

AC Zokuzoku gunsho ruiju
145
G857
v.14

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

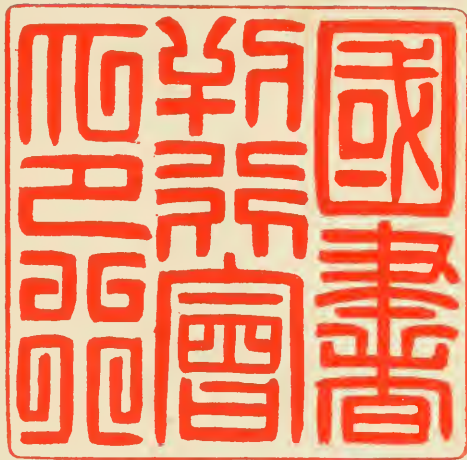


Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

續々群書類從

第十四

AC
145
G857
v. 14



續々群書類從第十四

例言

本篇には歌文部の首卷として、風葉和歌集以下十七種を收む、一風葉和歌集二十卷 古き物語の歌を、勅撰集の躰に、類聚したるものにして、龜山天皇文永八年に成れる事、序文に見えたり、但引用したる物語中、既に散逸して、今傳らざるものあれども、幸本書によりて其書の一斑を知り得らるれば、文學上價值尠からざるものといふべし、丹鶴叢書本を底本として、黒川眞道氏藏村田春門校合寫本を以て校訂す、

一新撰六帖題和歌六卷 本書は或は略して、單に新撰六帖ともいふ、衣笠内大臣家良、前大納言爲家、九條入道三位知家、前左京權大夫行家、(信實)入道左大辨光俊の五歌人、各古今六帖の題によりて

詠出し、互に評點を加へたるものにして、後嵯峨天皇寛元二年に成れり、流布板本を底本として、黒川氏藏狩野望之、清水光房の校合本を參酌して採收す、

一千五百番歌合二十卷 本書は土御門天皇建仁元年、後鳥羽上皇を初め奉り、後京極攝政良經、内大臣通親、權大納言忠良、其他俊成、定家、家隆、雅經、慈圓、顯昭等の歌人、總て三十人、各一百首の和歌を詠出し、千五百番歌合を催し、また後鳥羽上皇、後京極攝政、内大臣通親、俊成、定家等凡て十人、判者となりて部を分ちて各判詞を加へたるものなり、古來歌合中の歌數の多きものなり、流布板本を底本とし、圖書寮藏寫本を以て校訂す、

一集外三十六歌仙一卷 本書は二十一代集の載せざる歌人、三十六人を、後水尾上皇の撰ばせ給ひて、東福門院の御屏風の色紙に、押させ給ひしものといふ、寛政九年板を底本とし、黒川氏藏屋代

弘賢校本により校訂す、

一慶長千首一卷 本書は慶長十年禁裏御會の歌にして、後陽成天皇を初め奉り、八條宮智仁親王、近衛信尹、中院通勝、烏丸光廣、三條西實條等三十七人の歌、千首を集めたるものなり、黒川氏藏寫本を採收す、

一沙彌惠空百首一卷 惠空は九條植通の法名なり、本書は天正十八年八十四歳の作にして、卷末に春日若宮に奉れる願書は、歴史上參考となるものなり、但公の法名は公卿補任、諸家知譜拙記等に、行空に作れど、後に惠空と改められたる事、諸家傳并に本書に據りて知るべし、黒川氏所藏影寫本を採收す、

一天正十六年正月聚樂亭御會御歌一卷 本書は豊臣秀吉聚樂亭落成せしにより、一條内基、二條昭實、近衛信輔、菊亭晴季、細川玄旨、前田玄以、法橋紹巴等二十人を招きて、歌合を催したる時の歌を

集めたるものなり、黒川氏藏本を採收す、

一文祿三年吉野山御會御歌一卷 本書は文祿三年二月、豐太閤吉野山に於て觀櫻會を催し、太閤自詠の歌及席に侍せし秀次、菊亭晴季、浮田秀家、前田利家、伊達政宗、織田常眞、細川玄旨、其他人々詠出せし歌を集めたるものなり、太閤記所載のものとは、異なる點あり、高臺寺藏板本を採收す、

一後柏原院御日次結題一卷 本書は後柏原天皇、侍臣と共に永正六年九月九日より、同年十二月二十日まで、日課の御歌千六百首を掲げたるものなり、本書は正徳六年板にして、山崎弓束氏所藏、田中大秀の遺書なり、大秀の本書を得たりしことは、輿書に記されたるが如し、

一後水尾院御集一卷 御集の類本、二三にとゞまらず、されば其内御歌の最も多き本を收めまゐらすこととし、黒川氏藏寫本を

採收す、

一 後十輪院内大臣詠草一卷 中院通村の詠草なり、公は也足軒通勝の子にして、和歌を以て後水尾上皇の寵遇を蒙る、出家して後十輪院と稱す、本書内閣文庫所藏の寫本を底本とし、文學博士木村正辭氏藏本を以て校訂採收す、

一 爲兼卿家集補遺一卷 爲兼卿集は、續群書類從第四百三十二に二種採收せり、こゝには北川眞顔の編輯せる、文政元年板の爲兼卿家集の内、補遺を採收す、

一 惺窩先生倭訶集五卷 藤原惺窩の和歌を集めたるものにして、卷尾に君臣之事、父子之事、兄弟之事、朋友之事、嫡子并庶子之事、女子之事、妾婦之事、交隣國之事、隱居之事等の九條の論文を添へたり、こゝは後陽成天皇の勅問に對して、奉答せしものなる事、奥書に記せり、本書板本を採收す、

一衆妙集一卷 細川玄旨法印の詠歌を、曾孫丹後守行孝の集めたる者、法印は武門に生れ、亂世に人となりたれど、斯道に熱心にして、古今傳授を受け、朝野景慕する處たり、卷尾に飛鳥井雅章の寛文十一年の輿書ありて、衆妙集の書名は後水尾法皇より賜はりたる由を記せり、但卷末に九州道の記、及東國陳道記あれど、正編類從第三百卅八、第三百卅九に收めたるを以て省きたり、本書彌富濱雄氏所藏寫本を底本とし、中山速男藏本を以て校訂して採收す、

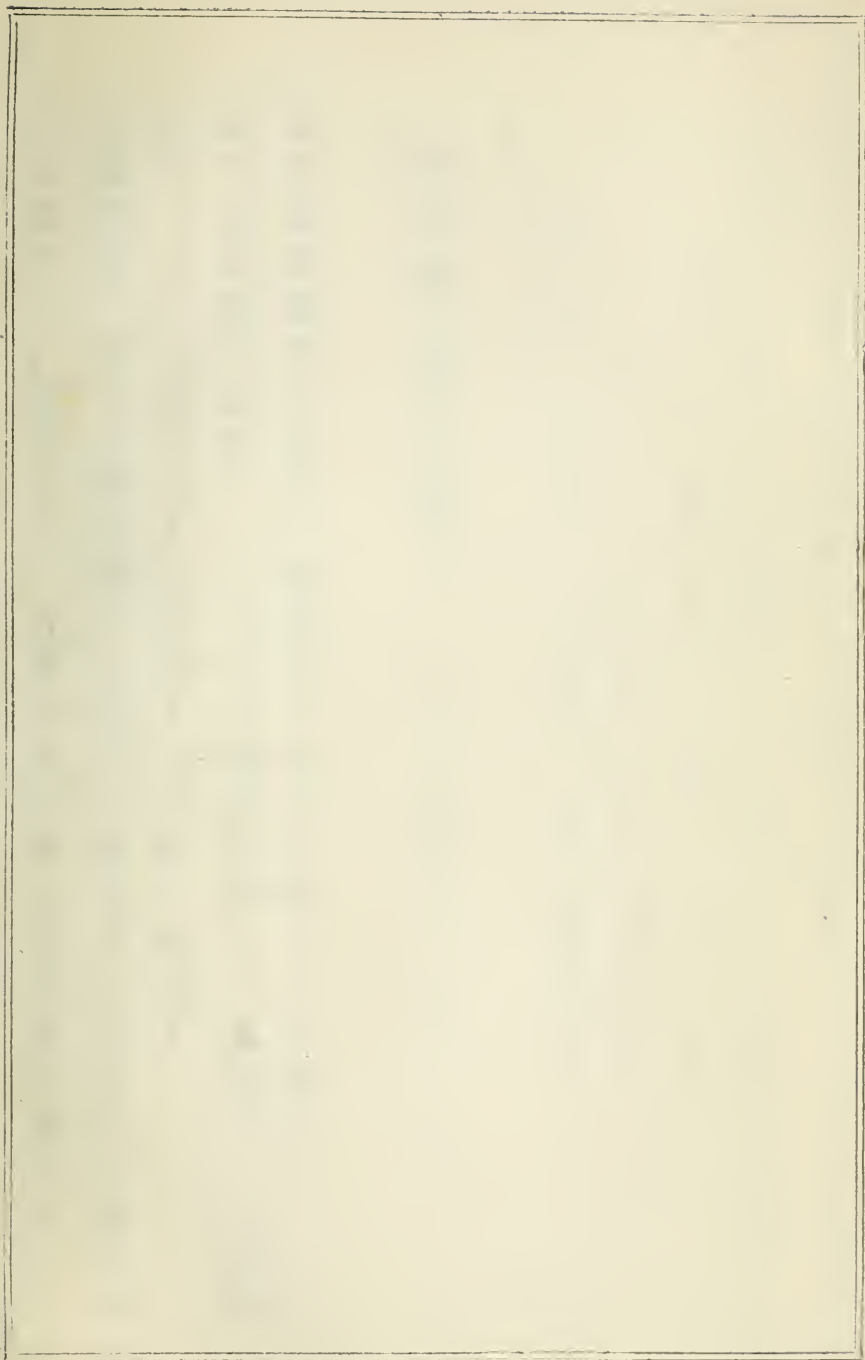
一草山和歌集一卷 深草の元政の和歌を集めたるもの、元政は彦根侯の士、年廿五にして出家し、日蓮宗の僧となり、深草に住す、佛乘は更なり、和漢の學に通じ、世に渴仰せらる、寛文八年寂す、本書は寛文十二年板を採收す、

一梶の葉三卷 京都祇園の梶女の歌集なり、梶女は茶店の女にし

て、寶永中の人、詠歌を以て名あり、本書寶永四年板を採收す、
一佐遊李葉三卷 京都祇園の百合女の歌集なり、百合女は梶女の
養女にして、亦名高し、本書享保十二年板を採收す、

本編は畠山健氏監修の下に成り又彌富濱雄氏は、秘藏の本を貸與
し、或は材料選擇に就きて補助せられたり、茲に之を謝す、

明治四十年五月



續々群書類從第十四歌文部一

目錄

風葉和歌集

一

新撰六帖題和歌

一〇一

千五百番歌合

一七九

集外歌仙

四九二

慶長千首

四三三

沙彌惠空百首

四七七

天正十六年聚樂亭御歌會御歌

四八三

文祿三年吉野山御歌會御歌

四八四

後柏原院御日次結題

四八九

後水尾院御集

五三〇

後十輪院內大臣詠草

五八〇

爲兼卿家集補遺

六二九

惺窩先生倭謔集

六四二

衆妙集

六七二

草山集

七〇四

梶の葉

七一一

佐遊李葉

七二一

續々群書類從第十四歌文部一目錄終

續々群書類從第十四

歌文部 一

風葉和歌集

やまとうたはやくもたついつもやへかきにはしまり
ならのはの名におふ宮にあつめられしよりことは
去のたのむりのちえよりもしけくえらはるゝことも
うらのはまゆふたひかさなりぬるにつくりものかた
りのうたといふものなむいつはりなれたる人のいひ
出たることにのみなりてまめなる所にはほにいたす
へきにもあらさめれはわかのうらのいそかくれにか
きすつるもくつむなしくつもりさか山のたにかけに
ときしらぬうもれ木くちはてぬへくなりなりたりに
こゝろを思へはかゝるへくもなむあらぬ世の中にあ

る人なすことしけきものなれはみるにもあかすきく
にもあまることをさたかにその人とはなけれとのち
の世にいひつたへてよきをしたひあしきをいましむ
るたよりになりぬるはかりしるしおけるなりければ
ひたふるにそらことゝいひはてむもことの心たかひ
ぬへくやなかにも歌のさまを思ふに花の色にへたつ
る霞をうらみおなしみかきに鳥のねをまちあやめく
さをひきてうきねをかこちなてしこをみて露けきを
そへふるさとのをきの葉を思ひて夕風にことつけ雲
ゐをわたるかりのねにともをしたひ霜かれゆく草の
はらにとふへきかたをうしなひをしほ山の雪にふか
きあとをたつねみねのあさひに千世をちきりうつせ
かひのむなしきからをなけくこゝろこと葉おほくは
そへうたのすかたにかなひてうたのおやなるなには
つのなかれにかよへればほかにはあさき言葉をあら
はして花鳥のいろをもねをもすてすうちにはふかき
こゝろをこめてをとこ女このひもうらみもしらせん
とよめるなり夏ころもたゝひとへならむよりもうた
かたのあはれなるこゝろそひてやあらんかゝるにい
まわか君あめのしたのくにのはゝとあふかれまし

してはたとせあまりいつかへりになりぬるにちゝし
 きのほるのえたゝさきつゝ色にたのしひはこや
 の山の秋の月かなしさをふひかりをもてあそひま
 しますひまにもろゝのこゝをすてたまはぬあまり
 いにしへ今のものかたりのなかよりかきあつめられ
 にける歌を人しれぬみ山かくれにしひてかよふ秋
 かせのふきおくれるにおとろけはこれをもとゝして
 さらにえらひそへまきをわかちことはをとゝのへて
 たてまつるへきおほせことになんありけるあら小田
 のかへすゝもかたいとおもひよらぬをいなふね
 のいなともはたかしこければかりのつらのかきつら
 ねぬるなるへしうくひすの初音をきくよりはしめて
 神山のあふひをかさしゑかのねにふかきあはれをし
 りよはのしくれをおもひやるにいたるまでまた神佛
 のちかひわかれたひのこゝろあしたの露ゆふへの雲
 に世をかなしひちとせの鶴ふたはのまつに君をいは
 ひなみたの色を袖にしひつらさにそへてうきをな
 けきいとたけの聲におもひをのへおやこのみちに心
 をまとはしあるは長歌物の名をり何れんかなとやう
 のくさゝのすかたまですへてちうたあまりをあつ

めてはた巻とせりかのむくさのはしめによせて風葉
 和歌集といふさてもうつほのなすこそ神といへるう
 たは拾遺集にいり拾遺集戀五此集戀二思ふ事なすこそ神も
かたからめしはしわするい心つけなん
 みよしのこれを入あひの連歌とは小一條院の御歌と
 かきこゆ住吉物語あかつきのかねのおとこそきこゆなれこれを
入あひとおもはしは後拾遺集雜二云女のもとにてあ
かつきかたを聞て小一條院かゝるたくひおほかれといつれものか
 たりやさきならむとてもるへきならねは今これのを
 そかぬなるへしこのものかたりなからのはしふる
 くつくれるもあしかきのちかき世にいてくるもはま
 のまさこ數つもりしきのはねかきかきあへぬまゝに
 よもきかしまにあらねとなのみをさゝてもとめえぬ
 もおほく花のそのにいりなからたをりつくさぬ木す
 ゑもあれば身のあやまりをのこし人のそしりをおは
 むことのかるゝかたなく思ひするものからかくこの
 たひあつめえらはれてよし野のたきのたえすみつか
 きのひさしきよにとまれらはものかたりをつくれる
 人はかくれてもあらはれてもこのことのとときにあへ
 るをなんよろこひいまの世にみおよひてきゝつたへ
 む人もはしめてなきあとをおこされぬればしきしま
 のみちのさかゆくことを思ひて大空の月日のかけも

風葉和歌集卷第一

のとかにめぐりよものうみのなみのおとしつかならんことぞねかはさるめやふみなかしといふとしのやとせふりみふらすみしくるゝころこれをたてまつりぬるとなり

春上

はるたちける日よませたまひける

なみのしめゆふみかとの御歌

たちかはる春のしるしにけふよりは初鶯よこゑなをしみそ

冷泉院行幸ありて御あそびともはへりけるついでによま

せさせたまひける 源氏の朱雀院のおほむ歌

少女

こゝのへなかすみへたつるすみかにも春とつげくる鶯のこゑ

左のおほいまうちきみかすかにまうてゝこれかれうたよ

み侍けるにあしたの霞といふことをよめる

梅比立

鶯の羽風をさむみかすか山かすみのか衣けさはたつらむ

大納言たいよりの七十賀をむすめのし侍ける屏風の歌

物語下

あさほらげかすみてみゆるよし野山春やよのよに越てきぬらん

たいしらす よみひとしらすすまふ歌のね

うちきらしさえし雪たに立かへりのとかに霞む春の空かな

いせなの一條院女三宮

はるながらまたふるとしのつらゝのみむすほゝれたる谷の下水

をのといふところすみ給けるころ子日に雪のふり侍け

れは はしたかの女院

小松原かすみばかりやたなひかむ雪かきわくる人しなればは

子日に中宮のおほむかたよりひわりこなたてよつると

て五葉の枝にうつる鶯に

源氏のあかしのうへ

とし月をまつにひかれてふる人にけふうくひすの初音聞せよ

御かへし

中 宮

引わかれとしはふれともうくひすのすたちし松のねを忘れめや

子日に野にいていふみ侍ける

しのもちすりの右大臣

君か世をいといものへにひく松はぬさへそふかきためし也ける

たいしらす

しぐれの源大納言家宰相

きみが爲春のおほのをしめたれば千世のかたみにめつる若なそ

山さとにすみける比いとあやしき女どものわかなつむな

みて

はまゆふの兵衛

霞たつのへの心もはつかしく何いまさらにわかなつむらん

右大將なかうちにさふらひけるにふちつほの女御し

るかねのひさげにわかなのあつものいれてくるほうをふ

たにおほひてとるところに女のわかなつみたるかたつく

りたるなつかはし侍けるにかきつけ侍る

うつほのそわうのきみ

君が爲春日の野への雪わけてけふのわかなをひとりつみつる

うきふねのかたへわかなつかはしけるに

源しのなのゝ尼

山さとの雪よのわかなつみはやし猶うきさきのたのまるゝ哉

うきふねのきみ

同上

雪深き野へのわかなも今よりは君が爲にそとしもつむへき

かすかの歌のなかに

うつほの左の少將かすね

みわたせば雪ふる山もある物を野への若なの老にける哉

同上

右大將なかつた

雪とくる春のわらひのゆればやのへの草木のけふりいつらむ

六條院にわたり給へるに雪ふりける日心みたるいけさの

あわ雪ときこえさせ給へりけるに

源氏の二品内親王

若菜上

はかなくてうはの空にそきえぬへき風にたいふはるのあわ雪

よそなからたにけちかきさまならはと思ふ人につかはし

ける

いひこしつくの頭中將

霞たにへたてさりせば春の色をよそにみつゝもなくさめてまし

こゝろならすをのにすみけるころをとこの久しくおとつ

れ侍らさりければてならひに うきなみの藤中納言女

かた／＼におほつかなさまはれやられて霞こめたる春の山さと

にはふ兵部卿のみこはつせまうてのかへさに宇治にとゝ

まりて侍けるにものゝれともおひかせにふきくるをきい

てかなる大將のはへりけるにつかはしける

源氏の八宮

椎本拾遺 百集廿四番

山嵐に霞ふきとくこゑはあれとへたてゝみゆる遠の白浪

春のころ女のもとよりかへりてつかはしける

さいわけしあさの關白

立いつる山ちをたにもみるへきにつらきは春の霞也けり

かへし

藤宰相のむすめ

おしなへて春の山への空よりもうき身ばかりを霞こめなん
春宮女御宮耀殿にすみ侍けるにつかはさせ給ひける

すゑはの露の皇后宮

九重のおなしみかきのうちなからかすみこめたる鶯のこゑ
むつきのころさとに侍けるにうちよりぬくらをこひぬ時
のまそなきとのたまはせて侍ける御かへし

あたりさらぬ麗景殿女御

花の枝にぬくらうつろふ鶯は思ひもいてしこそそのふるすな
たいしらす
はかための侍従

雲あゝの月の女二のみこ

梅のはなたゝかはかりも匂はなたにのうくひす今やきなくと
右大將紅梅のなかしきあげほのを見侍けるにうくひすも
ひとこゑなきたるに　ひちぬいしまの女三宮の中納言
なる人のあたりにはほふ梅かゝをあかすとやなくうくひすの聲
右のおほいまうちきみのきちかき紅梅のいとおもしろき
をみてまつうくひすのとさこえけるかへし

にほふ兵部卿のみこ

花のかにさそはれぬへき身なりせば風の便をすくまましやは

六條院のたきものあはせはてゝ御あそびありけるに梅か
えなといたしたりければ　ほたる兵部卿のみこ

鶯のこゑにやいとあくかれん心しめつる花のあたりに
もろこしにて梅木おほかる山を行て見侍けるによこに
こと木ましらすびとたひにさきわたけければ

物語一

はま松の中納言
白妙にふりつむ雪とみえつるは梅咲山のとほめ也けり
むすめのことを左大將にほのめかし侍とて

女すゝみのさきの右大臣

しる人のしるへき色にあられともみせはや宿の梅の梢を
かへし

なりしらぬ心やいとまといなん木たかきやとの梅の匂ひに

女のもとにてのきちかき梅をいりて

ひちぬいしまの關白

さき例ふかなつかしき梅花ちとせの春を君とこそみめ
かへし　中務卿のむすめ

風ふけばさそはれぬへき梅花たゝかはかりのえにこそ有けれ

玉かつらの内侍のかみまうて侍けるによませ給ひける

源氏の冷泉院御歌

源氏拾遺百番合三番

九重に霞へたては梅のはなたゝかはかりもにほひこしとや

梅の花のしろきくれなゐあはせ侍けるに紅のかたにてよ

梅つほの宮君

やへさげとにほひはぞはす梅の花紅ふかき色そまされる

女に梅花をいりてみせ侍とて　あふにかふる三位中將

紅に匂はさりせば梅花ふかき心をよそへましやは

人のもとへたきものつかはすとて紅梅のえたにつけられ

ける　あさくらの皇后宮

なれしよの袖の匂ひによそへつゝなれは露けき宿の梅かえ

御かへし　皇后宮大納言

よそへつゝなりたる梅の花みれば過にし春そいと戀しき
關白のきちかく梅を見侍ていにしへは先ぞ戀しきと申侍
ければ

しのふくさの入道一品宮

としをへてかはらぬ梅の匂ひにも猶いにしへの春ぞ戀しき

梅つほの花のいろこき枝につけて東三條院女御につかは
させ給ける

はきにやとかるの中將

梅花雲るになるい色よりもとにみしよの春そこひしき

御かへし

なかむらん雲るの花に思ひやれみしよ戀しきもとの梢を

後夜にあかたてまつるとてつまちかき紅梅を折らすれば
かことかましくちるにあかさりし匂ひも思ひいて侍けれ

うきふねの君

手習 百首合九十二首
袖ふれし人こそみえぬ花のかのそれかと匂ふ春の明ほの

こそその春もろともに月を御らんしける女のもとに又のと

しつかはされ侍ける はきにやとかるの御門の御うた

月やあらぬ春やみしよのそれなら詠めしのみや忘れはつらん

中宮さとおはしましける比たてまつらせ給ける

おやこの中のみかとの御歌

なかむともおなし心にたれかみも思ひくまなき春のよの月

御かへし

なかむれと心ははれす春のよのつきせす物を思ふ身なれば

たいしらす

いまとりかははやの太政大臣四君

春のよもみる我からの月なれば心つくしのかけとなりけり

あまのもしほびの大僧都

てりもせぬ春のならひのいとまたくもり果ぬる袖の月影
女のもとよりかはりてつかはしける

なんなすゝみの右大將

心さへやかてそくらす春霞かすみわけつる明ほの、そら

もの思ひけるごろあけほの空をながめて

つとにうき身は思ひわかれぬにみしにかはらの春の明ほの

物語

よし野の山におこなはせ給ひける比よませたまひける

風につれなきよし、院御歌

ふりにけるむかしをみるも哀也よし野の宮の春の明ほの
かすかの歌の中にかりのつらといふ心を

うつほの源のおほきおはいまうち侍

梅花堂

ふるさとにともに残らすゆく雁はこゝにて雲をすくさいらめや

また御らんせられんこともかたかりける女のもとよりい
ておはしますにかへるかりのなくきかせ給ひて

よその思ひのみかとの御歌

いまはとてこし路にかへる雁かれも猶あき霧の空をまつらん

源氏の大將と申ける時ついで國すまといふところにとり

おはしましけるにちしのおと、宰相中將に侍りける時た

づねまゐりてかへり侍けるあさはらけのそらに雁のつれ

てわたるによませ給ける

六條院御歌

ふる郷をいつれの春か行てみむうらやましきはかへる雁かれ

玉かつらの尚侍ひげくろの關白のもとにわたりにてのちあ

めのいたうふる目つかはさせ給ける

結注

かきたれてのとはきころの春雨にふる郷人をいかにしのふや

わかのうちを柳をよめる

よみ人しらすまよきんのは

きしちかみ露も涙もたちよればみたれすみゆる青柳の糸

人のかたらへりける女をしのひてとりこめて侍けるころ

にはに柳のうちをひくをみて あらはあふみの内大臣

つねよりいといみたる青柳はもとみし人に心よるらし

四季ものかたりの中に

あなやきのみや

あたにちる花に契をむすひ置て果はみたる青柳の糸

風葉和歌集卷第二

春下

左のおほいもうち君春日にまうてこれかれ歌よみ侍けるに花をいさなふといふ心を うつほの中務卿親王

わか宿にうつしてしかなのへに出てみれともあかぬ花の匂ひな

春のころ山さにて見そめて侍ける女を思ひやりて

たちかくす霞はとほくへたつれと花のありかに心をそやる

中宮清涼殿の花御覽しける明ほのを見たてまつりて

あまのかるもの權大納言

九重の霞のまより花をみて哀こころのみたれそめぬる

心にもあらぬことのそよになりにつれとこといそぎ

たいけすなめ侍て

春風はおもはぬかたに吹よれと心うつらぬはなのいろかな

右のおほいもうちきみのもとにあひすみ侍ける比關白の

かたの花のさかりをもろともにみてたつとてよみはへり

ける

のとかにそきみはみるへき春霞たつ空もなき花のあたりな

春の除目にかすより外の權大納言になりたる人のまてき

て侍けるに

ひちめいしまの式部卿のみこ

春をたにしらて過ぬるわか宿に匂ひまされる花をみる哉

花のさかりにちいとおといふはひはふりぬたと申侍けるに

なたえのぬまの皇太后宮
心ありて風ものとききやとからや花も盛ににはふなるらん

法皇六十御賀白河院にておこなはれ侍けるによせたまひける

いはてしのふの嵯峨院御歌

君かすむなかれひさしき白河の花ものときき匂ひ也けり

法皇の御歌

春をへてかひある花の光とはふりにし物をしら河の水

みかとの御うた

山さくら木たかき峰に咲のみやふるにかひあるみゆきなるらん

弘徽殿の御まへにうゑられて侍けるさくらの咲はしめたるに宴せさせ給ひけるにより侍ける

かくれみの、二のみこ

君か世ののときき春に咲そむる花のときは、今そみるへき

左衛門督

花にあかて何なけきけん君か世ののときき櫻有ける物を

大納言たいよりの七十賀の屏風にさくらのちるをあふき

てたてる人かけるところ

ふみ人しらす

さくら花ちるてふことはことしより忘れて匂へちよのためしに

南殿のさくらな一枝大将のもとにつかはさせ給ふとて

ゆくへしらぬのみかとの御歌

九重の花のさかりを見にくやとなしき匂ひをしるへにそやる

この花を御らんして

われのみそ有しにもあらず成にける花はみしよに變らざりけり

参りて奏し侍ける

左大將

白河院御歌

百敷はたとしくもあらねとも花のしるへはうれしかりけり

はるの院のいそちの御賀に行幸侍けるにうへに御かはらけ参らすとて

みかきかはらの入道式部卿親王

さくら花匂ふは春ときいしかとこいるみゆきのけふはなかりき

とらせ給まいに

これそのよるつふへき春ことの櫻をかきす花のみゆきよ

南殿のさくらのさかりに東宮二のみこなと花をりてとの

たまはせけるに奉り侍けるをみかとおきふる風もうらめ

しきになさげなしやとの給はせければ奏しける

みたらしかはの内大臣

ゆくへなき風たにちらす花なれば君か爲にはをらさめやは

堀河院東宮におほしましける時櫻につけてうゑおきし人

しなればはさき匂ふ春のみやまの花もかひなしとの給は

せたりける御かへし

風につれなきの宇治入道關白太政大臣

萬代と祈おきてしはる山の花さきそへむ末をこそまで

しら河院の花御らんしに行幸侍けるにあるしの院花みす

はけふのみゆきにあはましやときこえ給ひければ

行へしらぬのみかとの御歌

花故とあさくや人の思ふらんあるしからなるけふのみゆきを

白河の院おりあさせたまひてのちこのへの花を人のた

てまつれるを御らむして

雲ぬの月のおほきさいの宮

思ひきやみれの霞も立へたて雲ぬの櫻つてにみむとは

すまにてわかきのさくらほのかに咲そめたるを御らんす

るに一とせの花のえんなどおほいてられければ

六 條 院 御 歌

清原
百壽歌合上五番

いづとなく大宮人のこひしきにさくらかさしいけふもきにけり

にはふ兵部卿宮はつせまうてのかへさにうちにといまり

て侍けるにおもしろき花の枝をいりて山のさくらにはふ

あたりになつれておなしかさしなをりてける哉」と侍

ければ

宇 治 の 中 君

根本

かさしなる花のたよりに山かつのかきねを過ぬ春の族人

ふるさとの花おほしいて一條院の中宮にさかきにつけ

物語四上

時しらぬさかきの枝になりかへてよそにも花を思ひやる哉

さころもの齋院

女院一條院におはしましける頃南殿の櫻一枝たてまつら

せたまひて

いはてしのふのさかの院御歌

九重のほひはかひもなかりけり雲ぬの櫻君かみぬまは

女院御心とめさせ給ひけるさくらの枝をいりて院にうつ

りわたり結びてのちしのひてたてまつりける

おなし一條院内大臣

思ひいつる人もあらしをふる郷にわすれぬ花の色を露けき

ひろさはにすみ侍りけるころあさはらけのけしきにもみ

しよのほと思ひ出られければ

れさめのひろさはの准后

拾
百壽歌合三番

さき匂ふ花も霞ももろともに見しなかななる春の曙

山さよにこころほそくて侍けるころ花をみてよめる

けふりにむせふの姫君新宰相

しる人もなき山さよにともとみる花におくれぬ命ともかな

なとこのさくらを一えたおこせて侍けるに

新中納言

あふきなかしの

あたにのみちりぬへければ櫻花風につけても物をこそ思へ

返し

宰 相 中 將

あたなりとなにかはなげく色深くのとけき春のかたみとをみよ

右のおほいまうちきみさくらの枝をおこせて侍けるかへ

りことに

ゆめちねにまふ大納言女

なるからに色やかはらむ山さくらあたにうつるふ花のほひそ

としのほとなともになからむとおほすなんなをかいま

みせさせたまひて

さころものみかとの御歌

物語四上

たりみはやくちきの櫻行すりにあかぬ匂ひはさかりなりやと

またとしわかいりける女に給はせける

拾
百壽歌合七十四番

こころたかさの後冷泉院御歌

花のいろを思ひもわかぬうくひすにかすめわひぬる春にも有哉

せちに思ひける女のあたりにたい大かたにてまかり侍け

るに花のこす点に驚のなくなきいて

れさめの 關 白

わかことや花のあたりにうくひすの聲も涙も忍ひわひぬる

つれなき女のもとにて花のおもしろかりけるをみて

藤原君

うつほの中納言されたい

さくら花匂ひこほるゝ木かくれも猶うくひすはなくゝそみる

なんなものもとよりかへりてつかはしける

なたえのぬまの右大臣

あかすみる花のあたりは鷹かれのかへる空にもれのみなかれて

あて 歸鷹を聞てよめる

うつほの中納言

あて

かへりゆく鷹のは風にちる花をおのかたむけの錦とやみむ

すゝしの卿のふさあけの家によりて人々あそび侍ける

に野にいて花をのりとて

おなし参議良峰のゆきまさ

吹上ノ上

花ちらすかせも心あり駒なへてわかひるのへにしばしよきなん

修行し侍けるにふきこしといふところの花おもしろかり

ければ

あまのもしほ火の大僧都

のこらしなみねのあらしの吹こしにけふは櫻の花と見るとも

六條院中將と申ける時わらはやみにわつらひ給ひてたつ

れおはしましたりけるに

源氏の北山の上人

若

おく山のむろのとほそをまねにあげてまたみね花の色をみる哉

北山にて紫のうへはづかに御らんしそめて歸り給て又の

目遣されける

六條院御歌

同

おもかけに身をもはなれず山櫻心のかきりとめてこしかと

御かへしまたなにはつなたにはか／＼しうつつけ侍らぬ

ほとなればかひなくてなんとて

按察大納言北方

同

あらし吹をのへのさくらちらぬまを心とめけるほとのはかなさ

花のちるころ人のまうてきたりけるに

定中納言

花さくらなる中將

ちる花をなしみとめても君なくばたれにかみせんやとの櫻を

關白中將に侍けるとき左大臣のかつらの山莊の花見にた

ち入侍けるにともなひてあるしは朝に侍ければつかはし

ける

かつらの兵衛佐

よそ人もうつるふ花を惜む宿にいかめかるゝあるもなるらん

のきのさくらを人のなりてみせ侍ければ

かきりありてちるたになしき花の色を心つからもたなる君哉

かへし

中納言

大空の風にまかせてちるよりはなりとめてこそみるへかりけれ

春のすゑつかた山さとにすみける女のもとよりかへり侍

けるみちすから引といめらるゝこゝちと侍ければ

河きりの内大臣

ちりまかふ花に心のうつりつゝ家路なきへも忘れぬる哉

にほふ兵部卿のみこしらかばの院に侍けるに花見にまか

りてよみ侍ける

かたる右大將

ちりちらすみてこそゆかぬ山櫻ふる郷人にわれなまつとも

白河の花見ありき侍けるにふる郷の花もゆかしくいそぎ

歸るとよめる

あさつゆのあま

われなから思ひさたむるかたもなしとまらぬ花にうつる心は

六條院にて池に舟うけて女房あまたいりてあそび侍ける

中に

よみ人しらす源氏

春の日のうらゝにさして行舟にさをのしづくに花そちりける

ふさあけのはやしの院にて色をつくせる花風にきほひて

ちりかひこきわたるなふれもひとつにつゝきてみえけれ

は

うつほの右少將なかり

吹上ノ上

ゆく舟の花にまかふはほる風のふき上のはまをこけに也けり

花のころ宇治に侍ける女のもとよりみやこにいつとてよめる

つまこひかぬる三位中將

山さくらあかねにほひをとめ置て心にゆかぬ道の空かな
世なのかれ侍らんとて内にまゐりて南殿の櫻のさかりなるをみて大納言にまうし侍ける

ふたばのまつの中納言

ちりぬもと又こむ春は思ひ出よ心といめしはなの匂ひを
たいしらす

よみ人しらすみやまくれ

散花はのちの春をもまつものを人のころそなごりたになき
よし野よりいて侍りける比花のちるをみて

はまいつの帥宮中宮

櫛中納言この雪のきえさらんとたのめて侍けるもむな
しくて花のころになりてはへりければ

うきなみの藤中納言の女

きえぬまとたのめし人の名残とやにはの花にも人をまつへき
わかのうちにて花のちるをよめる

よみ人しらすまよふきのね

咲にはふきのさくらばうら風にちりても花の涙とこそなれ

四季ものかたりの中に

はるこまの申納言

君か世のすゑはるかなる春の野につきせすあさるつるふちの駒
玉響の内侍のかみひけくろの關白のもとにうつろひての
ちすみ侍けるかたにわたりたまひて山吹のさかりなるを
御らんして

六條院御歌

唯此

思はすにゐての中みちへたつともいはててそふる山吹の花
前齋院に山吹のえならぬ枝につけてきこえはへりける

ふくらすゐの左大臣

くちなしのこはえもいはぬ色なれとさしてもいかやま吹の花
やまふきのさかりなるところになちとまりて侍けるにう
ちわたりにて見侍ける女のもとなりければよめる

やまふきの三位中將

いはれとちやへの山ふき九重にをりしはとより思ひそめてき

一條院御くらゐのときほのかに御らんせさせ給てやへ山
吹のひらけさして心もとなきをりて色まさるらむとの

たまはせ侍ける御かへし

あたりさらぬの女院

かすならぬみきはにほふ山吹はやへにひとへをいかも重ねん
藤の花のえむに侍けるに六條院いまた宰相中將と申ける
ときこえ侍ける

花室

源氏の二條院のおほきおほいまうち君

わかやとの花しなへての色ならば何かはさらに君をまたまし
わかのうらにおはしましけるとき右大將まゐりてふちな
みのたちがへるへきこいちこそせれと申侍ければ

まよふきんのれの春宮

日なへつゝたちかへらず藤浪のまことにふかき色としりなむ

夕きりの左大臣藤のさかりに致仕のおとゝの家にてあそ
ひなとし侍けるに

源氏柏木の櫛中納言

たなやめの袖にまかへる藤の花みる人からや色もまさらん
女二のみにきたまりてのちかのすみ侍けるふちつほの

花のえんせさせ給ひけるに御かきしなりて

かゝる大將

宿木

すへらきのかさしになると藤花およほぬ枝に袖かけてけり

みかとの御歌

同上

萬世をかけて匂はん花なればけふなもわかぬ色とこそみれ
ふきあけにて入々うたふみ侍けるにふちの花を

うつほの紀伊權守

次上ノ上

藤花かゝれるまつのかみとりひとつ色もてそむる春雨

四季ものかたりの中に つくしの木工頭

あかれさす入日の影に色はえてみるもかいやく岩つゝし哉

かすみひの女御

立かへる道もわすれぬ春霞花ちるほとの心つくしに

さかにすみ侍けるにやふひのつこもりこる關白たつねま

うてきて君閑消永目なとうちす侍けるに

しのふくさの中納言御息所

花もちり春もくれなん古郷になかむる人の心をやしる

やふひの晦の日ふきあけにて春をいしむ心人々ふみ

侍ける うつほの在原時隆

次上ノ上

いつかたに行ともみえぬ春故になしむ心の空にも有哉

きよはらのまつかた

同上

ゆく春はとむへきかたもなかりけり今夜なからにちよは過なむ

風葉和歌集卷第三

夏

やふひのつこもりのよ右大將御とのいして侍けるをあげ
はていといま給はすとてよませ給ひける

よその思ひの御門の御歌

かされつる袖のなこりもとまらしなげふたちかふる蟬のは衣

冷泉院御息所いまたまゐり侍らさりけるにうつきのつい

たちころに申つかはしける 源氏宰相中将

竹川

花をみて春はくらしつけふよりや茂さなけきのしたにまとはん

關白のもとにまかれりけるに右大將のなさなく侍けるを

みてにはの櫻の一むらのこれをおし折てよめる

しのふくさの宮の中將

さくら花梢に残るひとむらや過にし春のかたみなるらむ

四季ものかたりのなかに ほといきすのみかとの御歌

立かへりみれともあかす山殿のかきれに涙をかくるうのはな

御かへし うの花の女御

にほひなきうの花垣の梢には人のこゝろのなみやこゆらむ

大納言たいよりの七十賀屏風に子規をまてるところ

よみひとしらすちちくは

物語二

ほといきす侍つる宵の忍び音はまろまれともおとろかれけり

夏のほしめつかた夜ふけて中宮のたいはん所にたちより

たりけるに女房のこゑともしければよめる

ふせこの頭中將

れさめする人もあらなん郭公しのひかれたることかたらはむ
かへし

侍 從 内 侍

しのひれはさてこそあらめ時鳥なへての空にいかにかたらむ
題しらす

わひ人の心をやしる郭公空にともなふしのひれのこゑ

女のもとにひさしくまからて思ひたち侍けるにほといき
すのほのかになけは

うきなみの權中納言

尋來ぬ我をうしとやしのひれに鳴てまちける郭公哉

こゝろならすみやつかへにたちいて侍けるこゝろ時鳥の
なくなきいて

みれともあかぬの中將

思はずにみ山をいつるほといきすいつさと馴し心なるらん
これをたちきいて

關 白

思はずにみやま出しも時鳥かくかたはらん契となしれ
まつりの日近衛つかさの齋院にまゐるをうらやましくみ

おくらせ給ひてよませ給ひける

さころものみかとの御歌

物語四下 百景歌九十八番

引つれてけふはかさしいあふひくき思ひもかけぬしめの外哉

あふひてふ名をかけてみせなんと申て侍ける女の返し

拾 百景歌四十三番

もろ人になへてあふひのなを惜みかけしやけふのかさしなり共
祭の日さきの齋院にきこえ侍ける

みかはにさける前關白

しのふくさの中納言

今までもよそにやはみむ諸葉草そのかみ山になれしかさしな
かへし

藤本宗

もろかつらしめのほかにはなりながら同しかさしを我や掛へき
藤典侍まつりの女つかひし侍けるにつかはしける

夕 霧 左 大 臣

なにとかがけふのかさしよかつみつのおほく迄も成にける哉
まつりのこゝろ大將うちへまゐりて侍ける車の中にしのひ

ていれさせ侍ける
名をたにもきかて年ふるくさなれと心にけふはなほそかけつる
あけゆく空にほといきすのほのかになくなきかたまたまひ

さころものみかとの御歌

物語一上 百景歌五十五番

ほといきすのしのひれあらはれてかたらひゐたるこゑも
夏山にあらねとうらめしうて

心あらはなうらめしうて
ひさしくとはさりける女をたつてをのなる處にまかれ

りけるに時鳥のなくを聞て
うきなみの權中納言

なくさむや又もよほすや時鳥物思ふやとにきなく一こゑ
返し

忍びあまるこゑをきくにも郭公なくれは誰もおとりやはする
藤 中 納 言 女

しのひたる女のもとにてほといきすの鳴ければ
はまいつの中納言

物語三

時鳥はなたちはなに木かくれてかゝるしのひのれたに絶しな
とほき所へ思ひたちける女にもの申ていてけるあかつき

まちかきたちはなにほといきすのなくを聞て

いはかきぬまの頭中將

ほといきす花たちはなのかはかりも今ひとこゑはいつか聞へき

たいしらす

いせなの左大臣本

一こゑやなきて過ぬる郭公花たちはなのにはふあたりな

ゆくへしらすなして侍ける女をたつねいて、蘆橘をとり

なるとの中納言

しるへする花たちはなのなかりせば昔の袖をいかてしらまし

みかといまたたゝ人におほしましけるとき五月四日の夕

つかたうちよりまかて給ひける道にのきのあやめをひき

おとしてさしきよりいたし侍ける

狹衣の中務卿のみこの家小宰相

物語一上
百巻合廿五
しらぬまの菖蒲はそれとみえずとも蓬か本はすすきすもあらなん

五月五日女のもとにつかはしける

いはし水の社の大將

物語上

思ひつゝ岩かきぬまに袖ぬれてひけるあやめのれのみなかるゝ

かへしむすめにかはりて

兵部卿のみこ

たいしらす

み山かくれの式部卿のみこの女

長きねなかくるにしりぬあやめくさ我身のうきにおふる物とは

ものれたみの登華殿御息所

ともすれば思ひ入江のあやめ草うきねなかくる身こそつらけれ

あといやへふきの按察大納言女

ひかてたにやみなましかば菖蒲草袖にうきねはかいさらまし

家少將

なかれてのためしにひける菖蒲草君かゝとのはいつかかれせむ

院姫宮の根合のうた

よみ人しらすあらはあふ

君が世にびさくらへたるあやめ草これを永きためしとはする

あやめ草かゝるたもとのせはき歳またしらぬまの深きねなれば

さつき五日いみしうなかさねを皇后宮に奉らせ給とて

あさくらの子條院御歌

あやめ草深き入江をたつねつゝ長きためしにけふはひく哉

玉かつらの尙侍のもとにためしにもひきいてつへきねに

つけてつかはしける

ほたるの兵部卿のみこ

百巻合廿五

けふさへや引人もなきみかくれにおふる菖蒲のれのみなかれん

むすめのもとにしのひて侍けるふみをみてちゝの左大臣

返事してかければ又たちかへしつかはしける

はしたかの關白

しのひしにこゑあらはれて時鳥けふはあやめのれにそたてつる

五月ほといきすをきいて あらはあふまの姫宮の中宮

つれよりもぬれそふ袖は時鳥空になくねのかゝる也けり

山さにと住はへりける頃おほきおほいようちさみたつね

まうてきてつれ／＼にかたらず人ちそはめ身をと申侍け

れは 袖ぬらすの准后

かたらはむさにときなかくて郭公み山かくれななにかたつねる

きふねにこもりて侍けるにほといきすのなくをきいてと

なりのつほねにつかはしける

本ノマ

あはれとも君はきかすや郭公たひねの空をなきてすく也

もろこしにてむら雨うちそゝきたるよひのまに時鳥のこゑのかはらぬをきいて

松浦宮参議氏忠

物語下

郭公なれをそたのむ村雨のふる郷人はとひもこゑよに
申河のほとき給ふとてひとめ御らんしける女の家を見
いたたまふにほといきすなきてわたるもよほしきこえ
かはなれば

六條院御歌

先散下

なちかへりえそしのはれぬ郭公ほのかたらひし宿の垣れに

同上

御かへし

よみ人しらす

同上

ほといきすかたらふ聲はそれならあなおほつかな五月雨の空
中納言されたいを左大臣になすへきよし申侍けるにさみ

整理

たれになりけりと申ければ うつほの源太政大臣
手規なくねびさしくなりぬるはさみたれなからいくふればそ

たいしらす
ふる郷たつぬるの權大納言

整理

はるくへき方こそなけれつれ／＼となかめくらせる五月雨の空

みれともあかぬの關白

さみたれの空とおほゆる心かないつの雲まにはれんとすらむ

五月雨のころ女の許につかはしける

心たかきの右大臣

かきくらしふればなみたのそふものを只五月雨と人やみるらん

整理

女につかはしける

うつほの彈正親王

なかめする五月雨よりなげきつゝ月日をふるそ袖はぬれける

さつきばかり女のもとにまかりてかへらんとしけるあか

つき郭公のなきければ くもぬの月の左大臣

五月雨にぬれてやまなく時鳥あかぬなこりの袖にたくへて

さつきのころ女のもとにつかはしける

かくれみの、左大臣 終一本

よといもになくさみたれの郭公しつくの山は我身なりけり

かへし
中納言家宰相

名ばかりやしつの、山の時鳥涙ならぬはぬれしと思ふ

題しらす
しのふの新大納言

つれもなき命のほとななけく身をかたらひてゆけ山ほといきす

はきに宿かるの院女御のは、

思ひ出て昔をこふるわれにしも哀ともなふほといきすかな

ふちつほの女御のかたのすのこにゐてあやしうあかしか

れたるに郭公のあまたいひなくを聞てなくびとこゑにと

いふものをと人のいひければ うつほの侍従なかつみ

一こゑにあくなる物を郭公こゝらなくねにくらししの、め

女にいさいかもの申侍けるにほといきすのなきければ

やをかほのゑもんのすけ

時鳥ことかたらはむほとたにもなくて明める夏のよはかな

六條院わたり給へるにくひなのほしめてなきければ

花ちるさとのきみ

くひなたにおとろかさすはいかにして荒たる宿に月をいれまし

御かへし

おしなへてたいく水鷄におとろかはうはの空なる月もこそいれ

あすかゐのやとりに御車ひきいたるにかやり火さへけ

ふりてわりなければ さころものみかとの御歌

わか心かゝて空にやみらぬらんゆかたしらぬやものかやり火

なてしこにつけて女につかはしける

朝倉式部卿のみこ

露けさな思ひやらなんなけきつゝ獨おきある床夏の花

ゆくへしらすなりけるむすめなとし月有てきゝ出たりけるになてしこにつけてつかはしける

いはしみつの申關白

物部上

たれまきてうゑし垣れのあれしより涙露けき床夏の花

冷泉院うまれさせ給ひてのち前栽のなかにとこ夏のはなやかにさきたるなゝらせ給て王命婦につかはせ給ける

六條院御歌

紅雲

ふそへつゝみるに心はなくさまで露けさまざるなてしこの花

薄雲女院

同上拾

御かへし袖ぬるゝ露のゆかりと思ふにも猶うとよれぬやまと撫子

むすめな

うかりける

いかてかしらんなてしこの花

藤つほの女御いまたまり侍らさりけるころつかはしける

うつほの兵部卿の宮

ふそにのみ思ひける哉夏山のしけきなけき身にこそ有けれ

袖ぬらすおほきおほいまうち君

もろこゑになきあはせたるうつせみも果は空しく成こそはせめ

幻拾百歌集合七十一番

ふるなをしる螢をみてもかなしきは時そともなき思ひ也けり

玉かつらの尚侍のもとにたちよりて侍けるに六條院几帳

六條院御歌

のかたひらに螢をつゝみ置給てうしかけたまへにははかにひかるなほとなくまきはしかくしければ

螢

はたるの兵部卿のみこ

なくこゑもきこえぬ蟲の思ひたに人のけつには消る物かは

同上

かへし

聲はせて身をのみこかす螢こそいふにもまさる思ひなるらめ

ものおもほしけるころよもすからもえあかす螢のひかりもあげゆけはきえぬるをうらやましく御覽せられて

なかれてはやきあすか川の院御歌

身をこかすたくひにみゆる夏蟲もあくれは消る思ひ也けり

こゝちこそなひて侍けるかすこしおこたりて池にはちすの花の咲わたれるに露の玉のやうなるをみ出して

素菜下

むらさきのうへ

きえとよる程やはふへきたまさかにはちすの露のかゝる計を

延命寺くやうし侍れるときはすの葉にかきつけ侍ける

うつほの左大臣

としふれとすまぬ入江の濁には清きはちすのいかておふらん

あつき日つり殿にすゝみて式部卿のみこに遣はしける

禁使

枝しけみ露たにもらぬ木がくれに人まつかせのはやく吹哉

みな月のつこもりにはらへしに河原にいて侍て

なるとの中務卿のみこのむすめ

みそきするけふは河せのしら浪も大ぬきにこそ立わたりけれ

わかうらにてみな月はらへし給とて

まよふきんのれの東宮

神もみなけふはなこしと聞物を猶あら磯は浪さわきけり

その夜更て風のおともすいしくなりにければ

手なれつるあふきも今は夏過て露よりさきにおかれぬる哉

風葉和歌集卷第四

秋上

ふ月のはしめつかた風すいしく吹出たる夕へによませ
給ける うつほの朱雀院の御歌

和秋上

めつらしく吹いつる風のすいしきはけふ初秋とつくるなるへし

わかのうちにおはしましける頃よませ給ひける

まよふきんのねの春宮

みきになるあしのうら葉のおときけは一夜の程に秋をきにける

もしはやく烟ひまなきわかのうらに霧の立そふ秋もきにけり

たいしらす 女すいみの前右大臣の三の君

ほしわふる袖より外におきそへて世さへ露けき秋はきにけり

左大將まのうらにこもりあて侍けるころつかはさせ給

ひける おなしき中宮

吹すぐるおとにつけてもいかならんまのうらわの秋の初かせ

女のもとにまかれりけるになきふく風のこゝろあわたい

給 官許御合八十二番 いと いしく 秋の上風ふきみたり心まとはす秋の夕くれ

七月七日のゆふへなきのかせになひくなきいて

いせをの前関白中君

つねよりも心してふけたなばたのつまいつふひの萩の上風

七月七日かはらにいてこれかれ歌よみ侍けるに

藤つほの 秋をあさみもみちもちらぬ天の川なにをほしにてあひ渡るらん

同上

藤つほの女御

たなはたのあふみの露を秋ことにわかかす糸の玉とみるかな
ないしのかみつれなきさまにみえ奉ければ七日宣はせける

けふさへやたいにくらさんたなはたの逢夜は雲のよそに聞つゝ
心にかけて侍ける人のふみを七日よそなからみてふみ侍

ゆる
道心すゝむる右大臣

ゆきあひの空迄をこそかけさらめふたにみはやかさゝきの橘

宣旨さとに侍けるに給はせける

心たかきの後冷泉院御歌

よといもにあかぬ別を身にしれは行あひの空も哀なるかな

みこにおはしましける時大將の女御に給はせける

のちくゆるのみかとの御歌

思ひきやまれにあひみる棚機に契おとれるなけきせんとは

梅つほの女御心ならすえまゐり侍らさりけるに七日つか

はさせ給ける
ゆるきのみかとの御歌

たなはたのあはぬなけきを身につみてけふの契を我にかざなん

おなし目いとせちにおはしめしける女につかはさせ給ける

さゝわけしあさの八條院御歌

わかれてのあすをはかけし棚機のけふの心を我にかざなん

御心ならず一條院の一品宮にわたり給ふへき由聞え侍け

る頃女二の宮にきかせ給ふこと侍らんをなとかとて

物語三中

なれかへりおきふしわふる下萩の末こそ風を人のとへかし

同上

さころものみかとの御歌

この御ふみのかたばらに
下をきの露さえわひしよなぐもふへき物とまたれやはせし

うき身には秋そしらの萩原や末こそ風の音ならねとも

りしかといとかうはあらさりきかしとなかめわひて

ねさめのひろさはの准后

しなれわひわかふるさとの萩のはにみたるとつけよ秋の夕風

一品宮に繪とも奉るなかにせりかはの大將のとなきみの

女一宮思ひかけたる秋の夕へかきたるに思ひよせらるゝ

ことや有けんかきてそへまほしかりける

かゝる大將

をきのはに露ふきむすふ秋風も夕へはわきて身にそしみける

人のわつらひけるとふらひにまかりてむかし思ひ出らる

ることや有けん秋の上風のわたるにしたかひてほろほろ

とこほろゝ露になみたもさそはれぬるこゝちして

風につれなきの太政大臣

秋風やむかしをかけてさそふらん萩の上葉の露もなみたも

かくわたれるよしきこえければ冷泉院一宮

うしとのみ思ひはてにし秋風にそよめく萩のおとそかなしき

のわきたちたるゆふへきりつほの更衣のはいの許につか

はさせ給ひける
源氏のさかの院御歌

宮さきの露ふきむすふ風のおとにこ萩か本を思ひこそやれ

關白すゝみわたたりてのち皇太后宮にあからさまによゐりて侍けるあしたかの宮より露そこほるゝあき萩の花との給はせて侍ける御返し　あさくらの皇太后宮大納言

宮城野のこはきか花の露みればしかたちなれし秋を戀しき四季もの語のなかに　月のみかとの御歌

しの原や露分衣袖ぬれてうつりにけりな萩か花すり一條院のみやす所をのにすみ侍けるにまかりて侍けるを心あるさまに思てしなるゝ野へないつくとて申て侍けれ

夕暮　は　夕きりの左大臣

秋のゝのくさのしけみをわけしかとかりれの枕むすひやはせしなみなへしなよませ給ひける　うつほの朱雀院御歌

初秋　うすくこく色つく野へのなみなへしうゑてやみまし露の心な

さかの院に行幸ありけるに野の花のさかりなるなかに女郎花の霧のたえまもわりなけるを御らんして

物語四下　立かへりならて過うき女郎花はなさころものみかとの御歌のさかりな誰にみせましなほすらはんきのまかに物語

とりてなやむなきいて　内　大　臣

あさつゆにしなればすとも女郎花おほろけならぬ人にならすなうちわたりにてつれかりける女のあらめさまにいひなしてほかに侍けるうしろてをあやしう見しこいするものかなとて　よその思ひの右大將

なみなへしいかなる野への草葉にてよそふる袖に露こほらん野分のあしたにふちはかまにつけて女につかはしける

うつせみしらぬの宰相中將

藤はかましなるゝ色によそへても物思ふ袖の露やまさらむ四季ものかたりの中に　あきゝりの中將

たちこむる霧のまかきの藤はかま露の爲とてしめし色かは前枝の中にをはなのまたほにいてさしたるも露をつらぬきとむる玉のなはかなけにうちなひきたる夕へ　にはふ兵部卿のみこ

宵木　拾　百番歌八十二番　ほにいてぬもの思ふらしまのすゝきまなく袂の露しけくして

ものまうてのところにいてさゝか見て侍ける女に薄にかけてつかはしける　こゆみの大納言

花すゝきはのかにみつる秋よりいかに忍びにむすひてしかなあれたる家にをはなのをれかへりまれくをみてよみ侍ける　うつほのおほきおほいもうち君

位陸上　ふく風のまれくなるへし花薄われふふ人の袖とみつるはせんさいのかるかやのにはかにふきすぐる風にみたれてうれへかほになひくを御らんして　かやかしたなれの嵯峨院中宮

露けさは秋のならひをかるかやのわきてしもなとみたれ初けん六條院御息所のもとより出させ給けるあしたせんさいの色々みたれたるを過かてにやすらひ給に申將の御もとにまあるをしはし引すゑさせ給て　六　條　院　御　歌

さく花にうつるてふ名はつゝめともならて過うきけさの朝貌あさかほの咲わたれる明ほのをもるとにみ侍ける人のたちかへりてこひしさまさる朝かほの花と申て侍ける返し　あさくらの皇太后宮大納言

おく露も光そひつる朝かほの花はいづれのあかつきかみも
御賀のおりみかとしらかは院なとみゆき侍けるにこま
せ給ける

みかきか原の嵯峨院御歌

君とてはいくよのあきの野への花露の光もこよひこそみれ

左大将おほうち山にすみ侍けるころこれかれたつれまか

りてあそひ侍けるついでに みつからくゆるの源宰相

聞しよりみてこそいとまさりけれ大内山の秋のけしきは

宰相中将

いかて君いまいてかゝる山さとの秋のさかりをひとりみつらん

八月ばかり女のもとにたいすみてふえふき侍ける

露わけわふる右大将

思ひじる人にみせはやあさちふの露わけわふる袖のけきしな

こたかりのついでにまてきたる人のよたなき原の露に

まといぬといひけるかへし せんいのいあよ

秋の野の露わけきたるかり衣むくらしけるやこにかこつな

このひてなくらにいて侍けるにこもすからおきめなせる

露もそてのうへになくひてみえければ

なくら山たつめるの女院大納言

吾袖にみたれにけりなほるくと玉かとみゆるのへの白露

たいしらす するはの露の右大臣

いかにせんあさちか原に風ふきて涙の玉の露もとまらす

なのにすみ侍けるに秋の夕くれ思ひ出る事おほくて

うきふれの君

手習 拾 百番歌合廿五番
心には秋の夕へとわかれとも詠る袖に露そこほるい

冷泉院の後の宮に御かたにて春秋いつかたに御心させ侍
へかり人ときこえ申させ給にいつとよき中にもあやしと
きしゆ点こそとの給はせければ

六條院御うた

講書 百番歌合八番

君とききは哀なかはせ人しれすわか身にしむる秋の夕かせ

にほふ兵部卿のみこ夕きりのおとゝのもとにわたりぬる

のちよろつ思ひみたれてのとかに吹くる松風のおともあ

らましかりし山おるしにはおとりて思ひくらへられけれ

うちの中君

宿不 百番歌合十二番

おく山の松のかけにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

野分 百番歌合廿二番

大かたの疵のはすくる風の音もうき身ひとつにしむ心ちして

中宮のさとおはしましける比しのひかたき秋のゆふへ

に依らせ給ひける

その思ひのみかとい御歌

身にそしむた夕くれの秋の風大かたにとは思ひなせとも

もろこしにてかへりなんとし侍けるころ河陽縣のさきき

の女王のきみのもとにまかりけるに見もしる心かほにこ

たへ侍ければ

講書 拾 百番歌合廿五番

哀しる人こそ更になかりけれ今はと思ふあきのゆふへな

物おもはしき心のうちなもかたらはむとて右大将のもと

にまかれりけるに爰にも夕への空をなめ侍ければ

いはてしのふの左衛門督

詠めつる心よいかに我ならぬ人もあやしき秋の夕くれ

かへし

大かたになかむる秋の夕へなも心にかへてあやしとやある
秋の夕へ吉野の宮にてよまぜ給ける

風につれなきのよしの院御歌

なほふりしちさとの外の雲のよそにふる郷とほき秋の哀は
風あらゝかにふき時雨となる々へけふのあはれはみしる
らんとおほす人のもにつかはさぜ給ひける

六條院御歌

平
賀
白鹿堂七十六歳

わきてこのくれこそ袖に露びし物思ふ秋にあまたへぬれと
もの思ひける秋のころ袖を風のふさがへすに

水あさみの衣香殿女御

夕されはいと露けき衣手に何としらする風のけしきそ

なくるまの麗京殿女御

かはかりと身のうき程をしらさりし秋の夕へも涙なりしな

あふにかふる梅室の女御

物思ふ袖の涙にうちそへていたくなおきそよはの白露

あふさなかしの源中納言

いとしくあれたる宿は秋のよに物思ふ袖そ露けかりける

うき舟の君をのに住けるころ月いてゐかしき程にたち

ふりて侍におくふかく入にければ

源氏のむかしのむこの中將

手習

山里の秋のよ深き哀をも物思ふ人は思ひこそしれ
女のもとにまかりてひとりあかししてゐる

おやこの中の内大臣

しるらめや片敷袖をしほりついあかしわつらふ秋のよなく

法輪にすみ侍けるころ月をみて

雲のうちの梅つほの女御

草の庵にひかりさしいる月をのみ友にてあかす秋のよなく

たいしらす

夢のかよひちの中君

いつもかく秋は露けき袖なれと月みる程そしなり侘ぬる

をのへの按察大納言家少大輔

おとに聞こえをば捨の月ならんみるにつけつゝ物そ悲しき

水のしらなみの冷泉院御歌

物思ふ涙にかけやくもるらんひかりもかはるあきのよの月

うちより涙にくもる月かけばやとめてもやぬるゝかほ

なるいかやうにてか只今は御覽するらんなと聞えさせ給

物語四下
百部歌合六章
へる御かへし

さころもの齋院

哀そふ秋の月かけ袖ならて大かたにのみなかめやはする

八月はかりしやうのことにしのひてかきならし侍ける

ちにくたくる按察御息所

月影もなかむるからの秋の空心つくしの風そ身にしむ

かものいつきおり給て後帝御たいめん有けるに月さし出

てをかしき程なりければみかきかはらの一品宮

今夜こそ君か光をさしそへて神世もしらぬ月はずみけれ

皇后宮内にいらせ給て出させ給けるに

おなし中宮

諸ともにかねならへぬ雲のうへはすむ空もなし秋のよの月

御位おりさせ給て八月十五夜六條院に聞えさせ給ける

源氏冷泉院御歌

鈴虫

雲のうへをかけはなれたるすみかにも物忘れせぬ秋のよの月
八月十五夜月くまなきにさかの院にまゐりて

わか身にたとゐるの宮大將

まつそ思ふみやこの秋の月みても君すむやとの松かせのこゑ

おなし夜女御更衣まうのほらせて御あそひ侍けるついで

によませ給ける 岩うつ浪の朱雀院御うた

あまたとし秋の今宵はみしかともまたかばかりの月はなかりき

宰相更衣

笛の音もやへのうき雲吹はらひ常よりことにすめるよの月

大僧都いまたらはに侍けるとき八月十五夜にゆるし給

はせたりけるをもてなしあそひ侍けるさかつきのついで

にあまのもしほ火の仁和寺の親王

いつもみる秋の半の空に猶ひかりそへたるよはのさかつき

さかの院のきさいの宮の六十賀の屏風に八月十五夜かり

飛る處 うつほの侍従なかつみ

秋毎にこよひの月をいしむとて初鴈かれを聞ならしつる

風葉和歌集卷第五

秋下

物語

たいしらす 風につれなきのおほきおほいまうち君

少女

雲る行鴈のねにさへいかなれば物思ふ袖はかゝるなみたそ

拾

さよなかに友よひわたる鴈かれにうたて吹そふなきのうは風

拾

おやこの中の内大臣

かきくらしわかこと物や思ふらんかりのねさめのこゑ聞ゆ也

はきにやとかる大將

物思ひの今はかきりの夕まくれ雲るに鴈のつけてすくなる

大内山にこれかれまうてきてかへる程に鴈の鳴てわたる

によみ侍ける

みつからくゆる左大將

立とまれ雲るにわたる鴈かれよやへたつ霧のはれまゝつ程

拾

たいしらす

袖ぬらすの准后

拾

女のものといなくあれたるをわけいるとて

機匠上

むしたにもあまた聲せぬ浅ちふに獨すむらん人をこそ思へ

うつほの右大臣

帝

帝たい人にておはしましける時一條院一品宮にわたり給

へるあしたに女二の宮にむくらの宿をゆきすきてと聞え

給へる御かへし

さいころもの嵯峨の院御歌

ふる郷は浅ちか原と成はてし虫のねしけき秋にやあらまし

はやうすみ侍げるところのあれにけるをとしころありて

みてよめる

せれうの中納言

吾宿はうつら鳴野とあれ果てあるしかほなるむしの聲々

あはれしられぬへき多くれあれたる所にすむ女のもとに

つかはしける

もとのしつぐの大將

詠らむあさちか原のむしのねを物思ふ人の心となしれ

かへし

おほきおほいもうち君のむすめ

置露のしけきあさちに鳴虫はなへての秋のさかとこそきけ

一かたならずもの思ひけるころむしのねを開て

おやこの中の内大臣

思ふことちくさにしけく虫のねにみたれまされるわか心かな

身の有さまを点にかきたりけるに夕へなめたる所にか

きつけ侍ける

浅ちか露の尙侍

夕くれはよもきかもとの下露に誰とふへしとまつ虫の聲

きりつほの更衣のはいのもとに御つかひにてまかてたる

に風いとすいしく草むらのむしのこゑ／＼もよほしかほ

桐壺

なれば
すいむしのこゑの限をつくしても長き夜あかすふる涙かな

源氏のゆけひの命婦

秋のころ女につかはしける

うつほの中納言まさあきら

雄略院

秋のよのさむきまに／＼きり／＼す露をうらみぬ曉をなき

たいしらす

かいはみの右大將

秋のよの長き思ひもきり／＼すいつまてともにならんとすらむ

山さとに物思ひける人を思ひやりてつかはしける

にほふ兵部卿のみこ

權本

なしかなく秋の山さといかならんこ萩の露のかゝる夕くれ

をとこのおろかなるさまにみえ侍ければ山さとにわたり

て侍けるにしかのなくをきて

みつあさみの右大臣中侍

つまこふるおなし音にこそあらねともしかなきくらす秋の夕暮

家のの辨

しらさりし都のほかのすまひしてし諸共にねこそなかるれ

石山にこもり給へるに鹿のいとあはれになきければ

風につれなきの一品宮

里とほき深山のおくの鹿たにも秋の哀はしのはさりけり

女二宮

かくはかりふかくはいまたしらさき鹿の鳴音に秋の哀れを

さかに住侍けるに鹿のなくを聞てわれもしかこそれをつ

くしけれと人のいひければ

はつねのしかまの太政大臣女

なくら山うき身に秋はしられつゝしかはかりこそ聲もなしまね

たいしらす

人しれぬ袖のしくれもひまなきにおなし心に鹿もなく也

霧ふかきあしたに女につかはしける

にほふ兵部卿宮

あさ霧に友まとはせる鹿の音を大かたにやは哀ともきく

宇治にまかれりけるに霧いとふかくたちわたりてみねの

権本

やへくも思ひやるへたておほくあはれなりければ

かゝる大將

橋加 百壽歌合六十二番
朝あさはらけ家路もみえず暑あつこしまきのを山は霧きりこめてけり

六條御息所みよところ齋宮いはいみやにくしきこえてくたり侍ける日霧ひきりいたう
ふりてたゝならぬ朝あさほらけにひとりこたせ給ひける

六條院のおほむうた

賢本

ゆくかたななかもやらんこの秋はあふ坂山を霧なへたてそ

一條のみやす所をのにすみ侍けるに尋りて女二のみこ
のかたにて霧のたゝ此軒のもと迄立わたれるにまかてむ
かたもみえずなりゆくはいかいすへきとて

夕きりの左大臣

夕霧 百壽歌合六十二番
山さとの哀かななをふる夕霧にたち出ん空もなき心ちして

女二宮

夕霧
やまさとのまかきをこめて立霧も心空なる人はとゝめす
あねのもとにいてゝやかてたちかへりけるになきのうは

風あらゝかにふきまよふに 末葉の露の東宮とうきやう宣旨

夕霧に道やまとはむ萩のはのそよめくやとに心とまりて

みこにおはしましける時きくのえんせさせ給に前中宮い
またさとおはしましける御まへのきく關白にめされけ
れはひととと奉りけるのちにさしおかせ給へりける

あたたみの院の御歌

一本易物語上
わか心君かまかきにうつろふは猶やのこれるしら菊の花
ものおほしける比きくの花を御らむして

六條院御歌

百壽歌合六十四番 物語百
もろともにおさふしきくの朝露もひとり秋にかゝる秋かな

右大臣の女御ささきにたち給てのちみかと菊のえたのお

らしろきを給はせたりければ めもあはぬの后宮の辨
朝夕に露分わびししら菊も秋のみやこの光とやみし
みかとみこと申ける時きくの枝をみよとて給はせたりけ
れば
のちくゆる大將の女御

うつりぬる色はうくとも朝霜のおきてやみまし白きくの花

長月ばかりあかしたる明ほのにきくをなりて人の見せ

侍ければ

露 露 露
露ならぬ人さへおきてきくの花うつろふ色をまつもみる哉
うつほのふちつほの女御

冷泉院の行幸侍けるにきくををらせ給てむかしの青海

波のをりをおほしいてゝ 六條院御歌

草本 百壽歌合九十八番
色まさるまかきの菊もをり／＼に袖うちかけし秋をこふらし

九月十三夜内にまゐりてよめる

まよふさんのれの按察大納言

すへらさのよも長月の月みればのとかにのみそすみわりける

中納言

雲のゝへはすみまさりけり古郷にまなへてみつる秋夜の月

おなし夜一條院にて御あそび侍けるついでによめる

いせなの右衛門督

秋のよのくまなき空の月影もたゝやとからにすむとこそみれ

吉野山の中宮

よし野にて月を御らむして

かへりてもわすれしかし秋深きよし野の山にすめる月影
世をそむきてふしみにすみ侍けるに權大納言夜ふかき月

になつれまてきて侍ければ

みかきかはらのさきの左大臣の三君

身のうきをなげかぬ人も尋ねけりふしみのさとの秋のよの月
かつらにすみ侍けるころ月を見て

かつらの 關白北方

秋はなほかつらの里のさびしさを人こそとほれ月はすみけり
うちにおはしましける頃月を御らんしてよませ給ひける

よその 思ひの中宮

さとの名もわか身ひとつの秋かせなうれへかれたる月の色かな
おなしころうちの御返事に

みし秋の月も雲ゐの空なからよなうち山のかげそかはれる

朱雀院の御時うすくもの女院内にいらせ給へるに月はな
やかなるにむかしのことおはし出られければこのへに
霧やへたつると聞え給へる御かへし

六條院 御うた

月かけはみしよの秋にかはらぬをへたつる霧のつらくも有かな
九月ばかり山へのほるとておほたけといふ所にてやすみ
侍けるに月かけに鹿のこゑあはれに聞え侍ければ

風につれなきの 關白

月のすみれをはるかにたつぬれととき世をおくる鹿の音哉
右 大臣

きくそうみ秋をしのはめきをしかのみ山の奥の月になくこゑ
四季ものかたりの中に 月のみかとの御歌

山のはにかたふく月のなになれば哀はかはるすゝむしの聲

御かへし

すゝむしの少將

君たにもとちに有明のかけならになにかはむしの聲よめるへき
なか月の末つかた箱ふきすすみけるに

いはてしのふの 關白

行秋の露に涙をおきかへて袖を草葉にやとる月影

かいはみの 右大將

いつとても有明の月はみしかとも心にとまる秋の空かな
かへし 太政大臣のむすめ

しらさりき秋の空をばみしかともかゝる有明の心つくしは
秋悲不倒貴人心といふころを

道心すゝむる 右おほいまうち君

あきのいも御らんしかてら雲林院におはしましけるころ

紫のうへにつかはさせ給ひける 六條院 御歌

賢木 百首歌合三番
あさちふの露のやとり君をおきてよもの嵐そしつ心なき

賢木 拾 百首歌合八十一番
風ふけばまつそみたるゝ色かはる浅ちが露にかゝるさゝかに

賢木 拾 百首歌合六十六番
うつほの兵部卿のみこ
かく露に秋のした葉は色つげと衣うつへさ人のなきかな

有明の月のまたよふかきにうちへまかりけるにあらまし
き風のきほひにほるゝとおちみたるゝ木の葉の露ちり

かゝるもいとひやゝかに人やりならすぬれて

かゝる 大將

山おろしにたへぬ木のはの露よりもあやなくもろき我涙かな

風あらくふきけるあした人につかはしける

玉もにあそふ關白

ふきはらふ風にみたるゝ白露も物思ふ袖に似たるけふかな

ふちつほの女御いまた参り侍らざりける比給はせける

うつほのみかとの御歌

嵯峨院

いつともたのむものから秋風のふく夕くれはいふかたそなき

おなし女御のもとにかく申こと侍て

右大將仲忠

初秋一

秋かせのはきの下葉を吹ことに人まつ宿はとこやしくらむ

さかの院のきさいの宮の六十御賀の屏風にもみちみる人

由邊にあらたかりつめる所 参議さねより

菊宴

おりしける秋のにしきに圓居してかりつむ稻をよそにこそみれ

いかなるをりにか秋のけしきもしらすかほに青き枝のか
たえいとくもみちたるを女につかはすとて

かなる大將

續月

おなしえをわきて染ける山姫にいつれか深き色といはしや

かへし うちのあねきみ

同上

山いめの染る心はわかねともうつるふかたや深きなるらん

むらさきのうへ春に心よせ侍けるに長月はかりはこのふ

たに色々の花もみちをこきませてつかはさるとて

冷泉院后宮

少女

心から春まつそのはわかやとのもみちを風のつてにたにみよ

物おほして御らんし出したるにきいの梢もいづつきわた
るころなりければよませ給ける

物語一下

せく袖にもりて涙や染つらむ梢色ますあきの夕くれ

しかにこもりて出侍とて色こき紅葉を折て

右大將なかつ

菊宴

山つとをみすへき人はなけれともわかなる枝に風もよきなん

思ふ事侍りてはつせにまうてゝなるへきさまの夢見侍て

まかてける道にてよめる しつのをた巻の左近府生

さは山のもみちの錦たちいてゝしるしを深くみるよしもかな

右のおほいまうち君こゝろあくかれたるさまなりける比

拾遺歌卷八十一

てならひにして侍ける 心たかき後冷泉院宣旨

秋ふかきあな葉の山のこきませにいろ／＼物を思ふ比かな

これを見て 右大臣

いろ／＼に人の心そうつるらしあなはの山は秋もしらぬに
秋の末つかた大あ川にてせうえうしてかへり侍けるにし
くれに袖のぬければ

みふねのおほきおほいまうち君

やよ時雨もみちにあかね色そとやことそともなき袖ぬらすらん

きさいの宮さとおぼしましける比うちしくれたる夕に

たてまつらせ給ける

そむれとも木のほゝ風にさそひけり袖の色こそしくれわひぬれ

御かへし

皇太后宮

秋ふかきかことはかりの袖の色にまたきしくれの空なうらみそ

みかとみこと申けるときかれ／＼にならせ給へりければ
長月ばかりによめる のちくゆる大將の女御

風さむみ人まつむしのこゑたていなきもしぬへき秋の暮哉

たいしらす

風につれなきのよしの院御歌

むしの音も秋はてかたの草の原かれはの露はわかなみたかも

わたらぬ中の承香殿女御

わかことくなきよわり行虫の音はあきはつる身や悲しかるらん

おやこのなかの中宮母

下くさにあるかなきかになく虫のよをあきはつる聲のかなしき

秋のくれにほうりんにまうていもみちの水になかるいを

みて

秋のよなかむる少將

散つともみちをなかつ水にこそとふへかりけれ秋の行へは

神無月にまゐるへしときこえける人に秋のくれにたまは

せける

風につれなきのよしの院御歌

くれぬへき秋をや人はなしむらんさもあらぬ露のかゝる袖哉

九月つこもりつれなかりける女の許にまかりてよめる

たゆみなきの中將

いていみよさこそつらさはつきずとも今夜に限る秋のけしきを

風葉和歌集卷第六

冬

神無月のついたちに「たくひなくうきわかれちの袖のうへ
にいとふりそふ初しくれ哉」といへる人のかへし

たゆみなきのふちつほの女御

たくひなく物思ふ人の袖のうへにけさをわきける時雨ともみす

あさくら^の皇后宮内侍

いつとなくしくるい袖に神無月空さへいといはれぬころかな

女のもとよりかへりてあしたにつかはしける

かいほみの^{右大將}

神無月しくれさりせはから衣けさの袂をいかにしちまし

まのうらにこもりあて侍けるころしくれかちなるそら

の氣しき思ひのことなくて

なんなすい^の左大將

ふりふらす時そともなき時雨哉うき世の中にあきはてしより

神無月ついたちころうちにてせうえうし侍けるに八宮の

すみ侍ける處の梢ことにおもしろうとほめさへすいゝるな

るに ^{にほふ兵部卿のみこ}

^{總司}秋はていさひしさまさる木のもとをふきなすくしそ峰の松風

右衛門督

いつくより秋はゆきけん山里の紅葉のかげはすきうき物を

たいしらす　　とりかへばやのみてものいひしり

秋はていよもの嵐にさそはるゝこのはにたくふ我身ともかな
なげく事侍ける比もみちのちるを見て

あまやとりの太宰権帥重康

こからしにちらすくたくるもみちは、物思ふ人の心なりけり

四季ものかたりの中に　　しぐれの式部卿のみこ

色深くそめしもみちは散ぬるを何と世にふる時雨なるらん

かみな月ばかりしくれいたうする目女につかはしける

とりかへばやのさきの太政大臣

物思ふ心も空にみたれつゝしくれにそふる我なみたかな

いとせちにおもふこと侍けるころうちくもりしくれけれ

は　　うもれ木の少將

はれまなき心や空にまかふらん泪しくるゝ袖のうへかな

たゝ人におはしましける時さかの院の皇太后宮れいなら

てさとにおはする比わたり給へるににはかにくもりしく

るればこまぜ給ひける　　さころものみかとの御歌

式部卿のみこさかにこもりあて侍けるころしくれかきくら

す夕につかはせ給ひする

な

なか月のわかれのみかとの御歌

思ひくらす夕への空やいかならんさもあらぬ袖もかゝる時雨に

山さとにすみける女のもとにつれよりもしくれあかした

るあしたにつかはしける　　れさめの関白

つづられと思ひやる哉山さとのよばのしくれのおとはいかにと

たいしらす

おもかけこふる三位中將

もの思ふ心のうちなしりかほにたえぬ時雨のおとそかなしき

みかともこと申ける時びさしうおとつれさせ給はさりけ

るころしくれのおとよとほにきゝなされさせ給ひて

うたゝれのきさいの宮

おとたえぬしくれにつけて思ふ度契りし人のかゝらよしかは

なとこのたえにけるころしくれを聞あかして

なぐるまのいけい殿の女御

音つれのたえぬなさけのしくれにもなとかく袖のぬれ増るらん

もの思ひけるころ月のにばかにかきくもりてしくるゝな

見て

あひすみくるしき源大納言三君

なくさめに詠る月もかきくもりいとゝ時雨にぬるゝ袖かな

しのびたる女のもとにまかりてたゝにてかへり侍ける道

に月をみて

みふれの太政大臣

かけとめし露のやとりも霜さえてうはの空にもめくる月哉

左大將みなせにすみ侍ける冬のころつかはしける

みなせ河の新中納言

聞なれしみねのあらしもいかならん都もかはる風のけしきに

少將なかりみつのをにこもりあて侍けるのち「松風のさ

むきよに／＼年をへてひとりふすらんきみをこそ思へ」と

申て侍ければ　　うつほの修理大夫思草女

ひとりぬるよさむも今やこけをうすみ霜おく山の嵐をぞ思ふ

女のゆくへおほつかなくおもほしなやみける比なほなか

もとのくさも霜もふかくなり行を御らんして

物語二

物語二七 百番合三番

たつめへきくさの原さへ霜かれて誰にとはまし道芝の露

四季ものかたりのなかに はきの内侍のかみ

花のうへにむすひし露は夢なれや萩のふるはをうつむ朝霜

女のもとよりかへりたる人にかはりてあしたにつかはし

ける 冬河にさけるの關白

拾 百番合四十二番

あさしものおくれはくるゝ冬の日もけふこそ長き物としりぬれ

かへし 女院のみくしけ

冬の日くるゝもしらす消かへるあしたの霜に身をたくへはや

嵯峨院のきさいのみやの御賀の屏風にあしるある河に舟

勘 ともこさうけたる所

うつほの權中納言忠能

こさつらねひをはこふとて綱代木におほくの舟をみなれぬる哉

うちにてよみ侍ける かをる 大將

惣四 百番合七十六番

霜さゆるみきはの千鳥うちわひて鳴音かなしき朝ほらけ哉

かへし うちの中 君

附角 拾 百番合九十六番

あかつきの霜うちほらひなくちとり物思ふ人の心をやしる

女のゆくへしらてなけきけるころ千鳥のなくを聞て

しくれの中將これすけ

さよちとり友まとはせるこふす也おなし心に物やかなしき

物思ひけるころ水鳥のこふをあはれに聞て

もにすむいしの權中納言

かたしきの袖さへ氷る冬のよはをしのうきねをよそにやは聞

うらむること有てあひ侍らざりける女のひとりあかして

池の水鳥のつかひはなれぬをうらやましく見て

おやこの中の内大臣

水のうへに氷とちたるをしたにもつかひはなれてあかす物かは

池に水鳥とものあそふを御らんしていしたやすからさ

らむほとおほししられければ

うたいねのみかとの御歌

水のうへに鴨のうきよをいつ迄かしたくろしくて過んとすらん

女二のみやのすみ給ひける一條にしのひておほしました

るに池にたちあるをしのおとなびも同じ御心におほされ

物語二八 百番合七十六番

さころものみかとの御歌

わればかり思ひしもせし冬のよにつかはぬをしの浮懸なりとも

女のもとにまかれりけるにつれなかりければ池のをしの

なくを聞て はしたかの按察大納言

もろともにばれうちかはすをしよりも湧る霜よはたへすなく也

あひそひて侍ける女のはなれあて侍けるころつかはしけ

る われからのほりまのかみ

冬のへにはらぬをしのひとりねは上毛の霜をいかにせよとそ

四季物語のなかに にほのきみ

なみかくるにはのうきすの磯つたひよるへ定めぬ契かなしな

かもの帥宮

人めもつらゝのとこあうき枕心くたくるなみのうへかな

女をおやにとりこめて侍けるにしのひてまかりならな

けきあかして さいわけしあさの關白

いかにせむ片敷わふる冬のものとくるまもなき袖のつらゝを

ゆふきりの二のみこ

おちつもる涙は袖に氷つゝとけてねらるゝふひのまもなし

雪のふりつもれるに月くまなくさし出てひとつ色に見え

わたされたるにやり水もいたうむせひ池の水もえもいは

れすすこきに

むらさきのうへ

水とちいしまの水はゆきなやみそらずむ月の影そなかるゝ

八條院の冬の御かたにて雪ふり月おもしろき夜詩歌なと

たてまつり侍けるに

さゝわけし朝の關白

冷わたる池の水も月かけもおなしかいみとみゆるよはかな

頭 中 將

たとふへきかたなきものは冬深み雪ふりしけるよはの月影

たいしらす

つまこひかぬる三位中將

なげきわひうちぬる床のさびしきに哀なそふる冬のよの月

うす雲の女院かくれ給てのち思ひいてきこえさせ給つゝ

おほとこのこもれるにうらみたるさまにて夢にみえさせ給

朝顔
百番歌三十八番

六條院おほむうた

とけてぬのれ覺さひしき冬のよに結はれつる夢のみしかさ

たい人におはしましける時こかはにまうて給によし野川

のわたりにてみきは氷のとちこめておほむ舟もえすきや

物語三下
百番歌三十八番

さころものみかとの御歌

わきかへり氷のしたにむせひつゝさもわひまざるよし野河かな

女のもとにたひ／＼まかりてひとりあかしてよみ侍ける

おやこの中の内大臣

ひとりねのよを重ねたる淋しさにとこさへさゆるかたきしの袖

五せちのまひひめにつかはしける

夕きりの左大臣

少女

ひかけにもしるかりけめやなとめこあまのは袖にかけし心を

とよのあかりの節會にをみにて侍けるにまうつとて有明

の月おもしろくさえわたれるに

みかさかはらの右大將

めつらしき豊のあかりのひかけくさかす袖にも霜はおきけり

まことにおきたりけるにやうちばらへるけはひをかしか

りければ

大納言典侍

ひかけくさかすにいとゝ霜さえて水やむせふ山あゐの袖

しのひたるをこのりむしのまつりのまひ人にてわた

けるにくるまよりあふきをさしいてたりければ馬をうち

よせたるに

五 せ ち

なみのきる山あゐの衣めつらしく只ゆきすりにけふはみよとや

夕くれの空のけしきいとすこしくれたる日にほふ兵部

卿宮ながむるはおなし雲あなと申て侍けるに

總角

う ち の 中 君

あられふるみ山のさとは朝夕になかむる空もかきくらしつゝ

世なのかれむとて出けるに江侍従内侍かもとのものに見

あひてことつけ侍ける

あまのかるもの權大納言

あられふるみ山のさとはいかにそとくる人ことの便すくすな

女院ゆくへしらてなげきけるこる木からしのあらくしく

れうちしてまたふきかへしあられのおとのおとろおとろ

しきをきいて

末葉の露の右大臣

こひわふる冬の夜すかられ覺してしくれかうへのあられをそ聞

いとつれなき女のもとにまかりてないきかれて侍けるに

あられのふりければ

水あさみの左兵衛督

うらやましうはの空なるあられたにまきの板戸の内にいる也

冬のころをのにうつろひ給ひけるに目比心もとなかりけ

る雪かきくらしふりて風のおともいとはけしければ

めもあはぬの右大臣

山深くけふなれ初るあらしよりやかてはけしきある雪哉

よし野山にこもりゐて侍けるころ雪のふりければ

演 松 中 納 言

物語四

ふゆこもりよし野の山の雪ふみていと人めやたえんとすらん

同上

よし野にすみ侍ける人につかはしける

きたかへり思ひやるとはしるめやよしの山の雪のふかさを

大納言たより七十賀の屏風に山に雪たかくふれる家

のある所

ふみ人しらす

落久は物語三

雪深くつもりてのちは山里にふりはへてくる人のなき哉

雪のあしたにあはれといふことをおきて歌あまたみけ

るなかに

ふたよのとの上人

道たゆることやうからむふる雪を哀とみても人のまたれば

ふる雪のけさの哀にさそはれていかなる人に誰をまつらむ

中宮のをどなくおはしましけるを六條院にわたしきこえ

むと思ひけるに雪かきくらしふりつものにかやうならむ

日ましていかにおほつかなからむとてめのとに申侍ける

落久

あかしのうちへ

雪ふかきみ山のさとははれずとも猶ふみかへよ跡たえすして

よし野山にて雪のふる日よませ給ひける

よし野の女院

ふみ分てくる人あらはとひてまし都もかくや雪つもるらむ

おなし山にすみてことに心ほそかりけるによめる

物語拾百番合三十五番

みよし野の雪のうちに住わびぬいつれの山を今はたつれむ

女のゆくへしらすなりて侍けるふるさとに雪のふる日じ

くらしながめてかへるとてよめる

かはほりの少将

尋ぬへきかたもなくてそかへりぬる雪ふる郷に跡もみへれと

四季ものかたりの中にゆきのみかとの御歌

しら雪のいかてか涙をむすはましむすふ水の便ならては

ないしのかみさまかへて侍ける後雪のあしたにつかはさ

せ給ける

玉もにあそぶの朱雀院御歌

哀とは思ひおこせよかたしきて身もさえわたる雪のよなく

新大納言世なのかれて高野にすみ侍けるに雪のふる目つ

かはさせ給ける

しのふの院の御歌

都たにきえあへすふる白雪にたかのにおくを思ひこそやれ

この御歌を見ても雪御らんせし御ともつかうまつれりし

ことなと思ひ出られ侍ければよめる

新 大 納 言

むかしみしなほの山のみゆきまで思ひ出ても袖そぬれける

六條院太政大臣にもし給けるときおほはら野の行幸に

つかうまつり給ふへくかいて御けしき有けれどもいみ

のよしそうせさせ給てさも侍らさりけるにきし一えた奉

冷泉院御歌

行幸 百番合九十九番
らせ給とて
雪深きなしはの山に立きしのふるき跡をもけふは尋ふ

御かへし

六條院御歌

同上
なしは山みゆきつもれる松原にけふはかりなる跡やなからん

雪のうちにかなる大將まできて兵部卿宮にかへりてとは
いつかたにか聞ゆるるとひ侍ければ

うちのあれきみ

御本 百番合七十八番
雪深き山のかけはし君ならて又ふみかふふ跡をみぬかな

まゐるへきよと聞えける人に雪いたくつもりてえもいは
すしみ氷たるくれ竹の枝につけて給はせける

さ衣の後一條院御歌

物語二下 百番合九十七番
たのめついくよへねらん竹のはにふる白雪のきえかへりつゝ

御かへし

院

末のよもなにしたのむらん竹のはにかゝれる雪のきえも果なて

こゝち例ならす侍けるころ關白しのひてまできて雪のつ
もりたるあかつきの空をいさなひてみせ侍ける

かやかしたなれの宮耀殿女御

うき事は身にのみつもる白雪のきえかへりてもふるそ悲しき

かへし

たれもみなきえ残るへき身ならねはふりそふ雪を何かいとらん

山さきに侍ける女のもとに雪のふる目つかはしける

ふきこ風の宰相中将

さびしやと思ひこそやれ雪深きみ山の里の雪のけしきを

佛名なことしはかりにこそはとおほしめして御導師の

さかつきのついでによませ給ける

六條院御歌

春までのいのちもしらす雪の内に色つく梅をけふかきしてん

御かへし 御導師

同上
千世の春みるへき花と祈置て我身を雪と共にふりぬ

さかの院のきさいの宮の御賀の屏風に佛名したる所

右大將なかつゝ

かけて祈る佛の数しおほければ年に一たびちよもますらむ

としのくれによめる わか身にたとるの皇后宮宰相

雪ふりて暮行としの数ことにむかしのとほくなるそ悲しき

風葉和歌集卷第七

神祇

ちきりとて結はすもなき白絲を絶ぬ計や思ひみたるゝ
これはよ所の思ひのみかと中宮の御事をおほむ心ひと
つにふかくおほしめしてよなく大神宮を拜したてま
つらせ給ひおほとのこもるともなき御ゆめにつけたま
ひけるとなん

やすみしる我すへらきにしたかはてたが誠をが神はうくへき
御夢のうちの御託宣たのもしくおほしめされければ關
白春宮大夫に侍けるととき勅使にてみてくら奉らせ給け
るにことなくかへりのほり侍ける道にてこれもゆめに
つけたまひけるとなんむ

物語下

やはたにこもりてこと事なくきねんすること侍りてかき
てはしらにおしつけいる いはしみつのいよのかみ

同上

はうてんよりけたかきこゑにて御かへし

物語上

夢ばかり結びおきける契故長き思ひに身をやかさん

神世よりしめ引そめしさか木はを我より外に誰かなるへき

これはさころもの源氏宮内へたてまつらむとし給ひけ
るに堀川院の御夢に賀茂よりとてはへりけるとなん
人しれすわかしめさしいさか木はを折んといかて思ひよらん

これはみたらし河の大臣さい院のいまたちゝみかとも
もしられ聞え給はさりける頃ほのかに見きこえて心に
かいりて寐たる夜賀茂よりとてさか木につけたるふみ
にかゝれたりけるとなん

物語

あきらけくてらさんこの世後の世も光をみする露や消なん

これは風につれなきよし野の院の中宮の御さむ近くな
りて宇治入道關白がすかにまうて侍けるに夢うつゝ
ともなくいとけたかきさまなる人のつけはへりけると
なんむ

猶たのめなけなき世をまつのはにかゝれる藤の花のさかりは

これは夢かたりの前の關白女をなくなして世をそむか
むと思ひ侍けるもとかくさはりかちに侍ればかすか
にまうてさまたけあらせたまふなと祈申けるあかつき
かたにうちねふりたるゆめにふちの花を給はすとの
たまはせけるとなん

物語中

なみのほかきしもせざらんさとなからわが國人に立ははなれす

これはまつらの宮の右大辨宰相のうちたゝ遺唐のそへ
つかひにわたりて侍ける時いくさおこりて世のみたれ
いてきにけるをかのおほやけのいくさにまははりて我
國の神佛を念しけるに馬くらまでわがすかたにかばら

ぬ人九人いてきてもろともにないかひてことなくしつ
め侍にければうちやすみたるより夢にみえ侍けるすみ
よしの御歌となんいひつたへたる

あふことはいさしら雲のかたく共立かへりみつしるしあらしや

これはかいばみの右大將女のゆくへしらぬことをすみ
よしにまうてい申侍とて「思ふ人よにすみよしと思せ
はたちかへりこんきしの白浪」とよみ侍けるにえもい
はすけたかきをとこのけはひにてつけ侍けるとなむ

秋のよの松ふく風のおとよりも哀身にしむ法のこゝろかな

これはいはかきぬまの頭中將すみよしにこもりて讀經
なとしておこなひ侍けるあかつきつほねにたてふみに
てさしおきて侍ける歌なりさるへき人もまうて侍らさ
りければ神の御しわさにやと思ひてひとりこちける

かくはかり物思ふ人はあらしよにたれか身にしむ哀なるらん

左大將かたちをかくしてところ／＼見ありきけるころ前
齋宮に大貳まさかれかちかつきよりけるを太神宮と思は
せてさま／＼申けるにおそれおこたり申て出にければ
ふみ給ける

我爲にあまてる神のなかりせはうくてそやみに猶まとはまし

やはたにまうていよみ侍ける　わたえのぬまの右大臣
ちかひおきし神の心をたのむ哉人の人にはあらぬ身なれば
女一宮齋院にお給へるもはいらすやあらんとおほさ
れてよませ給ひける

秋のよなかしとわふるみかとの御歌

ゆふ懸てしらすやあるらん思ふ人神のいかきにしめゆひつとも
賀茂の御つけにてみかとしらせ奉り絶てさかき葉のさ
してをしふる人なくはとの給はせける御かへし

おなし齋院の母后のみや

かはるなよ神葉さして祈るらしこやそのかみの験しなるらん
御出家おはしめしたうせ給て賀茂にまうてさせ給てよま
せ給ひける

今ばとて祈りかけつるゆふたすきわか世の後は神にまかせつ

かものいつきいまたかはり侍らさりけるとき花のさかり
に内大臣まうていちらても花の千世をへよかしと申侍け
れば

みたらし河の齋院申納言

さかき葉も花の匂ひもたくひなきなる人からに千世もへぬへし
みかとた一人におはしけるとき祭の日あやしろにてみや
こには音なきほといきす御垣のわたりにふるこゝろにな
りけるをきかせ給てかものいはかきたつれきにけりとの
たまはせけるに

さころちの齋院女別當

かたらはし神もきいなん郭公思はんかきり聲なをしみそ
六條院すまにうつろひ給はんとして故院の御はかにまうて
給ひける御ともにさふらひて加茂のしものみやしろをわか
れとみわたすほと齋院の御けいにかりの御すおしんにて
つかうまつれりしと思ひいてられておりて御まのくち

なとりて聞えける　源氏の衛門大夫

引つれて葵かさしそのかみを思へばつらしかものみつかき
やかてうまよりおりてみやししろのかたなをかみ給ふ神に

須磨百歌合八十七番

同上 百番歌合四十五番
まかり申たまふとて
うき世をば今そ別るいとしまらん名をはたすの神にまかせて

六條院御歌

兵部卿のみこのむすめうちになあるへしと聞えけるにに
はかにかものいつきにさたまりにければをみなへしにつ
けてつかはせ給ける みかさかはらのみかとの御歌
神かきに咲ましるとをみなへし露計をは思ひわするな

御かへし

齋院

ゆふたすきかけても人のわすれすは露のなさを頼みこそせめ
神無月十日ころ平野に行幸侍けるに齋院のわたりのもみ
ちいみしうさかりなるに御らんしわたさせ給て

さころものみかとの御歌

物語四下
神

かきは杉の棺にあられともみちの色もしろくみえけり

藤原君

たいしらす

うつほの参議すけすみ

めにちかくおいていのれとかすかのいもりの神は色もかはらす
龍吟出家し侍て又のとし春こそむつきにいなりの御幸
の御ともつかうまつりて侍けるかさしの杉に雪のふりか
かりたりしなとおほしめし出られければ

あまのもしほひの院御歌

祈こし神さへつらしいなり山いつらは杉のしろしありけり

六條院すみよしにまうてさせ給けるにしのひてまゐりて

よめる

源しのおかしのあま

若菜下
むかしこそまつわすられぬ住吉の神のしろしをみるにつけても
おなしをり廿日の月にはかにすみてうみのおもておもし
ろくみえわたるに霜のいとこちたかくおきて松はらも色ま

かひてよろつの事をいさむきに

同上

むらさきのうへ

すみのえの松によふかくおく霜は神のかけたるゆふかつらかも
六條院内大臣と申ける時すみよしに御願はたしにまてさ
せ給ひけるに神の御とくをあらはれにめてたしと思ひて申

出侍ける

参議惟光

治承百番歌合六十三番

すみよしのまつこそ物ほかなしけれ神世のことをかけて思へば

てよみ侍ける

かいほみの右大將

しろしありとたのむ心は住よしの松のみとりのいつかかはらん

みかとなる月の中納言のこときかせ給て月かりけむす

みよしの松とのたまはせければ

はつれのせり河の御息所

住よしの神もことわれあはちしま月かゝれとはなめきりしな

かひのものかたりのなかに八月十五日すみよしにまうて

てよめる

あはひかひの左大辨

いかばかり神の心もすみぬらん今夜に似たる月しなければ
五節のまひいめをみてつかはしける

夕霧の左のおほいまうち君

少女拾百番歌合四十二番

あめにますとよなかひめの宮人もわか心さすしめをわするな

登華殿女御にしのひて物申て出ける曉溫明殿のわたりを

すくとして内侍所のおほしめすらむこともおそろしくて

女すゐの左大將

神もみよかゝるなげきにむすひける契はけふの我心かは

すまにてやよひのついたりにてきたるみの日御はらへ
せさせ給ふとて

六條院 御歌

やほよろつ神も哀と思ふらんおかせるつみのそれとなければ
齋院のみそきの日はらへつかうまつるをきかせ給ていと
かうくしく物おそろしうおはされて

物語三下 百壽歌合八十八番

さころものみかとの御歌

みそきする

やほ萬の神もきてもとより誰か思ひそめてし

われこそにはひそめしか物語

物語四上

神も猶もとの心をかへりみよこの世とのみは思はさらなん

侍りけるをきかせ給て御心のうちに

風葉和歌集卷第八

釋教

むかしより心のつくしの契にてなげかむことも此世ばかりそ

これはあまのかるもの懽大納言思ふこと侍りてはつせ
にこもりてかゝる思ひやめ給へと申ける夢にいぬふせ
きよりうるはしきそうのさしいて申けるとなん

こひのふる心はやみにくらすとも雲の月をよそに詠めよ

これはちいにくたくる左大臣もの申ける女の後になち
給にけるをしらてなげさけるころの夢に石山よりとて

卷數のふたにかきつたりけるとなん

かけならへすまむことこそかたからめりかた近き山のはの月

これも石山の觀音のみたらし河の内大臣のゆめにつけ

給けるとなん

まてしばしちくるしほの時のまをかひもなきさと何恨らん

これはちくまのかはの中の君おといひともところとこ
ろにまゝ身のゆくへ祈けるにあねのきよみつにてあ

らたなるしるし侍けるを聞て石山にこもりて「おこし
けるひろきちかひのなかにしも我身ひとつのなともれ

にけん」とよみ侍ける御かへしの夢の中になん

かれはてん後をうらみよ埋木も花さく春も有とこそきけ
これはうつせみしらぬの内大臣の中宮の行へしらぬき

まになり給ひ頭中將も世をかこまることなと侍ける
ころさよ水にこもりてかれたらんうぶ木もと經よみ侍
けるをきいて「花さかむ事をいのりしうもれきばさて
たにくちてれさへかれめや」と思ていさゝかまともみ
て侍けるにこのてらの師の大とくとおはしきか申侍る
となむ

はかなしや夢計なるあふことに長きうれへをかへてしつまん
これはかさぬる夢の大將いとせちにおもふこと侍て法
輪にこもりておこなひ侍けるに夢うつゝともわきかた
きこゑにてつけ侍けるとなむ

しほしこそせきもとめ、妹せ川終に末にはなかれあひなん
これはなるとの侍従いもうとの行へしらぬことをなけ
きてくらまにこもりたりける夢に見侍けるとなん
ところ／＼見ありき侍けるころほうしの女のてをとらへ
て侍けるに佛のの給ふやうにてみ／＼いひいれ侍ける

かくれみのゝ左大將
たもたすてあやまつとかをみる時ぞ教へし法もくやしかりける
八月十五夜によみ侍ける
雪のうちのひしり
いかで猶わしのみ山にすむ月をこのみるはかりさやかにちみん
かへし
うめつほの女御

はれかたさいつくの雲をはらひつゝ君そ心の月はすむへき
なき人のために普賢菩薩つくりあらはしたてまつりてお
こなひ侍ける夜あかつきかたの月くまなうさし入て御か
さりととも／＼見え給ひければ

風につれなきの関白
ちかひあらはかゝる光をさしそへてまよはん闇を照さゝらめや
きよみつにこもらせ給ひけるにむねのみてはたてまつり
ぬといふ夢み給ひてかにもうてさせ給て院の御車にた
てまつるとて
ちくまかはの女院

夢の中に授くとみえしむねのゐての誓ひたかはぬ時至りぬる
おなしてらにこもりて思ふ事かなふさまに侍りければ
戀に身かふる頭中將

あなたふとかれたる木にも花さくにとける誓は今そしらるゝ
すゝめのものかたりの中に方便品若人散々亂心乃至以て

一華供養於諸像漸見無數佛

何となく手向し花の一ふさにかすの佛をみる身とそなる

人記品

かれはていふかき山へのうもれ木に思はす花の咲にける哉

觀持品

心くまわれはへたてゝ思はぬになにゆゑ人のうらみかほなる

神力品

いひおきしこの言の葉を思ひ出てなからん跡のかためにもせよ
院のふたん御經ちやうもんして侍けるにいつくかことに
たふときと人の申侍りければ

あまのもしほひの院新中將
水の沫の浮てはかなき世の中をいとへとける法そうれしき
兵部卿のみこのばてにさまかへ給はんとて
なみのしめゆふの冷泉院女一宮

涙のみくもる袂にかけてみよころものうらの玉やにこさむ

女院の御ことにこいちかきりになりて侍けるにいのりの

僧の若人有病得聞是經といふわたりなむを聞て

きわたる御法のかひもあらしかし絶にし人にかさるいのちは

なにはえの宮に八講おこなひて聽聞せさせ給ひけるに

いはてしのふの一條院内大臣

君が爲つとめもとめてこと更にひるむる法の心しらなん

此世をわかれはやのはいもさすかなる身の程に思ひわひ

てくるまにのるとて 水あさみの内大臣

何せんに思ひの家をいしむらんみつの車にのりをねかはて

經ふむはいむなりと人のいひければ

あまやとりの女御

たかせ舟のりもしらてはしら涙のきえなん後を悲しかるへき

右大將のはいのために宇治に堂たてて供養し侍てよめる

ひちぬいしまの關白

さり共とたのまるい哉さしわたるみのりの舟の道のしるへは

なはりのにそみて善ちしきの心になかふへきことゝて七

重寶樹のありさまなと説聞かせ侍ければ

あれまくの大納言大君

ないへなるうみをしらてもみちはのやしほになとか心染けん

いり日を見はへるとて

こくらくを思ひやりつゝ今いくか西にいりひの影をたのまん

さかの池の中宮の御すゝなとりて半座のうへにてかへし

奉らんとて かやかしたなれの關白

同しよのつらさもさてや忘れなんともまつへき契くちすは

大僧都御加持にさふらひけるにあふきにかきてさしいて

させ給ひける あまのもしほひの皇太后宮

結びつるたいかはかりなかにて沈まん後の世をたにもとへ

たいしらす みふねの皇后宮

幾度かゆきてはかへるむつの道くるしみならぬ處あらしな

いひわたり侍ける女の佛事しけるにさきけちのてうして

つかはし侍とて さかのゝ二のみこ

せばからぬばちすの花ときく物をもらすへしやはかゝる露まで

かへし 中務卿のみこのむすめ

にこりなき池のはちすの花なれば此世の露はすぬぬなるへし

おこなひなとし侍けるをさまたけゆくすゑななきことを

ちきりける人に こゝろ高き後冷泉院の宣旨

このよにはゆく末とても限あるを長く蓮のうへをちきらん

おこなひすとてねふると人のわらひければよめる

うたいねのかつらの尼

きえぬへき露の我身を夢にてもはちすの上におくやとを思

しのひて物申ける女のなくなりてつみふかきさまにみえ

ければ世をのかれておこなひて思つゝけ侍る

かはれたつめる三のみこ

うきしつむ池のみくつとなしはてゝ空にひらくる花ときかはや

すみわたりける女かくれてのちあかつきの念佛のふかう

にもいまさらもふはされ侍ければ女の母に申つかはしけ

る

あひすみくるしきの内大臣
いつかまた蓮のうへにあひもみむ露のやとりに心まとはて

式部卿の宮の北方

今はとてはちすのうへを思ふにも露けきは猶この世なりけり

さまかへてのちよみける

いせをの前関白三君

にこりなき蓮のうへの露計いかてこの世にこゝるといめし

さころものみかとあすかあうせにけりときかせ給てのち
のことなとふらはせ給てうちまとろませ給へるにあり

物語三下

くらきよりくらきにまどふしての山とふにそかいる光をもみる

わらはにて心といめたりける女のくらくておそろしきに

しそくさしてといふと夢にみてなくなりけるにやとて
光明眞言よみてその印結ひて思ひやるととて

あまのもしほひの大僧正

なか空にたいふやみは深くとも光をかばせやまのはの月

あつまの方に修行し侍けるに頼義朝臣かせめけんころも

かはのたちに思ふ心ありてそとはたてなとして

すくはんと思ふちかひをたておけはうへも佛のすかななりけり

入道前関白太政大臣さかにてわつらひ侍けるに行幸あり

て常行堂のみあかしの事なとおほせくたさせ給てよませ

給ける

有明のわかれのみかとの御歌

末の世を久しくてらせかいけおくけふのみゆきの法の燈火

風葉和歌集卷第九

離別

中宮のをさなくおはしましけるくしきこえてむすめのみ
やこにのほり侍けるによめる

松風

行さきをはるかにいのる別路にたへぬは老の涙なりけり

おなし中宮六條院にわたり給ひけるとときよめる

薄雲

末とほき二葉の松に引わかれいつかたかきかけをみるへき

をさなきむすめをみやこにおきてあつまへくたり侍ける

によめる

よみひとしらすのしま

思はずなまた二葉なるひめ小松引わかれゆくなげきせんとは

よし野に侍けるころあれを関白のむかへ侍ければちいみ

こわかれをしみ侍けるついでに

物語四

いまとりかへばやのよしのいみこの中君

いつかたに身をたくへましといまるも出るもとにをしき別を

すまにうつろひ給はんとするころきやうたいにより給ひ

てこよなうこそおとろへにけれとて

須磨

拾遺百番歌合八十六番

身はかくてさすらへめとも君があたりさらぬ鏡の影ははなれし

かへし

むらさきのうへ

六條院御うた

須磨 拾 百番歌合八十六番

わかれてもかけたなにとまる物ならば鏡をみてもなくさめてまし

同上

そのあかつきになりて

六條院御歌

同上

いける世のわかれをしらて契つゝ命を人にかきりけるかな

御かへし

むらさきのうへ

同上 百番歌合四十六番

なしからぬ命にかへてめのまへの別をしはしとめてしかな

中納言もろこしへ思ひたら侍とていまきこえけるに月

いとあかりければ

はま松の東宮

いかばかり涙にくれて思ひ出んにしにかたふく月を見つゝも

御かへし

古郷のみかさの山を思ひいて、我もいかゝは月を見るへき

参議うちたゝ遣唐のそへつかひにわたり侍けるにしたひ

くたりてまつらの宮にとまりてよみ侍ける

物語上

まつらのみやのあすかのみこ

けふよりや月日のいるを暮ふへき松浦のみやにわかこまつとて

同したひかの宰相にしひてつかはしける

同上

かむなひのみこ

もろこしのちへのなみまにたくへたる心も共に立かへりみよ

もろこしにわたるとて道より女のもとにつかはしける

はまいつの中納言

かさねげんことそくやしきから衣袖のみぬるゝつまと成けり

かへし

山の僧正の母

から衣たちはなれなは我のみそらむる袖もくち果ぬへき

すまひの節すきてつくしにかへりくらむとてすけの中

將のもとにまかりてよめる

すまひの修理のすけ

数ならぬ身こそゆくともしたかはね心は君にたちもはなれし

かへし 右 中 將

とゝむるも心はみえぬ物なれば猶おもかけそひしかるへき

あけむとしも又のほるへきよしなと申て

都いてゝまたこん秋の空までもおほつかなくそ待わたるへき

かへし 修 理 亮

中々に都の月をみそめては心つくしにわれそなかめむ

石山にこもらむとて出侍けるあかつきに女に

みなせ河の左中將

今こむと思ふ物から心をはとめてそいつるあかつきの月

かへし 入道一品宮中納言

かへりこむ程をもまたすきえはては此あかつきや限なるへき

もろこしよりかへりわたり侍けるにかのくにの人ともお

くりにまてきてふみつくりなとしけるついでによめる

物語二

はまいつの中納言

おなしのしほしの程と思ふたにわかれてふ名はいかゝ悲しき

同上

もろこしの宰相

あふこなみ雲のきはめなへたてにていつともあらし君を戀らく

あすかのみこをつくしにおきてかへりのほるとてよみは

物語上

まつらのみやの大將冬明

しらすりしわかれてそへるわかれ哉これもやよゝの契なるらん

同上

あすかのみこ

いかなりしよゝの別のむくいにていのちにまさる物思ふらん

参議うちたゝかへりわたらんとし侍けるによませ給ひけ

物語下
る

秋かせの身にしむころをかきりにて又あふましき世のわかれ哉

同上
かへし

ゆく舟のあとなきかたの秋の風わかれてはてぬ道しるへせよ

つくしにくたる人にのたまはせける

物語下

おちくほの中宮

なしめともしひて行たにある物か我心さへなとかおくれぬ

同上

かへし 大納言たいよりの四君

身わけて君にしそふる物ならはゆくともとるも思はさまし

ふき上に人々まうてきてびころめそびてうつきの朝日頃

吹上

にかへり侍ければよめる 中納言すゝし

かたらはぬなつたにもくるけふしも契し人のわかれゆくらむ

齋宮をきこえ給ひぬときこしめしてよませ給ひける

別てふつけのなくしもさしてしをまたせきこゆと聞そ悲しき

みやつかへに出たち侍けるにあれのふるさとにとまり

略

て侍りければ するはの露の中納言典侍

わするなま心にもあらでわかれぬる此かくれそかたみなるへき

住御息所のすみ侍ける所をほかへうつろひ侍とて

しのおくさの先帝姫君

なき人のかたみとみつる宿をさへ又わかれぬるけふそかなしき

をとこの心かはれるさまに侍ければ外にわたるとてかの

をといもうとなる人に ゆめちままとふ大納言女

かへし 關白のむすめ

ちとせまですむへき物を君か爲別といふ名はかけずもあらなん

左大將まのうらにこもりあて侍けるころまかりてかへ

るとてよめる 女すゝみの中宮權大夫

君をおきてかへらぬたひの空にたに露けかるへき袖のうへ哉

心ほそくおほえけるころすこしへたゝりぬへき人に

風をまつ露のいのちばえそしらぬたゝかり初のわかれなりとも

たいにもおはしまさゝりけるにほとちかくなりていてさ

せ給ふとて 風につれなきよしゝ院中宮

かり初と思ふへきかはわかれなはきためなき世の命まつまに

宇治にすみ侍けるか心ならずみやこへいつとて

いのちをそかきりと思ひしやとなれとさうて別るゝ方も有けり

世中はしたなきことゝもありて女二宮うちにいり給ふに

きこえける みなせ川の左大將

なにせんとさらぬわかれをなけきけんかゝる限の道も有けり

ちゝ大貳になりてくしてくたり侍ける女をえとゝめ侍ら

てよめる つゆのやとりの權大納言

行末のきらぬわかれを思はずはなげかさましこゝろつくしな

つれなかりける女のつくしへくたりけるにこかれしてか

まと山のかたをつくりてあたりをこがしてなとこのうち

みあげたるをつかはすとて いはやの左兵衛督

かれのつかひにてみちのくにへくたりてのほりけるにか
しこなる女に

うらみしらぬの所の衆

花かつみかつみてたにも戀しきに淺香のぬまをいかてゆかまし

天の迎ありてのほり侍けるにみかるとにふしのくすりたて

まつるとて

たげとりのかくやひめ

物語

今はとてあまのは衣きるなりそ君を哀と思ひ出ける

御かへし

同上

あふことの涙にうかふ我身にはしなぬくすりもなに、かはせむ

とてふしのくすりもこの御うたにくしてそら近きをえ

らひふしの山にてやかさせさせ給へりけるとなむ

風葉和歌集卷第十

羈旅三

あふさかをこゆるとてよめる

かへし

按察大納言女

もろともにたいまし物をよそにのみ聞そかなしきしかのうら波

いせのみてくらの使にてくたりけるとときすいか山にてよ

み侍ける

よその思ひの關白

またき秋のしくれふりぬるすいか山ならはぬ袖に色そうつらふ

あつまへまかりける時みちにてよめる

のしまの三位中將

物毎にあはれなりけるたひの空わきていつれと人にかたらん

よみひとしらす

なめめわふる旅のあはれのかきり歳月かけかすむ明ほの空

うちなげきいく宵々の草まくら末こそ露はふかくなりけれ

たいしらす

右大將 仲忠

たひ人のひもゆふくれの秋風は草の枕の露もほきなむ

とりかへはやの新中納言

拾
百香歌合八十九卷

あさほらけゆふつけ鳥ともろともになくくこゆる相坂の關

石山にまうてけるにあふさかをすくとて

風につれなき兵部卿のみこ

又こえむ人にもかたれあふ坂の關のしみつに袖はぬれしと

みちのくにいくたらんとてしはつといふ所にといまりて

侍けるに水うみのおもてに月のいみしうあかきを見ても

思ひいつることおほくて あさくらの皇太后宮大納言

しらかしおきよりなちにかげはなれみし有明の月をこふとは

はいそひていせにくたるへきにて侍けるにわつらふこと

ありてとまりにければあふみたち給日つかはしける

ひとりかとの齋宮女御

あふみてふ名をたのめとも獨けふたつはかひなししかの浦波

色そむる木のはいまきて旅人の袖にしくれのふるそわひしき

のしまにまかりて月まちいてたる折しもしかのなきける

に思ひいつること侍ければよめる

のしまの三位中將

おもかけを浪よりいつる月にみてあかね名残をなしか鳴也

笙のいはやにこもりてよめる はなの宰相のみこ律師

とほさかるいはやの中のだひれにはこのはの衣こけのさむしる

旅に侍ける夜ふる郷の女の夢にみえ侍ければ

ひちぬいしまの内大臣

古郷のながめやすらん草まくらたひの夢にもみゆる佛

ふきあけよりかへらんとし侍けるにみやことりのなくな

聞て

兵衛佐に侍けるとささつまのくにうつつされけるにいよの

みなといふ所にてみやこ鳥をみてよみ侍ける

一本海物語中

都鳥戀しきかたの名にはあれとわかふる郷のことつてもなし

こゝろにもあらずふる郷をはなれてさすらへけるに初雁

のなをきいて ふせやの關白北方

雁かれよしはしとまりて旅の空こひなかくたの物かたりせよ

すみのえに侍けるを關白にいきなはれて都にのほりける

に霧のたえまより松の木すゑはるかにみえければ

すみよしの關白北方

はかなくてわかずみなれし住のえの松の梢のかくれぬる哉

すまよりあかしにうつろはせ給てみやこなる人につかは

させ給ひける

明石拾

百番減合三十一番 六條院 御うた

えかたかりける女のゆゑにすまにこもりゐて侍けるころ

かの女のもとにつかはしける はつねの入道太政大臣

引かされうらみし袖の涙にもいとかくはかりしつまさりしな

父にくしてつくしへくたりけるにふなことのあらく

しきこゑにてうらかなしくもとほくきにける哉とうたふ

を聞てこひしき人もありければよめる

玉露

源氏のさきの小貳女

同上

ふな人もたれをこふとかおほしまのうら悲しけに聲のきこゆる

つくしよりのほるとて

行さきもみえぬなみに舟出して風にまかする身こそうきたれ

もろこしへわたりける道にて 松浦宮參議氏忠

の諸士

天の原おきつしはあひにうかふ沫をとまなふ舟の行へしらすも

參議安倍仲丸

同上

かすかなるみかさの山の月影はわか舟のりにおくりくらしも
世中いとわつらはしきことありてかうらいといふくに
はなちつかはされけるみちにてよめる

ゆめかたりの宰相中將

なみ枕しらぬたひねのかなしきにいく世を限る道の空そも
つくしへかへりくたりける道にて海のわたりをおりてみ
るかひなとをてまさくりにして右中將のなつかしうかた
らひしを思ひ出て

すまひの修理亮

あさりつるあらいそよりも都にてみるかひありし君そ戀しき
舟よりおりたるになみの高くうちかくればよめる

こしかたも又ゆくさきもはるかなる浪のなかにましろぬる哉
もろこしにてふるさとの女を夢にみて

はま松の中納言

物語拾遺卷三十一

日の本のみつのはまいつ今夜こそ夢にみえつれ我を戀らし
秋の夕をなかめて

同上

おく露も露たつそらもしかのれも雲あのかりもかはりやはする
おなしくにいて月をみてよめる

まつらのみやの參議氏忠

物語中

あることには捨山のかすそびてしらぬさかひの月そ悲しき

雨のふる日

しらさりし思ひをたひの身にそへいと露けきよるの雨哉

風葉和歌集卷第十一

哀傷

ちいみこの思ひにおほしましけるに年もたちかへり侍に
ければ いはてしのふの皇后宮

いかなれば暮ても年の歸へるらんわかればいと月日へたて
おなしこる皇后宮にきこえ侍ける

關白

あらたまる春につけてもすみ染の袖に霞の色やそふらん
母がおもひに侍りけるこる梅壺のこうはいのおもしろさ
を見てよめる われからの兵衛佐一

しもかれし冬の枝ともみえぬ哉戀しき人を花になさばや
關白中宮のほいにおくれてなげき侍ける比梅の花につけ
てさしおかせける かやかしたなれの宣耀殿少納言

あはれとてみる人からやしなるらん花は物うき色なられ共
かしは木の櫓大納言みまかりてのちすみ侍りける處のさ
くらのいとおもしろきをみて

伯耆

夕霧の左のおほいまうち君

時しあればかはらぬ色にききにけりかたえかれにしやとの櫻も
やよひのついたりこる春院に行幸ありて花のさかりを御
らんするにも故院の御賀のなりおほしめし出られければ

よませ給ける

みかきかはらの春院御うた

萬世とたのみしきみは霞にて花こそ春の色はかはらね
御かへし 皇太后宮

みしをりの花は匂ひもかはらねと人そむかしの春となりぬる
さかの院かくれさせ給ての春きさいのみやたちのおはし
ます所にすみ侍けるはるのかたの花さかりいにしへにか
はらぬを御らむして 六條院御うた

柏木
木のしたのしづくにぬれてさかさまに霞の衣きたる春哉
かしは木の榎大納言身まかりて後夕への雲のけしきにひ
色にかすみて花のちりたる梢ともをみて 源氏の致仕太政大臣

同上
うらめしや霞の衣たれきよと春よりさきに花のちりけん
さかの院かくれさせ給へりけるころまつりの日一とせ使
して侍りしを思ひいてゝかのふるき院にきこえ侍ける 紅梅右大臣

ありし世のけふのみあれを思ひ出て神のいかきも哀しからん
一條の大おほいまうち君かくれ侍てのころあやめにつけ
てしかまの太政大臣のもとにつかはしける かつねの入道太政大臣

袖よいかにひるまもあらし夏衣さらてもかゝるねなといめつゝ
むらさきのうへかくれ侍てのちほといきすのなきけるな
きかせ給て 六條院御うた
なき人なしのふるよひのむら雨にぬれてやきつる山郭公

女二宮のいみにこもり侍てほといきすのなきわたるも能
す心ちして あさくらの關白

時鳥ことかたらひし君ならてしのひもあへすなきわたるかな
御ふくにおはしましけるころ人の御返事に ねさめの中宮

さらてたに涙ひよなき墨染の袖におきそふ秋の夕露
むらさきのうへはかなくなり侍ける秋夕きりのおとゝの

はいのかくれにしもこのころの事そかしと思ひいてられ
給へりければ 玉にあそふの一條院女一宮

御は 百番六十三番
古への秋さへ今の心ちしてぬれにし袖に露そこほるゝ
一條院かくれさせ給へりけるに冷泉院の一品宮とふらひ
給へりければ 玉にあそふの一條院女一宮

ありとてや人のとふらん消はてゝ露もとまれる草のはらかは
弘徽殿女御わつらひ侍けるに御こゝろもれいならて遣は
されける 袖ぬらすの女院

といまらは草の原までとはましをあらそふ露の哀なる哉
宣旨なくなりて後女院にまありてよみ侍ける おなゝ太政大臣

有しよのくさのほらそとみるからにやかと露と消ぬへき哉
左のおほいまうち君も身まかりて後女の思ひに侍ける人
のもとにあさちにつけて遣しける かつねの左大臣北方

こゝのみや浅茅はしげきと思へとも又むくらおほす宿も有けり
かへしななきむくらに 橘右大臣

忠こそ
こゝのみや浅茅はしげきと思へとも又むくらおほす宿も有けり
かへしななきむくらに 橘右大臣

同上

人はいさかなしと思ふたのめおきて露の消にし宿のむくらに

御こいちかきりにおほえさせ給ひけるに女御にのたまは

せける

女すゝみの先帝御うた

はかなくも契ける哉あさち 原葉末の露の常ならぬよに

れさめの 關白

まれけとも君なき宿は花すゝき涙さへこそとまらさりけれ

白河院の皇后宮かくれさせ給ひて秋女院の御かたにまゐ

りてひとときわたれる花の色々もこの秋うちみまほしう

て いはてしのふの 關白

みし人はあらしにまよふ野への露よもの草木もしをれたにせよ

入道關白みまかりて侍けるにうちにこもりゐてよめる

風につれなきの太政大臣

秋ならてあらましたにも山里の君なきあとの夕暮の空

關 白

哀いかに人はふりにし山さとに秋をなこりの夕にはして

左 大 臣

わきてこの露を袖にかけよとや秋を名残にとゝめ置けん

きりつほの更衣うせてのち月のおかりける夜ふるさと

をおほしめしやらせ給てよませ給ける

さかの院の御歌

雲のうへも涙にくもる秋の月いかですむらん浅ちふのやと

八月十五日三位中將のはいにおくれ侍て一めくりのはて

に出家し侍らんとて かやか下なれの大將

かきりなくうかりし秋のなかはこそかつはうれしき月日也けれ

詔

宇治のあれきみのいみにこもりて侍けるに月くまなかり

ける夜よめる かなる 大將

おくれしと空行月をしたふ哉つひにすむへき此世ならぬは

しのひてかよひ侍ける女のなくなりけるあとにまかれ

りけるにむしのなきければ かはれたつめる三のみこ

今更に心とめしと思ふ世にをしみかほなるむしのこゑ哉

女の思ひに侍りけるころよわりゆくきり／＼すのこゑも

こゝろひとつたとふ心ちして

なが月のわかれの式部卿のみこ

別にし秋もするはのむしの音におのかよすかの露や悲しき

中納言身まかりにける法事を秋の末つかたにし侍けるに

しのふくさの 關白

ゆくへなき別の空にくらふれば過ぬる秋はことの數かは

十月はかり前坊の御ふくめき侍けるに空のけしきも思ひ

しりかほにうちしくれければ

なげきたえせぬ麗景殿女御

朽はつる袖をかへてもしくるればいつかはすまのあらんとすらん

左大將身まかりける頃しくれのする日女院にきこえ給ひ

ける

末葉の露の一品宮

なげきつゝ詠る空もかきくもりしくるゝ袖や涙なるらん

御かへし

しくなる空たにもみすせきかぬる涙の河に身はなかれつゝ

六條院の御いみはてゝ東宮うちへいらせ給ひてのこる木

の葉を思ひこそやれとのたまはせたる御かへし

あしたつの前齋院

思へた、棺にのこる木の葉さへ散みたれ行心ほそさを

四季ものかたりの中に

もみちのきみ

思ひ出ていとふ人あらは山河のそのみくつをあはれとはみよ

女三の宮の思ひに侍けるころよもすからなめてよみ侍ける

風につれなきの關白

おもひきやひとりねられぬよはの霜はらほぬ袖に消かへれとは

せうとの身まかりにけるをひころさたかにもき侍らさ
りけることを思ひて雪のふる日よめる

すまひのとさのかみのむすめ

人しれすえにけんこそ哀なれよにふる雪をみるにつけても

女の思ひにて侍けるにとしのくればてぬるもおとろかれ
て

夢かたりの前關白

年くれてうかりし目をへたつれと有しにまさる吾涙哉

やまいおもくなりてまかてんとしけるにうへさりともう
ちすていはえゆきやらしとの給はせけるに

源氏のきりつほの更衣

桐壺 百壽院合四十四卷

かきりとて別る、道の悲しきにいかまほしきは命なりけり

御こいちれいならすおほしめされけるに中宮に聞えさせ

給ける

女すゝみのみかとの御歌

かきりあらむ今一とさの命をば君にとむるこの世ともかな

御かへし

をしむにもよらぬ命を今はたふにたゆる此世ともかな
中宮をよそのことに聞たてまつりけるにこいちかきりに

なりてしのひて奉りける

有明のわかれの内大臣

思ひおく君たに今は哀しれこの世にかゝる中はありやと

御かへし

いかなりし此よのさきもたとられす思ひしる身をおき所なき

やまひしてよわうなりけるとさしひのひてなとこに申侍
りける

やみのうつゝの大納言更衣

たのめてもこの世はよしやわたり河後のうきせなとはむ計そ

心ちかきりにおほえ給て關白にしのひてつかはしけるあ
ふきにかきつけられ侍ける

風につれなきの冷泉院一品宮

なこりとほしらすいづれの野山にもくちなん苔のしたを尋よ

皇后宮にいさゝかちかつきまゐりてさびしうかしとおほ
しいてよと御みゝにきこえおくとて

みかきかはらの宮大將

今はたゝそれかとばかりたなひかん夕の雲のそらをなめよ

この世のほかになりなばあはれと思ひなんやと申侍ける
人に

はまゝの左大將のむすめ

けふりけむ人を誰ともしらぬたに夕の雲はあはれならずや

女のゆくへしら奉らぬをおもほしなげけるにはかな

くなりけるとときかせ給て夕の雲かすみなをかれにてこそ
のほりにけめとなめさせ給ひて

よもきかはらの春のみや

よそへつゝなかわる空のうき雲に立おくれぬる身をいかにせん
中納言のわさの夜よそに思ひやり侍けるも人しれぬこゝ

ろさしかひなくて

しのふくきの關白

時のまもおくれぬものとならひきてわかれちにしもそはぬ悲き

先帝の御わきの夜ふみける

女のすゝみの中將

限あればそはぬ烟をよそにみて猶おなしよに立やかへらむ

やかてかしろおろして北山にこもりけるとなん

あふひのうへのはかなくなりけるを鳥へのおくり給

てのち空のみなめられ給て

六條院御うた

のほりぬるけふりはそれとわかれともなへて雲ゑに哀なる哉

おなしころ風あらゝかにふきしくれするくれつかた六條

院の御かたにまうてたるにあめとなり雲となりにけん今

はしらすとひとりにち給ひければ

致仕の大おほいまうち君

同上
百壽公六十六壽

雨となりしくるゝ空のうき雲をいつれのかたとわきて詠めん

冷泉院一品宮のわきの夜鳥邊野のかたに雲の一むらたな

ひきたりければ

風につれなきの關白

はかなしやそれかとばかり詠るもむなしき空にきゆるしら雲

としへのちおなしのに女三のみこをおくりきこゆとて

古へもいまもけふりに立おくれなくはらふ鳥へ野の露

世のきこえをはいかりて一品宮のふくもき侍らてよめる

思へともこはいかなりし契にてそめぬ衣をそむる涙そ

冷泉院のおほきさいかくれさせ給て一品宮のくるききぬ

にやつれ給ひけるを見ておとり聞えさすへくもなきにか

きり有けるこそとて

たまもにあそふ關白

かきくらしおつる涙のふち衣さる人わける色そかなしき

あふひのうへかくれてのちにはめる御を奉れるにつけて
もわれさきたいましかはふかくそめ給はましとおほされ

て

六條院御うた

おほきさいのみやいまたまわり給はて入道關白のみやに

おはしましけるころきこえさせ給ひける八のみこかくれ

てのちかゝる大將さうてきてくろき几帳のすきかけも心

くるしければすみそめにやつるゝ袖をとひとりことのや

うに侍けるに

宇治のあね君

せちに思ひける女のうせて侍けるのちしをんのきめの侍

けるを誦經にせんとし侍けるに涙のかゝりけるにや色の

かへりたるを見て

とこ中の關白

涙にはころもの色もかへりけりなとわかれし人はみえぬそ

入道攝政身まかりけるに權大納言のもとにつかはしける

露のやとりの中將内侍

思ひやる袖たにいまたかわかぬにくちぬや君かけふの袂は

めのとのなくなりたる四十九日のわさし侍けるにうちき

つかはすとてかきつけける

すみよしの關白北方

から衣しての山路を尋つゝわかばくゝみし袖にかざれ

父のふくぬき侍とてよめる

水あさみの承香殿女御

なきぬらすふちの袂はくちにけりうき身ながらやぬきも捨まし

紫のうへかくれ侍ける一めくりのをはりにあふきにかき

六條院中將

同上

君こふる涙はきはもなきものをけふなは何のはてといふらん
これを御らんして 院の御うた

人こふる我身も末になりゆけと殘おほかるなみた也けり
しのひて内侍督のいるにて侍けるなはてにもめき侍らて
よめる はつれのしかまの太政大臣

限りあればけふをはてといふなれと我身に染る色はかはらし
申務のみこ身まかりてのちむすめのもとにつかはしける

さか野の頭中將

いかにして君をとほまし哀てふことを人のふるしてしかは

前齋院のいみにこもりて侍けるに皇后宮のとふらひのた
まはさりければ聞えさせ侍ける いはてしのふの關白

とまる身のうきにつけてやなき人の哀をたにもとれさるらん

父の左のおほいようち君こちかきりになりてみかとの

かゝるなりたにあはれともの給はせぬこといなき侍け

るにうせてのちおほむふみ給はせ侍ける御返事になてま

つる

國^みみし世にそかくもいばまし歎きつゝ又はみるよのなきそ悲しき
なくしての山路をいかしゆくわが路

兵部卿のみこかくれてのちに夢にみえ侍ければ

なみのしめゆふの浪景舍女御

夢のうちにみゆる別の悲しさもありしうつにおとりやはする

おほきおほいもうち君のすみ侍ける三條にわたりてすま

ひはへりけるにやり水のみくさもかきあらためて心ゆき

たるけしきなれば 夕露の左のおほいもうち君

舟^舟なれこそはいはもあるあるしみし人の行へはしるや宿のよしみつ

東屋

あれ君かくれて後宇治にまかりてやり水のほとりなるい
はにゐて かなる大將

たえはてし清水になとかなき人の備をたにといめさりけん
しのひたる女のはかにまありて おもかけこふる三位中將

とまる身のつれなかりける命哉思ひきえなて道芝の露
やみのうつゝの大納言の更衣のはかの草しけく侍けるに

左大將のゆめにみえ侍ける歌

うらめしやゆきゝの道となしはてゝ茂る草葉はばらふともなし
贈皇后宮にうちとけすなからみなれ侍けるかかくれ給ひ

てのち軒のしのふをみて しつくににこるの中納言

まことには結びやはせししのふ草なとあやにくに露けかるらん

權大納言みまかりて後をさなき子の侍けるを見てよめる

露のやとりの辨少將母

つみおきし忍ふの草をみても先哀かたみとれをのみそなく

贈中納言としかきなくなりて後よめる

後上

わひ人は月日のゆくそしられる明くれ空をひとりなかもて
弘徽殿女御かくれてのちさむるよなくおほしめしなけか

せ給て御てならひに

女にすぐせしらすの第一のみかとの御歌

かなしさはけふの別の心ちして幾とし／＼なやからへぬらん

いものとをせちにおほせとられけるにこの御手なら

ひをみて聞えさせ侍ける

右衛門督

としへぬる別は露もなくさまでよしなき袖のくちやはてなん
女におくれてとし月ありて後かの女のね侍ける帳をうち
はらひてふすとて
うつほの橘右大臣
年ふれとわすれぬ人とねしとこそひとりふすにも嬉しかりける

風葉和歌集卷第十二

賀

今上一宮うまれさせ給へりけるうふやしなひにちこの御
そてうしてきこえ侍ける
おやこの中の登宮女御
龜山の岩の小松おいそひてこれこそ千世の初なりけり
いぬみやのうまれてはへりけるに

櫻間

みとり子のおほかる中に二葉より萬代みゆるやとのひめ松
春宮のわか宮のいかまり侍ける夜よませ給ける

ひちぬいしよの朱雀院御歌

君か世の千とせのはしめ今夜にて雲ゐにたつのすまんとすらん
皇后宮うまれ給へりける七夜に女院よりちこのきぬにむ
すひつけて「ちよふへき鶴の毛衣いつしかと雲ゐになれ
むほとなまらみむ」と侍りける御かへし

末葉の露の關白母

生たちて雲ゐになれむ鶴のこの千世の契も君のみそみん
宇治入道關白むそちの賀し給ひて

風につれなきの女院

君か世の猶萬世といのる哉あかぬ心はかきりしられす
大納言たいよりの七十賀のつふのうた

よみひとしらす

物語

やそ坂をこえよとされる杖なればつきてをのほれくらゐ山にも
ちこのいかれのひにあたりに侍けるによみて侍りける

われからの式部卿親王

今年生の若葉の松をためしにて千世のいのひにたれもひかなん

侍従のめのと

けふよりはいかに久しきためしなを千目の松にひかんとすらん
さかの院のきさいの宮の六十賀正月のおとれに女一のみ
こたてまつり給ひけるに御かきし小松の枝に鶴すゑて

うつほのさきの内侍のかみ

御宴

おれたによはひ久しきあしたつのいのひの松の蔭にかくるい
いぬみやのもゝかおとれにあたりに侍けるわりこともふ
ちつほの女御につかはすとて おなし仁壽殿女御

御問下

萬世のゆくへもしらすおひいつる小松にけふはれのひしらすな
六條院よそちにみち給ふとしをさなき子ともなくして
わかなたてまつるとてよみ侍ける

若葉上

わかはさすのへの小松を引つれてもとの岩れをいのるけふかな
たまかつらの侍

御かへし

六條院御うた

同上

小まつ原すゑのよはひにひかれてや野への若なも年をつむへき
おほきおほいまうちきみのむすめのうふやにまかりて侍
けるにさかつきのついでに とりかへはやの中將

二葉より千世のけしきのしるき哉木高かるへきやとのひめ松
かすかの歌のなかにときをたとらぬ松といふことな

うつほの侍従是風

梅花堂

みる人のよはひは千代のあなたをやみとりの松は春とまつらん
右大將うまれ侍けるにちこのきぬつかはさるとて

みかきか原の二品宮皇太后宮

かすか野のわかほの松やちきるらんみれの朝日の千代の光を

御かへし

二品宮

契おくみれのあさけの光こそ二葉の松の千代もてらさめ
宇治入道關白むすめともにもきせ侍けるこしゆはせ給と
て 風につれなきの冷泉院女御

いつれをも木たかゝれとてかすか山松に千年をいはひそへつる
しほやき中將のはかまき侍ける夜よめる

いはやの按察大納言

ときは山生そふ松の末のよは人よりこえてこたかゝるらん
わか宮坊にさたまらせ給てのちうまれさせ給ひしよりの
こと思ひいてられてよめる

のちくゆる大將女御の太夫

いはひおきし心もしるく高砂の松のこたかきすゑをみる哉
中宮のいかによみ侍ける ひいこかしつく内大臣

子とせへんみとりの松のゆく末をみるへきはとの齡ともかな
中納言すゝこのふきあけのふちゐの宮にて藤の花の賀し
侍けるに藤の花をりて松の干とせをしるといふことなよ
める

吹土上

うつほのさきの組伊守

同上

ままとゐしていつれ久しと藤の花かゝれる松の末のよを見む

參議長峰行尹

やよい廿日ころ冷泉院の中宮さききにたいせ給けるに池
のなかしまの藤の松にかゝりてなへてならぬにこれかれ
歌よみ侍ける 袖めらすの源中納言

松風も枝をならさぬやとなればかゝれる藤のかけそのとき

うちのおと

かけさへそなへてはみえぬ紫の雲たちそへる池のふち浪

關白をのこなんなこかうふりしもき侍ける夜さかつきの
ついでに ひちぬいしよの前關白太政大臣

二葉なるみとりの松とみし物を枝しける迄なりけるかな
六條院御元服のなりひさいれのおとに御けしきたまは
せ給御さかつきのついでに さかの院の御歌

桐盛

いときなきはつもとゆひに長き世を契る心は結びこめつや
うきいの内大臣をさなく侍けるを入道太政大臣に申つけ
侍とて はつれのしかまの太政大臣

諸ともにおなしこ末をみとりなる松に千とせのかけをならへよ
かへし

小松原二葉なからに引うゑて千世をならへんかけをこそみめ
むすめのばかまきに中宮こしゆはせ給とて雲あまて技か
はすへきとの給はせける御かへし

かはきりの中宮新中納言

雲あまて生のほるへきわか松のこや枝かはすはしめなるらん

中納言

君か世の長きためしにあやめ草千ひろにあまるれを引つる
よみ人しらすあふさかえぬ

相接節の日尙侍まゐりて琴ひき侍けるにいかてかそこに

もこいにもよはひ久しくてなとのたまはせて

初歌二

千とせふる松より出る風の音はたれかときはにきかんとすらむ
かへし ないしのかみ

同上

こゑたえすふかむ風には松よりもよはひ久しき君をすゝまん
吹上にみゆきありて九日のえんをさせ給ひけるによみは

へりける おなし申つかき卿のみこ

菊のそのにいくらの齡こもればか露の底より千世をのふらん
なかつきふたつ有ける秋高陽院にてきくのえんをさせ給
ひけるにきくの下行河水のこゝろはへな

よみひとしらすはつ

君か世は猶長月の秋までもくみてそみゆるきくのしら露
九月十三夜うへの御あそひのついでによみ侍ける

はしたかの左大臣

幾千世と君かみよをはかさられば月みん秋の敷をしられぬ
さかの院の五十御賀の御あそひの夜月やうくさしいて
て雁のいとちかくつられたるに

雲あゆく雁のつかひにことつて、月のみやこの人やとふらむ
あまのもしほひの院御うた

さかの院御歌

めつらしきいそちのけふにあはさらば思ひ出なき我身ならまし
ふゆの御かたにて雪ふり月おもしろき夜人々詩歌なと奉
りけるついでによませ給ける

さいわけしあさの八條院御歌

池水も月ものときくみゆる哉千とせすむへきやとのしるしに

左 大臣

すみわたる月のひかりも池水に君か千年のかけをならへて

左 大 辨

雲の上のとかに澄し月なればやとかはれともさやけかりけり

みかと御いかの日おほちおとみたてまつりけるにたまはせける

一品宮のさきのみかとの御歌

色かへぬときほの山の小松原千世の梢は君のみを見る

關白權中納言うまれて侍けるにつかはされけるきぬのたもとにつけられ侍ける

あさくら皇太后宮

たつの子のすたちはしむる毛衣は色かはらぬためしなりけり

御かへし

皇太后宮大納言

色かへぬためしにたてる毛衣はまちとる袖そおき所なき

中納言みちたか子うまれて侍ける七夜にちこのきぬやるとてよめる

こゆみの彈正のみこの女

萬世を君にゆつりてこれそこの雲ゐにすなつ鷗の毛衣

子とものわれもくと年をこひければ

としあらそひの母

むれあつて千年あらそふ鷗の子に我萬世をゆつりてもみん

左のおほいまうち君にさかの院の女一宮ゆるし給て三日

の夜御かはらけ給けるによみ侍ける

うつほの橋の右大臣

巖

岩のうへの苔のむしろにすむつるはよなさを長く思ふへき哉

中納言ゆきた

藤原

おしたつのうつる千歳のやとりには今やいとこのいはと成らむ

右大將仲忠に女一宮ゆるさせ給てみかの夜めして御かは

らけ給はすとて

田原

なておほす松のはやしに今夜より千世をほみせよたつのむら鳥

同土

源のおほきおほいまうち君

姫松をれたくみるらしあしたつはおのか齡におひやますとて

いぬみやのうふやしなひにこかれのきしにかきてつかは

しける

藤原

むら鳥のつるのこほりにすむきしは松の枝にそけふはとひける

おなしうふやによみ侍ける

祭使

人ことに千とせの春をそふるまつ幾世かされるよはひなるらん

一宮のいかさにてまゐりけるに給はせける

波のしめゆふのみかとの御歌

雲かにも立のほるへきまなつるのしほしききはにあそふ聲する

御かへし

入 道 左 大 臣

とひたは千世をかねたるまな鷗のしほしききはに遊ぶ聲する

中宮のをさなくおほしましける時よめる

あしすたれの中宮亮

ひなつるの澤邊にしはしやすらふを雲のうへ迄すたてしかな

さかの院きさいの宮の御賀の屏風にれのひしたる所にい

はに松おひ鷗あそへり

右大將なかつ

岩のうへにたつの落せる松のみは生にけらしなけふにあふとて

人の家に花そのありいまうゑきする處

民部卿されまさ

勘定

うゑなむる人そしるへき花の色は幾世みるにか匂ひあくとは
人のいへにたちはなの木にはとくきすなり

参議すけすみ

同上

我宿の花たちはなをほとくきす千世ふるさと思ふへきかな

大納言忠頼の七十賀の屏風にみな月ほらへしたるところ

ふみ人しらすぢくは

物語下

みそきする川せのそこのきふければ千年の蔭をうつしてそみる

風葉和歌集卷第十三

戀一

女にばしめてつかはしける

小歌
百愛
合九番

思ふとも君はしらしなわきかへり岩もる水の色に同上しみえれば

とこなかの關白

世のつねのことはそとやいひなさんいかてしらせん思ふ心な

ゆめかたりの前關白

いかにしてかゝる涙のつゆばかり思ふころをもらし初まし

あ一本
はなのしるへのつま君

物思ふといふはなにともしらさき袖に涙のかゝる也けり

中宮いまた内のおとゝのものとおはしましけるころ聞え

させ給ける
人たかへのみかとの御歌

いかばかり涙の數のおつるをかも思ふとは人のいひけむ

女院の大納言にのたまはせける

なくら山たつめるの院の御歌

うちつけの契と人と思らん心のうちをしらせてしかな

あひ思ひ侍らさりけるをこのもにつかはしける

さとのしるへの式部卿のみこの大君

しらめや戀したたにもいへばえに思へばむねのさわく心な

女をひきといめてふみ侍ける

なたえのぬまの春宮大夫

しのふへき心ちやはする數ならぬ身につゐともあまる思ひを
心に思ふことなしのひかくすとみかとのうらみさせ給ひ
けるに

みかきかはらの内大臣

誰にかはもの思ふともなか／＼にうきはためしの有身ならねは
御かへし

みかとの御うた

うきはためしなからん下の思ひにも我計りこそしりてこかれめ
つれなく侍ける女につかはしける

かはほりの少將

かいらてもありにし物をなそかく思ひにもゆる我身なるらん
女をみえぬへしやとめりこめに入あて侍けれとみえさり

ければよめる

めりこめの少將

かけみえぬ人を戀れはいとしくくるしきやみにまとはるゝ哉
かきりそと思はぬ程はしのはれし涙も今そ色に出ぬる

一條女三のみにきこえ侍ける

風につれなきの太政大臣

いかにせん色かはる迄せきかへしもらしかれたる袖のなみたな
しのひて女につかはしける

道心すゝむる右大臣

あはれしる人もあらなんもらさしとつゝむ袖よりあまる涙を
きの袖になみたのかゝりてうつりたるなとりはなちて

それにかきつけて女につかはしける

うつほの参議ゆきまさ

ときてやる衣の袖の色をみまたゝの涙はかゝるものかは
そのかたはらにかきてかへし侍ける

藤原院

ふちつほの女御
袖たちてみせぬかきりはいかてかは涙のかゝる色もしるへき
梅つほの女御に思ふ心の程いひしらせ侍とて

あふにかふる三位中將

しのひあまり色に出ぬる袂哉人しれすこそしほり侘しに
なとこのから衣がさねはいかにうれしからましといへり

けるかへりことに

ふつあしの大正のむすめ

よそなから思ひはそめよから衣がさねほかへる色もこそあれ
大納言すけうちとけたてまつらぬさまに侍ければの給は
せける

みかきか原の御門御歌

我ならぬ人にもうとくならはすはかさねてなかの袖も恨みし
女をうちとけぬさまにてあかさせ給ひけるのちこひしう

おほし出られてよるのころもなかへしわひさせ給ふよな
なもさすかにあやしうおはされければ

物語四中 百景 合九十六番

さころものみかとの御歌

かたしきにかさねのころもうちかへし思へは何をこふる心そ
中宮宇治におはしましけるころ聞えさせ給ける

ふその思ひのみかとの御うた

かたしきの袖は我のみくちにてゝつれなさきまざるうちの橋姫
こゝろさしありていひわたりける女うちにまゐるへしと

きいてよみ侍ける

いほうつ涙の内大臣

あふことのあらはつゝまんと思ひしに涙ばかりをかくる袖哉
つれなかりける女のはるかなるほとへまかりけるにちか
き程までおくりてひとへの袖のぬれたるをひきはころは

して

思ふことけにおろかなる涙かなける袂をみてもしらなむ

ふちつほの女御いまたまり侍らさりけるころつかはし
申納言さねた

涙さへなきよなりせば我戀の身よりあまなるをいつちやらまし

源 宰 相

しつみぬる身にこそ有けれ涙川うきても物を思ひける哉

右大將なかつ

涙川うきてなかるい今さへや我なほ人のたのみさるらむ

しのひたるをとこの返事に ふくるかけの女御

なきかぬる涙の河とさくからに我身さへこそうきてなかるれ

みかとせちにの給はせける御かへりことたてまつり侍け

る こうはいの關白三君

せきかぬる涙の色はかはるともあふといふ名をいかなかさん

たいしらす しつくにこる贈皇后宮

つゝめとも袖のしからみせきわひぬ涙の川やうき名なかさむ

女のつれなく侍けるにかゝるを見てなかりゝひたふるに

心もつきめへきとて 夕霧の左のおはいまうち君

せくからにあさくそみえん山河のなかれての名をつゝみ果すは

たいしらす おやこの中の内大臣

なげきつむあまのしほやにあらねとも只わかやくともゆる戀哉

しのひたる女にあふさにかきてみせける

はつれのくもゐの關白

我からとたくものけふりそてなれてたえぬ思ひに身をこかす哉

かへしこのうたの上にかけつけない

しかまの太政大臣のむすめ

かきけたんもしほの烟なほたつな下にはのめく思ひなりとも

たいしらす ちにくたくる左大臣

もしほやくうら吹風に立けふり一かたにたにくゆりわひはや

女のもとにつかはしける すみよしの關白

世と共にけふり絶せぬふしのれのくらさやみにままとはるい哉

しのひたる女につかはしける

かやかしたなれの關白

思ひあまり人めわすれてまよへとや誰もしのふの由の通路

たいしらす いばかきめまの頭中將

我戀はいばかきめまの水ふたゝ色には出すもるかたもなし

玉にあそふの左衛門督

いはかきや沼のみこもりもらしわひ心つからやくたけはてなん

女のもとにつかはしける うつほの申納言さねた

みこもりて思ひしよりも池水のいひての後そくるしかりける

中務卿のみこのむすめ春宮にまゐるへしと聞えけるにつ

かはしける みなせかはの新申納言

敷ならぬなみのした草浮沈みことわりしらぬれそなけれける

人しらす御ころにものゝかなはさきりけるころよませ給

ひける みかきかはらのみかとの御歌

敷ならぬ昔ならてもあやしきはみかきかはらの思ひ也けり

かくひとりとたせ給ふなきいてわれもあるまじう心つく

しなることを思ひ侍ればこゝろのうちに

内 大 臣

つむせりのねにたになかて朽やせんみかきか原の下のうきくさ
身よりあまれる人なほのかにみてよめる

あつまのものいふ

かくまては思はさりけん古へのせりつみわひし人のこゝろも
わらほに侍ける時院の中納言三位古今をかゝせ侍けるく
れなぬの色にはいてしといふ歌のかたばらにいさゝか書
ておしつけいる

あまのもしほひの大僧都

かへし

按察大納言三君

ふしのれの烟ときけばたのまれすうはの空にや立のほるらん

齋院に雪にてふしの山つくられて侍けるを御らんして

さころものみかとの御歌

物語三下 百番歌合三十二番

もえわたるわか身をふしの山ふたいゆきつもれとも烟たちつゝ

物語一上 百番歌合三十二番

おほすことないさゝかもらさせ給つる女に

わればかり思ひこかれて年ふつとむろのやしまの烟にもとへ

しろかねのひとりにくろはうをまろかしてけふりなとし

藤原

ひとりのみ思ふ心のくるしきにけふりもしるくみえずや有らん

中宮一品宮と申けるとさいてさせ給つるにしのひて聞え

させ給ひける

みかきかはらのみかとの御歌

まのはすはむなしき空もゆくかたなたか爲みゆる下の烟そ

一條院の女一のみこにまのひつゝきこえ侍けるをいまは

さしもあらしと思ひなりて

たまもにあそふ關白

下もえに身をのみこかす我戀のけふりやけふは空にみちぬる
あふむ^本かへし

一條院の御うた

またにたく思ひはたえし雲の上に立のほりぬる烟なりとも

・いもうとの中宮の御事をおもひて「かなしきはたれゆふ

もえしけふりともまられぬ山にたなひきやせん」このう

らみなたにいかてはるけてしかなと右大將申侍けるに

みかきかはらの内大臣

消ぬへきこれは思ひのけふりともかひなき空にほのめかせとや

月のよかいはみて侍ける女のもとにつかはしける

わたえのぬまの春宮大夫

あらしかしほのみし月のかけてたにおほろけならすこふる心を

關白北方をほのかに御らんしてよませ給ける

とこなかのみかとの御歌

いかにして木のまの月のほのかにもみつと計りを人にまらせん

これをきいたてまつりて

關白家侍從

ほのかにも木のまの月のもらしては心盡しの物やおもはん

なとこのはしめて「これやさはいりてはしけきみちなら

ん山口あるくまとはるゝかな」といへりけるかへりこと

拾

百番歌合八十四番

ふもとよりいかなる道にまとふらん行へもあらすなちこちの山

登華殿女御石山にこもれりときいてまのひてたつれまう

つとてよみはへりける

女すゝみの左大將

これも又いかなる道のはしめとては出しけ山猶まとふらむ

いとしのひたる女のあたりをたゝませ給にもかひなけ

れは

ふその思ひのみかとの御歌
いとしくあふ坂山そはるかなる人の心のせきをへたてゝ

よそながらあかして侍ける女のもとにあしたにつかはし
ける

かくれみのゝ先帝の三のみこ
くれはとくゆかむと思ふこえつともこえずともなき相坂の關

からうしてひとたび返事したる女のまたともし侍らさり
けるに

さか野の四位侍從
東路のさゝ舟はしはしめよりふみもかよはてあらまし物を

女のもとにかきつくし侍げれとも返事をじとたじもみ侍
らて

道心すゝむるの中納言
難波潟敷ならぬみをつくしてもみつとはかりの一こともかな

かへりこともせさりける女につかはしける

あしろの宰相

いはみかたいかうらみぬ白浪のかへる跡さへたえぬと思へは

つれなく侍ける女のもとに

かくれみのゝ左大將
つらしとも恨みし更に思ふこといはぬをまさるかたになしつゝ

いはやの兵衛佐

我ならぬ人にもかくやつれなきと心みかてら身をやがへまし

あるましきことを思ひけるころよみ侍ける

有明別左大臣

身をくたく戀の行へなつねればあふを限のはてたにもなし

宣耀殿女御いまたまり侍らさりけるころつかはしける

女のすくせしらすの右大臣

すてゝはや惜からぬ身のなからへてつらさにたえむおなし命を

いかなりけるをりにか女にたまはせける

ふもきか原の春宮

戀わひぬ命にかふる物ならは我身をすてゝあひもみてまし

中宮のいまたまらるせ給はさりけるころまのひてたてま

つらせ給ひける

みかきかはらのみかとの御歌
つらからはたか名かなしき命たにあふにしかへは露のためしな

つれなかりける女のもとにてよみ侍ける

あたりさらぬ内大臣

涙こそさきにもたいめ命さへ人よりもき名をやながさん

ほのかにみて侍ける女のいとせちにおほえければつかは

しける

水あさみの右中將

命さへ思ひにやかて絶ぬへしあふにはさらにかへぬものゆゑ

身をさらぬみし佛のなかりせはなにゝかくへき命ならまし

參議氏忠琴の音をたつねまうてきてよなゝにならひと

りてわかるゝあかつきいといたくおもひいれたるけとき

をあられみて

まつらのみやの華陽公主

玉のをたゆる程なき世中を猶みたるへき身のちきりかな

かむなひのみこに聞え侍ける

參議うちたゝ

戀しなほこひもしぬへき月日へていかに物思ふ我身とかしる

いと有かたきひまにいさゝか物申ける女にはとなく引わ

かるとて

あさくらやまの秀才

物思ふと何いにしへをなげきんかくいひしらぬをりも有けり
たいしらす
ふその思ひのみかとの御歌
下いものとしてなれぬなこりよりやかてめるよの夢も結はす

風葉和歌集卷第十四

しのひたる女をうちとけぬさまにてあかしてよめる
あたりさらぬ内大臣

みしや夢なけくやうつゝいかなりしよはの名残に我まとふらん
おなしさまにてあかせ給ひつる女のもとにつかはせ給ひ

ける

さころものみかとの御歌

物語四中

おもかげは身をもはなれず打解てぬゆの夢はみるとなけれと

しのひたる所にてなさけなからぬさまにもてなしていつ

とて

ちにくたくる左大臣

世の常のわかれと人や思ふらんこはたくひなき袖の涙を

かへし

按察御息所

たくひなき袖の涙をかけてたにみしよの夢と人にかたるな

戀二

賀茂の行幸にかみのみやしろに御はらへつかうまつると

てさま／＼のりたてまつるをきかせ給ひてもそのかみ

の御こゝろのうちにはみなたかひておほしめされければ

物語四下

さころものみかとの御うた

やしまもる神もきけむあひもみぬ戀まされてふ御被やはせし

つれなくのえける女につかはしける

祭律拾遺五

うつほの右少將ながより

思ふことなすこそ神もかたからめしほしなくさむ心つけなん

前齋院にきこえ侍ける

さかき葉のさしてつれなきよゝをへて神もゆるせるしめの外故

あさかほの齋院なり給てのちもおなしさまにうきなき

けしきにはへりければ

朝賀

つれなきをむかしにこりぬ心こそ人のつらさにそへてつらけれ

つれなかりける女のもとにまかりてえなんあはてかへり

てつかはしける

つれなきに思ひもこりぬ心からいくたひ人のうきをみつらん

しのひたるなんのもとにてさま／＼うらみて

ふくろかけの大將

つれなきをうらむるくすの下葉こそ涙の露のおき所なれ

中宮かくれさせ給てのちおなしさまに女院に聞えさせ給ひけるにつれなくのみ見え奉らせ給ひければ

風につれなきよし野の院御歌

絶さらん命こそあらめおなし世にありてもつらき人の心よ

御かへし

なからへて有にもあらぬ身わうさをなきか恨の數になきはや

おなし女院にちかつき奉らせ給へりけるにおほしいりて

むげになきさまにならせ給ていてさせ給へるのちによま

せ給ひける

よし野の院の御歌

あさましやさてもいかなるうさそともうらむ計の契たになき

戀しともうしとも何に思ひけんかゝるつらさをかきりける世に

女のいひのかれてつれなきさまなりけるかまたとさのみ

こしらへ侍ければ

にほふ兵部卿宮

つらかりし心をみすはたのむるをいつはりとしも思はさらまし

さかの院女二のみこの事御けしき侍けるころかのみこの

あたりになちよらせ給て

さころものみかとの御歌

物語二上 百番集合二番

しにかへりよつに命そたえぬへき中々なにいたのみ初けん

をとこの返事につかはしける

みかはにさける皇后宮中納言

拾 百番集合三十七番や拾百

頼めすにさてもねなましなそや此くるいよなノ一待せかはなる

をとこのたのめたるよのふけ侍ければ

あさちか露の兵衛督の中君

あひみんとたのめぬばい申々にくるしからずも更ゆくものを

大將ひさしく立より侍らさりけるにみつへきところになし
しおかせはへりける

なけきたえせぬの中宮の宰相

またしと思ふ物からまきの戸をさいて明行空を見しかな

久しうまからさりける女のもとにつかはしける

女すゝみの右大將

かたしきに待らん床のきむしろをかけて忍ばぬ時のまもなし

かへし

前右のおほいもうち君の中君

うきこつみかたしく袖に浪越てやかて身ながら朽やばてなん

女のもとにまかりてたいにかへるとよめぬ

おとしふみの中將

きたれともしられぬ夜の衣手をぬらしわびついかへりぬる哉

あつまにはへりけるころさかみなりける女のもとになつ

ねまかりて

野しまの三位中將

見せばやな野原しの原草きてあはぬうらみにぬる、袂を

おやも心さし侍ける女のもとにつかはしける

一品宮の殿中納言

そま河におるすいかたにあらずとも我思ふせを引なたかへそ

おやの人にたのめたりける女に忍びてたまはせける

のちくゆるのみかとの御歌

けふやなほ身をなけてまし飛鳥川あすのあふせを人し渡らは

御かへし

大將 女 御

あふ瀬をも人し渡らはあすか河流れて世にもすましと思ふ

いとしのひたる女のもとにていみしうあかぬけしきにう

ちなかめて

有明別の關白

たまさかに人めまち出るよのまたに涙のひまのなとなるらん
女院の御ゆくへしはしりきこえ給はさりけるに聞いて
たてまつらせ給てきこえさせ給ひける

はしたかの三條院の御歌

涙河なかれあふせをまちいていともさわく袖のしからみ
しのひたる女に御心よりほかにへたつるよな／＼のわり
なきなとのたまはせてよませたまひける

物語一下 百壽歌廿五番
あひみては袖ぬれまさるさよ衣一よばかりもへたてすもかな

御かへし

あすかあ

同上

へたつれば袖はしわふるさよ衣つひには身さへくちや果なん
ほのかに御らんしける女のひとへたてまつりかへさせ
給て

かたみとてかくぬきかふるから衣我ならさん人にかさぬな

いとしのひたる女によひのほとかたらひておのかきぬき

ぬになるとてよめる

うちかさねあかしもはてぬきよ衣きてもかひなき物とこそ思へ

かへし

致仕大納言のむすめ

きぬ／＼に引わかるれとあひみてはいとしかされて物悲しき
はしめて物申ける女のいとせちにおほへ侍りければ

なれてくやしき左大將

つらしとてうしとも人をしらさりき何のむくい今夜なるらん
いさいか物のたまはせける女に あしたつの春宮

夢よりもみるほともなきうたいねに長くも物を思ふへき哉

いとしのひたる處におはしましたりけるにあやにくなる
みしか夜にてあさましうなかくなりければ

若衆 百壽歌廿五番
六條院 御歌

みても又あふよまれなる夢の中にやかてまきるゝ我身ともかな

御かへし
うすくもの女院

世かたり人へ傳へんなくひなくうき身をさめぬ夢になしても

年をへて思ひわたりける女にしひて物申て侍けるあし

たに

そのまゝの夢路にやかてまきれなであふにしかふる命也せば

しのひたるなとこのいてけるあかつきはしとなかぬ鳥

の音さうきといひ侍りけるに

鳥のねうらむるの兵部卿のみこの女

うたいの夢路にまふあぐれにさめて消ぬる我身ともかな

たれとはしらすなからおのつからあひみることとはたえき

りける女に

まつらの宮の参議氏忠

しのひたる女のもとより我にもあらでいつとてよめる

いかにして今より後も尋みん人にしらね夢のかゝひち

夢のやうにてよな／＼みなれける人に今はかやうにもえ

あるましきよし申て

夢ゆゑ物思ひのあめわかみこ

哀とも思ひ出しや人しれぬ夢のかよひちあとなえぬとも

御かへし

中

宮

これやさばかりなるらんうは玉のよな／＼みえし夢の通路
しのひたる女のもとにまかれるあかつきよめる

はつれのしかまの太政大臣

明ぬとて鳥のそられやはかるらん猶せきかへす相坂の山

關白たちよりて侍けるあかつきほかへなとやうにいひ
なしてよふかくいてんとし侍ければ

いはてしのふの白川院御息所

わかるれとたくひもあらしさよふかき鳥よりさきの心つくしは
いとしのひたる所にて鳥の聲もたひ／＼聞えければ

みなせ河の左大將

ましてはし鳥のれつらき曉もまたは此世にあらむものかは
いらへもし侍らさりける女のおかつき鳥のなくなきいてい
またにはやういてれといひければ

とりかへばやの前のおほいまうち君

つらけれと鳥のれならていかてかは明ぬとつくる聲をきかまし
鳥のなくを聞てこの音はいかい聞と申けるをここに

三舟の式部卿のみこの女

うきながら鳥のれことに思ひ出んあかす明ぬるよほの名残を
女のもとよりいてけるあかつきよめる

みかはにさける前關白

なきぬへしあかね別の曉をしらす鳥のこゑのつらさに

あさちか露の入道關白

しのひあへすやこゑの鳥に打そへてれにたてつへきけきの別路

かへし

尙

侍

曉のやこゑの鳥も人しれすうき身しらるゝねをやなくらん
六條院御かたかへのついでにしのひていりおはしまし
たりけるに鳥もしは／＼なくに御心あわたいしくてとり
あへぬ迄おとろかすらんととの給はせければ

源氏のうつせみのあま

平本

身のうさをなげくにあかて明るよはとり重てそれもなけれける
しのひたる女のもとよりいつるあかつきよみはへりける

はきにやとかる大將

思ひ出よ夕への空の雲たにも命にかへしあけくれの夢

これをきいてこゝろのうちに 院 女 御

なからへてうき世に月のすまはこそ思ひも出ぬ明くれの空

忍びて御らんせられける女にあかつきの給はせける

露のやとりの一條院御歌

拾

なからへて世に有明の月すまは又めぐりあふ契ともかな
れいけい殿わたりにて女にわかれけるあかつきよみ侍け
る

今とりかへばやの關白

なこりのみ猶有明の月かけをまたあふ迄のかたみとはみよ

女院大將にてつかへ給けるをひか／＼しきもてなしと御

らんしあらはすをりにやありけん

有明の別の院御歌

いかにせん只このくれとたのみても行かたしらぬ有明の月

御かへし

つれなくて猶有明のかけとめは身の世かたりになりやはてなん

しのひたるところにて有明の月のくまなくすみわたれる
をもちともにみてよめる

ゆくへしらぬ左大將

諸ともに有明の月と思はしやなと山のほにかゝるちきりそ
女のもとよりかへりけるあかつき

みふねの左のおほいもうち君

曉のわかれにおつる袖の雨に光もぬるゝあり明の月

あかすおほされける女をあかつきいさなひいてさせ給て
またかやうなることをならはさりつるを心つくしにもあ

六條院御歌

夕興 百集合十一番

古へもかくやは人のまとひけんわかまたしらぬしのゝめの道

もろこしにて河陽縣のきさきを心ふりほかに見たてまつ

りてあかすわりなきに立いてむこゝちもせさりけるあか

つきよめる

はまゝつの中納言

物語一

わか世にはまたしらさりし曉のかゝる別にまとひぬるかな

御かへし

またあひかたたく侍ける女にわかとて

ちにくたくる左大臣

このくれとたのむるたにも曉の別はなしき物とこそきけ

しのひたるところにて心ならず侍ける程いはんかた

なくて

我身にたとゐる関白

かきりありて命たえずはいかいせんちきらぬくれのけふの思ふ

おなしさまなりけるあかつきよめる

うもれ木の少將

あらはこそ物と思はめいていなはやかて消なん命ならずや
しのひたるをよこの出なんとするあかつきよめる

有明のわかれの中務卿みこの北方

かくてたいとふ命のきえなゝん絶すかなしきこゝろくたかて

白川院に行幸有けるついでに中宮をみそめ奉らせ給ひてあ
したに聞えさせ給ひける

ゆくへしらぬのみかとの御歌

しぬばかりおもふ物から後にまたあひみんことにかゝる命よ

しのひたるところにて明はてぬききにと人のおとろかし

侍けるにえいてやり侍らて

にほふ兵部卿のみこ

深舟

ふにしらすまとふへき歳さきにたつ涙も道をかきくらしつゝ

がへし

うきふねの君

同上拾

百集合七十五番

涙なもばとなき袖にせきかねていかにわかれなとゝむへきみそ

とほき程にはへりける女のもとにまかりてさのみもと

まり侍らて雨のふる日かへるとて

夢路にまとふの式部卿みこ

諸共に思はましかばかくはかり露けき道をとゝめやはせぬ

かへし

大納言のむすめ

せきとめんかたこそなけれ泪河神のしからみくち果しより

あひかたく侍ける女にからうしてゆきあひたりけるあし

たつかはしける

うきなみの横中納言

あふせにも猶よとまれは涙川いかゝはすへき袖のしからみ

なとこのおきわかれるあかつきかされんよはのかすそ

おほかるといひければ

水あさみの大納言のめのと

かさねへきよはもしられはから衣やかて涙に朽や思なん

しのひて女にもの申てあしたにつかはしける

玉もにあそふ關白

ときやせしむすひやしけん下細の亂れてこふるけきのわびしさ

一條の女三のみににかまひそめてのあしたに

かせにつれなきの太政大臣

わかるとてうちみもなれす曉をえそふらさりしかる物とは

まのひたる處よりいていあしたにつかはしける

うき浪の權中納言

人はいさうついかほにやさめぬらんまた明ぬきの夢のかよひち

御かへし

皇 后 宮

身をかふるこのよの外と思ふまに今こそたとへ夢のかよひ路

女二のみにこのもとにまのひてたちよらせ給へりけるあし

物語上
百番合三十八番

さころものみかとの御歌

うたいに申々夢と思はいやさめてあはする人もありやと
もろこしにてはつかなる女にわかれ侍とて

物語上

まつらの宮の夢識氏忠

さめぬきの夢のたいちをうついでいつを限のわかれなるらん

春宮の宣耀殿女御いまた参り侍らさりけるにいさいかゆ

さあひてあしたにつかはしける

れさめの右大將

宵のまの夢ばかりにて立わかれけさはいかなる心ちかはする

女のもとよりかへりてつかはしける

みかはにさける前關白

拾
百番合四十五番

とはいやないかなる夢をみつるよの各殘の袖のくかはぬるゝと

やせかはの右衛門督

あやししくもけさの袂のぬるゝ哉今夜いかなる夢をみつらむ

宇治のなかのきみにかまひてまたのあしたにつかはし

無角拾
百番合四十二番

匂ふ兵部卿のみこ

世の常と思ひやらすん露しけき道のしの原分てきつるな

先帝女一のみににかまひ初てあしたに聞え侍ける

なれてくやしき左大將

ふりにけるけさの心もかくはかり誰かはふらん道芝の露

かへし

なれにけむその道まはの露よりもおき所なき袖の上哉

女のもとよりかへりてあしたに

ひとりことの彈正のみこ

分きつる野原の露もまたひぬに袖さへぬれてかへりぬる哉

心さしある女をおきて外にとまりてかへりける道にてよ

める

おのれけふたき大將

露げくもなりける哉ひとりのみかたしく袖もかくやぬるらん

冬のころ女のもとより歸りてあしたにつかはしける

なたえのぬきの春宮大夫

いつのまにおく朝露のきえかへり戀しきことをなけくなるらん

かへし

按察大納言女

我身にそ今朝はよそふる消かへり草葉のうへの霜とみしかと

六條院たれとしり給はてなのりせよかうてやみなんと

は思はしとの給はせければ

おほる月夜の尙侍

北望 百壽院合三番
うき身世に

やかて消なば尋ても草の原をほとはしとや思ふ

后宮まゐり給へりけるあしたに奉らせ給ける

袖ぬらすの後朱雀院御歌

たくひ世にありやと人に尋はやくるゝ待間のほととの心を

中宮の新中納言にもいひそめていて侍とてよめる

河きりの内大臣

たくひなき心ばかりなとゝめ置いて又あふまてのしるへともせむ

女のもとよりかへりてあしたにつかはしける

有明別左大臣

袖のうちに我たましひやまとふらんかへりて生る心こそせね

あさちか露の入道關白

たましひはあかぬ夜床にとゝめ置てあるにもあらす暮すけふ哉

あしたにおともせさりけるなとこのもにつかはしける

おなし兵衛督のむすめ

けさとはぬつらさはさても契なくこの夕くれを猶たのむかな

一條院内大臣夕くれにいつとて「おきわひしなに曉をな

けきけん夕へにわきてとまる心を」と聞え侍ければ

いはてしのふの皇后宮

かはかりもとまる心のかはりなはこれやかたみの夕くれの空

たいひとたひあひてはへりける女に

みかばにさける前關白

拾 百壽院合三十六番
けふもくれあすもすきなはいかいせん時のまなたにたへぬ心を

いとたはれたる女なとゝめてかへし侍けるあしたに夢に

たになきうかるへきとこのうへにといひはへりければ

おなし關白

一かたに心をよすと思はゝや哀もかけんとこのうらなみ

しのひてあひて侍ける女の許へ又まかりてあしたに

おとしふみの中將

あふ坂はなれこし關の道なれとゆくたひことにまとはるゝかな

麗景殿女御ともなひてしのひて石山にまうてはへりける

にこれなんあふさかのせきと申なりとて

なけき絶せぬ大將

つひにかくこえける物なともすれば人わひさせしあふ坂の關

内侍督みそめて侍けるあしたにつかはしける

玉もにあそふ關白

こえて後しつ心なきあふ坂を中々せきのこなたなりせば

風葉和歌集卷第十五

戀三

おろかなるさまに思ふらむとおほゆる女にものゝみ心は
そきよしかたらし侍けるついでに

みつからくゆる左大將

命たに世になからふる物ならば君に心のほとも見えまし
かへし

なからふる我身のうきを思ふより外には人なうらみやはする
しのひて御らんせられける女に給はせける

女すゝみの先帝の御歌

君かあたりしはしはなれぬ心こそ我ものからにうらやまれけれ
女にのたまはせける

いかにせん後の世までと契ても猶あやにくにあかぬこゝろな
藤壺の女御ひさしく参り侍らさりけるこゝろおほむ心ちれ

いならすおほされければ給はせける

うつほの御かとの御うた

諸ともにおりてそよもをしまれしかくてはなそや露の命も
しのひてかよひけるところにてなとこ女のもろともにそ
ひふしたるかたをかきてつねにかくてあらばやなといひ

にほふ兵部卿のみこ

長きよなためにも猶戀しきは只あすしらぬ命なりけり

かへし
心なはなげかさらましいのちのみ定なき世と思はましかは
こゝろかはれるなとこのたちよりてことなしひにちさる

ことゝも侍けるに

かくれみの源中納言女

うきながら消ぬへき哉行末をちさる心はいのちしられば
世の中はしたなくてさとに侍けるこゝろ春宮みこと申ける
ときしのひておはしましてゆく末こちたくちきらせ給け
るに

をたえのぬまの尙侍

めのまへにかいらすもかなたのめおく行末までは定なくとも
おなしこゝろあかつきいてさせ給とてをしからぬいのちに
かへていかてわれとの給はせければ

思へともこの世にあまる身のうきをしらぬ昔の契つらしな
月こゝろありてまうてきたるなとこのちのやしるをひき
かけてゆくさき長きことを契り侍ければ

照用

うちの 中君

さしかたを思ひ出るもはかなきを行末かけて何たのむらん
心ちかきりにおほえけるになとこのゆくすゑをちきり侍
ければ

石山の 大僧都母

行末をかけてもなにか契るらん只めのまへに成める物を
女のおあひかたく侍けるに

きえれたゝ戀にわか身よあればうし又あふ迄の契なられば
右大將つらきさまに侍りければゆくへもしられ侍らさり

かせにつれなきの右大將

けるを尋出てたちかへりうらみわひ侍ければ

物語三下
百巻第四十四巻

におほしめしとちめさせ給ひてあしたにつかはさせ給ひける
さころものみかとの御うた
命さへつさせす物を思ふかなわかれし程にたえも果なて
のちのおふせなため侍ける女のほかさまに成にける夜
つかはしける

たまにもあそふ關白

けふ迄もなからへましや忘れしといひしにがゐる命ならずは
たいしらす
ちにくたくる左大臣

さりともと思ふ心のなくさめに今も消せぬ命なりけり
宰相中将大貳がむすめに心にもあらずかよひけるころか
くはならばさりつるにと心ほそくてよみはへりける

あし火たくやの源大納言女

我なからなと思ひけんめのまへにかゝる心はみせしものそと
かへし

かはかりの心を人にみせなからけふ迄ける身ないかになん
とき／＼物いひわたりたる女にまたこと人かよひけりと
聞てのちにはつかにゆきあひて

いはてしつふの一條院内大臣

立かへりみても哀のいかならん人はかはらぬこゝろなりせば
みこかへの内侍のかみ

岩はしにおとらぬ中のとたえをはたかつらさと思ひわたらん
右大將かれ／＼になり侍にければ

しのふのこ少將

露ばかり哀をかくる程ならはかくかきたえしきかにのいと

三條院御こゝろとめめさまにみえさせ給ければたてまつ
り侍ける
はしたかのきりつほの御息所

數ならぬ身をはのきはのさゝかにのいかにがすへき心ほそさな
みかたゝい人におはしましけるころしのひてかよひ給ひ
ける所をわれにもあらず外へうつるひけるあかつきた
いまなるとは聞えまほしきに鳥もなきければ

あすかゐ

物語二下
百巻第四十八巻

天のとをやすらひにこそ出しかとゆふつけ鳥よとほゝこたへよ
關白いまた三位中将にはへりけるころしのひてもの申け
るなつゝまじきことありていてけるみちにかのくるまの
あひてはへりければ

あさくらゐの皇太后宮大納言

拾
百巻第五十五巻

玉はこのみちゆきすりのかはかりも哀いづれのよにかみるへき
みかたみこと申けるときかよひ給けるかれ／＼にみえ
させ給ひければほかへうつるひ給ふとてかきおかせたま
ひける
うたいねのきさいの宮

何方へゆくともいはしなかつらとほすは人のつらさみえなん
なとこのこと女むかへんとしけるをみて山さとなるとこ
ろへまかりけるにおくりのものゝいつくにとまりぬると
かいふへきといひければ

地中語

よみ人しらすはすいみ

いつくにかおくりはせしと人とはいふ心もゆかぬなみた河まで
おとろかされてまうてきたりけるなとこの「わすられす
思ふ心をしらねはやいとかく人のうちみはつらん」とい

ひけるにいたうなきて

みつからくゆるの彈正のみこの女

涙たに思ひしらすはしのひつゝふかくは人なうらみさらまし

風葉和歌集卷第十六

戀四

てりみちひめとりかへされ給ひてよませ給ける

はこやの平のふとたまの帝の御歌

いとへ／＼いふに心はなくさます戀しくのみもなりまさるかな

中宮をほのかにみたてまつりてむかしのかれ侍けるなく

やしく思ひつゝけて いはうつ涙の内大臣

身をしらば人につらしとみえましやなとまつ物を思はさりけん

關白のむすめを思ふ心ありていはせ侍けるをうちに奉ら

んとし侍けるにひきたかへてあれのまゐりけるに御つか

ひにまうてきてそなたへつかはしける

人たかへの春宮のすけ

思ふよりほかなる人こと一本のくるしきや同上は今やほしめて君としるらん

内大臣心かはりたるさまにみえ侍けるころよませ給ける

おやこの中宮

かはり行人のつらさもわかれぬにいかにしりてか袖のぬるらむ

なとこをほかへそいのかしやりてさすか袖もぬれにけれ

は し水にぬるゝ内大臣北方

我ながら心のうちをしらぬ哉いかなるかたに袖のぬるらむ

夕霧左大臣おちほの宮にかよひはしめ侍けるころ致仕の

おとゝのむすめのもとにつかはしける

藤内侍從

夕霧 百集歌合廿三番

數ならは身にしられまし世のうきな人の爲にもぬらず袖かな

ふつかぬ御身のありさまみあらはされ給へりける人の御
かへりことに

物語二

まして思へ世にたくひなき身のうきななきみたる程の心を

うらみたてまつりぬへきことを思ひしらぬさまに侍ける
にかななるなりにかあやしう心のかはりてみゆるはとみ
かとのたまはせければ

とこなかの弘徽殿女御

しられにし身のうきなれば今更につらさもなにか思ひわくへき

こゝろとめぬさまなりけるなとこのなげくことありてれ
いよりもおろかに思はれぬへきこといひ侍りければ

あしひたくやの大貳女

ありしよりまさらん程のつらさにも又行末を思ひやる哉

たいしらす 女すゝみの登華殿女御

つらさなもうきなもとる身ともかなさてたに暫時物を思はし

一條院内大臣こゝろにもあらすはなれ聞えてのちささま
まうらみ奉りてはへりければ

いはてしのふの女院

思はぬと人はしりけり別にしうきも哀もかきりなければ

しのひたるなとこのかへりことにひまなきよしをいひて
侍りけるにさらばまたばえきこゆましまり人わろき心

ちすと申たりければ みかはにさけるの尙侍

除 百集歌合廿六番 けき けき
うきに又つらさをそへて歎けとやきのみはいかい物を思はん

いかなりけるをりにか内の御文にてならひにし給ひける

物語二 中 百集歌合廿三番

さころものさかの院の女二のみこ

夢かともみしにもにたるつらさ哉うきは例もあらしと思ふに

しのひたる男のいといたくうらみ聞えければ

我身にたとるの水の女の女三宮

今はたいみきと計りの夢をたに忘れんのみそなきけるへき
内大臣「みしかともわすれぬ夢を」とふ人はなく／＼すく
るうき世なりけり」と聞えて侍けるかへしに

みかきか原の女二のみこ

なからへてあるたに命つれなきをみしかといはん程の夢こそ
しのひたる女にたまはせける

おなしみかとの御うた

わすれぬ夢たになくはおのつからさむる涙のひまもあらまし

庚申しける夜かきて女にみせ侍ける

うつほの侍従なかつみ

祭使

ぬるまなくなけく心も夢にたにあふやと思へばまろまれけり

いとせちに思ひける女のうせにけるかまた人のむすめに

うまれぬと夢にみえ侍りければ

しのふもちすりの右大將

忘らるゝをりのあらはやまろまんいかてかみけん思ひぬの夢

みかとはのかに御らんせられ給ひて後ゆくへしられた

てまつらせ給はさりけるころのてならひに

つるのしるへの中宮

いかなりし夢のなこりのさめやらて今もかわかぬ袂なるらん

女のゆくへしらてなけきはへりけるころ

あさくらの 關白

明ぬよの中にもやかてまとふ哉はかなき夢をみるとせしまに
はるかなるほとに侍けるころみやこに思ひおきける女の
つらきさまに夢にみえ侍りければつかはしける

はつれの入道太政大臣

戀わひてなくさめかぬる夢ちにもいかにみえつるつらさ成らん
物思ひけるころあふきにかきつけ侍ける

やみのうつゝの左大將

長きよなまるとまでのみあかすともしらてや人の夢をみるらん
女をたゝ一たひしのひて御らんしてのちよませたまひけ
る

うきなみの一條院御歌

いかて又思ひあはせん宵のまにみもあへさりし夢のみしかな
はつかに御らんせられたりける女の御夢にみえたてまつ
りて侍ければ

わたらぬなかのみかとの御歌

うは玉の夢ばかりなるあふことを語りあはせんうつゝともかな
おやのまもりていとあひかたかりける女のもとにしのひ
てつかはしける

人にかはれるの大將

みし夢をいかにしてかはかたるへき逢見んことの此世ならねは
たいしらす

なるとの中納言

あはれてふ人たにあらはかたらはやみはてめ夢の忘れかたさな
いとしのひて侍ける女につかはしける

あひすみくるしきの内大臣

思ひいつやあるかなきかにみし夢はいかならんよに語り合せん

かへし

源大納言三君

ほのめきし曉かたにちかへてし夢よかけてもかたらさならん
みかるとにほのかに御らむせられて侍ける後心ちかきりに
なりてよめる

みかきか原の前左大臣三君

後の世とちきりしばかりたのまれて絶にし中の夢のうきはし
いとせちに思ひける女にたゝまはしそひて侍けるかゆく
へしらすなりにければ

ちにくたくる左大臣

夢とのみ思ひなせともみしまゝの佛にこそわすれわひぬれ

御心さしありての給はせける女のあらぬさまになりにつ

れは

いはてまのふのさかの院御歌

忘れはやとうきに幾たび思へとも猶佛の身をもはなれぬ

つれなくみえ奉ける女のいのちの後をたのめてもみむと

聞えけるをおほし出てよませ給ける

よその思ひのみかとの御歌

物思ふ命をのみもいとふ哉ちきりし後の世をたのみつゝ

中納言よそなからかたらひける女をつひにはみるへきも

のに思ひて侍けるにおやひきたかへこと人につけて侍り

かければ「くりかへしなほかへしてもおもひ出ふかくは

れとはちさらさりきなと申て侍りければ

物語二

はま松の大貳女

契しを心ひとつにわすれれといかいはずへきまつのなた巻

ひのもとの中納言かへりわたらんとし侍けるに八韻の

物語一

詩にそへて

おなしもろこしの大臣五君

今やとふとくやみゆると待つゝも同じ世にこそなくさめてふれ

拾百番歌合廿六番
けふ物語

御ころにもあらず右大將のもとにおはしましけるころ
おもほすことありて

めもあはぬの右大臣の皇后宮

おなしよにかばかり物を思ふともあらずや人のわすれゆくらむ
ちいみこ我なん世にひさしうあるましとて右大臣にねん
ころに申おきて程なくかくれ侍にけるのちおとゝまたか
ればてにければつかはしける

うつほの式部卿のみこの中君

祿
閑中

結び置てわかたらればわかれにきいかにせよとて忘はてしそ
右のおほいまうち君ほかにつかはせりけるふみを後冷泉
院たつれとらせ給てまのひて給はすとてつかに思ひ
ひあらせんとおもひしなこれこそ神のたすけなりけれし
人をそとにの給はせて侍ける御かへし

心高き宣旨

かきりそと思ひ絶にしその日より又ななくへきこともなき身を
まのひて物いひわたりける女のこと人にむかへられにけ
ればつかはしける

れさめの関白

限とて思ひ絶にし世中に涙しもなとつきせさるらむ
たれともあらず物申ける女のいとなくおほえ侍け
ればかならずこゝなたつめへきまにかならひおきける
所にゆきてもむなしくたわつらひてふえふきうたなと
うたひける末つかた戀しなとはおろかなりとふたかへり
はかりの後神うたにうたひ侍ける

なたえのぬまの春宮大夫

あふ事はまたなき中にいかなれば涙はかりの絶ぬなるらむ
これをきゐたるもいとたへかたくて心のうちに

ないしのかみ

人ばかり涙ばかりをなこちけり我は命も絶ぬへき身そ
なとこのみまうくはまでこしころになんあるへきとい
ひけるに

いかにせんたえなんもうし青つらくるはくるしと思ふ物から
御門おもほしわすれたるにやとおほえ給ひけるころ

秋のよなかしとわふるの齋院の母后

いつのまに契りしことは忘草まげれる中となしはてつらん
右大臣の一條の家にこれかれますませ侍けるころかはり
にければみなたよりにつけつゝちり／＼になりけるにた
けなとちかきはしらにかきつけ侍ける

うつほの橘右大臣のいもうと

祿
閑下

こゝね人をまらわたりつる我ならてまかきの竹も誰をばらはむ
ものおもほしけるころ竹の風にそゝめくを御らんしいた
して

こまむかへのみかとの御歌

思ひ出よおつる涙にくれ竹のよゝにもかゝるなけきありきや
尙侍心にもあらずうちに参り侍ける頃たのみこしことそ
かなしきくれ竹のとかきてはへりけるを見て

たまもにあそふ関白

吳竹のよゝにたえしと思ひしないかてむなしきなかと成けん
内にまゐらんとし侍けるのちのあふせなま／＼ちきり
ていばほにおふるまつほとと申ける人のかへしに

おなし春宮のはい女御

契きと我はわすれす思ふともいはほにおふるまつ人もあらし

六條院あかしのうへの事はめかしの給はせたりける

御かへし　むらさきのうへ

明石うらなくもおもひける哉契しをまつより浪はこえしものそと

もの申ける女のもとにこと人のまかりかふふと聞てつか

はしける　か　なる　大將

浮合なみこゆる比ともしらす末の松まつらんとのみ思ひける哉

あすかゝることさらに思ひわすれすそのもくつまつてた

つれまほしうおほされければ

物語二上さころものみかとの御うた

思ひやる心いつくにあひぬらんうみ山とたにゑらぬ別に

關白いとせちにいひよりて人たかへしたるさまにみえは

へりければ　みかはにさけるの女院御匣

拾なげきこり道まとひける山人のきくてにかゝる物を思ふよ

山さとに人をしりおきてかよひけるにたひかさなりけれ

はとのいのものなとおきてまもらすことになりてえあ

浮合はてかへり侍とて　にはふ兵部卿のみこ

いづくにか身をはすでんとまら雲のかいらぬ山もなくそ行

いとつれなくみえたてまつりける女のはてはやまひにさへ

なりければよませ給ける

風につれなきのよし野院御歌

ありしよのうきにはたに滑なましなに命の長き思ひそ
こいこそなへりけるにいさいかおこたりてのち女のもとにつかはしける　いちぬいしもの關白

たえぬへくみたれし玉の誰ゆるにけふ迄かゝる命とかしる

こゝろならずへたりてあひかたくなりける女にやま

ひにわつらひけるころつかはしける

おやこの中の内大臣

さりともと思ふばかりにかけとめし命も今はかきりなりけり

心ちかきりになりて侍けるに女院しのひてわたりおは

しましたりければ聞え侍ける

いはてしのふの一條院内大臣

こといへふ戀もうらみもはれやらて誰故ならずやみにまとは

みかとはつかにみえ奉りて侍けるのちこゝろならぬこ

ともありぬへかりけるを思ひわひてよをそむきて侍ける

かきりのさまにさへなりければ内わたりにさふらひ

ける人につかはしける

みかきか原の前左大臣三君

そむけとも此世なからは忘れぬに身をかへてこそ慰みもせめ

このふみをみかとにみせてまつるとて

ふちつほの中納言

夢にたにゑらぬもかなし君にこそわきてかくへき露のかことを

ときはまのひてすみ侍けるに心地かきりになりて

あ　す　か　ぬ

物語本四下なからへてあらばあふなをまつへきに命はつきぬ人とはひこす

れさめのひろきはの准后こゝるにもあらずおい関白にむ
かへられてなげき侍けるころわか關白の夢にみえ侍りけ
るうた

物思ふにあくかれ出てうき身にはそふたましひも泣々そふる

宜旨ゆくへしられ奉らすなりてのち今はむなしきからと

まらずやと聞ゆると御ゆめに御らんして

拾 百番歌合七十七番

戀ぞひてまとなわがたまことならはむなしきからの行へ尋よ

たいしらす

うつほの侍従なかつみ

藤原君

人と思ふ我身のたまはなからん空しきからはなげきしもせし

あひかたかりける女のあたりなる人にいひ侍ける

拾 百番歌合九十九番

袖のうらに涙よせかくるうつせ貝むなしきからに成や果なん

しのひて物申ける女のこと人にきたまりぬへく聞侍りけ

れは

うきなみの權大納言

この世にて絶はてぬともみつせ川今一たひのあふせあらしや

いけらしと身をいとひても同じよなわかれんことは猶そ戀しき

かへし

帥宮のむすめ

いかで猶わたり初けんわたり河今一たひのあふせばかりに

たくひなくき身ながらも同じよに今幾世かはありときかれん

いまはのきはにあはれなる歌ともかきて皇后宮に奉らせ

給へとて一品宮に聞えさせ侍ける

みかきかはらの宮大將

涙河この世の外になかれぬと袖よりもらせ水くきのあと

をとこの絶はてにければあまになりて侍けるかみをつつ
みてかのをこのくるまのみえけるにしのひていれさす
とてかきつけいる

たまかしに

うきしつみこふる涙のうみなれは今はあまとそ我は成ぬる

心よりほかのふねの中に身をかきりに思ひなりにける

にみかとのわたる舟人とかいせ給つるあふきにかきつけ

物思一下

拾 百番歌合七十四番

かちなたま命もたゆとふらせはや涙の海にふつむ舟人

をなしなりうみにいりなんとてかきそへはへりける

同上

同歌合九十一番

早きせのそのみくつになりనికిとあふきの風に吹もつたへよ

あはれと思ひける女のおほつのはまのほとりにて身をな

けにけりと聞て石山にまうて侍けるにうちいてのほとす

くとてよみはへりける

拾 百番歌合五十七番

戀わひぬ我もなきに身をすてゝ同じしくつと成やふなまし

故中納言たよりのついでに一よとまりてまたともし侍

らさりければ身をなげんとしける所にてうかひをみつ

てはかまのこしをひきやりてかゝりの松のすみしてかき

てかの中納言につたへよとてとらせ侍りける

かたの、大領か女

かつきゆるうき身の沫と成ぬとも誰かはとはん跡のしら涙

たい人におはしましけるとときかはにまうてさせ給によ

し野のあたりにてあすかぬのことおもほし出られてかは

かりのふかさをたに思ひいりかたけなるにいかばかりお

もひてかなとおほしめされて

物語二下 百番歌合五上番

さころものみかとの御歌

うきふれの便にゆかんわたつみのそこをしへよ跡のしら涙

あすかゝるものかきて侍けるあふきを御らんするになみ
たのあとといとくまゐるくゑともいあらはれておちたるを

またなかしそへさせ給ふとて

同上 同前合五上番
涙河なかるいあとはそれなからふからみとむる倅そなき

風葉和歌集卷第十七

戀五

こしをへていひわたりける女にむつきのついたちにつか
はし侍ける

荷宴一

立かへる年ともいもにやつらかりし君が心もあらたまるらん

宣耀殿女御いまたまゐり侍らさりける頃給はせける

女のすくせしらすの第一御門御歌

こゝのへの霞のよそになけきついはれぬ思ひに世をつくせとや
梅のさかりなる所にてもの申て侍ける女のゆくへしらぬ

ことをなけてよめる

まつらの宮の参議氏忠

物語中

とばいやなそれかと匂ふ梅かゝにふたいひみえぬ夢のたいちを

弘徽殿のほそとのにたちより給へるにおほる月夜に似る

ものそなきとうち眺めける女をふといらへさせ給て

花宴

百番歌合二番

六條院御うた

ふかきよの哀をしるもいる月のおほるけならぬ契とそ思ふ

こゝろならぬこと侍けるあかつきよみ給ひける

なれてくやしきのかつらのみこ

春のよのはかなきほととの契故人のつらさをみつる夢かな

女のもとよりかへりてあしたにつかはしける

み山かくれの宰相中將

みるほともなくて明ぬる春のよの夢ちにまといふわが心かな

かへし

よみ人しらす

春のよのみはてぬ夢にさもあらはあれ人の心のかゝらずもかな
はやう見侍ける女のこと人につきてのちものまうての所
にまゐりあひて侍けるにまのひてつかはしける

時雨の中將これすみ^{け一本}

みしや夢これやうつゝとたるとまに亂れてあかす春のよなよな

右のおほいもうち君またともし侍らざりけるにおしを
りて出にけるかつらの木の又のとしもえいてたるをみて

うつほの内侍督

^{竹蔭上}

忘れしとちきらぬ枝はもえにけりたのめし人そこのめならまし

なとこの柳につけて下にのみ思ひみたる、青柳をといひ

て侍けるかへりことに

ほと／＼のけさうの式部卿宮廻君侍風^{降力}

一すちに思ひもよらぬ青柳は風につけつゝさそみたるらん

かしは木の櫛大納言とかくいひおこすること侍ける返事

に 二品内親王家小侍從

^{若菜上}

今更に色にないてそ山さくらおよほぬ枝に心かけきと

女院をばつかにみたてまつらせ給て櫻につけてきこえと

せ給ける

今さらにかすみへたては山さくらひとめみてきと人にかたらん

御かへし

春をへて置はれせぬ山さくらいかなる折かとほめにもみむ

女のもとにつかはしける

うつほの中納言雅明

^{梅花堂}

水まざるよとのまこもの老の世にふかく物思ふ春にも有哉

山ふきを折て齋院にみせきこえさせ給てくちなしにし
もさきそめけむ契こそとの給はせて

^{物語上 百景歌合十六番}

さころものみかとの御歌

いかにせんいはぬ色なる花なれば心のうちをゑる人そなき
ふちの花を女にたまはすとて

はしたかの三條院御歌

あふことをまつにかゝりて年ふれば袖のみぬるゝ池のふちなみ
四季のものかたりの中に

ほとゝきすのみかとの御うた

心には猶かゝりけりもろかつら思ひたえにしあふひなれとも

御かへし

あふひの齋院

言のほにかけてもなにか思ひ出るいつきの宮のまめのまたくさ

六條院まつり御らんしける御車に奉りける

源典侍

くやしくもかさしける哉名のみして人たのめなる草葉計な

祭のころあふひかけわたして思ふことなげなるを御らん

せさせたまひて

よそのおもひのみかとの御歌

草の名をかけても更にかひなきは神のゆるさぬかさし也けり

しのひて御らむせられる女のもとにてあかつきほとと

きすのなきわたるをきかせ給て

たいの先帝の御歌

時鳥なきていつくに過ぬらん我のみつらきまのゝめの空

姓かはりたるばらからあまた侍ける女ともの中につかは

しける橘の女に

あさつゆの權中納言^{將一本}

にほふともかひやなからんいたつらに我袖ふれぬのきの橘
かへし

わすられて昔にならむ徒にわか袖ふれし軒のたち花
五月五日女のもとにつかはせ給ける

物語一上 百景殿廿九番
思ひつゝいばかりはかき沼のあやめ草みこもりながらくちほてねとや
やてなん百

たえてひさしうおほしまさりける所をものゝたよりに
おもほしいてゐたふらせ給へるに更にえわけさせ給ふ
ましきよもきのつゆけさになんはへると申ければ

六 條 院 御 歌

蓬生 百景殿合十九番
たつねでも我こそとはめ道もなくふかきよもきのもと心の心を
先帝の宣耀殿女御いまた参り侍らさりけるにさみたれの
はれまなきころ給はせける

女のすくせしらすの第二御門御歌

人しれぬなめいといくらされてなくさめかたき頃の空かな
もの思ひけるころさつきになりてはいと、ひまなき空の
けしきにつけてもおもひやるかたなかりければ

みかはにさける前闕白

我おもふ人にみせはやさみたれの空にもまさる袖のしつくな
ひさしうおとし侍らさりける人にさみたれのひまにつか
はされ侍ける

こけのころもの一品宮
思ひやればれまもみえぬ五月雨にとはて程ふる袖のしつくな
登華殿女御まかりいて、はへりけるに給はせける

はな宰相のみかとの御歌

夏のよの夢のたいちにゆきまよひ出し有明のかけそ戀しき
御かへし

有明のわかれし空をなかわれは秋よりさきの露そこほるゝ
女につかはしける

夢夏
夏草におく露よりもほかなきは君にかゝれる命なりけり
物おもほしける比はたるのとひかふを御らんして

身をかふるひとつ思ひの夏むしむいと我はかりこかれやはする
六條院なほ人からのとの給はせたるかたつかたに

空樓 百景殿合十九番
うつせみのあま

うつせみのほにおく露のこかくれてふのひくゝにぬるゝ袖哉
たいしらす

御語一下 同合十九番
こゑたてゝなかねばかりそ物思ふ身は空蟬におとりやはする
女のもとにうつせみの身にかきつけてつかはしける

空樓
ことのほの露をのみまつうつせみも空しき物とみるかわひしき
しのびたるをこのほかさまになりぬへくきければみ
な月のすゑつかたつかはしける

なれてくやしきの式部卿宮女

夏虫のひとつ思ひにもゆれともまたれぬ秋の風そすゝしき
あるましきことを思ひけるにその女のもとになこしの月
のわひしきはいむてふことのなきにそ有けると人のいひ
おこせたるをみてかたばらにかきつけはへりける

うつほの侍従なかつみ

祭使

人はいさなこの月そたのまれしせいのみそきに忘らるゝやと
秋のはしめつかたをこのかへりけるあしたに

いはてしのふの皇后宮

ならひこし袖のわかれも秋は猶身にしむ色の露そこほるゝ

心さしありける女にはなれてまたのとし七月ばかり秋と

いふ名もわきて身にしむ風のおとにいとと思ひくたけて

よみ侍りける

おなし一條院内大臣

わかれにしなにはふりぬる秋なれと猶おとろかす風のおと哉

中宮いてさせ給ていとさひしうおはしましけるにきこえ

させたまひける

みかきか原の御かとの御歌

ほさて又秋にあはんと思ひきや別れし袖の露のふかさな

ふちつほの女御いまたまわり侍らさけりるに七月七日給

はせける

うつほのみかとの御歌

つれもなき人をまつまにたなはたのあふふもあまた過にける哉

うちとけては御らむせられさりける女に給はせける

をたえのぬまの春宮

ふきむすふ露のみたれもなかりしを何と身にしむ萩のは風そ

ものいたふりに御らむせられたりける女の有さまさたま

りにけるにたかやかなるをきにつけてつかはさせ給ける

六條院御うた

ほのかにのきはの萩をむすはすは露のかことを何にかけまし

思ひむすほるゝこと有てはしつかたになかむるにをりし

りかほにこたふるをきのうは風もけにあやしき程なりけ

れは

有明前中務卿みこの北方

あた人の心の秋のみえしより我身にとまるをきのうはかせ
とひとりこちけるをたちきゝてふとさしよりて

左 大 臣

下萩のわれにしなひく風ならばあたなる秋のこゑはしらせし

みかた御心かはりよのつねならてとしへぬる秋の夕をな

かめて風にとまらぬ露もうらやましうといひかれ侍けれ

は

よその思ひの登華殿女御

きえぬかし袖の涙の露とたにうき身をはらふ秋風もかな

野わきのまきれに皇后宮を見たてまつりてのち心ちかき

りになりければ中務内侍につかはしける

みかきか原の宮大將

身にしみて思ひ出るも戀しきにその秋風の露ときえなて

秋の野かきたるあふきをもちて侍けるにみかたともうと

のことをおほしてこゝろにはしめゆひおきしはきのえな

とかきけかせ給へりければ

き衣の宰相中將

おしなへてしめゆひわたす秋のゝに小萩が露をかけしと思ふ

そのいちいもうとのもとに

みかとの御うた

一かたに思ひみたるゝしのすゝき風のたよりにほめかしきや

女のもとにつかはしける

いはやの左兵衛督

花すゝき末こす風のほのかにもそゝとこたふる聲を聞はや

左大將かたみにとてひとへなきかへて侍けるにひさしう

おとつればへらさりけるこゝろすゝきにつけてつかはしけ

る

いせなの式部卿のみこの中將

忘るなといひしかたみを思ひおきてまれくを花の袖そ露けき
いとつれなき女に秋のころつかはしける

うつほの中納言雅明

まれくかとみる程たにもなくさめんのへのな花に風はふかなん
かへし

ふちつほの女御

身にさむみ人の物思ふ秋風になひくをばななたのまさらなん
たち花の右大臣かれはてはへりけるころすいきのまれ
くをみてよめる

忠

うつほの左大臣北方

まつ人の袖かとみれば花すいき身の秋風になひくなりけり
おなしころさまうらみつかはしけれとなほさりなる
返事はかりしてはへりければ

同上

しら露に色かはり行秋はきは玉まく葛のかひなかりけり
みかとひさしうとはせ給はさりけるによませ給ひける

一本物語

うたのきさいのみや

秋のよの草葉におきてあかせともつゆ哀とてとふ人もなし
秋のころ山さとなりける女のもとにまかりてたにかへ
りてよめる

たゆみなきの中將

徒に秋の野山の露わけてさもほしわふる袖のうへかな
返事せぬ女に

なるとの中納言

玉札のあとみたれば初鵲の思ひつられてねのみそなく
かへし

大納言女

はつ鷹のうばの空なる玉つさはかきつらぬともあとやながらん
中宮いまた参り給はさりけるに聞えさせ給ひける

かやかしたれのさかの院御歌

大がたの秋のならひの風のおとをつれなき色に何かこつらん
いさゝか物申て侍ける女のあたりにつかはしける

はきにやとかる大將

もらさはや身にしむ秋の風の音に下はの露のたえて消ぬと
野分しける日女のもとにつかはしける

野分 百壽歌合十八番

夕きりの右大臣

風さわきむら雲まふゆふへにも忘るゝまなくわすられぬ君
風のあらうしき日女に袖をかはして

袖ぬらす大おほいもうち君

こからしの風もよそにそ聞わたるかはせる袖のひましなけれは
かへし

准

后

いつ迄かよそにも聞んともすれば身にしみぬへき山の嵐を
秋のころはなれて侍ける女につかはしける

拾 百壽歌合八十七番

とりかへはやの内大臣

戀わびてなかきよすかられさむればならはぬ秋の風をしる哉
かへし

權中納言女

君はさや思ひしるらん我はたいいつともわがすあきのこゝろば
八月十五夜中宮をはつかに見たてまつりて

いはてしのふの左衛門督

かけとめんものならなくに秋のよの雲まの月をなみにみつらん
おなしよの月のくもりて侍りけるにこそくまなかりしか
思ひ出らるゝ事はへりければ

雲あふ月の左大將

戀わふる涙や空にくもるらむみしよにも似ぬ秋の月かけ

たにしらす
御路下 百番歌合六十三番

しきたへの枕そうきてなかれぬるいもなきとこの秋の寝覺に

六條御息所むすめの齋宮にくしくてたらんとし侍けるに
なか月のはしめつかたたちよらせ給へるに明ゆく空のけ
しきこさならにつくりいてたらむやうなれば

賢人 百番歌合六十三番

曉のわれればいつも露けきをこほにしらぬ秋の空かな

御かへし

同上
大かたの秋の別も戀しきになくれなそへそ野へのまつむし
しのひたる所よりいてけるあかつきよみ侍ける

よその思ひの右大將

君故のつらきわかれはなれぬれと猶まとはるゝ秋の空かな
女のもとにまかりけるみちにきりのふもとをこめてたち
わたりければ

河霧の内大臣

川霧は行へきかたをへたつれと心のかよふ道はたとらず
いとしのひたる女のもとよりかへり侍けるみちに霧のた
ちこめたりけるに

うきなみの權中納言

けさのまの川せの霧のへたてたに立わかるゝはくるしき物を
思ふ事はへりて石山にまふてはへりけるに山のもみちの
いとおもしろきをみて

道心すゝむる右大臣

もみちはの色はものは涙のみかゝる袖こそさまさりけれ
志賀にまうてゝ紅葉の露にぬれたるをりて女につかは
しける

嵯峨院

我戀は秋のやまへにみちぬらし袖より外にぬるゝもみちは

たにしらす
若菜上 松百番歌合六十三番

身にかか秋やきぬらんみるまに青葉の山もうつるひにけり
みかといかへる山のとちきらせ給ひけるをおもひいて
きこえけるにやといきはに侍けるころはしらにかきつけ
ける

御路下 百番歌合六十三番

言の葉を猶やたのまんにしたかのとかへる山はもみちしぬ共

あすかるときはにわたり侍とてかはらしといひししは
しはまちみはやときはのもりに秋やみゆるとと申はへ
りけるをうせてのちきかせ給て

御路三上 百番歌合六十三番

秋の色はさもこそみえめたのめしをまたぬ命のつらくも有かな

よし野の院宇治入道關白のむすめ神無月によるゝへしと
てこゝろもとなくまたせ給ふ御けしきみえさせ給ければ

物語

風につれなきのさかの入道后宮

うつり行人の心の秋の色にしくれもまたすぬるゝ袖かな
たちはなの右大臣かれゝにかよひ侍けるもたえはてに
ければつかはしける

忠告

我宿にときゝ吹し秋かせもいとあらしとなるか佗しさ

女にたまはせける

秋ふかきなきの上吹風のおとのそよなそかゝる物思ふらん
たいしらす

君とはて幾よへぬらんあさち原はすゑの露の色かはる迄
道頼朝臣すゝきのかれたるをむすひてこれ見よとておこ
せて侍ければ

秋のよなかしとわふる弘徽殿左近

ほにいていばはとつらし花薄秋はてかたにかゝるけしきは
神無月のはしめつかた女につかはしける

あさくら山の中將

いつのまにけさは秋のしくらん朽にし袖もきのふかへしに
物思ひけるころしくるゝそらなみて

道心すゐる右大臣

かきくらす空の時雨はしくれば身よりあまれるよはの涙を
神無月はかり女のもとにまかりて人たかへしてかへる朝
にもとこゝろさし侍ける人につかはしける

さとのしるへの大將

それと見し雲まの月のさてもなとよその時雨にかきくらすらん
かへし

式部卿宮三君

しくれる雲まの月のよそながらたか憐れを思ひいつらむ
右大將夜かたしてかへりたるあしたしもかれゆくせんさ
いのけしきのあはれなるさまなときこえければ

いはてしのふの女四のみこ

契こし露のかことはかれはてゝな花か袖に霜むすへとや
皇后宮こゝろならすじさしうまゐり給はさりけるころ御
袖の水もいとけかたうあかしがぬさせ給て聞えさ給せ
ける

おなしさかの院の御歌

かたしきのさゆる霜よの衣手にかゝる涙のはとをみせはや
なとこのふかく出にけるあかつきななめて侍ける女
のもとにたちふりたるなものと人と思ひていかてかくた
ちかへるらんよなこめてあかしもはてすいづるみちより

拾 百番 中侍

みかはにさける前關白

えそゆかめまたしもふかき暗くれの別の道はたちかへりつゝ

なとこのこと人にきたまりにけるにつかはしける

かいはみの兵部卿のみこの女

みるまに野への淺ちもかれはてぬき身しもなと消殘るらん

みこにおはしましける時御心ならず夜をへたてさせ給ひ

ける女のもとにつかはさせ給ける

なみのしめゆふの御門の御歌

しらさきしつ心なく涙さわくみきはなしのうきぬせんとは

うちにひさしうさふらひてえまかてさりけるころ女一の

みこに聞え侍ける

右大將なかない

から衣たちならしてし百敷の袖氷つるこふひなになり

五せちの舞姫のすくれてみえけるにつかはしける

かはへきまひひめの藏人少將

いかにせんをとめのすかた戀しくは天つ空をやいといなかめん

かへし とはりあけの君

あまつ空をとめのすかたながむとも雲の袂はまたみえんかも

五せちのころ大納言典侍のさうしにたちふりて

みかきかはらの右大將

つれなくてさてやまあるの袖の色水れる上にむすほれつゝ

しのひたるなとこのしはすばかりにこと女にきたまるへ

しと聞てつかはしける 露のやとりの修理大夫女

ひまもりしことたにたえて忘水こほりとちめん程そ戀しき

雪ふかくふりつみたるころ山さにとすみける女のもと

にいとしのひてまかりてわけいりつる道の有さまなとか
にほふ兵部卿宮

浮舟
百部集卷三十二

みねの雪みきは氷ふみわけて君にそまとふ道はまとはす

なとこの雪のふる日出けるをかくるゝまで見おくりてよ
める

うきなみの藤中納言女

たのめなくほとをいつともしら雪のまたてけぬへきけふの暮哉
先帝宣耀殿女御いまた参りはへらさりけるころたまはせ
ける

女のすくせしらすの第二御門御歌

わりなしや山のしら雪ふりぬとてふかき思ひのきゆるものかは
女四のみこのときはにまかれりけるにはるくゝとみえわ
たれる池のおもてにふりいる雪はやかて氷にとちかさな
れるも思ひよそへられければ

みなせ川の新中納言

水のおもにかつ氷ゆくしら雪のいつまてとけぬ物を思はむ
雪のふりける夜こゝろにもあらず成にける女の
もとにあしたにつかはしける

源氏のひけくろの右大臣

楓柱 拾 百部集卷四十五
心さへ空にみたれし雪もよにひとりさえつるかたしきの袖

風葉和歌集卷第十八

雑一

木末にかはる女院はしめうちとけたてゐさまに御らむせ
られ給へりけるあしたむ月の朔日なりければ聞えさせ給
ける

はつれの高陽院の御歌

きのふ迄したはむせひし池水にけさは千とせのかけそのとき
御返しかはりてたてまつり侍ける

入道おほきおはいまうち君

池水ものとけき御代のしろしにや春たつけさはすみまざるらむ

紀伊國にはへりける春のほしめに驚のなくをきいて

あまのもしほひの大僧都

あらたまるけふもよそなる谷の戸になに驚の春をつくらむ
たいしらす

いちあひるひの大納言北方

数ならぬしつかかきれの梅かえに身をうくひすのれをのみそ鳴
内大臣かくれて後一條院の紅梅もときを忘すさきぬらん
と人のいふなきかせ給て

いはてしのふの女院

驚も春やむかしと忘るなよあれまくをしき花のふるさと

大將におはしましける時内大臣の入ける所をしのひてか
いはみ給けるにおとゝほとなく出にければ女になつかし
きさまにかたはせ給ひて

有明のわかれの女院

袖かけてをりもみてまし梅花人のしめゆふかさしならすは

やまひおもくなりける春申納言花のえなを折てかやう
なるこそふにてこいちもなくさみなんやとてみせ侍りけ
れは
かさねる夢の大將

あたなりとなけきし花のちらぬまにさきたちぬへき我を悲しき

こい例ならずおほえけるころ手習に

松

百景御合六十七番

これなみて
おほきおほいさうち君

風のおともこそにきかせて花さかりかくて千年の春をこそみめ

入道兵部卿のみこに藤の花をりてむかし此花にこそへ

られ侍けるをおほしといつかばさせ給ひける

露のやとりの一條院御歌

戀しさによそへてみれとなくさまでなるに物うきやとい藤涙

常葉院の御位のとさふちの花につけて心の松にかゝる藤

なみと聞えさせ給へる御かへし

夢ゆふもの思ふの中宮

数ならぬ身には雲あふ藤の花ころの松もいかしるへき

春のくれつかたこいちのたのもしけなくおほえければ

かすみへたつるの左大將

幾かへり春の別なをしみきてうき身をかき暮にあふらん

中宮御いろにてさとにおはしましけるにやふひのつこも

りに聞えさせ給ける
よその思ひの御門の御歌

霞ゆふいとふ日敷の袖の色に春なをしまぬ春も有けり

たいしらす

ひちぬいしまの關白

うちそへて我もこふにやたていまし山時鳥なきわたるなり

れさめの左大將

うき世には我すみ侘ね郭公しての山ちのしるへやはせぬ

五月の源大納言の女

しての山しるへとたのむ時鳥夜にまとひたるころの聞ゆる

一條院かくれさせ給て後花たちはなのかをれるほとには

といきすまかくこふすればよませ給ひける

とこなかの御門の御うた

むかしのみこふとしりてや郭公花たち花をとめて來つらむ

ちいみこのうせてのち五月にあやめふくをみて

あたりさらぬ式部卿宮の女

しのふ草茂りかはれる我やとになにのあやめをけふしらすらん

ひさしうせうそこもし侍らぬなとこになさき子ぶと有

ければなてしこの花をりてやるとて

源氏の夕かほの君

符木

山賤のかきほあるともなりしに哀はかけなてしこの露

にきいてつかはしける
藤のうらはの右衛門督

人しれす思ひこそやれなてしこのよそにしめゆふ花のすかたな

なてしこの大夫父の大將にしられはへらさりけるころた

たかくといひてんと内侍督にのたまはせてよませ給ける

なてしこの院の御歌

なてしこの思ひ出らん草むらに露かゝりともしらせてしかな

四季ものかたりの中に

いつみのひめ君

忍ばるゝ人はいつみにかけたえて拂ふにくさそかはりおにける
左のおほいまうち君子ともくしてつり殿にてすゝみ侍け
るにもるともならぬを聞え侍けるに

榮茂

枝ことにわかすや風の吹つらんこもれるねさへすゝしかりつる
かへし

同上

おく山にまつふるねを残しても岸になひくそかひなかりける
七月朔日頃なとこのたちよりてはへりけるに風のおとも
なかしう聞えければ

ひらぬ石まの中務卿宮女

すゝしさの常よりもけにしらるゝは我身に秋のきたる也けり
かへし

関

白

すゝしさばなへての風と聞ものなひにならひし秋のしるしそ
大將身まかりて後星合を見てなきためしにひきたてし
も思ひ出られければ

川霧の中宮新中納言

たなはたの行あひの空も別にし人にもかゝるちきりともかな
もの思ひみたれけるけしきをみて心ほそけにおもひたる
人に

清水にぬるゝ内大臣北方

なき原や末葉における露の身の風まつ程なたのまさらなん
内大臣の心いかなるさまにみえけるをりにか御手ならひ
にし給ひける

袖ぬらすの朱雀院女二宮

思ひわく心もなきをいかなればこの秋風のたゝに聞えぬ
うきふれの君にしひてあひすみ侍けるに中将あたし
の風になひくなくと云て入たりけるを返事そゝのかしかれ
て

小野のあま

手習

うつしうゑて思ひみたれぬをみなへしうき世をそむく草の庵に
前栽のなかにあさかほのほかなげなるをみて

しのふくさの関白

はかなさはいつれまされる朝かほの日影を待とかりのこのよな
かへし

中納言

あさかほは日影まつまもある物を猶うき世こそはかなかりけれ
人を行へしらすなしてなげき侍りけるころ尾花の風にな
ひくを見て

はま松の中納言

たつぬへきかたしなければふる郷の花か袖にまかせてそみる
うちの中君のもとにてあかつきちかくなるまで物かたり
しあかしてあしたにつかはしける

かなる大將

密集 拾百番歌合十番

徒にわけつる道の露しげみむかしおほゆる秋のそらかな
前関白女さまかへて侍りけるなまかりてうらみけるにむ

拾百番歌合七十一番

しのこゑあはれに聞えければ 袖ぬらす太政大臣
ふもすかと思ふ心をしりかほにとふらふむしのこゑそ悲しき

尙侍をみそめて又ともえまからさりける比むしのこゑみ
たれたるをきいても思ひやられ侍りければ

うつほの右大臣

後集一

風吹はこゑふりたつるむしのねに我もあれたる宿をこそ思へ
ふもとの大將

たいしらす

なくむしのもろともにこそたてねとも涙は袖にあまりぬる故
夕霧左大臣たちよりて侍けるな柏木の櫓大納言身にそへて
もてあそびはへりける宿をおくりものにしてはへりける

なふきならして侍りければ 一條院御息所
 露しけきむくらのやとに古への秋にかはらぬむしのこゑ哉

さうのことに秋風樂をひきて侍りけるを聞て女御のかた
 よりよそなる人の袖もぬれけりと申てはへりけるかへし

秋風のふくたくれのむしのねにしふることもいさなはれつゝ
 秋の夕は一本のさうのことをひき侍けるをきいてさしもあ

らぬたにすはたえぬものなるになとかとの關白の聞え侍
 ければ 我はつかしきの女院

またしらぬ松ふく風のこゑにさへ秋はうき身に先ぞ聞ゆる
 世をそむかんと思ひたちて秋にもなりぬるに夕の空をな
 かめて いはてしのふの右大將

山深く身をあき風にさそはれてさこそはなれぬ露も時雨も
 父御子かくれての又のとしの秋あねのもとに遣しける

うちの河浪の帥御子の三君
 常よりもむかし戀しき夕くれにことの外なる風のおとかな
 かへし 式部卿のみこの北方

あさ夕に風にみたるい下なきのおとろかすにも露そこほるゝ
 野分の後思ひまさるゝことありてよめる

みかきか原の右大將
 思ひ草さらても末の露の身をいかにつきつる秋のあらしそ

冷泉院のかしこまりゆるさせ給てのち女三宮もろともに
 秋の夕をなかくてよみはへりける

ねさめの右大將

なからふる命をなとていとひけんがゝる夕もあはれなりけり
 おほんくらゐおりさせ給ひなん事ちかくおほしめされけ
 る秋清涼殿に月を御らむせさせたまひて

あさちか露の常葉院御歌
 みるまゝにおもかはりすな秋の月雲ゐの外にかけはなるとも

八月十五夜つねよりもくまなきに式部卿みこのまをそむ
 きにけん行へおほつかなく思ひつゝけられて

くらゐの月の左大將
 世にすまはいつれの山のふもとにてこゝの月の影をみるらむ

かしは木の櫓大納言のすみはへりける所を物よりまうて
 けるついでにみいれければ月のみやり水のおもてをあら
 はにすましたりけるに 夕きりの左大將

夕きり
 みし人のかけすみはてぬ池水にひとりやとる秋のふの月
 をとこのもろともに月をみてよのほかなきさまなとかた
 らひけるに

あまのもしほひの中宮新寧相
 色かはる我身の秋はつられと月は今夜にかはるあはれな
 出家のいづ月をみて思ひつゝける

おなし大僧都

これのみやはらぬ友となかわれはあらぬ袂を月やたとらん
 もの思ひけるころあかつきちかくなるまで月をみあかし
 て

あひすみくるしき源大納言三君
 みるまゝににしかたふく月影をうき身の果とおもはましかは
 おなし女ともたちとかたはひて

かけとめてあるへくもなき世中にのとかにすめるよばの月かな

かへし

左 大 辨 女

すみのほる月の影たになかりせばうき世をいかて我すこさまし
女院ひさしくいらせ給はさりける比奉らせ給ひける

有明の別のみかとの御うた

まぢかぬる月の光のおそれれば雲ぬの庭の秋そかひなき
女二のみこ承香殿にすみ給ひけるに前栽のきくを折らせ
給ひて關白に御子のかけものに給はすとて

いちぬいはまの朱雀院御歌

わきてをる心もふかし九重にうつるひはてよしらくの花
中宮うちにおはしましけるころよみ侍ける

よその思ひの中宮宣旨

おのつからこといふなみも袖ぬれぬ世をうち山の秋のれ覺に
むずめのもとにときくおとつれけるなとこの秋はたの
めしたのみあればと申てはへりける返し

心やりの式部卿の宮の北方

ひたふるに音はせれとも小山田のたのみむなしくなさん物かは
かつらにおはしましけるに冷泉院より月のすむ河のをち
なる里なればと聞えさせ給へりける御かへし

六 條 院 御 歌

松風

久かたの光にちかき名のみしてあさ夕露もはれぬ山里

女の思ひにはへりけるころさかの院へまありけるに色つ
きわたれる木すゑをみて

一本

こけの衣の右大將

小倉山みねのもみちは色つきぬなげきのみこそ常盤也けれ
秋のなかはにあなはなからもみちのちるをみて

とりかへばやのみて物のひしり

秋はまたふかいられとも山ふしの涙にそふはこの葉なりけり
右少將なかりかしらおるしてみつのをに侍けるに紅葉
のころこれかれまかりて歌なみはへりけるに

うつほのときかけ

國歌

古へは君かころもにそめし色の今は山路にちりまかふかな

思ひのほかなることありて山のなかにおはしましけるに
鹿のなくをきかせ給ひて

一本

よし

野山の中宮

我はかりうきをおほえぬ鹿たにも山ひく運れをこそはなけ
たいしらす

まふ

琴の良の中納言

我ことや世をあきばていおく山につまこひわふるさなしかの聲

一本

民部卿のみやかくれてのちかの家のらになおしをりてよ

みはへりける

あたりさらぬの内大臣

ぬしなくてあるいまかきの藤はかまをるに露けき秋のくれ哉
長月のつこもりころ心ちわつらひてよく覺えけるによ

める

あまのもしほひの中宮新宰相

たか爲に秋のなこりをいしむらんけふをすくへき命ともなく

一本

しのひて御らんせられける女のゆくへしらせきこえさき

けるをうせぬときこしめしつけいる比しくるゝ空をな
めおはしまして

みか

きか原の御門の御歌

しくれ行空をかたみとみるよりはなと問し世をしらて過けん
右のおほいまうちきみすまひのかへりあるし侍りけると

き右大將なきた侍従にてことひきけるにうなしのさむ
けなるもかれはそかしとてあこめぬきてかつくとて

俊成

みな人をうつむもみちのかゝぬは風ふくまつと思ふなるへし

もの思ひけるころ風のあらゝかにもみちなふくを見出し
て
とこなかの右衛門督の中女

あかすみるもみちはよりもかくほかりうき身なさをへ木枯の風
むすめのことな思ひみたれけるころ

烟のしるへの兵部卿みこの北方

木のはさへおつる涙にまかふ哉心のうちにあらしやはふく
ものおほしめすころいろ／＼ちりかふ梢をみいたして

物語二上 百番歌合八十九番

ふきはらふふもの木枯心あらはうきよなかくすくまもあらせふ

な物語

たいしらす
浪のしめゆふの淑景舍女御

いかにして冬のよすからうちほらふをしの上毛の霜と消なん
水のきえゆくをよめる
我からのさぬきの守か女

朝日さすみきはの氷人ならば今まできえぬなけきせましや

初雪のあしたに大將にてつかへ給ひしよにつかうまつり
し隨身ともの思ひしなれてさふらふなはるかに御らむし
いたしてかやうなりしなり／＼はおほしいてられければ
有明のわかれの女院

我やそれみしよは夢にふりにけりたつれし物を野への初雪

關白三位の中將にはへりける時山にのほりけるかへるさ
に雪のふりければ立入て侍けるに

我身にたとるの中納言の北方

人とはぬいのかけちの雪のうちにならはぬ月の影をみる哉

かへし

あかなくにいてそやられぬ古へのなこりとまれる庭の月かけ

うちにこもりゐて侍りけるころ豊のあかりほけふそかし
と思ひやりてよめる
かなる 大將

體常

かきくらしひかけもみえぬおく山に心をくらすころにも有哉
父かしらおろしてゆくへしられはへらさりけるに雪のふ
る日山ふしはかゝる折こそれなくなれと人のいふを聞て

拾 百番歌合五十二番

行わかれいつれの山に跡たえておつる涙のいろかはるらむ

雪のふりつもれるにちの世をそむきにけるすまひを思
ひやりてよめる
われからのさぬきの守か女

年ふかきまきの山人いかにかり雪うつもれて思ひきゆらん
中將出家して後思ひかけすみあひて侍けるに雪の中にま
た出けるをかくるゝまでみおくりて

とりかへはやの前關白四君

なちこちのしらぬ山路にあくかれてかゝる雪まをいかで分らん
心ち例ならず侍けるにみかとゆく末とほくちさらせ給ひ
けるに
女すゝみの登花殿女御

この世をは今いくかともしら雪の消なん後の身をたのめとや
右大將みなせにこもりゐて侍けるか雪のふる日きえはて
ぬへき雪の中哉と申つかはしたりければ

永無瀬川の前關白太政大臣北方

さらてたによふ心の雪の中は思ひやるさへ消そしぬへき
はゝのおもひにおほしましげるとしのくれに雪のふりか

さなりてきたるへくもなきを御らんして

さころもの中宮

和語四中
ことわりのととのくれとはみえながらつもるに消ぬ雪も有けり

風葉和歌集卷第十九

雑二

もろこしのしやう山にて華陽公主琴をしらへ侍て又のよ
もとたのめ侍ければ山のかげにやとりてよめる

物語上

松浦の宮の参議氏忠

大空の月にたのめしくれまつと山のしづくに袖はぬれつゝ
もろこしよりかへりわたらんとしける比一の大匠のもと
にたちよりてはへりけるに夜ふかき月にむすめとも琵琶
さうのことなとひきあはせて遊びけるに

物語一拾百番歌合廿八番別言

はよいつの中納言

ひのものと山よりいでん月みてまつそ今夜は戀しかるへき

同上 同歌合廿八番

かへしひばにひきはへりける 一の大匠五君

かたみとてくるゝ夜毎に詠めてもなくさまめやはなかなる月

中納言もろこしよりかへりてまゐれるに月いとおもしろ
かりければ御あそびありけるついでにの給はせける

物語二同歌合三十番

おなしみかとの御歌

わかれては雲ぬの月もくもりつゝかばかりする影もみさりき

同上

御かへし

古郷のかたみそかしたあまの原ふりさけ月をみしそかなしき
世なはいかりて水無瀬といふ處にこもり給てはへりける
ころ月をみて 水無瀬川の左大將

さとかすみしにかはらぬ月のみや馴し雲ゐのかたみなるらん

うちよりまかてさせ給ひけるにみかと身をわくるものなら

ませはと聞えさせ給ければ 花さかりの中宮

諸ともになかむるやとはかはるとも同じ雲ゐの月をこそみめ

二位中將にはへりける比ふちつほに立よりて女房に物が

たりけるに月くまなくさしいてゐるゝかほなれば

數ならぬ秋も露のふかきには雲ゐの月のかげやとしけり

かへし ぶみんしらす

大空の月のひかりをやとしてもかこちかほなる露とこそきけ

人のもとにふくるまて法文なと申てたちいてはへりけ

るに月のあかりりければ ぶたよのもののひしり

今はまたこと葉のこりていてさらば更てさえたる月をみましや

とくちすさめけるをさいて 不斷念佛のあま

残らんそのことのほの末きかはこよひばかりの月はみすとも

にはふ兵部卿のみこむすめにたのめて侍けるに十六日の

月やうゝさしあかるまてこゝろもとなく侍ければつか

はしける 夕きりの左大將

大空の月たにやとる我やとにまつよひ過てみえぬ君かな

なにとなくみなればへりける女をゆくへしらすなして侍

ける所にて月をみて はまゝつの中納言

思ひいつる人しもあらし古郷に心をやりてすめる月かな

世をいとほしくおほしめしける比入かたの月のくまなく

さし入たるを御らんして さころのみかとの御歌

物語三下 百番歌合七十五番

まてしはし山のはめくる月たにもうき世に獨といめさらなん

ふをそむかんとて中宮にかきおきて聞え侍りける

としかへはやの中將

戀しくはうき世の中にすみわひて人山のはに月をなかめふ

かしらおろさんとして出けるにほしらにかきつけける

あつめのものゝふ

かきりそと思ひ入ぬる山ちにも月やかはらぬ友となるへき

關白いまたわかく侍けるころうちふして物かたりしはへ

りてあやしくおそく出ける月かなと申ければ

みるまに月もうき世にすみ侘て山より山にいりやしにけむ

世になきさまに聞えてのち右大將北山にこもれりとつた

へきいて月のあかりりける夜なかむらんおもかけもみる

こゝちして思ひやられければ ねさめの廣澤の准后

拾 百番歌合八番

しらさりし山への月をひとりみて世になき身とや思ひいつらむ

たいしらす

ありしにもあらすうき世にすむ月の影こそみしに變らさりけれ

しふへきゆかりならぬと月みれば過ぬることぞわすれ侘ぬる

廣澤のかたにまかりて月をみて 末葉の露の關白母

野しまの三位中將

すみ馴しむかしの人のおもかけを月にそみするひる澤の池

うき舟の君くしてうちにまかれりけるに辨の尼むかしお

ほえてすめる月哉といひて侍ければ

東屋 松 百番聯合八十七番

薰 大 將

さとの名もむかしなからにみし人のおもかはりせるねやの月影
しのひてうちにすみ給ひけるころ月いとあかう水のおも
てもすみわたれるにいととおほしいつることおほくて

物語三

今とりかははやの中將

思ひきや身をうち河にすみ月のあるかなさかの影をみんとは
大將弘徽殿のかたさまを過はへりけるに

ふみ人しらす

なしめとしはしとまらぬ月影をなにし袖にやとし初けむ
大將にてつかへ給けるころ承香殿の前をすき給ふに時々
もの申ける戸口をささりけるにかやうのましらひも今
いくほとかとおほしめされて 有明の別の女院
忘るなよ夜なくみつる月の影めぐりあふへき行へなりとも

皇座 給

六 條 院 御 歌

すまにうつるばせ給はんとて故院の御はかにまうて給へ
るに月も雲かくれてもりのこたちこふかくかへり出んか
たなくおほされて
なき影もいかにみるらんよそへつゝなかわる月も雲かくれつゝ
こゝろならず山さとはにへりけるころ月をみて

川霧の中宮の新宰相

思ひかねなむる空もかきくらし涙にくもるよはの月かけ

小野にすみけるころ月のあかきよなかくて

手習 百番聯合三十四番

うきふねのきみ

我がくつてうき世の中にめくるとも誰かはしらん月のみやこに
もの思ひけるころことにひきける

ことうらの烟の中納言更衣

あまをとめ月の都にさそはん跡といめしと思ふこの世を
一のみやを坊にたて奉らんとおほしめされけるを一條院
の三のみにこのたびは猶ゆつり奉らせ給ふへきよし
の院より念比にきこえさせ給ければさるへきになりて

あたりさらぬ冷泉院御歌

ゆく月の光を君にゆつりてん我も心のやみにまとへと
一の御子内に入給へるなこりあかつきまでなかくてよみ
はへりける
雲あにもなげく心やかふらん有明の空にまよふたましひ
法師にならんとていてけるあかつきむすめのかたにまか
れるに月かけいとをかしけなるをみて

濱にしめゆふの淑景舍女御

あさくらの前三河守

つきもせぬ心のやみにくるい哉さやけき月のかけみえぬまで
又のとしそのよにめくりあひてさやけき月といひしも

松 百番聯合五十一番

おなし皇太后宮大納言

思ひ出られければ
今こゝんといひてわかれし君により有明の月を幾よみつらん
よし野の宮に参りていてける曉よみ侍ける

風につれなきの左大將

人ばよな心にもあらず出にきと月にはかたれあかつきの空

たいしらす

しのふの源大納言

在明の残れる月のかけよりも我世にすまん程そはかなき
法輪にまうてい出けるあかつきよめる

をたえのぬまの春宮大夫

有明の月に心はすみぬるをなにとうき世にかへるなるらん
世をそむかんと思ひたちけるころ中宮中納言のつほれに
たちよりてうらむることゝも侍りて

いはてしのふの左衛門督

みるたひにうしとないびそいつ迄か同し雲ゐにあり明の月
中納言むすめないたきていて入はへりけるをみてうちに
まゐりあひ侍てたうかみになとこの女をいたきて妻戸
に入かたをかきてみせ侍とて 式部親宮の四位少將
身にそひてふたりあり明の月の影入あまの戸をみきとしらすや
かへし

我からの兵衛佐

月かけは入あまの戸もなかりしなを誰かみたるなるらん
たいしらす
ふくかたの風にしたかふうき雲は心に身をそまかせさりける
冷泉院をいてたまひてのち院そひたてまつりて大うち山
にものし給ひけるころ

寢覺の女三のみこ

しら雲のまたしらすりしおく山にかゝるへき世と思ひかけきや
心ち例ならすはへりけるに御門にきこえたてまつり侍り
る

女すゝみの登花殿女御

忘れすは夕の雲によそへてもむなしき空をそれとなかめふ
山さよりいてけるに入道のみこのすみ侍りけるたうの
すゑよりはるかにほそきけふりのたちいつるをみやりて

ふもとの后宮母

君かすむ宿のけふりをそれとみて立はなれ行ことそ悲しき
さかのおくに兵部卿のみやおこなふときこゆる所にけふ

りのわつかにたつをみて けふりのしるへの中將
かわたせはけふりたな引出さと思ひこもれる人やすむらむ
高麗といふくにいはなちつかはされけるみちにてあまの
しほやくけふりのたなひくをみて

夢かたりの宰相中將

神もきけもしほの烟こかれてもとかむばかりの思ひありきや
一條院内大臣もの思ひけるときあめのふる日つかはしけ
る

いはてしのふの關白

わきて思ふことしなけれと夕くれの雨にも袖のしをれやせぬ
しのひて女のもとにまかれりけるなとかくいひてうちに
もいればへらさりけるほとに雨やふりきて空いとくら
きにすこのはしつかたにあて かなる 大將
東屋 百番歌合七十七番
さしとむるむくらや茂きあつまのあまり程ふるあまぞき哉

北山におはしましたりけるにあかつきかたにせんほうの
こゑ山おろしにつきてたきのおとにびきあひたるに

六條院御歌

若軍 百番歌合七十番
吹まふふ山おろしに夢さめて涙もよほすたきのおとかな
左大將よしののみやにまゐりてあらしのおとを聞ならば
す心ほそけにおほえて侍ければ

君はしらしかゝる嵐のみねふかくこのはの末に夢はたえつゝ
かへし 風につれなきの按察大納言

こよひきてよしのゝあらし身にしみて又なく物を悲しかりける
御出家おほしめしたいせ給けるころ宇治入道關白のもと

にてみれのまつかせなき給て

おなしよし野の院御歌

山ふかくやかてなるへき松の風いたくなふきをまなく身にしむ

左大將大内山にはへりけるころ松のうれふく風のおとの

み耳とまりて

みつからくゆるい尙侍

また人のしらぬ山への松がせはこといふさへそ身にはしみける

かつらなるところにはへりけるに松風のおそろしう聞え

ければ

ひちの石まの中務卿御手女

ふをならへきしもならはぬおく山のみれの風にれをそたくふる

をしほといふところにすみ侍けるころ

なるとの中務卿の女

心して物思ふ人にかきせなんをしほの山のみれのまつ風

右大將にてつかへ給ひけるころにこもりぬさせ給はん事

ちかくなりてよし野の宮におはしまして御子のむすめに

のたまはせける

今とりかへはやの中宮

またもきてうき身かくさんよしの山みれの松風ふきな忘れそ

しのひたるなとこのいかなることを申けるなりにかみ

侍ける

れさめの老園白の中君

草のはにかゝるもつらき露の身のきえて悲しき風のおと哉

右大將冷泉院にかしこまること侍ていてけるにわするな

と申ければ

同女三の御子の中納言

あらし吹あさちか末の白露のきえかへりてもいつか忘れん

かへし

同 聯合十四番
ふきばらふあらしにわひて淺ちふの露残らしと君につたへふ

たいしらす

夢にまよふ大納言女

よしやたい幾よもあらしさいのはにおく白露にたくふ身なれば

六條院すまにおはしましてけるころきこえさせ給ひける

花ちるさとの君

通巻

あれまざる軒のしのふをながめつゝ茂くも露のかゝる袖をな

世をそむきてよし野山に侍ける人の今すこしふかき山に

入ふしきこえてはへりける御かへりことに

よし野山の中宮

尋らん草の庵にさそはなんおき所なき露のわか身を

たのみたりける人をゆくへなきさまに人のもてなしばへ

りけるにともなひてよめる

ふなうち川のあはち

露の身をよもの風のさそひきていつれのいへにおかむとすらん

やまひにてわつらひけるかおこたりて女に遣はしける

かくれみのい左大將

きえぬへきみたれし露の下草をしたに哀と思ひおきや

たいしらす

はまゆふの宰相女

奥竹のいことに露を袖のうへにおきふしものをおもふころ哉

琴をひきはへりけるにいなつましきりにして雲のたいす

まひたいならさりければ

松浦宮の華陽公主

物語上

いなつまのさやかにてらす雲の上に我思ふことは空にみゆらし

院の御賀に春宮の御笛の青雲ぬにすみのほりておもしろ

きに雲のけしきはり月の光まさりて樂のこゑおなしし

らへにふきあはせたるに女院御ひはなひきすまさせ給へ

るに花の女七人雲のかげはしよりおりて一返まひたるに

春宮「なとめこか花の一えたとゝめおけ末の世まてのか
たみにもせん」とふかせ給へるにえたとゝめにや花のかつ
ら一ふさなりて女院の御袖のうへに奉るとて

有明の別のあまなとめ

この世にはいかゝとゝめん君とわれむかし手折し花の一えた

御かへし

女 院

花のかは忘れぬ袖にとゝめおけなれし雲るにだちかへるまで

一條院にて女院内大臣ことひきあはせてあそび給ひける
に笛ふきなとして月に入なんとしければ

いはてしのふの關白

音にかよふ秋のしらへの松の風月なも空にふきやとゝめむ

八月十五夜としをならへて夢のうちに天人のひばなしら

物語一拾百部合二番
へけること思ひいてられて ねさめのじろさばの准后

あまの原雲のかよひちとちてけり月の都の人ととひこす

世をそむかんとて内をまかてけるに御門御ひはのね左衛

門陣まで聞え侍ければ右衛門督参りけるにことつて

露のやとりの入道兵部卿宮

同歌合九十一番
雲のうへを思ひはなれていつれとも心そとよるなかはなる月

左大臣春日にまうてゝはへりけるに藤つぼの女御ことひ

きけるなまうてあひてきゝはへりけるな下人のとかめは

へりければよめる

梅花
めつらしく風のしらふることのねをさく山人は神ととかめし

思ひなけく事はへりけるころひばをひきさして

わたらぬなかの大納言

思ふ事なくさみはせていとしくなけき加はるれにこそ有けれ
世をはなれむと思ひたちけるころ筆をかきならして

おやこの中宮母

今はとてかきなす筆のはてのをに心ほそくも成まざるかな

おもひのほかなる身のふるまひなものとすかたにあらた

めはへらむとて出けるにとしころもてならしける笛をふ

拾百部合八十六番
きたてゝ

しこのふへきふしもあらしな笛竹の此よをかきける音はつくすとも

左大將御あそひに笛つかうまつりて侍けるあしたに給は

せける

霞へたつるの御門の御歌

たくひなく心にすみし笛のねは月の都もひとつなるらん

御かへし

笛の音は月の都にとほけれと清き心は空にすみけん

なさなきうまこに笛ふかせなとして遊びける夜よめる

おのれけふたきなにはのみこ

末とほくまた音こもれる笛竹の更行よはのをしくも有哉

夕霧の左大臣かしは木の櫛大納言の笛をつたへてはへり

梅竹百部合六十四番
ける夜夢にかの大納言思ふかたことなりしよし申て

笛竹にふきよる風のことならば末のよ長きれにつたへなん

風葉和歌集卷第二十

雜三

仁和の御時せり河行幸のゑを御らんして左のおほいまう
ち君に給はせける 女のすくせしらすの第三御門御歌

せり川のたえぬなかれになくたつに古き跡をも尋てしかな

御かへし 左 大 臣

せり川の古きなかれを尋てもちとせの後は君そつくへき

入道前關白太政大臣のさかの家に行啓ありてかへらせ給

ふとてよませ給ける

有明別の東宮

大の川あせきの浪よなれもきけわれ世にすまは又かへりこん

冷泉院に行幸ありける時もとの中將にて青海波まひてお

なしく正三位ゆるされて侍りけるに殿の中將すいみて中

納言になりにつければいひつかはしける

二子の中納言

もろともにのほりし物を位山なと此たひはさはさりけん

かへし中納言にかはりて 關 白

諸ともに立のほるへき位山まつききたちて道しるへせん

右大將なかつの京極の家に從ゆき有けるむかし御らむ

せられけるさくらの木のらうのうへにさしおほひていか

めしうなりにければよませ給ける

うつほのさかの院御歌

樹上

春きては我袖かけしさくら花今はこたかきかけとみる哉

おなしみゆきにつかうまつりて子目に引うゑし岩根の松

も木たかくなりにければ 宮内卿かれみ

同上

引うゑし子の日の松は老にけり千世のすゑにもあひみつる哉

此歌をさかの院いみしうあはれからせ給てこの御返事

には民部卿になさるへしとなんおほせ給はせける

左大臣なにはにはらへしに出侍けるにもなひて松はら

樹夏

にしほのみちけるなよめる おなし藤宰相

深みとりみちひてそむる浦の松いづれのしほに色まさるらん

いそのかみの中納言つはくらめの子やすかひとり侍らて

かきりになりぬときいてとふらひにつかはすとて

物語

年をへてなみたちよらん住のえのまつかひなしと聞はまことか

このひてすみよしに侍けるころまつかせをきいて

物語

尋ぬへき人もなきさの住の江にたれまつ風のたえすふくらん

關白北方しのひてあていてはへりける舟のうちにてよめ

同上

住よし關白北方

る おなしあま

住よしの蟹となりてはすきしかとかはかり袖をぬらしやばせし

ふきあけに人々まうてきてあそびはへりけるに大なる釣

舟にあまのたくなはなくりおきたるを見て右少將なかな

りかこゝろさしよりはみしかいらむかしといひければ

うつほの中納言すいし

吹上

吹上

くる人の心のうちはしられともたのまるい哉あまのたくなは

おなしたひ人々かへりなんとし侍けるにぬさてうしてお
くり侍とて宰相中將ゆきまきにこかれのいさこ入たるに

紀伊守たね松か女

同上

君か爲思ふ心はありそ海のはまのまさきにおとらさりけり

心にもあらす土佐のむろといふ處にすみける頃よめる

すまひのすりの亮

世中にいきたるかひもひろはぬにあらいそ浪に袖のぬるらん

かへし 内記のひしり

荒磯をみつゝくさは自からいけるかひにもあらさらめやは

しのひたる女のさまかへてけるをきいてまかれりけるに

あひはへらさりければかへりてあしたに

みふねの大おほいまうち君

岸かくよりにし浪のかひなくて立かへる袖のくちめとをしれ

人々つとひはへりて見合しはへりけるところにまけなん

すとなさなきものゝ歎きけるにたれともなくていひける

かひあはせの藏人少將

堤中納言

かひなしとなになけくらん白浪も君かゝたにはこゝろよせてん

和歌のうらの歌合よしあしさとむへきよし申侍けるを狂

言綺語のあやまちひるかへしかたなくやといひ侍て

西の海のおまかひ

みつはさす沙干にあさるあまかひは思ひもよらすわかのうら浪

まのうらにこもりてはへりけるころ登花殿の女御草子か

きてと申て侍けるに 女すゝみの左大臣

あくかゝいみるめなきさの濱千鳥跡かきとめんかたも覺えず

やまふきといふわたりにうつろひけるに海のおもて心ほ
そくちひさき舟とものみえければ

かはほりの中務卿宮女

あるかひもなきさによるる浮舟の下にこかるゝ身をいかにせん

關白入道太政大臣のあれむすめにすみわたるけるにその

おとゝなばやう見はへりけるをたれともしめてゆくへき

物部一松百重金五番

いさめめ女院新少將

いみしきさまにてあまのいはやに侍けるころあまのひき

しくみえさりけるにちひさき舟をかれにあらんとみやり

て いはやの内大臣北方

なみまわけうきしつみくるあま舟を待こそわたれ袖はぬれつゝ

なにはわたりにて見あひける人の宿をとひはへりければ

ふめろ 新古今下 關白女

白浪のよするなきさに世をへつゝあまのこなれば宿も定めす

あま人のむすめ 新古今下 關白女

むすめの女御左大將に名たちてさまかへて侍りけるに前

代かくれさせ給て後登花殿女御にすみわたるときいて大

將のもとにつかはしける 女すゝみの内大臣

しほたるゝあまの袖のみ枋果ていかなるうらにみるめおふらん

わかのうらにすみ侍りけるかみやこへ出とて

まよふ琴の浪の先帝姫宮

磯菜つむあまのみるめにしほなれていかてか浪の立はなるへき

いせより昇り給て後手習に かくれみのゝ前齋宮

かくてふるかひこそなけれすゝか川八十瀬の浪の何かへりけむ

中納言のもとにあかつきたちよりてはへりけるにいみしくたふとく経をよみすましてゐあかしけるにやとみえければよめる

はまゝつの宰相中將

ひとりしもあかさしと思ふとこの浦に思ひもかけぬ涙のおと哉ゆくへしらればへらさりけるなとこにいしやまにこもりあひて侍けるを後にきいてそのなり哀とは思ひけんやと申ければ

あさくらの皇太后宮大納言

吹よりしまかのうら風いかはかり我身にしみし物とかはしる住よしへまうてける舟のうちにて

かいはみの大將

さらぬたにうき世と思ふにいとしくしらせかほなる跡の白涙心ちれいならず侍けるに讀る

時雨源大納言のむすめ

きえぬれば又うちいつる水の沫やあるかなきかの我身なるらんけふりにむせふの姫宮新宰相せきやらぬ涙の川にうくあわのとまらずきえん程のかなしさたいしらす

我からのさぬきの守か女

なかるればかす／＼きゆる水のおわを物思ふ人の命ともかな宇治にても思ひみたれけるころ

うきふねの君

^{浮舟} 里の名を我身にしれば山城のうちのわたりそいとすみうき

うき涙の院の女御

たちかへり又やわたらんすみなれし身をうち川の夢のうきはしはつせにまうつとていつみ河のほとりにやすめてよみ待ける

わたらぬ中の関白北方

ひたふるに流れもやらぬいつみ河みくつにかゝるあわそ怪しきうきことゝもありて父の大納言のもとをしのひていつとてかきつけいる

住吉関白北方

我身こそなかれもゆかめ水くきの跡はとゝめんかたみともみよたいしらす

^{王習} 身ななけし涙の川のはやきせをしからみかけて誰かといめし

小野のあまはつせへいさなひにはへりけるにこしかたのことゝも思ひつゝけられて手ならひ

^{同上} はかなくて世にふる河のうきせには尋もゆかし二もとの杉

しのひて物へまかりけるみちにかれ／＼に成にけるなとこのもとにはへりけるものにあひてことつけいる

時雨源大納言の女

尋ねへきみわの山へは遠くともわれすきかてにことやつてまし父御子たいこにこもりおこなひ侍るころうちよりいてけるみちにてかれこそたいこの南の山なといひあへるをききて

うき涙の院の女御

いつかたとしらぬもかなし聞もうし思ひ入けん山のゆくへをせちに思ひける女にこゝろにもあらずへたゝりにければ世をそむかんとていさいかたちよりて

しのひねの中將

行末を何契けんおもひいる山ちに雲のかゝりける世をほいとけてのちおなし人のもとにさしおかせける哀とも思ひおこせよしら雲のたなひく山に跡たえぬ共山さにとまかりけるときかせ給ける女に給はせける

物語拾百番歌合十九番

何事なにかにうらみてしら雲のやへたつ山に思ひ入けむ

はやうすみけるなとこの世をそむかんとて出にけるなき

きていひつかはしける

わたらぬなかの關白北方

契りこしよし野の山を忘れすはひとり君がいらしと思ふ

かへし

大納言

おくれしと契しことのかはらずは山ちにひとりまとはさまし

法皇よし野にすみ給ひけるに御子と申ける時たつれおは

しましてのちに聞えさせ給けるよし野院御歌

ひまもなく心にかゝるよし山されはそ人もおもひ入けん

院吉野山にこもらせ給て後いつかたにかとおほされて

風につれなきさかの入道姫宮

君がすむそなたの空を詠れば雲も幾へのみよしの一峰の岩のかけ道

左大將かの御山にたつれ参りて侍けるにの給はせける

同しよしの山の院御うた

おなしよの心なからやすみなるよしの一峰の岩のかけ道

中納言よし野の山の雪のふかさを申てはへりけるかへし

はま松の帥宮中宮

物語四

ふるまいにかなしきさまさるよし山うき世厭ふと誰尋ねけん

蜀山といふ處にこもりおはしけるこる日本の中納言たつ

同一拾百番歌合廿四番

ねまゐりけるに

おなし河陽縣后

世のうさにしなれて入しおく山に何とて人のたつれきつらん

ふかにまうていつれなき女のもとにつかはしける

うつほの中納言實忠

藤原

うきことを思ひ入とはなけれどと深き山へいくらみつらむ

世なのかれんとおもひける道にてよめる

よしの山の中將

ひたふるに思ひ入ぬる山道にさきたつものは涙なりけり

雲の月の左大將

さきにたつ袖の涙やひとり行しらぬ山路の道芝の露

なとこのかれ／＼にみえければたふのみのふもとにわ

たるとてふるさとかきつけいる

扇なかしの源中納言女

思ひあまり深き山へに入ぬともありやなしと誰かとふへき

大將心かはれるさまにはへりければほかにうつるひ給に

懸樋の水の水とちたりければむくらのやとの女院

住わひてやとのあるしもあくかれぬかけひの水も絶さめやは

母にくして父おといのものをいつとてひはたいろのかみ

にかきてはしらの日われたるにおし入侍ける

後住

源氏の紅梅右大臣北方

今はとてやとかれぬともなれきつるまきの柱は我を忘るな

ときはにはへりけるこるこち例ならさりけるに常にあ

たりける所のはしらにかきつけいる

あすかゐ

物語三下

百番歌合七十七番

なほたのも常盤のもりのまき柱忘れなはてそ朽はしぬとも

しはしすみ侍りける處のありうきことありてほかにわた

るとてあさ夕むかひたる戸にあしてにてかきつけいる

ふもとの后宮母

明くれに馴つるまきのとはかりも世にありふへき心ちこそせれ
右のおほいまうち君一條の家にすませながらかれはて

にければつかはしける うつほの橘右大臣いもうと

藤原中

古へのわすれかたさにすみ馴しやとをばえこそはなれさりけれ

おなしさまにはへりけるころ右大將なかつたちよりて

せうとのなかより水のをにこもれることを申いて、「む

つましきうときといもをふりすてい山へにひとりいかて

同下

すむらん」と申ければ 同朱雀院女一宮按察

たのみしもみえしも更に忘れてひとりはさと住うかりけり

なとこの心かはりければ山さにとうつるひすみけるなそ

こともしらて物もうてのかへるさにたちいたりけるな

菅原

古郷のつらき昔をわするやとかへたるやとも袖はぬれけり

左大將の大内山にこれかれまかりてあそびていみしきあ

さほらけにたちかへらんかなうて

身つからくゆるの宰相中將

かへりてはいかなかめん山さにとさのみ哀をつくしはてい

山さとはへりけるかかへりてかしこなる女のもとにつ

かはしける か なる 大將

曉は袖のみぬれし山さにとにれさめいかにとおもひやる哉

一品内親王家三位

松かぜをおとなふものとたのみついね覺せられぬ曉そなき

小野にすみはへりけるころ別にけるなとこの夢にみえけ

れは 時雨の源大納言女

山さとのふかきね覺にいとしくみしよのことをみつる夢かな

思ひのほかにしはしそひたる人にわかつてよめる

幾よかはこけのむしろにね覺して君を戀しと思ひあかさん

山寺にこもりて女のもとにつかはしける

あさちか露のひしりか母

君やさはうき世そむかん心みにいてつる道のほたしなるへき

世をのかればへらむとて中宮にたよりあらはみせてま

つれとてかきおき侍ける うつせみしらぬの宰相中將

君をのみつらきながらもほたしにて今そふみいる岩のかけみち

これを御らむして

今はとて入けん道のかけちにも心ひとつやおくれさるらん

たいしらす

中 宮

世の中にふればうさのみまさりけりいづれの谷に我身すていん

朱雀院よりおなし處を君もたつれよと聞えさせ給へるか

へし

源氏二品内親王

醍醐

うき世にはあらぬ所のゆかしくてそむく山ちに思こそいれ

醍醐

宇治八宮につかはさせ給ひける おなし冷泉院御歌

醍醐

世をいとふ心は山にかよへともやへたつ雲をきみやへたつる

醍醐

御かへし

同上

あたたえて心すむとはなけれども世をうち山にやとなこそかれ

さま／＼物を思ひみたれけるころとのなくなきいて

醍醐

うちのあれきみ

鳥のれも聞えぬ山と思ひしを世のうきことはたつれきにけり

ゆくへしられはへらしとて山さとはへりけるをきいつ
けたりける人のかへりことに

なるとの中務卿のみこの母

谷ふかみ思ひ入にし道なれとうき身はそれがかくれさりけり
入道關白宇治にて千部經供養し侍けるときよし野の宮よ
りいておはしましてよませ給ける

風につれなきよしの院御歌

さきたちてすみならしける山水をそむくうき世と誰うらみけん
御かへし

宇治入道關白太政大臣

老か世のうきめをみつの山道に君おくれしとおもひかけきや
七そちのよはひをむすめの賀し侍けるととき中宮の行啓な
と侍けるによみ侍ける

れさめの入道太政大臣

今はとて戸ほそとちてし草の庵にさやけき空の光をそみる

新撰六帖題和歌目錄

第一帖

春立日	昵月	朔日	殘雪	子日
若菜	白馬	仲春	彌生	三日
春終	首夏	更衣	卯月	卯花
神祭	五月	五日	菖蒲草	六月
夏祓	夏終	秋立日	初秋	七夕
後朝	葉月	十五夜	駒牽	秋興
秋夕	長月	九日	秋終	初冬
神無月	冬夜	霜月	神樂	師馳
佛名	閏月	歲暮	曉	朝
晝	夕	宵	夜半	天原
照日	春月	夏月	秋月	冬月
雜月	三日月	夕月夜	弓張	望月
不知宵月	立待	居待	寢待	廿日月
晨明	夕闇	曉闇	星	春風
夏風	秋風	冬風	山下	嵐
雜風	雨	春雨	五月雨	夕立

第二帖

秋雨	冬雨	雲	村雨	時雨
霜	雪	露	霰	霞
霧	霰	水	氷室	火
煙	塵	雷	稻妻	蜻蛉
山	山鳥	猿	鹿	虎
熊	貽	山河	山田	山里
山井	山彦	巖	嶺	谷
杣	斧柄	炭竈	關	原
岡	森	社	道	使
驛	春田	夏田	秋田	冬田
荊庵	稻舂鳥	僧都	春野	夏野
秋野	冬野	雜野	獵	照射
鷺	大鷹	小鷹	雉	鳩
鶉	大鷹狩	小鷹狩	野望	行幸
都	都鳥	百敷	國	郡
里	故鄉	宿	寄生	垣生
家	隣	井	庭	鶏
籬	門	戸	簾	床
庭	翁	女	親	垂髮

芝	葵	眞薜	小萩	牽牛花	葎	垣衣草	根蓴	菰	菊	女郎花	爾許草	春草	糸	紫	簀	刀	琴	紐
蟲	三稜草	蘿	蕨	淺茅	玉葛	事無草	荇	花勝見	荳荳	薄	雜草	夏草	綿	梔	筐	鞘	笛	帶
蟬	蓬	山橘	惠具	茅花	葛	芹	萍	芦	荳	篠薄	欸冬	秋草	布	綠	裘	秤	弓	薰籠
夏蟲	苔	菅	百合草	紫陽草	五味	水葱	月草	菱	蓮	荻	瞿麥	冬草		錦	色	扇	矢	詞
蟋蟀	逸師	篠	藍	堇菜	青菜	蓼	萱草	蓴	杜若	蘭	秋萩	下草		綾	紅	笠	太刀	文

鵲	鳴	鴈	小那木	馬醉木	羊躑躅	椿	檜	李	熱橘	山櫻	紅梅	松	秋花	蜘蛛	松蟲
百舌鳥	鳥	歸鴈	鳥	賣子木	楸	柏	合歡木	唐桃胡桃	椎	庭櫻	柳	柏	紅葉	蝶	鈴蟲
水鷄	鷺	鶯	放鳥	讓葉	桑	朴柏	樗	杉	梨	朱櫻	櫻	竹	柞	木	寒蟬
	箱鳥	時鳥	鶺鴒	堅樞	令法	長目柏	樞	室木	山梨	藤	樺櫻	笋	檀	枝折	螢
	貌鳥	喚子鳥	鶴	津間々	檜	躑躅	釣樟	桂	桃	橘	花櫻	梅	楓	花	促織

作者次第

衣笠内大臣

家良公

紫

前藤大納言爲家

號中院入道

黃

九條三位入道

知家

赤

左京大夫行家

又云信實

青

右大辨入道

光俊

黒

已上五人各除我歌加點四首

新撰六帖題和歌第一帖

はるたつ日	むつき	ついたちの日
のこりの雪	ねのひ	わかな
あをむま	なかのはる	やよひ
三日	はるのはて	はしめの夏
ころもかへ	うつき	うのはな
神まつり	さつき	五日
あやめ草	みなつき	なこしのはらへ
夏のはて	秋たつ日	はつあき
たなはた	のちのあした	は月
十五夜	こまひき	あきのけう
あきの夕	なかつき	九日
秋のはて	はつふゆ	神無月
ふゆのよ	しもつき	神樂
しはす	佛名	うるう月
としのくれ	あかつき	あした
ひる	ゆうへ	よひ
夜半	あまのはら	てるひ

はるの月	なつの月	あきの月
ふゆの月	さうの月	三日月
夕つくよ	弓はり	もち月
いさよひの月 ^{イナシ}	たちまち	ゐまち
ねまち	はつかの月	あり明
ゆうやみ	あかつきやみ	ほし
春のかせ	なつの風	秋のかせ
ふゆの風	山おろし	あらし
さうの風	あめ	はるさめ
さみたれ	ゆふたち	秋のあめ
ふゆの雨	雲	むら雨
しくれ	しも	ゆき
つゆ	しつく	かすみ
きり	あられ	こほり
ひむろ	火	けふり
ちり	なるかみ	いなつま
かけろふ		

夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫			
はるたつ日	家は	良 ^{イナシ}	くればてゐ年の内に猶いそきける春はきにけり	冬かけて春たつ空の朝霞としをはさてもへたてさりけり	春や今朝いそき來つらむ雪のうちに年をこめても立霞哉 ^{イナシ}	今朝よりは春立ぬとや久かたの空さへさらに長閑かるらん ^{家(信實)}	くればてゐ年のをばりに春立てきためかれたる我よはひ哉 ^俊	さゝ波や大津の宮はあれぬれと春はふるさす立か ^{ヘイ}	あら玉の空めつらしき春といひてうゐにかそふる月もきにけり	深山たに霞たな引春めきぬいかに都の長閑かるらん	四の海浜しつかなる御代なればはらかのにえも今日そなふ也	春きても猶とけやらぬ岩むろの水のうへにつもる白雪 ^{み大雪イ}
むつき	光	行	知	爲	家	家	家	家	家	家	家	家
ついで	ついで	ついで	ついで	ついで	ついで	ついで	ついで	ついで	ついで	ついで	ついで	ついで

夫

風渡るやけ山はたの下崩もまたことゆかすきゆる白雪
山里は日影の雪の消やうてかきれの草の色そすくなき
やゝ見れば山の雪も下とけて友まちすきむ春のあは雪
さもこそは春しらぬ身と成はてめ仕山さへにまた雪のふ
れのひ

玉はいきとる手もゆらに契りをきて幾代子日の春にあひみん
むかしより松はひかるゝ子日にも君を千年のなめしなるへき
子日にも人にひかれぬ野邊の松今は老木の春やへぬらん
子日する松も千とせのたれなれば誰も心にまかせてそひく
こゝにありて祈る心やかよふらし子日する野に出る諸人
わかな

夫

しるしらす人こそかはれ春くれば野原のわかなつまぬ日そなき
里人も若菜つむらし朝日さすみかさのゝへは春めきにけり
君かため袖ふりはへて白妙の雪も消あへすわかなつむらん
山かつのそのゝ雪まのかき内に心せはくやわかなつむらん
我ためは雪間の野邊に出すとも垣れのわかなことたりぬへし

あなむま

夫

夫

庭の面の標とるほとに成にけりはや白馬も引渡さなん
呉竹の青葉の色の駒なへて代々のためしを雲ゐにそ引
霞しく春の色なる白馬をたな引わたすけふもきにけり
見渡せばみなあなをさきの毛つるめを引つゝけたる馬つかさかな
長閑なる御代のなかはしとりもあへす引つゝけても渡る白馬

なかのはる

風さむみまたきさらきの山の端にかすむとみえて雪のふりつゝ

夫

永日にまたるゝ花は咲やうて暮しかれたる衣更著の空
いなり山杉の青葉をかさしつゝ歸るはしるきけふのもろ人
なからふる身とやたのまん如月の春の日をくる心ならひに
二月やけふ初午のしるしとていなりの杉はもとつ葉もなし

やよひ

あつさ弓末のゝ草のいやおひに春さへふかくなりそしにける
春ふかきひとつみとりになりにつけり霞の下野邊の若草
淺見とり野邊の草木のめもはるに比は彌生の名こそしるけれ
今ははや春の日數やたけぬらんやよひの月ばはしめなれとも
山櫻なきかおほくも散花に春のやよひの日數をそしる

三日

夫

から人の河瀬になかす盃の岩間にさはる程の久しさ
唐人もけふを待らし桃の花かけ行水になかすさかつき
けふとてや花の紅色そへて水のなかれにめくるさかつき
三千とせの數にもめくれ春をへてたえぬ彌生の花の盃
桃の花さくや彌生のみかのほらこつの渡も今さかりなり
春のはて

夫

陸奥のあたちのまゆみそりたかみをしかへしてもなしき春かな
かきりそとおもひながらも今更になれてかなしき春のわかれち
おしからぬうき身のあまりなからへてはたや今年も春に別れん
みな人の心かはりの春のくれおしむわかれはとまりけもなし
おしむへき身のことよりははなき春のなをも心にかゝる暮哉

はしめの夏

散花をおしめしほとに郭公聲待ときにはや成にけり

いつのまに初音来なくと郭公今朝より夏の空に待らん
春の行山路に残る遅櫻獨やけふは根にかへるらむ
春にのみ心かたひく梓弓をしてや夏のけふはきつらん
むらさきの雲は夏をもむかへけり藤咲かゝる山かけの庵

ころもかへ

けふといへは大宮人のしらさね春の色こそ立かはりぬれ
たちかふるならひしなくはから衣夏きたりとは何にしらまし
はやくより花色衣たちかへて今日ともわかぬ墨染の袖
花の色をきならし衣けふはまたぬきかへかてら形見にそなく
たなやめのけふぬきかふる衣手のひとへこゝろは我身なりけり

卯月

谷川に波かけそふる卯の花の汝か名にたてる夏はきにけり
花散し楢のみとり隙たえて茂りはしむる夏のかけ哉
夏来てもしのひの岡の郭公猶木かくれに五月待なり
時しもあれ花にをくれて哀いま比な卯月の名にそあらはす
おしめともとまらぬ春のつらさにそやて卯月の名には立ける

うのはな

宿はあれて古き垣ほの卯花に我身五十年の雪積つゝ
夏来てはうのはな垣れ白たへの衣手かけて幾日はすらん
めになれてふりにし雪にまかひつゝ初うの花のそのかひそなき
春ならぬ花のあるしもありといはゝ卯木垣根を人はとひなん
我のみそ待へき時もなかりける哀あなうの花もさくめり

神まつり

神まつる櫛になひくゆふしてのなとも涼しき森の下風

かみまつるうつきになればゆふかけてみむるの櫛なへてさす也
かみまつる卯月の花の白妙にゆふとりしてゝ山かつらせり
千早振卯月のみしめあらためてきれか諸こゑはやうたふ也
今日こそは葉ひるかしはにゆふかけてこの森にます神まつる也

さつき

いかなりし契りなればか郭公さ月をおのかときとなくらん
聞人に初音忍ひし時鳥をのかさつきは里なれにけり
時しあれば田子のかけなは永日も猶いとなくや早苗とらん
行ききの道もおほえぬ五月やみ位のやまに身はまよひつゝ
郭公何のおもひの行ふとてはれぬ五月の空に鳴らん

五日

梓弓まゆみはけふそまてつかひあやめの根さへ引そへてける
けふかくるたもとの花の色々に五月の玉もひかりそへつゝ
とし毎の五月の玉の緒たえていつかと待し今日もきにけり
けふ毎にいやときはなる櫛なとしの緒なかく玉にぬきつゝ
枕にはあやめもしかて明にけり身はならはしの苔の床かな

あやめ草

いかにせん今は六日のあやめ草ひく人もなき我身成けり
いつとても身のみうきぬの菖蒲草逢ことしらぬれこそつらけれ
有漏の身のかりのあやめの草枕この世は旅の夢そかなしき
床の上にあやめのわか葉片敷てれなみせねばや夜半のみしき
引人もなくてやみにしみこもりのうさぎのあやめ何しけるらん

みなつき

茂り行しはせの山のくまついらくるゝもななき水無月の空

えそゆかぬ風もかよはぬ玉銚の道のなかくての夏の目くらし
夏かりのおふの下草顯れて我獨ともしけるころかな
水無月のてる日のつちのわれのみと蟻のかみちゆきちかふ也
みなつきは吹くる風もまれなれとしつけき戀は心すゝしも
なこしのほらへ

夫 里人のおなし御被の宿毎にけふはかはらぬ千世いのるなり
夫 いたつらにおふの麻の葉とりしてゝことしもたけぬみな月の空
夫 河の瀬にあらくは浪の音もせず風もなこしの夏はらへして
夏くるゝあきの大ぬき手にふれてなつともつきし今日の御被は
ふけるるか道のちまたに御被してぬききりすつる村の里人
更のはて

夏衣一重なからにうちもねはやかてやたゝむ秋のはつ風
風やとき衣やうすき夏秋のゆきあひの夜半の空そ涼しき
あしかきを吹こふ風よ身にそしむ秋のとなりはくるゝ方とて
今夜はやかたへ涼しきうたゝねはあくるもまたて秋たゝむとや
夏はつる秋たつ風の涼しきにねやの扇そまつなかけける
秋たつ日

さても猶秋くる今朝のいかなれば四方の草木の露けがるらん
水無月の空かたかけて秋立といふばかりにや風そ身にしむ
世を捨て戀にしほれぬ我袖の今朝より秋の露にぬれつゝ
あはれなと衣かへせぬならひにて今朝より秋の氣色寒しも
朝またき秋立ぬらし草の原常よりことになける白露

はつ秋

白妙の衣手涼しうちま山朝かせ吹てあきはきにけり

ならひそと思ひながらもかなしきは秋の始の夕くれのそら
かり初の柴のあみ戸を吹あけて風のたよりに秋はきにけり
身にしむはたえまもあらし萩原やをひくゝに吹秋の初風
おもひやれなへて世にある人たにもなみたおつといふ秋の初風
たなはた

夫 銀河八十瀬の船の年毎に一夜わたせり誰か契りし
夫 今日きてやたちかさぬらむ天川いほはたにをる雲の衣手
夫 天河秋はあさせの浪の上に紅葉の小舟はやこかるなり
秋風にけふ七夕のあまつひれおもふかたにやまつなひくらん
さしもやは年に一度わたすへき思へはつらと鶴のはし
後のあした

七夕にたむくる糸のくり返しつらきは今朝の別成けり
久かたの天の河波立わかれきのふの暮を待やわたらん
七夕の明るけしきの朝戸出に又かきくらし袖やぬれなん
別をはかたへのあたやつけつらん七夕つめのあかほしのかけ
久かたの天の河とは明にけり妻をくり船今やいつらん
は月

夫 秋もはや半になれや我せこかさしの萩もうつるひにけり
夫 久かたの雲井のかりのこしちよりほしめてくるや八月なるらん
夫 男山秋のけふとやちかひけん川瀬にはなつよものいろくつ
夫 紅葉つゝ後や散なんこの比はいまは月の神なひの森
夫 泉川はいそもいまたもみちめにこま山越てかりはきにけり
十五夜

夫 天の原空行月のもちしほのみちにけらしな難波江の浦

出るより光も四方にみちにけり秋の半の山の端の月
おしきかなあすも待みん月なれと今夜にかきる秋の半は
今宵はや空もかひある雲消て月のあた名にあらぬ秋哉
我たのむ西のあるしに契りける今日のこよひの月のさやけさ

こまひき

望月の駒引けふのひきわけに又立出る雲の上人
名に高き木曾の梯引わたし雲井にみゆる望月の駒
夕暮の月よりさきに關越てこの下くらききり原のこま
あふ坂の關路につく駒のあしもあすの引わけ數やみたれん
玉鉾の道にほとふときこえあけてまたいりたたぬ桐原の駒

秋のけう

山里もとほれぬへしとまたれつる紅葉のいるに秋そ暮行
秋の野の花見てくらす歸るさに夜もとまれといつる月かな
思ふとちまたきてもみむ秋秋のもと葉の紅葉しはしちらすな
白露のをきて木の葉の數毎にめをおとろかす秋の色かな
あらし吹きりのまかきのあれまより麗をみればわさ田かる也

あきの夕

秋しかもかはる色ともみえなくなとか夕のかなしかるらむ
あはれたか何のならひにいひ初て秋のゆふへはかなしかるらん
よもきふの夕日かくれのきり／＼す夜半の思ひなをわけて鳴也
ものなのみさもおもはするさきの世のむくびや秋の夕なるらん
あはれわか身にしみとなる夕かな時雨て寒き秋の山かせ
なかつき

五十あまり老ぬる人のれ覺にそ夜を長月の程もしらるゝ

野へみればなやか下はうらかれて秋暮かたになりけるかな
秋の夜のこれや長月里人の千度八千たひ衣うつなり
秋のうちのおなし寒さしいやましにあらし吹そふ長月の比
長月の有明の空の村時雨いたくも袖をぬらしつるかな

九日

千とせふる来もまことにはるかなりきのふわたきし庭の白菊
長月やけふも名におふ九重に千世をかされてさけるしら菊
つもりては下行水となりぬらしけふつむ菊の花の上の露
かきれなる菊のきせわた今朝みればまたきさかりの花咲にけり
いかてかはけふ咲菊をめてさらむことしばは又も花のなければ

秋のはて

暮て行秋は手向やなかるらむ紅葉のぬきも散はてにけり
物毎に四方の草木は紅葉つゝ今はかきりとくるゝ秋かな
世を秋といとふ心はなになれば今日わかれをまたしたふらん
けふ歸る秋の道しはいかならん庭のあさちのいろをみるにも
岩木にも物の心はありといへばさそなわかれの秋はかなしき

はつ冬

難波江のかれたるあしのうちそよき浦風しるく冬はきにけり
あくるまで秋の別をおしむまにまたたぬ冬さへ時雨きにけり
いとまた秋の別そしのはるいはけしき冬の空のけしきに
けふしこそ時雨もことに降まされ思ひし事そ冬のはしめは
我袖の苔のみたれないかいせん木枯吹て冬は來にけり

神無月

神無月染にし山の木の葉さへ今は時雨とふりそそひぬる

身を思ふれ覺の涙はさぬまになきつゝけたる鳥のこゑ哉
たまきはるげふの命のあり數に又ははかなくもあくるしのゝめ
深き夜になつしきり聲たてゝゆふ附鳥は又ねしてけり
八こゑな鳥よりさきと思へともあかつき起をねそすきける

あした

老にける程もはかなし朝ことのたらひの水にうかふ面影
朝毎にはらふとすれとつもらん身のちりはかりいかて清めむ
明やらぬねやのひまのみまたれつゝ老ぬる身には朝居せられす
殿守のとのみやつれの庭たちに妾かしこきあさきよめかな
さはかりの朝まつりことしけれと世々にすてぬは數鳥の道

ひろ

芦かきのかけたにみえず成行は露もひるまの庭の秋草
折なける根もなき花の一枝は露のひるまもいかゝたのまん
あま小舟引あみのつなのなかき日はくるゝも程のさもそ久しき
人もみはあなしらゝし老狐いとゝもひるのましらひなせそ
見ればまたかめに折さす花の色のやかてもしばむ時はきにけり
ゆふへ

たつのなく夕しほさひのみなとすにもかりな舟も今やいするらん
いたつらにけふは過ぬといひゝてあはれ我世もさて過ぬへし
關越てけふも暮ぬと大津馬のなのか一つれ道いそくなり
歸るさの家路にいそく市に出てゆふとゝろきの民のこゑ哉
又けふもくるればくるゝ空とのみみてやみな袖はぬれつゝ
よひ
いかにせん人こそうけれよひの間にまたれて出る山の端の月

はかなしや老てまゝとるむ宵のまやうきをうれへぬ隙とたのまん
またれつゝ床きたまらぬうたいに夢なりけりな人のみえつる
この夜はいまたふけなくに老らくのかたねふりする灯のもと
彼岸にまたこきよせぬ舟人のうきてはいかいをやすくれん

夜半

しのゝめの曉ちかくなりけり衣手いたくさえぬこのよは
昨日けふわくなるかれの音にたに猶おとるかぬ長夜もうし
山寺の時うつりしてふく螺にねもすきぬとそおとるかめぬる
又今夜やもめからすよ人すけのなきをばしらて人おとるかす
さ夜中と月のさえたる空みればすむも心のみたれとそなる

あまのはら

天原なかむる空をためしにてつくる世もなき身のおもひ哉
あまの原空にあふきてうれふとも身のうき事のこたへやはせん
天原岩戸の關のあはれなと過行年をとゝめさるらん
身のうれへあまつ空には満ぬれとをよふ所のなきそかなしき
天原空に心をうつしてそむなしき世とばおもひしりぬる
てるひ

三笠山かけの草葉もなのつからて日ひかりさせばさしけり
たのもしなあまめき光世に出て雲ならぬ空に照す日影は
天津雲かはらず照す日の本の國しつかなる御代そかしこき
戯かくれさてしもあふく日の光うき身もらさぬあはれみも哉
今もかもまつたか山なてらす日にその五時のはしめをそしる
春の月
さのみやは霞もたゝむ夜半の月何ゆへ春のおほる成らむ

くるへあらはあはれさみつゝ夏る夜に霞る月の誰ささふらん
しつかやくがた山にたに立けふりかきておすむ春のまの月
春はまたかすむにつけて天津空せめてふまくのわが月哉
おほるにもまたこそみえぬ山の嶺の霞やうすき春の夜の月

夏の月

うちをがすならす扇によがへばや袖に涼しき夏の夜の月
暮る間を月はいてなん夏のよにしほしもまたは明もこそすれ
くれかたき空にはすまて月影のさもみしかくて明る夜にかな
庭の面の水音近きうたゝねに簾涼しく月を見るかな
銀河夏の夜のたる月影のながれてはやく明るしのゝめ

秋の月

ことゝしにありしにもにの世の中におなし影なる秋の月の月
秋の夜の月にはひとつをみる人の心を千々にふとくたくらん
かゝれともいふ人なしに月影の我秋さのこひかりそふらむ
あはら屋の板間つゝきのながき夜にうたゝねさす月の影哉
しゐてみる秋のきりしのうへにこそ猶九重の月はすみけれ

冬の月

神無月時雨の雲にさすらへてさもきためなき月の影かな
出るよりさえこそまされ木枯の吹こほりたる山の月の月
いじしらす夜半のあらしのさえぬれば水なき空もこほる月影
木枯の吹すくめたる冬の夜に月みて寒き我妻かな
雪ふりてさはかりさゆる山の端に冬籠りせて出る月かな

さうの月

見るまゝにこの世はあたにうつろへと月は昔をへたてやはする

いかにせん心なくさむ月たにも我世をわけて走さるなり
破るもていとむしおとも身はふりの今はあくまて月をたにみん
夜といもにくもる涙を身にしめて月にもうとさ我ながら
さこそあれまた人なともせぬ庵に更たる月をみるかなしき

三日月

たるぬる雲間にみゆる三日月のはそ河山の夕ぐれ空
わはれまた空さへ色のかはるらん秋くるかたに出る三日月
あかきりし人のまゆねにこそへても名残をおしき三日月のか
秋はきぬいつしが空の曙初てかつゝ三日月の月ささやけき
三日月のかけたたることのとにかくに多がる身とはなと生れけん

夕つくよ

白雲のかきほにさける柳の花にもてなされたるゆふつく夜哉
庵さす岡邊の森の木の間よりくるいまちける夕つくよかな
いつのまに山の端出て夕月夜やかても影のかたふきぬらん
雲うすき空かとみれば夕月夜はれても影をおほる成ける
峯ふかき木の葉かくれのゆふつくよ覺束なきは心成けり
弓はり

山の端にかり鳴わたる雲まより影ほのかなる弓張の月
さして入山の端にはあかぬきにじきとめかたき弓はりの月
梓弓かはらぬ名なもみでかほに山の端さして月の入らん
弓張のほにももて未たにみいるかこもなる山のほの月
名に高きやのい神山さへ更てはや弓はりの月もいるらし

もち月

今宵こそ月もみちけれ鹽の山さしての嶺に雲もかゝらす

月ことにけふは半の名にたてとみちたるかけはことにも有哉
天津風雲吹はらふ月みればかけたることそ心にもなき
過かはる宵曉のかたわれをひとつにすめる月の影哉
ことばには我身をさらぬ影そと空にみちたる月をやはみる

いさよひの月

名にしるき秋の空かな月影のいさよふ山は雲もまかはす
秋風に峯行雲を出やらてまつ程すくるいさよひの月
かけふかき秋のは山の月はまたいさよひ過て猶やまたれん
空晴ていさよふ影ないそけともまた出かての山のはの月
雲きりのたな引消る秋風にいさよひのほる山のはの月

たちまち

我門をさしわつらひてれるおのこさそ立待の月もみるらん
こぬ人を思ひかれたるやすらひの夜戸出やすらふ山のはの月
露そなくしはしたてれとはかりも頼めぬ月をいかにかこたむ
月待といひてもたてれ宵の間の露なく袖はことしけくとも
柴の戸を立出てみすは此山のむかひの峯に月そほのめく

ふまち

我のみそめられさりけるかるもかくぬまちの月の程はへぬれと
出ぬまにわすれてぬへき秋の月心とまたやなかめあかさん
太山路を岩れかたつきよりあつ月といもと猶そやすらふ
夕くれは萩のえ寒き秋風にうらひれおりて月を待かな
あはれ我あなうらむてふ床の上に待出る月の影のさやけさ

れまち

秋の夜のひとりれまちの月かけに身を吹とをす庭の松風

眞木の戸を誰へたのい
かたしきの袖の秋風さよ更てなを出かての山のはの月
窓明て山の端みゆる聞のうちに枕そはたて月を待かな
右をしき面を西とさためすはそなたにむきて月やまたまし

はつかの月

長月のはつかの月を待出て我ためみつと妹しるらめや
いかにせんはや待遠になりはては月のはつかに更る山の端
外面なるならのむら立葉をしけみさらても月ははつかにそみし
うしのくゑさすかに月のかけ出て心すむ夜のときのふたかな
たちのほるはつかの月の影みれば我世おとろく涙おちけり

あり明

嵐吹竹のまかきの枯すゝきそよゝさびし明の月
今しもそ別て出し長月の在明の月の影はかなしも
うき物と人はおもはて天の月ををし明かたの月やみるらん
いつまでか月にもみえむ世の中にまた在明の程もはかなし
謹拙の別をおしみ今ばとてこのあり明の月をみるらん

夕やみ

かた岡の木かくれ過るみたらしの河音涼しゆふやみの空
たのみつる月のしるへは程ふけて夕やみくらき山陰の庵
くれはて、道のあゆみのしられればもとこし駒も猶そあやうき
小車の道のなの松はやとせ輪たちもみえず日は暮にけり
わか後のまよはむ道を思ふにそ数にもあらぬ夕やみの空

あかつきやみ

しのはらやまた夜をこむる旅人のあかつきやみは道たとる也

夫 月たにも在明ならぬあかつきの我がはやみの夢かとそみる
夫 旅人のかたへいさなふこゑはして行かたみえぬ明くれのみち
中々によこもおほふ明暮はしのゝめをそき山のほの空
れ覺して猶そ涙をこほしつるあかつきやみの心まよひに

はし 雲の行方もしられぬ夕やみに一本此歌最初に在
はし しみえそむるむら雨の空を空にしるかな

夫 君が代は七のほしなためしにてうつらぬ程を空にしるかな
くるゝまに出そふはしの數しらすいやましにのみなる思ひ哉

夫 いつもみる空のみとりはときばにて星のはやしの影そかはらぬ
人なわく心とはみし大空を星のさらめきことよけれとも
夫 このよこそはや明ぬらめ明星の山の端たかく光さえげり
はるの風

春風の氷吹とく河きしの冬木の柳いろつきにけり
たつねはや花なき山の里人に春ふくかせは猶つらきかと

夫 吹なくる風をたよりのあま小船とませの山に花のかそする
さかりなる花の枝ゆるく春の風散をみぬまもしつ心なし
みはつへきことほりもなし櫻花さもふかはふけ春の山風

夏風

夫 かはつなく池のうき草かたよりにたえてわかるゝ夏の夕かせ
しけ山のそかひの道の谷あひは夏とく風のふかぬまなし
夏ふかき森の日影の遠ければ下吹風そひさにすゝしき
うすけれと衣は千重の心ちしてふけとも風の身にもさはらぬ
岡邊なるならの下風吹ぬなり草刈をのこ袖やすゝしき

あきの風

衣手の露吹はらふ秋風はやかてなみたのしるへなりけり

そこなく我心さへうがれ出てさそはれぬへき秋の風かな
秋きてはさればといひし人ことの思ひしらるゝ風の音哉
すゑさばく音をけししみのほらや野分ちかつき秋風そ吹
もしやとて心しつむる夕暮にこまぬく袖を秋風そふく
冬のかせ

夫 吹風に枯野のなかや過はてゝ秋みし程の下おれもなし
夫 音信し木の葉残らぬ冬枯に枝吹しほる風のほけしき

夫 行水のこほりによはる冬の夜に河風さむみ音そかはらぬ
ほけしさを冬にことよせ吹風に太山もあれてちる紅葉哉
人もこし何ぞは落葉吹たてゝまた道みする木枯のかせ
山おろし

夫 秋なれば夕はさそと思ふよりなれしともなき山おろしかな
つゝきたつ谷のときは木音立て一すちわたる山風かな
明てまたみれの白雪なかわれば梢ふきおろす今朝の山風
こゝにしもさそなふものと宿なれば木の葉かつちる山風のかせ
捨てすむ身にたにいたくはけしきのおとろかれたる山おろし哉
あらし

夫 見たし岡のやしほは散過て長谷山にあらし吹なり
あらし吹かた山里の秋のすゑすゝろに物をおもふ成けり
しとろなるれやのいたふき音立てあらしなきくは所からも
さても世は過ぬへしやと住山にあらきあらしこのゑ所かなしき
あらし吹野なる草木のおれかへりやすくもみえぬ世のならひ哉
さうの風

曉の我心より聞なして涙おちぬるみれのまつかせ

いたつらにむなしき空を吹風の何によるともなき我身哉
誰しかも衣はかさん旅にして朝かせさむしみる人はなし

夫 晨明の月の出しほの天津風海山かけて吹はしむなり
天津風身にしむばかり思ふとも空吹人をいか頼まん

あめ

夫 雲もなく晴たる空にふる雨はのりのうるひのはしめ成けり
明暮し世にふるとも数ならぬ身をしる雨は袖ぬらしけり
今はまたわかある山のさひしさな人こそとね雨はふりきぬ
雨やまはこえんと思ふをあさか山あさくは露の猶かはかめや
北へ行夕の雲の大空にかさなるみれば雨はふりつゝ

春雨

夫 淺みとり四方の木のめもえ出るくさかの山に春雨そふる
さほひめのたつや霞のうす衣しく／＼ぬらすはる雨そふる
春雨のそむる日數の大江山いく野の草の色まさるらし
わきもこか衣いつくに春の空くもりふたかる雨そいきかな
ふればかつしほるゝ物をわきもこか衣はる雨名には立とも

さみたれ

夫 日數へて雲にくもそふ五月雨のふりのみまさる身を歎つゝ
にそへい 俗人は五月の雨のなにならしさもはれまなくふる涙かな
日數へて行積りぬるあま雲の／＼かへりわつらふ五月雨の空
五月雨に瀧もあまりの水はしり所もせかぬ岩はさまかな
あれまさる宿の板間の五月雨はもとといはしふりにこそふれ
ゆふたち

夫 かきくもり降ぬとみゆるゆふたちのけしきはかりに過にける哉

夫

かきくもる空のむら雲風過て音にちかつく夕立のあめ
暮にけりしはし程ふる夕立に山の端みれば入日さしつゝ
雨やとりしはしとおもへば道のへの空くもりする白雨の雲
夕立に峯のときは木音信てこと／＼しくも過るかせかな

あきの雨

夫 吹まふ風さたまらぬ秋のよにまとうちすさふ雨の音哉
秋の雨のやみかた寒き山風にかへさの雲のしくれてそゆく
雨そいく秋のたみの嶋かくれすむてふあまも袖やぬるらん
眞木の葉も秋にはあへぬ山本にしたゐる雨の霰さひしも
たつた姫何ゆへ秋とわき初て木の葉はあめの色に成らん

冬のあめ

夫 この里は空かきくもり降雨にとやまをみれば雪そつもれる
きのふ今日都を寒く降雨も山はみ雪と成やしぬらん
むら雨に雪とけそふるあつまやの餘におつる軒の玉水
けふはまた山の朝けの霜をれに空かきくもり雨はふりつゝ
あし引の山かきくらしふる雨にとき／＼ましる雪の寒けさ

くも

夫 久かたの天とふ雲のいかにしてて日のかげを立へたつらん
こち吹は雨けにつたふうき雲のかきあつめてそ物はかなしき
風吹は眞木たつ山の峯の雪われもうき世のいとばれよかし
かへりみぬ雲のかけはし古の跡をほしるや数ならずとも
夕暮の空行雲のはるかにもへたゝりにける我むかし哉
むら雨

夫 かきはなる萩の上葉に吹風の音にふりそふ秋の村雨

夫 山風にさそはれわたる浮雲のたよりにつけておつるむら雨
夕暮の風さたまらぬ浮雲に行てはかへる秋のむら雨
窓うつも風にしたかふよこ雨の音幾度かふりすさふらん
おもへた一世にふりはてぬ村雨も人の袖をは猶ぬらすなり
しくれ

初時雨目に降はやましるのいはたの森は色付にけり
山陰や木葉しくれの日にそへてふりにのみふる神無月哉
ふりはつる我身むそちの神無月袖はいつよりしくれ初けん
さらてたにね覺かちなる寒き夜に時雨を冬と思はすも哉
身にそへぬしくれなりせば中々に苔の袂はほす日あらまし
しも

秋されは夕霜ふりて水くきの岡のくす葉もうら枯にけり
寒氷る岩の霜にとちられてならの落葉は風もさそはす
をしれもるを田のかりほのとまをあらみはたれに置る霜の衣手
かきねなるしの葉草の冬枯に霜をく風の音しきるなり
谷ふかき岩屋にたてる霜はしらたか冬こもる栖なるらん
ゆき

日敷ふる太山の雪のふかければ木陰そ鳥のすみか成ける
踏分てたれいそくらん九重やとのへにつもる雪のふか香
玉くしけかたみの山に降雪は誰とし積るかけなとめけん
ふみわくる跡のしるしもなきまにあさきもふかくみゆる雪哉
夫 我庵のかきれの岫の朝戸出に雪おれくゝる竹の下道
つゆ

日影まつ草の白露いて人のいやはかなる世とはしりにき

散涙をたえの玉とわきもせずみたれてみゆる草の下露
いかにせん庭の草葉になく露の隙なくなけく秋の心を
露をかは月そやとらむ草の原なにか恨の秋のゆふくれ
むくらふ庭にも玉をしきみてゝ君きまさばとをける白露
しつく

夫 ときはなる森の雲のいかなれば下草はかり色にいつらん
谷陰の岩本雲つくくときをわかしぬる袖かな
暮かいる山の雲をうけたためて枝末にうつすならのはかしは
なきあまる露のふかきやかきぬらんつたふ雲の秋の草は
夫 明わたる山の雲にそほちて花をつむ身と成そしにける
かすみ

たちのほるあまのしほやのうす煙いそ山みれば霞なりけり
うちひさすみかきの野邊の朝霞つかへし道なとへたつらん
ちかのうらにやくしほ煙春は又ひとかすみにも成にけるかな
たこのうらむなし煙におもなれてしほやく霞立かとそみる
ことしけき世の人なかなのかれても春に霞に立ましりつゝ
きり

秋霧の心せはさはからにしきたち殘したる山のもみちは
我庵のあはらかくせる秋霧のまかきの風は心してふけ
夫 とはねまの程を隔て夕きりの音せてのみもふる日敷哉
きりなく
かりなきて夕霧たちぬ山本のわさ田を寒み秋やきぬらん
しるしらすいく里こめて立ぬらむ山本つゝく秋の夕霧
あられ

山風のかれ野のあられ吹たためて草の葉をれ消残りつゝ

夫

白妙の玉のをとけて片糸の夫なくるすの小野にあられ降也

夫

岡邊なるならの枯葉にふるあられほにも過も夫て音さやくなり

夫

かりな田の鳴の上けにふるあられたまして鳥も夫なうつかとそみる

夫

吳竹のよゝのむかしにかけなきし玉かとみればあられ成けり

こほり

夫

あはれ我心の水の何いつ夫よりかとけぬ氷とむすひそめけん

夫

冬きては田河にたてる水車氷のくさひうちちそへてけり

夫

すはの海の冬のこほりの通路や神のむすへるちかひ成らん

夫

岩かとをよきて渡とおもへとも氷もかたき冬のやま川

火

夫

うす出ず火うちの石のほくそなみなにいもつかぬ我身成けり

夫

心なき岩木の中を出る火もうたてはてには身やいやかさすへき

夫

興津しま月はいりぬる曉の波間にのこるあまのいさり火

夫

のとなる月もひかりやまさるらむ底しのたく火の夜あかりの光は

けふり

あはれなり峯の岩屋の冬こもりのほる煙のたえぬばかりにイ

夫

いたつらになにと煙の淺間山あさましなから世にたてゐらん

夫

ふしのねのなにの思ひはしられとも朝夕けたすたつけふり哉

夫

山本に夫もはたやく里の夕くれもとなきはほそきけふりとそみる

夫

もえつゝいかうのけふりの時移りひつしのおゆみ今日も程なし

ちり

夫

昔ふかきみとりのほらはくれなぬの塵のほかなるすみか成けり

夫

かすしらに夫す誰もかきなく名のみして塵につくへき言のほもなし

夫

心をはよしなき色に染紙のうたてはらはてちりつもらん

夫

老か世に夫はみる事かたきますかみ塵のへたてもさそくもらん

なる神

夫

たのもしきひとつのちりの中にさへ四方の佛のこもらぬもなし

夫

しらさききほるけき空に鳴神の見ぬ物からに人をこふとは

夫

なる神の音羽の山の夕立にせきのこなたも氷まさりつゝ

夫

たちのほる雲の俄になる神の物おそろしの空のけしきや

いなつま

天の原とよはた雲になる神の音過やらぬゆふたちの空

夫

晩立の空になるてふ神よりも落なは我身に夫後もおそろし

陽炎のありやなしやまたのまれぬ世はあた物の果をかなしき
 世の中^はにありてなき身は陽炎のそれかあらぬかわきぞかねつる
 陽炎の我身まはゆき世にふるをありてなしとや人のみるらん
 夫
 あはれなり山おろし吹夕暮になきかすまさる軒のかけるふ

新撰六帖題和歌第二帖

山

しか

むさゝひ

やまさと

いはほ

そま

せき

もり

つかひ

なつの田

かりほ

はるの野

冬の野

ともし

こたか

うつら

野にのそむ^望

やまとり

とら

山川

山の井

みね

おのゝえ

はら

やしろ

むまや

あきの田

いなおほせとり

夏の野

さうの野

わし

きし

おほたかかり

みゆき

さる

くま

やまた

やまひこ

たに

すみかま

をか

みち

春の田

ふゆの田

そほつ

あきの野

かり

おほたか

はと

こたかかり

みやこ

みやことり
こほり
やと
いへ
には
かと
とこ
をうな
わかひこ
むま
かね

もゝしき
さと
やとり
となり
にはとり
戸
むしろ
おや
くるま
佛事
ほうし

くに
ふるさと
かきほ
ゐ
まかき
すたれ
おきな
うなひこ
うし
寺
あま

夫 夫
山

春をへてとかへる山のかつめに柴のたち枝もひこはへにけり
こりしけるいはのあら山そはかけにやすくは人の過かたのよや
神代よりとのいくとせつもらるむ月日を過すあまのかこ山
萬代をいはふ山邊にこたへても君がためしの數そいたらん
いてしとはちかひし山も年ふれはことつけかちに身こそ成ぬれ

山とり

夫

山鳥のなのれもなかしおをこえてぬるや契りになかぬよもし
高砂の山のやまとりおのへなるはつおのたれをなかくこふらん
やまとりのはつおの鏡はつかにもわかるゝつまの影みてそなく
秋されはなかつてふ夜を山鳥のおろ／＼にてはいかいあかさ
山鳥のなのつからとふ人もなしなかしわかれにあらぬ身なれと

さる

夫

山里の夜ふかき雨になく猿のこゑそ涙のかきりなりける
時雨行秋の木末のこの葉さる我色かほにおしみてそなく
手にとらぬ水の月影それかとてさるはおろかに身をやかふへき
ふかきよの太山かくれのとのゐ猿ひとり音なふこゑのひさしさ
秋山のこすゑつたひになく猿のしつまる時もなき心哉

夫

鹿

五月雨のひまなき頃も小男鹿のうはけのほしはくもらさりけり
さなしかのつままちあかす朝ふしにしからみやつ小野の秋草
たれもみな秋の哀はしる物を獨やたへす鹿のなくらん
立ならす野はらの鹿の秋ふけてかたむかはきのつまをこふらん
みな人のさひしとおもふ鹿の音をいまは我身の友とさくかな

٢٥٥

もろこしの虎すけいふす山のおくまでもきみしあひみはゆかまし物を
 いきなからわかれし世こそ悲しけれつたへて虎の皮を見るにも
 我庵はななとらふす野へにすみかへて世になき身ともいはれてし哉
 から國のとらのふしとのたけなれや世をおそれてそ我は過行
 誰もけに世のことはりをしりはては飢たる虎に身をおしまし

46

おく山にすむあら熊の月^{つき}のわによめこそいとくもらさるなり^{りけれ}
白雪のふる木^きのうつほ栖^{やすみ}とて太山^{はくさん}のくまも冬^{ふゆ}こもるなり

人なれぬすかのあら野のあら熊はかるやのさきもしらす顔なり
岩はさますむあら熊のて心を見ればや人のあたにかるらん

くまのすむ山にも今は入ぬへしむすふてことに身をかくしつゝ
むさゝひ

おく山の梢につたふむさゝひのこゝろも寒けく夜は更にけり
むさゝひのかたえ落行太山木に曉ふかくさゆる月かけ

夫 夫
むさゝひの梢にきゐるむら鳥を哀のイくとまつやくるしき

むさゝひのこゑなちかたの山本に里遠けなる森の一村
むさゝひの里に落くる聲すなりこれをも人はあやしとや聞

山河

山川のおちまふそはの岩さきにとめる水のわきがへりつゝ
谷せばき岩間をたきつ太山川わりなき世にもすみわたる哉
かた山のいさいな川のいしつたひ心ほそくて世を過すらん
岩よりおちあひせばき山川のくるゝも行も音たきるなり
見やま川こなたかなたのおちあひのみなはかくれにめくる流水

山田

夫 夫
里人のつくる山田の谷せはみ心ほそくやもりあかすらん
かた山のすそ田のあせの水落てくたりのみゆく世をいかにせん
つくりしはイ

山なつの外面の小田の月おとし去年のつくりにしゆもたえさす
 のつから岩にしたいる水うけてまつちすくなきしつの小山田かひ

小山田の稲葉なごもろく六郎のおれまくみわはしかいりにけり

やまさとの谷の丸木のひとつはしあやうかりしも渡りなれつゝ

我が山里すなわにかねてしる人おらはなつてなきまじ
このさとほつらおりなる山道のとにかくにとくる人をなき

ひたひたのなにかな^{のイ}にせん山陰にもすふばかりの柴のかこひは
爪木こり水もたよりの山里にさこそは人のすみよかるらめ

夫 山の井 えぬい の夫 くイ

かきやりし山井の清水さらにまたたへての後の跡をこひつゝ

みちのへのゆきいにもすふ山の井のすきはやしはし心しつかに
ほりかねにあらぬ山井のあさければ水も心にまかせてそくむ

山そのはの岩根にはへる松のねはたへぬとこ井の井つゝ成けり

こゑこゑことにまた山ひこのこたふれば峰にも尾にも鹿ぞ鳴なる
なけきあまり我よはふとも山ひこの同しこゑには誰かこたへん

行人をやゝひこせと山ひこのよそのこたへはそのかひそなき
よそなれとたかまのやまの山ひこは雲こたふる壁そかくれぬ

夫
世の中にむなしき谷のひくをばたれ山ひと名つけ初けん

いはほ

夫 すみかたき我心こそかなしけれいはほの中に宿はあれとも
ふしさらば山の岩ほの中とてもおなし世そとてすまれぬもうし
夫 つもり行なげきはつきし乙女子かなつる岩ほのはてはみるとも
夫 岩の上のかとくしきもある物を人のこゆるをいたみたにせぬ
夫 むす昔のふかき岩ほの中とてもいかてか風のきこへこさらん

みれ

夫 あまのはらばるるけき空も風ここのみれこへてこそ思ひしらるれ
こゝにてそ月はみるへき遠近に雲吹とめぬ風ここのみれ
あれにける峰の庵の苦むしるたれ世をこゝに數忍ひけん
みわたせばみれあらはなるふしの山高くや雲のかいりかぬらん
やまとなるおほしまみれの朝あらしはけしかれともふる時雨哉
たに

夫 しつかなる谷の心のかきなもいらては人のしらむものかは
うき人の心は谷となりななん身をなけてたにあふやと思はん
夫 秋はきぬ衣はうすきうたれに谷ふところも風を身にしむ
わか心くたけおちたる谷はしなひきあくる人のなきそかなしき
さても世にくたりはてたる身の程は栖もしるし谷底の庵
そま

夫 たかしまやみおの柚木の山くたし苦しき世とていとひやはする
夫 見お山や柚のわれ木のかたおちにすてられなからふしは忘れす
夫 むかしたればやしはしめて今はまた朽木の柚の名さへふりぬる
みやきとる柚も佛のたれ見へてわかつと聞跡はたえせし
みれここの谷の柚木のつなふはみあからてすてし名こそ惜けれ

おのゝえ

夫 春をへてちらすは出し山櫻いくたびおのゝえはくちぬとも
かた木こるたつきの斧のえを弱み思ひ切られぬ世こそつらけれ
山人のこしにさすてふ斧のえの手なれてもまた年そへにける
斧のえはさそ朽にけん身のうさのわかつら杖のたゆるともなき
一すちに心をふかくおさめなばおのゝえくつるほともしられし
すみかま

すみかま

夫 冬のきて遠山おろし寒ゆけはやくすみかまの煙たつみゆ
ふゆこもる山のすみかまやくとのみむせふ思ひに下こかれつ
たえくたつやけふりのしるきかな下もへはつる真木の炭竈
とにかくに大原山のになおもみ冬はすみ木をこりやそふらん
何としていかにやけはかいつみなるよこ山炭のしろくみゆらん
せき

夫 いづくにか我やとりせむやきたちのとなみの関にこえ暮ぬる
よの中は我身ひとつの關なればおもふ思ひのとなりやはする
あかつきの袖のわかれなをしとしてとりたにとめよまの關守
ふけかたき道のつまりのせきくは所せながらなをそこえぬる
いさきよき心のそらの關の戸を手によかせつゝあけぬ目そなき
はら

夫 草たちししめちか原は霜かれて身ばあらましの頼たになし
夫 あたち野のはらのくろつか鬼こめて心にくも世をすこさはや
夫 思ひし人なからめや馬はあれとかち野の原にしほれきつるを
宿しめてなに山かつのしつばらやしつかなるへきあたら住居を
霜かれの小野のしのはら今朝みればあさちをしなみ風渡なり

なか

君か代ないのるいのりのかくら岡松も千とせの色やそふらん
御幸せしふるききたのゝ見こし岡哀むかしはそなこひしき
かけなのみ久しきより頼かなわかなかた岡のまつの一村
岡越の道をくるしみ河そひのあすかのかたなゆきてめくらん
霜寒る野中の岡のかさおもて立出へくもなき我身哉

もり

いつみ川夕わたりして山城のはゝその森に宿やからまし
よと川のむかひにみゆるみつの森よそにのみしてこひ渡る哉
夕つくひ關越行はあはつのゝもりの梢に月そいさよふ
ふり行は杉のみとりも色付て木末さひたる山本の森
神よいかにいづをいつとか頼むへきはかなやいきの出いりの森
やしる

いそのかみふるの社の宮うつしあらたまるともなやはかはらん
むそちあまり國におちたるもろ社世のためにこそ跡はたれけめ
むそちまてないのやしるの見しめなほ心なかくも猶や頼まん
道のへの木の下の陰のつし社たれなをさりのめさまつるらむ
みちつしのとりゐにしるし杉かくれこの山中にやしるありとは

みち

こえわたるこさかの道の雪とけにかへるさくるい小野の里人
ゆたかなるないつの道のみつき物海山かけてさためをきてき
うみ山やいつくにとはんよな渡る道はかたゝありといふなり
我君のあまれき御代の道つくりくほめる身をも哀とはみよ
いるまでも末こそみえぬかくらくのはつせのやまの谷の下道

つかひ

たてまつるかゝるの使の名残こそ時にのそめはさすかなりしか
今の世もひかりとそみるあふひ草まつりにさせるかゝるの使は
明はまたさかひへたて伊勢しまやかかりの使のゆきやわかれん
さしならふさくら山吹つゝけともふちはあまたもなきかきし哉
勅なればさそいのるらむいせつかひ世は春なりと花を折つゝ
むまや

旅人の山越わふる夕霧にむまやのすゝいのこゑひゝくなり
道はそき關のむまやの鈴鹿山ふりはへ過る友よはふなり
まどろまで今夜も明ぬたひの空むまやつゝきの山の嵐に
はやうちのむまやつたひの東路は遠きもちかきさかひ成けり
東路やむまやゝのおちつきに人もすゝいめぬ君かわりなき
はるの田

高れには標もさきぬをやまたのたれまくほとになりそしぬらし
道きはのあせのかこひにしめさしてたな井の種もはや蒔てけり
かはつなく井手のあらを田しめはへて誰なほしろに思ひ立らん
山本のあら田のくは井手をたゆみかへすゝもひろひやはせぬ
朝日山かすむこなたの伏見田井打なこすへき時はきにけり

夏の田

今ははや秋ちかいらしを山田のわきほのかつら末なひくまで
ほに出ぬ夏田にましろのひえ草のひきすてられて世なや過なん
しつのおはしげるいなほの五月雨にはれまを見てや田草引らん
ちはやふる神の御前のみとしろに六月かけてきなへとるなり
ぬしやたれいくはくならぬを山田の谷のせはちに早苗とるなり

あきの田

あし引の山田にかくるひたふるにあな物さひし秋の夕暮
秋にあへる山田のほたち吹風になとて心のかたなひきなる
夕なきにしほみくらしみなと田のほなみにつたふ秋の浦かせ
をやまたの庵もる人におとるきてひたさはきなる秋のきなしか
浦風にはま田のをしれうちなひきはやりしほに成そしにける

冬の田

山里の門田のあせの霜くつれおちほひるひし道もたえつゝ
あせつたひきそふうき草とちこめて冬田のおもにこほる山水
秋はてしかり田のひつちいたつらにほに出来とも守人そなき
いつまてか水を心にまかせけん山田の氷いまはとつなり
日あたりのさばのふか田の霜とけにつたひかれたるあせの細道
かりほ

山田もるかりほの庵にふくとまのひま吹とをす風や寒けさ
いかさまにほしてかれまし露むすふかりほの庵の秋の夕暮
ますらおは菊穂の庵にいれにけりおきある露のふるにまかせて
秋の田のかりほのほくみいたつらにつみあまるまで賑ひにけり
かり鳴て山風さむし秋の田のかりほの庵のむらさめの空
いなおほせとり

霜しるき朝氣の風のさむけきになくや門田のいなおふせとり
露氣さもたのか涙か秋の田のいなおほせとりは鳴すもあらなん
つゆならぬいなおほせとりの涙さへさもひちまさる秋の袖かな
はやほこへ門田の面の駒のあしいなおほせとりのこゑ急くなり
なにそこはいなおほせ鳥の名のみして菊ほす民そ足たゆくくる

そなつ

秋はつる山田のくろは霜かれてたてるそなつのすかたなのみや
いかにせん菊田のそなついたつらに立るかひなき世を過す身は
里遠き山田のそなつ一かたに鹿ばかりとやおとるかすらん
入しれぬ山田のそなつさのみやは立すくみても世をはつくさん
今も猶てら田にたてるそなつかな秋はてぬへき世とはみなから

春の野

きいすなく春のやけのゝかきわらひ外山をかけてもえわたる哉
うらかれの草葉は霜のなをさえて春めきやらぬ小のゝ古道
もえ出る草葉の床やおしからんやけのゝにかへる夕ひはり哉
下もえのすくるをあらふ春雨にやけのゝすゝ草たちにけり
霞たつこせの春野になくきいすいつかありかな人にしられん

夏の野

たひ人のたこの駒の行すりに夏のゝ草をすさめやはせぬ
うくつらき世の人こにくらふれば夏のゝ草はしけしともみす
野風ふく草の葉かくれ秋やくるをなしかのつものつかのまばかり
かせかよふ野守の宿のさゝむしろ木陰なられと夕すゝみせり
とにかくにみかさと申せ夏ふかき末の原野に日てり雨ふる

秋の野

暮かゝる秋の野風いま立ぬ岡邊のはしや夜はにちりなん
草の木もなとろへはつる秋のゝのさかり過行比そかなしき
野邊はみな草葉残らすうら枯て音信よはる秋の風散
秋の野の草の下ひももうは露の色に見るまでとけにけるかな
あき風の吹上の小野の葛かつらささうら枯て露こほらん

冬の野

霜かるゝ冬野のはらのきり／＼す身ある物としる人もなし
霜ゆきのふるのゝなやおれかへり立なをるへき時のまもなし
ふみからす冬野の草の末をなみ駒のあしたにかくれさりけり
冬野にはこから山からとひちりてまた色／＼の草のはらかな
ふいきする夕のかせの時のまに面かはりしてみゆる野へかな

さうの野

旅人の野中の道のおひわけに名残おほくも行別ぬる
いかにせんうちの一芝生年へてあらぬつくりにせはく成世を
しるしらぬゆきに人のとまらむ我こそしめし野路の宿りな
しらさりし野くちの里に宿かりて道の芝生に今そ朝たつ
露ふかきたこのいり野の草枕ぬれてもこよひまたやむすはん

かり

狩人の行てのをしあひわかれまたは頼みもなき身成けり
なにとして太山おとしのせこ聲にやはれなから鹿もすむらん
明わたるもと山となくせこたてて夜こめの鹿の行方そむき
しいやとてこらかつとひの山祭けふの狩くら空しからんや
かりくらす山のなしかのおちあひにともやたはさみ駒早むなり

ともし

ともしするすその原に立鹿のあひもあはすもよをかされつゝ
ともしするはやましげ山たつ鹿もおもひ入にや身をはかふらん
いかにせんめもあひかたき鹿ゆへにほくしのまつとつくす心を
ともしするほくしの光かすかにてやみれの木陰夜は更にけり
照射するは山の鹿はわかこくよにあはてこそ身はたすくらめ

わし

あとみえてきりふに残るゑくひにそとやなるわしの心をもしる
ともすればとやかふわしのおはきれて立出かたきよをなげく哉
すたちけむその山しらぬ驚のはの身を離れたる名のみふりつゝ
またばよもはれをならふる鳥もあらしうへみぬ驚の空の通路
人とはぬみやまの驚も哀なりたれにむくひのはれおとすらん

おほたか

御獵場のましろの鷹のもとをしはうき世にめくるしわさ成けり
山かへるあかけのたかの手なれても心をはかるゝきみにもある哉
あちきなくなれぬ心をよとるとて我もれられぬやかたおのたか
とやかへる數もしらふの鷹なればたなれの鈴もこゑそふりゆく
いてはなるひらかのみ鷹立かへりおやのためには驚もとるなり

こたか

いくかへり年はふれともはし鷹のましろはぬ身に世をは恨みぬ
逢事をいつとか待むわか幸の山のくろつみつみしらせても
なつかひの程もへなくにはしたかのおはをしなへて秋風をふく
へなはなちてかひに輕き鷹の子はもたりやすくもかへりぬる哉
かりにてもこぬ人またるはしたかのかへる山の秋のゆふくれ

きし

あきされは野になくきしのほろ／＼と涙こほるゝ夕間暮哉
よそにやは日つきの狩場たつ雉のしほしのほとをありと頼まん
あなかまや人のきかくになくきす霞かくれなたちも忍はて
子を思ふ春のとたちのやきかりにけふりを分て立きゝす哉
つたへきく今しも袖のぬるゝかなのひけつきしのはれの雲に

はと

夫 おとこ山老のさかゆく人はみなはとのつえにもかゝりぬるかな
夫 入日さす山下陰のむらしはにはとなきかはす秋の夕暮
夫 庵さす岡邊のましはすゑなひき鳩吹かはす秋の初かせ
夫 茂りつい木ふかき山の夕暮はこもりこゑにそはとは鳴ける
夫 年へたるさはへのふる木むくひあれば鳩ある枝を先そ折つる
うつら

夫 野分する野澤のちはら霜かれて鶺鴒のれやもすみや侘ぬる
夫 あはつ野のかやか下露ふかいらしなのか羽ほしに鶺鴒鳴也
夫 今はまた人はすたかね古郷にうつらやあるしひとり鳴らん
夫 鶺鴒かる秋の草れのあつさ弓はやりうちの名こそしるけれ
夫 見たたせは野風を寒み日は暮て尾花かくれに鶺鴒なく也
おほたかかり

夫 冬かれのかた野のみのゝみ鷹狩とりふみたてゝからぬ日はなし
夫 野を寒みたかもましろにふる雪のおち草とめてあさる狩人
夫 草に入つかれの鳥をかりたてよかた野のみのけふ暮ぬとも
夫 つかりやるこゑを柴間に先たてゝかるやかたのゝ道したふ也
夫 みかり野に草とふいぬの立かへりたつかきゝすの羽音かなしも
こたかかり

夫 とやかへるつみを手にしへ粟津野の鶺鴒からむとこの日くらしつ
夫 あまたより鶺鴒にあへるはし鷹のさもとありあへすもかれてしかな
夫 うちむれてあはする鷹のはかせにも野へのかや草たちみたる也
夫 すいぬめてせはき蒔田のめの前にあはするたかも一はれそとふ
夫 ふる雨にくるすのゑのゝ小鷹かりぬれしそいゑのはしめ成ける

野にのそむ

夫 あき萩の咲散野邊の葛かつらくるゝもあかね花の色哉
夫 幾かへり我冬かれの野へにきてみし世の花の跡をこふらん
夫 咲花を折つくしても歸るとや人くといとふ野へのうくひす
夫 みわたせはのすちましりの道のへにたえゝ遠き草のほら哉
夫 野へに出て見れともあかす萩が花おはなくすはな今さかりなり
見ゆき

夫 大井河おなしなかれのかはらぬにふるきみゆきの跡を殘れる
夫 大井川もみちりしく神無月近きみゆきも跡ふりぬへし
夫 そのかみやふりまさるらむおとこ山代々の御幸の跡をかされて
夫 數／＼にみつなのこのゑひきつれてすゝみはしの袖を長閑き
夫 とのもりの夜の行幸にともす火のあきらけき世と成にける哉
みやこ

夫 村雨にちりが過なんやましろの宇治の都に秋はきの花
夫 いさこゝに我家居せむ世中にしかの都もふるされにけり
夫 さゝ涙やあれたる都すむ人も今はたまれにたつけふりかな
夫 としなへて都のうちにしつむ身は所からともえこそかこたれ
夫 我すまて花の都の春かすみやとせばはやくへたゝりにけり
みやことり

夫 都鳥聲も寒けし舟きほふほり江の河の氷る霜よに
夫 都鳥あらはとおもふ角田川きゝわたりてや人をとはまし
夫 みやこ鳥都はしらす角田河すみてもこゝに年のへぬれは
夫 さりとともほとやはちかき角田川思はぬかたのみやことり哉
夫 堀江こく小舟のみさほ見なれつゝみなきはさらぬ都鳥かな

もいしき

もいしきやみはしの本のたちはなに馴し昔は今そこひしき
つかれ行老をもしらて百敷に身をせめし世のこひしきやなそ
もいしきのみかきにれさす吳竹のおひはしめても幾世へぬらん
とのへみれば古きみかきの瓦ふきはばらぬ御よに又めくるなり
立よりて先袖みせしかたなしの軒の下こそわすれかたけれ

くに

とよ國の鏡の山のくもるぬにひかりをそへて出る月かけ
かけまくも賢かるへししきしまやまと國なる大みや所
あまのすみ里をはかれすつの國のいくたび浪の立かへるらん
豊なる國のこたへのみつき物民もやすけき御代いのるらし
さかひこそ敏にもあらぬ國なれとあきつ島にそ法はひるまる

こほり

みちのくのけふの郡におりぬのいせはきは人のこゝろなりけり
わかことはおくの郡のえひすかけともかくにも引ちかへつゝ
人めもる關をはゆるせあふみなやすの郡のやすくかよはん
笹わくる音もさいらのかうちゝに駒をはやめて今日もくらしつ
長門なるあふのこほりの桝板はもろこし人もすさめさりけり

さと

山本のむかひの里とみつれとも行めくるまに日はくれにけり
うきとかのしはしきこえぬ時やあるといき音なしの里を尋ん
雨ふればかたそはつくるいま里のふる道とめておつる山水
なのつから世はうけれとも佳吉の里をばかれし松もときはに
かのみゆるとなちの里の夕けふりそれがあらぬか山の霞か

ふるさと

たかまとの尾上の宮のあれまくに月のみひとり住残つゝ
さても世に我身はかくて憎のはのなにおふ里とふりまさりつゝ
かりあけぬ道ふか草の里の名はあれにし後やいひはしめけん
あともなきむかしかりのふる都残る難波はうらさびにけり
いかばかり吉野の山し遠からぬ古郷人の花をみるらむ

やと

はるかなるみやこのいぬお我宿は大内山のふもと成けり
いかにとよ世をつくすへき宿にても哀とまらす行涙哉
朝夕に身こそつられあれ果てゝかたばかりなる宿のあるしは
訪はれぬをさそな憂身にしられつゝあるしそ宿のあたと成ける
我宿は都のにしの山たかみ入かたはれて月をこそみれ

やとり

かり人のやはきにこよひやとりなはあすやわたらんとよ河の浪
やとりする埴生のこやの壁へたてぬるかうちたにみる夢もなし
明やらぬくらふの山にやとりして人の別をいかゝといめん
心して野はらの末は行くらせかならずかりのやとりやはかす
夕暮に山路こえつる旅人は此里にこそやとりとるらめ

かきほ

山かつのかきほの中のからなつなくきたつほとに春を成ぬる
跡もなくさしもあれつる垣ほにもへたてらるゝは我身なりけり
かくて世をあなうけにても過す哉かこふかきほのねりそ朽つゝ
くつれそふやふれつゝいの犬はしりふまへ所もなき我身哉
あひみんと君しはいはいあしかきの末かき分て今もこえてん

家

我家の月みることもかたかりき今そ長閑き老のこゝろは
いかにせん家に傳ふる名のみしていふにもたらぬやまと言のは
家を出し今ないとせの春ことに花の都は猶そこひしき
人めみぬかた山かけに家おして心すむやと身をそならはす
かゝるうき身にこそ出ぬこの家のあとは昔にかはらすもかな
となり

夫

里人の軒を井へて住宿はいつこまでこそ隣なりけれ
身のうさの所からかとかこてれば隣さへこそくるしかりけれ
ほさてたく股か爪木のもえやうて隣もいとふ夕煙かな
心あるやとのあたりとな夫のなかひかき文のかよひのはさまやはなき
家になき四の隣のかさこしはうたてといふもにくからぬ哉

夫

井

旅人の往來をいそく相坂にはやくそみゆる走井の水
いかにせん井のそこあ夫にみる大空の我身ひとつにせはきうき世を
花ちりて春はくれにし櫻井の名にた夫さへあかてむすふ比哉
老はてそ我身くち行つ井つ頼むのそみも猶そあやうき
わきてそのあかつき契る法の三井なかれくむみと成かたうとさ

夫

庭

花にさく庭の草葉の色々にぬしはふりにし宿もいとほす
春はまつ袖をつらねしむらさきの庭を立居に今もわすれぬ
このほとはとものみやつこきよめすな花の散をば誰かいとほん
やとしめてかひこそなけれ苔の上の庭つくりせぬ山のいはかと
いかにせんつみさたむなる庭の上にうたて心の我をさそは

夫

夫

にはと

なく聲にかけのたれおの誰人か明ぬといひて起わかるらん
音のみなくやとの庭とり聞なれて君につかへぬ年ふりにけり
榊葉にゆふつけとりの聲すなり神かきちかき夜はの旋れに
さためなきゆふ付鳥の所から庭におりはへ名をそやらはす
こえあかす山路の末の里人に鳥の八聲も今しきるなり
まかき

夫

夫

夫

わが庵は朝ふすしかのなるゝまでまかきにつゝ岡のかや原
ときとして咲つくはなの色々をふるまかきのいかにみゆらん
我庵のあはら籬に柴そへておひらくのこはたちもかくれん
草茂る宿には道もなかりけりまかきをこえて人はとはなん
我庵のまかきのひまは山なれとくれぬととむる人もなき哉

夫

門

あれ果てあやしけれともあやむしるかけたる門はさすか成けり
我門はむくら蓬のをしこめて心ととちぬ道もたえつゝ
からくして入しは何そ桑の門みちの心よそのしるしあれ
なのつから朽殘たる門はしら我家いかてたてなをさまし
おなしくはとちこもれかし桑の門名にのみ立て年のへぬらん

夫

夫

夫

夫

戸

山里の柴のあみ戸のあげたては峰のあらしの心なりけり
いかにせんときにひくとの出立にかなくみまくほしき昔を
君まつとさも夜さむなる秋風にねやの板戸をさいて明ぬる
世をそむく柴のあみ戸のかげかねの思ひはつせは人をまたるゝ
ふきたつるまきの板戸のはたゝと身をふるはるゝ山おろし哉

すたれ

夫 たえはてふりぬる宮の玉すたれこにたにみたす成にける哉

夫 すくもたく難波乙女が蘆簾世にすけたる我身成けり

夫 へたつれとまはらにあめるしの簾忍ふ人めもえこそかくれ

夫 世中にはてはすけのあしすたれあしくかけたる和歌の浦浪

夫 年をへて世にすけたるいふ簾かけきけられて身をはすていき

床

やとりするはにふのこやの竹すかき一夜の床もふしそ侘ぬる

夫 こぬ人のつらさなといなくとて夜床の風は吹まさるなり

夫 はらへともむなしき床のいづはりの言のはのみを数つりける

夫 うちたえてさのみ臥猪の床つめにかかるものみたれ朽やはてなん

夫 墨染の袖をつらぬるなか床はときまつとてもあたにやはある

むしろ

君まさて更たる夜半のさむしろはいかにしつめてれん方もなし

夫 涙にも朽てなになるあやむしろ我こひなれとみえぬ君かな

夫 秋ならぬ露を人のあやむしろしきしのへともかつみたれつゝ

夫 道の邊にそるあかりほす庭うらなのかつゝ数かたとそみる

夫 雲にふす苔のむしろもいたつらに我身たえは数かたもなし

おきな

夫 心をはいかにならばむ方もなしきたの翁に身は成ぬとも

夫 あさなくしらぬおきなのみす鏡めにみすまにつもる年哉

夫 いにしへのきたの翁もある物をなとあやにくに世をなげくらん

夫 日をへてはしらぬ翁をます鏡みる影うとき敷そかさなる

夫 あら玉の年をあまたにふる人も名をとけてこそ入こもるなれ

をうな

やをとめのふるてふすいのころ／＼にないの社は宮居せりとそ

夫 たをやめの花のうはきの下匂ひ物思ふつまに誰ならひけん

夫 わきも子かまた朝顔やつゝむらん髪ふりあげておもかくしする

夫 いはひなく御代の始の八乙女にやをよるつ代のほとはみえにき

夫 点にかける乙女の姿それまでもみよとはゆるすをしへやはある

おや

いかなりしよの契りにたらちれの佛をたにおほえさるらん

夫 たらちれのおやのいさめの数／＼に思ひ合せてれなのみをそなく

夫 かそいるのみし世の花の衣手につけきやかゝるすみそめの袖

夫 たらちれのおやのいさめも昔にて身は老はれのはてそかなしき

夫 とひかたみいかなる隈に身をうけて我たらちれの悲しかるらん

うなひこ

夫 百敷やくらのつかさのふりうりに我おとらしとつとふうなひこ

夫 うなひ子かをくしもさゝぬ朝れかみとくるまなくや思ひ亂れん

夫 うなひこかふり分かみの行末によそへてかくる草かつらかな

夫 うなひ子かうちたれかみをふり分てむかひつふての袖かさす也

夫 うなひこか岡本傳ふしはふしに野飼の牛は守るともなし

わかひこ

夫 みとりこのたふさの中の紅葉々ある物がほにしるもはかなし

夫 捨て行親したふ子のかたいさりよに立やうてれこそなかるれ

夫 世中はいとけなきこのおも嫌ひみしかなきには音こそなかるれ

夫 みとり子のまたいとけなき面きらひうときばうとくげにそ覺る

夫 一すちにある物とのみみとり子の鏡のかけなとるかかはかなさ

くるま

夫 今とはやかけてやみにし小車のよせ所なき世にもふるかな
夫 哀なとかもの見あれのすき車かきりてわたる世と成にけん
夫 行なやみから車もひくなりむそちあまりのなけきつむとて
夫 おひか世にまたしちたてぬ小車のつたふ力もなきそかなしき
夫 あかなくにくさひをぬきし小車のわれさりかたき世を歎つゝ
うし

夫 ゆきのしままきのこ牛のみとせにて鼻さす程もたえかたのよや
夫 日はくれぬ野かひのうしをしるへにて歸かたにや宿をからまし
夫 涙ちわけ宮古にきたるつくし牛草につきてやさかりみるへき
夫 こと／＼しこいの牛の角さきのきらあるみるも恐ろしのよや
夫 いなば分人の田の畔引牛のよこ道もなき時世なりけり
むま

夫 あれまさる駒のしなひのとりのとりもあへすしつめかたきは心成けり
夫 おくの牧の野とりの馬のかたなつけどもすればまたある君哉
夫 まれくとや遠方人の思ふらむお花あしけの駒のおふりを
夫 敷ならぬ身にしられたる駒さくりさのみやおなし跡をふみいん
夫 むちかけにおとろく駒の心にもなをよはぬは我身なりけり

佛事

心にてころはかりを傳ふなる三世の佛の道をしらばや
すませ猶心の底の法の水うき世の末のにこり成とも
たのもしな四方の草木に咲花もつゝに佛の身とは成なりし
釋迦あみた同しをへの一つ道ふもおくるもちかひたかふな
あるはなくなきはある世の中をとれさせてそ佛のさとりとになる

寺

夫 徒に往來をとむる關守はむつの道をやゆるさゝるらん
夫 たのもしな國をまもとちかひ置しわか立柚の嶺の大寺
夫 今日もまた入目さひしき山寺にひくこゑさめる秋風を吹
夫 更る夜の寺おこなひの鐘の音にはかつゝみにつそおとろく
夫 今こそは苦の下にてみえずとも空より花のふりし所そ
かれ

夫 白浪の岩うつ音やひくらんかれのみさきのあかつきの空
夫 石上名におふ寺のかれの音にふるくなる夜を聞そかなしき
夫 はつせ山あらしにまふ鐘の音にいくよの夢の遠さかるらん
夫 きいなるゝむそちあまりのかれの聲宵もあはれいつまで
夫 誰もきけ尾上にひく鐘の聲うたぬにはなる曉もなし
ほうし

夫 三吉野のかげちをつたふ山ふしのすゝかけ衣露にぬれつゝ
夫 髪をそり衣をそむる色なくは何につたへて法をきかまし
夫 高野山あけんひかりをまつ人の長き夜けため法りのともしひ
夫 苦の袖聞もたうとしいにしへの祖師のなかれの跡のしたえねは
夫 朝なくあかの水くみ櫓つみ苦のたもとは岩にふれつゝ
あま

夫 くる髪の色はかはらぬさげ尼のまことのすちに身はなひきつゝ
夫 玉かつらかけし姿をあらためておこなふ道はみるもかしこし
夫 一すちに五の障いとひてやおもひすてゝも道に入らん
夫 もしはやくあまならぬあまの姿にもからき浮世や思ひすつらん
夫 なをさりのむかしの今朝の行衛たにかゝる悟りの身とそ成ける
あま

新撰六帖題和歌第三帖

水	水とり	をし
から	にほ	う
かめ	いを	ころ
ふな	すゝき	たい
あゆ	ひを	河
かはつ	はし	ひ
るせき	しからみ	夜かは
あしろ	やな	江
いけ	ぬま	うき
たき	にはたつみ	うたかた
さは	ふち	せ
うみ	あま	たくなは
しほ	しほかま	ふね
つり	いかり	あみ
なのりそ	も	みるめ
われから	うら	かひ
なきさ	しま	はま

ちとり
いそ
かた

はまゆふ
なみ
みなと

さき
みをつくし
とまり

水

をのつから岸にしたる山水の末は小川になりける哉
 岩山のくつるゝ谷のうもれ水すましかれたる我こゝろ哉
 はかなしなむすふ清水のかつりてのこりありとも頼れぬ身は
 すみかたる野中の清水いたつらにぬるさ心は世にもつかへず
 君すめに水上ふかめ行水のなかれををみたゆる世もなし
 水とり

山川のばやせになるゝ水鳥のうき世の中になかれてそすむ
 おなし江になを立かへる水鳥のしたやすからぬ世をいかにせん
 今はまだはぬけになれる水鳥の立ちかなはぬ身をいかにせん
 うき鳥のきなからぬゝ水遊びなにそばさてもかしらからけそ
 蘆根はふうきめにすなくかりの子の親にまさると聞はたのもし
 なし

池にすむをしのつかひもねかはれすうき世にめくる契と思へば
 池水の思ひも出しあはれかなをなしとりのなしとりし世は
 冬の夜の氷へたつる池水にかけさへみえぬをしのひとりね
 池にすむ鶯の剣はそばたてゝつまあらそひのけしきはひし
 山川のあたりは氷る岩わたになかれもやらすをしそ鳴なる
 鴨

三草ある入江になるゝうき鴨のやすからぬ世は思ひしりにき
 日くるれば山陰きたる川あしにうきねをさむみ鴨そなくなる
 世にふればかもの水かきやすからす下の心は我そくるしき
 冬の池の鴨のうきねの身ふるひげにも寒さの程そしらるゝ
 霜のさぬ水の床に夜をかきね寒さたへたる池の鴨鳥

鳴

ふかき江のうきすにすたつ鳴とりの定なき世に身はふりにけり
 舟かよふ蘆間にすたつ鳴鳥のうくもしつむも我こゝろかは
 鳴とりの波の下道とすればうき世のほかとゆきかくれつゝ
 下にのみ鳴のかまひのみなくゝり入める磯はみらくすくなし
 かくれかとなを水くゝる鳴鳥もうきはおなしき世をやしらん
 う

いかにしてつかふうなばのきはきつゝおこなふ道に心みたれし
 いかにしてえかふ入江のはなれうのしはしの程も心やすめん
 おきつしまの浪のまもなくあらうとわはせと題のかはかざる
 なにかその波はかくれと見やたきやうのある石の上ぞかくれぬ
 みればまたつかひもいれぬ荒磯の岩にゐる鵜も魚はとりけり
 かめ

水とけて春はのとけき池水に汀のかめも日影まちけり
 河こしのなちの田中の夕やみに何そと聞は鵜そなくなる
 いかにして行て尋ねん鵜山にしなぬくすりばありといふ也
 つきとせのためしやさても重ねらんここの下なる鵜のまはひは
 河の瀬にうさたる鵜のさしくしそみし世なからのしるし成ける
 いな

冬川のさしの下行水ぬるみはえある世にもあひにけるかな
 夏河や瀬たえの水にすむいのせめくるかたをしる時もなし
 雨過るたぬきのさぬの水たまありはつましき世を頼まん
 うをのこのかへるたのみもある物をさらぬわかれの跡そ悲しき
 しほかれの浦間につたふ魚をみよたのしむへくもなき世成けり

こゐ

淀川にいてつなげるこゐをみよ誰も此世はあはれいつまで
 水底の玉もかくれにすむこゐのうき出んかたもあやふまれつゝ
 世中はよとのいけすのつなきこゐ身を心にもまかせやはする
 こきまはる漕の舟のこゐかせにひれのさばきの涙たかくみゆ
 水舟にうきてひれふるいけこゐの命まつまもせはしなのよや

ふな

いにしへはいともかしこしかたふなつゝみやきなる中の玉章
 ふなのほの濱江のえりの浅からす人のしほさのなきけなのよや
 ふしつくるおとろかしたにすむふなのけふの命も定なの身や
 したみおとす水口はやくほす池にとまる鮎子の数そしらね
 志賀の浦にすなとる鮎をあはれ／＼おきにもてきて放ちてし哉

すいき

夕なきの藤江のうらの入海にすいきつるてふあまの乙女子
 くれぬまにすいきつるてふ夕鹽のひかたのうらの海士の袖みゆ
 ひれふりし秋のすいきを思ひ出て誰いかばかりよとくかへらぬ
 鱸つるさほのたはみのなゝほみ波のたよりによせてこそひけ
 夕なみの見なとかたかけみつ鹽にすいきつり舟さしわたすみゆ

たい

きのうみにたいひくあみのおなかけてなく程みゆるうけの数哉
 行春のさかひのうらの櫻鯛あかねかたみにけふや引らん
 水無月や君のなさけにあひそめてうくてふ鯛は今もありとか
 わきもかためと思ひてつる鯛のさこそ心にうけても引らめ
 春の海のうらによるてふ櫻鯛なみなやなのか花とみせつる

あゆ

山河のそはのこかけのかた淵にわか鮎つるとけふはくらしつ
 かも川ののちせしつけみきてさして鮎ふす淵をれるはたか子そ
 太山河のほるこあゆのたてなかしからくもにこる世に生れけん
 朝な／＼ひなみそなふるかつら鮎あゆみをはこふ道ちかしこし
 すみわたる月のさかりそなのつから瀬にふすあゆの命とはみる

ひな

ひなのよるあふみの海も風さえめたなにかみ河やあしろうつらん
 寒行は氷も月もひとつにてひなのよるともみえぬあしろ木
 綱代もるまきの島人いとまなみひなのよるしもはやはれらるゝ
 あしろすにうちあけらるゝあさひをいこまかに砕く水とそみる
 風さむみ今朝しもしろしあしろ守思ふにさこそ水魚によるらめ

河

夕すゝみがへるさやすむますらをのかりてすゝけるくさ川の水
 あはれ／＼今につきせぬ思ひ河身をはやならあるかひもなし
 今夜さへあはれゆへにこの川の涙をしつけみ袖めらしつる
 はや河のせきりあやうき舟わたりをかひにむかへ道となくとも
 見ればこそ色にもふけれめなし河をことなしへよ我渡らん

かはつ

年をへていし井の底にすむかはつたなかりける我身成けり
 みさひある古江のかはつ草かけに人もすさめぬ音こそなかるれ
 いそのかみふるのあら小田草深みとりかはつの時となくらん
 春のうちは猶水さむき谷陰の岩のうつほにかこつなく也
 つとめすとれもせて夜はなあかす身にめかる蛙の心なきこそ

はし

夫

池水のすきにわたすそりはしもかたふくまてに古にける哉
昔よりきかぬ橋たにわたす世になからの跡なとふりにけん
旅人のわたるかけちの丸木はしあやふみなから行ちかひつ
峰越て岩にかけつく丸木橋まるのみよはき道そまははる
これやこのそらにはあらぬあまの川かたのへ行は渡る船はし

ひ

夫

まかせつる石ひの水の下にのみすます心はしる人もなし
水わくる田川のうけひうへ下にかはくまなくてくつる袖かな

夫

ほかさまにたれ山水をせきつらん頼かけひの音信そなき
やいくつるかけひの竹の水錆てたのむうき世の程もはがなし
ふみ越る道にふせたるかはらひのくつともしらし埋もるゝ身は

夫

井せき

夫

五月雨に水かさのまさる大井河となせのぬせき落すばかりに
くたるせのみかさをすまふる川の井せきを人の心ともかな
山川のせいのぬくひをうちそへてはやくも水をせきおとす哉
河そひのせきの古抗うちすていかゝるみくつの下にくちつゝ
大井河浪うつせきの古くひはくつるきならぬくる世もなし

夫

しからみ

夫

夏ふかみよとむばかりにかけてけり山下水の草のしからみ
河さしにしまむ竹のわれくたけ我世やかくてしつみはてなん
しはしたにせくにせかれぬ涙川なにそはありて袖のしからみ
みな人のつゐに行てふみつせ河その瀬にかくるしからみそなき
河の瀬にとまる紅葉はかひもなし枝をかけたるしからみもかな

夫

夜かは

かゝりさすうかひの小船かひ下り明てそのほる淀の川なみ
月ならてよ河にさせるかゝり火もおなしかつらの光とそみる
なくら山夜川の水の瀬をはやみのほれば下るかゝり火の影
さしはへて夜河につく篝火もさきたつみればせにやあふらん
この川に小夜更ぬらしかつら人うなば手にまき船くたす也

夫

あしろ

夫

水はやき宇治の河瀬のあしろもり手玉もゆらにうたぬまもなし
したにほるばやせの浪の網代木のうかれながらも世にたてる哉
ふる郷のよしの川のばやくより朽やしにけん瀬々のあしろ木
ひなのほる瀬々の網代木ことよせてわたりすゝむる宇治の川長
さらぬたに涙もてゆるすあしろ木になかしかけたる宇治の柴舟

夫

やな

五月雨はふる川のせの水はなにやなこそ浪の下に成ゆけ
みなと川ゆくせの水のくたりやな春のひよりにはやさしてけり
せきかくるたなかみ河ののほりやな遠まき水のおちそわつらふ
早川のあき瀬にかゝる片きしをやうつけたのたよりにそかる
手向へき神のにえそことよせておまへの河はやなうちてけり

夫

江

夫

あししげきなにはほり江にくく船の見さほならぬは心成けり
海士小舟さすかにかよふにこり江のすまきぬ世をも猶したふ哉
おきつ浪津田のほそ江のうらかくれ風も吹やととまる舟人
たまし河三舟はこかしきすきほに堀江の波はにこりもそする
潮むかふなの、湊のなかれ江に猶こきかゝれてとまるいせ船

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

池

夫 夫 夫 夫
 かるしまのあかりの宮のむかしよりつくりそめてしから人の池
 山のおのゆきあひにせく池水の入こもりしやわか身成らん
 哀れ世をうきぬの池といひたてゝみつからさても出そわつらふ
 道のへのつゝみのきはに入たてゝとやまかくれの池ふりにけり
 いかにせんかはるすかたの池水の底清からぬこゝろつかひな

うき

底ふがさいかほのぬまのいかほとに戀しきことを思ふとかしる
 しくれしな草にかくるゝぬま水のしたばえなかつふかき心を
 世をすては人めばかりは隠れぬのみこもりにてそ過へかりける
 我身いま猶もかしらにかみつけのいかほのぬまのいか、悲しき
 いつまでか袖うちぬらしぬま水の末もとならぬ物思ひけん

うき

み草あるうきはうへのみ見ゆれとも人の心のそこはしられず
 世中にうきはわか身といふほとにやかてふかくもしつみぬる哉
 けふもこすうきにかるてふあしつゝのうきや人の思ひ成らん
 水底のみえぬにこりのふかければうきとはいへと舟もかまほす
 うへみづぬうきに生たるあしのねのよばきこそ身をばしつめん

たき

夫 夫 夫
 あゆはしる瀧の岩つほわきかへりみるも涼しき水のいろ哉
 なく涙世のうき時とせきかけて我身をさらぬ布引の瀧
 おち瀧津水の白玉ひけとも名は音なしのきゝをふりぬる
 山はさまきひしくたいむ岩かとに年へてきれぬ瀧の糸哉
 うき時は袖におほかる涙ともしらてそたきの玉ひろひけん

にはたつみ

夫 夫 夫 夫
 五月雨もしけきよもきにはたつみ行かたしらぬ我心かな
 なかめのみたゝつれゝの庭たつみ世にふりはてゝ行方もなし
 村雨のふる程もなきにはたつみきてすみはてぬ世をいかにせん
 みな人にふみにこさるゝにはたつみ影とむへくもなきすまふ哉
 みればかつ軒のしづくにたゝかれて玉あるかすのまさる庭かな
 うたかた

夫 夫 夫 夫
 河の瀬にうきてなかるいうたかたの哀れいつまで消かてにせん
 うきて世をめぐるもかなしうたかたや渦巻く河の岸のみわたに
 時のまにきも消やすき水の沫のうたかたかくてあるはあるかは
 河のせにきゆるうたかたはかなきを思はさくらめやはれ世の人
 うき世には沈みはてにし身もしらす何人なみにましろうたかた

夫 夫 夫 夫
 益荒雄のみのにきゝむと澤に生るさゝめかほにも袖はぬれけり
 こしやたいむすひもそめこあたにきく淺澤水は絶もこそすれ
 さは水を秋の野守のかゝみにて千程にうつす花のかけかな
 秋さるる淺澤小野のひとはなれさひしくとなき水の上哉
 この雨によとの澤水ふかけれとおりたつ民はまこもかるかも

夫 夫 夫 夫
 おく山の岩かきふちのふかしともみえぬばかりにすめる水哉
 いく色とえやはわくへきちりかゝる紅葉の淵の谷の下水
 行年やつもりて淵となりぬらむ岩根によとむ谷川の水
 ふる川やくつるゝきしの下はやにいとわたみのふかき淵かな
 さきあかる岩間かくれに淵はあれと猶谷ひく浪の音かな

夫 夫 夫 夫
 おく山の岩かきふちのふかしともみえぬばかりにすめる水哉
 いく色とえやはわくへきちりかゝる紅葉の淵の谷の下水
 行年やつもりて淵となりぬらむ岩根によとむ谷川の水
 ふる川やくつるゝきしの下はやにいとわたみのふかき淵かな
 さきあかる岩間かくれに淵はあれと猶谷ひく浪の音かな

夫 夫 夫 夫
 おく山の岩かきふちのふかしともみえぬばかりにすめる水哉
 いく色とえやはわくへきちりかゝる紅葉の淵の谷の下水
 行年やつもりて淵となりぬらむ岩根によとむ谷川の水
 ふる川やくつるゝきしの下はやにいとわたみのふかき淵かな
 さきあかる岩間かくれに淵はあれと猶谷ひく浪の音かな

夫 夫 夫 夫
 おく山の岩かきふちのふかしともみえぬばかりにすめる水哉
 いく色とえやはわくへきちりかゝる紅葉の淵の谷の下水
 行年やつもりて淵となりぬらむ岩根によとむ谷川の水
 ふる川やくつるゝきしの下はやにいとわたみのふかき淵かな
 さきあかる岩間かくれに淵はあれと猶谷ひく浪の音かな

夫 夫 夫 夫
 おく山の岩かきふちのふかしともみえぬばかりにすめる水哉
 いく色とえやはわくへきちりかゝる紅葉の淵の谷の下水
 行年やつもりて淵となりぬらむ岩根によとむ谷川の水
 ふる川やくつるゝきしの下はやにいとわたみのふかき淵かな
 さきあかる岩間かくれに淵はあれと猶谷ひく浪の音かな

夫 夫 夫 夫
 おく山の岩かきふちのふかしともみえぬばかりにすめる水哉
 いく色とえやはわくへきちりかゝる紅葉の淵の谷の下水
 行年やつもりて淵となりぬらむ岩根によとむ谷川の水
 ふる川やくつるゝきしの下はやにいとわたみのふかき淵かな
 さきあかる岩間かくれに淵はあれと猶谷ひく浪の音かな

夫 夫 夫 夫
 おく山の岩かきふちのふかしともみえぬばかりにすめる水哉
 いく色とえやはわくへきちりかゝる紅葉の淵の谷の下水
 行年やつもりて淵となりぬらむ岩根によとむ谷川の水
 ふる川やくつるゝきしの下はやにいとわたみのふかき淵かな
 さきあかる岩間かくれに淵はあれと猶谷ひく浪の音かな

夫 夫 夫 夫
 おく山の岩かきふちのふかしともみえぬばかりにすめる水哉
 いく色とえやはわくへきちりかゝる紅葉の淵の谷の下水
 行年やつもりて淵となりぬらむ岩根によとむ谷川の水
 ふる川やくつるゝきしの下はやにいとわたみのふかき淵かな
 さきあかる岩間かくれに淵はあれと猶谷ひく浪の音かな

夫 夫 夫 夫
 おく山の岩かきふちのふかしともみえぬばかりにすめる水哉
 いく色とえやはわくへきちりかゝる紅葉の淵の谷の下水
 行年やつもりて淵となりぬらむ岩根によとむ谷川の水
 ふる川やくつるゝきしの下はやにいとわたみのふかき淵かな
 さきあかる岩間かくれに淵はあれと猶谷ひく浪の音かな

夫 瀬

いつみ川くたる小船のうちかひに淺瀬^{あせ}をしるき行なやみつゝ
今^{いま}もおもふ關の藤川^{ふじがわ}いかにしてくるしきせゝを我過^{わがとほ}にけん
すゝか川我身^{わがみ}ふり行老^{やう}の波やをせもちかくぬるゝ袖かな
月ことの七瀬^{ななせ}のみそきたえせねはまことに清きかはらとやみん
この河^かはみなとや近くなりぬらんひるせをこえて鹽^{しほ}みちにけり

夫 海

わきも手かいなみの海の白波のよるはずからにくたけてそ思ふ
我袖^{わがそで}の海となるおはつの國のなかす涙^{なみだ}のつもり成けり
そなたにもちかひたかへす西の海のこち吹^ふをくる風^{かぜ}を待らん
けふはまたなころ方^{あた}よせ風^{かぜ}やめてやゝはれわたる冲津朝^{おきつあさ}なき
もゝ谷^やのぬしといふなる海なれば水のこゝろにそむく世そなき

あま

あま人の身をうら波に袖^{そで}めれてめかり鹽^{しほ}やき世を渡るらん
みるめかり鹽^{しほ}やく蜚^ひのあしたゆくくるれば歸^{かへ}るいとまの身や
かれはつる色をほしらあま人の秋^{あき}なき波^{なみ}の花をのみゝて
はま中にしほ風^{かぜ}はかり音^{おと}信^{しん}てかたたよりなきあまの宿哉^{しゆくさい}
折^{をり}かこふはままつかえの袖^{そで}かきにかりはすあまのみるめ淋^{しみ}しも

たくなは

朝夕^{あすけ}のあまのたくなはいとまなみこの世はかりなくるしと思
海士^{うみし}のすむ里にほすてふたくなはのなき恨^{うらみ}はげにそくるしき
うなばらや底^{そこ}の心もしらるやとちひろたくなはくりためてみん
さりとても手にもたまたぬ撈^{うけ}繩^ひの苦^{くるしみ}しき世にそまつはれにける
とにかくにあはれくるしき世中^{よなか}になそたくなはの亂^{みだ}れそめけん

夫 しほ

いせの海^{うみ}のあまのまてかたかきつめて幾度^{いくど}同じもしはたるらん
いさしらすなるみのうらに引續^{ひきつづ}のはやくそ人は遠^{とほ}さかりにし
難波^{なんば}かた鹽^{しほ}手しほみちなかれ木のうきては沈^{しづ}む身こそつられ
なをさりの浦^{うら}のとまやによる波^{なみ}をくみてもしほと誰^{たれ}かみすらん
かもめとふ夕^{ゆふ}しほみちのはまさきに玉藻^{たまも}かるてふ船^{ふね}きよすなり
しほかま

おもひのみ下に

あまのくむ浦^{うら}の鹽^{しほ}遣^やしほゝとめれてのはては身をこかしつゝ
うたてなとあまの鹽^{しほ}かまやくとのみ思^{おも}ひつきせて年のへぬらん
たえずのみもしほやくてふかさばやの三^{さん}ほのうらはに煙^{けむり}立^た也^{なり}
すまのあまの朝^{あさ}な夕^{ゆふ}なにやく鹽^{しほ}のあなかまからき世にも有哉^{ありや}

夫 ふれ

あはち島^{しま}がさまにわたるしほ舟^{ふね}のからるの音^{おと}を沖^{おき}に聞^{きこ}ゆる
たよりあらはもろこし船^{ふね}に尋^{たず}はやまた我國^{わがくに}にたくひなき身は
ゆらの戸^とに興津^{おきつ}鹽^{しほ}風^{かぜ}むかふらし渡^{わた}る船^{ふね}人^{ひと}こき歸^{かへ}るみゆ
古河^{ふるがわ}にかたふきをれるすて船^{ふね}のうかふかたなく朽^くやはてなん
いきしにの二^{ふた}の海^{うみ}を渡^{わた}すなりあやきさそこくおきの釣^{つり}舟^{ふね}

つり

蜚^ひ小船^{せうせん}おきにさしいつる釣^{つり}棹^{さし}のたはむけしきもみえぬ君哉^{きみさい}
一^{ひと}すちにあまのつりなばこひかれてくるゝくれとあはぬ君哉^{きみさい}
きしたかみつりのたなはのうちはへてななき目^めあかす暮^{くれ}る空哉^{そらさい}
くらきよりくらきをしらてかりそめの釣^{つり}のいさり火^ひ何^{なん}ともす覽^み
夕^{ゆふ}なきにつりするあまのうけなほのなかくや人を恨^{うら}はてまし

興津風おれたる浦のいたや貝そも身の程のすみか成けり
よせかへりきためぬ涙のうつせ貝うかれのみ行身にかん
いける身のてはなさなからうつせ貝空しき殻や世にとまら
あやくそ^夫う珍らしきいたや貝皆ふくあまのなりひならずや
伊勢の海士の汐干にあさり求たるかひをそたもつ身をは捨つ

なきさ

夫 みなと河わかのさきも心せよなきさのふれも近つきにけり
すみよしのあまの古つな引人も今はなきさにくちぬへき哉
なきさなるあまの捨舟朽果てしつみのみ行身こそつられ
こもりいしの波の下かとしけからしなきさの小船心してこけ
湊入はなきさつたひにこきまはせとあさもあらは舟もこそいれ

しま

波間より今朝こそみつれとふさたてふな木きるてふのと島山
淡路島とわたる船のなにしほに思ひきためすゆくこゝろ哉
こき出るきりのたえまにみわたせば今朝めつらしき浦の初島
いかにせん玉津島姫我道のたゆたふなみのしはくも哉
こき出て猶またはし島はらにもろこし船のたれをまつらん

はま

夫 つれなきは岩木のはまのしき波のなにと心をかけはしめけん
おきつ波あらきはまへのとまひさし我こそやとれ風はとまらず
はまひさしさせるかひなき住家にもみゆるこ島の月をなれぬる
うと濱のうとかるへくもなき人のとほぬはさすかうめしき哉
波風のあらきはまへのいさこちにうちかされてそ物はかなしき

ちとり

夫 風さゆるさほの川との冬の夜に明やらすとやちとり鳴らん
ふさの海や汀のちとり哀にそさゆる霜夜に友よはふなる
風をいたみありそにかふふ濱ちとり涙たからし跡もとめす
浦つたふかたばしられとにまちとり夜鳴こゑそとなさかりゆく
夕なきいあしやのをきの鹽風にさそはれてなくむらちとり哉

はまゆふ

いたつらに年をかきなる三熊野の浦のはまゆふ我ならなくに
よそになる浦のはまゆふいくへまで人の心に我へたつらん
おひそめし浦のはまゆふ幾とせの春をかされてわか葉さすらん
かさねとは何かいふらんはまゆふのつかれのみ行我世かなしも
かきつくる浦のはまゆふなにとして夢には人をみせはしめけん

さき

夫 はりまかたいてさきめくる夕くれのふなこのこゑも哀なりけり
夫 入うみのせとのさきなるたか岩にうは波こしてある鹽風
夫 けふは又たかみそきなかしての崎ゆふとりして波もこすらん
夫 見たせはこす点ひとしきならひ松しまさき遠く誰かうへけん
わたの原見さきこきまふ釣舟のぼるかなれは心すみけり

いそ

夫 いせのうみの磯の中道いそげともはや朝鹽はみちそしにける
朝夕にしほみついでその岩根松世にいりこもるほとそかなしき
山ふしの磯のつちふむ眞砂地ないかはかりとかあしたゆくゝる
しほたればあまにも袖をかしゐかたいそなつみにと涙を分つゝ
今そわれあらいを岩の高波につちふみかれて袖ぬらしつる

なみ

年をふるみしまかくれによる浪の音にはたてす世を歎つゝ
沖津かせうらにきよするしき浪のしきりにこひぬ時のまもなし
侘人はいかなるえにかぬれ初し袖をやすむるあた波そなき
もしは草かきなひかすも有物をよこ涙つらきわかのうら哉
そこばみなすむにもこるも同じ江にかゝるあた波たつ成けり

みをつくし

すみの江の浜に朽行みをつくしふかき頼のしるしあらはせ
難波なるあしれに交るみをつくしうきふししげきよにや朽なん
きためなきイくなければかはるふる川にまた朽残る身をつくしかな
難波江にさそなしるしのみをつくし深きは廬にはかくれもなし
入をみな渡すしるしのみをつくしふかき江にこそ思ひたてつれ

かた

夫 てる月の影にまかせてあかしがた鹽のみちひもある世成けり
身はかくて沈みはつともみつ鹽に跡かたあらはなくさみなまし

夫 あさが満うけらか花のいとまた色こそみえけふもくれつゝ
見わたせば玉藻はからて夏そ引うなみかたに鹽やひぬらし
はりまかた沖イ朝こく船のほのかにもみえたる山はおほのしまかも

みなと

夫 さい波やひらのみなとの山嵐に船入侘るしかの大わた
夫 しほむかふかけの見なとのいり浜に哀我身の出かたのよや
夫 鮑津島月いさよほいこき出むひらのみなとはさよ更ぬとも

とまり

夫 みなと江にかしふりたつる泊り舟なかるゝまてに鹽はみちきぬ
夫 ともみればとまりに沈む朽船のうき出しがたそさすかこひしき
夫 波のなみ風のかけたるからことにひきとめられぬ舟人そなき
夫 友ふねはつくしもしいせもこきあひのおなし泊にうきねをそする
夫 今もかもこのうら浪高からしとまる船人おきにいつな夢

新撰六帖題和歌第四帖

こひ

おもかけ

うらみ

さうのおもひ

いはひ

かさし

たむけ

かたこひ

うたゝね

うらみす

おもひをのふ

わかな

わかれ

たひ

ゆめ

なみた

ないかしろ

ふるきを思ふ

つえ

ぬさ

かなしひ

こひ

たまきはる命を限りつれなきなつれなしといひて戀やまめやはあふことはいつとまらぬをたのみにて我こふらくにつもる年哉戀まなん身をやはおしむ逢事にかへぬ命のななつらき哉百夜かくちちのはしが逢まてとせめて久しき數そかなしきすていこし戀の奴のまりまたひとりとつかれたる身をいかにせん

かたこひ

波のうつあら磯岩のわればかりくたけて人をこひわたるかなさきのよに君のへいかに生れけん思へはもとの身こそつらけれいくたびかつれなき物と太山木のこりの心を身にうらむらん逢みての後のつらさのなかつまとをせとも明ぬおとしたてかな我袖のひたりもみきもぬれながらなとかた戀の涙なるらん

夢

逢事をまゝとるむほとになくさめて夢そありふる命成ける夢にたにあふ事まらぬ思ひれをたのみけるこそいやばかなけれさりともとくらせるよひの更行は今は侘てもゆめそまたるい見ぬもみえきかぬもき一つ世中に夢こそ戀のさとり成けれちらすなふあふと見るよの夢語りうたてちかふる人もこそあれ

おもかけ

わかるとて我身にそへし情かはされてのこる人のおもかけ朝夕はわすれぬまゝに身にそへて心をかたるおもかけはなしみるもうしかはる心の年月にありしまゝなる人のおもかけ身にそへる人の面影よしなきをいとほんとてもむく方そなきあかさきりし人の面影といめをきて我身にさらぬかたみとそみる

夫

うたいね

夫

まちなれし夕の床のうたいねもおとろかれぬる入あひのかに戀しきにおもひかれたるうたいねはまゝとるむとても忘やはするつれ／＼の秋のなかめのうたいねにやすく日影の傾ふきにけり床の上に手枕ばかりかたかたけてまはしとおもへばねそ過にけるそむきける親のいさめのむくひとて猶うたいねばやむ時もなじ

なみた

かきたえてぬる夜もかたし花うるし袖の涙をまほり侘つゝ戀しきもつらさも袖は涙にてびたりみきにも朽ぬへきかなさても身ないかにせよとて涙のみまげきなきの花とちるらん人まれの涙せかれてなかれすは袖のちしほや淵となりなん袖をみは人もあはればかけつへし涙そ戀のいつわりもなき

うらみ

大の川いかたのはすけいかばかりうきにつけても戀しかるらんあまのすむさとのなかくての道つゝき限あらはやうらみはつへきながらへてあればそ物をおもひける命は人のつらきなりけりみすいはしたゝよそならむとおもへともむかへは落る我涙かな身にかへるあたともまらて秋といへはいたくも吹かくすの下風

うらみす

なをさりのたゝ一筆の玉章はうらみ所もなくそなりゆく身のほとはうらみてとたに頼まれは思ひまらぬになして過つゝいとへとも人の心はつらからす身のことばりにおもひなしつゝ風過てたいいたつらにくすのはの人にうらなき我こゝる哉身をうしと思ふ餘りに恨みねはけにたのまぬになしやはてなん

ないかしろ

なげきつゝさすかある世のほと計なきになしてはおもはずも哉
いつまでかたえねはたえぬ心とてなをさりことの契りたのまん
わすれしの契りもえこそたのまれぬないにいひし人の言のは
あはすあらは思ひしことそあすかの契りやなそと何か恨みん
我たにもなきになしたるうき身をばさこそは人の思ひさくらめ

さうのおもひ

夫

なろかなる心のしとはなりぬとも思ふ思ひに身をばまかせし
人はさもあらぬ物ゆへあちきなくおもふ思ひのほてそかなしき
ことしのみまける物かは思ひ草尾花かもとの秋のこゝろな
はるかさてさもそけふりのたくびける心の中のむろのやしまは
おもはしとおもふにもにぬ思ひこそ思ふにたかふ思ひ成けれ

おもひなのふ

いかにせんくるしき海に船はあれとのりあらぬ身の行方もなし
われたにもうけくにつらき身の程を哀と誰か思ひゆるさん
いたつらにぬるゝ袖哉墨染のけふも暮ぬる空をななめて
いかにせん君もたすけよ年ふりて我身ひとつの世のかきり哉
あらさききほとけといもになきふして明暮しける我身成とは

ふるきをおもふ

いたつらにいそちを過し春秋は戀しからずといふこともなし
をのつから身を身と思ひし時たにも猶そむかしは戀しかりける
ふりにけるあとなそ忍ふならのはの名におふ宮のやまと言のは
いにしへのやまと言の葉あといめてはるかにあふく柿のもと哉
いかにかく心にむかしめになみたうかまぬ時もなき身なるらし

いはひ

夫

もちながら平をほなる盃のきよくにこらぬ御代の久しさ
あまてるや内外の宮のくもりなくほくゝみ守る御代は萬代
君か代はそこひもあらぬありそ海の駒うち渡る道と成まで
おさなこの春のはしめのいたたまきに司位はそなへあけつゝ
君まもる法をそ君は守なるさてその世は久しかるらし

わかな

夫

治まれる御代のわかなのけふことに千世をつむとも盡しとそ思
末遠き春日の野邊の若菜には千年の春をふめてこそつめ
ふるさとのかすかの原に生ぬれと若菜といひて年をつむらん
今はとて春のめくみのたのしきをつむや野原のわかな成らん
けふはまた野邊の若菜のなゝ草に君かやちよをつみやそふらん

つえ

夫 夫

あはれわか家に杖つくよはひまで身をなからへん物とやはみし
宮の内のむつきは上の卯目とて取てふ杖はよるつよのため
老の坂につくてふ杖の末よはみつよくは身をたすけやばする
ないそちにおよひかゝれる杖なればすかりてのみそ足も立ける
灑水かく杖の雲に袖ぬれて祈るれかひはみな人のため

かさし

夫

夫

夫

左ふち右さくらとてとりなれしかさしの花もむかし成けり
もゝあきやむかしかさしゝ櫻花我身ふりても猶そ忘れぬ
うき事に行かくれてもみてし哉山の茂りにかさしつゝ
わたつみの浪もてかくる島松の枝もかさしの花かとそみる
ことに出てときの花をかさしこし二月ばつきいつかわすれん

わかれ

わするなよわかれし道も出かてのあり明の月の心ほそきは
なさけなくつかさなからそたちねのさらめ歎に別はてにし
あなこひしあらはと人を思ふにも歸らぬ道のわかれかなしき
行をおしみとまるなさをふ心こそとに別のかなしがるらめ
たれゆへかつゐの別もおしからし親にも子にもそばの身なれば

めさ

夫 いま一めいもなみむろの神にこそめさとつむけて祈りわたらめ
夫 今ほわれ捨られなからあさめさの君か手なれし時を戀しき
夫 道のへにたいりなすなとみそきてせき守神にめさたてまつる
夫 なみたつるめさの追風はやければまかちふけめきわたる舟人
夫 道のへのあき岩根にめさむけてさかしき山を越そわつらふ

たむけ

わげ過るきたのいみやに手向せし昔の跡を神そうけゐる
たつた山神の手向もいかばかり秋は紅葉の色にあくらむ
ゆふたすきかけて祈りしかひもなく手向の神やなひかさるらん
せめてわか袖をさるともかみ山の手向におくる錦やはきん
あら山のとなりならはぬ岩つたひ手向のかみに任てそゆく
夫 たひ

夫 道のへの露分衣ほさすして野くれ山くれ幾夜れぬらん
さのみやは故郷となみ旅のよないもこひしらにいてかてにせん
若葉より草なまくらにむすひきて夜長くなりぬ秋のまのほら
みすまらぬ道のみとなき旅の空山こえ野越幾日きぬらん
家はなれひさにすてたる身なれとも旅にしあれば心ものうし

夫 かなしひ

たて置しつかのそとはも朽果て残る形見の跡はかなしひ
なしかへしさそなならふと思へともあるかなき世に成る悲しき
いたつらに過にしかたの悔しさをいかなる道にいかになけかん
うつせみのよをいたつらに啼々もあはれかなしき心からなり
あるまらずしめてふ人のかすことにとふらひなきの涙こそふれ

新撰六帖題和歌第五帖

しらぬ人

いひはしむ

としへていふ

はしめてあふ

のちのあした

しめ

あひおもふ

あひおもはぬ

こと人をおもふ

わきておもふ

いはておもふ

人忘れぬ

人に去らるゝ

夜ひとりおり

ひとりぬ

ふたりおり

ふせり

あかつきわかる

一よへたつる

二夜へたつる

ものへたてたる

ひころ隔てたる

とし隔てたる

とを道隔てたる

うちきてあへる

よひのま

ものかたり

ちかくてあはす

人をまつ

またす

人をよふ

みちのたより

ふみたかへ

人つて

わする

わすれす

こゝろかはる

おとろかす

おもひいつ

むかしをおもふ

むかしあへる人

あつらふ

ちきる

人をたつぬ

めつらし

たのむる

ちかふ

くちかたむ

人つま

家とうしを思ふ

おもひやす

おもひわつらふ

くれとあはす

人をとゝむ

とゝまらす

なをおしむ

おします

なきな

わきもこ

わかせこ

かくれつま

二なきおもひ

今はかひなし

こん世

かたみ

玉くしけ

たまかつら

かみ

もとゆひ

くし

たま

玉のを

たまたすき

かゝみ

まくら

手まくら

はた

ころも

衣ほやき衣

なつ衣

あきころも

衣うつ

かり衣

すり衣

あきころも

かは衣

ぬれ衣

さうの衣

ふすま

裳

ひも

おひ

ひとり

ことのほ

ふみ

こと

ふえ

ゆみ

や

たち

かたな

さや

はかり

あふき

かさ

みの

かたみ

つと

いろ

くれなる

むらさき

くちなし

あや

ぬの

みとり

いと

にしき

わた

しらぬ人

ふみまふ山のかげちの丸木橋しらすなからや戀渡るへき

前 大 納言 イナシ

音にのみきくもろこしのほとたにもまたしらぬ世の人を戀つゝ

入 道 三 位 イナシ

我なからわか心をしらぬかな誰といひてか戀はしめけん

前 左 京 大 夫 イナシ

我そゝの人ともいはぬ面影をおほくふひは夢かうつゝか

入 道 左 大 辨 イナシ

ちはやふる神のみむろにまるねしてつや／＼しらぬ人に戀つゝ

いひはしむ

おもひかれけふうち出る山水のなかれて絶ぬちきりともかな

今こそはおもふあまりにしらせつれいはてみゆへき心ならねは

けふは先あらぬ様ともいひなしてそれにつけたる氣色をもみん

思ひかれしらせ初つる筆の跡うちつけならぬ言の葉そなき

今をたにいふか愚かになるへくは又なにとしてこふとしらせん

年へていふ

山川のみかけのこすけ年をへて心なかくもこびわたるかな

色かへぬおなし言の葉幾とせかつれなき中にふりつもるらん

あまたとしつゝる思ひを武藏鑑かこゝにかけていひしらせつる

おもふ事いかにやいかに年をへてかくいひ／＼の數はつもれと

年月はいつかいふきの峯におふるさしも思ひのもゆとしらせし

はしめてあふ

こ草つむ野さばの小田のうす水打とけてこそ袖はぬれけれ

あひに逢てめる夜の鐘はうちつけにやかてみしかく成そ悲しき
あかすおもふ心はしるや逢坂の山下し水むすひそめつゝ
ちきりある新すぢのぬくたれにみたれそめぬる妹かくろかみ
我戀のかきりと今を思ふへき夜はしもいたくれこそなかるれ

のちのおした

夫

ぬる床のうらのしき波ふるよりも歸るあしたはくたけそひつゝ
あかぬ夜を月そくといふほとにけにしらむまで別かれつゝ
わすれめや宿のつま月に立出て明るをしはしまてといひつる
立ながらなす手枕の袖かけてあかぬあり明に出そやすらふ
おしみかゝれてさらはとてみなくればうたて空さへ明放れつゝ

しめ

夫 夫

里人の軒端の竹のみしめなはかけて祈ししるしあらはせ
むすはゝや我しめゆひしわか草の新すぢを人にふるさて
あらはれてはやしめさゝむ若草をぬけなりとは人もこそみれ
人しれぬ心は妹にかけをけと猶つれなさやしめもこゆらん
三輪山の杉のふる木のみしめなほかけきや人をつれなかれとは

あひおもふ

夫

諸ともにしたのおもひはかよへとも忍ぶそ戀のかきり成ける
かけしたいひとりゝかあらましもいひてかなしき心まといは
朝夕にかはす袖しのうらなれてともにみるめあかややはする
あつぎ弓末までとなすふせ竹のはなれかたくも契るなる哉
いかいせんしなはともにと思ふ身のおなしかきりの命ならすは

あひおもはぬ

長月の有明の月のわれのみやつれなさかけを猶したふへき

我そうきつらくは人にしたかはてなをたへしたふ心よはさは
おちたきつよしの河やいもせやまつらきか中の涙なるらん
なをさりの道行すりに逢事もうしろあはせに又ちかひぬる
つめのうへに山をばのせてありくとも又逢事は猶かたきかな

こと人をおもふ

しら波のかけても人に契りきやことうらにのみみるめかれとは
たのむなと告やいらまし我にたにさこそはいひて變りはてしか
海士小船ほか行浪のよるへにもなれし名残は袖のぬるらむ
すゑの松あたし心の夕鹽に我身をうしと波そこえぬる
くれなぬのこそめの衣あくかれてまたことつまに何うつるらん
わきておもふ

時雨ふる立田の山の色にみよわきてそ人をおもひ初てし
戀しさもみまほしさも君ならてまたは心におほえやはする
この里にわくかたもなく行なれて駒さへ今は道いそくなり
花かたみめならふ中のふしゝもいかなる竹のよなとなすらん
おとこ山神さへきこそちかふなれわく方ありと何うらむらん
いはておもふ

夫

吹風は涙のきよするしまさきのいはぬ思ひそくたけわひぬる
なけかるゝ心ひとつの年月をいはて思ふと誰かしるへき
さてもなを心にこめてなけくかな身をうきにのみ思ひしりつゝ
しのふ分てうつな柱にかくるひばもるてふ水のくちやなからん
かくはかりいはぬをさてもしるならば君につたふる涙ともかな

人しれぬ

夫
こひ佬ぬありしばかりの隙もかなここのすかはら人めもりつゝ

かくれぬのあしの下ねのよといもに戀つゝいふれとしる人もなし
磯かくれあまのしのひの下もえはくゆりわふとも誰か^{アイ}しるへき
こひしなはつゝあにつらさのはてそとも誰か^{アイ}は夢を思ひあはさん
人めには雲かくれつゝ夕立の空をそるしき戀もするかな
人にしらるゝ^{ナシイ}

春日野々雪間の草の春くれば下にもえしも限こそあれ
戀怪る涙を雨のたくひとて我思ふことは世にふりにけり
むら雲に時雨の月のあらはれてされはふつゝあにかくれなのよや
下もえのけふりや雲と浮ぬらん立名もあ^ナたに人のとふまで
我なからかくれあるへき戀すとは日のはしめより思はさりしそ

夜ひとりおり

夜もすからひとりおきある床夏の花のしら露消かへりつゝ
ひとりのみ戀しきまにみる月は思ひ忘れてん方もなし
いかばかり袖はぬれけん白浪の立田の山の夜半のなかめに
さりとはさもあらましの床中にひきをいたきて幾夜あかしつ
ふかき夜に獨おきゐておこなへとさとられぬ身は戀せらるはた

ひとりぬ

歎つゝひとりやれなん水鳥のはれに霜ふり寒き此よを
まてとたにたのめぬ人のよひくをこひては獨怪つゝそぬる
れやのうちは身を吹となす風寒み人のへたてのよなをさされても
待怪てさばく心の夕ま^チとひぬるとはなくてぬられもやせん
とし火の消てのみこそよりふせば我影をたにみる夜はもなし
ふたりおり

諸ともに影をならふる十寸鏡みてたにあかぬ心なりけり

待えてもたかひにちきる簾ことにまたぬれ夜半の更にける哉
たちそはぬ今にてしりぬ面影は人のこぬ夜の形見成けり
わきもこかきてはよりあるもろ心さそな夕のほともなつかし
あひにあふ時さへ物をなけいとてれやへもいらす明ぬ此夜は
ふせり

山風も時雨にきほひ寒^チけれと妹としぬれば長夜もなし
くろかみのみたれてかゝる手枕はすきまにかふ風たにもなし
中々にいやはぬらるゝあひみるもこれは夢かとおとろかれつゝ
あなかちにかたみに袖を重ねつゝあかぬ夜床はすきまたになし
なのつかから手枕はつしぬなをれば我おもはすと妹むつけれり
あかつき^ニわ^ニかる

曉のゆふつけ鳥もつらからず明けすは人にわかれせましや
鳥のねをあかぬ別のかきりにてたれかまさと鳴々を行
たくひなくうき曉の別をは何に似たりといひもやられす
あかつきにおきてさくれば人もなしあな淺ましや妹はいにけり
月影はまた夜^ニふかしとやすらへばや人やりの鳥はなくなり
一夜へたつる^{テダロイ}

笛竹の一よのふしのへたてたになとあなかちに戀しかるらん
逢事のあしのかりぬ二夜とはみえも見えずもつかさりけり
けふそしるあらぬ所にふし初て我をあきたつかたいかへとは
いもせ山中に生たる玉篠の一よのへたてさもそ露けき
山かつのかき^ニぬにかこふわれ竹のよませになとてあひ見初けん
二夜へたつる^{テダロイ}

身のほとのうきなをしらす玉くしけ二夜あはすと恨つる哉

あはぬまはきのふけふとてあすか川あすの夕をまち渡る哉
月たちてとはぬつらさを三か月のさすかはのめく影をみすらん
きのふといひけふばかりこそ飛鳥川かはる淵瀬のたえま成らめ
はやきませあはぬ日數をかそへても今夜は君をみよといふよそ

ものへたてたる

夫

夫

むしたるあつまいとめかすきかけに名残おほくて行別ぬる
秋の夜の雲かくれ行空の月みればゆかしき君にもある哉
今宵さへ事しけしとて逢事をちかへやりとのたてるかみ
玉たれのこすのひまもるうつり音は秋ふく色の風そつたふる
あちきなし心は妹にひき物のほつれにたにもしるひまやある
日ころへたてたる

浦風にあら磯なみの打つきあひみぬ夜半はれん方そなき
三日月のわれてあひみし面影の有明までになりける哉
かりにとて出にしまいに逢ぬ目のかそふばかりも積りつるかな
かそへもつ日數ばかりを身にそへておる手もたゆし逢ぬ絶まは
逢事をまたあすといひひのへてはやこの月も立ぬへきかな
としへたてたる

幾とせを隔つる中のふるひかきふみかよふへきたよりたになき
そのまいにきて過にけん幾とせをあればあふと思ひしるらん
あひみんとおなし事のまいはるいは待れし程に身や老ぬらん
まちこふるみつのほま松としへても波のかけなく契やはなき
あひみすてつもりつもれる年月の程も覚えぬ人そ戀しき
とをみちへたてたる

我せこかきなれの衣はる／＼と里をへたてこふるころ哉

海山の千里の外もなかりけり君にへたてぬ心ひとつは
思ひやる心もくるしわきも子かすむらん里の山こしにして
行つけはこまはなつみぬ妹が門一むらすきはやもかはなん
ゆみたけのかすもなよはぬ山中にはる／＼ひとり妹戀めやも
うちきてあへる

秋風も夜寒になればから衣うちきて妹にあひみつる哉
やいさむく吹もやすらむから衣きつゝあひみる夜半の秋風
なれ／＼し人のほひのかほりきてとこなつかしくかはす手枕
かりにてもきりあればやから衣きつゝあらしのおかの草ふし
くへしとは思ひもよらてれたる夜に夢かや人の袖をかさぬる
よひのみ

かきくらす宵のまほろししみぬ程を夢をはかなみ猶歎ける
又とたにたのめぬ程のよひのまのやみはうつしも定めかれつゝ
人しれぬまたいかさまの道もかなまたうちもれぬ夜半の關守
あかつきの別までこそかたからめまた更ぬ夜の夢そはかなき
宵のまにあはれまされの隙もかな立やすらは人もこそしれ
物かたり

年をへて思ひし程の心をはかたりあらはす言の葉もなし
いかにと思ひこしかた行ききかたるばかりに鳥はなくなり
これきけようき節々をかそふれば人のつらさにいひそくらふる
つらかりし日頃をかたるむつことになきみわらひみ明す夜半哉
あかさりしその古へのふることを語りつゝけてれをのみそなく
ちかくてあはす

あしあきのましかき中のへたてこそつらき心のおくはみえけれ

夫

よそながら朝夕かはすから衣さて我袖やたいにくちなん
さてもまたな逢事はかたし貝ならひふしても何にかはせん
露時雨色にみせてもかひそなきほとはこゝの森の言のは
いれ紐のさすかににみえながら解ては人のぬる夜半そなき

人をまつ

まつほとはさすか命をいけれとやとはぬ物からたのめ置けん
山のはに出つる月をおしむまでなをさりとともと君を待哉
月影はまたれぬこゝろもある物を人くるしめのよひくそうき
くるはよもまことならしと思ふにも猶夕暮そしつ心なき
いかにせんさはかりいひしかれことを我待をれば夜も更にけり

またす

山のはにはるかに月の更行もまたれしまての恨なりけり
わすれける時としらてまたれこし夕くれまでもうらめしき哉
今はまたとふへき物とたのまれは心さほかぬおきのうはかせ
またすしもあらてや夜半の明ぬらむ思ひ絶ては門させれとも
をのつからとはれしまての夕くれそ月を待とも人にいひけん

人をよふ

長月の秋の夜風のとこさむきませ我せこころもかされむ
かりにたに君きまさなんかきほなる草のたもとの風につけても
人めこそあしかりけらし難波めかこやといへとも出そわつらふ
たつ今なかつの山もよしさらばあはぬ契に我そひれふる
よひかへせあなま悔し空みればまた夜深きにせなをやりつる

道のたより

たまほこの道のたよりにこといふも人のなさけの程はみえけり

夫

かはかりもいかてかみまし我宿の君が行來のたよりならずは
とほるい道のたよりとらむな思ふこゝろは殊更にこそ
これやその道さまたけの妹かせきおもひ出すはたいそ過まし
つれもなき人をとときはにこふればや春のたよりも空しかるらん

ふみたかへ

しほかれの難波の浦のちとりあしふみたかへたる路もはつかし
かひなしや人をとふとも我れやとてみるにつらさの増る玉札
我やとをきいたかへてそきたるらむあるへき物かけさの玉章
玉章の道のつたへの門たかへ人のたよりもあけてこそみめ
結びめのたかふもしらす文使ほかにみせずといふかはかなさ

人つて

なからへていける命のつれなきをきかるはかりの人つてもかな
思ひこしあはれそこの年月をいまいふばかりはやかたらなん
しなばうし又逢事をこの世にて今ひとたびと君につたへよ
をのつから妹かつたへの口まれひあらぬけしきもなつかしき哉
君かあたり行かふ人と聞しかば我ことつてきかにいひきや

わする

かみなひのいはせの森の夕時雨うつらふ色に戀つゝそふる
契りこそさても忘れめはてはまた我ならぬかと身をたとりつゝ
こねは又もとこし道も忘るゝかそれゆへならはしるへせましを
あはれなとたれうらめしき草のな思ひのきはにしげり初らん
から人の我つまならぬ家うつりそれをためしの戀もする哉

わすれず

ためしなくうきにつけても忘れぬ心よはさの身をくたきつゝ

夫

何ゆへとなげくあまりに恨むらんゆすられぬさへ人のとかいは
今も猶心にかゝるわかれかなかきやりし人のうしろて
あかつきのうきは別になりはてゝおもひ出るに人を戀しき
我はかりとかく思ふもくるしきにたいけに人を忘れはてはや

心かはる

夫

ますらおのすけのあみかき打たれてめをもあはせず人の成行
かみなひの森の時雨の色よりもあへすかはるは心なりけり
またれこし夕はいとなく鴈のつらさしらるゝ秋の暮かな
くまでこそ野中の水もかはるらめかけみしもの心ともかな
うちになく外にもあらぬ心はいづくにかはるつらさとみん
おとろかす

思ひかねみしやいかにと春の夜のはかなき夢をおとろかす哉
さらになをとへとはいはずうきに我たへてある世をしらす計そ
かきたゆる心の中のおやしさをさてもいかにとゝはれぬる哉
うきはうく又逢事のしかすかにたえぬきりの程もはかなし
たえぬるをさらはさてとも思はれぬあまりや今も人をとふらん

おもひいつ

さ・らい

今そしるおもひ出つゝさらしぬのさらにも人は戀しかりけり
草かけの夏野にふかき忘水たえまあれはや思ひ出らん
別せし曉かたの空みれはまた面影のたちかへりつゝい
夢かとも思ひなせともみし人を忘るゝまてのはかなきそなき
みし人を思ひ出しとおもふ身の心もしらぬ我こゝろかな

むかしなこふ

夫
石上ふるのゝ玉のかつらかけてむかしをこひぬ日はなし

夫

いにしへの雲にみてし夜半の月そのおもかけを今も戀しき
竹馬におきふしなれしそのかみの世々はふれとも忘やはする
さしもいまいとはれさりしいにしへを思ひ出ても老そかなしき
さればなないかにとすへき身なるらん昔といへば涙おちけり

むかしあへる人

きのうみの眞砂吹上ふく風のはやくあひみし人は忘れす
いかにしてをのかさま／＼年ふともありし昔のことをつてまし
ものこしはきゝわすれまし年月にお中なれける人のこゝろ哉
逢事はむかしがたりの夢なれとおとろかさばやおもひ出やと
哀なり幾とし月をへたてけんみわすればつる面かはりかな
あつらふ

夜半の月戀しき人の影みえは思ふ心をそらにつたへよ
心にもあらぬ世々にはなりぬとも今は夢とて人にかたるな
ありし世にさながらあらずかはる身をかくとつけこそ秋の山風
山彦もとほゝこたへよ煙たつあさまのたけに思ひありとは
いかさまに人我中をいひうとめさくともきみよ心かはるな
ちきる

にイ

なをさりの人の契りも中々にさためなき世とたのむ計そ
いさやそのかたみに契るあらましの叶はん迄の世ともあらねは
たのましよ身はあすあらぬはかなきの末の月日のむなし契りを
かくはいへとあらぬ契りに成もせば頼む頼みのかひやなからん
ありし夜に夢とや人のむすひけんうつゝともなき中の契は
人をたつぬ

草の原霜のふり葉も枯果て尋る道もえやはみえける

幾かへり思ひのみこそあるへとてそのほとまらぬ道まとふらめ
思ひたつ道はいかにとれきかけついなりのすきのあるし顯はせ
草わかき野邊もる人にも申すわれそのそこに妻やこもれる
さらにまた身を捨ててたつねとも待見ん人や世になかるらん
めつらし

夫
春ふかみをくれて咲るをを櫻めつらしとのみあひみつるいも
戀々てたま／＼きたるさ夜衣うちみしことも忘れにけり
かつみても猶そめかれぬまの薄初ほにむすふ妹か手枕
ふしのればめつらしけなき煙にてあらぬおもひそめには立ける
夏山の青葉の櫻みしたにもさこそいひしかましてわかせこ
たのむる

僞とおもひはてゝそ中々にたのむることも情なりける
たのむる命をさばのかれこともあまりになれは疑はれつゝ
思はんとたのむる中のまくれつゝいつことの色かはるらん
待もせよ行とも見えんをつからよも僞の夜なもふかさし
夜も更ぬ今はよもそとびひなからたのめし人のまたるゝやなに
ちかふ

いかにして心の末をあらはさんかけてちかひしきこもりの神
よしや我人は命にちかふともたのまでこそはなからへてみめ
さらは又神のみしめを引かけて末かなはすは何かちかひし
うき中によしなき神のちかはれてうけすやはる契みらん
わするゝなちかひし神の僞におもひなしてや人をとほまし
くちかたむ
我戀はほこのねちとふくちかためはしめをほりも人にふらせし

世にもらはたかみもあらしわすれぬ戀なよ夢を今に限に
白玉を露とも人にこたふなよにたたくひをあやめもそする
夢かたりおもひなよりそ君かなも我なもたてし夜半のうたい
かはなちのはにふのこやのかり枕夢になしても人にかたるな
人つま

夫
年をへて人すむやとの妻にこそまのふの草もふかくふけらめ
まれにあふ人のよつまのあらまはしたのみなからも心をかれて
哀れまたつくる心のよしそなきいもりのあるしそれとみなから
ぬしなくてさらせる布も有物を人のてつくりてなふれそも
我ものとおもひふせたる人妻はもとへはやらしたゝはこふとも
家とうしをおもふ

紅のちしほもさらに染あかしおもふ心のいろのふかさば
我宿の妹が手なれのますかゝみめつらしけなく猶みまくほし
たかやすのみもとは早く慣にけりみつからけこの備へをそする
衣マのあかつきをきもなかりけりともにあるしと契る夜床は
ものになれぬ家にある妹がたく柴のきをりに人を待やくふらん
おもひやす

夫
いは山のしほの下草やせぬとおもひにたへぬ程をふらめや
捨られぬ戀のつらさを身にそへてかけはかりにそはや成にける
ありしにもあらずなる身は下帯のゆきあふ程をまつうかひける
戀ゆへは我くるかみも色かへて心ほそさの身そよばりゆく
身を捨て後さへ人をこひなればさこそはねとかはとなるらん
おもひわつらふ
吹まよふ風さたまらぬあさちふのともかくにも露こほれつゝ

いかにせんいかにかせまし思はしとおもへばいと人の戀しき
まつもこすまたぬにもまたとほれけり人の心なはいさためん
いなせとも思ひきためぬ逢事を我心にもまたそまかせん
後の世のなげきと人の戀しさとかたつりならぬ身の思ひ哉
くれとあはす

いつまてか蘆荊をふれ行かへりつれなき江にもこかれわふへき
通ひくともそには人にみえなからよしなや何とつれなからん
わきもこか心をたて、横の戸のいたつらふしにあくるまのいめ
難波江をこいそとまりといはればやたないし小舟こき歸るらん
我戀はきそのあさ衣きたれともあはぬばいとむれそくるしき
人なとむ

あけぬとも急きかへるな磯かくれ汐のひろまもみるめかるへく
明ぬともまれなる中の逢坂はせきとて人^{のイ}やとめさるへき
かへるさをあまつみしてまてまはし濡なは袖を人そあやめん
あかつきの鳥の心やあはすらむわかれなつけぬ逢坂のやま
明すきて人も歸さぬ今朝こそはいきたなき身のとり所なれ
といまらす

といまらぬ心つよさは梓弓引くらふへきためしたになし
曉のなき夜ともかなといまらぬ心つよさをなからへてみん
まはしともいふかひそなきおきかけて追手の風に出る舟人
大る川なをこのくれのな^{つなはイ}いあれと引とめ難きせいのいかたし
峯たかみ岩間をおつる山水のせきとめかたくいぬる君かな
名をおしむ

わすらるうき名はかりのおし^{きイ}さたにいかい心に淺くなげかん

あさましやうきなすいかぬ濁江にもかりを舟のまたやかよはむ
いとほるうき名なかな涙川我戀しなは水はまさらし
くち行をおもふもかなし名取河をしかりぬへき瀬々の埋木
人まれば我いもこふとふこそ世をすつる名をおしむ成けれ
おします

命たにおしまれぬまで戀倦ぬましや我名は世にとまるとも
なとり河さてもくつへき埋木のあらはれてたいこふとふらせよ
そいやりけり明るれやまの郭公なのりあつそまのはきりける
契りあらはたいながしてよ大ぬさのつゐによるせの浮名成とも
命たにおもひかるめて過す身に名のたつ事の何かうらみん
なきな

いかにせんなきななかなす涙川つれなくせかんふからみもなし
よにはよなふつむ我身ををきなからうき立ぬるは我名成けり
まはしみよ我みやま木に降雪の花のあたなほさてもとまらし
きえかての雪まもかなし春の野にみえぬなきなを誰まざるらん
いひたつる人の儂おもふこそわかなきなよりかなしかりけれ
わきもこ

鹿のたつ山の猶夫のねらへともまたわきもこにあふ夜半そなき
歸るさはあゆめくろこまわきもこか待らんきよの更もこそすれ
われをのみたのまさりけりわきもこかかたならぬ袖のすみ哉
行水のわきまはかれとわきも子にいほて思ふとふらせばやせん
はかなくも我たふろかす吾妹子とふりなかなと戀しかるらん
わかせこ

思ひあらはたのめすとても吾脊子は今宵の月にきまさいらめや

今こんといひしわかせこそそのほとい月日かそへて待かくるしさ
まきたへの床の秋風寒き夜になと我せこかきまさいるらん
うらまきに今かみゆらしわかせこかくるや夕のさいかにのいと
わかせこかこんといひしにたかはすはこの夕暮や山路こゆらん

かくれつま

夫

乙女子かあはせ衣のかくれつまうすきちきりというらみ侘つゝ
こき返るみしまかくれのもかり舟ほにはしこふな^{るい}ふれすのみ
よしや又造り重ぬる軒はにてこなたのつまはみえはこそあらめ
冬の池のには下道さのみやは水をふかめてかよひはてなん
もろ人のその日もそてはみつれとも猶ゆかしきはかくれつま也

二なきおもひ

たくひなく思ふ心のためしとて野中にたてる松の一本
昔より戀と思ひもきいなけとにたるたくひは世にあらしかし
一すちに戀やわたらむひたいくみうつすみ繩のあとにまかせて
君にわきて逢みん事を思ふにはかへん命もまたふたつなし
空にまれみつといふ水にかけうつす月はふたつもなき思ひとは

今はかひなし

逢事の心よはさのわれからを今はかひなき音になかれつゝ
今はわれ悔しとたにも歎かれすいふにかひなき音のみなかれて
あひみての後ばなにせんさきたいぬくひの幾度かなしけれとも
戀志ぬる後をはちてあふまての命をおしくおもひける哉
なといひかとも思はし今はたい人のつらさを身のとかにして

こん世

こん世にもまためぐりあふ契あらはおなしつらさを猶や重ねん

いさいらはこん世を後の契にてうきをもうしと思ひとかめし
いにしへのむくひに今もつれなくは後の世とてもさそな恨みん
めぐりあはんこん世のやみの契を夢のうちにや結びをかまし
いかにせん戀と思ひと身にそひて來ん世のたきいけつ方そなき

かたみ

夫

おもひかれなれにし人の形見とていとほるゝ身を先やまのはん
おもひ侘たえ行中の形見とはなれし我身のたのまれやせん
ふひ／＼は頼むかた見の夢^{にたに}たにも心やすくはえこそあひみね
かたみやは何かあたなる秋の夜の月に心のとまるちきりは
侘つゝはわするゝ時もあるへきになにしか人の形見とめけん

玉くしけ

玉くしけ明ぬ暮ぬと歎つゝ身をばむなしく過んとやみし
玉くしけ明暮つらきうき世をば二道にのみうらみてそふる
侘つゝは雲たにおほへ玉くしけ明ぬ空とはいひもなすやと
玉くしけふたりぬる夜もある物をくちきよらかに何かいとひし
たいさらば夜ふかくかへれ玉くしけ明は君かなたゝまくもおし

玉かつら

夫

夫

たえずなく涙の露の玉かつらつらきいろはかけはなれにき
末なかく頼みしかとも玉かつらいかなるすにかけはなれけん
としふともよも絶はてし玉かつらむすふくみめのなかき契は
なかつてふ契ともかな玉かつらかくるたのみはおもひいてき
玉かつらわたりをいたみ今は身にかかはなれても見えぬ君哉

かみ

いかにせん逢のかみの秋の霜身のいたつらにふりまさりつゝ

するすみにまつばれ懸るおち髪のとかくに物のうるさきもうし
ふりかくるひたひの髪のかたみたれとくとたのむる今日の暮
人とはいかいのはへん朝れかみけさ手枕にたはつけにけり
うきすちと思ひきりにしくろかみのみたれは今も心なりけり
もとゆひ

霜雪の色にそかはるむらさきのわかもとゆひのものと身にして
けちかめる我もとゆひの霜みればあらはにとしも老にける哉
ゆか近くおちてといまるもとゆひはうちそなかれぬ人の形見に
もとゆひの妹かたなれの一むすひうしろめたくや解んとすらむ
世ないとひ今はといきしもと結のそのきはまれる人はなかりき
くし

明發てさしくしもなく成にけりたけふのせうのととせしまに
君にをきてみせんと思ひさしくしを朝夕人に誰かとりけん
つゝみあまり人を心にさし節のかたはしばかりいひそしらす
逢事なとふやゆふけのうらまさにつけのを櫛のしるしみせん
世中に今は我身のもつくしそいたつらものゝためしにば引

たれもげにてにとる玉のみえればや世を照してはある人もなし
いにしへのさつけし玉はわたつみのしほひしほみち心成けり
涙こさは袖はぬるとも磯に出て玉やひろはんわかせこかため
たをやめのかさすかさしの玉ならは光を花とみえやまかはん
たか山のみれにはたほこわれたてゝみかける玉はよの人のため

玉のを

なかいらの人の心もみゆる世に涙のたまはをたえさりけり

和歌の浦にあまのたもてる玉のを長くは捨ぬ世にもあはなん
身につもるそこらの年をいかにて思ひしよりもなかり玉のを
かれてよりたゆとはいはしをのつから玉のを解ていつか逢みん
くる／＼も人たのめなる鈴のをは永き世すくふはんせん也
玉たすき

まれにのみあひみる中の玉たすきしけしきそ苦しかりける
しつのめかあさてほすてふ玉たすき思ひ掛ればちかふ世もなし
賤のめかせばき袂の玉たすきひきはりなるはかくる身のほと
ねたけなる賤かあさての玉たすき誰にむかひてわきをかくらん
玉たすき十つゝ十をかけてこそひとつさとり世とはなりけれ
かいみ

いくたびも心をかけますかみうらにはかけのうつる物かは
みかりせぬ野守の鏡時にあはてうつし心もなく／＼そふる
いかばかりみかき出けんあきの淵の水とすめるますかみ哉
すて果ぬ影はつかしき古鏡さもそおもてはつれなかりける
くもりなきみつ鏡のとりにみまかくひある御代とこそ聞
まくら

おそろしやつけの枕のあらつくりかとある人はとち頼まし
ますらおも枕をたかみやすき世にひとり歎はぬる夜半もなし
とはれぬにやすき心のあらはこそ枕さためて夢をたにみめ
とちをける枕さうしのうへにこそむかしかたりの夢はみえけれ
したへの枕を寒みめもあはてぬればや人の夢にたにみぬ
手まくら

あたになく露もちらすな若草の新手枕のかはすばかりを

たまきにかはすも袖はくちぬへし涙をかけてむすふ手枕
袖かはす夜半の手枕いつかたにあかぬ涙のぬれまさるらん
をのつから幾世なふとも手枕のあかぬ契にひちやくたさむ
手枕のかひな／＼も世にあらは心よはさそ人に見えまし
はた

あさはたになるてふ布のぬきをあらみ夜半の嵐も君やふせかん
山みちやみのゝひろきぬをるはたのをよひくるしき戀もする哉
ふくれつゝ秋のみけしを染はたのなるてにあかす立あらし哉
山かつのをさのあらみのばたなれと音はまとをに聞えやはする
山かつのあさてに搦てなるはたのおさ／＼しきは我身なりけり
ころも

いかにせんかけし衣のうらみてもたまなも玉としらぬかなしき
つかふとてきしや衣のさかさまに年へゆかなん今になるやと
うき度にあまり涙をしほるとてすみ染衣袖そはつるゝ
峯たかみ天のかこ山白妙のたか衣手を雲にほすらん
うき世をは空とひ別いとふかとあまのは衣よれにかきなん
しほやき衣

いつかわれしほやくあまのふち衣なれ／＼しくも妹にあひみん
しかのあまの鹽やき衣からくしてよをみることもまとを成けり
あまのすむまかきのしまの涙のまに鹽焼衣かけてはしつゝ
いたつらに鹽焼衣のれてのみ哀なるあまのなりところかな
もしほやくあまつさ衣いかなればなれても人のまとをならん
夏衣
わかせこかけふたちきたる夏衣人の心のうらなくもかな

をのつから我たち出る夏衣世にうすくのみ成身なりけり
わかせこかさらすてつくりぬきをうすみ夏の衣にをれる成けり
すいしさは時しもおなしせみのほにあつらへてけるうす衣哉
世を安み民のわつらひかへりみてひねりかさねはさる人もなし

秋衣

七夕の秋さり衣さりかたき契もいかにまとをなるらん
秋くれば露も時雨も身にそひて我衣手やほさてやみなん
衣手の涙をいつちせきやりて秋のをさける露のほとみん
露わけの衣ならねとわきも子か秋は紅葉の色に染つゝ
秋風はそらはた寒しいさこよひいもか衣手引かされてん
衣うつ

秋ふかみむへ山人のあき衣うちたゆむへきかせのなとかな
誰かまた霜さえわたる月の夜に衣うつとておきあかすらん
しつのめかきなれ衣の秋あはせばやくもいそくつちのをとかな
秋さればにきはふたみの里なれと音はさひしくうつ衣かな
山ははやうす紅葉せり麓なる晚かさ衣うつさかりはも
かり衣

色々の柳櫻のかり衣たちましろひしむかしなをそ思ふ
おきなさき野邊の御幸のかり衣世に立出は人やかめん
かり衣わくる野山のしはすりにうつるふ露の色をみたるゝ
草の葉に袖つくみちのかり衣いかなる露の色にそむらん
ますらおかかり衣いとさむしす点のはらのゝ木枯のかせ
すり衣
すり衣たゝぬ目にこそ成にけれ道行人もまつ心せよ

夫

しのふてふたゝしほのすり衣あさき物ゆへなにみたれけん
 そのかみにみし山あるのすり衣色のときはにわすれやはする
 梅かえの一しほすりのをみ衣色 こきよりもめにぞ立ける
 まはきもてする衣は身にちかくかけしよ人の秋もうらめし

あさ衣

夫

夫

夫

夫

山かつのしつのおさ衣みしつつき草とる田ぬにたゝめ日はなし
 やまかつのさくらあさもてなる衣花のたもとの名をや立らん
 まとななるしつかうみなのおさいれに心とうすきあさの衣手
 しつのおかあつまからけの麻衣ふたまた河はさそわたるらむ
 我身には又うへもなきあさ衣あさましけにも人の見るかな

かは衣

夫

夫

夫

夫

夫

わさつのをかたにかけたるかはひしりけふのみあれを待渡けり
 山ふかくをこなふ道のかは衣よものかせきもきてなれにけり
 秋のきて風はたさむくなりゆけは身になれそむるかは衣哉
 やまふしのすかたげとなきかは衣心こほくも身にそはぬかな
 谷ふかくかはの衣に身をかくしうき世隔る雪の山人

ぬれきぬ

夫

いかにせん身にはきなれぬれ衣のほすへきかたもしらぬ袖哉
 まことなき名に立ながらぬれ衣のきては袖こそかはさきりけれ
 露時雨何につけたるぬれ衣とそのゆへしらはほしもしてまし
 世中にうきぬれ衣のはたはりほのへもしめもせられやばせん
 身をけかすのりのぬれ衣かはくまもなくく歎我うらみかな

さうの衣

夫

色ふかきのりの衣のすみ染は三世の佛のかたみにそきる

夫

あさましや賤かゝるものととき衣ふみあらば人は人もこそしれ
 さためなく時雨る空の幾度か山分衣ぬれてほすらん
 きならしのあまのすさひのすて衣ひぬたにあるを猶やくたさん
 今ほわれぬしなき野邊のすて衣とりきてのみそ世を過すへき

ふすま

夫

夫

夫

夫

神無月ならのみやこにをくるてふふすまも年をかされつる哉
 こほりしもさこそさゆらめ鳴なしのふすまたに猶聞寒夜に
 闇の上に幾重の雪をかされきて夜半のふすまの寒まさるらん
 袖しあれば重てもねん何かその物はつかしのふすまおほひや
 きん人のまたらふすまのひと色にならてやつるに心みたれん

裳

夫

夫

夫

夫

夫

わきも子かみものひきこし長夜をかけてそ契るあかぬあまりに
 ひき掛て思ひなよりそあからものあからさまにも人しりぬへし
 たなやめのうはも染てふうす色のうすきを夏のしるしとやみん
 たかためもなき契をわきも子かうはものすそのためにしにそ引
 吾妹子か赤裳たれひきおきていなほしぬとやたに我戀おらん

ひも

あひかたきやまきのりの花のひも結ふ契りはむなしからしを
 契なも度々むすふあかひものうたてなかくもなとわすれけん
 さよ衣ひものとのちめのいとたえてさし入人を我やとはなき
 わきもこに手枕はかりいれ組のさせるかひなきうたゝねやせん
 むすひてし我下ひものといけ行はあやしや君かくへきよひかも

おひ

むすひをなく契りたかふな下おひの又おなしよにめくりあふまで

夫 今さらにむすふ契りもたのまれず人にとけゝるゐての下帯
いのれとも神はうけすやひたちおひのむすほゝれても過る年月
夫 おりしもあれえやは心をかけ帯のいもぬは胸のへたてなるらし

ひとり

思ひきや我身しつめる石の帯のうはてに人をかけてみんとは

夫 徒にとはれて深る空たきのひとりにこそこかれわひぬれ
夫 たきものゝくゆる烟の下むせひ我ひとりとや身をこかすらん
夫 たき物のひとりのおきのいきなからはひまされても世を過すらん
夫 思ふことふところふかきたき物のひとりのけふり行かたやなき
夫 もろ人のとるやひとりの先たてはのほる乙女の香こそしるけれ

ことのは

夫 世にふれはたゝなをさりのことの葉も情あるこそ忘れかたけれ
夫 代々かけて思へばとをしあし原やなかつ國よりならふことのは
夫 うつろふは心の中につらさにてさてもちらさぬ人のことの葉
夫 秋風にちることの葉のまゝならは心のいろもえやはたのまん
夫 いつはりの人の言葉心せようみなさへやく火ともなるなり

ふみ

夫 ふみをきし昔の跡のなかりせはいとゝこの世の人やまよはん
夫 うたてなとやまとはあらぬから文の跡を學ばぬ身と成にけん
夫 ものゝふの八十うち文はかたゝにゆき別れぬる跡をみえける
夫 はてはまたしみのすみかのむかし文拂へはちりとみるそ戀しき
夫 春はまつ御調をなふる國文のさしていくよも君のみをみん

こと

夫 夏くれはあつまのことのあしつなによりかけてける藤なみの花

夫 世にたえて音たにきこえず涙のみ玉をことのあとばあれとも
夫 俗人のたなれのことの音に立てうき世を秋のしらへなをしる
夫 秋よはひたつることちのなあはせのたいせめにのみせめも行哉

笛

夫 玉銚の道のちまたに吹笛も心ばかりほゆかぬものかは
夫 世中ほうきふしに吹笛のあなむつかしや音こそ絶せれ
夫 ふきたつるとなりの笛の聲高みわかしきたへもちりばららん
夫 みまきの草かる笛のわらはこゑあなかまとのみよそへてそ聞
夫 うしによりまきのうなひか吹笛は深きさとのしるへとそきく

ゆみ

夫 いかにせんしなのゝまゆみ年をへてなひかぬほと心のつよさを
夫 引かへしえやはうらみんあつさ弓戀しき方の心よはさは
夫 つるなれぬあらきの弓のそりたかみさて徒にひく人そなき
夫 徒にまたてもふれぬそりま弓人はをしたるはりことなせそ
夫 いまのよや弓の心もあらはれてはなつ矢すしのちかはさるらん

や

夫 ものゝふのおふてふやのゝたむれともなをすくならぬ我心かな
夫 おひぬれはのやにさすてふつの鐘をうゝしくそ早成にける
夫 人心たのまれかたききつれやはたゝそのまゝにまた音そせぬ
夫 今日ばみなゆたちのいての外までもすゝのいた付腰なれにけり
夫 空にきく鼓のこゑのなかりせは身にたつ矢をはいかてぬかまし

たち

夫 から國のふたへのたちは昔より君のまもりにしためをきてき

つるきたちもろはのときか上よりもふみとめかたき世にも有哉
 かちやなるたちのやきはの早くより思ひきりてし此世ならすや
 世中を思ふ心もほそ太刀のさやは丸えかつまりはつへき
 山ふかみ松のおふてふ岩か根におさめし太刀はいもそしるらし
 夫 夫

かたな

何事を思ひけりとしられしなふみのうちにも刀やはなき
 捨やらて身はさび果ぬふる刀さすかに世をは思ひたてとも
 今はわれまるはにとけるこし刀世につかはれぬ身とそ成にし
 やまと歌のこしはなれたるさび刀さも世にたすきらもなき哉
 かちときのまたはあはぬ小刀の世にたいてこそ思ひ怪しか
 夫 夫 夫 夫 夫

さや

いまほしもさそしりぬらんしりさやのさしも心に思ふけしきは
 徒にあれはありとてかりさやのまことのときはいるみともなし
 つし祭りふなはれともみせさやのさきおりかけてねるや誰子そ
 かつはまたさすさやくちにあふひつば心ありけるかなつくり哉
 みるもうしみたをたのむといふ人の萬の法を思ひかけさや
 夫 夫 夫 夫 夫

ばかり

たれもみな心にかけておもへかし業のはかりのおもさかるさを
 世にしらぬ我身のうさの数々はなにのはかりかかけあはすへき
 民のにと秋おさめするいなばかり年ある御代をかけてしるらし
 あし引の由にかけたる水はかりかたさかりにもおつるたさかな
 めにみえぬ心とかのおもはかりかいらむ後の世をなげくかな
 夫 夫 夫 夫 夫

あふき

日くるれば軒にとひかふかはほりの扇のかせもすしかりけり

かくれける月にたとへし扇こそふかぬ風をも又おしへけれ
 てにならすあふきの風はかよへとも草もゆるかすてる日影哉
 面影を半かくせるさし扇さてもひかりこそふ心ちする
 ひのおものまかりなつけしたをやめの扇の音もえやは忘るゝ
 夫 夫 夫 夫 夫

かさ

ふりやまめ雪まの梅のつほみ笠おもふ心のいつかひらけん
 雨過るとやまの道の木くれよりしからさかさみえかくれする
 おほきみのみかかさのかげのひるければあめの下には誰か頼まね
 さりとてもさせることなきつふれ笠骨をおりてそ君につかへし
 なにせんにわれかかさすらし袖笠の下にそ涙雨とふりける
 夫 夫 夫 夫 夫

みの

かくれみのうきななかくすかたもなし心に鬼をつくる身なれと
 かち人の野分にあへるふるみのゝ毛をふく世こそ苦しからめ
 村雨に野邊のさゝめを分行は重てみのなきる心ちする
 きまほしき世のうき時のかくれみのなにかは山の奥もかひなし
 世を捨て人にもみえずしられれば我こそ今はかくれみのなれ
 夫 夫 夫 夫 夫

かたみ

いそなつむあま乙女らか花かたみうらはの涙のかげやそふらん
 色々につみこし物を花かたみはななき時のなにこそ有けれ
 つみにこしなにのわかなも思ひ果てかたみむなしき春の野へ哉
 めにあまる涙とやみん草の葉の露をきながらつめるかたみは
 をのつかからかたみにもらぬ水はあれと命の留る世やなかるらん
 夫 夫 夫 夫 夫

つと

いかにして都のつとにつゝみもていにもみせんまつかうら嶋

たひの空その名きこゆる海山を都のつとにうつしてもみん
まはしとて山井の水をむすひつゝかれいひのつとを取て出つる
都にてとはい語らんをくろさきみつのこしまにつとはなくとも
暇なみおこなふのりなつとにしてつるの道にはかては思はし
いろ

もろ／＼の色に心を染をかしうき世にめくるあるへ成けり
うれしきもうきも身にしも時ことに色なる物は涙なりけり
春といひ秋とこそふのかはるにもいろはむなしき物とこそみれ
うつろへる人の心の花にこそ色のちくさも染あまるらめ
世にはけにまさしき色はなけれども見る物からなをそれといふ也
くれなゐ

いくかへり染て色こきくれなゐの文みし跡も今はたえつゝ
紅のすゑさくはなの色ふかくうつるばかりもつみしらせばや
くれなゐはかれ行秋の色なれば袖を涙もさそなうつろふ
あさなく／＼すゑつみはやす紅はちしほの色もかれてみえつゝ
春はつゝし秋はもみちと紅の色こそすつる時なかりけれ

むらさき
みとりよりふかむらさきの衣までつかへしこともむかし成けり
むらさきはなへくらゐの色なればこきも薄きもうばき成けり
紫の雲のふそにやおもはましすてめちかひのかゝらさきせは
むらさきのねそめんこともまたあらすまたはう色の徒にのみ
忘れめや紫生る野へにさへまはしなれともありしかなしき
くちなし

ことのはにいはいなるかになりやせんくちなし色にさける山吹

いかてかは我とはいはしくちなしの色をその名に人のまりけん
こはた山あるはさなかくちなしの宿かるとも答へやはせん
いかなれば言の葉交るくちなしのさのみもいはぬ色にさくらん
くちなしのいはてそ人は悟るらむことのばなれてある世成とも
みとり

年をへて色もかはらぬ高砂の松のみとりは誰か染けん
山陰や水又水のふかみとりかはらぬ色にたれかそめけん
誰かまたかはらぬ色を久かたのそらのみとりに染はしめけん
ときは色のちしなのみとり神代よりそめてふるえの住吉の松
かたふちの水にうきたる青みとりなになれたれともなき世成けり
にしき

世中にまれなる色のこまにしきいかなるこまに妹をあひみん
からにしきたつた山とは春秋の花紅葉にやいひはしめけん
故郷にまたもかへらはのちの世に千重のにしきをきても何せん
錦木にまたもなげきの数そひて千束かきらぬ妹か門かな
夢にみし夜半の錦のたゝまくにほかなや人のなとまひけん
あや

わきも子をみしはきのふのくれはとり生憎になと戀しかるらん
ふきまよふ風にたいよふ雲とりのあやうやうきて世を過る身は
秋のかりつらもみたれすおり出てそめなす春の水の色哉
かくしこそ手引の糸をくれはとりあやともはては成にけらしも
もいしきや大内山のうしとらになりへのつかさあやたてまつる
いと

我戀は賤のまけいとくりかれていかなるふしに思ひたゆらん

夫 一すしに心も今は去けいとのうきふしかちに世になりしより

われかくてわくてのいとて夫の幾めぐり命なかくも年のへぬらん

さのみやはさすかにたえぬまけ糸のふし／＼多く思ひみたれん

わた

夫 敷島のやまとはあらぬから人のうへてしわたのたれば絶にき

夫 するかなるふしのくわこのにぬわは高根の雪の色に似るらし

夫 秋の来る夜半の衣の一重わたひとへになをそ風は身にしむ

夫 人ふれぬいもか衣のつまわたはさしも思ひの数そかさなる

ぬの

夫 さも川にをりはへさらすてつくりは波のかけたる色かとそみる

夫 うらにあふとなみのあさ布とちかけし宵曉もそのかみのこと

夫 いかにせんかたびら布の片よりは身をかくすへき物とやはみる

夫 たち縫ぬけふのはそ布むれよりもかひある市にいかいあひみん

夫 今はよにあるも稀なるおくぬのもちひられしはむかし成けり

新撰六帖題和歌第六帖

はるの草

ふゆの草

さうの草

あきはき

玄のすゝき

きく

はちす

はなかつみ

ぬなは

うき草

玄のふくさ

なき

たまかつら

あをつゝら

つはな

をはき

ゆり

なつのくさ

玄たぐさ

やまふき

をみなへし

おき

かるかや

かきつはた

あし

ねぬなは

つきくさ

ことなし草

たて

くす

あさかほ

あちさひ

わらひ

あぬ

あきの草

にくくさ

なてしこ

すゝき

らに

かや

こも

ひし

あさゝ

わすれ草

せり

むくら

さねかつら

あさち

すみれ

あく

まさきのかつら

ひかけ さゝ よもぎ 玄は 夏むし すゝむし はたをり 木 あきのほな まゆみ かえ むめ さくら やまぎくも ふち 玄ゐ もゝ くるみ まき あふち

やまたちはな あふひ こけ むし きりくす ひくらし くも 玄をり もみち かえて 竹 こうはい かはさくら にはさくら たちはな なし すもゝ すき かつら かし

すけ みくり いちし せみ まつむし ほたる てふ はな はゝそ まつ たかな やなき はなさくら ひさくら あつたちはな やまなし からもゝ むろ かうか くぬき

つはき なかめかしは ひさき 玄きみ ゆつるは さなき ひなとり かへるかり よふことり さき かさゝき

かしは つゝし くは あせみ かたかし とり つる うくひす 玄き はことり もす

ほをかしは いはつゝし はたつもり やまちさ つまゝ はなちとり かり ほとゝきす からは かほとり くゐな

春の草

夫

山陰やつくりすてたるあらな田のこそのふる道にふける春草
ふられしな霞にこめてかけるふのをわが草下にもゆとも
雪消し野邊は霞にうつもれて猶下もえの春のわか草
雪間いそくかきれの小草をのつからめくむみとのこそその古道
もえ出し野邊のわか草今朝みればすいめかくれにはや成にけり

夏の草

夫

夏の野に草かるかまのかれよはみよにたえぬ身は長閑なりけり
夏ふかき山のかけ草とにかくにことのふけきは我世成けり
夏ふかくふけるかきほの草たかみかこふ置柴の末そかくる
さらにまた夏野をふけみ草なかの道のたゝちは行わすれつゝ
夏の日のすゝしくゐる尾上より山草かりてかへる里人

秋の草

夫

秋風のたえず吹しくあさちふにさもありあへて結ふ露哉
露けさは秋の草葉をたくひとてほすまもふらぬ我萩かな
露時雨なにこそかはれうらかる草葉はおなし色にそめつゝ
野邊みれば草のはつ花かた咲て千々には秋の色をまたしき
秋といへば色かはり行草の葉を露のをけはと思ひけるかな

冬の草

夫

かた岡の芝生にまじる志の薄霜枯てこそみるへかりけれ
霜むすふすゝいゝろにかるゝ冬草のなをたのみとなき世成けり
野へみれば花のさかりのすき果ておひさひにける草の霜かれ
冬ふけの霜をいたゝくつくもかみ見えしすなきたはれ草哉
草はみな冬かれわたる冬のもりいかにすみかのさひしがるらん

ふた草

夫

おもひかはなみの下草よといもみたれ侘ねとふらせてしかな
やけおれのそはの木陰の下草のふきふせられて世は過ぬめり
櫻あさのふけみにまじる下草の我とは世にも出かたのみや
おほあらしのもとあらの下の埋草さもおひらくの末そいふせき
なきわたす霜のたいちやうとからし森の落葉のふかき下草

にこ草

夫

なく霜にかれにけらしなあしからの箱根のゑろに茂るにこ草
あし垣のなかのにこ草まちかくて茂るおもひのほとはふらなん
河風もあらたつ夜半のにこ草のにくきよする波のまそなき
にこ草なつむやかたみのめな荒み荒きを見てはたまりやはせん
いかにして垣ほに生るにこ草のにこ／＼とのみいもあひみむ
さうの草

いたつらにふるの

夫

いたつらにふるのゝきはにかる草の心つからやよをななくへき
みつのゝやまきのひつきのかり草の束のまもなし戀のみたれは
かつまたのいけるはなにそつれなしの草の扱しも生にけるみよ
見ま草はくるともからむみこもりのあかひの岡のことの繁くさ
露まけき家のそのなるもゝ草もゝよいも戀袖ねらしつゝも

やまふき

夫

山吹の花のさかりはよし野河ゑ手こす涙も心あらなん
君みすて散か過なんふる里のみかきにさける山ふきの花
いつくにもさくや山吹みる人はこゝにあてとやまつおもふらん
春にあふ花もよしなし山吹のさき出ぬへくおもふ世中
山吹はいまさかりともあちきなくいはしや春の暮もうらめし

なてしこ

みてもまたあかむ物かは撫子のほつ花なひきをける白露
山かつのかきは露もわすられす思ひよそへしやまと撫子
やましろのとはにみてしか敷島や大和なてしこ花のさかりな
うへなきし庭のとこ夏ませゆひて花も手染の色かとそみる
なさけなき人にみせはやおりふしなすくさすける常夏のはな

あきはき

いもさそひあすもきてみん置露にちらまくおしき秋はきの花
このねめる朝風さむしきぬかたの野邊の秋はき今さかんかも
露分て秋はきたれと故郷に人もすすめぬ庭のはきはら
萩の露おれは衣にこほれつゝ玉にはぬかめ色そうつろふ
たかまとの尾上の小萩うつしもてまたみぬ人に袖やかさまし

をみなへし

長月のすゑ野の霜になとろへてさかり過たるをみなへし哉
おらてたいよそなからみん女郎花花のすかたのやつれもそする
立歸り猶こそみつれをみなへしとりもたてるうしろめたきよ
駒とめておりてやみまし女郎花なにあつてもさそな我身は
いさいらは袖にかけてんをみなへし此世のさかの秋のふら露

すいき

秋風に露はみたれぬ花薄はむけのいとぬきあへぬまて
うくつらき秋のさかのい花すゝき草のたもと露やかはかぬ
暮にけりなはなかりふき今夜もや露ちる庭に獨かもねん
夕暮は吹もきためぬ秋風にまねくすゝきの袖かへるみゆ
秋をへてまける宿の篠薄ほにはまねけとくる人もなし

まのすいき

里とをき山のかけのまのすゝきほにこそ出れ身をなげきつゝ
おれかへりまのひにまのふ篠薄心のうちよいかいくるしき
まのすゝきほに出やらぬ草むらに秋のさかりとをける露かな
秋かけてやゝ露ふかき篠薄我がまひちと誰かわくらん
みまぐさに幾度かりつ又はへのまのゝすゝきほに出ぬまな

おき

老て聞萩の上葉の秋風はありしよりけに涙落けり
きははよと思ひてうへし萩のはの初秋風は袖ぬらしけり
心とはなとつれもせて吹風のとへはこたふる庭のおきはら
吹すぐるはかせはさても萩はらや猶ともすりのをとのはげしき
いかさまになをまた物をおもへとてかきはの萩に風の吹らん

らに

から衣すそのに匂ふふちはかまふみらしたるまかの路かな
紫をくたくあらしはまたたいて野をさかりなるふちはかま哉
今朝はまた誰きてみよとふちはかま主めく露のつかりふつらん
むらさきの色そめはてぬふちはかまうすぐや草のゆかり成けん
秋の野に今さかりなるふちはかままたきてみれと飽れやはする

きく

霜をけは一夜ふたよにうつろひぬ竹のまかきのふらきくの花
さきはつることしのはなの白菊はうつろふよてそかきり成ける
目かけにはまたそうつろふ朝霜のまほしまかきのふら菊の花
たてなから籬のきくのつくりはな心つからのいるとやはみる
ことならはなにかはあたにうつろにんちらて久しきふら菊の花

かるかや

嵐吹岡邊に茂るかるかやの上葉の露はまつみたれけり
とにかくにみたれにけりなかるかやの我心にもあらぬものゆへ
露ながら野邊のかるかや秋風のふきのまに／＼さもそみたるい
おれかへる下のみたれに埋れてほにかすかなる野へのかるかや
あはれうき心の亂おもふにはなをかるかやもたくひとはみす

かや

霧深きまのゝかやはらをまかけのほのみしより身をば放れぬ
はた山の尾上つゝきのたかゝやにふすあありやと人とよむなり
まつのおかかやなをかをなつかれつゝ夕暮いそきかへる空かな
まけしとはよもいはしろのをかを原かる人多きよものつかれに
河上のれしろかやはらされ／＼てはてには君かよりかにたにこぬ
はちす

すましかれ心の水はにこるともむねのはちすはひらけさらめや
世にこゆるねかひはむねの蓮にてたのむよりこそ又むかふらめ
はちす葉に物あらかひのなかりせば露を玉とてみるべき物を
露やとすきりもあるを花はちす猶玉こすやうきは成らん
大空にみちたるはすの花なれとむねにおさめぬ人はなき世そ
かきつはた

霞行野さはにさけるかきつはた人の心をへたておほかる
池水にまつ花さけるかきつはたひろさうるひの春をふるらし
みれば猶色なつかしきかきつはた我袖すらんはなはちるるとも
沼水の底はへたてもなかりけりいはかきつはたかけうつせとも
おく山のみこもりぬまのかきつはたへたてはてはたる我世成けり

こも

山城の淀のみこものかりの世にあはれこゝろのみたれすも哉
風むかふはをふれのほこもいたつらに吹立てられて世は過ぬへし
今もまたよとのにむかふこも枕たかにえ人のあわさ成らん
かりてほすよとのまこもあみいとちかひめのすきめおほきを我心かな
をのつからとふのすり強いくふとも誰にかわけん思ひたえにき

はなかつみ

ぬま水のその心は花かつみかつみる人もふられさりけり
よしや唯かりにもよろし花かつみかつみなれなば亂れもする
都人きてやはとはん花かつみあさかのぬまの程となくして
花かつみかつみたれ行ぬま風に露やあさかの名にしおふらん
くるとあくとうつる心の花かつみかつみにつもる罪そかなしき
声

小船こく堀江の芦のまけき世をなにとさはりてそむかさるらん
人なみにさても世渡る流芦のうきふし／＼はなきになしつゝ
まほれふすなにはの芦の下みたれかくても船のさばりかちなる
難波人かるもひまなき芦のはなさのみやほさんやへふきのため
難波なるみつめに人はみえしとてあらしともいへは菊かゝる鴨

ひし

水草あろいり江のひしのつる絶す此世をふかくおもふはかなさ
いかにして池のひしつるうきことは始めもほとも思ひわくへき
いかにせん人えれぬまのみこもりひしの下ねのたえぬ歎を
みさびまほる菱の浮つるとにかくにみたれて夏の池さびにけり
古郷の池におりたちとるひしのすみきひしくはなき身成けり

ぬなは

夫 風吹は波にたふふうきぬなはうきながらやは世をつくすへき
夫 はらの池の水さひましりの浮ぬなは我にもあらす世に紛れつゝ
夫 古川のまけきぬなはにつなかれてなかくもやらぬせいの埋木
こもり江にまつみたにせぬうきぬなはくるしき心いや重ぬらん
いと我今はぬなはのおしければあひにはあはし戀ばこふとも

ぬなは

夫 いかにせん沼に生てふれぬなはのななきうらみに命たえなは
うきにのみ生るぬなはななきに思ひみたれて年ばへにけり
くる人もなき物ゆへにぬなはのながし夜を待あかしつゝ
夫 秋の夜の月をみにくる人さへにぬなはたえぬむる澤の池
いたつらにつれなき人にぬなはのれなくや下の思ひみたれん
あさ

夫 水まさるぬまのあさのうきてのみあるは有ともなき我身哉
夫 池水に生てふ草のあさのみうきはならひとぬらす袖かな
夫 おもふこと底ふかいらぬうきねより心あさのさてそおひぬる
みればまたあさ生てふ澤水は底の心のれなやあらはす
夫 君といへば生るあさの池水にうき／＼とのみなる心かな

うき草

水の面にぬさして生るうき草にむなし世をそ思ひふりぬる
水まさるぬまの五月のうき草のうきたつとも行方もなし
水の面にれなはなれたるうき草のさためなき身はあすなやは待
さそふ水ありて行瀬のなくはこそ世をうき草のさても絶なめ
なのみして身はうき草のしたふつまさもこえやすくみえし水哉

つき草

朝露にあたにひらくる月草のうつりやすきはこの世成けり
月草の哀かりなる命もてぬれての後の人に戀つゝ
おしめとも目数ははやく月草のうつりやすくも過るあきかな
月草のはなたの帯の色もうしこなたかなたのうつりやすさに
月草のはなたもてするわきも子か衣はよるや色まさるらん
わすれ草

わすれ草

うきをいとふ人の心にまかせずはわするゝ草のたれや絶まし
うき人の心の種のわすれ草うたてある世になとか生けん
あはれなとれたさもれたし忘草人の軒はに先蔑りけん
往よしのさしもせればや忘草所からなるたれをまきけん
忘草なのみそつらきなにもみな心のほかの種しなければ
たのふ草

たのふ草

夫 とうさかる月日をそへて忍草ふける軒端のふりまさりつゝ
わすれえぬ世のみ戀つゝ故郷はむかしふのふのくきにやつれて
まけたれぬやのあれまの忍草ふはし時雨もとまるばかりに
人まれのぬむれの思ひのせき板に軒のふのふはさそしけるらん
忍草生る板間もかへりみすあはれ我身のつかへしやいつ
ことなし草

ことなし草

いつくにかうきことなしの草を植て露もかゝるぬ世を途へき
我宿にまける草葉の中にたにあふことなしの名こそつらけれ
都人とふことなしの草の葉も今霜かれの冬のさびしき
なにかいふことなし草の言の葉よりへやすくそ人にとはる
身におもふことなしのさの種植ていかなる人の世をすくすらん

せり

水まさる澤田に茂るふかぜりの霞もみぬ人をかく戀めやは

こひぬまも水田のあせに引岸はれにあらはれて袖ぬらしけり

いたつらにあるいそのふのはたけせり侘しけにても有世成けり

つむとても思ふ心のふかぜりはおつるなみたやれをあらふらん

なき

むは玉のふるのいとまに立出てせりつむ小田の月をみる哉

をしなへて茂る草葉にわかさりしぬまのこなきも花に咲つゝ

露むすふ田中のゑとのなきの葉に光さしそふ夕つくひ哉

をのれさへ戀ぢにぬれて苗代のこなきかたになくかはつかな

苗代の田つらの畦のうへこなきまくてふなへなとりやませけん

たて

春雨のふりみふらすみ袖ぬれて深田の畔にこなきつむなり

さきのとふ川邊のほたて紅に夕日さひしきあきの水かな

かひもなしほたてふるからかくのみ身の憂節は思ひつめとも

かきはなるほたて色つく露霜にむへさむからし夜半の衣手

みるまいにこまもすさめすつむ人もなきふる郷のたてに花咲

むくら

うきせには身をのみつみし水たてのからきめにこそ涙落けめ

あれまさる葎の宿になく蟲はとはれぬへしと誰を待らん

我宿に重て茂る八重葎おもひは隙もなきを戀しき

年月に茂るむくらの八重ひかきもとはまほらに思ひしかとも

八重とつるむくらの門を出かてにうき身いふせき世をや盡さん

霜かれの宿のかきはの八重葎ひまなかりしはむかし成けり

玉かつら

ときは木のかけに茂れる玉かつらくるしき物と世をばふりつゝ

たにさまにはへるみぬへの玉かつらたゝくたりにもなる我身哉

玉かつら心なかくや思ひけんかけはなれぬる人のけしきを

玉かつらはふ木あまたに有物をとりつきかたのなきそかなしき

おく山の岩本はへる玉かつらさもれかたなくもみゆるきみ哉

みよし野のかけろふ小野にはふ葛の下のうらみはふる人もなし

秋風もうらみもあへす原葛原がつちる比のこゝろふさはに

きかしたゝかへる心そさはれん入ぬる山のくすのうら風

かへりさすうつらの床やさむからし葛はふ野邊の露の下かせ

うらふれて物思ひおれば我宿のかきぬの葛も色付にけり

されかつら

あし引の山されかつらくるくもあひみてあかぬいにも有哉

いとはばや山下まけきされかつらはひまつはれてたえぬ心は

思ふ事おほ江の山のされかつらくるとあくとはなげきつゝのみ

つま木こり遊ぶ手もたゆき五味くるしや今も歸る山人

世をたえていとふ山邊のされかつら心まればやくる人もなき

あなつゝら

なかし日もくるすのをいあなつゝら末葉さしそひ茂る比哉

我戀はあそ山もとの青つゝら夏野をひろみ今さかりなり

結びなく青葛このかはこりばさそなめならふたくひのみして

青葛つゝらなるてふ茂き野にとなりかたくそ駒もやすらふ

行駒のつまつく野邊の青つゝらつらばひにのみなる山ち哉

あさかは

千とせふる松のみとりもおなしこと日影まつ間のあさかはの花
我さきにおきてそみつる白露のかきほにかゝる朝かほの花
忍び妻おきて別の袖かきに面影のこるあさかはのはな
朝顔の花をはかなみれぬる夜の夢の直路の名残とや見ん
日影さすとはそにかゝる朝顔のまほめる花や我身なるらん

あさち

秋は、初霜むすふよ比へてなかへのあさち色付にけり
かれそむる野邊のあさちとみし程にたのみし中も秋果にけり
秋さぬと庭のあさちの枯行をおもひもまらて人を待ける
時は今過すとおもへとあさちふのなをかきかりの花をやはみる
色かはる庭のあさちに置露のけぬへく君をこふる比かな

つばな

春雨のふるのいちばらけふみればつばなぬくへく成そしにける
古河のさしのあたりのあさ草につばななみよる夏の夕風
道のへの柴生のつばなぬきためてうなひ子供か手まもりにせん
玉鈴の道の芝草はに出て春のつばなも人まれくなり
春もすき夏もきぬらし野に出てつばなぬきにと誰をさそはん

あちさひ

宵のまの露に咲そふあちさひのよひらに月の影そみえける
花咲し庭のあちさひあちさなくなとてよひらに我をすてけん
いまもかきませ我せこみせもせん植しあちさひ花咲にけり
あちさひのよひらすくなき初花をひらけはてすも思ひける哉
まもつけや籬にましるあちさひの四片にみれば八重こそはさけ

すみれ

我せこかうすむらさきの衣手に野へのすみれの花そまかへる
紫のこそめの袖とたかふまてすみれつみもて歸る里人
はつかしや草にやつる庭もせをすみれつみにと人のみるらん
かこひ分るかされかくれの草陰に名のおふ庭のつほすみれ哉
をのつから誰残りゐて故郷のあさちかはらにすみれつむらん

なばき

里人やなはきつむらん三笠山春日の原のはるのうらゝに
春日野やなはきつみけりなら出のこのめ春風ゆるく吹らし
いまはまた野へのなばきの春ふかみ時すきめれやつむ人のなき
今日はまた雪間のなばきつみませて野邊の苔葉の敷やそふらん
なばきつむ春野をみればあなによしならの都もにさばひにけり

わらひ

打返すかた山はたのさわらひのドにもゆるもあらはれにけり
山人の歸るこさかの道のへに折やすけなる下わらひかな
けふの日はくるゝ外山のかきわらひあげはまたこん折過ぬまに
谷陰やなとろましりの下わらひおりめつらしとひこはへにけり
今そしる山にいろ人春さればかしこからぬもわらひ折けり

ふく

いかにせん山澤ふくもつまなくに衣手ぬれて戀つゝそふる
あふことはかた山澤にふくつむとおもひし袖の今もかはらぬ
春はまつふくゝのわか葉をつむとてやおりたちそむる暇か小山田
ないくさの敷にばあらねと春の野に半夏の若葉もつみは残さし
ふめはいる春の薄氷下解て山澤女萎をつみそかれつる

(ゆり)

草ふかき野へのゆり花かくるへて露けしとたに人しらめやも
草ふかきしけみか下のさゆり花世に人しれぬみとや成らん
み馬草にかり残されて姫ゆりの心ならずや人にふられん
ふらるゝか野邊のさゆりの花さかり茂みかくれも色に出にけり
露けさの程たにいかてしらせまし野草かくれの姫ゆりの花

ある

夫 夫

はりなるしかまの里にはすあゐのいつかおもひの色に出へき
からあゐのやしほもあがていて人を我を深くはおもひそめてし
刈をけるつかねの藍こ天のそこあらは飽まで染そめえ色いろそしらるゝ
播磨なるしかまにつくる藍はたけいつあなかちのこ染をかみん
うき人なとあながちにいひそめてあゐよりもこき色に出らん

まさきのかつら

とやまなるまさきのかつら色かはる秋は物うき栖なりけり
冬のくるまさきのかつらもろくのみさもおちやすき我涙かな
うちはへてのほり坂なる山道はまさきのかつらくるしかりけり
外山なる眞拆の葛くるとあくと紅葉も色のめかれやはする
と出なるまさきのかつら打はへて色付くるゝ秋のそらかな

ひかけ

夫

諸人のかくるひかけの心ばにあまてる神のめくみをそみる
見る度にひかけのかつらよそなからむかしをかけて忘やはする
しはしたにありとはえこそ頼まれさすやひかけの草の葉の露
かさすてふ心はましるひかけ草苔のみとりもはなさきにけり
さはかりや木の下くらき奥山にあるへくもなさひかけ草哉

やまたちはな

夫 夫

跡たゆるやまたちはなの岩かくれみのなるさまをしる人もなし
鳴て出る山橋の名のみしてきてもやとらぬほとゝきすかな
ふりにける卯月のけふのかみそきは山橋のいるもかはらす
岩いかねはみとりもあけもはえ色の山たちはなのときはかきはに
あし引の山橋のなそまかくこかくればつる身とはなりけむ

夫

夫 夫

すけ

隠沼の初瀬の山の岩こそすけいはねそななきればななけれ
み人の笠かさぬふ草のかり跡のよにすけもなくなりける哉
しほしなと立もとまらて白宮のしらすけにては人の過らん
すかのねはむへなからししかたふちの沼田を深み誰かうへけん
太山なるすかのねしのき置おき霜になかくや袖のぬれて朽なん

さ

夫 夫

あふことはかた山峯の小さいはらわすれぬふしに露もかはかす
いくほとのとたがさもみえぬ小篠原編世におほきふしゝもうし
逢ふ事はかたちかひなるさゝむすひよゝのむくひの契つらしな
山かつの賤か垣れのさゝくろめにきはふまての栖や夫とはみし
篠の上に霜置さえて日は暮ぬ我いれかてそかねてしらるゝ

あふひ

もろかつらあふひまれなるかなしさな心の中にかけぬ間そなき
哀なりみあれの後のあふひ草なにつくへき我身なるらん
玉くしけみあれのけふのあふひ草かけに世々も年ふりにけり
いく二葉さてのみよゝにあふひ草神のかさしそかけて久しき
ふしさらばかけしやけふのあふひ草年にまれなる契成けり

みくり

夫 かくれぬにおふるみくりのくり返し下にや物をおもひみたれん
夫 水かくれにふかきさほめのみくりなほ月日はくれと引人はなし
夫 徒にひかぬみくりのふかき江にしつむくるしき戀もする哉
夫 さやまなる池のみくりのねもみねと打はへ人のくるそまたるい

ふもき

夫 庭の面の蓬をふかみもとつ人露を分てもとけんとそ思ふ
夫 老らくのくるとみなからふりにけりしもの蓬にあきたくる身は
夫 世にしあらはゆきかふ人もいばかり蓬か門にいちをなさまし
夫 まきもくのひはらににたるから蓬袖のしけみとむへもいひけり
夫 茂かりし蓬か宿の白露をあはれいつまで袖にかけいむ

こけ

夫 山里の庭のやり水岩ことにこけむすばかりとしそふり行
夫 谷ふかきいはほの苔のみたれあひてむかしの跡そみえず成ゆく
夫 家を出てさてすみ果ぬ山里にこぬ程みゆる庭の苔かな
夫 松たてる岩のはさまのねかくしにむすやいくへの苔ふりにけん
夫 またきより枕も袖も苔にのみなる身のほてをいかてうつまん

いちし

夫 徒にあふよしをなみみちのくのいちしの花のなにはきけとも
夫 あられ危我にもあらて身におほぬいちしの花のいちしるきよも
夫 時しあれば立田のいちしのいちしるくさけ共花をうる事そなき
夫 大はらは行てやみましいつしかと咲いちしほのはなのしるへに
夫 するへせよいちしの花の名にしおほい又うへもなき道の行ふを

しは

夫 故郷の庭は芝生になりにけり野かひの駒の立なるいまで
夫 世にもなき道のしは草しほしそとおもひし跡を我殘しつゝ
夫 駒はなつ野邊のうなひか芝くらへ永き日くらすこれやなくさめ
夫 家の風吹からしたる芝のねはおこしところもなくなりにけり
夫 もいしきの庭のきり芝降雪にこれをかきりとめれし袖哉

むし

夫 いかなりし世々の報ひそ木こり蟲身におふほと宿のはかなさ
夫 我宿はうへし草葉にむし鳴てやかても野邊と成ぬへき哉
夫 はかなさは露よりけなる玉蟲のからなとめてかたみとやみん
夫 秋の野におほくの露を涙にてちにくたくるむしのこゑ哉
夫 住なれしものと野原や忍ふらんうつすむしやに蟲のわふるは

せみ

夫 夕つくひもりの木末にうつるひてすいしき風にせみそ鳴なる
夫 音のみなく身は我からそうつ蟬のむなしき物に成はてしより
夫 あはれともいふ人なしに空蟬の身をいたつらに鳴くらすらん
夫 身におほぬ聲をのみ聞けからの蟬のなりはへありとやはみる
夫 哀なり身をうつせみの心からむなしき世にもなほまとひつゝ

夏むし

夫 なつむしの思ひにもゆるはかなさを我身のうへと人のしれかし
夫 はかなさの類もかなしともし火のかけにかいよふ夜半の夏蟲
夫 あちきなやよその思ひに身を捨てむなく消る夜半の夏むし
夫 ともし火をけつや夏むし中々にみせぬおもひの程もはかなし
夫 法にたく火に入夜半の夏むしや闇を出へきたよりなるらん

きり／＼す

暮ぬれば音になかむとやきり／＼す床のあたりに近つきぬらん
光なき我ふる郷のきり／＼す身はかけ草のれをのみそなく
きり／＼すなきうらみを管の根の思ひみたれて鳴ぬ夜そなき
我宿の苦のかきれのきり／＼す野へにのみやは露はならびし
吹風になびくあさちのきり／＼すいかにせんとか夜寒なるらん

松むし

暮ゆけば事あり顔になくむしのまづは名にのみふりにけるかな
草の原秋は末葉にうら枯て名のみつれなき松蟲の聲
浪かくる磯邊の山の松むしは音にあらはれて聲うらむなり
草陰にいつならひてかとふ人をおのれまつむしこゑしきるなり
夕暮はいつかは人を我宿に名たてかほなる松むしのこゑ
すいむし

むもれ行あさちか庭のすいむしは秋をかされてなく／＼そふる
いそくとて夜る山過る旅人のふりや捨けんすいむしのこゑ
秋ははや夜寒になりぬ乙女子が袖ふるやまのすいむしのこゑ
すいむしの去年の古こゑをのつから蓬かもとの心にそなく
鈴蟲のたひなきにこそなけれぬれ我なるさまを思ひつゝけて
いくらし

夕日かけ秋とおほゆる深山邊の梢さびしき日くらしのこゑ
人はこて風のみ秋の山里にさそひくらしの音はなかけれる
明るより鳴もたゆまず山里にけいくらしのこゑを聞ゆる
夏ふかきこゑの蟬のよはり聲たし山さとのひくらしそなく
とふ人の歸るさいそく山里にいまばたなきぬ日くらしの聲

はたる

夏ふかき野澤の草のたかければ下葉の露にとふ螢かな
飛螢ひかりみるこそ哀なれ何のおもひにもえはしめけん
宿はあれて人はふみぬあさちふにあたら螢の影を残れる
飛はたるおもひありとや露分の葎の宿にもえ明すらん
あかつきのまた空とほく行螢ひかりにたくふ法のともし火
はたなり

秋の野にはたなるむしのれを寒み誰から衣猶いそくらん
霜のたて露のぬきもて秋の野にはたなるむしは錦なるらん
草の庵に今はたむしのをりかくるこゑのあやなくよはる比かな
秋風の寒さにいそくしつばたをかりて野はらの蟲もをるらし
すそ野にはたなるむしもいそくなり山のしきの色まさる比
くも

同世にむまれあひてもくものこのちり／＼にこそまた別なめ
くれことにれやつくりするさにかにの軒端のつまと誰を待らん
いと／＼又造りますなりさき草のみつばよつばのさ／＼かにのいと
かたきしにあらぬ軒端のたよりにもかけ造りなるさ／＼かにの糸
露分て朝立くればあのはらや衣にかゝるさ／＼かにのいと
てふ

秋の野の千くさの花にとふ蝶の命にたのむ露もはかなし
さきつゝ／＼おりふしかはる花々にうつるてふなや思ひあるらん
いたつらに花やちりなん蝴蝶にもさそはれかたき人のつれなさ
咲花にはれうちかはしあはれてふさのみやふかき色にめつらん
一筋にまとふは人の身なりけりてふす／＼はなの色はやつさす

去

夫

夫

夫

なく露のひとつうるひに咲花の千くさに匂ふ野邊の色かな
秋草のさきみたれたる花さかり我身におはぬ宿にも有かなた
やちくさに心をとめて故郷にたかうへなきし秋の花その
花はみな野へなさかりとみゆる迄千草の露の染る秋かな
ぬらせた、袖やおしむ秋の野の花さく草にかゝるまら露

尖

夫

5

犬

夫

夫

まつ

はままつつれなき色にこひ初し我身ふくれのふらぬ目はなし
 たくひなき身こそおもへはかなしけれ一本たててからさきの松
 一つのまになとは時雨のふりぬらんうへしほとなき庭の松かせ
 庭のうへの松をはなをや拾置かむうへてもともに年ともしはへぬれと
 たかはまの真砂にたてる松のれのそこへもいらぬ我心かな

かえ

夫 花さけと人もすさめぬかえの木の徒にのみ身はなりにけり
 夫 ためゆき紫野なるかえのもりはかへするからうつものにけり
 夫 道ふかみ人こぬ山のかえのみはいたつらにのみおちつもりつ
 夫 道のへのかえのかさおちひろふとて木の下かくれ行そやられぬ
 夫 ちはやふるみむろの山のかえの木のかへぬ色は君かためかも

竹

うきふしを思もいれずまのへ竹め忍へとれこそまつなけれけれ
 鳥とまる竹のほすふのよゝなへてたゝかたふきになる我身かな
 はかへせて年ふる竹のかきうち花も紅葉もおりそふられぬ
 数ならぬき暇かかこひのあはら竹すふをりかけて世をやつくらん
 音さやく夜風を寒み竹の葉にまろひおひてや露も落らん

たかん

鼻竹のなきてさせるれたかんなむもれなからに身は老にけり
 いかて我がきれにおふる竹の子に世のうきふしを思ひあらせし
 おひ出る夏のかきれの竹の子はさこそみしかきよをかさぬらめ
 生たいむふしの数ある竹の子はみしかしとてもあたにやはみる
 夫 いかばかり雪の下なる竹の子の親おもふ人の心ふりけん

むめ

夫 日数まつ春ををそしと白雪の下より匂ふ梅のはつ花
 我せこにまつ告やらん梅の花あかぬ匂ひをきてもみるかに
 吹風も心やすくやさそふらむぬしさたまらぬ野邊の梅か枝
 春かせのさそふのみかは梅の花色もにほひも心にそしむ
 夫 やふしさくおとるましりの梅の花たいひとへなる色もわりなし
 こうはい

夫 くれなゐの色さへふかく咲初てにほひことなる軒の梅かえ
 紅の色こき花は梅かえにうつる夕日もわかれさりけり
 世こかし紅染のむめのはなよそへてもなをあかぬ色かな
 夫 宿の梅のうす紅のおろし枝れなまつほとの色やかれなん
 夕日さすとやまの里の梅の花木ことにまかふ春のくれなゐ

やなき

夫 白浪のうつたのうへの河柳もゆといふはるはきのふけふかも
 夫 風寒み雪はちりつゝまかすかになひきそめたる青柳の糸
 きしかけの水のよとみのかたふちにつりをたれたる青柳の糸
 夫 一つのまになひく梢となりぬらむ枝さしうへし庭の青柳
 はかなくもてい幾春経けん青柳のいとかりける身ともふらすて

さくら

さくら花なれてもあかぬ心からうつるふはてを身に歎つゝ
 なにことに身のうき事を忘れまし春も櫻のなきよ成せば
 夫 年へゆるふるきみきりの糸櫻見にくる人を春はたゝせぬ
 夫 散を我おしもちたる後までもをりめはつけし櫻うすやう
 夫 みればかつ本木の花はちりはてゝ八重咲かはるつきさくら哉

かはさくら

夫 ひつかはの岸に匂へるかはさくらちるこそ春のとちめなりけれ
夫 梓弓やはきの里のかはさくら花にのみいるわかこゝろかな
夫 から竹の笛にまくてふかは櫻春おもしろく風そふく^けなる

夫 妹かきるむへむらさきのかはさくら花のゆかりの色もなつかし
夫 あふみなるひものゝ里のかは櫻はなはわきて折人もなし

はなさくら

夫

夫 咲ぬらむいさみの山のはな櫻かすみはよそに立へたつとも
うき人のあたし心の花さくらことほり過てうつろひにけり
程もなくうつろひやすきあた人のこゝろににたる花櫻かな
さはひめの春のかたちの花さくら心つからのいろに染らし
あたなりと思ひそめてしつらさにて心をかゝる花さくらかな

山さくら

おもへともいかにうらみむ山櫻はなのみあたに咲世ならねは
いさげふはおりは^らおりてんおらすとて風の^こをくへき山櫻かは
ふか山の岩根にふせるわ^はひさくら霞の^こうちをえこそ立てぬ
山さくら花のあたりの白雲はさもたへはたてまかへてもみん
かくれかと頼むよしのゝ山櫻いたくなちりそ庵さひしも

庭さくら

荒まざる葎の宿の庭さくらうつろひぬとも誰に告まし
とふ人の跡たにみえぬ庭さくらよしなや春の花の名たてに
いつのまにこたかくなりて庭もせにうへし櫻の咲みち^にぬらん
散ちらす本あらの櫻庭もせにかつゝいろのうつろふや^みみん
うへてみる所からこそ庭櫻ほかにうつらは名たに殘らし

ひさくら

夫 みよし野の草葉もゆる春の目に今さかりなるひさくらの花
夫 春をやくひかりはおなし梢にも^て分て名になつひさくらの花
夫 春はこれ日影も^はゆるみ草の葉も萌る野はらのひさくらの花

夫 秋をこそやくとはみしか山のはにうす紅のひさくらの花
夫 夕つくひうつろふ雲やまかふらむ高根にたてるひ櫻の花

ふち

夫

夫

夫 さすかなを春のめくみやをよひけん三笠のもりの藤の末はに
年をへてはふきあまたの藤の花たえぬこゝろの春はみえけり
谷こしの藤の古枝のひこはへてまなひもなかく花咲にけり
深草は名のみなりけり藤のもり春をかけてそ花咲にける
心からさくやふち涙かけをきてまとはかさるゝ岩根松かな

たちはな

橘の匂ふ軒端の夕やみにむら雨ふりて風そ涼しき
たちはなの香をか^うはしみ散花にかけふむ道は行もやられす
けふまては人をむかしと忍ふらん我あす^はあらぬ宿のたちはな
故郷の花たちはなの枝折にかたみおほ^はゆる一むかしかな
いかなれば花さきみなる橘のわきて葉まもはときは成らん

あつたちはな

夫 いかなればあつ橘の匂ふ香にうすきたもとも涼しかるらん
夫 名にしおあつたちはな花ならば冬の衣の袖の香やせん
夫 ときはなる色をかされてむす苦もあつ橘の年はへにけり
夫 なにか匂あつたちはな袖の香は涼しかるへき風のつてかは
夫 なき人のいくよかさなる袖のかはあつ橘のにはひなるらし

まゐ

わかつなのまゐのこやての世にふれは人の心にあひたかほめや
いつのまにたれ種まきて片岡のむかひの峯に茂る椎柴

山本の椎の葉陰の夕暮は夏もつれなく風を涼しき
いくはくの道行つかれやすむらん椎の葉せはき旅のかれいひ

秋風に軒端のまゐの落つれば庭にくる石ふくかとそみる
なし

年ふれとかはらすなからつきなしのあらぬ物にも身こそ成ぬれ
いたつらにおふのうらなし年をへて身は数ならす成まさりつゝ

時にあひて秋をしまたぬ夏なしはかならずにしの枝ならすとも
かた枝はなりもならずもつきなしの思合へばやれてはかたらふ

昨わかね花とみゆるはいせの海のおふのうらなし波かゝるらし
山なし

足曳の山なしの花咲しよりたなひく雲のおもかけそたつ
きゝわたる面影みえて春雨の枝にかゝれる山なしの花

いとひてもいつくにまほし宿からむうき世の外の山なしの花
山なしの花のあるしな人とほゝこたへやせまし数ならすとも

まかすかに世をいとひえぬかくれかふなにとほありて山梨の花
もい

もい

いくかへり千代もかきなる八重桃の花のさかりに君そあひみん
朝日影匂へる桃の花さかり空さへ色にうつるひにけり

入くやとまやの軒はの紫垣に立かくれたるひめももの花
山吹の色にはあらねと桃の花また物いはぬふる郷の春

あかねさす色こそまかへ日のもとのむるふのけ桃花さかりかも

夫

山かつのそのふのすもゝ咲にけり風いとはぬ花やみるらん
きえてかの雪とみるまで山かつのかきほのすもゝ花咲にけり

やまかつの衣ほすてふかきほかとふるきをみればすもゝ花咲
数ならぬ片山かけのあなすもゝ身はあるかじもなくなりけり

梅櫻それはまかへし垣内のすもゝの花を雪かとはみん
から桃

いかにしてはほひ初げん目の本の我國ならぬからもゝの花
もろこしのよしのゝ山に咲もせてをのか名ふらぬから桃のはな

かゝりける誰種まきてから桃のやまとはあらぬ花咲ぬらん
よそにてはさやはみはやすから桃の花のぬしこそ色に出らめ

ことはよもきゝふらしとやから桃の物をはいはて花にのみ咲
くるみ

夏山のすそ野に茂るくるみばらくる身いとふな行て逢みん
時雨にもぬるゝくるみのかはかすてをのか心となにゝそむらん

うきふしをなげきくるみのそめほねは数多つらさのかすを重る
夏山にまけみかくれのひめくるみかねて見まくのかたきこひ哉

山からのまはすくるみのとにかくにもちあつかふは心なりけり
すき

すき

かくれぬのはつせの河のかほくまに神さひたてる杉は二本
道のへの杉の下枝に引まめはみはすへまつるゑるしなるらし

いかばかりふる河の邊に年をへぬいつあひおひの二本の杉
をのつからさても我世のすきやりと折々よばき身をいかゝせん

かこ山のみねのむすきのもとつばにみとりをそへて昔生にけり

夫 夫 夫
 志ほのみつ浦に年ふるむろの木のかはらぬ色も下葉散つゝ
 あつさ弓いそへにたてるむろの木とはにうつともタイの浦波つゝ

おく山の柚木はむろのなもまろしとつる戸ほそもさぞなと思へ
いか^にせん我ある山のむろの木^になみし人^にをわすれかねつる

夫 あつまやになてしはかりの横櫓あきさ契りにふしは絶にき
みすひさになりそまにけるなすて山櫓のふる木の苦ふかきまで
いかたしのとりみたるともさきはしらもとの心は人にまらせん
陰くらきまきのまけ山つれ／＼といつを月日のあかりともみす
冬過て今は春といふ山の邊に眞木のはまのき雪ふらめやも

夫 夫
ある人として折しかつらの枝もかな月の都も行てみるへく
舟とむる秋の入江の月影にひかりたえらすちるかつらかな
久かたの中なる秋の紅葉やえくるゝほとに色ぞふるらむ
葵がる比にしなれば神山のもとあらのかつらかくれかもなし
いつのよに誰たぬうへて久かたの月にありてふかつら成らん

夫 おく山のかうかのはなも哀なりまたもむすはぬ身のためしとて
 夫 うかりけるかうかの花のためしかな我思ふ事もならぬ身なればは
 夫 わきもここにかくとはかりは告やらむかたみのかうか花咲にけり
 夫 世々に絶めおほうち山のかたなしに古き合歡の櫓をそめる
 夫 山深みいつよりねふと名をかへてかうかの木には人まとふらん

郭公なく音きかむと尋つる北野のあふち花咲にけり
 みかきもりとのへにたてるあふちかけ下ふみなれし道を忘ぬ
 夏ふかきなかへのあふち茂りあひて此里人を夕すゝみする

夫
道のへのかもの河原のふしおかみオノミ古木のあふちかけもなれにき
今日こそは五月の玉にぬきとめておりにあふちの花とみえけれ

きりたをす田上山のかしの木は宇治の川瀬になかれきにけり
と山なるをかのかしはら吹なひきあれ行ころの風のさむけさ
木の葉たにふりもかへさぬイゑらかしの下行道をうつむこけかな
柚人のたつきのあとのゑらかしは枝にもほにもゑられやはする
ゑらかしの枝はをしなみ雪ふれとなれたる山は道もまよはずイ

夫タミ
 たかせさすきはのくねき原色つくみれば秋のくれかも
 霜かれのほら野にましろふしくねき世にかしけ行我身成けり
 夫
 さほ川の岸くたりなるわかくねき猶去れとやかりはやすらん
 夫
 里人のほたる冬のふしくねきおほ川のへのあれまくもおし
 夫
 春来てもはやまかすそのくねきはまた冬かれの色を殘れる

見る度にあか^あ色かなあし引のかた山つはき今がさくらむ
常磐なるやみ^つれのつばき八千代まで色かはらずと君をみるへく
目にみかく白玉つはきはかへせて久しきものと八千世まつらん
いやすしの八峯に茂るあな椿つら／＼物をおもふころ哉
玉椿つら／＼思ひはとくにはある身ともなしき世ともなし

かしに

ふはひのみふるからたのゝもと柏もとの身はかり戀しきになし
我宿の外は面のかしは冬ふかみ霜かれくちてあるかひもなし
三笠山あふみ絶てかしは木のめつらしからぬ森の木の木の本
さほ山のならのかしは木またほへのもつは茂み紅葉するにけり
山風にならのはかしは音たかしすむみつくも聞やおとろく

ほなかしは

葉をひろみ岡邊にふたるほなかしは下には月のもる夜半もなし
ほなかしはちる木の本をふみ分てそよさらにとふ跡をみぬかな
なにそこのにしの軒端のほなかしは山のはまたて月そかくるゝ
なく露の情をみかくほなかしはふひをすゝむる紅葉とそみる
年をへて片枝くち行ほなかしは葉ひろしとてもかけそすくなき

なめかしは

身にしめと吹ころほひの嵐かな秋の夕のなめかしはに
もろくちる比そかなしき山本のなめかしはのなめかしはて
雲はれぬなめかしはの下露はをみなくこそ袖ぬらしけれ
雨やまぬふるからなのゝ遠方になめかしはもなにしおふらし
徒らになめかしはの名にたてゝ頼むこととはけふもくらしつ

つゝし

水傳

みつゝてのいそまのつゝし咲しより螢のいさり火夜とやはみる
夕日さす岡邊の松の下つゝしときは木かほに花さかりなり
日をそふるは山の道のつゝしはら下てるかは花のいろかも
まれに咲山のたかれの夕つゝし雲まのほしや光そふらん
波かくるみほのうらへわのふらつゝし何れな花とみてか手折らん

いはつゝし

岩つゝしいはぬをまらぬならひとて色に出て誰かとかめん
河峯の岩はれにれさすいはつゝしおもひいれともかくれなのよや
村雨にぬるともおらむいはつゝしせこかま袖の色もなつかし
かたきしにれさしほする岩つゝしいつれな枝と花の咲らん
我庵の谷むかひなる岩つゝしいはれはともうとくやはみる

ひさき

月影も清きかはらの河おろしにちりてひさきの下もくもらす
ひさき生る庭の木陰の秋風に一こふそゝくむら時雨かな
濱櫛ひさしくみればいたつらにころもことしも咲やちるらん
ひさきおふるかた山かけのきもみちは時雨てたえぬ秋の色哉
ひさきちる霜夜の河へ吹風にきよくも月のすみわたる哉

くは

山かつのそのふのくはのくはまゆの出やらぬ世は猶そかなしき
古畑の桑のわかほのこきたれてこはいかにとよれのみなかるゝ
我妹子かこやのえひらのかすおほみあまたあめつる園の桑ばら
里人の今もこくてふ桑ばらや茂るともみぬ夏木立かな
みのをばりさかひつゝきにうへなへてよむともつきし桑の幾本

はたつもり

里人やわか葉つむらんはたつもりとやまも今は春めきにけり
まらくれぬにかさなる山のはたつもりはたつもり行罪そかなしき
今よりはこめも春のはたつもり時きにけりと人や尋ん
はたつもり積りし雪も消ぬればあつかすきみにわかなつむらん
れやいらぬとやまの春のはたつもり葉にのみ出て人にまらるゝ

あきみ

夫

夫

夫

夫

夫

檜つむ竹のはなこのはかなきもまことの道にいらさらめやは
あはれなる檜の花のちきりかなほとけのためと種やまきけん
檜つむ時のまもなく山寺にわきて一度花たてまつる
枝ながら峯の檜のはなしけみこるとはいはてつみにこそつめ
あか水に檜の青葉きりうけてさゝけもたればぬるゝ袖哉

あせみ

夫

夫

夫

夫

夫

山ちさ

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

あし引の山ちさのはな露かけてさける色これ我みはやさん
咲とたにたればあらむ白雲の晴せぬやまの山ちさの花
木かくれの日影もをそき山ちさは花のうへなる露そ久しき
とし暮るつま木にまじる山ちさのたゝ一えたはうなひこかため
夜半になく白露をもみ山ちさの花もやけさは風を待らん
ゆつる葉
ゆつるはのときは色もうつもれぬあしくま山に雪のふれは
春こに色もかはらぬゆつるはのゆつるときはも君かためとそ
これそこのはるをむかふるあるへとてゆつるはかきし歸る山人
年毎になつとはすれとゆつるはのかひこそなけれ老のまほみは
いやましにあしくま山はみ雪ふる峯のゆつるはいそきおらなん

かたかし

夫

夫

夫

夫

夫

妹かくむ寺あうへのかたかしのはなさくほとに春を成ぬる
たれかみん身をおく山に年ふとも世にあふことのかたかしの花
小車のもろわにかくるかたかしのいつれもつよき人こゝるかな
かつはまた岩にたとふるかたかしもつれなき人の心にそふる
人心なへておもへばかたかしのはなはひらくるときもありけり
つまい

つまい

夫

夫

夫

夫

夫

さなき

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

夫

おく山のひかけのさなき年ふりてさすかに花のさきにける哉
谷ふかき山のさなきの花さかり色にこふれとある人もなし
哀とていつかは人のきてもみし山のさなきのねさしよなく
あを山と名にこそたてれをのつから峯のさなきは花咲にけり
いさ行て我みはやさむおく山のさなきの花はある人もなし
とり
冬ふかみ太山やいたくあれぬらんわたる小鳥の里にむれたる
夏草の野澤かくれのはぬけ鳥ありしにもあらず成我身哉
白山の雪のうちにとかけふかき松をたのみて鳥や鳴らん
かたしきの衣手さむしいかはかり雪のみやまに鳥のなくらん
松のおのみれまつかななるあけほのにあふきて聞は佛法そうなく

はなちとり

夫 このうちの名残^{なごり}するな放鳥^{はなトリ}心のまいにあくかれぬとも

うかれ行我身^{いりごみ}のほとや放鳥^{はなトリ}まほしとたにも誰かおしまん
山ふかくいりもやられずはなち鳥猶^{やう}このことをかけて思へは
このうちをとおもひや出る放とりさらぬあたりの梢^{すゑ}にそすむ
いさやいさまらぬ心のはなちとりはなちかけたる身の行衛哉

ひなとり

夫

夏深^{なつふか}みまたかりそめぬあはつ野のきいすのひなの草かくれつゝ
春の野のありすのひなのばなわかみ思^{おも}ひたてとも行ふ^いなのよや
人そうき雀^{すずめ}のひなの手なれつゝまほしも身なほはなれさるらん
をのつからまた片なきの雛鳥^{ひなトリ}のかまへかたきのよないか、せん
春の野に尾羽^{おし}もそろはぬ雛鳥^{ひなトリ}のみにくければや君こさるらん

つる

管^{くだ}の根のなきはるへのかすむ日にうねのいたつの聲を長閑き
こにこもる我身^{ごみ}もしらすよるの鶴心のやみの音こそなかるれ
芦鶴^{あしかり}も澤へに年やつもろらむかけみなそこ^{そこ}にふれる白雪
さしもこそよはひはなかきすな鶴^{かり}のなと毛衣^{けい}のあしにとつかぬ
やまきたのくさのとほりのあれまくに恨てよるは鶴を鳴なる

夫

かり

外面なる小田^{せうでん}におりある鷹金^{たかぎん}のはなと聞えて今そ立なる
雲あふ初鷹^{はつたか}かれの涙もて秋の草木^{くさく}のいろかはり行
ふる郷^{さと}のならの都^{みやこ}のことつては空とふかりのたよりをそまつ
玉つさのたよりにあらぬ一筆^{いっぴつ}のふにかきやすき秋のかりかれ
山風の木の葉ちらして吹なへに雁さへいたくなきわたる哉

かへるかり

夫 かへるかりいましもいかにしたふらむならはめ春の別ならぬに
かひもなきたのむの鷹^{たか}の別かなしのふむかしにかへりやはする
歸^{かへ}るさなたれしたふとて鷹金^{たかぎん}のあかねなこりの今朝の玉つさ
こしちにはかりのくるとや霞^{かすみ}たつ春のあさけの空にみゆらん
夫 年こしのみやこの空のなかつたひにつはさたれてや鷹^{たか}歸^{かへ}るらん

うくひす

夫 あら玉の春はへぬれと驚^{おどろ}のなくればかりそかはらさりける
驚^{おどろ}をきくたに春のよそなれば我身^{ごみ}かひなき音をのみそなく
あらたまる春^{はる}になるらし冬かれの野かみのかたに驚^{おどろ}そなく
夫 いくはくの風のへたてに驚^{おどろ}のはなをばく、む春の梅か枝

ほといきす

夫 今年こそまたて聞つれ郭公^{かくこう}やふひのくれの雲のまよひに
我宿^{われしゆく}にかたひきなく時鳥^{ときトリ}物おもふことはなれもかなしや
さ月山雲^{つきやまぐも}ははれぬと郭公^{かくこう}卯花^{うけな}月夜^{げつや}さやかにそなく
さしもあらばなにかたたらふ時鳥^{ときトリ}雲間^{ぐもま}にうときよはの一聲
都人^{みやこびと}今もきたらは郭公^{かくこう}このはつ音にはあはましものを

よふこ鳥

夫 よふこ鳥また聞人^{きこひと}やなかるらむふかきみやまの春の明ほの
なにしおふまたすしもあかし行人^{いこうじん}をこてふにいたるよふこ鳥^{よふこトリ}哉
人はこて夜や更ぬらむ呼子^{よこし}鳥よへとこたへすみいなしの山
よふこ鳥よへばよひつく山彦^{やまひこ}をなにかいらへと人のきくらん
数ならぬ太山^{たいざん}のおくのよふこ鳥よはれと人のこしはむかし

ふき

あかつきのしきのはねがきしけしとも老て夜ふかき^に建にそ聞
霜かれの野田の草根にふすしきの何のかけにか身なまかくさん
夜を寒みなかへのをたにふす鳴の羽かきあへすきやく霜哉
いかなれば朝程なき秋の日ににれかくしきのもいはかくらん
いかにせん君かこめ夜の明かたに門田のしきのもいはくなり
からす

夫 夫

吹風に霜置きまよふみやまへに月夜からすの聲も寒けし
月になくやもめからすの音に立て秋のきぬたそ霜にうつなる
山のへの梢の森のむらからすれくら^にあらそふ夕暮の聲
今さらに里へな出そ山からすうときかた^にみ^にわらはれぬへし
月さえて山は梢のしつけきにうかれからすの^うた^夫鳴らん

さき

夫

いつみ川あさせも^ふるく立さきのみのけみたる、風の寒けさ
朝またきそれかあらぬかさき^のたて^るさむき渚によする自波
入潮のひかたにきあるみとさき^のない^さり^に出るあまかとやみん
なかゐせは心してゐよあつさ弓やはせの川のさきの一むら
風のふくさきのみのけにたとふなる心よ我身いつちかもせん

はことり

夫 夫

春されば友まとはせるばこ鳥のふたかみ山に朝な^くなく
夜はきてあくるかなしきはことりはいつ浦島にかよひそめけん
よるはきてあくれはかへる箱鳥のつらきならひにねをや鳴らん
何事をおもひ入てかはこ鳥のあくる朝けの音をやなくらん
鳴わたるみむろの山の箱鳥はふた^くとこそとひあかるなれ

かほとり

夕さればまほにもみえぬかほとりの聲もほのかにかすむのへ哉
忘れぬその面影はかほとりのこゑきくにたに音はなかつい
我もさそおひにやつるゝ貌鳥のみてはつかしき音はなかれぬる
ありとてもまたみもしらぬか^は鳥のい^と霞の空かくれぬる
春の野にきなくかほとりかほとりとみし人あらは戀^いやわ^らむ
かさいき

夫

七夕の天の河瀬のはしをしもなとかさいきのわたし初けん
よそにして戀わたるかな天の原雲るにたがきかさいきのはし
天川またことさらにわたす^つ秋のひとよのかさいきのはし
むは玉の夢のうきはしちかへてもまたかさいきの渡すとやめん
鵲のつはきならふるはしつくりいかて雲ぬに渡し初けん
もす

もす

夫 夫

鵲のあるふるえのはきも霜枯てあしたの原に秋そ暮行
風わたるおほなかつふに^もす鳴て秋のさかりとみゆる野へ哉
もすのゐる野邊の草葉の末さはき^はは^れも^すやすめす秋風そふく
見わたせば一村薄鵲なきてや^にかれ^にわたる野へのさひしき
紅葉ちるはしのほす^ふの秋風に^あと^ころ^あれて^鳥そ鳴なる
くゐな

くゐな

夏の夜は程なく明る天の戸をまたて水鶴の猶た^くらん
天の戸も猶や水鶴のた^くくらむさも明やすき夏の空哉
誰かまたたく水鶴にこたへせん我住宿はもる人そなき
何かその夜半の水鶴のた^くき^こさ^りとて^法の^とし^とや^は聞
眞木の戸をさしたる事のありかほとにたく水鶴の人おとるかす

女房

前内大臣
衣笠家良

寛元々年十一月廿一日始之

同二年三月廿五日詠之誌

前藤大納言

寛元々年十一月十三日始之

同二年二月廿四日詠之

九條入道三位

寛元々年二月六日始之

同二年六月廿七日詠之

前左京權大夫

寛元々年十一月廿四日始之

同二年正月十三日詠之

入道左大辨

寛元々年十二月廿一日始之

同二年三月廿五日詠之

百首調合

建仁元年 上御門院御宇

題

春 廿首 夏 十五首 秋 廿首
冬 十五首 祝 五首 戀 十五首
雜 十首

作者

左方

女房後鳥羽院

左大臣正二位藤原朝臣後京極攝政

前權僧正慈圓

從二位行權中納言藤原朝臣公繼德大寺野宮左大臣

參議正三位行左近衛權中將兼越前守藤原朝臣

公經

正三位行皇太后宮大夫藤原朝臣季能

宮內卿後鳥羽院女房

讚岐二條院女房賴政女

小侍從待省

散位正四位下藤原朝臣隆信

散位正四位下藤原朝臣有家

散位從四位上藤原朝臣保季

正五位下行左近衛權少將藤原朝臣良平

醍醐入道前太政大臣

從五位下行左近衛佐臣源朝臣具親

右 僧顯昭

三宮

內大臣正二位兼右近衛大將皇太弟傳源朝臣

正二位行權大納言藤原朝臣忠良

從二位行權中納言藤原朝臣兼宗

從三位行右近衛權中將源朝臣通光

沙彌釋阿

俊成卿女

丹後

越前

正四位下行左近衛權少將兼安藝權介藤原朝臣

定家

正四位下行左近衛權中將源朝臣通具

從四位下行上總介藤原朝臣家隆

從五位上行左近衛權少將藤原雅經

沙彌寂蓮

從五位下行右馬助源朝臣家長

判者

權大納言忠良

同春一

同夏二

同秋二

同冬二

同戀三

同三

顯昭

釋阿

左大臣

定家朝臣

師光入道

前權僧正

同春三

同夏四

同秋一

同冬四

同戀一

千五百番歌合卷第一 春一 判者忠良

春二十首

一番

左勝

女房

春たてはかはらぬ空そかはり行昨日の雲かけふの霞が

右

三宮

いつしかと雲井に春や立ぬらん雪けをこめてかすむ空哉

左歌心詞めつらしくこそ侍れ右歌もなたらかにほ侍るな

雲井と空とはおなし事にや侍らん以左爲勝

二番

左勝

左大臣

附拾遺

なしなへてけさは霞のしきしまやまともる人春を知らし

右

内大臣

夜をこめて竹にさえつる鶯の聲の色にや春のみとりは

右歌あしくも侍らぬと左歌うるはしきさまなれば可爲勝

歟

三番

左勝

前權僧正慈圓

雪のうちに春はきにけり吉野山雲とやいはん霞とやいはん

右

權大納言忠良

昨日までさふし嵐の音羽山かすむや春に逢坂の關

四番

左持

權中納言公繼

ふるす出る鶯の音にしるき哉谷より春はたつにそ有ける

右

權中納言兼宗

春きぬとたれに岩まの水なればけさは氷のとけはしむらん

左右ともにことなる事なし可爲持

五番

左

參議公經

杉の葉のかすむにしるしあふ坂や關の岩戸の春の曙

右勝

右近權中將通光

今朝よりは雪けの雲の跡はれて縁にかへる春の初空

左の關の岩戸の春の曙すかたはをかしく聞ゆるを山立出

るきりはらの駒といふ歌をおもへるにやそれば石門には

あらず岩のかとなりとも申にや又石門なるにてもいは月

といはん事いかいはんへるへからん門と戸とはことなる

物にこそ侍めれ初五文字もいたくしたかにや侍らん右も

雪けの雲の跡はれてと侍たゝ雲はれてとあらまほしく聞

え侍れとさしておほつかなき事なければ勝侍らん

六番

左

大皇太后宮大夫季能

けさよりや澤への氷とけぬらん春風かよふかさゝきのこゑ

右勝

釋阿

八重霞八十嶋かけて立にけり千代のはしめの春の曙

左歌春風かふふかさいきのこゑと侍るはもし東方朔傳に

朔日風從東方來鵲順風而立是以知其東嚮鳴也とい

へる心にや右歌姿まさり侍らむ

七番

左持

宮内卿

いつしかと春の日影に雪消て聲たて初る庭の松風

右

俊成女

出る日の光もしるし天つ空くもりなき世の春のはしめは

左珍しき狀には侍れと聲立初るとは言るいかにぞ聞え侍

にや右させる事無れと祝の心あれば何れを勝ると申難し

八番

左持

讃岐

雲井より春や立ちあまの戸をなしかけた霞そめぬる

右

丹後

昨日までこやもあらはに見えしかとけさ難波の浦はかすめる

兩首の霞勝劣不分明歟持とすべし

九番

左

小侍從

去年といふ昨日にけふはかはらぬをいかにしりてか驚のなく

右勝

越前

いつしかと春のけしきをながむれば霞にくもるあけほの空

左去年といふとなけるすこし耳に立にや侍らん右めつら

しき所なけれと難なくは侍へし

十番

左持

散位藤原朝臣隆信

あふさかや關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは

右

藤原朝臣定家

春かすみ昨日を去年のしるしとや軒はの山も遠さかるらん

左歌させる難なく侍るにや右歌軒はの山も遠さかるらん

といへる餘情過たるにやすかたはよろしく侍り可爲持歟

十一番

左勝

散位藤原朝臣有家

山の霞を分て出る日ものとかにめくる千代のはつ春

右

左近衛權中將源通具

年なみのこゆればやかて色そいふ霞かゝれる末のまつ山

右歌色そいふや耳にたち侍らん左可爲勝歟

十二番

左

散位藤原朝臣保季

年くれて一夜にかはる春なれば霞もあへずあまのかこ山

右勝

上總介藤原朝臣家隆

足引の山のしら雪消もあへず昨日を去年とかすむ空かな

左歌一夜にかはる春なればとへいへるはよろしきをあま

のかこ山はいつくにてもありぬへくや侍らん右歌昨日は

こそとかすむ空哉と侍すこしまさるにや

十三番

左持

右近衛權少將藤原朝臣良平

春日山松のうれより出る日は千とせの春のはしめ成けり

右

左近衛權少將藤原朝臣雅經

昨日かも年はくれにしあまの戸のあくるまにける春かすみかな

左松のうれよりなとことく聞ゆるに末の匂や事もな

く侍らん右もことなる事なければ持たるへし

十四番

左持

左兵衛佐源朝臣具視

年の内の春とは空に見よしの山もかすみ雪のふりつゝ

右

寂

蓮

卷向のあなしの檜原春くれは霞をかけて山かつらせり

左右兩首ともに得古賢之風勝劣難決仍又持とす

十五番

左

僧

顯昭

夜の程に雪ふる年を引かへて空も心も春めきにけり

右勝

右馬助源家長

こほり吹山風さむみけふも猶また打出ぬ水のしら浜

左歌めつらしき所なきにや右歌下句なとよろしきなるへ

し

十六番

左勝

女

房

冬とはると行あふ坂の影かえに霞をしのきあは雪ぞふる

右

内

大

臣

岩ぞいくたるひのうへにさす日影打とけにける春のはつ空

左よろしく侍り勝とすへし

十七番

左勝

左大臣

おちたきつ岩間うち出る泊瀬川はつ春風や氷とく覽

右

忠

良

卿

けふよりや木のめも春の山風にさくらか枝も花を侍らん

左いはま打出るはつせ川よろしく聞え侍り右なるかなる

詞にこそ侍りけれさくらか枝句なく見え侍り尤可爲負

十八番

左勝

前

權

僧

春風のむすふ水を吹とけはさらにやけふは袖もひちなん

右

兼

宗

卿

君かため子の目の松を引うへて千代のかげなも頼みつるかな

右歌させる難なきうへに祝の心も侍と左歌さらにやけふ

はと侍猶心ある機なりまさるにこそ侍めれ

十九番

左持

公

繼

卿

九重にけふたてそむる水こそ風にもとけぬためし成けれ

右

通

光

卿

いく千代のためしましてとか年ことに千代の松を引かさぬらん

左もことなることなく右の千代の松もさよの衣なとや覺

侍らん持なとにて侍へきにや

二十番

左

公

經

卿

あは雪のふるからをのゝとかしは本見し空にかへる春かな

右勝

釋

阿

鶯も千代をや契年をへてかはらぬ聲に春なつくらん

左のもとかしはいといひおほせられても聞えさるにや右

勝侍なん

廿一番

左

季

能

卿

一とせを思ひくらしてまゝめは夢よりあくる空のはつ春

右勝

俊

成

卿

女

明やらぬ谷の戸さくる春風に先さそはるゝ鶯のこゝ

左歌空のはつ春あしかるへきにはあらねとついさいかに

そや聞え侍るにや右歌先さそはるゝといへる優に侍勝と

すへし

廿二番

左

宮

内

卿

ゆく末の梢をこめゝ姫こ松けふこそよそに嶺のしら雲

右勝

丹

後

麓までかすみにけりな深山には松の葉しろき雪もけなくに

左梢をこめゝ姫小松となきて末にみねのしら雲といへる

へたてたる様にや侍らん右かつへきにや

廿三番

左勝

讀

岐

春風をさらに雪けに吹かへて峯の霞そ雲かくれゆく

右

越

前

春きぬといふばかりにはかすみ共また雪ふかしみよしの山

左心ことはともに優に侍へし右ことなる事なければ左勝

侍へし

廿四番

左

小

侍

從

たいかすみ空とやけさを思はまし谷の鶯音せさりせに

右勝

定

家

朝

臣

春といへば花やばなそきよしの山きえあへぬ雪のかすみ曙

左初五文字きよくも侍らぬにや右宜く見え侍

廿五番

左持

隆

信

朝

臣

春きては人もとふへきみよし野に雪よりふかき朝霞かな

右

通

具

朝

臣

たれに又けふと契を志賀の浦花のさゝ浪春風そふく

右歌花のさゝ浪春風そふくと侍いとも心えず侍り是はも

し今日不知誰計會と申詩の心にや如何様にもおほつかな

き様に侍らん左歌めつらしき様にもなきなるへし持なと

にや

廿六番

左勝

有

家

朝

臣

春風の立田の川やまさるらん三むろのさしの雪の下水

右

家

隆

朝

臣

春たちてけふ三日月の山のはに霞そめたる夕くれの空

右も無難は侍れと左立田の川の水のにこれるといふ歌思

出られてよろしく見え侍り可爲勝

廿七番

左

水せし嵐を春に吹かへて昨日はきかぬ谷のした水

右勝

保季朝臣

雅經

氷とくおきつ春風吹ぬらし汀にかへる志賀の浦なみ

左歌昨日はきかさりしとやいはまほしく聞ゆらん右歌下

句なとつれの事なれと指難なげればまさり侍らん

廿八番

左

今朝もな雪の雲にまかふ哉いづれ霞とみよしの山

右勝

寂蓮

春きてもな雪さゆる山風のみもとになれは水とくなり

左いづれ霞とみよしの山詞たらぬ様にや侍らん右ふも

とになれは水とく也といへる心をかしく侍り勝とすへし

廿九番

左勝

具親

いつしかとかすみの衣立田山うらめつらしきはるの明ほの

右

家長

春風のおへの雪を吹からに音信そむる松のはつこゑ

うらめつらしき春の曙勝侍らん

三十番

左勝

顯昭

いめこ松ひくまのゝへに手日して手ことに千代をかさしつる哉

右

三宮

けふも猶雪ふる松に音信で聲うちかすむ春の初風

左勝へきにや侍らん

三十一番

左勝

女房

かつらきやたかまの山に雪消てさえし嵐は春のはつ風

右

忠良卿

春はまたあさかの沼のうす水消あへぬうへに淡雪そふる

浅香の沼の水高間の山の雪に及へからず侍り仍以左爲勝

三十二番

左勝

左大

臣

よし野山雪ふるさともしかすかに横のはしのき春風そ吹

右

兼宗卿

たちわたる霞も春はあはれ也秋風ふかぬ萩のやけはら

右霞も春はあはれ也といへるよはく聞ゆるにや左横のは

しのき春風そ吹よろしく侍り可爲勝

三十三番

左勝

前權僧正

春霞たるは都担も猶山のおくには雪つふるむ

右

通光卿

たえ／＼に去年の名残とちる雪をしばしもみせぬ春霞哉

右雪をたえ／＼にふるといはん事やいか侍へからん野

中のし水なとの心ちし侍らんしほしもみせぬも遠山の殘

雪なとはさも侍なん左まさるにや侍らん

三十四番

左

公繼卿

春の日の霞のうちにくれぬれはなかしとも又おほえさりけり

右 勝

釋

阿

春きぬとみかきか原はかすめ共猶雲さゆるみよしの山

左歌なかしともまたと侍またの字や無用きこえ侍らん右

猶雲さゆる尤可爲勝

三十五番

左

公

經

卿

白妙の袖にみとりなうつしもて雪ふるのへに若菜つむ比

右 勝

俊

成

卿

女

昨日までとちしつらいの池水にいつ春風の浪を吹らん

右優にはへり

三十六番

左 勝

季

能

卿

うちなひき所もわかす立春を何とへたつる霞成らん

右

丹

後

鶯の泪のこほりとけしより打出そむる谷川の水

右涙の水とけしよりといひて打出そむると侍るかけあは

すやまた上下の句のはしめも同じ文字也左なにとへたつ

る霞なるらんといへるめつちしかられと難ければすこ

しまさるへくや

三十七番

左 持

宮

内

卿

くもる日ないつちうらなくかこたまし霞の衣春雨の空

右

越

前

浪路より春や立らん朝ほらけ霞そこゆるすゑの松山

左歌下句はよろしく侍るないつちうらなくかこたましと

いへるやいかにそ聞侍らん右末の松山かすみこゆるなと

つれの事也上句もあまりやすらかにや侍らん可爲持歎

三十八番

左 勝

讀

岐

春の雪は猶ふる草に晴やらて道ふみ分ぬ竹の下折

右

定

家

朝

臣

山のはに霞ばかりはいそけ共春にはなれぬ空の色かな

左の深草の雪おかしと思ひやられ侍り右いそけ共といへ

る優にも聞えさるにや左まさり侍らん

三十九番

左 持

小

侍

從

雲ついくとをちの里の夕霞たえまゝにかへるかりかれ

右

通

具

朝

臣

雪のうちに涙とけ行鶯は我音に鳴て春やしろらん

左雲ついくとをきて又たえまゝと侍はしめなはり事

たかひてや右此心ふるくおほくよめり持とすへし

四十番

左

隆

信

朝

臣

君かへん千代のためしに引せめし野への小松も数そひにけり

右 勝

家

隆

朝

臣

山里は木の間の日影猶さえて春とも見えぬ庭の霜哉

左はいはひの心なれ共右すかた宜侍り勝とすへくや侍ら

ん

四十一番

左持

有家朝臣

けふこそは花の都にくれ竹の泣くらさため春の鶯

右

誰經

新松道晴

わらぬ雲は雪けの春風に霞あまきるみよしの山

左右おなしほとにや侍らん

四十二番

左

保季朝臣

れのひする野へより色そかはりけるときはの松の春の一しほ

右勝

寂蓮

春はなをかすみもはてぬけしき哉吉野の山の松の村消

左野へより色そかはりけるといへるいかと聞え侍にや

右よしの山の松の村さえは優に侍を霞もはてぬけしき

哉と侍そ不被庶幾侍れと猶右勝侍らん

四十三番

左持

良平

みよしの野の楢を花となかむれはたかれはいまた冬の白雪

右

家長

から衣袖ふりはへて雪消ぬすその原の若ななそつむ

左右ともに無殊難可爲持歟

四十四番

左持

具親

志賀のうらや水によとむ冬の浪のいくかを過て立歸らん

右

三宮

秋たにもほのめく空の夕つくよかすめる春はそれかともしなし

左水によとむといへる山川の心ちし侍れとさゝ浪のしか

の大わたよとむともなと萬葉にもよめれば難には及はさ

るへし右も勝へきほとには見え侍られに持にて侍るへし

四十五番

左持

顯昭

春霞けさはけふりにまかふらしふるしもみえず鹽かまのうら

右

内大臣

昨日までつらいのそこに見し根芹けさは雪けの水にこそつめ

左右同科勝劣難決

四十六番

左勝

女房

白妙の衣春雨かきくもりふる野のわかな今やつむらん

右

兼宗卿

山里は聞しる人もあらしとやまつ聲ならす谷のうくひす

右の歌つねの事也左勝とすへし

四十七番

左勝

左大臣

時しもあれ春の七日のはつれのひ若菜つむ野に松を引哉

右

通光卿

待わひし軒はの梅に風過にそれに聞へきうくひすのこゑ

それに聞へき鶯のこゑ優にしも聞えさるにやわかなつむ

野の手日まさり侍らん

四十八番

左持

あは雪の花なき里にうれしきは木のめも春の夕暮の空

右

春毎に千日の松の千代は皆我君か世のためし成けり

左木のめも春の雪ふればと云歌の心おかしくみえ侍り右

祝の心也持とすへし

四十九番

左

ときは山しら雲かいる梢こそはるかにみゆる雪のした草

右勝

俊成卿女

春日野の雪まな分て尋ぬれば草のはつかに春めきにけり

左心はなかしき春の歌と見ゆるところや侍らさん右難

なく侍り勝とすへし

五十番

左

鶯の水れる涙とけにけりまたふる年の雪は消あへて

右勝

丹後

雪とちし軒のたるひのとけ行ないつしか春の雨かとそみる

左歌とくと消るとはおなし事にこそ侍めれ右勝侍へし

五十一番

左勝

小松原雪まな分てひく人の手にあらはるゝ千世のはつ春

右

越前

音羽山松に明行横雲の名残をみればかすむ一むら

右歌姿よろしきを松に明行と侍こそ松にしもやはよのあ

くへきと覺侍れ左難なくは勝もし侍れかし

五十二番

左

霞しく河そひ柳浪かけてれにあらはるゝ春のうくひす

右勝

定家朝臣

山里は谷の鶯打はふき雪よりいつる去年のふる聲

兩首の鶯れにあらはるゝ春の鶯といひ雪より出る去年の

ふるこゑといへるともに優に侍を左霞しくとなけるや河

そひ柳にいとつゝきても聞えず侍らさん右勝へくや

五十三番

左持

深山いてゝ花を遅しと思ひけり松の雪にそ鶯はなく

右

通具朝臣

芹つみしみがきはらはそれなから昔をよそにぬらす袖かな

左詞つかぬ様に聞え侍れと右昔をよそにぬらす袖かな

と侍もさにこそとは聞えなからおほつかなくや侍らん持

なとにや

五十四番

左持

春といへばなへて霞やわたるらん雲なき空のおほる月よは

右

家隆朝臣

春の日のあさいはをのゝうす氷たれふみ分てれせりつむ覽

左右おなし心に侍

五十五番

左持

隆信朝臣

雪のうちにめくむ若菜に埋れてとふひの野守みるかひそなき

右持

雅經

わかなつむゆかりにみればむさし野の草はみながら春雨の空

左飛火の野守出てみよと云歌の心とは聞え侍れとみるか

ひそなきといへるや野守の無下に無面目様に聞なされ侍

らん右の草はみながら春雨の空又いとも心得ず侍れは持

とすへし

五十六番

左持

有家朝臣

春ことにとふ火の野守ふりぬらん雪まの若な年をつみつゝ

右持

寂蓮

誰か又春のしるしと契けん三輪の山もとうくひすのころ

左ことなる事なけれと無指難右はなかしきをみわの山も

とのとやいはまほしく聞覽猶持とすへし

五十七番

左持

保季朝臣

春くれにもとよりたえぬ煙さへ霞とみゆる鹽かまの浦

右持

家長

暮はつる浪路の末は八重霞かすみを出る春のよの月

右八重霞かすみを出る春のよの月誠にかななりて聞え侍

り左もとよりたえぬ煙さへといへる宜侍にや

五十八番

左持

良平

くもる夜の空をよそにてもる月や木の下陰に残るあは雪

右持

三宮

津國のなにはの春を見わたせは霞をよする奥つ白浪

兩首歌勝劣不分明歟

五十九番

左持

具親

都にてなにかへるともうらみげんはつねに出る谷のうくひす

右持

内大臣

春風にないくのみかは鶯のきあるにたえぬ青柳のいと

左はつねに出るといへる宜聞えれば以右爲勝畢

六十番

左持

顯昭

はる／＼と飛火かはらを見わたせば霞といもにひはり立也

右持

忠良卿

行末を子目の松に引かけて君か千年を手にまかせつる

左歌殊なる事なしといへ共右にはまさり侍るへし

六十一番

左持

女房

手折げん軒はの梅を尋めれば花もえならぬ袖のかそする

右持

通光卿

庭の面に残る跡まで木のまもる月かけうつす雪の村消

右歌心はあり詞つゝき宜しからず聞え侍り左委宜く侍り

可爲勝

六十二番

左

左 大 臣

鶯のはれ白妙にふる雪をうちほらふにも梅のかそする

右勝

釋 阿

袖のかに梅はかはらすかほりけり春は昔の春ならねとも

左右ともよろしく侍にとりて右は下句いますこしま

さるにや侍らん

六十三番

左勝

前 橋 僧 正

春はとし霞かゝれる梢より花そなそきと鶯のなく

右

俊 成 卿 女

山里は猶ふる雪の消かてにまたき梢に花を散ける

左歌心おかしく侍り右歌もすかたはよろしく侍れと猶左

まさり侍らん

六十四番

左勝

公 繼 卿

日かけみぬ山かくれになれきて雪けの水の又こほりぬる

右

丹 後

昔よりけふまでたえぬ子目にも君を松とや引残しけん

右も難なくは侍れと左雪けの水の又こほりぬるといへる

心よろしきになり勝とすへし

六十五番

左勝

公 經 卿

新千載

春風をたきつ岩根にせきかれて霞におつる花の白浪

右

越 前

うす水春日うらゝにとけぬらし山田のさはにしつそゑくつむ

左歌宜く侍り右歌ことなる事なければは左可爲勝

六十六番

左勝

季 能 卿

玉ばいきこれも千年のためしとて初ねの松に引そふる哉

右

定 家 朝 臣

新古今

消なくに又やみ山をうつむらんわかなつものにあは雪そふる

左ことなる事なきか右姿よろしきを又やみ山をうつむら

んわかなつむ野もあは雪そふるなといへる野邊よりも都

には雪のふかゝるへき様に聞ゆるにや持に侍へし

六十七番

左

宮 内 卿

けふわかなつむてふ事は一とせにのへふみならずはしめ成けり

右勝

通 具 朝 臣

新古今

梅花たか袖ふれし匂ひそと春や昔の月にとはいや

左初五文字こととしく侍にや右勝はへらん

六十八番

左勝

讃 岐

梅花匂ひはよそにちらすとも色をは風のおしまししかは

右

家 隆 朝 臣

子日する松に千とせや契けん同し二葉のゝへの若草

左のおしまししかは聞よくも侍らぬにや右下句はよろし

きたわが草のちとせを契らん事おほつかなければ持とす

へし

六十九番

左

小侍 從

ふみなれし昔の跡をたとへて哉和歌の浦にも霞へたてい

右勝

雅經

雪さむきまやのいさはの梅かえに春を待しも鶯の聲

左に指事右すかた宜く侍り勝とすへし

七十番

左勝

隆信 朝臣

春たちて都のわかなつむまてに鶯の音を松のしら雪

右

寂蓮

梅花咲ぬる色に埋れて雪かとみれば袖にほふなり

鶯の音を松のしら雪まさるにや

七十一番

左勝

有家 朝臣

昨日けふまたみよしのは雪ふりて春とも見えぬ嶺の雲哉

右

家長

雪のうちはつちにつくまで見えしかと立枝にかへる松のむら立

立えにかへるいか侍らん左可爲勝

七十二番

左勝

保季 朝臣

夜をこめていく浪路をか過ぬらん跡よりかすむ春の明ほの

右

三宮

續千載

ふる巢なほ都の春にすみかへて花になれ行谷のうくひす

跡よりかすむといへる宜く侍り

七十三番

左

良平

聲の色にたくふ花たになかりけり鶯さある松の村立

右勝

内大 臣

詠れは見えみ見えすみ春霞立あるのへに若なつむ人

左たくふ花たにといへるたにの字優ならずや聞え侍らん

右可爲勝

七十四番

左勝

具親

白雲のたな引のへの小松原空にしめゆふ君か千代かな

右

忠真 卿

雪消ぬ野への通路跡みえてわれよりさきに若なつみけり

空にしめゆふ君か千代かなと侍宜きうへ視の心也尤可爲

勝

七十五番

左持

顯昭

さきやらぬ花のれくらなまつ程やゆふくれ竹にさある鶯

右

兼宗 卿

鶯のなくれの色に聞ゆるは春しりそむるし成けり

兩首ともに無指難又無指事歟

千五百番歌合卷第二 春二 判權大納言忠良

七十六番

左 勝

春風のさそふかのへの梅かえになきてうつろふ鶯のこゑ

右

釋

阿

春はなを柳か枝もかきりなしみとりのいとに露のしら玉

左右ともによろしく侍るにとりて左なきてうつろふと侍

猶まさり侍にや

七十七番

左

左

大

臣

暮戀のさすなく野のしたわらひしたにもえても折をとる哉

右 勝

俊

成

卿

女

新古今

梅花あかぬ色香もむかしにて同じ形見の春のよの月

左も歌から宜く侍れと右おなしかたみの春のよの月尤も

ろし勝とすへし

七十八番

左 勝

前

權

僧

正

春雨のふるからなのゝあつさ弓をりていさゝば若なつみてん

右

丹

後

梅かえにおもひよそへてなかむれば雪さへかほる春の曙

左勝侍らん

七十九番

左 持

梅かえの花のにはひをゆかりとやきゐる鶯妻もとむらん

右

越

前

打ばらふ雪たにやまぬ春日野に袖ふりはへて若なをそつむ

右無殊事にや左歌萬葉に春なれば妻もとむとて鶯のとよ

める心にやあなかりに優にしも聞え侍られは持とすへし

八十番

左

公

經

卿

軒ちかき梅の匂をかたしきの袖にそふかき色はみえける

右 勝

定

家

朝

臣

谷風の吹あけにさける梅花あまつ空なる雲や匂はん

左いとも心えず侍り右天つ空なる雲や匂はんと侍ことに

宜く侍にや

八十一番

左

季

能

卿

春ことに野へに心をやる人も若なにそへて年はつみけり

右 勝

通

具

朝

臣

梅かえを折つる袖にかけみればかさへなつかし春のよの月

兩首いく程の勝負なく侍れと右折つる袖にかけみればと

いへるいさゝかまされるにや

八十二番

左

宮

内

卿

けさよりはかたまつこともなかりけり梅さく宿に鶯の聲

右勝

家隆朝臣

霞たつたの御野の狩衣はらふともなき春のあは雪

左かた侍ことふるくもよめること葉なれと不被庶幾也右

爲勝

八十三番

左

讃

岐

石上ふる野のをのと聞しかと若なは年におひかはりけり

右勝

雅

經

春もきてたちよるばかりありしより霞の袖の梅のうつりか

右歌下句は宜きを春もきてと侍るもの字耳にたつてや侍

らん左又させる事なければ猶すかた宜きにつきて右勝侍

へきにや

八十四番

左

小侍從

今そしる宮の鶯さえつるもひとり聞ける人のこゝろな

右勝

寂

蓮

花ならて又も心はうつりけり谷の鶯なくやむめかえ

左上陽人の昔の心おもひやれるよりは右谷の鶯なくや梅

かえといへるはめつらしきさまにや

八十五番

左勝

隆信朝臣

春日山松のみとりはほのみえて消あへぬ雪に春風そ吹

右

家

長

うめの花なつさふ人の袖ことにありあへたるは匂ひ成けり

左無指難侍り右ありあへたるはといへる俗にちかくや侍

らん左勝とすへし

八十六番

左持

右家朝臣

まかへつゝなめそくらす花をのみ松の梢の雪の村きえ

右

三

宮

みな人の花を尋て出ぬれは春の宿もるうくひすのこゑ

松の梢の雪の村消すかたおかしく侍へし春のやとる鶯

のこゑ又宜しければ持にや侍らん

八十七番

左持

保季朝臣

けふまでも梢は冬の色なから去年にはかはる雪の下草

右

内大

臣

くればとりあやになかめの成行かみとりの空にあそふいとゆふ

左雪のした草は去年にかはらん事もしりかたくやとは聞

ゆれとむすほゐれたる雪の下草ともよめれば不可及難歟

すかたはよろしく侍り右歌も無指難侍ればこれも可爲持

歟

八十八番

左勝

長

平

色よりも身にしむものは梅花袂に匂ふ風のうつりか

右

忠

夏

卿

いくかへりなれぬる春と思へ共な梅かえにうくひすのこゑ

左風のうつりかといひはてたるいかにそや聞え侍にやき

れと右おもへともといへるよほくきこゆ劣に侍へし

八十九番

左 勝

具

親

谷ふかき雪のふるすにおもなれて花に物うき鶯のこゑ

右

兼

宗

卿

おほつかな軒はの梅をかほらせて櫛のいたやに誰なかむらん

左歌あしからす聞え侍り右歌必まきの板やとしもおもひ

やるへからすや聞え侍らん左勝に侍へし

九十番

左 持

顯

昭

さく花をうらやましとや思ひげん春の梢にとまる白雪

右

通

光

卿

山ふかきまかきの雪も消ぬまに都の人の春なとひける

右心は侍へしうらやましとや思ひげんといへる程そおも

はまほしく聞え侍右春を問けるといひはてたる又いかい

と見ゆれば持とすへし

九十一番

左 持

女

房

池水のみ草にをける夜の霜消あへぬうへに春雨そふる

右

俊

成

卿

女

鶯のれくらにならず梅かえにをのか羽風も身にやしむらん

左右ともに優美にして勝負難決可爲持歟

九十二番

左 勝

左

大

臣

千代

野も山もおなしみとりにそめてけり霞よりふる木のめ春雨

右

丹

後

遠近もひとつかすみのうちながら音にそしるき志賀のうら涙

左の野山右のなちこちよろしく侍にとりて左の下句まさ

り侍らん

九十三番

左 持

前

權

僧

正

ふふこ鳥うれしくも有かなちこちのたつきにまふ山の夕暮

右

越

前

ふるすより春の嵐やわたるらん袖にこみちる谷のうくひす

左右同科歟

九十四番

左

公

繼

卿

都にて心やはるゝ雪のうちに冬こもりせし谷の鶯

右 勝

定

家

朝

臣

里わかね月をは色にまかへつゝよものあらしに匂ふ梅かえ

右歌よろしく侍り尤可爲勝

九十五番

左 持

公

經

卿

たれもとへ梅か香匂ふ木の下に光ほのめくいさふひの月

右

通

具

朝

臣

そことしもしられぬ梅はかほりきて垣ねの末に鶯そなく

左の誰もとへ右のそことしも同じ程の事にや

九十六番

左持

季能卿

あさみとりかすみこむれと鹽風のなとにそしるき磯の松原

右

家隆朝臣

梓弓をして春雨ふる郷のみかきかはらそうすみとりなる

左の磯の松原いつこにても侍へけれと猶其所なさいまほ

しくや侍らん右のみかきかはらもさせることなければ持

とすへし

九十七番

左勝

宮内卿

梅かえの花のありかなしらねとも袖こそにほへ春の山風

右

雅經

かすむより雲路にのみそ聲はする澤へのたつものへのひはりも

右こゑはするといへる優にも聞えさるにや左袖こそにほ

へといへるまさるへくや侍らん

九十八番

左

讃岐

かへり行こしちの雪やさむからん春はかすみの衣かりかね

右勝

寂蓮

尋つる花のこすふななむれはうつろふ雲に春の山風

左歌春は霞の衣かりかれといへるも宜く侍れと右歌うつ

ろふ雲に春の山風又優に聞ゆ右勝へきにや

九十九番

左持

小侍從

身こそかく年ふりぬれと驚のさえつる春はあらたまりけり

右

家長

春風のふくにつけてそ思ひ出るつのくむ萩の行末の秋

左ふるき歌の心をも詞をもとりてよむは常のことなれと

是百千鳥を驚になせる計にや珍しけなくこそ右行末の秋

ならは思ひやるとそ有へき持なとにや

百番

左持

隆信朝臣

春きては霞の衣いくかさね袖しのうらの涙やたつらん

右

三宮

かた岡の草はを雪やそめつらん消行まゝにあさみとりなる

左歌秀句限なく侍り右又無指難持にて侍れかし

百一番

左勝

有家朝臣

山里は嵐にかほるまとの梅霞にむせふ谷のうくひす

右

内大臣

春霞たてるやいつく花をまつ心よりこそたちはしめけれ

右もことなる難なく侍れと左霞にむせふ谷の驚といへる

ふるしく侍にや

百二番

左勝

保季朝臣

霞たつ山のはまてはおほるにてのほれば月に春風そふく

右

忠良卿

さきぬなりかほるにしるし梅花色こそみえれ春の山風

左山のはまてはおほるにてといへる宜く侍り右いま見侍

ればやみなともなくて色こそみえれといへる心えさるへ
しうたかひなきまけにこそ侍めれ

百三番

左 持

良

平

石土ふる野のなの、雨の中にぬれても萌るはるの若草

右

兼

宗

卿

吹風にかたよりしけり鶯のかさやぬふへき青柳のいと

左右同科に侍へし

百四番

左 勝

具

親

もゑ出る木のめ春雨けふも猶ふるの、若なまたはつか也

右

道

光

卿

立よらぬ袖にかほる梅花それともみえぬ雪もあやなし

右雪もあやなしと侍るやみはあやなし梅花といへるには

にすや侍らん左まさり侍にや

百五番

左

顯

昭

軒ちかきわか木の梅の初花にことしそ我も春を知ぬる

右 勝

釋

阿

なめわひ誰かはとほん山里の花待ころの春雨のうち

左ことしそ我もといへるよりは右の春雨の中勝侍らん

百六番

左 勝

女

房

ふかき夜のあはればしるや春の月しく物もなき有明の空

右

丹

後

行衛なき雲路にきゆる雁金の聲さへかすむ春の明ほの

右歌も宜しくは侍に聲さへかすむなと常の事なるへし左

しく物もなき有明の空勝侍へし

百七番

左 勝

左

大

臣

わたのほら雲にかりかれ涙に舟かすみてかへる春のゆふくれ

右

越

前

梅かえのあたら匂ひに袖ふれてひとりかたしくよはをかさぬる

右歌結句心ゆかす侍はや左歌置てかへる春の夕くれよろ

しく侍り

百八番

左

前

權

正

春ことにかさして年そつもりぬるわかおひかくせ梅の花かさ

右 勝

定

家

朝

臣

春やあらぬ宿をかことに立出れといつくも同しかすむ夜の月

左もなかしき様には聞え侍れと右心姿儘に侍勝とすへし

百九番

左 持

公

繼

卿

みよしのかすかのもりの梅花とる神はに香をましへけり

右

通

具

朝

臣

さびしさのしけさまさるあさちふの庭は春雨ふるにつけても

左かをましへけりと侍聞ふからすや右庭は春雨降につけ

てもといへるまた宜しからすめ侍れは可爲持歟

百十番

左

公

經

卿

梅花袖に匂ひの風こえて夢の枕にさゐるうくひす

右勝

家

隆

朝

臣

百千鳥た袖ふれしふる郷の軒はの梅のかをしたふらん

左歌鶯はよるはながさるにや此夢の枕は曉にこそは侍ら

め又夢の中にさけるにやおほつかなく侍り右おほつかな

き事なければ勝侍らん

百十一番

左

季

能

卿

かさこしの嶺には春やたいさらんふもとの空に霞へたてい

右勝

雅

經

新古今

白雲のたまになひく青柳のかつらき山に春風そふく

右歌すかたよろしく侍り

百十二番

左勝

宮

内

卿

うすくさのへのひとりの若草に跡まてみゆる雪のむら消

右

寂

蓮

谷の戸をいとも雲に入にけり花に木つたふ野への鶯

左心ことばおかしく侍り可爲勝

百十三番

左

讀

岐

わきもこか衣春雨ふるからにすその草そ色まさりける

右勝

家

長

なのつから跡みし雪は消はてし草たつ庭に春雨そふる

左歌我せこか衣春雨ふることにのへのひとりを色まさり

けるといふ歌にいとたがひたる所なきにや右歌草たつ庭

優にも聞えぬとふる歌にあらぬは勝とも申侍らん

百十四番

左勝

小

侍

從

年つめは果は老けりわかなこそ見しそのかみのかたみなりけれ

右

三

宮

梅花あかね色をいくしほか心にそめて春をへぬらん

左歌わかなは年へまさりけんそのかみもおいてこそ侍け

め右歌又かやうの心詞常の事也持とすへし

百十五番

左

隆

信

朝

臣

うへしより春はと待しかひありて梅のはつえに鶯のこゑ

右勝

内

大

臣

春雨にこぬれかくれて鶯の聲うちしめる夕くれのそら

左梅のはつえと侍初花などいへるよりは聞つかぬ様にや

侍らん右勝侍にこそ

百十六番

左勝

有

家

朝

臣

新古今

青柳の糸に玉ぬく白露のしらすいくよの春かへぬらん

右

忠

良

卿

春霞たつた川原の河かせにこすへなみなる岸の青柳

しらすいくよのといへるよろしく聞ゆ可爲勝侍り

百十七番

左 勝

保 季 朝 臣

ゆきとけて山陰さゆるふるすより聲のみ春の谷の鶯

右

兼 宗 卿

年をへてさかめためしはなけれ共猶またるゝは櫻成けり

左歌すかた優に侍り右歌ことあたらしくや侍らん

百十八番

左 持

眞 平

霞しく春のみとりに成ぬれば今一しほのときは木のもり

右

通 光 卿

明ほのゝ哀はこれにしりそめつ軒はの梅に月なのこして

左常磐木のもり松のみとりなといへるにはおとりてや聞

え侍らん右のあはればこれにしりそめつといへるいつれ

もすくれても侍らぬにや

百十九番

左 持

具 親

春風や梅の匂ひなさをふらん行ふさためぬ鶯のこゑ

右

釋 阿

新古今

いくとせの春に心をつくしきぬ哀とおもへ御よしのゝ花

右あはれとおもへみよしのゝ花かきりなく見え侍に左行

ふさためぬ鶯の聲又心詞優に侍り勝負さためかたし

百廿番

左

顯 昭

梅か香をよばの嵐のさそはすはれやのいたまをいかでもらまし

右 勝

俊 成 卿 女

風かふれ覺の袖の花のかにかほる枕の春のよの夢

左右の花のかといもによろしくは侍れと右すかたおかし

く侍り勝とすへし

百廿一番

左 勝

女 房

よひのまはほのめく月のしかすかにかすみもはてぬ春の天空

右

越 前

さき初る花は心ないさなへはうたて霞のたちかくすらむ

右花は心ないさなへばといへるかつへからす左の勝判に

も及さるへし

百廿二番

左 勝

左 大 臣

津國の難波の春の朝ほらけ霞も浪もはてをしらばや

右

定 家 朝 臣

あつまやのこやの假寝のかやむしろしくゝほさぬ春雨そふる

左なにはの春の朝ほらけことに宜く見え侍り右しくゝ

ほさぬ負侍へし

百廿三番

左 勝

前 權 僧 正

春の心のとけしとてもなにかたせんたえて櫻のなき世なりせば

右

通 具 朝 臣

いつとなき霞の空は縁にて袖になかめの春雨そふる

左有其興様なり右姿よろしきななめめ春雨とつゝける

やいかいと覺侍らん左まさり侍にや

百廿四番

左持

公繼卿

梅花なちのふもとに咲にけりにほふにしるしかさこしの山

右

家隆朝臣

思ふよりいかにせよとて梅花うたて匂を袖にかすらん

同等に侍へし

百廿五番

左勝

公經卿

なかむればやみばあやなし故郷に匂ひて過る梅の下風

右

雅經

立かへりみてもみまくの花盛さはぬ風の打匂ひつつ

右歌みてもみまくの花盛といへる見まくのほしきとある

へきにや左歌故郷無其詮侍れと勝侍なん

百廿六番

左勝

季能卿

鶯はさても聞けり春くれば花なき宿のいさいむら竹

右

寂蓮

春くれば梢に花の浪こえてふしのいおくも末の松やま

左花なきやとは見所すくなくやと覺侍り右花のなみこす

事は常の事なるなふしのいおくも末の松山といへる宜く

侍にすゑの二所侍り左勝へきにや

百廿七番

左勝

宮内卿

二月や雪ちる風に枝さえてさき出る花や立とまるらん

右家長

春雨のふるの山田をきてみれば鳴のふしとにかはつなく也

左は心はせおかしく侍に花の立とまるらん事そいかいと

覺侍れと右鳴と蛙同宿せるよりはさき出る花見所まさり

侍なん

百廿八番

左

讚岐

春の池の汀の柳うちばへてなひくしつえにをしを立なる

右勝

三宮

うへなきし若木の梅のはつ花に匂ひそめぬる聞のうち哉

左歌なしにはかに出来る様にや右少まさるへくや侍らん

百廿九番

左

小侍從

色あれはそれとはみてん梅花枝に残りの雪消すとも

右勝

内大臣

かきつられ歸るこしちに日はくれぬ雲のいつくに宿をかりかれ

左有色易分殘雪底といふ詩の心おかしくこそみえ侍れ右

歸る越路に日はくれぬと侍る又よろしきうへに初五文字

なとまさり侍らん

百三十番

左勝

隆信朝臣

今はわれよはひも老ぬ鶯のかさにぬふてふ梅をかさいむ

右

忠良卿

山のはの雲より花にうつりきてなめくらせはかすむ月かけ

左歌鶯のかさにぬふといふ梅の花といふ歌をおもへるな

るへしかればおりてかさいん老かくるやとこそいひつれ

此歌はたゝ老人のかならす梅をかさす事のあらん様にや

聞え侍らん右雲より花なといへる思わさかたき様に聞ゆ

れはいかにも左勝侍へし

百三十一番

左勝

有家朝臣

津のくにやなにはのはるの色もみなひとつにかすむ曙の空

右

兼宗卿

おもかけにこそその櫻をさかせてそ花まつ程はなくさめにする

右下句心すくなく聞え侍り左勝へきにや侍らん

百三十二番

左持

保季朝臣

をちの里かよはぬ風を恨ても梅かと思ふなかめばかりそ

右

通光卿

打なひく柳のいとわきて又いかなる風にむすほゝるらむ

兩首の梅香柳糸同等にや

百三十三番

左

良平

かりかれのかへる名残をなかむれば心もこしの空までそ行

右勝

釋阿

續拾遺

白妙にゆふかけてけり神ほに櫻さきそふ天のかく山

櫻さきそふ天のかく山岩戸明けん昔思ひやられておかし

く侍勝侍へし

百三十四番

左持

具

親

消やらぬ雪よりめくむ若草の露しり初る春雨の空

右

俊成卿女

つれ／＼のまさるなかめは徒に春の物とてふれば成けり

右伊勢物語の歌とも思出られてすかた宜く侍り左も心お

かしきを空といへると此歌にとりて無要侍れと持なとに

や

百三十五番

左

顯

昭

風ふかぬ君か御代とはしりなから心となひく青柳のいと

右勝

丹

後

かへりこん秋をたのむのかりたにも鳴てそ春は立わかるなる

左吹風枝をならさすところいひならはしたれすへて風ふ

かす侍らん事いかゝ右歌さまよろしきなるへし

百三十六番

左

女

房

月よゝし夜よしと誰に告やらん花あたらしき春の古郷

右勝

定家朝臣

待わひぬ心つくしの春霞花のいさよふ山のはのそら

左花あたらしき春の古郷おかしくそ侍れ右心こもりて

愚意難及侍れとすかたよろしければ勝とも申侍らん

百三十七番

左持

左 大 臣

さらしなやおは捨山のうす霞かすめる月に秋でこもれる

右

通 具 朝 臣

尋入心のはてをみよしの、山よりふかく花やしるらん

左をはすて山のうす霞に秋のこもらん心おかしく侍り右

よろしくはみゆるをちかくかやうの心さ、侍し様に覺侍

れときのみば、かりあふへからさるにや可爲持也

百三十八番

左

前 橋 僧 正

櫻千枝

櫻花またみぬさきもみよしの、山のかひある嶺の白雲

右 勝

家 隆 朝 臣

月は猶かすみのしたにこほれとも汀に歸る志賀のうら波

霞のしたにこほれともといへる宜く侍り可爲勝

百三十九番

左

公 繼 卿

春のうちに梅はなさくその、玉柳匂をうつせ風のたよりに

右 勝

雅 經

山たかみ雲井の櫻くもとみてやすらふ程に風や吹らん

左の梅さくそのは柳か枝にといふ歌の櫻を思はぬなるへ

し右雲井のさくらくもとみてといへるよろし

百四十番

左

公 經 卿

かすみ行尾上の鐘のうちつけに花のおりまつなはつせの山

右 勝

寂 蓮

ゆきとまる所もあらし木のもとに過てそ花はみるへかりける

左うちつけに花のおり待といへるよりは右すきてそ花は

といへるまさりて聞ゆるにや侍らん

百四十一番

左

季 能 卿

春雨のふるからなのをみ渡せばわか葉さしそふもと柏哉

右 勝

家 長

匂ひさへ花の鏡にうつららしむすへは水のなつかしき哉

右むすへは水のなといへるよろしきにや勝侍へし

百四十二番

左

宮 内 卿

雪まわけまたうらわかきみとり哉草のはつかに春はなれとも

右 勝

三 宮

梅かえの花のれくらばあればて、櫻にうつる鶯のこゑ

左も下旬なとあしくは侍られと右さくらにうつる鶯の聲

勝り侍らん

百四十三番

左

讃 岐

新勅撰

も、しきや大宮人の玉かつらかけてそなひく青柳のいと

右 勝

内 大 臣

春雨の心ほそくもふる郷は人くといとふ鳥のみそなく

人くといとふ鳥のみそなくと侍まことに心ほそく思ひや

られ侍り侍に侍へし

百四十四番

左 勝

小 侍 從

かつみても散んなげきを思ふまに花ゆへ身をもくたく比哉

右

忠 良 卿

風かほる雪のみふかきよしの山雲とは花のそらめ成けり

左歌心詞常の事成へし右も珍しき様にも侍られは左猶花

ゆへ身をもなといへる宜きに似たり勝に侍へし

百四十五番

左

隆 信 朝 臣

梅花ちり行ほとそしられぬる吹くる風のうすき匂ひに

右 勝

兼 宗 卿

あたら夜の月と花とのなかめよりいと身にしむ春の曙

左うすき匂よろしくもきこえさるにや右春の明ほの優に

侍り可爲勝

百四十六番

左

有 家 朝 臣

小松原今一しほに色みえてなしほの山も春めきにけり

右 勝

通 光 卿

名にたかき梢の花の色やさは大内山のみれのしら雲

右歌色やさばといへる程そいかにそや聞え侍れと大内山

のみれの白雲をしほの山の小松原には立よさるへくや侍

らん

百四十七番

左 持

保 季 朝 臣

歸雁そなたの雪に思ひ出よ花の梢にこゝろとよらは

右

釋 阿

たとへてもいはんかたなし山櫻霞にかほる春のあけほの

右歌すかたよろしくみえ侍り左もちからいたるさまな

り可爲持

百四十八番

左

良 平

またれつる花成けりな山櫻霞のうへに見ゆる白雲

右 勝

俊 成 卿 女

あかなくにかへる雲井に春雨のふるは涙か雁そなくなる

左花なりけりなといへるあなかに優にも聞えぬにや右

下句なと宜く侍り勝とすへし

百四十九番

左 持

具 親

すはの海や冬の名残のうす氷消すはありとまたのむへさかは

右

丹 後

おく山の雲の梢もばれにけり都の櫻いまやさくらん

左すはの海の氷右おく山の雪の梢とり／＼に見え侍れは

勝負難定歟

百五十番

左

顯 昭

よしの山みやこなからそ入にけるおもかけにたつ花のたよりに

右 勝

越 前

日なへつゝ霞の末を詠れは雲に成行小泊瀬の山
左花を思へる心ふかきをよしの山へとやいはまほしく聞

ゆらん右が様の心常の事なれとさせる難はなきなるへし
勝もし侍らん

千五百番歌合卷第三 春三 判者釋阿

百五十一番

左勝

女

房

みよしのいよしのい山の花盛くもより下の春のしら雲

右

通具朝臣

山櫻あかね旅れの露分て手折たもとにあり明の月

左歌雲より下の春のしら雲まことにめつらしくありかた

くこそみえ侍れ右手折袂に有明の月といへる姿えんに侍

るな木のもとの旅れの夜のうちに猶手おらむ事や花のた

めいかいと覺侍れはなを左の春の白雲難及侍にや仍以左

爲勝

百五十二番

左勝

左

大臣

續後篇

山櫻今やさくらんかけろふのもゆる春へにふれるふら雪

右

家澄朝臣

玉柳春の梢にきく時はみとりの空にうくひすの聲

左かけろふのとなきもゆる春へなといへる姿おかしく侍

るな右みとりの空に鶯の聲といへる心もめつらしく侍を

柳櫻の歌ならへるにとりて猶花の歌まさるへくや侍らん

とて以左勝と申侍へし

百五十三番

左 持

前 權 僧 正

香をたにと思ひし花の霞より色をも送るはるの山かせ

右

雅 經

谷風や山も霞のひまことに又打出る花のしらなみ

左右兩首左は良少將花の色は霞にこめて見せずともとい

へる歌をおもひ右は源當純かうち出る浪やといへる心を

ひけりともに古今歌を本歌とせるをかしく見え侍り持と

すへくや

百五十四番

左 勝

公 繼 卿

はかなくそあさゐる雲にまかへつる花は匂ひの有けるものを

右

寂 蓮

花はみな枝に残らず散にけりまたのみかほる春の山かせ

左歌下句の心や花の事少事あたふ數聞え侍れと朝ある雲

になといへるわたりよろしく見え侍り右歌上句は見所す

くなくみえ侍るを末句も心は優に侍をまたのみ詞も荒涼

にや左は句の上下の始の字そとかむる時も侍れとさまで

なもき難にはあらさるへし左の勝に侍るへし

百五十五番

左 勝

公 經 卿

先たちてたれみよしの山櫻あらぬしおりの跡付てけり

右

家 長

永日も花みる比は暮やすく程なき夜半を明しかれける

此右歌目のなかく夜のみしかな事はかりなる様には侍れ

と花みるゆへに暮やすき心なればあしからすきこえ侍る

左爲勝

百五十六番

左

季 能 卿

花みんと思ひたつよりかよひきて心に匂ふ春の山かせ

右 勝

三 宮

時しあれば雨にあらそふ櫻花つゝに開ぬるみよしの山

左歌上句のおもひたつ程をすこしよそはひて聞え侍れと

心に匂ふは優に侍にや右歌櫻のさきやうすこしかたき事

なる様に侍れと赤人が歌にも春雨にあらそひかれてなと

よみて侍れば右歌まさり侍らん

百五十七番

左 勝

宮 内 卿

雲ならぬ花とは誰か三笠山かすめる空に雪はふりつゝ

右 内 大 臣

春草をとひたつきす妻こめにけふなやきそと鳴にや有覽

左花とはたれか三笠山なといへる姿よろしく侍るへし右

は彼つまもこもれり我もこもれりといへる歌の心をかし

く侍るを左歌末句なと宣侍にやまさると申へくや侍らん

百五十八番

左 勝

讀 岐

鶯のゑるへのみかは花の香に人をもさそへやとのはる風

右 忠 良 卿

風雅

みれあらむ梢の空に影おちて花の雲間に有明の月

左歌ことなるとかなく優に侍へし右歌花の雲間に有明の

月はおかしく侍るを上句やすこしく侍らんか

かる姿ひとつのやうには侍れと始に韻あらむとをき影お

ちてなと猶いかにそや見え侍にや無爲なるに付て左勝へ

く侍らん

左持

小侍

從

花をみて思ふ心のまゝならはちるにとまりてかくに歌かし

右

兼宗卿

よしの山花とは誰かあらさんたちなまかへそ峯のしら雲

左右共に殊なるとかなく優に侍るへし持と申へくや

百六十番

左

隆信朝臣

あさみとりいとよりかくる玉柳ぬく白露の名にこそ有けれ

右勝

通光卿

あたにやはふもとの庵になかむへき花より出る嶺の月かけ

左歌彼通昭いとよりかけて白露をといへる歌をとれる心

残すなくや侍らん右歌花より出る嶺の月かけ誠にあた

にはななめかなく侍へし右まさり侍らん

百六十一番

左持

有家朝臣

春雨のふる野のをさゝよゝをへてさらに緑の色まさりけり

右

釋阿

君か代に春のさくらもみける身を谷にくちめと何思ひけん

左歌春雨のふるの、小篠といへる詞つゝき宜こそみえ侍

めれ右歌はことなる事なき迷懷に侍うへに愚老か歌に侍

りけりたまたま判者の人数にまかりあたれる例によりて

勝負を付すや侍へからん

百六十二番

左

保季朝臣

おも影を春の匂ひに先たてゝ枝にあられぬ花をみる哉

右勝

俊成卿女

すみれ草野を分てしも旅れせし露まゝ袖のかたみばかりは

左面かけに花の姿を先立てといへる歌を見し心ちし侍れ

と撰集なとにいらぬ歌はさりあふへきにあられと詞のを

き所かはらさらはめつらしからす見え侍にや右露しく袖

といへる宜侍にやまさと可申哉

百六十三番

左持

良平

白雲のかゝる高れを始にて空より匂ふ山さくらかな

右

丹

後

ななめやる花はいつれそ白雲のたつたの山のあげほのゝそら

此兩首の歌左は心姿をかくしく右は姿詞いひしれり持に

てや侍へからん

百六十四番

左持

具親

いたつらに霞に夜半は更にけり山のは遠く出る月かけ

右

櫻花あかね色香をことしたに風にまかする春の山姫

左歌霞や雲よりもあつく侍らんとみえ侍れと心ありては
侍へし右歌ことしもいかにとおほへ侍れと春の山姫はち
るらむやうに侍なんとも心に有てみえ侍れは又持と申へ
くや

百六十五番

左

さきぬとて尋てみれば白雲のまかふも花のなさけならすや

右勝

定家朝臣

櫻花さきぬやまた白雲のはるかにかほる小泊瀬のやま

兩方の白雲左は上句の詞あまりにたしかに聞え侍うへに
なさけの詞もよせなくては殊こひねかふへからすや右は
はるかにかほるをはつせの山宜や侍らん勝とすへし

百六十六番

左勝

女房

新千載
かりかへる嶺の霞のはれすのみ恨つきせぬはるのよの月

右

家隆朝臣

春はまたそなたともなくとふかりの花に匂へる夕くれのこゑ

左歌鷹かへるといへるより姿心始終妖艶に見え侍り右歌
もはなに匂へる夕暮の聲といへる姿宜侍をそなたともな
くといへるや鴻鴈春は北に向とこそは申て侍れとおほえ
侍りいかゝ猶以左可爲勝

百六十七番

左勝

たれなけふまつとはなしに山かけや花の雲に立そめれぬる

右

左大臣

山風の吹ぬるからに音羽川せき入れぬ花も瀧の白波

左に彼萬葉の山のまつくに我立ぬれぬといへる歌の心を
取て花のしづくに立そめれぬるといへる心いみしく艶に
みえ侍を右又人の心の見えもするかなといへる歌をおも
へるおかしからさるにはあらす侍れと猶中古の歌は萬葉
の心に難及かるへし仍以左爲勝

百六十八番

左勝

前權僧正

ほりうへてみるはうれしき花の木のうつるふにこそ習俗ぬれ

右

寂蓮

志賀の浦に花のさゝ波こき分て釣するあまや袖匂ふらん

左歌素性法師うつるふ色に人ならひけりといへる歌の心
なうつるふにこそと侍いとおかしくみえ侍り右歌は未見
ふて我おもひやるならばふかの花そのふかの山越などの
花をぞ思へきをあまの釣する袖をしもおもへるおもひか
けすや侍らん尤左勝侍らん

百六十九番

左勝

公繼卿

いか斗まつもおしむも花ゆへは人のこころをみよし野の山

右

家長

足曳の山鳥の尾の長日にあかても花を獨かもみる

左歌いかはかりとをける初^{ハツ}の五文字やすゑの心にいと
しもあひかなひても覺侍らねと人の心をみよしの山と
はよろしく侍にや右はこと／＼きさまの風跡にみえ侍
れとさすかに殊なる事侍らぬうへに上下の句のはしめの
字をもき科にあらされと目になつ様に侍めり左勝へきに
こそ侍らめ

百七十番

左勝

公 經 卿

^{新下載}
尋入かすみもふかき花の香をさそひて出る山下風のかせ

右

三 宮

尋つる花にかはらぬ色なからおくれぬものは歳^{とし}のしら雲
兩首歌尋入尋つるいくはくの勝負は侍らねと左は心おか
しく右は末句姿引すかりてよろしくはみえ侍を心少誠な
らぬやうにや申侍らん左勝と可申や侍らん

百七十一番

左持

季 能 卿

山櫻かつさきそむる梢こそ友まつ雪をみしこいぢすれ

右

内 大 臣

むめも梅我身もわが身宿もやと春や昔のとのみ詠て

左歌心おかしきさまには侍るへし右は彼月やあらぬとい
へる歌の心とはみえ侍を梅も梅わが身も我身なといへる
姿やすこし如何こそやみえ侍れと末句の心あはれなるや
うにもみえ侍れはなすらへて持にや侍へからん

百七十二番

左

宮 内 卿

花も雪も色はかはらし歸鴈都の梢こしのしら山

右勝

忠 良 卿

^{風正}
花や雪かすみやけふり時しらぬふしの高ねにさゆる春風

左右歌左は花も雪もとをき都の梢こしの白山といひ右は
花や雪霞や煙といへる姿ともに相似てはみえれと左は心
すくなくや侍らん右は下句なと宜見え侍りまさるにや侍
らん

百七十三番

左勝

議 岐

^{新下載}
さかぬまは花とみよとやみよしの山^{やま}のしら雪消かてにする

右

兼 家 卿

くれぬ共まはしなつけそはつせ山花みるほととの入相のかれ
左歌よし野の山の雪心ありてみえ侍り右歌は泊瀬の寺の
鐘まはしなつけそといへる心とリノには侍を猶田のし
ら雪消かてにするといへる心宜くや侍らんまさとと中へ
くや

百七十四番

左持

小 侍 從

つく／＼と花に向ていさゝらは散なん後のおもかけにせん

右

通 光 卿

なにと此さてもとまらぬ花ゆへに恨なれたる春の山風
左は花に向ていさゝらばといひ右山風をなにと此といへ
る心ともにされ歌の心なるへし持にや侍へからん

百七十五番

左 持

隆 信 朝 臣

尋入はなはそれとも白雲のへたつとみればかほる山かせ

右

釋 阿

今はわれふしのゝ山に身を捨ん春より後を問人もかな

左歌花はそれとも白雲のなといへる心よろしからざるに
はあさるへし右歌はあやしの老比丘か歌に侍けり侘た
る迷懷の軀に侍を此合手猶子のこときに侍りたまゝ判
者の人数に罷いれる事を例によせて勝負を決し申さすや

侍へからん

百七十六番

左 持

右 家 朝 臣

鷹金の雲の衣のほる風にかへる空をや猶うらみまし

右

俊 成 卿 女

新千成

故郷と成にしかとも櫻さくはるやむかしのしかのはなその

此右歌春や昔のまかの花園といへる心よろしくみえ侍を

左歌又雲の衣の春風になといへる彼雲衣范外羈申贈とい

へる詩なと思出られておかしくも侍れば持なとや可申侍

らん

百七十七番

左 持

保 季 朝 臣

木のもとに花ゆへくらすゝ夢にもむなし嶺のふら雲

右

丹 後

夕月よ光は花にやとせとも櫻かもとはおほる成けり

左は夢にもおな嶺しの白雲といへる末句右は光は花にや

とせともといへる上句ともに姿よろしくみえ侍を先の歌

はとくうたいれしたるやうにみえ侍り後の歌は櫻か本別

に花の外なる様に聞え侍にや共に善否相交心ちし侍れば

又是も持にてや侍へからん

百七十八番

左 勝

眞 平

久かたの雲のうへなる櫻花空にしらるゝ雪とこそみれ

右

越 前

村さえの雪かと思しや花ならんひとつに成ぬ嶺のしら雲

左歌空にしらるゝ雪心おかしくみえ侍り右歌ひとつに成

ぬ峯の白雲といへる姿又よる敷は見え侍を左は雲の上な

るといへるやさしく聞え侍らんとは見え侍れと猶雲のう

への花勝と申へくや

百七十九番

左 持

具 親

芳の山はなの盛に成にけり故郷にはふ春のあけほの

右

定 家 朝 臣

雲のなみ霞の涙にまかへつゝ芳野の花のおくをみぬかな

左古郷にはふ春の曙彼よし野の山の近ければといへる雪

の歌の心花もさそにはふらんと饒に侍へし右芳野の花

の奥をみぬ哉といへるふかくいれる様にはみえ

侍を雲の浪霞の波といへる殊浪のよせなくや侍らん仍

ふかさにもまさるには難及や侍らんとて持にてや侍へ

かへん
百八十番

左

顯

昭

遠近の花みるほとに行やうてかへきは暮ぬ志賀のやま越

右 勝

通 具 朝 臣

新古今

石上ふる野の櫻たれうへて春はわすれぬかたみなるらん

左 志賀山越に取てはちこちしゐて有へからすやかへさ

くれん事は又うたかひなかるへし花みるほとになといへ

る事は無下にたゝ詞にやあらん右心詞とかなくみえ侍り

勝とすへし

百八十一番

左 勝

女

房

歸鴈霞のうちに聲はして物うらめしのはるのけしきや

右

雅

經

雲もうし嵐もつらし山櫻まかふとすればちりはてにけり

左 歌霞のうちに歸鴈景色殊見る様にこそ覺侍れ右歌雲も

うし嵐もつらしといひて末句又むかしにやきこえ侍らん

左 歌尤勝に侍へし

百八十二番

左 勝

左

大

臣

春風は花と松とに吹かへてちるもちらぬも身にしまつやは

右

寂

蓮

さひしきも今一しほの色そへて軒の忍にはるさめそふる

左 花と松との春風散もちらぬも身にしめる心殊勝に見え

侍り右忍の春雨今一しほのさひしさいせる興なくや侍ら

ん左可爲勝

百八十三番

左 勝

前 橋 僧 正

春風のいたりいたらぬきはそなき咲るかちればさかざるもさく

右

家

長

山風に花の波たつみよしの一よし野の春や鹽かまのうら

左 歌さけるさかざる花のみゆらんといへる歌の心おかし

く侍る右歌山風に花の浪たゝん斗に騒がまのうら俄に出

來たる様にや侍らん左勝とすへし

百八十四番

左

公

繼

卿

いつれとも花をわきえぬ心さへ霞にましろ春の山かな

右 勝

三

宮

よしの山みれの櫻のさきしより花によかれぬ旅ねをそする

左 は心の霞にまじり侍らんはよろしく侍るを花なはいか

にわきえぬかとや聞え侍らん右はみれのさくらの開しよ

り花によかれさらんたひね花を思心可然聞え侍り右まさ

り侍らん

百八十五番

左

公

經

卿

玉葉

ほのくゝと花の横雲明初て櫻にふらむみよしの山

右 勝

内

大

臣

花ちらぬ杜となさはやれきことをさのみ聞けんやしる尋て

左歌花のこ雲櫻にふらむなとことしき風體に侍へ
し右歌はれきことをさのみ聞けん社こそといへる古今の
俳諧歌の心をとりにて花ぢらぬ森となさはやといへる心お
かしく侍り勝と可申哉

百八十六番

左

季 能 卿

花をみる道の芝草ふみ分て芳野の宮のはるの曙

右 勝

忠 良 卿

花が雲かゝる波の梢より落くる色やみよしのい瀧

左歌初五字花をみるとなける心いとも心えず侍を右のえ
そしら波の梢よりも浪の梢とつりけるこそ如何みえ侍れ
と道の芝草ふみ分んよりは落くる色やみよしのい瀧末句
宜侍にや以右勝とすへし

百八十七番

左 勝

宮 内 卿

花故にまれに宿とふ暮に又人くといとふ鳥の聲しも

右

兼 宗 卿

いとせめて花に心をつくせとや春の山風吹はしめけん

左歌鳥のこゑしもといへる彼伊勢物語の戀とはいふと聞
し我しもといへる覺ておかしからさるにはあらさるにや
右歌いとせめてとなける五字末句の心にいと叶てしも侍
らぬにやと覺侍うへに左猶心こもれるにや侍らんすこし
はまさるへくや

百八十八番

左 持

讀 岐

あたなりとかつみよしのい山櫻恨ても猶たつれ入かな

右 通 光 卿

山里はさらてもまれに間人を思ひたえぬる春雨のころ
左はかつみよしのい山さくらといへる姿見え侍を右お
もひたえぬる春雨の比といへるも取々におかしく侍り特
とすへし

百八十九番

左 勝

小 侍 從

風ふけは晴ぬる雲とみる程に麓につもる花のしら雪

右 釋 阿

ふら山や雪猶ふかき越路には蹄鷹にやはるをしるらん
左晴ぬる雲とみる程にといひ麓に積る花の白雲といへる
宜くこそみえ侍めれ右歌ふら山やとなける五文字とつよ
ろしからず聞え侍り左可爲勝

百九十番

左 持

隆 信 朝 臣

年をへて同じ櫻の木のもとにこりすもつくす我こゝるかな

右 俊 成 卿 女

山路をは送り月を憑にてそこともしらぬ花に暮しつ
左末句こりすもつくすなといへる姿よろしからさらには
あらず同櫻の木の本をいつくにとすこしおほかなく聞
え侍右そこともしらぬいつれとや山路の櫻とは見え侍り
た、持にて侍かし

百九十一番

左持

有家朝臣

はつせ山ひはらの霞まかふらし思ひしよりもさける花かな

右

丹後

玉はこの行てにかゝる山櫻我ひとりやはおらて過へき

此右歌ゆくてにかゝる山櫻ことほりも可然姿も宜みえ侍

を左歌檜原の霞心姿又たかくや侍らんならへて持にて

や又侍へからん

百九十二番

左

保季朝臣

道すから花ちりくれはこしの山すゝ分る袖に風かほる也

右勝

越前

みよしのゝ外山を花やへたつ覽雲にまつ吹風の音かな

左のすゝわくる袖大峯となる山ふしなと思へるにやと

聞え侍らん右は雲にまつふくといへるよろしくや侍らん

とて右の勝と申侍へし

百九十三番

左持

夏平

芳野山分けきてのちになかむれば霞をこむる花の白雲

右

定家朝臣

あるしらぬわかぬ霞の絶間よりあるしあらはにかほる花哉

左歌下句はよろしく侍を分きて後になかむればやすこし

隣に聞え侍らん右歌あるしらぬわかぬ霞のなといへるは

優に侍をあるしあらはにといへるしゐてよろしくもみえ

侍らす仍勝負分明侍にや持なとにてや侍へからん

百九十四番

左

具親

花にあかぬよしのゝおくの篠枕いとはぬ月の雲かくれ哉

右勝

通具朝臣

行かへり花こそあたに思らめ幾世の人かしかのやま越

左さゝ枕なとはゑんに侍を末句の心こそいとも心えず侍

れ右のいく代の人か志賀の山越よろしく侍にや勝と申へ

くや

百九十五番

左勝

顯昭

思事なくてみるへき花盛心みたるゝはるの山かせ

右

家隆朝臣

散なれし梢はつらし山櫻春しりそむる花をたつれん

右歌新樹を華んといへる心おかしく侍を左歌心よろしく

侍にやまさると申へくや侍らん

百九十六番

左勝

女房

よしの山雲にうつろふ花の色を緑の空にはる風そふく

右

袁蓮

あれまさる駒のけしきもあるき哉野と成にける里のあたりは

左歌雲にうつろふ花の色なと置縁のそらに春風ぞ吹とい

へる心詞中々申は事浅く成侍ぬへし右歌は彼庭もまかき

もといへる里をおもひて駒をさへはなてるにや如何にも

雲にうつるふ花のあたり申ならふへきにあらす左尤可爲勝

百九十七番

左持

左大臣

あし鴨の下の水は解にしなうは毛に花の雪そふりしく

右

右大臣

吹風のふかても花はとまれとをのれとちるは庭にこそちれ

左花のちりける春の池水鳥なと題ならんやうにやみえ侍

らん歌の姿はおかしく見え侍り右吹風のふかても花はと

いひなのとちる庭にこそちれといへる心云おほせさ

るにはあらす侍にや但花をなのれといへるは花いとをし

くや侍へからん勝負申かなくや侍らん

百九十八番

左勝

前權僧正

人しれぬ花を霞に尋ればをのれよそなる三輪の山杉

右

三宮

古郷の庭の櫻に風ふけは軒の忍に雪かゝりつゝ

左歌花を霞に尋れ心を三輪の杉にこもれるにや侍らん右

歌古郷おほつかなく侍うへにつゝの詞たらずや侍らん左

心まさり侍らん

百九十九番

左持

公卿

あかなくに花の下ふし日數へぬかへりて宿や旅心ちせん

右

内大臣

春ことに花もなけきや積らん散を恨め人しなけれは

左かへりて宿やといへる花をおもへる心おかしく侍へし

右花もなけきやといへる人の心も思ひしられて宜聞え侍

りともに心可然持にや侍へからん

二百番

左勝

公卿

嵐吹花の下陰ふみ分ておほる月ふにとふ人もなし

右

忠良卿

みよしの月をたのむの鴈金や花さく春もふると鳴らん

左歌ふみ分てやすこしいかにそ聞え侍れと下句ふんに見

え侍へし右歌月をたのむのかりかやとは如何侍にか老

の心難及侍にや左まさるへきにこそ侍めれ

二百一番

左

季能卿

玉つさにあらぬ霞を何と又つはさにかけてかへるかりか

右勝

兼宗卿

あやなしや惜にあらぬ花ゆへに幾度風を恨きぬらん

左なにと又なといへる姿おかしきまには侍を末句こと

たらぬ様にや聞え侍らん右事理慥に無科みえ侍りまさる

にや侍らん

二百二番

左

宮内卿

わきも子か葛城山の花さかりはなれぬ色の嶺の白雲

右勝

通光卿

かへらん行衛らしらぬ曙にたのむのかりの雲ふかき聲

左歌はなれぬ色とはいかに侍にか右歌明はのゝたのむの

雁の雲ふかき聲心こもりて聞え侍りまさるへくや侍らん

二百三番

左 勝

讀

岐

思れの花を夢路に尋きて嵐にかへるうたゝれの床

右

釋

阿

御狩せし片野の冬やつらからん春の山路にきゝす鳴也

左花を夢路にといひ嵐にかへるうたゝれの床いとえんに

こそみえ侍れ右只百首の中の地歌に侍り尤さざる事なし

左事外の勝に侍へし

二百四番

左 勝

小

侍

從

おしめともとまらぬ春をまたふとて花も心や空に散けん

右

俊

成

卿

女

諸こしに散くら花なまゐるへにて恨もかへぬけるの山かせ

左歌花も心やといへるおかしくみえ侍り右歌末句はよろ

しく侍るめるを初のの五字やこゝしく侍らん左は終の

句けんそ覽にてあらまほしく聞え侍れと左まさり侍らん

二百五番

左 持

隆

信

朝

臣

ちる花を涙かとみれば高砂の尾上も今朝は末のまつ山

右

丹

後

吹風を夢の中にもいとふ哉花に枕をむすふななく

左歌涙かとみれば高砂のといへる姿末の松山にかけたる

心よる數こそ侍めれ右歌又夢の中にもいとふ哉といひ花

に枕をむすへる心えんに侍にや左はけさほといへるそい

つれの朝にかとおほえ侍れと末の松山にかけたる心猶捨

かたくみえ侍ればなぞらへて持にてや侍へからん

二百六番

左 勝

有

家

朝

臣

續古今

かつらきや高間の山の花盛雲のよそなる雲をみる哉

右

越

前

花の色にうつる心のいとなくて我身世にふるなめやはする

右歌花の色はうつりにけりなといへる小町か歌を思へる

心宜侍ないとなくてとをける中の五字やこひれかふへか

らさる詞に侍らん左歌高間の山の花盛といひて雲のよそ

なる雲の心いと宜くこそ見え侍れ尤たちまさり侍らん

二百七番

左

保

季

朝

臣

音をのみ哀と聞し松風に花の香うつす春の山里

右 勝

定

家

朝

臣

あかさし霞の衣たちこめて袖のなかなる花のおもかけ

すへて歌の初のの五字はよく思へき物にこそ侍めれ左音を

のみとをけるおかしと聞なさん事かたくや侍らん右あか

さりし霞の衣袖のなかなる花のおもかけなといへるえん

ならさるにあらすや侍らんまさるにこそ侍めれ

二百八番

左 持

良

平

山川の岩もと櫻かけみれば雪をそあらふ瀧つしら波

右

通

具

朝

臣

秋風にこしちくやしき旅なれや霞たつやとかへる鴈かれ

左歌末句はおかしくみえ侍を岩もと櫻やすこしらしす

かのれなとに聞なれて如何ぞ覺侍れとさくらも梢は高く

も侍らんとは思なし侍れと右歌ことなくみえ侍を左も猶

下句めつらしきさまに侍ればなすうへて持と申へくや

二百九番

左

具

親

春の夜のまた明やらぬ山のはにしらむともなき花のよこ雲

右 勝

家

隆

朝

臣

新勅撰

けふみれば雲も櫻にうつもれて霞かかれたるみよしの山

左まらむよこ雲なとことしく詞もつよけに侍り右か

すみかかれたるみよしの山いとよろしくも侍哉勝侍へし

二百十番

左 勝

顯

昭

ちりまかふ花を雪かとみるからに風さへしろし春の曙

右

雅

經

春のうちは待もおしむと思ひねの花なのみ見る比の夢哉

左歌風さへ白し春の曙といへる下句よろしくこそ侍めれ

右歌もおかしきやうにはみえ侍を比の夢哉とはてたる心

すくなくや侍らん猶左の末句勝と可申や

二百十一番

左 勝

女

房

ちらはちれよしやよしの山櫻吹まふ風はいふかひもなし

右

家

長

梢にはたえて櫻のなきさなる波の花こそかたみなりけれ

左歌よしやよしの山櫻吹まふ風はいふかひもなしす

てさまに侍につけて猶えんに侍ればいかなる事にか侍ら

ん右歌理ありては聞え侍を河池なとやあらまほしく侍ら

んいかにも左尤可勝侍

二百十二番

左 持

左

大

臣

櫻花うつるばんとや山のはのうす紅に今朝はかすめる

右

三

宮

かきくもる遠の高れの花盛消せぬ雪に春雨そふる

左姿心高く又色ありてみえ侍にや右はかきくもるといへ

る五文字そことはなれてなかれるやうにみえ侍れと末に

は叶て侍へし消せぬ雪に春雨そふるといへる末の句おか

しく侍れば持にてや侍へからん

二百十三番

左 持

前

權

正

おしめともとまらぬ花のゆかりとて恨はつへき春のうへかは

右

内

大

臣

あかざりし花の名残をなめよと木の間もりくる春のよの月

左は姿おかしく右心うるはしくとり／＼にみえ侍り是も

又持にこそ侍めれ

二百十四番

左

公

繼

卿

めつらしくつはめ軒端にきなるれば霞かくれに鷹かへる也

右勝

忠

其

卿

なれにけり名残よいかに山櫻風より後の春の目かすな

左歌支鳥來鷹向北郷心おかしく侍へし右歌は名残よいかに

山櫻といへる心姿えんにも侍ればまさるへくや侍らん

二百十五番

左勝

公

經

卿

春風にちりなは後をいかにせんなにと馴ぬる志賀の花園

右

兼

宗

卿

春雨はのへの草葉の色よりもつれつれまさる物にそ有ける

右春雨のうち寂寞の心誠にしかある事には侍れと左志賀

の花園になれぬる名残を思へる心はえんにや侍らんまさ

るへくや

二百十六番

左

季

能

卿

はるのいと雲路にかへるかりかぬをいく霞まてなめやらん

右勝

通

光

卿

山川をまかせてけりな小山田の苗代水に花のなみよる

右歌眺望眼路あまさへ遠くや侍らん右歌苗代水に花の波

よるらんけちかくみつへくや侍へからん

二百十七番

左勝

宮

内

卿

時きぬと苗代水やまかすらんいとしる小田に蛙なく也

右

釋

阿

哀にもせらにきえつるひはり哉芝生のすなは思ふ物から

右の雲雀ことなる事なく侍を左の苗代時きたりて五百代

に蛙鳴らん尤左勝侍へし

二百十八番

左持

讚

妓

てりもせず雲もかゝらぬ春のよの月は庭こそしつか成けれ

右

俊

成

卿

かけきよき花の所は有明の月もえならす澄める空かな

左歌不明不暗朧々月には閑ならん心宜侍るを右歌花の所

の有明の月えならすみえ侍らんともに女人の歌はか様に

こそとえんにみえ侍りよき持にて侍へし

二百十九番

左持

小

侍

從

ありふれば人の心もつらき世にめなれて花のちりぬるもよし

右

丹

後

櫻花又こんまてと契れともうしろめたきは春の山かせ

此兩首又ともに其心花をおもへる餘にとりて思ひわつら

へる意趣おかしくみえ侍り又勝負難分猶持とすへくや侍

らん

二百廿番

左

隆

信

朝

臣

尋こし山路は花をしるへにてちる木の本やすみかなるへき

右勝

越前

いかにせん分るもおしき詠哉花のおりしもかへるかりかれ

左歌散木のもとやなといへる心妖艶には侍へし右歌分る

もおしきといひ花のおりしもなと詞つゝきやすらかにい

ひくたして宜く聞え侍にやまさると申へくや

二百廿一番

左持

有家朝臣

斜日影にはへる山の櫻花つれなく消ぬ雪かとぞみる

右

定家朝臣

續古今

櫻花うつるふ春をあまたへて身さへふりぬる淺茅生の宿

左朝日影とをきつれなく消ぬとみゆらん風情いとおかし

く侍へし右うつるふ春をあまたへてといひ身さへふりぬ

るあさちふの心のやみをくらすにや侍らん哀もかくへく

と覺侍れと猶左の朝日影も昔の夜鶴の侍らましかほと心

をかへて覺侍れは勝負既まとひて同しなとや申へく侍ら

ん

二百廿二番

左勝

保季朝臣

せきもあへず花吹おろす嵐哉よしの瀧の末匂ふまで

右

通具朝臣

春のよの心をわかぬ人はあらし月と花とのあはれはかりは

右歌月と花との哀人の心までおしはかられたるおかしく

は侍を左歌せきもあへずとをきよしの瀧の末にはふま

てといへる心宜侍にやまさると可申哉

二百廿三番

左

良平

尋きてしらぬ木のもとなかりけり花になれ行みよしの山

右勝

家隆朝臣

久かたの光のとかに櫻花ちらてそ匂ふはるの山かせ

左花になれ行みよしの山心委おかし侍を右久かたの

とをきちらてそ匂ふといへる心幾年舜日周武漢文之時之

春の山風にやと覺侍はなして以右爲勝

二百廿四番

左

具親

跡たえてなめし雪の庭までは契し物を花のさかりな

右勝

雅經

忘すは散なん後も思出よ花見かてらのはるのよの月

右歌去年の庭の雪の時契ける心とかなくは侍へし右歌花

見かてらの春のよの月當時の事にておかし侍にや勝と

すへくや

二百廿五番

左

顯昭

越路にはさひしきこともあらんかし友引つれて歸る

右勝

寂蓮

玉葉
なにとなくさえつる山の鳥の音も物の哀は春の曙

左歌歸鴈友引つれてこしちさひしからしといへるあしか

らすは聞え侍り右歌何となくさえつる鳥の音も哀に覺侍

りけんいつれの山の末にかとあはれに侍れはいまも哀に

て此歌もまさるにや侍へからん

千五百番歌合卷第四 春四 判釋阿

二百廿六番

左 勝 女 房

花は雪とふるの小山田かへしても恨はてぬる春の夕風

右 三 宮

かくしつゝ今一しほやまさるらん春雨そいく浦のはま松

左ふるの小山田返してもといひ恨はてぬる春の夕風心姿

詞つきありかたくみえ侍り右歌春雨そいく浦の濱松え

んには侍をかくしつゝといへる心や彼君かやちよにあふ

ふしもかなとも世をやつくさん高砂のなといへるこそか

なひて聞ならひては侍れ今ひとしほのまさるはかりには

いかゝと聞え侍にや左尤まさり侍なん

二百廿七番

左 持 左 大 臣

明はては戀しかるへき名殘哉花の影もるあたら夜の月

右 内 大 臣

侘人の住とはきけと足引の山のかひある岩つゝしかな

左花のかけもるあたらよの月誠になこり多かるへき事也

右山のかひある岩つゝしおかしく侍へきを侘人の住とは

きけといへる管見の老已不覺悟侍り其間暫も左まさる

へきにやと可申侍之處極以其恐多あたら夜の詞雖爲舊艶

事強不可庶幾所存也仍持とすへく侍にや如此申狀尙恐惶
恐惶

二百廿八番

左 前 權 僧 正

こいらなく鳥のれたくや思らんおしむにとまる花ならなくに

右 勝 忠 良 卿

山おろしに櫻なかるゝ吉野川はやくも春のくれて行哉

左歌たれにおほせてこいら鳴らんといへる歌の心おかし

く侍へし右歌山おろしに櫻なかるゝ吉野河姿詞たかくみ

え侍り近來舊歌おほくとる事はあまたみえ侍れとあらは

に其歌をひけるとみゆるはさる事にて侍り是は古今の戀

の秀歌をよしの川はやくとなき所おなしく侍にや中々に

如何そ侍へからん然れば歌に負へきにあらす山おろしに

櫻なかるゝなと姿も宜侍れば猶右まさるへきにや侍へか

らん

二百廿九番

左 公 藏 卿

かへる鷹こしちにふかき雪をみて春の空をやおほめきぬらん

右 勝 兼 宗 卿

ながむればたなひく雲のたえまより心ほそくもかへる鷹金

左姿おかしくも侍るにや但越路の雪爲毎年事歸鷹おほめ

かすや侍らん右うるはしく無爲には侍にや歌合のならひ

まさるへくや侍らん

二百三十番

左 公 經 卿

春ふかく尋いるさの山のはにほのみし雲の色を殘れる

右 勝 通 光 卿

まかふとていとひし峯の白雲はちりてそ花のかたみ成ける

左歌姿詞とかなくはみえ侍を右歌ちりてそ花の形見成け

るといへるいとおかしく侍にや勝侍らん

二百三十一番

左 持 季 能 卿

これにたに問人なしに住宿を猶山ふかくよふこ鳥かな

右 釋 阿

うらやまし苗代水をせく賤も心の程はまかせこそすれ

左喚子鳥猶山ふかくといへるよろしからざるにはあらす

右老法師の逃懷氣みえたる歌惡氣もや侍らん但左是にた

にといへるいつくにかとすこしおほつかなく侍にやたま

たま判者にまかりあたれる事を例によせて不付勝負や侍

へからん

二百三十二番

左 勝 宮 内 卿

庭は冬こそすゑは夏の心ちして春にもあらす花を散行

右 俊 成 卿 女

みよしの、野へのさくらもちるまいに風にみたる嶺のしら雲

左庭は冬梢は夏のといひ右野へのさくらとなき嶺の白雲

といへる姿詞共にいくばくの勝負なきやうに侍れと右も

中の五文字ちるまいにといへる少よばくや侍らん聊順も

て左ささると申侍へし

二百三十三番

左持

讃

岐

春のよのみしかさほとをいかにして八こゑの鳥のそらに知らん

右

丹

後

ふしの山尋し花は散はてて跡なき雲のあとをみるかな

左右兩首委詞いひしりてよろしくみた侍り勝劣難申かる

へし仍爲持

二百三十四番

左

小

侍

從

たれをかくうはの空にはよふこ鳥たのめぬ人のいかいこたへん

右勝

越

前

春風は吹にけらしな吉野山雲になみたつ夕暮の空

此兩首左は姿おかしき様也右は風體高かるへし取々に見

わつらひ侍程に左上下句初のたの字おなしく侍りけり是

は例としてふかき難にはあらされと少の勝劣をもとむる

時はとかに申也右少はまさるへくや

二百三十五番

左持

隆

信

朝

臣

風かほる花のしづくに袖ぬれて空なつかしき春雨の雲

右

定

家

朝

臣

新古今
櫻色

の庭の春風跡もなしとはいそ人の雪とたにみん

左歌空なつかしき春雨の雲といへる末句は姿よろしくこ

そ侍めれ右歌はあすは雪とそ降なましといへる歌の心を

とかくいひなして侍詞つかひおかしく侍にや老の心まと
ひあやしく侍れば勝劣申かたくや侍らん

二百三十六番

左持

有

家

朝

臣

吉野山梢に花のはれぬれば岩のかけちをうつむしら雲

右

通

具

朝

臣

みるまゝに高ねのさくら雲消て縁にすめる松の空哉

右歌縁にすめるといへる下句姿も高く心もおかしくは侍

を左岩のかけちをうつむ白雲花の氣色猶見所まさるへく

やとみた侍いかい

二百三十七番

左勝

保

季

朝

臣

うつもろい花の梢に日數へて風よりばるゝしら川の里

右

家

隆

朝

臣

待人に宿の春風ことつてよけふこそ櫻梢にもみめ

左歌うつもろい花の梢にといへるは如何を聞わかれぬ心

ちし侍を風よりばるゝしら川の里姿何となく宜侍にや右

歌けふこそ櫻おらは折てめといへる歌の心を梢にもみめ

といひなせる程もおかしくは侍れと猶風よりばるゝとい

へるすかたみつへくや侍らんと覺侍れば白河の里まさる

へきにや侍らん

二百三十八番

左勝

長

平

花のちる山の高ねのかすますばくもうぬ空の雪と見てまし

右

雅

經

みよしのやたのむのかりの聲す也花に名残の春のあけほの

左やすらかなる姿詞よろしくみえ侍り右みよしのやとな

けるより心こはく^{こほりてイ}ては侍ながら猶花の名残のなといへる

心えかたきやうにや侍らん左まさるに侍へし

二百三十九番

左

具

親

今はとや雲をはなれてかり金の霞にうつる明ほのい空

右勝

寂

蓮

あかて行鷹の涙やこれならん雲に名残の雨をかく也

左末句の姿宜はみえ侍を雲より霞にうつる心愚意及かた

く侍いかい右歌雲に名残の雨そいく也といへる雲よりそ

そくへきと覺侍れと鷹の涙やなといへるも今すこし哀に

も覺侍れはにや右まさる様に聞なされ侍へし

二百四十番

左持

顯

昭

心から妻こひすれや逢事のかた山きいすれにたてゝなく

右

家

長

都をはたのむのかりのふり捨てをのかこしちによろと鳴也

兩首心詞殊なる科なく侍あり左の片山きいす右たのむの

かり同科に侍へし

二百四十一番

左勝

女

房

かすみ行やよひの空の山のはなほのく出るいさよひの月

右

内

大

臣

些右歌兩首共無之次第

左歌霞行らん彌生の山をはのく出るらん月の心も殊えん

にこそ侍れ右歌根はふふこ野萬葉集の心花の色紫むつと

しくなとはみえ侍を上る三句かゝる歌をみ侍し心ちし侍

れとさやかに覺侍らぬうへに左の山のはの月にはよこ

野の葦難及侍へし

二百四十二番

左持

左

太

臣

うちなめ春のやよひの短夜をねもせて獨あかす比哉

右

忠

良

卿

住吉のまつ吹かせのさひしきも今一しほの春の明ほの

左ねもせて獨あかす比哉心姿何となくおかしくこそみえ

侍れ右住吉の松いま一入の春の曙は殊よろしかるへく侍

をさひしきのまさり侍らん事やふるの山への秋の松なと

やさし侍へからんとは覺侍れと住吉の春の曙いかはな

ろかに侍へきとてなすらへて持にてや侍へからん

二百四十三番

左勝

前

權

僧

古郷の花の白雪みにゆかんいさ駒なめて志賀の山越

右

兼

宗

卿

草も木もいかに契て藤の花松にとしもはかいりそめけん

左歌いさ駒なめて志賀の山越是等は只詞にまかせて百首

の中ののやり歌とはみえ侍れと心詞はおかしく侍にや右歌
心うるはしくとかなくはみえ侍を藤の松にかゝれる心さ
してしもは覺侍られと聞なれてや侍らん左の志賀の山越
めつらしく侍にや

二百四十四番

左

公

卿

卿

苗代にやつるゝまつかあき衣こなきか花のするかひそなき

右勝

通

光

卿

杜若色に出てそかくれぬをそことも人にしらせそめつる

左のこなきか花めつらしきさまには侍へし右杜若は常の

歌枕也色に出てそあらせそめつるなといへるよしありて

みえ侍れはなきの花にまさるへくや

二百四十五番

左

公

卿

卿

つくくゝと軒の玉水敷そひてふのふにくもる春雨の空

右勝

釋

阿

ななさそへ位の山の喚子鳥むかしの跡をたゝぬ程をは

左歌末句姿もおかしくそ侍を初句につくくゝといへる

や如何ぞ聞え侍れといはゝや物を心行までとうたふ鄴曲

に歌も侍れはおかしくも侍へし右歌は老法師の述懐に侍

りけり只左まさるとて侍らまほしく侍を此喚子鳥ほいゝ

さか人の憐惑もこひねかふへく侍をたまゝ判者の人数

に罷入侍れば是計得分にや可申讀ほらん

二百四十六番

左

季

能

卿

駒なめてこそせの春野を朝ゆけはをあきか原にきゝす鳴也

右勝

俊

成

女

風雅

高砂の松のみとりもかふまておのへの風に花を散ける

左こそせの春野をなといへる萬葉集などおほえて優に侍を

下句こそ何の原といへるにか侍らん管見のものゝみにた

にえふみとかず侍り萬葉集にもこそせの山野にはつらく

椿なとはいへるやうに覺侍り右はことなる事は侍られと

妾詞とかなくは侍にや大方は萬葉集にもおかしきやうな

る事なとり詠する也とそ古き物にも申侍る巨勢の春野も

まゐてこひねかふへきにはあらさるにや無事なるにつき

て右勝へきにや侍へからん

二百四十七番

左

宮

内

卿

なしこめて臘月夜の春ならば霞の外をあきとなかめし

右勝

丹

後

春風にしられぬ花や残らん猶雲かゝる小泊瀬の山

左歌臘月よの春ならばなといへる心こもりてはみえ侍り

右歌猶雲かゝる小泊瀬の山心姿宜も侍哉只右爲勝

二百四十八番

左勝

讃

岐

あれはてゝ我もかれにし古郷に又立かへり葦をそつむ

右

越

前

さくらさくひらの高浪に風吹は梢につゝく志賀のうら浜

左我もかれにし古郷にといへるいつくとはわき侍られと
哀おほく侍にや右梢につくといへる此つくなといへ
る詞はこひねかふへからず覺侍事にてさきも侍を此
歌にとりてはことさらにつくといへる中へけれとおかし
くは侍を左の葦簾けくや侍も入とてまさると申侍へし
二百四十九番

左持 小侍 從

おもへ共聲はたてしと忍ふるにうらやましくも喚子鳥哉

右 定家朝臣

花の香も風こそよもにさそふらめ心もあらぬ古郷の春

左歌ふふこ鳥の心おもへ共といへるよりいみしくおもひ

しられ侍れば左右なくまさると申たく侍を右歌又心もし

らぬ古郷の春といへるも身にとりては捨かたく聞なし侍

にや勝劣申かたく侍へし

二百五十番

左 隆信朝臣

雨そく色こそ春にあひにけれ人も分こぬ庭のふもきふ

右勝 通具朝臣

ちり残る青葉の山のさくら花風より後を尋さりせは

左色こそ春にといへる心は宜く侍へし右風より後を尋さ

りせはといへる姿心又いとおかしくも見え侍り左の蓬生

哀なる方も侍れ共猶青葉の山の櫻立まさりてや侍らん

二百五十一番

左勝 有家朝臣

さらぬたに朧にみゆる春の月ちりかひくもる花の陰かな
右 家隆朝臣

花のちる山下風にふしわひて誰又あくる空を侍らむ

此右の歌面かけ覺て花の下ふしえんには思やられ侍を左

歌春の月と置ちりかひくもるといへる彼のこへといふ

る道まかふかにといへる昔覺て誰又あくととおもひや

れんよりはまさるへくや侍らん

二百五十二番

左勝 保季朝臣

眞柴分る片野のみの朝ほらけ霞の末にきくす立也

右 雅經

里遠みいくの末を見渡せば霞にかへす春の小山田

兩首左はかたの御野右はいく野の末といひ霞のすゑ霞

にかへす歌の姿詞取々に侍を霞にかへさん小山田よりは

霞の末のきくす見所や侍らんとて左をまさると申へくや

二百五十三番

左持 長平

ちるおりもふるにまかひし花なれば又木のもとに残るあは雪

右 寂蓮

ちりけりあはれ恨のたれなれば花の跡とふ春の山かせ

左又木のもとに残るあは雪心詞おかしくは侍を右あはれ

うらみの誰なればなといへる心宜侍にや仍持にや侍へか

らん
二百五十四番

左持 具 親

よしさらはいつちもさそへ春のかせ花も盛限りイとみん人のため

右 家 長

つく／＼と霞にくらす野への庭庭の莖にひはりおつ也

左歌彼素性が袖にこき入てもていなんといへる歌の心を

いつちもさそへといへるおかしく侍へし右の歌庭の莖に

雲雀おつ也といへる姿もよろしからさるにはあらずや仍

又持にや侍へからん

二百五十五番

左 顯 昭

つれ／＼の春日をいかてくらさまし心すみれの花見さりせば

右 勝 三 宮

さく花に心をとめてかりかれのかへりわつらふ明ほのゝ聲

左春日をいかてといへることなる事なくやみえ侍らん右

のかりかれ歸りわつらふ曙のこゑ尤まさるへし

二百五十六番

左 勝 女 房

芳野山てりもせぬよの月影に梢の花は雪とちりつゝ

右 忠 良 卿

水底に紫ふかきかけみえて波に色つくたこのうら藤

左歌彼文集の春夜の詩にてりもせずくもりもせず朧々た

る月非暖非寒漫々たる風といへるを吉野山照もせぬよの

月影にと待面影みるやうにこそ覺侍れ右歌みなそこに紫

ふかくうつるらんたこのうら藤もおかしくば見え侍れと

猶左の月の前春の雪殊艶にみえ侍り仍以左勝と申侍へし
二百五十七番

左 勝 大 臣

泊瀬山花に春風吹はてゝ雲なき嶺に有明の月

右 兼 宗 卿

よしの河よとむまもなく行水にかけはなかれぬ岸の山吹

左のはつせ山花に春風吹はてゝ雲なき嶺の月誠に花の後

の春のなくさめに侍へし右よしの河の歎冬影は流さらん

となく云くたされてはみえ侍を猶吉野川の山吹泊瀬の

山の月には難及や侍らん

二百五十八番

左 持 前 權 僧 正

おくまては尋ねぬ花をみせかほに風になかるゝ山川の水

右 通 光 卿

見渡せば春の限の色なれやたかすむ宿のいけの藤涙

左歌の下句右歌の上句共に姿詞宜みえ侍り同科にてや侍

へからん

二百五十九番

左 勝 公 繼 卿

春山に駒とすさめぬ岩つゝし心のよゝに花さきにけり

右 釋 阿

松陰にさける莖は藤の花散しく庭とみえもする哉

左歌岩つゝし見所おほく侍らん古歌老の後輩をよくみ侍

しかば只藤の花の散たるにて侍りけるを遅く見ため侍

て此たひの百首の歌に松の下にちらして侍ける許に侍り
歌さま尤ことやうに侍り左の岩つゝし遙にまさりて侍り
二百六十番

左持

公 經 卿

ひたふるにたのむの雁のいかなればかへる雲路をみよしの里

右

俊 成 卿 女

春くれて花や散らん吉野川せゝの岩浪風かほる也

兩方歌左はたのむのかり右は吉野河の落花共よろしくみ

え侍り持と申侍へし

二百六十一番

左持

季 能 卿

天つ空雲のはたてにみたれつゝめもあやなりやあそふ糸ゆふ

右

丹 後

とかむへき人なきあての歎冬を心やすくや浪のおるらん

左の遊糸雲のはたてにみたれめもあやならん心秀句こと

の外に侍へし右のあての山吹心やすく波の折らんおかし

く聞ゆ是も又持にて侍へくや

二百六十二番

左持

宮 内 卿

松か枝におきつ鹽風春かけて霞になきぬたこのうら波

右

越 前

谷河に花のしからみかけてけり嶺の嵐や春の關守

左霞になきぬたこのうら波といひ右峯の嵐や春の關守と

いへる心又勝負分かなくみえ侍なるへし猶同しなとすへ

二百六十三番

左勝

讃 岐

こぬ人をうらみやすらん喚子鳥しほたれ山の夕暮の聲

右

定 家 卿 臣

とまらぬは櫻ばかりな色に出てちりのまかひにくるゝ春哉

左まはたれ山のよふこ鳥誠うらみやすらんと聞え侍を右

櫻ばかりな色に出てといへる心いと心えす侍れは以左ま

さると申へくや

二百六十四番

左持

小 侍 從

石上ふる野のさとをきてみれば獨すみれの花さきにけり

右

通 具 朝 臣

吹はらふ木の下風にかつきえてつもらぬ庭の花の雪かな

左のすみれ右の落花取々なるへし持とすへくや

二百六十五番

左

隆 信 朝 臣

さは姫はなへて縁をそむれ共革にかはる野野イへの色哉

右勝

家 隆 朝 臣

さらに又猶面かけに櫻花やよひの雲の暮かたの空

左歌さは姫の染る心大方は山姫をは春はさほ姫といひ秋

は立田姫と云ければ春も秋も花の色色に取ては董のみに

やは驚へからん右歌猶おも影に櫻花といひて彌生の雲の

暮方の空といへる尤宜侍へし以右爲勝

二百六十六番

左持

有家朝臣

尋つゝ小鳥かさきの山ふきのいはぬ色しもまるへかはなる

右

雅

經

くれぬ共いかゝ見捨て橋の尋こしめの歎冬のはな

兩方の小鳥の歎冬もしつゝきともに取々におかしくみえ

侍りよき持なるへし

二百六十七番

左持

保季朝臣

山ふかき嵐のそこに喚子鳥跡なき道をふみ分よとや

右

寂

蓮

吹風のさそひもはてぬ青柳の枝にそ春の色は残れる

左の嵐の底に喚子鳥右の枝にそ春のといへる心なのを

おかしからさるにあらす又持とすへし

二百六十八番

左勝

長

平

新古今

ちる花の忘れかたみのみれの雲をなに残せ春の山かせ

右

家

長

草さく野をなつかしみ草枕むすへる夢は一夜のみかは

右草に結へる草枕一夜のみかはといへる心憂に侍を左の

そなたに残せ春の山風猶宜侍へし左勝なるへし

二百六十九番

左

具

親

色ふかき藤浪なひきみる人の心をよするたこの浦かせ

右勝

三

宮

いとせめてふたふ心やかしかれのかへる雲のつらにそふらん

左歌可もなく不可もなく侍にや右歌いとせめてといへる

初の五字やゑて叶ても聞え侍られと末句宜侍へしまさ

ると申へくや

二百七十番

左持

顯

昭

山ふきのうつるふ影を結手のあつくにあかねの玉水

右

内

大

臣

むかしたれあての山吹うへなきて花故里の名を残すらん

左右のあての歎冬左は滴にあかねといへる彼あかても人

にといへる本歌のあかてもといへる詞をあしく心得て申

人も有を其由に心得たるにやとみえ侍にや

二百七十一番

左勝

女

房

風ふけは花のふら雲や消てよなはるゝみよしの月

右

兼

宗

卿

花ゆへにおしむけふそといふならばかへりて春や我をうらみん

左歌よなはるゝみよしの月秋の空のひとへにくま

なからんよりもえんに侍らんかしと面影みるやうにこそ

覺侍れ右歌おしむけふそといふならばなといへる詞體に

理聞えては侍へし但歌の道よなはるゝみよしの月

なと幽玄に及かたきまにあらまほしく侍る事也

二百七十二番

左勝

左大 臣

花ちりて木のもととくなるまゝに遠き行袖のうつり香

右

通光 卿

まのへ共いはぬ色なる山ふきの花に戀しきあての古郷

左歌遠き行袖のうつりが姿心いみしくこそ見え侍れ

右歌花に戀しきといへる心いとやさしく聞え侍り但ゐて

の古郷を戀しさばかりはいはぬ色なるなとまてまのふる

戀には及へからすや侍らん左の袖の移香猶えんに侍へし

二百七十三番

左勝

前權僧 正

新千載

立かへりみれ共あかね藤なみは過る心にかゝる成けり

右

釋阿

春くれぬ今やさくらん蛙なく神なひ川の山ふきの花

左過る心にかゝる也けりいみしくおかしくこそみえ侍れ

右の神無妃河の欺冬是はよのふることを百首につきて

はさまの歌になきて侍りける計也尤以左勝とすへし

二百七十四番

左勝

公繼卿

大かたの春の日影ものとけて時にそあへる藤生のいはな

右

俊成卿 女

くれぬ共猶春風は吹かよへよしのおくの花の青葉に

右歌猶春風は吹かよへなといへる姿はよろしからざるに

はあらず侍れと左歌大かたの春の日影もなといへる心宜

見え侍り末句の藤生の花を猶今少やすらかなる藤にて

あらまほしくやと聞え侍れと上句よろしくみえ侍り左勝

にて侍へし

二百七十五番

左持

公經卿

立かへり猶古郷にすみれさくまかきの暮に春風そふく

右

丹後

なつかしき色のゆかりと思ふにもみれば心にかゝるふちなみ

左のすみれ籬の暮に春風そ吹と云右の藤浪の色のゆかり

と思にもなといへる兩方共にえんに侍へし持とすへし

二百七十六番

左持

季能卿

色まらぬあまもやめにはたてつらん雲にまかへるたこのうら藤

右

越前

春ふかみいての山ふきちるまゝにひとへに夏に成かとそみる

左は田子のうら藤を思ひ右はあての欺冬をひけり心とり

とりに優に侍を左あまもやめにはといひ右は散まゝに一

重になれる心兼盛か歌ふるき難にや侍らんすらすらへて又

持にや侍へからん

二百七十七番

左勝 宮内卿

庭の面はのらと成ぬる古郷のまやのあまりに雲雀おつ也

右

定家朝臣

吉野川たきつ岩浪せきもあへす早く過行花のころ哉

左歌彼庭も籬も秋の野らなるといへる遍昭か母の家の心

をまやのあまりにひはりおつらん姿本歌よりもつき／＼
しく聞え侍にや右吉野河によせてはやく過行花の比哉と
いへるか様の心さきにも見え侍つるにや左雪雀おつなと
おかしく侍り左まさりて侍なんかし

二百七十八番

左 持

讀

岐

讀古今

今はとて春の有明にちる花や月にもおしき嶺の白雲

右

通

具

朝

臣

櫻花ちりのまかひに暮ないん歸らは春の道まかふかに

左月にもおしきみねの白雲いと宜こそみえ侍めれ右かへ
らは春のといへる彼ちりかひくもれ老らくのといへる業
平朝臣の歌を思へる心又をとるとは申かたし仍持とすへ
し

二百七十九番

左 持

小

侍

從

紫の雲井にみゆる藤の花いつか心の松そかいらむ

右

家

隆

朝

臣

鳴とむる花かと思ふ驚の歸るふるすの谷のしら雲

左歌紫の雲いつる心の松にかけたりしか覺ゆへき事なり
と覺侍を右歌花かと思ふといへる花を雲とのみこそい
ふことを雲を花かといへる姿もおかしくめつらしくも侍
れば又なすらへて持にて侍へし

二百八十番

左 勝

隆

信

朝

臣

春といへは今はの心つくはれの嶺をはるかに歸るかりかれ
右 雅 經

うつり行春をはたこのうらみても忘れすかけよ峯の藤浪
右歌心おかしくみえ侍を左歌今はの侍つくはれのといへ
るはかりこそよろしくみえ侍めれ勝にや侍らん

二百八十一番

左

有

家

朝

臣

わきも子かくれなぬそのめ岩つしいはて千入の色そみえける

右 勝

寂

蓮

新古今

おもひたつ鳥はふるすもたのむらんなれる花のあとの夕暮
左歌岩つし千入の色ふかくもみえ侍を右歌なれる花
の跡の夕暮宜侍りけるにやとみえ侍り勝にて侍へからん

二百八十二番

左 勝

保

季

朝

臣

明ほのにおもひなれたる春なれと山の端かすむ夕暮の空

右

家

長

あとしのふむかしみかはのかきつはた涙は今もふりはてにけり

左歌曙に思ひなれたる春なれといへる心宜侍り右歌昔
みかはの杜若ゆへおかしからさるにはあらさるへし但左
の山のはかすむ夕暮の空猶宜にや侍らん仍可爲勝

二百八十三番

左 持

良

平

おしきかな彌生の空に花ちりて梢にすさむうくひすの聲

右

三

宮

水むすふ峯の山吹きさきしより底さへ匂ふゐての玉河

左 おしき哉といへる五字より姿おかしくは侍をすさむ詞

やあたらしき様に聞え侍らん右底さへ匂ふなとは聞なれたる様に侍れとゐての玉河心とまる所に侍れはなすら

へて持にてや侍へからん

二百八十四番

左 持

具

親

心あれや神なび河に鳴かはつ春もうつろふ山ふきの花

右

内

大

臣

花ちりぬ何かは春もおしからん花ゆへにこそ春を待し

左 歌心あれやとをけるより姿詞おかしくみえ侍を右歌花

ちりぬといひ何かは春もと又をし返し花ゆへにこそとい

へる心珍敷も聞え侍れ勝劣又難申侍にや

二百八十五番

左

顯

昭

葉かへせぬ老木の松に色めくや若紫のふちなみのはな

右 勝

忠

良

卿

花になれし名残を雲になかむればやよひの暮の春雨の空

左 老木の松に色めくらんわが紫よろしからすやみゆへく

侍らん右名残を雲にとひ彌生のくれの春雨の空心姿事

外にこそみえ侍れ左の老木の松藤波の花諷詠にたいさる

へし以右爲勝

二百八十六番

左 勝

女

房

いにしへの春さへけふはつらき哉くるといかに歸そめけん

右

通

光

卿

さ夜ふくる鐘の音には行春をまたふ心もつきはてにけり

右 歌彼いにしへの人さへ今朝はつらき哉といへる後拾遺

の歌の心いみしくおかしくみえ侍り右歌さ夜ふくる鐘の

音に春をまたふ心もつくらん心おかしくは侍れと春さへ

けふはつらきと侍には如何及侍へき

二百八十七番

左 勝

左

大

臣

手に結ふ岩井の水のあかてのみ春にわかるゝ志賀の山越

右

釋

阿

おしむとて春はとまらぬ物ゆへに卯月の空なはいとふとやみん

左 歌岩井のみつのあかてのみといへる心姿しづくに濁る

山の井にもいく程の勝劣いかゝとて覺侍を老のまとひ

こそ侍らん右歌とかく申に及へからず左萬里の勝にみえ

侍り

二百八十八番

左 勝

前

懺

僧

正

暮ぬれと花のしたにも宿かれは日數ばかりそ春にわかるゝ

右

俊

成

卿

女

なをわきて時こそ有けれ霞たつ夕の空も春くるゝほと

左 日數計そといへる心めつらしくこそみえ侍れ右時こそ

有けれといへるおかしくみえ侍れと下句いく程の事にか

はと覺侍れは猶左まさるへくや侍らん

二百八十九番

左

公

經

卿

行春よ空のけしきをつく／＼と心にとめてなかわばかりそ

右 勝

丹

後

そなたへは歸らぬ春と知らなくるれはつらき西の山のは

左歌ゆく春よといへる心とかなくは侍へし右歌始にそな

たへはとをけるや何事そと聞え侍らん下句にくるれはつ

らき西の山のはといひつればかなひて侍うへに末句心姿

宜侍り勝へきにこそ侍れ

二百九十番

左 勝

公

經

卿

かへりなば春のみおしき名残かはなれにし鳥も雲に入なり

右

越

前

暮はつる春の行末も白雲のなかもや送る氣色なるらん

右歌春のゆくゑも白雲のなといへる文字つゝきは宜侍を

末句今少思ふへくそ侍りける左歌春のみおしき名残かは

といへる心まさるへくや侍らん

二百九十一番

左

季

能

卿

四方の山けふをかきりとかすまておほつかなみの春の行ふや

右 勝

定

家

朝 臣

けふのみとしゐてもおらし藤花さきける夏の色ならぬかは

左上句はよろしきやうに侍をおほつかなみの詞こそこひ

れかふへき事にも侍らすや伊勢物語の異説の本にそけふ

の詠やといへるやうに覺侍れとさてはふるくも用ゐたる

やうにもおほえ侍らす萬葉集伊勢物語もよき詞を取へき

にや侍らん右しゐてもおらし藤花といへる春はいくかも

といへる業平朝臣の歌の心宜や侍らん

二百九十二番

左 持

宮

内

卿

花もなし人めもしらぬ柴の戸もさすかに春のくるいけふこそ

右

通

具

朝 臣

行ふなくはてなき物は暮て行春の雲路のとまり也けり

左歌初五字そいかにそ聞え侍れとさすかに春のくるいけ

ふこそといへる心こもりておかしく侍へし右歌はてなき

物は暮て行と云る心細くも侍れは持と申へくや侍らむ

二百九十三番

左 持

讚

岐

枝にちる花こそあらめ鶯のねさへかれゆく春の暮かな

右

家

隆

朝 臣

みよしの、大河のへの藤浪の春もふかしと色にみすらん

此兩首又よろしくみえ侍り持に侍へし

二百九十四番

左 勝

小

侍

從

ちるとみる花もねにこそかへるなれ過行春の行ふしらはや

右

雅

經

限あれば今夜もすてにふけにけりくれかたかりし春の日數の

此つかひも又共におかしく侍をさのみ持と申も例の事に

侍うへに右歌こよひもすてにといへる己の字そよせなく
ては無下にたゝ詞にや聞え侍らん仍左少はまさるへくや
侍らん

二百九十五番

左持

隆 信 朝 臣

こきよせよ難波わたりに舟とめて今宵ばかりの春をなかめん

右

寂

蓮

東路や春の行ふを今夜より夢にもつけようつの山ふみ

左歌旅泊海路なといへる題もなくて只こと葉に漕よせよ

と下知したるにいつくのつゝあてともなくおきてたるやう

に聞えや侍らん右歌は東路やとをければ旅行の歌にこそ

とばきこえ侍を今夜よりといへるうつの山に目數ふへき

やうにや侍らんいづれもまさると難申や侍らん持に侍へ

きにや

二百九十六番

左

有 家 朝 臣

名残なくけふこそ春はつくはねの木のもとこの花もふりにき

右勝

家

長

ちる花になげきなれぬる心こそ春の別もたへ忍ひけれ

左けふこそ春はつくはねのといへるおかしくみえ侍を花

もふりにきといひはてたるや匂すくなきやうに侍らん右

歎なれぬる心こそといへる理聞え侍にやまさるへきにや

侍らん

二百九十七番

左

保 季 朝 臣

今日暮ぬいつくへ春の行て又ともなふ花を外にみすらん

右勝

三

宮

なかも送る心をやかてきそひつゝ雲のふる巢に歸る鶯

左歌ゆきて又といひ外にみすらんといへる詞くたけて

いとゆきても侍らぬにや右歌雲のふる巢にかへる鶯よく

きこえ侍りまさり侍へし

二百九十八番

左持

良

平

行春の別はけふになるとより船いたしてもいかに尋ん

右

内

大

臣

春の色もけふを眼の夕附日さしもや藤のうら紫に

左は別はけふになるとより右は夕つくひさしもや藤の共

に文字つゝきおかしきやうに見え侍り持にて侍へからん

二百九十九番

左

具

親

花もちり鳥も古巢にかへりなほおしかるへくもなき別哉

右勝

忠

良

卿

行ふなきなかも計を名残にて雲のはたてに春を暮ぬる

左歌花もちり鳥も歸る崇徳院の御歌にや見給へし心ちし侍

らん右歌とかなくくたりて侍へし以右可勝爲

三百番

左

顯

昭

かへる春おもひやるこそくるしけれなこそその關の夕暮の空

右勝

兼

宗

卿

郭公きなかん事をおもほすは暮ぬる春にいかてたへまし

左かへる春をなこそその關におもひやれる物惣にこそ聞え

侍れ春をはいづくにもいとひ侍らしものを右は郭公をも

思ひ春をも惜む心深く見え侍り右尤勝侍へし

千五百番歌合卷第五

夏一

無判

判者土御門内大臣雖有勅定薨去畢

三百一番

左

女

房

春山の霞の衣ぬきすてゝ今朝はみとりの夏の明ほの

右

釋

阿

ころもこそかふともかへめ春の色にそめし心はいつかうつらん

三百二番

左

左

大

臣

見しま江にしけりはてぬる蘆のねの二よは春を隔きにけり

右

俊

成

卿

女

春の色をとめかたみの夏衣たつ日も今日に成にける哉

三百三番

左

前

權

僧

正

夏にさく池の藤なみ色に出て山郭公なくなまつ哉

右

丹

後

けふよりは心さへこそかはりぬれ昨日はまちし郭公かは

三百四番

左

公

繼

卿

かたみとやかへにそむくる灯のわつかに残る春の影かな

右

越

前

新後拾遺

夏衣いそきかへつるかひもなくたち重れたる花のおも影

三百五番

左

公 經 卿

おもはすも蟬のは衣たちかへて一夜に春をわするへしとは

右

定 家 朝 臣

郭公まつに心のうつるより袖にとまらぬ春の色かな

三百六番

左

季 能 卿

花にそむ心やうすく成ぬらんいそきたるも蟬のは衣

右

通 具 朝 臣

暮ていにし春のかたみとけふみれば花の袂に露そまたひぬ

三百七番

左

宮 内 卿

けふこそあれ春は霞も立田山緑をこめて過しもの也

右

家 隆 朝 臣

今はよも花は嵐の夏山に青葉ましりの峯のしら雲

三百八番

左

讃 岐

神まつる卯月の花もさきにけり山郭公夕かけてなけ

右

雅 經

袖の色もうつりにけりな夏衣春はくれぬと詠せしまに

三百九番

左

小 侍 從

昨日までいとひし風をまつにこそ定なき世の程もしらるれ

右

寂 蓮

野へみれば霞の袖も引かへてみとりは草のたもとなりけり
三百十番

左

隆 信 朝 臣

心には春の名残をうらみてもかひなき袖の一えなるらん

右

家 長

春の色のならも更に夏たてはみとりにかふる衣手のもり

三百十一番

左

有 家 朝 臣

夏衣春の形見を立田山秋は紅葉の色はそむとも

右

三 宮

ぬきかふる衣の袖にしられけりまたうらなれぬ夏の氣色は

三百十二番

左

保 季 朝 臣

心からけふぬきかへて夏衣恨を春に猶のこすらん

右

内 大 臣

神まつる卯月になれば卯花のかきねもをみの衣きてけり

三百十三番

左

良 平

けふよりは春をは夏に立かへて花の袂はせみのはこるも

右

忠 良 卿

けさよりは花ともみえず夏衣立田の山の峯のしら雲

三百十四番

左

具 親

空蟬の羽になくこれや袖のつゆ花のならをしのひくに

右 兼 宗 卿

かきりあらん春こそあらめ花の色を心とかふる夏衣かな
三百十五番

左 顯 昭

卯のほなを折たかへても思ふ哉雪ふるさとに我やきぬらん

右 通 光 卿

たちかふる衣にこそは思ひしれけふより春をよそになるとも

三百十六番

左 女 房

夏の空くもれるよ半の卯の花の月をやとせる玉河のさと

右 俊 成 卿 女

卯花のさきぬる時は夏山の木蔭くもらぬ夕つくよかな

三百十七番

左 大 臣

鶯のひとりとかへれるおく山に心あるへきをそさくらかな

右 丹 後

今朝きなけ夏のかさねの鶯も暮にし春の忘かたみに

三百十八番

左 前 權 僧 正

とめくれと春なき山の梢より今はいとほぬ風わたる也

右 越 前

故郷の卯花月よきてみればれやの板まをもらぬ計そ

三百十九番

左 公 繼 卿

夏きぬとかふる衣はきなれにし春のかたみなたつにそ有ける
右 定 家 朝 臣

待とせし人のためにはなかもれとしける夏草道もなきまで
三百二十番

左 公 經 卿

卯花のかさねほのめく夕つくよいつあり明の久かたの空

右 通 具 朝 臣

さきぬればまたき有明の光哉卯花山のあかつきのかけ

三百廿一番

左 季 能 卿

むら雨に露置わたす卯花のかさねつゝきや玉河のさと

右 家 隆 朝 臣

入る月てふ月にこそほりきえ行木のまより打出る涙や谷の卯花

三百廿二番

左 宮 内 卿

卯花をまかきにうへて雨のよも月見かほなるをのいさと人

右 雅 經

卯花や春をへたつるかさねまで曉りはてたる雪の村きえ

三百廿三番

左 讃 岐

ほとゝきすまた打とけぬ忍びれに木の下くらき夏のよの月

右 寂 蓮

卯花やみきはなかけてさきぬらん涙よせまさる玉河の里

三百廿四番

左 小 侍 從

あふひ草たのみをかくる諸人のしるしはいつかみあれるへき

右 家 長

わすれては冬かと思ふ卯花の雪ふみ分るなのいかよひち

三百廿五番

左 隆 信 朝 臣

山かつのたのむばかりのうつ木垣花みんとしはうへすや有けん

右 三 宮

いつしかと山ほといきすまつことと春を忘るゝはしめなるらん

三百廿六番

左 有 家 朝 臣

神代より年に一たびあふひ草逢日まれなるかさしなりけり

右 内 大 臣

橘の花ちるさとをあかくれて山ほといきすなとや音せぬ

三百廿七番

左 保 季 朝 臣

卯花のかはらぬ色を名残にているもいらぬも有明の月

右 忠 良 卿

^{新後醍醐}しひびねをいつくに鳴てほといきすうの花かきに猶またるらん

三百廿八番

左 眞 平

玉河のきしのうの花咲ぬれば汀にしらぬ涙そたちける

右 兼 宗 卿

いくたびかけふのみあれにあふひ草思も久しみつかきの内

三百廿九番

左 具 親

卯花のさけるかきれやこれならんそなからあらぬ有明の月

右 通 光 卿

ほといきす待につけてそ夏のよをねぬにあけぬと思ひしりぬる

三百卅番

左 顯 昭

ぬれ衣ほすかとみれば白妙の卯花さけるあまの袖かき

右 釋 阿

卯花のかきれの露にやとりきて春わすれよと夕つくよ哉

三百卅一番

左 女 房

ほといきす心してなけ橘のはなちる里の五月雨の空

右 丹 後

夕たすきかけてそ待し神まつる卯月は夏をはしめと思へば

三百卅二番

左 大 臣

^{新古今}有明のつれなく見えし月は出ぬ山ほといきす待よなからに

右 越 前

思ひねのまくらになれて時鳥うつゝも夢の一聲のそら

三百卅三番

左 前 權 僧 正

夜半にきて山郭公なのるなり旅の宿かせ橘のはな

右 定 家 朝 臣

時しらの里は玉川いつとてか夏のかきねなうつむ白雪
三百廿四番

左 公 繼 卿

しつのおかかこひませたる垣れこそ卯花月のくもり成けれ

右 通 具 朝 臣

ともしけり澤の螢はほのみえてくもるもしらぬ鳥の一聲
三百廿五番

左 公 經 卿

ほといきすしのふる聲のすか原や伏見のくれの夢かうついか

右 家 隆 朝 臣

ちはやふる神代をかけてあふひ草君に二葉のかけやそふらん
三百廿六番

左 季 能 卿

しらさりき卯花月ようちしらみ春より後も明ほのい空

右 雅 經 卿

花は春散にし峯にあはれてふことをあまたにやらぬ白雪
三百廿七番

左 宮 内 卿

ほといきす初音をとこそおもへともまたすしもなし山のはの月

右 寂 蓮

里なれぬ聲をそたのむ郭公み山にふかき宿の夕くれ
三百廿八番

左 讃 岐

ほといきす夜ふかき聲は諸ともにれさめぬ人もうらめしき哉

右 家 長

鶯のいりにし跡の雲路よりまち出る時の鳥もなくなり
三百廿九番

左 小 侍 從

おほえ山いそきいく野の道にしもことをかたらふ時鳥かな

右 三 宮

春過てなをみ山へを尋みん嵐にのこる花はありやと
三百四十番

左 隆 信 朝 臣

若葉さす君か光にあふひ草よろつ代かけて神やうへけん

右 内 大 臣

五月雨にあふさか山の郭公關屋にしはし雨やとりせよ

三百四十一番

左 有 家 朝 臣

郭公まつ夜むなしく明ぬなりゆふつけ鳥の聲計して

右 忠 良 卿

浪やたつ雪やつもると卯花のさきまかへたる玉河の里

三百四十二番

左 保 季 朝 臣

むら雨そ先をかつるゝ時鳥待夕くれの雲のはたてに

右 兼 宗 卿

郭公まつにはよらぬ物そとも中々さらば聞もはてはや

三百四十三番

左 良 平

郭公山のいつくにうちはふき鶯かへるころをまちけん

右 通 光 卿

わきかれつ夢うつゝとも時鳥それがあらぬか夜はのこゑ

三百四十四番

左 具 親

月もおし初音もなそし郭公山のあなたにすむ身ともかな

右 釋 阿

夏もなを心はつきぬあちさひのよひらの露に月も住けり

三百四十五番

左 顯 昭

まきの戸を月にさいてそひろも又たしく水鶏は有けりとしる

右 俊 成 卿 女

人しれぬれにはつくさてほといきす待よの月のかけにかたらへ

三百四十六番

左 女 房

^{風雅} またよひの月まつとても明にけりみしかき夢のむすふともなく

右 越 前

一こゑはきくもつらしと郭公うらみはてれは明そしにける

三百四十七番

左 大 臣

須まのうらの浪におりはへふる雨にしほたれ衣いかにほさまし

右 定 家 朝 臣

あふひ草かりれの野へに郭公あかづきかけてたれを問らん

三百四十八番

左 前 權 僧 正

ほといきすあふさかこえて尋れば今そなとはの山に鳴なる

右 通 具 朝 臣

しのひねのあはれしらるゝうたいねにかたらふゑの郭公哉

三百四十九番

左 公 繼 卿

草枕あやめをむすふ今夜こそよのかはらぬかり成けれ

右 家 隆 朝 臣

うちつけにそれかとそきくほといきす人まつ山にしのひねの聲

三百五十番

左 公 經 卿

名残まてしのひそあへぬ霍公深山の庵の出かてのこゑ

右 雅 經

尋はや五月こすともほといきすしのふの山のおくの二こゑ

三百五十一番

左 季 能 卿

時鳥かよひそむれば卯花のかきれうかるゝうくひすの聲

右 寂 蓮

ほといきすまつ夜ふけ行一こゑもあまり程ふる五月の空

三百五十二番

左 宮 内 卿

あま雲のよそにもなるか時鳥さすかに聲はたえぬ物から

右 家 長

聞そめしたゝ一聲にほといきすいくみしか夜をあかしきぬらん

三百五十三番

左

讃

岐

手折つるはな橘の香をしめてわかたまくらにおしき袖哉

右

三

宮

卯花のかきれつゝきのほとゝきす月影分るよはのしのひれ

三百五十四番

左

小

侍

なか／＼にしのひし比そ郭公さりともし聞しよ半の一こゑ

右

内

大

臣

一こゑはみはてぬ夢の心ちしてれてかきめてか山郭公

三百五十五番

左

隆

信

朝

臣

なかきれをむすふあやめの枕にもなを程なきは夏のよの夢

右

忠

良

卿

こゝろこそ行衛もしらね時鳥なくや夕の一こゑのそら

三百五十六番

左

有

家

朝

臣

猶またんなかくてもやまし時鳥こそもならしの岡の一こゑ

右

兼

宗

卿

名にたちし春にもまさる哀哉ほとゝきすなく明ほのゝ空

三百五十七番

左

保

季

朝

臣

郭公いつかわすれんあつまはやすかのあら野のよほの一聲

右

通

光

卿

ほとゝきすしはしはなとかが在明の月も夜ふかき空のけしきに
三百五十八番

左

良

平

夏の夜も花たちはなのかほるかにやみはあやなき物にそ有ける

右

釋

阿

しのひつま待にそ似たる郭公かたらふ聲はなれぬ物ゆへ

三百五十九番

左

具

親

郭公まつも心やかばるらん花たちはなにしのひれそなく

右

俊

成

卿

女

時鳥まつゆふくれのたちはなにに風さへいかに吹てすくらむ

三百六十番

左

顯

昭

たれもみなたのみをかくるみあれ山神の恵にあふひとをしれ

右

丹

後

ほとゝきすなかぬかきりそ卯花をさえぬかきれの雪かとそみる

三百六十一番

左

女

房

夕つくよしはしやとれる山の井のあかぬ光の水に涼しき

右

定

家

朝

臣

ななさりに山ほとゝきす鳴捨てわれしもとまる森の下かけ

三百六十二番

左

左

大

臣

時しあれば花ちる里の軒の雨にをのかさ月の鳥の一聲

右 通 光 卿

露かけてはらふ袂にちりぬへしかきね分行よひの卯花
三百六十三番

権後拾遺

左 前 權 僧 正

いく里をかたらひすてゝ郭公いまわが宿のはつれ成らん
右 家 隆 朝 臣

かきくもる庭の梢とみるほとに軒もみとりにあやめをそふく
三百六十四番

左 公 繼 卿

足曳の山した水を引かけしすそわの田井に早苗とる也
右 雅 經 卿

かそふればこぬ夜あまたの郭公まつ夜まされるなかめせよとや
三百六十五番

左 公 經 卿

新古今

郭公なをうとまれぬ心かな汝がなく里の他所の夕暮
右 寂 蓮 卿

よそに又心なわけそほとゝきす人まつ山の夜はの 一こふ
三百六十六番

左 季 能 卿

うれしさのたくひなき哉郭公ひとりは聞ぬはつれなれとも
右 家 長 卿

明はつる名残よいかにはとゝきす月にいさふふ山のほのこふ
三百六十七番

左 宮 内 卿

その程となかむれば又時鳥おもはぬかたの雪の 一こふ
右 三 宮

待わひぬ宿やかへましほとゝきすおなしみやこもわきて鳴なり
三百六十八番

左 讀 岐

引かれし山田の水を五月雨にあらぬかたにもまかせつるかな
右 内 大 臣

けふたにも結ふよもきの人數にいらぬあやめの音をもなげとや
三百六十九番

左 小 侍 從

あやめ草あさかの沼に引つれとおもふばかりのぬこそかたけれ
右 忠 良 卿

権後拾遺

うけやなを己のか五月そ時鳥たれゆへならぬよはのぬ覺を
三百七十番

左 隆 信 朝 臣

あやめ草けふかりそめにふきつればしのふそ軒のあるし顔なる
右 兼 宗 卿

郭公をりしりかほにきなく也花たちはなのにはふ夕くれ
三百七十一番

左 有 家 朝 臣

聲よりもすかたやしのふ郭公をくらの山の雲になく也
右 通 光 卿

あやめふくけふとも分てみえぬ哉さうてもしける草の庵は
三百七十二番

新古今

左 保 季 朝 臣

右 釋 阿

すきぬなり信太のもりの郭公たえぬしつくを袖にのこして
ほといきす五月の雲に契をきて人の心を空になすらん
三百七十三番

左 眞 平

年ごとにふけるあやめのねをとめは軒やあさかの沼と成なん

右 俊 成 卿 女

夏も猶あはれしらする妻とてやしのふの軒にあやめふくらん
三百七十四番

左 具 親

おもひしりぬ雲のいく重をへたつとも人をばとほん五月雨の頃

右 丹 後

郭公こそふるこゑいまさらになにかは忍ふのか五月を
三百七十五番

左 顯 昭

郭公尋かれたるうらみしてかへる人めやはつかしのもり

右 越 前

ほといきすなのれば待としられけりたそかれ時のいにしへの空

本

此卷内大臣通親公判者也于時不遂薨逝畢云

千五百番歌合卷第六 夏二 無判

土御門内大臣雖可勅定薨去畢

三百七十六番

左 女 房

たちよりは涼しくやあると結ふ手のしづくに濁る井手の玉みつ

右 通 光 卿

行すゑなたれしのへとて夕風に契かをかん宿のたち花
三百七十七番

左 大 臣

とふ鳥のあすかの里をほといきすむかしの聲に猶や鳴らん

右 家 隆 朝 臣

軒はもる月の光にかほるよは花たちはなにあきかせそふく
三百七十八番

左 前 權 僧 正

くれなゐにふり出てそなく時鳥もみちの山にあらぬ物ゆへ

右 雅 經

郭公ねさめきりせばとばかりに思ひもあへす過る一聲
三百七十九番

左 公 經 卿

飛鳥川せいのいしはし水こえて道たとくし五月雨のころ

右 寂 蓮

五月雨にあさちかすゑは涙こえて又うつもる庭のやり水

三百八十番

左 公 經 卿

さらばよし心をかへてほといきすきなかぬ空をまちこゝるみよ

右 家 長

むこ河に跡もとめぬかほ鳥いく井も見えぬ五月雨の頃

三百八十一番

左 季 能 卿

五月雨に露さへそふるさゝまくら短き夜をもあかしかれけり

右 三 宮

郭公まぢれの床の板まより枕におつる夜はの一聲

三百八十二番

左 宮 内 卿

けふといへばみきはのあやめたち乍ら末をかたしくひなの夕暮

右 内 大 臣

ふきそふる軒のあやめもみとりにてしのふになるゝ蓬生のやと

三百八十三番

左 讃 岐

涼むへき清水たつれて行道の野中の草を先結びつる

右 忠 良 卿

五月雨のしづくにこる山の井のあかて過ぬるほといきすかな

三百八十四番

左 小 侍 從

よそへけん昔の人をみるに似て露にぬれたるなてしこの花

右 兼 家 卿

郭公雲おほるかに鳴ゆくは月のみやこの人もきけとや
三百八十五番

左 隆 信 朝 臣

一かたにまたましものを郭公すくる雲路も跡をさためは

右 通 光 卿

五月雨はけふをまちけりいつしかとあやめにつたふ軒の玉水

三百八十六番

左 有 家 朝 臣

五月雨に山郭公をとつれて軒はのあやめ風かほる也

右 釋 阿

夏のよのなかくもあらは時鳥いま一聲もまたましものを

三百八十七番

左 保 季 朝 臣

五月雨にを田のみなくちせきもあへず浪こす袖に早苗とるなり

右 俊 成 卿 女

ほといきす鳴有明の雲ばれていつくの露の袖にちるらん

三百八十八番

左 良 平

ほといきすたつれくらせる木本にこたふる物はみれの松風

右 丹 後

蘆の葉にけふのあやめを引添へて幾重になりぬこやの八重ふき

三百八十九番

左 具 親

津の國のあしのまろやの五月雨にひまこそなけれ雲の八重ふき

右

越

前

時鳥言傳てんまてなれともやまてとはいはましものな
三百九十番

左

顯

昭

音なしの山ほといきすいつよりかこいになくとは人にしられし

右

定

家朝臣

臣

夕暮はなくぬ空なる郭公こゝろのかふやとやしらるん

三百九十一番

左

女

房

心あてにきかはやきかん時鳥雲路にまふみはのこころ

右

家

隆朝臣

臣

時もとときそれがあらぬか時鳥こそ五月のたそかれのうち

三百九十二番

左

左

大

臣

かさゝきの雲のかげはし程やなき夏の夜わたる山のはの月

右

雅

經

橋のにほひはいまそほといきすなかはなくへき夕暮の空

三百九十三番

左

前

權僧正

正

郭公涙はなれに聲はわれにたかひにかしていくよへぬらん

右

寂

蓮

五月雨の空のみ夏はくもるかは月をなかめし池のうき草

三百九十四番

左

公

繼

卿

五月雨にゆけの河原のむれ木もあらはれてこそ流きにけれ
右 家 長

あくるまもくるいもしらぬ空の雲軒まてとつる五月雨の山
三百九十五番

左

公

經

卿

郭公あはれもふかく住やまに杉のあみ戸のあけくれの聲

右

三

宮

さきにけん花はまたきの夏草に先一色の露むすびけり

三百九十六番

左

季

能

卿

ともしすと山のこさめに立わじてあはれにもうき細もぬれり

右

内

大

臣

五月雨はみかさもえこそさしあへぬ木下露のかゝるしけさに

三百九十七番

左

宮

内

卿

宿やあらぬ花や五月の花ならぬ山時鳥よそにのみして

右

忠

良

卿

橋のむかしにかほる袖に又けふのあやめもねばかりけり

三百九十八番

左

讀

岐

夏むしのともしすてたる光さへのこりてあくるしのいの空

右

兼

宗

卿

とことばに鳴とも人やあかさらんさてこゝろみよ山郭公

三百九十九番

左 小 侍 從

五月雨に水やこゆらんさはた河袖つくはかりあさかりしかと

右 通 光 卿

早苗とるけふおもかけに立そめていなほもそよの秋のはつ風

四百番

左 隆 信 朝 臣

一聲の後はうらめしほといきすきく心ちせぬ時しなれば

右 釋 阿

よそへてもむかしは今ばかりひもなし花橋の袖のかもかな

四百一番

左 有 家 朝 臣

此ころは月をまつへき山のはないく夜へたてつ五月雨の雲

右 俊 成 卿 女

露けさもあはれとそおもふ風なひくしけみにしける常夏の花

四百二番

左 保 季 朝 臣

五月やみいくよの雨になれぬらんいている月の影をわすれて

右 丹 後

五月雨に庭のさゆるは水こへていりぬる磯のくさかとそ見る

四百三番

左 良 平

夏^{にイ}菊の玉江のあしやくちねらん浜に鳥ある五月雨の頃

右 越 前

初聲にかきらさりけり郭公聞ての後も猶そまたるい

四百四番

左 具 親

一こゑのあかねなこりはほといきす恨てあかすしのゝめの月

右 定 家 朝 臣

^{風神}またれつゝ年にまれなる郭公き月計のこゑなおしみそ

四百五番

左 顯 昭

いまはとていなほの山のはといきすわすれたかたみの一聲も哉

右 通 具 朝 臣

ともしする木下やみを分ねれて露にみたるいしのふもちすり

四百六番

左 女 房

足引の山はといきすをちかへりしつくにぬるゝ夕暮の空

右 雅 經

いにしへやみぬ雨影もたちはなの花ちるさとの有明の空

四百七番

左 大 臣

まくすばら玉さくかすやまさるらん葉になく露に螢飛也

右 寂 蓮

むかしともおもひなすへき身の程を花橋にとふ人もかな

四百八番

左 前 權 僧 正

やよいかに山郭公われさへそすみわふる身の猶つれなきに

右 家 長

五月雨によとのつき橋跡もなしこれもなからの名をなかしつゝ
四百九番

左 公 繼 卿

五月雨のとかにくらす夕暮をおとろかしつるほといきす哉

右 三 宮

芳野山はななのみやば尋ねへきとへかし人の五月雨の比
四百十番

左 公 經 卿

郭公きの丸殿の雲井まであさくら山のおもひ出のこゑ

右 内 大 臣

ことしげしはしはたてん横の戸をたゝく水鷄よ鳴はてすとも
四百十一番

左 季 能 卿

花をまつ心は秋にかよへとも分る跡なき庭のなつ草

右 忠 良 卿

ともしげちこゑは聞えぬ夏虫のいはぬ思ひに身をこかす哉
四百十二番

左 宮 内 卿

おほかたのほろゝ時たに雲たえぬ嶺のいほりの五月雨の比

右 兼 宗 卿

けふといへば薫るありかなさをひつゝ風も吹ける軒のあやめな
四百十三番

左 讀 岐

故郷の庭のあさちに風たちて涼しくなれば夕たちの空

右 通 光 卿
なにとなくさひしき程をつくくと思ふ心も五月雨の空
四百十四番

左 小 侍 從

ふくるまではれす見えし夕立の名残ともなき有明の空

右 釋 阿

橋にあやめのまくらかほる夜そむかしを忍ふかきり成ける
四百十五番

左 隆 信 朝 臣

時鳥あかぬなこりをおもはせてきくとしもなきさよの一こゑ

右 俊 成 卿 女

みても猶あかぬよのまの月かけを思ひ絶たる五月雨の空
四百十六番

左 有 家 朝 臣

百敷や軒はにかほる橋の代々のむかしの風や吹らん

右 丹 後

郭公すきぬる後の雲まより猶なかもよと出る月影
四百十七番

左 保 季 朝 臣

春まてはとれし物をあはれ又よしのいおくの五月雨の比

右 越 前

たか手より引分れてかあやめ草おもひくつまにかゝれる
四百十八番

左 良 平

むは玉の夜わたる月ばもりもこすまのあまりの五月雨の比

右 定 家 朝 臣

けふいと、おなしみとりにうつもれて草の庵もあやめふく也

四百十九番

左 具 親

おもひいてゝたれわか宿をのへとて花橋に風のふくらん

右 通 具 朝 臣

夕されは光みえ行夏もしのこれや世なしる思ひ成らん

四百廿番

左 顯 昭

まとゐしていかゝあそはん五月雨にせか井の水も岩こえにけり

右 家 隆 朝 臣

一聲はたむけの山のほとゝきすめさも取あへず明る夜は哉

四百廿一番

左 女 房

笹士のやみなもわかぬみなれさほさすかに夏は月を待けり

右 寂 のこち 蓮

夏かりのあしに浪の音はして月のみこほるみほの古郷

四百廿二番

左 大 臣

みさひえのひしのうき葉にかくろへてかはつ鳴なり夕立の空

右 家 長

れ覺する枕におつる瀧の音にむすほゝれたる夏のよの夢

四百廿三番

左 前 橋 僧 正

五月雨に物思ふ宿は時鳥なく一こゑも猶を夜ふかき

右 三 宮

^{王女}夕ま暮風につれなき白露はしのふにすかる螢なりけり

四百廿四番

左 公 卿

たか宿の花橋のにはびそとおもふかたさへなつかしき哉

右 内 大 臣

五月雨はしつの垣根に日敷へてあさのほきさをほすひまをそき

四百廿五番

左 公 卿

あやめ草かたしくよひのさゝ枕しうぬ匂ひのひまもとめけり

右 忠 良 卿

夏の月雲吹かせなさきたてゝ山のは涼し夕立のそら

四百廿六番

左 季 能 卿

なにとなくうらやましきは夏虫のほすになるゝ光成けり

右 兼 宗 卿

けふは皆わき田の早苗うへてけり田子のてまなくみゆるさ月に

四百廿七番

左 宮 内 卿

軒しるき月の光に山かけのやみなしたびて行螢かな

右 通 光 卿

ほとゝきす花橋もちりはてゝ雲よりもちすさよの一聲

四百廿八番

左

讀

岐

此世よりやとる露さへ清き哉にこりにしまぬ池のはちす葉

右

釋

阿

さなへ月五月雨そむるにしめとやよもの山雲くもり行らん

四百廿九番

左

小

侍

從

我ならぬ澤のほたるもゑるの思ひはえこそ忍はさりけれ

右

俊

成

卿

女

五月雨の雲路たとらぬ郭公をいかき月のやとなならして

四百卅番

左

隆

信

朝

臣

五月雨はふしみの田井に水こえて庭までつゝく宇治の川なみ

右

丹

後

郭公なれも心やなくさまねなは捨山の月になく夜は

四百卅一番

左

有

家

朝

臣

つま戀の秋のおもひはいかいせんともしに鹿の身をわかふへき

右

越

前

五月雨にかけのみ残る心ちして底にみゆるや沼のやつはし

四百卅二番

左

保

季

朝

臣

めにみえぬ匂ひに袖をぬらす哉露やはかゝふ軒のたちばな

右

定

家

朝

臣

天川やせせもしらの五月雨に思ふもふかき雲のみほかな

左

良

平

待てても恨でふかきほといきすなのか五月の夜半の一聲

右

通

具

朝

臣

五月雨はたのめし野へに水こえていかに尋人もすの草くき

四百卅四番

左

具

親

蓮葉に風となひかぬ夏の日もなききたまらぬ露のしら玉

右

家

隆

朝

臣

いかばかり田子のさ衣みしふつき雨もしみにさなへとらん

四百卅五番

左

顯

昭

ほくし影鹿にあひつの山なればいるにかひあるさつほなりけり

右

雅

經

五月雨にこえ行浪はかつしかやかかつみかくるいまいのつき橋

四百卅六番

左

女

房

ともしする影をふなり深山水のこりすも鹿のめをあはすらん

右

家

長

夕すゝみ夏はまへに住吉の松とはしるや澳つしほ風

四百卅七番

左

左

大

臣

ちりをこそすへしとせしが獨ぬる我とこなつは露もほらばす

右 三 宮

月夜にはなにか影ともわかきりし螢はつみにあらはれにけり
四百卅八番

左 前 權 僧 正

夜やくらき道やまとふととふへきに山時鳥なかくてあけぬる

右 内 大 臣

あはれるよとのすまゐは眞嶺ゆへ夏ばかりこそ人にかるるれ
四百卅九番

左 公 繼 卿

身にしむる人の心やかばるらん花たちはなのおなし匂ひを

右 忠 其 卿

夕つくよかたふく空はよゑなから雲のいつこに有明の影
四百四十番

左 公 經 卿

いにしへを花たちはなに忍ふれは袖とふ風のにはふ夕暮
兼 宗 卿

五月雨は雲まなければ久かたの月のさかりは猶しるさかな
四百四十一番

左 季 能 卿

わきておもふにほひなくても夕ま暮花橘に風は吹しな
通 光 卿

右 花の春月の秋とてなになれや忍ひまたるゝ此ほととの空
四百四十二番

左 宮 内 卿

右 釋 阿

衣手に涼しき風をさきたてゝくもりはしむる々たちの空
五月雨はぬまのうき草岩こえて蛙の床もねやたえぬらん
四百四十三番

左 讀 岐

よとともにもゆる螢のいかにして涼しき秋をかねて知らん

右 俊 成 卿 女

ながきよのやみこそまされともしするはくしの松のかりの光に
四百四十四番

左 小 侍 從

しつめのほこの世計としらすしてはかなくみゆるうかひ舟哉
丹 後

右 丹 後

鵜飼舟ほのかにともすかいり火に數そふ物や螢なるらん
四百四十五番

左 隆 信 朝 臣

空は雲庭のあさちになみこへて軒は涼しき五月雨のころ
越 前

右 越 前

よばふへき人もあらはや五月雨にうきてなかるゝさのゝ舟橋
四百四十六番

左 有 家 朝 臣

よそにみておもはきりつる村雲も此里までの夕たちの空
右 定 家 朝 臣

右 定 家 朝 臣

袖の香を花橘におとろげは空にあり明の月を殘れる
四百四十七番

左

またきより秋にや宿なかり枕松かけ涼しうたい月の床

右

かたらひし宿をわするなほときき聲みな月のそらにならるとも

四百四十八番

左

思ひあまりながめつるかな時鳥がたらひ捨てきゆる雲路を

右

五月雨はかひやかかけふり打しめり山田のくれに蛙なくなり

四百四十九番

左

心あてに露も光やそへつらん月に色なき夕かほの花

右

いそのかみふるのゝ道を寛草の露分ころも袖ふかきよて

四百五十番

左

かひのほる鶴身をしけみしくら河瀬々の浪やくかゝり火のかげ

右

いにしへの野守いかゝみ跡たえてとふ火はよ半のほたる成けり

保季朝臣

通具朝臣

良平

家隆朝臣

具親

雅經

顯昭

寂蓮

千五百番歌合卷第七 夏三

判左大臣後京極攝政良經

四百五十一番

左

風をいたみはすのうき葉に宿しめて涼しき玉に蛙鳴なり

右

常夏の花にをさめる白露に又影やとす夜半の月哉

我君尋入雲於出雲之昔酌餘波於難波之朝姑射山之花

下各逢風雅之中與和謂所之月前再見天曆之先蹤爰小

臣猶侍諷詠之進刺當判者選願涯分欲辭之恐遠

勅命守勅命欲從之戀乖涯分何況非家譜之所經

歷日闇毫以失進退愁猶綺難默止粗尋淮康菅家萬

葉集以詩讀歌大江千里詠以詩爲題蓋和漢之詞同類相

求之故也仍綴七十五首之絕句代百五十番之判詞分

彼二句及之兩番也於此道之習俗其才於傍輩而

已

尚葉露將翟麥露招涼珠有擲金聲

四百五十二番

左

山姫の濯のしら糸くりためてをるてふ布はなつ衣かも

右

井つ井ついのうへに水こえてむすふもあさし五月雨の比

女房

宮

親

經

昭

蓮

臣

臣

臣

嶺泉曝布其何益雨濕_ニ飄流_ニ古井程

四百五十三番

左勝

前權僧正

ほといきすきなかぬ宿の橋はたゝかれれと思ふへらなる

右

忠良卿

秋やくるとへと白露風涼しいはたのなのゝ夏の夕くれ

郭公定有_ニ雄飛思_ニ白露詞伎_ニ時輩詞_ニ

四百五十四番

左勝

公繼卿

中々にすゝしくみゆるけしきかな野さはの水にもゆる整は

右

兼宗卿

かくしつゝいつはるへしと見えねともさ月ばかりや五月雨の空

野澤整光頗可_ニ見_ニ夏露五月霽猶遲

四百五十五番

左勝

公經卿

かやりひのけふりを空のへたてにて雲にくもらぬ軒の月かな

右

通光卿

月かけをおもひもわかぬなめ哉五月のやみに卯花の比

兎月卯花新計會風情可_レ比_ニ兩方篇_ニ

四百五十六番

左

季能卿

夏かりの蘆ふくこやにかふひきて軒はすゝしき難波浦風

右勝

釋阿

五月雨はすまのしはやも空とちてけふりはかりそ雲にそひける

海村眺望無_ニ同類_ニ淺雨雲間一片煙

四百五十七番

左勝

宮内卿

なにはかた月には遠く成はてゝおきにたゝふ夕たちの雲

右

俊成卿女

草も木もさながら露の玉おちて風に過ぬる夕たちの雲

雲雷過後暮天興野露豈爭_ニ江月光_ニ

四百五十八番

左持

讃岐

かりてなく涙やかへす郭公こゝみみな月のむら雨のそら

右

丹後

人しれぬわが常なつのから錦たれをまつとて數はしめけん

山鳥籬苑相比處云_レ聲云_レ色雨尋常

四百五十九番

左勝

小侍從

はちす葉に朝なく露のみたれあひてひとつになるも法の心か

右

越前

夏山のともしのかげにはほしみえてふもとにたれか鹿を待らん

誰憶獵人期_レ鹿志露光宜_レ觀一園蓬

四百六十番

左

隆信朝臣

旅人の友よひかはす聲す也夏野の草に道まふらし

右勝

定家朝臣

久かたの中なる河のうかひ舟いかに契りてやみをまつらん

新古今

任他草野行人路 只觀桂河漁客船

四百六十一番

左持

有家朝臣

ほに出ぬかやかしけみにつめ共おもひみたれてとふはたる哉

右

通具朝臣

夏の夜も岩もる月を結ふ手に水くたくる山の井の水

草中螢火水中月 皎々夜光是一同

四百六十二番

左持

保季朝臣

ひさきおふるおきの小島の浪の上に浦かせきそふ日くらしの聲

右

家隆朝臣

五月雨のふるの申道ながしにしける草葉も見えぬ比哉

蟬惹蒲風已辰 雨超野草興共空

四百六十三番

左持

良平

ほととぎすたゝこゑと契けりくるればあくる夏の夜の月

右

雅經

夕立のなこりは峯に雲消てすそ野の草の露の一むら

如何山鳥與露 月露雲清興互加

四百六十四番

左

具親

たか宿のものと見えつ山かつのおなしかきはのなてしこの花

右勝

寂蓮

蚊遣火のけふりのすゑもほのかにてかすみこの夏夜の月

牆下草花争得比 暮煙籠月似春霞

四百六十五番

左持

顯昭

うちとけぬけしきにしろし氷室山夏をへたつる心ありけり

右

家長

夜もすから岩もる清水かたしきて程なき夢もいく結しつ

氷室素非締契處 泉流豈作結夢床

四百六十六番

左勝

女房

澤水の草葉にやとをかりこものおもひみたれて行螢かな

右

内大臣

しかのれもまた打とけぬ夕暮にあやしがるへき風のなとかな

秋風雖近未聞鹿 只愛草中螢火光

四百六十七番

左

左大臣

松かせのばらふ汀のほちす葉にさよき玉ある夏の夕くれ

右勝

忠良卿

夕立の一むら過る雲はれて名残の露はとこなつのいろ

常夏雨過花色好 岸松池藕定難争

四百六十八番

左勝

前權僧正

宿もやとなく聲もこゑ郭公身のふりぬるやことしなるらん

右

兼宗卿

ますらおかば山のばらにこかくれて松をともしの鹿につけばや

今聞舊里霍公語 空忘深山照射情

四百六十九番

左 持

公 鑑 卿

花ちりし宿のこかけをなをつからす、みかてらにとふ人もかな

右

通 光 卿

中々になかむる程も夏のよの月に名残はおもひしられて

觸境感懷隨分有 戀花惜月憶春秋

四百七十番

左

公 經 卿

玉にまかふよひの螢の影むれて雲井のかりの聲を待ける

右 勝

釋 阿

ますらおやは山わく覽ともしける螢にまかふ夕やみの空

成群螢影末聞習 豈若山人夜火幽

四百七十一番

左

季 能 卿

かつみてめつらしき哉とこ夏のばや初花の色をそへつゝ

右 勝

俊 成 卿 女

澤水に秋風ちかし行はたるまかふばかりは影みたれつゝ

詞露凡卑盟夢色 思風佳麗水螢輝

四百七十二番

左 持

宮 内 卿

見わたせば浪もゆるかの夏の日に松かけ遠きいそのほそ道

右

丹 後

涼しやと立よる人のむすふ手にみたれておつる瀧のしらいと

猶殊飛流興閑浪 何渭何涇迷是非

四百七十三番

左 持

讀 岐

住よしの松陰あらふおきつ浪したにや秋の風かよふらん

右

越 前

きふれ河玉ちるせいにまかひてもまかひもはてぬ夏虫のかけ

南北兩神靈地趣 欲論優劣恐猶深

四百七十四番

左

小 侍 從

眞葛はふ夏野のくさのしげくのみたれをうらみて露こぼらん

右 勝

定 家 朝 臣

夏衣たつた河原をきてみればしのになりはへ浪そほしける

維教葛葉成其恨 河水靡衣叶夏心

四百七十五番

左

隆 信 朝 臣

かきくらすとはかりみゆる夕立にいつれの里かあさちふの露

右 勝

通 具 朝 臣

忘れては秋かとおもふ風わたる峯より西の日くらしのこゑ

雷雨不知何所過 待秋只翫蟬鳴

四百七十六番

左

有 家 朝 臣

時こそあれ露吹はらふ夕風に涼しくなりぬ床なつの花

右 勝

家 隆 朝 臣

ともしするは山かみれをなかむれば雲路そ鹿のたちとなりける

離花振_レ露_レ蟬_レ宿_レ鳥_レ 山鹿踏_レ雲射_レ竄高

四百七十七番

左持

保季朝臣

うらなれて蟬飛かふ夕まくれいつれかもとのあまのいさり火

右

雅經

曙わたる雲のいつくに入やられて山のほかこつなつのよの月

混_レ螢_レ漁火宿_レ雲月 光自高低彼是同

四百七十八番

左

夏平

かいみかともゆる氷室のこほりにそあらはれにける冬の面影

右勝

寂蓮

せきとむる山した水は末たえて風になかるゝ蟬のむらこゑ

冬景不_レ思氷鏡上 只聞蟬響約_二溪風_一

四百七十九番

左持

具親

夕立のはるゝ程なき雲まより猶いてかはる山のほの月

右

家長

みな月や風まちわふる野への宿うらみぬくすのうらめしき哉

吐_レ月嶺雲應_レ厭否 待_レ風野草可_レ親不

四百八十番

左

顯昭

さよふかみ風にたくへて行蟬秋ちかしとは空にしるらん

右勝

三宮

松かけの岩井の水の夕暮をたつねぬ人や秋をまつらん

新後望

任他螢火亂飛處 松下清泉不_レ待秋

四百八十一番

左持

女房

柳陰すゝみにきたるから衣ならず袂になるゝ河かせ

右

忠良卿

夕つくひさすやいはりの柴の月にさびしくもあるひくらしの聲

柳岸風聲應_二絶妙_一 柴屏蟬響又幽奇

四百八十二番

左

大 臣

日くらしのなくれに風を吹そへて夕日涼しき岡のへの松

右勝

策宗卿

みな月のてる日の影に色そへてにしきをさらす常夏の花

非_二斯羅夢詞花好_一 偏可_二青松言葉哀_一

四百八十三番

左持

前 權 僧 正

ほといきす空もとろに鳴程に夜たゝ雨ふる袖のうへかな

右

通 光 卿

夏むしのおもひをうつす池水にたくひしらするかいり火のかげ

郭公縱有_二舊風體_一 一點水螢又莫_レ損

四百八十四番

左

公 繼 卿

涼しさは宿からにしもなきものを心しつまるところなりけり

右勝

釋 阿

おは井河かいりさし行鶴かひ舟いくせに夏のよなわかすらん

新古今

心靜身涼雖價日舟中浪上太幽玄

四百八十五番

左持

公經卿

新古今

露^{新古今}かる庭の玉さ、打ないき一むらすきぬ夕たちの雲

右

俊成卿女

岩たいく谷のし水の音さけはむすはぬ袖そまたきすいしき

庭露巖泉清冷夕風情面々尙難分

四百八十六番

左

季能卿

風わたるならの葉かせのあらましになかむる空のはつかりの聲

右勝

丹後

待もせずおしきもあへず夏のよは山のはうとき月をこそみれ

夏天新雁垂時令縦觀未來聲豈聞

四百八十七番

左勝

宮内卿

みぬ人を松の木陰のこけ蕤猶しきしまや大和なてしこ

右

越前

はいそ原立よるかけの涼しきは梢に秋やちかくなるらん

青苔展席花重錦定類漢儒重席名

四百八十八番

左勝

讃岐

夏のよの月のかつらの下もみちかつ／＼秋のひかりなりけり

右

定家朝臣

夏のよはまたよひのまとなかめつゝぬるや川へのしのゝめの空

只翫桂華秋色深夏宵不憶一夢成

四百八十九番

左勝

小侍從

しるしらぬひとつ木陰に立よりて契をむすふ山の井の水

右

通具朝臣

夏衣すそのいはらの夕風に秋おもほゆるさゆりはのつゆ

只斯草露不能斷已盜當時先達歌

四百九十番

左

隆信朝臣

み山かけ夏なき年やこれならん月をし水に松の下かせ

右勝

家隆朝臣

身に近くならずあふきもならのはのしたふく風に行ふしらすも

松下豈爲期月處林風忘扇感情多

四百九十一番

左

有家朝臣

昨日けふ夏をはよそにみ山へのならの木かけに日晩のこゑ

右勝

雅經

たちよれば衣手涼しあらし山秋やとなせの瀧のしら波

避暑何尋蟬樹下嵐山景氣近秋聲

四百九十二番

左

保季朝臣

夕暮のまかきに秋やかふらん露をならはす庭のさゆりは

右勝

寂蓮

すむ人はあるしとなきよもきふに虫のねそはん秋の夕くれ

草中虫怨期_レ秋處 誰比_ニ幽人閑地情_一

四百九十三番

左

良

平

夕立の雲まの目影はれぬれば玉をそみかくあさちふの露

右勝

家

長

吹風はおもひたえたる庭の面に露にそなひく常夏の花

瞿麥待_レ風無_ニ氣力_一 可_レ憐蘿露落低辰

四百九十四番

左

具

規

はいそはらまた色つかぬむら雨に秋のけしきも森の下露

右勝

三

宮

雨そく嶺の梢をなむればむら雲かゝる蟬のこゑく

樹陰嶺上雨過處 論_ニ歌高低_一 定不均

四百九十五番

左持

顯

昭

はちす葉になとか心なかけさらんあたなる露もなくとこそわれ

右

内

大

臣

さひしとて柴折くへし山里に猶かやり火のけふりたてけり

桑門詠興_ニ槐門詠_一 眞俗詞同宜_レ作_レ持

四百九十六番

左勝

女

房

夏ふかみ草のはかくれ露はゐてしのひく、の秋のはつ風

右

兼

宗

卿

むすふ手のしづくに月もやとりけりこれや名におふ玉の井の水

玄邇風情唯在_レ后 古賢難_レ及況當時

四百九十七番

左

左

大

臣

萩原やこゑもほに出ぬさほしかの深く夏野にそよくなる哉

右勝

通

光

卿

石はしるし水なむすふ深山へに涼しさそふる松の下かせ

右方後學非_ニ臣右_一 可_レ聴左方左道篇

四百九十八番

左持

前

權

僧

露の身を玉ともなさん蓮葉のにこりにしまぬ我心かな

右

釋

阿

山の井をむすひて夏は過ぬへし秋や立なん志賀のうら浜

露色先憐禪觀處 水聲又翫納涼前

四百九十九番

左勝

公

繼

卿

せきとむる岩まの水にすむ月ばむすへはとくる水なりけり

右

俊

成

卿

山ふかき松に吹けり都にはまたいりたらぬ秋かせのこゑ

波月松風忘_レ夏處 浮_レ涼猶勝_ニ菊_一 水程_一

五百番

左勝

公

經

卿

かはつなくはすの下葉のさゝ波に浮草わたる夕くれのかせ

右

丹

後

わかるればこれも名殘のおしき哉夏のかさりの日晚のこゑ

寒蟬自本秋天物 送夏何因欲惜聲
五百一番

左 季 能 卿

人はこす心ばかりかる岡のへやけふさへいかにひくらしのこゑ

右 勝 越 前

かけさゆる山井の水のいつくにか暮行夏の立かへるらむ

倩見^ニ左方語首尾^ニ 詞斯不足意參差

五百二番

左 勝 宮 内 卿

^{新古今}かたえさすおふのうらなし初秋になりもならずも風を身にしむ

右 定 家 朝 臣

山のかけおほめくさとにひくらしの聲たのまるゝ夕かほの花

山陰花色雖^レ難^レ弃 猶勝^ニ秋風浦樹枝^ニ

五百三番

左 勝 讀 岐

むしのねはまたあさちふに忍きて下に露けき野への夏草

右 通 具 朝 臣

尋きてならず日かすに秋風や立田河原の夕くれのそら

虫聲先好草間露 風響^ニ思河上秋

五百四番

左 持 小 侍 從

手に結ふいつみの水のすゝしさに忘て鹿のねをそ待つる

右 家 隆 朝 臣

松かけや瀧のうら葉のいは枕夏なき由にかふふころかな

手掬^ニ清泉^ニ堪忘^ニ夏 定閑瀧裏古巖頭
五百五番

左 持 隆 信 朝 臣

秋をまつ目かすもちかくなる神のをとにばたてぬ風を涼しき

右 雅 經

夏ふかき野原のくれにかけみえて螢露けきさゆりほの花

非^ニ唯雷響宵^ニ風響^ニ 葉字何要百合花

五百六番

左 勝 有 家 朝 臣

^{類後集}にまかせに涼しくなひく夏草の野島かさきに秋はきにけり

右 寂 蓮

夏も猶草にやつるゝ故郷に秋をかけたたる萩のうはかせ

舊宅草將^ニ弧島草^ニ 海邊景氣感猶加

五百七番

左 勝 保 季 朝 臣

はつせ河岩こす浪に打そへて涼しく成ぬ入あひのかね

右 家 長

へたてこし垣根も見えず成にけりとなりひとつに草をしけれ

山寺好^ニ聞鐘鼓^ニ韻 隣家還厭草滋陰

五百八番

左 長 平

木間よりとりくる月の涼しきにちるも秋なる下紅葉かな

右 勝 三 宮

秋をまつみ山かくれのさをしかはしのひゝに聲やたつらん

林間月影似秋處 猶勝暮山麋鹿聲

五百九番

左持

具

親

秋ちかき夏の草にかくろへてまたほにいてぬ鹿のはつ聲

右

内

大

臣

戀せしのみそきと人やみたらしの河せのけふの夏はらへなも

古今兩親已爲病 鷗聲未加愈奈何

五百十番

左持

顯

昭

むすふ手のすいしきのみか岩そくたるみの音も夏はしられず

右

忠

良

卿

松風の夏たけくまに涼しきは梢に秋やちかのしほかま

浦號郷名強結構 若優其志定同科

五百十一番

左勝

女

房

藤千枝

みそき川せいの玉藻のみかくれてしらぬ秋やこよひきぬらん

右

通

光

卿

御被する河せの浪も音すいし夏の目数はみな月のそら

神明從本感和語 何況渡河我后詞

五百十二番

左

左

大

臣

七夕のあまのかばらに戀せしと秋をむかふるみそきすらしも

右勝

釋

阿

神後説

なる瀧や西の河せにみそきせん岩こす浪も秋やちかきと

鳴瀧西邊秋近處 言景智水又思誰

五百十三番

左勝

前

檀

僧

正

夏衣かたへ涼しく成ぬ也夜やふけぬらん行あひの空

右

俊

成

卿

女

うたい浪のまたよひなからあけなむみそきに過るみな月の空

夏光秋景去來夜 半冷衣裳感我情

五百十四番

左勝

公

繼

卿

みそきするなかれになひけ蘆原のくにはしめせし神の心も

右

丹

後

みそきする河せの風の涼しきは秋にや神もこゝろよすらん

神國古風詞上顯 對何物欲相爭

五百十五番

左持

公

經

卿

みそきするあさのは風のふき分て秋をよせくる浪の夕こふ

右

越

前

夏衣たちきてなれし程もなく袂に秋の風を吹ける

河水上將衣袖上 報秋風氣定相同

五百十六番

左

季

能

卿

みな月のなこしの森の夕すいみみそきもまたぬ秋の下かせ

右勝

定

家

朝

臣

たかみそきおなほあさちのゆふかけてまつ打靡くかもの河かせ

強求_二杜號_一其何益 未_二敢見聞_一秋下風

五百十七番

左 宮 内 卿

夏衣たもとに秋の浪かけてみそきにふくるさ夜の川かせ

右 勝 通 具 朝 臣

みそき川夜や深ねらんあさ露のやかつて秋なる道芝のうへ

河邊夏被雖_二相似_一 行路且涼勝_二浪音_一

五百十八番

左 讃 岐

はやき瀬のみそきになかすうき事はかへらぬ水にたくへてそ思

右 勝 家 隆 朝 臣

郭公こゑもたえにしかきれよりしのひれになくきりくす哉

碁思偷通_二時鳥後_一 聲々相續竅搖_二心_一

五百十九番

左 小 侍 從

みそき川なつるあさらのひとかたにおもふ心をしられぬ哉

右 勝 雅 經

みな月やさこそは夏のすゑの松秋にもこゆる波の音かな

非唯白浪超_二松上_一 又有_二風情_一超_二左方_一

五百二十番

左 隆 信 朝 臣

みそきして神のめくみも廣瀬川いゝ子世までかすまんとすらん

右 勝 寂 蓮

夏はつるかもの河原のみそきこそ神やうくらん秋風のこゑ

廣瀬祝言雖_レ匠_レ負 鴨河往事不_レ能_レ忘

五百廿一番

左 勝 有 家 朝 臣

夏はたゝ今夜ばかりとみそきする河浪涼し秋やたつらん

右 家 長

御赦する河せの浪の立かへり猶むすへとや夏したふらん

只思臨_二水迎_一秋處 遮莫掬_二波慕_一夏程

五百廿二番

左 保 季 朝 臣

みそきする河瀬に今夜音信てあくるをまたぬ秋の初かせ

右 勝 三 宮

けふのみと夏をながむる淺茅原末こそ風のかたへ涼しき

見取_二竹園言葉趣_一 秋風近報好_二風情_一

五百廿三番

左 眞 平

日くらしの壁にや秋のかよふらん木かけ涼し夏のくれかな

右 勝 内 大 臣

みな月のけふくれ竹のよわりにそ君か子とせの数ほそへける

遣_二懷節_一折千年祝 他事雖_二論送_一夏時

五百廿四番

左 持 具 親

をしなへてみな六月のみそき川いくせの波にいくし立らん

右 思 眞 卿

さほしかの聲もほに出ぬしのすゝきしのひかれたるのへの夕風

左右相共心已舊 等閑相准欲爲持
五百廿五番

左持

顯

昭

涼しさならの葉風にささたてゝしのふのみに秋やきのらん

右

兼

宗

卿

うき事もみなつきはつるけふならばあすや禊のしるしもみん

無咎無難無氣味 兩方勝負實難分

千五百番歌合卷第八

秋一 判者同前

五百廿六番

左持

女

房

風の音に秋はけふより立田山夜半にや夏のひとりこゆらん

右

釋

阿

こほちより秋や立らん明かたはこゑかはるなりすまのなみかせ

如何此道一遺老 齡及九旬獨侍君

五百廿七番

左

左

大

臣

新古今 深草の露のよすかを契にて里なはかれず秋は來にけり

右勝

俊

成

卿

女

景松送 秋くれば身にしむ物と成にけり昨日も聞し萩のうは風

性園「荒唯有茅 誰尋深草露光幽」

五百廿八番

左勝

前

權

僧

正

風の音におとろくのみか萩のはのさやかにひく秋はきにけり

右

丹

後

うたゝねは心せよともいふへきにおもひもあへぬ秋のはつかせ

若令「劉白聞秋萩」下「感深春」感「早秋」

五百廿九番

左持

公

繼

卿

秋きぬと一夜を分る鐘の音にあはれうちそふ曉のそら

右 越 前

うたいに心つくしの秋きぬとおとろかすなり萩のうは風
鐘響告秋將曙處 相同假寢夢驚情

五百卅番

左 持 公 經 卿

けふより秋は立田の山のはに入日さびしくかはる空かな
右 定 家 朝 臣

けさよりは風をたよりのしるへにて跡なき浪も秋や立らん
心憐嶺目凄々影 思動海風弱々聲

五百卅一番

左 持 季 能 卿

たれに又露のあはれなかけんとて袖より過る秋のはつ風
右 通 具 朝 臣

萩の葉にいつ秋風の吹なれて身にしむはかり人にしらする
秋風秋草詞難舊 秋始一簫相互存

五百卅二番

左 持 宮 内 卿

軒ちかき松の梢におとつれて袖にしられぬ秋のはつ風
右 家 隆 朝 臣

秋はくるまたしのいめのけしきより夕の空もみえける物を
簾下松風秋思苦 任他曉色似黃昏

五百卅三番

左 持 讃 岐

かそへする人の心になつ秋を西よりとしも誰さためけん

右 雅 經

あさくらやきのよろ殿にたれとへは秋をもなのるおきのうは風
人意計秋能識節 猶同秋響忽稱名

五百卅四番

左 小 侍 從

いかなれば身にはしむそと尋ても秋吹かせの色をしらばや
右 勝 寂 蓮

秋風は一夜ばかりを蟲の音のはたなるまでや夕くれの空
聞誰將識秋風色 只感心機緒綺聲

五百卅五番

左 隆 信 朝 臣

またさかぬ哀ないかてそへつらんことしにかきる秋の風かは
右 勝 家 長

しのひこし岩井の水の松の風あらはれて吹秋はきにけり
風聲經歲聞何變 松韵顯秋興豈空

五百卅六番

左 有 家 朝 臣

けさよりはいな葉もそよとしらす也鳥羽田のおもの秋の初風
右 勝 三 宮

昨日より萩の下葉にかよひきてけさあらはるゝ秋のはつ風
蕭瑟秋聲初報曉 扶花風勝稻花風

五百卅七番

左 保 季 朝 臣

かれてたに心にとまる秋風のけふ明そむるたそかれの空

右勝

内大臣

秋風のたつた河原の柳かけ春のみとりもいるつきにけり

龍田河興令宜賞 岸柳春過秋色寒

五百卅八番

左勝

良平

けふよりは秋のけしきの森なればやかて身にしむ出おろしの風

右

忠良卿

夕暮のあはれな空になかむれば秋きにけりと萩のうは風

情憶近年秋夕詠 此詞度々幾回看

五百卅九番

左

具親

新古今
しきたへの枕のうへに過ぬなり露を尋ねる秋のはつかせ

右勝

兼宗卿

故郷とあれにし庭のあさちにも露なきそへて秋はきにけり

枕上秋風草露到 不思舊里草榮場

五百四十番

左勝

顯昭

新古今
永くさの岡のくすばも色付てけさうらかなし秋のはつかせ

右

通光卿

たちそむるけふより人にしられけりなれし秋にかへる秋かせ

可憐老後灑詞處 葛嶺岡邊秋色黃

五百四十一番

左勝

女房

秋たちて昨日にかはる浪風に涼しくなひく伊せの濱萩

右

俊成卿 女

まれにあふあまの河邊の秋風は此世ならすや哀なるらん

遮莫張良帷帳策 決勝只出殺情中

五百四十二番

左

左大臣

おほかたの夕はさそとおもへとも我ためにふく萩のうは風

右勝

丹後

けふも又みとりはおなし松陰に風にまかせて秋やたつらん

詞疎偏被衆人弄 昨木不才寄此躬

五百四十三番

左

前權僧正

今宵こん人にそあはん七夕のたえぬ契にあはんとおもへは

右勝

越前

かれはや野山も色のかはるらん身にしみ初る秋のはつ風

嵐氣向人宜染意 出頭野面早秋天

五百四十四番

左

公繼卿

ふけにけり今や秋たつ思ひれの夢路をこめて風を涼しき

右勝

定家朝臣

水草の岡のくすばら吹返し衣手うすき秋のはつかせ

風吹秋草衣裳薄 曉夢難思枕枕前

五百四十五番

左持

公經卿

契あればあまのは衣立ゐても待よかならず星合のそら

右 通具朝臣

あはれ又いかにしのはん袖の露野原の風に秋はきにけり

星影露光雖照耀 其詞優劣未分明

五百四十六番

左 季能卿

けふよりは月の秋そとなかむればたいにはあらぬ夕つゝのかけ

右 勝家隆朝臣

七夕の雲の衣を吹かされ夜さむに成ぬあまの川風

潘郎若見晚星詠 秋興素懷定改情

五百四十七番

左 宮内卿

風の音に物わひしかる秋はきぬいつくに宿をおもひさためん

右 勝雅經

久かたのあまのは衣まれにきて契はつきぬほし合の空

七夕羽衣交不變 豈拋喜祝賞秋悲

五百四十八番

左 持讃岐

三日月の光ほのかにみゆるより心をつくす秋のそらかな

右 寂蓮

吹風も松のひいきも浪の音も秋きにけりな住よしの濱

新秋微月尋常事 白浪青松又比之

五百四十九番

左 小侍從

天河年によはまちもみし又わく方のこゝろありせば

右 勝家長

いとばやもおのへの鹿は聲たてつすそのい萩さきもあへぬに

星躔縱有鹿他天 風體太卑似落弓

五百五十番

左 持隆信朝臣

秋の色をいつしかみする夕つくよさすやおかへの松風のこゑ

右 三宮

秋たちていくかもあらぬに哀さないつならひけん夕くれのそら

兩首秋詞應比類 等閑篇詠見猶同

五百五十一番

左 持有家朝臣

さらに又待へき秋も久かたのあまの河せにかへるなみかな

右 内大臣

秋きぬとはのみか月の光にそかれてくまなき影はしらるゝ

倩憶二星歸路曉 猶同片月未圓天

五百五十二番

左 保季朝臣

出そむるまた三日月のほのかにいていかに秋の色をみすらん

右 勝忠真卿

竹のはにあさひくいとや七夕の一夜のふしのみたれなるらん

竹竿新有願絲掛 棘府何無意緒牽

五百五十三番

左 良平

天川けふをあふせとなかめてもくるゝ待には袖やぬるらん

右 勝

兼 宗 卿

年をへてななき契のたえせれはためしにひかる七夕のいと

牽牛織女相期日 待夕何因涙不_レ禁

五百五十四番

左 持

具 親

けふのみや心もはれて七夕のおなし雲井に月をみるらん

右

通 光 卿

あひみてもなを行末の契をやむすひかさぬる七夕のいと

乞巧今宵皆獻_レ祝 此詞定叶_二星心_一

五百五十五番

左

顯 昭

七夕にけふかす絲は君か代のなきためしをひくにそありける

右 勝

釋 阿

風の音を萩の葉のみと聞こしなくすのうらにも秋は見えけり

七夕祝言雖_レ可_レ賞 風聲吹_レ草蹠_二秋陽_一

五百五十六番

左 勝

女 房

しのすゝきまたほに出ぬ夕月よさすかに秋のけしきなるかな

右

丹 後

新勅撰

まくすばらうらみぬ袖のうへまでも露をき初る秋はきにけり

暮天月與_二秋衣露_一 相去雲泥萬里路

左

大 臣

しら露も色そめあへぬ立田山またあなはにて秋風そふく
待えてもいかななめんいつしかとけしきことなるみか月の影
寄_レ語詞林諸好客 定嘲木葉未_レ紅時
五百五十八番
左 勝
おもふへし我身ひとつの秋そかしたれかかくしも月をなめん
右
夕暮はをのゝしのはらしのはれぬ秋きにけりとうつら鳴なり
天無_二毫雲_一 傍無_二友_一 月下幽情又比_レ誰
五百五十九番
左 持
ひこほしのつまむかへ舟よそふらしあまの河原の今日のくれ方
右
いつしかと空にあはれを三日月のかたふく影も秋の夕くれ
星渚_二艤舟相待夕_一 夕傾片月互搖_二情_一
五百六十番
左 持
もとあらの萩の下れになく蟲の聲をに誰にみせもきかせも
右
我宿の萩の下葉のいかならん袖も露けしはつかりのこゑ
萩花開處秋庭興 相類暗_二雲遠雁聲_一
五百六十一番
左 持
季 能 卿

人こそあれ庭のむくらしも色付て風のみかよふふるさとの秋

雅 經

萩か花さくともよそに宮城野の木の下露の秋の夕くれ

可怪此詞無艷色 庭蕪變綠野萩開

五百六十二番

左 持

宮 内 卿

天河もみしのはしやわたすらん色付にしの夕くれの空

右

寂 蓮

秋をへてよそにおもひし夕よりたよらぬ物を秋の上かせ

非唯紅葉秋橋色 吹萩西風染意哉

五百六十三番

左

讀 岐

天川こそわたりはうつろへとふかきちきりやかばらさるらん

右 勝

家 長

よといもに山かけくらさ谷の庵のくるいしらする日晩のこゑ

秋樹蟬鳴山影寂 以聲知暮感猶深

五百六十四番

左 持

小 侍 從

いつしかとけふを待つる七夕のあすの心をおもひこそやれ

右

三 宮

七夕もしはしやすらへ天河わけこし涙はかへりやはする

不知詞浪深將淺 河漢比才兩首心

五百六十五番

左 勝

隆 信 朝 臣

あきらげき庭の灯かすことに雲井にかよふひこほしのかけ

内 大 臣

萩の葉に秋ふく色はみえれとも身にしむ程の風のなとかな

乞巧奠庭雲上燭 星河陰昧定増明

五百六十六番

左 勝

有 家 朝 臣

萩原や末吹なひく秋風の音するたひに人はうらめし

右

忠 良 卿

萩の葉に松の梢を吹ませておなし嵐のあはれわく也

吹松吹草風雖伴 秋思最憐催怨聲

五百六十七番

左 勝

保 季 朝 臣

星合のまたれし空と思ふよりまかきの萩に風かはるなり

右

兼 宗 卿

いといしく露のしら玉をきそへて萩のにしきのあたならぬ哉

野花黃錦何強翫 詞草大都直自靡

五百六十八番

左 勝

良 平

夕されは玉ちる野への女郎花枕さためぬ秋風そふく

右

通 光 卿

なかむへき秋のなかはのかけまでも思しらする夕つくよ哉

風思縱非華麗體 以名可賞女郎花

五百六十九番

左 持

具 親

大かたのこのてる月の影までも宿るならひに秋はきにけり

右 釋 阿

七夕のあかぬ別の袖よりや秋は露けきころとなるらん

蟬宛影將^{名勝イ}半女涙 秋初景氣互蕭條

五百七十番

左 顯 昭

さしてなと年に一夜をわたしけんおもへばつらしかさゝきの橋

右 勝 俊 成 卿 女

むくらふ宿ともわかす秋はきて心つくしに月そもりくる

綠蕪簷破月空漏 臥月誰尋鳥鵲橋

五百七十一番

左 持 女 房

七夕の雲の袂やぬれぬらん明ねとつくる秋風のこゑ

右 越 前

七夕の涙やそへてかへすらん我衣手もけきはつゆけき

想像曉更半女別 兩方潮濕淚相并

五百七十二番

左 大 臣

旅人のいるのいおけな手枕にむすひかはせるをみなへしかな

右 勝 定 家 朝 臣

松の葉のいづともわかぬ陰にしもいかなる色とかはる秋風

女郎花冷露無^レ艶 君子松高風有^レ情

五百七十三番

左 持 前 權 僧 正

秋のさかりくらぬ空や久かたの月の桂のみちなるらん

右 通 具 朝 臣

秋はきていくかもあらぬ空にしも心つくしの星合のかけ

只看月桂星輪影 秋意何強有^二淺深^一

五百七十四番

左 公 繼 卿

七夕の枕のちりはばらふとも猶むつことはつきしとそおもふ

右 勝 家 隆 朝 臣

秋風にもとあらの小菰露おちて山かけさむみ鹿ぞ鳴なる

山脚人家宜^二賞^一 鹿鳴花下鹿鳴音

五百七十五番

左 勝 公 經 卿

わひつゝは玉かと問し白露のなきまとはせるしのゝめの空

右 雅 經

なとつれて身にしむ風の吹しよりむすはぬ袖に萩^レ上露

曉露如^レ珠仍^二舊點^一 昔時感^二恩與^一今同

五百七十六番

左 季 能 卿

草のはに露こぼるとや思ふらん風こそしられ暮かたの空

右 勝 寂 蓮

女郎花なひきもはてぬ秋風に心よはきは露の下折

猿猴豈^レ襲^二周公服^一 俗骨草摸^二擅俗風^一

五百七十七番

左 持 宮 内 卿

宮城野やのほらの床をかり衣風にまかする萩か花すり

右 家 長

あせつたふ鳥羽田の面の夕まくれわくるいなはにうつら鳴也

若論ニ野宿鹿鳴聲 盍比ニ田嘯鵲喉聲

五百七十八番

右 持 讃 岐

秋はまたあさかの野らの朝露にさしもしほるゝ旅衣かな

右 三 宮

七夕のあかぬ別のなみたゆへもみちのはしや色まさるらん

逆旅路將ニ露迹路 露光涙色欲ニ相爭

五百七十九番

左 小 侍 從

をきわふる露にやしほる七夕のかへる朝のあまの羽衣

右 勝 内 大 臣

こしちまで秋風吹とたれ告て都にけさははつかりのこゑ

萬里秋風胡地報 望ニ雲先感遠鳴來

五百八十番

左 隆 信 朝 臣

秋といへは心も色に成ぬへしおはなにましりさく花をみて

右 勝 忠 良 卿

雲井より鴈の泪やなくら山ふもとの野への萩の上の露

詞花縱伴ニ野花興 鴈淚相加添ニ色哉

五百八十一番

左 勝 有 家 朝 臣

ふちはかま一もとゆへの色よりも香そむつまじきのへの秋風

右 兼 宗 卿

花の名はたれかつけにし女郎花心ありけるむかしなりけり

人心定染ニ紫闌色 況有ニ秋風帝ニ異香

左 保 季 朝 臣

袖に又いつより露のなれぬらん風こそ秋のはしめと思ふに

右 勝 通 光 卿

思ひこしなめはこれが秋萩の花にほのめく野への夕くれ

不レ憶草常風露趣 猶宜ニ涕暮草花粧

五百八十三番

左 真 平

むらさきの色にそ匂ふふちはかましらぬ主さへむつまじき哉

右 勝 釋 阿

夕月夜このまもりくるよびのまそ心つくしのはしめ成ける

微光初冷林間月 秋感且知向後添

五百八十四番

左 持 具 親

心なき草の秋も花すゝき露をきあへぬ秋は來にけり

右 俊 成 卿 女

秋風に外山の鹿は聲たてゝ露ふきむすふなのゝあさちふ

草露無レ情還有レ意 何准麋鹿與相兼

五百八十五番

左 顯 昭

秋風に絶まおしと思ふらん錦をさらすまの萩はら

右勝

丹

後

七夕のあはれなえまなかへしは此世にみする月日成けり

詞中有錦而非錦 猶異文君機上功

五百八十六番

左勝

女

房

覆後

日影さす岡への松の秋風に夕暮かけて鹿を鳴なる

右

定

家

朝

臣

露をおもみ人は待えぬ庭の面に風こそばらへもとあらの萩

若比西施顔色美 君詞妖艶尚無窮

五百八十七番

左

左

大

臣

さなしかのなきそめしより宮城の萩の下露をかね目そなき

右勝

通

具

朝

臣

七夕のあかね涙になきそめてこれより秋はあかつきのつゆ

風情高下以之識 禽獸豈草星漢光

五百八十八番

左勝

前

權

僧

正

ころもうしはつかりかねの玉札にかきあへぬものは涙なりけり

右

家

隆

朝

臣

こととはにかばらぬ風も萩のはにそよく音より秋の夕暮

秋雁懸書南窓處 宜哉華洛斷人腸

五百八十九番

左

公

繼

卿

宿ちかき野への小萩や秋霧のたちのこしたる錦なるらん

右勝

雅

經

さきにはふ千種の花の末葉よりうすきりなひく野への夕風

哉錦秋花皆舊事 離風夕霧是新詞

五百九十番

左

公

經

卿

たれとたにいはたの小野のふちはかまおほめく暮に匂ふ袖哉

右勝

寂

蓮

あれにけり雛を野らとみし程によときか露も軒の玉水

蓬蒿露滴如懷舊 誠識佳名夢後貽

五百九十一番

左

季

能

卿

たれゆへに野と成はてふか草の里のお花にうつら鳴らん

右勝

家

長

さても又露をくことのかはらぬは袖にうつれる萩か花すり

秋鶉簪竹宜雌伏 深草故郷眼不驚

五百九十二番

左勝

宮

内

卿

我のみと聲をなたてそ嶺の松心ばかりは萩のうは風

右

三

宮

秋はきのうは下葉の露けさや鹿と蟲との涙なるらん

松與秋聲風互好 鹿將蟲淚露無情

五百九十三番

左持

讀

岐

さびしさに秋の哀をそへてけりあれたる宿の萩の上風
右 内 大 臣

秋きぬと萩のうはかせうたかひて萩の下露心をかゝるな
可_レ塞風露少_二秋興_一 何況右方難_二響應_一

五百九十四番

左 勝 小 侍 從

たいならす見ゆるまかきのしのすいさかなる露の契成けん
右 忠 良 卿

おのへよりかよふ嵐にたくひきて松の梢にさなしかのこゑ
松上鹿聲雖_二事舊_一 若論_二叢薄_一尙爲_二増_一

五百九十五番

左 持 降 信 朝 臣

しら露のなくとと野への花をみてねとはしのはん萩の上風
右 兼 宗 卿

朝夕にむかひの野への女郎花みるともあかし花のすかたは
竊竊望將_二朝暮望_一 野花色々各非_二珍_一

五百九十六番

左 持 有 家 朝 臣

袖のうへにたれかはかゝる露はなく我身ひとつの秋の夕暮
右 通 光 卿

女郎花あさらを草のまくらにてなのか野原をたひねとや思ふ
満衣秋露爲_二誰涙_一 可_レ比_二女郎似_一族人_一

五百九十七番

左 持 保 季 朝 臣

風ふけは雲はのこらぬ山のはに月をよこさるはつ雁のこゑ
右 釋 阿

夏の野は草のしけみのさゆりばも秋は露にやしほればつらん
月前新雁露中草 視聽共知觸_二物幽_一

五百九十八番

左 眞 平

これや此夜るなく蟲の涙とて玉をつらぬくまのいとはき
右 俊 成 卿 女

いかなりし夜はのあはれに月も又秋にひかりをちきりそめけん
眞夜佳期爭_二不_一賞 昔誰計會月將_二秋_一

五百九十九番

左 持 具 親

しのふれと色にやいつるをみなへし物やおもふと露のなくまで
右 丹 後

たのれのみ思ひみたるゝかるかやの世を秋きぬと風やつけいん
秋風秋露滿_二秋草_一 溫_レ故新詞彼是宜

六百番

左 持 顯 昭

そむくとて恨もはてし女郎花又吹かへすかせもこそあれ
右 越 前

たれか又とめて折つる秋霧の立かくすらん萩のにしきを
六百番歌其興少 恨猶左右互凡卑

千五百番歌合卷第九 秋二 御判

六百一番

左

女

房

このゆふへ風吹たちの白露にあらそふ萩をあすやかともみん

右勝

通具朝臣

夕まくれ待人はこぬ故郷のもとあらの小萩風そとふなる

をのゝたてまつれる百首をつかひて甘巻の歌合として

人々判申内に二巻よしあしなため申へきにて侍に愚意

のおよふ所勝負ばかりはつくへしとはいへとも難にをき

てはいかに申へしとも覺侍らす左右のふもに一文字計を

付んは無下に念なきさまなるへしよりて判の詞の所にか

たの様に廿一字をつらねて其句の上ことに勝負の字計を

定申へき也

みせはやな君を待もの野への露に枯ましくおしく散る萩哉

六百二番

左勝

左

大

臣

きり／＼草葉にあらぬ我が床の露を尋ていかで鳴らん

右

家隆朝臣

萩はなを心つくしの木の間より月にもりくる棹鹿の聲

とにかくに心そとまるはにあらでかつなく露のちりま

かふ萩

六百三番

左勝

前權僧正

鳴鹿のこゑにめさめて忍ふ哉みはてぬ夢の秋の思ひな

右

雅

經

尋てもたれかいとはん三輪の山きりのまかきに杉たてるかと

忍ふ夢かつ／＼覺ぬ空の月よわたる山の木々の秋風

六百四番

左

公繼卿

武藏野にこれもむつまじ女郎花苦紫のゆへなられとも

右勝

寂

速

野へまでも尋て聞し蟲の音のあさちかそこにうらめしき哉

むくらはひしけきまくすのはの下にやすから鳴かまのい

めの蟲

六百五番

左

公經卿

きり／＼す鳴てやすから明す也まのうら萩色かはる比

右勝

家長

秋風に思ひみたるいかやふきのこやのれ覺になしか鳴也

なく露のしのにみたるいかるかやのかつみるからに散か

涙の

六百六番

左持

季能卿

いささらば妻に結ばん女郎花旅れの庵の秋のれ覺に

右

三宮

ちりぬればかけもとまらず成にけり野澤の水の萩が花すり
おれかへりなひくすその下萩のほの上てらす遠山の月
六百七番

左勝

宮内卿

物やおもふ秋にや空のなりそむるかはらぬ床にね覺をそする

右

内大臣

七夕のたへぬおもひやいかならん雲の衣をこよひかりかれ

閑の上にさしも時雨のめくりきてよはのさ衣しほりわひ

つゝ

六百八番

左持

讃岐

花すいき秋のかたみになる時は聲もほに出て鹿も鳴也

右

忠良卿

遠山田いなほのかに腦なきて雲のたえまに三月月のかけ

遠山田打そよくなる時しもあれ恨もあへずかふ鹿のね

六百九番

左

小侍從

いかにせむ風にまたかふかるかやの思ひさたむる方もなき世を

右勝

兼宗卿

分きつるをさゝか原の朝露に袂ひまなきたひ衣かな

見渡せばきつゝなれにし野への小篠かたみと袖に散かふ

ら露

六百十番

左

隆信朝臣

夕暮は野原のけしきたいならて露吹かへすくすのうら風
右勝

通光卿

たれとなくまれくお花のひとつ野に心をさけるくすのうら風

よの常にきいもなれにし風の音も身にしむ暮のきりゝ

す哉

六百十一番

左持

有家朝臣

みよし野のたのむともなき玉つさないく秋かけて鷹のきぬらん

右

釋阿

朝露にはかなくうつす月草も秋のかたみの色と成らん

時そとや森の秋風散にも夜寒に成ぬしのゝめの空

六百十二番

左

保季朝臣

浪のうへにいさよふ月を松島やをしまかいその秋の初風

右勝

俊成卿

風ふけばしのにみたるゝかるかやも夕はわきて露こほれけり

月すめは夢やはむすふ野への庵かりの涙にちりまかひつ

つ

六百十三番

左持

良平

さひしさの心のかきり吹風に鹿の音すさむ野への夕暮

右

丹後

から衣すそ野をすくる秋風にいかに萩のまつしほる覽

千々に思外山の月の山おろしにせばき袂にむすふ白露

六百十四番

左勝

具

親

たえ／＼に月より過る村雲の雨うちすさむ萩のうは風

右

越

前

秋はきの露に秋を分なしてほさんもおしき花のぬれ色

秋の月めくりてすめる野への露かさなる玉を千里にそし

く

六百十五番

左

顯

昭

ぬしまらぬ若むらさきの蘭たかゆかりとて風のたつらん

右勝

定

家朝臣

萩はらやうへてくやしき秋風はふくなすきみにたれかあかさ

なきまふ木ことの露を山風のかつふくからにちる木葉

哉

六百十六番

左

女

房

女郎花枝もとをいになく露を待とるかぜに蟲うらむ也

右勝

家

隆朝臣

雲消る空をかきりとすむ月の光もなるゝ秋の袖かな

空きよくてる月影の山里にさしてもなれぬ柴あめるかと

六百十七番

左勝

左

大

臣

とこよにていつれの秋か月はみし都わすれぬ初かりの聲

右

雅

經

夕つくよやとる山田の露のうへにかりれあらそふ霜葉のかけ

六百十八番

左勝

前

權僧

正

遠山をこえ行鴈の夜はの聲夜寒に成ぬしはのかり庵

右勝

寂

蓮

こ萩はらぬ夜の露やふかゝ覽獨ある人の秋の柄かは

右

寂

蓮

たれか又千々におもひをくたきても秋のこゝろに秋の夕暮

こしちより初鴈金そきこゆなるよるとな鳴そしのゝめの

月

六百十九番

左勝

公

繼

卿

をみなへし秋ばきましり開ぬればまからむ鹿や心わくらん

右

家

長

なきすてゝ鹿はつれなき山下風にすこおとろくひたの音哉

岡のへやなひくかたのゝまの薄ほむけの露も時を待ける

六百廿番

左

公

經

卿

雲にまかふ花といはしなかわれは月もふしのゝ山路成けり

右勝

三

宮

新後進
行人もとまらぬ野への花薄まねきかれてや露こほるらん

住位ぬすそのゝ庵の霧の中に夜ふかき月のしのゝめの影

六百廿一番

左勝

季

能

卿

わきもこかずそわの田ぬに風過て衣手寒し初かりの聲

右

内 大 臣

あさちはらたへ忍ふへき夕かは露ふきはらふ風のけしきに

遠山田うす霧かくれ飛鷹をうちなかむれば風を身にしむ

六百廿二番

左 持

宮 内 卿

見る人の心つくせと初秋の空よりかはる夕月夜かな

右

忠 良 卿

ふちはかま嵐になひく末葉より紫くたく野への夕つゆ

ひとりたれ外山の月をまのひかに木々の木葉に風恨らん

六百廿三番

左 勝

讀 岐

とれはけぬよし枝ながら宮城の、萩に玉ある秋の夕露

右

兼 宗 卿

尋てもたれかはとはん鵜なく野へにあはればふかくさの里

都人きてもとへかし松風のけはしき里のよはのけしきを

六百廿四番

左 持

小 侍 從

たのめつる人まつよゐに哀又心さはかす萩のうは風

右

通 光 卿

わりなしなをかやか下のみたれ葉に露吹むすふ秋の夕かせ

なく露に靡くをかやの萎れつゝほすまふしとはいこ

たへよ

六百廿五番

左

隆 信 朝 臣

人はこすさひしかれとや萩の葉のそよくばかりの秋の山さと

浪にあらふから錦ともみゆる哉野島かさきの秋萩の花

にほの海やしかのうらわに霧はれてかけくもりなき月の

影哉

六百廿六番

左 有 家 朝 臣

待出て後さへつくるころかな雲にいさふ山のはの月

右 勝 俊 成 卿 女

忍へき人たにたへぬ秋のよな野はらの蟲の露に鳴らん

昔たれまのに露なく野へにしもかゝる秋とは契をきけん

六百廿七番

左 勝 保 季 朝 臣

大かたの月には風もつらからす宿かる露のあるかあたなる

右 丹 後

さま／＼に花のひもとく秋ののにいかなる露のむすほゝる覽

片敷のせはき萩をのへとてやかくしも露のちりまかふら

ん

六百廿八番

左 勝 良 平

秋さてはいくかになりぬ夕月夜ふけ行空に影殘るまで

右 越 前

吹まふ嵐のつてにさそはれて松にみたるゝ棹鹿のこゑ

柴の戸やかまふ嵐の庭の松にけにもさびしきよほの聲か

な

六百廿九番

左

具

親

いとひえて雲なき空となるまゝにいや遠きかる山のはの月

右勝

定

家

朝

臣

棹鹿のなく川の隈つくしてもいかにこゝろに秋の夕くれ

石ま行山下水のうす水けにはこほらてすめる月影

六百卅番

左持

顯

昭

友をなみわかかりねこそさひしけれ野にたつ鹿は妻よはふ也

右

通

具

朝

臣

我もしるおもひし物をもる共に音にたてつへき夕まくれ哉

みるからに涙を涼しきにはの海や暮行空のまかのうらか

せ

六百卅一番

左

女

房

分ゆけはしけくも露のみゆる哉月吹やとせ野への秋かせ

右勝

雅

經

よしさらば袖にも影をやとしてむ月待宵の山のまの露

峯に吹水々の嵐に空晴てよわたる月のきよき比哉

六百卅二番

左

大

臣

物おもへとするわさからし木間よりおちたる月にさなしかの聲

右勝

寂

蓮

露さむき聲になたてを萎たれかはしらぬ草のはらとは

ふらさりきかゝる露なく野への庵に横の戸たゞくげさの

木からし

六百卅三番

左持

前

權

僧

正

ふちはかま花にぬしとふ夕暮にこたふる風や萩の上そも

右

家

長

野へみれば朝夕露のおき原やをきあへぬ程に秋風そ吹

人はこて年ふる秋の柴の庵に桐の落葉を風を問ける

六百卅四番

左持

公

繼

卿

むかしたれ袂ににせてしのひけんお花か露をむすふ秋かせ

右

三

宮

風わたる秋の上葉にやとりきて影うちそよく秋のよの月

手にむすふいしゐの水も人とはて年へにけりなまかの山

かせ

六百卅五番

左持

公

經

卿

すめはすみくもればくもる涙かな物おもへとて月にばあらねと

右

内

大

臣

かへになく秋の末葉のきりくすいつまで草にすまんとすらん

となへ川うす霧なびく瀬々の浪にむれたる千鳥風に行也

六百卅六番

左

季

能

卿

きりまよふ深山のおくのすまゐまでやればやらるゝ我心哉

右勝

忠 冥 卿

眞蕩はふまのいはまの夕風に恨てかへるおきつしら浪

なむれは峯の嵐に空晴て影くもりなき月の比哉

六百卅七番

左勝

宮 内 卿

つれより哀そふかき霧の中に鹿の立なく峯の夕暮

右

兼 宗 卿

山里の秋の哀の身にしむは鹿の音そふる萩の夕風

みつしはやさしうつ浪の松かれにけはしきまでの夜はの

浦風

六百卅八番

左勝

讃 岐

新拾遺

なみなへしよかれぬ露をなきながらあたなる風に何なひくらん

右

通 光 卿

さよふけてあはれときげは袖の上に露をつたふる萩の上かせ

みわの里きてもとへかしはるゝと待もうらめしくすの

秋風

六百卅九番

左

小 侍 從

はるかにそおのへの鹿はなくなれと涙は袖の物とこそみれ

右勝

釋 阿

名こそあらめみるもなつかし女郎花枝さへ花の色に匂ひて

庭の萩のはむげの風に日數へてよなくやとるしのいめ

の月

六百四十番

左持

隆 信 朝 臣

雲はらふ風に哀を先立て出るもしるき山のはの月

右

俊 成 卿 女

引つらねかへりし空に音信て又袖ぬらす秋のかりかれ

おきつなみ浪吹上の颯風にてらすともなき磯のいさり火

六百四十一番

左持

有 家 朝 臣

すゑの松まつふけ行空晴て浪よりいつる山のはの月

右

丹 後

聲たてゝふかはかりこそなけれ共袖にそしるき秋の夕暮

時は秋物おもへとや庭の萩よかれぬ露をしたふ秋かせ

六百四十二番

左勝

保 季 朝 臣

なかめ侘ぬ心を秋にとめしとて思ひすつれとさらしなの月

右

越 前

秋風の身にしむ夜はのね覺こそ物の哀の限なりけれ

みわたせば木々の木葉も晴ぬへし松にのこりてくるゝ秋か

せ

六百四十三番

左持

良 平

ふのすゝき上葉の露に宿かりて風にみたるゝ秋のよの月

右

定 家 朝 臣

秋さぬと袖にまらるゝ夕露にやかて木間の月そやとれる

みる袖のなみた事とひやとる月さひしくもあるか柴あめ
る垣

六百四十四番

左持

具

親

秋といへばこれはならひよ夕まくれ袖に涙と何おもひけん

右

通

具

朝

臣

下萩の露きたわふる蟲の音にうたてさひしき風の音哉

人はこて年ふるさとを鹿そとふ木ことに秋の風はふきつ

つ

六百四十五番

左持

顯

昭

小萩原玉しく色なみぬ人や露をあたる物といひけん

右

家

隆

朝

臣

さわげさは秋のならひの夜はの月思へとえこそねられさりけれ

瀬々くたす宇治のさと人舟とめて浪にすむ月しばしかも

みよ

六百四十六番

左

女

房

あはれむかしいかなる野への草葉よりかゝる秋風吹はしめけん

右勝

寂

蓮

新修

おもひあまる心の程もきこゆ也しのふの山のさなしかの聲

よはの月に鹿の立なくみ山より霧を分つるはつかりのこ

あ

六百四十七番

左勝

左

大

臣

故郷に我まつ風をあるしにて月に出こしさらしなの山

右

家

長

秋にそむ心ちたへすみる月のほのめく影にさなしかの聲

なのつから柴の戸たゝく風の音も松にそかふふくるゝ夜

毎に

六百四十八番

左持

前

權

僧

正

あはれにもおなしみとりの春の草の心々に色かはりゆく

右

三

宮

蟲の音も千種の花も野へなから鹿をのみまつ庭のあさちふ

小山田になるこひくてふしつのおはほむけの風を友と聞

らし

六百四十九番

左持

公

繼

卿

花すいきまれきとめてや思ふらん道行くれの野へのたひれな

右

内

大

臣

月影をほとなき袖にせきかれて秋のあはれをもらす涙か

なにとなくをきまよふ露そひるまなき外山にむすふ柴の

假庵

六百五十番

左

公

經

卿

さえわたる光に霜の色そへて野原の蟲も月に鳴なり

右 勝

忠 夏 卿

千々におもふ心は月にふげにけり我身ひとつの秋となかめて
み山へやきりの籬の萩かうへにかことかましき露の色か
な

六百五十一番

左 持

季 能 卿

故郷の庭をばをのか野へにしてさすかにたれをまつ虫の聲

右

兼 宗 卿

山田もるすこかすまゐのいかならんいはの風の秋の夕暮

時しもあれ物おもへとや庭の萩に夜すからかふ鹿の聲

哉

六百五十二番

左 持

宮 内 卿

あさちはら下葉かたしく袖のうへに露をさかふる野への秋風

右

通 光 卿

秋はたゝ萩の葉すくる風の音に夜ふかく出る山のはの月

き々の入あひの鐘に日はくれて外山の月に鹿を鳴なる

六百五十三番

左

讀 岐

一時の花とみれ共女郎花秋のちきりを世々にむすはん

右 勝

釋 阿

むらさきの色をばのこせ藤はかまふは嵐にくたけちるとも

月きよみゆらのみなとの濱千鳥夜ふかき空の霜になく也

六百五十四番

左 持

小 侍 從

はかなきをとにもみんとや思ふらんあたなる露に宿るいなつま

右

俊 成 卿 女

よしさらはかならず人にあはすとも今夜の月にねなん物かは

友さそひ浦わのきりに飛かりばうはの空にかへる玉つ

さ

六百五十五番

左

隆 信 朝 臣

秋をへてなかめぬよはもなき物を猶めつらしくすめる月哉

右 勝

丹 後

野へならてしからむ鹿はなげれとも露になれふす宿の秋はき

下にのみかふか袖に野への露かつくやかてちる涙哉

六百五十六番

左 勝

有 家 朝 臣

秋きては宇治のはしもりなれも又夜わたる月を哀とやおもふ

右

越 前

おもひこし秋のあはれを数々にかきつられたるかりの玉つき

初時雨しくれてわたる山風にさびしきおもふ鹿のこゑ哉

六百五十七番

左 持

保 季 朝 臣

浦風にふほちのすゑも霧はれて月に成行ふたの浮島

右

定 家 朝 臣

松虫の聲をとひ行秋の野に露尋ける月のかげかな

みつ鹽になみ立くらし夜もすから岸の松かえ風さはく也

六百五十八番

左勝

夏平

野へみればくさの花はほのかにてなく白露に有明の月

右

通具朝臣

雲はるゝ空もひとつに清見かた浪にかさなる秋のこの月

松か枝にけはしくあたるよはの嵐身にしむ色を聞き忍び

つゝ

六百五十九番

左

具親

相坂のせきの岩かと引つれて影をならふるもち月の駒

右勝

家隆朝臣

秋といへば濱松かえのたむけ草わりなき露にのつとる月哉

水の面にきよくもよとれ山のはなさつかにふるふかの月

かけ

六百六十番

左

顯昭

さらぬたに秋のおはれにたへぬ身を夕霧かくれ鶉なく也

右勝

雅經

まくすはら露に光をさしそへて玉まくものは秋のこの月

横の戸をくもりもやらず過ぬ也よわたる月に時雨かぬつ

つ

六百六十一番

左

女房

野へにをける露をばつゆとなかめきぬ花なる玉か鷹の涙か

右勝

家長

山里はさやけき月も鹿の音も峯の嵐の心なりけり

峯の月清き光にかりなきてつはきにかいる風そさびしき

六百六十二番

左勝

左大臣

秋なればとてこそぬらす袖の上を物やおもふと月はとひけり

右

三宮

秋のよの月吹かせに霧暗て空にそすめる棹鹿のこゑ

見むる山きほふ木葉にまかひつゝけにふる雨も夜はふら

れす

六百六十三番

左勝

前權僧正

故郷の虫のなみたやなきつらん庭もまかきも野への白露

右

内大臣

いとぞめてなこりの空もわりなきに秋はさながら有明の月

月をまつ夕より先晴れ初てよすから清きふのゝめの空

六百六十四番

左

公卿

鹿のねはおろす嵐にたくひけりふちとの野へに妻や立らん

右勝

忠良卿

つもりけるいくよの雪になかむれば横のはるくくてらす月影

松風も岸うつ涙ものとかにて影をや月の千里にはしく

六百六十五番

左持

公經卿

ふかきよの心のうちをあらはして霧まの月にをしか鳴也

右

兼 宗 卿

夕暮は萩の上葉に風さえて花にやとかる虫のこゑ

千々におもふ時とは月のやとれともせはくや袖は武藏の

霧

六百六十六番

左 勝

季 能 卿

草葉にもあらぬ袖さへまほれけり露はさためぬ置所かな

右

通 光 卿

初かりはかへりし雲の跡わけて又都にもおもむちけり

雲路より澤へなたのむ初かりのよはの涙に時雨おつなり

六百六十七番

左 勝

宮 内 卿

谷の戸はまた明やらぬ霧のうちに出る朝日は影たけにけり

右

釋 阿

花も露もいかに心をくたげとて秋は野分の吹はしめけん

秋やまのさひしき庵に人はこて四方の嵐を鹿ぞわふなる

六百六十八番

左 持

讃 岐

君か代の秋の空までなめける契うれしき月のかけかな

右

俊 成 卿 女

行めくりなれぬる空の秋の月さてもあかぬ光そひけり

みるからに涙そくもる宿の月さひしと思ふはの扉を

六百六十九番

左 持 小 侍 從

朝ことの露にはなにのなくならん我袖のみそ其れとしらるい

右

丹 後

うき世とばおもふ物から鈴蟲のふりすてかたき身をいかにせん

おさつかせ浪や吹らんまかのうらにてる月影の磯にさや

けき

六百七十番

左 持

隆 信 卿 臣

板まもる月は都にかはられと鹿なく野へに秋風ぞ吹

右

越 前

さま／＼に秋のあはれはつくせとも萩ふく風にまぐ物はなし

獨のみとしふる軒の忍ふ草さてとふものは風の音のみ

六百七十一番

左 持

有 家 卿 臣

すまの浦にわふとこたへし跡もなしな／＼月の影はとへとも

右

定 家 朝 臣

おもひいれぬ人の過行野山にも秋は秋なる月やすむらん

水無瀬川なかむる空のよはの月清き早瀬にかけやとしけ

り

六百七十二番

左 持

保 季 朝 臣

長夜の哀をいかにみたやもりいなはの露に月をやとして

右

通 具 朝 臣

高砂のおのへの秋よいつとても松をはらはぬ風なられ共

千たひうつとちのさとのさよ衣族れの夢にむすほいれ

つゝ

六百七十三番

左

眞

平

おもひやるむかしの秋の哀きて今夜の空にみずる月影

右勝

家

隆

朝

臣

ふかの海やにほてる浪をみわたせば月にいさよふあまの釣舟

影きよき月松かえに風すきて汀に浪をきかぬよそなき

六百七十四番

左

具

親

くもるといふ思ひはかりそさらしなやをほすて山も月は入けり

右勝

雅

經

新千載

かつらきや高間の峯に雲はれてあくる侘とき有明の月

たれか又かゝるみ山の旗の葉に影もりかぬる月をみるら

ん

六百七十五番

左持

顯

昭

都へはなと出やらぬあふさかの關に入ぬるも月月の駒

右

寂

蓮

涙をばよその袂になしはてゝ聲をは鹿のなのかものとは

なかなはらなひく夕の柴のいほにてらすともなき稻妻の

かけ

千五百番歌合卷第十

秋三 御判折句歌

六百七十六番

左

女

房

續千載

物やおもふ雲のはたての夕暮に天津空なる初かりのこゑ

右勝

三

宮

初かりはこし地の雲を分過て都のきりにいまそ鳴なる

此ころは鹿こそばなげ山里のさひしくむすふ柴の庵に

六百七十七番

左勝

左

大

臣

虫のねはならの落葉にうつもれて霧のまかきに村雨そふる

右

丙

大

臣

あら玉かなにそと問へば女郎花露のきえつゝしほれふしぬる

むかし思ふふかの都の山風に里あれぬとや鹿もなくらん

六百七十八番

左勝

前

權

僧

正

わたつ海の秋なき浪の花に鴛鴦なく物ばよはの月か

右

忠

良

卿

明石かた浦かせさひし月影の浪にきえ行うす霧の空

下葉ふく森の秋風かせさきて月すむ露にかよふそて哉

六百七十九番

左勝

公

繼

卿

まのゝめの曉露やそめつらんよのまにかはる萩の上のいる

右 兼 宗 卿

あまのはら空行月をいかなれば我が物かほにみする山のは

よさの浦や鹽風松をほらふ也清き月夜のはるかなるかせ

六百八十番

左 勝 公 紅 卿

長岡や田つらの庵のあれよくにね覺いさなふ鳴のはれかき

右 通 光 卿

この比はおのへの鹿の聲によりふもの里にね覺かちなる

ふかの海にきつゝもとひこ山風にさひしくもあるか鹿の

初聲

六百八十一番

左 季 能 卿

身をたくく心の色は夕ま暮千草の花にあらはれにけり

右 勝 釋 阿

ふめなきていまやとおもふ秋山のよもきかもとに松虫の鳴

武藏野や下葉露けき萩かえによな〜秋のしかや鳴らん

六百八十二番

左 宮 内 卿

雲かゝるいこ^{かたけい}またかれに月おちて三輪のひはらにましら鳴也

右 勝 俊 成 卿 女

さらてたになくさむ物が長き夜に月より外の獨れ覺は

れもやらすさそな深山にめさめつゝよわたる月をふのふ

秋哉

六百八十三番

左 勝 護 岐

なかめつる有明の月はかたふきて山より出るさをしかのこふ

右 丹 後

秋風にむら雲はるゝ月みれば心の中も涼しかりけり

ふのゝめやかり田の面に風すきて月にむれたる鷹のこふ

哉

六百八十四番

左 持 小 侍 從

霧ふかき難波の浦のまかり舟いとあしまをよせやわつらふ

左 越 前

我さへに涙をおつる秋かせにふのひもあへぬ虫の聲々

契あれや常世のかりの山を分て都の空にむれてきにけり

六百八十五番

左 隆 信 朝 臣

きてみればさひしかるへき家ぬかは月も住けり秋の山里

右 勝 定 家 朝 臣

高砂の尾上の鹿の聲たてし風よりかはる月の影哉

岡のへや軒もる月のへたて哉よわたる雲に時雨すきつゝ

六百八十六番

左 勝 有 家 朝 臣

ふのすたれ秋はかけても槇の戸をさいて有明の月をみる哉

右 通 具 朝 臣

鷹もこはまてと契をすかはらや伏見の床に衣うつなり

松風に霧はれぬらし山のへや影さへわたる月そやとれる
六百八十七番

左 保季朝臣

あけぬるかまのい浦かせ音信てまねくお花に鳴のはれかき

右 勝 家隆朝臣

泊瀬川山ふる河のへも霧はれて月にそたてゐる二もとの杉

すまのせききくや關守はる／＼とかふ千鳥の月になく

也

六百八十八番

左 持 良 平

うき身には月をみるたにかひそなき秋の心を袖にのこして

右 雅 經

有明も秋そ名残はおほはらや月をなしほの山のはの空

ななのれのみなるおの松の鹽風にまつみにかゝる浪の音が

な

六百八十九番

左 具 經

おもひかつひなぬあれまくもおしすかはらや伏見のさとの秋せの比

右 勝 寂 蓮

初かりのきこゆる空をなかめても心にかはる春のあけほの

松か枝にけさや嵐のよばるらんさすかに聲の遠さかり行

六百九十番

左 勝 顯 昭

むすひをく霜とはいさや岩代のはま松かえにすめる月かな

右 家 長

都おもふ月もあかしの浪の上によるのこゝるののとけからすも
なむれはみるめの浦の松の風けはしくもあるよほの聲

哉

六百九十一番

左 女 房

秋の田のまのにをしなみ吹風に月もてみかく露のふら玉

右 勝 内 大 臣

露ふかき道のさゝ原分きてもかゝる秋をあはれとはみよ

み山へや木々の木のはそ宿もとふさびしき嶺に時雨過つ

つ

六百九十二番

左 勝 大 臣

かり人の道をそおもふ山うまなうのこはたの里の秋の夕きり

右 忠 良 卿

天つ空よもの雲霧消はてゝ嵐にのこる秋のよの月

この比はほしのもみちの立枝たによるをく露も霜むすふ

ふし

六百九十三番

左 勝 前 權 僧 正

霧はれぬくらほし山の秋風に音にや月をきゝわたるらん

右 兼 宗 卿

心あらん人とも見ばやと思よりいはぬにおしき夜はの月哉

なくら山もみち吹おろし吹風の松につれなきくれかたの

ころ

六百九十四番

左持

公 繼 卿

行人のもすそもまゐるし秋といへばあさなく露のふか草の里

右 通 光 卿

あさちふや吹くる風をたよりにて光をちらす露の月つぎかけ

新は遠入之 岡のへやならの落葉に時雨ふりほのく出るを山の月

六百九十五番

左持 公 經 卿

毛 秋をへていくよもまらぬ故郷の月はあるしにすみかはりつゝ

右 釋 阿

新古今 あれわたる秋の庭こそ哀なれまして消なん露の夕くれ

身にしめてなかわる比の宿にしもさあやにくの鹿のこ

ふ哉

六百九十六番

左 季 能 卿

いく秋のためしなひく諸人の行あふさかのもち月の駒

右勝 俊 成 卿 女

くすのはふまかきの霧に鳴鹿も恨かほなる風の音哉

松にふく風こそあられ霧の中にかすみし春の月の面かけ

六百九十七番

左勝 宮 内 卿

わすれずは又こん秋の空まてと雲にたのむるあり明の月

右 丹 後

秋のよの月もりあかす柴の戸をこと問ふものは嶺の松かせ

くすのはに物うらめしく風過て月はあさちに影やとしけ

り 左勝 讃 岐

六百九十八番

秋の月いかに待出てなかわれはさやけき影のまつくもるらん

右 越 前

ひる澤の池しもいかに昔より月みる夜はのさかと成らん

いなほ山げはしくもあらぬ松風のくもらぬ月の影はらふ

なり 小 侍 從

六百九十九番

つれよりも月に心のすむ夜哉かくてや人の雲にいりけん

右勝 定 家 朝 臣

新古今 心のみもろこしやてもうかれつゝ夢ちに遠き月の比かな

草枕もりくる月にうらむなりけさたつ山のすゑの白雲

七百番

左 隆 信 朝 臣

さのみやは月にふすゐのいなやすみれられぬ物を秋のよなく

右勝 通 具 朝 臣

影やとす露のよすかの秋くれば月ぞすみけるなのゝしの原

夜はの秋すむ月影のかけきよしよさのうらはのしのゝめ

の空 七百一番

七百一番

左

有家朝臣

秋のよは月見よとてやなか月の有明にさへなりける哉

右勝

家隆朝臣

わすれすや昔みかきの秋の月猶ふるさくにめぐりあふとは

みるからに影そさえ行さの庵よとこの月の霜のさむし
る

七百二番

左持

保季朝臣

鳴鹿の聲より落る夕露に萩の下葉のところせきまで

右

雅

經

釋古今
とも

しぜしは山まげ山のひきて秋にはたへぬさをしかのこゑ

大かたのなかむる宿のまはた萩もほに出つゝそ時を待ける

七百三番

左勝

夏

平

鴈金にいさ事とはんこしちより都にむかふたひの心を

右

寂

蓮

空さえてすむへき月を山のほに星の光のかれてみすらん

此ころは鹿も月にや契りけんよかれぬ露のまのいの空

七百四番

左勝

具

親

人はいさくろしき物としりぬれはよそにはきかし松虫の聲

右

家

長

秋の夜は虫の音のみとおもひしに月影しけさあさちふの露

よはの月空さえわたる山風に里にも秋の霜やなくらん

七百五番

左持

顯昭

岩かれにたかはかりあきなかむれば吉野のたげに月かたふきぬ

右

三

宮

おりしもあれひとりなむる大空の有明の月に初鴈のこゑ

庭の松れやもる月をとふからに千々にも思ふ風の音哉

七百六番

左

女

房

新後撰
小山田のいな

はかたより月さえてほむけの風に露みたる也

右勝

忠

夏

卿

夜さむなる松のあらしなとひかほにとを里をのに衣うつ也

夜はの秋さそなかなしき虫のれも風のけしきと月のひか

りも

七百七番

左勝

左

大

臣

千たひうつきぬたの音をかをへても夜をなか月の程をしらるゝ

右

兼

宗

卿

岩まよりりくる水にやとしても心計の月はなかめつ

北よりやぬしさたまらぬ玉章をかけつゝ鴈の月にきつら

ん

七百八番

左勝

前

檀

僧

正

我門のわき田かりねの草のいほに夢路うつるふ神なひのもり

右

通

光

卿

都人とへかし秋の花さかりなさけこめたる霧のまかきを

わくらばに里とふ人のたよりあらはよかれぬ月に忍と答

へよ

七百九番

左

公 繼 卿

みよしのゝきさ山さばに待月ほとをちの里の影よりそみる

右 勝

釋 阿

秋の夜は光なことにそへよとや月の都にさためをさげん

みほの浦や清見が關に影やとす月はたひねもかはらさり

けり

七百十番

左 持

公 經 卿

あかて入月に恨やのこらまし山のはにくる夕なりせば

右

俊 成 卿 女

新古今

色かばる露をば袖にをきまよひうちかれて行野への秋哉

うらかれの下葉色つく秋はきの露ちる風にうつら鳴なり

なしかへしなむる秋をしのひてもこほる露の所せき

まて

七百十一番

左

季 能 卿

秋からの月の光が露ゆへの秋のあはれかいかになかめん

右 勝

丹 後

いかなれば霞にきえし鴈かれは月の秋しも契をさげん

水きよき清瀧川の月影をよるとはみえすしのゝめの空

七百十二番

左

宮 内 卿

ことしげき都の空の月にたに秋はなかめのつきねとそきく

右 勝

越 前

草ふかみ道ふみまとふ故郷にあれても月の影のみそすむ

くすのほもさそなうらむる野へにしもかたふ露けく契る

露哉

七百十三番

左

讀 妓

新古今

あはれなる山田の庵の寝覺哉いなはの風に初かりの聲

右 勝

定 家 朝 臣

もみちする月の桂にさそにれたのなげきも色そうつろふ

物思へばみたれて露さうりまかふ夜ばに寝覺をまかの聲

より

七百十四番

左

小 侍 從

くらき夜のやみにまよはんと道にても今夜の月やおもひいつへき

右 勝

通 具 朝 臣

新古今

ふかくさの里の月影さひしとすみこしまの野への秋かせ

嶺の月清き岩まにやとりきてさゝ浪水るまかの山の井

七百十五番

左 持

隆 信 朝 臣

秋の夜は雲も心やあり明のかたふくまでもすめる月哉

右

家 隆 朝 臣

月みはとたのめばなきし人はこてあさちが露に松虫そなく

目數へぬ外山の露にしほる袖きついなれにしから衣哉

七百十六番

左持

右家朝臣

身のためにいそくとならばから衣かさぬる夜は、打もれなむ

右

雅經

秋風にうつらなく野の夕まくれなき心まであはれをそしる

忘すも清見か浦のかりまくら快に浪をまほりわづしも

七百十七番

左持

保季朝臣

鳴くらすもさかそまのさよ枕かたしく袖に松むしの聲

右

寂蓮

み山出し山路の月の影のみそなくりついても友に成ける

峯の月なかも侘ぬる宿にしもさよのれ覺を鹿そとひける

七百十八番

左

良平

心さへはるゝまそなき霧の中になかめ侘ぬる秋の山さと

右勝

家長

虫のれを荻ふく風やさそふらんそよくとすれば遠さかるなり

むさし野や下葉の露のよすからや清くも月のかげやとす

らん

七百十九番

左持

具親

いたつらにれぬ夜の數と成にけり月ならぬ比の鳴の羽かき

右

三

宮

草枕なみたの露は秋風の事とふにしも落まきりけり

なみなへしなひく風とやしたふらんやゝふら露も打時雨

つゝ

七百廿番

左持

顯

昭

なかわれば千々に物思これそこの心つくしの秋のよの月

右

内

大

臣

あくかれて今ほと思山里にすみなれにける夜はの月哉

眞葛ばら玉まく露もなきやそふながむるまゝのしのゝめ

の空

七百廿一番

左

女

房

めくり行秋やはもとの秋の空月そ昔のふかのふるさと

右勝

兼

宗

卿

なかわれば月ば浪ちに影さえてあかしのほまにつもる白雪

水の頭に峯の松風やとりきてさそすみの江のふのゝめの

月

七百廿二番

左勝

左

大

臣

すそのゆく衣にすれる月草のうつりやすくも過る秋哉

右

通

光

卿

雲はらふ嵐を空に先たてゝ秋ともふるくすめるよの月

すまの秋空はあくともこのれとや夜わたる月をしたふう

ら風

七百廿三番

左

前 權 衛 正

露の染て色々になす紅葉はの又色々に露をそむらん

右 勝

阿

秋の月じるとば見えてさえさむし雪とおもふは庭いしら露

さひしさにむしあげのせとの隨風に夜深き月にしく物そ

なき

七百廿四番

左

公 繼 卿

涙のうつ玉の浦わのあら磯に光をくたぐよはの月かな

右 勝

俊 成 卿 女

月をのみ伏見のさとの秋の暮松風ならてとふ人もなし

横の月ば月によかせて夜やあかす桐の葉つたい風は吹つ

つ

七百廿五番

左 勝

公 經 卿

衣うつみ山の庵のまはしもまらぬ夢路にむすふ手枕

右

丹 後

さ夜ふけてきぬたの音のさむければ衣かりかね空に鳴也

むさしのやすみける月を吹風によかれぬ露や下葉そむら

ん

七百廿六番

左

季 能 卿

右 勝

越

前

袖のうへにくもらぬ夜はの雨過て月ばくまなく住よしの里

みよし野やきりたつ秋も春をみる影おほなる月は住つ

七百廿七番

左 持

宮 内 卿

衣手は秋の山田のそほつとも月さゆる夜のつゆは拂はし

右

定 家 朝 臣

いく秋を千々にくたけて過ぬらん我身ひとつを月にうれへて

なける露もとあらこの萩障をなみ枝もとをいにすめる月

哉

七百廿八番

左 持

讚

岐

夜もすからなきある露のいかなれば草の葉毎にぬるとみゆらん

右

通 具 朝 臣

世中になひきおきふす下萩も末こそ風に露は落けり

音にきくなるとの浦の鹽風にほのかにかよふ友千鳥哉

七百廿九番

左

小 侍 從

なかむるに傾ふく月そうらめしき我はかくこそいりもやられぬ

右 勝

家 隆 朝 臣

心なき身をさへさらにおしむ哉なにはわたりの秋の夕暮

なかむれば庭のあさちをばらふ風かけうちなひく月の影

説

七百卅番

左 持

隆 信 朝 臣

明ぬるか外山の原の秋の月かたふく空に鳴のはれかき

右

雅 經

夕暮はいつくをいかになめまじ野にも山にも秋風そふく

水の面になかれもやらすやとれ月さほの河風ふからみは

ふし

七百卅一番

左 勝

有 家 朝 臣

秋の色をそむるなき名の立田姫ときはの山は鹿のみそなく

右

寂 蓮

なこりなく峯の嵐に雲落て軒はの空に有明の月

外山かせ木々の木葉をくらふらしかりかぬさむくつもる

秋哉

七百卅二番

左 勝

保 季 朝 臣

暮ことの露にや色のかほらん時雨はまたし庭のあさちふ

右

家 長

秋の夜の野へにかばらぬ袖の露ありとやこゝに虫の鳴らん

窓ちかくたつきの音や柴の戸にかよふ山人つま木とるら

え

七百卅三番

左 持

夏 平

玉葉

衣うつあつかふせやの板まあらみきぬたのうへに月もりにけり

右

三 宮

草むすふ秋の野はらのかりれには月にそかはすさよの手枕

都人なとかとびこぬ山の月さすやいほりの雄栗の門

七百卅四番

左 勝

具 規

大かたのうきにかへたるれきあかな里わく物を傳鹿の聲

右

内 大 臣

風ふけば過行秋の立田山花牛に紅葉やひとりちるらん

闇のうちにさす月影は目覺つゝかたしく袖のつゆはらふ

なり

七百卅五番

左

顯 昭

むかしみし月ばあはれやまさりけん面かけにさへぬる、袖哉

右 勝

忠 貞 刺

秋風をくるいふことに身にしめてたのめぬたれを松虫のこゑ

都にも霧は立けり野も山もかきらぬ秋のちきりむすびて

七百卅六番

左

女 房

おなしくはあはれしれらん人もかな鹿とむしとの秋の夕暮

右 勝

通 光 卿

衣うつきぬたの音に賤のめかいそく心や夜ばのあき風

よはの月ふきつの浦をみわたせば岸の松かえはらふ秋か

せ

七百卅七番

左 勝

秋風に簑鷹ならずかた岡の柴の下草色付にけり

右

釋 阿

人とはいにかたらん秋の山松のあらしにあり明の月

時雨して晴めるよはの野への露をかつく袖にちらす秋
かせ

七百卅八番

左 勝

前 權 僧 正

露は野へわか夕暮の袖を又かりのなみたのそめて過ける

右

俊 成 卿 女

夜をかされ月影さむみきりくすもきか本に聲よはる也

月をまつ夕になひく空の雲夜半には拂へ木々のあきかせ

七百卅九番

左

公 繼 卿

曲もなき月をすみれは秋のよも程こそなけれぬに明ぬる

右 勝

丹 後

紅葉は染る時雨もある物ななにゆへ月の色をそふらん

物おもはし身にしみかへれ千々にのみ夜はを詠て忍ふ月

影

七百四十番

左

公 經 卿

玉ほこの行ての袖のてるまでに紅葉をあらふ雨の夕暮

右 勝

越 前

なくさまぬ心に月のめくりきて昔にかへるをはすての山

村雨の風打なひく下荻にかことかましく露むすふ袖

七百四十一番

左

季 能 卿

月みればやて秋のぬるゝかな心の玉や水をとらむ

右 勝

定 家 朝 臣

秋とたに忘れんと思ふ月かけなさもあやにくにうつ衣哉

山路よりさすか月影柴の門みるもさびしき露のまかきこ

七百四十二番

左 持

宮 内 卿

夜々をへて聲達さかるきりくす栖かはおなしすみかなれとも

右

通 具 朝 臣

あはれる時しも秋のね覺かな妻とふ鹿の明かたの聲

わたのはら霧に潜入もかり舟闕とはふるやすまのうらか

せ

七百四十三番

左 勝

讀 成

人はみな心の外に秋なけやわかそてはかりをけるふら露

右

家 隆 朝 臣

秋の嵐ふきにけらしな外山なる柴の下草色かはるまで

鹿のねのはるかにかふふ野山かなまよのあまりのけきの

秋風

七百四十四番

左

小 侍 從

なむれは身には心のとまらぬにさそひもあてふ秋のよの月

右勝

雅經

君か代の野への下草吹風にむすほゝれたる松むしのころ

鳴わたるかりの涙にむすふ露まなくもちるかくすのうら

かせ

七百四十五番

左持

隆信朝臣

よしさらば人松虫にまかせてん草にやつるゝふる郷のいは

右

寂蓮

月あかぬ秋の心は秋のよのちよを一よに秋風そふく

里に吹浦のとまやの風の音にたれかもひとりすみはしめ

けん

七百四十六番

左

有家朝臣

色かはるは山かみねに鹿なきてお花吹こす野への秋風

右勝

家長

今さらにまくすかはらをわけふとや恨かはなる松虫のころ

松か枝にくもらて空も住吉やかふ浪風に月はすみけり

七百四十七番

左勝

保季朝臣

さ夜ふけてはとふく山の秋風に村雨過ぬ袖にまぐれて

右

三宮

衣うつなちの里より吹風にはるゝきたるつちの音哉

さいの庵夜ふかき月の影さむし妻とふ鹿のかふね覺に

七百四十八番

左

良平

いつれともみえぬまかきの月影を匂にそわくきくの白露

右勝

内大臣

朝はらけまきのを山に霧こめてうちの川おさ舟ふはふ也

女郎花さきける野へに露おちて夜ふかき風に鳴たちぬな

り

七百四十九番

左

具親

こぬ人をまつよつもりぬうら風に遠里をのは衣うつなり

右勝

忠良卿

柴の月に木葉ふかのねさそひきてみせもきかせも山嵐のかせ

此比の野にも山にも晴くもりかふふ時雨を月にうらむる

七百五十番

左持

顯昭

とはゝやな詠るまゝにあくかるゝ心のはては月やまゐらん

右

兼宗卿

あり明のあけ行空の月みれにすかたばかりも哀なりけり

おきまれりなむらたえて敷島や大和とよねも動きふき

世ぞ

千五百番歌合卷第十一 秋四 判定家朝臣

七百五十一番

左勝

女房

秋の虫の手玉もゆらになる機なたきてみよと野への夕くれ

右

阿

月はこれあはれな人につくさせて西につゐにばさそふ成けり

左秋虫假機婦札々聲晩野感行人悠々之望詞雖爲塞

北秋雁之行心深ニ於江南春水之色其義偏慣ニ于上世其

體已超ニ于中古右寄瞻望於秋月凝ニ觀念於西天許也幽

玄之詞雖頗異他勝負之思更難及左者歟

七百五十二番

左持

左大臣

秋はななくすのうら風恨てもとほすかれにし人そ戀しき

右

俊成卿女

とふ人もあらし吹そふ秋はきて木葉にうつむやとの道芝

兩首秋の哀を盡して戀の心に通へり左は眞葛の風を恨て

枯にし人を戀右は木葉の風に向ひて埋る跡を思へり時

雨に移るひ秋にあへぬ色何れを深しと辨へ難くや侍らん

七百五十三番

左勝

前權僧正

もろく見し霜と露とのたてぬきに風のおりける錦なりけり

右

丹後

夕ま暮野へのあさちを分ゆけは露ちる風にうつら鳴なり
もろく見し霜と露とのたてぬきに風のおりける錦也なりけ
りと侍はめつらしくこそみえ侍れ

七百五十四番

左

公繼卿

はれくもりきためなきよの月影にくめちの神の心いかにそ

右勝

越前

月なのみ見るとはなきをすまの海士の秋の幾世をれて明すらん

晴曇定めなきよとは時雨なと思へるにやくめちの神の

心月の晴曇に依ていかなるへきとにか侍人近き世の歌

に古の月かりせはなといへるを思へるにやかの歌も唯

月の隅なき由を云ん爲さやあらましと讀るにぞ侍へき昔

より申傳へたる夜の契なたに基俊は本文慥かならぬ事と

申侍けるとかや右歌はれて明すらんと云る優に侍にや

七百五十五番

左勝

公經卿

紅の色にそ涙もたつた川もみちのふちをせきかけしより

右

定家朝臣

ひとりぬる山鳥の尾のまたりおに霜をきまふ床の月かけ

山鳥の垂尾床の月影なと霜夜の長き思詞たえぬ所多く

心分ち難く侍めり紅の浪紅葉の淵は誠に深く思入て心

の色も染ましとこそ侍らめ

七百五十六番

左勝

季成卿

あなし吹なたのしほちに雲消て浪にきはまる月の影哉

右 通具朝臣

吹風もあらしになれば床の山夕のうつらうらみてそなく

雲消る灘の磯路は歌の丈有ん事を好み嵐吹床の山は詞の

艶ならむことを希へり浪に極まる月風に恨むる鶺鴒もいつ

れと申難くは侍れと吹風嵐となるかはりめその程を存せ

ることにや侍らん浪にきはまるもすこし聞なれぬこゝち

して侍れと月のかげはるかにすみてきこえ侍にや

七百五十七番

左持 宮内卿

秋はたゝ草にまかせて虫の音のあれたる庭と人はみるとも

右 家隆朝臣

鐘のこゝろ鳴の羽音もあはれ也野守の霧の明かたの空

左の歌ことほりのきこえぬには侍られと詞のついきやた

とらるゝかた侍らん右歌うるはしくいひくたしては侍れ

と又かやうの心つれの事にや鳴の羽音もみゝなれ虫の音

もみたれては聞え侍れと基俊は鶴膝蜂腰の病とたに申て

侍に右の歌の字六かさなりて侍やあまりに侍らん

七百五十八番

左勝 讃岐

續後撰
夜とゝもになたの鹽やにいとまなみ浪のよるさへ衣うつらえ

右 雅經

何とかくばらひもあへす結ふらん袂はつゆのをきところかは

波にうつ衣露結ふ袂歌のすかた詞のついきいづれもいと

おかしくは見え侍をなたの鹽や波の衣よる所侍らん

七百五十九番

左勝 小侍從

よしさらはなかわる月にすむ心やかて西へのみちにともなへ

右 寂蓮

曉の鳴たつ迄もなかりけりいなほにこもる宿の夕暮

右歌田面の秋の望にたへすして宿の夕のあはれなのへた

るとはほのくみえて侍と鳴返もなかりけりやうちき

くに何事とわきまへかたく侍らん唐にもやまとにも曉鳴

立心を秋のあはれのもととすばかりいひならはしたる

ことはいとも侍らぬにや春は曙秋は夕暮なとこそ申をき

て侍ればすこしことあたらしくもや聞え侍らんいなほに

こもるといへるも霞外花色霧中曉聲わか草のつまおやの

かふこならてはことほりならずや聞え侍らん左歌當時述

懐にすきて來世得脱をおもへり秋の歌にはかならずやと

は見え侍れとおほつかなき所は侍らぬにや

七百六十番

左 隆信朝臣

鹽風や秋は夜寒になるみかたあまのとまやも衣うつ也

右勝 家長

秋風はふかぬ草葉もなき物をかこちかはなるかやか下折

右歌ことなる事なきをめつらしく心おかしく侍へし

七百六十一番

左持 有家朝臣

時雨には色もかはらぬ高砂のおのへの松に秋かせそふく

右

三

宮

秋やおしき暮行空やはれなる思ひさため虫のころく

左歌雖^レ似^レ有^ニ餘情^一可^レ謂^ニ無^ニ殊事^一右歌惜^ニ涼秋之暮景^一

憐^ニ微陽之短明^一雖^レ不^ニ思定^一強^ニ無^ニ差別^一也如何

七百六十二番

左

保

季

朝

臣

山ふかき秋をみるにもおもふ哉これよりおくの夕くれのそら

右勝

内

大

臣

類古本

うら風や夜寒なるらん松島やあまのときまに衣うつ也

山のふかきのみかさならんによりて秋の夕暮ささるへき

ゆへも侍らしすその鹿の音外山のまさきの色しもすて

かたく侍物をおもふかなもおもほまほしく侍にや浦風も

夜さむならんあまの衣はひとへにあはれなる方も侍らん

七百六十三番

左勝

良

平

紅葉ちるいは田のをのいはそはら風にそはるゝ秋のよの月

右

忠

良

卿

うらちかきあしやの里に日は暮て浪路のきりにあまのいきり火

岩田のをのいはそはらふりにたる詞には侍れとさせる

難なく侍へし津のくにむはらのこほり蘆やの里は業平朝

臣住侍りけんむかし歌になたのしほやきいとまなみとよ

み南のかせふきてなころたかくうきみるのよせられたる

もかくれなく侍れば浦ちかきとをかずとも星か河邊の螢

とまかひしいさり火の面影計りは波路の霧に隠れなくや
侍へき上下句のに文字もなきよりはいかこそ聞え侍にや

七百六十四番

左

具

親

大かたの秋のけしきをこればたゝおもふまいなるきをしかの聲

右勝

兼

宗

卿

ことくになかしき秋としりなからさてしもたれか恨はてたる

大かたの秋の氣色千々にかなしき月かけを我身ひとつの

とらみ物おもふやとのほきの露をかりの涙にかこちて

も人の思ひば忍ふるなさを鹿にも思ふまいには侍るめれ

とこればたゝないへるわたりすこし心えかたきかたや

侍らんことになかしき秋又衣のすそを吹かへす初風より

もしもかれはつるくすの下はまて恨とるおほかる秋の

氣色をしもおしみたふならひのみあやしげに侍へし是

も詞につくさぬ所侍れと左よりは心えられてや侍らん

七百六十五番

左

顯

昭

秋風におもひやりつゝ衣聞音さへに身にはしみけり

右勝

通

光

卿

松虫の聲する方に宿からばよもきか門のすまゐなりとも

左歌の心こまもろこしのふみより昨日けふの歌まで詞の

露色々に見え思の風ころくゝに聞えて身にしむふしゝ

もおほく侍を此歌にとりては秋風に思ひやりつゝといへ

る何をおもひやるともことにわかれ侍らす聞音さへそな

と優にしもあらずや侍らん心あらはに詞すなななんと
このみよむとおほしやらん歌は人のいたくふみるさぬ
心なを思ひよりたらんやさるかたにも聞え侍へき右歌
松虫の聲を尋てよもきが門をきらばぬ心おかしく侍へし
七百六十六番

左勝

女

房

ますかみ見るめのうらのよはの月水なよする秋の鹽かせ

右

俊

成

卿

女

月みはとたのみし秋のよもすから又うらめしくうつころもかな
右攝衣迎_レ八月九月之涼夜_一怨_二千聲萬聲之寒杵_一其詞雖_二
尤美麗之體_一頗無_二氣力_一歟左真寸鏡江心波上之色秋風夜
月之影如_レ金其月磨_レ瑩珠_一函新開勝_レ自_二秦皇之照瞻_一不_レ異_二
唐帝之鑒古_一似宵有_二九五飛天之龍_一人間臣妾誰敢及乎
七百六十七番

左持

左

大

臣

露の袖しものさむしろしきしのふかたこそなけれあさちふの宿

右

丹

後

いかなればうつるふ色とみせなからちるてふことなしら菊の花
霜のさむしろはしく物なくはみえ侍を露しもそ少末の詞
によせなきかたも侍りぬへきちることしらぬ花の色も心
深くまて見え侍れば此あさち白菊色わきかたくや侍らん
七百六十八番

左持

前

櫓

僧

正

立田川袖のもみちにせきかれてから紅のしたとよむ也

右

越

前

波のうへにつもれる雪をなかむればおきのしらすに浮るよの月
兩首左は紅右はしろたへ也色々を題としてよめらん心ち
し侍れと波のうへの雪おきのしらすの月秋の心かすかに
して冬の歌にことならずや侍らん
七百六十九番

左勝

公

繼

卿

新古今

れ覺する九月のよの床さむみ今朝ふく風に霜やなくらん

右

定

家

朝

臣

いかにせんきおふ木葉の木枯にたえず物おもふ九月の空
左涼夜之方永歎介而不寢心むかしの花省の秋思やられ
ていとをかしこそ侍めれ右いかにせんとをけるより風
情つきにけるにやと聞え侍れば尤以左可爲勝
七百七十番

左持

公

經

卿

紅葉の色よりはやく行水のそこの木末にうつる秋かせ

右

通

具

朝

臣

よはり行虫の音にさへ秋暮て月も有明に成にけるかな
左は秋かせの色紅葉にさそはれてうつり右は曉の月の影
虫の音共によはれる秋の心歌の姿何れと分難くや侍らん
七百七十一番

左

季

能

卿

右勝

家

隆

朝

臣

いさいかに深山のおくにしほれても心しりたき秋のよの月

夜やふくる雲をばるかに鳴かりもひとつになりぬ衣うつこゑ

左しりたきといへる雖聞俗人之語未詠和歌之詞也
加之初五字又不甘心右歌霜砒之韻夜深雲雁之聲暗通景

氣甚幽而感情相催歟

七百七十二番

左持

宮内卿

外山まで深山のあられ分過てまさ木のかつら秋風そふく

右

雅經

ふなくばやとりなれにし月かけもかれ行をのゝあさちふの露

みやまのあられ過つらん秋風のかよひちばるかにおもひ

やられてをかしくは侍を分過てと侍る詞すこしもとめたる

様に聞え侍やとりなれにし月影のかれ行をのゝあさち

は詞の霜も見所おほく侍れとみ山のあられまで思入たる

心ふかく侍れいづれと申かたくや

七百七十三番

左

讃岐

磯ちかきあまのとまやの夕暮に霧のまかきなあらふ白浪

右勝

寂蓮

秋をしる袖は恨の露なから萩の下葉をあはれと思ふ

此あまのとまやも磯ちかきとなかれすは白波のより所な

く侍へきにやさしも侍らし物を末の句はいひなれてみえ

侍れと秋をしる袖はうらみのなといへるはしめなはりか

なひてや聞え侍らん

七百七十四番

左小侍從

ひとりの枕の下のきりくすとふらふ聲はしのはきりけり

右勝家長

あさの袖いかにほしあへて松島やなしまか磯に衣うつらん

いかにほしあへて松しまやといへるをかしく侍にや

七百七十五番

左勝

隆信朝臣

秋ふかき深山の庭のなりひそときてもかなし峰の松かせ

右

三宮

行かふふ人たにあらはとひてまし山路のきくの千代のけしきを

山路のきく行かふふ人なきよし仙家の心にや侍らん歌

のすかた詞よろしく侍へしならひそと聞てもかなしとや

らんのことはちかく見侍し心ちし侍れといづれとも思ひ

給へ侍れば秋の景氣にとりて右はたしかにや侍らん

七百七十六番

左

有家朝臣

松風に草のやとりやあれぬらん枕になるゝきりくす哉

右勝

内大匠

今こんの空たのめなや九月のあり明かたの松むしのこゑ

左歌優には侍をそことろと作者ことに思ひいれたるさ

まに侍らぬにや右歌は艶に聞え侍へし

七百七十七番

左持

保季朝臣

くれかゝるなのゝ草ふし風過てむすふまくらにうつら鳴也

右

忠

良

卿

たかすみかいつくの秋を尋まし野へも山邊もなめわひぬる

中の句に風過て露ちりて終の句に鳥鳴虫怨歌此心餘に耳

なれてそ聞え侍れとすかたこと葉慶には侍へしたかすみ

かいつれの秋もことに思入ては見え侍られ共歌の程いつ

七百七十八番

左 勝

良

平

風まてくれなるふかくみゆる哉わたる木すゑに木葉ちる頃

右

兼

宗

卿

なが月の九日ことにあふならは八重はなとさく白菊のはな

左歌すかたおかしくは見え侍をわたる木末と侍るたつた

河の紅葉をみてわたらは錦といひくらはし山の霞によせ

て立わたるなとよめるにはにぬ心ちし侍れとあまりの事

にや右歌かならず九日をちきらはなとか八重にはさくと

いへることはりなきには侍られと左猶やすらかにいひく

たされて侍にや

七百七十九番

左 持

具

親

たれか又山路のすゑにむすふらん千年をながす菊の下水

右

通

光

卿

色ふかくそむる木末もある物を花にうつろふきくのしら露

菊の下水菊のしら露ふかさあささしゐてわきまへかた

や侍らん

七百八十番

左

顯

昭

なきまざるのか聲にやきりくす深ゆくよばの程をしるらん

右 勝

釋

阿

故郷にひとりも月をみつるかななをば捨山をなに思ひけん

左暗螢之韻以_レ己音之漸増_二知_一夜漏方闌_二推_一察々思_二頗似_一

無_レ詮右玄兎之影極_二舊里之閑望_一偏名所之遠情心尤幽玄

足_二賞_一詠_二者歟_一

七百八十一番

左 勝

女

房

玉ほこの道の芝草うちなひきふるき都に秋風そふく

右

丹

後

水上にみれのもみちやちりぬらん色々になる瀧のしらいと

ふるきみやこに昔の人をくして玉ほこのみちに秋風のこ

れる心おもかけ空にうかひて誠にたくひなく見え侍れば

よれる所なき瀧のしらいと色わきかたくや侍るらん

七百八十二番

左 持

左

大

臣

いれかてに庵もる田子のかり枕夜半にをくての露をひまなき

右

越

前

夕まくれ木すゑをばらふ風の音にさひしく成ぬ秋の山里

左はいれかての田子のかり枕よばにをくてのなと誠に露

のひまなく見え侍を右の棺をばらふ風の音又歌のさまも

すこしさひしくや侍らん

七百八十三番

左勝

前權僧正

紅葉々をよるのにしきになす物はまたみぬ山の嵐成けり

右

定家朝臣

さなしかのふすや草むらうら枯て下もあらはに秋風そふく

したもあらはにうらかれん草村歌のすかた詞もまたみぬ

山の紅葉の錦におよひかたくこそ侍らぬ

七百八十四番

左

公繼卿

衣うつしつか袖にやかふらんぬ覺の床のあかつきの露

右勝

通具朝臣

暮て行秋の契はあさちばら末葉の露やむすひはつらん

ぬ覺の床の曉露はすゑはの霜にけたるへくも見え侍らぬ

と秋の契は淺茅はらなとこほる所なくいひ下されたる

詞つゝき猶はしめなほりかなひて侍にや

七百八十五番

左勝

公經卿

昨日みてけふみぬ程の風のまにあやなくもろき峰のもみちは

右

家隆朝臣

大かたの野はらの花はうつろひて風にしられぬ庭のしら菊

左歌心ことはおかしくこそ侍めれ右歌も詞いとよろしく

は侍を心はすこし聞なれたる心ちし侍にやあやなくもろ

き嶺のもみちはめつらしくや侍らん

七百八十六番

左持

季能卿

長きよを思ひあかしてあさかほの世のことはりを人にみするも

右

雅經

くれかたの木葉にまよふ秋の雨の窓うつ程によばなりにけり

左の秋の夜は櫛のおもひあかし侍にや右雨の窓うつ程い

つばかりにか歌はさのみこそ侍れとすこしおほつかなき

かたや侍らん

七百八十七番

左勝

宮内卿

そらも海もひとつにかふふみとり哉月さへ涙に有明のいろ

右

寂蓮

暮つるはしのたちふやそれならん霧のあなたにもすそ鳴なる

左歌空も海も一つに通ふ覽涕をかしく侍る春の空浦々に

霞める松の村立なとにや一通ふみとりは聞ならひて侍

らん唐の歌にも紅心秋月白、自月正圓時なとこそ作て

侍めれ在明の色もあまりにめつらしきつゝきにや右歌草

つるなといはみわの杉むら芳野の花なとや聞なれて侍

らん物氣なきはしの立枝ばかりはななのゆへにかとあや

しくや霧のあなたもさほ川の千鳥立田山の紅葉なとこそ

おかしくは侍をもすそ鳴なるはよろしき歌の詞に聞なら

はす侍れば左猶月の色もすみてや聞え侍らん

七百八十八番

左持

讀岐

頼めなきし人のゆくゑを松虫の聲ばかりして秋を深行

右 家 長

吹からに涙もいろき秋風の木々の紅葉にかゝらすもかな
左人のゆくゑを松虫のなと優に侍を行ふといひて深行と
侍やおなし心に聞え侍らん右涙もいろき秋風なとまた心
なきには侍らぬをかゝらすもかなや松の梢の藤なみかつ
らきのしら雲なとならてはすこし聞ならばぬちやし侍
らん是は深き難に侍らし

七百八十九番

左 小 侍 從

なるこ引鳥羽田のおもの夕ま暮色々にこそ風も見えけれ

右 勝 三 宮

影やとす峰の白菊さきしより庭に秋ある谷川の水

鳥羽田のおもの夕の色々は稻花の遠望にこそはと見え侍

れと鳴子引によりて風の色々にみえんやうにや聞え侍ら

んかけやとす峰の白菊は庭に秋あることはり叶て侍へし

七百九十番

左 隆 信 朝 臣

女郎花たゝ一枝の名残さへ今はあらしの風わたるなり

右 勝 内 大 臣

秋きては夢の枕やよそにみん月よいしとてうちもふさすは

女郎花たゝ一枝のなこり何事にか侍らんそのゆへあらは

優にも侍へしふきたへの枕塵つもりてまたすしもあらぬ

月にふさぬ心はいとおかしくこそ侍めれ

七百九十一番

左 有 家 朝 臣

木枯の露ふき結ふ草むらに秋もふけぬと虫そわふなる

右 勝 忠 良 卿

なかむれば空に心そつきぬへき秋にしられぬ夕暮もかな

左下句よはく右は上句ことなることなく聞え侍れと秋に

しられぬ夕暮もかなとは左上句よりもよろしきにや侍ら

ん

七百九十二番

左 持 保 季 朝 臣

聞わかぬ木のはゝ庭の時雨にて鹿のぬすさむ長月のくれ

右 兼 宗 卿

たくひなき八しほの岡のもみちはゝみぬより色の程そしらるゝ

木葉は庭の時雨にてとをきてはそのすちの心詞のよせな

としもにあらまほしくや侍らん上下ことかはれる心ちし

侍るうへにすさむといふことはふるく聞ならばすや侍ら

ん三代集にいらぬ歌は本歌ともせずなとて申人も侍れ

とそれはさるへき事にも侍らず打きくにおかしき歌はか

ならず集にいらんにもより侍らし詞はふるくよめるこ

とはのよしあるを置てはしめてこのみよまむこともかつ

は時によりことにしたかふへくや侍らんやしほの岡のも

みちさせるとかは侍られと左も思入られては見え侍れば

いつれと申かたくや

七百九十三番

左 持 良 平

ちりつもる木葉しのきてきなしかの立田の山に秋風そふく

右 通 光 卿

枝かはす松のみとりの一しほもみちの秋そ色まさりける

棹鹿の立田の山いひくたされては侍へし松のみとりも春

くれはといふ歌を思て紅葉の秋そなといひなされたるも

又心有て聞え侍にや

七百九十四番

左 具 親

今日まではまた露のみやをくら山下葉よりこそ色付にけれ

右 勝 釋 阿

衣うつ音こそあやなたのまるれ夜半の枕もさゆる霜よは

左歌ふまではまた露のみやとは時雨ゆかん程なを思

へるにやことばりの聞えぬにはあらねと色付にけれとい

ひはてたるすこしたかへる心ちやし侍らん

七百九十五番

左 顯 昭

紅葉々をそむるのみかは常盤木の色も時雨にあらはれにけり

右 勝 俊 成 卿 女

秋山のふもとの小田のかりいほに紅葉を分て月そもりける

もみちにまじる常盤木の時雨にあらはるゝ色めつらしき

事にはあらねとよろしく侍へし秋の田のかり座月そもり

けるなとも又つねの事なれとも詞は又優に侍にや

七百九十六番

左 持 女 房

秋山の松をはしのけ立田姫そむるにかひもなきみとり也

右 越 前

かよひこし枕に虫の聲たえて嵐に秋のくれそきこゆる

左はかはらぬ松のみとりにそむる山姫かひなく右はくれ

ぬる秋の嵐にかよひし虫の聲たえぬ心詞いつれもいとよ

ろしく侍へし

七百九十七番

左 勝 左 大 臣

苔のうへに嵐ふきしから錦たゝまくおしき森のかげ哉

右 定 家 朝 臣

岩代の野中さえ行松風にむすひそへつる秋のはつ霜

左歌上句は不堪紅葉青苔地といへる文集の詩をおもひ

下句まとあせるふはといへる古今の歌によせてもりの「か

けかなと侍る季の句まで心たくみにおもかけおかしく覺

てをかしくこそみえ侍れ嵐吹しく錦にて紅葉を詞にあら

はされぬも業平朝臣のからくれなるに水くゝるとはとい

へる歌思出られて心もふかく侍へし右歌初霜結ふといは

んばかりに心とけぬ岩代の松まではるかに思ひよりけん

誠々に見所なくや侍らん

七百九十八番

左 持 前 權 僧 正

秋はいねとをくらの山になく鹿の聲のうちにや時雨そむらん

右 通 具 朝 臣

ひるまなき袖をは露のやとりにて心の秋ふいつかはるへき

此左歌中の三句あまりや本歌にかはらす侍らん右歌二句も露の置所かはり侍らぬうへに彼源氏の物語の歌には上下をよひかたくや侍らんいかい

七百九十九番

左 公 繼 卿

なへて世のあはれも秋の風そよく夕くれよりや思ひ初らん

右 勝 家 隆 朝 臣

なくら山にしこそ秋と尋ねれば夕日にまかふ嶺のもみちは

夕暮よりや思ひそむらんとおかしくは見え侍を西こそ

秋と尋ねれば夕日にまかふ峰のもみちはといへるおなし

なくら山のあまた見え侍るなにも此みねのもみちはに

心の色もふかくそめはてられ侍りぬるにや

八百番

左 持 公 經 卿

霜の下にかきこもりなほ草の原秋の夕もとほしとやさば

右 雅 經

秋ふかき松に嵐の立田山よその梢をまつばらふらん

左歌これも源氏物語の心にかよへるにや詞えんには侍へ

し右歌松に嵐のといへる縁於太山阿舞於松柏之下なとい

ふ心おもへるにやいかにも草のばらよりは木たかき松に

は侍へし

八百一番

左 勝 季 能 卿

鹿のねものこらぬ宿の小萩はらまかきになせる古郷の秋

右 寂 蓮

秋ふかき野への草葉の色よりもなきからしたる松むしの聲

虫の聲さへ枯ぬらん野への草葉の色もあはれあさくは侍

られとなきからしたるといへるあまりめつらしき詞にや

侍らんつれによみならはれとえんにおかしきことばも侍

をこればしも聞え侍らぬにや鹿の音たにのこらさるら

ん故郷のこ萩露けくや侍らん

八百二番

左 持 宮 内 卿

ひたふるにみぬ人戀し秋風にやい露さむしなか月の末

右 家 長

なかめやるみとりのおくの紅葉ゆへおもはぬ松を手折つる哉

人のおもはぬなかにてはあらてか様の心をも思はぬとよ

める詞はいつぱりよりいてきていつれの歌のをかしきに

かは侍らんいまたしたかにも尋見侍らすいかにも近き世

よりはうたことに侍れといまたよろしき歌は聞え侍らさ

るへし山したかせはふかれともきまさぬよひの秋風はな

とよみならはして侍れとみぬ人戀しからんをばひたふる

にのこ葉もすこしあまりにや侍らん

八百三番

左 勝 讀 岐

秋のくれ嵐の山をすきゆけば袖にこきいろい峰の紅葉は

右 三 宮

虫のねのかれくになる草の上に秋かけてをく庭のはつ霜

梅かえにきある驚いひしなかにもあらなくなるといへる
ふるき歌の心にはかけてといふ詞は兼ての心によせて春
秋のはしめによめるとそ見え侍るめる是もたかひては聞
え侍らす秋をかきりとみんなのためといふ歌を思ひて袖
にこさいるい峰のもみちといへる誠に宜も侍哉

八百四番

左 勝

小 侍 從

よそへつるまかきのきくはうつろはて^{ひイ}人の心の秋をしるかな

右

内 大 臣

なからへば又もさこそとおもへとも戀しかるへき秋のそらかな

右の歌のちの秋をば待ながら此暮をおしめる心もおかし
くは侍を左歌心は戀にすゝみて見え侍れと詞えんなもと
として歌のさまよろしく侍にや

八百五番

左 持

隆 信 朝 臣

ながめてもいかにしのはん紅葉はに時雨ふりぬる秋の日數を

右

忠 良

時雨ふる秋にはあへすくすのはの恨は色に出にけるかな

ともに時雨ふりにける紅葉の色なればふかきあさきわき
かたくや侍らん

八百六番

左 勝

有 家 朝 臣

みるたびにおらまほしきはから錦立田の山のもみち成けり

右

兼 宗 卿

そめわたす時雨の雨はかはくとも猶もみち葉に風をいとはん
おらまほしき唐錦なとこびれかはるへくは侍れとふるき
歌覺てひとつのすかたにはいひしりて聞え侍にや

八百七番

左

保 季 朝 臣

萩はらや秋も末葉にうら枯ておもへとよほるかぜの音かな

右 勝

通 光 卿

新古今

入日さすふもとのお花打なひきたか秋風にうつらなくらん

左の上句は優に聞え侍をおもへとよほるといへるや聞な
らはす侍らんふもとのお花おもかけ有てたか秋風になと
いへるはよろしくこそ侍らめ

八百八番

左

良 平

かれくに野への千種も成はてゝ又こん秋をまつむしのこゑ

右 勝

釋 阿

立田姫たつたの山は我名とや紅葉もことに思ひそめけん

たつた姫も我名をおしむ心かよひて紅葉の色のことに見
なされ侍にや

八百九番

左 持

具 親

露さゆる秋の末葉の淺茅原虫のねよりそ枯はしめける

右

俊 成 卿 女

なかつていさえ行袖に有明の月よりむすふ秋の霜かな

秋の末はの淺茅虫の音よりかれ曉さえ行霜月影よりむす

へるおなし心よろしく侍にや

八百十番

左

顯

昭

紅葉々にこかれあひてもみゆる哉繪島か磯のあけのそほ丹

右 勝

丹

後

鳴とめぬ秋こそあらめきりくすなのかれさへそ弱りはてぬる

哀遙かつかまつれる歌とかや物語に申つたへたるすくれ
てをかしきにはあられとあまねく人の口に侍に繪島か磯
のましりて歌に成にけるとや聞侍らんなきとめぬ秋こそ

あらめなといへるなかしきかたも侍へし

八百十一番

左 勝

女

房

けふこそは秋の日數もくればとりあやなし名のみ長月のそら

右

定

家

朝

臣

冬はたいあすかの里の旅枕をきてやいなん秋のしら露

左はしめをほりかなひて心たくみにすかたをかしく侍へ

し仍爲勝

八百十二番

左 持

左

大

臣

こたふへき萩の葉風も霜かれてたれにとほまし秋のわかれち

右

通

具

朝

臣

秋かせは木葉の底に吹きかれて身にしみはつる夕ま暮哉

左艶には聞え侍れと右夕ま暮秋の暮の心はさも侍りなん

八百十三番

左

前

權

僧

正

紅葉はをぬきに手向て行秋をおしみとめぬや神なひの森

右 勝

家

隆

朝

臣

^{新古今}露しくれもる山かけの下紅葉ぬるともおらん秋のかたみに

下葉のこらすもみちする山にぬるともおらんといへる秋

のかたみ本歌の心になひていとおかしくも侍かな

八百十四番

左 持

公

繼

卿

過る秋露もなこりはなき物をなにいぬらん我袖のうへ

右

雅

經

深草や秋さへ今夜いていなはいといさひしき野とや成なん

左は過る秋我袖のうへすこしやすらかならすや侍らん右

はふるき歌を本歌としておほくとりすこすは昔よりのな

らひに侍れと上句を下にす急下句を上にもひきちかへ又

五七句はさながら讀すへ侍ことも歌さまにしたかひては

つれに侍めれと出ていなはいとい野とや成なんなと文字

のをき所いたくかはる所なくや左右はるかにあらぬさま

八百十五番

左

公

經

卿

これよりや秋はいく田の森のかけ過る時雨にちるこのほかな

右 勝

寂

蓮

誰もみなあかぬ名残そ大江山秋はいく野のかたをなかくて

兩首心詞をかしくは見え侍をともし秋の行によそへてい

く田いく野といへるおなし心には侍れと金風の西にかへるによそへてあかぬ名残をおほえ山秋はいく野のかたをなかめてといへるは行にかなひて聞え侍らん

八百十六番

左 勝

季 能 卿

秋風の吹そめしよりなれにける袂の露は今夜はかりや

右

家 長

聲たつる鹿もいまはの常盤山をのれなきてや秋おしむらん

右をのれなきてや秋をしらん又いくはくかはらすや侍らん今夜はかりやもいひとちめ心ちし侍れとふるき心には侍らす

八百十七番

左

宮 内 卿

津の國やなからへもせて秋はけふいく田のおくに風そはけしき

右 勝

三 宮

うちわひてなむる空のうき雲に今夜はかりの秋風そふく

つのくにやなからへいくたなと事かさなりて侍らん右は

させるとかなく侍へし

八百十八番

左 勝

讀 岐

いつかたへ秋のなくりをすまの關せき行舟も行衛しらねは

右

内 大 臣

時雨する雲のあなたは冬の空秋の名残はいまいくかいは

左は心おかしく侍をなくりをすまの關すこしさへてや

聞え侍らん右の句末のはの字がさなりて聞え侍りことにはいかるへき事には侍られとうちきくにいかにそ侍にや左猶末句もなかしきさまにや侍らん

八百十九番

左

小 侍 從

長月のみそらに秋やかへるらんけふしも風の音もたてれは

右 勝

忠 良 卿

といまぬ秋に涙は先たちて木葉もたえす山をろしの風

左歌のみそらに秋のかへる今はしめて思ふれるやうにや

聞え侍らん九月のみそらならてはいつれの秋かはかり侍へき右歌は優に聞え侍へし

八百廿番

左

隆 信 朝 臣

今夜まで荻ふく風の音のみや秋をのこして人にきかれん

右 勝

兼 宗 卿

新古今
行秋のかたみなるへき紅葉々もあすは時雨とふりやまかはん

秋をのこす荻ふく風の人にきかれんといへるよりはあす

なまつ紅葉の色ふりやまかはんと侍はよろしく侍にや

八百廿一番

左

有 家 朝 臣

おしめともけふさへくれぬいつかたへあすはいく田の森の秋風

右 勝

通 光 卿

あすよりは秋をしのふの草枕名残なるへき袖のつゆかな

兩首ことなる事は侍られと左の中の五字や少ふく聞え

侍らん

八百廿二番

左

保季朝臣
みるもうしあすは名残も嵐山けふのみ秋の夕くれの雲

右勝

釋

阿

たのめなくかたもやあらんかへる秋心をやりておしむけふ哉

雲之爲_レ體忽分_レ改_レ容須臾之間變化無_レ窮何限_二暮秋之期_一

永矢_二旦朝之望_一乎_二右歌無_二指難_一也

八百廿三番

左持

良

平

くればつる秋の名残をしのふ山みれに嵐のこゑうらむなり

右

俊

成

卿

女

色かはるあさちかすゑに吹風のなとにもしるき秋のくれかな

兩首詠秋のくれのかせの聲ことにかはれる心侍らぬにや

八百廿四番

左勝

具

親

紅葉々に秋の日數も見むる山立田の河にしからみもかな

右

丹

後

あせきにもとまる紅葉やなかるらん流てはやき秋の暮には

左三室山のもみちに秋の日數をみて立田河にしからみも

かなといへるいとおかしく見え侍を右けふとくらしてあ

すか川といふ心を思ひてなかれてはやきなといへるも心

なきには侍られと猶あせきをきてなかれてなと侍らは

川やあらまほしく侍らん左は歌のたけ侍らんかし

八百廿五番

左

顯

昭

今夜かく心つくしのことの葉や秋をとゝむるもしの關もり

右勝

越

前

かた岡のすゝのしのやに秋くれぬ時雨もらすなならのうはふき

ちかき世のことにやおしむとて今夜かきをなくことのほや

と侍る歌の心をもしのせきにひきよせたるにそ侍める關

城國たにかひなき春秋のといめかたさをことの葉ばかり

のもしの關守とならんこと物はかなくや侍らん片岡のす

すのしの屋ことにをかしきふしは侍られと又させるとか

は侍らぬにや

千五百番歌合卷第十二

冬一

判定家朝臣

八百廿六番

左持

風さきて今朝より冬をなら柴やかりはの小野に時雨すく也

右

秋はけふいつち旅れの草枕かれ行野へに霜むすふらん

兩方野左ばかりはに時雨過てなら柴の冬をむかへ右は旅
れに霜結ふらんと草枕の秋をおもへり心委いづれもいと
よろしく侍へし

八百廿七番

左勝

風の音もいつしか寒き櫛の戸に今朝よりなるゝ埋火のもと

右

立田山みれのもみちはちりはてゝ嵐にすさふ松のこゑ哉

右の嵐にすさふの詞やすこし聞なれす侍らん左の埋火耳
にたつ所侍らぬにや

八百廿八番

左勝

錦をるしつばた山のはつ時雨けにたてぬきと成にける哉

右

秋山に時雨はすきぬ神無月木葉そ冬のはしめとほふる

女

房

通具朝臣

左

大

臣

家隆朝臣

前

權

僧正

雅

經

有神な月に時雨ふらぬやうには聞え侍れと木葉そ冬のなら
といはんためはさも侍なん左はしつばた山も艶なるかた
は侍らねとこととはたくみに聞えて歌によくへきに侍らし

八百廿九番

左持

をしなへて冬の氣色に成にけり昨日もけふも打時雨つゝ

右

昨日みし秋の梢もそれなからおりしりかほにうちしくれつゝ

左右の歌をばりに打時雨つゝといひ心に昨日けふの空の
氣色を思へりかはれる所侍らぬにや

八百三十番

左勝

なきそむる霜にもさゆる嵐哉昨日は露のこほりやはせし

右

紅葉せし秋はいなほの山風に松のみ残る冬は來にけり

霜は冬しもなきそめれと歌はさのみそ侍りしいなほの山
にももみちはさため侍らんかの立わかれいなほの山の
峰におふるとはわかれなんことをかていへるにや今す
こしことほりかなひて聞え侍らん左下句も優に侍にや

八百卅一番

左

今朝は又時雨そめけり昨日まで秋のあはれにぬれたもとを

右勝

冬きぬる氣色のもりの村時雨そめし木葉を又さそひけり

公

繼

卿

寂

蓮

公

經

卿

家

長

季

能

卿

三

宮

秋のあはれにぬれし袂すこしよはくや聞え侍らん大かたは近き世よりの歌にそこそ心なく袖ぬるゝことはおほく侍にや氣色のもりの時雨ぞめし木のはな又さそふもことはり聞え侍らん

八百廿二番

左持

宮

内

卿

昨日こそなめし秋もくれはとりあやになれやさゆるよの風

右

内

大

臣

何とかや峰なるかれよ霜をけは冬にや今夜成はしむらん

左夜るの風右冬霜ともに無指難可謂同科也

八百廿三番

左勝

讃

岐

秋くれてあはれつきにし鐘の音の霜にこたふる冬は來にけり

右

忠

長

卿

秋はみな杉のいた戸のひましらみ明行空に時雨ふるなり

秋はみなと侍あまたあるやうにや聞え侍らん月令曰其日庚辛其音商其數九なとは侍れといかにもすきぬといはん

に聞え侍らんみなのことはいかい左は優に侍へし

八百廿四番

左

小

侍

從

なく霜のなとなたてゝやまれきつるお花か末に冬は來にけり

右勝

兼

宗

卿

神な月けさは梢に秋過て庭にもみちの色をみるかな

左歌怒うつ雨まきの屋のあられなはさらにもいはすなら

の葉にこぼるゝ露竹の枝におれふす雪音にたてゝ聞なれたるものおほく侍れとなく霜の音こそいかなるへしと覺侍らん右歌耳になつ所なくうるはしくや侍らん

八百廿五番

左勝

隆

信

朝

霜とのみ結ふか露の玉くしけ二よたにへぬ秋の名残を

右

通

光

卿

いつしかと時雨め冬にうつりこは秋の跡とてさひしからまし

二見のうら明かたの空ともいはんため玉くしけはつねに聞なれて侍れと露のとつゝけてはくしけやいかゝ聞え侍らん秋の跡とてさひしからましもさる事にはきこえ侍れと左猶思ひれたるさまに侍へし

八百廿六番

左

有

家

朝

なめやる野へもひとつに霜かれてあしの丸やに冬は來にけり

右勝

釋

阿

新古今

なきあかす秋のわかれの袖の露霜こそ結へ冬やさめらん

右歌さざるめつらしき心には侍らねと優には聞え侍にや

八百廿七番

左持

保

季

朝

鳴子引秋やむかしに成ぬらん門田の面に時雨すくなり

右

俊

成

卿

いつしかと時雨ふりきて明かたのまきの戸たゝく木からしの風

此初五字秋の歌にも聞え侍つるにやなにも昔になりて後

時雨は過ることにや侍らん鴨子引昔さなへとりし昨日は
るかにことかはりて侍かなまきの戸たゝく木枯のかせそ
のことゝ聞え侍る所は侍らす

八百卅八番

左

長

平

人めまて今はかれ行はしめとや草の戸さしに冬は來にけり

右 勝

丹

後

冬來ては時雨ばかりそなとつるゝとふ人もなき老のれさめに

冬きにけり老のれ覺めつらしからぬさまには侍られと又

ことなるとかは侍らさるへし

八百卅九番

左 勝

具

親

秋の色はつれなく杉のこすゑより嵐そかよふあふさかの關

右

越

前

冬きぬと思ふばかりの朝ほらけことの外にもかはる空かな

左歌心姿よろしく侍にや右歌の調誠にすこし事の外なる

かたや侍らん

八百四十番

左 持

顯

昭

朝風にほたへもさむし衣手のもりにや冬はたちはしむらん

右

定

家

朝

臣

秋くれしもみちの色をかされても衣かへうきけふの袖かな

はたへもさむしなといふ事こそちかき歌にきゝならひ侍

られ詞はふるき歌にならひ心は我心より思ふれるや歌の

本意には侍らんたいし紅葉の袖の色よくみえ侍にや女
の歌なとならばゆるさるゝかたも侍なん

八百四十一番

左 勝

女

房

秋くれて露もまたひぬならのはにをして時雨の雨そゝく也

右

家

隆

朝

臣

むら雲の伊駒の山にかゝるよりなかわる袖も打しくれつゝ

いこまの山の雲は時しもわかすや侍らんもの字にて冬の

心は侍にや左殊叶初冬之節歟

八百四十二番

左 勝

左

大

臣

しのはらやしのひに秋のをきし露こほりなてそ忘れたかみに

右

雅

經

行秋のわかれし野へは跡もなしたゝ霜ふかき淺茅生のはら

左右の秋のわかれ左はしのはらの露の形見こほりなんこ

となうらみ右は淺茅生の霜の跡たへぬ事をおもへり歌の

すかた詞も優には見え侍を淺茅おひたらん原にあさちふ

の原ことほりたかひ侍ましけれとつれには淺茅生あさち

原なと申なれて侍にや左の忘れたみはいさゝか事も聞え

侍らす

八百四十三番

左 持

前

權

僧

正

宿さひて人めもくさもかれぬれば袖にそ残るあきのしら露

右

寂

蓮

木葉ちるみ山のいほの時雨こそふるもふらぬも袖ぬらしけれ

初冬景氣袖ぬらせる心かはれる事侍らぬにや

八百四十四番

左持

公 繼 卿

久かたの雲だちめくり時雨して野山のあさち色付にけり

右

家 長

外山なる松を吹こす木枯にしらぬ梢のもみちをそ見る

立めくる雲吹こす木からしいつれとも殊事侍らぬにや

八百四十五番

左勝

公 經 卿

神な月外山のしくれすきぬ也正木のかつらちりもあへれば

右

三 宮

わきかれし木葉の音はたえはてし時雨のみちるもりの下哉

左散もあへればといへる少心えかたきかたも侍れと右木

葉の音にのこる時雨あはれあまり聞なれてや侍らん左歌

姿はをかしく侍にや

八百四十六番

左

季 能 卿

かくしつゝ人めも草もかれよとや庭のあさちのけさのはつ霜

右勝

内 大 臣

初時雨ふりはへてこそとはすとも都の雲のよそにたにみよ

庭の淺茅の枯行氣色も心なきに侍られと都の雲のよそに

なと侍はことによりしく侍へし

八百四十七番

左勝

宮 内 卿

秋の色も今は嵐の山風に紅葉こきませ時雨おつなり

右

忠 良 卿

山めくり時雨やすくる松かせの吹かときけはのきの玉水

吹かときけは軒の玉水なといへること葉つかひ此ころの

歌におほく侍ちかくよりみゆる事に侍へし紅葉こきませ

時雨おつ也もふるなりなと侍らんはよの常の事とかへら

れたるに侍めり大かたの歌の姿はよろしきにや侍らん

八百四十八番

左持

讀 岐

なきかはす繼の虫も鹿のれも時雨にかへてなとつれもせず

右

兼 宗 卿

秋のうちもおりゝ音はせしかとも冬のはしめのはつ時雨哉

はしめ鳴かはすと侍よりまかきの虫鹿のれ時雨なと聲々

おほくかそへられたる心ちし侍いか折々の音は冬のは

しめのなと又平懷なるさまにや侍らん

八百四十九番

左持

小 侍 從

なとつれて猶過ぬ也いつくにも心なとめぬ初しくれかな

右

通 光 卿

たえゝの木葉か下の音信も霜にとちつる虫のこゑゝ

詞つかひ同音信に侍ればしゐて聞分がたくや侍らん

八百五十番

左

隆 信 朝 臣

横の屋の冬のさひしさつけかほに木葉しくれて袖ぬらす也

右 勝

釋

阿

そめすてゝ立田姫もや神な月風にまかせてちる紅葉かな

立田姫もや風にまかせて散もみち又優におかしく聞侍る

事にや

八百五十一番

左

有家朝臣

さひしさをとひこぬ人に山おろしの木葉吹まく庭をみせはや

右 勝

俊成卿女

浅茅生のをのゝしの原霜かれていつくを秋のかたみとかみん

木葉吹まく庭をみせばやもおかしく見え侍をあさちふの

をのゝしのはらいつくを秋のなと侍猶々すくれて艶に聞

え侍れば是もいかい

八百五十二番

左 勝

保季朝臣

嶺つゝき時雨の雲のたえまより夢かほのかにみる月のかけ

右

丹

後

ちりかゝる紅葉に色そかはりける袖をはそめぬ時雨と思ふに

夢かほのかになと詞のつゝきめつらしきさまに侍へし右

歌そのことゝは聞え侍られとかやうの心はつねに侍にや

八百五十三番

左 持

頁

平

木間もる夕日のかけはさしなからかたへしくるゝみやまへの里

右

越

前

續古今

木葉さへ山めぐりする夕かな時雨をさそふみれの嵐に

兩方の時雨いくはく思ひわくへき程なくや侍らん

八百五十四番

左 勝

具

親

はれくもる影をみやこにさきたてゝしくるとつくる山のほの月

右

定家朝臣

冬來ぬと時雨の音におとろけはめにもさやかにほろゝ木のちと

影を都にと侍はよその時雨にや心あるさまに侍へし

八百五十五番

左

顯

昭

雨とふるもみちの山をこえゆけは身のしろ衣色かへてけり

右 勝

通

具朝臣

野へになく露の名残も霜かれぬあたる秋のわすれかたみは

紅葉の山みのしろ衣色かはれる心見所ありく珍敷見え侍

れとあたる秋の忘形見こそ誠によるしく侍めれ

八百五十六番

左 勝

女

房

冬來ぬと嵐にきくの露のまにぬれてほしあへす今朝そうつるふ

右

雅

經

暮ぬとも猶秋風はなとつれよ萩のうは葉のかれゝゝにたに

吹かはる冬の嵐の音を聞もあへすぬれてほす朝の露の色

にうつるふ菊のにはひはなの詞心もそめはてられ侍りて

かれゝゝの萩のうは葉のおとつれ何とも耳にとまり侍ら

す

八百五十七番

左

大 臣

夕くれの一むら雲の山めぐり時雨はつれば軒はもる月

右 勝

寂 蓮

朝ことにうつるふ色を置かへて霜にそかれぬしら菊の花

左 心 姿いとおかしきまには侍をおはりの匂の月やすこ

しさいへて聞え侍らん右霜にそかれぬと思かへせる程心

あるにや侍らん

八百五十八番

左 勝

前 權 僧 正

秋の夜の影みし水のうす氷月にこたふる冬は來にけり

右

家 長

山かけや木葉しくるゝ横のやにもらぬ時雨は袖にのみして

影みし水の月にこたふる心めつらしく侍らん

八百五十九番

左 勝

公 繼 卿

おもへとも心きたむるかたそなき時雨空のさ夜のひとりに

右

三 宮

見わたせばすまのうらくくもりきて時雨とわたるあはち島山

左 歌 儼に聞え侍うへに右時雨とわたる雲のけしきもおか

しくは侍をみわたせばとをきてとわたるとそ侍ける

八百六十番

左

公 經 卿

事とひし庭のみちしばうら枯て霜よりさゆる冬の夜なく

右 勝

内 大 臣

時雨するしるしも見えす神な月みわの杉むらおなしみとり

庭の路芝の雪盛には聞え侍を三輪の杉むらの時雨神な月

にしるしのみえぬ心猶おかしくや侍らん

八百六十一番

左 持

季 能 卿

山里は雪氣の空のくもるより分こん人そしたまたれける

右

忠 真 卿

さひしさは深山のおくの神な月時雨ぬ夜はも木枯のかせ

雪氣の空の雲に人を待しくれぬ夜半の風にさひしさをし

れるともに殊事は侍らぬにや

八百六十二番

左 勝

宮 内 卿

紅葉々の色をやとしてば又さそひて出るやま川の水

右

兼 宗 卿

霜かれのお花か末になくもすは秋の名残をとふにや有らん

むかしの花のかみとなる名は散かゝるなくもるといひ

今の紅葉の下行山川にうつりしかけをさそふと見る春の

花秋のもみちはことなれと心の色そむる思ひはおなしさ

まにをかしく侍へしなくもすはしの立枝にも見え侍ぬ

にやもすの草くきなといはては殊なる事なき物に侍ぬり

八百六十三番

左 持

讃 岐

榎の屋もひまなく苔にとちられて時雨の音もかはるふる郷

右

通 光 卿

ふけゆけはいとかたしく袖さえて夜毎にしるしやの上の霜
兩首苔の下に時雨の音をわすれやの上に霜の色を思へ
りすかた詞いつれもわくへくも侍らぬにや

八百六十四番

左 持

小 侍 從

尋きて歸らんみちそ忘ぬる花にかはらぬ雪の木かけは
右 釋 阿

うへをきて秋のかたみとみる菊の冬の色こそ猶まさりけれ

左 尋雪中寒樹混春花之美景右對霜後孤葉飜紫菊之殘色各
催其感可謂同科歟

八百六十五番

左 持

隆 信 朝 臣

時雨こそ音もしつくもよそならめ月さへもらぬあしの八重ふき
右 俊 成 卿 女

木葉ふく嵐の庭の虫の音にほのかに残る秋のこゑかな

左 あしの八重ふきの時雨しつくもそなりとはいかに侍に

か右虫の音秋の聲おなし心とや申へく侍らぬいか

八百六十六番

左 持

右 家 朝 臣

初霜のなきまとはせる菊の上にかされて秋の色をみる哉
右 丹 後

つく／＼と身をしる夜はの村時雨よその床にはさかしくそ思ふ

左 霜の上的霜かされて秋の色なる心いとよろしくこそ侍

めれ非ニ當六義之詞ニ已叶ニ五行之理ニ身をしるよはの時雨
冬の空にかきらすや侍へきおほつかなくや

左 持

保 季 朝 臣

散にける峰の梢はむなしくて色も残らぬ山嵐のかせ
右 持 越 前

なかくる紅葉の波の立田河ふもとにきかぬ嵐をそみる
色ものこらぬ山をろしかせよりは紅葉の波のたつた河

見所ありてや見え侍らん

八百六十八番

左 持

良 平

あしふきのやともあらはにかればてゝ霜にさえたる夜げのさ庭
右 定 家 朝 臣

のこる色もあらしの山の神な月あせきの浪におろすくれなゐ

あしふきのやと殊にめつらしき所は侍られと優なるさま

には侍にや

八百六十九番

左 持

具 親

今は又ちらてもまかふ時雨かなひとりふり行庭の松かせ
右 通 具 朝 臣

時雨行宿はいかにと木枯の吹につけつゝとふひとまかな

左 心なかしく右は詞艶に侍にや

八百七十番

左 持

顯 昭

たきつ浪たつかときけは吉野河いはとかしはに時雨ふる也

右 勝

家 隆 朝 臣

嵐ふく梢はゝれて大井河木葉かくれにやとる月かな

左だけあらんとはよめる歌に侍へし但たきつ浪たつかと

聞はとはよしの河岩浪たかく行水にもなみたいぬ時の侍

へきにやおさつしほかせにしたかふ浦浪こそなきたるあ

さもことに侍らぬ吉野の瀧の岩なみのあたりに立か

今更におとるかれて誠に石迹柏にふる時雨の音ばかり

に聞なされん事有かたく侍らんいはとかしはもとときは

なる物にそよみて侍めれと時雨の音なとにはたよりも侍

らすや右嵐の山の木葉ふりしきにける程ことはもげちか

く心もをかしく聞え侍へし

八百七十一番

左 勝

女 房

紅葉する程は時雨のむら雲に空行月やめくりあふらん

右

寂 蓮

軒ちかき峯の嵐もこゝろせよ木葉ならてはくもるやとかは

有歌心せよといへるこひぬかはれずや侍らん紅葉する程

は時雨のなとすかた詞まされすおかしく聞え侍れば空行

月の光も猶勝にや侍らん

八百七十二番

左 勝

左 大 臣

霜ふく

つむかり田の木葉ふみしたきむれるかりし秋をこふらし

右

家 長

山嵐にたえずちりくる紅葉はのなきまよはせる庭のはつ霜

かり田の木葉ふみしたきとなき秋をこふらしなと侍心詞

巧みに及び難き所聞えてきら／＼しくおかしきかたも侍

にや絶すちりくる紅葉々のなきまよはせる初霜のけしき

もおもかけをかしく思ひてみえ侍れと左には及び難し

八百七十三番

左 持

前 權 僧 正

あけはみよ四方の山邊の雪の色をころもてきむし東雲の空

右

三 宮

虫の音は草葉といもに枯ぬれとよはらぬものはあさちふのかせ

左のすかた詞いとよろしくは見え侍をしのゝめの空にあ

けはみよと侍やたかひて聞なざるゝかたも侍らん四方の

山への雪の色も見えわかるへきはとになりぬとこそ侍ら

ぬ右虫の音かれて風の音よはらぬ心もことはり聞え侍れ

はいつれと申かたくや

八百七十四番

左 持

公 繼 卿

風わたる梢に雨をきいなれてもるにぬれける袖もしられす

右

内 大 臣

むしの音は木葉の下にうつもれて時雨のみこそ庭に音すれ

兩首ともに下句や思いぬさまに侍らん

八百七十五番

左 持

公 經 卿

さくらし夜な／＼過るあられ哉ならのふり葉に音を殘して

右

忠

頁

卿

ふしのわや木葉なみよるきよ見かた嵐のすゑにおきのとも船

ふな／＼過るあらねならのふり葉の音に誠にきも侍らむ

かしきえくらしそかなひても聞え侍らぬふしのわの木葉

清みかたおきの友舟にまかふばかりはるかに吹みたされ

人程歌のならひには侍れとあまり事遠くや侍らんよもす

からふしのたかれに雲消てなと近頃侍歌も雲のきえ月の

すまんほとは木葉のなみよらんにすや侍へきいかい

八百七十六番

左

季

能

卿

ひとりぬる山鳥のおのかきたれてふるらん雪をおもふさひしと

右勝

兼

宗

卿

都たにあられる夜はしからきのまきの外山をおもひやらるい

山鳥のおのついきこそ鳴のはねかきなとにやきいなれた

る心ちし侍らんさるゆへの侍にや震ふるよはしからきの

なとこと葉なたらかにことばり聞えて侍にや

八百七十七番

左持

宮

内

卿

立田山木の下ふしの跡にのみ嵐に寝るもみちなりけり

右

通

光

卿

あはれなりみ山の庵にちりつもるならの枯葉にあられふるなと

左はわりなき風情なもとめ右はよのつねの霞の音をよま

れて侍れと歌の程いつれとも見え侍らぬにや

八百七十八番

左持

讃

岐

みなと河なみの枕にわきかぬふ時雨にとまの雪にそしる

右

釋

阿

出めくる時雨はやかて過ぬれと木葉にぬるし袖のうへかな

兩首の時雨みなと河枕のもと山めくりの袖のうへ又おな

し程にや聞え侍らん

八百七十九番

左

小

侍

從

新後拾遺

右勝

俊

成

卿

秋は猶あはれそありし夕ま暮かゝる嵐のかせはなかりき

左はむかしの事をこび右は秋のあはれをあらでへり是も

いつれとはわかれ侍らぬと嵐の風はしめをばりかなひて

や聞え侍らん

八百八十番

左持

隆

信

朝

木葉かときいたにわかぬ村時雨もらて過ぬる音をすくなき

右

丹

後

新後拾遺

山さとは雪より先に跡たえて木葉ふみ分とふ人もなし

左の木葉時雨誠にきいもわかれ侍らす少きもわざとと

めてよむへき心とも聞え侍らぬと晴くもり不定空のけし

きたとをいはんためにこそ侍らぬ右の雪より先と又ふり

八百八十一番

左持

有家朝臣

わけきつるすそ野のお花うら枯て衣手さむししのゝなふゝき

右

越

前

木枯に峯のもみちはちりにけり色々になつうち河なみ

左のしのゝなふゝき身にしむまては侍られとさるがたにいひくたされては侍にや右もいろ／＼になつといへるそ

少おもはまほしく侍れとおとるまては侍らし

八百八十二番

左持

保季朝臣

露ふれは葉末は霜に成にけり秋より冬ののゝしの原

右

定家朝臣

かれはつる草のまかきはあらはれて岩もる水なうつむ紅葉々

左初五字いかになきいかにきこゆる露をふるゝとは申へきにかいまたえ思え侍られはわきまへ申かたくや

八百八十三番

左勝

夏

平

うたゝれの夢もあらしの山里にまきの葉つたひ霞ふる也

右

通具朝臣

時雨つる今朝のむら雲程もなく入目にみかく山のはのつゆ

夢もあらしの山里つれの霞の音なれと誠におかしくこそ聞え侍れ今朝の時雨の露みしかき冬の目なとは申なから

入日の山のはにみかく事如何と侍らん

八百八十四番

左

具

親

新古今

今よりは木葉かくれもなければとも時雨に殘るむら雲の月

右勝

家隆朝臣

月さゆる庭の木葉になく霜のくもらぬうへにあられふるなり

冬のよの月はおなしさまに侍を左の末の句や少さゝへて

聞え侍らんくまなき霜の上の月は光も殊に侍らんかし

八百八十五番

左勝

顯昭

雪ふれはみな白妙の梢にて名もきたまらぬ花さきにけり

右

雅

經

行かへりこれや時雨のめくる雲又かきくらす遠山のそら

木毎にさかはいつれを梅とも分き難く春ながら消かてにせしならひにはさくともおほめかれ侍らて名もきたま

らさらん花のさまはほいなきかたもや侍へき山めぐりなといひならはしては侍れとこれや時雨のめくる雲とをけるはいかにそ聞え侍れば左猶姿をかしく侍にや

八百八十六番

左持

女

房

はれくもり時雨ふるやの板まあらみ月をかたしく夜はのさ蓮

右

家

長

袖さえてぬる夜の床もさむしるに夢をはかなみ松風そふく

月をかたしくさ蓮のおもかけなへてならすおかしく思ひやられ侍をぬるよの床もといひて夢をはかなみと思よれる心詞是も優には聞え侍にや

八百八十七番

左 持 左 大 臣

なにはかた光を月のみつ鹽にあしへの千とりうらつたふなり

右 三 宮

まれにこし都の人ばかれはてゝ草の戸さしにあられふるなり

あしへの月の光草篇のあられの音又いつれと申かたくや

侍らん

八百八十八番

左 勝 前 權 僧 正

おく山の雪けの水になかれ出て秋と冬とをみするもみちは

右 内 大 臣

ひとりれの友とや鷺もふる雪をゆるきの杜に立もさばかぬ

雪けの水になかれないつる紅葉ゆるきの森にさばかぬ白鷺

いつれもつれに思よりかたきさまには侍れとおく山の紅

葉秋を見せん色はふかきかたや侍らん

八百八十九番

左 公 繼 卿

吹まよふ峯のあらしはつもりにし庭の木葉を又ちらしけり

右 勝 忠 良 卿

新拾遺

今ほとてあさちかれ行霜のうへに月影さひしなのゝしの原

右は下句やなかく聞え侍らん

八百九十番

左 勝 公 經 卿

手にくみしあての玉水さゆるよに契をむすふうすこほりかな

右 兼 宗 卿

ふる細のねやの板まにもるあられ思はぬ床に玉をしきける

契りをむすふ水ことは儼に聞え侍へし玉敷の床のおもは

ぬことはいさきにも侍つるにや又か様の心つねにぬな

れても侍らん

八百九十一番

左 季 能 卿

そことなき雪を心にわけさせてみぬ深山へのこゝにさひしき

右 勝 通 光 卿

みる人に秋の名残をしのへとやかれ野にさゆる冬のよの月

初の句のそこおほりの句のこゝろこひねかはれぬさまに

や聞え侍らん枯野にさゆる冬のよの月うるはしきさまに

は侍らん

八百九十二番

左 宮 内 卿

つの國やなにそはあしのあるかひは風もあらはに宿はなりつゝ

右 勝 釋 阿

はつせ山花ふかき鐘におとろけは旅れの床も霜そさえける

右のすかたことはめつらしきには侍られといとをかしく

聞え侍いかゝ

八百九十三番

左 勝 讃 岐

霜結ふ冬のよなくかさなりて風のみかれぬ庭のあさちふ

右 俊 成 卿 女

待人もとふへき里もなげれとも時雨ふる夜はぬれさりけり

風のみかれぬ庭のあさちふいとよるしく侍かな

八百九十四番

左持 小侍 從

夕しほにあら磯浪やさばくらんぬもさたまらず鳴千鳥かな

右 丹 後

時雨たに音にしらるゝ山里のならのかれ葉に霰ふるなり

ぬもさたまらずといへるおかしきことはには侍らぬにや

あら磯のゆふしほも山さとの寝いづれもふりてや聞え侍

らん

八百九十五番

左 隆信 朝臣

我門のかり田のれやにふす鳴の床あらはなる冬のよの月

右勝 越 前

みし人もとてのみこそ杉の庵にたえず音する村しくれ哉

杉の庵の時雨も詞のつゝき優に侍を田家の冬月猶すかた

いひしりてや聞え侍らん（或本判詞如此）左歌殿富門院大

輔先年所詠也作者定忘却歟隨右歌優也

八百九十六番

左勝 有家 朝臣

新抄霜をかぬ人も今はかれはてゝ松にとひくる風をかばらぬ

右 定家 朝臣

しほればや露のかたみになく霜も猶嵐ふく庭のよもきふ

霜をく草を詞にあらはさすして風吹松の音にとはれたる

心おなし人めかるゝもかくてこそいと宜聞え侍れ

八百九十七番

左勝 保季 朝臣

けふまては猶とちはてぬ氷にて音をぞ残す谷川の水

右 通具 朝臣

霜結ふ袖のかたしき打とけてれぬよの月の影ぞきむけき

左猶とちはてぬ氷にてなとさるかたのすかたに侍へし右

袖のかたしき打とけてれぬよと侍を五文字のかすにつけ

てくはしくよみつゝけぬ程はかみにことばりたる襟にそ

聞え侍さむけきも此歌の詞つかひにばすこし思はすとや

侍らん如何

八百九十八番

左勝 良平

大井川なみは木葉になりはてゝ峯に色なき嵐山かな

右 家隆 朝臣

新抄夕つくひさすかにうつる柴の戸に霰ふきまよ山おろしのかせ

柴の戸の冬のかけ霰の音山おろしのけしきもめのまへに

むかへる心ちして誠にをかしこそ見え侍めれ左歌させ

るとかなくは侍へし

八百九十九番

左 具親

松風も今は嵐になるみかた色なき浪のふゆのさひしき

右勝 雅經

霜やこれかばらぬ色を置あかし月にかれ野の秋のふる郷

秋も見え侍りつるにや鳴見かたの松の風あらしとならん

千五百番歌合卷第十三

冬二

判蓮經 季經入道

九百番

左

東路を雪にうち出て見たせは浪にたふふうき島かはら

右 勝

寂

蓮

木葉ちるみきはなほらふ山風の跡にむすふは氷なりけり

左歌雪に打出てといへる波にもことよりてなかくは侍

なすこし思出らるゝ事そ侍作者は見おほはすも侍らん建

久二年左大將家百首

あしからの關路越行しのゝめに一村かすむうき島かはら

正治二年内大臣家歌合

駒なめて打出の濱よ見たせは朝日にさばく志賀の浦浪

雖の似し昨今事徐達之遺遺之聽打出見渡詞東路眺望心大

略相同此兩首歟右歌水句雖頗無詮風體似聊有心歟

九百一 番

左 勝

からにしき秋のかた見をたいしとや霜まで残る庭の一むら

右

三

宮

とふ人のふみわけてける庭の雪の跡をそうつむ夜はの月かけ

左歌そのものをあらはさすしてそのものとときかする一の

様に侍り彼霜の縦露のぬきこそよばからし山の錦のな

れはかつ散といひから鐘枝に一村のこれるは秋の形見

をたいぬなるへしとなとよめる姿なり霜までのこる庭の

一むらなとおもしろく侍り右歌心をかく侍れと猶霜ま

でのこるば詞をきまさりてやとそうけ給侍る

九百二 番

左 持

左

大

臣

霜の上になのかつばさをかたしきて友なきをしのさよふかき聲

右

内

大

臣

續松

時雨ともなにかはわかん神な月いつものたのもりのしづくは

左歌なのかつばさをかたしきて友なきをしのさよふかき

こそ誠心すみて聞え侍り右歌いつもの田の杜のしつく

はと侍るよろしきに似たり勝負いつれとおもひわきかた

く侍り

九百三番

左持

前權僧正

吉野山みれのしら雪いかならしふもとの里もふらぬ日はなし

右

忠良卿

しほしこそ秋のかたみとなかめしか霜に跡なき野へのいろかな

左歌よろしく聞え侍に上下の句のはての字おなしこれは

同聲韻病と濱成式にいたせり隨て天徳四年内裏歌合に兼

盛か歎冬歌に「ひとえつゝ八重山吹は開けなんほとへて

にはふ花とたのまん」とよめるを聲韻病と咎められたり

右歌これも歌からはおかしく聞ゆるに上下の句の始のお

なしくて聞よからぬ同歌合に中務戀歌に「ことならは雲

井の月と成ないん戀しき影や空にみゆると」とよめる左

方念人聞にくきよし申也左は聲韻病雖然ちかき比はあな

かちにはいからざるにや右は雖レ非病きよかられはな

すらへて爲持

九百四番

左

公繼卿

さが木葉に霜のしらゆふかけてけり神なひ山の明ほのい空

右勝

兼宗卿

さびしさも中々けさそわすれぬる深山の里の雪のけしきに

左歌は金葉集に「神垣のみむろの山に霜ふればゆふして

かけぬ賢木葉そなき」といふ歌にこそ侍めれ右歌結句そ

いますこし思へくやと聞ゆれとも古き心ならは爲勝

九百五番

左

公經卿

時雨たにあらそひかれし槇のはのうつもればつる雪の夕くれ

右勝

通光卿

初時雨むら雲まよふ夜半の月なかめわひぬる山かけの庵

左時雨たにあらそひかれしとは色を染たぬにやつも

れはつるといへるもいかゝ右歌下の二句いかに侍ともま

さるへくや

九百六番

左

季能卿

せめて猶おしみなれにし花ゆへに雪ふく風もうらめしき哉

右勝

釋阿

霜さゆるかれ野の草のはらにきて涙そやかてこほり成ける

左歌心はきこえ侍に雪ふく風こそあまりたしかに侍れ右

歌かれのゝ草の原にきてなとよろしくうけ給侍り仍爲勝

九百七番

左

宮内卿

神な月夕日のかけに成にけりあらたちそむる奥つしら涙

右勝

俊成卿

ふみわけてさらに尋る人もなし霜にくちぬる庭のみみちは

左の波あらたつよりは右の霜にくちはてぬるはまさりて

や侍らん故猶右を爲勝

九百八番

左勝

讃岐

世にふるはくるしき物をまきのやにやすくも過る初しくれかな

新古今

右

丹

後

なには江にむれゐるたつもかくれなく蘆の下葉は霜かれにけり

右歌蘆の下はことなるふしならぬ共歌からうるはしくや

侍らん左歌やすくも過る初時雨かなといへるよろしく侍

り仍爲勝

九百九番

左

小

侍

從

浪かへるいそまかくれの友千鳥浦よりなちにうらつたふ也

右勝

越

前

山里の庭のあさちふ霜かれて人めもさそなおもふかなしき

左歌いそ浦の様なる事をはふるくはとかめ申にや今はあ

なかに申さぬこそされとも先例を申さんもことなかる

へし右歌はよろしく侍れば爲勝

九百十番

左持

隆

信

朝臣

何ゆへのうらみをすまの友千鳥浪にしほるゝあかつきのこゑ

右

定

家

朝臣

花すゝき草の袂もくちはてめなれて別し秋をこふとて

左歌何ゆへのうら見をすまの友千鳥浪にしほるゝ曉なと

いへるよろしくこそ侍れ右歌草の袂くちはてめなれてわ

かれし秋をこふとてといへる又やさしく侍ればいつれと

思かね侍りぬ

九百十一番

左持

有

家

朝臣

神な月やまきくもるむらしくれほとやはふるにけふも暮ぬる

右

通

具

卿

水鳥の上もなほらふなとすなり袖にそ消ぬ冬のよの霜

左歌村時雨ほとやはふるにけふも暮ぬるといへる冬日み

しかしといへとも無下にほとなくや右歌野への旅ふしと

もあさちか原にかたしく袖なともいほて袖にそきえぬ冬

のよの霜といへる兩首共に有不謬仍爲持

九百十二番

左持

保

季

朝臣

草の庵もあらぬをかやと成ぬればよなくなれし虫のれもなし

右

家

隆

朝臣

春秋のいろ／＼ことにみし夢のさむるも冬の梢成けり

左歌をかやそ心えかたく侍れとも右歌夢思ときかたく侍

れはなすらへて持とや申へからん

九百十三番

左持

長

平

いつしかと鴨のはかびに霜をきて玉もの床にこほりぬにけり

右

雅

經

この比は月こそいたくもる山の下葉のこらぬ木枯のかせ

左歌冬のけしきあらはれて聞え侍り右歌下葉のこらすふ

かん木枯の風さると聞え侍り又持と申へきにや

九百十四番

左勝

具

親

今は又きくのまかきはかれはてゝなきまふ霜にあり明の月

右

寂

蓮

涙さばくなしの羽風もさたまりぬ結びやしつる池のうすらひ

左歌菊はかれはてゝ月と霜との又まよふらんさもと聞え

侍り石歌浪さばくなしの羽風も定まりぬといへる事心え

す池やこほりぬる羽風にさばく浪もさたまりぬとこそい

ふへけれことは上下したるにや又しつるといふ詞もてつ

つきに聞ゆれば左の勝なるへし

九百十五番

左勝

顯

昭

むさしの草のゆかりもとひかれつゝさきの原の雪の夕くれ

右

家

長

結びきて露にかはりし初霜の霜より雪のふる郷の庭

左歌むさしのいつきの原と有詞に侍りがねつといふつ

文字そいか侍へき右歌露霜雪つくせり事しけくやつも

こそ心ゆかれとも左勝なるにや

九百十六番

左持

女

房

深山ふくよもの木枯さえ初て横の葉しろく初雪そふる

右

内

大

臣

なまゝ原あられふる夜を思ひ出るいまさら／＼に獨のみれて

左歌み山ふく四方のこからしさえそめてまきのは白くな

と侍るたけたかくこそ承れ右歌和泉式部が竹の葉に霞ふ

るなりさら／＼にひとりいぬへきなとよめるを思ひてあ

られふる夜を思ひいつる今さら／＼になと侍又おかしき

さまにとりなされて侍ればいつれとわきかなく侍り

九百十七番

左

左

大

臣

網代もる宇治のさと人いかばかりいさふ浪に月をみるらん

右勝

忠

真

卿

續後律

あはち島浪もてゆへる山のはに氷て月のさえわたる哉

左歌させるふしの侍らぬにや右歌は歌から詞つゝきなと

きよけにうけ給る仍爲勝

左勝

前

權

僧

岩にさく雪の花こそあはれなれ春も見さりき秋も見さりき

右

兼

宗

卿

侍人の跡をばつけよ庭の雪ひとりはいかいみ山へのさと

左歌は古今に紀秋岑が歌に「白雪の所もわかずふりしけ

はいほほにもさく花とこそみれ」とよめるを思ひて岩に

花さくと侍にや跡なきにあらず面白こそ見え侍れ下の二

句ことにめつらしく侍り但雪の花春の初に花とこそみれ

らん右歌雪は跡つけかたくこそよみならばして侍れとら

けふこん人をなともよめればそれはあなかりの難にあら

すひとりと人とそ申比の判者或は爲病いまた事きれすな

と判詞に申けるしかればめつらしきうへにこの不審なき

九百十九番

左持

公

繼

卿

とふ人のなとかときけは山かけの眞柴かうへにあられふるなり

右 通 光 卿

道たへぬけふよりやさば都人心みゆへきにはのしら雪

左歌とふ人のなとかときけはといひ右歌けふよりやさば

みやこ人といへる勝負難辨歎

九百二十番

左 公 經 卿

うちとけし岩まの水は今夜こそまことに氷る冬の月

右 勝 釋 阿

むら雲の時雨し空はそれなからさゆる嵐にあられふるなり

左歌ことなるあやまりは侍らぬに右歌さゆる嵐にあられ

ふるなりと侍まさるへきにや侍らん

九百廿一番

左 勝 季 能 卿

なときけは楢くらぬ木葉にもまことに袖はうち時雨けり

右 俊 成 卿 女

風にちる木葉みたるゝ露霜にむすほれ行冬のよの夢

左歌初の句になときけはと打いたせるやにはかなるさま

ならんされとも心なきにあらす右歌風にちる木葉みたる

るは今の世にはあなかにさらぬにやと思給ふれとも第

一第二のはての文字おなしきは頭尾の病と濱成式にい

たせりうちきくも聞よからぬに左の可勝にや

九百廿二番

左 勝 宮 内 卿

いにしへに花ももみちも成はてゝ雪にそ宿の楢をはまつ

右 丹 後

曉の時雨のをとにたくふなり寐覺ちよほす鳴のはねかき

右歌はうるはしくよまれたれとも左歌は心ふかくめつら

しきやうにうけ給れば猶まさると申へきにや

九百廿三番

左 勝 讀 岐

うちはへて冬はさばかり長夜を猶のこりけるあり明の月

右 越 前

夜もすからさえつる床のあやしさにいつしかみれば讀のはつ雪

左歌心おかしきうへに猶のこりける在明の月よろしくや

右歌これもよろしく承はれ共左の猶のこりける右明の月

は心にとゞまれりと可申

九百廿四番

左 小 侍 從

谷ふかみ住人いかにせよとてかこほりをむすふ山川の水

右 勝 定 家 朝 臣

時雨こし峯の松かけつれもなくすむには鳥の池の通路

左歌めつらしき事なきうへにすむ人いかにせよとてかと

いへる無下になに心もなくや右歌こゝろ侍ればまさるへ

し

九百廿五番

左 持 隆 信 朝 臣

奥つ浪たかしの濱のさよ千鳥跡もさためめ聲きこゆ也

右

通具朝臣

冬のよのれ覺ならひしまきのやの時雨かうへにふるあられ哉

左歌おきつ浪たかしの濱のなといひよれるほとよろしく

聞ゆるに跡も定めぬなと侍心ありと申へし右歌もよろしく

侍り持と申へきにこそ

九百廿六番

左勝

有家朝臣

村雲のすきのいはりのあれまより時雨にかはる夜はの月哉

右

家隆朝臣

楸おふるさほの河原にたつ千鳥空さへ清き月に鳴なり

左歌むら雲の杉のいはりのあれまより時雨にかはるらん

月面影侍り右歌かくいひなれて侍れともさしたるふしは

侍らぬにや左つよきにこそ

九百廿七番

左持

保季朝臣

外山なる松よりこゑのうつりきてかれのゝ嵐月にふく也

右

雅經

淵はせにかはるのみかは飛鳥川昨日の浪そけふはこほれる

右歌あすか川ふらは瀬になる事つねに聞ゆるにとりて此

歌はこほりにとりよれるたくみななるにや左歌外山なる松

よりこゑのうつりきてかれのゝ嵐月に吹なりさも侍なん

と思給へれば持なとにてこそ侍らめ

九百廿八番

左

眞平

あさちはらこほれる露に霞ふり玉よりうへに玉そこほるい

心とやびとり明石のうら千鳥友まとふへき夜半の月かは

左歌玉よりうへに玉そこほるいなと侍あしからず侍れと

右歌びとりあかしの浦千鳥といひて友まとふへき夜半の

月かはといへるよろしきにや仍以右爲勝

九百廿九番

左持

具親

霜にのこるみとりはいつか嶺の松ありとはかりそ雪の下風

右

家長

はりまかた磯うつ浪のなみのまに友まふ千鳥こゑのこる也

左歌心なきにあらす右歌是又あしからず持と定申

九百卅番

左持

顯昭

住吉のはそ江の蘆も霜かれてよそにもしるきみなつくし哉

右

三宮

谷川の岩うつ波やこほるらん嶺の嵐の音のさむけさ

左歌ことなるとか侍らぬにや右歌これもあしからず侍に

の文字や多侍らんされ共又持なとにて侍らん

九百卅一番

左持

女房

里人のいはりにたげる稚柴のけふり吹しく山おろしの風

右

忠眞卿

ひとつ空におなし雲こそかはりけれふもとは時雨嶺はしら雪

左歌けふり吹しくなとよろしく聞え侍り右歌是又ゆへなきにあらされは猶持と申へし

九百卅二番

左勝

玉葉

朝日さす氷のうへのうすけふりまたばれやらぬよとの河きし

右

兼宗卿

吉野山さくへき花のしるへかとみれば松にも雪そふりける

左歌よろしき姿にこそ侍るめれ右歌又させるとかきこえ

侍らねとも左は詞つかひまされるにや

九百卅三番

左

前權僧正

白浪のこえてかへるとみえつるや雪に風吹すゑの松やま

右勝

通光卿

うちしほれ今はお花か末の露むすひし秋の跡しのひけり

左歌は古今に「浦ちかくふりくる雪はしら浪の末の松山

こすかとそみる」と侍る歌を思て風に雪をふかせて白浪

をこしてかへされて侍り右歌打しほれてお花か露むすひ

し秋をしのへるはすこしまさるへきにや侍らん

九百卅四番

左

公繼卿

目をふれとまた跡もなき庭の雪にとほれぬ程を人に見えぬる

右勝

釋阿

冬くればなのかやくとや炭かまのけふりにきをふおほはらの里

左歌「我宿は雪ふりしきて跡もなし踏分てとふ人しなけ

れば」といひ又一雪深き道こそしるき山里は我より先に人こさりけり」といへる歌にや聞なれたる態也右歌は

萩のふる枝をやくとやくかなとよめる思出られてなのか

やくとやといへるおかしくこそきをふもたよりありて侍

り仍勝と申へし

九百卅五番

左

公經卿

うちむれて遠さかり行千鳥哉浦よりなちにこそを殘して

右勝

俊成卿女

露こほる野路の玉さいよなへつゝ嵐にそよき霞ふるなり

左歌浦を遠さかりなん千鳥のこゑの殘らん事ありかた

くや上下の初字同歟右歌嵐にそよきあられふるなといへ

るすこしまさるへきにや

九百卅六番

左勝

季能卿

中々に軒の掣の音もなし木葉のふるもさひしかりけり

右

丹

後

夜やさむき友なし千鳥打わひて浪の立ぬにれをのみそなく

左歌させるあやまり聞え侍らす右歌金葉集に「あふ事に

いつとなきさの濱千鳥浪の立ぬにれをのみを鳴」といふ

歌にたかひ侍らすやうちわひてといふ心もゆかす左の勝

にこそ

九百卅七番

左勝

宮内卿

ほともなく風のけしきもあらち山みれよりわけて積る白雪

右 越 前

これをきかん生田のおくにさ夜ふけて妻や争ふなしのもろこゑ

左歌ことなるあやまりなきにや右歌生田のおくおほつか

なしも生田のおきにや生田の杜のおくにをしるるへき

所やは侍る左可勝

九百卅八番

左 持 讃 岐

露は霜水は水にとちられて宿かりわふる冬のよの月

右 定 家 朝 臣

まきのやに時雨あられば夜かかせてこほるかけひの音信そなき

左右ともに心おかしく侍れば勝劣難決

九百卅九番

左 小 侍 從

たにかくれ木葉かしたのむれ水こほればやらん音信もせぬ

右 勝 通 具 朝 臣

あま人のほしあへぬ袖もこほらんをしまの浪に月さゆる夜は

左歌こほればやらん音つれもせぬといへるほと無下にお

さなくや右歌あま人のほしあへぬ袖といひてなしまの浪

に月さゆる夜はといへるいひなれてしほはこほらぬ物な

れともこれは月の光なこほりによせたる也仍右爲勝

九百四十番

左 勝 隆 信 朝 臣

山のほは皆よりしらむ雪のよの猶さえ行や明ほのゝそら

右 家 隆 朝 臣

衣手に松風さむみ住よしの夕浪千とりうらつたふなり

左歌心なきにはあらす右歌これはひとつの姿をよめるに

つなにとなくいひちらしたり左つよく侍らん

九百四十一番

左 勝 有 家 朝 臣

柴のいほの軒はの目かけいまさらにくちるとすれば霞ふる也

右 雅 經

つくは山とけき梢やいかならんこのもかのもの雪の下おれ

左右をのゝよろしく侍にとりて左はいますこし思へる

所侍にや猶左勝にや

九百四十二番

左 保 季 朝 臣

はる／＼と猶行末やおほえ山いくのゝみちの雪の明ほの

右 勝 寂 蓮

ま賀のうらはこほりにけりな有明の月より後にやとる月かけ

左歌はる／＼となを行末やおほえ山いくのゝ道のなとい

へるあしからぬに右歌の有明の月より後にやとる月かけ

といへるまさり侍らん

九百四十三番

左 勝 良 平

さ夜千とり浦つたひ行浪のうへにかたふく月も遠さかりぬる

右 家 長

波のうへに行ふもしらぬうき哉すたちにはけりな鳩のひなとり

新後拾遺

左歌さよの月もなとかたふくと讀さいらん五六日の月は
よゐに四にはかたふくにこそ侍めれ有歌にはのうきすの
ゆられん事冬にかきるへからす又にはほは子をばいつうむ
にかはいつれの鳥も春もしは夏のほしめなとにうむにこ
そひなすたちたりといふ共かならず冬と思かたし左まさ
るへきにこそ

九百四十四番

左

具

親

木からしやいかに待みん三輪の山つわなき杉の雪おれの聲

有勝

三

宮

雪ふればしかのからさき浦さえて氷のうへによするしら浪

左歌心えかたし伊勢か三輪の山いかに待みん年ふ共とよ
める歌を思ひて待みんとよめる歟それはあひしれるおと
こ心かはりにければおやの穴和守に侍けるもとへまかり
けるとて三輪の山いかに待みん年ふとも尋ぬる人もあら
しとよめるこれは木からしやいかに待みんとよめる心得
かたく侍り有歌聞なれたるさまなれ共かち侍らん

九百四十五番

左

顯

昭

千鳥なくせとのうきれに月よきあはわさひしき浪の七哉

有勝

内

大

こゆるきの磯の松風をとすれば夕波千鳥たちさばくなり
左歌つれに聞なれたるさまにや月夜さしといひてふるま
へるばかりにや有歌こゆるきの磯の松風をとすればとい

九百四十六番

左

大

臣

おなし雪のよそめ成けり初瀬山花とみつるも月とみつるも
しきしの夜半の枕はさえつれと今朝はうれしき庭の初雪

有勝

前

備

おなし雪のよそめ成けり初瀬山花とみつるも月とみつるも
しきしの夜半の枕はさえつれと今朝はうれしき庭の初雪

有勝

阿

おなし雪のよそめ成けり初瀬山花とみつるも月とみつるも
しきしの夜半の枕はさえつれと今朝はうれしき庭の初雪

ひて夕浪千鳥たちさばくなり侍るよろしきに似たり仍猶
有勝

九百四十六番

左勝

女

房

なしてゐるやなにはの蘆のしたかくれかりぬる鴨の霜に鳴こゑ

右

兼

宗

卿

いつかわかすかたの池と思ふにもかればのあしのあはれなる哉

左歌をしてゐるやなにはの蘆のといひてかりぬるかも

霜に鳴こゑと侍る歌からたけたかく侍り有歌寒蘆をみて

老後を歎くさもありぬへき事に侍れ共わが妾なとさうれ

たるあまりに侍りたうきかりすきん事を思ひあはせたる

さまはよく侍ぬへしいかにも左まさるへきにこそ

九百四十七番

左持

左

大

臣

みむろ山嶺のひばらのつれなきをしほる嵐にあられふる也

右

通

光

卿

たひれからきしやしのはぬ幾千鳥なれたるあまの袖をといや

左歌よろしく侍り有歌又よろしく侍りなれたるあまの袖

を問はしやなと又いひなれて侍ればこれかれ持と申へし

九百四十八番

左

前

備

正

おなし雪のよそめ成けり初瀬山花とみつるも月とみつるも

右勝

釋

阿

しきしの夜半の枕はさえつれと今朝はうれしき庭の初雪

左歌心詞めつらしく侍り初瀬山の雪のよそ目花とはうた
かひなく見え侍なん月とは庭の雪はまかひ侍とも泊せ山
のよそめには見えかたくやと思ひ給ふ右歌はうるはし
く聞え侍れば勝と申へし

九百四十九番

左

公

繼

卿

木葉をは風もはらひき雪にこそうつもれにけれ冬の山里

右勝

俊

成

卿

女

おく山の雪氣の水やくたすらん瀧つ岩につもるもみちば

左歌心なきにあらず右歌は古今に「此川にもみちはな

る奥山の雪氣の水そ今まさるらん」といへる歌にこそふ

るきによりて以右爲勝

九百五十番

左持

公

經

卿

あし鴨のうはけの霜をうちばらひ羽風もさやに氷る空哉

右

丹

後

こほりあて鳥たにすます成にけり昔の池の跡ならねとも

左歌は風もさやにとよめるいかに心うへさにか萬葉集に

「さゝの葉は見出も清にみたる共」と讀る或本にはさやに

とよめり萬葉のことくはそよくにや此歌はさゆるよしに

やそよきてこほる空といへり又さやに見ゆるなとこそよ

めれ右歌むかしの池はもしかつま田の池にや水なきによ

りて昔の池といはん荒涼にや侍るらん持なるへし

九百五十一番

左

季

能

卿

さゆるよの水のうへに住なれて月に鳥あるかつまたのいけ

右勝

越

前

あり明の月のてしほに湊ふれいまや入るらん千鳥たつ也

左歌心なきに侍らぬに鳥あるといふ詞そいかいと承る又

こほりしぬれば鳥はあすこそよみならはしたればすみ

なるいと侍るおほつかなく侍り右歌心なきにあらずみな

と舟そいかにそ侍れとも勝成へし

九百五十二番

左

宮

内

卿

花にとひし跡を尋て待人もこそすゑの雪にあらし吹なり

右勝

定

家

朝

臣

これやさば秋のかたみの浦ならんかはらぬいろを奥の月かけ

左歌花のおりはとひし人もいまはこそとよめるにや心き

こえ侍れとも右歌「是やさば秋のかたみの浦ならん」と

いへるよろしく侍りおきの月かけそいかに侍れとも勝と

申へし

九百五十三番

左持

讀

岐

風わたる池のみきはのいかならん袖たにこほる冬のよなく

右

通

具

朝

臣

こほりぬるかけひのをとのたえしより夜はの嵐ぞれ覺問ける

左歌「霜をかぬ袖たに浮る冬の夜の鴨の上毛を思ひこそ

やれ」といふ歌の心をとかくしるせるにや右歌夜はの嵐

のれ覺とひけるもあしからねは持と申へし

九百五十四番

左

小侍 從

あられふり風もはけしき冬のよにつかはぬなしの聲をわふなる

右勝

家隆 朝臣

夏かりの玉江のあしも霜かれて葉分の浪にをしそ鳴なる

右歌霜かれの蘆の葉分にをしのなかん事夏かりのといは

ても侍りなんかしされ共左歌はわふるといふ詞いかにそ

侍れはまぐへきにこそ

九百五十五番

左持

隆信 朝臣

春秋の花が月かとなかむれば雪やはつもる庭も梢も

右

雅經

とふ嵐とはぬ人めもつもりてはひとつなかめのゆきの夕くれ

左右まことにめつらしき風情をもとめいたされて詞をい

たはらぬにこそ持と申へし

九百五十六番

左勝

有家 朝臣

野へみればかつふる雪をわすれ水たいむらきえの心ちこそすれ

右

寂蓮

ひとりのみなりぬる空に雲消て雪の光にすめるよの月

左歌心なきにあらず右歌ひとりのみなかむる空に雲きえ

てといへりひとりのみといへるよせなきやうに侍左勝に

こそ

九百五十七番

左勝

保季 朝臣

雪つもる梢を花にまかへてもとふ人つらき庭の跡かな

右

家長

さゆる夜のをのか上毛をはらひわび霜に物思ふなしの獨れ

左右の歌各心なきにあらぬに右のばらひわびといひきれ

るや猶おもふへからん左つよくや

九百五十八番

左勝

良平

月影のやとりなれたる池の上にこそほりばてぬもわかれさりけり

右

三宮

夕ま暮風のけしきもあらち山雪に宿かるこしの旅人

左歌池のうへなと侍そいかいと聞え侍れ共こそほりばてぬ

もわかれさりけりといへる心なきにあらず右歌雪にやと

かるやうの詞此世につれに聞え侍り又上下の初文字間

くし左つよくや

九百五十九番

左

具親

春秋のなかめは雪につもりけり花と月とをみよしの里

右勝

内大臣

つきはてし秋のあはれは曉の時雨のなとに猶のこりけり

左歌又上下の句の始の字おなしきは聞にくしと申とかや

したかひてなかめと見るとはおなしことにや右歌つきは

てし秋のあはれ時雨のなとに残らんまことに心すみて聞

え侍り鼓以右爲勝

九百六十番

左

顯

昭

夕かけてつまや戀しきかみ鳥のいそまのうらに千鳥しは鳴

右勝

忠 真 卿

空や海月やこほりとさ夜千鳥雲より浪に聲まよふ也

左歌かみしまのいそまの浦に千鳥しはなくなとさひしく

侍れとも右歌の「空や海月や氷とさよ千とり雲より波に

こままよふ也」といへる左さひ／＼として右の勝にこそ

九百六十一番

左勝

女

房

浦ちかき末の松山雪ふれは冬よりうへな浪やこゆらん

右

通 光 卿

それとみし月の光も池水にかさねてむすふうす水かな

左歌「末の松山雪ふれは冬よりうへな浪やこゆらん」とい

へるまろしく侍り右歌これとまろしく侍れ共猶冬より上

な浪やこゆらん立よさり侍なん

九百六十二番

左勝

左 大 臣

山里はいくへか雪のつらるらん軒はにかゝる松の下折

右

釋 阿

雪よこし雲さへこほる冬の雨の空にむすへる名にこそ有けれ

左歌いくへか雪のつもるらんといひて軒はにかゝる松の

下折まろしく侍り右歌雲さへこほる冬の雨のといひて空

にむすへるこほりむすふおなし心にわ左の勝にや

九百六十三番

左勝

前 權 僧 正

白雪のなへてふれは海の花冬さく色はかひなかりけり

右

俊 成 卿 女

新古今

さえわひてさむるまくらに影みれば霜ふかき夜の有明の月

左歌梅花それとも見えす久かたのあまざる雪のなへてふ

れいとはいふ歌の詞をおもへり梅花といへる高葉のふる

きことはなのへられたり冬さく色かひなしといへる心あ

る也右歌夢ともぬる共いはてさむとまよおほつかなし左

かつへくや

九百六十四番

左

公 繼 卿

夕されはさほの河瀬の風さむみ空に浪たつさよ千とり哉

右勝

丹 後

さえ／＼て夜のまにつもる嶺の雪を朝ある雲とたれなむらん

左歌夕されはと侍程にさ夜千とりと侍る時刻やたかひて

侍らん右歌させるふしもなく難も侍られは勝へきにや

九百六十五番

左

公 經 卿

岩間けり昔の下水行なやみしられぬ冬の音こほる也

右勝

越 前

雪にまたかくれてすめる津のくにのこやもあらはに立煙かな

左歌水の行なつみ源氏物語に侍にやつこほり閉し石まの

水も行なやみ」とよめるにや大方如此の物語などの詞を
あなからの名事ならずはよましなと先達申侍るに近比
おほくよみあへるにや右歌は「蘆の葉に隠れて住し津の
國のこやもあらはに冬は來にけり」といふ歌を雪にとり
なせり心なきにあらずまさるへきにこそ

九百六十六番

左持

季能卿

かたしきの袖こそぬるれ嶺わけに時雨落くるまつかせの音

右

定家朝臣

浦かせにやく驪けふり吹まよひたな引出の冬そさひしき

左歌時雨おちくる右驪けふり同じ程にや侍らん

九百六十七番

左持

宮内卿

紀のくにやあまのふせやのとまひさし吹上の千とり月に鳴也

右

通具朝臣

玉ほこやかよふを川のうす氷むすひもわへぬ音きこゆ也

左歌あまのふせやのとまひさし吹上のちとり月に鳴なり

なとよろしきにや右歌これ又よく侍に初五文字のやの字

ともに侍れとも左は聞なれて耳にたち侍らす左つよくや

九百六十八番

左持

讀岐

れ覺する人なかりせば消ぬともいかてしらまし夜はの埋火

右

家隆朝臣

あまのほら雪ふりくれば足引の山こそ涙のふもとなりけれ

左歌させるふしなくや聞えれ共いか右歌涙の聴心えか
たく侍れはいつれと申かたく侍り

九百六十九番

左小侍從

朝日さす池の水のひま／＼にむれゐるなしの友そあまれる

右勝雅經

涙のうへに友なし千鳥打わひて月にうらむるあり明の聲

左歌させるふし侍らぬうへに友そあまれる心えかたし右

歌は月にうらむる有明のこゑなといひなれて聞え侍り右

勝也

九百七十番

左勝隆信朝臣

みよしの冬すまゐそあはれなる目数は雪のふるにまかせて

右寂蓮

色も猶むかしの袖そしられる雪ふりうつむ軒のたち花

左歌目数は雪のふるにまかせてといへる心なきにあらず

右歌色も猶昔の袖そしられるとばいかにしられるに

か左まさると申へし

九百七十一番

左有家朝臣

冬かれのすいきなしなみ古郷のふみ分かたき庭の雪かな

右勝家長

さいのくまひのくま川につらいゐて胸もとめす冬の明ほの

左歌こなるあやまり侍らぬにや雖非病上下句初字さ

にくきか右歌「さゝのくまひのくま川に駒とめて」といへる歌を引なせる也左はきゝよからぬ文字侍れば右勝なるへし

九百七十二番

左 勝

保 季 朝 臣

とほれけるむかしの跡はなけれども雪ふみ分るをのゝ通路

右

三

宮

雪の下こほりのうへをすみかにて冬にこもれる池のをし鳥

左歌伊勢物語に雪ふみ分て君を見んとはといへる歌をおもひてより右歌雪の下氷のうへにをしのすまん事いか

か侍へからんこほりぬれば池に鳥はぬめにや又雪をばらはてうつもれん事もけにも共おほえ侍らねは左勝侍りな

ん

九百七十三番

左 持

良 平

山里は軒はの岡をふく風にこほりておつる松の白雪

右

内

大

臣

さ辰川に千鳥なくなり夕されは衣手さむしたれとかはれん

左歌軒はの岡いときよからす右歌又さしたるふし聞え

ねは持と可申

九百七十四番

左 持

具

親

跡たゆる都の外の山さとは人もうらみす雪もいとほす

右

忠

良

卿

浪のなとは水にたえて蘆鴨の上毛の霜にあられふる也

左歌おろかなる心及かたし跡たゆる都の外かはうたかひ

侍らす人もうらみす雪もいとほすとは若人跡たえたる所

なればとはぬ人もうらめしからす道たゆる雪もいとほす

とにやあきらかならす右歌浪のなとは水にたへたるに鴨

の上毛の霜にあられふるなりとはいは毛にふらん散をと

し侍りなんやなと聞程に近つきなんに鴨にけさるへきに

あらすこのうたかひ侍れば左右勝劣定めかたく侍り

九百七十五番

左 持

兼 昭

宗 卿

こほりしてかちわたりするすはの海を出わつらふは鴨の浮舟

右

兼

宗

浪かくるこしまかさき友千鳥立かとすれば又きなく也

左歌鴨のうきふれなとゆへ侍へし右歌は入内御屏風の歌

にたるかなる判者が「風さゆるこしまかいその友千鳥た

ちぬは浪の心なりけり」とつかふまつる歌にこそ侍めれ

右勝と申さは愚詠をもてなすになりぬへければ於此番

者勝劣難に定申侍り

千五百番歌合卷第十四

冬三 判者同前

九百七十六番

左勝

女

房

雪のあした木のした風はさむけれと機もしらぬ花そ散ける

右

釋

阿

すむ月も千里の外は氷りけり雪のあしたはかきりたになし

右歌は秦甸之一千餘里凜々氷鋪といふ事を思て雪ばかりなしとよめりよろしき歌と承れとも左歌はおほよそ彼

本歌をかうとりなされたる思よりかたし兩首の雪の朝おもしろくうけたまはれ共猶以左爲勝

九百七十七番

左勝

左

大

臣

嵐ふく空にみたるい雪のよに氷そむすふ夢はむすはす

右

俊

成

卿女

新後條

松島やなしまか磯による浪の月のこほりに千鳥鳴なり

九百七十八番

左

前

權

僧正

梅かえのにはひうれしきたえま哉木ことに花の雪の明ほの

右勝

丹

後

冬のよはあまきる雪に空さえて雪の涙ちに氷る月かけ

九百七十九番

左持

公

繼

卿

ちりつもる木葉にうつむ谷川のやかてつらゝにむすはれにけり

右

越

前

かよひける人の跡たにみえぬ哉しきみか原につもるしら雪

左右の歌いつれと申かなく侍り

九百八十番

左

公

經

卿

さひしきないかにとほまし夕月日さすや岡への松の雪折

右勝

定

家

朝臣

續古今

なく千鳥袖のみなとをとひこかしもろこし舟のよるのね覺に

左歌さすやおかへの松の雪をなれなといへる「夕月夜さすや岡への松のはの」といふ歌を思てよめるにやその歌を

おもひてよまは夕つくよとや侍へからん萬葉集には夕月

日さすやと侍り古今の歌を思ひて松をよまは夕つく夜と

そ侍へき大略同様なれとも右歌本歌伊勢物語に「おもほ

えず袖にみなとのさはくらしもろこし舟もよりしはかり

九百八十一番

に」といふ歌をとりなせるゆへなきにあらねば以右爲勝

左持 季 能 卿

しほ風の蘆^{あし}まを分て吹たひにうきねやかはるあちのむら鳥

右 通 具 朝 臣

千鳥なく浦^のの西の松風^{かせい}に月もおしとやあり明のそら

左右歌とりしに侍り持と申へくや

九百八十二番

左持 宮 内 卿

さゆる夜もなとこそたえぬ岩かねにちる玉こほるみよしの瀧

右 家 隆 朝 臣

まきもくのひはらに雪やおもるらんたえぬ梢に柚木とるおと

左歌吉野の瀧後撰には「こほりこそ今はすらしもみ吉の

の山のたきつせ聲もきこえず」とよみ拾遺抄には「冬寒の

こほらぬ水はなけれども芳野の瀧は絶るよしなし」とよ

めり今の歌は散玉こほるとよめればたゆるふもなくとも

おち散らん水玉となとかこほらさらん右歌雪折の音柚木

とるをの音にきこえんさもおほえ侍れはいつれと聞

わきかなく侍り

九百八十三番

左勝 讀 岐

ふる雪に人こそとはぬ炭かまのけふりはたぬおほ原の里

右 雅 經

あしまとちいかにうきねのをしのこゑ先水ける浪の枕を

左歌よろしくも侍哉右歌すこしはおとり侍らん

九百八十四番

左 小 侍 從

ますらなは年よるひをにおもなれてかしろの霜も綱代とやなる

右勝 寂 蓮

柴の戸になとするかたをなむれはをのれと雪をばらふ松風

左歌年よるひをいかく又かしろの霜をあしろとはいかい

見侍へきしろきよし也右歌をのれと雪をばらふ松風おも

しろく侍れば勝侍へし

九百八十五番

左持 隆 信 朝 臣

石まわけおつるよそめはそれながら音せぬ瀧やたるひ成らん

右 家 長

駒とめて草の末にあられふりまたかりゆかぬきす立也

左歌さも侍なん右歌寂にきくすのおとろきへ立らんさも

ときこえ侍れば持にや

九百八十六番

左勝 有 家 朝 臣

王^またれかくてすむらんとたに白雪のふかきみ山のおくの庵哉

右 三 宮

やとりぬる影もこほれる池水に月をかたらふをしのひとりぬ

左歌おもしろくつうけくたされて侍り右歌やとりぬる心

ゆかす又月をかたらふをしもいかくそうけ給はれば左

つよくや

九百八十七番

左 保 季 朝 臣

ふりつもるいくえの雪のしたにてもけふりそたえぬをのゝ炭竈

右 勝

内 大 臣

秋はてゝ人めかれ行山さとにとまつ雪のいかにふるらん

左歌の心は煙不絶とたにこそとは思つて侍れともうち

きくは煙不立とにやと覺侍りたへぬとよむへきにや右ま

さりと承り侍り

九百八十八番

左

真 平

雪のうちこしのしら山みわたせば雲にくもらぬさらしなの月

右 勝

忠 真 卿

冬くれは谷の下水をとたえてひとりこほらぬみれの松風

左歌心なきに侍られとも右歌の下水はこほりて音せぬに

ひとりこほらぬみれの松風おもしろくこそ承れば爲勝

九百八十九番

左

具 親

なにゆへかさえ行浪とおもふらんこほればくなくこから浦風

右 勝

兼 宗 卿

やとるへき月をへたつる冬の池に心のつらゝ思ひしられぬ

左歌おもへる心さしほの聞え侍り右歌こほりの月をへた

つる池の心しられぬといへるすこしまさるへくや

九百九十番

左 持

額 昭

綱代木にちるもみちはなかたしきて月とゝもにそもり明とつる

右

通 光 卿

うちきらしはれぬ空にもなし鳥のつかひはなれぬ雪の夕くれ

九百九十一番

左 勝

女 房

月かとてはらはればまた白妙の袖にそきゆるふかき夜の霜

右

俊 成 卿 女

さらに又つめれる雪にうつもれぬ時雨ふりをきしなうの枯葉も

左歌(白妙の衣の袖を霜かとてはらへば月の光也危)とい

ふ歌引ちかへて霜を月かとてはらはすといへるおもしろ

くこそ承侍れ右歌彼文屋のありすふか萬葉集撰の時代を

御たつめの時「神無月時雨ふりをける憎のはの」と讀る二

句をとれりか様の名歌をばとるまじきにや隨て初五文字

まみてたるもよかられば左の勝にこそ

九百九十二番

左 勝

左 大 臣

にほの海やつりするあまの衣手に雪のになちるし賀の山かせ

右

丹 後

庭の面を我のみ見れはおしき哉月と化とにまかふ白雪

左歌は「さゝ浪やひらの山風海ふけはつりする蟹の袖か

へるみゆ」といふ歌を思へりよくとりなされて承るみ

つうみをはにほてるといへばかく侍にこそ右歌我のみ見

れはおしきかなといへるほとたいことはにや左はまさり

て承る

九百九十三番

左勝

前にイ橋僧正

冬草のかれぬとなにかおもふへき花の春こそ人もとひてし

右

越前

かつしかやまの繼橋雪ふればその名はかけにうつるはかりそ

左歌心なきにあらず右歌の心はかつしかのまのつきは

し雪にうつもるれとも影にそ其名はうつるとにや水とも

月ともいほてかけうつらんこといかまの八江とあら

は水は聞えなんだいしそのはしそ入江にわたしたれにみ

つありとかやいかにも左はまさりてや

九百九十四番

左勝

公繼卿

そのかみやあまの岩戸のあけしよも思ひしらるゝあかはしの聲

右

定家朝臣

ことそともなくてことしも杉の戸のあけておとろく初雪の空

左歌神樂のおこりに今夜の星を思あはせられたるゆへな

きにあらず右歌ことしもすきめといへる已に歳暮の心か

はつ雪におとろくといへる初雪及歳暮降ことのほかの

遅々賦仍以左爲勝

九百九十五番

左持

公經卿

ふりつもる雪を氷にしきかへて月かけさゆる山のはのそら

右

通具朝臣

庭のこのは色はかはれと跡ぞなき霜より雪にふりはつるまで

左右の歌あるひは月影さゆる山のはの空或は霜より雪に

ふりはつるまでとよめるいつれもわきかたく侍り

左

季能卿

そのかみの岩戸もかくや明星のあけ行空に鳥うたふ也

右勝

家隆朝臣

宿からん行衛も見えず久かたのあまのかはらのゆきくれの空

左歌は又神樂のおこりに侍鳥うたふそいかと承た鳥

をば詩なとには作り侍とかや八輩の鳥をうたふと讀るこ

と承不及若神樂催馬樂なとに侍かやしらぬ道に侍ればお

ほつかなく右歌伊勢物語に「狩くらしたなばたつめに宿

からん」といふ歌を思ひて讀り左は鳥うたふ心侍られは

以右爲勝

九百九十七番

左持

宮内卿

見たたは氷のうへに月さえてあられなみよるまのうら風

右

雅經

網代木やうちの川風夜はさえてゐのれのみよる波の音哉

左右共にさざる難聞え侍らず持歟

九百九十八番

左

讃岐

我友とたのみし竹は雪おれて人こそなけれ冬の明ほの

右勝

寂蓮

山風はさそひかれたる櫛の戸を行衛もしらすうつむ雪哉

左歌唐太子賓客白樂天愛爲吾友といふ事をよめり閑居の

歌にはよくや侍るへき右歌さもと侍ればまさるにこそ
九百九十九番

左持 小侍 從

見かりする山路にすゝの音はしてしらふの鷹は雪にまかひぬ
右 家 長

風さえぬ宇治の川おきこよひもやよらんとせぬひをい待らん

左歌するとしてとは病にや右歌風さえぬといひてよらん
ともせぬとよめる不の字二つ侍ればともに病にこそ仍爲

持

千番

左持 隆信 朝臣

まのうらの浪はこほりに音絶て立ゐる物ばかりのむら鳥

右 三 宮

^正風ふく八十うち河の浪の上に木葉いさふせいのあしる木

左歌よろしきにや右歌又殊事侍らねはいつれと申かたし

千一番

左 有家 朝臣

久かたのあまの川風さえぬらしなかるゝ月のなをこほるまで

右勝 内 大臣

三とせまでつかひなくともおし鳥のうきねのところに新枕すな

左歌なかるゝ月のなをこほるまでよろしけれとも右歌の

三とせまでつかひなくともなしとりのうきねの床ににひ

まくらすなと侍伊勢物語の「たし今宵こそにひまくらす

れ」といふ歌思ひ出られて侍をかしく勝侍なん

千二番

左 保季 朝臣

冬くればときはの山も風さえてかはらぬ松にあられふるなり

右勝 忠 良 卿

この人は跡なき庭にあらはれてうらみもふかしけきの白雪

左歌殊事侍らす右歌あとなき庭にあらはれて恨もふかし

今朝のしら雪おもしろく侍れば右爲勝

千三番

左勝 良 平

ふりつもるみやこの雪をなかめても思ひこそやれこの山こえ

右 兼 宗 卿

哀れなりしたのおもひやいかならん水なくいるおしのけころも

左歌殊なる難聞え侍らす右歌結句そ心ゆかす聞え侍る毛

衣といふ事もしのたらぬがいりたるさま也めつらしから

れと左勝にや

千四番

左勝 具 親

岩たゝく音も嵐につらゝゐて谷の小川も冬こもる也

右 通 光 卿

ものゝふや八十宇治川に月さえて綱代にひなのよるもねられす

左歌岩たゝくなとも嵐になといひて谷の小川も冬こもる

とゆへなきにあらず右歌ものゝふのやそうち川とこそふ

るくもいへものゝふやばきつかす左勝にや

千五番

左持

顯

昭

山あひにすれる衣やまかふらんばたれ霜ふる庭の榊葉

右

釋

阿

さゆる夜はしみつの涙も氷りけり玉そくたくるとこのさむしろ

左右歌共にあやまりなし可爲持

千六番

左勝

女

房

まさもくのきの小松に雪ふればはひはらかす点に雲そかいれる

右

丹

後

秋よりもさびしき影やまさるらん雪に月みるさらしなの山

左歌難侍らす詞つかひなとよく侍り右歌雪に月みる無下にた詞に侍れば左の勝とそ見え侍る

千七番

左持

左

大

臣

雲はるゝ雪の光やしるたへのころもほすてふあまのかく山

右

越

前

つく／＼とけふりにつけて思ひやる心そやかてなのゝすみかま

左のかく山右のすみかまいつれと申かたく侍り猶持也

千八番

左持

前

權

僧

色かへぬ冬のふとりをみよとてやつゐにもみち松のしら雪

右

定

家

朝

臣

かたしきの床のさむしろこほるまにふりやしく覽みれの白雪

左歌十八公榮霜後露、一千年色雪中深といふ詩の心によ

腰の五字そいかにそ侍れとさまてのとかならずや色かへ

ぬともみちせぬとは同心にや隨て不審也右歌これともろ

しく承れば猶又持と申へし片敷とふりやしくらんとは病

にや仍爲持

千九番

左持

公

繼

卿

炭かまのたえぬけふりのゆへなれや雪にもかよふなのゝほそ道

右

通

具

朝

臣

とふ人も跡なき庭はたえもせて庭のしら雪ふるにまかせて

左のゆへなれや右のたへもせずおなしにや是も猶勝

負難辨

千十番

左勝

公

經

卿

かれわたるすゝきをしなみふる雪にとほぬもつらし岡のへの里

右

家

隆

朝

臣

新後撰

あまつ袖ふるしら雪に乙女子か雲の通路花そちりかふ

左歌させるあやまりもなく又殊なるふしも聞え侍らす右

歌あまつ袖こそおほつかなく侍れ天なばあまつ空と申天

衣の義にやいひならへる事こそよく侍れふるしら雪に廻

雪の曲と聞え侍り依無不審左爲勝也

千十一番

左勝

季

能

卿

新古今

さよ千とりこそちかくなるみかた傾ふく月に鹽やみつらん

右

雅

經

むかしよりたいぬけふりのさびしきはむろの八島の冬の夕暮

左歌聲こそちかくなるみかたかたふく月に謡やみつらん
よろしく聞え侍り右歌上下句の初字同てきいよからぬ
うへにたいぬけふりとはいかにむろの八しまをはけふり
たつとこそよみならばして侍れもしいぬはたえぬ由也
さらばたいぬけふりと侍らばや誠に富士の山あさま
のたけなとのやうにももえずともけふりたつとよみなら
はせる事を依此不審左勝へし

千十二番

左

宮 内 卿

宮木野やはきのふるえに霜さえてこのした露はたるひなりけり

右 勝

寂 蓮

庭の雪にけふこん人を哀ともふみわけつへき程そまたれし

左歌はみやさのい木下露は雨にまされりといふ歌を
おもひてよめり宮木野に萩さく事疑なかるへし但此歌は
この下露とこそいへれ本歌にもなきことをはきあればと
てをさへてよまんこといかいはきのこのしたも心え侍ら
ず結句のたるひ成危もばたしにやと申承侍り右歌へけふ
こん人をあはれとはみんといふ歌を思へり雪の深きこ
ともよろしき程こそ侍りかといへるはよろしきに似たり
仍爲將

千十三番

左

讀 岐

柿川の水によとむ筏士や岩まの雪にはるなまつらん

右 勝 家 長

ふる雪のふかきいほりを人とはいへ柴おりくへてわふとこたへよ
左歌宜さまに侍れとも右歌和泉式部が「柴折くふる冬の
山さ」といふ歌を思ひてよめりふる雪の深き庵なとた
より侍り右の勝にや

千十四番

左 勝

小 侍 從

今朝はしもそる簷簾のかけも見し野守のかいみうす水して

右

三 宮

綱代木になみとびおとのよる／＼をひとりやあかすまきの島人

左歌はし鷹の野守のかいみおほつかなき事侍らす右歌あ
しる木に浪とひなとのよる／＼をとばたよりありて聞え
侍にひとりやあかすこそ山田もるひをなといはんやうに
聞え侍れ綱代には必一人あるへしと云事侍らんやうに侍
り左勝へき也

千十五番

左

隆 信 朝 臣

さむけしやつかはぬをしのよなをかき浪にがたしく霜の毛衣

右 勝

内 大 臣

罷ふるさむきみきはに立簾は玉になれたる鳥にそ有ける

左歌浪にがたしく霜の毛衣心えがたし霜は毛にこそ置
侍らめ隨て浪にがたしかば霜さへ侍なん霜もがたしくは
いはれ侍り右歌被崑崙山の鳥は玉としてうてとも玉になれ
てなとろかすとうたひ侍にや心めつらしくとりなされて

侍仍爲勝

千十六番

左 勝

有 家 朝 臣

よひのまは月をこほりと水の面にやかてもむすふ涙の音哉

右

忠 良 卿

くれて行冬の枝折か跡 えて由路もふかきまつの雪折

左 歌月を氷とみつの面になたくみに聞え侍り右歌心お

かしくや聞え侍にしおりと雪おれとは病とや申へからん

もし病ならは左の勝にこそ

千十七番

左 勝

保 季 朝 臣

うきれする枕なすきそさよ千鳥いつれのうちもおなし月影

右

兼 宗 卿

由かつの世にすみかまそあはれなるけふりさひしき大原の里

左 歌 我宿の垣な過そ郭公しといふ歌を郭公を千鳥に

なし卯花を月にひさちかへたるさと思ひより侍なん右歌

心ほそく聞え侍れともおかしきかたは左まさり侍るらん

千十八番

左 持

良 平

なにゆへの思ひなるらん埋火のやすむまもなくしたこかれする

右

通 光 卿

櫛とりうたへは冬のなかきよもいまやあくらんあまの岩戸を

左の結句のなはりの字右の初七字共にいと聞よからぬ

にや仍爲持

千十九番

左 持

具

親

新抄撰

さ夜ちとりみなと吹こす簾風に浦よりほかの友さそふ也

右

釋

阿

埋火のあたりにかきうたいねは春のはなこそ夢にみえけれ

左 歌めつらしからねともよろしきにて侍り右歌春の花社

夢にみえけれといへるは埋火のあたりは春の心ちしてと

いへる歌の心をとりにあたゝかなるを春かとて夢に花こ

そ見ゆれと侍り思所なきにあらねば可爲持

千廿番

左 持

賴

昭

みしま野に鳥ふみたてゝあはせやるましろの簾の鈴もゆらゝに

右

俊

成 卿 女

山里の眞柴のけふりかすかにてさゝぬもさびし雪のゆふくれ

左 歌萬葉集に「屋形おの鷹てにすへてみしまのにからぬ

ひまなく」とよめり偏に存古風不叶時詠なり右歌心ほそ

くよまれて侍り左右姿かはれりといへともなすらへて爲

持

千廿一番

左 勝

女

房

松の葉のみとりもみえずふる雪をわたる嵐のあとの一しほ

右

越

前

年くれてなくり迎ふる人ことはいづれをいそぐいきなるらん

左 歌みとりも見えずふる雪をわたる嵐の跡の一しほ宜承

侍り右歌此送迎のいそきいつれともにこそはいとなみ侍
らめ我身につもる年月を送り迎となにいそくらんとこそ
はよめれ必ひとつないそくへき事ならばわたる嵐のあと
の一人は色ことに承侍り

千廿二番

左 勝

左 大 臣

袖くたすにふの川かみあとたえぬみきはの氷みれのしら雪

右

定 家 朝 臣

冬ふかきまのいかやはら跡たえてまたことゝなし春のおもかけ
左右歌共に跡たえぬるよし侍にとりて右はまたことゝなし

し春の面影と侍宴飲なといはんさま侍り左勝侍也

千廿三番

左 持

前 權 僧 正

飛鳥川なかれてけふもくれぬれば春にあふ瀬は今夜成けり

右

通 具 朝 臣

新古今

草も木もふりまかへたる雪もよに春まつ梅の花の香そする

左歌飛鳥川の歳暮の詞古今に「昨日といひけふと暮して

飛鳥川」と云歌思ひ出られ侍り春に逢せはたより侍り右

歌花の香そするといへる事「かすみ立春の山邊は遠けれ

と」といふ歌の結句をとれり古今の句は一二句とれとも

殊なるしるしなきはなにことも聞えずこれは耳にたちて

侍り左もこの詞侍ればひとしめて可爲持也

千廿四番

左 持

公 繼 卿

身につもる年と思へばおしけれと春をはえこそいとふましけれ
右 家 隆 朝 臣

雪のうちにつゐにもみちぬ松のはのつれなき山にくるゝ年哉

左歌金葉集に「河となく年のくるゝは惜けれと花のゆかりに春を待設」といふ歌の心にこそかよひて聞え侍れ右

歌古今に「雪降て年のくれぬる時にこそつゐにもみちぬ

松もみえけれ」といふ歌をおもひてよめり持と申へし

千廿五番

左

公 經 卿

梅花それともみへぬ雪の夜におほめく月の影そもりくる

右 勝

雅 經

あはれにもをのゝ音までいそく也松さる山の年のくれかな

左歌たしかに冬の歌とも覺すや侍らん梅も雪も春迄も侍

也第一二の句彼「天さる雪のなへてふれいは」と云歌思出

られ侍右歌無疑冬歌と聞え侍り松さる山のそ心えられぬ

やうに承たしかなるにつきて右勝也

千廿六番

左 持

季 能 卿

ふみわけしきやまば雪に跡絶て池のみくりはくる人もなし

右

寂 蓮

淵の月はむすひはてたる山風に松の雪さへうへこほるなり

左歌さ山をしもよめる雪にはおなしくはこしのかたをや

よみ侍へからんさやまによせある事あらんには沙汰に不

及事に侍右歌山風松のとなむすふといへるばいかにむす

ふにかさこほりたるよしにやしからは松の雪さへこほ
る侍也病にや此むすひはてたる事思ひとはえ程は勝劣
申かたし

千廿七番

左勝

宮内卿

をのかさとの山風さえて吹からに都へ出るをのいすみやき

右

家長長

とことほに音せし風はなとせてたえ／＼ひいくまつ雪折

左歌よろしく侍に初五字そこは／＼しく侍る右歌これ又

音せし風はなとせてといへるあまりに心にまかせ侍り

なといひいくとはいかい侍へからん初句こは／＼しく

侍れとも左つよくや

千廿八番

左

讃岐

白妙のふしの高ねに雪ふればこほらてさゆる田子のうらなみ

右勝

三宮

春ちかきこほりのしたのさゝ涙は打いてん事や思ひたつらん

左歌ながらよりかみは萬葉集に「田籠の浦に打いていみ

れは白妙のふしの高ねに雪降にけり」といへる歌也こほ

らてさゆる田子の浦なみといふ事くしたるはなかしかる

へきにふしのたかねに雪ふらんからにたこの浦浪のさゆ

へきにあらすふしの高ねに月なとすまはたこの浦にうつ

りてこほらてもさえ侍なかし右歌は心えぬ事侍らねは

勝とす

千廿九番

左

小侍從

敷ならて世にすみかまのけふりこそ心ほそくはおもひたちけれ

右勝

内大臣

冬と春とゆきかふ風の池水にかたえとけ行うすこほりかな

左歌聞なれたるさまに侍りけふりとかけるおほつかなく

侍り右歌彼「夏と秋とゆきかふ空のかよひち」といふ歌

を思ひてかたえとけ行湧水と侍たくみにとりなされて侍

り左ふるめかしさにまけ侍なん

千卅番

左持

隆信朝臣

大はらやこゝろ／＼にやく炭のけふりはひとつそらのうき雲

右

忠真卿

かすみそめし春の空よりなめきて雪ふるとしの暮に成ぬる

左のけふりは空のひとつ浮雲右の雪ふる年の暮いつれと

申かなく侍り

千卅一番

左

有家朝臣

水鳥のさばく入江のさゝ涙のよる／＼こほるまのうら風

右勝

兼宗卿

續後正

心あらは袖山川のいかたしもしはしは年のくれなとめよ

左歌は蘆鴨のさばく入江の白浪といふ歌なからとれり

入江と侍もしかきあやまれるにや右歌いとふるしも覺

えねは可勝にや

千廿二番

左持

保季朝臣

夜やかきせきいるゝ水の音たえて衣手さむしをしの一聲

右

通光卿

日はくれぬ宿はいつくにかり衣うらみはかへればしたかの木居

左歌をしの一二ふ何れへとも聞え侍らす右歌此恨はかへ

れ答響の木居心得かなく侍れば持にやとぞ覺侍る

千廿三番

左

良平

あまの戸のあけやしぬらんむは玉のふり行空にあかほしのこゑ

右勝

釋阿

千鳥なくふしよかきき繪にかいは友ふふ聲そきこえさるへき

左歌又神樂のおこりをのへられたり第一第三の句の下

字聞よからず右歌友ふふ聲誠にふにうつしかなく侍り右

勝と申へし

千廿四番

左持

具親

炭かまのけふりはかりは大はらやたえぬもさひし冬の山さと

右

俊成卿女

とはさらん人もうらみし跡たえてふるのゝ里の雪のふかさに

左のけふり計は大原やたえぬもさひしといひ右の跡たえ

てふるのゝ里の雪も歌からおなし程にや

千廿五番

左

顯昭

すみかまの大原山はこれなれとこのもかのもにけふりたつめり

右勝

丹後

炭かまのけふりになるゝをのゝ山はいつれ雪けの雲とわくらん

左歌させる難は侍られとも右歌いつれ雪氣の雲とわくら

んといへるまさりてそ侍らん

千廿六番

左勝

女房

冬くれて今年もけふにつくはねのこのめもかねて春めきにけり

右

定家朝臣

宿ことに春の霞を待とてやとしなこめてはいそきたつらん

左歌冬くれてことしも今日につくはねと侍る能つゝきて

こそこのめもかねてはるめきにけりと侍る誠に春ちかつ

きぬればなにとなく惜ずけわたりてみえ侍りおもかけ

はこれにこそ侍るめれ右歌年をこめんこと霞に便侍れと

このめ春めくには立ならひかたくやとぞ承仍以左爲勝

千廿七番

左持

左大臣

月よめは早くも年のゆく水に數かきとむろしからみそなき

右

通具朝臣

いたつらに月日はゆきとつもありつゝ我身ふりぬる年のくれかな

左歌年月はやすくそと侍り右歌月日はゆきとつものとい

へりその詞かはれりといへとも同科にこそ侍めれ

千廿八番

左持

前權僧正

としのあけて影いかならんます鏡今夜ひとよにおもかはりして

右

家隆朝臣

年にはイくれてよそそ過ぬむは玉の我くろかみも霜やなく覽

左歌さそものをばいふ事なれとも一夜におもかはりけん

事さすかにや右歌我黒髪も霜や置らむといへる古今拾遺

抄なにかやうにたちたることはきゝなれてそ侍れとも

なすらへて持と申へし

千卅九番

左勝

公經卿

新拾遺

行としもたちくる春もあふさかのせきちに鳥のねをやまつらん

右

雅經

歳くるゝ春やむかしの春ならぬもとの身にのみたちかへりつゝ

左除夜の心よみおふせられて侍り右歌年くるゝ春や昔の

春ならぬと侍ればすてに春になり侍りたるにや大方のな

るかなる心をよひかたく侍り左勝へきにや

千四十番

左

公經卿

くれにけり空に月日の杉の戸にことしも今は入あひのかれ

右勝

寂蓮

春秋となかめし月や今もこれつもればとしのすゑとなるらん

左歌室に月日の杉の戸にまてはよく侍にことしも今は入

あひのかれといへるそ心得かたく侍右歌彼つもれば人の

老となる物といふ歌をおもへり心得やすきにつけて右勝

と申へし

千四十一番

左

季能卿

あすは又今日をばこそといひすてゝおしみし物と思ひたにせし

右勝

家長

冬のそらわびつゝ今日に成にけり跡なき庭の雪とみるから

左歌いひすてゝといへる五字井に結句いかゝと承右歌は

少まさり侍なん

千四十二番

左

宮内卿

やゝわかめかりそめふしの袖の上にけふとし涙も越るきのいそ

右勝

三宮

今日まではまた雪ふかきみよしのゝ山のあなたに春やさぬ覽

左歌風俗の玉たれの歌よめるにやけふとしなみちこゆる

きの磯と侍るは正刻のよしにやとそ聞え侍右歌は年の中

と侍り願心冬につきて勝にや

千四十三番

左

讃岐

ます鏡影さへくれぬ物ならばかさなるとしをなげかさらまし

右勝

内大臣

くれて行年のおしさはますかゝみ見る影さへやあすはかはらん

左歌ます鏡の影くれすとてもよはひおとろへばなげかさ

るへきにもあらず右歌くれて行としのおしさはます鏡と

いひてみるかけさへやあすはかはらんとしへる此ます鏡

こそあさらに侍れば仍爲勝

千四十四番

左 小 侍 從

^{新古今} 思ひやれ八十のとしのくれなればいかばかりかはものは哀しき
右 勝 忠 貞 卿

としといひて四十もちかく送りきぬさても迎ふる春はうとくて

左歌誠に八十算のくれいか計かは哀に侍へき但何事を思へるにか上を承程はするにいかなる事かと思給ふるにいか計かは物はかなしきといへるこひさめにこそ承れ右歌としといひてと侍るより四十もちかく送りきぬると侍よりしきうへにさてもむかふる春はうとくてと侍左の八旬よりは右の四十算はまさりて承る

千四十五番

左 勝 隆 信 朝 臣

春の日を秋の夜とこそなめしかさても程なき年の暮哉

右 兼 宗 卿

めつらしき春もあすとそ聞ゆればくれなん年ななにかをしまん

左歌春は花秋は月となめしかともさても程なくとしくれぬと讀る心なきにあらず右歌春もあすとそ聞ゆればといへる程や聞よからず侍るらん左まさりてや

千四十六番

左 勝 有 家 朝 臣

行としの名残の空もふけぬれば春やこゆらんさ夜の中山

右 通 光 卿

みな人のなにゆへならずおしむらん今歳のほてのけふの暮とて

左右歳暮歌何もよく侍にとりて猶さよの中山は今すこしまさりてや

千四十七番

左 保 季 朝 臣

あすをまつしつか門松さきたてもけふより春の色をみる哉

右 勝 釋 阿

^{新古今} 今日ことにけふやかきりとおしめ共又もことしにあひにける哉

左歌門松さきたても侍るより右歌よことにあはれに侍

もの哉可爲勝

千四十八番

左 勝 眞 平

けふまではゆきやとく覽春風のあけてたつへき白川の關

右 俊 成 卿 女

昨日といひけふとすきこし年月をふりつむ雪の跡そしられぬ

左歌よろしく侍り右歌するの句思ひわきかたく侍れば左

可勝や

千四十九番

左 持 具 親

今日も又すきし日數にくれにけりまとるむ夢に春をへたてゝ

右 丹 後

一とせをこひばかりになかめきておしみながらに春をまつ哉

左右歌共に宜にや仍爲持

千五十番

左 持 顯 昭

といめあへず流るゝ年のぼては早かきなる老の浪にそ有ける

右

越

前

はかなくてことしの空もくれ竹のゝよばかりになりにつけるかな

左右歌これも又ひとしと申へし

千五百番歌合卷第十五

祝部

判者生蓮師光入道

千五十一番

左勝

女房

萬代とみもすそ川の春の朝浪にかされてたつかずみかな

右

通具朝臣

新千載

あさみとり四方の梢のめもはるにさま／＼みゆる千代のかけ哉

左歌ゝろつ代とみもすそ河なと／＼つゝきて浪に重てたつ

霞と侍ほとこそめつらしくおかしく見給れ右歌よもの木

すゑのめもはるにさま／＼みゆる千世のかけなと侍も

ろしく侍り然而左は猶たけたちまさりて侍り仍爲勝

千五十二番

左勝

左大臣

新古今

のれてはす玉くしのぼの露霜に天てる光いく世へねらん

右

家隆朝臣

四方の海に浪の外まで聞ゆ也はこやの山のゝろつ世のこゑ

左歌玉くしの葉の露霜に／＼置て天てる光いく代へねらん

と侍程太神宮の風俗を混侍りおほるけの歌立ならひかな

く見給れば右の良にや

千五十三番

左勝

前權僧正

さいれ石のこけむす岩と成て又雲かくるまで君をみるへき

右

雅

經

千世を祈る神のみむろのさか木はは君かためしと茂りあひにき

左歌「君か世を何にたとへんさくれ石の巖となりてこけ

のむす迄」と云歌を思はれて猶雲かゝるまてなと侍祝の

心久しくこそ見給れ右歌もよろしく覺侍れと左の雲は

猶立まさりてや侍らん

千五十四番

左持

公

繼

卿

宮あせしちひろたくなは君かためななき契をむすひそめけり

右

宣

蓮

あしたつの友ふふこゑにさるき哉名残おはかる千代のけしきは

左伊勢太神宮の宮ゐの時にはへるちひろたくなは事をか

くとりなされたる尤可然事也右名残おはかるといはん

て友ふふ聲なと侍これも詞叶て宜侍り仍持と申へし

千五十五番

左

公

經

卿

君か代を我たつ袖に祈きてひばらすきはら色もかはらし

右勝

家

長

春ことにはこやの山にさき草の萬代かけて殿つくりせり

左我たつ袖そいかにそや聞え侍れとも歌からはよろしく

侍り右いひしりて今すこし宜侍にや

千五十六番

左持

季

能

卿

君か代はなかとこの島の小松原神さひて又わか葉さすまで

右

三

宮

さいれいのいははとならん行末を千度みるへき君とこそきけ

左君か代はなかとこの島のなと侍萬葉古風存られなるにや

右さきにも申侍様これち古歌の心を思はれて大方もおな

し程にこそみ侍れ

千五十七番

左持

宮

内

卿

のとかなる御代のはしめの春の日を霞にかはる空かとやみん

右

内

大

臣

君か代はみそそ川にすむ月のそこのころは神そしるらん

左右共宜侍りいつれと難辨こそ

千五十八番

左

讚

岐

伊勢の海きよきなささの浪もたゞ君に心をよする成けり

右勝

忠

長

卿

あまつ空かすみを分て出る日の影ものときき千世の初春

左歌いせの海きよきなささの浪も君に心をよすとはかり

にては祝の心こそおほつかなく侍れ右歌は大方もよろし

く侍上に祝の心侍れば可爲勝

千五十九番

左

小

侍

從

やしもあるくにつみかみに祈きて千とせば君かこゝろなるかな

右勝

兼

宗

卿

神風や内外の宮に祈をきてかた／＼君か千代はたのまむ

左末の句聞なれたるやうに侍り右内外の宮に祈をきてと

いひてかた／＼なと侍上下かなひて侍れば勝侍へし

千六十番

左持

隆 信 朝 臣

君かへん八千世の數もくもりなくみもすそ川をてらす月かけ

右

通 光 卿

おとこ山おひそふ松にしろきかなきりもしらぬ君か手とせは

みもすそ川をてらす月かけおとこ山におひそふ松いつれ

もともにやんことなき事ともに侍れば勝負難申侍り

千六十一番

左持

有 家 朝 臣

雲の色はしのやとりもさしなからおさまれる代な空にみる哉

右

釋 阿

神風やみもすそ川のさいれ石も君か御世にそ岩となるへき

左雲の色星のやとりもさしなからといひておさまれる世

な空にみるなと侍心めつらくこそ侍れ故存古心いほひ

のよしふかく侍れば同程にや侍らん

千六十二番

左

保 季 朝 臣

としへたるみもすそ川の月かけそ世にすも君かひかりなるへき

右 勝

俊 成 卿 女

てらしみんやを萬代そくもりなきはこやの山のみねにすむ月

左歌心は宜侍を世にすむ君なと侍やすこしよそへたる心

ちし侍かとも右歌はこやの山の嶺にすむ月なと侍程こと

によろしく覺侍仍爲勝

千六十三番

左持

頁 平

すいか川ふるきなれをつたへきて猶すゑとなき君か御代かな

右

丹 俊

枝ことに千代も八千世も色かへぬひら野の松は君かま／＼に

左右共におなし程に覺侍れば持と申へし

千六十四番

左

具 親

君か代の數にはこれもつくは山としてまげき體なれとも

右 勝

越 前

ひまもなく内外の宮に行かふふ心は君かよるつ世のため

内外の宮に祈申君の萬歳左右なく勝侍へし

千六十五番

左持

顯 昭

我君に千代もやちよもゆつりはの常盤のかけは猶つきもせし

右

定 家 朝 臣

あめつちとまきりなげれとちかひなきし神のみことそ我君の爲

左歌千世もやちよもゆつる葉のなをきて存萬葉古風す

じやかに侍り石は心めつらくこそ侍れはなすらへて持なと

にや侍らん

千六十六番

左 勝

女 房

萬代とみたらし川の夏のよに秋ともすめる山のはの月

國古今

右

家 隆 朝 臣

久かたのあまのかく山空晴て出る月日やよろつ代のため

左歌夏のよとをきて秋とすめる山のはの月と侍ことに

おもしろく侍り右歌久堅のあまのかく山に出る月日なと

は侍れとさせる心も侍らす仍以左爲勝

千六十七番

左 勝

左 大 臣

君か代に法のなかれなせきとめて昔の浪やたちかへるらん

右

雅 經

おもひやる心のはても猶過て道ある御代の千代の行す点

左歌佛法皇法は如牛角佛法繁昌すれば又皇法盛なるとい

ふ心にて法のなかれの昔に立歸をもて君の御齡久しく盛

なるへき出をあらはされたるにや若然者心ふかくこそ見

給れ右歌ふみしりてよろしく侍れとも左勝にこそ

千六十八番

左 勝

前 權 僧 正

君か代にさしての磯の友千鳥八千代のこゑを聞そうれしき

右

寂 蓮

いつとなく八重の鹽路にたつ浪の數かきりなき君か御代哉

左右共に宣侍に左猶今少思入られたる所侍り勝へきにや

千六十九番

左 持

公 繼 卿

足引の八みれの椿君か世にいくたひかげなかへんとすらん

右

家 長

きみか代は遙かなるとのはまひさし久しき影は浪のまに／＼

やみれの椿こと／＼／＼にかけなかへん事は誠に久しかる

へしはまひさしの歌もあしくも侍らす持なとにや

千七十番

左 勝

公 經 卿

君か世のすゑを思へば久かたの天てる神の影をならへて

右

三 宮

いくたひか君か御代にはめくりあはん月日の光千々の春秋

左歌よろしく侍り右歌もあしくは侍られとも左勝へきに

や

千七十一番

左

季 能 卿

おさまれる八すみのうちのいくさの君か御影になひかゝはなし

右 勝

内 大 臣

國古今

百數にかめのうへなる山なれば千世をかされよ鶴の毛衣

右歌もしきの蓬萊宮を龜の上の山といひあらはして千

代をかさねる鶴の毛衣なと侍こそ詞たくみに義あらはれ

て面白侍れ左歌民の皆なひき侍らん事さることなれとあ

なかりにも侍らぬかとよ仍以右爲勝

千七十二番

左

宮 内 卿

行すゑを思へば涼し君か世の風ものときき夏の夕くれ

右 勝

忠 良 卿

君かため千町の早苗年をへていく萬代もとりそかさねん

左 貳させる事侍らす右歌宣侍り可爲勝
千七十三番

左 持 讃 岐

やとしなく影しつかなる月みればすむもかひある石清水哉

右 兼 宗 卿

いく千世も君の心にまかせよとすみはしめける石清水哉

おなし石清水いづれも同程にこそ

千七十四番

左 持 小 侍 從

此君とたのめてうへしから人の千世の契りや今のよのため

右 通 光 卿

君か代は谷の岩れのひめ小松雲ある嶺にまつえさすまで

左歌のふるまはんとはふまれたれともいとしもおほえ侍

らす右歌谷の岩れのこ松の雲ある嶺にしつえさいん事祝

の心はふかく侍れと年久しくならんにしたかひて松のた

かくならんことやいかいなるへきほとのはたふる木

にて侍なり仍爲持

千七十五番

左 隆 信 朝 臣

行末よく代の秋を契るらんわかのうらちをてらす月かけ

右 勝 釋 阿

君か代はいく千とせにかあふ草かはらぬ色に神もまもらん

左歌なひやかに侍に五文字すこし耳にたちて侍かしょ

右歌心詞相叶て足爲勝

千七十六番

左 持 有 家 朝 臣

君か世に十たひすむへき水の色をくみてしりける山の聲哉

右 俊 成 卿 女

千はやふる神代もしらぬためしなや君にはしめて定めなきけん

左黄河千年にすみ山萬歳なよふ事を君の御代に引よせ

られたる相叶てこそ聞え侍れ右神代もしらぬよはひ君に

はしめてきたむる程はめつらしく侍り持なとにや

千七十七番

左 持 保 季 朝 臣

君をこそ神もあはれと石清水外よりいてめなかれと思へは

右 丹 後

君か世は貌姑射の山の嶺におふる白玉椿葉かへせんまで

左歌心はさもと聞え侍事あたらしき様にや聞え侍らん右

歌も末句なひやかに侍られは持なとにや

千七十八番

左 持 夏 平

君か世はあたにもいはし石清水すむへき御代のそのふかさに

右 越 前

すいか河やそせの浪をへたてゝもわか神風は君を祈らん

左末句といこほりて侍り右八十瀬の浪を隔てもなと侍は

今少なひやかに聞え侍祝の心のかすかに侍にや仍可爲持

千七十九番

左 具 親

いく千世も君かためしやこれならんいつぬき川の鶴の毛衣

右勝

定家朝臣

新後

さしこしのさか木にかけし鏡こそ君かときほの影はみえけれ

右歌調そすこしといこほりて聞え侍れとも昔天照大神天

の岩戸をとちさせ給へりし時世の中とこやみとなりて侍

しに神たち香久山のさか木にこしてふらにきてあなにき

て鏡なとかけて神樂をし給ける事を今祝に引よせてなか

しくよまれて侍哉左つねの風情なり左右なき右の勝にこ

そ侍めれ

千八十番

左

顯

昭

君かへん三千世をかけてさく桃の百かへりまでさかへまきなん

右勝

通

具

朝

臣

あかれさす日影もふるし夏の空あきらけき世のなかきためしに

左歌王母か桃の事常の事にてめつらしき所も侍らす右歌

風情めつらしく侍り仍爲勝

千八十一番

左勝

女

房

萬代と三笠の山の秋風にのとかに嶺の月そすみける

右

雅

經

かきりなき世は久かたの空晴て照らす月目ものとかにそすむ

左歌みかさ山の秋風になと侍こそたけたかくすみて聞え

侍れ右歌心はあしくも侍らねともくたけて聞え侍れは左

によみあはせ侍れはにや右の貞とそみえ給ふる

千八十二番

左

大

臣

久かたの空のかきりもなき世かな三の光のすよんかきりは

右勝

寂

蓮

新後

浪の上にくすりもとめし人もあらは菟姑射の山に道ふるへせよ

左歌久かたの空のかきりもなきよ哉三の光のすまんかき

りほと侍こそ風體たげたかくして三光心めつらしく侍に

限といふ事の上下の句に侍や歌合には申へく侍らん但よ

き歌に成ぬれば先例も失にて失ならぬ事とも見え侍れは

是もあなちの事には侍らぬに右の歌の波の上に薬もと

めし人もあらはと置てはこやの山に道ふるへせよといへ

る程いみしくおほえ侍れは猶右の勝ともや申侍へからん

千八十三番

左持

前

權

僧

正

かくばかりふかさ心のむくひには昔か八千世にあはさらめやは

右

家

長

ますらなも千町の早苗と日ノにいはふもふるき天の下哉

左の歌けにと聞え侍り右歌も又祝の心ひろく見え侍り同

程に侍り可爲持

千八十四番

左持

公

繼

卿

春日野に若なつみつゝ祝けんそのふることもかなふ御代哉

右

三

宮

新後

朝夕に千とせの聲ぞ聞ゆなる松と竹とにかふふあらしは

いづれも同程に侍り但右歌はかきあやまりの侍かとも
千八十五番

左 勝 公 經 卿

君か代のあり敷にせん神風やみとすそ河によするふき浪

右 内 大 臣

もろこしの代々はうつれと敷島や大和しまねは久しかりけり

左歌めつらしき風情なり面白侍り右歌もよろしく侍れと

猶左の勝にや

千八十六番

左 季 能 卿

雲の浪けふりの浪を尋ても君か御代にはなふふふふかは

右 勝 忠 良 卿

霧はるいはこやの山の秋の空に月もいく千世すまんとすらん

左歌蓬萊宮も猶不及射山と侍こそ心得かたく覺侍れいか

なる方の難及侍やらん蓬萊には不死の藥ありその歸際限

なし射山も不死の義なり其齡又際限なかるへし共におな

しくこそ侍へきに君か御代にはなふふ島かはと侍こそあ

まりなるやうに覺侍うへに末の島かはも聞よくも侍らぬ

かとも右歌させる難なく侍り仍爲勝

千八十七番

左 持 宮 内 卿

草木もわかすなくてふ白露のまられぬかすの君か御代哉

右 兼 宗 卿

神山の嶺におひそふ小松はらいく木の千世も君か代の數

心詞ともにおなし程に侍り

千八十八番

左 謙 岐

四方の海は浪しつかにて住よしの松吹風のなとのみぞする

右 勝 通 光 卿

ときはなるみとりの色にあらはれて君か千とせば空にしろしも

左歌めつらしき事も侍らす又させる難もなし右歌は心め

つらしく侍れば勝とや申へく侍らん

千八十九番

左 小 侍 從

四の海浪しつかなる君か代にあまの命もうれしかるらん

右 勝 釋 阿

君かへん千世のためとそ小松原をしほの山も祝ひそめけん

左あまの命いかにそや覺侍り右宜侍可爲勝

千九十番

左 勝 隆 信 朝 臣

たとへても猶君か代そ大はらやをしほの松も千代をこそつめ

右 俊 成 卿 女

四方の海や吹浪風もまつかにてけふりまよはぬあまのもしほ火

右の歌よもの海ふく風浪とそ侍らまほしき吹浪風はつゝ

き上下ふたるやうに見給る如何左歌宜侍れば勝ともや申

侍へき

千九十一番

左 有 家 朝 臣

もろ人のふた心なくあふく哉はこやの山に身をまかせつゝ

右 勝

丹

後

君かためうへなく竹のふししけみ其數々に千世そこもれる

左 歌詞つかひもいかにそや聞え侍うへに祝の心くらくや

侍らん右歌はさせるとか見え侍らす

千九十二番

左 勝

保 季 朝 臣

古きあとな世のためしにはうつすとも千歳は君そはしめ成へき

右

越

前

いくかへりおひかふ松の花を見んはこやの山の春の梢に

左 心さもときこえ侍り右もよろしくは侍れとも猶左はめ

つらしく侍へし

千九十三番

左

真

平

千はやふる賀茂の社のゆふたすき千年を君にかけよとぞ思ふ

右 勝

定 家 朝 臣

新古今

我道をまもらは君をまもらんよはひにゆつれ住よしの松

左 歌あしくも見え侍らねとも右歌尤興ありておほえ侍り

仍爲勝

千九十四番

左

具

親

君ならてありきあらすや萬代なとふじの野守年はへにけり

右 勝

通 具 朝 臣

いさなきつ色にもむなし末なれば君に契れるとよ國の土

左 歌難もなく又すぐれたる方も見え侍らぬにや右歌ゆへある事をよくとりなされたれば勝と申へし

千九十五番

左

顯

昭

君か代は數しらぬまのあやめ草引ともつきしけふのかさしは

右 勝

家 隆 朝 臣

かけなひく星のくもるものかにて空にそしるき御代の氣色は

左右共に難なくみえ侍り但右は今少めつらしき所まさり

てや侍らん

千九十六番

左 勝

女

房

萬代とみつのほま風うらさえてのとけき浪にこほりぬにけり

右

寂

蓮

今よりやあくまで花も三千とせになるてふ桃のそのをうつして

左 歌萬代とみつのほま風とをきてのとけき浪に氷ぬにけり

りと侍有餘情有高情尤足賞翫右歌は當の事をおもしろく

つゝけては侍に詞つかひ少いかにそや聲侍所の見え給ふ

る歌の丈も事の外にひきくこを見え侍れ然者以左可爲勝

千九十七番

左 勝

左

大

臣

あるちりの山をいく重にかされてもけに我國はうきなき世を

右

家

長

萬代をふへき君なり月も日ものときき光かねてあること

左 歌心めつらしき詞不混俗右歌もあしくも侍らねとも猶

かれには難及こそ侍れ

千九十八番

左

前 權 僧 正

千はやふる神そしるらん我君をれても覺てもいのる心は

右 勝

三 宮

水のすむいづぬき川のしき浪に猶たちまさる御代のかす哉

左歌君をいのる心其思ありてさもと覺侍に視の心や少く

らく侍らん右歌は視の心は侍にや

千九十九番

左

公 繼 卿

ときはなる御代のしるしにたてりけり古河のへの二本の杉

右 勝

内 大 臣

はるかなる程を思へはたけくまの松のみとりや君が行すふ

右歌はるかなるためしにたけくまの松を引よせられたる

おもしらくこそ侍めれ左させる事侍らぬにや仍以右爲勝

千百番

左 持

公 經 卿

君か代につもりて山となるちりのすゑをおもへば雲かゝるまで

右

忠 良 卿

友千鳥むれゐる磯のこゑに君か八千世の數を聞ゆる

左歌は君か代は千世に一たびあるちりの白雲かゝる山と

なるまでといふ歌を思はれたるにやあまりにとりすくさ

れて侍やうに見給ふる如何右歌も心は侍にむれゐる磯の

こゑに侍る程そ千鳥のこゑにこそはと覺侍れと猶

つゝきのいかこそ覺侍には勝負思わさかく侍り

千百一番

左 勝

季 能 卿

くもりなくおさまる御代を人もみな見よとて出る星の影哉

右

兼 宗 卿

跡たれし三笠の山のかひあれば天の下こそのとけかりけれ

左歌あしくも侍らす右歌聞なれたる風情なれば猶左や勝

侍へからん

千百二番

左 持

宮 内 卿

千代までと夜はの水にこそよせて契をむすふまかのうら浪

右

通 光 卿

君か世はあまのたくなほくり返し濱のまさこそ數にとるらん

同程にや侍らん

千百三番

左 持

讃 岐

春日野のぼるの若菜も君かためいく萬世かつまんとすらん

右

釋 阿

君か代を日吉の神に祈りなげは千とせの數やまかのうら浪

是も又勝負は思ひわさかく侍れば爲勝

千百四番

左

小 侍 從

二葉なる松のためしもたえぬ哉いく千世となき君か御代には

右 勝

俊 成 卿 女

むれあつゝ和歌のうらわに鳴たつのこゑにも君か千代を聞ゆる

左に中五文字いかにそや聞え侍右心詞叶てよくこそ見給

ふれ

千百五番

左 勝

むかしよりさこそはいのる萬代と君そまことのためし成へき

右

丹

後

君か世を長井のうらにゐるたつも萬世までとこゑ聞ゆ也

左心めつらしくて逸興にこそ侍めれ右も宜は侍り君か代

と萬世とやいか侍へからん君そまことのためしなと侍

まさるへくや

千百六番

左 持

龜のおの岩ねおちくる瀧の糸のいく千世へもたえん物かは

右

越

前

君か代にあふの松はら枝しげみ末たのもしく影そさしそふ

左歌さもと見侍に瀧の水たえさらん事計にて祝の心いか

か侍へからん右歌もあふの松はらは祝にはいとよみなら

はしたるとも覺侍らす又祝の心これもおなし程にや仍爲

持

千百七番

左

保

季

朝

臣

此世には昔もきかず今もあらし君かよはひにまさるためしは

右 勝

定

家

朝

臣

萬代の春秋君になつさはん花と月とのすゑそ久しき

左に祝の心ふかく侍り右は心めつらしくいますこし見所

あり勝侍へきにや

千百八番

左

長

平

つさせしとあめのまたをや祈るらん萬代にはふみかさ由かな

右 勝

通

具

朝

臣

千々の秋かねてそゑるき君か世を長月にさくまら菊の花

左歌宜は侍れとすこしめつらしからぬさまにや侍らん右

歌はさもと見え侍勝とも申侍なん

千百九番

左 持

具

親

かつまたの池に鳥なしにしへの過にしほとや君か行すゑ

右

家

隆

朝

臣

君か代は花も千とせの友として松と竹とに春風そふく

左歌殊なる事もなく又させる難も侍らぬにや右歌からは

面白さまなるにすこしかきあはれやうに見え侍なさらへ

て持なとにや

千百十番

左 持

顯

昭

かちの葉にやを萬代とかきつけてねかふれかひは君かまに

右

雅

經

君かへんよはひをさして大空にむれたるたつのなのか聲々

左右ともにおなしほとにや

千百十一番

左勝

女

房

萬代とみくまの浦のはまゆふのかされても猶つさせざるへし

右

家

長

君か代は二葉の松の千世をへて梢の風を雲にきくまで

左歌かされても猶つさせざるへしなと侍程なへての事に

は難及こそ見給れ萬代となきてみるよしのつうけやう

數多侍様のおほえ侍れば立歸り見給ふるに五首歌を併初

五文字に萬代と置いてやかて見るよしのやうをかへて四季

に侍こそ興ありておかしく覺侍れ右歌もうるはしくよま

れて侍り然而猶以左爲勝

千百十二番

左勝

左

大

臣

人の世をなと定なくおもひけん君か千とせのありける物を

右

三

宮

くもりなきあまてる神のみつかきに君か千とせの影うつるなり

左歌めつらしき風情にして見所侍物かな右歌もよろしく

侍れとも猶左ばすてかたくや侍らん

千百十三番

左持

前

權

僧

正

なからへてかひある事を松なれや君か千年の影にかくれて

右

内

大

臣

諸人のあふくのみかは君か代はすの空はすによるこふ雲も立けり

左歌松をこそおほくは祝のためしに讀ならひて侍に昔の

千とせの影にかくるゝ程心めつらしく侍に又右歌樂府に
侍かとも本文ある事なみしくとりなされて祝の歌には
尤出来へかりける事と見ふる給に言葉つかひなとも優に
侍れば勝負思わつらひ侍りぬ

千百十四番

君か世はちくまの川のさゝれ石のさながら岩とあらはるゝまで

右

公

繼

卿

すゑとなく千世の御かけをたのみ哉契あればそあふの松原

祝歌にちくまの河あふの松はらとにきいならひても覺

え侍らす持なとにや

千百十五番

左持

公

經

卿

君か世をとふ人あらは出る日の光をさして空にこたへん

右

兼

宗

卿

くもりなきはこやの山の月影に光をそふる玉つしま哉

出る日の光はこやの山の月影共に見所侍れば爲持

千百十六番

左持

季

能

卿

神路山下津君れの宮はしらふるしたかへぬ御世とこそみれ

右

通

光

卿

萬代のためしをいはし君か代は鶴の毛衣いろもかはらて

左歌伊勢御神の宮柱しろしたかへぬ程祝の心たしかに侍

り右歌鶴の毛衣色もかはらぬ體なびやかに侍り仍爲持

千百十七番

左持

宮内卿

昔よりなかれをうくる四方の海のかかぬは君かよはひ成けり

右

釋阿

住吉の松もすいしくおもふらし君か千とせの和歌のうら風

左歌あしくも侍らす右の歌優に侍り持なにてや侍ぬへ

き

千百十八番

左

讃岐

君をいのる心をくみてこたふ也みたらし川の音もさやかに

右勝

俊成卿女

新後撰

さきにけり君かみるへき行末は遠里をのゝ秋はさの花

左歌祝の心くらく侍り右歌祝の心はへるうへにおほかた

もをかしく侍れば可爲勝

千百十九番

左持

小侍從

みちとせになるてふ桃のいかにへり花さく春を君やみるへき

右

丹後

龜のおのいはれにおつる瀧つせにちる白玉や君か代のかす

いづれも／＼なひやかに侍り持とこそ見給ふれ

千百廿番

左

隆信朝臣

君か世はにまの里人つくる田のいれのほすふの數にまかせて

右勝

感前

空はれていつる月目や君か代のすゑはるかなるためし成らん

左歌心はよろしく侍れと詞つかひや少いかにそや侍右歌

心詞よろしく侍り仍爲勝

千百廿一番

左持

有家朝臣

玉椿八千世の後も我君のときはかきはの色はかはらし

右

定家朝臣

四方の海もけふりにきはふ濱ひさし久しき千世に君そさかへん

彼此難思分侍り可爲持也

千百廿二番

左持

保季朝臣

此君のなを行末は年をへて生そふ竹の數しらぬまで

右

通具朝臣

君そみん千ひろの海の底の色のこん年なみにあらはるゝまで

左歌さもと覺侍り右歌海底あらはれん事長元歌合の判に

とかめたるやうに見侍れともあまり久しからんためには

又なとかにと覺侍れば持なとにや

千百廿三番

左持

良平

すみよしの松のみとりと君か代といつれ久しと神そしるらん

右

家隆朝臣

やなか行はまの眞砂にある千鳥君か千代をやそへてかそへん

いづれも共によろしく侍り仍爲持

千百廿四番

左

具

親

おほの浦のそのなかはまによる浪のゆたけき君か千代の末哉

右勝

雅

經

君か世はときほの山の松の風色もかはらし音もたえせし

左こと／＼しきさまなからさせる事侍らす右松の風の色

もかはらし音もたえせさらん程さもと覺て尤勝侍へし

千百廿五番

左

顯

昭

君そみん山路の菊を千代なから長月ことにつめるしるしは

右勝

寂

蓮

たちぬはぬ衣の袖もにはふ也山路の菊のよるつ世の秋

おなし菊なるにとりても衣の袖のにはふはいますこし可

賞翫や侍らん

千五百番歌合卷第十六

戀一 判者生蓮

千百廿六番

左勝

女

房

足曳の山ふた水のわきかへり色にはいてしこかくれてのみ

右

三

宮

我袖にけふそ涙のはつ時雨いかなる色にそめんとすらん

左歌古今のあし引の山下水のこかくれてと侍歌をとりな

されて優艶にこそ見給ふる右歌もはつ時雨いかなる色に

そめんとすらんと侍もまことに行ふおほつかなく侍てお

かしく侍れとも猶以左勝とさため申へし

千百廿七番

左持

左

大

臣

ふらせはや戀をするかのたこのうら恨に波のたぬ日はなし

右

内

大

臣

玉たれのみずのひまのみまけいれはかけても人を頼むへきかは

左歌はこと葉たくみにしてたけたかく右歌は心めつらし

くて聞所侍り仍持なとや申へく侍らん

千百廿八番

左勝

前

權

僧

正

五月雨の軒のふつくはほといきすなくやき月の涙なりけり

右

忠

長

卿

つゝましまなめはふるき物なればたえぬ景色は誰もみつらん
左歌鳴や五月なとは宜侍り歌合には戀の心やかすかに侍
らん右歌末句にたえぬと侍そいひくたされても覺侍らぬ
もしたへぬなとをかきあやまりて侍にや又五文字も少心
ゆかす覺侍れば左の勝侍へきにや

千百廿九番

左 勝

公 繼 卿

あま乙女いさりたく火のほのかにも思ひの程を人ふるらめや

右

兼 宗 卿

またあらぬ人はさかしき嶺なれやふみつたふへき道たにもなし

右歌心は侍に人はさかしきみねなれやと侍こそなひやか

ならず侍れ左歌させる難見え侍らすまさり侍へきか

千百卅番

左 持

公 經 卿

ふかりとてなひかし物をさなしかの入野の薄ほにも出あへす

右

通 光 卿

これやさば人を見るめのなきさなるならはぬ袖にかゝる涙かな

左歌さなしかの入野の薄なと存萬葉之古風おほかたは宜

侍に五文字そなひやかならず覺侍る小野篁か歌にもかや

うに侍かとも右歌さもと聞え侍れば持なとにや

千百卅一番

左

季 能 卿

わけそめていかにたとらん行ふなきあふをかきりの道芝の露

右 勝

釋 阿

尋入らん道もあらぬ忍山袖ばかりこそまほりなりけれ
左右共におかしく侍れ共右は今少勝てや侍らん
千百卅二番

左

宮 内 卿

なめには心ゆるさしこれそ此つもればつゝに戀となるもの

右 勝

俊 成 卿 女

續後拾遺

あらざりきむすはぬ水に影みえて袖に雫のかゝる物とは

左古歌を思て讀侍れとも右水の心いひなかされて侍り仍

爲勝

千百卅三番

左 持

讃 岐

續古今

ふしのれも立そふ雲は有物を戀のけふりそまかふかたなき

右

丹 後

新後撰

けふこそは袖にもいらせいつのまにやかくて涙の色にみゆらん

共にいひしりてさせる難なく侍り同程の事にこそ

千百卅四番

左

小 侍 從

たてそめてあふ日をまちし錦木のあまりつれなき人心哉

右 勝

越 前

戀路にもおりたちぬればよそに見したこのもすそ袂にぞしる

左歌錦木のあまりつれなきとつゝきて侍れば千つかにあ

まりてたつる事の侍にや右歌は心得られぬ所なくさもと

聞ゆれば勝侍へきにや

千百卅五番

左 隆 信 朝 臣

袖の色は若紫にあらずに心をそむるふのふもちすり

右 勝 定 家 朝 臣

新千歌
あふ事のまれなる色やあらはれんもりいていそむる袖の涙に。

左わかむらさきにふのふもちすりをひきよせられたるは

たよりありて聞え侍に心やめつらしからす侍らん右は心

なかくこそ侍れ爲勝

千百卅六番

左 有 家 朝 臣

おらすしてやみなん物か山櫻霞のまよりみえし匂を

右 勝 通 具 朝 臣

戀をのみしのふの里の道のはてかよふしるへは心なりけり

左歌は古歌の心を思ひておもしろく侍に戀の心やくらく

侍らん右宜侍れば可爲勝

千百卅七番

左 保 季 朝 臣

雲の色も昨日みしにはかはりけり思ひそめつる夕ぐれ空

右 勝 家 隆 朝 臣

ほのみてし君にはしかし春霞たなひく山のさくらなりとも

左歌いかに侍にかけふはしめて物を思より心かはり雲の

色もかはるとよまれたるかたしかにも心得られす侍右歌

は春古風歌の心姿なひやかにこそ侍れ

千百卅八番

左 眞 平

右 勝 雅 經

いつのまに君に心をつくは山程なくしけるなけき成らん

是やさば人を思ひのはつけふりなれぬなかめの空のうき雲

左もあしくも聞え侍らぬに右よろしくこそよまれて侍れ

勝へきによ

左 具 親

戀すてふ名はいたつらにみちのくの忍の山もかひなかりけり

右 勝 寂 蓮

ものおもふと泪のすゑもちりぬへし心のうちも袖にしられて

左さざる事なく侍り右は心詞共に見所侍仍可爲勝

千百四十番

左 顯 昭

ほのめかすかひこそなければあふ事ないなみの浦のあまの漁り火

右 勝 家 長

君をけふみかきか原に袖ぬらしせりつむ計物やおもはん

左歌難なく聞え侍れとも右は猶まさりてや侍らん

千百四十一番

左 勝 女 房

神な月袖のみしたの初時雨人のこゝろを秋の一しほ

右 内 大 臣

つゝも袖たがこふるとほもらさすつく覽すみを哀ともみよ

左は毎句おもへる所ありて不混俗右心なかくし侍に申五

文字やいかいにそ聞え侍らん仍以左爲勝

千百四十二番

左 持

左 大 臣

うちしのひいはせの山の谷かくれ水の心をくむ人そなき

右

忠 良 卿

ことの葉は色にもいていくちれとよときはのりりのあきの下露

ときはの杜いはせの山共によろしく覺侍り仍勝負難申侍

り

千百四十三番

左 勝

前 權 僧 正

我戀はゆくかたもなきなめよりむなしき空に秋風そふく

右

兼 宗 卿

富士のねのけふりにはちぬ思ひ哉もゆとはみえて下にこかるい

左歌たけたかく面白侍り右歌も心は侍とも猶左勝へきに

や

千百四十四番

左 勝

公 繼 卿

^{續古今} かげろふのいはかき淵のわきかへりうは浪たゝぬ物をこそ思へ

右

通 光 卿

人しれぬ心のおなし友なれやほのみしま江の蘆のみたれは

左歌「蜻蛉の岩垣ふちの隠れにはふしてしぬともなかも

はいはし」と侍歌の詞をとりてうは浪たゝぬなとよろし

く侍り右の歌もあしくも侍らぬ共左の浪は猶立まさりて

や侍らん

千百四十五番

左 持

公 經 卿

せきもあへず戀すてふ名やなかなん水のしたまで影かよふ也

右

釋 阿

^{新古今} あはれなりうたゝねにのみ見し夢の長き思ひにむすほいれなん

左歌心めつらしく見所侍り右歌の又たけたかくすみたる

さま侍れはおなし程にや

千百四十六番

左 持

季 能 卿

身にはまたならはぬ物をあやしくも聞しに似たる袖の上哉

右

俊 成 卿 女

いかにせんしのふの山に跡たえて思ひいれ共露のふかさを

左歌心めつらしきさまにや侍らん右歌しのふの山に跡た

えて思ひ入られたる程心ふかく侍れとも猶持にこそ

千百四十七番

左 持

宮 内 卿

人しれぬ戀をのみたゝすかのねのなかくややかて思ひいれなん

右

丹 後

うちいてんことの葉さへそせかれぬるかきもなかさぬ山川の水

右歌心はつねに聞なれたる心らし侍り左下句の初耳にた

ちて侍にや仍爲持

千百四十八番

左 持

讃 岐

もろともに有明の空そまたれけるはの三日月のよひの面かけ

右 越 前

あらはれん名はおしけれと忍山嶺のしら雲かいらすもかな

左右共にさもと聞えてよき持にこそ

千百四十九番

左 持 小 侍 從

よしさらば戀しぬへしといひなからいけるば人を頼まさりしに

右 定 家 朝 臣

かた糸のあふとはなしに玉のをまたえの計そみたればてぬる

左歌風情めつらしく見所ありて侍り右歌は常の事を面白

つゝけられてたやすからぬ所侍かとよ是も持なとにや

千百五十番

左 隆 信 朝 臣

しのふ山うつゝにたにもまたみぬをばかなくたのむ夢の通ひち

右 勝 通 具 朝 臣

^{類有今}せきかへし猶もる袖の涙かなしのふもよその心ならぬに

左さもと聞え侍か又いかにそよ侍かとよ右は心詞かけ

あひて聞え侍仍可勝にや

千百五十一番

左 勝 有 家 朝 臣

下萩のほにこそあらぬ露計もらしそ始るあつのはつ風

右 家 隆 朝 臣

春の涙の入江によふ初草のはつかにみてし人を戀しき

左右共に思所あらはれて優に侍を左猶めといまる所や侍

らん勝へきにや

千百五十二番

左 保 季 朝 臣

染まさん猶行末をおもふかなけふ一しほの袖のなみたに

右 勝 雅 經

ほにいてし蘆のふし葉の下みたれ入江の涙にくちははつとも

左よろしく侍に右の思入たる程こと葉つかひ艶に侍り勝

にもや申侍らん

千百五十三番

左 眞 平

忍ひれの色のみふかき袖なれやいはての杜の秋の時雨は

右 勝 寂 蓮

たへぬへき涙の程はしのひきぬさのみはいかゝ袖のしからみ

左歌よろしく侍にしのひれの色と侍こそ涙にこそはと思

ひ給ふれとつゝけやうのいかにそや聞え侍也右歌袖のし

からみは河なとに引よせずしてはいかゝと覺侍粗さる歌

も侍やに覺給ふれと猶歌合の時はおもふへくや侍らん彼

天徳歌合に判者水なくて藤波といふ事古歌におりゝあ

りされと尋る人なければさてとまれるなるへし歌合に

はいかいあらんことによせぬはいはれなし水岸なとによ

すへかりけると云々以彼思之猶河なくしてまからみをよ

まん事や如何そ侍へければこれも難にや共に難侍らんに

とりては右宜こそ可勝

千百五十四番

左 持 具 親

またさりし秋やは物をおもひしる道なきまでの庭のけしきを

右 家 長

かきくもり雨ふる宿の秋風に涙かたしきこよひかもねん

左右共におなし程にや

千百五十五番

左 持 顯 昭

みたれぬる心はよそにみえぬらんにか人めをまのふもちすり

右 三 宮

かくこふといかてか人にもらすへきおもひまのふの山のした水

共によろしく侍是又持にこそ侍らめ

千百五十六番

左 勝 女 房

^{續古今} 蘆のやのなたの鹽くむあま人もまほるゝ袖のいとまなきまで

右 忠 良 卿

たのみをさし淺茅が露に秋かけて木葉ふりまゝ宿の通路

左歌蘆のやのなたのしほくむあま人もと置いてまほるゝ袖

のいとまなきまでと侍程世のすゑにいてきかたく侍り中

の五文字のものを字に戀の心あらはれてめてたく覺侍り俊

惠法師と申まゝの蘆のやのなたと置いてたけたかくいみし

かるへきに末の句の叶ほとなるかたき也是よみかなへた

らんはめてたかるへしとつねに申侍し思合られていみし

く覺侍也右歌心こもり詞優に侍れとも猶左かく申になよ

はす覺ぬ涙おちて仍可勝侍

千百五十七番

左 勝 左 大 臣

我戀は又ふる人もしらすけのまのゝ秋萩露ももらすな

右 兼 宗 卿

^{續拾遺} もらさしと思ふ心やせき返す涙の河にかくるしからみ

左歌詞つかひことにめつらしくたくみにして不混俗右心

珍敷からすといへ共さして難はなし然て左は左右なき勝

にこそ

千百五十八番

左 持 前 權 僧 正

戀をすまのうらみてかへる風の音をあふ事なみに聞そかなしき

右 通 光 卿

身のうさはさてつれなきにしらるれとむすほゝれても岩代の松

左歌おもしろくそへくたされて有與聞え侍り右歌身の程

おもひしりてむすほゝれても岩代のまつ艶に侍ればすて

かたく侍り持なとにこそ

千百五十九番

左 持 公 繼 卿

つれなきをかれてしらはや天雲のよそにみるより袖のぬれぬる

右 釋 阿

色にいてす人の袖には露かくる君はうけらの花にや有らん

左つれなきをかれてしらはやあま雲のなとをける程おか

しくこそ侍にあま雲をよそにみるに袖のぬれん事こそお

ほつかなく侍と又ふる時にてもなとか侍さらん右よろし

く侍り持にや

千百六十番

左

公

經

卿

我戀は嵐にまふうき雲のさはきそわたる夕くれの空

右 勝

俊

成

卿 女

おもふさへ跡なき空のかたみ哉そなたの風の身にはしめとも

左は末句すこし耳にたちてや侍らん右は心ありてこそ見

え侍れ

千百六十一番

左 持

季

能

卿

はりまかた恨ても猶たのめとやすふにありてふあふの松原

右

丹

後

戀わたる涙の河のはわきせに身をつくしてもあひみてし哉

左歌すふにありてふあふの松原と侍は播磨よりつくしへ

ゆかんに末とてふまれたるにや右歌むげにふるく聞え侍

れと持なとにこそ

千百六十二番

左 持

宮

内

卿

我戀はかり田の庵に吹風のにはかに人にしられぬるかな

右

越

前

なにせんにかゝる戀路をふみそめて行ふもしらぬなけき成らん

戀路をふみそめて行ふもしらぬなといふ事はよろしく侍

にきくなれたる風情にや

かり田の風はすこしめつらしくもやと覺侍りにはかに戀

のしらん程いかゞ仍爲持

千百六十三番

左

讚

岐

蛙なく神なび河にさく花のいはぬ色をも人のとへかし

右 勝

定

家

朝

臣

たれか又物おもふ事をなしへせし枕ひとつをしる人にして

左の神なび河にさく花のいはぬ色なとはふるまはれて侍

り右の枕をしる人にして物思ふ事を誰かをしへしなと

たかはれたるこそ風情めつらしく見所侍勝にや侍らん

千百六十四番

左

小

侍

從

浪たかきゆらのみなとをこく船のしつめもあへぬ我心かな

右 勝

通

具

朝

臣

左由良のみなとをこく船のまつめもあへぬと侍さもあり

めくくりこしよの契に袖ぬれてこれも昔のうきなみた哉

と侍こそ思ひいれたる所ありて見え侍めれ左にはまさる

へく侍らん

千百六十五番

左 持

隆

信

朝

臣

うらやましたれゆへ露なこほすらん我身のためはくすの秋風

右

家

隆

朝

臣

あるといへばそなたの空となかめれと吹くる風の袖になれぬる

左右共に詞つかひなびやかならず同程にや

千百六十六番

左持

有家朝臣

新後^新 かはらの烟はまたにむすふともおもひありとは人にしられし

右

雅

經

續古今

おもひなく心の瀧のあらはれておつとは袖の色に見えぬる

左歌かはらのけふりはしたにむせふとも侍こそさる

事の侍にやかはらのけふりをむせふとこそ聞なれて侍

右歌さもと聞え侍に色そあなちに詮ありても覺侍らぬ

かれこれ共に思あはす侍れに勝負申かたし

千百六十七番

左持

保季朝臣

かひもなきたいたつらのなかめ哉思へといはて過る月日は

右

寂

蓮

わひつゝも春までとたに思はゝやしははてぬる雪の下草

左心ありて侍り右戀の心かすかに見え侍と詞なひやかに

優に侍れに猶持なとにや

千百六十八番

左勝

良

平

夕されば松に秋風をとつれてこぬ人つらきうたゝしのゆめ

右

家

長

いたつらにたのめぬ人を松の門さちてそあくろいくともなく

左歌松に秋風音信てといひこぬ人つらきうたゝしの夢な

と侍こそ事外にいひしりて侍れ右歌もあしくも侍らねと

も猶左勝へくや

千百六十九番

左

具

親

うしといへばやかて心のかはるかは戀しき上のおもひなりけり

右勝

三

宮

物思ふにならば袖のしら露はしのはんとしもおほえさりけり

左歌さても侍ぬきに戀しきうへのといへる字やさへた

るやうに覺侍右歌さる事と覺侍にしら露そたよりなきや

うに聞ゆれとすへて歌からなかく侍り仍爲勝

千百七十番

左

顯

昭

我戀やよるのいとまにつみしせり袖のみぬれてみる人もなし

右勝

内

大

臣

せきとむる心も苦しいさいらは井の水ももらしはてゝん

左本文ある事をよめれとよるのいとまなと侍ほとにや俗

に聞え侍らん右よろしく侍り仍爲勝

千百七十一番

左勝

女

房

いつら秋のながしてふ夜は名のみしてつきぬ名殘そ有明の月

右

兼

宗

卿

しのふれと涙の色のくれなゐにふかきこゝろあらはれにけり

左歌古今にいつらは秋のながしてふ夜はと末句にをける

ふりは今上句にいつら秋のながしてふ夜は名のみしてな

と侍罷めてたく覺侍右めなれたる事に侍れは無左右以左

爲勝

千百七十二番

額拾遺

あら磯の浪よせかくる岩根松いはれとれにはあらはれぬへし

左持 左大 臣
右 通 光 卿

うれしくも色にみせつる涙かないふともいはいおもふばかりは

左歌浪よせかくるいはれ松いはれとれにはあらはれぬへし

しなと侍風體面白詞花美にこそ覺侍に右の歌いふともい

かいなと侍程是又すてかたくこそ見え侍はえまかし侍ら

し持と申侍へし

千七百七十三番

左勝 前 權 僧 正

かよい行夢路にすふる關守はうちもれぬよの我身なりけり

右 釋 阿

關守はうちもれぬともいたつらにかへる戀路はかひなかりけり

左右共に同關をよまれていつれもなかく侍に左の關に

はいますこし心とまりて覺侍り

千七百七十四番

左 公 繼 卿

山かけの岩もとすけのれたくのみ色もかはらぬ物おもふらむ

右勝 俊 成 卿 女

新勅撰

くれなばとたのめても猶朝露のおきやらぬ床に消そしぬへき

左いひしりて儼に見給に岩もとすけはれかたき事に見き

きならひて侍にたいねばかりにはいかにおはえ侍れと又

さる事もなとか侍さるへき右心さもと覺て詞よろしくい
ひくたされて侍り猶右の可爲勝にや

千七百七十五番

左勝 公 經 卿

ならへこし枕ばうとき面影のうらめしなから猶そはなれぬ

右 丹 後

我ゆへのなかくと君はしらしかし申々よその人はとへとも

左心めつらしく侍かとも右もおしくも侍らぬとも左猶勝

へきにや

千七百七十六番

左 季 能 卿

なにとなく思ひ入るらん吉野山奥にも人はあはぬ物ゆへ

右勝 越 前

なのつからまともむ程にわすらるゝ戀を夢こそおとろかしつれ

左歌さもと覺侍に顯季卿歌に「我戀はよし野の山のおく

なれや思ひ入ともあふ人もなし」と侍歌に心通ひて侍め

りもし此歌を思ひてよまれたるにやされと歌おもてはさ

としも見え侍らず右歌心をかしく侍めり仍爲勝

千七百七十七番

左 宮 内 卿

思事えそしのばれん袖のうへに秋ならばこそ露とかこため

右勝 定 家 朝 臣

戀しさのわひていさなふひ／＼に行てはさぬる道のさゝ原

左歌させるとかも侍らぬに右歌心詞相叶事外に宜こそ見

え侍れ仍爲勝

千七百七十八番

左持

識

岐

いたつらにきてやはくちんあや薙なかつ涙をしきしのひつゝ

右

通

具

朝

臣

しる人も涙のしたにくちはてはたか名はたいしつれなきにして

右歌分明にもえ心得侍られは無左右勝貞難申

千百七十九番

左

小

侍

從

夢とのみ思ひはてゝもやむへきに契しふみのなに残りけん

右勝

家

隆

朝

臣

人ふれすくつるたくひや我袖にくらふの山の谷のむもれ木

左歌心はさても侍りぬへし契し文や無下にたゝありに侍

らん右歌心詞相叶て侍めれば爲勝

千百八十番

左

隆

信

朝

臣

いくまほとそむる心を人とはゝかはる涙の色をこたへむ

右勝

雅

經

いかで猶ほにしも人に住ふしのあさいは水のすゑはたゆとも

左歌よろしくよまれて侍に右の歌いかてなをえはしも人

にすみふしのと置てあさいは水の末はたゆともと侍程め

つらしく艶に見給ふれば猶可勝にや

千百八十一番

左

有

家

朝

臣

山川のこぼれる涙の春風に打出てこそいはまほしけれ

右勝

寂

蓮

なそもかくおりしも物を思ふらん秋のれ覺もふかきよの雨

左「山風に解る水のひまことにうち出る波や春の初花」

とよめる歌の心をもて面白戀に引よせられて侍ものかな

右なそもかくおりしも物を思ふらんといひて秋のれ覺も

ふかき夜の雨と侍る心くるしきさまのすてかなく覺侍り

勝と申侍へし

千百八十二番

左

保

季

朝

臣

まてとかやいひしばかりを命にてあふまてとやは身を怨むへき

右勝

家

長

秋の鴈かへる春をもたのみけり我玉つきの行ふふらずも

左あしくも侍らぬに五文字そ耳にたちて侍右めつらしき

さまにて宜こそ見え侍れ可爲勝

千百八十三番

左

長

平

さりともとつれなき人を松風の心くたくる秋のふらつゆ

右勝

三

宮

今こんと契し程も年ふりて軒はまのふに庭は浅茅に

左ことなる事侍らす右心は侍り末の句そ耳にたちて聞え

侍れとも猶勝なとにや

千百八十四番

左

具

親

中々についむけしきや時雨らんうきになしたる泪なりけり

右勝

内

大

臣

あふ事につくまの神にいのりきてなへての數にいれしとやきは

右ふるき事を引よせて心めつらしくして尤逸興にこそ侍

めは仍爲勝

千百八十五番

左勝

顯

昭

新千載

さのみやはつらきけしきをみしま江の入江の孤の亂れはつへき

右

忠

眞

卿

あちきなくたのめぬ人を我待て深行まになけきそへつる

左歌ことなる事もなく又めつらしき所も侍らぬとよくつ

つきて侍めり右歌あしくも侍らぬを中の五文字いかにそ

聞え侍らん猶左はよさるへきにや

千百八十六番

左勝

女

房

つれもなき人をはたのむかひもなくてくるい夜ことに秋風を吹

右

通

光

卿

けふまてはまのひにしほる袖の露いつあらはれて誰にもらさん

左歌思ひ入られて侍さま幽玄にこそ見給れ右もさる事な

から猶以左爲勝

千百八十七番

左勝

左

大

臣

新後深

よそなからかけてそおもふ玉かつらかつらき山のみねの白雲

右

釋

阿

年もへぬ宇治のはし守君ならはあはれもいまはかけまし物を

左歌「よそなからみてやゝみななかつらきの高間の山の

みねの白雲」といふ歌なもてかやうにとりなされて侍詞

たくみに餘情満ちありてこそ覺侍れ右又「千早振宇治の

橋姫なれなこそあはれとは思へ年のへぬれは」といふ歌

思はれて艶に侍れとも猶以左爲勝

千百八十八番

左持

前

權

僧

正

横の戸をさいてそあくる君はこそ我やゆかんのやすらひのまに

右

俊

成

卿

女

思ひぬの夢のうきはしとたえしてさむる枕にきゆるおもかけ

左は衣通姫の歌に「君やこん我や行んのいさよびに横の

板戸もさゝすねにけり」といふに似てこそ侍れ此歌をと

られたるにや右歌源氏物語の詞をすへてやさしく見え侍

にさむる枕にきゆる面影とこそいかい心ゆかす侍れ夢に

見えんすかたこそおとろかはきえもし侍らぬ面影に夢さ

むとき消侍らし物なとおほえ侍れば是をおもひきたためむ

程は勝負難申

千百八十九番

左持

公

繼

卿

こひすともつねにあふせを祈哉これなほうけよみたらしの神

右

丹

後

待々て山のは出る月はみつ今こんといふ人はなけれと

左右共に古歌を思て侍り左は五文字いかにそや侍り右は

よろしく侍り戀の心すくなしやと見給れば持なとにても

侍れかし

千百九十番

左 公 經 卿

しほ風に岩うつ涙のわきかへり心くたくるものおもふかな

右 勝 越 前

いひそむる戀路にまよふ玉つさのむすほゝれたる物をこそ思へ

左歌「風ふけは岩打涙のなれのみくたけて物を思比哉」

といへる歌にや似て侍これもやかて此歌の心なをとら

んとよまれたるが右歌心は侍に艶書をもすふなといふこ

となよまれたるそまめしからぬ心ちし侍れと難まで

は侍らねは可爲勝

千百九十一番

左 季 能 卿

面影に行ふなとへはあちきなくしらぬ涙のこたへかほなる

右 勝 定 家 朝 臣

さえわひぬうつるふ人の秋の色に身をこからしの杜の下露

左は心おかしく右は心詞いひくたされてことによるしく

こそ聞え侍仍可爲勝にや

千百九十二番

左 持 宮 内 卿

わが戀は人しれぬまのあやめ草あやめぬ程それをも忍し

右 通 具 朝 臣

吉野川岩うつ涙のわきかへりかけみぬ水の瀬にくたけつゝ

右歌は心侍しか末句ぞいかいと覺侍左歌はことにめにな

つことも侍らぬにや持なとにや

千百九十三番

左 勝 讀 岐

うちはへてくるしき物は人のみしのふの浦のあまのたくなは

右 家 隆 朝 臣

から衣目も夕くれの空の色くもらはくもれまつ人もなし

左歌なびやかにいひくたされて侍うへに右歌も百自侍に

少歌合には戀の心やすくなくと思給れば猶左勝侍なん

千百九十四番

左 小 侍 從

思はしとおもふ心のかなには人をはましていかにうらみん

右 勝 雅 經

かけてたにたのめぬ涙のふる／＼なまつもつれなきささの浦風

左歌末句に人をはましてなとつゞけられ侍いとときよく

もおはえ侍らす右宜聞え侍可勝にこそ

千百九十五番

左 持 隆 信 朝 臣

いかにせん思ひに深し伊勢の海に釣するあまのうけかぬ身を

右 寂 蓮

をのつから恨むるかたもありなまし身をなき物に思ひなきすは

左歌なびやかにいひしりて侍右歌も宜に侍めれば持なと

にや

千百九十六番

左 勝 有 家 朝 臣

山かつのおりたつさはのまこも草かりにのみこそ細もぬらめ

右

家

長

涙かへる君にあふみのかたゝ舟しけきあしまを行かたそなき

左歌戀の心よそなるやうにすこし聞ゆれと又きやうにも

讀て侍にや右歌詞なひやかにもいらねは左猶可爲勝

千百九十七番

左勝

保季朝臣

今こんも契むなしくふけぬれは空行月の影もうらめし

右

三

宮

たのましと思ふ物から暮ことにこゝろにかゝる雲のふるまひ

右もあしくも侍らぬに左は猶宜侍にや

千百九十八番

左

良

平

續後拾遺

あはてたゝななく計の契なほこはなにゆへにむすひをきけん

右勝

内

大

臣

幾世しもあらし物ゆへあちきなくうき身にかへて思ふへきかは

左歌心は侍り右歌の心詞かけあひて華美にこそ見給れ勝

侍へし

千百九十九番

左

具

親

さりとと待しくれこそはかなけれとふにたに猶つらき心な

右勝

忠

良

卿

思ひねに我が心からみる夢もあふ夜は人のなさけなりけり

右よろしく聞え侍り可爲勝

千二百番

左

顯

昭

いとばれて年ふる身には思ひやる心つかひもはつかしき哉

右勝

兼

宗

卿

あふ坂はみやこにちかき程なれと戀路となれば遠さかりけり

右勝侍へきにや

千五百番歌合卷第十七

戀二

判者顯昭法師

千二百一番

左 勝

女

房

なかむれはこぬ人またる侘つゝも今夜の月にあかすかもれむ

右

釋

阿

せきわひぬあふ瀬もしらぬ涙河かたしく袖やあてのしからみ

判申云左歌は「月夜にはこぬ人待るかき曇り雨もふらな

ん侘つゝもれん」と申歌の心にこそ侍めれ雨もふらなん

の詞をすてゝひとへに今夜の月にあかすねんと侍るおそ

らくは月をもてあそふ心もふかく成て本歌よりもまさり

てこそ侍めれ右歌は萬葉歌に玉藻菊あてのしからみうす

きかも」と侍歌の一句をとりて井てのしからみと置れた

るは心高きに上句は金葉集の歌に「淺ましや逢瀬瀬もしら

ぬ名取川またきいはまにもらすへしやは」と侍にかよひ

てあふせもしらぬ涙川と侍るわたりあさくやきこえ侍ら

ん左歌は本末一すちに高情のすかたをこのまれて左歌勝

と申侍へし

千二百二番

左 勝

大

巨

下もえの名にやはたてん難波なるあし火たくやにくゆる煙を

右

俊

成

卿

女

類後拾遺

夏衣うすくやのなりぬらん空蟬のねにぬるゝ袖かな

左歌は萬葉に「難波入蘆火焚屋はすしだれとをのか妻こ

そ床めつらしき」と侍歌によせて蘆火たくやにくゆる煙

の我下もえの名にたてん事を歎かれたる程優艶にこそ聞

え侍れ右歌は「蟬の聲きけはかなしな夏衣うすくや人の

成人と思へば」と侍歌を上下の句にとりちかへられたる

にや空蟬の音にぬれん袖よりも猶蘆火たくやの煙はたち

まさり侍らん

千二百三番

左 勝

前

權

僧

正

あり明のこや長月の空たのめ待出る月のかきくもるまで

右

丹

後

舞千載

時しらぬ戀はふしのねいつとなくたえぬおもひにたつけふり哉

左歌は「今こんといひし計りに長月の有明の月を待出る

哉」とよめる素性が歌によせてそらたのめに待出る月を

かきくもらせられたりきもと聞え侍り右歌は伊勢物語に

侍「時しらぬ山はふしのねいつとてかゝのこまたらに雪

の降覽」と有歌をおもひて山は富士のねを戀はふしのね

とかへられたるにこそかゝるすちの歌にとりてあしくも

侍らねと歌合には如何侍へからん左歌をまさると可申哉

千二百四番

左 持

公

繼

卿

浪あらし岩にも松はおひにけりとおもふ計をなくさめにし

右

越

前

岩のうへにおひぬる松のたねをのみたのむ計のなくさめそうき

左右共に「種しあれば岩にも松は生にけり戀をしこひはあはさめやもと」侍歌を思はれて詞もおなしやうに侍り終句そかはりて侍れとそれもとりくなればおとりまさり申かたき也

千二百五番

左 勝

公 經 卿

かくしつゝうき身消なほありし世の夢をはかなみ哀となみよ

右

定 家 朝 臣

夢なれやなのゝしのはらかりそめに露わけし袖は今もしはれて

左歌は伊勢物語の「ぬぬる夜の夢をはかなみまゝとめは」と侍歌の詞を思はれたるにや哀に聞え侍り右歌は思はれたるすち侍にこそおほつかなく侍れ但し源氏物語に北山の旅に紫土のうはの尾にあひて「はつ草のわか葉のうへを見つるより旅人の袖を露もかはかぬ」と侍歌やかて詞も侍りその事のありやうなを思はれたるにやなのゝしのはらなとも北山の旅にのたよりありてや此事雲をはかりの事に侍る歌合のうたしかなるへければその事と承らん程左かつへき歟

千二百六番

左 勝

季 能 卿

さもあらはあれ憂身の程やしらせまゝいかでやむへき物思かは

右

通 具 朝 臣

我戀はあふなかさりのたのみに行くもしらぬ空のうき雲

左歌詞もかさらす心におもふよにいいひのへられたり右

歌は「我戀は行ふもしらす果もなしあふを限りと思ふ計ぞ」とよめる躬恒が歌をおかしきまゝにとりなされて侍りとちむる句の空のうき雲の詞いか聞え侍は左まさるへくや

千二百七番

左 持

宮 内 卿

身のほにつゝむといはく自らいとふになりぬ戀すしもあらず

右

家 隆 朝 臣

おもへとも人の心のあさちふにをきまかふ霜のあへすけぬへし

左歌は「月夜よし夜よしと人に告やらはこてふに似たり侍すしも非す」と侍心をこひれかひて月を戀になしたすしもあらずなこひすしもあらずといひかへられたるにこそ右歌は「ありつゝも君をまたん打なひき我くろかみに霜の置まふ」といへる終の詞ををきまふ霜のとよみなされて又ひるは思ひにあへすけぬへしとあるなはりの詞をひきうつされたる共にちか入て侍れといつればさたかに勝まくへしとは申かたきをや

千二百八番

左

讃 岐

ふけにけりこれや頼めし夜はならん月をのみこそ侍へかりけれ

右 勝

雅 經

あはれともいつかは人にいはれ野のいはれすかゝる袖の露かな
左歌は後拾遺に侍江侍従か一月みれば山の端高く成にけ

り出はと言し人に告はや」と讀る事思ひ出られ侍り右歌にいはれ野と侍るは新拾遺に「鶉鳴いはれの野への秋はきを思ふ人ともみつるけふ哉」と侍るに萬葉には鶉なくふりにし里のはきにと侍はおほつがなく侍り其歌ならて侍にやたしかにかんかへられ侍へし後拾遺に眞蓬か歌に「磐余野の萩の白露分行は戀せし袖の心ちこそすれ」と侍はふるくもよみて侍にこそいかさまにても右かちにや

千二百九番

左 勝

小

侍

從

あさましやかくやは物をおもふへき我つらからは人はしのはし

右

寂

蓮

おもふ事千えの浦わのうき木たによりあふ末はありとこそきけ

右歌は萬葉に「秋風の千えの浦はのこつみなる心は寄ぬ後はしらぬと」と侍歌の心也此歌には浮木と侍り萬葉には木積と侍りこつみとは浪にうかへる木の枝などの鹽にひかれて浦々になかれてよるな申にこそ萬葉には又よめり「堀江より朝鹽みちによるこつみ貝にありせばつとにせましを」これはこつみとよますしてうき木とよまれんは本歌にやたかふへき又法花經には一眼の龜の浮木のあなにあへるがことしと解り海の龜いかばかりのあなならは浮木もちいさからし又張窓が浮木にのりて天河の水上を尋たり又海渚の人も槎にのりて天河の河邊にいたりてたなはたのひこ星にあへりといへり小大君か歌にも「天河浮木にのれる我ならは君かあたりにつふはきなまし」と

よめり萬葉の木積を叩へてうき木とよまんことはいかい又思事千えの浦わとつけられたる事は庵主か歌に「わがおもふ事のしげきにくらふればしのたののりの千えは物かは」と侍るは千枝と申事也千えのうらわにとことたかひたれとたいちえのうらとよめる名ばかりによせたるなるへし歌合にはかゝる耳とをき詞なとなはよますとぞ先達申をきて侍るに左させるとか侍られは勝と申へし

千二百十番

左 勝

隆

信

朝

臣

あさゆふにうき面影をみなれさほさすかに扱もなくさきみやせん

右

家

長

夢にたにみるよもなくて明るよのかへす衣のそてのうら涙

左歌みなれさほさすとはかりにてたかせ舟なともよせられぬいかとおほえ侍れと古くはさのみこそ侍のれ「梓弓をじて春雨けふふりぬあすさへふらは若菜つみてん」なとそ侍あり右はしめおはりよむへきふしはみなよまれ侍れと夢によせて夜の衣を返し袖のうら涙にかけてみるめなきよしをよまれたり事一すぢならぬはな左勝ぬへしとそ思ひ賜へ侍ける

千二百十一番

左

有

家

朝

臣

年ふともなかれてこひんつらしとて扱やは人を山川の水

右 勝

三

宮

よといもにうき人よりもつれなきは思ひにきえぬ命也けり

左歌は「山高み下行水の下にのみなかれてこひん戀はし
ぬと共」侍る歌の詞をとられたりと見ゆれとさてやは人
を山川の水と侍るあさきさまなるへくや右歌心詞始終相
叶て心詞たしかにのみすへられて侍はうたかひなきかち
に侍めり

千二百十二番

左

保季朝臣

思ひやに草にもあらず木にもあらずたいやは袖に露はをくへき

右勝

内大臣

見し夢をしのふる雨のもらさはやうつゝともなき袖の雪を

左歌は「木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに吾身
はなりぬへら也」と侍歌は竹をば木にもあらず草にもあ
らずとよみて侍りそのかしらむれの句をとて今の歌の
むれこしにをかれてはへる本歌よりは品なきやうにきこ
え侍るはひか覺えにや侍らん右歌は源氏の歌に侍る「見
し夢をあふ夜ありやと嘆くまにめさへあはてそころもへ
にける」とある歌の心にやたとひ其本歌ならずとも歌の
すかたよろしきさまなれば勝と可申

千二百十三番

左持

良平

池水につかはぬをしのうき枕ならふかたなき戀もするかな

右

忠良卿

人もうく我もくやしきなくさめは世々のちきりのむくひ計そ
左歌ふるきやうなこひねかはれて一ふしとよまれたるさ

る事と見え侍右歌はつれなきこひのなくさめに世々のち
きりまでおもひ入られて侍り心さしとリノに侍れば持
と申へき也

千二百十四番

左勝

具親

今はとて思ひたゆへき横の戸をさゝぬやまちしならじ成覽

右

兼宗卿

君をのみひとへにしのふ夏衣さてもうらなきかひやなからん

左歌は「君やこん我やゆかんのいさよびにまきのいた戸
もさゝすねに鳧」此歌を思はれてよろしく侍り右歌は夏
衣によせてひとへにうらなしとはめつらしけなくや左を
かちと申侍へし

千二百十五番

左

顯昭

さりともとよまたいにては山城のいつみの小管いつかあひみん

右勝

通光卿

古へはしちのはしかきも一夜とも頼むればこそそれにつけても

左歌は「山城のいつみのこすけよそなみにいもか心をわ
か思はなくに」と侍る萬葉の歌をおもひて侍れと下句い
つかあひみんなと心よくもおほえ侍らす右歌はしちのは
しかきも一夜なとよまれたるは昔よりよみきたれる事な
れははしめて申へからず天徳四年内裏歌合に平兼盛が歌
に「ひとへつゝやへ山吹はひらけなんほとへて匂ふ花と
頼まん」と侍をは判云やへ山吹の一重つゝひらけはひと

へ由吹にこそ本意なくやあらん又上句のはての文字下句
同し文字ありて負侍るに同歌合に小貳命婦が詠に「足引
の由かくれなるさくらはな散のこれりと風にしらすな」と
侍る歌をはいとをかしくてきてもありなんとて勝侍り
ぬされば同病なれとかちまけは歌のよしあしもしは難の
ありなしによるかと心得られ侍れば右歌勝へく侍る

千二百十六番

左持

女

房

君はしるや待夜あまたにつもりきて袖に有明の月をみる共

右

俊成卿

女

色かはる心の秋のときしもあれ身にしも暮の萩の上風

左歌上句に待夜あまたにつもりきてと侍る柿本人丸がた
のめつつこぬ夜あまたにとよめること葉思出られて侍り
下句は伊勢が歌に「あひにあひて物思比のわか袖に宿る
月さへぬるゝ貌なる」とよめる歌おもかけにたちて侍り
袖にあり明の月をみるととさへ侍るいよゝ月前戀さ
はまりぬることにこそ待めれ右歌の色かはる心の秋の身
にしむ暮の萩の上風もやうかはりてたゝならず侍れはみ
きの袖も露をきぬへくや持と定可申也

千二百十七番

左

大

臣

木かくれて身はうつ蟬のから衣ころもへにけりしのひくゝに

右勝

丹

後

わりなしや露のよすかを尋きて物思袖にやとる月かけ

左歌「敷島のやまとはあらぬから衣比もへすしてあふ
出もかな」と申歌は貫之か詠也此左の歌は後撰に「忘ら
るゝ身はうつせみのから衣かへすはつらき心也けり」と
侍歌又伊勢が歌に侍る源氏にもいれる「うつ蟬のはにを
く露の木かくれてしのひくゝにぬるゝ袖哉」これらの心
にておもしろうよみなされ侍にこそ木かくれて身はうつ
せみのから衣とをきてころもへにけりしのひくゝにと侍
るめつらしさめをよはすこそ待めれ右歌は露のよすか
と侍源氏の詞にはあさからぬよすかにかけてなといへる
詞は侍るにや萬葉には「しかの山いたくなきりそ荒おら
かよすかの山とみつゝ忍はん」と侍りひこひめか和歌の
式には「あひみるめなきこのしまにふけよりてあまそて
みちぬよすかなみ也」是らにていかなることとは心え
られ侍なん此の歌の心もたかひ侍らず歌めきて侍れば左
のころもへにけりは心得すして耳に聞なれて侍れば露の
よすかまさり侍りなんや

千二百十八番

左勝

前權

正

いかにとよ戀しき事をよしなしと思ひはつれば物忘れして

右

越

前

あふ事はかた山さしの岩の上いつなまつとてふるみ成らん
左歌は「むかし人になを立返る心かな戀しきことに物わ
すれせて」これは貫之か詠に侍今の歌下句は此歌の二句
をとりて今三句をおかしくよみそへられて侍るもおかし

くよみなされぬれば撰集にもまかり入侍らんか右歌は萬葉の歌にあさつまのかた山きしと申歌の詞をとられて侍れと終句なとよろしかられば左歌は勝侍なん

千二百十九番

左勝

公 繼 卿

ふちはかま夢路はさこそ通ひけれあふとみる夜のうつりかも哉

右

定 家 朝 臣

^{新古今}尋みるつらき心のおくの海よしほひのかたのいふかひもなし

左歌は鄭文公か家にいやしき妾ありその名を燕姫といふ夢に天使來て蘭をあたへていばくこれをなんちか子とせよといへり夢覺て後にうめる子を蘭となつくといへり此事をよまれたるなるへし右歌は伊勢よりみやす所の源氏のもとへたてまつれる歌云「いせしまや鹽干の湯にあさりてもいふかひなきばうき世也けり」此歌いせしまなかへてつらき心のおくの海となされしほひのかたにあさりてもいふかひなきば浮世とあるをしほひのかたのいふかひもなしとかへられたりうき世の詞をすて戀の歌につけられたる成へし左の燕姫か蘭の夢は今すこし歌めきてにほひふかく侍ればまさると申へし

千二百二十番

左持

公 經 卿

なかめわびうはの空なる月かけに身のうき雲そいといかなしき

右

通 具 朝 臣

あふとみて思ひあはせぬ夢にさへばかなかりける契りなれとや

左歌はうはの空なる月をなかめわびて身のうき雲をいとひ右歌はあふとみて夢のむなしきにはかなき契をしれると共に宜きこえ侍れば同程と可申にこそ

千二百廿一番

左勝

季 能 卿

しらせては中々戀やまさるへきいはぬにつらき人しなけれは

右

家 隆 朝 臣

なのつから頼む夢路はむなくしていつかうつゝの戀はさむへき左歌の心あしくも侍らす右歌夢路なとよみてよせある詞やいさゝかも侍へきされは古も「夢ちには足もやすめす通へ共うつゝに一め見し事はあらず」又「夢ちにも露や置らん夜もすからかよへる袖のひちてかばかね」などこそよまれたれ左勝也

千二百廿二番

左持

宮 内 卿

これも又あはれいつまでなげかれんかばらぬたにもかはる心な

右

雅 經

さきの世をおもふもうしや人心つれなかれとは契りしもせし左右の詠おもひ／＼に心をつくされたるにとりて右歌はいさゝかおほつかなきふしこそ侍れつれなかれと契らすはさきの世を思はんもなにかばうかるへきせめておもふあまりにこそふるき歌には「先の世の契をしらてはかなくも人をつらしとおもひける哉」とおもふ人も侍る物をされとちいやちくきにおもひみたるゝ心のうちなは一す

ちにしつめおもふともかなひかたし人の心々はたい同事
と申侍へきにこそ

千二百廿三番

左 勝

讀

岐

夢にたに人をみふとやうたいの袖吹かへず秋のゆふかせ

右

寂

蓮

いせの海の鹽瀬になひく濱萩のほとなきふしに何しほるらん

左歌は萬葉に「自妙の袖ふりがへし戀れはや妹かすかた

の夢にしみゆる」といふ歌の心をおもひて袖ふきかへず

とよまれたるよろしくも侍り國信卿の歌合の時夜戀に隆

源法師が「戀侘てかたしく袖はかせともいつかは君か

夢にみえける」とよめるなほその時の歌仙衣かへすと同

事かなとおほめき侍けるも萬葉の歌たしかにもおほえさ

りけるにや右歌は「神風やいせのほま萩おりふせて旅れ

やすらんあらき濱へに」と侍歌の心にこそたし上句鹽

瀬と侍れと下句にしほるとよめるはあらぬ事なれとあま

人わたつみなとよせては袖のぬるゝをしほたるなとそ

へよむ事なればたい文字の病よりは耳にたち侍ぬへし源

氏の歌に「しほゝとよつそなかりかりそめのみるめ

はあまのすさびなれとも」とよめり左歌勝にや

千二百廿四番

左

小

侍

從

ちきらすな枕にとめんうつりかなたえなん後のかたみなれとは

右 勝

家

長

わひつゝは同じ世にたにと思ふ身のさらぬ別になりやはてなん

左歌枕にとむるうつりかのためての後の形見とならんも

なさけふかくこそ覺侍れ右歌は五郎中將業平の君か母の

みこ長岡に住けるときとみの事とて文をもてきたりこと

事はなくて「老ぬればさらぬ別の有といへはいよく見

まくほしき君哉」とよめる歌そのさらぬ別よめるはし

めとおほえ侍るひとことはなとれるも心ほそききゆれ

は右の歌は猶あはれもかけ侍ぬへし

千二百廿五番

左

隆

信

朝

臣

いし川や鰯のを川のなかれにもあふをありやとみそきをそする

右 勝

三

宮

物思ふ心のうちにやとりきぬふしのたかれもむるのやしまも

左歌は左大臣家の百首歌合に祈戀に「石河やせみのを川

に齋串たてれきしあふせば神にまかせつ」とよめる歌侍

りその作者達定おほふられ侍らん但長承のころはひ顯輔

卿歌合に「戀侘て落る涙の玉ならはちはこの數もつきや

しなま」と藤雅親が歌也其後保延の比家成卿歌合に「君

戀る涙の玉をぬきをきても車にも積てみせばや」藤宗

國歌基俊判云さきの歌合に涙の玉にはこの歌あり今の歌

合に泪の玉も車の歌あり忘て誦するかこひれかひてよ

めるにても千箱百車これ同事也古歌二たひよむは歌合に

ゆるさぬ事也遼東のゐのこにたとふへしといへりしから

は此左歌すてに此とかなをかせり右の歌はおもひにか

る心に富士の洞室の入鳥をともしやとされたる珍らしく
たくましくふせいなりのたかひなき勝に定られ侍へき也
千二百廿六番

左持 有 家 朝 臣

かりそめに結ふさいやの雨そいき一よのほとももる涙かな

右 内 大 臣

忍ふれとよそめやいかにあきてあらふ盟の水のかけもはつかし

左歌は籠馬樂の歌に「あつまやのまやの餘りの雨そいき

我たちぬれぬこの戸ひらかせ」とうたへるをむすふさい

やの雨そいきとよみなされたる有興也右歌は世俗の口ず

さみに「あきてあらふたらひの水に影みれば戀にわか身

は面やせにけり」此たはふれことにかよひて侍るにつけ

てもおかしくは侍り但はれの歌合にもかやうの戯歌に

とりいつる事もふるく侍り寛平太上天皇の御時后宮歌

合に「いくはくの田を作ればか郭公しての田をさなあと

なふふふ」藤敏行歌「秋風にほころひぬらし藤はかま

つかりせてふきりくすなく」在原棟梁これらを案

侍るに左はひきつくるへたるさまなこのみ右はおかしき

心にほこれりいづれをすていつれをとるへからず侍り

千二百廿七番 左 保 季 朝 臣

おもふ事しのへと今は名取川せいの埋木あらはれやせん

右 勝 忠 良 卿

ぬられぬは枕もとき床のうへにわれしりかほにもる涙哉

左歌は「名取河せいの埋木あらはれはいかにせんとかあ

ひ見初けん」此歌の上句なとりて今の歌の腰より下三句

になかれて侍りはしめの二句ばかりあたらしく侍也右

歌は「我戀を人知らめや敷妙の枕のみこそしらはしるら

め」と侍歌につきてぬられればまくらもとき床の上に

と讀をかれてわれしりかほにもる涙かなと侍る下句おか

しく侍れはいつこふるくと申へからず古歌枕ばかりそし

らはしるらんと侍詞に付て枕もときとなされたるはか

りなればあたらしき歌なれば勝とされたため申侍ぬ

千二百廿八番 左持 良 平

名殘にはぬれこそまされさよ衣返してきつる夢の明ほの

いとふ共同し世にこそすむらめと思ふばかりそたのみなりける

左右の歌共に風情はよくとられて侍に左は下句よろしか

らす右は腰句のすむらめと侍詞や今少おもはるべく侍ら

ん同程となすらへて可申

千二百廿九番 左 具 親

ほしわひぬ思ひしのたのもりの露千々にくたくる手枕の袖

空蟬のひともといへばなにならす身にかへてやは忍ひはつへき

左歌はさきにもしるし申つるいほめしか歌にしのも

りの千えは物かはと申歌のすこしききなをされて侍にこ

そ又おもひしのたのつきはさきにもおころかし申侍の
右歌は源重光卿のせみのもゆげを女のもとへつかはすと
て「これをみよ人もとかめぬ戀すとしてはななく蟲のなれ
る姿を」とよみけること葉おもひ合られていと哀にこそ
覺侍れ勝と可申

千二百卅番

左

題

昭

いとひつる君ばかりやはうきぬなほくるしき物をたえぬ恨みは

右 勝

釋

阿

いく年になれにし床のふりぬらんつけの枕もこけおひにけり

左歌うきぬなほにかけてたえすくるしなとそへふむほも
のすそよりおちたるふる事なればめつらしけ侍らす右歌
は上句よのつれならすたけたかく見え侍うへに下句は萬
葉に「ゆひし組とかんひとをみ敷妙のわか木の枕若おひ
に危」と侍歌なと思出られて左歌まけ侍へし

千二百卅一番

左 勝

女

房

續古今
うらみよとなれる夕のげしき哉たのめぬ宿の萩のうはかせ

右

丹

後

新後拾遺
申々にこえてそまよふ相坂の關のあなたや戀ち成らん

左歌は一篇に金をちりばめ五句に玉をつらぬけり心詞共
にあひ叶てほめ申に付ておそれふかく侍也ふところなう
しなへり右歌はこいぢわりなく侍るにいさゝかいきとを
るところあひましばれり申々にこえてまよふといは、關

のこなたとそよみ侍へき「をそく出る月にもある哉足引
の山のあなたも惜むへらなり」これは月の出やられはか
くよめり「みよしの、山のあなたに家もかな世のうき時
の隠れかにせん」これも山よりこなたにてよむ心なりさ
ればこそ關のあなたにまよふとは申へからす作者よくよ
くおもはるへし以左可申勝

千二百卅二番

左 勝

左

大

臣

行かよふ夢のうちにたまきるやとうちぬる程の心やすめに

右

越

前

秋風に思ひみたれてくやしきは君ならしの岡のかるかや
左歌は「戀わひて打ぬるなかに行通ふ夢のたいちはうつ
つならん」此歌の心を終句におもはせていひさゝれ侍
なり右は古郷のならしの岡の郭公と侍歌につきてならし
の岡のかるかや秋風におもひみたれてくやしきとはよ
くこそよみくたされて侍れあまりにたくみにきりくまれ
て岡のかるかやなとしなやなかれて聞え侍らんやまと
歌ははかなきさまにておもへる所見えたるはいみしきし
なに侍れば左勝にこそ

千二百卅三番

左 勝

前

權

僧 正

なくさむる時こそなけれ月やあらぬ秋やむかしの萩のうは風

右

定

家

朝 臣

人心かよふたいちのたえしよりうらみそれたる夢のうきはこ

左歌に伊せ物語に「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして」と侍歌の心おしはかりて秋の心に引かへてなくさむる時こそなけれとよみをかれて秋やむかしの秋のうはかせと侍まことにたくみに侍心もをよはの風情に侍ぬへし大かたは詩にも歌にも時にしたかひてそのすかたかはる事にこそ侍めれ詩は齊公文傳序云漢より魏にいたるまで四百餘年詞人才子文體三たひかはると侍めりされは杜伯山か事時務にかなはずとてつねのやうなふる事も侍りやまと歌もかくのことし和歌は古今序云昔平城天子詔侍臣令撰萬葉集自爾以來時歷三十代數過百年其後和歌棄不被採雖風流如野宰相輕情如在納言而皆以他才聞不以新道顯云々又云時變澆漓人貴奢淫浮詞雲興艷流泉涌其實皆落其花孤榮至有_レ好色之家_レ以此爲_レ花鳥之使乞食之客_レ以此爲_レ活計之謀故半爲_レ婦人之有_レ難進丈夫之前云々今案平城御代萬葉之風體延喜御撰古今歌撰其姿不同其詞相違詩者四百年文體三變歌者百餘年風流亦變者歟古今序には今世中色につき人の心花になりけるよりあたなる歌はかなきことのみおほくとかけり又そのみ皆おちてその花ひとりさかゆ共いへりこれはならのみかとの萬葉より後延喜御代古今の歌なとはかはりて侍にやいはんや其後今の世になりてはともかうもかはり侍らん事た人の心にまかせ侍へし古き歌をのみほめ今をそしるへからす左の歌の心たかさも右うたのよのつれめきてげちかく侍もいつ

れに心えへし共思ひえ侍らす歌合に持のつかひ侍事なればさやうにてこそ侍へけれと猶うるはしきに付て左勝か
千二百廿四番

左 公 經 卿

いかて我しのひになるうつりかのためぬ匂を袖にかさねん

右 勝 通 具 朝 臣

曉の床は草はのなになれや露に別のなみたなく覽

左歌上句のうつりかと下句の匂ひとは同心の病にて侍り

六條右大臣家歌合に「我宿のはなたちはなの匂ひにはひと

とりぬる夜もうつりかそする」と侍歌勝侍るとて病あれ

とかちのよしの證歌いたして侍れ共くはしくそのよしな

しるされはおほつかなし此歌は病あり共つかひの歌無下

にわるくや侍りげん判者心はかたし右歌は「獨ぬる床は

草葉にあらね共秋くるよひは露けかりけり」此歌の詞を

とりてあしくも侍られは左歌やまひによりてまけ侍なん

千二百廿五番

左 持 公 經 卿

萩のはに露のかことをむすはすはかなも人なもたれかうらみん

右 家 隆 朝 臣

新古今 おもひ出またかかれことの末ならん昨日の雲のあとの山かせ

左歌は源氏物語の歌に「ほのかにも軒はの萩を結はずは

露のかことを何にかけまし」右歌は同物語に「みし宿の

煙を雲となかわれば夕の空も睦しきかな」もし此歌の心

かさらぬにても左かこと右かれこと同一料にてや

千二百廿六番

左

なにとかくよなく袖のしほらん思へはたれか心なりしそ

右勝

おもひわひおつる涙の玉こよにくたきはてゝもある心かな

左歌ゆへなきにあらずおもへる所はいひのへられたり右

歌は「あは雪のたまればかてにくたけつゝわか物おもひ

のしけき比哉」又源重之歌にも「風をいたみ岩うつ涙の

をのれのみくたけて物を思ふ比かな」か様の心共くたけ

て物をおもふに涙の玉のくたくるよしをよみそへられて

侍るはいづれまさるともおほえ侍らぬと左歌終句の心な

りしそなといかにそや侍れば右歌ちからいれられて侍め

れば勝侍なん

千二百廿七番

左勝

新後拾遺
あくるまにおしまぬ物をくれはとは心の外のそらたのめかな

右

寂

涙さほくあしまにかつくには鳥のうきしつみてもぬるゝ袖かな

左歌後朝歌にてはさる心も侍ぬへし右歌は鳴鳥のうきし

つみてぬるゝ袖も歌さあしくも聞え侍らぬと左はおも

ひ入て侍り右はよのつねの事にてや左可勝歎

千二百廿八番

左勝

深草の野へのうつらよなればなをかりにはとまたぬ物かは

讃

岐

右

詠わひぬじとり有明の月かけにあはぬ數かく鳴のはれかき

左歌は「野とならばうつらと成て年ばへんかりにたにや

は君はこさらん」といふ歌を思へり右歌は「曉の鳴の羽

かき百ばかり我をさすかく君かこぬまよ」と侍り左歌は

我宿のあれて野とならば我は鶉のやうになきて年へんと

よめるをそのあらましことのうつらなかりにはとまたに

たぬ物かはとよめり右は君かこぬ夜の數を鳴のまよは

さのやうに我はかすをからんとよめるを鳴の人にあはぬ

數をからんするやうにあはぬ數かく鳴の羽かきとよまれ

たりふたつにとらは鶉にならんと人の讀たればさもよみ

つへし鳴の數かくことはなければいかゝ左はいますこし

たよりや侍らん勝と申へくや

千二百廿九番

左

たのむ共今はたのましあふみちのしのゝをふゝき人ばかりなり

右勝

三

さのみやは人の心にまかすへきわするゝ草のたれをしらはや

左歌は催馬樂に「あふみちのしのゝをふゝきはやふかす

こもりまちやせぬらんゝをふゝき」と申歌に附て讀

るなるへしゝのゝをふゝきは風の名と申つたへたりこも

ちまちやせぬらんといふ詞につきて人はかりけりとはよ

めるにこそそれもたしかにやたしかに詞をことにあ

きらむる事はいかゝ大かた神樂風俗催馬樂などのうたは

小

侍

從

宮

家

長

ふるきうたにて心得やすき事あり又古語なとましりゆ
へありてなにとし申あきらむへくもなきことありとこ
そよるつのみちまりくゝりたる人々も申侍りけれ後頼朝
臣か竹風如秋と申題にて「秋きぬと竹の園生になのらせ
てまのいふいき人はかりなり」と讀るに下句おなし如
何右歌「今はとてわするゝ草の種をたに人の心に委せず
もかな」此心にて上三句は此歌をなかつて我種をしらは
やと侍りをしばかりなれと左歌の下句ふるけなればまく
へし

千二百四十番

左 隆 信 朝 臣

戀せしのみそきもいまや夢にたにみたらし川の忘れかたみは

右 勝 内 大 臣

明暮はなれし昔を忘れつゝ夢かとのみそおもひなさるゝ

左歌「戀せしと御手洗川にせしみをき神は受すもなりに
けらしも」と申歌につきて戀せしのみそきとよむ事侍れ
とこひせしのとよむ事はうけられぬ詞に侍りたい心うつ
くしう戀せしとよみ侍らはやとふるき人も申侍き右歌
業平朝臣これたかのみこのもとに年ころかまひけるにか
しらおろしてひえのさかもとに小野と申所にうつりあら
れたるに正月にとふらひにゆけりけるに雪いたうふりて
ものさひしけに侍りけるにかの室にいたりておかむにつ
れつれとしていと物かなしかりければ歸りてつかはしけ
るうたなりその心をとりでさりけなくていとせのながら

ひによみなされてあはれもふかく侍に左歌常の事にて目
もおとろき侍られば右をや勝と可申
千二百四十一番

左 持 有 家 朝 臣

立かへり暮まつはとのひるまたになく／＼袖をふほりつる哉

右 思 良 卿

戀をのみまつやのこすけ露ふかみかりにも袖のかはくまそなき

左歌ひるまたになく／＼袖をと侍るうちまかせたるつゝ
けやうにて上にはひるまなしといひ下にはれをなくよし
にそへつゝけられたるよろしき歌に侍られと源氏物語な
とには「いつくにか身を捨てん白雲のかゝるぬ山もな
くなくそ行」なと讀る事はおほかれはとかめ侍へからず
右歌かくらのしつやのこすけの歌につけて露ふかみかり
にも袖のかはくまそなきなとはなかく侍るに戀をのみ
しつやとつゝけ侍る事はふるくいとみえ侍らすこひすま
なとは侍めりされと近比はかく侍めればひとりいかゝと
申さんばひか事にてそ侍へきかちまけ定申かたし

千二百四十二番

左 保 季 朝 臣

大かたを涙にくらす夕されはおもふばかりのながめたにせず

右 勝 兼 宗 卿

なきなかつ涙も我ないとへばや身をばなれてはおつる成らん
左歌にあしく侍らぬに詮とせられたるふしやいかゞ千
載集に源明賢歌になげきあまりしらせそめつる言のは

も思ふばかりはいはれさりけり」と侍下句にやかよひて侍るらん一ことはもむねと思ひたるふるき詞をばはれにほさるへしあまた句なれとさせる事なきをばとかむるにをよはすといましむることなれば申侍なりおほゆるほと

千二百四十三番

左持

頁

平

さむしろやあたりさひしきね覺して夢の別も露けかりけり

右

通

光

卿

なのつからあふあらはのあらましと思ひ絶ゆる身の思ひかな

左歌ふるまへるすかた優に侍り右歌心をかく侍れば持にて侍へきにや

千二百四十四番

左

具

親

むすひけるあさき契りの程みえてあかて別るゝ山の井の水

右勝

釋

阿

みちのくのあら野のまきの駒たにもとればとられてなれ行物を

左歌は「結ふ手のしづくに濁る山の井のあかても人に別れぬる哉」とよめる歌のなかれにこそましかく聞なれて

あさき事とおもひ侍へし右歌はみちのくのあら野のまきの駒によせられたればおくふかく心にく侍ればいし井

にむすふてのしづくににころかけよりもあたちの駒のあしはやくかちふちうちまかせてやさしく侍らん

千二百四十五番

左

顯

昭

昔より人のうへにもおもひきや戀にうき名をといむへしとは

右勝

俊

成

卿

女

うちかへしかされし袖をかたしけはそれかと匂ふ手枕のつゆ

左歌の心と申詞につけてさせる見所も侍らす右の歌心たくみにすかた妙にして古判の詞にいとおかしなとほめ

られたるはかゝる歌をめでられたる詞にやとそおもひあはせ侍かちと申につけてかたはらいなく侍へし

千二百四十六番

左勝

女

房

萩のはに身にしむ風は音信てこぬ人つらき夕くれの雨

右

越

前

人ならはおとろかすなといひてまし心もしらぬおきのうはかせ

左歌上句には萩の葉に身にしむかせを音信させて下句にはこぬ人つらきゆふ暮の雨と侍こそ不堪紅葉青苔地又是

涼風暮雨天と白樂天のつくれる詩までも思ひ合られて戀のなさけも催され侍けんと思ひやられ侍れ右歌下句の心

もしらぬ萩の上風と侍も「夏衣また一重なるうたいれに心してふけ秋の初かせ」とよみてこそは侍るめれことわり

千二百四十七番

左勝

左大臣

繰返したのめてもなをあふことのかたいとをやば玉のをにせん

右

定家朝臣

面かけはなれしなからい身にそひてあらぬ心のたれちきるらん

左歌は「かた糸をがなたこなたによりかけてあはすはな

に玉緒にせん」と侍歌にて「ふとおかしくむせびなさ

れ侍る右歌はふかき心ほしり侍られとひとへにあらまし

ことにてくさりやられて誠すくなきまにやふるき歌讀

の中にも贈答の歌屋風しやうしの歌合の歌にはみなさま

かはりておなし歌よみなれとえぬかたえたるかたなと一

すぢならずと申つたへ侍と申事も侍歟左ばたしかにはあ

え侍ればつよしと可申歟

千二百四十八番

左

前權僧正

つみしらはむくひを思へ花かたみめならふ人はひとりならぬを

右勝

通具朝臣

とへかしなわ花かもの思草しほるゝ野への露はいかにと

左歌は「花かたみめならふ人の數多あれはわすられにけ

ん數ならぬ身は」と侍歌のさまにてこそ侍あれ此歌の上

三句を取て今の歌の下三句にせられて侍るめり右の歌は

萬葉の歌に「道のへのお花かもの思ひ草今さらになと

物思ふへき」と侍る歌のむねこしなとりて更に下句を讀

かへられて侍めり又始の句もあたらしく侍は今少右すゝ

みにや侍らん

千二百四十九番

左勝

公繼卿

道のへのいつまははらのいつかわれ歸る朝のつゆはらふへき

右

家隆朝臣

時しもあれ名そあなちにつらからん秋は夕暮月により明

左歌は萬葉に「道のへのいつまははらのいつも／＼人の

ゆるさんことを待ん」と侍歌の上三句のうち第三句の

いつも／＼をいつかわれとがへて下二句を後朝の歌によ

くかへなされて侍めり右歌は下句に秋はゆふくれ月是有

明と侍はさきにもしるし申秋のゆふへはあやしかりけり

の歌歟もしは「獨める床は草はにあられとも秋くるよひ

は露けかりけり」と申歌のこゝろ歟爰は月により明とは

それもさきにいたし申す曉はかりうき物はなしと申歌か

いかさまにも此下句のありさまよく讀すへられたると覺

侍らす秋ばたゝ夕ま暮こそたゝならぬ旅のうは風秋の下

露なとこそけにもとおほえ侍れ以左爲勝

千二百五十番

左

公經卿

うらみはや人をも身をも朝霧の八重たつなみの秋おしそ思ふ

右勝

雅經卿

やとるとて月に涙をまかせてもくちなはいかに袖のしからみ

左歌は「またしらぬ曉露におきめれて八重立露にまよひ

ぬる哉」是はさ衣の歌と承に此歌の心ならば朝霧の八重

たつなみの秋と侍はいかによまれて侍にかもし浪と雲と

なまかへてよみ侍らばきりとなみとをまあひませてよま

れ侍にや右歌もさきに申伊勢かやとる月さへぬるゝかほ
なると申歌にくちなはいかに袖のしからみなとよみそへ
られて侍るかとも思はれたる所よく侍れと左の朝きり
の八えたつ浪のなをきゝつかぬように覺侍れば右なかつ
と可申

千二百五十一番

左

季

能

癖

おきつ浪あらゐの磯の岩に生る松にもにたるそてのうへ哉

右勝

寂

蓮

面かけはくもる空たに有物をうたてくまなくすめる月かな

左歌は「くさかけの荒ゐの崎のかさしまをみつゝや片か
山路こゆらん」とよめる歌萬葉に侍ればあらゐの磯も侍
らん磯と崎とはかよはしてよめる事おほしとしまか崎と
もとしまか磯ともよめり右歌は「いつしかと暮を待まの
大空は曇るさへこそうれしかりけれ」と申歌の心にや後
拾遺に隆家卿の歌「さもこそは都の外に宿りせめうたて
露けき草枕哉」こればたゞ三文字なれともなき所かはら
ねはこの詞によりてきよけにきこゆ又ふるしも申つへ
し但あまりの事也詞つかひなとよろしく見ゆれば右まさ
ると申侍へし

千二百五十二番

左勝

宮

内

卿

から衣うちぬるほと夢路にも人にうらみをむすふ成けり

右

家

長

さ夜衣かきぬる事のなきてのみ涙に袖のくちやはてなん
左歌させるとかなくみえ侍に夢路と申詞かふ行なとよ
りたる詞なくてばたゞ夢とはかりよまれても侍ぬへくや
さきにも此よし申侍にき但あまりの事にこそ此御歌合に
もたひ／＼見え侍とほの／＼おとろかし申侍るばかりな
り夢路の歌さきにくはしくしるし申てき右歌はさ夜衣か
きぬる事のなきてのみとよまれたるさきにも申侍にき腰
句のなきてのみと侍上句の詞によらは無といふ心下の泪
によらは音をなくとよめりされと古物かたりにと侍はと
かく申かたし歌合は物語などのうたはにるへくも侍られ
はなきてのみの詞いかゝと聞え侍れば左勝と可申歟

千二百五十三番

左持

讀

岐

くもるさへうれしかるへき空ならば涙の雨もいとほさらまし

右

三

宮

うとかりしもろこし船もよるばかり袖のみなとをあらふ白浪
左歌はさきの五十一番の右歌に申あげ侍ぬるくもるさへ
の歌に聞え侍ぬ右歌伊勢物語に「おもほえず袖に港のさ
はくかなもろこし船もよせつばかりに」と侍歌の上下句
なとりちかへられて侍なりしかれと詞つかひなとあしか
られはさて侍なん左の歌も一ふしは侍れと猶右歌下の句
の袖のみなとをあらふしら浪とふるまはれて侍は勝侍る
へし

千二百五十四番

左 小 侍 從

侍人もとふの當こもとはいこそないふをあけてぬとしられぬ

右 勝 内 大 臣

詠れは心さへこそうき雲やそのいにしへのゆふくれのそら

左歌は「みちのくのとふの當こもないふには君をれさせ

てみふに我れん」と申歌にてまされたるか上句にとふと

よみて下句にないふとよめるやまひには侍らすや又とふ

のすかこもとはいとそへられたるは此こもなられともそ

の證は定めてかんかへられてそよまれて侍らん右歌は源

氏物語に「君もさはあはれをかばせ人しれす我身にしむ

る秋の夕くれ」と侍歌の心にやあしくも侍らす左は病侍

は負侍へし

千二百五十五番

左 隆 信 朝 臣

明ぬとはかなく忍ふなこり哉あふとしもなき夢の契を

右 勝 忠 良 卿

侍し比まちならひにし夕暮はまたれぬ時も猶またれけり

左歌は上にはかなくとよみて下に逢としもなきと侍れは

病なり右はかゝる詞つかひの歌も侍うへに左病侍れはう

たかひなき右勝也

千二百五十六番

左 有 家 朝 臣

たれもみなうきをばいとふことばりをしらすはこそは人を恨め

右 勝 兼 宗 卿

あさゆふになれ行君かおもかけはつらき心の外にやあるらん

左歌はことばりはきこえたれと詞くたけてや侍らん右歌

は風情よろしく侍れは爲勝

千二百五十七番

左 保 季 朝 臣

つれなきは猶かはらてや山しなの音羽の山の音にたつらん

右 勝 通 光 卿

逢事は夢にのみこそならひきてうつしともなき今夜也けれ

左歌は「山科のをとほの山の音にたに人のしるへを我戀

めかも」是は出しなのをとほの山とあるまゝにつけて

音にたにとそへたり和泉式部が歌は歸るさをまち心みよ

かくなからよまたいでばやましなとそへたり此左歌に

つれなきはなをかばらてや山しなのと侍れはいはれぬつ

つきにや右はさるふし侍られは爲勝なり

千二百五十八番

左 持 良 平

あひみても名残をしよのあま人はけさのおきにそ袖ぬらしつる

右 釋 阿

あやなしや戀すてふ名は立田河袖をそくゝるくれなるの浪

左歌は「松島やをしまか磯にあさりせし璧の袖こそかく

はぬれしか」と後拾遺の歌に侍り是にて後朝の心をよま

れて今朝おきにそ袖ぬらすなとそへられて侍り右の歌は

「千早振神代もきかすたつた川から紅に水くゝるとは」

これは業平か歌也此歌をよみそへて侍あり「あやなくて
またきなき名の立田川渡られてやまんものならなくに」

と申歌をとり合てたくみに戀のうたをつくりいたせり左
歌もよるしく見侍ればかちまけ申定かたし

千二百五十九番

左 勝

具

親

あかすしてわかるゝ涙袖にけふなをしのゝめの道芝のつゆ

右

俊 成 卿 女

思ひ出てなきこそわたれ秋風に契りし空の初かりのこゑ

左歌は「あかすして別るゝなみたなきにそふ水増るとや

下はみるらん」これは仁和のみかとみにおほしましけ

る時にふるのたき御らんして歸り給ひけるに兼業法師が

よめるなりわかるゝ涙たきにそふな袖にそふとよみ永ま

さるとや下はみるらんをなをしのゝめの道芝の露とよみ

うつしたることの外に物あさくや右歌は「思ひ出て戀し

き時は初かりのなきてわたると人ほしらすや」これはし

のひにかたらへる人の家のあたりをまかるおりに鷹のな

くをきいて黒主かよめるなり左は猶しのゝめいかいとき

こゆれと右は本歌と心も詞たかはぬやうに侍仍爲負

千二百六十番

左

顯

昭

さきの世の契ありけりとばかりもみゆるほとなることのはも哉

右 勝

丹

後

あひあても心のほるゝひまそなき歸る空には打時雨つゝ

左歌させるめつらしきふしはあられとも戀の心は侍あり
右歌かへる朝の心さも侍りぬへし勝と可申也

千二百六十一番

左 勝

女

房

御古今
うづつこそめるふひ／＼もかたからめそなたにゆるせ夢の關守
續拾遺集入

右

定 家 朝 臣

歌後集

おもひ出またかきぬ／＼の曉もわかまた忍ふ月そみゆらん

左歌は「人しれぬ吾通路のせきもりは／＼／＼ことに打

もれないむ」と侍歌と「あかてこそ思はん中は別なめそ

なたに後の忘れかたみに」と侍歌とふたつをとりてあは

せられてめてたくこそ侍れ誠庸才はけむとも及へからず

俗骨くたく共かなふへからずこそみえ侍れ右歌は「しの

のめのほから／＼と明行は已かきぬ／＼なるを悲しき」

と申歌にわかまたしのふ月そみゆらんとは／＼／＼へられ

て侍れと秀逸にはみえ侍らぬうへに月の字かきなりて侍

りあかつきとよみならはしたればきゝよからずや仍以左

爲勝

千二百六十二番

左

大

臣

くらしつる日はすかのれのすか枕かほしてもなをつきぬよほ哉

右 勝

通 具 朝 臣

今こんと契し事は夢なからみし夜に似たるあり明の空

左歌は「待くらす日は菅のねにおもほえてあふよしもな

と玉のなならん」と申歌にすかまくらをなちいれられて

たよりをかしくこそとりなされて侍めれまねひ歌はかやうに侍へきなりかはしてもなをつきぬ夜半かなと侍すか枕と尤よまるへく侍けり右歌は今こんといひしばかりと申歌にとりかゝるへくはおなしくはあり明の月ととちめらに侍る空もひかことならねと二にとらばの事に侍りかやうの事は人のこのみく侍れと存やうを申侍なりされと歌姿あしからねは右歌可勝也

千二百六十三番

左

前 權 僧 正

我袖にやとるならひのかなしきはぬるゝかほなる夜はの月かけ

右 勝

家 隆 朝 臣

清見かた我かよひちの關なれやうちぬる人も涙のよるゝ

左歌さきにも申侍やとる月さへぬるゝかほなる侍歌のかみのめつらしきやうに侍にこそ右歌伊勢物かたりの歌に「人しれぬわか通ひちのせき守はよひゝこと」にうちもねなゝん」と侍歌につきて通路のせきもりを清見か關になしてうちぬる人も涙のよるゝとよまれてめつらく侍れば勝と可申

千二百六十四番

左 持

公 繼 卿

あひなくも時雨の音のつらき哉侍人のこね夜はのれ覺は

右

雅 經

返してもむなしき床にあほる哉恨はてつるよほのさ衣

左歌はことばりさもときこえてよろしく見給るに初句の

あひなくもと侍おほつかなく侍つれにはあやなくもとこそよみ侍めれもしひかゝきにや侍らん規子内親王野の宮歌合に有忠か女郎花をよめる歌「くらふ山麓の野への女郎花露の下よりうつしつる哉」とよめるを源順が判申ていはく有忠かさが野をすきてくらふ山までもとめありきげんもあひなしと詞にこそかきて侍めれそれも又あやなしをかきたかへて侍しやらん又あぢきなしとかける本も侍めりとかくにおほつかなく侍り右歌はさざるとか見え侍らすされと左かきたかへを承て勝負はは可申侍りひかかきをおさへてまくへしとうたへ申事は左右相わかれてはしたなく勝負あらそふ時の事に侍り

千二百六十五番

左

公 經 卿

新古今

つくりと思ひあかしの浦千鳥浪のまくらになくゝそきく

右 勝

寂 蓮

たか里の露をは袖にはらふらんよもきのもと風にまかせて左歌なみの枕になくゝそ聞と侍るは人間事を千鳥のなぐにそへられて侍るか又千鳥の鳴にはあらて思ひあかしの浦千鳥をあはれにたへずして人のなくゝ聞と侍にもや覺束なく侍右歌は源氏のよもきふのまきにたつれても我こそとはめみちもなくふかきよもきのもと心はと侍歌の心か本歌にふかき蓬のもと心と侍れば如何にと申には及び侍られと蓬のもと風にまかせてと侍つゝさいかいとこそおほえ侍れさりながらも左の浪の枕に泣々そ

きくと侍は千鳥にもきく人にも通ひて如何と覺え侍れば
右の蓬の本の露は分行袖もしおれ増るへくや

千二百六十六番

左 季 能 卿

あひみても後つらからんうき名なほとめぬ命にかへんとそ思ふ

右 勝 家 長

うちしほれ露のみふかき思草霜にしられて年はへにけり

左歌はつねにはあふに命をかふとこそ讀ならはして侍れ

「命やは何ぞは露のあた物をあふにしかへは惜からなく

に」「人しれすあふをまつまに戀しなほ何にかへたる命と

か言ん」かやうによめるに此左歌は命にかへんともい

すしてあはれ事はかしこき事にて有な後につらからんう

きなのとまらんことを命にかへんとおもはれんはいか

はせんとめぬいのちにかへんとよまれたる詞のつゝきの

心得られぬいかゝ右歌は露のみふかきおもひ草にて霜が

るゝ共なくて年ふる心よろしく侍り左の命にかへんの一

すぢならぬにはかち侍りなむ

千二百六十七番

左 勝 宮 内 卿

とへかたな時雨を逝の色に出て人の心の歌にぞるみを

右 三 宮

心こそ一かたならずまとひぬれつりするあまのうけなられ共

左歌さることゝみえ侍り右歌は「いせの海に釣するあま

のうけなれや心一つにさためかれつる」と侍歌にあまり

にたかはすや侍らん本末の詞のとりにちかへられて侍はか
りにこそこれは左歌かち侍へき也

千二百六十八番

左 勝 讃 岐

なみた川せきやるかたやまかの浦みるめは末たのみなけれは

右 内 大臣

由しるのこまのうりふの世中やならしはてゝ人のつれなき

左歌はふるき歌ふたつをとり合てよまれて侍にや「早き

瀬にみるめおひせは我袖の涙の川にうへまし物を」みる

めこそあふみの海にかたからめ吹たにかよへまかの浦

風」かやうの心はへともに侍歟右歌は「山城のこまのわ

たりのうりつくりとなりかくなりなる必哉」とよめる歌

の心にてこまのうりふの世中やなとおかしくよみなされ

て侍なるへし左はいますこし歌合の歌にはかち侍なん

千二百六十九番

左 小 侍 從

たいもせしなかめなれ共おりからに忍ふも又そくるしかりける

右 勝 忠 貞 卿

身のうさは人のつらさをふるへにて涙の宿は袂なりけり

左歌たゝもせしなかめはつれの事なれは忍ふる戀のおり

のなかめくるしからん事は申くらふへきにあらすや右歌

は上下句共にたいうちあるさまの事に侍らすことの外に

こそほひたかくみえ侍りまさと申侍へし

千二百七十番

左持

隆信朝臣

我戀ははかなき夢のいさめかはみるにつけても袖のぬるらん

右

兼宗卿

續拾遺

いつまてか思ひみたれてすすくへきつれなき人を忍ふもちすり

左歌させる科見え侍らす右歌は河原左大臣の歌に「みち

のくの忍ふもちすりたれ故にみたれそめにし我ならなく

に」と侍歌の心にてふし／＼よろしく讀なされて侍れば

聞なれたる心ちもつかまつり侍にやともにさせることば

とみゆる難も侍られは持と可申也

千二百七十一番

左持

有家朝臣

泪しもせきやはあへぬ結びなく水もらしの契りたかはし

右

通光卿

あひみても過にしかたのつらさを忘るへしとは思はさりしを

左歌は「なとてかく逢こかたみに成にけん水洩さしと契

りし物を」と侍歌の心ながらあふこ形見の詞なとはあな

かちにとられずとも侍ぬへかりけり水もらさしの契の詞

や心よからすきこえ侍らん右歌あしくも侍られと又すく

れたる心もみえ侍られは同程と申侍へし

千二百七十二番

左

保季朝臣

袖のうへに心の色はふるけれどさすかにあさきおもひとはみし

右勝

釋阿

おもひ出よわすれやしぬるわかさちや後瀬の山と契し物を

左歌袖の上に心の色ふるしと侍にさよとみえ侍れとなな

かゝる涙なとは申さまほしくや右歌は萬葉に「とにかく

に人はいふとも若狭ちの後せの山の後もあは人君」と侍

歌の腰よりまをよみうつされながら頭尾の兩句をいみ

しくこそよみをかれて侍れかやうによしあしも申かなく

侍れと勝負申さす侍もをそれふかく侍れば申侍なり左歌

あしくも侍られとなを右はつよく覺侍れば勝と定申

千二百七十三番

左勝

夏平

露の身の其曉にきえすしてたゆる恨にむすほれつゝ

右

俊成卿女

待とたに人ばわするいさ蓮にいくふかさねつ袖のかたしき

左歌うちとけての後につちからん心くるしさもおはえ侍

りぬへし右歌は「さむしろに衣片しき今夜もや我を待ら

ん宇治の橋姫」と侍る歌につきて宇治のはし姫といふそ

の名をはかくしてまつとたに人はわするいさむしろなと

はをかしく見給ふるにむすふ句の袖のかたしきはいか

侍らん本歌は衣かたしきこよひもやとよみかけて侍れば

こそきにくかられ此袖のかたしきはをよほぬこゝろに

かたふかれ侍よりて左爲勝

千二百七十四番

左持

具親

いつまてとこぬふを月にかこちつゝぬれても袖をまた忍ふらん

右

丹後

千五百番歌合卷第十八

戀三 判同前

くやしくそ磯邊の浪の打出てけふはかひなきうらみのみする
左右歌上下句の心詞ともにおかしくよみくたされて侍れ
はかつまくと申きり侍らんもなる心の底もあらは
れぬへしおの／＼二首の歌がされてなかめ合てかちまけ
は定侍ぬへし

千二百七十五番

左

顯

昭

あたに吹風にはいかちらすへきうきたのもりの秋のことのは

右

越

前

かゝれとはかさねさりしなさよ衣あなあやにくの袖のけしきや
右歌は顯輔卿の歌合に「さらぬたに秋の心に耐ぬ身をあ
なあやにくの月のけしきや」と季通朝臣讀るを基俊が判
詞に一はしの興あれとあまりの心うすしとことばりて侍
り月のけしきと侍るはいかにそや聞え侍にこの袖のけし
きさこそあらめとおほえ侍かな左歌はいかさまにもやつ
からおとりて侍ればひきちから侍らざるをや

千二百七十六番

左持

女

房

濱ひさし久しくもみぬ君なれや逢ふなみの浪まなければ

右

通

具

朝

臣

草のほらとへはちら玉とればけぬはかなの人の露のかことや
左歌は萬葉に「涙まよりみゆる小島のはまひさき久しく
なりぬ君にあはすして」と侍歌につかは濱ひさきとよみ
侍へきを伊勢物語もしは雜藝集なとに或は濱ひさしとか
ける本の侍につきてはまひさしともよむ事の侍にひとへ
に萬葉を本として見ゆるこゑまのはまひさきとよみつゝ
け侍らんとときは左右にをよひ侍らすたいはまひさし久し
くとはかりつゝけられんときははまひさしにても苦し見
侍らましはまひさきにてもはまひさしにてもこゝろにま
かせ侍へしはまひさしはまひさしとては今少なひやかに
いひくたさるゝ方も侍へし右歌は源氏物がたりには「う
き身世にやかてきえなはたつねても草のほらなとはし
とや思ふ」狹衣物かたりには「たつねへき草の原さへ霜
かれてたれにとはまし道芝の露」古き人は歌合の歌には
物語の歌をは本歌にもいたし證歌にも用るましと申けれ
と源氏世繼伊勢大和とて歌讀のみるへき文とうけたまは

れはさ衣も同事歎左歌をかしく侍右詠もよろしく侍れは
持と可申歎

千二百七十七番

左 大 臣

新古今

身にそへるその面かけも消ないん夢なりけりと忘るはかりに

右 家 隆 朝 臣

うら風や今夜も松にふけにけりたのめぬ涙の音はかりして

左は身にそへるおもかけきえなば夢とおもひて忘んと侍

さもと覺侍右歌は浦風やこよひも松にふけにけりと侍は

いかによまれて侍にかふけにけりと申詞はさ夜ふけなと

申は夜のふかくなる心なり天つ風ふけぬのうらにあるた

つとよみ侍は風のふく心なり所の名にも吹と書てそふけ

と讀侍此歌はうら風やこよひも松にふけにけりと侍は風

ならはふきにけりと心えへきにたのめぬ涙の音はかりし

てと侍は風はふかす聞え侍なり大かた年老はれてわつか

にみたる事も覺す侍れはやすく心えへき歌もひかさまに

おほえ侍れはよろつのこと薄きこほりをふむこいのみ

つかまつれはおもひきたむへきかたも侍らすいかにも各

はからひ申されんよろしかるへき歎

千二百七十八番

左 前 權 僧 正

に覺する我手枕の秋の露は春もなきけりいつもおきけり

右 雅 經

おもひかれつれなき中にまつ事はくらせるよひの夢の通路

左歌上句にはれ覺の秋の露は春もおきけりと侍るに秋の

みならずとはきこえ侍に又いつもなきけりと侍こそおも

ひかたく侍れ第五句侍へくは春もなきけりと侍らすとも

聞え侍りなんと可申に想につけ別につけてたしかに申を

く事も侍らすあしからずや侍らん右歌こしの句侍ことは

と侍そあまりにたい詞に侍れと下句なとよろしく侍めり

勝負はおろかなる心難及侍めりまかきのもとのかやくき

あまつ空の雲にかけりかたし井の内の蛙わたつ海の涙を

法のくにあたはさるにや

千二百七十九番

左 勝 公 繼 卿

逢よさへいまや／＼と鳥のねを思へはまつに成ぬへきかな

右 寂 蓮

夕されば軒の忍ふにさにかにのいとかりける心よばさよ

左はさる事と聞え侍り右は日本紀に衣通姫か歌に「吾春

子かくへきよひなりさにかにのくものふるまひ兼てふる

しも」彼注にさにかには蜘蛛の別名也といへり又申やう

も侍れとこの歌につきてはよしなくや歌のすかたはさ

かにのいと心ほそくきこゆれと左歌はいますこし心あり

てみえ侍めれば左勝と申す

千二百八十番

左 勝 公 經 卿

きえかへり風にたいふあは雪の哀思ひの行ふまらせよ

右 家 長

物思へは袖にひかりは有明の月の行ふをいく夜なかつ
左歌は我戀はゆくゑもしらすはてもなしといふ歌をおも
ひてあはれおもひの行ふしらせよとよまなかために消か
へり風にたいよふあは雪のとをけるついき心ふかくこそ
みえ侍れ右歌もわりなくはよみなされて侍れと袖にひか
りはあり明のなと此御歌合にあまた見え侍にやめつらし
けなく見え侍れば左勝にや侍らん

千二百八十一番

左

季

能

卿

なかめやるいこまの山に雲とちて行ふにまよふ雨の夕くれ

右勝

三

宮

おもひわひうちぬるひまのかたければ夢もよかるゝ床の上哉

左歌は「君かあたり見つゝをらん生駒山雲なかくしそ

雨はふるとも」と侍歌を思はれて侍れと下句の「雲なかく

しそ雨は降とも」と侍るは唯ありとみえ侍り行ふにまよ

ふ雨のゆふくれはよしあるさまにて歌めきながらも右歌

はさきにいたし申つるうちぬるなに行かよふ夢のたゝ

ちと申す歌のふるまいにこそ夢も夜かるゝ床のうへなと

よろしく聞え侍れば勝と申侍にや

千二百八十二番

左

宮

内

卿

いとせめて思ひいたるなけき哉うき身ならては恨やはする

右勝

内

大

臣

戀しなんいつかたへとていきのなのたえん命の名こそ惜けれ

千五百番歌合卷第十八

左歌うらみやはすると侍もあしくも侍られとうらみやは
せんと侍はいますこしいひきしらぬさまにてまさり侍なん
やむげに申事もなきにはかやうにふし／＼をむしり侍も
めさましきさまにて侍歟右歌いつかたへとていきのなの
たへん命なときこへ侍れば仍而勝と申侍へし

千二百八十三番

左

讀

岐

おもひれの心の外にさめにけり夢のうちにも夢としられは

右勝

忠

夏

卿

跡たえぬたれにとはましちのくの思ひ忍ふのおくの通路

左歌夢の中の夢つれにみゆる事にてめおとろかすへきふ

しもあらずや右歌は詞さら／＼敷てありつきふるまはれ

て侍れば勝とこそは申侍らめ

千三百八十四番

左

小

侍

從

つらきなは恨ぬものを逢事のあればそかゝる心をもみる

右勝

兼

宗

卿

ひとりしの床にかたしく我袖にあふうれしさをいつかつゝまん

左歌は天徳四年歌合に朝忠卿が戀歌に「あふことの絶て

しなくは中々に人をも身をも恨みさらまし」と侍歌の心

を出すや侍らん右歌は「嬉しさをむかしは袖につゝみけ

り今夜は身にもあまりぬる哉」と申歌の心にてこの心つ

れにみえ侍れと此歌はよみおはせられて侍は勝侍へし

千二百八十五番

三百八十七

左勝

隆信朝臣

いまはたい思ひたえたる夜な／＼の契りもふらぬまつ風哉

右

通光卿

今ぞしるつらしと聞し鳥の音はひとりね覺に待れけり共

左歌は思へる所侍めりをはりの松の風かなと侍を庭の松

風と侍らはいますこし聞よく侍なんや人の心々か右歌は

よろしく侍に後拾遺に井手の尼が讀て侍かといひにし

へはつらく聞えし鳥の音のうれしきさへそ物は悲しき

と侍歌に下句よみかへられたれとおほ心はひとつすちに

や左勝にや

千二百八十六番

左

有家朝臣

これを見ればあはれもなとか懸さらんぬるゝ貌なる袖の月かけ

右勝

釋阿

夢にたにあふせありやと待へきに枕のみうく涙川哉

左歌はひとつとりはなちて見侍はあしからぬに下句のさ

き／＼も申侍伊勢か歌の腰より下三句をとてむねとの

きもにせられて侍るうへに又右歌はしめなはりあひかな

ひてことに神妙に見給侍れば論なき勝にこそ侍らめ

千二百八十七番

左

保季朝臣

いくかへりないふのちりをばらふらん侍夜かきなるふの菅蓐

右勝

俊成卿女

ある程そまはしなくさむ歎つゝねぬよの空の有明の月

左歌さきにも申つるとふのすかこもの歌に侍り上に七ふ

のちりとをかれて末にとふのすかこもと侍は右歌ことの

外のきす侍すは左歌可勝に右ことの外にたちまさりてこ

そみえ侍れ

千二百八十八番

左

良

平

いまはさば心にまけれ忘草うきをはたへてふのふ物かは

右勝

丹

後

思ひかれ字治の橋姫事とはん侍夜の袖はかくやぬれしと

左歌につきて忘草と忍草とひとつ草の名なりと申事侍り

萱草といひて萬葉にはわすれくさとよめりそのうへに順

か和名には又忘憂草と侍りうれへをわするゝと申心なり

又垣衣とかきてふのふ草とよめり垣もしは屋のうへなと

に生たる苔のたくひなりと侍かは軒のふのふなとよむに

こそされはこれは萱草としのふ草とおなし事にはよも侍

らし軒のふのふなとを忘草と申ことの侍にこそ伊勢物語

にある御つほれより忘草を忍草といふやとていたされた

りければ男給りて「わすれくさ生るのへとはみるらめと

こはしのふなり後またのまん」と申せりける此返事にひ

とつといふ事を出きて侍けるにやかのかのいたされたりける

忘草そおほつがなく侍軒のふのふにて侍りけるかといふ

へきなり又わすれ草をは住よしのきしにもよめりすみよ

しとあまはいふともなかなるすな人わすれ草きしにおふ也

これは忍草にてであるらんと申めりある文にわすれ草云

のふ草とは同物とはみえたり本草にかゝれて侍はまこと
かと見侍りまかれと又くはしき事みえず本草には萱草の
ほか忘れ草侍らすそれは別々の物とそあかして侍めるさ
れは忘草忍草ひとつといふ事もこぼれのふなりといふ歌
よりはしまりたるかされは初てうたかひ申侍へからす右
歌はさむしるに衣片しきの歌をおかしくよみなされたれ
はすこしきらくしくや侍らんまさと申侍なり

千二百八十九番

左

具

親

わすれすままれにかまひし一夜たに我をうらみし人や契し

右勝

越

前

待ほとにふけぬる夏のよはも猶おもひたゆればあかしかねけり

左歌上句はことありけに聞へ侍に下句いひおほせられて

も覺侍らすいかゝ右歌いますこしおもふ所いひあらはさ

れて侍らん爲勝

千二百九十番

左

顯

昭

なをさりの玉章ここのはなだにイなたにみましやはうきを恨め心ならずは

右勝

定

家

朝

臣

わすれぬまこれは限のとはかりの人つてならぬ思出はうし

左歌させるをかきふしも聞え侍らすくれてめつらし

き心も見えずや右歌遺雅卿まのひて物申ける人にえあは

さりければ「今は唯おもひたえなんとばかりを人つてな

らていふましもかな」と恨みけん袖のなみたを我身に

けてつくされんことのはなにかは事もろかに侍へきた
た口にまかすばかりにては心にしみにとまる程のなさ
けはよにありかたくや左歌はいとあさし右勝と可申

千二百九十一番

左勝

女

房

数々に思ふ心は大泣のまつなうらむる涙のなとかな

右

家

隆

朝

臣

あひにあひて物思ふ比の夕くれになくやき月の山郭公

左歌は伊勢物かたりにむかし伊勢國なる女にえあはぬお

とこいみしう恨てとなりのくにへいきければ女「大泣の

まつはつらくもあらなくに恨てのみもかへる涙哉」とよ

める歌の心をおもひて数々におもふ心はおほよとのと

ついきいしみうこそままれてきこえ侍れ右歌は五句なか

ら面白こそよみつゝけられて侍めれあひにあひて物思こ

ろのと侍二句は伊勢か歌なり夕暮にといふ腰句は齋宮女

御の「さらてたにあやしき程の夕暮に」と侍歌なくやき

月は萬葉の「ほといきす鳴や五月の短夜」と侍る歌山ほ

といきすとばてたるは躬恒か歌にくるゝかとみれば明ぬ

る夏のよなあかずやとなく山ほといきす已上新歌とて一

文字も我詞も侍らぬうへにさせる事侍らすやれば以左

可勝也古今に「夏由に鳴時鳥心あらは物おもふ我に聲な

きかせそ」と申歌の心にこそ堂舎高危尾有松と申詩を法

花經の四文字に久歩三文字を讀と感しけるには不可似歟

然を爲負

千二百九十二番

左 勝

左 大 臣

新古今

めくりあはん限はいつとゑられ共月なへたてそ空のうき雲

右

雅

經

新後

山のはに入まで月をなかもともゑらてや人の有明の空

左歌は「忘るなよとは雲ゐになりぬとも空行月のめくりあふ迄」と申歌の心にかよひてや詞は伊勢物語にみえたり右は昔より有明月とのみこそよみつゝけて侍るめれ上句に入まで月をとよみて後に有明の空といへるはひか事ならぬと古やうにはたかひてや第二句を入までわれか共入まで今夜共ありて第五句には有明の月とやふるき人はよみ侍らまし後拾遺に「年もへぬ長月のよの月影の有明方のそらをこひつゝ」と侍はさるていの歌にて詞はなれてもきこえ侍らぬにや但左歌上下韵字に聲韵病を侍れとそれは同病なれといかなきやうに侍ればまけぬ歌と同やうなるへし右歌さまでのとか侍られはなを以左爲勝

千二百九十三番

左 持

前 権 僧 正

とにかくにうき數かくや我ならんまぢのはしかき鳴の羽かき

右

寂

蓮

物思へは月たにやとる袖のうへなとはてや人の有明の空
左まぢのはしかき鳴の羽かきにつきて二の義侍へし一に
は古今の「曉の鳴のはれかき百はかき君かこぬ夜は我そ
數かく」此歌につきて「曉のしちのはしかき百よかき君

かこぬ夜は我そ數かく」と申歌侍りそれは別の歌にあらず曉の鳴をまぢといひなし羽かきをはしかきといひもいはかきをもい夜かきとあひにたる詞につきてかきなしたる事かさてまぢのうへにもいふれよといふもの語をもつくり出してまぢのはしかき百夜數かくとはいへるなるへしと申此義は別にまぢのはしかきといふ事も歌にもあるましき心なるへし一には古今に鳴のはれかきの歌あるにてもまぢのはしかきといふ事あらむにたがるへからすやまことに歌のならひはさせる日本紀なとにみえぬ事も古歌ひとついてぬればそれを本文にてやかてよみつたふる事おほかりいかさまにてもまぢのはしかきといふ事をよの人よみたちなん後ははしめてすつへきにあらす古き歌の論義と申物は一條院時殿上人に仰て歌論義をせられ侍ける時間答抄にて四條大納言公任卿あまたのおほつかなきことをかいたる内にこの事も入て侍めれば此左の歌の様に二のことにままれんもとか侍へからすそれにとりては鳴の羽かきのやうに人のこぬ夜の數をまけくかく事もあり又まぢのうへにもい夜れてもい夜かきとよまるる人もあればそれを我身にふたつをかされてよまれんはおもひもよらぬ風情にて侍ればとかく可申に侍らす但作者のおもむきはさやば侍らんいま少しふかくもよろしくも侍へきをひかさまに申さはおこかましかるへしかしこき人はいかによまれて侍そなとしるして手をいたさぬ事にてそ侍へき右歌はまへの歌のやうに月と有明の空とは

なればなれに侍れとこれは上に月とをきてはするに空な
くてはあしかりぬへく侍ればちからをよばす左歌もあま
かき侍れとあつしき眞情に侍は可勝也イ
りに任意侍は持歟

千二百九十四番

左 勝

公 繼 卿

いもかと思ひくらせば山のはにまたれてこそは月は出けれ

右

家 長

いまはたゝむねはいさり火床は海恨てのみも年はふるかな

左歌まちくらす人につけてたかはす出たる月をそめみた

る心さもあることゝ覺侍り右歌は「胸はふし袖はきよみ

か聞なれやけふりも涙も立ぬ日そなき」といへる中比の

歌の心さまなまねはれたれとゆく／＼とよみなかしたる

すかたはあひ似すや侍らん左歌はいますこしなひやかに

て勝共可申歟

千二百九十五番

左 持

公 繼 卿

なけきわひみしは夢そと忍ふれは忘侘ぬる中のたまくら

右

三 宮

なをたのむ我心をそうらむへきこれにかきれる空たのめかは

左歌はあしからす侍にはしめの句に歎侘と侍に又下句に

わすれわひぬるといへるはさりかたき病に侍右詠もよろ

しく侍に初句なほたのむとをかれて末の句にそらたのめ

かはと侍に又病累うたかひなく侍り同つかひしもいかに

侍ける事にか持にこそ侍めれくらへ馬そ持にのるは馬心

にまかせねはさすがにわつらはしく侍なれば心得たると
ちいひあはせてそとりくみてわたり侍なる歌合の勝負は
持をこのむとも判者の心もふりかたくてはいかなるへし
ともはからひにくく侍にかやうにおなしさまの病の侍ら
んのみそ持と定可申

千二百九十六番

左 持

季 能 卿

わすれても露の情や思ふらんよしや草はといひしはかりに

右

内 大 臣

わすれ草おふるのへなは尋ねれと昔忍ふそなをも露けき

左歌おとこあるこたちのみつほねのまへなとをるになに

をあたにかおもひけんよしや草葉のならむさかみんとい

ふな「罪もなき人をうけへは忘草をのか上にそおふとい

ふなる」と申歌のことにや右歌さきに申侍つる歌に忘草

おふるのへとはみるらめと申歌の事にこそ左右共に伊勢

物語の忘草の事なれば露ばかりのかはりめもみへかたか

るへし

千二百九十七番

左 持

宮 内 卿

新後成
つれなくも猶なからへて思ふ哉うき名をおしむ心ばかりに

右

忠 良 卿

戀わふる袖のみなとの浪枕いく夜うきれの數つもるらん

左歌物にもそへすなすらふる事もなくてたいありによま

れたり心うちうこきて詞ほかにあらはるとはかゝる歌の

事か右歌詠のみなとの事さきにも申侍つれともなみ枕いく夜うきれの數つもらんとなかしく聞ゆれはひとしめて持とはからひ申つねの事也

千二百九十八番

左持

讀

岐

契をきしうら吹風はさもあらて袖に涙そやむ時もなき

右

兼

宗

卿

あひみての後さへ物を思ふかな人の心のしらまほしさに

左歌は「われも思ふ人もわするなありそ海の浦吹かせのやむ時もなく」と六帖に侍れはにや人みな口つけて侍を萬葉には初二句は此定にて腰の句は「おほなほに浦吹風のやむ時なくあり」と侍古歌の終句いひにくきを誦直されたりけるに左歌の終意やいかさまにもうら吹風につきてはなかしくよみなされたり右歌は「あひみての後こそ戀は増りけれつれなき人を今はうらみし」と侍後拾遺の歌をやうかへて人の心のしらまほしからん事さも侍へし左は詞をかさり右はおもふ心をのへられたり持と可申

千二百九十九番

左持

小

侍

從

なからふる身のつれなきを同じ世にありて聞るゝ事のみそうき

右

通

光

卿

さりとともたのむ心のふかけれはなを此暮もまつの下水

左歌恨の心はふかけれと下句の詞あらゝかにや右歌いますこしうためきてきこえ侍にむすひ詞の松の下水やには

かに出たる心ち侍らんたかひにえぬ所えたる所も侍れはひとしめて同科とことばり申へけれと左はさしたるとか侍らす松の下水はいかゝときこえ侍れば左勝と可申

千三百番

左

隆

信

朝

わすれしの露のなさけを忍草名をかふるまて老にける哉

右勝

釋

阿

うつゝには思たえ行逢事をいかにみえつるゆめちなるらん

左歌上句はさることゝきこえ侍を忍草名をかふるまてとは忍草を忘草といふ迄とにや心は侍れと詞にはくらくや侍らん右歌こゝはとみゆるふしもなくこのまじき姿にみえ侍はおろかなる心のをよふ所まきと申侍へし

千三百一番

左勝

右

家

朝

うしとおもひ戀しと思ひ一かたにかはく時なき袖のうへかな

右

俊

成

卿

めのまへにかはる物そとみても猶よゝの契のはてそ忘れぬ

左歌は風情たくみに露詞あさやかに侍り右歌はこん世にもはやなりないんめの前につれなき人をむかしとおほはんといふ歌の心をは思はれたれと末句たしかにも聞えず歌合の歌には左やまさり侍らん

千三百二番

左勝

保

季

朝

臣

忍びあへぬ名をや煙にたてつらんあまのもしは火下こかれても

右

丹

後

もらさしと形見についむ人めにも涙はえこそといめさりけれ

左歌上下あひかなひてよろしく聞え侍めり右歌上句はさ

事と見給ふるに下句ふるめき過てや侍らん以左爲勝

千三百三番

左勝

良

平

おもはずな重れし袖のそのまいになけきのつまとならん物とは

右

越

前

蘆のはのかれ行みればつのくにのこやあきはつるしるし成らん

右歌拾遺集に能宣か歌にことの葉も霜にはあへすかれに

けりこやあきはつるしるしなる覽己に撰集の古歌也左さ

せるとかのえ侍らす勝と可申

千三百四番

左持

具

親

いとほるゝ身にそへとしも思はしを心ならぬやきみかおもかけ

右

定

家

朝

臣

はてはたゝあまのかるもを宿りにて枕さたむるよゐゝそなき

左歌よろしくよまれて侍めり右歌さしていつれの歌の心

とは思ひより侍られと大かたのやさしきさまの歌共こそ

おもひあはせられ侍れ「幾世しもあらし我身をなそもか

くあまのかるもに思ひ亂るゝ」「戀わひの蟹のかるもに

やとるてふわれから身をもくたきつる哉」「白浪のよす

るなきさに世をすくす蟹の子なれば宿も定めす」など侍

歌ともにあくがるゝ心をあまのすまびになしかへされて

侍にこそ左義まことにといのほり右は艶をこのめり花實

をたくらふるにやまと歌は尤花を先とすへきにこそ右捨

かたかるへし准て同とすへし

千三百五番

左

顯

昭

待夜半の明行かれはこぬ人のつらさをさへそおとろかしける

右勝

通

具

朝

臣

まつらんと思ひし物を秋風のひとり身にしむ夕ま暮哉

左歌明行鐘のこぬ人のつらさをおとろかすよりも右歌夕

くれのかせのひとり身にしむは時こそかはれと恨の心は

事のほかにまさり侍へき也

千三百六番

左勝

女

房

つれなくはたいことうらにたてけふり我すむ方は月そさやけき

右

雅

經

物思ふ心ひとつに秋ふけて人をも身をもくすのうら風

左歌は「驪たるゝ我身の方はつれなくてことうらにこそ

けふり立なれ」これは天王寺の阿闍梨道命か歌に侍りそ

の心とはおほめかれなから上句のことうらにたてけふり

と侍るつきゝしきさま申もおろかに侍に下句の我住か

たは月そさやけきと侍本歌はわか身のかたはとこそ侍る

に我すむかたはと侍るよみまさられてこそ聞え侍れ在中

將か布引の瀧を見てわか家あしやの里へ歸るに日くれて

あまのいさり火をみて「はるゝよの星か河への螢かもわ

か住方のあまのたく火か」とよめるおもひ合られてなよ
はね心にもめてたくこそ覺侍れ右歌は上句はいかなる事
か侍らんずらんと末ゆかしく侍に人なも身なもくすの
ら風と侍るな恨の心なからも事たらずも又なへての事
にても左にはなふふへくも侍らぬかな
千三百七番

左 持

左 大 臣

新古今

我なみたもとめて袖にやとれ月さりとて人の影はみえれと

右

寂 蓮

すまのうらの鹽やくあまの袖は猶ほすもぬるゝも心成らん

左歌上句たくましけにこそよみくたされて侍れ下句もや

すらかなるさまながら「戀すれば我身は影と成にけりさ

り」とて人にそはぬ物語」と侍詞つかひ覺て侍り右歌ふる

めきたるすかたなからあしくも侍らねばかやうの程をお

なしほとゝ可申にや

千三百八番

左 勝

前 權 僧 正

あらはれてうつるふ色のしるければ人の心のはなをみるかな

右

家 長

年月をふる河のへに戀わひぬいつかあひみんふたもとの杉

左歌「色みえてうつるふ物は世中の人の心の花にそ有け

る」と小野小町が讀る歌によせて色みえて移るふ物はと

侍をあらはれてうつるふ色のしるければとなをされて人

の心の花にそ有けるを人の心の花をみるかなとよまれた

るも詞も心も共に同じさまには侍歟右歌旋頭歌に「初瀬
河ふる川のへに二本ある杉年をへて又もあひみん二本あ
る杉」といふ歌を思て年月をふる河のへに戀わひぬいつ
かあひみむ二本の杉と侍はよくとりなされて聞え侍れと
下句すきてつよきにや侍らん左歌はゆへありてきこゆれ
はかちに侍へし

左

公 繼 卿

戀しさもあり思へは忘られてその事となく涙落けり

右 勝

三 宮

さめぬればあかね別の心ちしてわりなき物はうたいぬの夢

左歌上句はよろしく聞え侍に下句は法性寺大相國の月三

十三首の歌人々によませ侍しに清輔朝臣が「今よりは更

行までに月はみし其こゝなく涙おちけり」とよみて侍

しかば世人あまれく見侍し歌也同大相國歌合に「つれな

しとかつは心なみ山きのこりすものをのゝ音つるゝかな」と

女房堀川かよめりしなは判者俊頼朝臣申云此歌さいつ

ころしのひたる人の歌合にみしやうにおほえ侍れば僻事

にやよみ合たらはよしかくれの歌とてなしてとりたらは

ぬしやはなふかんとおほえへきかなとかけりこれをおも

ふに歌のぬしきかすとも世人思はん事も同事也いかにも

勅撰の歌のみならず内々會歌合の歌も可被尋見事歟右歌

心詞あひそなへて侍れば勝侍へし

千三百十番

左

公 經 卿

獨りのみうさふる郷のなにしいては忍おほしふとたにも人のしれかし

右勝 内 大 臣

しのふとも軒の玉水つふ／＼とありし雨夜の物かたりせよ
左歌後拾遺に「ひとりしてなむる宿のつまに生る忍と
たにも知せてしかな」此歌の心詞にやかまひて侍らん右
歌は世俗の口ずさみの歌に「雨ふれば軒の玉水つふ／＼
といはいや物を心ゆく迄」と侍歌に源氏のあま夜の物語
をかしく讀つかれて侍歟仍右歌まさと申へきにや

千三百十一番

左 季 能 卿

つらきなを思ひしらすは無物をうらむばかりの身の程もかな

右勝 忠 良 卿

うきを思ふなげきの色をそめしより松かはにによふかく風しくる也
左歌さることいきこえてよろしくきこえ侍めり下句なと
よまいほしくこそ覺侍れ右歌うきをおもふなげきの色な
そめしよりなと侍やうありけにも又迷懷なとのかたにも
よりぬへくや共覺侍り下句の松に夜ふかく風しくるなり
と侍松風雨にかよふ心なときこえたやすきさまにもなく
や松にと侍るも風しくるなりと侍る詞も戀のかたによせ
られぬへくやされとも右歌は歌合から侍ればまさと可
申

千三百十二番

左 宮 内 卿

津のくにのみつとないひそ山城のとはぬつらさは身にあまる共

右勝 兼 宗 卿

つく／＼と思ふもかなし逢ぬ夜はいをたにやすくぬるよしも哉
左歌は「君か名も我名もたてし難波なるみつともいふな
逢きともいはし」又「つの國のなには思はず山城のとは
に逢みん事をのみこそ」此兩首をとり分ていまの歌の上
下にをける歟山城のとはにあひみんとよめるは鳥羽とき
こゆるにとはぬつらさとするはすこしかすかにや侍らん
右歌は戀の心ひとすちに侍めり可勝侍

千三百十三番

左 讀 岐

あま雲のよそなからたにいつまてかめにみる程の契り成けん

右勝 通 光 卿

かひなしとかへす衣をうらむればぬられぬよはのならひ成けり
左歌は「天雲のよそにも人の成行かさすかにめにはみゆ
る物から」と申歌の心なるへしいさいか心はよみつけら
れて侍る右歌は「いとせめて戀しき時はむは玉の夜の衣
を返してそきる」と申歌よりはしめて衣を返してぬれは
戀しき人夢にみると申に返すかひなきは戀しさの餘りに
いのぬられぬならひそとあればことばりありて聞え侍れ
は右歌すこふる勝へきにこそ

千三百十四番

左 小 侍 從

とにかくにおもへと物のかなはねはいける命を歎くばかりそ

右勝 釋 阿

いひかよふ道たにたえぬ逢事のなからの橋はきこそくちなめ
左歌あしからぬと戀の心はうすくて迷懷の歌にもかよひ・
侍へきにや右歌は「あふ事を長柄の橋のなからへて戀わ
たるまに年そへにける」と侍歌によせなからこひの心も
つよければ勝と可申

千三百十五番

左持

隆信朝臣

いたつらにあげぬと告る鐘のねはあはぬ夜しも悲しかりける

右

俊成卿女

鐘の音

うき物とたれかいひけん曉の別のみこそかたみなりけれ

左歌曉のわかれにはむかしより鳥の音をこそよみならは
して侍に小一條院の女のもとにて「曉の鐘の聲こそきこ
ゆなれこれを入相と思はましかは」とあそはしたるより
鐘の音をはききりによむ事に侍に此歌にもあはぬ夜しも
そ悲しかりけると侍いみしくや右歌「あかつきはかりう
き物はなし」とよめるにつきてそれはなにか悲しからん
又もあはさらんには形見にてこそあれとはよまれたる事
なれば此左右共にすてかたく侍也

千三百十六番

左勝

有家朝臣

夕ま暮頼めぬ物をとばかりにまのひかへせば萩の上かせ

右

丹後

君こふる涙の色のくれなるは思ひかへすにかへるものかは

左歌惡くも侍らす右歌は後入道二品親王の百首中に「戀

そめし心はなにの色なればおもひかへせとかへらさるら
ん」と侍に心詞違はぬうへに聲韵病きるところなく侍れ
は左勝也

千三百十七番

左勝

保季朝臣

きくもうし何と心にとまらん思ひたえたる夕くれのかれ

右

越前

心あらはこころなかへて思ひしれなのゝまのほら忍ふけしきを

左歌よろしく侍めり右歌は「浅ちふのをゝまのほら忍
とも」と侍歌をよみあげられたるはかりにて差事も侍ら
れは左爲勝

千三百十八番

左

良平

恨こし涙ばかりを袖にかけていく夜かこひをすまの關守

右勝

定家朝臣

かれぬるはさそなためしとなかめてもなくさまなくに霜の下草

左歌上下の詞あしくも侍られと戀をすまの關守によせて
そうらみの涙を袖にかくなとは聞なれてや侍らぬ右歌は
もし源氏物語に「ほのめかす風につけても下萩のなかは
は霜に結ばれぬ」と侍歌の心にやかやうに申へきに
侍られと歌のよしあしも聞え侍られはおとろかし申につ
けて歌のほとはみゆる事にて侍は心にくもなり侍也ま
さり侍へし

千三百十九番

左

具

親

忘られん時しのへとはなけれ共いはれはふらぬならひ計そ

右勝

通具朝臣

うちばらふおりも有けん床のうらの涙になれたるよはのき蓮

左歌は「わすられん時忍へとぞ濱千鳥行衛もふらぬ跡を

止むる」とある心にていはれはしらぬならひにてふみと

むる跡のよしなるへし右の歌「わたつ海とあれにし床を

今さらにばらばし袖やあはとうきなん」といふ心にて涙

になれたるよはのき蓮なとやさひたるけしきなれば勝と

可申也

千三百廿番

左

顯

昭

つらしとてなによりみけん契あればとける物をよはの下ひも

右勝

家隆朝臣

中々に明たにはてれおきもせずれもせぬよはのむら雨の空

左歌は初逢戀の心こそ侍れ百首の歌をはなれてよみし

むる事きこへかたく侍歟右の歌は「起もせずれもせて夜

るを明しては春の物とてなめくらしつ」と侍いせ物か

たりの詞には男うち物かたらひてかへりきていかいおも

ひけんときはやよひのつゐたち雨をほふるにやりけりと

ありこれをおもふになめくらしつとあれば歸りたるつ

きの日やりたるかさては上句のあけたにはてよとはいつ

れのよにか又ねもせぬ夜はの村雨の空と侍るもそのよは

おほつかなしこれは歌のことはあはせておもふばかり

なりかゝる歌はあふところたかふ所侍りあなかりにとか

もなし又古今の詞にばすこし物語はたかひて侍歟猶左歌

は負也

千三百廿一番

左

女

房

白露もあけ行ほとはのへにをく時ともわかぬそての上哉

右

寂

蓮

さゆる夜のうきぬの霜をうちばらひなくなるをしも我計やは

左歌萬葉に「ひくらしは時となげともわかこふるたをや

め我はさためかれつ」と侍に此上句にばしら露もあけ

行ほとそのへにをくとよまれて下にときともわかぬ袖の

うへかなと侍すてに萬葉の一言に一篇の五句かきいれ侍

めるにこそ牛頭梅樞のかたされ仙人瑠樹の一枝とこそ見

給へ侍れ右歌は「夜を寒みれきめてさげはをしそなくは

らひもあへす霜や置らん」とよめるうへに我ばかりや

はなと一ことばくはへられたるばかりにやなくなるをし

なともいかにと聞ゆ勝負をはかるに一日の論にあらず

千三百廿二番

左勝

左

大

臣

右

家

長

みせはやな曉つゆのおき別きいわくるあさの袖のけしきを

左歌上句の我とこそなかなれにし山のはにと侍より承

心もすみたて侍に下句のそれも形見の有明の月と侍た

た一詞に戀の心のふかさもあらはれぬるにこそたけたかく心あまれりなと申はかゝる歌の事に侍歟右歌上句萬葉の歌に「この比の曉露に我宿の萩の下葉は色付に覓」下句はいせ物かたりにいりて侍「秋霧にさゝわくるあさの袖よりもあはてこし夜そひち増りける」と申歌の詞をひき合てよくこそいとなまれて侍れとあかつき露にさゝ分る袖もあはればふかけれとそれもかたみの有明の月になすらへは下にやなり侍らん

千三百廿三番

左 勝

前 權 僧 正

我なみたよしの河のよしさらばいもせの山の中になかれよ

右

三 宮

七夕をわか身のうへになしはてゝ重ねぬ袖にあまの河浪

左歌は「なかれてはいもせの山の中に落る吉野の河のよしや世の中」と侍歌は大方のいもせのなかの戀のありやうなよめる歌にて古今の戀の歌のはてには入て侍とみゆるをおかしくもとりなされて侍かな本歌はよし野の河のよしやと侍にいまのうたは我泪をよそへてよし野の河のよしさらばといひ本歌にはなかれてはいもせの山の中におつると侍を今の詠にいもせの山の中になかれよとなされて侍ゆゑしき心なくみなり木にかなたをきさまは郡匠か斧もおよふべからず紙に繪をかくんには長康が筆もならひかたかるへし右歌は七夕を我身になしてかされぬ袖に天の河をかけられたる風情たゝの人のたましと思ふよりか

たし泪の詞をすてゝあまの河なみとこともこもりて侍れと猶左の歌はおかしくや侍らんけたみ詞もよしの河には右はおとり侍へくや

千三百廿四番

左 持

公 繼 卿

身をしらて人なは何か恨むへきと思へばいとなくさめもなし

右 勝

内 大 臣

いせの蟹のみるめの果よいかならんおふの浦梨なりもならずも

左歌は伊勢物語に男女のもとに一夜ばかりにて又もいかななりければ女の手あらふ所にぬきすなうちやりてたらいの水にかけのみえければ身つから「我ばかりものおもふ人は又もあらしと思へば水の下にもありけり」とこれはことばやすらかにて心さしのへたる歌にこそ人をはなにかうらむへきとおもへばいとなくさめもなしと侍おこかましけれと身を恨てこそ心をもゆかずとなにかうらみんと思てんはむげになくさめもなかるへきにこそ右歌は古今あつまつたの中に伊勢か歌に「おふの浦にわたえさしおほひなるなしのなりもならずもれて語らはん」と侍心にて上にいせのあまのみるめのはてよいかならんとはよくなかれてこそ侍めれとりのすかた持と可申也

千三百廿五番

左 持

公 經 卿

かくまてのつらさにたえて戀しなは思ひ出もなき命成けり

右

忠 良 卿

戀わたるとたえはかりは現にてみるもはかなき夢の浮橋

左歌は六義の中のたいことうたなるへしおもふ心にまかせてあなかに詞をかさらす右歌はなすらへ歌也心詞を
あひならへて夢のうきはしとよまんに戀わたるとた
えとよみうつゝにてみるもはかなしとなすらへとをさ
れたるともによろしくたくみによみおほせられぬればき
はめて勝負さためかたき事にて侍りすこしもよみたかふ
るふしも出き又たえぬ心も侍時はそれにつけてよしあし
なも申侍人の心々にまかすへし此左右は共によく侍は持
と申侍へし

千三百廿六番

左 勝

季 能 卿

こんとてもすぐるならひは中々に憑めぬ夜はの情成けり

右

兼 宗 卿

新納保人

人こゝろのはふりしくゑにしあれば泪の河も色かはりけり

左歌させるくせもなくよろしくよまれたり右歌いぜ物語
に「秋かけて言しなからもあらなくに木葉ふり敷ゑにこ
そ有けれ」と侍をおもひて涙の河も色かはるとよまれて
侍りよろしく侍に歌合にはかゝるさまの歌は左歌とか侍
は勝もし侍なん共にことなる事ながらんにとりては左は
歌合のうたすかたにて侍れば勝と可申

千三百廿七番

左

宮 内 卿

われからと人をうらみぬ袖のうへもなみたは同し涙なりけり

右 勝

通 光 卿

形見共つれにしすまはなめましなれしその夜の有明の月
左歌上句はよろしく見給ふるに下句の千載集の歌にて侍
なり藤顯方「うきせにも嬉しきせにもさきにたつなみた
は同じ泪なりけり」又基俊が歌合の判詞に云古人と心あ
ひ通ふ事は甚興あることに侍れと歌合に尤さるへき事也
たとひ文字すこしことなりといへ共おほ心たかへること
なくは是をさるへし上の三句下の二句同からむこれと
かむへしといへり已勅撰の歌の下二句尤さるへかりける
也右歌心詞ともによりしくて難すへき所侍られは左歌負
侍へき也

千三百廿八番

左 勝

讃 岐

豊千代

いそのかみふるのわさ田につなはへて引人あらは物は思はし

右

釋 阿

むかしし人のみいまは戀しきを^に又逢ましき事そかなしき

左歌は萬葉に「いそのかみふるのわさ田のほに出す心の
うちにこふる此比」と侍をうかいひて上句をばよみおか
れて下句にひく人あらは物はおもはしとをかしこそよ
まれて侍めれ右歌はなにとなく過にしかたの戀しきにい
にしへさまになれや世中とよみをける人の心は老もて行
まいにこそ思しられ侍を此詠につけていよくあはれも
まさりむかし忍物おもひのやみといはれせぬ涙をのこ
ひて左右の勝負を思ひ侍に右歌戀しきあふましきかなし

きなとみつめてつゝきぬるは病にあらずとうけ給はれと
歌合の時はかしこましようまなくや侍らん左匠者ふるの
わき田につなばへてなといふにのみて又龍の眠にあはれ
ぬるにこそ侍めれ此度斗は左歌麿の詞をつけ侍ぬ

千三百廿九番

左 勝

小 侍 從

遷古今

たのめつゝこの夜をまちしいにしへを忍へしとは思やほせし

右

俊 成 卿 女

新古今

ならひこしたか僞もまたふらて侍とせしまに庭のよもきふ

左歌はたのめつゝこの夜あまたにとよみをけりし古事な
おもひ出わか身にふられし古の人のつらさを思合られた
るかとなしはからるゝもなかくや右の歌は花山僧正の
歌に「我宿は道もなきまで荒にけりつれなき人を侍とせ
しまに」と侍る歌又源氏に「藤波のうちすきかたくみえ
つるは松こそ宿のまるしなりけれ」と侍歌ならひにその
詞なとかきつゝけたるこそ此歌の心かとは見え侍れとそ
れはふりかたしいかにもふるきうたをまなはんにとりて
は柿柿詠にはなふふへからすたいしさり共歌の様をと
り侍らは可申になよばす左歌まさり侍なん

千三百廿番

左

隆 信 朝 臣

戀をのみまづる門田のひたふるに音たふる迄秋はてぬとや

右 勝

丹 後

ひとりぬの袖にふらるゝ時雨こそ秋しもわかぬ物と見えけれ

左歌戀をのみまづか門田のとつゝけられたるは戀をすま
なとよみ侍やうに戀しつとよまれ侍る近比はさる歌時々
見え侍れとむかしは見え侍らぬにやひとへに辭事と申に
は侍らすふるき歌をかんかへ侍らんためにおとろかし申
はかりなり右歌は上下あひかなひてよみおほせられて侍
めり古今序に小野小町か歌を申すに艶にして無氣力と侍
りつよからぬは女の歌なればと申せり以有爲勝

千三百廿一番

左 勝

有 家 朝 臣

戀をのみつれに時雨る慎のやのまばらにたにも音信よかし

右

越 前

いかにせんなくさむやとてなかわれは別しよはの有明の空
左歌まさきのやのまばらにたにも音信よかしなとさる事も
聞え侍り右歌さきにも申侍るやうに別しよはのあり明の
空と侍らはおなしくは有明の月とよまれ侍れなくはしく
よふはさきに申侍ぬ左勝と可申

千三百廿二番

左 勝

保 季 朝 臣

おもひをきていつる涙の行すふは袖よりやかて道芝のつゆ

右

定 家 朝 臣

ときつ風ふけるのうらにかよひてもたか爲にとが身をも惜まし
左歌はなかしき風情をよくこそよみくたされて侍めれ右
歌は萬葉に「時つかせふけるのうらにいてあつゝあかふ
命は妹かためこそ」侍歌をおもはれたりければ俗流をば

なれてみゆるは理りなりけれ共まわさと取られて侍はい
かゝせん萬葉の歌とるは故實ある事なりちかき世には顯
季卿こそ其様を心得てみゆれと崇徳院の仰たひく承き
と顯輔卿申され侍しを承傳侍りいかさまにも此歌は時つ
かせ吹飯のうらよりはしめてあかふ命はいもかためと侍
まて心も詞もみなよみのせられてわたくしのまわさそす
くなくや侍らんまかれはあたらしきにつきて左歌可勝也
千三百卅三番

左勝

良

平

かはり行人の心はなになれはつらきをまたふ我身成らん

右

通

具

朝

臣

新古今

ことのほのうつりし秋も過ぬればわか身時雨とふる涙かな
左歌えんにこそ見え侍れ右歌は今ほと我身時雨とふり
ぬればことのはさへにうつるひにけりと小町かなかめけ
るふりにしことのばやおもひわすられ侍らん又以左爲勝
千三百卅四番

左

具

親

後の世をたのむ頼も有なまし契かはらぬ我身なりせば

右勝

家

隆

朝

臣

入まては月はななめついなつまのひかりのまにも物思ふ身の
左歌はいとあはれに侍りたいし上にたのむたのみなと侍
に下句にちきりと侍らん三になりてかしかましくや聞え
侍らん歌合にはよろつを忘て讀すまされ侍へき歟右歌初
二句はつれの心腰より下は又「秋の田のほの上にてらす

いなつまの光のまにも忘れやはする」と申歌をこめ入て
終句に物おもふ身のとちちられて侍いみしく侍り雲林院
の御子の歌に「吹まふ野風をさむみ秋はきのうつりも
行か人の心の」と侍歌の人しれすこのもしう侍るさずか
になきにく侍に興ありて侍大かたはいなつまのひかり
のまにも物思ひわすれぬに入まて月をなかわる戀のわり
なきをしばかられてまさと申侍へし
千三百卅五番

左

顯

昭

なにとかは今朝のわかれをななくへきその移りかは暮ひきに免

右勝

雅

經

思事のこらぬ秋のゆふへたになを忘らるゝ身こそつらけれ
左歌今朝の別れにそのうつりかのまたひくるほとめも
おとろき侍らす右歌思事のこらぬ夕にわするらんつらさ
は身にあまり侍ぬへし爲勝
千三百卅六番

左勝

女

房

傳後深

長月の月みてかひはなけれ共たのめしものを有明の比

右

家

長

眞葛原人のこゝろの秋風はかへすくもうちらめしき哉
左歌さきにもほのめかし申侍今こんといひしばかりに長
月のと侍歌のこゝろはいみしうとりて侍ものかな長つき
の月みてかひはなとまことになかしうつきまされたる詞に
侍にたのめしものを有明の比と侍かくてこそ有明の月と

侍らぬもことはりとおほえ侍れ有明のそらとよまは月に
て侍へきよしをたひ／＼申おきて侍るゆへに心をいみし
と取りわき申侍るなり右歌は「秋風の吹うら返す葛のは
のうらみても猶うらめしき哉」と申詞をかへす／＼も
とよみがされたる計が右歌のくすのはよりは左歌こそあ
やなくうらめしく侍れ

千三百卅七番

左 勝

左 大 臣

なげかすよ今はた同じ名取川せいの埋木くちはてぬとも

右

三 宮

今こんの契はたえて申々にたのめぬ月そよかれさりける

左歌はさきにも申侍つるなり河瀬々の埋木の歌に「佐
ねれば今はたおなしなにはなる身をつくしてもあはんと
そ思」と申歌のむれの一句をとりそへられて侍にこそ其
の上に神おろしの句むすひ句なとよろしく侍り右歌はい
まこんといひしはかりのうたの心はあまた侍ねればとか
く可申にも侍らす契とたのむとは同心と申ならはして侍
りさきにはたのむたのみと三にかきなりて侍つればたい
きにくしとはかり申侍ぬ歌合はわつらはしくはかなき
とかをもとめて侍なり「契置し人も木すゑの木のまより
たのめぬ月の影そもりくる」と申歌は金葉に入てこそ侍
れ然者任例依病左歌可勝歟

千三百卅八番

左 勝

前 權 僧 正

たつた山夜はにや君かひとりとしてれしよの夢の行ふをそしる
右 内 大 臣

なをつらしきかすかほにてあかす夜に枕にちかき鳥のうきれよ
左歌は「風吹は沖津白浪たつた山夜はにや君かひとりこ
ゆ覽」と申歌の心をとりにて上句にむすひて彼歌うちなが
めてひとりふしけんものゝ夜の思の夢の行ふをさ
へさこそありけめと思しれる心はへなるへし但伊勢物語
には男いかにも女の恨たるけしきのみえさりければなき
まにこそ男にあふかとうたかひて前裁の中にかくれて見
ければ女此歌をよみ侍けるをきいて河内へもいかすなり
にけりといへり大和物語には男前裁の中にて見なればま
へなる女に此歌をかたりけるしはし見あたればうちなき
てよりそふしぬ前なる女かなまりに水を入てむねになん
すへたりけるわきがへりにければ其ゆをはずて又水を入
かへ／＼してたひ／＼に成にければ男はしりいてい
いかなる心ちし給へばかくはし給ふそとてかいたきてれ
にけりといへりされはこの二の物かたりにともに河内へ
もゆかて男にければ更に思の夢も見え侍へからすれ
しよの夢のゆくふなにつけてしられ侍へきされとかい
る事はさてこそ侍れ本文をみてたすにはをよひ侍らす
和歌に縦法令の難するは此道の外道なりとこそ法性寺の
大相國もいましめおもく侍れ右は遊仙窟に可憎病鵲半
夜驚人薄媚狂鷄三更唱曉此句をよまれて侍るめれば鳥
の音といふうらめしく侍りけん此文の心也枕にちかき鳥

もやめからすうかれ鳥をならへてよまれて侍りな
されと此鳥の音恨る事は常の風情に侍り左の夢の行ふ
はめつらしき心にこそ河内へもゆかさりけりなとはあ
まりの事に侍りおきつしら浪たつ田山となかむるこそ此
物かたりの肝心にては侍れ左の歌風情たかく侍れば勝侍
るへし

千三百卅九番

左持 公 繼 卿

たえはつる程を哀にしられける夢路にたにもみらくすくなき
右 忠 真 卿

影たえて程は雲井のなかめにも猶夕暮の山のはの月

左歌は「鹽みては入ぬる磯の草なれやみらくすくなき戀
らくの多き」と申歌は萬葉の中にぬきいて、花山法皇拾
遺に入させ給て侍は世の末にもてあそふへき歌にこそ侍
めれみらくすくなきふらくのおほきと侍本歌は中々に
わさ／＼しく聞え侍にわつかにみらくすくなきの一句は
きよくこそ侍れ右歌はさきにもよまれて侍程は雲井の
ひとことはをのせられて侍れとすゑのよくよみくはへら
れて侍ればともによろしく持なるへし

千三百四十番

左勝 公 經 卿

戀わふる涙や空にくもるらんひかりもかばるぬやの月かけ
右 兼 宗 卿

こりはてぬうき身のはてを疑ひて心のうらにつくへかりけり

左歌涙に空をくもらせてぬやの月かけをかはなと侍るい
とをかくみえ侍り右歌「かく戀ん物とは我も思ひきや
心のうらそまさしかりける」と申歌につきておもひしま
まにいとほるうき身をこりはてぬるよしはことばりふ
かくて侍れと心のうらはまさしかりけりと申ことのあま
りに耳なれて侍はにや左はなをめつらしくや侍らん

千三百四十一番

左持 季 能 卿

いとほるゝ名はふらさしと思しを心にあまるそてのむら雨
右 通 光 卿

しのひあへす我やゆかんのいさよひに昔語の夕暮の空

左歌は上句はさもと聞え侍に終句の袖の村雨の詞あまり
にあたらしきそや侍らん但人のこのみ／＼に侍れば一
すちに申定かたく侍りめつらしとおもふ人も侍る右歌は
君やこん我やゆかんのいさよひの歌にむかしかたりの夕
くれの空をよみそへられて事こもりたるさまにあひて初
句のしのひあへすなともたくましうをかれて侍るなすら
へて持と可申

千三百四十二番

左持 宮 内 卿

頼めしなまつとて我身ゆきふればうらみとりにもはては成けり
右 釋 阿

新古今
違事にかたのゝ里のさいの庵しのに露ちる夜はの床かな
左大かた心もたくみに侍るうへに詞つかひもなかくこ

そ見え侍れ詞花集の歌に「とはぬまをうらむらさきに咲
藤のなにとて松にかゝりそめけん」とよめるすかたおも
ひあはせられて侍るかな右歌上句もこのもしきさまによ
みくたされて侍めり下句も萬葉の「秋のほをしのになし
なみ置露のけかもしなまし戀つゝあらずは」と侍歌なと
取合られていみしくこそ聞え侍れ左歌すてかたく侍れば
持と可申歟

千三百四十三番

左

讀

岐

新勅撰

あはれ／＼はかなかりける契かなたいうたゝれの春のよの夢

右勝

俊成卿女

戀といふうき名ばかりそとめけん忘かたみなたれ忍へとて

左歌あまりによりつなむなしくおもひとられてたうとく

や右歌はさまかはりて戀にしみかへりてみえ侍れば戀の

歌にはかつへきにこそ

千三百四十四番

左持

小侍從

さらぬたにれ覺さひしき冬のよにうらみし鳥のれこそかはられ

右

丹後

敷妙の枕もうとくなりぬれば夢みし夜はも戀しかりけり

左のうらみし鳥の音こそかはられと侍るも右の夢みし夜

半さへ戀しからんも心得のうちあさいふかさとかく申さ

んに及侍らすや

千三百四十五番

左勝

隆信朝臣

とへかしな哀とまではあらず共さてもやいけるとはかりをたに

右

越前

うちたえてまたれぬ程に成ぬれば吹もふかぬも萩の上風

左歌まことにあはれにきこへ侍るうへに上句にあはれと

まてにといひ下句にとばかりをたになと侍るよみかけら

れたるいみしくおほへ侍り右歌もめつらしきすかたにて

侍れと吹もふかぬも萩のうは風とおもはせられたるなを

心ゆかすや左やまさり侍らん

千三百四十六番

左勝

有家朝臣

新古今

忘れしといひしばかりの名残とてその夜の月はめぐりきにけり

右

定家朝臣

久かたの月そかはらてまたれける人にはいひし山のほのそら

左歌よろしくきこえ侍り末句きゝなれて侍らんされとた

しかにはおほえ侍らす右歌もあしくも侍らぬに末の人に

はいひし山のほの空と侍すこしおろかなるこゝろゆかす

や左まさると可申

千三百四十七番

左勝

保季朝臣

おきわかれ歸る道をばをくる共月は物をやおもはさるらん

右

通具朝臣

忘れなん人こそあらめ夜と共に契し事はこのよのみかは

左歌心ふかく詞きよらかに侍めり右歌は上によといもに

侍る下にこのよのみかと侍るおなし心のやまひさりかた
ければ左をかちと申侍へし

千三百四十八番

左

良

平

忘らるゝ身をしる雨の行ふとやうかりしまゝに袖のくちぬる

右勝

家隆朝臣

今はとやなのかきぬゝいそくらん獨りかたしくしのゝめの月

左歌藤原敏行が業平かもとに侍女のもとへ文つかはしける
詞に雨のふりけるをみわつらひ侍と云ければかの女に
かはりて業平かよめる「かすゝ」におもひ思はずとひか
たみ身をしる雨は降そまされる「又源氏物かたり」に五月
雨のふりやまぬにつけて「つれゝ」と身を知雨のをやま
れば袖さへいとみかさ増りて「後拾遺」にも雨のふりける
日和泉式部が「みし人に忘られて降袖に社身を知雨は
いつもをやます」堀川院百首の春雨に俊賴朝臣「つくつ
くと思へばかなしかすならぬ身をしる雨はをやみたにせ
よし」かるに近比の人々涙を一つに身をしる雨とよめり
身をしる詞は涙にもかよはぬへしさればまことの雨にの
みよせてよめる右歌はひとりかたしくしのゝめの月なと
よろしく侍れば勝と可申歎身をしる雨を難申故にあらず
それは事のつゝおてにおとろかし申ばかり也

千三百四十九番

左勝

具

親

よしさらばうらみはてんと思へ共心つよさは人によりけり

右

雅

經

結手の雲ばかりを袖にみてあかても人に山の井の水
左歌めつらしくみえ侍り右歌貫之かむすふ手のしづくに
にこる山の井のこゝろにや此御歌合にもあまたみえ侍り
右はなをまさりて侍らん

千三百五十番

左勝

顯

昭

たまさかにあひみて後もいとひけり戀は果うき物にそありける

右

寂

蓮

露しげきよもきかれやのひまとちて古き枕に秋風を吹
右歌ふるき枕とよまれたるは長恨歌にふる枕ふるき衾た
れとゝもにかせんと侍る詞をひきて源氏物語に懷舊の所
にしろして侍めり又狹衣の物語にも「ちり積る古きまく
らをかたみにてみるもかなしき床の上かな」と侍るうた
もふるきをおもふ心なるへし歌合の戀の歌にはたてまつ
られかたくや左歌は戀の心侍れと猶合歌はよみしれるす
かたなれば勝と申へき也

和歌の浦のよしあしなさへ分へしと人並にたに思ひかけきや

千五百番歌合卷第十九

雜一 判者前權僧正

千三百五十一番

左勝

女

房

ゆふたすき萬代かけて住よしの神や種まきし峯の姫松

右

三

宮

久かたの空はれわたる浪のうへに雲ときえ行奥のつりふね

君か代にたくひも見えぬためし哉神のたねまきし住よしの松仍以左爲勝

千三百五十二番

左勝

左

大

臣

みな人の世にふる道そあはれなる思ひいるゝも思ひいれぬも

右勝

内

大

臣

そのかみや祈しことはとようけのしるしそ君かめくみなりける

豐受のうけすといかと思へき世にふる道にみちはあれ共

仍右爲勝

千三百五十三番

左勝

前

權

僧

正

明石かた舟のむかしに事とへは島かくれ行跡のしら浪

右勝

忠

良

卿

さひしさな人もこすゑのなかめにてけふもくれぬとまつの夕風

たいきける水鶴ならぬと松風の人もこすゑは哀成けり以

右爲勝

千三百五十四番

左勝

公

繼

卿

なさけしる人はいかにかなむらん明行山の空のけしきを

右勝

兼

宗

卿

住吉の松のこすゑのふか縁つもれるはるの色そみえける

なかむれば明行山の空よりも縁の色はすみよしの松仍有勝

勝

千三百五十五番

左勝

公

經

卿

さらに又つまとふ暮の武藏野にゆかりの草の色もむつまし

右勝

通

光

卿

いにしへも今行末の世のはても思ひいれつるあかつきのそら

世のはてと中になかつばむさし野の色やあらまし曉の空

仍右爲勝

千三百五十六番

左勝

季

能

卿

くらもちの神もうらめしいかなればあたと櫻の花となしけん

右勝

釋

阿

夜をかされさひしき床にすか枕いくたひ鐘の聲を待らん

鐘の音におとろきて聞神の名は猶しらすけの枕也けり

千三百五十七番

左勝

宮

内

卿

さしのほる日影たけぬる朝なきの雲なき空にたつあそふ也

右 勝

俊 成 卿 女

れ覺もる月さへさひし奥山の柴のあみ戸の明かたのそら

れさめもる月そさひしき舟路ならておほつかなみの朝な

きの空然は暫以右爲勝

千三百五十八番

左 勝

讚 岐

古の神世もかくや春の花秋の紅葉はさためなきけん

右

丹 後

時しあれば花は春にも逢にけり待こともなき身をいかにせん

待ことはめつらしからぬ花なれば神世の紅葉色やそふら

ん仍左勝歟

千三百五十九番

左

小 侍 從

袖になく露もたまひぬ曉にゆふつけ鳥の鳴そあやしき

右 勝

越 前

いすい川その水上を尋ねれば神路の峯にかゝるしら雲

曉の鳥のれたしや神路山思ひながけそ嶺のしら雲以右爲

勝

千三百六十番

左 勝

隆 信 朝 臣

明ぬとや釣する舟も出ぬらん月に棹さすしほかまのうら

右

定 家 朝 臣

大かたの月もつれなき鐘の音に猶うらめしき有明のそら

なに事とわかぬ有明の空よりも月に棹こそさしまさるら

め然は左勝也

千三百六十一番

左 持

有 家 朝 臣

跡たれていく世になりぬ神風やいすいの川のきよきなかれに

右

通 具 朝 臣

羽とのれにかよふ岡邊の松風は葉分に千々の秋しらふ也

神かせはいすい河原に吹なれぬ時々ゆるせ松のは分に

千三百六十二番

左

保 季 朝 臣

尋入山路のふかくなるまゝに鳥のこゑまでかはり行かな

右 勝

家 隆 朝 臣

神風やみもすそ川も岩清水も君かためとやすみはしめけん

かけまくも畏き神のもろしめはなかにいかゝ引ならふ

へき

千三百六十三番

左 持

良 平

いかなればおなし空よりふる雨の春秋のへのいろをかふらん

右

雅 經

あつまやの軒のしのふのすゑの露いく朝なきの袖したふらん

雨も露も朝なきの袖の上の色深しあさしも思わかれす仍

爲持

千三百六十四番

左

具 親

てる月も君に心をゆふかけて櫛葉しろき天のかく山

如寒者得火

寂

蓮

谷の水嶺の嵐をしのひても法の薪にあふそうれしき

あはれ也法の薪をこりつみて思ひをきけん秋の白露但可

爲持也

千三百六十五番

左

顯

昭

明ぬとて鳴か羽音におとろげはまた夜もふかしいなのふし原

右勝

家

長

八雲たついつも八重かきひまもなくめぐみにこめよ君か萬代

ふげにける鳴か羽音もいかてかは八雲の色に立まさるへ

き仍以右爲勝

千三百六十六番

左勝

女

房

ありそ海のやむ時もなき浦風に涙かくれ行あまの釣舟

右

内

大

臣

柳葉やいつも緑のしめの内に鳩吹秋は風そ身にしむ

あま小舟なみかくれ行うらかせば鳩ふくよりも身にそし

みける左尤勝

千三百六十七番

左持

左

大

臣

かり人もあはれしれかし嶺の鹿のへのきゝすのなのかこゑ

右

忠

良

卿

山たかみかけちの雲のたえまよりふもとの浪を出る月かけ

月かけよ麗の雲を出ぬれば嶺には鹿の聲そかなしき仍持

歟

千三百六十八番

左

前 檀 僧 正

君か代にふるからなのいもとかしほもとに返るや我身なるらん

右勝

兼 宗 卿

風の音に聲をもやかてしらすれば友とそたのむまとのくれ竹

もと柏もとにはいまた歸りはてすさればよ竹のよしとこ

そみれ仍右勝

千三百六十九番

左勝

公 繼 卿

玉はこの道の消行けしきまであはれしらする夕くれの空

右

通 光 卿

暮はてん空をはしほし三日月の影ほのかなる名残をそ思ふ

たまはこの道の夕の氣色には光そうすき三日月の空

千三百七十番

左

公 經 卿

山のはにかさなる雲のいかなれや郡にもにぬ空のいろかな

右勝

釋 阿

をしてるやばまの南の松原もいく木の千代を君にそふらん

君か代のいく木の千世を松の色に染ます物はあらしとそ

おもふ仍右勝

千三百七十一番

左

季 能 卿

深山木の梢にさ夜やふけぬらん月にさひたるむさゝひのこゑ

右勝

俊成卿女

あはれ思ふ人こそしらね雲のいる嶺のかげちをかよふ松かせ

あはれなる峯のかげちの松風にいとおそろしきむさひ
のこゑ以右爲勝

千三百七十二番

左勝

宮内卿

窓ちかく嶺の松風音信て軒より下をかよふしら雲

右

丹

後

うらやまし雲おほるかに成ぬれと空行月はめぐりあひけり

めつらしき軒より下の白雲に空行月の立かくれぬる左爲

勝

千三百七十三番

左持

讀

岐

草も木もなのかおり／＼契をきて色をも香をも人にまれつゝ

右

越

前

袖さすとも宮人の神あそひ立まふ袖の香さへなつかし

とにかくにたゝなそらへて有ぬへしゆへありとても聞よ

からねは仍爲持

千三百七十四番

左勝

小侍

從

鹽みてはかくるゝ磯のそなれ松これもみる目をすくなかりける

右

定家朝臣

たつけふり野山のすゑのさびしさは秋ともわかす夕くれの空

中々にかくるゝ松はさもとみえて野山の末はめにもたゝ

れぬ左勝歟

千三百七十五番

左持

隆信朝臣

故郷の池はみ草にとちられて心に月をやとしつるかな

右

通具朝臣

ながれての世々につたはる河竹も君に契れる末そ久しき

此左右は又なそらへて持とすへし難の言葉もつゞけにく

くて

千三百七十六番

左持

有家朝臣

續古今

風ふけばあまのときまのあれまくもおしよか磯によする浪哉

右

家隆朝臣

霧はるゝ鳥羽田のおもをみわたせば行末遠き秋の山里

此比の風の姿になれ／＼て身にしむ色はいつれともなし

千三百七十七番

左持

保季朝臣

一夜たに心とまらぬすまゐ哉かたしく袖に山おろしのかせ

右

雅經

やとれとや苔のさむしろうちにはらひ旅行人を松の下風

とにかくに松の下風山おろし吹みたりぬる心なりけり仍

又持也

千三百七十八番

左

良平

曉はよもの草木もをく露の清き光もこゝろすみけり

右勝 如裸者得衣

寂

蓮

今そ思かた岡山の旅人も身をかくしける紫のそて

みればこれもあはれなりける衣かな身をかくすとて身も
かくれぬる仍右勝也

千三百七十九番

左

具

親

見わたせば花と雪とにおなし色のおりからかはるみねのまら雲

右勝

家

長

此比は和歌のうら涙立そひて君をやまもる玉つ島ひめ

雲にいかゝ立をとるへき和歌のうらに君をまもらん玉つ

しまひめ殊以右爲勝

千三百八十番

左

顯

昭

むしろ田のいつぬき川に年をへて涙や立らん鶴の毛衣

右勝

三

宮

鳥のれもかれのひいきもなき山は明るもしらぬみねのまらふし

庭田とうちきくよりもふかき山に哀なるへき嶺の丸伏仍

右勝

千三百八十一番

左勝

女

房

すまのうらに待夜ふけ行月影を涙のあなたに誰おしむらん

右

忠

良

卿

新古今

うしとても又はいつちかあくかれん山より深きすみかなければ
めつらしき涙のあなたの月影に忘れにけり深き山のは

以左爲勝

千三百八十二番

左勝

左

大

臣

舟のうら涙の下にそ老にけるあまのしわざもいとまなの世や

右

兼

宗

卿

春の日の長閑にてらす大空にむれたるたつのあそぶ聲々

涙のまたあまのしわざにくらふればそのことゝなきたつ

のこゑかな尤左勝

千三百八十三番

左

前 檣 僧 正

ふりにけるなからの橋は跡もなし我が老の末はかゝらすもかな

右勝

通

光

卿

かよひけんむかしの琴のしらへまで思ひまらるゝ峯の松風

松風に昔のことを引かけて思ひ知るらん末をほるけき尤右

勝

千三百八十四番

左

公

繼

卿

秋としもあはれをなにか思ひけん暮行そらのかせにそ有ける

右勝

釋

阿

色かへぬみかきのうちの臭竹も君が御代にそ千世はまけらん

君が代に千世まけるへきくれ竹のくせなき方に心うつり

ぬ

千三百八十五番

左 持

公

經

卿

をしへをきし是そ都のたつみとて軒はの嶺に鹿も鳴也

右 俊成卿女

時しらぬすゝの志のやに月もりて風こそ秋の音をきかすれ

いつかたそ翼の鹿も風の音もいさといかに聞そわかれ

ぬ

千三百八十六番

左 持季能卿

くりはらのあれはの松をさそひても都はいつとしらぬ旅かな

右 丹後

あはれなるすゝのしのやのまるれ哉跡留むへきくまとやはみし

すへてたいなとりといはて有ぬへしあれはの松もすゝの

しのやも仍持也

千三百八十七番

左 宮内卿

わたのほらくえの浪をへたてゝも都をこめしおなし白くも

右 越前

にこる世に光さやけき夜半の月心をすます道しるへせよ

思ひわかね雲のへたてにまよふ程月のしるへやすみまさ

るらん右勝也

千三百八十八番

左 讃岐

心あらは行てみるへき身なれ共音にこそきけ松かうら島

右 勝定家朝臣

いく世へぬかさしおりけんにしへに三輪のひはらの苔の通路

すむあまの心あるへき松か浦もみわのひはらに及へきかは以右爲勝

千三百八十九番

左 小侍從

うきふしはとゝこほるとも河竹のなかれて末にあふせなりせば

右 勝通具朝臣

風はやみ夕しほみては難波かた入江のたつのこゑもおします

うきふしはげにとゝこほる心ちして入江のたつや鳴まさ

るらん以右爲勝

千三百九十番

左 隆信朝臣

尋きて心なきまで月そすむ世のかくれかとたのむいほりに

右 勝家隆朝臣

住の江の月に神代のことゝへは松の梢に秋かせそふく

かくれかの庵にすまし住の江にいつもなかめん松の秋風

尤右勝

千三百九十一番

左 勝有家朝臣

山のはの雲を衣にかたしきてさも明かたき岩まくらかな

右 雅經

雲にふし風にやとる足引の山のいくえの夕くれのそら

山のはのおなし雲にはふしなからつよくもみゆる岩枕か

な仍左勝也

千三百九十二番

左

保季朝臣

うちはへていかいとみえし柴の庵もすめは遠かに日数へにけり

右勝

如商人得主

寂

蓮

里となき市の庵のとまひさし行かふ民にあふ心ちして

柴の庵けにいかいととてとまひさしとしてそいとふ心とめ

けん以右爲勝

千三百九十三番

左勝

夏

平

夕暮は山の端いつる月をみてかゝけもやらぬ窓のともし火

右

家

長

色ふかき萬の葉までならのはの名におふ宮に散はしめけり

萬のは散おはせてもみえぬ哉此古ことはかけまくもいと

以左爲勝

千三百九十四番

左勝

具

親

尋くる人もいつかは三輪の山杉はふりぬるしるしはかりそ

右

三

宮

浪の音も風のひきもさしなからいく世に成ぬ松かうら島

ふりぬれと杉はしるしも有ぬへし浪のよせなき松かうら

しま然は左勝也

千三百九十五番

左

顯

昭

くる人のあらばいかいと問てましひとりのみきく嶺のまつかせ

右勝

内

大

臣

そさのなも君かみことのためとてや八雲のしるし思ひ立けん

松風は人に問へきなめかは八雲のしるし立まさるへし

尤以右爲勝

千三百九十六番

左勝

女

房

都人とはて月日は松の庵の軒になれたる嶺のまつかせ

右

兼

宗

卿

ふりにける磯の岩やにすむ龜はいく年浪をかされきぬらん

杉の庵の軒になれてはいとしく聞所ある松のかせかな

尤左勝

千三百九十七番

左勝

左

大

臣

岩かたのこりしく嶺をふみならし薪こるおもいかゝくるしき

右

通

光

卿

年毎におひそふ竹の世々をへて久かれともなれる御代かな

としことに生そふ竹のふしよりもこりしく嶺やたかくみ

ゆらん以左爲勝

千三百九十八番

左

前

權

僧

正

なさけあらは人もさめる榎あさつおふの下草おいはてぬとも

右勝

釋

阿

和歌のうらの風にたつさふ友鶴の君か千とせにあふそうれしき

今そしる左を右になしたらば老ことずとは人にいはれし

仍尤右爲勝

三百九十九番

左 勝 公 繼 卿

さよふけて風吹らしあなし河川音たかくなりまさる也

右 俊 成 卿 女

新古今
かくしても明せばいく夜過めらん山路の苔の露のさむしろ

あなし河けに音たかく聞ゆ也しきしのふへき露のさむしろ

千四百番

左 勝 公 經 卿

たつた山こえし昔の面かけはふもとの里のあり明の月

右 丹 後

今さらに思入こそはかなけれしめをかさりし谷の戸ほそに

なにとなく物さひしきは立田出思入かたもあはれなれと

も左勝也

千四百一番

左 持 季 能 卿

またかゝる道こそ雪もしらすけの風にたゝふふ朝ほらけ哉

右 越 前

高砂の松を友とはなけれどもなかもそなるゝいたつらにして

とにかくにいひおほせてやみえさらん雲のしらすけ高砂

の松持歟

千四百二番

左 持 宮 内 卿

中々になかめにぬれぬしつかさるたみのゝ島の雨のゆふくれ

右 定 家 朝 臣

駒とめしひのくま川の水清み夜わたる月のかげのみそみる

ふけにける雨と月とに分かれぬ田簀のゝしまもひのくま

川も爲持也

千四百三番

左 勝 讃 岐

新古今
身のうさに月やあらぬとなかむれば昔なからの影そもりくる

右 通 具 朝 臣

曉はひとりねさめに思事あはれ数そふ嶋のはれかき

身のうさの詠はけにそ哀なる月やあらぬの春の明ほの以

左爲勝

千四百四番

左 小 侍 從

音羽河なとに聞つゝやみなはやこえてくやしき相坂の關

右 勝 家 隆 朝 臣

いく代ともしらね物ばしら雲の上よりおつる布引の瀧

いとゝしく音さへたかく聞ゆ也雲にさらせる布引の瀧以

右爲勝

千四百五番

左 持 隆 信 朝 臣

古郷はいく重の雲に跡とちてかさなる山のみれの月かけ

右 雅 經

跡とめてとまるかなきうきね哉さこそうきたる浪ちなれ共

とにかくに山路浪ちはかはれ共心はおなし旅ねなりけり

千四百六番

左勝

有家朝臣

花かとも故郷人のとひこかし軒はの山のみねのしら雲

右 如子得母

寂蓮

かいりける御法の花そ驚ふ梢をおしとなにおもひけん

あはれとも如子得母のたはふれを思ひ出てやひとり行らん

但左勝也

千四百七番

左勝

保季朝臣

山ふかくすまは共にといふ人もまことにならばかはりもやせん

右

家長長

これまでもかしこき御代にかはらねば古へ今の跡をこそとへ

そむく道はまことになればとわれと思ひしるこそけに

はおほゆれ左勝也

千四百八番

左勝

夏平

わたのはらなめのはてはひとつにて村雲わくる興つしら浪

右

三宮

尋こし昔の人は跡たえて野中のし水誰かくむらん

わたの原村雲分る浪に又野中の水もあさからぬかな仍持

歟

千四百九番

左勝

具親

わたのはらいく夜の月をしるへにて都の山を浪にまつらん

右

内大臣

神かきに夜や明かたに成ぬらん夕つけ鳥の聲のきこゆる

山のはを浪のうへには待もせよ月のしるへやかすかなる

らん仍持也

千四百十番

左

顯昭

我友と人やみるらん柴の庵のまかきにうつすいさゝむら竹

右勝

忠良卿

しほかまやをちのなかめの浪分て松の木間に奥のつりふれ

常にみるいさゝ村竹いさゝかもかつへきふしそみえず成

ぬる仍以右爲勝

千四百十一番

左勝

女房

これやさば都にてみし空の雲それをかたしく嶺の旅ふし

右

通光卿

苔蘚あなれかみねは名のみしてたゞしら雲のよそめ成けり

たちをとる峯の雲こそかひなけれそれをかたしく心ふる

さに右尤可負也

千四百十二番

左

左大臣

春の田に心をつくる民もみなをりたちてのみ世をそいとばん

右勝

釋阿

四の海おさまれる世は音に聞龜のお山も浪そよせん

なりたちていとなむ民もしかはあれと猶よせふかし龜の

お山は仍右勝

千四百十三番

左

前 權 僧 正

蘆たての難波のみつにやく鹽のしほたれて物を思はずもかな

右 勝

俊 成 卿 女

もろともにすめはなりけりあしたつも吉野の奥の松の木のもと

仙人のすみかいましきよしなれやよしの山のおくの松

風仍右勝

千四百十四番

左 勝

公 繼 卿

すきゝぬる山分衣ぬれながら野はらの露に猶そかたしく

右

丹 後

松風の軒はにおつる音をさへ怒うつ雨とおもひけるかな

なかむれば共に色あることのほのかたしく袖やそめまさ

るらん仍左勝

千四百十五番

左 勝

公 經 卿

月を思袖より秋のしるへせよしのたのもりのよその夕露

右

越 前

里もなき山路はるかに行暮しゆるすもしらず雲にやとかる

かれも是もそのもと末も分かれて猶みる袖に月のやとれ

る然は左可勝也

千四百十六番

左

季 能 卿

なめけんくものふるまひ空晴て月かけしろきたまつ島姫

右 勝

定 家 朝 臣

空に吹おなし風こそ聲たつれ嶺の松かたあら磯のなみ

雲か蜘蛛かあら磯に吹松風のおひたいしきも猶めにそた

つ右可勝也

千四百十七番

左

宮 内 卿

晴ぬるかたちろく雲のたえまより星みえそむる村雨の空

右

通 具 朝 臣

新古今

一すちになれなはさても杉の庵に夜な／＼かはる風の音かな

くればとりあやなるはたにひく絲のかはれる色に心まと

ひぬ

千四百十八番

左 勝

讃 岐

いかばかり心の水のあさければぬしたにしらぬむれの蓮葉

右

家 隆 朝 臣

もしはやくけふりも浪の末にして知ぬはまちにけふもくらしつ

つるに猶むねのばちすはひらげなん知ぬ濱路は行てしも

なし仍以左爲勝

千四百十九番

左

小 侍 從

名にしほはば尋もゆかんみちのくのあふくま川は程となくとも

右 勝

雅 經

風わたる松の下れのさ夜まくら夢路とたゆるあまの橋たて
橋たてや夢路とたゆるさ夜まくら吹まさるらし松の下風

仍右勝
千四百廿番

左

隆 信 朝 臣

老か世のあたら光の秋の空雲井のよそにみつる月かな

右 勝

如渡得船

寂

蓮

おもふ人あるにつけても都とりあはれ今はと法の川をさ

わたり川舟待えてもいかばかりけに都鳥こひしかるらん

以右爲勝

千四百廿一番

左

有 家 朝 臣

山田もろしつか庵のひたふるにうちぬる夢もたえて程へぬ

右 勝

家

長

梨つほの昔の跡にたちかへりわかのうらわに浪の寄人

なしつほの昔の跡のうれしさばとてもかくてもかたさら

めやは仍右勝

千四百廿二番

左

保 季 朝 臣

きためなき人の心にしたかひて住もいとふもおなし山里

右 勝

三

宮

ふりにける三輪のひばらにこと問んいく世の人がかさし折けん

なさけあるみわのひばらのかさしなばさして思ひそ山の

里人左負也

千四百廿三番

左

長

平

いていこし都の空にあくかれて心きためぬ草まくらかな

右 勝

内 大 臣

住の江の松風かよふからことを浪のなかけてしほや引らん

浪のなや引まさるらんあくかれて定めぬ空は秀句なけれ

は以右爲勝

左 勝

草の庵は尋し跡もふりはてい嵐そさむき相坂のせき

右

忠 長 卿

月よする明石の浪を枕にてみやこの夢はすまの關もり

夢はすまも月よする浪もいさ如何に尋もしてん蟬丸かあ

と左勝也

千四百廿五番

左

顯 昭

暮ゆけはさは風さむし旅人の宿かすか野やいつこ成らん

右 勝

兼 宗 卿

旅れしてさげはむつまし都鳥なれもおもふや同し友とは

都鳥おなし旅れとみゆれとも猶さは風は身にしまぬかな

仍以右爲勝

千五百番歌合卷第二十

雜二 判者前權僧正

千四百廿六番

左勝

女

房

旅ねする夜半の嵐に夢覺て打なむればあり明の月

右

釋

阿

昔さく野への岩屋そあはれなる嵐のそこを夢にみえけん

こともなくめてたきさまそ有かたき岩やの夢は君かまに

まに左勝歟

千四百廿七番

左

左

大

臣

我心その色としはそめれとも花や紅葉ななかめきにける

右勝

俊

成

卿

女

むかし思心もいとすみた川暮行程のわたりなりけり

花やといひ紅葉をそむる色よりも暮行程は心にそむ右

勝歟

千四百廿八番

左

前

權

僧

正

君か代のつきぬ千とせの友とならん老の使ひになしたこたへよ

右

丹

後

我もさそ草の枕にむすひつる露にやとかる月の影かな

月といもに草の夜床にやとりける枕の露や心すむんら仍

千四百廿九番

左勝

公

繼

卿

あはれにもすみなれにける山里を松の嵐に夢さめぬまで

右

越

前

うたいれにまとろむ夢を程もなくさめたりかほに思はかなさ

松風もけに夢なるゝ同夢のさめたりかほは猶いかにとて

左勝

千四百卅番

左勝

公

經

卿

冬の色をけしきの杜に顯してうつもればつる雪の下草

右

定

家

朝

朝夕はたのむとなしに大空のむなしき雲を打なかつゝ

色みゆるけしきの森の氣色哉むなしき雲は心くもりて左

可勝か

千四百卅一番

左勝

季

能

卿

新古今

みつのゐのよしのゝ宮は神さひてよはひたけたる浦の松風

右

通

具

朝

とふへしとたのまぬ物に所イを松の月の嵐にとつる夕くれのころ

神さひて歸たけたる松風や猶松の月に吹まさるらん左

勝

千四百卅二番

左勝

宮

内

卿

なめてもいく世になりぬ有明の月を待えて出る山人
右 家 隆 朝 臣

古郷にたのめし人も末の松まつらん袖に涙やこすらむ
末の松やまひなくはと見ゆる哉冥加有ける出る山人左勝

歟

千四百卅三番

左 勝

讃

岐

後の世の身をしる雨のかきくもり苔のたもとにふらぬ日そなき

右

雅

經

玉藻しき袖しく磯の松がねにあはれかくるも奥つしら浪

花なくて實ありとみゆることのほを吹なみたりそ磯の松

かせ以左爲勝

千四百卅四番

左

小

侍

從

春日野のわか紫の妻こひはあふとそみしになとかへるらん

右 勝如病得醫

寂

蓮

身につもる風の通路尋すはふもきの關をいかてすへまし

妻戀にあひてかくとやふらさらん蓬に消しその露の身は

右勝歟

千四百卅五番

左

隆

信

朝

臣

族の空誰かはとほん萩原や野への秋風そよいかにとも

右 勝

家

長

玉ほこの道こそたえぬ山のへやかきのもとまで跡をたつて

まけぬへし人丸にたに誰かあはん亦人さへに立そひにけ
り左負

千四百卅六番

左 勝

有

家

朝

臣

新古今

春の雨のあまれき御代をたのむ哉霜にかれ行草葉もらすな

右

三

宮

わたのほらやへのまほちをみわたせば雲につらなる奥つしら浪

春の雨にうるおひにける草なればふるき波にはたちまさ

るへし以左爲勝

千四百卅七番

左

保

季

朝

臣

都おもふそなたの風を身にしめて月に伴なふうつの山こえ

右 勝

内

大

臣

老の後月にすみけんから人の跡をたつて入山路かな

から人の跡を尋める月影はうつの山にも澄まさるらん以

右爲勝

千四百卅八番

左 持

夏

平

いつかたへたかことつてをすまの關せき吹こゆる奥つしほかせ

右

忠

良

卿

きみを置く小島か崎の岩枕なみよりほかの涙もかけり

あはれにも波よりほかの浪に又立ならひぬる奥つ鹽風仍

爲持

千四百卅九番

左 具 親

高砂やこきのく舟もうちむれて風やすけなる浪のうへかな

右 勝 兼 宗 卿

待わたる都の人にこゆるきのいそく浪ちといかてあらせん

風やすくこきのく舟やいかならんいそく浪ちによる心か

な以右爲勝

千四百四十番

左 顯 昭

なにとなく心ほそきは南ふくとさの舟路の明かたのそら

右 勝 通 光 卿

眞柴わけ道もおほえぬ山路哉あほりをこむる嶺のしら雲

嶺の雲におもひなかけそ南ふきて物おそろしき土佐の舟

路や仍左貢

千四百四十一番

左 勝 女 房

わするなまかゝる深山の夜はの秋いかなる空の月をみるとも

右 俊 成 卿 女

露しげきをさいか原の風の音にかりねの夢を結やはする

常にきくなさいかりねの夢よりもいかなる空の月は忘れ

し以左爲勝

千四百四十二番

左 勝 左 大 臣

月日のみなに事なくて明暮ぬくやしかるへき身の行ふ哉

右 丹 後

うちとけてまゝはこそ古郷をとほめ旅の夢にたに見め

旅れしてまゝとる夢の床よりも覺るまことにふくものそ

なき以左爲勝

千四百四十三番

左 前 權 僧 正

君か代に久しくにはへ住よしの松に契し百草のはな

右 勝 越 前

石の火に此身をよせて世中のつれならすきを思しる哉

石の火によする身まてはあはれなりつれならすきと猶お

もふへき然而以右爲勝

千四百四十四番

左 持 公 繼 卿

ますらおはいなばかき分家おしていく秋風を身にしめつらん

右 定 家 朝 臣

そなれ松まつみやためしをのれのみかはらぬ色に浪のこゆるん

そなれ松かはらぬ色の色もいさ身にしむ風もあますやあ

るらん仍爲持

千四百四十五番

左 持 公 經 卿

まてとやはひのくま川にたのめをきし駒うちなむる夕暮の空

右 通 具 朝 臣

とまりするなしまか磯の波枕さこそはふかめ夜の松風

なたらかに吹なす磯の松風もうち行駒の跡もわりなし仍

持歟

千四百四十六番

左持

季能癩

むくらふのさしもげはしき古郷をまことにいとふ心なりせば

右

家隆朝臣

昨日こそ浪はかけしか椿まくら雲しくみねも袖はめれけり

かち枕雲しく嶺にうつる程けはしき里にしはとやとらん

仍爲持也

千四百四十七番

左勝

宮内卿

ものゝふの八十字治川のはしはしらのかにおとせまきの島舟

右

雅經

今日も又秋の末はを空にみて露ふりくらすむさしのゝはら

武藏のゝ露もこまかに見ゆれ共もしすくないる橋はしら

哉尤以左爲勝

千四百四十八番

左持

讃岐

行末をふる人あらは問てましかくいひてはてはいかにそ

右

如暗得灯 寂蓮

ゆきはたる光を窓にあつめても思ひしらるゝ法のともし火

はかなしな法の灯そも消ぬかくいひてはてもまこと

に仍持歟

千四百四十九番

左

小侍從

かくばかり名こそその關と思ひける人にこゝろをなにと止めん

右勝

家長長

かたをなみ蘆邊をさして鳴たつの千世を伴なふわかのうら人

かくばかりいとふ名こそその關よりも蘆へよせある和歌の

うら人右爲勝

千四百五十番

左

隆信朝臣

ぬ覺とふ深山の里の松の風きくもさかぬもさびしかりけり

右勝

三宮

かりそめと思し物を飛鳥井のみまくさかくれいく夜ねぬらん

みまくさや立まさらん松風を聞ぬ心はいかいしるへき

右勝歟

千四百五十一番

左

有家朝臣

人数になかめもすへき秋の月身をうき雲のうちしくれつゝ

右勝

内大臣

新勅撰

やをよろつ神のちかひもまことには三世の佛のめくみなりけり

うき雲やわかぬ心に見る時は神を佛としるそうれしき以

右爲勝

千四百五十二番

左勝

保季朝臣

物おもはて袖のなみたとなるものは松よりおろす嵐なりけり

右

忠良卿

月影を狩もおしむもなかめにて出るも入も山のはのそら

みれば猶月をなかめの山のはに袖の松風吹まざるらし左

勝

千四百五十三番

左持

眞

平

夜と共に木の下くらきときはやま月も送らて誰かこゆらん

右

兼

宗

卿

都にてみしにかはらぬ月なれと山里さひしあり明のそら

なにとなくてことなる影もみえぬ哉送らぬ月もかはらぬ

月も仍爲持

千四百五十四番

左

具

親

月いらは我もさてやば磯まくら旅れもちかしふかのうら波

右勝

通

光

卿

冬の夜はうら風さむしかち枕さても明石の月をみつれば

旅枕ならへてみれはいとしく月は明石やすみさるらん

人仍以右爲勝

千四百五十五番

左

顯

昭

すい舟をよする音にやさばく覽すまの上野にきいす立也

右勝

釋

阿

かけていへは厭ひもすらん春日山さりとていかゝ頼まざるへき

昔より木たかくなれる春日山をちくたりてもみゆるすい

ふね尤左負也

千四百五十六番

左勝

女

房

月殘る蘆屋のさとの有明に昔に似たるあまのいさり火
人になにしられぬ谷の下水にあまれき月の影はさしけり
谷水にやとれる月はおほろにてかけさやかなるあまのい
さり火仍以左爲勝

右

丹

後

千四百五十七番

左持

左

大

臣

なしかへし物を思ふはくるしきにしらすかほにて世をや過まし

右

越

前

すてやらぬ我身を浦のうつせ貝むなしき世とは思ものから

ふらすかほはこひれかはるゝ世なれ共又すてかたきうつ

せ貝哉然と持也

千四百五十八番

左

前

權

正

たれか聞難波のまほのみつなへにたみのゝ島の鶴のもろ聲

右勝

定

家

朝

臣

年ふれば霜夜のなみになく鶴をいつまで袖のよそに聞けん

行末をたのむ霜よの鶴の聲やたみのゝ島に鳴まざるらん

以右爲勝

千四百五十九番

左持

公

繼

卿

つくりけるなからの橋は又くちぬふりにし人のこれをみませば

右

通

具

朝

臣

まゐるしらすわかぬあはれなのこしつゝ幾夜の宿の曉のそら

千四百六十番

又つくるなからの橋の末もいかもふりしらす曉の空
然に可爲持歟

千四百六十番

左 勝

公 經 卿

かされては衣手さむし泉河千鳥なく夜のおかつきの霜

右

家 隆 朝 臣

我庵は嶺の杉むら分過てそれともふらぬ深山木のかけ

峯の杉又み山木のふげきよりなめやすきは曉の霜左勝

歟

千四百六十一番

左

季 能 卿

九品のはちすのうちに結はれてとへはちらさぬ身ともならばや

右 勝

雅 經

草の葉にしほれふしぬる袖枕夢やはむすふ夜はつ白露

極樂のたうとき方はふはしなくをかしき色の袖まくら哉

以右爲勝

千四百六十二番

左 持

宮 内 卿

こえ行は梢にかゝる跡もなし山のいつくに雲かくるらん

右 如貧得寶

寂 蓮

わひ人の心ばかりはかゝひきて思ふにさこそうれしかるらめ

わひ人のうれしきゆへもかすか也雲の跡なき嶺にまとい

て仍持也

千四百六十三番

新勅撰

影たけてくやしかるへき秋の月山路ちかくもなりやしぬらん

左 勝

家 長

君か代にそめます物と成にけり山とこととはのいまの一しほ

君か世にそめますと閑色なれば今一しほも身にそしむへ

き右可勝也

千四百六十四番

左

小 侍 從

うらやましいたいのはしのけたよりも戀わたりけん人の心よ

右 勝

三 宮

奥つかぜ鹽やくうらを吹からにのほりもやらの夕けふりかな

みれば猶いたいのぼしの末よりも鹽やく浦に風わたる也

仍有勝

千四百六十五番

左

隆 信 朝 臣

我宿をとへ人あらはふるへせよ岩ふむ道になるい由もり

右 勝

内 大 臣

位山跡をたついでのはれとも子を思道に猶まといぬる

昔聞心はやみの末なれば子を思道せけに哀なる尤右勝

千四百六十六番

左 持

有 家 朝 臣

身の程を中々なればいはれともある人ことにいかいと思

右

忠 良 卿

數ならぬ我身は花にふく嵐すむ夜も月にかゝるうき雲

迷懷のこころの心をはこころしてこそ定むへらな
れ仍持也

千四百六十七番

左 保季朝臣

明ぬれと涙はゆるさず清見かた關路は鳥の音まてと思に

右 兼宗卿

^{續後拾遺}
位山なに中々の跡ならん嶺まで思ほとくのくるしさ

位山思心そあはれなる跡あるからにあとをくるしと以右

爲勝

千四百六十八番

左 眞平

春の日のめくみをまつにかゝる哉其數ならぬ藤の末葉に

右 通光卿

かくしつゝいく世の露になれぬらん草の枕に袖をかされて

なにとなくさこそは松にかゝるらめ藤の末葉をあはれと

そみる左可勝

千四百六十九番

左 具親

すまはさてならひやすると思へ共ましら鳴也たにのゆふくれ

右 勝 釋 阿

芳野河岩こそ浪をなかもれはたえせぬ水の心をそしる

吉野川たえぬなかれのふかさをばくみてたにこそしらま

ほしけれ以右爲勝

千四百七十番

左 顯昭

かり庵の友とはいかいたのむへきもるほともなきよひの稻妻

右 勝 俊成卿女

清見かたうきれの涙にやとる夜は月に心のとまるなりけり

ことはりや清見か月の光にはいかいなよはんよひのいな

つま以右爲勝

千四百七十一番

左 持 女 房

たれみよとあれたる宿の松風にひとりすみけるあさちふの月

右 越 前

^{續古今}
思事なきたにやすくそむく世にあはれすてゝもおしからぬ身を

あさちふの月に心のすむからにおしからぬ身も捨られぬ

かな然ば持歟

千四百七十二番

左 持 左 大 臣

うきしつみこん世はさてもいかにそと心に聞てこたへかれぬる

右 定家朝臣

いたつらにあたら命をせめきけん長らへてこそけふにあひぬれ

けふにあひて過こしかたのくやしきも心にとふもくるし

かるらん仍持歟

千四百七十三番

左 前 權 僧 正

鷹のくる嶺の松風身にしみて思ひつさせぬ世の行ふ哉

右 勝 通 具 朝 臣

過にける三十は夢の秋ふけて枕にならふあかつきの霜
霜に結ふ三十の夢の枕にもあはれに秋のふくるあかつき

仍右勝

千四百七十四番

左

公 繼 卿

駒とめてこゝにやしはしやすらばんみまくさもよき飛鳥井の陸

右勝

家 隆 朝 臣

むかしに昔朽ける津の國のなからのはしの跡をしそ思ふ

くちにけるなからの橋の跡なれば昔のむかしさをなほる

けき尤右勝

千四百七十五番

左

公 經 卿

ありし世の月を涙まに待たて袖ふしかぬるむしあけのせと

右勝

雅 經

野への露山のしつくと立ぬれてかこまましき旅ころもかな

待わひて袖ふしかぬるせとよりも猶ぬれまさるたび衣哉

右勝歟

千四百七十六番

左 持

季 能 卿

心やる道こそ遠くなりまされ老行まゝにむかしおもへば

右 如民得王

寂 蓮

難波津にをのか物ゆへ行かへりれをなくあまも春にあふ比

心やる道もはかなし歸てれをなくあまも猶いかにせん

仍持歟

千四百七十七番

左 持

宮 内 卿

谷ふかみかさなる宿を見わたせば軒より出る山川の水

右 家 長

もしは草かきなく末の跡みればむかしにこゆる和歌のうら浪

とにかくにいひなしてもみえぬ哉わかのうら波山河の

水仍爲持

千四百七十八番

左 持

讃 岐

なからへて猶君か代を松山のまつとせしまに年そへにける

右 三 宮

いとせめて身のうき時のなかめには袖にも落る瀧のちら玉

誰もみなふる思ひはふな／＼にあはれにぬるゝ百草の

袖仍爲持

千四百七十九番

左 勝

小 侍 從

みきとたに誰にかたらん雨そいく雲にまかひしあかつきの夢

右 内 大 臣

世をいとふ人の入なる山里に又すみわひていつちゆかまし

みる人の心ばかりやしほるらん夢さへくもるあかつきの

雨左勝也

千四百八十番

左 隆 信 朝 臣

浦ちかき嶺のいはりのさひしきはふもとの雲に夕なみのこゑ

右 勝

忠 良 卿

世中をまゐても何か椎柴やしほしへめへき住家たになし

なにとなくいひくたしたる椎柴やふもとの浜におりまさ

るらん仍以右爲勝

千四百八十一番

左 持

有 家 朝 臣

うきながら猶つれなくて過すともあらし我身の末のおもひて

右

兼 宗 卿

恨へき人はなければおほかたにたのめは世をもうちなけきつゝ

とり／＼に思ひけるこそあはれなれたのめは世をもある

は思出爲持

千四百八十二番

左 持

保 季 朝 臣

山ふかみたりこそ人のとはさらめ月につけては音信もかな

右

通 光 卿

跡もなく岩のかけみちたとりきて雪と分つる庭の白雲

思ひわかすおなしといひて有なむふかき山へも岩のか

けちも仍持歟

千四百八十三番

左 勝

良 平

もれきても猶うつもれて年やへん木葉かくれの山川の水

右

釋 阿

續古今

おち瀧つ千々のなかればつもれ共かはらぬ物はおきつしら涙

行ふある木葉かくれの山水は奥つなみにもたまされか

し然は以左爲勝

千四百八十四番

左

具 親

かりそめのいほりも草のたひ枕夢こそあかれ野へのうたゝけ

右 勝

俊 成 卿 女

ふりにけり跡なけれどもつの國のなからの橋は名こそくちせれ

誰も皆聞わたるなる橋の名は此夢よりもけに残らん右勝

千四百八十五番

左 持

顯 昭

袖ぬらす木の下露もある物を涙おちそふすゝのかりふし

右

丹 後

山のはにいさふ月の影みてもふけぬる身こそかなしかりけれ

さやかなる光も見えずいく程と思ひわかれぬ月と露とは

仍持也

千四百八十六番

左 勝

女 房

朝夕にあふく心を猶てらせ涙もまづかに宮川の月

右

丹 後

わかか浦にかひなき藻屑かさつめて身さへくちめと思ひける哉

とにかくに心詞も及れすいともかしこき宮川の月無左右

右負也

千四百八十七番

左 勝

左 大 臣

君にかくあひぬる身こそ嬉しけれ名やばくせん代々の末まで

右 通具朝臣

此時にあふそうれしき世々の風聞しにまさるわかのうち波

代々といふもうれしと聞もそれなから朽せぬ名こそい

なれてきけ左勝

千四百八十八番

左 前權僧正

朝夕にみてもなつさふ山水のはやくも君につかへつるかな

右勝 家隆朝臣

うきながらあればそあへる君が世に數ならずとも身をば厭はし

山水にかきなかりてしさゝ浪はたれにもいかゝ立まさる

へき併左負也

千四百八十九番

左 公繼卿

うれしくも其人數のイになれきて跡マイをたつめるほり川の水

右勝 雅經

^{玉集}あはれとてゐらぬ山路はおくりきと人にはつげよ有明の月

いかばかり心の底にすみきけんみれば跡あるほり川の水

仍以右爲勝

千四百九十番

左 持公經卿

心あらん人は中々住ぬへし浦のとまやに世をつくしても

右 如實客得海寂蓮

見すしらぬもろこし舟の行ふまで世をふる道は八重の鹽かせ

あはれさをなにとへんと思まにもろこし舟の跡のし

らなみ但可爲持歟

千四百九十一番

左 季能卿

あさらけき月日が高くあふきつゝ年ふる身をはあたによは思ふ

右勝 家長

君か代に此ことわさは山城のとはにあひみん和歌のうち人

一すぢをいひなかつこそあはれな我君か代の和歌のう

らなみ以右爲勝

千四百九十二番

左 持宮内卿

身のうさをかくてもやみになしはつなあふく心をみくまの月

右 三宮

かきつくる藻くつないかい思らん浪になれたる和歌のうち人

みくまの月をあはれとみる程に又袖ぬらすわかのうら

波仍爲持

千四百九十三番

左 勝讚岐

老のなみなを立出るわかのうらにあはればかけよ住よしの神

右 内大臣

年をへてこしかたのみそしのほるゝあらましかはと思ふ人ゆへ

こしかたを忍ふもいかゝ老の波にあはれかくへきすみよ

しの神若可左勝歟

千四百九十四番

左 持小侍從

命こそうれしかりけれ和歌のうらの又人なみに立ましりぬる

右 思 良 良 卿

いなみしとわかのうら浪立ましり思ふあまりのもしは草哉

とにかくにしげく成ぬるうら浪の耳なれぬればめにまた

たれず爲持

千四百九十五番

左 持 隆 信 朝 臣

位山のほりたちにし稚業の道にまよひて老にけるかな

右 兼 宗 卿

いかで猶思ふ心をとむさまし道ある御代にあふ身とならば

あはれなるなふさ／＼の思ひ哉なをさりながら人にし

れつゝ可爲持也

千四百九十六番

左 持 有 家 朝 臣

おもふ事しほしなくさのはま千鳥跡こそかよへ和歌のうらほに

右 通 光 卿

われながら蘆邊をたつのさしもやはもくつをよする和歌の浦風

はま千鳥あしへのたつもおしなへておなし道なるわかの

うら哉仍持也

千四百九十七番

左 保 季 朝 臣

数ならぬ袖をそはつる君か代にあふうれしさをつゝみながらも

右 勝 釋 阿

いかにしてうき身ながらに君か代の千世の始のけふにあふらん

君か代の千世のはしめにくらふればけに数ならぬ袖とこ

そみれ以左爲貞

千四百九十八番

左 良 平

人なみにたち出ながら和歌の浦にかゝる藻屑はあらしと思ふ

右 勝 俊 成 卿 女

こきはなれ行月影もあはれなるむしあけの松の風の音哉

月に聞むしあけのまつ風の音やつねのうらには吹まき

るらん以右爲勝

千四百九十九番

左 具 親

^{續古今}いそのかみふるの中道立歸りむかしにかよふ大和ことの葉

右 勝 丹 後

君か代にとまらん名こそうれしければかなき鳥の跡とみるとも

磯のかみまことにふりて見ゆる哉とまらん鳥は跡有ぬへ

し仍右勝

千五百番

左 勝 顯 昭

思事今こそなけれ和歌のうらにまづむもくつも花さきにけり

右 越 前

年もへぬその月よみなたのみこし心のやみはいつかはるへき

君か代のひろきめくみにあひぬれば思ひもあらしやみも

はれなん仍持

勅なればなにはのことみなひれと

よしあしにこそなまよひぬれ

千五百番歌合卷第二十終

集外三十六歌仙

是はかけまくもかしこき 後水尾の上皇のおり居さ
 せ給ひし比の御すさひにして神なを日の直き御心に
 白妙の雲井の人は置せ給ひ御下司よりして世捨人等
 のやまと歌にかしこかりしを三十あまり六卿に撰は
 せ給ひて東福門院の御屏風の色帯におさせたまへり
 しを今世につたへなから長柄のはしの橋柱の波に朽
 なんも本意なくこたひ風齋老人とはかりて櫻木にう
 つしおのれ／＼同じこゝろのひとにたよりすみつか
 きのひさしく玉椿の八千代にもつたへてむとねかふ
 ことしかなり

左

安田貞雄花押

嶺炭竈

平 常 縁

たちのほろ煙ならずは炭かまをそこもいさやみねのしら雪

殘花

津 守 國 豊

よし野山とこるせきまでみしひとの散々になるはなのふる郷

山月入簾

淨 通 尼

秋の夜のつゆの玉たれひまをあらみもりくるものは山の端の月

春祝言

柴 屋 宗 長

青柳のなひくを人のこゝろにてみちある御代のはるそのときき

寄舟戀

月 村 齋 宗 碩

こかれ行ふれなかりたるおもひしてよらむ方なき君そつれなき

月前鴈

永 閑

きゝそむる雲井の鴈の聲よりもおとろかれぬる月のかげ哉

曙雪

沙 門 正 徹

しらさきの雲井遙かに飛きておのか羽こほす雪のあけほの

初逢戀

沙 門 正 廣

鈎麗の外にひとりや月のふけぬらむ夜こゝろのそでの涙たつれて

浦搦衣

耕 閑 齋 兼 裁

秋ふかくなるをのうらの蛸人はしはたれ衣いまやうつ覽

冬野

太 田 持 資

かり衣すそのゝ原の花すゝきはの見しかせもしもかれにけり

寒蘆風

三 好 長 慶

なにはかた入江にわたる風さえてあしの枯葉のおとそさむけき

旅宿叢

宗 規

風よせにあられたばしるさゝ枕ゆめもむすはぬ旅寐わひしき

闕雪

伊 達 政 宗

さいすとして誰かは越むあふ坂の關の戸うつむ夜半のしら雪

梅香留袖

兼 與

誰か袖に匂ひをふれて散残る色香すくなきにはの梅かえ

遠里鵲

里 見 玄 陣

遠かたにゆふつけ鳥の聲すなりいさそのさとに宿りとらまし

待花

佐川田昌俊

よし野山になまつ頃の朝な／＼心にかゝるみねのしら雲

山家初冬

尚 證

やま賤の朝けの煙うちしめりしうれしそらにふゆはきにけり

月思往事

木下長嘯

世々の人の月になかめしかたみそとおもへば／＼ぬるゝ袖哉

右

關月

種玉庵宗祇

清見かたまた明やらめ關の戸を誰ゆるせばか月のこゆ覽

月前述懷

沙門心敬

こしかたも歸るところもしらぬ身をおもへばそらにみする月哉

依聲驚夢

櫻井基佐

さびしさの種をそうえし宵々にゆめおとろかす庭の萩原

月前述懷

牡丹花宵栢

おもふらし櫻かさしゝみや人のかつらなをらぬ月のうらみは

山下燈

蛭川親當

くれて社人すむ庵もしられければた山かけのまとのともし火

曉神樂

安達冬康

うたふ夜のあか月ふかく聲ふけて神代なからのすゝの音哉

佛名夕

修江齋紹巴

夕々ほとけのみななとなへつゝつみもきえ行衣手のつゆ

初冬時雨

宗 牧

けふつゝに秋の時雨のあらましなをそらことにせぬ冬は來にけり

田鹿

細川玄旨

さすかまた小田もる賤も鹿の音の遠さかるなほしたひてや聞

行路時雨

沙門心前

かへりみるあとの山風ふきしよりやかて時雨のみらいそくらし

柳

毛利元就

あなやきのいとくり返すそのかみはたか小手卷のはしめ成らむ

閑居

北條氏康

中々にきよめぬ庭はちりもなしかせにまかする山の下庵

松間花

武田信玄

立ならふかひこそなけれやまさくら松に千とせの色はならはて

寄松祝

北條氏政

守れ猶昌にひかれてすみよしのまつちとせもよろつ代の春

河五月雨

今川氏真

よし野川瀬々のしら浪岩越てこすへにかゝる五月雨の雲

寄枕戀

里村昌胤

あはれともうくとも今はなれなしもしる人にせむ小夜の手枕

河邊寒月

小堀政一

かせさえてよせ來るなみのあともなし氷る入江のふゆの夜の月

月

松永貞徳

雪と見たばこよひの月にうからましょしや吉のゝ櫻なりとも

作者姓名

左方

平常緣

津守國豐

淨通尼

柴屋宗長

月村齋宗碩

永閑

釋正徹

釋正廣

耕閑齋兼載

太田持資

三好長慶

宗賴

伊達政宗

兼興

里見玄陳

佐川田昌俊

尙證

木下長嘯子

東下野守

津國住吉社人

足利將軍義晴公母堂

連歌師宗祇門人

連歌師

追考

東福寺書記

正徹和歌門人

連歌師蘆名氏

左衛門大夫入道道灌

修理大夫

追考

左京大夫

連歌師兼載門人

連歌師

永井信農家士佐川田喜六卜云

追考

若狹少將勝俊

右方

種玉菴宗祇

心敬

基佐

牡丹花宵柏

蜷川親當

安達冬康

紹巴

宗牧

細川玄旨

心前

毛利元就

北條氏康

武田信玄

北條氏政

今川氏真

昌叱

小堀政一

松永貞德

飯尾氏東野州門人

北嶺十住心院連歌師

櫻井中務丞連歌師

連歌師夢菴

新左衛門

三好長慶舍弟

松村氏連歌師

宗長子也

式部太夫藤孝二位法印

心敬門人

右馬頭

左京大夫

大膳大夫晴信

氏康子

式部太輔

里見氏連歌師

遠江守

細川玄旨和歌門人

右集外歌仙は近代歌仙とも云寛永の 太上皇御自撰にして詠歌は震筆を下し給ひ畫像は狩野蓮長に勅して畫かしめたまひしも雲上月宮の御事なれはしるへきに非ず人々の官職によりておろくに圖せしむ和歌は松永貞徳翁の男昌三子の廣澤長孝子に書て贈られしを我師六陽齋長雪居士まで相傳ありし秘本のまを許されて寫し置ぬ此歌仙の人々のめいほく昔の歌仙の人々にもおさく劣るましく有難くも覺侍りぬ今世たまくみる所の詠歌の寫書損不少原本をもて改め正して世に普く弘めむと思ふ事久して果さず爰に安田貞雄の主の力にてこたひ梓とはなしぬ年比のあらまし成て老の悦はしさになし時に寛なる政も八といふ年の霜ふり月の事に社あなれ

稻梁軒風齋

懷にまきおさめたる文迄もしらるゝ御代にあふかかしこき

元禄本云
右歌仙者依「東福門院之御懇望」爲龍慰被「染」宸筆「者也」

寛文五年二月下旬

交野内匠頭寫之

院御覽之後命狩野蓮長被「製」畫圖「與」各詠「合」社乎

山井圖書定量記之

慶長千首和歌 慶長十年九月 禁裏御會

春二百首

立春朝

御製(後陽成院)

さほ姫の霞の衣たちかへる春とはしるき朝ほらけかな

立春天

素然

君か代は猶のとかにと久方の空もかすみて春や立らん

立春日

同

今朝のあさけ天照す日の光より四方も曇らぬ春はきにけり

立春風

信

尹

あふ坂の關吹こゆる山風の音羽の里も春やたつらん

立春霞

言

緒

空もまつ春やきぬらん今朝はもや霞と見ゆる四方の山の端

立春雲

實

益

鳥か音に明行空は長閑にて雲路まとはす春や立らん

立春雪

總

光

今朝きけは風に風に吹かへて雪のうちに春や立らん

立春氷

道

勝

吹もまた去年の風に音羽川水のひまに春や立らん

立春水

智

仁

あら玉の春たつ今朝の谷の水に君か千とせの契りむすはん

立春都

時

直

山の端の霞にみせて九重の空はゆたかに春のたつかな
早春山 秀 直

春の色はまたそれとしも分れぬを先山の端の霞そめぬる
早春關 雅 朝

相坂は春の越來る關路にて今朝は霞の色にあげゆく
早春川 隆 尙

立かへる春そと今やいはた川水とけゆく水のしらなみ
早春湖 有 廣

春はまた浅き汀と唐崎の松にもかすみ色そすくなき
早春浦 最 胤

春はまた幾日もあらぬ空よりも氷吹とく志賀の浦風
野子日 實 顯

宮人のころもの袖も紫の野邊にむれゐていく子日かな
子日松 季 繼

引かふる子日の松のふかみとり千年の春の色そこもれる
子日祝 茶 地 丸

ひかぬより千年の影と見ゆる哉子日の野邊の松の縁に
山霞 光 廣

なかめやるおもかけ消て此頃はまちかき山の霞をそ見る
嶺霞 通 村

咲ぬへき比とはなきを春といへは嶺の霞を花かとそみる
野霞 道 勝

春日野やたとる／＼も分まふ袖は霞とひかれてそ行
關霞 爲 満

あふ坂や關のこなたの杉村につたへし雲やまつ霞むらん
徑霞 時 慶

詠めやる道は絶しを行人の袖にさほらぬ霞なるらん
橋霞 兼 勝

春風のとなえみせつゝ杉むらも霞にこもるふるのたか橋
江霞

難波江や音も長閑に浪の上の霞をくゝるあまの釣舟
瀧霞 季 繼

春霞吹とく風に音羽山瀧のしらいと亂れそふらし
河霞 秀 直

さすさはのよるせもなにと白浪や霞こめたる宇治の川長
海霞 定 照

ふ佐の海や浪路を渡る舟人も春は霞や分^{わか}まふふらん
湖霞 道 勝

朝ほらけ國津みかみのうら舟も霞にきゆる末のしら浪
濱霞 永 孝

もしはやく海人の住家もそこなく明る濱へは霞立なり
嶋霞 素 然

霞てはうつさん筆のあともなし名のみ繪嶋の春の明ほの
波霞 總 光

明ぬれとしはしまふ舟人の宇治の渡りにたつ霞哉
里霞 基 任

柴の戸も霞の下に埋れてなを奥ふかし春の山さと
舊巢鶯 實 條

春淺きこゝろをしりて谷の戸のふるすを出ぬ鶯の聲

初鶯 雅 庸

千里にも鳴て春をや告ぬらん今朝ほこるふる鶯の聲

雪中鶯

聲はまた雪のふるえの梅か枝になれてもうとき鶯の聲

曉鶯 智 仁

れやちかきやとりしられて曉の枕よりきくうくひすの聲

朝鶯 光 廣

うち霞春の軒端の朝日影のとかにうつる鶯の聲

夕鶯 宗 勝

夕日影うつろふかたのくれ竹になれつゝさなく鶯の聲

里鶯 秀 賢

春寒さかた山里も梅かゝをとめてやきなく鶯の聲

山家鶯

山里は春さへ残る朝霧にむすほゝれたるうくひすの聲

竹鶯 信 尹

朝なきは植しかきれの吳竹のよことにかふふ鶯の聲

寢覺鶯 時 慶

竹ちかき床の寢覺のさひしきになれて鳴音や老の鶯

野若菜 雅 朝

春淺き野への雪間のわかれなもつみは残さて歸る諸人

原若菜 爲 親

いつる日のあしたの原は分てまつ雪間にしけきわかななそつむ

澤若菜 實 益

けふはまつ野澤につもる白雪の消る方より若菜つみてん

光 豊

うす水まつ解そむる澤邊こそそに尋ねぬわかれ也けれ

田若菜 同

すきかへす袖にはあらて山陰のあら田の面のわかなつむなり

岡殘雪 信 尹

光さす雪間よりしも緑そふ松はならづの岡のなちこち

草殘雪 雅 賢

日の移る交野は草の絶々にもえ出殘る春の泡雪

木殘雪 信 尹

み山木にまた其まゝの白雪の深きに淺き春を見へける

餘寒月

大空は去年の嵐や殘るらん見るかけ寒き春の夜の月

餘寒風 永 孝

吹とふく夜の間の風の名残にやなのへは雲も春はさゆらん

餘寒水 尊 政

春しらぬみ山は風もななをさえて水の下にしつむ川音

梅雪 良 恕

消るともはらはておらん梅かゝの雪もひとつに匂ふ春風

梅風 兼 勝

軒ちかきこすにもれいる風ふけてたならぬ袖も匂ふ梅か香

夜梅 雅 庸

明るかともまたなき出ぬ白妙に咲そふ梅の花の下ふし

故郷梅 之 仲

故郷となりにし軒の梅かゝも春やむかしと花そ咲そふ

里梅 雅 庸

暮てたに道もたとらぬ咲梅の香なとめてこそ小泊瀬の里

庭梅 爲 満

あかなくも鶯のねにさそはれて軒端の梅をしはしたにみむ

簷梅 時 慶

外にこそ匂じなとめて立よらぬ我すみならす軒の梅か香

隣家梅 尊 政

中垣のへたてにあれとかほりきてとなりの花もわか宿の梅

梅移水 同

梅の花うつろふ蔭は立さらしをられぬ水に袖ひたすとも

梅香 光 豊

咲出る一本ゆへに花さかり梢も梅の香ににほふなり

梅薰枕 智 仁

おのつからふかき匂じもふれにけり手枕の野の梅の下ふし

折梅 實 條

折取をつらしとのみそ吹をくる匂じもふかき梅の下風

若木梅 定 照

軒ちかきわか木の梅は今年より色香の春や知られそむらん

紅梅 實 條

夕日影さすかたは猶さく梅のくれなるふかく色やそふらん

落梅 素 然

冬木より咲そめし梅はゆきなからおちて衣に匂ふ春風

柳露

春風はさもこそあらめ朝なノ露にもなひく青柳の糸

池柳

朝春雨

信

尹

春ことに柳の髪も亂れてやうつろふ池のかゝみなるらん

門柳

眞

恕

青柳をうつし植たる門の前の縁にふかく誰かすむらん

岸柳

谷春雨

雅

庸

西東川邊の水に春の色のいたりいたらぬ岸の青柳

河柳

信

尹

早川の岸のよとみにくりためてかけもなかれぬ青柳の糸

路若草

光

廣

春にまつもえ出そむる若草を道行人やかてむすはむ

岡早麩

時

慶

もえ出る比は岡邊の里人の外にもとめすおるわらひ哉

樵路早麩

爲

満

くるゝ日なをそきても又こる柴に手折そへたる道の早麩

山春月

雅

庸

曉の雪にかたふく影はおしきても霞む山のぼの月

關春月

秀

直

名にしむふ空はかこたし分て猶霞の關の春の夜の月

江春月

信

尹

たなやかに舟漕とめて三嶋江や浜にかすめる有明の月

春曉月

智

仁

霞そふ空かとみえし明方の影うすくなる春のよの月

春月幽

爲

勝

哀たれ春といひげん秋を置て時こそ有けれ霞むよの月

朝春雨

信

尹

降つみし夜の間の雪も軒に消て今朝春雨の音をそへけり

夕春雨

光

廣

さひしさの秋は程なく夕暮をなめ侘ぬる春雨の空

谷春雨

雅

庸

緑さふる色を三谷の草木まで恵みにもれぬ春雨そふる

野春雨

季

繼

旅衣行衛そ遠き大江山いく野の道の春雨の空

春春雨

爲

満

さなきたに春もさひし草の庵に猶音つるゝ駒はうらめし

春駒

同

春雨のはるゝ市より青み出る草葉になれて駒いはふなり

岡雉

季

賢

名にしおふ入日の岡をたつ雉子朝鷹人をよきて鳴也

野雲雀

兼

勝

野をかけて霞こめたる半天にあかるひにりの聲かすか也

路雲雀

教

利

くるゝまで野路のゆきゝやしけかゝん空に雲雀の聲のみそなく

歸鷹知春

信

尹

いつしかに秋こし嶺にかへる山南をあとの天津鷹かれ

曉歸鷹

眞

恕

したふにもつれなく見えて行鷹の名残かすめる有明の空

夕歸鷹

兼

勝

天津鴈夕の雲路別れつゝかすみの關もさはらてそゆく

夜歸鴈

言

緒

かへるさは夜をこめてたにいそくらん雲路にまよふ鴈の一行

歸鴈連雲

實

顯

遙なる行衛やまよふ白雲のこなたかなたに歸る鴈かれ

嶺歸鴈

素

然

分てこし峰の朝霧春は又はれぬ霞にかへるかりかれ

海歸鴈

爲

滿

浦遠くなきたる朝は漕舟のほかに歸る鴈の一つら

遠歸鴈

同

したふにも雲をへたてゝかへる山なにそはいそく天津鴈かれ

歸鴈似字

雅

庸

玉札をかきつられしも見るばかり夕の空にかへるかりかれ

歸鴈幽

雲に先つはさは消てかへる鴈残るも聲や霞ゆくらん

春山

道

勝

かすみつゝ花なき山も有明の春こそはるの緑なりけれ

春野

最

胤

わきてその秋は草葉の花に見む野へもひとつの下燃の色

春關

基

任

霞行汐のひかゑの末かけてあかね詠めや須磨の關守

春行

良

恕

音羽川氷も岩にうちいてゝ涙の花さく春の色かな

春海

爲

滿

行衛なき舟のなかめや是ならん今朝は霞のうらの初嶋

野遊

宗

勝

もりにしも立歸る哉すみれ草摘つゝ野へに春日くらして

遊絲

實

條

長閑なる空にはまよふ色もなしと心のまにあそふいとゆふ

待花

永

孝

あくかるゝ心はあやし年々によつたならびの花としりても

棧花

素

然

うへしうへに幾木の花もあさくらん吉野の春をおもひしりても

尋花

道

勝

尋れ行跡より花のおもかけは道さまたけの嶺のしら雲

初花

光

廣

待得ては猶そまたるゝ山櫻又たくひなき花の色かな

見花

信

尹

心なを花にちらさて見る程に風ふかぬよの例をそしる

翫花

雅

庸

色に香に染てもあがす木かくれに花を見はやす九重の袖

折花

秀

賢

山守のゆるすこゝろそ哀なるおらぬも花の片枝ちるより

突花

最

胤

ましはれる心の色のほとゝをわきてしるやと花にまはゆき

曉花

實

倅

夜を殘す空は空にて咲花のおほふ軒端を先しらみゆく

朝花

永

孝

玉簾また捲あへぬ袖にさへ匂ひはあまる花の朝風

夕花

雅

庸

なめして永き日影もおもほへぬ花に待出る夕月夜哉

夜花

秀

直

暮るまで見るかうちより山の端の月もさしてふ花の色哉

山花

尊

政

しほりして入そあやなき奥山の花の匂ひをしるへとやせん

嶺花

良

恕

白雲のかゝる嶺まで春はたゝおなし櫻の盛ともみむ

谷花

爲

親

水上の春もやすふの谷川になかれいつらん花のしら浪

岡花

智

仁

雪霜の後あらはるゝ程そなき岡邊の松の花にむもれて

杜花

春毎に信太の森のさくら花千枝に咲そふ色としもかな

野花

道

勝

千はやふる神代の春も忍はれて三笠の野邊の花に暮しつ

関花

雅

庸

へたて見し都さくらと思ひ出ぬ咲そふ花のしら川の関

流花

通

村

雲井より落くる瀧と見ゆるもや高れの花のさかり成らん

禁中花

尊

政

かけふかくいやかさなりて花さかりおほふは雲の上には有らん

社頭花

之

仲

色ふかく花のひかりの猶そひて春は櫻の宮居たいしき

古寺花

信

尹

咲と見る枝より花のふる寺の軒の忍ふそ香にみたれつゝ

故郷花

素

然

ひとりのみなかむる花の夕暮に身を故郷の春やしるらん

里花

良

恕

さく比は浪なれてすむ里の海人も花にゆかしき心成らん

山家花

道

勝

さく比は都のみかは柴の戸も花見かてらの春のともない

庭花

智

仁

人はまた咲ともしらぬ庭の面の花を尋ねて春風を吹

閑居花

言

緒

奥ふかきたゝひとりの屏までわかつてや春の花は咲らん

花雲

智

仁

葛城や嶺のしら雲かさなるとよそには見ゆる花さかり哉

花雪

隆

尙

さきそて下なれもせぬ色なれや梢にあまる花のしら雪

花枝

花梢

爲

満

にはふより咲とやしらん吉野山花の梢に見へずは有とも

花本

宗

勝

散はつる跡もしたはむみゝし野やなれてもあかね花の木の本

花根

定

照

又もこん春にも契れ年にのみ棺の花は根にかへれとも

花挿頭

時直

手折るなも人なとかめそ花の枝をかさしにさして家つとにせん

花手向

兼勝

花ふさをさりし佛の手向とて朝な夕なにつみやかふらん

花廊

實顯

行春の折しも麻と散花はいつれの神の手向成らん

花袂

雅庸

山風の吹くるかたに大原や折てかへさの花のたもと

花衣

素然

心にはよしあかすとも花の枝苔の衣に折はやつさし

花鏡

實益

池水も花にこゝろやうつすらん鏡となりて影をやとせは

花錦

實益

三吉野は花のにしきと成りにけりきて見る人も今はさかりと

花匂

隆尙

吹風にうつりかはして咲花のあさき匂ひは一木たになし

花色

爲満

たをやめのそむる衣と見るまてに紅にはふ花の夕はへ

花便

時宜

三よしのゝ里より奥も咲花の便まつ聞そしつ心なき

花主

實條

春来てはとばれぬかたもとばるやと花を主になしてこそまて

花梯

光廣

さく花の面影見せて春風も匂ふはかりの峰のしらくも

花形見

素然

散ぬれば花の紀念のかひもなし春ならぬ色の花の白雲

惜花

雅賢

かれてより木末の花そおしまるゝちらぬも春のかきりと思へは

落花

尊政

散花をまなくもさそふ山風や消残る雪を又ふゝくらん

殘花

素然

咲残る一木の色そ見せてける四方の花をも暮る春をも

三月三日

雅朝

あひにあひて彌生のけふの花かつらそれとはかりに咲る桃哉

桃花

素然

花の色はもゝにはあらて三ちとせに咲てふ種や仙人の宿

梨花

隆尙

雨はるゝ軒のつまなし打ちりてこそひまより風そもりくる

山田苗代

山水を心のまゝにせき入てつくるや賤か小田の苗代

路苗代

實益

賤のおか道のわき田の苗代に水せき入る手をもたゆます

河苗代

實條

おのつからゆく川水をせき入て春の苗代末はるかなり

夕蛙

同

みさひゐて色めもわかす暮る日の野澤の蛙聲かすかなり

田蛙

定瀬

すきかへす春のあら田の水口に聲もすたきて蛙なく也

野葦

有

廣

袖にたゝ露も亂れて春雨のふる野の原にすみれつむ也

夜葦

實

益

我宿の庭におふてふつほすみれ花咲まてはつましと思ふ

摘葦

雅

庸

けふこに入野はいかて里人のつみもつくさぬすみれ成らん

松下躑躅

信

尹

石の中のおもひの色の下つゝしましほる松もけふりなつ也

躑躅紅

定

熙

春もはやくるゝとしりて岩つゝし紅ふかき花そささける

池杜若

實

顯

花咲て隔そ見するかきつばた芦の葉まじる池の汀に

澤杜若

爲

溝

せりつみし野澤の水に咲出ておりを隔つる杜若かな

欸冬露

言

緒

家つゝとおもひながらも山吹を手折ればぬるゝ露の玉川

夕欸冬

兼

勝

夕霞はれわたるより吉野川浪の底までうつる山吹

路欸冬

實

條

行袖の露もこほれて匂ふなり春の名残の山吹の花

池欸冬

總

光

池水の底まですみて匂ふらし浪に色ある欸冬の花

川欸冬

大井川あせきの浪の山吹の花色衣かけてほすなり

嶋欸冬

爲

親

橘の小嶋にさける山吹は色に匂ひのなをもそふらし

岸欸冬

敦

利

清瀧やきしの山吹さきそひてよせくる浪も色やそふらん

里欸冬

信

尹

いはぬ色に咲とはすれと玉川の里の名のりはしるき山吹

庭欸冬

光

豐

庭の面は雨のなこりの山吹の花はちらぬも色そしほるゝ

籬欸冬

總

光

おらて見む籬の外に咲あまりおきみたれたる山吹の露

夕藤

爲

滿

春日山夕は雲と見えてけり紫にはふまつ藤のみ

岡藤

最

胤

梢にも咲かゝりつゝ風かよふ岡邊の松をこゆる藤浪

池藤

實

顯

水の面に春を残してさくよりもやかてうつるふ池の藤のみ

江藤

爲

滿

住の江や岸根の水の底までうつる梢にかゝる藤浪

浦藤

更

恕

底までうつるふ色の藤が枝をおしてはいかゝ田子の浦浪

岸藤

季

繼

住吉のきしれに藤の咲しより水の外なる浪そかゝれる

松藤

永

孝

松の葉の色こそわかぬ咲藤の花にもれたる枝しなけれは

春欲暮

雅 朝

花鳥の色にも音にも惜まるゝ春も今はた日數すくなき

暮春月

敦 利

暮て行なこりやはなき春の夜も有明方の山の端の月

暮春雪

有 廣

しはしたゝ暮行春を立こめていくへもかれ山の端の雲

暮春霞

實 益

いつしかに暮行春の山の端も霞もうすく棚引にけり

暮春鐘

有 廣

行春のあはれしれとや夕暮の空もかすみて鐘ひいくらん

留春不駐

道 勝

花はちり鳥も古巢に行春の空にかすみのせきもりもかな

惜三月盡

通 村

留めえぬ春としりても今日の日のくるゝをいかて惜まさらまし

三月盡夕

暮て行春の餘波もけふのみと猶したはるゝ入相の鐘

三月盡夜

眞 恕

花鳥になれしまよひも限り有今夜はあたにかてれなまし

潤三月盡

花鳥の色香にあかて惜む哉後のやよひのけふのわかれな

夏百首

首夏

宗

勝

ぬきかふるけふのならひと惜まるゝ心そふかき花染の袖

朝更衣

きのふ暮し春の名残の今朝なたにしはしかへぬ衣ともかな

更衣惜春

花染にそめし衣も立かへておしむかひなき春の色かな

餘花

木隠れをしらてや風の残すらん若葉の中に交る一花

新樹

雅

朝

夏山の梢は露のそめしより緑の色も雪とぞ見る

路卯花

同

卯花の咲る近頃はくれはてゝ雪にそかへる小野の細道

籬卯花

實

條

さかり今と色もたはに降雪の色をかされて咲る卯花

田家卯花

時

慶

かきねには月をまかひて白妙に卯花さける小山田の庵

卯花似雪

之

仲

消あへぬ雪かとぞ見る山陰の卯花かこふ賤か棲む

卯花似月

實

顯

卯花の咲ぬる時は玉川やこの里のみの月かとぞ見る

榮

之

仲

諸人の袖をつられて玉簾かくるあふひの比はきにけり

待郭公

光

鹽

心あらはまたれすとても郭公なかつては過しむらさめの空

尋郭公

爲

親

明は又尋れやゆかむほといきす聲する里の遠の一むら

人傳郭公

道

勝

人とはい人つてならぬ一聲とこたへまほしきほといきす哉

初聞郭公

智

仁

此比と待しものかと初聲におとるかさるゝほといきす哉

郭公未遍

爲

親

聲もまた稀なるころは過行もなちかへりなけ山郭公

月前郭公

信

尹

郭公聲いやたかく成にけり月のかつらなやとりとや行

雲外郭公

雅

賢

明方の雲をはるかにへたてきて軒端の山になく時鳥

雨中郭公

長

恕

月にこそよしつらくとも郭公雨の夕の一聲もかな

曉郭公

定

照

ほといきす明ほのかけて鳴聲や寝ぬよの夢と紛れ行らん

曙郭公

尊

政

郭公待し夕はつれなくも夢のうちなる明ほのい聲

朝郭公

秀

賢

朝附日はつかにくもる村雨に一聲たると山ほといきす

夕郭公

通

村

ほといきす雲間に名のる一聲もあやなくまよふ夕暮の空

夜郭公

教

利

あかす猶百千度なげほといきす夢路おとろく夜半の一聲

山郭公

永

孝

行かたはいつく成らんむらさめの空はくらふの山ほといきす

杜郭公

實

條

聲を猶おしまてもなけ郭公もりの下道くるゝ夕に

岡郭公

道

勝

ほといきすきかすはゆかし片岡の杜の下道小夜は更とも

野郭公

兼

勝

川つらの浪にぬし夜の舟とめて明る淀野にきく時鳥

原郭公

雅

賢

一聲の名残なそしたふ郭公眞野の萱原分もつくさて

關郭公

有

廣

あふ坂の關路越行旅人なかついさめてや鳴ほといきす

浦郭公

實

益

ほといきす須磨の浦半の浪かけて聲をおします百千度なけ

渡郭公

智

仁

さす舟のさほにもたへて郭公それかとそきく淀の渡りに

夢中郭公

有

廣

きいつともおもひ定めず時鳥只一のたゝちは

寢覺時鳥

宗

條

ね覺して物に紛れぬ聞きたにも幽なりけり山ほといきす

獨聞郭公

永

孝

詠めつゝいとりたへぬる草の戸に哀をそへなく郭公

郭公幽

秀直

しはしたにしたふかうちの一聲も空に消行山ほとゝきす

田家早苗

光豊

風たゆむ山田の庵に雨過てなひく早苗におもき朝露

急早苗

實條

秋来てやまつなひかまし小山田の中にもいそぐ賤が早苗は

早苗多

さなへとる伏見の小田の遠近の縁につゝく水の涼しさ

池菖蒲

通村

池水のふかき心もひきそふるけふのあやめのれとぞしらるゝ

沼菖蒲

兼勝

いとしく暮行方はかくれぬの中にあやめも香にわくるらん

菖蒲蒲

定熙

根もふかき池の汀のあやめ草菖蒲残したる方ですくなき

蘆橋薰風

爲滿

玉すたれ透間もとめて吹風に花橋そにほひことなる

雨中蘆橋

兼勝

風ふるゝ軒端の雨の音つれてむかし忘れすにほふ立花

簾蘆橋

光豊

五月雨の軒の雲に立花の色さへ香さへしめる夕ぐれ

櫻

花さけるあふちの梢雨さきて雲ゐる軒に風かほる也

夜五月雨

兼勝

つれゝの庵のうちはみしか夜もあくる程なる五月雨の比

山五月雨

爲親

五月雨のそらは明行空ならわかれかれたる山の端の雲

杣五月雨

信尹

五月雨にたてにし音の泌も朽木の杣も絶やはつらん

橋五月雨

雅賢

かきくらし日數猶ふる五月雨に往來絶たる佐野の舟はし

江五月雨

秀賢

江の村も嶋となるまで浪よせて見るめそかはる五月雨の空

瀧五月雨

尊政

水上ばそこもしらす五月雨に瀧の音せぬ山陰もなし

河五月雨

有廣

晴ぬへき空をいつとか松浦川かは音たかし五月雨の比

湖五月雨

隆尙

五月雨の雲かさなりて志賀の浦やむかふ鏡の山もしられす

浦五月雨

之仲

旅衣しほれそひたる五月雨にあまりなるみの浦のさひしさ

古宅五月雨

五月雨のふるき軒端は朽そひて音こそたへぬ露も雫も

夜水鷄

時慶

端居してやゝ更る夜の月影にたくひやはある水鷄鳴聲

夏夜

雅庸

影はやき月の御舟の入さをやしたひて見るも短夜の空

雲間夏月

信尹

ところゝ月の下行浮雲はむら消見する夏の夜の月

水上夏月

最 胤

涼しやと見る木かくれを行水かけやけく月の影なさそひそ

樹陰夏月

道 勝

涼しさに袖にしられて分 行 けは月影ながら森のしたつゆ

夏月涼

教 利

しけりあふ竹の末葉の露の上に宿れる月の影の涼しき

夏月易明

素 然

難波かた芦のふしの間程もなくかりねに明る夏の花の月

瞿麥露

尊 政

手ふるゝにこほれやせんと塵をたに拂はて置る床夏の露

庭羅夢

隆 尙

故郷の庭のなてしこ塵をたにすへしと今は誰はらふらん

夏草露

秀 直

草ふかみ分入袖は夏にしも秋とはかりの野への夕露

杜夏草

實 顯

涼しさに分こそあかね秋もやゝちかき氣色の杜の下草

野夏草

季 繼

分行も跡なき野への夏草にかへる道をも又わたとらん

徑夏草

實 條

さすか又道ひとすしは曉りけり夏野の草の茂りあひても

庭夏草

光 廣

稀に見はあらぬ所とたとるまで茂りをひたる庭の夏草

夏山

兼 勝

休らふにあつき日影も夏山のおのへつゝきそ茂りそひ行

夏野

真 恕

茂りあふ野中の道は花にいつわけんともなき露の草むら

照射

基 任

夏山やしけみはそこますらおは幾夜おくしの影を見すらん

鵜河

最 胤

後の世のやみちしかゝ鵜飼舟はしかゝりのける間にたに

夜螢

通 村

更る夜のあしやの里のいさり火に影あらそひてとふはたる哉

橋螢

隆 尙

立ならず橋の下水くれそめて螢みたるゝ風の涼しさ

水上螢

季 繼

雨はるゝ流すみ行澤水に影もみたれて螢とふなり

池螢

實 益

うちなひく池の芦間をほのゝと風に亂れて螢とひかふ

江螢

定 熙

おのかその影をも友と難波江の浪にみたれて行螢かな

澤螢

基 任

かひなしやすたく螢の澤水にもゆるおもひをけたぬ螢は

浦螢

智 仁

暮ぬ間は葉かくれなりし芦の屋の浦に亂れてとふ螢かな

草螢

尊 政

夕風の吹も亂れて夏草の露かと見しは螢なりけり

螢似露

雅 朝

置露のちるかと思れば吳竹の葉分の風に螢とふなり

盤似玉

永 孝

くれ竹の葉分の露と白玉と光まかへてとふ螢かな

蚊遣火

爲 滿

かきつゝて宿にふすふる芥火の煙につれて遠き蚊の聲

垣夕顔

時 宜

たそかれの比にもなれば草垣にひもとく花の夕顔の露

池蓮

音 緒

雨過る跡より風の音つれて池のはちすの露としほるゝ

氷室

同

立よれば夏こそなげれ氷室山猶下さゆるこゝちのみして

夕立風

雅 庸

大江山雲吹をくる風はやみいく野にすくる夕立の雲

夕立雲

定 熙

夕立の雲をさそひておほえ山いく野の末や風きほふらん

山夕立

實 益

風あらくむら雲まよひ見れば又と山のみねにすくる夕立

河夕立

基 任

まさりけるみかさも浪は川岸に濁るばかりの夕立のおと

夕立早過

宗 勝

夕立の空かきくもり暮るかと思れば外山に残る日の影

杜蟬

總 光

白雨の音にまかへて蟬の鳴森の木陰に立そやするふ

樹陰蟬

松下泉

雅 賢

岩かれのなかれあまたにせき入て砌すゝしき松の木かくれ

夕納涼

光 廣

夏の日にあつさばするゝ夕露は木陰の外も立そやするゝ

樹陰納涼

爲 滿

降雨の名残涼しく暮るまで立こそねるれ木々の下露

納涼忘度

基 任

夕すゝみ夏をわすれて秋ふかき月をそいそくもりの下風

六月抜

素 然

ぬさなかつみそきは夏のかきりにて身のうき瀬々や猶残らまし

秋二百首

立秋朝

實

顯

玉さゝの一夜へたてゝ朝またき秋きにけりとをける白露

立秋天

良

恕

天つたふひかりも今朝は秋さぬと誰里まては時を分らん

立秋日

實

益

こゝろより秋や立らし今朝は又いつるひかりの色もかはれる

立秋風

兼

勝

久かたの空に入目のかたふきて西吹風に秋やたつらん

立秋露

雅

賢

淺ちふや秋立くれは袖に又かつゝ露のむすひそめける

初秋曉

信

尹

涼しさを秋くるよひはおもひあへず風身にしめる明ほのゝ空

初秋夕

敦

利

昨日けふはや音かへて吹風の身にしみそむる秋の夕くれ

初秋夜

秀

賢

くるゝまはあつさに秋もしられぬをおとろかしけり床の小夜風

初秋雲

爲

滿

暑さなもよそのみ空にもよほして秋とて見ゆる雲の一むら

初秋衣

時

直

葛の葉のうらめつらしき衣手にふるゝも涼し秋の初風

待七夕

隆

尚

暮ぬ間のけふの空にも七夕の千とせふるてふおもひなやせん

七夕雲

實

條

こゝろあらは立そひつゝも七夕のわかれなしたへ空の浮雲

七夕霧

最

胤

七夕のあふ夜やいそく夕霧の先立わたるかさゝきの橋

七夕橋

隆

尚

天の川紅葉の橋の色に出て忍ふともなきほしあいの空

七夕衣

わかれ行星の契りそあはれるなる秋さり衣こるもへずして

七夕船

總

光

一とせをおくりしよりもけふは

七夕後朝

通

村

七夕のこゝろよいかゝ銀河とをきわたり今朝は成ぬる

曉露

之

仲

稻荷守山田の庵の露の間もいなれすなくる曉の空

朝露

實

益

秋の野はすゝき蒔蕘みたれあひて朝露ふかくなきにける哉

夕露

有

廣

夕暮は草葉も物を思ひ出やしほるゝ色に露の置らん

夜露

爲

滿

白露の置そふまゝに月清みよるは見よとや玉しきの庭

野露

基

任

哀とも誰かこゝろをなく露のあたの大野のあたにちるらし

原露

光

豐

やゝさむあしたの原は名のみして夕もふかく露や置らん

徑露

雅

庸

故鄉露

秀

賢

庵露

總

光

庭露

雅

賢

草露

爲

滿

淺茅露

素

然

苔露

敬

利

袖露

兼

勝

枕露

秀

直

夕萩

言

緒

夜萩

定

熙

江萩

爲

滿

誰袖か先分て入る跡ならんこほれし野への道の朝露
蓬生も浅茅もかるゝ故郷は露の色さへなき所なき
秋風のたゆる跡より置そひて露のもり入原のかり庵
庭の面は影さやかなる夜半の月に光をみかく露の白玉
折を得て秋の物とや置つらん草葉にあまる今朝の白露
とふ人の有ともわけやかれてまし名のみ浅茅か庵の夕露
草も木も色かへ行をはいかにして昔路は露にみとりそふらん
萩すゝき分る夕はこほれても又やなくらん袖の上の露
忘れしなかりれせし野の女郎花亂れあひたる露の手枕
夕されば軒端の萩の聲たてゝおとろかれぬるうたいの夢
秋の夜はまた床なれぬうたいに聞もならはぬ萩の音哉
俄にも汐の入江の萩の葉の音こそかはれ浪やこゆらん

庭萩

敬

利

庭萩

尊

政

野萩

實

顯

行路萩

言

緒

河萩

尊

政

崎萩

時

慶

庭萩

最

胤

野女郎花

雅

庸

女郎花庭風

智

仁

徑女郎花

尊

政

岡薄

光

廣

原薄

長

恕

庭の面にそよき立つゝうたいの夢おとろかす萩の上の露
夕暮の秋の哀そたゝならぬ軒端の萩の聲聞しより
ちらめ聞をいかに見すてゝかへらましあの大野の萩の夕露
色もなきあさの衣も秋の野を分行袖や萩か花すり
萩かえの露はちりきて色々にくたくる野路の玉川の浪
はる／＼と露を分來てけふそ日に見そめの崎の秋萩の花
さなしかの聲もよかさに隔つなようへ置萩の花のさかりは
風かふふ末はあたにや女郎花くるゝさか野のなひき伏らん
秋風になひくをみれば名にしおふあたの大野の女郎花かな
露ふかき道をは分し女郎花なまめきたててゝかけの茂きに
穗にはまた出ぬものから白露のおかへのすゝき誰招くらん
亂れ行小笹か原の白露の玉をつらぬく糸すゝき哉

徑薄

雅

朝

野をとなみ茂るをまゝに穗に出て尾花か末の道ぞ絶行

岡薊萱

時

直

岡野邊やしらにしほれなみよるは誰ふみ分し跡のかるかや

薊萱亂風

爲

親

なひくなもそのまゝなれて秋風の吹いたしたる野へのなる萱

庭薊萱

尊

政

うつろへる薄か袖にかくされて露も色なき庭の薊萱

蘭蕙風

雅

庸

秋風の吹より花の百種に匂ひを分るふしはかまかな

蘭露

時

慶

分行はうちける露に袖も又おなし匂ひの藤はかまかな

野蘭

道

勝

露にけさはころひ出る藤はかま誰野を分てぬしと成らん

薊萱

永

孝

草ふかき芭のうちは消やうて露をさかりの朝かほの花

曉虫

明かたの秋のれさめなこゝひて涙もよほす虫の聲々

夕虫

光

豐

たへかめる秋の夕のさひしさをなれもしりてや虫の鳴らん

夜虫

實

條

更行けば霜ふかくなる秋の夜をうらみかほにも虫や鳴らん

野虫

信

尹

百草の花にはなちてわた殿の西をさか野に移す虫の音

原虫

道

勝

淺茅原色つく露のさかりにもふり出かたきすゝ虫の聲

徑虫

右

廣

したひつゝ猶やきかまし春日野のなとろの道の松虫の聲

庵虫

露

蒨

なくむしも秋の哀やそへぬらんをきそふ露の草深き庵

庭虫

光

廣

百草の秋の花野をおのつから砌にうつむ松むしの聲

閨虫

尊

政

更ぬれば身にしみて聞れやの内に入かと近き虫の聲々

聞虫

永

孝

虫の音にさそはれきつゝ諸人もくるゝさか野を分も残さず

曉初鷹

總

光

大かたの秋もかなしき曉にあはれもよほす初鷹の聲

夕初雁

光

豐

近なるも夕ある雲の山の端に翅はきゆるはつ鷹の聲

夜初鷹

雲間初鷹

最

胤

幾重こしられぬ越の嶺の雲を分きて今朝は初鷹の聲

山初鷹

永

孝

夢さます枕の山の明ほのにうらめつらしきはつ鷹の聲

嶺初鷹

之

仲

常世よりいそく心や筑波根の嶺とひこゆるはつ鷹の聲

遠初鴈

同

あまとふはそれと見えしも初鴈のつはき消行秋の夕暮

近初鴈

信

月

待よはりしばしまとろむ鳥羽玉の夢路に近き初鴈の聲

初聞鴈

雅

庸

いかにして秋霧深き雲の上に迷はて來つる初鴈の聲

初鴈幽

素

然

秋風に雲間の聲そほのかなる先くる鴈の友やすくなき

朝鴈

智

仁

さなしかのゆきては歸る今朝とてやつれなき妻に鳴音成らん

夜鴈

實

條

暮われは秋のおもひを野邊に猶絶すしもなく掉鹿の聲

夕鹿

光

豐

長き夜もかきりにあるを聲こめて明方しらぬ小男鹿の聲

山鹿

雅

庸

秋の夜や明ほのならし山遠く野へより歸るさなしかの聲

谷鹿

素

然

谷ふかみ猶夜を残す霧のうちに今朝も妻とふ掉鹿の聲

岡鹿

總

光

暮われは端山出つゝ岡こえの道をふしとに男鹿鳴也

野鹿

兼

勝

里近き人けいとはすなれにける小鹿の聲の近き春日野

原鹿

爲

滿

聞は猶秋のおもひやそひぬらん山田の原のさなしかの聲

海邊鹿

淡路灣なれも身にしむこゝろとやかたふく月に雄鹿鳴らん

田鹿

なれて聞田つらの庵は守人のあはれしらるゝ小雄鹿の聲

野鶉

總

光

霧に野はそこともわかす草深きかたを鶉の床と定むる

江鶉

爲

滿

風かゝ眞野の入江に秋更て夢をはなれすなく鶉哉

里鶉

信

尹

露霜の床なうつらと鳴よりもけに夕暮の深草の里

曉鶉

同

篠枕とてもぬられぬ曉の霜うちほらひ鳴の羽かき

澤鶉

道

勝

旅れなうきかきりとや明すらん澤邊の鶉の夜半に鳴聲

田鶉

長き夜も明むとするに小山田の鳴の羽かきかそふ枕は

秋田風

秀

賢

うへてかつ早苗にみえし秋風の穂に出て吹比もきにけり

秋田露

時

直

門田よりひたのかけ繩引程や稻葉の露もこほれそふらん

秋雨

智

仁

憂秋の淋しきやとも立出入空こそなけれ雨の夕は

山霧

兼

勝

玉ほこの道の行ても分かねて霧になくらの山のはるけさ

野霧

通 村

むさし野や行末となくたつ霧に猶しほれそふ旅衣哉

關霧

長 怒

明やらぬしほし空にも残る夜の霧を戸さしの相坂の關

河霧

道 勝

山風の吹なかしたる夕霧にむすひやかへる川浪の音

浦霞

信 尹

秋風のさそへばやかて霧の海のひかたにうかふ遠の浦々

駒迎

相坂の山立出んきりはらの駒うち渡す瀬多の長橋

八月十五夜

長 怒

かそふれは秋の最中は今宵そと空にも見する月の影哉

夕月

半天にひかりやはむくればまたほのかなる山の端の月

夜月

雅 賢

末遠くをくる野風に露晴て影もくまなき秋の夜の月

曉月

實 條

立まよふ霧はあらしの空に晴て曉となく月を残れる

山月

茶 地 丸

月影の澄こそまされおのつから雲あぬ山の夜半の嵐に

嶺月

宗 勝

雲霧はたちも及はし風越の嶺にくまなき秋のよの月

谷月

道 勝

雪とのみ影こそまかへひかりなき谷とやはみん月の下道

柚月

爲 親

分入もしげきみ山の柚人や月をまちつゝ柚木ひくらん

岡月

秀 直

紅葉々の色をそへつゝ片岡のもりくる月の影そさやけき

杜月

季 繼

月はなを袖ぬらすとも立よらんなかめし野田の杜の雪に

野月

總 光

木隠ればさほり有とや廣き野に出つゝ月の影を見る哉

原月

雅 庸

露なからかたしく袖にやとし見る月も幾世の武藏野の原

關月

光 豐

旅ねする夢をとなさぬ板間こそ不破の關屋の月の明方

徑月

兼 勝

ふむあとな惜むばかりに行やらて雪かとそ見る月の下道

橋月

定 熙

月のため浮雲はらふ行衛とて濱名の橋を風わたる也

水邊月

光 廣

河風の音もなかれて行水の底までこほる秋の夜の月

池月

雅 賢

風の音の更行まゝに澄影もます田の池の秋のよの月

澤月

定 熙

影やとす澤邊の水のすさましく月に吹そふ秋の夕風

沼月

信 尹

月見てもあやしかりけり更る夜に沼野の沼の秋の水は

江月

智 仁

曇りなき光はやとに蘆の葉の露の玉江の秋の夜の月

渡月

一ふしを月にうたひて友舟のゆらの戸渡る聲聞ゆなり

田月

信 尹

くるゝより露をきわたるむしろの田のうへに玉しく夜半の月影

都月

尊 政

見る人のこゝろにわくや天の原へたてぬ月も都なりけり

禁中月

素 然

雲の上や二たひかゝる月を見て明らけき世の恵みをそしる

社頭月

定 熙

照月も空に光をやわらけて影さしそふるみつかきの内

古寺月

實 顯

鐘ひしく曉わけてかつらきやとよらの寺の月そさひしき

故郷月

實 條

故郷の軒端に月のやとりてや忍ふの露に影みたるらん

村月

隆 尙

あまのすむ里ひとむらはもしほたく煙にしるし月そ曇れる

里月

永 孝

名にたかき月のかつらの里人は外にもとめぬ光をや見る

山家月

定 熙

柴の戸のうきにたへたる夕暮を更に催す月の影かな

庵月

宗 勝

秋更る山田の庵にかたふくや月影寒き軒の松風

庭月

とふ人を松の戸ほそに詠侘ぬ月の雪には跡もおしまて

瀧月

信 尹

山姫のひるは紅葉を染て又月にさらせる瀧の白絲

河月

智 仁

川の瀬に流れてはやき月影をしほしとむるしからみそなき

湊月

同

船よせて愛こそあかれ橋立や與謝の湊の月澄る夜は

湖月

秀 直

浦風の吹たつ浜に影とめて月もよりくる志賀の辛崎

浦月

爲 親

夜もすから猶しほたるゝ海士衣うらなきつゝも月や見るらん

濱月

光 廣

秋風も眞砂に落てくもりなき月のひかりや吹上の濱

磯月

季 繼

旅れするいそへの秋の夜々はなかも侘たる月の影かな

汀月

尊 政

浦浪のかくるゝ影もさそはれてみきはのかたは月そさひしき

崎月

素 然

行暮ぬ此まゝにてや三輪か崎今宵の月に家は有とも

嶋月

眞 恕

海原の浪よりくれてすむ月の八十嶋かけて行こゝる哉

潟月

同

浪のうへに月の光はみつしほのひかたくもらて浦風そ吹

泊月 爲 満

行やうて幾夜あかしのとまりにもあかねは月の光也けり

井月 信 尹

山の井の浅き水にもいかなれば底をふかめて月やとるらん

闇月 時 慶

小夜風のよしや吹ともれやの戸をさし入月は詠めすてめや

隣月 最 胤

とはいやな軒端ならふる宿にしもそなたの月はわきて澄やと

閑居月 實 條

ともし見る人たにもなき蓬生の宿には月の影そこつけき

船月 雅 朝

秋の水もみとりの色に空晴て月に掉さす淀の川長

惜月 爲 勝

明方の月の光は晴てゆく空より後の山の端そなき

夜擣衣 光 廣

手枕の夢をさそひてから衣打もれられぬ夜半の小蓮

里擣衣 長 恕

音なしの里にひゝきて夜を寒みれ覺てきけは衣うつ也

闇擣衣 秀 直

里人のうちばよばらて秋風のたゆめはたゆむ麻のさ衣

遠擣衣 總 光

なかき夜をともし明せと絶まなく村を隔て衣うつなり

近擣衣 言 緒

秋もやと更行まいにならへすむ隣の里も衣うつなり

秋夜長 信 尹

いにしへをかたるにむへも残る夜や言の葉つきぬ長月の空

野分 素 然

色々に野分の風なるまゝに千種の花のあとかたもなし

葛風 基 任

さな鹿も恨みをそへて妻こふる聲さそひくる葛の裏風

徑葛 兼 勝

朝霜ははらひはてゝも道は猶しからみかくる葛の葉かつら

垣葛 雅 庸

とほれぬをおもふ心のまつかきに恨みをそへて葛ははふらん

野草欲枯 素 然

かれむ色を秋よりかれておもひ草尾花かもとの霜結ふなり

枝菊 尊 政

山人とめてなむ菊の花の種うふる砌の秋はつきせし

菊露 通 村

うへて見る色もたほに置露の色をそへたるしら菊の花

山菊 兼 勝

仙人のすみかなるらし谷陰のなかれもにはふ菊のト水

谷菊 雅 賢

分入てたれかまほらし人しれぬ三谷に咲る菊のさかりか

水邊菊 實 益

山川の岸れにさける菊の花露や落そふ水にはふなり

尋紅葉 同

花のとき松に交れる山さくらもみちやすると尋ねてもみえ

初紅葉

實 條

露霜のまた下染はをしなへてひとつ梢の紅葉とそ見る

葛紅葉

隆 尚

染やうて先一しほに色めくや松の木の間の葛の葉かつら

柞紅葉

有 廣

染つくす色をもまたて柞原いかてあらしの吹ちらすらん

櫨紅葉

實 益

露時雨からぬ枝はなけれとも染てもうすき櫨の紅葉々

山紅葉

素 然

浪そなきかはらぬ音の立田川時雨し山は色に出けり

峰紅葉

谷紅葉

尊 政

山姫のしらてやそめもあへさらんまたうす色の谷い紅葉々

岡紅葉

素 然

そめ染の時雨の程を分てけり松にならひの岡の紅葉々

杜紅葉

智 仁

うすくこき色なほわかし下枝まで露も雪も森の紅葉々

行路紅葉

太山路に手折もみちの錦きて花の都にかへるもろ人

漉紅葉

季 繼

はげしくも嶺の嵐の吹ならんとなせの漉に紅葉散也

川紅葉

光 廣

あしひきの嵐も間なく大井川先かけうかふ木々の紅葉々

岸紅葉

三室山岸根の紅葉散にけり嵐や秋をさそひのくらん

古寺紅葉

紅葉する豐等の寺の入相の聲も色あるかつらきの山

遠村紅葉

時 慶

をちかたのむらに林は隔ても梢は近きもみち葉の色

里紅葉

雅 庸

露時雨そめつくす色もうす紅葉霧に小倉の里の一村

垣紅葉

智 仁

紅葉にや時雨のじまも岩かきのふかき雪に色をそふらん

庭紅葉

季 繼

なく露の庭の梢の下染も時雨やふかき色をそふらん

簷紅葉

道 勝

分てこし山を初にかりほしてさなからなのか軒の紅葉々

松間紅葉

兼 勝

さたかなる松の木の間の夕日かとみれば尾上の紅葉々の色

竹間紅葉

道 勝

陰おほふ窓の吳竹なひかすは峰の紅葉の色を見ましや

紅葉宿雨

永 孝

夕日さす木々の梢はたひの時の時雨を見する千入成らん

紅葉映目

雅 庸

さやかなる夕日にむかふ色そき分てなからの嶺の紅葉々

紅葉移水

同

うつろへる色はさながら立田川水にぬさしの木々の紅葉々

紅葉如錦

光 廣

暮秋風

教 利

よそめには折えてかへるもみち葉を故郷人の錦とやみん

暮秋雲

信 尹

うらかるゝ淺茅か末に吹風も色に成行秋の夕暮

暮秋露

有 廣

久堅の雲のはたての物おもひもくれ行秋をかきりともかな

暮秋雨

素 然

くれて行秋の末野の白露やかつゝ霜に結びかふらん

暮秋霜

信 尹

暮てゆく秋の名残の雨の音やかて時雨に聞やかへまし

九月盡夕

尊 政

日にそひて森の葉は落からす鳴霜みつ空を秋そ暮行

九月盡夜

雅 朝

紅葉吹嶺の木からしまてしはしけふの夕の秋の形見に

九月盡曉

實 條

曉のかれをかなしむ春もまた秋をかなしむ夜半に成にき

おしめともかきりある夜の曉に鐘を名残に秋やくるらん

冬百首

初冬曉

光 豐

よなゝの霜のをきぬのかさなりて冬そとしろき曉の空

初冬朝

兼 勝

冬くれば木のは亂れて朝なゝ秋の時雨に音やそふらん

初時雨

良 恕

今朝よりは日影も寒き山のはの時雨に冬の空そしらるゝ

山時雨

有 廣

跡もなく嶺には雲も晴ながらかく山もとや猶時雨るらん

嶺時雨

定 熙

一となり時雨て晴る跡もなし又立かはる嶺のしら雲

谷時雨

兼 勝

谷の月に絶すおりある雲よりや時雨るゝ跡も又時雨るらん

杜時雨

爲 親

朝朗うかへる雲に三冬たつけしきの森の時雨てそ行く

關時雨

尊 政

あれまさる不破の關屋の板庇いたく時雨の雨そもり入

野時雨

夕時雨まなく矢田野に過にけりあすや有乳の嶺の初雪

河時雨

時 慶

川上の嵐につれて瀬の聲も更にそひ行夕時雨かな

里時雨

山の端にしくるゝ雲のかさなりて里はなぐらの名こそかくれぬ

聞時雨

手枕の夢をばらひて幾度かねやの板間に時雨きぬらん

曉落葉

雅 賢
實 條

見はつへき夢をさそひて明方に木の葉の音ぞ猶残りける

朝落葉

秀 直

風にのみちるにはあらず朝な／＼霜にもねて落る木の葉は

夕落葉

實 條

秋の色の木のほも今は残さしと夕風さそふ木々の紅葉々

落葉隨風

實 顯

木末をばはらひつくすと見るかうちに又ふきたつる風の紅葉々

落葉混雨

爲 勝

音は猶わかれぬもりの木陰哉時雨の雨も落る木の葉も

山落葉

道 勝

風さそふ木の葉の後やしららん見さりしこの山のすかたは

谷落葉

定 照

柴人のかよへる谷の下道もおち葉か色に踏まふふらし

路落葉

爲 滿

清めする秋の名残をおもふなり踏分かたき道の木の葉を

橋落葉

道 時

谷陰はかふともなき橋の上も霜に朽葉の色そかさなる

庭落葉

永 孝

染殘す落葉の色やしららん置けるうへなる庭の朝霜

野霜

實 益

秋に見しその色もなし武藏野の小萩も今は霜の下草

田霜

光 廣

色なから冬まで残る小山田の穂なみにしろく結ふ霜哉

庭霜

實 條

さむき夜の程をしらせて眞砂地に深く見せぬる今朝の霜哉

草霜

尊 政

浦浪やさこそきゆらし小夜更て松風寒き志賀のから崎

田水

信 尹

冬深き山田のそほつ音せぬや岩もる水の水はつらし

懸樋水

通 村

山川のかけひの水の音せぬは木の葉に又や氷しつらん

冬寒月

同

空にしと見るたに寒き月影の水の上にとりてそ行

冬月冴

秀 直

時雨にやふりかはりけん曉の霜にさえ行有明のつき

曉千鳥

教 利

浪の音にめさますすまの浦風に千鳥なきたつ曉の空

夜千鳥

宗 勝

夜もすから浦風するあら磯に浪の千鳥や鳴さはくらん

河千鳥

隆 尙

霧ふかきさほの川舟さして行方もしわかつてや千鳥鳴らん

浦千鳥

智 仁

おり居つゝ浦のひかたもしほみてに友にさそはれてたつ千鳥哉

濱千鳥

秀 直

浪の音もたかしの濱のはま風に友やわかれて千鳥鳴らん

池水鳥

秀

賢

河水鳥

秀

繼

紅葉々の折も残らぬ川水に浪な色とるをしの一つれ

夜網代

實

條

かたしける霜も氷もさむからて網代に水魚のよるや待らん

網代寒

同

かゝり火の影も消つゝ田上の網代の床に猶やさゆらん

竹散

最

胤

山風の軒端に竹を吹わけて窓によこさる散はけしき

篠散

定

熙

吹風に音をなかにへて更る夜の散にさやく道のさゝはら

栢散

之

仲

雲さそふ風のたいくゝ栢木の柱に音して散あられ哉

屋上散

夢絶て散たはしる風の音に心くたくるれやの寒けき

寝覺散

素

然

降出し散の音に夢絶てよはる枕それ覺とはなる

初雪

言

緒

置霜のふかき色にはあらなくに今朝またうすき庭の初雪

山雪

最

胤

雲も猶はれて明行大ひえや都にうつむ雪のふしのれ

嶺雪

季

繼

泊瀬山嶺原のあらしさえゝて嶺に雪けの雲そたゝふ

谷雪

智

仁

柚雪

信

井

誰も見よ我立柚に墨染の夕を残す雪のけしきを

杜雪

良

恕

かふ駒のあとさへ見えす降雪にかれて残らぬ杜の下草

野雪

素

然

行かふ隣の里の道もなしあたりの野邊の雪つもる頃

關雪

兼

勝

あらしふく袂を寒の相坂の雪ふむ道や駒なつむらん

河雪

雅

賢

みたれあしもうつもににてゝ白妙の雪に明行末の川つら

湖雪

教

利

俄にもふりくる雪に蜚人の舟こきかへる志賀のうら浪

浦雪

兼

勝

浦風も松のあらしもしつまりて雪に

濱雪

永

孝

枯残る萩の末葉も濱風に折つゝつもる今朝の白雪

嶋雪

雅

庸

白浪もこゝがとはかり浮島やふりくる雪を誘ふうら風

田雪

實

條

かり残す田面はなくて今朝はばや稲葉にかはる雪の色哉

郡雪

雅

朝

日敷のみふりつむ雪におほひえや西を部のあけほの空

禁中雪

尊 政

たとふへき詠めそあらぬかけ高き竹の臺の雪の明ほの

社頭雪

光 廣

朝またき神の御前の神葉のなひくと見しや雪の白ゆふ

古寺雪

雅 朝

泊瀬寺嶺にも尾にも降つみて雪より出る入相のかね

里雪

總 光

ふりつゝる雪を花かとかかへつゝふむあとおしきみよしのゝ里

故郷雪

最 胤

野山にもへたてきりけり蘆垣の吉野のみやの雪のあしたは

閑居雪

同

世の外に結び置きける住家をは雪とて人の問むものかは

松雪

定 照

冬ふかく成行まゝに降そひて松なもうつむ雪の色かな

竹雪

宗 晴

吹風にしつまりはてゝ降くらす雪を砌の窓のくれ竹

杉雪

雅 庸

積りてもそれとはしるし相坂の杉の梢の雪のむら立

檜雪

時 直

みとりなる檜原が末はかきくもり降白雪の色にまかする

狩場風

雅 朝

風あらきかり場のすみはくれはてゝ行方たゝる雪のおち草

夕鷺狩

降 尙

折數で旅寝やせましかりくらす交野の眞柴霜になくとも

野鷺狩

言 緒

けふもはやおしむかひなく暮にけり交野のみつゝ御狩せしまに

炭竈煙

通 村

すみかまや立る煙も此ころは雪にすくなき小野の山里

遠炭竈

爲 溝

かふへき道は遠くてふる雪にけふりばちかき奥の炭竈

爐火

尊 政

眞木の戸のうちに寒さも白雪に埋火のみを頼む夜な／＼

神樂

信 井

置霜に幾重ともなきかす／＼にうたふ聲より曉の空

佛名

總 光

さむき夜の更ぬるまでもとなへつゝ三世の佛の數やそへけん

年内早梅

實 顯

こゝろあれや春をもまたす先咲に色香ことなる園の梅かい

年欲暮

秀 賢

いとま有もいとまなき身もいそかぬなとてか年のしるて暮行

夜歳暮

雅 賢

行年を猶こそしたへけふの夜はゆふつけ鳥の聲をかきりに

山歳暮

智 仁

年は今いなほの山の峰の松雪の下にや春をまつらん

路歳暮

永 孝

としもはやくるゝかきりに玉銚の道もさりあへす袖はゆきかふ

川歳暮

光 豊

月も日も流るゝかけの早瀬川はやくも年のくるゝ空かな

歳暮松

素

然

年くる、門の松さへあすは又春の縁そかつはそはまし

山家歳暮

隆

尙

山里は道も軒端もうつもれて雪にこもれる年の暮かな

閑居歳暮

爲

親

さひしきになれたる宿もむかふへき春をこゝろの年のくれ哉

老後歳暮

素

然

年ことにくるゝとはかりおしひきていのち●老を今そおとろく

惜歳暮

基

任

身のわさも何ななして暮はつることしなおしむ心成らん

戀二、百首

寄天戀

雅

庸

見るにななうこく心は繪にかける姿にたくふ天の羽衣

寄日戀

信

尹

年をへてあはぬつらさはいむことのおほき日よりや思ひ利けん

寄月戀

雅

朝

つれなきを頼むかひなく更々てまたれし月の入方の空

寄星戀

實

條

心とけてあふとしならは彥星の年に一夜を身にも頼まん

寄風戀

素

然

行かよふ我身ならばや君かあたりあはれたよりの風にのりても

寄雲戀

同

おもひいてゝまつらん物よとはゝとへ夕の雲の空ななかめそ

寄煙戀

智

仁

あたなりし名にこそたいめつゐる身はおもひ消ての煙なりとも

寄霞戀

爲

滿

なれてたい人の心をしらぬかな霞の衣うすきちきりは

寄霧戀

之

仲

いづよりか人の心も秋霧の立へたてたる中と成らん

寄露戀

雅

賢

玉の緒のなかし行衛もしらぬ身に露のかことを頼むはかなさ

寄雨戀

雅

庸

我袖のひちかき雨はなのつから人めを忍ふよすかとそなる

寄霜戀

道

勝

寄霞戀

尊

政

寄雪戀

實

顯

寄稻妻戀

有

廣

寄曉戀

實

益

寄朝戀

宗

勝

寄晝戀

宗

勝

寄夕戀

最

胤

寄夜戀

最

胤

寄山戀

智

仁

寄嶺戀

道

勝

寄谷戀

雅

賢

かほく間も猶我袖は谷川にせかれてかゝる涙のむれ木

寄岡戀

永

孝

寄袖戀

尊

政

寄杜戀

良

恕

寄野戀

有

廣

寄原戀

實

益

寄關戀

道

勝

寄徑戀

素

然

寄橋戀

信

尹

寄水戀

最

胤

寄池戀

實

益

寄沼戀

通

村

寄江戀

時

慶

難波江のあしのほの見し面影を夢になしてもいかにわすれん

寄瀧戀

秀 賢

我袖の涙は瀧と落ぬれとつゐのあふ瀧はそことしもなし

寄川戀

實 顯

いつかさて色にもいていふかくのみおもひ染川渡りてを見む

寄淵戀

實 益

絶すのみ落る涙にわが袖はふちとなりつゝ浮しつむなり

寄瀨戀

光 廣

早川の見なざるよりもつれもなき人のうき世に渡りかねたる

寄湊戀

道 勝

おもひなをそふる涙にくちぬさの袖の湊の見るめからはや

寄海戀

雅 賢

頼めてもとはれぬ夜は床の海の浪にぬれそふひとりれの袖

寄浦戀

素 然

絶果て又はあふみのかたゝなるうらめしとたにいふよしもかな

寄濱戀

光 豊

さてもかくつらさ心をみつの濱に拾ふかひなき身をいかにせん

寄磯戀

光 豊

しゐて猶つれなき人を松島の磯のなみ風ぬるゝ袖かな

寄渚戀

秀 賢

こり須磨におもふなきさはそなれ松なれば又も名にや立ちらん

寄崎戀

爲 滿

一夜とはなとて契りし箱崎やあげてうき名の立ん身なるに

寄嶋戀

茶 地 丸

朝な夕な忘れもやらぬ面影によもきか嶋も遠くからぬかな

寄湯戀

信 尹

つゐにさてしほひのかたはなかりけり涙の海に千尋ばかりや

寄泊戀

言 緒

行末をかけて契りし心さへうきからことのとまりはてめや

寄渡戀

實 條

なき名たゞ淀の渡りのよとみつゝ流るゝ水の思ひとそなる

寄岸戀

實 益

朝夕に松は久しき住よしのきしこともなき人のつれなさ

寄石戀

通 村

うきことやまた打出ぬさゝれいしの中ら思ひの絶ぬ身にして

寄砂戀

秀 直

いつかさて恨みないつもつくさまし濱の真砂を有數にして

寄巖戀

光 廣

あひおもはゝ岩ほか中にすむとてもつきぬ契りの蟲や頼まむ

寄田戀

智 仁

我おもふおもひはいつか秋の田のほにあらはれて色に亂れん

寄都戀

長 恕

おもふ人すむとしきかは和田つみのたつの都といとはさらめや

寄紫申戀

秀 賢

御講水にかきなかしぬる紅葉々をひろふや深きえにし成らん

寄社頭戀

忘るなよ神のやしろの木綿襪かけて誓し末とおもはゝ

小泊瀨のいのるこゝろのあさからのしるしを見する契ならずや

寄寺戀

爲 親

寄里戀

光 廣

寄庵戀

秀 直

寄門戀

秀 直

寄戸戀

秀 直

寄垣戀

隆 尙

寄籬戀

定 潔

寄庭戀

爲 規

寄井戀

實 條

寄屋戀

素 然

寄柱戀

信 升

寄簷戀

雅 庸

寄窓戀

同

寄床戀

之 仲

寄圍戀

之 仲

寄隣戀

爲 藹

寄簾戀

雅 賢

寄初草戀

雅 朝

寄忍草戀

爲 滿

寄忘草戀

有 廣

寄思草戀

季 繼

寄月草戀

實 益

寄下草戀

定 無

寄葵戀

有 廣

寄葛蒲戀

雅 賢

この夜半はおほつかなしや住里をたとらぬばかり我になしへよ
稀にしもせめてとはれば簀の庵の身のうきふしないひや出まし
忍ふとも人なといめそ妹か門たふりにうたふ中とおもは
おさまれるよとやこたへむ人とはいの横の戸さいて下待し夜は
隔てなきこゝろともかな人しれず頼むる方の里の中かき
つゝめとも歳のひまのかたみにももるゝ涙の袖いかにせん
いつしかにとひすてらるゝ中道やはしめて深き庭の浅茅生
山の井の浅からすのみ結びつゝ絶ることなき契りともかな
人つまといつなりはてゝ東屋のまやのあまりにつらさ見すらん
いかにせん契りあさきの雨水柱われてもあはむたよりなき身を
いかにせん茂る軒端の忍ふ草露のみたれも外に見えなん
かゝりせば頼ましものを足たゆくとふにこたへぬ窓の内かな

すさましき床とこそなれかりにたに拂はぬ葵のやまぬけきに
恨みわび落る涙の玉すたれおもひかけても人そつれなき
手につまん程もはるかの初草に生さきしるく頼めなく中
ふりはつる軒端におふる草の名も忘るはかりの袖の露かな
わか中につつうへそめし忘草さてしもふかき根さしなるらん
花すゝきほにあらはれて思ひ草しのふと袖の色やしられん
頼みてとかひこそなけれ月草のうつろひやすき人のこゝろは
かくとたにいひほもらさて下草の下のみたれになるおもひかな
つれなきやかけていのちん葵草なひくを頼む神の裏に
池におふるあやめの根さし我方にまつこゝろひく契りともかな

寄薦戀

良

恕

せめてさはみつの御牧の眞薦草かりにもとふと頼む夜もかな

寄菅戀

宗

勝

面影をほのかりそめにみしま江の茂る眞菅もわかおもひ草

寄葛戀

季

繼

すへかけて頼む契りもいつまでそかゝる眞葛の恨みありては

寄萱戀

時

直

つれもなき人の心ばかりかやの露に亂るゝおもひくるこさ

寄淺茅戀

秀

直

人の秋にあはさらましを命たに淺茅か末の露と消なん

寄蓬戀

爲

親

かれゝゝになる身の秋を哀れともいつかとはれむ蓬生の宿

寄芝戀

爲

親

いたつらにおもふこゝろは道芝や露と情は更にかゝらて

寄苔戀

眞

顯

頼みつゝとひげん人はまつかれや薔おふるまでなりける哉

寄蘇戀

眞

顯

心のみ下に亂れてうき草やれも見ぬ人のえにしばかなさ

寄藻戀

教

利

浪のうへにたいふうき藻浮沈みつをふるへの逢瀬とは見ん

寄桐戀

通

村

人こゝろつれなきまゝに桐の葉のもろくも落る我涙かな

寄梓戀

定

照

心をばかたへの秋に見せそめし梓の色を我中にうき

寄櫨戀

最

胤

しばしその色になりてそ櫨紅葉人の秋なる名にや立まし

寄楸戀

隆

尙

身にそしむ楸ちるなる川原風幾夕くれをあはてきつらん

寄常磐木戀

良

恕

いかなれば人のこゝろは常磐木のつれなき色にならひきぬらん

寄柚木戀

智

仁

今はたい柚人のみそ恨なるわかなげきをば引もつくさて

寄宿木戀

時

慶

あふ事もあらぬ歎きにやとり木のれも見ぬ末やつるにかれなん

寄鹽木戀

言

緒

いかにせんはこふ鹽木のこりすまにうらめしとても絶ぬ思ひは

寄朽木戀

寄埋木戀

素

然

あふ瀬あらはいとほてよしや名取川身を埋木と朽なむはうし

寄鶯戀

永

孝

かきりなく忍ふもくるし今日はたい身を鶯の音にや立まし

寄雉戀

尊

政

聞からにあはれと思ふ春の野の雉子もおなし妻こひの聲

寄郭公戀

時

直

待ふひの更る恨のなみたをもことつてやらん山ほいとさす

寄水鷄戀

時

慶

ひとりの戸ほそをたいく水鷄かといふれなき人を思はましかは

寄鷹戀

名にしおふ鷹のつかひにことつてん我玉章をかけてかよへと

寄鶉戀

定 燕

つれなきを恨とすれば我そまつ鶉の床にうきねをもなく

寄鶉戀

雅 朝

きぬ／＼の思ひもふかく身にそしむ曉しけき鶉のはれかき

寄鶉戀

智 仁

頼めつるそのことの葉の末もなきしるへに似たる鶉の草くき

寄鶉戀

雅 庸

哀とも人はとはしな夕／＼鳴ふく秋の風のたよりと

寄鶉戀

素 然

なにをそもいもかかたみの浦千鳥なきてわかれし名残なき身は

寄鶉戀

同

うしやたゝ我身にしらて鳴鳥のなき中川のよその契りは

寄鶉戀

真 恕

霜寒みつかはぬ鶉のおもひをならふばかりの床のうへ哉

寄鶉戀

雅 朝

身のうへに哀とそきく鳴のなくうきねの床の涙のまくらを

寄鶉戀

同

あた涙を人のこゝろの嶋つ鳥うきたくびとてぬるゝ袖哉

寄鶉戀

雅 庸

たつ鶉の翅もかもな空に絶す思ふかたにもうかれゆかまし

寄鶉戀

同

稀なるもうらやましきは世々かけて契りかはらぬ鶉のはし

寄鷹戀

實 益

いかにせん心もしらぬはし鷹のたかへる程になれるおもひを

寄山鳥戀

定 燕

あはれしれおのへを分る山鳥のかほとばかりのおもひ有身を

寄鶉戀

永 孝

たまさかの契りをしらてきぬ／＼を八聲の鳥はなにそくらん

寄鶉戀

兼 勝

我もれに鳴こそあかせよるの鶉の子を思ふ道にあらぬ物から

寄鶉戀

實 條

思ひしれ人の心のくまよりも身をうつほ木のたくひにはして

寄虎戀

隆 尙

身をかへて虎ふす野邊の末迄も待としきかは行きはおくれし

寄馬戀

季 繼

うき人に見せばや牧の馬たにもやかて手なるゝ心よはきを

寄猪戀

真 恕

枕たにならぬとならばかるもかく伏猪の床になれてしもねん

寄鹿戀

敦 利

身のうへにたくへとそきく鳴鹿もおきふしつらき妻やこふらん

寄蝶戀

尊 政

年月のあたの頼みなくらふればそれも胡蝶の夢のたはふれ

寄蛙戀

信 尹

いたつらに袖行水を増りける蛙のあまた鳴田ならねと

寄螢戀

雅 賢

かきりなく積るうらみは人もしれ螢とのみもゆるおもひを

寄糸戀

兼

勝

契りてもむなしき床の夕暮に恨をそへてなくきり／＼す

寄松蟲戀

雅

庸

夜な／＼にとはれぬ人を契りても身に松蟲の音をのみそなく

寄鈴蟲戀

基

然

人よいかに長き夜あかてすゝ蟲のふり捨てたき今朝のわかれを

寄促織戀

光

廣

誰ためにはた織蟲そ戀衣かことやかけむ朽はてぬとて

寄蛸戀

尊

政

さらてたにまたるゝ暮をさゝかにのいと心やあくからすらん

寄蠶戀

智

仁

いもにあはぬならひにみなもつらき哉衰桑子のまゆこもりとて

寄我柄戀

有

廣

うき人をしたふこゝろや我からと藻に住蟲の音にも鳴らん

寄玉戀

最

胤

かくばかりしほれやばせんひかりなき玉とそなきし人の心も

寄鏡戀

季

繼

面影をしたふおもひのます鏡かけてへたてぬこゝろともかな

寄匣戀

基

任

残しなく見るもつらしな玉手箱あくとしもなき形見なからも

寄飾戀

隆

尚

玉かつらかけはなれついさし櫛のさして頼まむ便たになし

寄憂戀

宗

勝

おもひ出て落る涙の玉かつらかけし契りの末いかならん

寄本結戀

信

尹

生たむゝ行末となく契る哉初もとゆひに妹をさためて

寄枕戀

智

仁

逢夜あらは拂ひつくさむ獨寝の枕の塵は山となるとも

寄席戀

素

然

契らぬも人まつ夜半となくさめて獨と拂ふ床のさむころ

寄衾戀

雅

如

ひとりのみきつゝそれぬる夢中に重ねもやらぬ床の衾は

寄衣戀

信

尹

下組のとけぬひそねばしらて猶衣の關を君をこえくる

寄裳戀

こぬくにもまつらの川にわがゆつるもすそより猶ぬるゝ袖哉

寄劍戀

兼

勝

とたへぬる程も今はためくりあひて恨みの中もとくる下組

寄帶戀

秀

賢

結びえぬ契りをつらき篋は花田の帶のめくりあひても

寄書戀

尊

政

返しなき程なほものおもひにて又見るふみに戀や初けん

寄繪戀

定

照

たへ怪ていかにとかせんうつし繪にうつし見るともあかぬ心は

寄硯戀

有

廣

忘られて打ふす床の硯にはなみたまも水もわかれやはする

寄筆戀

之

仲

かきりあればかきもつくさぬ水くきの短き筆の跡そばかなき

寄笛戀

信

片

寄琴戀

雅

庸

寄弓戀

爲

滿

年月は猶つもるともあつさ弓引かたありや我によりこぬ

寄笛戀

雅

庸

はかなしやかきやる文も白眞弓やなみの敷のつもるうらみは

寄扇戀

爲

滿

したひ怪の秋の扇と捨られて身の程なにも思ひこりても

寄簪戀

素

然

忍ふへき道にとおもふかくれ簪名にかくれすほなにや立なん

寄絲戀

總

光

くり返しおもふばかりに白絲の結びもとめぬ契りもそうき

寄箏戀

信

尹

餘所にてはぬれ衣きると我宿の笠やとりにも立よらしとや

寄錦戀

實

條

一筋におもふとすれとかひもなくにしきの組そむすほいける

寄挿頭戀

爲

親

忘れめや香もなつかしき舞姫の袖のかさしの花のおもかけ

寄手向戀

智

仁

身に契る結ふの神のうけぬへき言の葉もかな手向してまし

寄被靡戀

大ぬさのとる手にいのる末終にしるしあらはせ神のもろふし

寄木綿戀

雅

庸

寄四手戀

實

顯

寄注連戀

總

光

つれなきもかけてはなれしゆふ四手の靡かぬ末を神に祈りて

寄車戀

基

任

頼めなく行衛とならば小車のめくりあはむを身にや引かまし

寄船戀

光

豐

物おもふうき身は薄士の捨小舟よるへも浪の哀となしれ

寄揺戀

爲

滿

行末や猶いかならんこく舟のかちとるひまもあらぬおもひに

寄帆戀

時

慶

便ある風を待待て行舟の眞帆にあひ見むこゝろともかな

寄碇戀

時

慶

いかりおろす舟はたゆたふ浦浪の下にのみやは思ひはつへき

寄簀戀

光

豐

おもひれの袖の涙のたくひかはかりほの筥の露も雫も

寄網戀

爲

親

餘所に引人のこゝろはしら浪の立さばく浦の網のうけ繩

寄釣戀

本

仁

釣たるゝ舟も浪間にうけ繩の長きおもひに身を恨みつゝ

寄筏戀

永

孝

よるへまつ身はいつまでか筏士の棹のひまなく物はおもはむ

寄簾戀

尊

政

かいり火の煙もともにこもるよとくるしきむねの内そこかい

寄網戀

言

緒

こゝろなきあまの小舟の綱手さへひけはひかれて我によりくる

寄繩戀

尊

政

見るめたいあらぬ恨みはつきせめや海人のたく繩くり返しても

寄い盡戀

爲

滿

難波江の身をつくしてもかひそなき人の心もしろし見えねは

寄貝戀

總

光

しらせずはいさしら涙のうつせ貝われてもあはぬ頼みなき身は

寄斧戀

爲

親

あはてふる日數は更に斧のえもくちむ涙の袖の上かな

寄笠簪戀

素

然

忘れむ故たにもなし花かたみめならふかすにいらぬうき身は

寄燈戀

實

條

巻こめて人に忍ぶの玉札をひらくたよりもとし火のものと

寄願戀

敬

利

契りをきてまつ夜更行問の戸に猶うらめしき鐘の音かな

雜二百首

山櫛

最

嵐

香久山の嶺の榊葉いつよりか縁もふかきかけと成らん

嶺椿

隆

尙

松かえの嶺に相生のたまはき千世に八千代のかけそならへる

洞槿

秀

直

幾年かかはらぬ色に槿の葉のみとりもふかき谷の下道

麓柴

智

仁

里人のかへさの道の近しとやふもとよりかる眞柴成らん

柚櫛

宗

勝

柚人や引て宮木になしつらん茂る檜原の陰あさくなる

杜柏

かつちるも葉ひろかしの影そびて月こそいたく杜の下道

岡柊

之

仲

山賤もひろび殘すやいたつらに岡へにくつる道の落稚

濱楸

良

恕

陰あさく秋になるみの濱ひさき浪のまにくしほれてそ行

磯松

導

勝

風の音は浪に残して見るかうちに日も入海の磯の山松

門杉

信

尹

よそめには人とふらへのたよりとも見ゆるしるしの杉たてる門

窓竹

之

仲

生そふる窓のくれ竹ふしておもひ起てまよふも身をおるかなる

離草

同

荒にける笹と見しも秋くれはさすか色ある草の花々

庭苔

雅

朝

世々をへてつくりなしたる庭とてやたいめる石も苔のむす也

簾忍草

信

尹

むれたゆる古屋に雨はたまれと軒の忍ふに露そやとれる

岸忘草

實

條

住吉の岸にや種なうへそめてうきをわするゝ草といふらん

野篠

總

光

行人もまた夜ふかしと分されや霜をくまゝの野への笹原

路芝

光

廣

芝草もなひさあひけりやりはつる吉野の里は道もなさまて

沼葦

光

直

こと草はそれとも見えぬかくれぬに生立わたる蘆の一むら

江菅

時

直

三嶋江や蘆の葉かくれ生ぬれば浪のしら菅かる人もなし

河藻

實

益

流れ來て淺瀬によとも川のせに結ほゝれつる中のひしつる

名所山

素

然

おさめしる心のすゑも 見んはこやの山の動きなき世に

名所嶺

季

繼

村雨の過るかたへのうき雲はよそに成行たかまとのみれ

名所岡

光

豐

幾もかならひの岡の松風にしくれの音を殘す明ほの

名所杣

信樂のそまやま人の斧の音も道も絶たる雪のむれ來

名所杜

案

然

おり／＼の心うつらてなかわるやかばる氣色の森の春秋

名所野

言

緒

草も木も色付にけり露霜のふるからなの、秋の夕暮

名所原

良

怨

木の下に露もこほれて幾度か又時雨らん宮城野の原

名所關

宗

勝

うき旅も忘れて爰にあかしかた須磨の關屋の月のかりふし

名所路

雅

賢

をのつから茂りそびてや宇津の山月影もらぬ蔭の下道

名所橋

時

直

川浪もこゆるはかりの音はしてをやます雨はふるの高橋

名所池

永

孝

なし鴨の床はなれてやさばくらん明方さむきこやの池水

名所澤

雅

庸

雲の上に音もや絶ぬ天地のひらけしよりの富士のなる澤

名所沼

光

廣

哀れやはあさかの沼の花かつみかつみもあへぬ名所にして

名所瀧

通

村

嵐山嶺の紅葉やかけつちとなせの瀧の風のしからみ

名所河

道

勝

よし野川浪の花さへ散行をしからみとめふ山風のすへ

名所湊

智 仁

松の風浪のひいきにうさねしていな湊にかゝる舟人

名所海

總 光

ことの葉も筆も及はぬ松原の浪よりうかふよさの入海

名所湖

光 廣

浪の音も猶あましく諏訪の海や嵐の空の暮そむるより

名所浦

實 益

漕て行かたはわかれて春はたゝ霞にこもる和歌の浦浪

名所濱

永 孝

いつの間にをのゝ葛葉も霜枯て汐風寒き吹上の濱

名所磯

雅 庸

なれてたになかめあかぬは浪よする綸嶋か磯の秋の夜の月

名所汀

信 尹

こと浦に見るたにあるをいかばかり清き渚の夜半の月影

名所崎

尊 政

人とは我は忘れしといひてまし金の御崎を過かてに見て

名所嶋

名所橋

くもりなく照日のもとのさやかにもまつくそめし淡路嶋由

名所湯

泊舟こきはなれ行難波かたあし邊のよるの名残をぞ思ふ

名所泊

有 廣

秋に猶月にあかしのとまりして浪の小舟は宮ふくもなし

名所渡

名所田

最 嵐

ほのかにも明行末の一村の竹田の早苗今やとるらん

名所里

智 仁

菅原や伏見のさとに住人の今もあれまく猶惜むらん

名所市

同

哀身はなるかなる名に辰の市やさしてうてふことしなければ

名所山

信 尹

夢かともくくらき陰はうつつの山うつゝともなくたとる細道

名所嶺

道 勝

かり衣目も夕くれにこへ残す峰のこなたに宿やからまし

名所野

實 顯

むさし野やけふも千種の露にのみしほれきてうき旅ころも哉

名所原

道 勝

夢さめぬ夜や更ぬらんかり枕小笹か原の露さむき袖

名所關

雅 賢

出てこし都にいつかわかへるへき旅の日數もしら川の関

名中路

基 任

いとほしな幾重の山をこえきても都にちかき關路なりせば

名中橋

雅 庸

いかにともうしろめたくも思ひ渡る故郷いてしまいの繼橋

名中河

實 顯

今も猶とをき都をおもひ出て隅田川原の舟よばふなり

名中渡

素 然

風をあらみおなし湊による舟も出るを見ればなのか浦々

竊中海

永 孝

けふも又海原となく漕出てこゝろつくしの船路にそ行

竊中湖

實 條

旅衣浪にしほれてなのつから行もかた田の浦風そ吹

竊中浦

秀 直

今こゝなとまりとやせん浪枕袖を数津のうらのふな人

竊中濱

實 益

旅ころもたちて幾夜を重ねさてしらぬ濱邊の月を見るらん

竊中磯

信 尹

たび衣さのみしほれてこゆるきの磯の浪なる蜃の袖かは

竊中汀

定 照

浦浪のよする汀にとまりして末またしらぬ旅そかなしき

竊中嶋

兼 勝

日なへつゝ風のたよりの松嶋やなしまにかゝる浪のうら船

竊中潟

永 孝

旅ころも猶うらふれて清見かたよせくる浪にうちもれられす

竊中泊

總 光

漕くれしけふもあかしの泊舟浪にかたしく旅ころもかな

竊中渡

爲 満

日もくれぬはや舟わたせ隅田川とりもとめぬ旅は物うき

竊中里

もカ

夢路たに遠さかりゆく故郷なしのふの里の旅ねかなしき

山家春

道 勝

春といへば契らぬ友もとひくやと山櫻戸を明てまたるゝ

山家夏

なのつから夏なほよそにやり水のこの水上やみやまへの里

山家秋

隆 尙

白雲の八重たつ奥に庵しめて誰山里の秋を侘らん

山家冬

雅 朝

人とはぬうらみは絶てふりつもる深山の里の雪の通びち

山家曉

素 然

鳥の音の聞えぬ里に聞なれてあかつきしるは鶏の聲

山家朝

基 任

朝またきほるけさ山の家居なほ立るつま木の煙もそしる

山家夕

秀 賢

山すみとおもほさりせばいかにしてたへなんものそ秋の夕暮

山家夜

爲 親

柴の戸をたゝく嵐に夢さめてあかして侘る山のした庵

山家風

爲 賢

聞なるゝ音とてさすか柴の戸にむすふ夢ある山風の聲

山家雲

秀 賢

軒ちかく立と見えしは程もなく餘所に成行山のしら雲

山家煙

爲 満

民の戸も奥山すみもなへてこの治まる御代の煙たてけり

山家雨

時 慶

餘所に今ふりはれぬるも山里は岩の雲にのこる雨かな

山家路

雅 朝

今朝分しかたともしらすたとるなり落葉に埋む柴の戸の道

山家水

定 照

いつまでもなれてやくまむ山里の岩根の水のすむにまかせて

山家庵

つれづれをなやむ人のしらん柴の庵にすめるこころは

山家草

敦 利

世の中のうきにかへたる山住はかくて生ふる草かきにして

山家苔

實 益

谷深く庵を結ひて住人のありとは見ゆる苔の細道

山家木

すむとも竹の柱をみやま木をおりかけ垣の陰のあはれさ

山家鳥

鶯 鶯

竹かきなかこふともなき山里になれて小鳥それくら定むる

山家蟲

同 鶯

夕くれの人めはかゝる山住を知てや蟲のあはれとふらん

山家春

光 廣

すきかへす田面の草をとりそへて荒たる庵や春にかこはむ

山家夏

雅 朝

五月雨のはれ間待得て取もあへず門田の早苗いそぐ頃哉

山家秋

定 照

小山田の稻葉の爲にさす庵は秋よりたゝのさびしからなん

山家冬

智 仁

冬は猶小山田のかり庵の隙をあらみ露より寒き霜や置らん

山家風

信 尹

鳥かへる門田の雨の夕くれに風そなるこの音はたてける

山家雲

素 然

里に見し朝けの煙晴て又鳥羽田に遠き雲の一むら

山家煙

時 夢

眞柴たぐとたへも小山田のかり庵にせきかけし水の澄立ら

山家雨

兼 勝

ぬれてほす山田の庵の蓑も笠も又とりあへず雨を降くる

山家鳥

隆 尙

吹風に田面の庵のなるこ繩たひくさばくむら鳥の聲

山家蟲

隆 尙

霜ふかき田面の庵の道芝にたのれもかるゝむしの聲哉

春夜夢

信 尹

ながくにおもひそ出る思出のすくなき年の春の夜の夢

夏夜夢

良 恕

風かよふ軒端の竹の涼しさにうたゝぬる間も夏の夜の夢

秋夜夢

房 満

秋の夜に頼まれなくに故郷をおもふ枕の夢はさめつゝ

冬夜夢

基 任

冬の夜のなき空をも幾度かさめては結ふ夢路成らん

曉夢

素 然

秋はまつ夜ふかき程にね覺して夢をも老はあかつきを見る

短夢

隆 尙

秋の夜の長き頼みも名のみにて見へつゝ夢のさむる程なき

夢驚

雅 朝

見るほともむすふ程なき草枕風におとろく夢のみしきさ

山眺望

素

然

不二のれも都の山はおほひえを重ねあけつゝむかふこゝろは

野眺望

言

緒

を地かたの空はそれとも見ゆるまてうす霧はるゝ野への夕暮

海眺望

季

繼

與謝の海や松の木末を吹風に霧はれわたる天の橋たて

寄風無常

素

然

世の中は風のうへなる塵の身のかるき物からあはれはかなき

寄雲無常

通

村

しほしよし有と見ながら頼まれぬ憂身のうへの空の浮雲

寄露無常

最

嵐

なきあへすやかて消行白露につるは此世のたくひなりけり

雨中懷舊

秀

賢

しつかにもれやに音つるゝ雨の夜は思ひ残せるいにしへもなし

深夜懷舊

秀

賢

しげかりし昔のことを深き夜のしつげき窓でおもひ出ぬる

草庵懷舊

爲

滿

いとしく涙を落る草の庵の春のむかし^ねの^あわかし^のれ^の覺思へは

閑居懷舊

宗

勝

ひとりのみむかしを思ふ草の庵に^あの^の涙は雨にふるなり

懷舊淚

尊

政

おもひ出てすゝろに落る涙こそいにしへ人の形見成らめ

獨懷舊

定

熙

かたらはむ友もなければひとりのみ昔を忍ふわかにこゝろかな

老後懷舊

時

慶

なきをしも思ひ出れと哀にも涙さしくむ老か身そうき

寄日述懷

同

豐

なるかなる憂身のうへも頼まゝし天てらす日の光なりせば

寄月述懷

光

豐

捨し身は月もめてしと月もしれ昔を忍ふすかとおもへは

寄星述懷

季

繼

さとりえぬ心そつらき曉の星をしるしの法のためしな

寄風述懷

爲

親

世の中はうはの空吹く風をたゝ我身のうへとしるそ侘しき

寄雲述懷

光

廣

ありて世に定めもやらの浮雲は我身にたくふ物とやは見ぬ

寄煙述懷

素

然

高きやにのほりてや見し古も民のかまとに立るけふりを

寄路述懷

永

孝

治れる國の東とはこれちやわきて絶せぬゆきゝ成らん

寄橋述懷

雅

庸

かくれ家に入跡とめぬ友さへも絶てふりぬる谷のしは橋

寄沼述懷

爲

滿

なるかなる心はいとがくれぬのかくれやはすることの葉の道

寄江述懷

信

尹

よる浪の玉江にしけきよしあしをいつかわかたむ大和ことの葉

寄河述懷

最上川のほるは名のみつゐにきて身のうき舟やくたりはつへき

寄海迹懷

實 條

なにもと學べとならば淺からぬ海をこゝろの底るにやせん

寄瀨懷

實 條

をろなるにあればなる名取川瀬々にあるてふ埋木にして

寄浦懷

最 鹿

音も猶のとかなりけりをいつから治れる世の四方のうら濱

寄雨迹懷

長 恕

世にふればあらぬおもひに身をしほる涙の雨は晴るともなし

寄露迹懷

定 熙

露もなをうきになへてや結ふらんふりたる宿の道の草葉は

寄霜迹懷

尊 政

をろかにしふる身のはてそかひもなき霜をいたく姿ながらも

寄雪迹懷

時 慶

ふりなける黒髪山の雪ならてつもる我身のよはひおとろく

寄山迹懷

實 益

學いえぬ窓の現はちりひちの山としなりて歎きこりつゝ

寄關迹懷

實 益

あふ坂の關路の花にこえかれておほえすけふも暮しぬる哉

伊勢

爲 滿

くみてしる人はあまたの世なりけり五十鈴川のきよきなかれを

石清水

素 然

老か身のかゝらむ杖のはとのみれさかゆく道は神のまに／＼

賀茂

爲 滿

あふくより頼みこそあれ片岡のもりてしらるゝ神のちかひは

松尾

爲 親

そのかみのあふひかはらぬ根さしとてかくる二葉の松の尾の宮

平野

雅 庸

君かよはひ積る言葉のちりひちや平野の松をためしとも見ん

稻荷

長 恕

杉の葉の當磐かさほのいなり山さか行かけを

春日

同

いつよりのためしなるらん今も又神まつるなる春日野の道

大原野

時 慶

長岡の宮まもるてふ大原の神のめくみは今もかはらし

布留

總 光

折々にひくしめ縄をかけそへてあふくに代々をふるの神杉

住吉

爲 清

幾千代もかきりあらしとうへつらん君に相生の住吉の松

日吉

雅 庸

いつよりか跡たれそめてくもりなき春の日吉と世に仰くらん

梅宮

道 勝

名にしあふ神も心やいさむらん梅の宮ゐに春を聞へて

吉田

實 顯

君と臣ちかひかはらて九重の近き吉田に宮居すらしも

祇園

雅 庸

末となく道しある世を守らなむ今もたいしき神のそのふは

北野

同

祈るとて絶す立よる袖おほみ分て北野の神の宮居に

貴布禰

素

然

木舟川その水上をしろからにはやきちかびを頼まさらめや

出雲

同

八雲たつむかしの跡をしたふとも神かみならば空に知らん

三輪

数々の道もまよはず神垣は杉をしるしに三輪の山里

玉津島

雅

唐

みな人の思ひめくみもわきて身に頼まさらめや玉津嶋姫

熊野

習

仁

三熊野や浦におふてふ濱ゆふの幾重も神に世をやいのらん

如是相

爲

親

見ても猶心のほとはすみかたき濁りを出て匂ふはらす葉

如是性

如是體

兼

勝

色分てさくらば花のくれなゐに柳か枝そ淺みとりなる

如是力

通

村

木々の枝はおるよとばかり吹風にたゆるうちからを見する青柳

如是作

雅

賢

四の時種をわかつて誰世より作りそめけん民の草葉も

如是因

宗

條

たれとりてよくとしもなき村草のかれても又や春を待らん

如是縁

光

廣

法はたいえにしもとめよ吹風を眞帆にうけたる舟とまるより

如是果

冥

恕

嵐ふく木陰にひるふ柴栗のしほしと頼む此身ならすや

如是報

爲

滿

過ぎつる身のことわざな思ふにそ世々の報ひの程もしらるゝ

如是本末究竟等

もとあらの小萩の花ももろともに末葉の露と散し色かな

地獄界

雅

朝

哀なりむせふほのはな出やられておもひの家のがきすみかは

餓鬼界

爲

滿

物ことにうへしなげきは前の世に人をすくはぬむくひならまし

畜生界

後の世もあはれる哉里の犬のうてともさらぬえにし也けり

修羅界

信

尹

及びなき月日をも手にとらはやのたけき心に身をばはつらん

人界

光

豐

さかふるも衰へゆるも人の世のならびとのみはおもひわかれす

天界

智

仁

かきりあればしほれこそすれ久方の天津乙女の花のかつらも

聲聞界

素

然

琴の音に立まびし袖の心をはしりきと人のいかに答へむ

緣覺界

尊

政

はてもなくめくる憂世のことばりをむなししくしるや悟り成らん

菩薩界

彼岸へ行てふ道をしることもけに舟長のあればなりけり

佛界

雅 賢

白雲のへたてなければとこばにやとるこゝろの月も澄けり

寄天祝

雅 庸

君も臣も猶直にやおめ行世は久堅の空に知るらん

寄日祝

素 然

かしこしな天津日嗣のそのまゝにひとつなかれの絶ぬためしは

寄月祝

有 廣

契りなけわか君か代も久かたの空にめくれる月をためしに

寄星祝

光 豐

あふくてふためしにひかむ君か代は北にうこかの星のひかりに

寄雨祝

尊 政

久堅の空よりくたる雨たにもおさまる時そ日數たかへぬ

寄地祝

光 豐

あらかれのつちの始をおもふより神代かはらぬ國そかしこき

寄國祝

時 直

恵みにはいかでもれよし雨風の時をたかへぬ國にすむ身は

寄郡祝

敦 利

名にしおふ鶴の郡にすむ民やあかす千年の齡ひふるらし

寄道祝

雅 賢

神代より傳へもて來て今も猶種はつきせぬ數島の道

寄水祝

隆 尙

底きよき松の下水結ふ手の雫も千代の影そうつれる

寄巖祝

長 恕

池水は絶すなかれてさゝれ石のいはほに契る君か代のすゑ

寄都祝

秀 直

君か代のめくみあまれき春にあひて花の都そなへてさかふる

寄苔祝

尊 政

さゝれ石の岩ほも庭の松かえも苦むすかけやかばらさるらん

寄竹祝

智 仁

一ふしに千世もこもれと九重の竹の藁やうへもなくらん

寄松祝

實 條

霜雪に色もかはらぬ松かえのよけひや君か齡ひなるらん

寄椿祝

道 勝

かけも猶たかのを山の玉つはきかはらぬ千世の色に咲く也

寄櫛祝

之 仲

かけたかき神の御前の櫛葉のときほかさばに世をやいのらん

寄杉祝

時 直

年なへて平野の宮に立杉のななき御世をはあふかさらめや

寄龜祝

有 廣

羽吹いて雲井にあそぶ鶴の手は幾千年をか世々にかきじん

寄龜祝

有 廣

萬代のよはひをのへて池水にすむてふ龜もわか君のため

慶長千首作者

六十五首

御製

後陽成帝

五十四首

素然

中院通勝卿
也足軒號

五十三首

信尹

近衛三親院
慶長十九薨五十

十六首

言緒

山科言經男
三木天正五生

二十八首

實益

西園寺正二位有大臣寬永九薨
公朝男 公益父

十四首

基任

園權大納言後光明外祖
基繼男基音父

三十七首

實條

三條西寬永十九年
內大臣公明男公勝父

二十一首

總光

廣橋正二位權大納言
從一位兼勝男

三十四首

道勝

聖護院

三十七首

智仁

八條後陽成御弟
陽光院御子

十五首

時直

西洞院三木從二位
時慶男元ハ時康

十八首

秀直

富小路從二位左兵衛權佐
種直從三位兵衛佐賴直父

十六首

秀賢

舟橋ノ元祖少納言
國賢男秀相父

二十五首

雅朝

白川三木元ハ雅英
雅業男

二十三首

隆尙

鷲尾三木慶長十三年卒
四上權中納言隆康男

二十三首

有慶

六條權中納言元ハ有親又ハ
俊久正二位有繼男有純父

二十三首

光豐

勸修寺贈內大臣
慶長十七卒時豐男

二十一首

最胤

梶井

十九首

實顯

阿野正二位權大納言
元ハ實政季時男

十九首

季繼

四辻正二位權大納言三木
季滿男公理父

三首

爲勝

下冷泉三木爲純男爲將父
爲純元ハ爲右爲純天正六四一橫死

三首

茶地丸

二十七首

光廣

鳥丸寬永十五年卒
六十光宣男光賢父

二十首

通村

中院
承應二二廿九卒

四十七首

爲滿

上冷泉正二位權大
爲益男爲賴父

二十二首

時慶

西洞院從二元ハ時通
時秀男

二十七首

兼勝

廣橋從一位內大臣
元和八出家國光男

二十八首

定熙

花山院左大臣寬永十一年卒
元ハ家雅家輔長男定好父

二十五首

永孝

高倉正三位權中納言慶長
十二卒四十八永相男永慶父

四十六首

雅庸

飛鳥井元ハ雅繼權中納言
法名尊政三木雅敦男雅賢父

十五首

宗勝

難波實ハ雅庸男難波中繼
家ヲ相續後飛鳥井相續雅胤ト改

十六首

爲親

中山冷泉歟右少將正二位權大納言
親綱男權中納言爲尙父

二十三首

光豐

勸修寺贈內大臣
慶長十七卒時豐男

三十八首

曾政

一乘院門主
近衛龍山弟

十八首

之仲

五辻從四位 馬頭
元ハ元仲爲仲男

十六首

教利

高倉元ハ範遠
範國男

十六首

爲勝

下冷泉三木爲純男爲將父
爲純元ハ爲右爲純天正六四一橫死

十六首

教利

高倉元ハ範遠
範國男

十六首

爲勝

下冷泉三木爲純男爲將父
爲純元ハ爲右爲純天正六四一橫死

以上三拾七人

右之外二

宗條

實條歟宗時ヲ誤歟
松木宗條歟時代少相違歟

基仁

基任ノ誤歟

秀繼

季繼ヲ誤歟

有慶

有廣ヲ誤歟
六條有廣歟時代少相違歟

季直

秀直ヲ誤歟

言備

言緒ヲ誤歟
此名諸家ニ不見

六條

有慶

元祿九年御會之作者此時申將
慶長九年ヨリ九十三年ニ成ル年數相
違如何

松木

宗條

貞享五年御會作者此時正二位
慶長九年ヨリ八十五年ニ成ル
是又年數相違如何

慶長千首落ル歌八首

春一首

花枝

夏一首

樹陰蟬

秋二首

夜初鴈

嶺紅葉

戀二首

寄關戀

寄朽木戀

雜二首

名所渡

如是性

天保九年五月中浣

源政忠寫

沙彌惠空百首

詠百首和歌

沙彌惠空

春二十首

立春氷

けふといへは氷も涙に龍田河水をや春の潜そむらん

初春霞

深くれし雲より明て出日のかすむないかてはらふ春風

雪中若菜

わかな摘袖には雪のひまそなきつもるもちるも打はらひつゝ

初鶯

ふる巢にてなかくては出し鶯のはつねとけさはたれか聞へき

絲梅

いにしへを軒ばにおふる草の名に忘れはてしとにほふ梅か香

門柳

我門によする車の玉すたれかゝるもおなしあなやきの絲

歸鴈知春

鴈かへる聲を聞ゆる故郷の花はいかなる色香なるらん

二月餘寒

春霞かすみの衣たちかきされ又きさらきのさそかへる空

故郷春月

かはらすや奈良の都の春の月かすむももとの光なるらん

夜春雨

春雨のふるは聞えず鐘のなとの籠に成ぬ老のまぐきに

春日遅

行くれし冬の山路の宿ならしひるまの碧の空の長閑さ

尋花

常よりも花のために岩根ふみかさなる山のこゆるともなし

見花

久かたの空にも花のさくやとてうちなかむれば嶺のしら雲

翫花

かめにさして見つゝをいらむ世間の花に心は長閑からしな

折花

花をみし木の下陰のしらしてしつゝの末を折て歸らむ

惜花

ふひの月のたにおしむ年の内花に心をつくしはてしむ

三月三日

思ふ事みそきに捨て三日月の光のそはむ春をたのむる

歎冬

芳野河しからみかけてさきそむる花の色かふ岸のやまふき

松間藤

すかへりの花やおそしと藤波の松をいさめてさきかゝるらん

三月盡名

あすよりは春にあられば花鳥の色れも猶やあたにおもはし

夏十首

卯花似月

卯花のかきほの内外咲みてゐる影はさながら春の夜の月

待郭公

まちわひぬ野へにくらしてよるは又心にとなき山ほといきす

寢覺郭公

ねぬるまもなきやしつらむ時鳥たゝこふは雲のいつこそ

五月郭公

さ月山いてゝ今はと天ひこのこたへまうくもなくほといきす

庵五月雨

さみたれば草のいほりそよしや猶心の外のことをなきかすて

夏草露

秋の野のはなの色々にほふとも涼しさはたゝ草の上の露

里壁

みつしほに螢なかれて亂るめりあしやの里の風そよきつゝ

夜河篝火

かゝり火のうつろふ影の人井河つかふ鰯繩の末もみたれす

遠夕立

しら雲のたなひきてより涼しさやゆふたちすらし空もとゝろに

樹陰納涼

すゝしさと思ふ所はなかりけりこの一本の松の下陰

秋二十首

立秋風

なひくよと思ふばかりをしるしにて音せぬしのゝ秋のばつかせ

初秋露

朝露のおきいてゝみればさゝの葉の秋を催す音を絶てぬ

七夕後朝

天漢はやくなりぬと七夕の昨日の瀬なやかへりみるらん

秋夕

いつくにもいづもゆふへはありなめと秋は何故さむしかるらむ

夜萩

とふ人はなき宿なれとよなきにおとろかれぬる萩の上かせ

朝萩

さらすとそきゝし錦はこれなれつ朝日いろめく萩の上露

夕薄

ゆふ日影入野のすゝき行人の袖こそふれて過てきにける

山初鴈

淺茅原また色つかしらち山越てきつらむはつ鴈のこゑ

田家鹿

棹鹿をわき田のために追けてゝひたやくもりのくやしからまし

野亭閑蟲

なく蟲の聲をかきりそあはれなる野原のいほのあはれもとおし

嶺月

くまもなき空をそ照す嶺の月ふもとほくらさ河波の音

谷月

ささてとくちる花もなき谷川の底には秋の月ぞすみける

海月

霧はれて秋の海へと見え渡る月になとせぬなこの浦波

湖月

世中の級に任てしなてるやにほの水海にうかふ月影

關月

あふ坂の清水にやとる月をみて關守とても心とむらん

掃衣響風

天津かせ此世にかよふ乙女子の衣うつらしびいきりにけり

紅葉増雨

ふるの雨をいとひしはさてけさは猶色こそ増れ四方の紅葉は

紅葉映日

なくら山名にそかくる・入日まで光そひける嶺のともみち葉

暮秋露

又こんの秋をもさらにしら露のなきある草は根さへかれぬや

惜九月盡

おしかへしおもへはなにか惜からむ八十年なれこし長月のけふ

冬十首

初冬時雨

けふよりは冬なりけりとつけわたる時雨をいくる山風の音

風前落葉

吹はらふ風のちからや盡ぬらむ天津空よりおつる紅葉は

庭霜

さしのほる朝日にしめる庭の面の眞砂の霜やとけ渡らん

冬月

冴てこそ心もすめれふくる夜の月の秋とはたれかいひけん

古屋霰

荒はてゝ霰うちこける櫓の屋のみや玉しける跡を見えける

曉千鳥

すまのうらに心すましし聲ならむ千鳥なく也あかつきの空

池氷

池の面は底のかよひ路閉にけるこぼりのうへをわたる水鳥

常盤木雪

ときは木も二たひ色をみせにける今一しほの積しら雪

深雪

みよし野を思やるまでふりつもる都の山の雪の曙

歳暮雪

月も日も今日をさかひと白雪のつもるにつけておとろかれぬる

戀二十首

寄雲戀

わかおもふ人の心はおほ空の雲の立ぬに見えける物を

寄風戀

葛のはの枯て猶ふけ秋の風すこしとたぐも思しらせむ

寄雨戀

つれくと思な侘そ五月雨ははれむ限の空をながめて

寄月戀

半天に絶む物かはてる月も入さの山をさしてこそゆけ

寄煙戀

たちそめし富士の煙のそのかみないへはゆゑしな思ひけちてん

寄山戀

折々の色をしみせて動なき山の心におもひもそつく

寄杜戀

こゝろなをうき田の杜のみしめ縄かけはなれすも朽はてぬとや

寄園戀

あやなくもたつ名をしひてとゝめえす世にかくれなき逢坂の關

寄海戀

みるめなき海へにすまはいか計り波のよるゝいをやすくねむ

寄橋戀

谷河の水こす岩のかけ橋のうきていつまで思ひ絶しな

寄埋木戀

今さらに事ならふとも名取河絶々見ゆる瀬々の埋木

寄鹽木戀

見せばやなおもき鹽木の海士小船浪にたゝふ袖のしほれを

寄宿木戀

なをさりにおもひなすてそやとり木の根ふかき程の契ならすや

寄柚木戀

思へたゝ柚のたつ木のたつきなき山のおくにも分いりてこそ

寄朽木戀

花の香も色をもわかし朽木にそなしもはてゝし人の心は

寄剝草戀

我おもひこかるゝゆへに春の野の草はみなからもえ出にけり

寄忍草戀

かくしつゝさても軒はの忍草はなのみなくといかてしらせむ

寄思草戀

霜やたひなけとかれせぬ思草つもるうらみや種となるらん

寄下草戀

色にこそつゐに抜けれ松の葉の末よりもるゝ露の下草

寄忘草戀

我ためにしけらするともわすれ草おひかばりなほ思しるへく

雜二十首

曉眠易覺

鳥のねを恨もそする老らくの思ひゝはりし夢の半に

窓燈

窓の内は螢よりけに燈のさすかに文字のかけはみえける

名所松

淡路島あはとみしより吹風やつたへきぬらむ住よしの松

名所浦

いまの世に昔の人の名をとめておもひもよらぬ和歌のうら波

名所嶋

和歌の浦の蘆へのたつの鳴こにみちくる鹽の時せしらるゝ

野風

かへりみる野原の道を行まいによはりもそする由かせのなと

橋雨

なみたてる松の葉しのきふる雨にかせわたるらむ天の橋立

渡舟

先の世に契し人や渡船往もかへるもたちまたるらむ

旅行

あつよかたけふあひみした都人程に雲をになるとつたへよ

旅宿

明日は又いつくの里に宿かりていかなる人と枕ならへむ

旅泊

日の本の内といへともから泊はる／＼わけし波をしと思

山家路

ゆきかへり柴うちりて山里のおくそしらるゝ道の一筋

山家鳥

なくとの山さと人と思ふらむ八こゑの鳥は心あるへし

田家煙

朝夕の煙そうすき菊はてし田面の秋のくれかたの空

獨遊懷

うらやまし海士のたくなはくり返し思へは海になすわさをなき

老後懷舊

こえむとは思はさりしな老の坂さかさまにしも立かへらはや

往事如夢

さむるまもなき夢の世に老はてゝうつゝと見つることは何ぞも

神祇

岩戸にて兒居根命のことわさは晝日の神のいかで忘れん

釋教

驚の嶺こゝに三笠の仙人の薪こりしなえにしとめこし

祝言

君と臣すくなる道に相生の松の千とせないく代つたへむ

天正十八庚寅曆沾洗吉日良辰仁沙彌惠空春日大明神若宮社乃廣前仁跪豆畏美畏天恐美恐豆申壽夫世既仁澆季爾及止謂止毛日月乃行度者不易也只人乃心凡俗仁遷利豆朝廷日仁衰政道月爾廢連利是越歎豆惠空祖神與利三十一世仁志傳東漂西泊憂悲苦惱毛一流再興乃太目也終爾其志越不遂奈利實子無仁依豆晴良公息兼孝公仁家督越讓天先途越遂天家業越相續_{太留神}慮奈利然仁長男五歲仁傳元服則右近衛少將藤原忠榮此仁越見留爾同年乃嬰兒仁不准奈理因玆惠空誠越致新天祈精志奉留夫和歌者託其根於心地_{止奈禮者}正慮乃趣於沈吟越凝志天詠千百首和歌備進志奉留義憤神明者_{奈禮}微志越納受之給豆此小冠國家棟梁再榮万機乃攝錄越意仁任天息災延命富貴仁子孫繁昌内心仁者慈愍越根源_{止志}神明佛智乃冥慮越仰喜外仁者仁義禮智信越專止之才藝者詩歌仁性心越竭志日本靈止成給遍登申壽

ことしむ月のはしめ雪のあしたに右近衛少將忠榮庭前の木に鳥のやとりけるを見て

雪ふれば鳥かすくみて枝にある

とし給ふに

日のあたいかにはやくなれかし」と付侍て吟詠すればおいさたのもしくてためしなとれば菅丞相五歳ばかりにて紅梅の下に現し給ふを是善公いたき奉て歌をよみ給へと申給へは

梅花へにの色にも似たりけりあこほうにもつけふかしもり

とよませ給ふ

定家卿家隆いづれも五歳の歌みな人しれる事なればしるすにおよりはす只五歳の例を引侍也法性寺殿月輪殿後京極殿峰殿此道に長し給代々集に當家の歌終不_レ漏也家をおこし給ふへきしたかたと見えける中にも風雅を二たび握翫あるへき事無_レ疑九句に及て大慶何事如_レ之乎

いつにて歌よみそめしためしなをいまひきおこす人のかしこさ

きさらき廿日あまり元服の時

さく藤の若きむらさきのもとゆひにむすひそこむる松の干とせな

奉納の一卷に書加事自愛感悦のあまりを神慮に納受し給へと

奉_レ仰也

春秋八十四歳

天正十六年聚樂亭御會御歌

(天正拾六年正月廿五日)
聚樂に於て御歌の懷紙

詠梅有佳色和歌

關白秀吉

梅花いく千世かけて咲ぬれとなむこの春は一しほの色

一てふ殿 從一位內基

植おきて春しもあらは咲梅の花の色かはつきしと思ふ

二てふ殿 從一位昭實

なへて世にもれぬめくみの春の色を見せてや庭の梅匂ふらん

さんる殿 左大臣信輔

咲いつる花の色しもあら玉の春にさかふる宿の梅か枝

きくとい殿 右大臣晴季

百しきのもの咲色も所えてみゆき待ける宿の梅か枝

あすか世大なる 正二位雅春

色もかも猶咲まされことしより春しりそむる宿の梅か枝

やふ大なる 正二位公遠

空に吹風ものとかに咲梅の花の色かや世におほくらん

くわんしゆし大なる 權大納言晴豐

色もかも梅にそちきるもろ人のけふのがさしや千世の初花

なかやま大なる 權大納言親綱

ときをしる雨に色そひ吹風もならさぬ枝の梅匂ふらし

ひの大なる 權大納言輝資

庭ひろみわきてうへそふ梅の花つさぬ色かやひさしからまし

立ならふ木々のなかにも咲やこの花は色かあらはれにけり
ちみやうめん中なる 中納言基孝

ひろはし中なる 權中納言兼勝

年をへて色まさり行宿の梅や四方にあまぬく匂ふ春哉

たかくらのうへもんのかみ 右衛門督永孝

萬世の色を見せつゝ咲梅の花に立よるもろ人の袖

あすか井の申しやう 左近衛權中將雅繼

いくとせの春にさかへん咲やこの花の色かのふるき立枝は

はちしやう 侍從賴隆

年々に色をかされて咲梅のいく世か君か春にあはまし

しやうこん殿 准三宮道隆

梅の花まつ咲そめて草も木もさかへん春の行衛をそしる

大かくし殿 准三宮尊信

色そふるのきはの梅に見る人のおらて千とせのかさしならまし

けんし 法印玄旨

色をうつし匂ひなとめてうれしきや袂につゝむ梅の下風

せやくのん 法印全宗

なかにらん御世のためしに咲梅の色かもふかき庭の面哉

みんぼうあん 民部卿法印玄以

咲梅の一もとゆへにときはなる木々も見ながら色にこそなれ

せうは 法橋紹巴

なにはつの梅の匂ひを春風の花の都の色となすかな

文祿三年吉野山御會御歌(文祿三年二月廿九日於吉野歌之御會御歌也)

はなのねかひ

秀

吉

とし月をこゝるにかけしよし野山はなのさかりなけふみつる哉
はなをちらさぬかせ

こゝるあるかせはふかしなふしのやまはなの盛な雪と見るまで
たきのうへの花

たきつなみくたすいかたのよしの川こすゑにのこせ花のやま風

かみのまへのはな

春はなを神のめくみのあるゆへにまふてみるやみよしの花

はなのいはひ

をとめこか袖ふるやまに千とせへてなかにあかき花の色香な

はなのねかひ

關 白 秀 次

いつかはと思ひ入にしみよしのよし野の花をうみ見つるかな

はなをちらさぬかせ

かたわけてなひく柳もさきいつる花にいとほぬ春のあき風

たきのうへの花

見るか内にまきのしつえもしつみ危よしの流の花のあらしに

かみのまへのはな

ちはやふる神やみるらんよしの山からくれなゐの花の袂な

はなのいはひ

治れる世のかたちこそみよしの花にしつやもなさけくむこゑ

はなのねかひ

石 大 臣 晴 季

ちりひちの山に生出し根さしよりけふのかさした花やまらけ

はなをちらさぬかせ

うつろはぬ木々のこすゑなさそふらし花の香はかりなくる山風

花のうへのたき

咲つゝくへよりおちてよしの山はなにせかれんたきのしら波

かみのまへのはな

人こゝるへたてもなしや神かきの花のしらゆふあかね色香は

はなのいはひ

うへそへて千とせのはるな契りなかん花も老せぬ影をならへて

花のねかひ

權 大 納 言 親 綱

四時おなしいるにもさきつけとおもふばかりの花のうへかな

はなをちらさぬ風

さそはすはなをふくともいとはめや花に見えたる春の夕風

たきのうへの花

みよし野やさなから華を水上になしておちそふたきのしら涙

かみのまへのはな

けふといへは大宮人のたちよりて神のいかきの花をみるかな

花のいはひ

うつしうへてあかね心にたちなれん花の千とせも君かまに

はなのねかひ

權 大 納 言 輝 資

かけたかき雲井の花にみよしの山をさなからうつしてしかな

花をちらさぬ風

かすみせば吹はらひても心あるや花にさはらぬ春の山風

たきのうへの花

岩ふれてみなきりおつるたきのうへのはなの梢はいかて手折ん

神のまへの花

春は猶袖ふりはへて行かふも花にみちあるかみのひろまへ

花のいはひ

色も香もかはらぬはなの木の本にいくよの春をたちなれてみん

はなのれかひ

まぢかぬるはなも色香をあらはしてさくやよし野の春雨のなと

花をちらさぬかせ

咲花をちらさしとおもふみよしの、こゝろあるへきはるの山風

たきのうへの花

花の色春より後もわすれめやみなかみとなきたきのしら浜

かみのまへの花

とし／＼の花のみきりのよしの山うらやましくもすめる神垣

花のいはひ

君か代は千とせの春もよしの山花にちきりはかきりあらしな

はなのれかひ

權中納言 秀保

年々にきても見ねともみよしの花にこゝろをかけぬまもなし

花をちらさぬ風

春はたいかせにこゝろをつくすかなよし野の山の花をふくやと

たきの上のはな

水上はいつくなるらんみよしの、たきにおちそふ花のしら浜

かみのまへの花

見わたせばよしの、山はしるたへに花の色こきかみかきのうち

はなのいはひ

天地のめくきもふかき君か代は花もいく春みよしの、山

花のれかひ

權中納言 秀經

みよしの、はなのさかりを見ぬ人に見せばやとのみおもふ計そ

はなをちらさぬ風

よしの山にすゑをわたる春かぜもちらさぬ花をいかゝたをらん

たきのうへのはな

みなかみに花やちるらんみよしの、たきのしら玉色におちそふ

神のまへの花

よしの山奥のみやゐにたちつくかすみな花のいかにけり

花のいはひ

君か代はたいしかりけりみよしの、花にたとせぬみよしの春風

はなのれかひ

參議左近衛中將 秀家

春ことこゝろをかけてみよしの、花の色香をまぢそかぬる

花をちらさぬ風

かせふくと花にはよけよよしの山わか身一つの春にはあらねと

たきのうへの花

みよし野や花のにほひもたかねよりかすみにもるゝたきの白糸

かみのまへのはな

植をきし神のいかきの花さかり代々ふるためしあるをちきらん

花のいはひ

白妙によしの、山はさくら花千とせふるともわすられんやは

花のれかひ

參議左近衛中將 利家

はなさけとこゝろをつくすよしの山またこん春を思ひやるにも

はなをちらさぬ風

ちらさしとおもふ櫻の花のえたよしのゝさととはかぜもふかしな

たきのうへの花

ちる花にたきのしら玉まきはりて雪かとみねの雲そかいれる

かみのまへの花

千早ふるかみのめくみになひてそけふみよしのゝ花を見る哉

花のいはひ

吉野山はなのさかりの久しきにきみかまはひはかきりあらしな

はなのねかひ

右衛門督永孝

春ならぬ時もかはらてさくらはなさかはきてみむみくしのゝ山

はなをちらさぬかせ

山かせもこゝろありてやたゆむらん枝も動かぬはなのさかりは

たきのうへのはな

みなかみのはなの錦をなのつかなるやよしの野の瀧のしらいと

かみのまへのはな

さく花にぬさととりそへてかみかきや長閑にかよふ春のみや／＼

はなのいはひ

花にめていこゝろのはへは年々もつきせぬはるに猶やなれ見む

はなのねかひ

左近衛權中將雅枝

花の木に限もあらぬみよしの野をこゝのかさねに植みてしかな

はなをちらさぬ風

春風にこゝろあればやさかりなるはなはさそはぬみよしのゝ奥

たきのうへの花

瀧つせのうへより見えてよしの山なかれもいてぬはなのしら浪

かみのまへのはな

神の代にうつしうへてやよしの山いかきになてる花の木たかき

はなのいはひ

おさまれる世の春なれば花も猶君をそまたんみよしのゝやま

はなのねかひ

侍從政宗

おなしくばあかぬ心にまかせつゝちらさて花を見るよしもかな

はなをちらさぬ風

となくみし花の木すゑもにはふなり枝にしられぬ風やふくらん

たきのうへのはな

よしの野山たきのなかれに花ちれはいせきにかゝる浪そたちそふ

かみのまへの花

むかしたれふかきこゝろのぬさしにてこの神垣の花をうへげん

はなのいはひ

君かためよしの野のやまの檣の葉のときはに花の色やそはまし

はなのねかひ

准三宮道澄

花の春くるにかきりのなくもかなあくまでさくら猶かさしてん

はなをちらさぬ風

みよしのゝよしやうらみし花さかりちらさぬ花の風のやとりは

たきのうへのはな

石はしる瀧のみなかみまさるやとみしはあらしの花のしら波

かみのまへのはな

神かきもうへをきけんは心あれやなのつからなる花のしらゆふ

はなのいはひ

かた／＼の花みる人の往来にもおさまれる代のなとはしるしも

はなのねかひ

常

眞

とし月のねかひもみちぬよし野山おくかおくなる花をとめきて
はなをちらさぬ風

おさめしる君かこゝろやあふかまし風ふかぬ世の花につけても
たきのうへのはな

ゆく水のはやくの事も思ひ出て袖をそびたす花のたきなみ

かみのまへのはな

千はやふる社のみまへの杉むらにかけてそ祈るはなのしらゆふ

はなのいはひ

あくまでもなかがめやせよし年々に春したゝすは花もたえまし

はなのねかひ

法 印 玄 旨

春かせもおほふかすみの袖もかなちらさて花をみよしの山

はなをちらさぬ風

吹も猶はなとゆめとなさそひみぬ風のちからや夜はの手枕

たきのうへの花

瀧波のおつとはみえてなとせぬや花もまされる水かさなるらん

かみのまへの花

一枝もななさがきはの香をそへて手向ことなるはなのいろかな

はなのいはひ

君かためはなの錦をしきしまややまとしまれもなひくかすみに

はなのねかひ

玉きはるわかおひらくの花もかな君かちとせの春ことにみん

はなをちらさぬ風

たちかくくすかすみのうちの花の色ちらぬも風のたよりにそみる

たきのうへの花

石はしる瀧つなかに落つもる花はみなからあはとこそなれ
かみのまへのはな

なへて世のちりにしまはるちかひなも花にみせたる神垣のうち

はなのいはひ

むすこけの青根かみぬの花さかりこするはきに十がへりの松

はなのねかひ

法 眼 紹 巴

花にけふこゝろはなきぬ春ことにおもひうかれしみよしの山

はなをちらさぬ風

御舟やま花のにしきのよはひしてのとけき春のかせやまつらん

たきのうへのはな

瀧のうへもあさからぬかなよしの山雨のなこりの花のしづくに

かみのまへのはな

杉むらのみとりの色もをしなへてあけのあかきに花やさくらん

はなのいはひ

植そふる吉野のおくの山さくら花のさかりも萬代までに

はなのねかひ

法 眼 由 巳

よしの山はるの木たちもをのつから都のうちにうつしなかはや

はなをちらさぬ風

さく花のちるともみえぬみよし野の山のほかなや風はふくらん

たきのうへの花

よしの川ちりそふはなの瀧ならてみねの雲さへなかれてそ行

かみのまへのはな

こゝろなき人やたならん花の色もみや木もりなるみよしの山

はなのいはひ

吉野山千とせの後も春をへて君かよはひにはなもあかなん

はなのねかひ

法橋昌吐

あらましに送りきつゝもはるをへし花もげふこそみよしの山

はなをちらさぬ風

吉野山すいふく風もかすみてやはなのにはびも明わたるらん

たきのうへのはな

水上の花さくいろにたきの絲もからくれなゐをふりいたすかな

かみのまへのはな

うつろはん色ともさらにみつかきのひさしき春に花もならひて

はなのいはひ

そのかみの春を思へは行すゑもなをいつまでのはなのみよし野

後柏原院御日次結題

御人數十六人 歌數千六百首

永正六己巳年九月九日始同年十二月廿日終
自永正六年至于正德三年二百五年

題

春二十首

歲中立春	野外朝霞	海上晚霞	山居子日	水鄉若菜
冰消田地	南北梅花	露暖梅開	春鴈離々	獨見春月
閑中春曙	柳無氣力	旅泊春雨	行路春草	山寒花遲
花下送日	落花入簾	桃花曝錦	留春不駐	

夏十五首

羈旅更衣	殘花何在	人傳郭公	寢覺子規	廬橘于低
民戶早苗	柚五月雨	湖五月雨	鷗船迴嶋	連峰照射
里蚊遺火	閑庭瞿麥	沙月忘夏	野亭螢火	晚曳蟬聲

秋二十首

幽栖秋來	二星適逢	織女惜別	夜深聞荻	荻花藏水
女郎花露	風動野花	鹿聲何方	秋夕傷心	遠天旅鴈
橫峯待月	明月如畫	十五夜月	雲間稻妻	名所擣衣
霧中求海	伴菊延齡	霜草虫吟	紅葉出垣	山路秋過

冬十五首

初冬落葉	遠鄉時雨	寒草處々	濱邊寒蘆	月照網代
連日鷹狩	薄暮千鳥	水留水聲	寒閨聞鼓	水鳥馴船

雪中殘鴈	眺望山雪	雪埋苔徑	爐火似春	老人惜歲
------	------	------	------	------

戀十五首	思不言戀	祈難會戀	歎無名戀	相契忍戀	不堪待戀
	臨期變戀	時々驚戀	憑書言戀	深更歸戀	後朝切戀
	逢日增戀	非心離戀	見形厭戀	數書恨戀	絕經年戀

殘月越關	風破旅夢	嶺林猿叫	翠松遶家	山家人稀
野寺僧歸	田家見鵲	樵路日暮	晴後遠水	滄海雲低
漁船連浪	江雨鷺飛	夜淚餘袖	憂喜依人	竹契還年

作者傳

人王百五代
後柏原院 諱勝仁

後土御門院第一皇子

御世准三后源朝子權大納言長賢女

寬正五十廿降誕文明二十二十三立太子

明應九十廿五踐祚大永六四七崩御賢具六十四

御集稱柏玉集

西三條實隆系譜

號後三條
公豐 內大臣

實豐 正二權大納言
公雅 權大納言

實雅 內大臣

三條西祖
公時 權大納言

實清 權大納言
公保 內大臣

實隆 內大臣永正十三四十三出家堯空號逍遙院家集名雪玉集
母左大辨房長女 天文六十三薨

公條 右大臣正二位太宰帥天文十三二十廿七出家法名仍覺號道名院
母左大臣教秀女

冷泉政爲系譜

號京極
定家 中納言

號中院
爲家 大納言
冷泉祖
爲相 正二位中納言

爲秀 正二權中納言 號五條
爲邦 正四下左中將 爲尹 正二權大納言

下冷泉祖
持爲 正二權大納言

政爲 正二權大納言法名曉覺
爲季 從二權中納言法
大永三年薨 家集號碧玉集 名宗圓 天文十二二月薨 六十九

飛鳥井雅綱系譜

飛鳥井祖
雅經 參議從三 新古今撰者 敎定 正三右兵衛督 雅有 從二參木

雅孝 正三中納言 雅家 從三右兵衛督 雅緣 從三權中納言

雅世 正二權大納言 雅康 正二權中納言 雅親 正二權大納言

雅俊 正二權大納言 雅綱 從一權大納言 法名高雅永祿六八廿一薨七十五

甘露寺元長系譜

甘露寺
爲經 正二中納言 經長 正二權大 隆長 正二權中納言

藤長 正三權中納言 兼長 從一權大納言 房長 頭辨

親長 正二權大納言 和歌所寄人

元長

民部卿石兵衛佐
從一權大納言
伊長
從一權大納言
天文十七十二廿薨六十五歲
法名清空
大永七十八十七頓
薨七十一歲
母中納言永經女

廣橋守光系

廣橋祖

從二權中納言

經光

從二權中

兼仲

正二權中納言

光業

從二權中納言

兼綱

從一

仲光

從一權大納言

兼宣

贈內大臣

兼鄉

正二權中

綱光

從一

兼顯

從二權中納言

守光

從一准大臣
大永六年薨贈內大臣

中山康親系

中山祖

忠親

兼宗

正二權大

忠定

正二參木

基雅

正三

家親

正二參木

定宗

從二權中納言

親雅

權大納言

滿親

權大納言

定親

正二權大納言

親通

准大納言

宣親

權中納言

康親

權大納言

東坊城和長系譜

後柏原院御日次結題

東坊城祖

正三治部卿

長綱

正三參議

秀長

正三參木

長遠

正二參木

益長

正二權大納言

長清

參木從三

和長

正二權大納言
享祿二年薨七十歲

四辻公音系

四辻祖

正二權大納言

公重

正二參木

實爲

從二參木

公春

從二

實鄉

左少將

季顯

正二權大納言

實茂

從二權中納言

季俊

權中納言

實仲

正二權大納言

公音

正二權大納言
天文九年薨

姉小路濟繼系

師綱

宮內卿正四下

親綱

從四上

家時

正三

師平

宮內卿正四下

賴基

從三

家綱

從三

昌家

姉小路左中將

基綱

從三權中納言

濟繼

參議正三位
永正十五年五廿九於飛州卒四十

後柏原院御日次結題

高倉永宣系

●範昌

從四位

永經

從三

永賢

正四下

永忠

從四上

範賢

長門守

範康

左近將監

範定

從三

永基

從四下

永親

參木

永宣

正二位

小倉季種系

●小倉祖
公雄

正二權中納言

實教

正二權大納言

公修

正二權中納言

公名

正二權大納言

公種

正二權大納言

實右

從二權中納言

季種

正二權大納言
永祿二年薨

●田向
資蔭

田向重治系

經良

從二參木

長資

從二權大納言

經家

從三參木

重治

正三權中納言兵部卿
天文四年薨八十四

春部

九月九日

歲中立春

御製

寶隆

政爲

季種

元長

重治

和長

長宣

守光

濟繼

公條

爲孝

公音

康親

伊長

雅綱

十日

野外朝霞

朝戸出の野守か庵よ世は春のかすみも袖に露けかるらし
あさな　雪のふる道たつれ来てまつ春日野に立つ霞かな

守光

時しらぬ山たにあるに朝な／＼すそ野のかすみ幾重立らん
野邊はまたかれふの草のあき霜に霞の色もむすほ／＼れつゝ
またさゆる雪のひかりに霞さへむらきえわたる野邊の朝風
春さむみ枯野の霜も打かすみいつる日影に今や消ゆらん
朝またき霜の枯生のとき／＼にかすみや野邊の緑なるらん
野邊はまた行人みえぬあきほらけ霞のほかに袖やならん
けさそ見る秋ふく風のいろよりも霞にかはるむさし野の原
朝日影いつるたかれは先みえてかすみ未野の色そはるけき
矢田の野やかすみ袖もあは雪にまたふきかへす峯の朝風
野を遠み深き霞のかきりをは日たけてはるゝ空にこそしれ
朝立ちてわたる淀野や舟よはふこゑは聞えてなほ霞むらん
春日野やゆかりの草のすり衣けさおりそへて立かすみかな
わか／＼の青野か原の朝霞かすみはてたる野邊のなちかた

十一日 海上晚霞

浪のうへは入相の鐘も程遠しかすみやゆふへかへる釣舟
立きある色やは／＼かむ々／＼は沖津しはあひにうかふ霞も
ゆふ鹽のひかたや遠くなりぬらん霞はてたる波のしつけさ
くれわたる霞の波にうきしまの松はいろなき春のひとしほ
鹽風は吹としもなき夕なきに立や霞の浪もあつけれし
あまの住しるへも浪の千里までかすみやけふり浦のゆふ暮
浦ちかく見えすはわかしおきつ船あとは霞のふかきゆう波
海士をふれ一葉まかはぬ波のいろも霞にくるゝ春の浦かせ
霞もや袖をかさぬるあまこも日もゆふくれの浦のつり舟
ゆふしほの干潟の松のうす霞春のうみへよいつはありとも

康親 濟繼 雅綱 季種 公音 政爲 公條 爲孝 實隆 永宣 重治 和長 伊長 政爲 康親 濟繼 雅綱 公音 季種 爲孝 公條 實隆

くれゆけは猶立そひてうなはちや霞にきゆる三つのあは鳴
さへ／＼し風はなこりも田子の海の浦風かすみ春のゆふ波
みつしほもかすみ夕への難波かたいふにまさりて曙もなし
くれてゆく霞のいろに波の上のあはときえぬる淡路しま山
おもひやる波路はるかに松浦渚にしに山なき夕かすみかな
海原やかすみもやうてゆふ波のなほさへかへる沖のつり舟
十二日 山居子日
なへて世のけふは子日の松の戸に山深き身のひく人そなき
住なるゝ山も初子によはふらし軒端の松の千世のほるかせ
柴の戸の軒端の山の姫小松ひかてやこれも千世を待つらん
たよりにもけふは子日の松とたにこの山陰よ誰につけまし
君を祝ふ千代はかはらし山かつの部をよその子日なりとも
すむ身こそいつ共わかれ山松の子日にあふも春の一しほ
山かけや子日にもれし松の垣ひかても千世の春やこもらん
岩におふる小松をあがて柴の戸の身をのすれても引子日哉
子日くりみやこの春やこゝろひく松はいつともわかぬ山陰
柴の戸の暫時はかりと思ふ身もけふは千年の子日をそする
山里はひくもうふるもとほからぬ松陰しめて子日をそする
山里に身をはおもはぬ子日にもちきりやおかむ松かせの聲
なのつからけふは子日とひきうへぬ小松も庭の山陰のいほ
子日すと柴の戸いつる昔の袖松のおもはんことばわすれて
子日しに立いつる宿の松の戸もいつれの年に引かうへけむ
子日する松はかすそふ山里になほ春ふかくさへかへるなり
十三日 水郷若菜

永宣 重治 和長 元長 伊長 守光 實隆 季種 康親 濟繼 雅綱 守光 政爲 公音 爲孝 永宣 公條 重治 和長 元長 伊長

河上に摘て歸らん若菜にもよる瀬は妹かあたりなや思ふ
 諸人のわかなつむてふ袖のいろに川邊の里も春をしるらん
 きえそむる雪もけふこそ三島江にあし間の若菜誰求むらん
 山水のなかるゝ末もにこるなり川邊の村やわかなつむらん
 春の來てふれとも雪は粟津野のみきはの若菜むれて摘なり
 ありて行雪間のわかな春といへば里はみなせの誰か摘らん
 里人はわかなもとむと川上の瀧のいとなき春にやあるらん
 つみたむる袖のうへにや拂ふらんみつ野の若菜淡雪そふる
 わかなつむ乙女か袖も玉しまの春のひかりにほふ川かせ
 さは邊にはわかなつむなり伏見山松の雪間の春のしるへに
 けふやまた野邊の若菜のかすゝに伏見の澤の根芹摘らん
 芹河の水の根芹のなかき世も誰かつみそめし若菜とかしる
 日影さしぬるむみつ野の里人のつむ手ひまなき深根芹かな
 かきわけてわか菜つまゝし數妙の美豆野のさとの雪の朝明
 雪間わくる遠かた人の袖見えてみつ野の里につむ若菜かな

十四日 春鶯呼客

谷の戸をまた出やらぬうくひすや鳴て舊巢に我さそふらん
 うくひすの鳴音をおひか言の葉にさそはれ出る心とやしる
 うくひすの音に誘はれぬつれなきを人にことばる春の谷陰
 さそはれてこゝにとび來は鶯のなく音も人をよふこ鳥かな
 さく梅の枝のうくひすおのれまた聲にも人をさそふ頃かな
 いたつらにはつ音はなしき谷の戸を人もととや鶯のなく
 うくひすよわれやはあるし隱家の心もしらす人さそふらん
 まつとひて花なもちきれ鶯のこゑこそあるし春のふるさと

公條 康親 濟繼 雅綱 季種 公音 政爲 眞隆 永宣 重治 和長 元長 伊長 守光

鶯にさそはれ來てやふるさとの春をもさすか人のとふらん
 さそはれん花のもとをばすれしな心いられの鶯のこゑ
 鶯の人來と鳴くはいづくよりとふへき友をかねてしるらん
 今よりの心を花にあしひきの山さくら戸のうくひすのこゑ
 里とはさしはの戸ほそも鶯の音にさそはれて人のとへかし
 うくひすは春のあるしと成はてて宿のこすゑに誰を待らん
 とへかしの鳴音もしるき鶯はいとしもとの人やわすれし
 のとなる心の友もうくひすの聲きく時そいとまなる、

十五日 永消田地

春來てもかへさてあるゝ小山田にむすふ水はよし残るとも
 山川のこほりも今になかるらん鳥羽田のおもに春風そふく
 あきかせの尾花か波も又や見むしつくの田井は水とけり
 けさもなほ氷なからにせきあへぬそは田の水の流れてそ行
 草かくれ水もとくる小山田につれなくむすふ春のあさしも
 雪氷とけゆくすゑのおちそひて田面にひるき春のやまみつ
 春の目のみ影よりこそ筑波根のすそはの田井も水解けれ
 春さぬと山田の氷したとけて愁より先に水やもるらん
 水とけもえ出る草のみしかきも早苗にまかふ春のあら小田
 小山田のたるひも春にとけぬらし水のうたかた蛙なくまで
 やまかけの水のなかれも音たてゝ田面にとくるうす水かな
 おのつから水もとくる淺田にやかてうち出る浪や見ゆらん
 かつとくる水のひまなもり初てひとりまかする小田の水音
 せきいれも苗代なからこほりとく田面しはしと水落すらし
 せきいれし水田の氷したとけてたちゆく末の聲そきこゆる

重治 元長 守光 伊長 公條 和長 公音 政爲 眞隆 爲孝 永宣 重治 元長 公音 和長 伊長 守光 雅綱 康親 濟繼

せかてさへ水は田面にますら男か心もとくるこほり成らし

十六日 南北梅花

さく梅のいろにもしるし日のうつる南のいきはまとの北風
月をうつす南のえたも北に見る星のひかりにもほふ梅か香
名にしおふ峯の春風吹分てちればひらくる梅か香そする
梅の花くれなゐにほふ日影にもそともの雪の枝のさむけき
大内やみはしも梅のにほひもて花はへたてぬ北のかみかき
おなし枝の南と北に咲く梅のおそくときにそ春はひさしき
かたわけて咲きちる梅や日の影も南の枝をさして知るらん
ふく風はさそふたよりか中垣の北の窓にもほふうめか香
都にもかつ咲きにけり春日野の三室の梅やさかりなるらん
くもるなよ月の南のむめの花影はこなたににほふはるかせ
こしの雪吉野の花のいろに出て梅さく枝のいつれを見む
都にも花をそけなる梅か枝になれし越路の色香をそおもふ
おもひやる難波わたりの春かせを都の梅にいそくころかな
谷ふかみ木こりの道の 西本朝此

十七日 露暖梅開

寒かれの雪にかはりて梅か枝も露のこいろの色香見せつ
春のいろに獨さきたつ花の枝やいつくの露のかゝる梅か香
のとなる夜の間の雨に咲初てなこりの露にしめる梅か香
梅か香をしのふの軒の霜も今つゆにとけたる花のしたひも
けさはなほ露ものとかにおき出てかつ咲く梅の色を見る哉

季種

永宣

重治

實隆

和長

元長

公音

伊長

雅綱

公條

政爲

康親

濟繼

季種

爲孝

守光

和長

實隆

元長

公音

伊長

伊長

十八日 春鷹離々

あさつゆにうつる日影も長閑にて花のいろそふ軒の梅か香
をしなへて木の芽は春の朝露に梅のみまたき花や咲くらん
なく霜のむすほゝれたる古枝にもけさ白露のにはふ梅か香
いつしかと軒端は春の霜さえて木末のつゆに咲ける梅か香
露もけさ春の光やこもるらん梅か香ならて花に、ほへる
うちけふり行とも見えぬ山水にしつえつゆけき梅のはつ花
朝日影のほる木すゑに雨はれて露さむかぬ梅か香そする
影うつす春日のとけき梅か香の咲く花ことにおつる朝つゆ
日の影のさすかた見えて咲く梅の心とけたる枝のしらつゆ
さく梅のした行く水もぬるむ日に木すゑの露の心をそしる
朝日さすあたりの露もくれなゐに咲よりにほふ梅の春かせ
日をかへて旅立つ鷹の歸るさもおなし越路やとまり成らん
つれて行中のへたてもうき雲におもへわかれの春のかり金
なのつから花見て歸る道やあるとをのかさまゝ鷹の行空
かへりゆくこゝろよいかに天津鷹たれも都の春をこそとへ
なれも又名残はさそな思ふかたに雲井の鷹のわかれ行とも
跡さきに行はあれとも名残おもふ心ふ鷹になくればする
かへるさはおなし道にと行雲のへたてよいかに天津かり金
まてといふこゑかとそ聞かへる鷹雲にさきたつ友したふ空
横雲の空にもはなれ山の端もたれにあまたの鷹のわかれ路
したはるゝ誰かなこりしる鷹金のおくれし空に又急くらん
かへる鷹おなし雲路のゆく末もこゝろゝの友は見えけり
空に過しはしむれ居て立つ鷹は山もそなたと今かへるらし

雅綱

永宣

公條

政爲

康親

濟繼

季種

重治

爲孝

守光

元長

永宣

公音

伊長

雅綱

政爲

爲孝

重治

和長

康親

濟繼

季種

季種

暮ふといつれか春にとまらしを後ろゝ鴈の行も悲しき
急ぐにや友もおもはてかり金のおなし道にも行わかるらん
行ふなき誰か玉章のあとならしかきもつられずかへる鴈金
つれてゆく數も霞のたえ／＼に鳴なる雁のおもひをさしる

十九日 獨見春月

ひとり見る所からかもさひしさの秋にかよへる春の夜の月
われはかり涙にかすむ袖もなしうき身や春の名立なるらん
ひとり見る我が影さへに曇りけり誰にかこたむ春の夜の月
このまゝにかすみなばてそ待出て友と見る夜の袖の月かけ
夜よしともたれにかつけん獨たにむかふ空なくかすむ月影
面影もかすめる空にひとりのみ見るとほしらし春の夜の月
なへて世にかすむものから身一つの恨ば月に猶やのこらむ
われならぬ人やはさてもだへて見むかすみに更る蓬生の月
身ひとつの老のあはれを思ふ夜やなみたの月に霞さふらん
さそな月なへての春に霞めとも獨かうへな世ほかこつらん
身ひとつは恨そはてぬかすむ夜の月も心に晴れくもるか
誰ならぬ影を友なるなくさめも月にすくなく霞むよなく
しく物もなき春の夜も我のみそ月にことはる床のさむしろ
哀しむらくひにはあらし春の月かたふくまでに獨見る夜も
雲霞われをやれたむ春の夜をおもふかなかと月に明して
月たにもかすめばうとき手枕のさひしさ思ふ友やなからむ

二十日 閑中春曙

夜や深きぬくらの鳥のこゑもせて霞にこもる春のあけほの
あけほのい空はかはらしとちこもる薔に春の色はなくとも

公條	守光	實隆	元長	永宣	公條	伊長	守光	雅綱	政爲	實隆	重治	和長	康親	濟繼	季種	公音	爲孝	守光	政爲					
鳥の音も霞のおくにはのかにて春しつかなるあけほの山	淺茅生にすむ身もこゝろありかほにおもひうかるゝ春の曙	誰かしるなへてうき世の花ならぬ霞のそこの宿のあけほの	春の色になにをか見まし住む庵は檜原の山のあけほのい空	明ほのゝ春にかかたむ色もなしうきをならひの淺茅生の奥	つく／＼のなかめにくらせとはかりの春や我が世の曙の空	草の戸になかめなれぬるあはれさのそれにもたへぬ春の曙	おもひしるむ／＼の門もいまさらにとちやばてゝん春の曙	けふそしるたゝ花鳥に過來しはいかなき夢の春のあけほの	雲霞いくへのいろを由ふかみしほの戸くらき春のあけほの	ひとしほのいろさへふかくかすむらし松の戸はその春の曙	おもひやるみやこの空もいかならむ柴の扉の春のあけほの	おもひやる心いくへの由里にすむともかくや春のあけほの	春の夜の夢をわすれてなにとこのおもひもなむ曙の空	廿一日 柳無氣力	みつとりの浪にしられぬ羽風さへ見えてかたよる青柳の糸	春風もやとるとはなしくちのこる老木の柳いとみたれつゝ	露にさへなひく柳の枝をよほみ風にばたへず猶さみたるい	ふく音はきこえぬ春の朝風もやとるにしろきあなをき	糸	春風のふかぬたえまもあさつゆの末葉かたよる青柳のかけ	つゆなこそつれなくは見れ青柳のいとまはかなき春の朝風	あまの子はふり分髪も引舟のよわき綱手になひくあなをき	見るほとそしつ心なきしなゝらん柳か枝を風にまかせて	ちとり飛ふ川添やなき羽風にもみたれやすきをたのか姿に
雅綱	永宣	公條	伊長	爲孝	和長	康親	濟繼	實隆	重治	季種	元長	雅綱	爲孝	永宣	公音	公音	爲孝	守光	政爲					

なのつから末葉におつる露にたに枝先うこく春のあなつき
寒からぬ風のけしきも身にしてみてなびくにたへぬ青柳の糸
青柳のこころよはくもなびくこそ春吹風のすかたなりけれ
風わたる川をひ柳かたよりになびきもあへすかいりしら波
さそひても音こそなけれ青柳はなびくを風の色に見せつゝ
ふく風のため間を見るも青柳のなびくはなのか心つからな
わか草のなびくたにある春風につゝみの柳さそなみたれむ

廿二日 旅泊春雨

枕かる波しつかなる春雨にとまのしつくそおつるひまなき
音せても苔のしつくや波まくらまされぬ夜のはるさめの空
ほしわひぬ須磨の磯屋の波たにもうきれの袖のよるの春雨
音もなき波のとまりの春の雨はそれもやささるゆめの故郷
こきよせてたのむとまりの一村も雨にかすめる浦のゆふ波
旅ころも船にぬる夜もとほれけり野山のほかの春雨のそら
しほしたに夢やは見えむとまり舟苔もる雨の春のまくらに
こきよする船もさはらぬ蘆の葉のみしかき夢や春雨のそら
梶まくら磯うつ波のものをうきにさびしさをふる夜はの春雨
降るとしも雨をはらしてかち枕音するときそ春はのときき
波まくら春の夜長きおもひれにまた降りつるあかつきの雨
春の雨もいかにもりけむ波まくら苔のひまゝ明る光に
はるさめのふるさと人もおもひしれなみの枕のためぬ雪は
とまり船苔のしつくのつくゝと雨きゝあかす春の夜長さ
聞わひてゆめ路むなしき波枕またやさばらむ夜のはるさめ
一夜たに波のうきれにきゝわひぬかくてはいかい春の長雨

濟繼

公條

重治

守光

伊長

政爲

和長

季種

實隆

重治

和長

濟繼

元長

雅綱

公條

伊長

政爲

永宣

爲孝

守光

公音

康親

廿三日 行路春草

春もさそとはれぬ道の跡見するよもきの枯葉のこる草葉に
もえいつるひまもとめゆく道たにも末はひとつの春の若草
わくるともおもはぬ草の末はよりもすそにしめる春の朝露
ふみなれし若葉つむ野の道のへに下崩かれて草そみしかき
わけてこそ萌出る色もしられけうへは古葉の野邊の道芝
春ふかく霞にこもる御馬草もたれかはからん道もわかす
初草のいかにもえてか道のへのゆきかへるまに緑そふらん
うつりゆく心そいかにあさみとり道はまよはぬ野邊の若草
道邊のしるへにむすふ程もなしはつかにもゆる春のわか草
一本もまたそれならて分る野の青むかれ葉や春のわかくさ
もえ出る草葉を見てもおもふそよ跡はたえぬ道も有けり
時しあれば青きを踏し草の上も果は行來の道によくらん
しもかれもまた春風のあさみとりこれや時世の道芝のつゆ
きえ初る雪ままとめて道のへにはやしたもえの草そ色つく
春深きかけともしらて朝露を淺しやわくる野邊のわかくさ
末遠きかすみの袖もみとりにて行手にかゝる野邊のわか草

廿四日 山寒花遅

山ふかみ谷のこほりも春しらてまた打とけぬ花のひもかな
山深み春またさむしよしさらば花と見るまで雪もふらなむ
さきやらぬ枝ふさしほり山さむき嵐そ花のちるよりもうき
咲やらぬ木陰におつる山水のおとのみさえて花の香もなし
山ふかくとひ來し花はつれなくてこそその嵐にかへる寒けさ
きえあへぬ外山の松の雪の色に花をこはる春のさむけさ

和長

康親

濟繼

元長

雅綱

守光

政爲

爲孝

重治

永宣

季種

實隆

伊長

公音

公條

元長

雅綱

實隆

政爲

重治

公條

たつれてもまた春寒き山さくらかつ咲色もいかで見ろへき
ほかの散のちにと花を山かせのおもふにさゆる心なりせば
さかぬ間の花にたとらむ面影もまた雲さむき山かせそふく
山守はなのかさむさや答へまし花のうへこそ人ばとふなれ
さき出ん後は風なき花ならはしはし太山の春さむくとも
寒かへる山路にのこる雪の色を枝の花ともいつかまち見む
こそにして花にうらみしつれなきを嵐にかこつ春の山かけ
さきぬへき花もつれなし吹風のまた身にさむき春の山ふみ
待人にこゝろのとめて寒かへる深山は花のあらましもなし
さき出ん花をもしろす雲のある軒端の山のかせのさむけさ

廿五日 花下送日

行かへり夜の間ばかりのあるしにてわが宿うとき花盛かな
斧のえも朽木の花の陰しめは日なふるほと幾世ならまし
けふ幾日なれし日數よ春風もたいまくおしき花のかけかな
色にそむ心つからやおくりむかふ花の木陰に永き日もなし
けふくんと春の日數を詠め來てうつろひかはる花の木の本
木の本になれ行まいに日數さへうつてふ名そ花に悲しき
花にこそ命をば思へ昨日といひけふと暮すは惜からぬ身も
見ぬかたに枕かへてもけふまではおなし山路の花の下ふし
奥ふかく咲そふまいにみ吉野の花に幾日の春をつくさむ
ありあけになるまで花を見つるかな山路わけ來し月の夕影
思はずもけふばといひて幾日をかたゝ假初の花にくらせる
けふ幾日われこそ峯の雲たにもゆふへはかへる花の陰かな
立さらすこゝろうかれて春毎にくらすや幾日はなの下陰

爲孝 伊長 康親 和長 季種 濟繼 公音 永宣 守光 元長 雅綱 守光 伊長 公條 實隆 政爲 康親 重治 永宣 濟繼 公音 季種

花に來てけふを幾日と思ひけん咲ける程は時の間にして
このまゝにとしの三年も花の陰吉野の裾といふもこそあれ
さく櫻くるるまでなれて吉野山よしや花にも世をやつくさむ

廿六日 落花入簾

ひまとめてちりくる花よ玉すたれまきの屏の雪と見るまで
よきてふけさそはぬさへに玉簾ひまもとめ來る花のした風
さそひ來はよし玉垂の内外なく花にゆるさむ春のやまかせ
さそひくるいつくの風を玉簾かけてもしらぬ花のいる香は
ちりかふや音なきかせも玉垂のひまもとめくる花のしら雪
花ちりてけさなほつらし玉すたれまきくらの夢ものこる春風
いるも香も内外をかけて散くるや花のたもとの釣簾の追風
推あての匂ばかりも釣簾の内に花とやいはん花を散くる
風は猶ふきそたゆまぬ玉すたれひまもる花の隙はあれとも
ちり來ては袖にそ積るたますたれ吹まく風の花のしら雪
はかなさを何そとへば玉すたれ露よりもろく花を散くる
よしやさは風も恨しこの間に木の本来らぬ花を散くる
花やさき風やさきにと釣簾の間の人の匂ひにひかれゆく色
一かたにいかゝ恨んたますたれひまもる花の風のたよりを
玉垂の隙もとめてもさそひ來る花にまたるゝ風もこそあれ
おしめとも花ふきいるゝ玉簾みとりな木々にかへす春かせ

廿七日 桃花曝錦

なりにあふ春のにしきと咲桃や柳さくらにたちかされてむ
薄くこき三千世の花の唐にしき着て歸らばやあかぬ木陰を
またとはゝ立やかへましさく桃のみなもとならぬ花の錦を

和長 爲孝 雅綱 伊長 實隆 爲孝 重治 永宣 季種 濟繼 守光 公音 元長 和長 康親 政爲 公條 公條 政爲 康親

ふるさとに花さく桃は誰か袖を入目にかへすにしき成らん
あひ思ふ錦とも見る色なれや物いほぬ桃の花のうへなも
古里となりて花さく桃園に誰かぬきかくるにしきなるらん
一むらのにしき色こき日影かな桃さくころのさとの木末に
さくら花都にさらすにしきなは桃さく山の木すゑにも見つ
今もそのにしき織はへ桃園の花のむかしもおもひしらるゝ
さく桃のゆふくれなゐの色はへておる人しらぬ錦なりけり
野も山も桃さく春のにしきなは柳さくらのほかに見すらん
見る人もまれなる桃の花の陰夜のにしきの名にやたいまし
故郷にきて歸るへきにしきとやくれゆく春に桃のさくらん
けふの日のあかすくれなはさく桃の花もや夜の錦ならまし
たてぬきの光をそへてさく桃の花のにしきを織る日影かな
花を見てかへるといはぬ人はなし袂も桃のにしきたちきて

廿八日 留春不駐

如何にせん留らぬ春に残る身の後れしとするも見ぬ別にて
あかす思ふ春もとまらぬ花鳥のあとは心やかたみならまし
吾妻よりくるにさはらぬ春なればかへるもとめぬ逢阪の關
いかなればあひも思はて行春をしたふ心もとまらさるらむ
風にうらみ雨におもひし心のみほかなき花の春はくれけり
おもひしる春や行らんとまるとも限しあらばおなし名残を
世には猶つらき別れも有とのみしたふな春のしらす顔なる
春よさてしたふにとまる方もあらは誰ゆへにかと又や恨む
山川の花のしからみ雲かすみなにいにかけてか春はとまらむ
よし野川なかるゝ水や行春のこゝろをしたふ人に見すらん

重治 元長 濟繼 永宣 爲孝 伊長 和長 公音 雅綱 守光 季種 實堅 季種 實堅 元長 雅綱 公音 永宣 康親 爲孝 公條 實隆

墓ひてもとまらぬ春のかきりなは心にのみやなほ殘さまし
身に積る年ともいはし春ばかり思ふ名殘のたくひやはある
逢阪の關守もなとこしかたにかへらは春をとめさるらん
暮る春もまたあらたまる物毎を歡く我のみ身はふりれとや
なれ／＼て何をかたみと思はまし花ものこらぬ春の別れは
春よ今しばしとたにも恨まばやいふに休らふ道はななくとも

伊長 政爲 重治 和長 守光 濟繼

後柏原院御日次結題

夏部

廿九日

霧旅更衣

おもひやる山路つゆけし都にもけふはかへけむ花そめの袖
花染のおしきのみかは都いてしなこりの袖も立わかれぬ
春もおしなこりはいつれ都いていけふたちかふる旅の衣手
朝ゆふの露にやつるゝ旅ころもけふ立かふる折そうれしき
ぬきかへて衣手うすし山風もけふの假寝よこゝろしてふけ
しほれ來し山分衣かへまくも惜とはいはしけふを待えて
はなのいろを惜むのみかは立いてしみやこの春の衣更して
かふるなもうしとはいはしたひころも都の春の花ならぬ袖
ふるさとの春のへたてと花染のほかに更まくおしき袖かな
時しあればけふこそかへめ夏衣旅のやつれの袖ならずとも
花染の袖やしはしもかへさるゝ旅は月日のゆくへなきにも
かへてたに露やはほさむ夏衣たもと草のまくらかる野に
つゆけさばかへてやまさる旅衣野山の春のわすれかたみに
たちかふる春の衣のわかれさへ露けきものを草のまくらば
しほれても春の形見はけふさらにかふるにあかね旅衣かな
たび衣かるきかうへに立かへて更にや身にも夏をしらまし
十月一日 殘花何在
散てこそよし野の奥も春くれし花の名残はいづくにか見む

永宣 雅綱 守光 伊長 實隆 公條 重治 康親 濟繼 和長 季種 政爲 公音 元長 爲孝 永宣

ちりはてし春の山邊の道かへてのこれる花をまたや尋れむ
たつれはやいつくの花に宿して飛かふ蝶の春をわすれぬ
なへてさく春こそあらめ山守の心ゆるさむ花やとはまし
尋れわび香やはかくるゝとはかりにゆけとも花は夏木立哉
たか里にほかの散なんかきりをも待しさくらの今匂ふらん
行ふなき花の香をすする夏かけてちらぬをしるもうきかな
あかすなほ青葉の底に尋れ見む風にしられぬ花もあるやと
吹風の匂ひを夏はしるへにてのころさくらにちる心かな
かけかくす雲のいつくそ山横ありてうき世の春もくれぬと
よし野山春より後もたつれ見むこゝろの奥な花にのこしつ
花はとも人にいはれと夏山やさくらかした水もゆくなり
花さそふみなかみとはみ山人の春をとゝむる住家とはゝや
わけくらす青葉の底にとふ蝶の白きを見ても花かと思ふ
此頃はなへて青葉の山さくら散のこゝろ色をいつくにか見む
しられすよせめては風のつてもかな春に後れし花も尋れん
二日 人傳郭公
われにのみなほ忍び音か郭公人はきゝつと世にもらせとも
初音をば我に忍びてほとゝきすいかなる中に先もらしけむ
聞とてもはや人傳の後ば世の初音なるへきほとゝきすかは
時鳥こゑを傳ふる言の葉はよしいつはりの有世なりとも
聞つともかたるを人の傳りになすまでうときほとゝきす哉
きくもたゝ人傳のみは雲井よりなを遙なるほとゝきすかな
待夜さへ我につれなきほとゝきすなと人傳にけさは聞らん
聞人のかたるをしらばほとゝきす忍ぶ音をや我におしまむ

雅綱 公條 康親 濟繼 政爲 元長 季種 爲孝 公音 和長 重治 實隆 伊長 守光 雅綱 守光 公條 伊長 重治

ほといきす人に傳えむ心とはしらてや忍ふ音をもらしけん
しらす世に何のむくいの時鳥さゝおふ名も初音とはなし
鳴つともいふ人なくはほといきすわきて我身に何か恨みむ
つれなきの限はありと千規ふそにきく音をたのみてそまつ
きく人もあればとたのむほといきす鳴へき空に心ゆるさし
なれこそは我につれなき時鳥さゝつとかたる人のはつ音よ
待さりしいつの間にかとかたり出る人に恨のほといきす哉
人をわかば我も忍びてほといきす鳴つる方の里やつれむ

三日 寢覺手規

折しもあれ寢覺の床の一聲は待にまされるほといきすかな
かたらふもなほ淺からぬ情かな寢覺をときの山ほといきす
郭公ねさめはなのか爲としもしらてやすくる夜半の一こゑ
ほといきす幾夜な／＼の寢覺にもこの一こゑを面影にせむ
了規おもふる度に鳴て來はねさめかちなる身をもうらまし
寢覺するをりしりかほにかたらふや世にたくひなき由時鳥
ほのかなる由時鳥ひとこゑをおなしねさめの誰にとほまし
鳴すてゝなにな名残のほといきす寢覺の枕月たにもなし
一こゑのさたかならぬや時鳥さくころさむる夢路なりせば
恨しと思ひしれとやほといきす今宵はまたぬ寢覺とふらん
子規なれもれさめの夜ころとやおなし夜明の空に鳴なり
思ひねに聞しやうつゝさめて後夢ばかりなるほといきす哉
こゝにしもめる夜をしらて時鳥おそくも夢の後に聞つる
ほといきすなれて聞へき山里のあらまし思ふ寢覺にそとふ
老もはやまくらにちかき郭公いづれおとろく寢覺とかしる

濟繼

時鳥ねさめのなみたおちかへり鳴音の數はなとかすくなき

和長

和長

軒ちかく枝うちなひきたちはなの實さへ花さへかほる夕風

元長

爲孝

ちる花はげにかるさ名に橘の實をむすひけるかけの木深さ

政爲

季種

そめぬへき色とはなしに立花の實さへ花さへ雨おもけなる

康親

公音

散てさへ花のなこりか枝をおもみ露うちなひきにほふ立花

伊長

康親

妹かそてにぬくや五月の玉と見てはな橘の實さへなつかし

實隆

永宣

花ちりて雨おもけなるたちはなに霜の林を見るこゝちして

公條

雅綱

雨はなほおもくや見えむ立花のみさへ數そふ枝のしけみに

重治

季種

なのつから花たちはなの花の鈴枝もたはいにふむ鳥もなし

濟繼

伊長

花も實もことし見そむる立花のわか葉におもき雨のゆふ風

和長

實隆

實をむすふ花橘にふる雨もしたてる色をそむるとはなし

永宣

政爲

村雨のなこりの露もたちはなの實さへ花さへなひく枝かな

雅綱

公條

おもく見る露のさ枝は花もみも匂ひおくれ軒のたちはな

爲孝

重治

のこしけり見るかうちに橘の實のなる枝に花のむかしな

季種

康親

雨はれて木すゑの露やのこらんみさへ花さへにほふ立花

守光

濟繼

たちはなの實さへ花さへしけりあふ枝おもけなる雨の朝露

公音

永宣

五目 民戸早苗

公音

公音

うへわたすけふの早苗の露の袖ほさても田子の秋を待らん

實隆

元長

早苗とるほかにひまなき民もなくつかふ時有道もしられて

濟繼

爲孝

ほかよりも先うへたてし程見えて門田の早苗しけりあふ色

重治

守光

民の戸のむろのはやわせとる苗にこゝにやまたも秋の初風

和長

爲孝

早苗とる田子のこゑくく日を我もおしとや蛙鳴らむ

政爲

うきわきに我世たのしむ民の戸やうたふ壁して早苗取らん
陰しむる門田の早苗うふるより稻葉の庵も見る心地して
いそかるい心の種もとりそへて田子の早苗や植わたすらん
秋の色やまたき見ゆらんうへわたす門田の早苗露深くして
家々の門田の秋もとほからず畔をへたてゝとる早苗かな
うへわたす賑か心も一むらとのこる門田のさなへにそしる
日頃へてふし立ぬらし民の戸のあくるをそしとる早苗哉
門田よりとりし早苗のけふはゝや千町の末に人さばくなり
立いてゝよそに見るたにさなへとる賑か門田をしつ心なき
日數へてうふる門田のさなへにはなくれ先たつ縁を見ろ
うへわたす門田のさなへとりく心は秋に先かよふらし

六日 柚五月雨

斧の音はたえてほとふる五月雨にひかね柚木をくたす山川
筏士は水かさもしらし柚川や雲にさなささみたれのころ
五月雨に柚のかりやは人もなしそれも朽木の名にや流れむ
五月雨や日ころは涙をせく石もしたになかるい水□□柚川
さみたれにひかね宮木も柚川の水のひいきに山彦のこゑ
時しあれば柚山川のさみたれにいつの朽木のなかれ出らん
川瀬をばくたさぬ山のさみたれに柚木や雲の波にうくらん
こゑたてゝいた川波や柚木ひく山路たえたるさみたれの頃
五月雨に川瀬を早みくたしてや柚木ひく身のうさも忘るゝ
ひき捨し柚木やくたす山川の瀬々におちそふ五月雨のころ
そこなく水もいつみの柚川にくたす宮木のさみたれの頃
うきわきになれてもさそな柚木引山路の奥の五月雨の空

永宣 爲孝 公條 季種 康親 雅綱 伊長 濟繼 和長 政爲 永宣 公音 伊長 守光

五月雨の目をふるまゝに引過てくち木の柚といひや初けむ
とりつくす柚木の跡もある雲のは山しげ山さみたれのころ
柚川やいかたの床による波もなほおとまさる五月雨のころ
斧の柄は朽もやすらゐいたつちに目をふる柚の五月雨の頃
七日 湖五月雨
あまほいさ海ふく比良の山風に歸るとも見ぬ五月雨の頃
むかふともなにか鏡の山ならむふもとの海のさみたれの空
さみたれば雲や志賀津の菰松のさゝ波よする風たにも無し
さみたればまのゝ入江にこそ波の色を尾花にあき風そふく
五月雨にみるめも波の海こしや山はかゝみの影もわかれず
雲うつむそなたや比良の海山もへたてぬ雨は五月なりけり
田子の浦やあらぬ淵なるさみたれに底さへ匂ふ花は残らて
志賀の浦や雲の波のみ重なりて水かさも見えぬ五月雨の空
五月雨の雲をかされて湖の海の水のけふりも晴間なきころ
五月雨の浮雲のほるにはの海にもとの水とやまた下らん
水をそわたるとは見しすはの海やまた雲とつる五月雨の頃
五月雨にとまふく船の行すゑは雲こそおほへ志賀のうら波
辛崎や松はひとつのみきはにもあらぬ波こそ五月雨のころ
かゝみ山かけ見る海による波もくもりはてたる五月雨の空
しほやぬ袖もほさしな志賀の浦や浪の幾重の五月雨の頃
さみたれにしける波もみかゝれて吹かたしらぬまのゝ浦風
八日 鵜船廻島
島かけのそなたになりぬ川上の里の鵜船やさしかへるらん
哀いかに明やすき夜のうかひ船しまかくれ行程やなからん

元長 爲孝 公音 守光 政爲 和長 永宣 守光 伊長 雅綱 濟繼 重治 公條 康親 永宣 公條

心をやこの瀬ひとつに川しまの行めくりても鵜舟さすらん
篝火のかけなきえゆく鵜かひ舟いまや島陰こきめくるらん
世と共にさすや鵜ふれの篝火はやみに明ゆくしま陰もなし
鵜かひ船月もあまきり明る夜になほしまくれ思ひ行らん
川島のなかれ洲とはみ鵜かひ舟めくりもはてす明ぬ此夜は
うかひ舟水の川しまゆきめくり影もかくれぬ夜のかゝり火
大井川見よや鵜舟にともす火の明石もさそと島かくれ行
川しまのこなたかなたの鵜かひ舟月の夜頃もかけや有けむ
めくり來ん闇もいく夜そ鵜飼ふれくらきより猶くらき嶋陰
川島やめくるも早きうかひ舟思へむくひのかゝりける世を
うかひ舟のほればくたる川しまのこなたかなたの篝火の影
川島のやくる鵜舟になす罪のむくひもかくや程なからまし
河上やくたすうふれの嶋かくれきえぬかゝりの影そ跡なき
おなし瀬にしけき篝や川島のへたつるなみの鵜舟なるらん

九日 連峰照射

道かへて鹿やゆくらんとしする山のきのふの峰の遠かた
峯つゝき絶めほくしの待宵にいかなる鹿の身をかくすらん
影うつるみれより峰に照射してもらさしとのみ鹿や待らん
さそと見るさつ男のともし夜を重ね峰を重ねて明す苦しさ
ともしする葉山のすゑの峰つゝき明るけふりそ雲に立そふ
のかるへき小鹿の道とをちこちの峰を残さすともしする影
何方に思ひかからむ小男鹿のおなし並なる峰のともしは
漏て行かたやなからんともしするさつ男も峰も獨ならねば
さな鹿の月待なれし峰つゝきあらぬともし影したふらん

重治	梓鹿のひとつおもひを遠近のみれのほくしにたき明すらん 哀けにいづれのの照射にか野にふす鹿のこゝろ寄らん 鹿をまつ幾重のみれも奥深くともすほくしの影にみえけり 夜雲かきさなる峰に影さえて残るともしを外山にや見ん まかへては鹿もしらすやともしするみれ立つゝく星の光に 明ぬるか峰もあまたに見し影のきえて少なく残るともしは よる鹿のともしあらはに峰つゝきあはれ立所を雲も隠さて	重治
和長		和長
公音		公音
濟繼		濟繼
守光	十日 里蚊遣火 かやりたくおもひつさせぬ山里の夜のけふりや峰の朝霧 夕けふりかすかに立てし住居をも蚊遣の末はわかぬ里かな みしか夜も明しやかれむ夕けふり雨打しめる宿のかゝり火 いかにたく里の蚊遣そ住む人もむせはゝおなし夜はの煙を なへてたく里一むらのかやり火やたつるけふりも雲霧の空 ゆふまくれかやりになつる薄煙里わくはかり打なひきつゝ 心なきしつかわさとや夕かほの花もあはれにかやりたく影 松原のおくある里の薄けふり夜ふかく立やかやりなるらん あまのすむ里のしるへもなへて今かやりにあかぬ夕暮の空 けふりをも月には立てし此里にたい宵の間のかやり火の影 かすかにて住世しられぬ里もなほ煙は見えて蚊遣たくらん 山本や一むらのこる夕けふりなほ里わきてかやりたくらし この頃やかやり立そふゆふけふりよそめにきはふ遠の里人 かやりひの影にも見ゆ佐てすむ人はおほかる里のあはれさ 雲をさへいとふへき夜の月になと里の蚊遣のけふり立らん 里人はそむくとなしにれぬ夜半もつきな煙にやつ蚊遣火	守光
公音		公音
濟繼		濟繼
守光		守光
康親		康親
實隆		實隆
永宣		永宣
政爲		政爲
伊長		伊長
和長		和長
元長		元長
爲孝		爲孝
康親		康親
公條		公條
雅綱		雅綱
季種		季種

後柏原院御日次結題

くらき夜の光を見せて庵むすふ野澤のはたるいつち行らん
くみなれし野宇か鹿のうもれ水有とやこいにはたるとふ影
誰かとてとひ来る野への草のいほ見えしは夜の螢ばかりな

十四日 晩夏蟬聲

鳴蟬のそめぬ木すふも秋ちかきこゑにしくるゝ杜のした露
すいしきははや秋風の木末より夏をわすれぬ蟬のもろこゑ
なくこゑはなにのなこりか空蟬のは山にくるゝ水無月の空
かはり行空蟬の世の夏もはやとまるとはなき露の木のした
鳴せみのこゑのしくれば夏はつる木末に秋を先いそくらん
きけはまた秋もすいしく蟬のなみたに秋のつゆや散らん
なほそ鳴人の秋にはあはしとも身を空蟬のおもひやはせぬ
秋風の木すふをまつや空蟬のつきぬ音になく夏はくれけり
秋かせにうつりかはらむ夏山の木末やしたふうつせみの聲
程なさをおもひやむせふ空蟬の羽におく露にかよふ秋かせ
色に出む秋もやちきる夏山の木すふしくるゝせみのもろ聲
枝の露に鳴とはしるし秋ちかきは山の蟬のこゑしきるにも
鳴せみのこゑもしくれて秋近きみそきやいそく杜の下かけ
みそきする森のした道くるゝより秋風告る蟬のもろこゑ
夏ころもうすきにおもふ秋風をいそくもくるしせみの諸聲
なくつゆの杜のしめ繩くるゝ日に秋風さそふ蟬のもろこゑ

季種 重治 爲孝

永宣 雅綱

政爲 和長

元長 公條

實隆 爲孝

重治 濟繼

公音 康親

季種 守光

伊長

秋部

十五日 幽栖秋來

すむ身たにたへしと思ふ蓬生に露うちみたれ秋そ來にける
あき風のたよりはかりやなへて世の數にはもれぬ蓬生の陰
とちはてし思ひし道の草葉にもさはらぬ物か秋は來にけり
閉はつるむくらの門もそのまゝにいつくを秋の道芝のつゆ
思ふとも花にはさかし草の戸の色をもまたぬ秋は來にけり
わびて住よもきか門のゆふくれに待としもなき秋のはつ風
いつとなく心よりなく露をこそなへての秋も宿と來つらん
くむ人も見えぬ板井の水の上に桐の葉おつる秋は來にけり
山かけの松の扉をとひ來てもさひしきものや秋のはつかせ
さひしさをおのか物なる蓬生の宿にやゝかて秋をしるらん
初風につゆ打ちりてよもき生の陰にもげさや秋の來ぬらん
露むすふけさよりしるし跡見えぬ庭のよもきや秋の通路
松の戸は色なき秋をふきかはる風のたよりに先しらせけり
いかならんかれても露の八重むくらしけれる宿の秋の初風
しられしの淺茅か奥の音つれも人ならましの秋のはつ風
さしこもるむくらの門も今そしる秋來る風のたより有とは

十六日 二星適逢

七夕のまれのあふ瀬にこゝろせよ紅葉の筏かさいきのはし

永宣

爲孝

濟繼 和長

政爲 元長

實隆 重治

公條 公音

康親 季種

伊長 守光

康親

公條

一とせの空をへたての雲きりもけふやはれ間の星あひの影
 七夕のけふのちきりの嬉しきは誰かかす袖に猶あまるらん
 あはぬ夜をちきりになして七夕の年にまれなる獨寢もかな
 一とせのうらみは世々にふりねとも更にや夢の星合はうき
 織女はさらに今宵そにひ枕なにとし毎のちきりともせむ
 うらみをはかきもつくさぬ行ふとや猶さら月星あひの空
 ほしあひの秋の目数の七車つむともつきしつくすこゝろは
 はし柱ちかきたえ間も行合のこよひ名におふ天のかはなみ
 待程やたのみならましたまさかのちきりあやうき星合の空
 一とせをかたる言葉のつゆの間をおもふもあかね星合の空
 たまさかにあふ夜うれしと七夕の天の羽衣うらみもやなき
 まれにあふうらみのみして七夕はいひよる中の初ともなし
 一年に一夜かはすはたなはたに誰かかしそめし枕なるらん
 うらみとかいふもほかなし七夕の夢もまれなる契にかりに
 待くるやなきさを清みひらふてふ玉々けふの天の川ふれ

十七日

織女惜別

待々てこゝろ休めむ程たにもまたみしか夜の星合のそら
 別路のつらさをしらば七夕のあはぬ月日もなくさみやせむ
 七夕のいく世の秋のわかれ路を心なかくもしたひ來ぬらん
 こゝろよばき別もさそな小車の牛ひきわたすかさききの橋
 天の川けさのわかれのうき瀬より立とし波をやかて待らん
 七夕に人のかしつる袖かけてぬらすにあかねけさの別れ路
 七夕のわかれのなみたけさよりや紅葉の橋に時雨そむらん
 あふ程もなみたをかけて七夕の手引の糸の立やわかれん

濟繼 康親 元長 政爲 守光 永宣 季種 伊長 雅綱 公音 和長 重治 爲孝 實隆 公條 爲孝 重治 和長 康親 元長 守光 永宣

彥星のあはぬ日数にくらへ見は一夜のわかれ猶うかるらん
 かきりなき秋はちきれと七夕のあかね別やししたひわらん
 七夕のけさの別にかへやせむ幾としのちきりなりとも
 さそなけに天の河原のあま雲のわかれもやらぬ明ほの空
 七夕のなみため秋ほしもあへすこの別れにや又しほらん
 今はとてよそなる峯のよこ雲におもふもかなし星合の空
 七夕のななき契はなにならてわかるゝ度に身をたくらん
 其まゝにかはるちきりを人に見よ別るゝ星のうきは物かは

十八日

夜深聞萩

ともしひのまたいく影をしるへにて窓より萩も闇の秋かせ
 おとろかす夢もこそあれ寢覺にはいとほてきかむ萩の上風
 見し夢のおとろくのみか小夜更て又もねられぬ萩の上かせ
 とはいやなまくら露けき萩の音に人待ふくる袖はいかにと
 小夜ふけて露もおつらん萩風につれなくかはる萩のこゑ哉
 さすかなる夢もこそあれ小夜枕あまりひまなき萩の音かな
 吹ちらし夕への風のした萩や夜ふかき露におれかへるらん
 萩の風ふけゆくまいに音すなり夢もむすはず物おもへとや
 明やらぬまぐらの露も夜ふかきに夢はみしか萩のうは風
 色もなきこゝろをそむる寢覺かなふらぬ雨さぐなきの上風
 萩の葉に吹たゆむ風の跡までもつれなき露を袖に夜深き
 いひしらぬ秋の心のかきりをは夜深き萩やさそふあきかせ
 さらてたに萩はあはれも深き夜のねさめなきそふ萩の上風
 夢はいきなれし枕のかれの音もよそにやさそふ萩のうは風
 とはるへき夢路はたえてつゆよりも心をなくたく萩の上かせ

季種 伊長 雅綱 公音 和長 康親 元長 政爲 公條 實隆 濟繼 公音 雅綱 永宣 季種 伊長 爲孝 守光

きくたいにれさめ物うき秋かせをなにやとすらん軒の下萩
十九日 萩花藏水

とまるともゆくとも見えす秋はきの散しく水のしたの心は
ちりうかは絶間も見えむ萩か花したゆく水や枝おほふらん
枝ひたす花こそ花よしからみにちらてもせくや萩のした水
せきとめて花にや袖をしほらまし萩うつらふ庭の池みつ
たえ／＼の音にこそしれ萩萩なる花のみうかふ庭のやり水
とてもちる名になかれなん萩萩原なに咲かくす花のした水
枝おほふ花のか／＼の影も見すちらぬにくもる萩の下水
なかれ出るすみは色なる秋はきの花の下水かけはうもれて
みかは水よしや拂はし萩の戸の花のちりにはうもれ行とも
ふる枝にもとのこゝろのはきか花野中の水を夏と見るらん
ま萩散る野へにしられぬ忘水うつろひはてむ後や見てまし
くれなるの色にや底もなかるらん花にせかるゝ萩のした水
胡蝶にもろき小萩の散しよりあらばれそむる花のした水
花さかりした葉もしらぬ秋はきの影ゆく水の色はたえつゝ
埋めなほ散なんのちもはきか花よそこにさそはぬ庭のやり水
二十日 女郎花露

重治 元長 政爲 實隆 永宣 伊長 庭親 濟繼 重治 公條 公音 和長 雅綱 爲孝 季種 公條 實隆 重治 濟繼 雅綱 永宣

しほしなと心もおかて女郎花あたる露になひきそめけむ
口なしの色に咲出はをみなへし露のあた名もいか／＼晴けむ
おくつゆを玉のかさしにみかきてもなほ光そふ女郎花かな
駒なへて野へ行人の袖のうへに露はおちけるをみなへし哉
置まふ露もえならすさく枝にうつればおなし女郎花かな
立よるも我名はたし女郎花露をちきりになひき初ぬる
なく露になひきはてゝも女郎花しめゆふ野への主な忘れそ
なひくとも露こそかこてをみなへし人に多かる心見えすは
をみなへしかさしの玉の露ならはちるを哀と猶や見てまし
露の間のちきりはかりに女郎花心よはくもはやなひくらん
廿一日 風動野花

元長 政爲 季種 公音 伊長 守光 和長 爲孝 康親 和長 公條 重治 濟繼 雅綱 永宣 元長 政爲 季種 康親 守光 爲孝

風さばくすゝの野原の夕くれになひく千種の花やちるらん
咲花や冬かれまたてしほれまし野原の風のみまりにけしき
正木散山よりもなほ花のうへにこゝろをなほる野邊の秋風

廿二日 鹿聲何方

山風の空にきこえて鹿の首の秋のあはれや四方にみつらん
たゝへ來し尾上やいつく秋風のまくらにまふ棹鹿のこゑ
男鹿なくあらしの木よ我ならぬおのか妻さへ聞かまとはむ
秋風のつてもほのかにさそひ來て猶そこなきさを鹿の聲
しるへなく里とひかれてくるゝ野にたまゝ聞も男鹿鳴聲
をちこちに所きたためぬ鹿の音はかくるゝ妻や尋ねわふらん
鹿の音はいづれか先にさそひ來し峯にも尾にも秋の小夜風
この頃の野分ゝ風いづれなほ身にしむ鹿のこゑに吹らん
あくるまで妻もつれなく鳴鹿はふもとの野へか歸る山路か
あはれなほ我そ答ふるなく鹿やいつれ山彦をちこちのこゑ
磯山もいつくか近き秋かせの船にのる夜のさなしかのこゑ
その山とさためぬ鹿のこゑなれやいつくも秋の心うかれて
そこなく聲きくときやさな鹿の妻とふ道も猶たとるらん
敷たへの枕にかはるさなしかの聲さためなき夢はさめつゝ
そなたそと聞もさためぬ妻戀によそまでまふ棹鹿のこゑ
松風のさばく夕はいづくそときゝもなかれぬさなしかの聲

廿三日 秋夕傷心

露やしる年深からぬ秋たにもゆふへは袖のぬれしならひに
脊そとて世の人なみに花も見ず我にしらるな秋のゆふくれ
いかにして我よりおいの心にも堪げるものそあきの夕くれ

伊長 夕にも秋にも限るうきならぬ身をさへなとか思ひそふらん
公音 夕くれに一しほまさるあはれきの心ないかて秋にかこたむ
實隆 うきなからいつくの秋を過し來てこの夕暮に堪しとすらん
公條 あはれいかになひく淺茅のいろゝも人の心の秋の夕くれ
重治 またも逢む秋をもらしぬ我身にはうきも名残の夕ならずや
濟繼 あきそとて物おもふことの夕暮を心にとふも答へわひつゝ
雅綱 わきて身に物思ふ人はいかならん秋の夕もつらきならひに
永宣 いとはしよ夕の秋のそれならて何を憂身のたくひにかせん
元長 雨の樞草のちまたのおきふしに猶わびきする秋のゆふくれ
政爲 なかめつゝ夕となれば誰か世よりうきにし堪ぬ秋を知らん
季種 ことはりのうき世なりけり心より思へば秋の夕暮もなし
實隆 露のくれ草の秋はいかならん人のこゝろそあきにしほるゝ
和長 うき物といひはてゝも秋よ今ながめすつへき夕暮はなし
康親 廿四日 遠天旅鷹
くるかたのしられて聞も天つ鷹いつくの雲をそすかなる聲
公音 急くらんみやこの空は程なくて出しこし路やとほきかり金
康親 都には見わたす山もはるげきに越路の鷹のいくか來ぬらん
爲孝 雲わけていくたび鷹のゆくときといづくかおなし旅の中宿
守光 なか空におもひやわふる古里もみやこもとほき天つ鷹かれ
伊長 天津鴈になしをりと雲水の跡なきみちをわけて來つらん
實隆 來しかたを天つ空にやしのふらん雲のはたての鷹の一つら
政爲 やつれ來し旅もさそなと來る鷹の雲路隔てかすかなるこゑ
重治 旅の空なほはるけしとおもふなよ都の山をこゆるかりかれ
公音 うき雲をまきれて行もほのかなる聲をしるへのかりの一系列

濟繼 伊長 雅綱 元長 公條 政爲 公音 伊長 康親 守光 季種 和長 爲孝 雅綱 永宣 元長 公條 實隆 政爲 重治 公音 伊長

天つかり雲のよそなる音つれも誰がすむ山のたよりとか待
おもふにも幾うみ山なしのき來し心やかたる初鴈のこゑ
まちえても都を旅となく鴈のこゑさへとほき秋にかひなき
をのか空へたての雲に音をなきて都いそかめ鴈のあはれさ
むれてある田面やとほき都には空にのみきく天つかりか
いつくにか宿りはからん來る鴈の都をたひの空にまよひて

廿五日 横峯待月

峯たかみよこほりふせるふもとにも月は立待の小夜の中山
峯續き高きかたへは木くらくてよそより月の影そほのめく
うき雲の横さるみねの秋風にこゝろつくせとなるる月かな
かひかれを今や出らん月かけになほ雲うつむ小夜のなか山
まつほとほくらき高根を雲かとも影見ぬ月に先いとふかな
あき風もさむき音羽の瀧のうへの峯やそなたと月を待かな
峰高みこゝにこそまで待すともそなたの里は月や見るらん
をそくとく出へき月の影としもわかれぬ峰につれなくそ待
まちわびて更ゆく空は横雲のそれかとにほふみねの月かけ
心あてにおもひし峰の雲とほくあたりも今はにはふ月かな
まちわふるたかれの雲もそれながら松をつくして出る月影
まちわひぬ山のこなたのゆふやみに峰こそ月の出やらぬ影
しはしなほ横さる雲の面影とおもひしみに月そほのめく
待わひぬふもとの雲も風こしの峰こそ月に立のほりつゝ
このまゝに明やはなれん待更る月のたかれのよこくもの空
あちきなく待出し月もよこ雲のみね一すちにあり明のそら

廿六日 明月如畫

爲孝

康親

和長

季種

守光

永宣

元長

公條

實隆

政爲

重治

伊長

康親

爲孝

濟繼

守光

季種

雅綱

公音

和長

曇なき月を夜ともおもはてや寝たるからずの鳴さはくらん
よるならぬ都の名をもつきかけの千里に見するあき風の空
山鳥もひとりや寝んますかゝみ照すは月の夜としもなし
なほさりに見し影いかにすむ月の夜とは人の空めなるらん
この頃の月の秋にや文まなふ窓にはくろく夜をわするらん
よるひるとわきて見るへき色となし隅なき月のてらす光は
きえやうて光そひゆく露にこそ日影を月のそらとしも知れ
明るかとくまなき月におき出て思ひしよりもなるゝ影かな
かれの音や月見ぬ里をしらすらん寝なき空は夜としもなし
夜を日に繼てし人のこゝろまでさやかに見する月のなか空
くまもなき影にむかひて夜とたにおほえぬ空に更る月かな
さやけさを露のふるまと思ふには何をかやとり月の下草
かはかりの月には誰かふし糸のよるとはいかて枕さためむ
すむまゝに櫓のくまもなき月によるをわするゝ鳥の聲して
夜をへたつ露のひるまを面影にうつすかゝみや月はるゝ空
鳥羽玉のよるとは見えし一むらの雲のよそなるつきの光に

廿七日 十五夜月

元長 公條 實隆 政爲 重治 伊長 康親 爲孝 永宣 和長 雅綱 公音 濟繼 季種 守光 元長 公條 實隆 政爲 重治 康親 爲孝

おほかたの秋を光のはしめにもなかの月そさらに照そふ
一葉より月もる桐のした水も最中の影やさらにすむらん
わきて見む葉月の月も名にたてる今宵いかなる影か添らん
ひといせの秋の中にもこよひはとかれて心の月もくもらず
かそふれば心のくまか月影の似る夜半もなき水のなかには
最中そと思ふ光は効もなし知らてあこかれん月にやは非ぬ
秋なからことなるものは名にたかき一夜の月の光なりけり
めくり來て満ぬる月のいつはあれと中にも中の秋の夜の月
おなしくは名高き月と聞ばかり身に知ほやなめてん惜きな

廿八日

雲間稻妻

はかなしとなにおもひけむ浮雲を跡にのこしてきゆる稻妻
きえかへり此世を露のたくひとや空なる雲もいなつまの影
野へとほき外山の雲の一むらにかよひなれたる稻妻のかけ
いかばかりてらす雲間に稲つまの跡なき影に見ゆる山の端
とめぬへき影をはいなと稻妻の雲のよそめは餘りはかなき
村雨のそらにまさるゝ光かな雲のたえ／＼見ゆるいなつま
ゆくまなき露のちきりに稲つまはほのめく雲を面影にして
雲の端にまたぬ光はいくたひか心うこかすよひのいなつま
しはし猶おなし雪間にかよひてもありとたのまぬ宵の稻妻
いなつまのひかりに見れば村雲の色すまましき夕闇のそら
むら雲のでらしもはてぬ稻妻によるゆく人や道まとふらん
雲くらき曉月の露のうへにかふともなきいなつまのかけ
風さばく雲のたえ間の影またてをのれもれ出るよひの稻妻
雲の端も光ばかりのいなつまは何をすかたに時の間も見む

永宣

空にしもうつると見しや程もなくかへる雲井の稻妻のかけ

雅綱

雅綱

折しもあれ立田のあらし夜やさむきゆふつけ鳥の衣うつ聲

實隆

公音

秋ふかき生田の杜のあき風に身にさむしとやころも打らん

重治

守光

打たゆむ木曾の麻衣淺はかにまどろむ程やよにしられん

爲孝

和長

月になるなにはの蘆火たきすてゝこやの軒端に衣うつなり

永宣

伊長

秋さむき槇のしま人たへかれてさらさぬ布も月にうつらん

和長

濟繼

ころもうつよし野のおくのあきの風身にしむ色や花に吹聲

公條

季種

あき風の目をへてさむき夜もすからおきぬの里に衣打なり

元長

元長

夜なさむみ今や音羽の山ひこもこたふるばかり衣うつらん

政爲

公條

須磨の浦や波こゝもとに打そへて囁は音のそれとしもなし

康親

重治

名にも似す里は十市の小夜衣うつ音ちかくまくらにそきく

伊長

永宣

うつ音よ誰なしのふの里とほみそれかあらぬか夜半のさ衣

雅綱

政爲

住來しはあらぬものから深草や里は野風にころも打なり

公音

伊長

姨捨や山かせさむきあきの夜をなくさめかれて衣うつなり

季種

濟繼

小夜衣うつ頃よりやまどろまておきぬの里のゆめは絶なん

守光

守光

秋しのや外山の里のなく露もよそにしられてころもうつ聲

濟繼

季種

ころも打おとば音羽の出こえて關のこなたもおなしあき風

公音

公音

三十日 霧中求泊

永宣

實隆

行舟やとまりいつくたととるらん霧間にしげき梶こたへ哉

和長

爲孝

霧のまにかち答へして行ふれもいつく泊といふよしはなし

公條

康親

藻鹽やく浦のとまやとこきいれは霧のまかきにまよふ友船

元長

和長

つなくへき船のとまりはそこしも思ひきたため薄霧の空

元長

泊ぞと見えしは霧のうきしまによせてやさらにまよふ船人
霧くらきみつの泊は見つとしてみなくそまよふ秋のふな人
船とめてたのむとまりも牛窓やあききりくらき沖つしは風
から横おす壁をしるへに行舟もおなしとまりか夕きりの空
夜もゆく波路なからにこく舟のとまりいつくと霧まよふ空
霧のうちはこいそ泊と聞てたに猶まよふへき船のよるへを
くれにけり三津とさため泊さへ波路のきりに迷ふ舟ひと
浦となく霧立まよひゆくふればこいそ泊とよるかたもなし
たのみ来し泊いつくとこきゆかむみきはもしらぬ浪の夕霧
霧の中にこき行船のそのまにこいな泊と行かたやなき
こくふれや霧のなかにも唐琴のとまりは波の音にしるるゝ
霧深みたとるゆふへの浦傳ひいつくに船をさしてとめむ

十一月一日 伴菊延齡

うへてたに幾秋なれぬしら菊の花の千とせはまたや待見む
咲菊のしたゆく水や千代かけて秋をせくへき花のしからみ
仙人のすみ家におふる菊の花うつす宿にも千世は經ぬへし
あかす見て千代もまことに露の間と思ふばかりの秋の白菊
すゑの秋の花に匂へるしら菊を千世のかさしの初とそ見る
仙人の千とせのあきをつむ菊の九かさねにあかすちきらん
移らふなあたにもなきて秋の菊ひとへに花の千世や契らむ
しら菊の花をし見ればあきといひ春と共に幾世とかしる
あひにあひて今九重にさく菊やつゆも千年の敷におくらん
うへそへて君が千年のゆくすゑをけふより契る庭のしら菊
いまも其山路のきくのした水や汲てつさせぬ秋をしらん

實隆 政爲 重治 康親 爲孝 濟繼 季種 公音 雅綱 守光 伊長 永宣 公條 元長 實隆 政爲 重治 康親 和長 爲孝 伊長 濟繼

置つゆに千とせの敷のよはひをも猶つみ添む庭のしらきく
打ばらひ手折かさしも君かため千代にや千せと菊の上の露
よるつ代と秋もつもらば音にのみ菊の白つゆ淵とこそ見め
うつらふと見るも盛の秋の來て老せぬ花に身をや忘れむ
匂へなほ千年の秋をとし毎にいく度なれてちきりをくらむ

二日 霜草蟲吟

かれはてむかきりやいつれ鳴蟲のこゑも色なき霜のした草
花の色はあへすうつらふ初霜にそなたにのこれ松蟲のこゑ
朝な／＼霜のふる葉のよもきふに淺き陰よりよはる蟲の音
初霜のなかのかや根よ蟲の音よいつれか先に枯まざるらん
露をこそたのむ陰なれ蟲の音のかれぬやいかに霜のした草
きり／＼す聲はきえゆく草垣のゆふ日に霜の色そつれなき
木の葉たに遂にしほるゝ秋の霜蟲の音そへて草ものこらし
霜にあへすかるゝか色も淺ちふのをのれさひしき蟲の聲々
蟲の音もなひく淺茅の色こになく霜よりや思ひみたるゝ
置まよふ草こそあらめ蟲の音もかれ行野へのゆふへ明ほの
草の原たのも陰なくなく霜にいまいくほとを松むしのこゑ
なく霜の草のそこにも鳴蟲のなほかれのこゑもこそあれ
こゑ／＼に聞しも今や松蟲のひとりつれなき霜のした草
なくしもは拂ひもあへぬ草の葉につれてや蟲も枯そむる聲
蟲の音もななかれ／＼になく霜の色にきえゆく草の原かな
あはれなる霜のかれ葉の草根をもたのむ陰とて蟲の鳴らん

三日 紅葉出垣

中垣のすゑこすばかり我が物と見るばちきりの薄紅葉かな

守光 季種 雅綱 公音 實隆 政爲 重治 和長 爲孝 濟繼 季種 公音 元長 康親 伊長 守光 元長

やまさとは垣ほにあまる紅葉のおく物ふかき秋のいろかな
 やまさとは庭の草垣うらかれて枝こす色のふかきもみち葉
 岡への宿の木すゑの色つきて眞垣や山とよそに見ゆらん
 はふ鶯のこすゑも山と岩垣はかきこもらぬもみち葉の色
 吳竹の根はふと見えしなかいきにあらぬ色そふ秋のもみ葉
 思へともおほふやせはき袖垣のすゑこす紅葉あらし吹なり
 露しくれ染つくすよりもみち葉のたえ間に見ゆる庭の松垣
 山かつの垣ほのもみち一えたはしほりのこすも心ありけり
 くれたけの笹の山のしたもみちいかなるつゆの色に出らん
 しくれてもかた枝ばかりはかひなしと笹を山にそむる紅葉
 庭に見るあるしよいかに外面にも越る垣ほの枝のもみち葉
 打しきれいかに隔て中かきのよその木末ばそめまさるらん
 隙をあらみ紅葉はよその詠めにもあるしに惜き賤か袖垣
 隔なく中垣こゆるもみち葉はいつれの方のあるしとか見む
 誰をまた見まくはしとか色に出て神のいかきもこゆる紅葉

四日

山路秋過

くればつる秋のこえ行跡ならし草木しほるゝ山のしたみち
 すゑ遠くしくるゝ雲の山風に見えてとまらぬ秋のわかれ路
 わかれ路におふるもそれと葛の葉のさ山の風や秋を恨みむ
 更にまたわたるもおなし山路ゆく秋やかきりの色鳥のこゑ
 立田山もみち分まよひくれてゆく都の秋や夜半にこゆるん
 絶はつる深山路なから來し方をのかしるへと秋は行らん
 秋もいま鶯のほそ道わけてゆく宇津の山こゑあふ人やなき
 花もみちおもひのこさぬ山路にも心をとめす秋やゆくらん

公條 政爲 重治 和長 爲孝 濟繼 康親 永宣 伊長 守光 季種 公音 雅綱 實隆 元長 公條 實隆 政爲 重治 康親 永宣 伊長 守光 季種 公音 雅綱 爲孝

なかれては木の葉をのこす水もなし山路を出て秋や行らん
 あはれしる山路の奥もけふのみと思ふにおしき秋の空かな
 ゆく秋や有明の月をしるへにて山路の霜にあとをたつらん
 したへとや山路のすゑにはふ葛の恨かほにもかへる秋かな
 散紅葉さそふあらしの日にそへて山路の秋そくるゝ程なき
 棹鹿の跡たに見ゆる山路にもしらぬ秋のいつち行らん
 あふ坂やせきもる山のかひもなく秋は今こそ杉のしたみち
 そめつくす紅葉のぬさも手向山木々のした道秋やゆくらん

永宣 伊長 濟繼 守光 季種 公音 雅綱

後柏原院御日次結題

冬部

五日 初冬落葉

山かつも山わけころも冬の來ておち葉に袖の色やかふらん
あらし山にしこそ秋と思ひしに落葉と見れば冬も來にけり
さそはいと思ふ木の葉やかみな月けふ立風にはやく散らん
根に歸る木の葉みたれて庭の面に何處を道と冬の來ぬらん
一葉にもおとし初し秋の風はらひつくして冬は來にけり
深からぬ山の木の葉もみたれそふみれの嵐に冬や來ぬらん
冬來ぬとけさふく風や秋にちる一葉の庭をまたうつむらん
秋のうちは堪し木の葉の風の上にもろきを冬の心とや見む
冬きぬとちるを色なる紅葉に露のたえなくさゆる名もうし
秋もかくもろき木の葉の残りなく散もや冬のしるし成らん
神南備の杜はけふこそ冬の色に兼て移らふ一葉たに無き
吹風は露とみたるもみち葉や霜さむき松の冬を見すらん
冬の色に思ひもなすか木々の葉の名残なき迄けふは散つゝ
庭の面の夜の落葉をけき見れば霜をかされて冬は來にけり
ちる木の葉まよはぬものそ冬は來ぬ嵐や山の道もわくらん
散はつる木の葉に冬の色を見て枝にすむ鳥あきやこひしき

六日 遠郷時雨

住の江のとを里小野やしくるらん松の木すゑの船のうき雲

和長 永宣 伊長 元長 實隆 重治 政爲 康親 爲孝 公音 季種 濟繼 雅綱 守光 公條 和長

しくれつる袖うちばらひ糞はして入日にくたす宇治の柴船
都には晴ぬる雲のゆくすゑのふもととのさとに今そしくるゝ
いく里なしくるゝ雲の末ならむ降みふらすみはるゝ空かな
誰か里の袖をたつててしくるらん木の葉のすゑの遠の村雲
けふも又ふるの山邊のいかにそと袖のほになる夕しくれ哉
三輪の山檜原くもれる程もなく十市の里やはやしくるらん
行駒のうかへる雲も山こえて木幡のさとのしくれをそしる
遠かたの里と見るとも曇り來るしくれば神に猶やながらん
故郷もそなたとはかり詠やる時雨や袖を先ぬらすらん
遠かたの里はしくれて晴くもる月の桂のかげのさむけさ
見るかうちに都の空は晴初て雲ある里やいましくるらん
生駒山しくるゝ雲をいかに見ん思あたりは有もあらすも
小夜しくれ故郷人もこの頃やおなし雫に袖ぬらすらん
遠かたにしくるゝ雲はたか里の心あてさへさためなき空
たか里に袖はしあへぬ程ならむまたしくれゆく雲の遠かた

七日 寒草處々

永宣 伊長 元長 公條 實隆 重治 政爲 康親 爲孝 守光 雅綱 濟繼 季種 公音 永宣 伊長 元長 公條 實隆 和長 政爲 雅綱

いつまでの霜をふよそにおもふらん谷の陰くさ松のした草
なにいかは所おきける初霜のむら／＼見えてのこる冬くさ
かれて行草葉のこらて初霜にまたむら／＼の花や見すらん
かれにける後さへかばる面影や霜おきまふ野へのむら萩
冬枯にいつれかいつれわすれ草こは忍ふへき秋の色かは
冬ふかき霜はわかした道のへや行手にのこる草もありけり
かつさきし秋の花野のおもかけにいまはたかへる霜の下草
あげまきの刈残したる蓬生やむら／＼霜のむすほゝるらん

八日

濱邊寒廬

鳴田鶴も霜夜をわひてゆふ波のあし間にさむき三津の濱風
はま風にしほこす蘆のかれ葉をば藻屑になしてよする波哉
ゆふ月影入江のあしのかれしより濱松かえの色そきひしき
濱ひさし久しく波にしほれ蘆の音もかはりて霜さやくなり
あらはるゝ濱松かえの色を見霜にやたへぬ波のむらあし
はま川のゆくかた見えてむらあしのかれ葉に氷る水の白波
花も葉も散しはいつのはま嫩かれたつあしの音はかりして
濱川やこゝろみきはになつあこの蘆風も波も音はたえつゝ
霜まよふあしのかれ葉の一村になは濱松のいろそつれなき
はま風に行かふ人の袖かててあしのかれ葉をなほる頃かな
濱風のふくかた見えて蘆の葉のなびきしまいに氷る波かな
蘆の葉に浦風さむく濱ゆふの幾重の霜をむすひそふらん
かけひさし嫩はちりし濱かせに波こすあしのかるゝ一むら
しほれゆくあしへの霜の朝な／＼濱のまさこの末は晴つゝ
音そよくみきはの蘆はかれふして濱松か枝にのこる浦かせ

濟繼
爲孝

吹たゆと松には三津のはま風もかれ葉のあしに音で残れる
九日 月照綱代

康親

守光
公條

人も寐のあしるの床のかりひさし今は月のみもり明しつゝ
綱代もる瀬々のあたりはすむ月の影見し水も氷らさりける
浪ばかり夜のおしるなをもる月のすましげなる宇治の川風
もりはつる田上川のおしるもり秋よりのちの月やいかなる

元長
公條

季種

鶴かひ人いつより冬は綱代木にやみをはかなみ月に守らん
年波をおもふや宇治の綱代もりつもれば老の月もすまし
守わさの宇治の綱代木さゆる夜は月の水によるひをやなき

永宣
重治

重治

曇なき月にはありとも綱代守たく火にまさる影とやは見る
袖のうへに波と月とを宿してやこの里人はあしるもるらん
よせてのみかへらぬ波と月影も守やあしるの床のさむけさ
あしる木に月の水もなほさえてもる袖さそな宇治の川かせ

政爲
守光

永宣
元長

川かせも宇治の綱代のうきふしをとなふになくさむ床の月影
夜川たつ宇治の里人いつの間にいとほ月とあしる守らん
綱代木によるの川音ふけゆけは空たかくそ月もすみけれ

伊長
季種

實隆
政爲

波風をわすれて袖に宿すともさこそあしるの床の月かけ
川かせに夜のかゝり火影もなし綱代は月にまかせてや見る

爲孝
雅綱

重治
和長

あすも來んけふの狩場の名残あれや暮る末野に雉子鳴なり
いつまでかけふばかりとの狩衣かさなる山のあかぬ鳥立に
けふも又猶とりかはむ手になれぬあかけの鷹の心しるまで
はし鷹のあかぬ狩場のけふ幾日くるすの小野の苦拂ふらん

公音
和長

爲孝
守光

あすも來んけふの狩場の名残あれや暮る末野に雉子鳴なり
いつまでかけふばかりとの狩衣かさなる山のあかぬ鳥立に
けふも又猶とりかはむ手になれぬあかけの鷹の心しるまで
はし鷹のあかぬ狩場のけふ幾日くるすの小野の苦拂ふらん

伊長
季種

守光
伊長

あすも來んけふの狩場の名残あれや暮る末野に雉子鳴なり
いつまでかけふばかりとの狩衣かさなる山のあかぬ鳥立に
けふも又猶とりかはむ手になれぬあかけの鷹の心しるまで
はし鷹のあかぬ狩場のけふ幾日くるすの小野の苦拂ふらん

公音
和長

公音

あすも來んけふの狩場の名残あれや暮る末野に雉子鳴なり
いつまでかけふばかりとの狩衣かさなる山のあかぬ鳥立に
けふも又猶とりかはむ手になれぬあかけの鷹の心しるまで
はし鷹のあかぬ狩場のけふ幾日くるすの小野の苦拂ふらん

公條
實隆

季種

あすも來んけふの狩場の名残あれや暮る末野に雉子鳴なり
いつまでかけふばかりとの狩衣かさなる山のあかぬ鳥立に
けふも又猶とりかはむ手になれぬあかけの鷹の心しるまで
はし鷹のあかぬ狩場のけふ幾日くるすの小野の苦拂ふらん

永宣
重治

濟繼
雅綱

あすも來んけふの狩場の名残あれや暮る末野に雉子鳴なり
いつまでかけふばかりとの狩衣かさなる山のあかぬ鳥立に
けふも又猶とりかはむ手になれぬあかけの鷹の心しるまで
はし鷹のあかぬ狩場のけふ幾日くるすの小野の苦拂ふらん

和長

狩人もけふ立鳥もはかなくやあすをはたのむ心なるらん
踏したくきのふの野邊の雪の上にけふはまかはぬ鳥の落草
犬もなつみせこもつかれぬ鳥の引達の山本あすやからまし
狩くらすきのふもあかすけふも又鳥立をかへていそく鷹人
草ふしやつかれの鳥のけふまでにまた残りける雪の御狩場
あすも来て山遠からぬ家路とやくれぬと見てもかへる狩人
岸川に日次かそへてはしたかのつかふる道やおもふかり人
けふは又きのふの野邊の道かへて鳥のおち草分つゝそゆく
七夕の一夜のやともいく夜れむ天の河原のあかね狩場に
けふも猶鳥立はしらす狩人のきのふの山をかへてこそゆけ
狩盡す程もしられすけふは早きのふばかりの鳥立たになし

十一日 薄暮千鳥

くれわたるそのの川原の川千鳥こゑきゝすてゝ誰か歸らん
鳴よるや鴨の川瀬のゆふちとり君にや千世を聞えあけつゝ
暮る夜のもしほ火くらき折しもあれ妻とふ千鳥聲忍ふらん
夕しほに磯邊にみつの濱千鳥ふたりもつれす立わかれつゝ
ゆふ波のふりくるほとをなき立て聲とほからぬ磯千鳥かな
今はとてつまとふ波のゆふ千鳥さそ待かたも音には鳴らん
身にしむは秋より後のゆふへかなあはれ千鳥の立あなく空
あさりする眞砂をひろみ夕しほの干潟の千鳥打とけてなく
夕くれの浪路はるけき浦ちとり聲やしるへに友さそふらん
風さむみゆふ騒みては村千鳥かたもさためす立さばくこゑ
うなばらや夕の雲のそれなかなほ立つるゝむら千鳥かな
さしくるや騒もくもりて夕波のたつ空わかぬ村ちとりかな

元長 康親 伊長 守光 濟繼 季種 公音 雅綱 爲孝 永宣 和長 政爲 元長 康親 爲孝 公條 實隆 伊長 雅綱 守光 濟繼

夕しほの入江の田鶴の友千鳥こゑをかはして今か鳴らん
ゆふ騒にたつや千鳥のうちわひておなし汀にかへる波かな
いたつらにけふもくらして飛鳥風わか友千鳥川邊にそなく
はし立や松かせさむみゆふちとり日も入海のなみに鳴なり

十二日 水留水聲

たゆるとは見えぬものから岩波の水りての名や音なしの瀧
人めのみおもひしものを山水のかれぬたよりも水ばてつゝ
淺き瀬もせくにはびく瀧波のいかにこほりて音は絶けむ
音たゆる谷の水のしからみやせくにまさらぬ水かさ成らん
やまかはも冬は水におとたえて松かせばかりうき物はなし
こほりても月はなかるゝ岩こえて行瀧の水のゆく音はなし
音せぬそ水のなとよ山水のむせふなとへばしたにむせひて
音するも音せぬ時もさびしとはわか山水のこほりにそしる
あらゐその波はしつかに氷りあて空にはけしき山風のこゑ
よる波は松にのこりて山水の水のうへをふくあらしかな
氷りては音せぬ水も物毎にたえぬなかれの有ときくにも
山水のかすかに通ふこゑもなし岩れの苔をとつるこほりに
さよ風もけき見るばかり淺き瀬にみたるゝ水は氷とちけり
いとひしを思ひしれとや山水の音をたえてもけき氷るらん
けふ幾日こほりはてゝやおつと見る瀧の白波音はたゆらん
出川の音たえにけりこす波もこほる岩間をしからみにして

十三日 寒閑閑寂

板間よりしらぬ襪もれやの中の衾のしたにさえとほりつゝ
夜をさむみ閑の枕にいく度かあられも夢もみたればつらん

公音 季種 重治 元長 康親 永宣 公條 爲孝 公長 實隆 政爲 伊長 守光 公音 季種 重治 元長 康親

聞のうへに散くる音のさむけさは身にとほりてもふる霞哉
袖に猶はらひそかぬる玉あられたまらぬ聞はさえ明しつゝ
あられふる夜半の枕よ草のいほの雨にはのこる夢も有けむ
降つもれ篠ふく聞の玉あられこれなや玉のいらかとも見む
あられふる音につけても竹ちかき夜床は更に寝む方もなし
見るゆめはあらし嵐と音たてゝ夜ふかくさゆる聞の中かな
あはらなる板間しられて聞の中に散來る霞をとのすくなき
もる月にはねやの板間に影さえて音のみのこる玉あられかな
あれまさる板間しられて聞の中に音さくよりも散あられ哉
衣うつ秋の風にもたへさりし聞はあられの散にまかせて
風さむみ霞くたくる聞の中はおとろくほとゝの夢をたに見す
聞のうへにあられみたれて霜水の枕の夢はむすふ間もなし
さしむかふ影もしめりてなとにきくあられにさばく聞の灯
聞の上になえ／＼ちりて玉霞かそふばかりの音のさやけさ

十四日 水鳥馴船

ふな人のおなし心になれ來ては夢もいく夜そなみのなし鴨
池水にさすや小船のみなれ棹見なれてつるゝなみのうき鳥
水鳥もこほりのほかをゆく船に心へたてぬこゑのさむけさ
釣のあまの心がたよるいとまなみ隔てぬこゑのうらの水鳥
なこり有と立空やなきさす舟をしる人にして鳥うかふなり
あま小船つれてもゆくやよそにまたたつ空みえぬ波の浮鳥
浮へるをおのか友とや水鳥のはかなく船になれて來つらん
ゆく舟のさをさす袖にまかふまで間近き波にあそふなし鴨
たえず見る釣の小船はおとろかて行來になるゝ水のうき鳥

永宣 爲孝 公條 和長 實隆 政爲 雅綱 伊長 守光 重治 公音 季種 濟繼 康親 永宣 公條 和長 實隆 政爲 雅綱 伊長

十五日

雪中殘鷹

ゆきかふ人江の舟のみなれ棹見なるゝ鳥のたつ空そなき
捨小舟おなし入江の波のうへにつかはぬ鷺の影ならふらん
わたし舟しけきゆきゝも馴めれば水のむら鳥立としもなし
ふれわたすゆきゝになれて川波の立ちまさはかぬ水鳥のこゑ
水鳥の釣する船になれくるも綱になれたる身をも知らん
江の水に近くなれ來てつなきおく舟にとりぬのなし鴨の聲
鴨といふ名をなつかしき水鳥やなれてともなふ浦の友ふれ
雪のなか秋になれてくる鷹や花の春にもしひてといめむ
花と見はれ今もかへらん心かもまことの雪にのこるかりかれ
越路よりめなれてや來し都にはけふこそ雪のはつ鷹のこゑ
我もまたはらひかてははる雪に天とふかりの心をせしる
あまつかり都の今をおもひ出よこゝらの春の雪にかへらは
みやこにも日をふる雪をいといひては猶南にと鷹やゆかまし
こし路より旅なる空にうかれ來てみやこの雪にまよふ鷹金
鳴鷹のつはさそ自き降雪に誰かたまつきの文字はさえげむ
秋の空になくれし聲かくもりなき田面の雪におつるかり金
なくれ來しこゝるゝいかに天つ鷹迷ふは雪の道ならずとも
はらひわび雪をや鷹の恨むらんをくれて來しは心ながらに
しはれ來し露霜のみかはらひえぬ雪ふりはへて鷹の鳴こゑ
鷹やしるこし路にのこる春よりも都は雪の今もあさしと
ふる雪の深きあはれをしれとてや秋になくは鷹のくる空
みこし路を幾日過來てふる雪の身のしる衣かりのなくらん
人かへる田つらの里の雪のなかに跡をたつて鷹を落くる

元長 守光 濟繼 公音 重治 雅綱 公條 和長 實隆 康親 政爲 伊長 元長 永宣 守光 爲孝 濟繼 季種 公音 重治 雅綱

十六日 眺望山雪

出る日のくれなるふかき雪の色に花こそはへ雪の山の端
 するやいかに太山の雪に都おもふ人もありやとかはす心は
 けさの朝けみれ白妙に降しきて雪もあなしの山かつらせり
 一すちのみねのかけはし猶見えて降くる雪に山かせそふく
 松原もうつもれ果るけさの雪につくり出せる山をかきなる
 うつもれて里こそ見えぬゆく人の橋うちわたす雪の山した
 おもひやる心の色にふりつみて幾重かたかき雪のやまの端
 なかめ来しかすみも霧も何ならて雪に惜まぬけさの山のは
 面影も見さりし山のけさ晴てしらぬ日ころの雪もめつらし
 時の間にふりしく雪やはれ初てこの里かき山を見すらん
 空にのみ雲をつりける月もいさ雪に晴てそ山の端もなき
 ふしの根のけふりもそれと面影にたつや小比叡の雪の白雲
 白たへになへてつもれる雪にしも山の姿はさましにして
 ときはなる色こそなけれ白たへに千里くらぬ雪のとを山
 ばるくとはても長等の山見えて雪のはなちる志賀の辛崎
 朝戸あけてむかふよそめは春あきもおよばぬ色や雪の遠山
 十七日 雪埋苦徑

後柏原院御日次結題

公條 和長 實隆 政爲 元長 永宣 守光 爲孝 濟繼 季種

人とはて苦むす庭はふみ分るゆきのしたにも道たとるなり
 ふみ分てけさやなか／＼跡も見む苦路のうへの雪のふる里
 岩かれやあしもたまらぬ苦の上にやすくも雪の積りぬる哉
 絶はてし思ひしものを苦の上の雪にはまれの跡も見えけり
 ふりゆくは苦にも見えし道ながらまた今更のゆきの山里
 目頃ふる雪にうもるゝ山陰はいつかみとりの苦のかよひ路
 けさはなほ山路の苦の道もなし雪や世にふる人いとふらん
 岩かれの苦のなかめやはらひ行山路の雪のしるへなるらん
 雪の中はかれ野の外にたのみ来し岩れの苦の道もたえけり
 苦のうへはなほ跡見えて山人のかよひし道も雪にたえつゝ
 十八日 爐火似春

元長 守光 爲孝 濟繼 季種 公音 重治 公條 雅綱 公音 永宣 和長 雅綱 伊長 元長 公條 爲孝 實隆 重治 政爲

きえやらの光をたのむうつみ火にすゝむ眠りや春の一とき
折しもあれかつ咲梅のいろ香にも春いそがれの埋火のもと
寒かへる風のおとして春とのみおもひはてぬる埋火のもと

十九日 老人惜歳

春をまつ心ばかりの暮たにもをしかりし身に年のつもれる
世の中のなごりはたえず思ふ身に又年くるゝ老をかなしき
身につもるかしらの雪の翁川ゆく年なみなうき瀬とそ見る
老らくをよそに歎かは年波の身に越るをは知すとやいはむ
更になほ何惜むらん老らくの身にのみこえてつもる年かな
わきて猶をしむもさそな老の波かへらの年のくれてゆく空
老の身に過來しほとなをくるとも惜かるましき年の暮かは
この暮にまた立こえむ年波もおいのたもとは先おしむらん
皆人の老なかへさむくすりもか暮ゆく年はかきりある世に
としは今たゝ我のみの限とかいふにも老のあはれをそしる
數ふれば惑ふへきにもあらぬ身の年をいつくに暮るとか思
つれなくも殘ると見ゆる老の上と思ふともやは年は惜まむ
おしむにもかひなき物が老の波こえてかへらの年の暮かな
大方はおしひなれても有しよりくれやすき年を老てしる哉
老そうきかしらの雪も行年もつもれる年のうへにつもれば
積りては我身ひとりそ年の暮としは春とて立かへるとも

康親 守光 季種

後柏原院御日次結題

戀部

二十日 思不言戀

身をすれば打出の濱のうちいてぬ心の色をいかに見えまし
ほかに其見えなむ色をとればはや我あらはさぬ浅き思ひな
いかさまに打もか出入言の葉に心ゆるさぬうたかひもなし
おもふとて心をつくす言の葉はあらし物からあたに散さし
涙たにせかてや見せん誰ゆゑと問はし言葉のたよりもそ有
いひ出てつらきを見むもわりなしと思ひ煩ふ年もへにけり
限あらは人や汲しるとはかりにいばてもえやは山の井の水
思ひ餘りあらぬ人にやなか／＼に問す語りの心見えまし
わか心安達のみ弓すゑつるにしのひは果てし色や見えなむ
うきふしもまよする習ひの世にこりていはぬ歎きや谷の下柴
つれもなき心よそれといはさらむ限はいつか靡くなとも見む
下くゆる蟹の藻鹽水それとたにはのめかすへき言の葉も哉
いひ出てつれなき色はうき物とおもふになほ忍ぶ中かな
猶を變それにもあらぬ人にさへくるしき物といはぬ思ひは
いつまでか涙はかりにむせふへきせめてしらす一言も哉
もらしてもつれなかりせばとはかりに思ひ返して過る中哉

廿一日

祈難會戀

伊能里天茂浮田農森乃憂中者神左惠請怒契越楚知

公條 公條 實隆 元長 政爲 守光 伊長 重治 爲孝 季種 公音

思へかし神にしるしの無名をもたかつれなきに立とかは知人
 人はなほはけしく見ゆる初瀬山かしの御嶽やしひて祈らん
 かひもなき心つくしかよそにのみうつる鏡の神と見はては
 あはてうき哀をしはいのるてふ鏡の神もかけてくもらむ
 貴船川たとる逢瀬のあた波をいのるかひなき袖にうけつゝ
 みしめ縄なびくとも見る一言の神はなき世を恨みてそふる
 淺はかに何恨ぐむいのるさへめくりもあはて過る月日を
 祈らすよ千木のかたそき行合もしらぬ契のくち果てれとは
 神や先なひかざるらんわか中にあはぬ歎きの杜のゆふして
 よしやたい神も恨しいのりてもあはぬ契のむくひなりせば
 柳葉の葉かへぬ陰を見るもうしつれなき色に祈來し身は
 哀とはいつれの神かゆふたすき懸て此身はいたつらにして
 いのるてふこととはうけしの神な月袖のしくれをとふ人も哉
 あふ事は神もゆるさて祈るかひなくくかくる杜のしめ縄
 しろしなき神も心のつれなきを人にはいつかならひ初けむ

廿二日 歎無名戀

くらへてもなき名は憂やたはれ島波の濡衣いつかほさまし
 我上はともにもかくにも思ふ名のいへばさすがに人に苦しき
 月草の移らふ人のたくひにはかはらむとての名にや立らん
 恨すや思ひもかけぬなき名さへ風にさきたつ波にぬれぬる
 かされぬるたかねれ衣を我袖の涙になして名にはもれけん
 憂こともよし逢までと過し來て無名をさへに歎きそへつゝ
 誰かしる身は中々にあらぬ名を晴けもやらて過す月日を
 思ふとはたかしり初てかくはかりよそに無名の未き立らん

濟繼 和長 實隆 永宣 元長 政爲 重治 康親 雅綱 公音 守光 季種 爲孝 公條 濟繼 和長 實隆 永宣 元長 政爲 伊長

かこつへきかこと求めて我にうき人や無名もいはい立らん
 いつまでか山とし高くあたし名の立にもしらぬ中に歎かむ
 乾わふる波の濡衣くるしくも誰かぬきするつらさなる覽
 今更に歎きやはせむとてもかく立名といひて人しなひかは
 厭ふとか思ひもなきさはよしや只身の浮名をはいひも晴けし
 とにかくに立は無名と思はぬを思ふ習ひも身には知れと
 いかなれば袖のした行なみた川しらぬ逢瀬の名には立らん
 身にゆるす往來はたえつ今はさはあらぬ名こそ其の關守も哉

廿三日 相互忍戀

身一つの目つゝみはいかならん二人せくにそ水も洩さぬ
 行かふ心のおくはいかなれや共にしのふの山のしたみち
 はかなくも誰か方よりかよはるへき色に出しの心くらへは
 猶もひつ袖のしからみおなし瀬に人目つゝみの涙もらすな
 かばかりの涙やはせく世につゝむ契りはおなし心なりとも
 もらさしの心はおなし秋にも我そなみたばせきまざるらん
 いか様に人の見るらん我中はよそけになして共にふる世を
 誰か方が限知られんとはかりにいとい忍ふの亂てそおもふ
 世にもれば我身のとかに成やせむ人にまけしと忍ふ苦しき
 夢にたに見えしとおもふおもひ寝に人もやつらき人の面影
 誰か方が心のおくは深からむ見はやしのふのおなし山路も
 もらさしの心くらへも我はいさまけて思ひの身にも餘らば
 訪來しのかこと也とは頼ましよ人もよそめを忍ふばかりは
 ひまもなき人目をよきてもる共にせくやなみたの川口の關
 わするなよ露のちきりの木葉まで共にと忍ふ草の根さしを

重治 季種 守光 雅綱 爲孝 公音 康親 和長 永宣 元長 守光 雅綱 濟繼 爲孝 公條 公音 實隆 政爲 重治 季種 康親

もる共に深きなきけは通ひてもしのふにたゆる中のとし月

廿四日 不堪待戀

一夜にも身は朽ぬへし橋姫の袖やつれなく波になれけん
たのめつる人は音せぬゆふかせに心の松の身をしほりぬる
いのちをはこの夕暮につくしても待わひぬとは誰か傳へむ
こよひ来てそれときくともとほしとや心の松の雪折のこゑ
此夕身をかきりそと思ひしる道たにあらなよしとはすとも
むなしくて明もやしなんとばかりをこの夕より先歎かな
心たにこゝろにささるうさなれや契いかにとおもふ待夜は
ありし身におなし物から此暮を待もかきりと何おもふらん
いつばりに習ふ憂身はたのめつゝ待夕さへくるしかりけり
あたならぬ命なりとも待夜半の心は千々にくたくものから
今は身に思ひたえなむとはかりに待夜くるしき心となしれ
僞になれし夜ころのいつまてか只うたゝれの月にあかさむ
待程もたゝにあられぬ身にしあれば幾度床の塵はらふらん
萩の上の露をも袖に拂ひかれわが待来れば風もつれなし
我やゆかむ今は明ぬと思へともとても寝ぬ夜を恨かてらに
きえはてゝ後は何せむ露の身の残れるほととふ人もかな

廿五日 臨期變戀

しらさりきふりはへ今は雪もよにひとりの袖をしけとは
時の間は淵は瀬となる飛鳥川あすといひても又やかばらむ
わか門をとふかと聞し小車の引かへすにもやるかたそなき
風かはる空さりけなき夕暮やわか袖のみのしくれるらん
かならずといひし夕のかれことにかはる今宵の獨寝そうき
人はこの後いかさまに契るともいま更かはる音つればうし

伊長

此暮ををしへ置つる妹か門あらぬこたへにさしやこもれる

重治

實隆

今こんといふはなれぬる僞をさらにことばる音つれもうし

爲孝

永宣

頼めしも今の間ながら音せぬはもしわするやの疑もなし

季種

元長

ときの間もつらき千年か今來んと心の待につくるさばりは

守光

政爲

時のまに何をかことのさばりとも我にことばれつけの小枕

公音

爲孝

今來んといひしは身にもたのまれば思ひし事にかはる夕暮

雅綱

濟繼

おもはずよ今はとあくる櫛の戸にとはしと告る人の夕くれ

和長

季種

つれなくも今はこりれと思ふらん又この際も人のかはれば

公條

康親

思ひかへす心もあらは小夜枕かれてしらせぬ夢の世そうき

廿六日 時々驚戀

たまさかにさてもとかこつ夕たにとはては人の幾日過ぐむ
身を秋と思ひしりてもこのまゝはいかい山田の驚かしつゝ
いつか見む夢をは知らすおり／＼の身の憂數を驚かれぬる
せめて只忘れはつなと折々に又おとろかす中はかひなし
折々のつらさはかりなたよりにて身は徒らに驚かるらん
はらひ來し道よりみちの露げさにまたいつまでの蓬生の庭
かきやるも人目もるまの玉草をたのみ思ひの有身とや見む
いつをきておもふにたゆむ心とて心の我をおとろかすらん
物毎におもひ忘れぬたよりにもな雪風や身をしほるらん
あちきなくこれを誠の契かは忘れぬ程におとろかしても
春の花秋の紅葉にうつる世をおなし思ひの身にそおとろく
風のこゑ虫の音もたゝこの頃はわか思ひなる袖を見せばや
あた波の折しもあれば捨小舟おもひはてすの風もよすらん
さすか猶わすれもばてす思ひ出て稀にも我を人のとふらし

重治

爲孝

季種

守光

公音

雅綱

和長

公條

康親

伊長

政爲

元長

永宣

重治

雅綱

濟繼

爲孝

公條

實隆

和長

伊長

康親

季種

ともすれば心をほろ松の風わずれぬものに袖そしくる、戀に身はけふも暮めとおとろけと猶わずらぬ鐘の音かな

廿七日

憑誓言戀

頼むぞよ神にかけつる言の葉はた、我爲のゆふたすきともゆふかけて契りや置むかはらしの言の葉守の神のまに／＼一すちに誓ひじすふよさりととたのむ誠を神やうくらん神よさて誓ひしこといさめてやかはる心の後またのまむおなし世の後またなほも頼むかな契むすふの神のまに／＼忘るとも神やいさめむ誓ひてし言葉な人にたのむとも見は事にふれてあた成にしも神懸て言しはよもと頼むばかりそわすれしと誓ひし人の言の葉にかけてものこる命となしれちかひてし神やたのまむ偽もまこともわかむ我身ならねは我にのみいふにもあらず誓ひてし詞を神の知によかせむ忘れすは何かかはらむ川の石のほりて星となる世ありとも枝をかはし羽を並ふる誓ひあらはた、花鳥の世をも頼まむみしめ縄ななき契やちかひてし千々の社にかけてたのまむいつはりのなき世になきは神かけし人の言の葉末も頼まむ偽もあらしかことのたよりある神もあはれ我もたのまむ今そしるちかひしすふを頼とて神のめくみも人のなきけも

廿八日

深更歸戀

恨ても夜ふかき道のいかにそとそふる心も我にわかれていつなとか心の末に待も見むまれの夜をたに一夜となさて夜をこめてなく／＼出し涙ゆふゆふつけ鳥のこゑも露けし夜を深みわか歸るさは人やりの道ともいはむつらさをぞ知

守光
公音

よのつれにおき出し朝の道芝もさこそは露のふかき世の空つれなくも何いそくらん有明の月も夜ふかき人のかへるさ夜をこめて急くにあかぬ衣々ばうらなく頼む中としも無

濟繼
重治
伊長

政爲

いく程もあらしわかれなをきつる恨も人にのこる夜の空うしやた、曉出る月をたにまたて夜ふかきさぬ／＼のそら

永宣

爲孝

なげかしな人目はかりに深き夜のこす心の別れなりせば

雅綱

伊長

とりあへぬ音をなけれける深き夜の鐘さへきかぬ衣々の空

元長

元長

立かへり露おく袖ふしのめめ鳥より先になにうらみし

爲孝

濟繼

小車のうしみつまたてかへるにも人は驚くゆめもやはある

知長

康親

深き夜の鳥にさきたつ鳴音をばつけさへあへぬ人の歸るさ

季種

雅綱

立歸るなこりもつらく残る夜にせめて又寝の夢やまたまし

守光

公音

まきの戸に夜深く残る月を見よ我かへるさは思ひなくとも

公音

廿九日

後朝切戀

實隆
公條
重治
和長
季種
守光

獨寝をなくさめとてやわかれてもあしたの床にのこる面影のこしつゝ人にそへつる魂のいかにかへりてけさは戀しきつくすへきならひ成共いかさまにけさの心を書もやらまし世にしらぬ月のゆくへやけさは身の心の關に猶やのこらんあすしらぬ命と何か歎きけむけさの名残のうさもならはてけさたにも思ひきたぬる露の身のいかて夜深くおき別けむ誠に消はてぬへし逢毎にかへてや來つるけさのいのちはつゝきにほかこちも遣し我中のけさの名残を言の葉もなき夢ならはまたも見ゆやと思ふたに朝の床はうかりしものを又いつといひしそ命忘れすはけさの名残や思ひのとめむ年月はあふなかきりのわか涙けさの袖にはせくかたもなし

伊長
元長
濟繼
爲孝
康親
永宣
實隆
守光
公音
公條

ひと夜れていかに絶ける七夕の心をけさの身にもしらほや
しらせばや別れしけさの袖の露なをきえわひてうき命とも
なからへてあれば逢夜の命ともおもひなきれぬけさの別路
思ひきえはゆふへの空そけさの間ばうき別とも心やはある
おきあへぬ床のけしきもおもひやれその朝寝髪この面影

十二月一日 逐日増戀

日敏ふるなみたの雨の思ひ川まさる水かさばせく方もなし
忍ひ來し袖のなみたもけふは猶つゝむにあまるわか思ひ哉
思ひのみつゝも雪の日にそへてなひく草木を心ともかな
なほさりに思ひ初しも今そしるなれ行まいに近まさりして
思ひ草春の雪間の日にそひて繁るをそれと見すや知らずや
積りけりきのふは浅き雪の上に消ぬ思ひをたくへても見え
幾しほといはむもあさし戀衣そめます日々の色に見えなほ
さりとともたのも契も朝もよびきのふに増る人のつらさは
あやにくに思ひそ増る日にそひてつらくなるにも懲ぬ心は
物思ふ雲のはたての夕月夜々をへてまさる影は見ゆらん
とにかくにつれなきのみやます鏡うき面影は塵もくもらて
とへかしな目をふる袖の時雨には心木の葉の色はいかにと
何にそめなにな色なる思ひにもきのふに増る袖の手しほは
にしき木にあらぬ深さのくれなるの袖も幾日の色を重ねん
あかれさす目数も空に幾しほの思ひの色のはてそしられぬ
露しくれそめし木末は何ならてなみたの袖の色そひゆく

二日 非心離戀

萩の葉のそよくな見ても思ふらん難波のあしのはれし契を

政爲 雅綱 重治 和長 季種 永宣 伊長 雅綱 元長 濟繼 政爲 實隆 季種 公音 守光 康親 和長 重治 公條 爲孝 永宣

疎きたにつらかりし身のよそ人に其儘ならん物としりきや
心こそへたてもはてぬ都をはたちわかれにし須磨のうら波
いかにせんしけき人目を忍ふ山通ひし道もあとたゆるまで
根にこそと思へる花の心にもあらぬあらしや世には烈しき
のこしおく心やかたみ玉手箱身をわけてとも思ふわかれに
とりあへず心もゆかぬ別には忘るなとにいふよしもなし
やく鹽のわが身そからき浦風になひくけふりは心しられと
中たえていつちかさそふ水鳥の入江にさばく波のうきくさ
思へかし其人ならぬうつし繪に遠き別もなきためしかは
床さむみくさふし知らぬかた鴉たか秋風にたちわかれけむ
あはれともあまの鹽焼うらみをも今ゆく道におもひ出つゝ
へたてあるほとと雲井のかり初に親の諫めし音をや鳴らん
このわかれ思ひもかけぬ人やりにしひて恨ん言の葉もなし
身にそふる扇の風もへたてゆくふな路かなしき蟲明のせと
ぬれくす八十潮の波も袖に今むがしををかけておもふ別よ

三日 見形厭戀

いかにせむ立そふ影を月に見てこゝろの雲に厭はるゝ身を
いとふらん身こそ老木の心をは花になすとも人ばしらすや
かへり見て見ぬにしらるゝ面影を我も人にそ深くことばる
夢うつゝそふ面影も誰ならん見えし我をはいとふものから
哀ふる身は誰ゆゑの思ひとて見るめをさへに厭ひはつらん
見るたひに鏡にはつる面影をわすれて人のうきになさばや
いかにさて戀にやつるゝ姿をは有にまかせていとみ果らん
恨しなうき太山木のすかたをは思ひもかけぬ花のこゝろを

伊長 雅綱 元長 濟繼 政爲 公條 實隆 公音 守光 康親 季種 和長 重治 爲孝 永宣 元長 濟繼 政爲 伊長 爲孝 公條 雅綱

後柏原院御日次結題

あちきなく夜の契はゆるさなむいとふ姿もしひて見えしな
つくも髪おもひみたるゝ面影の立なるゝなもさそ厭ふらん
みるめかるあまたに夜は海士衣かきぬる妻し有世いとふな
いやしきは心言葉のほかにもまた見にくき姿さそいとふらん
三輪の山それ共人の訪來かし身を小たまきの厭ひはてても
人はまた面影見えてやみねとやわか姿をもちとひはつらん
我たにも我をそいとふ朝毎のかゝみにうつる影を見るより
鳴盡もはてこそかゝる姿なれすさめの戀のわれや何なる

四日 數書悵戀

偽の人の言の葉見る度にうらみみてや數つもるらん
かきすつるたい一筆のあとにたに心をこめて人そつれなき
我方に知ぬかことのそふもうしうへはつれなき筆の跡にも
知やいかたまた／＼鳥の跡見ても思ふに堪ぬ音こそ鳴るれ
偽と見るもうらみの文なからあまりなくさむ言の葉もなき
かはかりの心を見る玉章はとふにうらみの數そひひぬる
かひそなきより來る波の玉章もおなし恨のうしと見るめは
一筆にかきとめさる玉つさよ恨ぬものゝうらみとはなる
恨有その一筆もさすか猶なき所なき物とやは見えぬ
恨あるこの一筆をことばらは見よとも人にまたやかへさん
かはらしといひしにたかふ水壺のなかの葛葉やあき風の色
玉章は手にとる程をおもへたゝ見すは恨のかゝらましやは
藻鹽草わが書やりし程はかり返る波には見ぬもかひなし
待えても見るに程なき一筆をいかばかりかは我はうらみむ
見るたひに打なくはかりいかなれば涙せきあへぬ袖の玉章
筆のうみ千尋のそこも何ならてたゝ一言にこもるうらみよ

實隆 重治 和長 季種 康親 守光 公音 公音 公條 實隆 政爲 濟繼 伊長 雅綱 元長 爲孝 永宣 重治 和長 守光 季種 康親

雜部

六日 殘月越關

月になほ杉の木末にありあけの道なもたとあふさかの山
影さゆる月のしら濱はる／＼と關路あけゆく須磨の浦かせ
かへり見るみやこの月の夜は深し鳥の音をしめあふ坂の關
月ゆるもかへり見かちにおき出ぬ都へたつなあふさかの關
鳥の音におき出てゆけば關の戸をこゆへき月を空に残れる
こゑやらて先やすらば有明の月はこなたのあふ坂の山
あかて行これも心の戸さしかな關の木すゑの月のあけほの
都をはあとにへたてゝ有明の月もこゆるやあふさかのせき
あかてゆく都のけきのおもかけも月にほとなきあふ坂の山
月にゆく竹のした風ふきたへて明る夜おそきあしからの關
かへり來んみやこの月の明かたも今はとしたふ逢坂のせき
おき出てゆけば夜ふかし相坂や鳥のそら音も月を見よとが
しはしまた月たにおくる關の戸を明ぬと誰か立わかるらん
こゑゆけば名のみ霞の關なれやくまなき月のありあけの空
有明にふねこき出せきよ見かた關もる夜のなみもとめし
鳥の音に關路こゑてもみやこ出し月や夜ふかきあふ坂の山
七日 風破旅夢

雅綱 永宣 實隆 元長 公條 政爲 守光 濟繼 康親 季種 爲孝 伊長 和長 重治 永宣

旅ならぬ人もおもふにうちとけてこの山風に夢はあらしを
草むすふまぐらの風のほけしくて夢も果なきむさし野の原
吹とふく風もいく夜の笹まぐらたふる里の夢そみしき
松かれにかけつる夢のうきはしも枕のあらし末はとほさず
草まぐらとけて寝ぬ夜は心ともさめまし夢に山かせで吹
さそはるゝ夢はみしき小夜風にあくるはおそき草枕かな
波風にこゝろゆるさぬいそ枕ゆめも旅寝のならひしらし
はかなくも見え来てつらき嵐かな松かれ枕ゆめもまたぬに
まぐらかる小笹が霜をふく風に跡なき夢をしたふはかなき
こゝろなきこの山風ふ夢ならてなくさめかたきくさの枕を
草まぐら都にかよう夢路さへたえて身にしむ野邊の小夜風
山いつく陰なき草のまぐらにも夢はあらしむさし野の原
來し方のたよりの風と思ふ共夢にはつらき物にやばあらぬ
夢もなほおもふかたより見え來すは波の枕の風もいとほし
枕かるみのゝ小山の松かせに見はてぬ夢そなこりさひしき

八日 嶺林猿叫

ますら男がみれ立こゆる狩こゑに林かくれをわたるむら猿
峯たかみ木の實むなしき山風をわか歎きとやましら鳴らん
峰とよみ林をわたる風のおとに木の葉みたれて猿さけふ聲
猿さけふ峰のはやし雲の色も雨ならずとも袖ぬらせとや
みれ高み子を思ふ道は木隠もおほつかなしやましら鳴こゑ
花に風香をたにおもふ峰の雲ふかき木末に猿もなくなり
枝にとりおつる木の實を拾ひても峰つたふ猿の聲を隠なき
山彦もちかくこたへて峰つゝき木ふかき奥にましら鳴なり

實隆	公誅	みれ高き木末のあらし吹まゝに鳴やましらの聲もすさまじ きかてさへ住うかるへき峰の庵雲の木すゑにましら鳴なり
元長	康親	陰ふかき木すゑもわかぬ雨雲の峰たちならしましらなく聲
公條	爲孝	木つたふや木の葉もそよと音ばして猿なく峰の雲ふかき暮
季種	伊長	くるゝ目の木深きみれにかへり来て哀ましらの聲ぞ淋しき
雅綱	守光	おち初る椎のはやしになく猿の聲やゝさむきみれのあき風
公音	和長	みれ高き木すゑは鳥も住する枝うつりしてましら鳴なり
康親	重治	おち葉する峰のあらしこのくるゝ日に惜さひしき猿叫ぶこゑ
爲孝		
九日	翠松遣家	
伊長	永宣	ゆきめくる道も幾木の陰ならん木すゑかさなる松のした庵
守光	實隆	落葉かく道たえゝの松原にさびしくも有かき籠る身は
政爲	重治	れくらとふ鳥もなれくる山松に木かくれてすむ宿の静けさ
和長	元長	軒も垣も松か枝ふりてわか宿は巢にすむ世とや白鷗のこゑ
重治	公條	かくれ家と尋ればいらす引うへて見るかうちより高き松原
		尋ね来てこの世のはかにたとるかな空のみとりの宿の松風
		頼むとて千年をふへき住居かは松を廻りの垣もはかなし
		はるゝ夜の月さへうとき住居かな枝さしおほふ松のした庵
永宣	伊長	陰しけき松よりほかに草もなしはいりにはなを引結びけん
實隆	公音	葉かへせぬ枝もひまなき陰ふかみとしふる里の四方の松原
元長	季種	すむ人の干とせをこむる軒端かな庭も外面も松のみさをに
公條	雅綱	拂ふへきかたこそなけれ松陰の宿のかみひ路深きおち葉は
政爲	康親	めくる日もさす方見えぬ松陰の軒端はかく露の間もなし
季種	爲孝	入來ればかさなる陰もあらはにてたゝむらの松のした庵
雅綱	守光	もみち散るのちは色なき松の陰しくれそ今は宿につれなき

年もへぬ庭も垣もおなし枝の松にかこへる色はかはらて

十日 山家人稀

山さとほたま／＼見ゆる人影も行かたしらめ木かくれの道
とふ人も道なきかたとたつれ來し心もふかしかくれ家の山
さびしとも思はし堪し山里はなるゝまゝなるひとつ庵かな
とはるへき人もはや世になき身かは有て山里おもひ過ぎし
山里はわか跡ばかりふみ分てまたまふへき道たにもなし
音つてもまかへてきかむ嵐かはとふへき人もあらぬ深山に
山里もさすかにたのむ花にたにはぬ夕のいく日すきけむ
とふ人のありとも誰かこたへましなかにおほゆる柴の扉に
世にしれぬなすけありとも山深くむすふ庵は誰かとふへき
假にたにはぬやいかに後れしと言しはかはる山路也共
大かたの鳥たになかぬ山深みいかなる人を待むとかおもふ
とはれぬ世の覺事になきむ身は頼む山路も住やうかれん
山里に我住すともすまはよといひしは人のこゝろならずや
行かへる人は見えぬとしはの庵住とはかりの葦のはそみち
とふ人のあらはと思ふ山の奥にまた捨果ぬ身をそおとろく
ましはとる人のゆきゝを松の門たのみかほにてすくる山陰

十一日 野寺僧歸

わけかへる袖さむからし月の下の門は野風の吹にまかせて
かへりてや又墨染の袖のいろに道たとりゆく野への古てら
ふりにける寺は野原の松の門月にたにくもしるきかへるさ
花つみてかへる野寺は墨その袖のつゆほす夕けふりかな
うき身をはまかせ果てし雲水にかへるやいつく野への古寺

政爲

空は雲かへるなそふ墨染のたもとまそな野への露けさ

政爲

永宣

さびしくもかへる野寺は墨その袖とふ月そ友となりぬる

伊長

重治

くればたる野寺の月にかは聞て船さしかへるすみそめの袖

永宣

元長

墨染の雲のはやしの入あひにかへるもおなし袖のさびしさ

濟繼

和長

かへらん袖に夕日の影見えて野寺の道は山もつゝかす

季種

公條

道とはき野寺のかれにさそはれてかへる袂やすみそめの空

雅綱

政爲

雲も今かへる野寺のゆふくれにいろこそまかへ墨その袖

公音

伊長

墨染のゆふへの袖に露わけてかへる野寺はさそなはるけき

康親

濟繼

かへる袖いそくを見れば墨染のゆふへの鐘の野への遠かた

爲孝

季種

こゝろをや宿す一葉の船ならしかへるは野への墨その袖

守光

十二日 田家見鶴

入あひのかれは雪よりひしく野にかへるやいそく墨染の袖

守光

實隆

きゝなるゝわれや仙人山田守さへにあさる鶴のもるこゑ

元長

爲孝

ひたの音をおのか友とやあさりする田つらの庵の秋寒き空

政爲

公音

人かふ田面の庵のあさゆふになれてや近く鶴のすむらん

伊長

雅綱

もり捨るかりほの小田に鳴鶴のたてるすかたそ翁さひたる

永宣

康親

人もなきはともしられて庵ちかき田面の水につるのたつ影

濟繼

守光

靜にて庵もる友はむしる田の群あるたつにしかしとそ見る

實隆

十一日

菊あけし田つらの里のいつまてか鶴は門もる聲残すらん

季種

實隆

いとひ來し鹿はかよはて庵近き菊田の面にたつのもるこゑ

雅綱

重治

小田守は見馴にけりな立さらてかりはに近くたつそ鳴なる

公條

和長

山もとの田面に見るも蘆田鶴のこゑは雲井の物とこそきけ

爲孝

元長

洞のうちの昔やおもふふりにける里は鳥羽田の蘆たつの聲

重治

公條

あさりしておのか影をや友鶴のたてる門田の水のさびしさ

爲孝

里のをさし翁さひつゝ、稻守や田つらの鶴をおのかよはひに見るも聞も住居さひしきひな鶴の聲や小田守友となるらんもり捨るとまや行けむあれのこる冬田の庵にたつそ鳴なる守すてし庵はあるしむしろ田になは立さらぬ鶴のもろこゑ

十三日 樵路日暮

みれにのみのこる日影をたのみてもくるゝ麓にまよふ山人人もかくとしれかし徒らにくらすわか身は猶そくるしき友なひて歸る木こりのうたてなと獨もすまぬ山路なるらん唄つたひ一人ゝのかへるさに柴とる山の日はくれにけり哀にもくれにけるかなおもからぬ薪なれともとはき山路を休らはん花なき頃の山人はいかにくらして今かへるらん後るゝは何のうへにもくるしさを思へ爪木の道もくれけり行すゑを急かむとてやくれわたる爪木の道に先やすむらんふきおくるゆふ日も谷の北風に船さしかへるみれのしは人よしさらば月待てとの休らひにうたふ木こりの山路暮しつ暮すきてかへるしは人よひかはす聲をしるへの谷のこた這くるゝ日に通ひなれても山陰は歸る木こりの道たとらしくれ渡る岩につたひも柴人のかよひなれたる道つまよはぬ月をたにたのまぬくれや眞柴とる山路くるしと猶急くらんとば人の休むほとかは行やらてくるゝ山路にうたふふし暮ゆけは月のかつらの影をさへなは折そへてかへるしは人

十四日 晴後遠水

はるゝとよきのふの雨の山風にちりもまかはぬ水のしら波霧のこるこの山もとは木くらくてゆくすゑとほく白き川水

和長	公音	康親	守光	公條	伊長	元長	季種	雅綱	重治	伊長	守光	公條	伊長
雨はるゝ水に入目のかけそひて雲はふもとをのぼる川かみ山かせのふもとのくもの行末にはしめてはるゝ水の一すちよそに見る水影すみて山かせに朝川わたり行しけれかな雨に見し雲ものこらていなみ野の淺茅か末にすむ清水かなむらさめの雲ふきつとす山風にみなきりおちて清きたき川朝もよひきのふの雨にみなきりて行すゑひるき水のしら波雲もきえ雨もはれゆく峯たかみ落くる水やとほきゆくすゑ雲はらふ雨のなこりのゆふかせに末はるかなる野への澤水遠こちのさかひも見えて雨雲のよそにはれゆく山水のすゑ山本の木すゑもはるゝみなせ川ありてや水もむらさめの跡木幡山夜の間のおめに見わたせば伏見の澤にひろきさは水山たかみあらしおちゆく川水のすゑもくらす雨はるゝ空夜の雨のなこりもさそとみかの原今いつみ川音もさやけし雨はるゝ野澤のすゑの草かくれたえゝ見ゆる水の一寸ち	永宣	清繼	實隆	爲孝	和長	康親	公音	元長	季種	雅綱	重治	伊長	守光
雨はるゝ水に入目のかけそひて雲はふもとをのぼる川かみ山かせのふもとのくもの行末にはしめてはるゝ水の一すちよそに見る水影すみて山かせに朝川わたり行しけれかな雨に見し雲ものこらていなみ野の淺茅か末にすむ清水かなむらさめの雲ふきつとす山風にみなきりおちて清きたき川朝もよひきのふの雨にみなきりて行すゑひるき水のしら波雲もきえ雨もはれゆく峯たかみ落くる水やとほきゆくすゑ雲はらふ雨のなこりのゆふかせに末はるかなる野への澤水遠こちのさかひも見えて雨雲のよそにはれゆく山水のすゑ山本の木すゑもはるゝみなせ川ありてや水もむらさめの跡木幡山夜の間のおめに見わたせば伏見の澤にひろきさは水山たかみあらしおちゆく川水のすゑもくらす雨はるゝ空夜の雨のなこりもさそとみかの原今いつみ川音もさやけし雨はるゝ野澤のすゑの草かくれたえゝ見ゆる水の一寸ち	永宣	清繼	實隆	爲孝	和長	康親	公音	元長	季種	雅綱	重治	伊長	守光
海原やきのふの雲のこりしきてけさあらはるゝ雪のとは嶋うなばらや見るめあやうき浪路かな雲に消ぬる舟の行へばはるかなる松浦か沖を見わたせば雲をかきりによする白波しほかまのたえぬ煙やわたつ海の波の幾重のすゑのうき雲おきつ風みききによせぬしら波や影をひたせる空のうき雲へたて來し面影みせて浦しまや明ゆく雲そ波にのこれるうな原や水よりのほるうき雲のまた中空になひきかぬつゝ海はらやしほ瀬にかゝる白雲は風なきなみを見する色かなうなばらはこれもやかきり雲おほふ空も一つにつゝく白波	永宣	清繼	實隆	爲孝	和長	康親	公音	元長	季種	雅綱	重治	伊長	守光

夜半にきく雨のなこりか明わたる浦わのなみに雲そたな引
海わたる人をそれとや天さかる雲のころもにかいるうき波
雲のなみけふりの波も松はらの木するにわかぬ天のぼし立
松浦かた雲をもひたす海原のなみに入日のかきりをそ見る
一むらの雲はさなから昔おほふねかとも見るおきつしら波
雲のある波のうへなる淡路島あはとぼるかに見し影もなし
しらさりし新島なれやあま雲のさなから沖の浪にかゝれる

十六日 漁船連波

猶しほし見てこそ行かめ夕なきにこきならへたる波の釣船
こき出る末は千里のあま小船まほにも見えぬ波のうへかな
行かへり急くも見ゆる浪のうへに釣する船のひとり静けき
くるゝ夜の釣にともせる明石かたすまの浦波影もへたてす
敷そふと見るもあたるいさり火の浮たる船の身を思ふ哉
綱引するうらわの波の夕なきに敷もしられぬあま小船かな
月おそき磯山陰のなみまよりいて敷そふあまのいさり火
おくれしと磯のなみわけ行ふれもばや綱おるす袖のうら風
夕日影つりするあまの遠近にうら／＼見えてかへる波かな
波のうへに釣するほとと友船のおのか浦々又やわかれむ
いさり火の敷なほそひて天つ星かけなうかふる波のうへ哉
けふの日のくもらぬ波にいとてや打むて行あまの釣船
浪風になれてやけふも出つらん沖に見えたる海士のつり船
後れしこのゝるや追手あま小船なみに一葉の敷そひゆく
打けふりくれゆく海に見し船も夜やかすそふ波のいさり火
世をわたるいとまや灘のうら波に朝ゆふうかふあまの釣船

公音

和長

康親

重治

政爲

爲孝

實隆

永宣

公條

濟繼

實隆

爲孝

重治

康親

和長

守光

元長

公音

伊長

政爲

季種

雅綱

十七日

江雨鷺飛

江をとみ雨ふきおくる浦風におもかけきゆるなみの白鷺
鷺のとふ入江の雨の色を見てしらすうしほの日は暮にけり
水に入つばさも有にとふ鷺のふる江の雨にしほれてそゆく
雨くらき入江の鷺はしらなみの立別れてやそれと見ゆらん
鷺のゆく空はみそれかきくらす入江の雨に雪のおもかけ
くれわたるいり江の雨による波の色をのこすや鷺のとふ影
たつ鷺のおか蓑毛は名のみして入江の雨にしほれてそ行
立鷺も身のしろ衣をのれのみ雨はるゝ江の雪と見ゆらん
しつかなる雨の入江にたつ鷺は船の行きやおとろきぬらん
雨くらき入江の松にとふ鷺のなれくらぬ色は見えつゝ
蓑毛たにしほれもあへず降雨に入江をとほく鷺のとふ見ゆ
雨になる入江の波路くれはてゝれにゆく鷺の色そのこれる
雨くらき水の入江にたつ鷺のみの毛のこせる跡のしらなみ
ふる雨にあしまを分てとふ鷺の入江の山も陰はあらしな
雨に行鷺の蓑毛のみしま江のますけの笠もぬきて着せばや
あめはるゝいり江の水にたつ虹の影にまきれぬ鷺の一つれ

十八日

夜涙餘袖

まきれなく我をおとろく夜な／＼に涙に狹き袖をしりぬる
袖の上の涙もさそなうげかたき身はいたつらの老の寢覺に
世のうさを包むにあらぬ涙さへ猶せく夜半の袖いかにせむ
うれしさを袖につゝまむ事もなし夜の涙は身にあまれとも
なきを忍びあるほうき身と思ふ夜の涙の限り袖もしらしな
老らくの寢覺の袖をあらそふや昔わすれぬなみたなるらん

永宣

公條

濟繼

爲孝

政爲

重治

康親

公音

伊長

雅綱

季種

元長

守光

實隆

和長

元長

實隆

爲孝

永宣

政爲

重治

小夜衣袖のほかにもしほり行なみたはいつの身を忍ふらん
 夜の袖の涙にもしれ世のうきめ千聲百こゑ音には立ねと
 寢覺して思ひし事のかすゝに涙となりて袖にせけとも
 身なうしと思ひぬさめは夢のうちにせかぬ涙や袖に落けん
 いたつらに老となる身の思ふ事つきぬなみたは夜の袖かな
 おもふことみな夢の世のさのみなと寢覺の袖にかゝる涙そ
 おろかなるをなげく心も深き夜の袖の雫そかきりしられぬ
 愚なる身はとにかくに憂ふしの涙せきあへぬひとり寐の袖
 思ひ出ておつる涙そ小夜ころも袂にせはきむかしなりける
 小夜ふかく袖こそしほれ身のうきの限りを我にかこつ涙は

十九日 憂喜依人 出本不足

市をなす門もこそあれ我すめは同しうき世もかくれ家の奥
 よしあしの報いなすれば世の中のいさみ有にも歎き有にも
 人の世は憂をのみなることわりをしるに増れる嬉さもなし
 あかす猶これをも人はおもふらん及ばぬ身にはあまる恵を
 いとけなきうへにや年も急くらんかへらぬ老を人は歎くに
 梓弓それはうしなふことわりは心をわかむ物としもなし
 民の戸のときしるあめにうるほふも大宮人や花にいとほむ
 つかふへき道ある時をあふく世に歎かさらめや身の愚さを
 思ふ事はたのしむ人も有らめとうき身の憂は猶そかなしき
 うれしともなす業なくば思はめや道ある時に逢る身ながら
 憂世にはなへての名にも身に知らぬ人を見るにも我そ悲き
 なへてその世のことわりや一さかり露の朝かほ花のゆふ顔

二十日

竹契週年 西本殿

康親 和長 元長 季種 永宣 公音 實隆 公條
 康親 和長 元長 季種 永宣 公音 實隆 公條
 守光 伊長 雅綱 公條 伊長 雅綱 公條 伊長 雅綱 公條

唐ころもいるもかはらしき竹の大宮人の代々のちきりは
 すゑの千年の陰もちきりおけ御垣の竹は誰を隔てむ
 敷島のみちはふりぬや桑竹の世々のふる言となく傳へて
 末とをき常磐の陰は松もあれと竹にすくなる世をや契らん
 さゝ竹の色もかはらしよつ代に霜の浅度しみはつくとも

政爲 實隆 濟繼 公條

今はむかし物まなひに尾張國あつたのさとに在りけるほとをりく名古屋の里に行かよひける道に澤といふあたりに種々ふるき調度なとうる見世棚あり歌書つらねたるものゝ見ゆれば立よりてとりて見るに此永正御日次百首の春戀雜の部にて惜らくは夏秋冬の歌のかけたりけるなりあかすくちをしけれとかひつかくて家に歸來ていくほとも日を經さりしに野口翁名玄珪號弄化通稱養安とふらひて何くれと物かたりせらるゝついてにゆくりなきやうにていはるゝやう此ころふるき書函の中に歌集めきたる物ありき外題は何とかありしをいまわすれつとくまゐらすへしやうあるものならはとゝめられよとてかへられけるすなはちおくられき見れば此百首のともにて彼缺たりける夏秋冬なりけるものか思はざるにいとうれしくてよろこふこと限なしかくて又もこそ散みたれめとおもへはとく引合て一冊子となしつるに餘れるもなくかけもせず年をへ國をへたてゝ有けるものゝかく邂逅にもあひに合けるものかなくすしともいともくすしくあやしともいともあやしきことなりけり

此は大秀若かりける寛政の末はかりの事なりし

をこのころ大田氏の南畝莠言といふ書を見るに彼家にをさめられたる法花科註の奥書に

余曾托ニ法住院景春藏局一曰若逢下需ニ法花科註ニ者ニ請告而知焉前年蜡月廿七日景春以ニ好本一被レ送雖レ不堪ニ舞蹈一以レ闕ニ第一一爲レ恨矣翌年人日雲頂院仁如藏局相過見レ之歎賞且曰往歲店上見ニ一卷一於故帙堆中ニ不レ知猶在也否待ニ我遣レ人搜レ之須臾仁如蒼黃自携來則如レ合ニ符一不ニ亦異一乎聞此經者應仁亂後西陣除饑男某得レ之而施ニ與於景雲僧某一其端闕者殆數十年也嗚乎余何幸不レ出ニ十日一以補レ之乎屏山先生所レ謂神寶去來自有ニ定數一不レ可ニ下一以ニ歲月一而測ニ焉定知言者也矣

豈永正戊寅孟陬上浣日東樵瑞佐書ニ于相國寺裡長得禪院一

かく見えたるをいとあやしき事におほえてつくつくと思をれば自己かうへにもさること有けり同日に語出へきことそと當時を思ひ出て書しるしつ

文政八年六月廿三日

田中大秀花押

後水尾院御集

春部

後水尾院御製

立春試筆

寛永廿一年日

百鋪やけふ待えたる都人もたもとゆたかに春に立ちし

吉徳傳孝年

しとしきやふるきにかへるけさは先枕こと葉に春をおほへて

あつさ弓大和の國はなしなへて治る道に春やきぬらん
たか里もいれぬ惠の光よりなのかさまく春をむかへて

立春風

天津風ちりくる雪を吹とちて雲のかよひち春や立ちん

早春

雲霞海より出て明そむる沖のとま屋の春をしろらん
來る春の色もそひけり水無瀬河このやまとの霞ひかりに

聖德太子御製
慶安廿二年日

けふといへばつもるも雪のあさくつの跡あらはるゝ百敷の庭
神垣や春のしろしは杉ならぬ松の嵐も匂ふ梅か香

初春霞

ゆふへとは見しを幾よの光にて霞そめたる春の山もと

早春朝霞

慶安四

待えたるたか嬉しさの春の色や霞の袖にけさあまるらん

雪けにもくもりなれにし山なから春の霞は色もまかはす

朝霞

水無瀬御法堂
曉霞

寒かへる風もしられて山の端は霞もやらぬ有明の月

峯霞

水無瀬川遠きむかしの面影も立や霞にくるゝ山もと
戀つゝも鳴や四歸り百千鳥霞へたてゝ遠きむかしな

峯霞

ことほりや春にはあへず霞けり今朝まで雪に見えし高根も
峯つゝき松の煙のそれもなを今一しほに霞む春かな
嶺つゝき松も檜原も陰ふかく晴やらぬ色や先霞らん
春ふかく霞やさこそ遠からぬ花に嬉しき四方の山の端
けさは先そなたに薄き山眉を遠きや霞む色を見ずらん
遠近の高根をしるき薄くこく霞の内も色は別れて

遠山霞

霞匂ふ夕日の空は長閑にて雲に色ある山の端のまつ
峰高み春の光をさし添て霞む朝日の色もめつらし

霞添山氣色

春の色も花に匂はす霞より心になるゝ四方の山の端
世のめくみ大河山は雪きえて緑の霞そておほふらん

たちぬはぬ春の衣の色そへてはこやの山に霞たなひく
霞春衣

花鳥のあや織はえて朝霞春のたつてふころもきにけり
白妙の雪にかされて遠山をすれる衣や霞なるらん

江上霞

住の江や春のしらへは松風もひとつみとりの色もかすみて

海上霞

和田のはら春は煙の色もみず鹽焼浦のおなし霞に

松上霞

いつなかは霞色とも分てみむ煙になるゝ松のよそめは

橋邊霞

かさいきの渡す雲路の末かけて霞につゝくあとの橋立

湖上霞

颯やかめ志賀のから崎ほのゝとなひく煙や霞なるらん

春朝

春にみむ霞もあさけそ色も香も花にはうしといひてやみむ

千里霞初春

紅も緑も見えぬ春の色を千里に告る鶯の聲

来る春の道ひろからし峰の雪汀の氷消ものこらて

初春見鵲

萬代とさこそ雲井によはふらし年立歸るあし田鵲のこゑ

早春鶯

このねるゐの一よの松の鶯や千代のはしめの春をつくらん
梅か香のしるへもまたて来る春に先さそはるゝ宿のうくひす

春の来る天の岩戸の明ほのになか鳴聲の鶯のこゑ
春といへは神の御代より吳竹のよゝに絶せすきなく鶯
あら玉の春をもこゑの内にして世の長閑さを鶯のなく

南枝暖待鶯

行かりを跡に見のこす花の香に鶯いそけ春の初風

鶯告春

おさまれる宮のこゑならし鶯の四方も長閑に春をつくれは
鶯のこゑのつゝみも百鋪や軒端の梅もかけてかそへむ

鶯入新年語

いにしへのことかたらなん幾萬代々の春しる宮のうくひす

鶯知春

宮のうちとさくそのとけし春さぬといふ計なる鶯のこゑ
都さへまた降雪の古巢にはいかに春しるうくひすの聲

谷鶯

鶯のこゑさくよりや雪ふかき谷の心も春にとけ行
谷の戸はさすか春とや鶯のさきちらぬ聲の匂ひにもしる

名所鶯

うくひすのとひくるのみや故郷の見かきか原の春もへたてぬ
櫻ちるみかきか原にゆく春の故郷さへやうくひすのなく

鶯

鶯のこゑの匂ひを梅が枝のいつこにそへてあかすとかなく
長閑なる光をさそふしるへにて花より先に鶯のなく

梅近聞鶯

聲なからうつす計に植しより鶯なかつやとの梅かえ
梅か香もこゑの匂ひも暗からすおし明方の窓の鶯
軒ちかき梅を心に朝な／＼花にそひ行うくひすの聲
鶯聲和琴

しらふるも名にあふ春の鶯のさへつる琴の音にかよひつゝ
春情在鶯

ちりもせし花よりさきに鶯のこゑの色香にそむる心は
曉立春

鳥か啼あつまの山のせき越て曉ふかく春や立らん
春曙

詠てそ身にしみかへる鴈かれの名残もつきぬ春のあけほの
見しまゝの心にとまる面影やたかならはしの春の明ほの

残雪

峰つゝき都にちかき山々の限りもみえてのこる雪かな

早春雪

山のはにこそその雪けの色そへて曇や霞春をわくらん

春雪

かきくらゝ降もたまらて庭の面はしめる計の春の淡雪

庭残雪

今ふるはつもらて消る庭の面に去年のまゝなる雪のつれなさ

水邊残雪

うち出ん波には遠き花の色や谷の氷の残るしら雪

残雪半藏梅

梅やしる消あへぬ雪の埋木もかた枝花さく春の惠は

にしこそと秋みし梅の同じ枝も分て残れる雪に咲らん

早春

春立て幾日もあらぬ梅壺の梅こそ匂へこそ朝かせ

初春霞

相坂や關のこなたに春きぬと霞そめたる朝日影かな

元日宴

百鋪や百の官に御酒たまふつかひも世々の春にしられて

夕鶯

聞あかしやとりやからん夕暮の筈は山と鶯のなく

關早春

あつまちにありてふ關の名に立て霞やけふの春をみすらん

朝霞

立そむる霞もうすき山眉に匂ひ出たる朝附日かな

霞遠衣

白妙の雪はのこらてかく山や春は霞の衣ほすらし

雪消春水來

絶たるなつくや雪けの山水の末たのもしき春をみすらん

春風來海上

吹かふる春はなへての沖津風波の千里の誰に告らん

題不知

いとはやも縁に匂ふ柳かな花はこのめの春とみしまに

春風吹春水

時つかせ春の色香の水の上に先吹そめて氷とくらし

風光日々新

御書

きのふよりけふはめつらし花鳥も千世をならさん宿の初春
毎家有春

世はなへて梅や柳の時津風たかきれかは春をへたつる
いますめる霞のほらの宿もあれと猶九重の春そのときき

毎山有春

白妙の花匂ふらん春に又山また山に霞そめぬる

雪消山色静

雪とくる春にしつけし年のななきはこやの山のみとりは

春風春水一時來

うき草のすみより水の春風や世に吹そめてのとけかるらん

東風吹春水

時津風春の色かのみながみに先ふきそめて水とくらし

梅

咲花のいつくにこめて白妙の一重なからもふかき梅か香

大空をおほはむ袖についむとも餘るばかりのかせの梅か香

初梅

寛永十六

時もまたあたゝかならぬ春風に雨まちあへす匂ふ梅か香

里梅

吹まよふ空にのちてや梅かゝにたか里分ぬ月の下風

軒梅

誰とひてこそばともみむ淺芽生や人は軒端の梅のさかりを

雪中梅

春風の寒かへる空にさそひ來る雪にまたれぬ梅かゝそする

雨中梅

心あれや雨もふり出て紅の色そふけふの庭の梅かえ
吹風もよそにさそはて咲梅の匂ひしつけき雨のうちかな
故郷梅

軒ふりて橘ならぬ梅かゝもむかし忍ふの露やそふらん

梅告春

世をめぐむ道にもうつせ天か下みな春におふ梅のにほひな

若木梅

いかた又色香そはまし宿の梅生行末も長き立枝に

梅風

春風は吹ともなしに青柳の木末にみえてなひく梅か香

梅薰風

世は春にさける咲かざる宿はあれと梅か香ならて吹風もなし

よるつ木にやとらて吹もひとつかのなあまりある梅の下風

花薰袖

袖ことに匂ひそうつるいやしきもよきもさかりの梅の下風

多春翫梅

幾春か言葉の花も咲匂ふ此もゝしきのやとの梅かえ

毎年愛梅

去年よりもことはまさる色香そと幾春かみる庭の梅かえ

梅度年香

としことに色香をそへて咲梅の花にや千世の春も待らん

梅有遅速

先咲やなくるゝ程をうつしうへて梅かゝひさしさをみん

梅花何方

朝霞立枝も見えぬ垣根よりおもひの外に匂ふ梅か香
玉たれのひまもとめ入春風はいつくなりけんあやし梅かい

落梅浮水

駒つなくたか爲かほに梅の花またきちり行春の山水

梅柳渡江春

寛文五年正月廿

江の水に船さす棹のうちならぬ梅も柳も影うつす春

江の南梅さき初ておそくとくみとりにつく岸の青柳

梅交松芳

立ならふ枝にもうつる花の香に松よりふくも梅の下風

若菜

ひまみゆる澤邊の水ふみ分て若菜つむてふ道はまよはず

若菜處々

雪きゆる野原の若菜尋みむ澤の根岸に猶もぞくなし

水邊若菜

春はまたあき澤水のあさからぬ名にあふせりやつむもぞくなき

寄若菜祝言

若菜つむ袖のよそめも白妙の露の毛衣千代は見えけり

草花早

見そむるそ思ひは深き咲花の色はいつれと分ぬ千種も

若草

やとりつるこてふの夢も覺さらんれよけにみゆる野への若草

春草

分みればをのかさまゝ花そさくひとつ緑の野への小草も

春木

神かきやきのふにも似ずくる春の一夜の松はかすみ渡りて
窓前梅

あかすななとちもやられす月やとる影さへ匂ふ窓の梅かえ

玉柳

ならひては花はつかし玉柳玉かつらせ百のすかたに

柳先花緑

立ならふ花はこのめの春の色に先染けりな青柳の絲

岸柳

生ましる岸根の竹のふし柳おなし緑も春やわくらん

柳辨春

春は猶柳にしるし緑なるひとつ草木の有か中にも

柳臨池水

元和十一年九月廿五日

青柳の絲絶すして萬代をすむへき蔭や庭の池水

柳垂臨水

氷とく池のかゝみにかけみへて柳のまゆも世にたくひなき

柳靡風

花ならぬ柳か枝に吹もなを思ひみたるゝ露の朝かせ

行路柳

別路の心ほそきを行人に誰か折そへし青柳の絲

道のへや行もかへるも立そよる春のかけなる青柳の絲

柳垂藏水

岸かけの柳の梢いとたれて松ならなくにこゆる河波

柳移池水

池水の底なるかけも色そひて年のおなかき青柳の絲

柳櫻交枝

花のときにあはすは何を玉の緒の柳櫻にあかめ春かな

二月餘寒

梅の花折へき袖も春寒て猶二月の雪そかいれる

柳露

青柳は中々おもる露もみすなひくなおのかもとのすかたに

餘寒永

春の日にとけ行末も木かくれの山下水やまたこほるらん

春雨

道遠くきてや覺ゆる行人のぬるいはかりのころも春雨

たつ鳥のあらぬ羽音に音もなく霞む軒端の雨を聞哉

東屋のまやのあまりにかすめるや降も音せぬ春雨の空

閑居春雨

春の雨さたかにそ聞音信の人にまれなるやとの軒端は

潤花愁暮雨

長閑なる夕の雨を光にて谷にも春の花は咲けり

春月

月影はそことも見えす霞野に木の下やみそひとり晴行

鳴くらす鶯の音によろこひの色をそへても出る月かな

霞行影さへ嬉しさふ風のさえしとはそを月にひらきて

いつはあれと霞める花のこいまより光も匂ふ春のよの月

春曉月

寛永廿一年二月
空にはふあかつき方おイの影もうし霞かうへに春のよの月

名残あれや待出しまに影うつる松松イの梢の月の明ほの

風寒く霞吹とく明方のかけしもおしき春のよの月

浦春月

浦舟のとまかいけてや難波人梅がいかなぬ月も見らし

月影の霞める程も浦なみにみえてきやけき海士のいさり火

難波江の笛かいけてや浦人も梅がいならぬ月も見らん

餘寒月

風あれて霞をはらふ山の端に春としもなき月のさやけさ

旅宿春月

旅衣みやこ思へば都にて見しにもあらず霞む月かな

深夜春月

かたふけは鈎簾のまちかく入月のおほろけならぬ哀をそしる

餘寒月似雪

寒かへる空にはくもる月影のそれかとまかふ雪そつもれる

歸雁

したはれて來にし心の雁ならはかへる雪路をいかてしるらん

春霞かくす部の山の端をかへりみかちに雁もゆくらん

曉歸雁

曉の別といへははるのかりかへる雲路をしたひやはせぬ

深夜歸雁

曉の鳥よりさきに鳴そめてなれも別やおしむかりかぬ

陽春布徳

やとことに咲梅がいもなりある春の心を先しらすらん

世を花にもよほしたつる雨風も更に時ある春の長閑さ

くまもなき人の恵を鳥すらもいよるこひの春やつくらん

餘寒風

立あへぬ霞の色も春あさみこそ見し雪をかへす山風

江山春興多

氷とけし江の水遠く山かすむ春やことはの代々の程なる引うへし松も高砂住の江の春にあひおひのみとりをやみむ

綠竹辨春

めつらしきこゑの色そへ吳竹の千世のみとりを鶯のなく

霞中流

この山の上にありてふ瀧なれや霞のうちに響く岩なみ

松契春

これや此千とせのはしめあたらしき春しるやとの庭の梅かえ

松かえも千年の外の色そばむ此やとからの春の日長さ

峰春松

峰に生ふるたれもしらしな八千代へんみかきの松の春の一入

松色春久

八千年を春の色なる影もあれと猶かきりなき庭の松かえ

飛瀧音清

雪とくる山の瀧津瀧落そひてあかぬ音にも春をわくらし

遠山如畫圖

つくり繪を霞や残す咲頃はまた遠山の花の千枝に

これまた又こゑある繪しと夕間暮山の端遠くかへる雁かれ

龜の上のうつしゑなれや千代の秋雪をふくめる春の山の端

梨花

降雨もましらぬ雪の枝たはにつもる色そふな山しの花

雪なからうつるふ色はさむからてたくひもなしの花の色哉

櫻

しほみては磯山さくら吹風に是も見らくのさかりすくなき

漸待花

雪も今残らぬ山の木すゑより咲いてむ花そやかて待るゝ

待花

ときはなるたれもあらなむ住の江の松は久しき花ならぬかは

あすからは枝にうつさむげふばなをまつ心の花のさかりな

いさこゝに千代も待みん花の友あかぬ心に春をよかせて

待たてみむ思ふに違ふあやにくの世のことほりに花やさかぬと

花初開

いさきよき朝露ながら咲そむる花よさかりの色はありとも

山櫻

散らばおし香をなつかしみ櫻花匂にをばぬ春の山かせ

初花

めつらしき見るを心の千しほにてさく色ふかきはつ櫻かな

世の常の色香ともみすすたれこし初花そめの深き思ひは

禁庭待花

鶯の聲のつゝみも百敷の軒端の花にかけてかそへん

松間花

松風にさそはれやすき花そうきさしも常盤の陰はならはて

見花

いかなれやみる物からのわりなさな心の花の春にそひ行あかなくの心の色や見るたびに又みるばかり花にそふらん

靜見花

ことしけき世をもわすれてつく／＼と心をわけぬ花にむかひて

暮山花

ことくさに旅れしぬへく暮にけりこえ行山の花の下かけ

森花

しめのうちの花をよきてや神かきの杜の春風吹も長閑しめ

折花

折のこせあすみむ人に見ぬ人のけふのためなる山の櫻も

曙花

霞行松は夜ふかき山の端に明ほのいそく花の色かな

河上花

花さかりすき行ものは川波のよるひる分ぬならひかなしき

磯櫻

鹽みては磯山櫻吹風にこれもみらくの盛すくなき

花下忘歸

見る人ももしあひおもふ花ならば道を我もわすれぬ

題不知 岩倉御幸の時

長閑しな風もうこかぬ岩倉の山も花さく春のこゝろは

初花

なへて咲盛はあれとあかすなをけふ初花の色を見初て

曙花

白雲に松も檜原も籠江に初瀬の山そ花に明行

寄雲花

匂ひこそ四方にみたるれ風吹けと所もさらぬ花のしら雲

雨後花

雨の後花はまねなる花にこそましるとみえし青葉かくれに

旅宿花

花の比は野山をやとのならはしに又今更に旅れともかな

山家花

柴の戸は花もうき世の外ならぬかは

わりなしや花さく比は柴の戸をさすかとほぬもとほるいもうし

花盛

あすを待けふこそ花は盛なれ咲のこられはちらすやはある

逐年花珍

春をへてなるいにと染まらさる心や花の色にいつらん

花雲

天津風しはしといめむちる花の雲のかふひち心してふけ

花なれや遠山かつら白妙に麗をかけて明る光は

花留人

見るかうちに語らふ人のなさけ迄花にそへてもえこそ見捨れ

翫花

まといして見る人からや花にあかぬ色香もけふに似る時はなし

見花戀友

友こそは色香の外の色香なれとへかし花のさかり過さて

澗花愁暮雨

長閑なる夕への雨を光にて谷にも春の花は咲けり

寄雪花

花なれや春日うつるふ山の端にあたりかけなる雪の一むら

花埋路

過かてにけふや暮さん散つもる花のうへ行春の山みち

池水似鏡

長閑しな世にはにこれる水もなき春をうつせる池の鏡は

寄風花

さそへともちるへくもあらず盛なる花には風のとかもかくれて

寄花神祇

あかすことや神もくらん色も香もふかき心の花の手向な

花隨風

花よいかにも身をまかすりんあひ思ふ中ともみえぬ風の心は

花漸散

日かすこそつゐにつられ山風のさそはぬ花も青葉そひ行

落花

家つとにせよとや風のおくるらんたをらぬ花の袖に亂れて

山に鳴く鳥の音にさへちる花のむなしき色はみえてさひしき

よしやふけちるも色香の外ならぬ花には風もおもひかへさん

鹽かまといふ櫻を

浦の名に聞はるげし陸奥の花は軒端にちかのしほかま

三月三日

けふはその水上の月もめくりあひて咲かけふかき桃の波かな

苗代

寛永十二・十一・十六
あらそはぬ民の心もせきいるゝ苗代水のすへに見へつゝ

雲雀

夕ひはり我ある山の風はやみふかれてこゑの空にのみする

款冬

山吹のいはてもおもふ吉野川はやくの春のおしき名残を

誰ゆへにいはぬ色しもみたるらん忍ふにはあらぬ山吹の露

寛永八・十二
里款冬

里の名のいはても物をとばかりに何か露けき山吹の花

川款冬

よし野河さくらは浪に行春もしはしせくかと匂ふ山ふき

山吹のうつろふ影や五百年にすむ名も色に井手の玉河

藤

寛永八・正・廿五
はひかゝる草木も分す紫の色こき藤のあかぬこゝろは

池藤

池水に松のみとりを染かへて紫ふかくかゝる藤なみ

池にすむなとやさこそ行春をうらむらさきに藤も咲らめ

咲藤もうらむらさきの色にいてぬとはれぬやとの池の心に

池水そむらさきふかき咲藤はをしのつはさの色もうかひて

松上藤

玉かつら降までかけて咲藤に木高き松も谷のうもれ木

藤花盛久

いはひつる松に契りて君と臣あひに相生の春の藤なみ

春到管絃中

谷かけもあはまきはかり吹笛のこゑの中なる春の長閑さ

牡丹

思へとも猶あかさし花をさへわするばかりのふかみ草かな

一きはのかすさへそひて紅の色もことしはふかみ草かな

春生人意中

のとなる人の心の春の色や世に初花とまつ匂ふらん

山姥春

限ある春はかひなし外のちる後しも花は匂ふ山かせ

朝眺望

時しらぬ都の富士の春の雪かのこまたらに今朝はきえつゝ

春釋教

雪なからきえも残らし春日さす野への若菜のつみは有とも

拈花微笑 世尊拈華如葉微笑

心もてひらくる花は梅か桃かとはいや人によいはすとも

故郷草

あれまくも春そおよはぬ古郷のかきれにしけきつはな草も

笙笛箏琴琵琶をかくして

うしやうし花にはふえに風かよひちりきて人のこととひはせず

雄

子を思ふ心やかはす夕ひばりとこをならへてきゝす鳴なり

春風不分處 古事孟子萬章篇下武王不泄適不_レ忘_レ遠

風も今おさる春に遠近のわすれすなれぬ心をやふく

世は春のめれぬくみの風にこそ所もわかす雪はけぬらめ

本歌しら雪の所もわかす降しけはいはほにも咲花かとそ見る

又惠ノ風之事古文後集蘭亭記天朗氣清惠風和暢惠風は春風也

暮春

花鳥にあかてそつゐにくればとりあやなや春のあまることしも
かきりある春の日敷をかそへても今さらおしきけふの暮哉

今さらけふそおとろくかれてより限ある春はかそへしめても

暮春風

この夕花も残らぬ朝風にきはひて歸る春のさびしさ

暮春雨

ひちかきの雨にかくれんやとりさへしほしたとて行春はなし

柳先花緑

春はまつなびく柳も深木の花にならばん緑をやおもふ

海邊霞

朝またき海つら遠く漕舟のほのく霞色やみすらん

夏部

首夏

夏きてはひとつ縁もうすぐこき梢にをのか色はわかれて
けふといへは心を分て時鳥花をおもふかうちもまたるゝ

林首夏

すむ鳥も春より後やうしとなくちりしきのふの花の林に
ちる花の雪をたいめる夏衣かへても春の名残やはなき
更衣

貴殿更衣

聖訓御集

是やこのもつつ色なるしらかさねけふの袂はしなもわかれず

山残春

かきりある春はかひなし外のちる後しも花のにほふ山にも

残花

咲そめし面影ながら日にそへてまれなる夏の山さくらかな

餘花

玉かきの風もよきてや神まつる卯月にかゝる花のゆふして

新樹

常盤木に色をわかはのうすもへきおなしみとりの中に涼しき
夏山のおなし縁にむかはめや花やもみちのおなし千種に

卯花

咲いつる折しもあかすうの花は月なきほととの庭の光に

卯花似月

里まてはさしもおくらぬ影なれや卯の花山の^かへるさの月

卯花繞家

月影はめくらぬかたの垣根にも咲卯の花を光さやけき

社卯花

白妙の衣ほすかと川社しのにみたれてさける卯の花

待郭公

高砂の屋上なられと郭公まつはいくよの物とかはしる

時鳥まつこそしるし咲藤の花のたよりを宿にすくすな

手規心の松のみさほにもくらへくるしきこゑのつれなき

杜鵑

過行なたか初音とかほといきす我おしむをも待えてはさし

時鳥幽

聞つともえしもさためす時鳥あやな雲井のよその一こゑ

なをさりに待やはきかむほといきす雲井に遠きよその一聲

一こゑの空を明行郭公啼つる方の月もほのかに

跡したふたゝ一こゑは郭公遠き入さの山の端の月

時鳥橋

うとくなるをのがなくれも色見えは青葉の花の山ほといきす

聞時鳥

覺はてぬ曉やみの一こゑは夢にまさらぬほといきすかな

野時鳥

聞初てあかぬ野中の郭公見なくるほとそ空に久しき

岡郭公

寛永九年

時鳥鳴ていふきの岡の松まつにかひある聲の色かな

故郷とならしの岡のほとゝきす世に忍ひねやこゝに鳴らん

一こゑもゆきゝの岡の時鳥里をあまたに聞やつたへむ

鳴子規

時鳥鳴かくれ行一こゑをあかしの浦のあかすしそおもふ

磯郭公

待となきあまのいとやもゑる波にこゑそへてとふ時鳥かな

夕時鳥

寛永廿一丁巳七月
神まつる明月の影も白妙のゆふかけてなくほとゝきすかな

時鳥ゆふとゝろきのまされにも待一こゑはなをさたかにて

五月時鳥

郭公をの五月はおりはへて引やあやめのねをもおしまぬ

五月の空といふ手向に

かりそめの軒のあやめも時しあれば五月の空に匂ひことなる

卯月郭公

初こゑはまた忍ひねの時鳥卯月をなのか時ならずとも

濱五月雨

谷川の岩こす浪に淺き瀧も淵と成行五月雨の空

五月雨

梢にも魚もとむへくそなれ松浪にしつめる五月雨のころ

岡五月雨

岡にもやつゐにのほらん麓川行水高き五月雨の頃

袖五月雨

袖人は宮木もひかぬ五月雨に山とよむこゑや瀧々の川波
横なかつ川波たかき五月雨に力をもいれす丹生の袖人

曉時鳥

時鳥たかとひすてし恨さへしらて待とるあかつきのこゑ

晩立

夏の日のけしきをかへて降音はあられに似たる夕立の雨

俄にも波をたへしにはたすみかはくもやすき夕立のあと

音羽山音は聞えて夕立のこゝに降つるほとをふるかな

常はみぬ山のみとりも瀧落て名残もすゝし夕立の雨

寛永九丁巳五月
涼夕立

夏雲

暮寛永九丁巳五月野や此野の末に降くるもしはしよそなる夕立の雲

降雨のなこり涼しく夏山の縁につゝく雲の色かな

河曉望

ふかくなる青葉の山の麓川夏しも白き浪の色かな

眺望日暮

釣舟はみなすなとりにみえ初て暮行奥に近きいさり火

白鷺立汀

白妙の池にばちすもまた咲ぬ汀の鶯は色もまかはす

早苗

うへ渡す早苗の末葉しけるらし千草と共にひく夕風

山水のたき津なかれをせき入て雨まちあへすとるさなへかな

夜慮橋

名残なをむかしおほへて見し夢の後も枕にかほるたち花

故郷橋

ふる郷の軒端に匂ふ立花やむかし忍ふの露をこふらん

すみ捨しむかしも遠く故郷のぬししらぬ香に匂ふ立花
沼菖蒲

しけりあふ草のみとりにかくれぬのあやめもけふや分て引らん

夏月

てりそはむ紅葉はしらす秋風も月の桂はまたぬ涼しさ

松風もりにやかふ夏しらぬ月そまことの霜の花なる

あつき日の暮かたかりし名残しも待とる月のあかぬ涼しさ

瀬夏月

夕涼み渡りもはてぬ此川の浅瀬しら波月そあけ行

清夏月

白妙の色そ涼しき夏ころもかとり浦の浪と月とに

夏月易明

さし入ておくも残らぬ横の戸の明る夜しるき月のみしかさ

夏閑

をのかうへにきゝおひてこそ郭公待に名こそその閑のなもうし

瞿夢

露けしな誰か別をしないひこしれてのあさけのとゝ夏の花

蘿瞿夢

朝夕のまかきの露やかそいとおほしたてけむ花のなてしこ

夏草

あけまきのはなちかふ野の夏ふかみかくるゝ草の陰をうしとや

野夏草

たのもしな夏野の草もふむ跡は絶なむとなる道なのこして

叢螢

草の上に今朝そきえ行白玉か露かとまかふよはの螢は

くちはてむ後こそあらめ草の上に螢や何のもえて行らん

水螢

池水になほ消やらて飛螢はかなくもゆるをのかおもひを

沼螢

もへ渡る思ひはあはれかくれぬのうきを人にゝおほたるも

水邊螢

とふ螢水の下にもありけりとをのか思ひをなくさみやせん

深夜螢

たかおもひあまりて出し玉そとも夜ふかく見えて飛はたる哉

あはれ我よほじもいまは更る夜に窓の螢はあつめても何

嶺照射

さなしかのたつたのおくも残らぬや峰にも尾にもともしする比

蚊遣火

蚊のこゑをばらひはてゝもしつかやにくゆる煙は又やくるしき

曉螢

明方の影うすくなる水の面に螢や春の光そふらん

里蚊遣火

里人もかりなくなる難波かたあまのもしほ火煙くらへに

垣夕願

卯の花の目かすへたつるかきほにものこる色かとさける夕願

あれたるしつかかきねのたそかれに光涼しき夕願の露

卯花

時鳥かたらふこゑに降つむと見し卯の花の雪はけぬなり

河夕立

水上に夕たちすらしみるか内ににこりてきほふ瀧津河波

森蟬

夕日さす梢の露になく蟬の泪ほしあへぬ衣手のもり
瀧波を木すゑにかけて山ふかきけしきの森の蟬のもしる聲

暮山蟬

夕露を待えかほにも空蟬のは山しけ山しけきこゑかな

樹陰蟬

秋風もせみなく露の木かくれて忍び／＼にかよふすゝしき
霜かれて木の葉をまかふ鳴蟬の葉山はしけき梢なからも

鵜川

河そひの柳にすくやかゝり火の影もみたるゝ鵜舟なるらん

納涼忘夏

涼しさのことはり過てはては又秋風更ぬ森の下かけ

松下納涼

むかしきくおのゝゑくたす松陰も爰におほへてあかね涼しさ

夕納涼

鳴蟬のこゑも木すゑにしつまりて涼しく暮るゝ森の下風

納涼

松陰やまたこぬ秋の初風も下行水にかよふすゝしき

夏祝

今爰に人の國さへたゝきこんと君にしらすくひなとそきく

森夏菰

かれてより月もうつろふ河波にみそきすゝしき神なひの森

庭草

はらへとも跡より生る庭草を思へば野へはしけらさりけり

六月板

けふのみの夏は人まれ麻の葉を瀬々になかして御被すゝしも

秋部

早秋

きのふにはなな吹かへつ秋の風身にしむまての音はわかれと
色みえはこれや初入紅葉する秋のけしきの森の涼しさ

初秋露

いにしへもさこそは露にはさゝめ心つくしの秋の初かせ
むかしより心つくしの秋風にむすひそめてや露はひかたき
吹こほす秋の朝けの露みえて初かせしるきあさちふの庭

初秋風

すゑつゝに身にしむ色の初入や衣手かるき今朝の秋風
吹初る桐の一葉の秋風にあらそひてちる浅芽生の露

都初秋

いつしかとげふは紅葉の秋もさぬ見しはきのふの花の都に
音羽山音にもしるし都にはまた入たゝぬ秋の初風

森初秋

とはやいとおもふやしるへ我心つれて生田の森の秋風
はいそ原露より先の秋の色に染ぬもしろし森の下風

關初秋

初風のせき吹こゆる須磨の瀨に秋なき花もちりやそふらん
残暑

秋きても猶たへかたくあつき日のさすかに暮るゝ影の程なさ

七夕

一とせな中にへたて逢見まくほしの契や思ひつきせぬ

七夕の一夜のちきり思ふには入ぬる磯のうらみもそなき
七夕風

七夕雨

此ころのせこか衣の初風をうらさひしとやほしあひの空
おほつかな雨ふりくらす七夕の行あひの空は雲もかよはす

七夕衣

かさぬるも夢とや思ふ七夕のかへしなれたる中の衣は
七夕の衣のすその秋風にうらめつらしくかきれてやぬる
名所七夕

今宵さへ衣かたしき彦ほしに戀やまさらんうちのはし姫

七夕月

天の川なかるゝ月も心してまれのあふ瀧に光といめよ

七夕川

なきこふる泪の河のおり姫のうへて見るめもけふやかるらん

七夕草

うくらんもしらすや星の手向草此八千種は花もましらす

七夕草花

今よりはちりもすへしと織女や契らまほしき床なつの花

庚申七夕

七夕は今夜れぬふにめぐりくる年さへうしとかこたさらめや

詠二星適逢

七夕のまれのよに一とせなつものうらみはいひもつくさし

二星待逢

暮るまなわかに久しと七夕の待こしけふも待や飽らん

七夕鳥

かへまよく星の契よをのか上に思ふはおしのひとりねぬよ

七夕別

いかにまたみきはまさらん天の川けさしもかへる浪のなごりに

七夕祝

星合の空にくらへて君と臣も身をあはせたる代々の契を

夜萩

ふかきよの物にまされぬしつけさやこゑをへけらし萩の上風

月前萩

かゝる夜の月に夢見る人はうしといはぬばかりの萩のこゑかな

萩風

陰高き松に吹たに埋もるゝ軒端の萩の萩かせの暮

萩露

正候八九

袖ふれておらはおちぬへく色にしもあたのおほ野の萩の夕露

さやけしな清く涼しき萩の戸の花にとられぬ露の光を

野外萩

しかなかりそ萩がるをのこ一本はかさしに残せ野へのかへるさ

萩萩

から錦こゝそたゝまく男鹿なく野への眞萩も此ころの萩

女郎花

女郎花なまめく花よ朝顔やつまとふしかもおもひかへらん
たかために思ひみたれて女郎花いはぬ色しも露けがるらん
たかための露ふかいらし女郎花萩の千種に思ひこかれて

白露のかさしの玉の女郎花よそひことなる花の面影

野女郎花

誰か此野をなつかしみ女郎花なひく一夜のまくらかるらん

茹萱

みたるゝをすかたなりけりかる萱はたゝ萩風にまかせておらん

草花早

みそむるそ思ひはふかき咲花の色はいつれとわかぬ千種も

草花露

かゝやくは玉か何そと百草の色にとられぬ花のしら露

朝見草花

かすみには千重まさりけり霧渡る萩の花野の露の明ほの

朝またき露しらみ行庭の面にはへある萩の花の色々

秋花

千々に身をわくともあかし萩の花ひとつゝにとまるこゝろは

秋夕

さひしさは萩のならひを萩の葉のことはり過る風の音かな

ななめこしいくよの萩のうさならむ我とはなしの夕暮の空

身をしほるならひいかに世やはうき人やはつらき萩の夕暮

さしてうき色はわかれす何事も思ひのこさぬ萩のゆふ暮

澤間秋夕

夕間暮鳴たつ萩の澤邊にはうき曉の羽れかきもなし

早涼

色見えすこれや初しは紅葉する萩のけしきの森の涼しさ

秋夕思

たか秋か露の外なるなく鹿も籬のむしも絶ぬ夕に

極花

朝貌は朝な／＼に咲かへてさかり久しき花にそ有ける

極不待夕

露よりほしはしなくるいそれもなを夕かけまたぬ朝顔の花

蘭

ふちはかま吹風ふりて秋の野の草の秋もかくやにほへる

まの薄

霧にのみむすほゐるらしまの薄穂にたに出ぬ秋の心は

秋里

露も猶身にしむ比のいかならんうらめしといふ里の秋風

蟲

色見えはなのかさま／＼鳴いのるそれもや千種野への蟲の音

夜蟲

よな／＼の露を忍ひて松蟲の名にあふ聲の色もかはらぬ

折しもあれ夜さむの衣雁かれのはた織蟲も聲いそくらし

原蟲

秋風に亂てしげき蟲の音は宮城か原の露にまされり

松蟲

浅茅生の霜にもかかれぬ聲の色やひとり名におふ野への松蟲

夕蟲

やとりしる誰を松蟲草ふかきまかき山と夕暮のこゑ

山家蟲

都にて聞しにも似す山ふかみ瀧の音そふ夜半の蟲のね

蟲怨

うらかるゝ眞葛か中の秋風を音に顯して蟲もなくなり

月前奎

自妙の霜にまかへてきり／＼すいたくなわひそすめる月影

雁

あま小船はつかにそきく初雁のこゑをほにあくる秋風の空

秋風を宮古の空のしほりにて雲路たとらぬ雁やきぬらん

したひこし春も昨日の夢の世をかりとなきてやおとろかすらん

ふる郷の秋に絶すや雁かれのこゑるかるくも出て來ぬらん

ふる郷を秋しも餘所に別きて雁のと渡る空にしくるゝ

月前雁

初雁の聲をほにあけてしたひ來ぬ天の戸渡る月のみふれに

駒迎

世に絶し道踏分ていにしへのためしにもひけ望月の駒

夜鹿

あま小船よるの秋をぬらすともさしてゐらすやさほしかのこゑ

梓弓いる野の鹿や我が方にひけばよる／＼妻をこふらん

さをしかも山鳥の尾のなかきよをよそにへたてゝ妻をこふらん

秋の風夜さむなりとや小男鹿もかれにしおのかをこふらん

深山鹿

をのかうへに何より秋の山ふかくおもひ入らむさをしかのこゑ

秋ふかき太山嵐にさそはれて紅葉にましろ小男鹿の聲

田家鹿

小山田のかりほへたつる夕霧にもる人なしと鹿や鳴らむ

鹿聲驚夢

我となす人もみえぬ夢はたゝ何かなしかのこゑもいとほむ

鹿聲留人

から錦こゝそたいまくをしかなく野へのまはきも此ころの秋

河霧

そことなき霧のうち行浪の音も一すしみゆる秋の川きり

明ほのや山本くらく立こめて霧にこゑある秋の川水

河上霧

水の面に吹跡みえて山本の川風しろきなみのうき霧

渡霧

是もまた渡る舟人そことしも行衛やしらぬよとの川霧

曉霧

さたかにもりくる鐘の聲ながら明ぬ夜ふかき峯の八重霧

山朝霧

峯つゝき吹方みえて朝霧の風の絶間そ絶間たになき

霧中山

山もさらにうこくとそ見る明ほのや秋風なひく霧につゝみて

月

もれ出ぬ雲間またれて半天に行もおしまぬ夜半の月かな

いく里かおなし心に見る月も千々におもひの色ばかりらむ

花ならはうつろふ比のよばの月かたふきながらそふ光かな

月出山

半天に更もゆくかは山の端をさし上るほと月におもへば

待月

うき雲はうすくも空に消のこれ待出ん月の光もそ添ふ
山のほの雲より雲にうつりきて猶出やらぬ秋のよの月

弄月

いひしらぬ色にも有かな何事かなにのむしろか月にはへなき

見月

見る人やをのかさまく色かはる月に千里も分ぬひかりを

有明月

月はなをさかり過たる有明のかげしもふかき哀そひ行

あくるよのしらむ光や池水の月の水をわたるはる風

長月も今幾ほとか残る夜の名残つきせぬ有明の空

十五夜月

もと見しもげふの今宵に似る時は半の秋の雲の上の月

はこのこと雲井にのほれこきのこの今宵の月も空にすめく

停午月

半天にのほりばてゝそ吳竹の夜なかき影も月にすくなき

かたふかばくひある道そ月もいまのほる空なき影なといめよ

雨後月

いひしらぬ月そうつろふ萩すゝき露もまたひぬ雨の名残に

月すめるこよひのためと雨も世にさしも此比降つくしけむ

不知夜月

雨もよにうしや名たゝる昨日といひけふたにはれぬ十六夜の月

九月十三夜月

名にしあふ今宵一よにとばかりも見し長月の影をしと思ふ

光あるこよひの月の言の葉にくもるうらみをわすれてやみむ

長月のこの夕汐のみつとなき月もみるめにあかぬかけかな
よしやみむ月のかつらな千入までけふしも染る秋の雨かと
よしやよし月のかつらの花もみつ空はさながら雪の明ほの

山家月

山里の友とはなれて夜半の月これもうき世を廻るとおもへは
山水のすめるやいかに月にこそうき世ながらも世をばわするれ

立待月

ひくらしのなく夕くれのそれなれて立またるゝは山の端の月

居待月

より居ても月をこそまで心あての嶺にむかへる横のはしらに

山月

卷上る鈎簾のまちかく山もさらにうこき出たる月の影哉

茸狩御幸の時叡山を翫ありて

みよやみよ都のふしの空晴て月もうへなき秋の光を

嶺月

夜長さの程もしられて待出るみれこそかはれ有明の月
富士の根はなへての峯の雲霧も薙になして月やすむらん
影うすき月のかつらの初もみちくるゝ尾上の松にもりくる

岡月

木かくればあやな出ても秋の月さすや岡へのまつそ久しき

曉月賦雲

はれかたき雲をそいとふむかひみる心の月もすめるあかつき

明月

さやけしなたえても残るうき雲に又待出る山の端の月

横峯待月

影にはふ松もうつり行秋の月まつよきなる峯のつゝきに

松間月

ゆきみむと引うへし松も秋をへて木の間すくなき月にくやしき

盛秋月

松のばも秋は別れて夕附日さす岡野邊の月のさやけき

野月

むさし野や草の葉分にみえ初て露より下にいつる月影

行手にやむすびよるらん月やとる野中のし水しるもしらぬも
やとりけり月も花野の露分て家路わするゝ草の枕に

野徑月

おきあへぬ露はさながら月影に分しあとおる野への通路

關月

月そすむ不破のせき屋の板ひさしひさしき跡を代々にとめて

江月

かりはらふ手にまかせてやあしまにもみかく玉江の浪の月影

河月

河波に月のかつらのさほさしてあすなもしらすうとふ舟人

月そすむ舟さし下す川波の夜の雨きく音もさながら
雲のうへの影もかよひて天の河名になかれたる月やすむらん

池上月

月やしるこよひも今宵見る人を待えしやとの池の心は

池月久明

月そすむ千里の秋も池水のそこのさゝれの數にみえつゝ

水紀月

秋の月いつくはあれと海つらの宇治よ伏見よいかにすむらん

湖上月

寛永十七年

はれてよきおなしたくひの秋の月たか影に湖の海つらしはならぬうらにそうらむ煙さへ空にくもらぬ月のみるめは

瀧月

これもまた瀧なくもかなかへりこん山路はさこそ月もおくらめぬきみたる玉かとそみる月影も清く涼しき瀧津白なみ

池月

さい波のよるさへみよと紅葉はのうつるも照す池の月影

月照瀧水

月はなを雲のみをとて瀧津瀧の中にもよとむ影やなからん

海月

くもらすよむへも心ある海士のかるもなかの秋の浪の月影

海上月

須磨あかしすむらん影もみろめなき我身をうらの波の上の月

海邊月

和田の原雲井についく夕波のかきりしられていつる月影

夕煙月に心して須磨の海士の家たにまれよもしほたくらし

浦月

波かゝる眞砂地遠く影更てうら風しろき住の江の月

暮ぬれば沖のとも舟こきわかれなのかうら／＼月やみるらん

思ひやる赤石も須磨もおもなれてまたみぬ浦の月としもなし

行舟にゆふへあるへき見る月も波路やかばる秋の浦人

都月

今宵たにいかて都の空ながら山の端しらぬ月にあかさむ

花洛月

春によせし心の花の宮古人うつろふ秋の月やみるらん
おもひやる心に遠き海山もこよひ都の月にむかひて

旅浦月

浦人の夕へ曉行舟になみ路をかへて月や見るらん

海上曉月

入はつる都の山の月影も残るや沖の波の明かた

河月

耽神門宮内卿拜領

更渡る月やさそひてすみのほる河音高きよはの閑けさ

旅泊月

思ひやる心の道そ友舟の同じ泊りの月やかばらむ

寄月旅泊

波風のこゑさばくより泊舟思ひのこさぬ月それられぬ

月契多秋

こよひたに千夜をこよの月もかなあかす八らよの秋を契らん

詠月爲友

月を友といはむもやさし雲の上にすむかすむにもあらぬ我身は

月の御歌とて

山風のたいく夕は聞すてゝ音なき月にあくる柴の戸

寄月旅

あすは又いかなる野への月をみん行衛さためぬ草の枕に

庭上月

雪ならぬあさちか庭の露も猶ほらばぬ跡はおしき月かけ

月契千秋

月におもふ心々は千々の秋をいばふことはのたればかはらし

古寺月

古寺の菊も紅葉も折ちらしくむあかつきの影そ身にしむ
寺ふりぬ誰おこなひて閑なる心よりすむ月やあるらん

江上月

紅葉はのながれてかゝる江の浪のよるさへみよと月やすむらん

寝覺月

夢なうて見しよの事そおもほゆるぬ覺の後の月にむかひて

月下淺茅

しつけしな人もばらばむ露更て月影おもるあさちふの庭

月前草露

影やとすあさちか露のみたれきて野風にくもる月もこそあれ

月前萩

かゝる夜の月に夢見る人はうしといはぬばかりの萩のこゑ哉

月前雲

吹かゝる雲さへうれし晴るゝよの月にむかへるにしの山かせ

月前星

しらす誰星をかさしに月をおひてこゝもはこやの山をとふらん

月前時雨

まとの月もりくる竹のさふ風やしくれせぬ問もばれ曇らし
しばし猶くもると見しそ光なる時雨の雲をもるゝ月影

月前鹿

さほ鹿や思ひくまなくすむ月にこよひさへうき妻を戀らん
一しほの色もこそゝへ夜半の月鹿なく山の秋をとばゝや
つま戀をなくさめかれておは捨の山ならぬ月に鹿やなくらん
もるともに山より出し小男鹿や入方見せぬ月になくらん

月前鳴

聞わひぬおしと思ふ夜の月影にあかつきしるき鳴の羽かき

月前鶴

くまもなき眞砂の月に白砂の色をかきぬる鶴の毛ころも

月前釣翁

そなれてもあはれ翁の釣たるゝいとまなくてや月は見さらん
おきなさひ誰とかむなと秋の水すめるを待て月に釣らん

寄月述懷

世をなげく泪かちなる袂にはくもるばかりの月もかなしき

寄月祝言

みちぬへき月に思ふも行すゑをまつこそつきのたのしみにして

擣衣

枕かるしるへにやとる夕かせのたよりにたくふ里のきぬたは
更行ばうつや衣のおさをあらみまとをに聞しこゑもさやけし
うつもなをきく人よりは夢やみる更てきぬたのしばしやせぬ

聞擣衣

夜なぐのきぬたの音に此ころのまかきの花のなにもねられぬ
遠津人かへらむ衣うつたへにさそなれぬよの月にななしき

松下擣衣

獨のみ夜床にみつの霜をへてたれ松の戸に衣うつらむ

寛永十三年十一月

海邊擣衣

あま衣なをうちそへてあしのやのなたの釣するいとまなき比

野徑鶴

秋の野のふる枝の眞秋かりにたにくる人なしと鶴なくらん

菊

露光宿菊ノ類ナキコト 原方諸君ニ梅ヲ忘レシニ同

ならの葉の世のふることにもれし菊梅を忘れしうらみなしやは

菊半開

またそみむかた枝はおそき白菊も咲しはかりの秋の日數に

籬菊

春秋もまかきの蝶の夢にしていつしか菊のうつる花かな

菊映月

光とは是や籬の秋の菊月にはへある花のてこらさくもらすも雲井の庭の秋の菊花も光を月にかはして

菊帶露

咲まいに花ふさおもみなく露もたえぬばかりになひく菊哉折にあふたまのかさしにあかす見し萩も下葉の露の白菊

山路菊

露のまに干とせあまりの菊そ咲大内山もやま路覺えて

河邊菊

よし野河はやくのとしをかへさめや菊の下水老はせくとも

菊粧如錦

秋のきく誰があかすらし面影にしきぬる野の花の色々

菊花盛久

ちりうせぬ此言のはの種となる花もいくよの秋のしらきく

霜の後松もしらしなしら菊の萬代かれぬ秋のちきりは

菊花久芳

百種の花はあとなき霜の庭に我はかほにも匂ふ白菊

露光宿菊

あかすみむ千よの數にも咲菊のまかきにあまる露の白玉

菊似霜

菊はいま咲も残らぬ花の色の霜やまことの霜をまつらん

寄菊契

月草の露もなかけそ我中の契りはかれぬ菊をためしに

寄菊恨

木からしのやとすきかてに手折しも菊はうらみの淺からめやは

寄菊旅

梅が香をふれし衣に秋の菊かされて匂ふ旅をしそおもふ

寄菊祝言

百舖や世々のむかしにかへる世をとりそへてくめ菊のさかつき

菊爲花第一

咲きくや天津星かと雲の上にうへなき花の光みつらん天津星と見えて雲井に咲菊はうへなき花の光ならすや

重陽宴

かきりなき秋のいくとせ廻りあはむげふ九重の菊の盃

菊有長生種

種しあればけふ九重に咲菊の花もいくよの秋にあふらん

秋旅

思ひやれ床は草葉も數わふる旅の秋の露のふかさを

秋神祇

紅葉にもあまるめくみの露ならむあまたの神にたつるみてくら

紅葉

このころの朝夕露は染やらて一夜の霜に木々も色こき

山紅葉

分入は麓にも似ず紅葉はのふかきやふかき山路なるらん

嶺紅葉

餘所にみてまつやみなむ染わたす高間の山の木々の紅葉も

むら紅葉夜の間に染てよ雲の峯にわかるゝ松の色かな

森紅葉

思ひかれ梢の露もくれなるの色にやいつる衣手の森

岡紅葉

染あへぬ枝へ手ことに折つくすゆきゝの岡の紅葉はいおし

うすくこく染し梢にはへあれや松もならひの岡の紅葉は

瀧紅葉

戸名瀬川水の面にはちらぬ間も紅葉をくゝる瀧の白絲

澤邊紅葉

木々の色のうつろふ池にうく鴨や時雨もしらぬ青葉なるらん

紅葉隨風

梢ゆく風にば又やまかすらしふくれに染し山の木の葉も

紅葉霜

染つくす露より後も置そひぬ紅葉にあける霜やなからん

なにか世もはてはうからぬ紅葉はいつぬに染たる霜やくたさむ

朝風に吹やられてや松陰も霜置なからつもる紅葉は

あかね紅葉の

心せよあかね紅葉のちらまくも思ふにおしきよはの山風

篋

心あれやり行水をせきとめて紅葉はなからたいむいかたし

暮秋

色香をはおもひも入ぬ鷹人もさこそは野への秋をおしまめ

九月盡

鳴蟲のこゑも哀やつくすらむ暮行秋のけふをかきりに

けふばかりいかてとゝめん又來むはおもふに遠き秋の別を

見をくらむ行衛なられと名殘なく霧なへたてそ秋の別路

堤霧

寛文十一年

誰か中の人めつゝみのへたてとて立かくすらん秋の川霧

冬部

初冬

秋風の音をさらに吹かへて又おとろかす冬は來にけり

初冬時雨

冬きては木の葉降そふ山風にきのふの秋の時雨ともなし

時雨

さためなき此身もいつの夕時雨ふるも思へば袖の外かは夕陽暮聞まかへつる松風のやかてもさそふさよ時雨かな物ことにさためなき世を思ふにも袖の外なる時雨のみかは

朝時雨

山めくる時雨もみえて晴くもる雲にいさよふ朝附日かなちりそひて山あらはるゝ木の間より紅葉にかへて流そ落くるふみ分る山路にそきく落葉して梢の風のまれになる聲染そめずつるに嵐の末の露もとの雪とちる木の葉哉

落葉風

あたにちる春の花より木の葉まで思ふに風のうさもつもれる風やな木葉にあらき夕時雨染あへぬ枝もさそひ殘さぬかさなるを吹わくる風に今朝の霜なかに置たる落葉もそある

落葉霜

殘菊

霜をへてうつろひかはる園の菊殘るものこる秋の色かは

枯野

霜のみせめてわかれて花はみなあらぬさなる霜の野へかな

木枯

はけしくも枝吹しほる木からしにうすき紅葉の色ものこらす

松添染色

霜の後の松としるし榮ゆへき我國民の千世のためしは

寒草

しほしこそ霜をもしらね冬草はつるにみさほの松かけもなし枯るゝよりかりもはらばぬ道みえて霜に跡ある野への草むら千種にもなをかへつへし霜かれの中に一はなきけるなてここ冬かれの草葉にも見よ色といへば千種咲たにあたの世中

寒草霜

朝顔のもろさも千世の白菊もわすかれ野の霜のおはれさ

江寒嵐

正保十三年
江にしけきあしの葉からす霜の後是もあらはれぬ沖のいきり火

水

雪をさへよほとかされて水よりもさむき岸根の朝水かな

水初結

照日にもなを絶さりし山水の音こそきかれ今朝や氷れる

霜

光もて晴いそくかさきのはしにみちたるよばの霜かな

朝霜

霜なれや光おさまる有明のことほりすきてさやかなるかけ

冬月

見る人の袖さへとをる小夜風に木の葉の後の月そくまなき

水鳥

見し秋のにしき絶たる河波にかされてうかふおしの毛ころも

寒夜水鳥

獨るゐしの思ひやみたれ蘆のはたれ霜ふりきむき夜床に

水鳥馴

池水に我袖ちかくすみなれてあそふもあかぬをしの毛衣

千鳥

さそはれておのが立ちも隙そなき夕なみ千鳥風のまに／＼

波かゝる袖の湊の風をあらみさばく千鳥やよるかたもなき

浦なみの立わかれるもをりあるもこゑにみえ行さよ千鳥哉

河千鳥

千鳥なくさはの河霧立別行衛もしらぬつまやとふらん

岸千鳥

松ならぬ音にあらはれ小夜ちとり浪うつきとに妻やこふらん

浦千鳥

おのかつままづはつらくも大淀のうらみてのみや千鳥なくらん

霜夜立別

おのか上にかされむ霜やいく世ともしらす白洲の鶴の毛衣

冬浦

時雨きて此夕なみにこと浦の雪をのせたる舟もこそあれ

焚そへてさすか三冬の浦がせもふせくたよりやあまのもしほ火

橋上霜

板橋や朝風寒き霜の上にかよはぬ人の見えてさひしき

擣衣寒衣

秋風の身に寒く成山賤やくるゝ夜毎に衣うつらむ

冬植物

残りけり松ばみとりのほらの内にちらて友なふ千世の白菊

冬天象

是もまた白きをみれば更る夜の月さへわたるかさゝきの橋

冬地儀

枯はてゝ中々秋の露よりも色なき野への色そ身にしむ

野霰

思ふそゝ故郷遠き旅れして霰ふる野にあられける身を

霽

山風や暮るまに／＼さむからしみそれに雪の色そ添ひゆく

雪

山々のへたてわかれてさやかなる雪は晴ての後にこそあれ

庭初雪

庭の面は降もたまらて眞砂のみしろき梢の今朝の初雪

冬池雪

みたれふす蘆間や消る冬の池の波はすくなく積るしら雪

庭雪

晴やらぬ今朝のまゑとへ踏跡もふりかくすへき庭の白雪

雪庭樹花

あかすなをみきりの松の千代もみむちらすは雪の花の常盤に

いまさらににははぬ花の恨なれみかきの柳雪になひきて

殘雪

踏分る沓もかくれぬ今朝の間をとふは思ふにあさき雪かな

曉雪

有明の月と見しまに松竹のわかれぬ色そ雪にわかるゝ
行路雪

かきくらす雪にもしけき通ひちばうつみもはてす跡もとまらず

關路雪

しら雪のいつこか家路ふる雪にすいまぬ駒のあしからの關

暮村雪

暮ふかくかへるや遠き道ならむ笠おもけなる雪の里人

閑中雪

住人の心は外にふりをきし雪や友まつよもきふのやと

人をまつ心の道の絶にしも雪はばらばんよもきふの宿

海邊雪

あま小舟はつ雪なれやわたつ海の波よりしろき奥津嶋山

松雪深

落葉せし梢の雪はおもからて松にとのみもつる雪かな

山家雪朝

かくれ家の心も雪に埋れて見しよの友そけさはまたるゝ

山ふかき今朝の雪にも埋れぬ心の松に人のとへかし

望雪

山の端に降つむ雪も深きよのやみばあやなき色にさへつゝ

眺望山雪

めにちかく山も入くる樓のうへに千里晴たる雪のさやけき

春秋の山のにしきの面影も埋みはてたる今朝の雪哉

積雪

ちりそめてつもるな思へおこたらぬ學ひなりせばまとの白雪

連日雪

都として思ふに雪の晴やらぬ日數ばかりはつもるともなき
都たに間なく時なくふる雪に深山はさそなつもりはつへき

途日雪深

けふことに手折枝よりなれそひて松こそ雪のみをつくしなれ

鷹狩

暮るまをしらすや分るかり衣なを心ひく鳥の落くる
はしたかに心いれてやかり衣風もさむからす道もまとはす

夕鷹狩

あかすなを今一よりとかり衣日も落くるをしたひてそ行

雪中鷹狩

白砂の雪こそ光れゆふかりのあかぬ日影をつきてふらなむ

炭竈

煙にもまつあらはるゝとし寒き松よりなくの峰のすみかま

夜埋火

聲すなり夜のまに竹をうつみ火のあたりはしらぬ雪や折らん

柗柅

二たびはさしも匂はしたち花に霜の後なる花そまかへる
色こそあれ紅葉ちる日は咲初て我はかほにも花そ匂へる

冬祝言

鶴龜もしらしな君か萬代の霜のしらきく残る日數は

歳暮

けふことに過行年なくれぬとて身におとろくもいへばおろかさ
なすことのなきにそ思ふ行年もいまはおとろめよはひならぬと

海邊歲暮

暇なみ今年もくれぬうみ渡る世のことわざよ海士のまてかた
歳暮

梓弓いるにも過て年ことに去年にさへ似すくるゝとしかな

戀部

初戀

もえそむるいまたにかゝる思ひ草葉すゑの露のいかにみたれん
おもひたつこれはあしもと遠くとも戀の山路のすゑもまよふな
心から物おもへとやいひそめてたえん夕への空もしられす
すゑつゐに淵とやならむなみた河けふのたもとを水上にして

忍戀

今こそ忍ふもちすり誰ゆへとみたれてつゐにしられんもうし
思ひわひきゝもあはせんしのひねをわれにかたらへ山郭公
忍ふとも見えしとおもふ泪をはまきはさむもなをこゝろせよ
しられしとおもひもいれし物思ふ心は色に見えもこそすれ
我が袖の月もとかむなうき枕に露のかゝらぬたくひやはある

忍尋縁戀

此里のみちしるへにはたのむとも人に忍ふのおくはしられし

忍逢戀

思ひをく床の山には人しれぬ又たまさかの夢もこそあれ
あやにくにくらふの山も明る夜をまねなる中にかこちそへつゝ

見戀

思ふそよあしのはのかに聞しより見しまかくれば汀まさりて

聞戀

いつばらめ言葉としるも聞あかくておくれし方もさすかかたるに

尋戀

嵐ふくみより後はとこなつの露のよすかもたつれ侘つゝ

祈難逢戀

つれなきをたつてやまむ契りをや年へて祈るしるしにはせん
いかでかくいのるしるしの見えさらん神は人をもわかし心を

祈戀

れきことのしるしもみえぬ我が爲は神もいさむる道をしれとや

祈逢戀

今そしるうきとし月も逢ことのかけていのりし神のしるしも

行不逢戀

横の戸をたたくもあくも小夜更て待人ならぬ人もこそしれ

誓戀

よしやその千々の社ほかけすともたのまれぬへき色しみえぬは

逢戀

たくひなやあふよとなればつらかりし人にもあらずとくる心は

あれはありし此身よいつのならばしに世を隔むも今更にうき
つゐに身の契りなれとやたとへても浮木の龜のおふせ計を

適逢戀

いかにせむ年にまれなる逢ことをまちし櫻に人もならは
たまさかにあふよなればととけやらぬ恨を人にゆるすさへうき

逢増戀

かた絲のあはすはかいけるけちかさの似たらぬふしも思ひ亂れて
人そうきかいふしさへ片絲のあはすは何とおもひみたれん

逢後増戀

逢も見ぬさきならばこそ戀せしの御般もつらき我おもひかは

不逢戀

いかさまにいひもかへましつれなきの同しすちなる中の恨みは
よそにこそあふの松原か計にかちたいてはあらしつれなき
終にいかにかまことの色をみはてむのおもき方には猶たのむとも
動きなく思ひきためて中々にあはしともいはてあはしとやする

通書戀

契戀

あさくこそ人に見るらむ玉章にかきもつくさぬ中のおもひは

わかれてはよもなからへしうき身とも思ほぬ人やりきる行す
もろ神をかけてちきれば行す衛の松には越む波も思はす
たのまじよことよくちきる言の葉をつゐになげなる物思ひせむ

契待戀

たのめしなたのまは今は頼むなよ月いてゝとは人もちきらす

忍符戀

忍ふればうれしきものゝ小夜ふけて人はれたるそ待にかなしき

別戀

待えてそいそき立ちらん鳥か音をおなしつらさにいひなすもうき

あはぬ夜もありける物を別路の鳥より後そあかしかれぬる
いそくなふも又はこし此たひや限りとしたふ今朝のわかれを

惜別戀

明るよの程なき袖の泪にやなをかきくらすきぬくの空

祈戀

神も思へ頼む祈もかひなくて立やなき名を誰におふせん

深更歸戀

まちいてゝかへるこよひのつれなきはひとり見はつる有明の月

あはすしてはかれぬ程をいたつらに月も更ぬと人にうらみて
有明の月はつれなき色もなし見はてゝかへる人のこゝろに

後朝戀

我こそはさそひてかへるおも影を跡にそ人のさしもとゝめし
身にそへて又やれなまし移り香もまたさなからの今朝の袂を

馴戀

なれ行な又も見まくのとはかりはおもほし物のいとひはつらん
あま衣なるとはすれといは嶋やあはぬうつせはひろふかひなし

顯戀

つゝみこし思ひの雲のたえくゝに身はうち河の瀬々のあしろ木
うしや世の人の物いひさかなさよまたき我か名も洩んとすらん

増戀

いかにせんふるや泪の雨もよに淀の澤水まさるおもひな
神よかに聞たかへたる戀せしとはらひしまいにまさる悲しき

遠戀

嶺の雪分こし道のわりなさもあさき方にはいかゝおもはむ
たちかへりとふとも遠き中道に心の外の世をやへたてん

近戀

つらきかなたゝはい渡る程にたに思はぬ中の遠き絶間は
人はたゝ見たにおこさぬ我宿のまつとはさこそしるき梢も

久戀

今までにむかしはものなとはかりに恨め身をばうらみやはせぬ
つらきこそいつもかはらぬしら玉の見えしは色の泪なりけり

夢戀

さきの世の夢をわすれぬ契りかたとるばかりの中の年月

恨戀

情こそ思ふにうけれつらしとておほよそ人にうらみやはある
おのつから見ゆらん物を恨ともしらすかほなるそれも一ふし

いかならん此一ふしのうらみゆへつらき心のおくも見えなむ
恨みしよことの恨つくすともかたはしをたにえやはほるけむ

人傳恨戀

我が恨世のそらことにいひなして聞もいれすと語るさへうき
人つてはうしろめたしやにくからすおなし恨もうちいてこそ

恨身戀

思ふ人うき身のとかなしはてゝうらみぬまでの中の恨を
おもふにはうきもつらきも誰ならん恨のほてそいふかたもなき

つゐにその里のしるへもあまのかる藻にすむ蟲の我をかなしき
忍恨戀

けにかよふ心ならばとかこつかなさこそは人のひまはなくとも
變戀

つらくともさらはてしとかはり行心をしゐて頼むはかなさ
被厭戀

つけばやなきたる朝の我袖につゐに身をしる雨はしけしと
難忘戀

思ふにはなげの情もいかなれやそよそのことのうきぬまたれぬ
忘戀

千重まさる霧や隔つる我方のはる日つもりて遠き絶間を

片戀

よしや人それにつけても思ひしらは思はむ方のよそにたにあれ
寛永十二廿五
なとか我つらき心のつらからぬよしあひ思ふ道はなくとも

偽戀

ことよきにはかられきては偽のしらるゝきは人を人にうたかふ

絶戀

よしや見よ果無きふしにうきならえしも忘れぬ人もこそあれ

隔川戀

うしつらしちきりにかけむ鳴鳥のうき中河を君にへたてゝ

經年戀

さりともとなくさめきぬる年月になか／＼つらき限りなをみろ

關路戀

したひこし面影ながら鳥が音にいそく關路のならひさへうき

鞆中戀

故郷のたよりと聞は文かきてつくしもはてめ思ひとをしれ

春戀

いかにせんとはれぬ春も頼まれぬ身はうくひすの聲のやとりな

夏戀

明やすき空そわりなき夏のよも逢人からはおしむならひな

夏忍戀

思ひわひさゝもあはせむ忍びれを我にかたらへ山ほとゝきす

夕戀

此暮のさばる恨をかきやるもまつらんかたはつらしとやみむ

夜戀

つく／＼と物にまされぬ思ひのみまさきのつなのよるを怪しき
名残なをあふと見えつる夢よりもきたかにむかふよの面影

戀涙

別行我袂には色かへて身をのみなげく涙さへうき

忍泪戀

ゆるされば袖には落す幾度か心まてくる我なみたかな

思

思ひ草おもふも物をとばかりにおきふしまげく露をこほるゝ

くり返しななき世までもまよふへき思ひを何としつのをたまき

片思

なとか我つらき心のつらからぬよしわひおもふ道はなくとも

寄月戀

面影の我にむかひてかきくらす人はさたかにみむ月もうし

たのめしはあらすなる世に面影のむかしおほゆる月さへそうき

寄月草戀

しるへなきやみにそたとる戀の山かくるゝ月をなを思ふとて

寄月忍戀

うちとけて見えんもいかゝくまもなき月は心のおくもしるらん

寄月變戀

もろともに見しよの月の光まで面かはりする人の秋はうらみし

寄月別戀

人もかくおくらましかはかへるさの月は身にそふ今朝の別を

寄雲戀

寛永三十
時雨なきならひよいかに雲ならぬ戀はむなしき空にみちても

はかなしや人の心の風はやみ身はうき雲の半天にして
契りたと思ふにもうき中空の雲は跡ある人のことの葉

寄煙戀

人のためは煙をたちし此頃のおもひもしらぬ思ひかなしき

煙たに人にしられぬ下もへにさとのしるへのあまのもしほ火

おほ方の風にばさしもなひくらむうしや見さほの松の煙も

寄夕戀

思へ人あすはとふとも草のほら此夕露の消は残らし

寄露戀

思ひやれ人の心の秋もあき露も空なしき露のたもとを

靡くかと思ふふしもかな竹の露のまろひあふ返は契りなくとも

寄山戀

人心見はては我もやみれたいよしうき戀の山つくるとも

寄海戀

みちひなきならびもうしや敷妙の枕の下のしほならぬうみ

寄湊戀

人心うかへる船のよるへとも我見なと江をいかてたのまむ

寄滝戀

せきあへぬ袖の滝津瀬行末にわれてもあはむ契りたにあれ

寄野戀

かりにたに人ばこさらむ戀草のしけき夏野に何たくふらん

寄木戀

人心花にうつろふならびこそ我かたばらのつらき深山木

寄草戀

道絶るあさちか庭は眞葛葉をかへす秋風吹とつたへよ

寄草別戀

別行此道芝にくらへみよあはてこしよの露はつゆかは

寄葛戀

つれなきに我や眞葛の恨さへいまさらふかき露をしらなん

寄鳥戀

槇の戸をたいげは人に契りおかむ水鶏なくよは聞もとかめし

うき中は鷹よ燕よ羽根をさへならへんと契る人もこそあれ

寄猪戀

見せばやな伏猪のかるもかきたへてこぬよの床の露のみたれを

寄蟲戀

おのか名のこてふに似たり折かさず花にやりてむすふ契りは

ひをむしのまたの夕へを思ふにそさえぬを頼む身さへばかなし

寄玉戀

聞侘てあやな泪のたま／＼のあふばうきをえこそかこたぬ

寄風戀

さそへともちるへくもあらぬ盛なる花には風のとかもかくれて

聞もうしとひしはいつの松の戸にそなたより吹風の音信

寄河戀

いかにせん泪の河のなかれても哀あふせをつゐにしられぬ

寄鐘戀

聞もうし暮をまつまの鐘ならてとはれぬよはの曉のこゑ

寄山戀

あひみての後世の山のこなたにも戀てふ道は猶たとれとや

題不知

いつぱりのことのみおほき玉章をひき返しても恨つるかな

寄枕戀

あふとみる一夜ばかりの夢もあれな五十の枕それはおもはず

寄秋戀

うしやいま誰か手枕にいとふらん身はならはしのれやの秋風

寄衣戀

いかにせむ我戀ころも春雨にぬれしはかりのなみたならずは

寛永廿一廿七

かへしても見るふまれなる夢そうき中にあるたにうとき衣を
見るめなきうらみよりけに中々にしほやき衣ぬれそふもうし

寄繪戀

かひもあらし形はさこそうつすとも月は光をえしもかゝねは

是をたに見さらん程はとはかりにかきすきみしやえしも恨め

寄糸戀

いはゝやな下のうらみのふし多みしつかしけいと繰返しつゝ

寄商人戀

哀身にあはぬなげきや商人のきぬきたらんかたくひさへうき

寄名所戀

あふことを我松山はあたにのみいく年なみのこえんとすらん

恨絶戀

大かたのうきならはこそとはかりも恨て後のこゝろとばしれ

忍久戀

つゝましき身をかへりみる心にはいつか忍ふの色かはらまし

雜部

松

百鋪やうへし我が世も思ふにはいく程ならぬ松の木高き

紅葉こそ餘所にもおもへ松風の聲には秋の分ぬ物かは

庭松

うつせなを竹の圍生の跡とめてきぬる松の庭のなしへな

庭上松

家々の松のことの葉ちりうせぬ庭のをしへの幾よならまし

硯松

百敷のふることかたれ我みても久しき代々の松はしるらん

嶺松

つもりしもつゝぬに嵐の枝はれて雪に色そふ峰の松原

峰に生ふる程もしらしな八千代へんみかきの松の春の一入

浦松

松風も秋にすゝしく音かへて浦めつらしき志賀のからさき

よせかへる波吹立て夏なしと松にこたふる志賀の浦風

住吉や松の緑も猶かへてあまの家たにあやめふくらし

名所松

百鋪や誰をしる人高砂の松のふりぬるむかしかたりも

松有歡聲

松にふくもやばらく國の風なれや安くたのしむ聲に通ひて

風吹けは空にしられぬ白雪のりちにしらふる松のこゑ哉

窓竹

いや高く生そふまゝに大空のおほふばかりのまとの呉竹
なよ竹のなひきふしてはさみたれの雨くらからぬ窓のうち哉
ことし生の蔭さへしけく呉竹のはやまも窓にみえず成行

庭竹

吳竹の園生に残せ代々の道に老ぬる松の庭のをしへな

竹契週年寛永三丙寅九月廿六日行幸之時八日御歌會

唐の鳥もすむべく吳竹のすくなる世々そかきりしられぬ

岡篠

かの岡にもゆる草葉のうらわかみ霜にもかれぬ小篠をやる

門杉

あはれ誰まつこともなくさしこめて世を杉たてる門のあけくれ

藁柴

なをそふる山のふもとの涼しさに眞柴かたしきくらすころかな

出家

山里は時につけたるうさばあれと浮世のうきに似るへくもなし
心よりひとりの山住はならふ軒端もしらすかほなる
先たちて入し心そなれぬへきいま住初むやまの奥にも
思ひ入心の奥のかくれ家にずまばや山はよしあさくとも

山家煙

冬ふかみさらに折たく柴の戸の煙をそへてさゆる山風

山中隱家

妻木こる眠たに見えぬ山も我おもへ入にはあさきかくれ家

山家嵐

たえてやば太山の庵に聞初しその夜のまゝの嵐なりせば

山家燈

柴の戸に誰かしこきを友として文にむかへる夜半のともし火

山家客來

ことよせてとひくるもうし山住の心の外の花やもみちに

山中瀧

岩なみを梢にかけて松風もさらに音なき山の瀧つ瀬
水かみは梢の露やちりひちのつもりてたかき山の瀧つ瀬
山たかみ落くる瀧のしら糸に結びもとめぬ玉そ亂るゝ
谷樵夫

暮ふかみ峰より谷の賤のをにこゑをかはして歸る山人

題不知 笛吹藤田清久拜領

おひそむるれよりもしるき笛竹の末の世なかならん物とは

題しらす

うつすともたやはなまはぬ峰の松白きを後の傍にせよ
ひらけ猶文の道こそいにしへにかへらんあとは今もこらさめ
水石契久
天下めくむ心も行水のもるてふ石をためしにやせん

幽徑苦

誰ばらふ道ともなしにおのつから苔にちりなき松の下かけ

水樹佳趣多

しら玉のかすにもしるし池水のたきつ岩根の松の干とせば

橋上苦

おのつから柳やたなれふる苔のまばならすしも渡す河はし

橋雨

行人の跡たえはてゝ板橋の霜よりけなる雨のさひしさ
みのもかさもとありあへす行村雨のしとゝにぬるゝまゝの懸橋

名所橋

世をわたる道もこゝより行かへる人やたとらぬ涯のつきはし

故郷草

あれまなくも春ぞ思はぬ古郷の垣邊にしけきつはなすみれに

閑居

心よりしつかならずはしつかなるかくれ家とても塵の世中

市中隱居

立さうて心の内を住かへよ里の庵もふかきかくれ家

閑居待友

今さらにとふへき誰を松の門さすかに三の徑をのこして

草庵燈

草の戸のすきまの風の灯のきえやらぬ程と住や誰なる

曉

鳥か音におき出るよりよしあしのわかるゝ道を思はさらめや

曉鐘

おとろかす曉ことの鐘の音になを覺はてぬ夢をしそ思ふ

夕鐘

春秋のいく夕暮をおしみきてかれもつきぬるとしなつくらん

さすか身はおとろきなからつきはてぬれかひも悲し入相の鐘

古寺鐘

小初瀬や紅葉吹おくる山風にこゑも色ある入相のかれ

古寺松

法のこゑにそれもやさそふ高野山曉ふかき庭の松かせ

田家

はかなしなかりほならぬもかり初にかこふ田中の賤か家居は

とる聲も水のひゝきも絶はてぬ氷る冬田に庵のさひしさ

思へ世は玉敷とても秋の田のかりいほならぬやとりやはある

田家鳥

おとろかす跡よりやかてかへりきて門田の鳥そ人にまぢかき

鶴伴仙齡

仙人の名にあふやとそ千世かけてこゝにもちきれるの毛衣

名所鶴

住鶴にとほゝや和歌のうら波をむかしかへす道はしるやと

鶴馴岡

すみなれぬなれも千とせの友こふや雲井の庭の鶴の諸聲

君かため久しき跡は九重の眞砂を敷に田鶴や住らん

鶴立洲

おのか上にかされむ霜を幾代ともしらす白洲の鶴の毛衣

池岸有松鶴

池水の岸根の松に千代ふへき所をみてや田鶴も住らん

白鷺立汀

白妙の池のはちすのまたさかぬ見きはの鷺は色もまかはす

關鶴

名残あれや鳥か鳴音に起いつる關のかやゝの月を残して

題不知

關守もうちもれなゝん人心すくなる折そあふさかの山

馬 千里馬雜説ニミエタリ

思ふそよ千里の馬を尋てもしるらん人はさてもなき世な

海路

故郷をおもふやおなし過行をとみに見をくるおきつ舟人

磯屋煙

もしはやく海士の家たにまれにして煙さひしき須磨の浦浪

浦船

難波かたうらなみ遠き蘆間よりおなし一葉とみゆる釣舟

題不知

淡路方せとこす舟をうつなみにいはをも山ものころものかは

漁舟述浪

あま人の一葉にまかふ舟よりまろき身をおく浪のうへかな

明はてはおのかうらく漕出て世をうみわたるあまの釣舟

遠帆

しるやいかにすき行舟の遠からすそなたに見えぬ浪のあはれな

海眺望

面影をうらの煙に先たていかすまん春もちかのしほかま

蜃小舟初雪なれやわたつみの浪より白き奥津嶋山

みるかうちに湊漕出て行舟もきえて跡なき須磨の浦波

河眺望

ふかくなる青葉の山の麓川夏しもしろきなみのうへかな

いにしへのちきりにかけし帯ばかり一すしゑるき遠の川なみ

こりつめるしはしか程も行かへる世のいとなみやうちの川舟

湖水眺望

わたつみのかさしにはあらて白妙の花のなみよるしかの浦風
眺望日暮

釣舟はみえずなるより見え初て暮行沖にちかきいさり火

旅行

行々ておもへばかなし未遠く見えし高根もあとのしら浪

旅宿

何かうき草の枕そふる郷とおもふもかりのやとならぬかは

旅宿嵐

たのみこし夢路もたえて草枕ふる郷遠く吹あらしかな

旅夜

なきてふや故郷遠き露ならむさゝのまぐらの一夜ノゝに

旅朝

旅衣あきたつ野へのさゝ枕一夜のふしもたれかおもはぬ

旅友

おもふより遠くきぬらし旅衣分る夏野の草たかくなる

騷旅

たひ衣うちぬるまゝに故郷にかよふ夢路はあしも休めず

鞆中關

都人あかすわかるゝ夢路にはあやなまさしき關もかためず

旅泊夢

舟人のいつからとまり浪なれて見るらむ夜半の夢もかなしき

波さばくうき浪のまぐら又うきぬ都のゆめのかへる名残に

富士

物としてなしとはいはし世の中をこれもうらなる雪のふしの根

述懷

後の世のつとめの外はことなくて物にまされぬ身をつくさはやしなほやなもよほし草よ世の中のものにも耳にもあまることこそ

寄木述懷

いたつらになすなま心直き木にまかれる枝は有とゆるして

獨述懷

ともかくもなさは成なむ心もて此身ひとつをなけくおるかさ

寄書述懷

古を書なく筆の跡もうしさらすはくたる世にはしらしなひらけなを文の道こそ古へにかへらん跡は今はのこらめ人もこれ草葉もしげし野も廣しつむ榮となれば雨もすくなし

夜述懷

何事ななけきの森のしけからん今幾程の老のれ覺に

寄鏡述懷

うつしみに我やいかなる世の中に人のかみはいまもこそあれ

述懷悲

道々のその一たにいにしへのはちかはしにもあらぬ世にして

懷舊

みち／＼の百の工のしわさまでむかしに及ぶ物はまれにて

思往事

さま／＼に見しよをかへす道なれや雨夜更行ともし火の本

寄橋雜

おもへ人木曾のかげはしそれならてうき世を渡る道もあやうし

孔子

たれ道をうけつかさらん四をたち四ををしゆる跡しならば

顔回

ちまたにはしけるもよしやたのしめる道にさはらぬ薺よもきふ

顯不知

千世もへしみかきの竹の一ふしをおきてかそふる人のまことに

神祇部

伊勢

うこさなき下つ岩根の宮柱身をたつる代々のためしならずや
なが月やながきためしのみてくらのつかひは絶し神の御前に

神社

見ても思ふすなをなりしも隆高き内外の宮のかやか軒端を

社頭曉

曉の霜もおくかと神かきやさかき葉しろき夏のよの月

社頭松久

すみよしやいつの御幸に逢生の松はしろらん世をもとほいや

社頭祝

代々かけてたのむ北野の一夜松ひとつふたつの道のためかは
いはし水なかれの末の我末も神し守らは世々に絶しな

寄社祝

九重のためならぬかは守れたい天津やしろも國津社も

神祇

たのむそよみもすそ川の末の世の数には我ももれぬ恵を

秋神祇

いなほにやあまる恵の露ならんあまたの神にたてるみてくら

寄月神祇

月よみの神のめくみの露しけきこよひの秋を光ことなる
八百萬神もさこそは守るらめ照日の本の國津宮古を

寄花神祇

あかすとや神もうくらん色と香もふかき心の花の手向を
社頭月

やはらくる光やおなし波間より影あらはるゝ住の江の月

社頭水

月こよひいかにすむらん石清水にこけなき名も空にかよひて

社頭祝

我たのむ心の底もいはし水おなしたくひと守らましかは

神樂

今もなを神代のまゝの跡とめてうとふ榊のもとすゑのこゑ

神祇

まもれなをよに住吉の神ならば此敷島の道のまことを

隠岐國人被遣候

隠岐の海のあらし浪風しつかにて都の南宮つくりせり

祝部

祝言

いまこそと袋にはせめ梓弓八つのゑひすもみななひきゝぬ
しきしまや此ことの葉に何事かまさきのかつらなかきためしは
守るてふ五つの常の道しあれば六十あまりの國もうこかす
絶せしなその神代より人の世にうけてたゝしき敷島の道

寄日祝

天津日を見るかことくに恵ある世とたにしらぬ時のかしこさ
つきせしな天津日嗣も曇なく出入影の照すかきりは

寄月祝

月よみの光あまねく照すてふ國も千五百の秋はつきせし

寄鏡祝

聞きみる文にそしるきおさまれる御代のかたみや世々の古こと

寄國祝

ためしなや他の國にも我國の神のさつけしたえぬ日嗣は

寄道祝

九重の名は絶すなる木の道のたくみも代々の跡を残して
行人の皆出ぬへき道ひろく今はおさまる國のかしこさ

寄世祝

いのりをく千とせば代々につきもせしありとある人の一つ心に

寄龜祝

九重にうつせるかめの山陸にしらぬ千とせの後までもみむ

夏祝言

今こゝに人の國さへたいきこむ君にしらする水鶴とそきく
冬祝言

松にすむ鶴の毛衣冬きてやおきまさる千世の霜をみすらん

爲君祈世

千世もしるしみかきの竹のふして思ひおきてかそふる人の誠に

對龜爭齡

池水のゝとけき宿と萬代を我にちきりて龜やすむらん

寄若菜祝言

わか菜つむ袖のよそめに白妙のつるの毛衣千代は見えけり

寄道慶賀

思ふことの道々あらむ世の人のなへてたのしむ時のうれしさ
行人の遠しともせし東路のみちのはてまでおさまれる世は

龜萬年友

うこきなき我世の友と池水にすむ龜の尾の山を契らん

釋教部

在於閑處

靜なる太山の松のあらしこそ心につもるちりもはらばめ

無諸良患

あふけなを八しまの外も浪風のうれへなしてふ法のまことを

空門極樂

むなしきか色なき色は誰かみむよし見む人もみぬ世ならずは

秋霧の立ち及ばぬ大空のくまなき月は見る人もなし

未顯眞實

妙なれやつるに四十年の霜の後世にあらばるゝ松のことのは

世尊拈華伽葉微葉

ふみのまゆひらけし花は梅か桃か誰ししらん誰しらすとも

徳山入門則棒

明石方迫門こそ舟をうつ浪にいはほも山も殘るものかは

應無所住而性已身

ぬしや誰とへとこたへぬ海人の子のとまりきためぬ浪の上かな

無覺無性

おのつから思ふは物をおもふかはおもはしこそはうき思ひなれ

如是我聞

我聞し人の心を種として世々にや法の花はさくらん

釋教

ふかく入もあさしとをしれ法の道山の奥なるふもとならずは
耳にきゝめに見ることのたに法の外なる物やなからん

春釋教

照しみよ春日に消ぬ霜もあらし野への苔菜のつみは有とも
霜なから消も殘らし春日さす野へのわかなのつみはありとも

僧問趙州 加何是祖師西來意州云庭前柏樹

染なきはこゝや西より來る秋の色は色なき庭の木すふな

東照宮十三回忌法華經廿八品人々に歌よませたまひける

卷頭に

序品照于東方

寛永五
元和八年四月十七日

いちしるし妙なる法にあふ坂の關のあなたをてらすひかりは

思往事

さま／＼に見し世をかへす道なれや雨夜更行ともし火の本

無常

あはれなり鳥部の山の夕煙われさへ風になくれ先たつ

寄舟無常

世中の浪のさはさもいつまでの身のうき舟はさもあらばあれ

坊城俊定卿身まかりし時趙州無の心を

かくれ家の何國かはあるふのこ草そればととへば山なしの花

御辭世

行々ておもふもかなし未遠くこえし高根の峰の白雲

御影の御自詠 般若院ニ在御グハ妙門様被ニ

うしや此太山かくれの朽木かきさても心の花し匂は

靈源寺御像 奈良一門様被遊

おもへたゝ應化の外もなす事のあらばまことの佛ならしを

御連歌御發句

身をち、に千とせも見ばや園の梅
梅か香にふかさくらへむ花もなし
五月雨になかさねあはせあやめ草
かさねあけて見ばや都のふしの雪

五典の御歌

君臣有義

天津空くもりなきまで照月のうつれる水の色もにこらす

父子有親

雲井より澤邊におよふ聲す也子を思ふ鷗もおもはるゝ哉

夫婦有別

行かふふ山田もる男そいとまなきしつばた帯のとけし夜の闇も

長幼有序

春ことに梅よりつきて咲花の梢あまたの折ふしそなき

朋友有信

あし間より友したふ聲の哀なるおのれのみやはあさるかりかれ

御在位の砌仙洞へ竹に雪の降かりたるをそのまゝ折

なからまいらせられて

今よりは雪にもてはやす言のはのみかきの竹の世々につもらん

御位をゆつらせ給ふ時

思ふ事なきにやすく昔世にあはれすてゝもおしからぬ身そ

萬治三年比女院御茶屋作らせ玉ふに御幸成て家つくりた

くひなしといふ事を香冠にすへ給ひて

いくよなへ月も住へくりちの歌くりかへしうたひ猶かけもなし

香冠の御歌

御茶屋を板倉周防守建しに御色紙被下候
此ちややたくひなし

ことさらに千よのばしめや大和歌くり返しうたひ猶あふくらし

仙洞へよみて奉りける

鳥丸資慶

春に猶今一たひな松かえの藤波かけてさそへ花その

御返し

藤波のなみにおもはゝかひもあらし月にさそはん秋の花園

おなし年兩臣獻和歌

鳥丸資慶

紅葉はや染て待らん花園の秋にといひし月の桂も

御返し

うそといふ鳥やとまらん忘草生る花その秋や暮なむ

中院通茂

花園の月にといひしことの葉のあたに暮なん秋なと思ふ

御返し

わすれくさ生る

秋や暮なん

仙洞より聖護院の宮へつかはさるゝ御聖に野山なつかし

き折ふし花壇の菊一枝折候一枝けさんに入候

此ころの菊そうつるひ盛なるさこそ紅葉の干しほなるらめ

野山漸色つき微覽にそなへたきと存候折ふし御花壇の一

枝拜領候中々紅葉にはめもうつるましくかしこまりて詠

入候はかりにて候

聖護院宮道晃

一枝の菊にけたれて色もなし山の木の葉は千種ながらに

鹿苑院長老へつかはしたまふけるこのころの時雨に盛

のみちいかゝと

とはいやな衣笠山の秋の色をきてみよとこそ鹿も鳴らめ

たけかりの興ある日神にこき入計も木の葉はまたそめあ
へれば

霜の後又もきてみむ名にしおはいさこそ八鹽の岡のもみち葉
けふの御幸は葺かりの爲なりとや木々の紅葉は八鹽の岡
のやしはならぬも心有かほ也 導 晃 親 王
心して今一たびの御幸まつ木々の紅葉や染残すらむ

大猷院殿御他界の悼五首 女院の御所へまいらせらる
あがなくにまたき卯月の廿日にも雲かくれにしかけをしと思ふ
時鳥やとにかよふもかひなくて哀なき人のことつてもなし
いとしく世はかき暮ぬ五月やみ降や泪の雨にまさりて
たのもしな猶後の世はめの前に見ることばりな人におもへば
賀之御歌

只數のかけいや高き若竹の世々の緑は色もかはらし
修學院へ御幸の時昔御覽しられたる野原の人里となりて
侍りければ

むかし見し野原は里と成にけり數そふ民の程はしらねと
富士山 今上御製 寛文二年春の頃仙洞御屏風
いささよく繪かく計りにみれば見し佛きえぬ富士のしら雪

末の松山といふ盆山の石の御歌

逢事は我松山のあたにのみ幾年浪の越んとすらむ
延寶二年七十九の御寢覺に
おもひやれいるがことも梓弓八十ちかつく老の寝覺を

御目覺に

思ふそふ我もむかしは九重のしのはれぬへき道もこれまで

八十四の御年
それをたに人にみえんもつゝましき八十の後の數しまのうた
題しらす

いとふとてみな人ことに身をすては山や中／＼き世ならまし
癸巳年焼亡 寛文十三年五月九日禁裏院中残りなく町屋に
至るまでおひたいしく焼失し侍る比
ありとある事はさながら内も外もよの常ならぬ世の常をこそ
龍の繪の讃に

手にもてる扇の風はふかすとも繪にかくたつふ雨ふらずらん
海邊の月に鷹ある繪の讃禪閣所望ありしに

こと浦に心もとめず來る鷹やおなしところの月に鳴らん
御葺かりの後將軍家へけんさんに可入候御製を申請度よし
板倉周防守所望申御清書色紙にあそばしつかはさる

分みれば草木もさらにことやめて野山か末の道もさばらて
御山庄に御幸ありてはたえたといふ言葉たち入給ひて
ゆかてはたえたへし春の山里に見し面影の月はかすます

柏の葉の形したる祝を將軍家光公につかはさるとて
色にこそあらはれずとも玉柏かふるにあかぬこゝろとはみよ
行幸の御をくり物さうの琴のことちつゝみにかきつけさ

せ給ふ
しるしなく世のふることのおのつから絶たるなつく跡習はなむ

女御入内の御時將軍家より使藤堂和泉守高虎に橘の折枝
に付て下さるゝ

名にしおはい花立花はそれなからむかしはかりの匂ひやはある
永井信濃守領し來れるさたといふ所の天神の社堂廢して

とし久しく成ぬるを修造のいとなみ功を終りてかの社に
こめ奉り度念願として御製申請し時

家の風代々につたへて神かきや絶たるをつく梅も匂はず

東照權現十三回御忌につかはさるゝ心經の包紙に

郭公鳴はむかしのとはかりやけふの御法を空にとふらし

あつさ弓八しまの涙をおさめをきていまばたおなし世を守らし

後光則院崩御の時

をり／＼を思ひいつれば草木も木を見るに泪の種ならぬかは

八月中旬の比中院大納言通村武家勘當の事ありて武州に

ある比つかはさる

思ふより月日へにけり一日たにみぬはおほくの秋にやはあらぬ

秋風に袂の露もふる郷を忍ふもちすりみたれてやおもふ

いかに又秋の夕をなかもらうきは数そふ旅のやとり

見る人の心の秋にむさし野もおほすて山の月やすむらん

何事もみなよくなりぬとはかりをこの秋風にはやもつけこせ

御返し

中院通村

行方に身をばさそはて夜な／＼の袖の露とふむさし野の月

物の名 かにはさくら
こさくら

待花はさこそ外にはさくらめとこれのいろこさくらへましやは

物の名 みやまつくみといふ事な

大和路を絶ずかよひし折のみやまつくみてん井手の玉水

題不知

あかさりし昔のことを書つゝる硯の水はなみななりけり

いかなる折にか

おもふ事一つかなへはまたつ三つ四つ五つ六つかしの身や

題不知

此御製は澤庵和尚を東堂に被勅時東武より申返す
故に本院江御諱の時云々

蘆原やしけらはしけれ秋静とても道ある世にすまはこそ

歳暮

思ひやれいるかことも梓弓八十にちかき老の涙さめを

御返し

圓照寺宮

曳かへして見まくほし梓弓八十にちかき君かよはひを

延寶三卯年八十の御賀歌

この春にせめておとろく身ともかな愧おほしてふ命なかさな

奉和前韵

中院通茂

おとろかて幾千世か經む洞のうちにうき平しらぬ命なかさを

新院御製

この春の八十を千代の初にて命なかさそかきりしられぬ

禁裏御製

仙人のよはひを君かためしにて八十の春を百かへりみむ

飛鳥井雅章

八十年に八千代をかけて松の葉の常盤堅盤の春はつきせし

日野弘資

みな人のあかぬ心に八十年をまかせん洞の春の行すふ

風早宰相

洞の松の春に契りて我君は千世ませ千代のうたかひもなし

白河二位

あかさらん命なかさよ八十年に猶五百とせをかせあけても

同年霜月八十御賀に主上より銀の御杖をまいらせられて

君か手にけふとる竹の千世の坂こえてうれしき行末らみち
御返し

つくからに千とせの坂も踏分て片か越ゆへき道しるへせむ
寛文十二年十二月女院御所の庭に高き三丈ばかりにやに
て富士山のかたなつくくらを松うへせせなとして御覽す
法皇御幸なりてよませ給ひける

花鳥の色香もなにか老か身は雪より外の友ならばこそ
泉涌寺の御影にあそばし付らる御クシハ焼惣親王外ハ深幽書之

時ありて春しりそむる一花よみよ一はなもさき残るかは
身はかへて又も來ぬ世にホくきの跡たにしはしとめんもうし

東福門院御之時

あまも又たかうき身そと世をしらは思ひ暮せる日こそつらけれ

延寶八庚申年五月八日將軍家綱公御他界之時

世の哀しるかと思ふほといきすおのか五月の空に鳴音は

後鳥羽院四百年忌御追善に霞

こひつゝも鳴や四かへり百千鳥霞へたてゝ遠きむかしを

東福門院御之時彌陀之六字を句の上に置いてあそばしける

る

南に事も夢の外なる世はなしと思ひしこともかきまされつゝ
無かひゐてたいさなからの佛に一ことをたにかはさぬぞうき
阿け暮にありしなからのことわざも目の前さらに見る心地して
彌ね世まで思ひのこさすとはかりも此一ことを何にかふへき
陀れに思ひ聞てもみても驚かぬ世をはいつまでの空たのみして
佛たいひはめぐりあはむもたのまれす此世を夢の契かなしも

題不知

哀なり鳥部の山の夕煙我もたきゝの身をわすれつゝ
寄船無常

あるはなくなきは浪間に消うせて漕行舟や人の世の中
岩倉山御幸の時題不知

長閑しな風もうこかぬ岩倉の山も花咲春のこゝろは

東照宮三十三回忌をとふらふうたと云ちしを廻
りにおきて中にやくし佛の五體をこのてあそば
しける

登心とあり有やいぬ勢もありの宇ちみし能くそいひ養ふけし
はに地あふ九まひふ師もそや不いふ津うゝの散
もたす月あふくらのひまなめに布あふうたはうん
まうも夜もす来らふかり思ふにや歸もやか徒らうり志
良くとみか流そけ俱の娘と斯くあふいん顔うあふ右
部がへこのうおもあふそ四よりか別あふん通あふれ佐
騰のうと越しりも喜りふふあふうの半あふう其いふう年

十首御製

早春霞

雪げにもくもりなれめる空ながら春の霞の色そまかはぬ

静見花

事しげき世をわすれてつく／＼と心をわけぬ花にむかひて

野子規

聞とめてあかぬ野中の時鳥見をくる程そ空に久しき

海邊月

須磨あかしそむらん影も見るめかな我身を浦の浪の上の月

山紅葉

分入は麓にも似す紅葉はのふかきや深き山路なるらん

關路雪

白雲のいつこか家路ふる雪はすいまぬ駒のあしからのせき

忍待戀

忍れはうれしき物の小夜更て人はれたるそ待にくるしき

稀逢戀

つゐに身の契りなれとやたとへても浮木の龜のあふせ計な

旅宿風

たのみこし夢路も絶て草枕故郷遠く吹あらしかかな

社頭祝

石清水なかれの末の我末も神し守らは代々に絶せし

十首の御製拜みつかうまつり候

早春霞寒雲烟霞共に雖も遮翳微陽春和氣嚴然たる心詞艶

美候歎靜見花繁務の世をわすれ對花心難寧凡慮候
野郭公景氣如見候海邊月多年雖散雲上洞中月影求
見遠境遠海之佳景之恩を小町かわか身をうらみとりな
され候染心臍候山紅葉麗より分のほる紅葉景氣眼前に
候珍重々々關路雪藍關雪すいまぬ駒のあしからのつ
き又殊勝候歎忍待戀忍ふ夜の更行憂さ喜ふ心誠に感動に
候稀逢戀まれなる中の契を龜のうき木に取合され候たく
みに候得共趣の心あまりにや候へからん旅宿嵐寒風破
旅夢故郷遠き草の枕心たに詞艶美麗拔群の様に存候
社頭祝これ又珍重殊勝存候條々にかりおほく候得とも
仰にまかせ例の無心體事とも書つけ候よく御とり
なしにてひろう参らせ候

通 村 上

江島永源寺一系和尚へ硯御寄進の時硯箱の内に震筆に
て被遊被遣候

硯の命は世をもてかそへしるとかや人の世をさしも見
しかきにかへまくほしきことに故院つねに御手ふれし物
なとおもへは崩御の後は坐右に置いて朝夕もてならして廿
とせあまり七とせに成ぬ今はとて永源寺の住持にゆつり
あたへて彼寺の具となさしむおのつから經陀羅尼の功な
つまはなとか結縁にならざらんやとてなむ

海はあれと君か御影の見るめなき硯の水のあはれはかなさ
我後は硯の箱のふた代まで取傳へてし形見とも見ふ
山陰の道の側に世捨人あり白芽を結びて住る事十年計に
成ぬかの庵に銘て桐江といふ三公にもかへさる江山を望

ては詩情の助となし一鳥鳴さる雪の朝岑寂を甘ひては禪
定を修し己に詩熟し禪然せり爰に十篇の金玉をつらねて
投贈せらる幽賞やます翫味あくことなきあまりに芳約な
けかし拙き詞をつりてこれにむくふといふ愧赧甚しき
物ならし

浦山しおもひ入けん山よりもふかきこゝろのをくの閑けさ
いかでその住る屋上の松風に我もうき世の夢をさまさむ
思へ此身を請ながら法の道にふみもみさらむ人は人かほ
うくひすも所得かほにいとふらん心とやなく人來くとし
心して嵐もたけとち果てものにまさけれ蓬生の門
山里の春やへたてぬ雪間そふ柴の笹の草青くして
ふる郷にかへればかはる色もなし花もみし花山も見しやま
去年よりもことしはしけき雪をもる太山の杉の下折の聲
此國に傳へぬこそは恨なれ誰あらそはむ法のこゝろを
世にふるは扱も思ひに何をかは人にもとめて身をは頼まむ
後陽成院崩御の御時の御歌

九月の末つかたおもひもあへず色にうつろひしは唯夢の
内ながら覺へさかたなきかなしさに佛を念し侍りけるに
諸方眞相といふ事をおもひ出てそのはしめに置いていさ
か愁吟のおもひを述侍るならし

しら雲のまかふ計のかたみにてけふりのすゑもみぬそ悲しき
よそへみるたくひもはかな朝顔の花の中にもしほれやすきは
ほしわひぬさらても秋の露けきは泪しくるいすみのたもとに
うつゝある物とはなしの夢の世にさらは覺へきおもひともかな

しらさりきさらぬ別のならひにもかゝる嘆をきのふけふとは
つかふべきあとにあらはなくさまむ苔の雪を袖にかけても
さまくにつりかはるもうき事に常なる物よあはれ世中
うけつけし身のおろかさに何の道もすたれ行へき我世と思ふ
八景之御歌

粟津晴嵐

雲はらふ嵐につれて百舟も千船も波のあはつにそよる

勢田夕照

露時雨もる山となく過ぎつゝ夕日の渡る勢田の長はし

矢橋歸帆

眞帆引て矢橋に歸る舟は今うち出の濱のあとの追風

三井晚鐘

思ふその曉ちかきはしめそと先きく三井の入相の鐘

唐崎夜雨

よるの雨に音をゆつりて春風を余所になたてそから崎の松

比良暮雪

雪はるゝ比良の高根の夕暮に花のさかりを過る春風

石山秋月

石山やにほの海てる月影はあかしも須磨も外ならぬかな

堅田落鷹

峰あまた越へてこし路にまつ近き堅田になひき落るかり金

慶安元年九月十三夜十三首和歌

九月十三夜

名にしおふこよひ一夜にとばかりもみる長月の影をしそおもふ

月前星

しらすたれ星をかさしに月をおひて爰都イはこやの山をとふらん

月前時雨

しほし猶くもると見しそ光なる時雨の雲にもるゝ月影

月前萩

かゝるよの月に夢みる人はうしいはぬばかりの萩の音かな

月前鹿

つまこひをなくさめかれておは捨の山ならぬ月に鹿や鳴らん

花洛月

春によせし心の花の都人うつろふ秋の月やみるらし

占寺月

古寺の菊もゝみちも折ちらしくむあかつきの影を身にしむ

露月忍戀

うちとけて見えむはいかゝくまもなき月に心のおくもしるらん

寄月別戀

人もかくなくまらしかはかへるさの月は身にそふ今朝の別を

寄月述懷

世をなげく泪かななる袂にはくもるばかりの月もかなしき

寄月旅泊

こき出はあすの波路もことゝへよ今宵の月はみつの泊りを

寄月祝言

みちぬへき月に思ふを行末をまつこそつきのわたのしみにして

仰のおもむき候ぬ此題人の見参に入候まいあそはし候

ふしにて拜見をゆるされ候かしこまり入候さてゝとり

とりの金玉共中々言の葉も及はぬ御事とも有かたく存候
今夜に季秋の名残一入おしむへき事にて候就中こよひに
清光にて候へき空の體に見え申候星をかさし故事にて候
やらん不覺悟候へ共詞つよくまことに及かたき體とも申
へく候やとそんし候時雨の雲をもるゝ月一しほの光輝を
そへ候へき御事にて候いはぬばかりの萩ことほり外に其
心あらはれ餘情かきりなきとも申ぬへく候かの妻こひを
なくさめかれておは捨のならぬ山に鳴鹿の思ひよりかた
き御事にてや候へからん春によせし心の花物語の詞の面
影候にや菊も紅葉も折ちらし是また雲林の體おもひ出ら
れ候月は心の奥もしるらん心詞又ありかたく拜見候月の
ひかりまで面かはりする心のあきまことにさる事にて候
へきと存候おくらましかばわりなき別れの體無申計か泪
かちなるたもとにはくもるばかりの月も悲しき心はさる
物にて御こととはのつゝきまことになつみなく心にまかせ
ていひくたされ候とはかやうの御事にやとすいりやう候
あすの浪路とことゝへよとてこよひの月みつのとまり妖
艶の體にて候やらんみちぬ月に行末つきわたのしみかへ
すかへすことはのたれもつきせぬ御事は空をあふくはか
りにて候かんだんの心にひかれて秀言ことの外しけくな
り候そのまゝにてはなをゝ憚おほくやと存候へとも拜
見のあいた御使まぢまいらせ候ことの外程なへ候やらん
御わたくしまて見参に入候くろしからすと候ぞと御びろ
うは則やらせおはしまし候へかしく 中 院 通 村

太上法皇御製賜黃檗山

舍利偈宸翰

北天曾自奉南山、

古佛真身傳世門、

十萬里程靈骨援、

三千年後異光班、

宋皇述讚感生相、

源晨將心欽定顏、

晨夕拳々服膺久、

翠峰永仰五雲閑、

正三位平忠康奉

太上法皇詔賜佛舍利於黃檗山萬福禪寺

伏以靈覺舍利輝古騰今常住身隨緣赴感是

宗社皇神讓訖

歷朝聖王傾心原夫

佛牙舍利北天王昔獻宣師今

在天龍寺傳來之由見于普明國師之記

上主未欽佛化有旨迎請入內供養貯

水晶之匣旦夕瞻禮初貯匣時如

粟米粒素之歲月大齋菽子生分化

結似貫珠非

崇信深密焉能如斯矣頃年匣中生白石之屑

掃之又生如是影回自然穿穴內外洞明也

上怪示臣等庸昧不知何等祥瑞竊謂佛眞法

身未曾寂滅見神明靈氣之所依而通也

上益加敬重乃

命工造金色寶塔而焉茲隱元和尙入也

竇內洛南靈區門創黃檗展龍象

筵鳴無道實當世法行之場也

上美其興復之盛特賜寶塔兼震筆

御讚臣等所蘇聖壽無疆皇圖萬福

人天瞻禮共成佛自矣

寛文六年丙午六月十九日

後水尾院

本院	御母	東福門院
後光明院	同	壬生院京極殿園殿妹
後西院	同	芳春門院匣殿四條殿妹
今上	同	新黃双門院 園殿息女
輪王寺	同	壬生院守澄尊敬臣
仁和寺	同	師局 永無瀬殿息女
大覺寺	同	芳春門院
八條宮	同	同
妙法院	同	新黃双門院堯恕御母新中納言殿臣
一條院	同	眞敬
聖護院	同	芳春門院 道寬
智恩院	同	權中納言殿四條殿息
青蓮院	同	新黃双門院 尊澄
梶井宮	同	權中納言殿 清胤
女二宮	同	近衛殿
女三宮	同	東福門院
女五宮	同	同 二條殿
圓照寺	同	四局藪凡第一宮四辻殿腹

後西院

杵休寺	同	芳春門院
寶篋院宮	同	同
品宮	同	新黃双門院
興正院	同	芳春門院
大聖寺	同	壬生院
靈鑑寺	同	同
當曇花院宮		
當大聖寺宮		
當寶篋院宮		
八條宮	御母	女御子高松宮女
有栖川	同	新大納言局 幸仁
實相院	同	義延
輪王寺宮	同	天眞
毘沙門堂宮	同	六條 公辨
聖護院宮	同	道祐
八條宮	同	尚仁
圓滿院宮	同	高辻息女
蔓珠院宮	同	六條

女一宮

同

女御

靈鑑寺

同

新大納言

宗榮

桃宮

同

同

墨華院宮

同

六條

賢宮

同

新大納言局

栢宮

同

同

瀧宮

同

六條
寶鏡寺
持壽院

定宮

同

同
入江殿

壽宮

同

同
光照院

後光明院

女一宮

御母

小一條殿山科殿

今上

東宮

御母

松木大納言女大納言典侍

一宮

同

源典侍 小倉女勲修寺門跡

二宮

仁和寺

私若殿

六宮

妙法院

五條殿腹

宮

松木

女一宮

近衛殿

小川坊城殿腹

女二宮

女御

女宮

松木

女宮

松木

後十輪院内大臣詠草

添削者内大臣實條公

春部

元日

けふにあげて老のこゝろも立かへりまた花鳥も春に成ぬる

元日陪 柿本影前詠言志和歌

ふりまさる身もあら玉の年越てまた花鳥の春にあひぬる

試筆 元和五年

としのうちにかすみ初つゝけふふりや我とこゝろえて春の立らん

歳暮立春 寛永元年十二月小廿九日

けふをまた去年とやいはん一夜明て更に立そふ春の霞に

元日雨降ければ

一夜あけて四方の草木のめもほるにうるふ時しる雨の長閑さ

試筆

うらゝかぬ心をたねにことのほの花もさき出ん春は来にけり

初春

男山のときき色をまつみせて日影も春にたつ霞かな

慶安元二月廿二日水無瀬御法樂

水無瀬山いく世の春の澗の名もありとやこゝに霞こむらん

世におほふ快ゆたかに棹姫の霞のころも春や立らん

初春水

なかれさへのとかにそすむ石清水こほりとけゆく春の初風

初春祝道 禁裏御會始慶安四正十九日

君に今遠き所もくる春の道についてたつ時やしるらん

立春

一夜明てあらしもきかす朝霞こゝのかさねの春や立らん

早春

松に吹音もかすみて男山けふふり春の風そのときき

早春風

さは姫の世におほふ袖やせばからしまた春あさき空の霞に

吹そむる春のかせにや石清水下つ岩はも水とくらん

朝なりし立そふ空の霞よりあらしも春の色に吹なり

早春山

男山みとり立そふ松かえに今ふり春の色そさかゆく

八幡山さか行春の色とてや尾上の春もかすみそむらん

はる来てはほとなき峯にみし雪も霞むか残る山の端もなし

早春河

吉野川けきは霞の下くゝる水より春の色はみえけり

早春鶯

春を浅みかせさむくとも今更にふるすおもふな宿の鶯

はると共に深谷を出る鶯の宿にならさむ千代の初こゝろ

春風解水 禁裏御會始正保四正十九

長雄丸ノ代何用之
ノ童名通純

行水も水にたえし跡とめてふるき道しる春風そ吹く

春風春水一時來 仙洞御會始承應二年

池水に千代の縁をせき入て松にや風の春を告らん

江上春興多

伊駒山はなのばやしも難波江の春をへたてぬ浪をかすめる

雪消春水來

山河やうつる日影を水上の幾重の雪かはるにとくらん

雪消山色靜

同寛永十八
きのふみし雪の埋木みとりにて春あらはるゝ山の長閑き

風光日々新

同寛永十七正月十八日
空の海や春の光のいやましにみちくるしほは立かすみかな

禁苑春來早

禁裏御會始寛永十八正月
九重の梅も柳もそのゝ内の春のいてゆの心をやしる

春到管絃中

同寛永廿一正月廿三
物のれに柳の糸をひきそへて風のしらへもゆるき春哉

毎家有春

わか家のはるの光にあらそふや人をへたてぬ君かめくみな

毎山有春

春の色の外山はいはしらかの枝にもみえて雪を凌らぬ

霞 寛永十七七月廿四御宮座

たいぬ目の一日たになし和田の原はるは霞の奥津しら波

朝日かけ出る高れに匂ひ初てたつ色淺き春かすみかな

霞知春

よなこめておなし道をやくる春に立もなくれぬ朝霞哉

立かへり春もしられて長閑さに世にあふ袖をたつ霞哉

由霞 内稽古御月次寛永五十二

朝陽目うつるひかりも紅のかすみ色こき春の山の端

おなしこころな

のとかさもわきて都の春の色を大内山やまつかすむらん

朝な／＼なを立そひて春の色の霞に淺き山のほもなし

嶽霞 後陽成院御時一日千首に

色とらのたゝ一筆のすみかきを都のをちにかすむみれかな

咲ぬへき比とはなきも春といへば峯のかすみ花かとそみる

春ふかきかすみやさこそ遠からん花にうれしき四方の山のほ

嶺樹霞

たちぞむる峯のかすみの線より木のめも春の色にみゆるらん

松か枝のみとりは雪のうちにみゆるも峯の霞の春の一しほ

霞添山氣色 仙洞御會始

わきて此名にあふ洞のかすむより山も時しる春の長閑さ

霞添山色

時は今またき木のめも春の色に霞のそむる四方の山のほ

のとかなる空の霞の色よりや山の木のめも春をにるらん

筑波川のこのものかすむよりあまれき春の色はみえげり

霞添春色 公宴御會 慶安五年

なへて世の霞も人の心とやなひくを春の色にみずらん

霞隔村

ほと近きこなたの里か朝霞へたてゝみゆる遠の一村

海邊霞 元和四三九月次當座

みくまの浦のばまゆふそれならて春のかすみ幾重成らん

見つ汐の江の松もはるかなり春は霞の沖をふかめて

江山霞

見つ汐の江の松もはるかなり春は霞の沖をふかめて

難波江や春はみちくる汐よりもなをいやましに立霞かな
なには江や棚なし小船春は又あしへの霞いく重分らん
崩出てかすむ緑の玉津しま入江に寒きあしのほもなし

若菜

かきりなき年なそつまん春毎に老ぬ名にあふ野への若なほ
わかなてふその七草は七十なな十かへりの春につみてん

若菜和時

禁裏御會始寛永廿一正十九

君か代もことしそ千代の初わかな老せぬ春なつむ時やしる

鶯

はるかぜのうち出るなみのほつ花にはやさそはれよ谷の鶯
降雪の匂はぬはなも匂ふかとこゑに春ある枝のうくひす
寛永廿四
霜とくるはるの日影に鶯の羽かせもかるき枝の朝露
あさ露にぬれて木つたふ鶯のはかせもかるき春の曙
吹かせはなをさゆれとも鶯のなくれ春なる園のあけほの
くれ竹のよふかき枝にやとりつるれくらしらるゝ春の鶯
やとりこしれくらしられてくれ竹のよふかく

南枝暖待鶯

鶯も來なけ集つくる鳥もあるかたへは春の長閑成日に

古巢鶯

心さしはなにや深きうくひすの消あへぬ雪のふるす成らん
深きも
鶯もあくかれ出は谷陰にわれやすもりの音をほなまし
元禄三九月次第禁裏御會始
寒かへる谷のふるすにならひてや都におそき鶯のこゑ
はる來ても雪のふるすにとちられてまた谷深き鶯の聲

鶯聞萬春

禁裏御會始承應二年

萬代の春の初音を松の上になくうくひすや君に告らん
鶯聲和琴

琴の音のひいきそかよふこのうちに夜なく鶴も春の鶯

雪中鶯 仙洞御會

いとほやも花にきかにや鶯の雪より出る聲の匂ひを

夕鶯

くれ竹のまとのうくひす後もなな夕日かくれの枝しめて鳴く

竹鶯

吳竹の去年のやとりの雪折にいま旅なる鶯や鳴く

山家鶯

うくひすの都の春はおもふともこの山里をあらさすもかな

谷鶯

谷陰になくはかひなし花ならぬ岩木を春の鶯の聲

名所鶯 永無瀬法樂正保四二廿二

みよし野やなのか集出る鶯も古郷さむき雪になくなり

梅近聞鶯 御會始正保二正廿八

なには津のぼるな雲井の梅か枝に鳴うくひすや君に告らん

餘寒月

行月もはるなや空にたとるらん猶かせきゆる雲の通路
月深

すむ影のかすむや流石春の月雪氣のかせは袖にさえても

殘雪

うつもれし色の竹の枝なからこほりてさむき去年の雪哉

松殘雪

とけ初て下よりおつる雪にもうへはつれなき松の白雪

春雨

深き夜のあはれば猶も秋をいきて時こそありけれかすむ月影
ことはりの春にも過る夜はの月かすむあま^しりや雨に成らん
ことはりの春のものとほかすむとも雲なかくしそ夜半の月影
はらへとも月におよばて飛鳥風只徒に影をかすめる
いたつらに吹とこそ見れ飛鳥風かすめる月の空におよばて
さやかなる影はありとも春はた霞にいはふ月なこそみめ
しるて猶春たに老を忘れはやたか見る月もかすむ替に
春雨 後鳥羽院四百年御遠忌に

曉春雨

明ぬるかいとい光もかすむなり夜を中空の月とみしまに
ありとしも影^{みづ}なやはみん横雲の絶間にかすむ春のよの月
春雨

庭の面は降ともみえぬ春雨のかすみにおつる軒の玉水
おのつから軒の雲は^{みづ}おちあひて空にはいと^{みづ}かすむ雨哉

軒はもる雲もあひぬゆふくれの深さかすみや夜半の春雨
かすみつゝ音そふ軒の玉水に今降そむる春雨のそら
春雨

春草

さなかへる野は初草のうらわかみ更にや露にむすほゝるらん
春草短

萌そむる草はみなから紫のゆかりとやみん武藏野の原
むらさきのゆかりもみえず萌そむる草はみなから春の緑に
春色浮水

春色浮水

見梅

うつろふもおなし縁の空の色を底にふかむる春の池水
解わたる池の水のなみのあやに色もめつらし鶯の毛衣
見梅

梅花皆春 寛永廿年

草の葉のみそかしらする種もあれと春をは梅やまゝ匂ふらん
簪梅

簪梅

はるの夜のみしき軒端あけ初て梅か香しろき園の朝風
思ひ出るむかしやいづれ橘のはなにかほりしのきのむめかえ
窓梅

窓梅

咲そはん若木の梅のおひ先もはるにこもれる窓のうち哉
はなの色は雪にみなれし窓のうちに匂ひあやしき梅の下風
若木梅

若木梅

幾はるの色香とかしる咲梅のわか木にこもる花のおひさき
逐年梅盛 仙洞御會始慶安三正十九

残雪半藏梅 同

物こそと秋見し梅やおなし枝をわきて残れる雪に咲らん
里梅

里梅

はなは猶さかぬ垣れも吹かせに梅か香うとき里やなからん
里つゝいきい手の風にさそわれてまきたまらぬ梅か香そする
行路梅

行路梅

吹おくる遠近人の追かせにとはてもしるき梅か香そする
春色浮水

折そめは枝もあらしと見る梅に先たつ人の心をそしる
ゆく末の道やまとはむ咲梅の匂ひをいくるかせのしるへに

梅風

春かせのさそふまに／＼梅か香もよるの軒ばの花としもなき

梅薫風

時わかぬ松に吹さへ咲ころはたゝ梅か香の春風にして

梅薫春風

木の本をたつれてもみん咲梅の宿もまたかに匂ふ春風

梅香遠薫

幾里をへたてゝもなをみつゝこしおなし軒端の梅か香はさかかに匂ふ梅か香そする

木の本は隋てもなを行やらぬ道かとたとる梅か香はさかかに匂ふ梅か香そする
過へてこし來ぬる道におもへば咲梅の立枝の花は匂ひはせしり

毎年愛梅

咲出る色もにほひも春毎に似たるものなき庭の梅かえ

はる毎に花のかきりはみれとあかね色をそへつゝ匂ふ梅かも

毎年翫梅

心にも幾はるそめつ梅のはなことしは去年にまさる色か

雲の上やなれこし春の幾年にあかね色香を匂ふ梅かえ

はな／＼な色香もそひめなれてこし身こそ古木の春の梅かえ

柳糸縁新

萬代なまゆにこめてやくり出すとしの緒ななき青柳の糸

梅柳渡江春 仙洞御會始慶安五正廿一

和田津海のかさしのはなも梅柳はるの入江におりやかへまし

柳絲臨池 禁裏御會始慶安三正十九

池水に吹ものときし青柳のまゆにこもれる千世の春かせ
柳似煙 寛永七二廿五竹門主

柳似煙

もえそむる柳一本のかせ見えてなひくけふりの末もふつゝいかぬ

由本の里の朝けのそれならてなひくけふりや春の青柳の柳

花

もえ出るさしの柳は行水になにの思ひのけふりくらへそ

待花

開ぬればいつれともなき春の花の中に櫻そものにまされぬ

漸待花

はなになをわりなきものか咲初る色にさかりを急くこゝろは

花はまた枝にこもれる木末にも心の色そまづは染ぬる

山さくら咲へきころの心あてにたかはん花そ兼て飽しき

またきより待としなけれ安き代は花もやはらく色や増ると

初花 御當座

雨もよにふれる軒ばの朝戸出に思はぬ花の色をみる哉

あさ霞日影ばかりにみし花の光に匂ふ色もめつらし

或人の許より初花そへて「咲初る心を送る山櫻はなの色」

香はさもあらはあれゝと侍し返し

庭花初開

ことのほの色をそへすは山櫻はなの匂ひもかびやなからん

雪花

うへしよりまたれし花の咲初て宿も今年そ春を知ぬる

所々尋花

暮なはたとのむにはあらぬ山路にも花ゆへ幾日旅にしつらん

時のまゝしつ心なし分入てまた見ぬ方のはなも咲やと
をそくそく咲つかん花に又こそ心なやりてけふも分きや
咲そむる花やいつこと白雲のかいらぬ山も幾重越さぬ

嶺上望花

岩にふむ道越わひてにはひさへまかはぬ花も峯の白雲

霞隔花

山高み木陰になれぬ^{はな}はとをたに思ひし花を霞へたてて
やまさくら霞へたてて花の香に見ぬおもかけなさを春風

静見花

いかならん身にか千年の一度も花を此世のあくものとせむ
しつかなる折こそ花はそふ色をいかならん世にあくまてはみん
歸るさを忘れはてけり長閑さの世にぬ花の色に向ひて
はる毎にかはらぬ花も長閑にて見る時にこそ色かそひけれ
いつはあれとけふこそはるの長閑成ひかりも花の色にそひけれ
朝露もこほさて匂ふ花の上に心をくへき春かせもなし
さそふへきかせなき花に心さへ外にちらさてくるゝ空かな

獨見花 竹門主

心こそまよつ散そむれ咲花も獨かだめばおしき色かな

見花戀友

いつの春そのおりふしの^と佛をばなに覺ゆる人ぞ多かる
けふまでもとはれぬばつらき人よりもなき佛そ花に多かる
花に今とはぬ恨ばわすられてともに見しよの春そ戀しき

花満山

外よりは去年のまゝなる雪と見て歸らん山の花盛かな

袖花

咲にけり宮木引てふ袖人のはなに心のなをとまるまで

瀧花 一日千首

雲井よりおちくる瀧と見ゆるもや高根の花の盛なるらん

馴花 法樂

はる毎にあかぬ心のそふも憂しなればまさらぬ花の色香に
是もまたなるいはいとふことほりを我またしうて花に悔しき
なかもあかぬ心を花の常盤にてなるゝ日數そはるにすくなき
馴て後散はうらめしことほりを又咲花に物忘れして

折花

山守のゆるす一枝を散かゝる花に折たるこゝろとやみん

花未飽 元和五正廿五竹門主

はるを経て花にそおもふ秋の夜の千代を一よと云し心も
あかすしてられはとおもふ心もやくる春毎の花にそふらん
今年もやあかて暮さん咲花のとまらぬ春を物忘れして

花留人

くれにけりしはしとてこそと計を花にかたらふ春のもろ人

花下忘歸 竹門主御法樂

故郷花

咲ころの花にいとばんうき世かは奈良の都はよゝにふりても
更に今すみけ人のおとつれも花に待へき宿そふりぬる
來てとへはふりにし跡も粟栖野の花は忘れぬ淺茅生の宿

古郷夕花

寄雪花

里はあれてふりにし人の哀さへ夕への花の色にそひぬる
ちらぬたに盛の枝は花ならて雪を色なる山さくらかな
花の香の雪になる目にとふ人は數のうらみないかゝるらん

花風

心さへうつればかはる花にまぢ花にうらむるはるの山かせ
風はまつれたきものからさすかなみ花の心そいふかたもなし
今は又空にもかせの色みえてうつるふものと花さそふらん

依花待人 竹門主御法樂

幾年かとはれぬ宿を春毎のはなに忘れて人を待らん

花浮水

はなさそふ水せきとめて枝なからうつるとみてや散を忘れん

花隨風

うしやなをさそひもはてす吹風に身をまかせたる花の心は

落花

さそはるゝ心そつらき櫻はな散すは風のとかになしても
おもふかひなき世なりけり櫻花あたにしきそふ風の契に
花さそふおのかつらさを心かへするものにもか風にしらせん
うらみすやさそふと見るも半天に花をなくらす風のつらさに

夕落花 寛永六三廿四内御月次

散と見てあるへき物をしたふまにうたてかへさの道を暮ぬる
ゆふ月夜はつ影うつれ散と見て立かへるへき花の陰かは
ちるまいに枝には花の色消てゆふくれ深きゆきの木の本

風前落花

花の心に可なり

咲はなをさそふつらさに心さへ空にみたるゝ春の風をな
つるに散花にはありともめのまへにさそふつらさは風を恨ん

花漸稀

外のちる後とか誰にならひてか深山櫻のなを匂ふらん

桃花曙錦

仙人にこゝにすむらん咲桃の錦たちいつる水のみなかみ

歸鴈

ゆくかりもさすか都の別れとやおし明かたの雪に鳴らん

松かせのふかんと見てもくすの葉の恨は春にかへる鴈金

深夜歸鴈 寛永三三三月廿四日

人ならは夜をもとをさぬ衣のの名残ににたる春の鴈金

うき物とわかれはしるや有明の空につれなく歸る鴈金

月前鴈

古郷のほとは雲井の春のかり空にや月の秋契るらし

秋を空の月にや契る別行ほとは雲井のはるの鴈か

めぐりあはん秋をや月に契らん春の雲井にかへるかり金

歸鴈幽

はるかなる雲路のこゑに傳もかすみて残るはるのかり金

ゆくかりの翅は消て山のほの霞のおちにのこる聲かな

潮邊鴈

漣やきよき渚にかすむ夜の月をのこしてかへるかり金

こん秋を月に忘るゝにほの海や今はとかりの思ひ立とも

にほの海や漕出る船のかちの音にまかひてかすむ春のかり金

春駒

正徳三十三

聲いさむ駒やしるらん花山のむかしのはるにかへる道をも
はなちかふ春の草の縁さへあるいとみえて駒そいはゆる

連日

今朝のほとひるまの空をきのふかとたとへるも老の春の目永さ

遊絲

うちほへてなみたるらん春風の吹としもなき空のいとゆる

杜若 元和四二廿五内裏御法樂

ましろともみさりし池の杜若はなに咲てそあやめわきける
行春のへたてともなれかきつはた花のほとたに立やとまると

藤

契は藤をならしめ

涙こゆるならひな春のちきりにて藤咲かゝるすゑの松山
ささかゝる花ともみえずふく風のこゑうちそふる松の藤涙

松藤

と見るまで藤

根にかよふものかとそ見るむらさきの色に匂へる松のふちかえ
まつにはふ汀のふちのかけみえてまことの波もこすかとそみる

江上藤

うちよするまことの涙も白妙のふちえの松の花かとそみる

幾春をかけてか契る住の江や神代久しき松の藤かえ

春欲暮

はな鳥の後の日數はのこりてもかひなきものゝおしき春かな

暮春

くれにけりうつる日かすのほとなきなおもへば春もけふの一時
あり明の月もほのかにかすむなりのこりすくなき春の日數に
有明の月かけほそき山のほに霞もうすし春のくれかた

ゆく方をしるるといかに尋ましけふにとちむるはるの霞に

暮春雨

又も來んはるはありとも山櫻ちりかひくもれあり明の月

暮春雲

おもかけの花とたにみし春もはや殘すくなき山の雲
暮て行はるのわかれの衣々を雲のころもや空に見すらん

暮春雨 慶安三十廿三御當座

春もけふかへる道にし降雨はたか袖ならふなみた成らん

暮春鶯 寛永六三廿四内御月次

行春とともにかへらは鶯のものうかるれば我そなかよし
くれて行春はおもはてうくひすのかへるなやまつ谷の里人

暮春

殘るとてたのむものかは手を折てかそふともなき春の日影は
ゆくゑなき名殘を空になかむれば雲ものこらぬ春の山のは
暮て行空をかきりになかむれば雲さへかへる春の山のは

惜三月盡 一日千首

とゝめえぬ春としりてもけふの日の暮るないかて惜まざるへき

柳臨池水 元和十正十九禁裏御會始

池の鶯も波のあやなる水の面に色をましたる岸の青柳

夏部

首夏風

恨こしはなほ跡なき夏山の若葉すしき木々の下風（下風）
あかすみしきのふの花の傍に露もうちいる風そ涼しき

更衣

花の色のうつるひはてし行ふとて袖さへかはる夏衣哉

新樹

茂りそふみとりは木々を染わけて色の千種も若葉にそみる

卯花

わきかぬる月と雪とに咲花の色はけたれぬうつき垣かな

卯花隠路 元和五四廿五月次

分かへるみちたとし卯花はまち出る月のひかりなからに

咲うつむ色にそしるき卯花の垣れつゝきの路（路）かきよひ路

わくふかく誰か住らんとふことをあなうの花にみちばよかせて

薄暮卯花

分出は道やたとらん卯花のくれぬひかりなこのむかきれも

賀茂祭

かばらぬやその神山のむかしよりけふにあふひのかさし成らん

山朝祭

神山やかさしの玉を代々かけて今もあふびに見する朝露

郭公

さたかなるこゑはありとも時鳥（時鳥）うついにさかん一こゑもかな
夕されば山本かすむ面影（面影）なさそひてもなくほとゝきすかな

仙洞御會御節

五月まつ心やおなし時鳥はな立花のかれぬちきりに

庭の面のはなたち花に郭公今もやしのふよゝのふる聲

まちし夜の雨をいつくに過してか朝の雲になく郭公

ほとゝきすたかなをさりの待暮に思ひなしてか我につれなき

やよいかに我をやさそふ時鳥この世の夢のあけかたのこゑ

待郭公 聖廟法樂右三首雪玉抄に眞隆の歌なり

時鳥なをそつれなき神垣のまつは一夜の名をたのめとも

まつほととほとひもあはせし時鳥さつといば、初音ならぬを

待人につれなき名のみ世にふりてなを出かての山郭公

郭公いつより人のまちそめて難面ものにれをならひけん

間郭公

子規なく一こゑをまちつけて今はれぬへきめこそ覺ぬれ

初時鳥 横手芽也歸國の時會せしに

古郷にかへる道をや郭公人にすゝめむ初音なくらん

卯月郭公 元和三年二月

またさかぬはな立花の時鳥なれもやなきて五月待らん

驚の歸るふるすなあくかれて出やまたき山ほとゝきす

曉時鳥

有明の月のゆくゑの一聲もなをよにしらぬ時鳥かな

寢覺時鳥

れぬるまに幾度かばと一聲に夢路くやしき郭公かな

徒にいづくこゑかはとれ覺しておしと思ふや間郭公

ゆめたゆるやみのうつゝに時鳥むすほゝれたる夜半の一こゑ

時鳥過る枕に夢たえて只一こゑそむすほゝれたる

郭公きゝつともなきれ覺かなむすほゝれたる夢の枕に
子規たちかへりなけみし夢もむすほゝれたる夜半の一聲
絶初る夢のまぐらの郭公たゝ一こゑそむすほゝれたる

夕郭公 一日十首

郭公雲まに名のる一こゑにあやなくまよふ夕くれの空

杜時鳥

村雨のやとりもとらは郭公三笠の森に聲はおしまし

郭公幽 云和三十七廿五首當座

したはるゝ心にしゐてほのかなる聲にはなきぬ由郭公

時鳥こゝろを雲のいつこまでほのかなるれにさそひ行らん

郭公語少

かたらはん里をあまたと思へはやたゝ一こゑに行時鳥

時鳥稀

今はまた待しにかへる一聲を聞しにも似ぬ郭公かな

題不知

五月まつ心やおなし時鳥はな立花のかれぬ契りは

池菖蒲 一日千首

池水の深き心もひき初るけふのあやめのれにそしらるゝ

蘆橋

見すしらぬよゝのむかしに袖ふれぬふるき軒はにかほる橋

橋の香にこそしのへ袖ふれしそれかとまでも知ぬ昔を

古郷の忘草生ふ軒はにもむかししのふやにほふ立花

橋風 元和八二廿五公宴御法樂

ふりにけりゝのむかしな夕風やはな立花に今も吹らむ

蘆橋 慶安三六廿五日

あかすみ春もむかしと梅かえのおなし軒はに匂ふ立花

御橋

袖ふれしみはしに近き橋のみさへふりぬるむかしなをそ思

花橋に

いにしへをなたち花に見し夢も覺であらなむもとの身にして

古郷橋

人は猶ふりにし里の軒はにももとの身なからにはふ立花

あれてたにあはれ幾世を匂ふらむふりにし里の軒の橋

對橋間昔

むかしなをへとしら玉露おちて袖の香しめる軒の橋

櫻誰家 元和三年六月廿五日竹門主御法樂

とひよりはあふちやかこと紫の色にかゝる宿のあるしな

あふちなやかことにはむ紫のゆかりにはあらぬ宿の主な

たか宿そ軒はに絶すある雲の色かと見ればあふち咲陰

早苗

おり立ていそく中にも一むらはとしておくての早苗分らん

採早苗

袖の色もおなし縁をとる田子の手さへ涼しくみゆる若苗

腰のめかるとるや早苗のあき衣ほさて幾日かぬれ増るらん

五月雨

五月雨は半天とつる雲水に明ぬ幾日の目をなくるらん

もえ出し若葉はかりに成にけり蘆の末こそ五月雨の波

天川瀬々にみなさる雲水やあまりておつる五月雨の比

菴五月雨

降のまも雲そ絶ぬ五月雨にやかて朽ぬる草の庵は

五月雨久

かけ清き川原も見えず五月雨はひさ木の末葉もくす流て

續照射

棹鹿のよらぬ幾夜をあがすらむ峯のほくしの待かひもなし

水鷄

行とまる宿をさためぬ水鷄もやいつこときいぬ門たいくらん

水鷄もやおとろかすらん老か世を猶出かての門させりとて

夜水鷄

柴の戸の音にあるしと小夜更てたしく水鷄におとろきやする

さやかなる月をやたとる天の戸のあくとおしへてたしく水鷄は

鵜川

うかひ舟とるや手繩の隙なきもふそにしられてしめるかいり火

山陰のやみと思ふ夕月夜おほつかなくも出し鵜舟は

雨後鵜川

鵜飼舟雨より後もくもる夜をうれしきよとや篝さすらん

夕立もめくれる山の麓川また跡とめてさす鵜舟かな

鵜川篝火

う船さす袖吹おくる河風に淵さへさはくかいり火の影

世をわたるわざを思へば鵜飼舟おのかうき世の篝火の影

夕立

元和四卯月九日月次御會

此里を過行方のすいしさも空にしらるゝゆふ立の雲

夕立の名残の露に風立て日影涼しき山のした柴

天津かせ日影を空に吹とちて夕立涼し雲のかよひ路

村夕立

一となり過ぬと見つる山本に又雲きほふゆふ立の雨

しはしな笠やとりせん行道にむかひの里のゆふ立の空

瞿麥露

朝またき塵をもしはし撫子のはなにおこたれともの宮つこ

夏草

秋をまつ草もありけりと計に庭そ草葉に茂りばてぬる

咲出ん秋の花をや白露のしたにふくめる野への夏草

おく露は秋の花なる草の葉を夏野にかへす夕風そ吹

道やいつこ雪にはみえし駒の跡もしけるに分ぬ野への夏草

庭の面にはらふもおなし種なれや心にしけるむくらふもきふ

夏月

ほともなく明行月は秋の夜のおなし空行影とたに見す

涼しさもあかすとむかふ程なきの心つくしや短夜の月

色消る真砂の夜の霜もおし涼しき月のあくる光に

きのふけふさやけき月を五月雨の晴まになしてまた曇なふ

夜螢

更る夜のあしやの里のいさり火にかけあらそひて飛螢かな

螢知夜 一日千首

うは玉の夜こそつくれ光ありと見し夕露も草の螢か

くるいよりのれもえてやうは玉の闇の螢は夜をわくらん

亂ては浪にも消ぬおもひともしらぬの螢夜やいそくらん

池螢

さいれ石の中のおもひを池水の浪にうち入てとふ螢かな
河邊螢

音はして行水くらき木かくれに照す螢の影も涼しき
夏風 元和三五月十三

吹風は松に木高き聲もあれとなひく若葉の上にこそ見れ
風をなふたおもてなる花に吹この手かしはに夏はつれなき
國民もやすき思は夏の日も治まれる代の風や涼しき
君か代の手にまかせたる國の風は夏のあふきに増る音かな
立ならず木陰涼しく露おちて袂にしめる夏の朝かせ
はなの色もうつれはかはる心より袂にあかね夏の朝風
夏來てそしらはとはまし吹も猶袂にあかね風のやどりは

夏河

花は散紅葉はまたき立田川夏そにしきの中は絶ける

夏野

しはしまてまちかくきかむ時鳥われもいくのゝ末の一聲
あふひ草名をなつかしみ一夜れん董摘しもおなし野原に

夏蟲

秋近き遠の野へのゆふ暮に何ともしらぬむしのこゑ哉
身をてらすよはの光をおもふかなあつめの窓は過る螢に

夏鳥

水鷗にやおとろがさるゝ明ぬ夜の月に鳴行かさいきの聲

夏木

此まゝにしけりも行は庭の面にみ由計の梢をやみん
ときは木は下葉散つゝ茂り行縁そふかき陰はみえけり

夏の日には涼
立よらむ茂る梢の影もよしやとる計の家はなくとも
夏門

涼しきに行過かれつ陰しけき柳はいもか門なられとも
日の影もよそにへたてゝ涼しきに誰かはこゝを杉たてる門

夏衣

ぬきかへしうすき衣の單へたに猶身にそはすあつき比叢

松下泉

おのつから木深き松の下くゝる水には秋の風も涼しき
涼しさもあかねものかなあつき日にしられぬ谷の松の下水

松風秋近

松にこそまづおとつるれかそふれは空には絶ぬ秋の初風
下くゝる水よりもななほと近き秋風かふふ庭の松か枝

納涼

陰しけきめくみの露のつくは山庭にも見する木々の涼しさ

納涼

暮るまてなを山の井を結ふ手の雫も袖にあかね涼しさ

九條家夢想の歌を句の頭にすへて三十一首の歌

すゝめられしに 松下納涼

すゝみにと來つゝならして花ならぬ松にも見ゆる薜の下道

樹陰納涼

夕日影もたぬ木陰は葉さへうちゝるばかり風の涼しき

夏萩

水鳥のかものかぜせも色かへてけふは御破の麻の白ゆふ

御破する川瀬の麻の夕風は神の心もなひくとぞみる

夏月涼 元和五十二御法樂

待^{また}出る^る袖^{そで}に光^ひも散^ちはかり月^{つき}よりおつる風^{かぜ}の涼^{すず}しさ
あつき日^ひは夕^{ゆふ}への後^{あと}に隔^{へだ}て來^きてまら出る月^{つき}に秋風^{あきかぜ}そ吹^ふ

秋部

初秋

おき初^{はじ}るけふより秋^{あき}のものと見て涙^{なみだ}わすれん袖^{そで}の白露^{はくろ}

風告秋

吹^ふからにやかてしほる木^きはにて草木^{さうもく}もみずる秋^{あき}の初風^{はつふう}

新秋田 元和八十五八幡宮法樂廿五首

穗^ほに出る秋^{あき}たつからに小山田^{こやまだ}の庵^{あん}のけふりもにきはひにけり
ほに出る稻^{いね}はもそよと吹^ふ初^{はじ}て鳥羽田^{とりはた}の面^{おもて}になひく秋風^{あきかぜ}

早秋 慶安三七月廿四日御當座

色^{いろ}ならはうつるはかりに吹^ふかへて音^{おと}そ身にしむ秋^{あき}の初風^{はつふう}
白露^{はくろ}のまつおき初^{はじ}て草^{くさ}のはの風^{かぜ}たにしらぬ秋^{あき}や來^きぬらん

七夕 織女曙^{おりひめあけぼの}

明^{あき}ぬれはくるいものともあふことなたのめぬ星^{ほし}や夜^よを惜^{おし}らん

七夕月 已下七首御懷紙

天漢^{てんかん}わたりを照^てせ玉^{たま}はこの光^ひまちつけん夜半^{よなか}の月影^{げい}

七夕河

天^{あま}の川^{がは}あすの舟^{ふね}出^いのいかならむけふこそやすの渡^{わたり}り成^{なり}共

七夕草

いつしかと待^{まち}こし秋^{あき}のはつお花^{はな}こよひやほしの手枕^{てしざ}にせむ

七夕鳥

心^{こころ}してなか鳴^なとり^のの夜^よをなをしめけふほし合^あのあすの岩戸^{いわど}に

七夕衣

秋^{あき}かせも猶^{なほ}身にしまし織女^{おりひめ}の袖^{そで}つく夜半^{よなか}の天^{あま}の羽衣^{うのえ}

七夕別

棚機や別路に生るくすの葉にこむ秋風を又契るらん

七夕祝

天津空けふ逢はしのわが君に影をならへむあきも幾秋

七夕風 禁裏御會兼題

追風に船出やすらん七夕の月のかつらの棹もとありあへず

吹かせのたより待えて七夕の舟出もやすの渡すいしも

七夕のけふの船出は吹風のたよりにやすのわたり涼しも

七夕霧

更行は天津ほし合の影もみむ^みより晴ふ水のあき霧

七夕絲

あふ事はかた絲ならて七夕の絶ぬ契にけふ^{はかしてん}やかさまし

織女にかくるれかひの絲はやも心のすちにあふ夜あらなむ

さゝかにの絲も手向に七夕のくへき宵とや空に^{はかしてん}立ち

七夕草

萩薄二の星に手向をきていつれか秋と空にとはいや

七夕絃管 七夕公宴

空にすむしらへも秋にあふ星の心ゆくよの絲竹の聲

七夕涼如水

袖ぬらす星のあふ瀬の音つれもこにおちてや風の涼しき

織女惜曉 元和七年七夕公宴

七夕の後のあふよに時のまなかへんとやおもふ曉のそら

つきせぬや神代のうらみ長鳴のとおりあへず^{空にそらへ}明る星合の空

七夕後朝 一日千首

七夕の心よいかに天の川遠きわたりにけさは成ぬる

閏月七夕

あふ瀬なき後の文月や七夕のぬれきぬならし天の川波

月前臨二星

こよびあふほしのいもせの中に落る天の川風月^{に添}を涼しき

牛女秋來祝

かへる秋のえにしるしけむ七夕の露やまかふとおもふ涙を

牛女年々渡

年毎の秋の一よや七夕の夢のわたりのかさゝきのほし

天川わたりなれてもたとらん年にまれなる申のあふぜは

けふ毎にわた^{は添}りなれても天河と絶あやうき^{なかつ}鵲のはし

なれゆけは浮身^{はうしを添}をしるや七夕のまとなに渡る鵲のはし

星河欲明天

明行か朝のまなも天の川ほし合の空にかこちよせても

萩

またれても猶つれなけれ秋の風本荒の小萩露なからみん

野へになくひとつものとは誰かみん花咲のらの萩の上の露

露ながら本荒の小萩うちなひきつれなき風の花に嬉しき

萩露

深からぬ露までをみも置はてゝ本あらの小萩風をこそまて

萩映水

かげもあへずあたになかれん色もなし萩こそ波の花のしからみ

行路萩

人ことの袖にうつらは色もあらし道よきてみむ野への秋萩

萩

あたに散花のゆかりに行道の露分わふる野への萩原
 萩のはにきいもすつへき秋風を身にならにしのうき夕へ哉

蒼萩

萩のはの一本ゆへに秋風のあはれ多くもそふ軒はかな
 吹過る軒はの松のゆふ風をやかてこたふる露の下萩

路薄

をきながら露になひきて花薄分ぬに人の跡は見えけり
 朝またき分る人なき道みえて行手の薄露も亂れて
 はな薄まぬ秋にまかすれば道もさりあへす露を亂る

風前薄

過行に千種なからの秋風とひとり小花か袖のものなる

女郎花

露にふし風になひきて女郎花のか心とぞめ姿かな
 をみなへしあたにや契る白露の結ふ程に秋風そふく

原蒨葎

おく露を己か花にやかるかやの野原の風に散亂れな亂れな亂れ

蘭

朝またきたれか來て見し蘭露もみたれて綻にけり
 蘭さきぬるときかむらさきの色に匂へる野へのしら露
 いかにして綻ひぬらんふちはかまきて見る人もあらぬ野原に

草花露 八十五放生會

袖にそふわきて手折ん色もなうけてよ露の千種なからに
 なきそひておもれはなひく萩か枝に末葉の露を見る程もなき

移し植しいつくの野への夕露か庭の小菰になきかはるらん

月前草花

心あらははなによはかれ月影の露のやとりの野への秋風

秋夕

吹しほるなへて草木の夕露に我袖のこす秋かせもなし

海路秋夕

ゆふくれの浦かなしきも秋風のなみに立そふ船のうち哉

初鷹

秋かせに又わけてきぬ天津鷹霞にとちし雲の通路
 越てくる翅は峯のふそなからこゑをみやこの秋の初鷹
 今朝そ鳴きのふかすみし佛も忘れぬ峯を越る鷹金

初聞鷹

春霞雲井はるかに思ひこし秋かせ吹て鷹は葉にけり添のなくらん

初鷹連雲

元和三六廿五聖廟御法樂

秋風の尾上の雲のみたれかとみしや空めの初鷹の聲
 峯越るつばさばおなし空なから雲にわかるゝ初鷹の聲

暮天鷹

くれかゝる夕の雲の尾上よりかすあまたなる初鷹の聲

月前鷹

鳴かたに心をわけて月影にこゑなくまなる鷹の一聲
 くるかりも聲をほにあけて渡るなり月のみ船のおなし雲井に

鹿

私に云後水尾院御筆に此歌有之小山田のかり庵隔つる夕霧に守る人なしと鹿や鳴らん

聞鹿

夜もすから鹿のなくれをさそひきて袖に露けき野への秋風
なみたさへといめかたしや入方の月に鳴夜のさほしかのこゑ

暮山鹿

ゆふまくれ露の管をへたてにて尾上の鹿もこゝに鳴なり
小倉山夕の秋のさひしさに絶すや鹿の音にはなくらん
常盤山つれなき妻をとふ鹿のをのれ色なる夕暮の聲

夜鹿 元和三正八當座

おのか妻いつくにおりとゆふ月夜覺束なくも鹿の鳴らん
あり明のつれなき妻をとふとてや長き夜あかす鹿の鳴らん
梓鹿の思ひやおなし山鳥の尾上へたてゝもろこ点になく
かなしさの絶ぬ心に夜もすから袖に露けきさほしかのこゑ

野外鹿

春日野のしのもちすり鳴鹿やつれなき妻に思ひ亂るゝ
かすか野や忍ふのみたれ鳴鹿はつれなき妻をとひやわふらん
春日野やつれなき妻をとひ怪て忍ふのみたれ鹿の鳴らん
秋の野に妻とふ鹿の鳴聲につれなからぬは我なみたかな

夕蟲

ゆふ日影うつるもよほき草かくれもよほす露に蟲やなくらん

草蟲

かれゝの草れのむしのれもこゝも此比わふる霜夜をそ思ふ

野蟲

おなし野のをほな袖も松蟲に心あはせて人まねくらん

野外蟲

蟲のれに分こし野への草の原かへる道を誰にとはまし

蟲聲近枕

鳴むしの思ひや露にかよふらん今宵は草のまくらならへて
なきよるは夜の枕のきりゝす草葉の露の深さしられて
聞人の思ひはしるやなくむしに枕ならへておきあかす夜に

鈴蟲

籠の中に聞しにも似ぬすゝむしのをのかすむ野の夕暮の聲
ふりかたきこゑたにあるを鈴むしゝ人にやすくもなるゝ心よ

蟋蟀鳴我床

きりゝす霜の下葉を我床の秋のよさむにかへて鳴なり
夜さむをばなれもやわふる闇の内に枕ならへて鳴きりゝす

秋聲夜盡螢

明ぬれと猶こゑ絶ぬきりゝす長き夜あかす秋を恨みて
淺茅生やゆふへもまたぬ螢こゑもまたやなきあかさまし

朝霧

八幡山ふもとの里に霧はれて朝氣にきほふけふり立みゆ
さそひゆく山風はやき朝霧になくれてくたる淀の河舟
朝霧をはらふ南の山風に末よりはるゝよとの河水

野霧 一日千首

むさし野や行末遠くたつ霧になをしほれそふ旅衣かな

川霧

川かぜにふかれてのほる霧の跡にむらゝみえて落る山水

月

吹としもしらね草のかせみえて下葉につとふ露の月影
出ぬまに外山の雲をばらびつゝ月吹おくる峯の松かせ

月の歌として

わたつ海のかさしの浪のこす岩に光を花と月も散なり

待月

秋かせにほるへき雲を山のはのそなたにや待夜半の月影
まつほととの屋上にはるゝ雲間より光吹こす月の小夜風

不知夜月 慶安四十八公宴御當座

雨に見てきのふ恨しひかりまで空にまたるゝいさよひの月

九月十三夜

光ある今夜の月のことはにくもるうらみを忘れてやみむ
秋風も雲吹つくせ長月やこよひに殘る月のひかりな

野月

月見つゝ一夜は野邊にねもしなんおはな袖をひしき物にて
うかれゆく秋のよとのこも枕月にや露のやとりからまし

野月露涼

秋の野の露わけ衣かせふれて月影ながら萩か花すり

山月

秋かせに積らぬ雪をはらはせて山の端さゆる夜はの月哉
山の端の松をはなるゝ影みえて秋風高く月そすみ行

山家月

山住の心の塵もはらへとやいさめてすめる柴の戸の月

田家見月

月にのみおきあかしつゝ心とはもらぬ庵もる秋の小山田

河月 元和三八十五

河水の最中の秋の月そすみいけるをはなついなもあらはに

河月似水

河水に空ゆく月はすみなから中にへたてぬ氷をそみる

江月

秋かせの水のうき霧空晴て江のなみ遠くすめる月影

江月冷

^{冬なれや深}冬はいさ眞砂の霜を吹かせになみの水のすみの江の月

秋ふかみ浦かせえて住の江や見る影さむき波の上の月

湖上月明

所からひかりもやそふさゝ波や月もにほてるしかの辛崎
本間月 元和四十廿五月次會當座

影たかき屋上の松を出やらであらしにさはく秋の夜の月

あらと吹屋上の雲は出ながら外山の松そ月のくまなる

松間月

もりかぬる月影見せて雲よりと松にうれしき秋風を吹

松のみそ殘るくまなき秋の夜の雲なき峯に出る月影

庭上月

庭の面のひかりもそへと秋風や紅葉の木の間月に吹らん

禁中月

衛士のたく夜のけふりのおこたりも月にこはる秋の夜の空

雲の上やすみそめならぬ影にても袖にくもらむ秋のよの月

古寺殘月

鐘の音そひとり明ゆく月は猶とよらの寺の西にのこりて

深更見月

^{そのまゝに}くもるとなにかめ捨なほ雲もなき夜を中空の月はしらしな

とほし火をそむけて向ふ深き夜の哀は春の月なられ共
深山曉月

すむ庵の外山の峯の出かてにいとあけゆく有明の月
遠江曉月

此里は湖とをみあり明の月のゆくゑにとふ人もなし
月多秋友

おとこ山さかゆく末の秋來てもかはらぬ友と月も忘るな
月宿松

おとこ山尾上の松にやとらん千代の影すむ秋のよの月
月前松風

いとほしな雲霧ばらふ松風は月にしほしの木のまあり共
月前眺望

住の江や松陰となく漕舟のそなたに見るもあかぬ月哉
さそはるゝ心のはてよ月に見る雲の千里も限こそあれ

見るまゝに清見か波の月はれて浦かせ遠きみほの松原
月前鐘

またれこし山のは近き月影の残ん夜半を聞かれもうし
月をのみおしと思ふに聞初てしはしめうつる鐘の音哉

くまもなき眞砂の上に白妙の色をかさねる鶴の毛ころも
猶惜月

夜もすからこれのみ友とすむ月のかたふく月を侘つゝそみる
月やしるかたふく影を獨のみおしと思ふ夜の心つくしは

鳴

有明の月影さむき澤水に數かさわふるしきの羽かき
身の上にかそへもあへぬきひしさや長き夜あかぬ鳴の羽かき

寢覺鳴

さめて猶わすれぬ夢の哀さにかすかきそふる鳴の羽かき
長き夜に今いく度とかそへみむ夢のかすかくしきの羽かき
みし夢そやかて覺ゆる立鳴の羽音もさむき秋の枕に

重陽宴

九月九日

けふ毎の秋にかにうて萬代の霜をかされん白菊の花
君か代に淵とそならむ千々の秋は九かされの菊の上の露

放生會

かはらしな生けるをはなつことわきの絶ても神のめくみ計は
絶ぬとも生けるをはなつ此神のものとめくみは今もかはらし

野草欲枯 元和三二月

花はみなしほりはてつゝ置霜の下葉にうつる野への秋かな
なき初る野原の霜の秋風になひく淺茅か末そしほるゝ

色はみなうつる花野になく霜のとけてや秋の露もみえまし
野風 慶安三五十九御當座

露みえてはや袖すゝし吹風の西こそ秋のちかき嵯峨野は

閑居秋風

さひしさよ物によされぬ松の戸の心もしらぬ秋のゆふ風
人とはぬしつけき宿の秋よりや身にしむものと風は成らん

秋色

露しもの染る木末の秋をさへいそくに似るも色鳥の聲
ほともなく移にけりな色きのよみしの花野の露も山の木のほし

秋霜

秋にあへず枯ゆく庭の淺茅生にはやくの霜のをき所かな
色にみし野への千草の露のまにうつりもゆくか秋の初霜

秋野

秋もなをかせしつかなる武藏野はおほな木も亂れやはする

秋田 戊戌九月九日

色になる小田の穂むけの秋風になれもかたよる村雀かな

秋山田

賤の男かにきほふ秋のかまとさへ山田の稻の色にしられて

秋水

ふもすから誰ながむらん山水にすめる心を月にかはして
かきながすことのはならてみかは水秋の紅葉を波にうかへる

秋興

あがなくの色の手入も染なすやもみちのものとの秋のさかつき
入日をほもみちの陰にしたひつゝれもせて月をめつる秋かな

秋夜長

いかなををあかしかれまし此比の夜はたにあるを八月九月

菊

色もかも世にならへみむものそなき花なき比の秋の白菊
さき出る色もめつらし菊の花はや霜枯の草の筈に
野へにみし色の千草の花をけふ雲井の菊の上にみすらん

菊映月 以下九首御懷紙

やとりきて月のかつらもにほふ成ひかりな花の菊の筈に

菊帶露

時過てうつろふ色もむらさきの一もと菊の露に猶みん

菊似霜

開みうてかきなる花の下まではおかしとみるも霜のしら菊

山路菊

おのゝえのくちしやいつこ咲菊の花は千年もみむ山路哉

河邊菊

谷川や岩れを越るなみ分てなかれぬ末も菊の匂へる

寄菊契

かさねへき夜の契をわするなよ名にあふ菊のをしの姿に

寄菊恨

うつり行心の秋の菊の枝にかれぬ思ひの色ははかなし

寄菊旅

故里をわかれてにはふ菊ならは花にかりぬの

寄菊祝

鶴かめのよはひを菊につみかへてよそへん千世は君につきせし

菊露 一日千首

植てみる色もたはになく露の色をそへたる白菊の花

露光宿菊 元和六重陽

秋の露もあかすとやなく色まさる盛はありともけふの白菊
ゆふまくればしより外の光ありとみしや雲井の菊の上の露
あたにやば露のひかりもゆふつゝの名にあふ菊の花にきては

飯宮庭菊 御懷紙

千々の秋もそへなれてみむ紫の庭のまかきのしら菊の花
菊花映霜

をきまよふ色ともみえず紅に匂ふかうへの霜のしら菊
うつろふを今はさかりの秋の菊もとの色なば霜にゆつりて

籬菊 寛永十七七廿四

うつろはて幾世も匂へ菊のはな色は秋の霜にはありとも

芭菊如雪

九月の空に降てふ雪の色を芭の菊そ咲て匂へる

籬菊帯秋風 重陽公宴

うつり來てまかきの露に匂ふなる花の千草の野への秋風

菊契多秋

九重の芭にさくやぬれてほす露より外の千代の白菊

よゝの霜ほしの光をつむ菊やけに久かたの雲の上の秋

菊花久芳 重陽公宴

幾千代の霜をかされん雲の上や星をひかりに匂ふ白菊

にほひさへふりすもあるかな萬代の霜をかされんしら菊の花

雲の上に千代をかされて咲菊や花にふりせぬ匂ひ成らん

芭菊露芳 重陽

九重のまかきや山路ぬれてほす露も幾秋匂ふしら菊

月照菊花 重陽公宴御懷紙

月影のはしとみえても色そふや雪井の庭の花の白菊

題しらす

色そへうつろふからにけふのみと秋を思はぬしら菊の花

題しらす

程もなく暮行空のうすきりに松原遠き秋の海つら

浦秋夕

海原や波にうつろふ影見えて人目をくゐるあきの釣舟

掃衣

秋もはや更ゆく風の夜寒をやをなし心にころもうつらん

掃衣幽

秋風のひいきそへたるほと計うつ音すなり賤かさころも

秋かせや響そふらんみし夢を打おとろかす夜半の衣は

浅茅原すむ人あれや風にたくふひいき計に衣うつ聲

さめて後ほのかなりしもまたかにて夢路ゆるさすうつ衣裁

秋もはや更ゆく風の聲の中にきけば夜寒の衣うつなり

月前掃衣

里人の夜寒にいそくから衣まきかへす程や月をみるらん

月下掃衣

たかためのころもうちあかすらん里人のころも夜寒の影にうらみて

紅葉

いそかるい色の千入を思ふにはもみちにあさき秋の露しも

春秋のいつれかいかになかめましおなし櫻の花よ紅葉よ

染つくす千入の後の色もうしさそふ風まつ木々のもみちは

紅葉一樹

うつろふはなへての秋を一本まついかなる露のわきて染らん

なへてなくよもの草木の露霜をこの一もの色に出ぬる

此趣向とはつゝきあるやうに覺申候如何

置露や心とめて一本まつしくれもまたぬ色を染けん

紅葉如錦

あかすなな色こき花を見し春のにしきに増る秋の紅葉は

秋不留

限りなくみくりあふへきけふなればとまらぬ秋を何か惜まん

秋欲暮

長月や有明の月の山おるしに空にも秋の色はすくなき

九月晝

もと結の霜のかたみもおもなれぬ幾年秋のけふの別に

冬部

初冬

いつもきく軒ばの松に吹そへてむへ山かせも冬そはけしき

初冬時雨

降にける秋のしくれもけふよりや冬立空にめくり來にけり

冬天象勝

此ころのはとなき空にくる糸のなかきをそへむ目さへまたれて

冬地儀持

かけすてし風のしからみ跡みえてもみち岩行山川の水

冬植物勝

神無月けふかきつむることのばい散うせぬ松の代々の種かも

時雨 元和四二廿五内御法樂

幾度かむすひかふらん定なき時雨にましろ冬の夜むらぬ夜半の静の聲

閑度におとろかざる夢路のみいかにさためてさそふ時雨そ

神無月絶すしくれやかゝらんさためなき世をなけく袂に

元和四二月大袖の上に今やかゝらん神無月いつも時雨のふるきことのほ

松のはのかばらぬ色はつれなくてしくれにぬるゝ夕日影哉

もみちはゝ残りぬ山の村しくれはれて色こきゆふ日影かな

峯時雨

よそにのみ降とはみえず葛城やしくれてかゝる峯のうき雲

半天に過ぬとみつるうき雲ももとの尾上に時雨來にけり

時雨雲

うちつけにましらぬ雪もみる計山のはさむきゆふ時雨哉

落葉

ふるまいに山風さむし時雨ゆく雲のへかしや雪け成らん
染つくす時雨をいくる木末より風さへぬれて散木の葉哉

橋落葉

埋もれて絶まなきしもあやうきは木の葉の下に朽る板はし
ちりにけり空にみちぬる夜の霜染るもみちの橋とみるまで

殘菊

ひとつ色を霜にゆつりて冬枯の筥にうつる白菊の花
冬枯の草の中にも秋の色ありとやこゝに匂ふ白菊
霜もなを心なきてや秋の色をまかきにのこす花の白菊
菊ひとり殘るもあはれ秋の色はうつるひはつる草の筥に

谷殘菊

谷陰や冬まで殘るしら菊はちらて八千代の霜を待らん
櫛葉の色なやならふ霜八度冬もかれせぬ谷のしら菊

枯野

みしや夢草葉のこらす霜むすふ手枕の野の秋の面影

冬風 元和七十竹門主

落はする枝には絶て松にのみつれなく殘るかぜの音かな
吹しほる秋の草木の色よりも冬そあらしの音はけしき

寒草

冬かれて殘る末はのうちなひくおはなに寒きかせの色哉

庭寒草

枯そめし人めおもへは庭の面にはやくの霜はあさき色哉

我宿のたのむ陰なる蓬生も霜のかきほはゆふかひもなし
名所寒草

篠上説

降くるはそのまい散て篠のはにたふるはふそのあられ成けり
ふりくるはちるや説のたまさかに外よりたまる野への笹原
きいなれし小篠の庵のそよ更に音も篠の冬そはけしき

柴叢

椎柴のともにくたけて散ばかりうらはもしろく散亂て

水

散しきてしけき木のはに行なやむ石間の水やまつ氷らん
ふくる夜の空の空よりおちて水よりもさむき氷をししく嵐哉

掛樋水 一日千首

山河のかけひの水の音せぬは木の葉に又や氷しつらん

雪

吹おるす風に深谷は埋もれて峯もたいらにつもる雪哉
山の端は雪の色より明そめて出るまおそき朝日影かな
くれ竹やうつもれぬらんさふ風のしつまる聲にかはる雪折
よもすから幾重か埋む吳竹に積りしまては雪折の聲

八十賀に雪

松か枝に八十年つもる雪の色もなを十かへりの花とみゆらん
雪の中に

つもりこし八十年を猶も十かへりの花にみせたる松の白雪

竹屋宰相光長卿祖母九十賀すいめられしに雪を

九十なを十かへりを松のはな今よりみせてつもる雪哉

庭初雪

ふりそひて道も絶なば春秋なとはぬ恨や雪にとちめん
ふり初てやかつてつもりは春秋もとはぬ恨や雪にとちめん
降そむるほとを過さは春秋なとはぬ恨や雪に積らん
まつ人のつれなく過し春秋も更に忘るゝ庭のはつ雪
つもれ雪ふり初るよりこの人を心のまつにうつもるゝまで

夜雪

め^{のまへに}深
今も猶ふるかとみれば在明のひかりそへたる庭の白雪
宵の雨は降ともいさや白雪の更てつもれる色を見すらん

深夜雪

東雲はまた明やらて降雪の光にしらむれやのひま哉
望山雪 元和三霜廿四公安御月次

さらに今うこきや出ると計に湖の松につゝく山の端
くもりにし日影の後やはれぬらん暮てさやけき雪の山のは
積雪

つもりそふほとはみえ^{しら}れと降雪に積みしかき軒の山松
遠村雪

山本の軒はの梢おもるとてはらはいよそにおしき雪哉
社頭雪 元和二四廿四竹門主

深きよの雪にや緋の玉垣の神のみまへにあふ人もなし
松雪

ふくかせやななはらふらん降雪のうつみもはてぬ庭の松かえ
雪川松

つもりけりよのまの雪の朝朗松をあらしのよそに吹迄

樵路雪

山人のやすむにつけて雪をもるたさいの道や^{ふり積る雪のたさいの道やくるしき深}くくろくしき

同じ題 大山當座

柴人の歸る 〔はつもしりにたとらぬ〕の道やくろくしき

雪如花 元和二霜廿五公安御月次

枝ながら消んもかなし木々の雪はなばうつろふ色もみえしを
散まかふ色かと見ればやかつてまた枝に花さく木々の白雪
雪瀑泉飛瀾日寒

山かせのせき入ておとす瀧津せや深谷にふかき雪の白波
やまかせを水上にして降雪の瀧なみさむし谷の下陰

千鳥 元和五十六内御月次

こといへよおなしうきれの小夜千鳥浦なれてたに悲しかるらん
うらやましもろこゑになく小夜千鳥我はうきれの友なしにして
小夜千鳥われはうきれの友なしにうらやましきも諸こゑになく
我も今うきれの千鳥なれてたに浦かなしきを諸聲になく
浦かせに吹かへすらん立千鳥おなし所にこゑの明ゆく
夕千鳥

夕されはしほかせ寒き真砂地になみよりさきに立千鳥哉
浦風や猶さむからし夕汐のひかたの千鳥なみになくなり
鷹狩

夕まくれうち散雪もはし鷹の毛白にまかふ野への遠方
かり衣今一よりとしたふまにはやくれ深き鳥のおち草

寒閑食

さむき夜もうすきなからもかされてや衾となれば聞の手枕

神樂 元和四霜十九月次會

九重にをきそふ雷の柳葉を猶おりかへすこゑもかはらぬ
もる人なもよほす夜半や更ぬらん今そ明行朝倉のこゑ
更行は水なき空も水かと雲井にさゆるさいなみの聲

炭竈烟 一日千首

すみかまやたつるげふりも此ころは雪にすくなき小野の山里

おなし題 元和二四廿五竹門主

さそひくる峯のあらしに炭竈のけふりは雪の下にくゆりて

寒々て雪吹おるす山かせにけふりもしろき小野のすみかま

名所炭竈

冬くれば小野のすみ^{かま}やきをのれまつさむさいとはぬ^{もしら}烟立なり

雪中早梅

降雪のおよはぬ枝や春またてほゝゑむ梅の匂ひ成らん
はるまたてほゝゑむ梅の花の香に深きおよはぬ枝の白雪
年の中に春はありとや匂らん雪の下なる庭^{はら}の梅か香

歳欲暮

承應元年此歌被詠けるに同二年廿九日に六十六歳
にて身まかり給ふなれば此歌辭世となるとな
殘るとてたのむ日數もあり明の影のうちなるとしのくれかな

年欲已暮

春秋をあたにおくりしくやしさもけふとりそへて暮る年哉

惜歳暮

いかにせんおしみなれてもいたつらに行ては來ぬる年の名殘を

市歳暮

慶安三六廿五聖廟御法樂當座

社頭雪 竹門主

くる春に心をかへて市人もおしまん年のくれいそくらし
まことあるを守る北野の神かきに誰いつにりの雪のしらゆふ

戀部

初戀

まよふへき戀路のすへをいかにも我またしらて思ひ入哉
ふかくならん行末しらぬ涙のみけふより袖にかゝる思ひよ

洩始戀

幾年なつゝむにあまる思ひさへたうちつけに人は聞らん
思ふなよしのふにあまることのはにいばぬはいふに増る習を

忍戀 元和四霜十九月次會

思ふその人はかりにもみえもせよしのふ心のおくのみたれも
あまるなもななせきかへす心さへ今幾度によはりはてまし
戀すてふ我名やもれん中々につゝみあまるをなけく氣色に

忍久戀

たへかぬる戀にぞしるつゝみこし此年月にあさき思ひな
つゝみこし此とし月のかひもあらし心ひとつに思ひあまりて
年を経てつゝむ涙に袖くちて身にあまる戀の限りをぞしる

忍傳書戀

人めのみのふの浦のもしは草なをかきやらん波のまもかな

契戀 元和四霜十九月次會

忘るゝもうれしからましたのむるをちかき日數に思ひまかへは
たのむには又もとほるや言の葉の我おもふ方に聞もかへてむ
契をば我中川にかけ初つあふ瀬の涙よ立もかへるな
ちきりなく日數の後やしられまし定めなき世に残る心は
行末の遠き契もよしや身の老は命もかきりある世に

朝契戀

けさのまの心よ末のゆふへまで頼むことはの人にかはるな
行末をたのめてかへる別にもれての朝氣の名残をそ思ふ

契經年戀 元和四卯九月次會

とし經とも戀りはせしつ言の葉にかゝるもはかな露の玉の緒
たひやくに忘れはせしと契しもおほつかなきは年そ經にける

契愛戀

かはるとも我こそおもへはしめより人はたのめぬ心成けん
かはりゆく今ぞくやしき言の葉のなけなるものを深く頼て

久戀 元和三正十八當座

何事をなしたのむ身そつれなきは見はつ計の年も經にけり
絶ぬへき命といひし年月にいけらぬ身と思ひなすらん
身をこほる思ひもつらし水かきの久しきほとに物忘れせて

不逢戀

此まゝにたも戀しなん思はしとおもふものから猶ぞかなしき
つれなくて終にかちぬと思はんも弱りのみゆく身にはしらしを
つれなきのむくひあらはと戀しなむ身こそ思へば人につられ
戀しなん後も心やといまりてつれなき人にものをおもはん
つれなきのあまりにねたき氣色よりまけし心も人にそひぬる
難面も今ざりともと頼こし月日はかなく過るかなしき
身ひとつになげくのみかは戀しなん世々の報ひの人にさへうき
おふと云なげきも更にあしかれと思はぬ人の上になしき
きかはうしく戀しなむ我ならぬ人には人のつれなからしを
つれなきの限を人にみはてんと思ふにも似ず身のよはるらん

先の世のしらるゝのみやつれなきにいまさへつらき身の契哉
詞和不逢戀

言のはをなひく計といひよれば心のおくのありてみえける
いひよればつらき心に言の葉はなげなる物をしらてくやしき
言の葉はなひくとみえてなふ竹のおるへくもあらぬ人の心よ
何とまたいひもおるへき言の葉はつらからぬしもつらき心を

逢戀

とけ初る夜半のしたひも今宵よりなき契に結びかへてよ
つらかりし筋にはあらて逢夜はい又いひしらぬ思ひもそいふ
逢ことをしらてやいまんつらかりしその夜にかなふ心なりせば
俄逢戀 元和三五十二當座
わするなふたい今のまの逢こともおもへばさきの代々の契を

白地逢戀

忘るなよ夜なもとをさぬ蘆のやのかりそめふしの契なりとも

祈戀 元和九二十八公宴御月次拜題

あちきなく契たにしゐて祈るてふいつれの神か我にうからめ
わかためや終に驗のみえさらんいつれの神に祈りかけても
人よりも神やうからんかけて祈る中につれなき心みえなは
つれもなき人になひくな祈ること耳かたからぬ社成とも
いのりてもななをかひなくはつれなきのつらき恨や神に残らん
祈るにも猶つれなくは人よりもつらきうらみや神に残らん
くるして神もやうとむつれなきをあまりわりなく祈る心を
祈るてふしるしまつまに年も経ぬ神たにかけよ人の哀な
たのむにも猶あふことはかたそきの行あひ違き神のしるしか

いのるにもかひなかるへき契かとしらはやせめて神の心を
祈るてふしるしもそなき我中は神のいさむる道とみるまで

祈逢戀

立かへるつれなきならば中々にげふのしるしや神にうらみん
あふことをけふの後瀬も初世川はやきしるしの末にたのまん
逢ことのしるしありける神をこそ此ゆく末もかけて頼まむ

待戀

あふにとも更てはあらし今はたい中々あすのくれをまたはや
待人にかこつけしきの月もいる眞木の戸口やよそにみえまし
山のはの月より後もつれなくはいかにいひてか人をまたまし
深更待戀

徒にあけなんもうし小夜更て今はまたしと思ひやみなは
おろかさを明てやくひん更ぬればよしや今はとまたれすもなし
とひもこはおろかに人や思はんと更なる夜しもそいとまたるれ
待空戀

さりともと待宵すくる鐘の音に思ひとちむるほとそかなしき

恨戀

たのめつゝはりし暮は見しものを夜深くいそく心さへうき
名残あれや明しつゝも夏の夜はほとなき空をいそく別に
またれつゝ更しつゝさも明ぬゑなやかて立そふ衣々の空
又いつとせめてたのめん言の葉も涙かきくらす衣々の空
恨別戀

引とめてなをそうらむる暮にもといはぬ別の心つよさを
後朝戀

消かへるけさの思ひに分てこしわか道芝の露をうらやむ
別こし袖の中なるたましひは今もまた寝の床に歸らし
立かへりとはいや今朝の衣々をうつゝなり共思ひあはせん

逢不遇戀

はかなくそあひみんまてと頼れる猶のこりある人のつらさを
つれなきもなをたのますや逢みしは情をすてぬ人に見るより
あひみしなくやしと人やおもふらん今のつらさの昔にも似ぬ
思ひきやあひみて後のつれなきにもとの歎きを忍ふへしとは
逢ふ事にかへさりし身のつれなきに有てうき世の果をみる哉

恨戀

恨るに又もれたしやいふことをさならぬすちにことばりもせて
ことばりをきくもつくさは流石またおもひしるへき中の恨を
恨るにことばりしらぬ心とはみえぬ物かられたきさまなる
つゝみある恨をしらて等閑の恨を人にいはてくやしき
いかてかは思ひもしらんうきふしのひとつふたつと積る恨を

恨心中戀 元和三三五

身の上にしるもかなしき契かなあらし吹そふ秋のこゝろを
よきふしと思ひなりなはと計に恨をかへず身さへはつかし

戀不依人

陽明院御當座 元和三五十二御當座一説慶安十九九四於

馴戀

戀しさもつらさも流石まさるやと朝夕なれてみぬわさも哉
よのつれのつらさはなるゝ朝夕に心つよさやしゐてくはゆる
朝夕のへたてもあらは中々につらき心のおくもみえしを

増戀 元和三二廿五於崇光聖廟御法樂

戀しさの限あるやと思ふまの月日にそへてやるかたもなし

難忘戀 元和三二廿五聖廟御法樂

うきふしと情をもみしこし方はたいめのまへの傍にして
うれしさも又つらかりと傍も身をはなれたる時のまもなし

變戀

うつり行人の心は我ためにくる秋としもわきてかなしき
うき人に心木の葉の秋の色に思ひみたるゝ我をかなしき

恥身戀 元和四三九月次當座

見まうき我身のほと思ふさへいとくろしき戀の要なる
われたにもつゝましき身を残りなく心淺くは何にみえけん

稀戀

と絶こし中の日數をかそへてもきためなき身はいかゝ頼ん
とたえこし中の月日にこりもせてゆふくれ毎に何またるらん
はかなしや千夜に一よのあふ事に積る恨をかへずこゝろよ
きためなき中の日數はかそへてもいかにまちみん中のと絶そ
絶なはとおもふ計に隔たれる人の心にまかせてそみる

返書戀 元和四三九月次當座

つれもなき言のはよりもつらさこそ手ふれぬ文に多くせひけれ
かへすをもみつと戀まん玉草を人たかへかとおほめきもせば

白地戀

行人を令しはしともいひ侘ぬあまり程なき折のつらさに
かりそめに立かへりぬるあた波のよせし名残の袖はかはかす

顯悔戀 慶安三三廿二永無瀬宮御法樂

猶しはしぜかまし袖のしからみにあまる涙を思はさりけん

非心離戀

身の上に今そかなしき出ていなば誰かといひし人の別も
身のために猶うらめしきつらきその心にあらぬ中の別も

絶戀

絶々にかれはてさりしつらさへおもひしものを申川の水

秋絶戀

またすして絶んものかはたえはて頼みなき身の秋の夕暮
かれにけり恨しのへの眞葛原あきかせまてを身の契にて

三句猶可有之候

顯絶戀

なへて世に洩しあた名を思ふさへ憂きにつらさをそへて絶にし
もれしさへなげくにあかぬ身の程なとりかさねても絶る契よ

旅戀

鳥か音におとろかされて草まくらあふ夜の夢も今を別るい

借人名戀

我れかとも思ひもよらはかひもなし名計りものと人にしられし
つれなきはうき身からかと我ならぬ名にいひかへて心をほみる

春尋戀

こたへぬに道もまとひぬ大かたにかずみし宿の春の夕へも
かすむうちに宿こそわかれ俤はたいこいにしも見る計なる

夏戀

かことかと又は疑ふ五月雨のいみおく迄は思ひはれしを

疑眞偽戀

言の葉をいひしまいにや頼まいし世のいつはりば人に任せて

隱在所戀

今はたいまことに望の子なりともおしへよ里のしるへ計は

戀扇

手にならば中の扇のそれらてかはす契のなとなかるらん
いとりのみれやのあふきの風もうし我身を秋の中の契に

戀枕

枕とて草引むすふ程たにもかはす夜もなき身の契かな
枕たにつれなき人に告もせよ涙せきあへぬ夜はのけしきを

戀鏡

契りさへよそにうつりし鏡には我俤もなみたへたてい

戀面影 元和四十廿九月次會當座

つらきふしうき折ふしの戀しきの外にはみゆる俤もなし
いつくにもうきは身にそふ俤を忘れぬ人の思ひ出して

つれなきな思ひ出ても戀しさのうきにまきれぬ面影そ立
像想こゝろに行てみせもせは我おもかけの人に怪しき

思

とし經てもなにをかに染まざる思ひの色のおくものにせん

寄日戀

限りあれば傾ふきやらぬ春の日もくるい習ひを人そつれなき
もの思ひよ何にまきれん獨のみはるの日永き窓にむかひて

ほすひまも涙かきくらす心には日影も袖にたのむ物かは

寄月戀

くもるなまたのめぬ夜半のなくさめに忘れて待ん山の端の月
物思へば空やあらぬとたとる迄おもかはりする袖の月影

曇なふ忘れて待んとひこむとたのめもおかぬ夜はの月影
あかるい習ひもありとみる月の人はさそはぬ傷そうき

寄月待戀

かこつけし月はつれなき空ならて人ばかりせす更る夜半哉

寄春月戀

我袖にやつすともみ^の物思ふなみなならてもかすむ夜^のの月

寄風戀

わきてしも身にしむ風は秋ならて獨める夜の床のものなる
なのれのみよはらぬ聲を聞もうしとふ程過る夜はの松風

寄雨戀

絶侘めとはぬ身をしる袖の雨はさかやとりたに思ひかければ

寄烟戀

まかふへきよその煙のか^もひもあらし是そ思ひの末としられは
戀しなむ後のけふりにそれと見よ終にしられぬ中の思ひは

寄雪戀

元和二霜廿四公宴御月次

積りそふ思ひやしらむ行かふ心のあとの雪にみえなは
通路に雪にそ絶るふむ跡をおしむにはあらていとふ心に

寄花戀

いさ櫻われもいとひてつれなさに幾春人のうきめ見るらん
うつり行人のころのはなは猶後の春まつなくさめとなし

寄草戀

元和三十七廿五首當座

生出る種はかはらぬ草の名のしのふわすれそ人^はなわきける
萌出る今たにかゝる思ひ草まして茂らん末いかいせん

寄山戀

かなひしや人の心の岩木山絶ぬ思ひをあはれともみし
うきなき心もうしやいふ事は耳無山のきかすかほにて
情しらぬ心をみれば山の名の岩木はいはし人のつれなき

寄野戀

萌そむる入野のすいき手枕にむすふ契をいつとたのまん

うちほらふ露しけくとも枕かはす淀野の床にたのきも
限なき人の心をおもふには猶末ちかきむさしのいはら

寄杜戀

いつよりか我名はよそに杜の露はてはなけきの身をしほらん

寄沼戀 一日千首

たのむそよぞのかねことの忘れすは淺澤沼のあさき心は

寄里戀

つれなきのつらき詞の里の名をあひみてのちの身に頼まはや
思ひある身をかくすへき宿もやと忍ぶの里にもとめてもみん
教すてし道にまよはし蟹の住里のしるへな先やうらみん

寄河戀

わか身にはうき瀬ばかりの飛鳥川かはる淵ともいかに頼まん

寄海戀 慶安五四廿

枕うく涙もかなし和田海とあれにし床の夜半の獨ぬ

寄嶋戀

頼めなきし契をまつか浦嶋に心ある海人のたよりたにあれ

寄桂戀 一日千首

身にそひて殘るもつらし待てみん佛のみのうらの初嶋

寄桂戀 一日千首

手にとらぬ月のかつらのたくひなる人の心をなとしたふらん

寄檜戀 一日千首

秋風のつらき心になら柴やしはし計のおとつれも哉

寄桐戀 一日千首

人心つれなきまゝに桐の葉のもろくもおつる我涙かな

寄竹戀

つれなきの色^{は落}そがばらぬ^{て同}呉竹のうきふしいけき人の心は^{も同}

獨れのうきふしならてくれ竹の一よばかりの逢こともかな

寄鳥戀

まれに來てふすかとすれば鳴聲にとりあへず明る短夜もうし

なへて世の別れにも似ず山鳥の尾上へたてし夜はの歸るさ

我ためはかそへてもうき敷なれやこぬ夜計の鳴の羽かき

寄門戀 竹門主御法樂

つらきかな人の心は八重葎門させりとほみえぬものから

とかむるはくるしき妹か門のいぬなれよ幾度行かへるらん^{りつ、音}

寄蓬戀

はらひ侘ぬ袖の湊のとまり母背の掣も夜半の涙も

寄菰戀

おもへ人太山の苔の露けさをうけしく袖の夜はの小菰

寄衣戀

から衣あふ夜やもれん嬉しさをついみならばぬ袖にあまらば

寄絲戀

年経てもなをあふことはかた絲の絶んものかはよき玉のな^{ふ落}

寄遊女戀

船のうちやうきれ計の契たにつらきか中にいかで頼まん

あふには身をも

いかにせんあふには身をも惜まれとつらさに絶め命なりせば

戀の歌の中に

猶ぞうき我つれなきになきしとやしゐて人めをついみ願なる

一寸ちに我つらさにはなきしとやわりなくついむ人め成らん

うらむるを我ことはりに聞かせよたかためならぬつらき心に

たのむべきことはなからいつばりのある世に残る我心かな

偏のある世はしりぬしかりとてそむかれなく頼む言の葉

消れたしいふの山の峰の雲かゝる思ひのあともなきまで

寄岡戀

色に出て今より戀んさのみやは忍ふの岡の忍ひはつへき

朝戀 御短冊

袖よいかにくるあしたの道芝の露も日影を待ぬものかは

雜部

江山春興多

伊駒山はなのはやしも難波江の春をへたての浪そかすめる

遠山如畫圖

色とらぬたゝ一筆のすみかきを都の遠にかすみ峰かな

曉更鷄 慶安四十四御當座

鳥の音はなをそまたるい心さへゆるふねむりも老の枕に

雲

へたてある山とみえしは白雲の八重にかさなる高根成けり
山のはにしはこと見ても吹かせにやかて跡なき峰の白雲

薄暮雲 御月次

くれにけり山より遠のゆふ日影雲にうつりしあとの光も

庭苔

まれにとひし人の跡さへ庭の面は幾重の苔の下に埋れて
山かせの吹につけつゝおのつから苔の塵なき庭の面かな

庭上松

枝かはすかたへの木々の霜の後も庭にふりたる松の色哉

浦松

浪はまた遠さかるなり志賀の浦やおとなは松の枝に残して

樹老五株松

ふりにけり木高き松の立並かけも五葉の色はかはらて

浦鷄

袖くたす海人にかさばや浦波になをしはなれぬ鷄の毛衣

鶴立淵

むれ来てそ水なき空の友鶴も河邊の浪の色をそへける

鶴砌馴

君かため久しき跡は九重の眞砂を數にたつやとむらん

河邊鳥

すみ鳥もおもひやすらん河水にいけるをはなつ神のめくみな

すみ鳥もうれしと思ふ飛鳥川七瀬のよとの浪絶ぬ世を

水郷鷺

淀川や底すみ瀬々に立鷺はなのか影をや友と見るらん

寄木雜

たれか世にしらぬ谷を心にてかけの古木の身をいくるらん

市商客

うる事のしげきをそしる商人の造そへたる市のかりやに

うることを市にあらそふ心よりまついそき立よその商人

山家

心には身をまかせたる心しも身にしたかはぬ山のおくかな

山家夕

すみつかぬ我こゝろより夕暮のあはれを山にかこつ庵かな

山中瀧

涼しさのいつれたかはむ山かせも袖におちくる瀧のしら玉

世の塵をあらばん水やおく深き山の岩れに落る瀧つ瀬

閑居燈

つくぐとわかふ更ぬるとほし火を今ははれられぬ友とかいけん

山竹

年も經ぬ直き心はしらねとも我住山は竹を友にて
としを経て我住山のくれ竹はうきふしけき友とこそみれ
樵路雨

降雨にくれぬさきにといそくらし眞柴すくなく歸る山人

樵夫夕飯

山上樵夫依雨晴檐薪踏險里千程、黄昏待月欲飯否、隔谷
遙聽一笛聲、

山人のおもき薪の道とをみいそくとするも暮る空哉

古寺鐘

初瀬山みねのかすみはつゝめともよそにもれくる入相の鐘
かはらのみわつかにくれて鐘ひく尾上の寺の暮やさひしき

曉鐘

初瀬山おのへのあらし音さえて霜夜にかへる曉のかね
春もはやみしかきはとの空なれや夜深き鐘の聲そ明行
在明の月は霞のうちなからひとりさやけき鐘のこゑかな

野篠

春きてもかすまぬ空の風おちて猶霜さやく野への篠原
もえ出る草の縁におなし野のをさゝは春の色をすくなき

浪洗石苔

池の面の岩の蓐なは波のあやなたち^にかされたる衣とそみる

海路

船人に身をまかせ來ぬけふ幾日しらぬ浪路の末を頼みて
舟のうちに幾日なれても聞たひにこゝろさはかす浪風の音

渡船

おのかわきななうき船の渡し守人のゆきゝはやすき道にも
漁舟火

漕出て釣するならし蟹小舟沖にたゆたふ篝火の影

夕眺望

日のおつる山の麓は暮る色にむかひの峰の影そ消行く
海この山よりくれてなかがめやる心もちかき波にうつりぬ

湖水眺望

にはの海や震はれ行波の上に遠さかる船もみえて數そふ
砂はれ水みとりなる浦の名も浪に立そふ志賀の辛崎

名所松

仕へきてとしも經にけり高砂の松のおもはん身をは忘れて

ことのはも代々に積りの浦風に滄色そふやすみよしの松
いくよゝかおなしなかめの色そへてかけ高砂の松の春風

ことのはも散うせぬ松をしるへにて吹つたへ^もな^{つた}和歌の浦風

名所橋

明る夜も春はわかれし岩橋をかすみにわたせ葛城の神
おもひしる心の道にたれかけてよなう治川の橋は絶せぬ

名所瀧

あらし山峰ののみちやかけつらんとなせの瀧の風のしからみ
春くればまた山姫のたちぬはぬ霞のころもさらす瀧津せ

名所浦 寛永六三廿四内御月次

長閑なる浪に此世をうみ渡るものともみえず三津の浦舟
櫻あさのあふのうらなし春は又花のみるめを蟹や刈らん

ふく風も春には名古の浦浪によるてふ貝も今はひろはん

名所島

橋姫のかすみを筆のすみかきにうつすや浪の繪島成らん
心ある蜃のしほやく煙かとかすみそはてぬ松か浦島

名所渡

天の川としに一度あふ春の花にもとをき渡りとそ思ふ
なかし日は幾度人を見なれさほわたす隙なき淀の川長

音羽河 春

音羽川水ふきとく山風に岩浪はやく春や越らん

大井河 夏

大井河入江の松のしたすいみ今より夏の影にならん

三室山 秋

おく霜はよそのもみちの上に見せて三室の櫛色もかはらす
紅葉はの色染つくぜ三室山時雨まつ間に嵐こそ立て

相坂關

木かくれの世にあふ坂の石清水あふく陰なる名なも頼まん

交野 冬

夜もすから霜こそむすへとけてみる夢にかた野の笹の枕に
よゝを經しかりの使の跡ふりてかたのいみ雪つもる色かな
世々かけてかた野のみ雪降にけりかりの使の跡もなきまで

鏡山 冬

散かいるほとこそくもれ鏡山はれてきやけき雪の花にも
手にとりしこれや神代の鏡山雪より出る月よみの影

筑波山 戀

入そめてまよふもかなし筑波山人のこゝろのこのもかのもとに

鳥羽 雜

松か枝にまたも降つけ山城の鳥羽にみるともあかし雪哉
朝な夕な松のけふりも立そひぬ鳥羽田の里の民の籠は

常盤森

月もなを秋とほみえて山城の常盤の杜の時雨するよは

伏見里

敷わびて夢も幾夜か絶ぬらん獨ふし見の里のさむしろ

富士山

不似のねはたい雲風を姿にてもとみし山の傍もなし
時のまにたな引消てふしのねは雲こそ山の姿なりけれ

宮城野

みやき野の木の下草におちそじて中々かるき萩の上の露

述懷

終にさてなす事なくは身のうさを歎くにあかす世をやつくさん
後の世を思へやたれもある程はかすならぬ身のかすにいと

曉述懷

山深く今はきくへき鳥の音をおなしね聲に待もつれなし

獨述懷

身のうさの同したくじの人とあらは問ひあはせても慰みなまし
水無瀬氏成卿追善にすゝめられし獨述懷

寄雪述懷

誰かする友におくれて和歌の浦になくはかなしき田鶴の心は

寄雪述懷

しるしなく跡にそまよふ古き世の文見る道をしらぬ心は

あつめぬを身のうらみにて今はたゞ雪にそとつる窓の明暮
年月はあたにつもれる白雪の我身世に經るなくひ計りに

懷舊 元和五十廿五

かくなからにこりはつへき末の世にふたいひすまん山水もかな
こし方は何ばかりなる思ひ出のなき身なりとて忍はすもなし
言の葉をかばす計りになき人のおもかけむかふともし火の本
老はてん末もかくこそ時のまに三十過にし身をおもふには
我身には何ばかりなる思ひ出のありとてしのふむかし成らん
その折と定かにはあらでいつそやも見しかと思ふ事を床しき

懷舊淚 元和三十七廿五首當座

なき人のかはらぬ跡を水莖にふるき涙もなかれそふなり
垂乳ねのおやのいさめの數々にそむく我身を涙せきあへぬ

思往事

しのふ世や心に深きこしかたのたゞ目のまへにうかふ涙は
思ひ出の有身にはあらでこし方のしのふ心のくせもわりなし
年月をあまた經にける思ひこし我あらましの末はとならて

逢友述志

いひ出る友そしたしき言の葉をすつへくもあらぬ心々に
言出は今しかばらし諸共にまじはる中の深き誠を

夜淚餘袖

うれしきもうさも寢覺の思ひ出にびとつ涙を袖にせきあへぬ
夢 元和二四廿五竹門主

思ふ事心になかふ夢覺てうつゝにつらき風の音かな
何ことのすちともわかつて覺にけり枕の夢の行ふゆかしき

永き夜に残るもあるをおもふにはいかに見えてし夢の行ふを
見はつるを思へばあやし春の夜の夢ばかりなる夢の枕に
萬事無心一釣竿

釣の絲の餌をかくばしみよる魚やおもふか税の心やはある
とにかくにうつる心よ釣の絲のたゞ一すちに世をは思はて
青燈歌々思悠々

いかになな身をしまれとて灯のさやかにむかふ人の備
公の御心に不叶事ありて下向の刻久しく武城にとゝめら
れて寛永寺にうちこもりて年經し秋の比邊房卿の方より

『さそひ得の草の枕を月もさそ出てや恨む武藏野の原』

返し仙洞より思ひあればなくさめ兼つ武藏野に蜷捨山
の月やすむらん』との御返しとも云々

行方に身をばさそはて夜な／＼の袖の露とふ武藏野の月

此歌御感ありて歸京の事を許し給ふとなり

源忠晴(松平伊賀守)百首の歌讀で見せ給ふける奥に書付
ける

かさつむるかすの玉もに心なくかくるやあたの和歌の浦浪

藤原三友齋藤攝津守五十首歌讀で見せられけるを返すと
て奥に書付られける

むさし野の露やいかなる秋またてみつる言葉の花の色々

藤原正盛(中根壹岐守)富士の繪の讀に
思ひあへず半ばの雲を降と見て山を忘るゝ雪の富士の根

或人亦富士のゑの讀をのそまれしに
ふしの根は雪の光に明そめて麗の雲に残る夜半哉

同

船人に心をかして不似の根の雪に漕出る田子の浦浜

清見瀉書し繪に

清見瀉岩うつ波に聲そへて磯つたひ行山の松風

雪の山水書しゑに

梢をも手にとるばかりまぢかきや雪にはれたる遠の山本

山紅葉書し繪に

その色としくる、山はわかれとも去年の日影に染る紅葉は

曙の山水書しゑに

近くなる程はみえれと明そむる浪にそうかふ沖の友船

薄雪の繪に

おく露をいはなかつたのおほひてや菊はうつろふ色のなからん

竹菊書し繪に

咲初て神なき時や千尋ある陰をためしに匂ふ菊かも

竹の繪に

よといもに落葉は絶ぬ吳竹のなとかは秋の色にもれけん

定家卿影に

世にしのふ名をば残して小倉山ふるき軒はの松のことは

攝津守藤貞まうて来て「しるへせよ代々にかはらぬ跡つ

きてけふ入初る敷島の道」返し

代々の道つきてをならへしき島の道守るてふ神につかへて

内大臣に任せられし時林道春詩を送りし和韻に

かけ高き星の位やおろかなる身にはうかへる雲の中空

おなし時林春齋詩の和韻

出る日の影なひくにとあふくなりひかりあまれき關の東を

慈鎮和尚

常に思ふ心のまゝによしなやとかされしつまば思ひかへさし

あかためし 元和二極月廿四竹門主

あしたうつかたへより先たねかして恵む頃しも賤かいとなき

黄 元和二三廿五

風ふけば千々のこかねを我宿の庭に散しく山吹の花

誠

朝夕にいとなき螢はしほよりも我いとなみながらことと思ふ

わらはやみに神事おこたりし八月十五日に

男山ことしの秋はたれこめて心計を神にたむくる

高雄にて

ちればうき散ぬばしつむ紅葉はのかけや高雄の山川の水

別 元和四卯九月次會

ゆくを猶見をくるかたにかへりみる人よ心ないばてしらす

かたしん露なもまたすしほれけり別かなしき旅のころもは

羈旅

あまたいひかれてしほるゝ袂かな都出ては一よ二夜を

いと猶しほれにけりな旅衣都しのふの露の風に

羈中衣

うちとけて夢もやは見む旅衣かへす程なき夜ほの枕は

旅行

行つて我はわれなる古郷をいひなくさむる旅の道かな

旅衣きのふのとまりなくれぬとまついそき立今朝の宿哉

寄雲旅行

分まふ袖にかさなる山高み雲の衣にあらし立なり
わけくらし雲の衣をかされても猶袖寒き山のかりふし

旅友 公宴聖廟御法樂

年月をなれにしばかり行つる人にしたしき旅の道かな
たれとなく草の枕をかりそめに行あふ人も旅はしたしき

旅宿 寛永四七月廿五竹門主

しる人といふばかりにも一夜かる宿のあるしの我にしたしき
旅衣おはな袖にかされてはいとく露けきかり枕かな

旅宿夢

現にはしらぬ幾重の山路をか越てみえける夢の古郷

同 寛永廿二廿四水無瀬法樂

見るほとも古郷までは行やらぬ夢路をたのむ草枕かな
故郷の夢路はかせのつてならて吹ぬまかふ人のおもかけ

海路

追風のあまりあやうき行舟にこいとまりといふ聲も哉
おひかせにうきしつみゆく友船を見るにあやうき浪の上かな

野旅 元和五十月六内御月次

むさし野や草の枕は霜かれぬ猶行旅になになしかまし
おきあかす草の枕の野への霜わくるあしたの袖しほるなり

夏旅

旅衣あさ夕すいみ分そ行あつき日影の中やとりして
あつからぬ程とそいそくのる駒のあゆみの塵も雨のしめりも

秋旅

旅ころもす急の時雨をいもふにはしほるも袖に淺き露哉
別こし古郷人もいかならんさるは夜寒の比もへにけり

旅泊夢覺 元和七十竹門主

涙の音もかはるとまりの舟のうちになれにし夢も人ぞおとろく
梶まぐら夢はうつしの古郷をもとのうきれにかへる波かな

關屋書 竹門主御法樂

相坂の關路をこえは半天の目影も西にかたふきぬへし
おふ坂の關路の空になりけりよそに都の今朝の目影も

哀傷部

加賀相公(松平筑前守利常)室家(將軍秀忠公御息女)元相
八年七月三日逝去し給ひける時法華經をくりける裏紙に
秋やばといひし別の袖の露夜寒の床にしきや侘らん
なけくその涙も露になきかへん心を法のほなにうつして
前相公悼に江文通が寂寞として神をいたましめ手を分て
涙を含む郷のわかれ其心凄からずといへ共潘安仁が寢興
して形を存し遺言耳にある亡を悼む其哀なを深かるへし
爰に前相公さりし長月の初つかた願言を空しくして鹿の
なく野へのゆふ露袖に絶す雁のくる峯の朝霧むねばれぬ
思ひありかのをくるゝ程をかなしみあるを見るたにと歎
し古ことも思ひ出られ神無月ふりみふらすみしくるゝこ
ろさためなき世のならひも今更おとろかにくおろかなる
心につたなき詞をつゝりて恒公の綿々の恨を計惻々の情
をとふらふと云

神無月絶す時雨もとひぬらし定めなき世を歎くたもとに
袖の上に今やかいらん神無月いつもしくれのふるき言の葉
別れしはぬるかうちなる夢の世に覺おうつゝや悲しかるらん
れてもみえれても見ゆらん儂におもひなくさむ時のまやなき
年月の深き契を今はななあかぬこゝろに思ひ出らん
絶すして散しはいその秋かせを思ひこぞやれ森のこのもと
ひとりればならばぬ床もかたばらの今やさひしき秋の小夜風
契りこし中のれかひのことのほもむなしき床に散やはつらん

たましいなかへす煙のそれならて絶のおもひをむねにたくらん
今はたゝかひなき玉の行ふたに見しまほろしと思ひやはせぬ
露のまもいかにかたきうちしめる袖のなみたのふるき枕は
生れあふ契をなやたのむらん化はゝちすのおなし臺に
平正興 中根半十郎の悼に
秋にあへす散し柞の木のもとをこらてとふへき月を經にける
寄夢無常
おさしあへすやかくて消ゆく白露もつるば此世のたとひ成けり

釋教部

釋教

聞人のこゝろにそしるゝこととかぬ御法は耳の外にて
二月やのこす教もたかためとしらのうき身のよそに聞らん
一言もとかぬ御法をいかたりし心に聞て世につたふらん
一言もとかずといふにとく法をやかて心につたへてそきく

寄月釋教

やとさばやまことの法の月の影を心の水のにこりあらせて
見る人の心にかはる月なれやわしの高ねのおなし光も

如是力 一日千首

木々の枝はおるかとはかり吹風にたゆみ力を見する青柳
東照大體現十三年忌に法華經二十八品の歌めされけるに

唯獨自明了

くもらしの心ひとつに見る月は出入山いさはりたになし

殺生成 元和五卯月廿五竹門主御法樂

ともしするさつおの弓も後の世の報ひをしらは別かへきなむ
忘れても思ひたにせしいむ事のいつしか中のおもきつみをも

報佛之恩 元和八八月廿六

よい経てもむくひつくさし親と子の深き教の道おもふには
ばかりなき却経ても猶あひかなき教をいかてむくひ盡さん

父少而子老

いつのまにこゝろも老けん鶯のすたちし松の色はかはらて
年深き松はかはらぬ縁にて柳の髪の色ぞ老たる

前亞相光廣卿七周忌に光賢卿より一品經の歌すめられ
しに常護是人といふ事を

たのもしな御法のはなの山寺はさる人なしもめくむ誓ふ
たらちれの親の守りのそれならて身にそふちかひ聞も頼もし

慶安三年十月十一日本源目性院繁一周忌の追善の歌に示

以所繫珠

聞てこそかけし衣の玉さかにさめぬる酔も身にしられけり

我見灯明佛

古き代を見し人ならば法のはなひらん時もいかてしらまし
そのかみにかはらずと見る六種より二度とかん法をしそ思

便得離欲

一すちにたのむよりこそ女郎花めつる心の露ものこら^{とま}の
常にそのちかひを深くたのますは戀の山路に闇や迷はん

神祇部

神祇

今もなをあふくに高し天の原空にうつし神の御影はあふより猶こそはめ法の氷絶ぬもまもる神の恵は

元和二八月十五日

けふよりそたのみなかくる男山さかゆく末^{道の末}なけふの手向^{はるかに添}に

神も我心をはしれ春秋のたもけにあかの手向なからも九重のかさしの櫻いにしへにかへる春をや神もまつらん道まもる神もめくみや猶そへん絶すもよせよ和歌の浦波

秋神祇

御幸せしむかしの秋のけふ忍ふ心そ手向神もかけてよ

石清水

石清水三のころもにかけとめし神^{もわきと添}の心や法まもるらん

社頭神

元和八二廿五御法樂

瑞籬の久しき代々の霜を経て神の御室にしける櫛葉

櫛葉のさしては祈るさかゆへき世をやす國の神の御前に

神代のこと

千早振神よのことも水くきのほかなき跡にみするかしこさ

祝部

祝言

寛永二正十一初卯石清水法樂

我君か代はうきなき石清水すめる心を水上にしてまもるなをたえのなかれの石清水君につかへん末かすへ迄

我君か代はやす國に生れあふ身をうれしとや民も思ん神も今此ことのばの手向種とうけてや千々の秋もつもらん

石清水ほそきなかれの絶すしてつかへん道も我君のため吹音もわきてのとけし君か代はけふを千年のはるの初風

慶賀

もろ人のいとりの身のの上にさちある時にあふかうれしき數ならぬ我身ながらも君か代なはいはふ心の人にわくれし

寄神祝

寛永七二廿二水無瀬御法樂

天下うけつくまいになさめ來て神のさつげし國そうこかぬ祈るよりわきても神の恵ある宿は千年の春もかはらし

月前祝

君のみやまつにかそへんよはひなもかきらぬ月を雲の上にみん

寄月祝

夏祝言 慶安三四

千代すまん影そすしき池水に清くやはらく空をひたして早苗とる田子の歌にも治まれる我君か代のこゑやわくらん

冬祝言

高砂の松をかさぬる千代なれや尾上の霜の鶏の毛衣

寄道祝

ふるき跡の絶たるをつきあたらしき道おこすへき時や此時
君に今つかふる道もおろかなる身を捨ぬ世にあふかうれしき

ことのはの末もまよはし敷島や道すななる御代にひかれて
石清水君かもし代につかふへき人の道をもさぞ守るらん

同じ題

みな人のあやうさしらぬ世にそみる道の心の深きまことは

寄道祝言

治しる道より國はやすかれや三のおしへもひとつこゝろに

爲君祈世

一ことをさつつけしまいに今もなを治しる世の君いのちなり

花梨多春 慶安四二廿五仙洞へ朝親之行幸御當座

洞のうちの春につもらぬ御幸にも老すはとけふ花をしそ見る

松有默聲

長閑なる春にさかえん宿の松君萬代のこゑよはふなる

松に吹音にもしるしまつりことやはらく國の風をうつして

松添榮色 寛永廿霜九御即位御會

さかゆへき御代のはしめと榊葉の霜をも枝に見する松かな

松竹増春色 同十四正廿九公宴御會始

吳竹のよにこもれる春の色も松よりみせて立みとり哉

綠竹辨春 慶安四正十一仙洞御會始

春の色のみとりにも見る萬代をかされて風の竹になるこゑ

竹不敗色 元和四九廿四諒閣後御月次御會始

おもふにばたれかたのまね色も猶千尋あるか^のけを^は君か御影と

百數や臺の竹はひとふしに千代をこめたる色やそふらん

すくなるを代々のためしと色かへぬ臺の竹にうつしかへてん

御懷紙寫之

秋日侍 行幸二條第同行契還年和歌

中宮權太夫源通村

幾度か御幸まちみんくれ竹の末のよななき秋にかはらて

竹契還年

すくなるを治まる御代のためしにて千世もさかへん庭の吳竹

鶴伴仙齡 仙洞御會 庚午二月八

仙人のよはひにをのか千とせなをもへてゆつるのこゑそ聞ゆる

あしたつや芝の砌にすみよしの眞砂のかすの跡をとめん

仙人もしらすよはひやたつもへん今よりなる芝の砌に

ぬれてはす山はあさしと蘆たつや芝の砌の露に見るらん

對龜寺齡

うつしみよ君か齡の萬代もすみぬる池の龜のかいみに

君のみやかそへもそへん萬代の龜のおよはぬ末の齡を

萬代の君かよはひば池水にすむてふ龜のかいみにもみん

萬よものとなるへき君か代に心やすくやかめもすむらん

君か代ないふことは多かれと誠を契るかめのよろつよ

寄道慶賀

たのしみ心にあまることのはや見せて雲井に敷島の道

綠竹年久 寛永廿正十九御會始

あひにあひぬみかきの竹を此君の千世に千尋の陰をならへて

本々此集者後十輪院^{中院殿}前内府之詠草也予年々

集之以爲一冊傳聞御代所詠出之和歌或三千餘首或五千首今爰一千三十餘首書載之後人加補焉

和歌門弟觀向居士以繁

詠十首和歌

竹鷺

鷺のこゑを明ゆくくれ竹の夜深き窓とおもふまくらに

春雨

春雨のしのふのみたれ吹風にむすほふれたる軒の糸水

歸鴈幽

さき立はまつ飛消て一行のおくるゝ鴈は雲にかすめる

更衣

あかすしてはなにわかれしころのみなを立かへる夏衣かな

尋時鳥

郭公人にもとはしけふよりさきにときかはれたき初音を

寒爐

江にたてるおしのは寒き朝霜に氷をいそくかせ渡るなり

待戀

月まつと人はいひし夕暮の今夜もまたやあたに更なん

顯戀

人しれすつゝいぢとおもひし我涙いつより袖の外にもれけん

寢覺鷄

身の上の寢覺になりし初聲に鳥のつかさとおとるかすらん

祝言

みとり成松たにしらし萬代もつきのほこやの山のときはい

詠十首和歌

此十首長嘯詠歌幽齋點なり

立春

霞たつあふ坂山のされかつら又くりかへし春は來にけり

朝驚

なかめやるすへのし原の朝霞かすみの中に驚そなく

更衣

いつのまにうつる月日もかばるらんばなの秋も夏の衣も

水邊納涼

大原やせかゐの清水むすふまに月もかたふき鳥も鳴なり

野蟲

むしの音そみたれて野邊にしとるなる秋の思ひや忍びかぬらん

月爲友

うき世には又かたらばん友もなしなをなくさめよ秋の夜の月

深夜雪

しのめはまたあけやらて降雪の光にしらむれやのびまかな

寒庭水鳥

うちばらふおしのうきれのさいら涙まなくも夜半に霜や置らん

寄繪戀

又も見るそのなくきみはありなまし点にかくほとゝの姿なりとも

夕戀

日くるればたつ儂を身にそへてそのまゝにこそうちふされけれ

夏日同詠五十首和歌

早春

此ころの春またあさき山のはに日數を見せて立春かな

氷解

春かせに汀の水とけぬらしけふ立かへる志賀のうらなみ

鳴霞

船路さへ遠さかると見ゆるまで今朝は霞のうちはし姫

河邊梅

水となつれもみはや年毎になかるし川に梅にはふなり

春夜

照もせぬおほろ月夜は名のみして疊はてたる春の夜の月

枕花

ことしうへてわかつて咲へき春を先疎きと花のおりはとふへき

花理路

雪とみて道も絶けり春かせは梢のはなをさそふのみかは

遊糸

長閑なる空にわたるし糸ゆふは春の霞の衣おるらし

雲雀

かすむ野は子を思ふ道も迷ふとやおのかすにのみ雲雀鳴なり

樵路躑躅

こりかへるしはしそやすむ山人も道の行手のつゝし折とて

竹亭夏來

我友とうへし芭の吳竹のかばらぬ色に夏は來にけり

磯時鳥

あら磯の浪のまかひのこゝろなきいつとやいはん山郭公

澤菖蒲

それとなく野澤に生しあやめ草けふたか爲にひかんとか見し

幽栖五月雨

とふ人はなきならひの宿にしてなな住わひぬ五月雨の比
夏草も澤のしけれるまゝにかれ行や野中の庵の人め成らん

更草

蟬樹蟬のなく木末に秋やかふふらししのひくゝの森の夕かせ

簾下萩

軒ちかき萩の上にはこほれつゝやかて袖にも露かゝるなり

萩半綻

白露や心をわけゝなきぬらんかは咲出るはなの萩原

初鷹成字

かけてこしたか玉章そ鳥の跡のほのかにみゆる初鷹のこゑ

旅泊鹿

浪の上に幾夜うきれの梶まくらしくにおしかの聲そわひしき

秋々

色みえぬものから秋のさびしさの夕くれ毎に又はそふらん

月前鐘

庭の面にまかふのみかは鐘の音も霜もさびる秋のまの月

月下遊士

ゆく月の影をしたびてたはれをやかたふかたの宿をとくらん

古郷擔衣

都たに今は夜さむの宵かせによし野の里はころもうつなり

葛閉戸

あれ残る草の庵の柴の戸を又とちはつる薦かつらかな

秋不留

おしとおもふ心よ道のしるへせよゆきてもしはし秋をといめん
山館冬至

我宿の陰とたのみし紅葉はも今朝より冬の木枯の山
落葉驚夢

神無月しくれぬ夜はの山風に木のは幾度夢さそふらん

田水

たえ／＼の笈の水の音もせす氷かさなる小山田の原

淵水鳥

飛鳥用きのふの淵やかはるらんうきねさためぬおし鴨の聲

都初雪

冬もなをはなのみやこの名にたてゝそれとは見えぬ今朝の初雪

市成露

月も目もいそぎなれぬる市人も更にや年のくれおこむらん

寄名所山戀

分そむるほとたにまゝふ筑波山こひのしけ山すへいかにせん

寄名所岡戀

色に出て今より戀んさのみやは忍ふの岡のしのびはつへき

寄名所浦戀

かくばかりつらきものとはしらさき待夜むなしき床の浦風

寄名所瀧戀

布引の瀧のしら玉いさからむ袖のなみたの色かはり行

寄名所河戀

もろともに今宵そ契る水無瀬河ありてゆくゑも絶ぬ逢瀬は

寄名所橋戀

いかにして又もわたしあふ年は終に一よのまゝのつきはし
寄名所里戀

更級の里に行ん月ゆへになくさめかれて物おもふ身と

寄名所杜戀

色かへぬときは森はつれもなき人のこゝろのたくひなりけり

寄名所湊戀

涙せく袖の湊の浪たかみはてはうき名やたゝんとすらん

寄名所濱戀

今は、やうらみたにせしうと濱のうときのみなる人の心を

伊勢

我君をひとつ心にまもるらしふたつの宮の内外ともなく

石清水

石清水あきの最中にすむ月や神の光を空に見すらん

玉津島明神

あはれかくや身のかすならぬことの葉も敷には入ぬ玉津島姫

山家猿

さらぬたにさてもさひしき松の戸の軒はの山にましら鳴なり

羈旅

日にそへていやとをさがる都かなきのふのかすみけふの白雲

寄草述懷

冬の霜の下にかれにし草のはも春のめくみにことしあひぬる

寄夢懷舊

更にまた思ひ出てそのはるゝはかなき夢に昔見しより

寄世祝

君を猶あふかさらめやおしなへて治まれる世にあへる諸人

詠百首和歌

立春

一夜あけてあらしもきかす朝霞このかさねに春や立ちむ

朝霞

あきな／＼なを風さむみ棹姫の衣手うすく立霞かな

はるをあさみまた空さゆる山風に霞の衣たちもさためす

谷鶯

谷陰に鳴もかひなし花ならぬ岩木をはるの鶯のこえ

残雪

うつもれし籬の竹の枝なからこほさて寒き去年の雪哉

若菜

立かへりあすこそつまめけふはまた雪間もみえぬ野への若菜を

行人の跡を雪まの野へに來てかたみの若菜つみもたまらず

里梅

里つゝき行手の風にさそはれてぬきたたらぬ梅か香そする

はなはなな咲ぬかきねも吹かせに梅か香うとき里やなからん

薺梅

思ひ出るむかしやいつれ立花のあほりし宿の軒の梅かえ

はるの夜のみしかき軒はあけそめて梅か香白きねやの朝風

春月

夕まくれほのみし月の影ながらやかて霞にふくる空かな

春曙

歸風

明る夜のひかり待とる山のはにひきわかるゝもおしき横雲
秋風の吹はと見ても葛の葉のうらみは春にかへるかり金
ゆく雁もさずか都の別もやおし明方の月になくらん

春雨

花にこそおしまんばるの一時に幾日おくるゝ雨のさひしさ

岸柳

春風の岸行水のゆふけふりすへはひとへになひく青柳

待花

初花

朝霞の光と計見しはなの日影に匂ふ色もめつらし

見花

いつを身のあくものにせん春毎の名残を花に詠めそへては

花盛

散花のひとつふたつの色はあれと咲のこらぬを盛とはいはん

吹かせを枝にいとて見る花の盛の色に物思ひもなし

落花

うつろふは心つからになしもせて花にまたるゝ春風もうし

歎冬

かたふきて咲こほるゝも山吹のはなには薰籬ともみす

池藤

吹過る木末の風に浪の音も松よりこゆる池の藤なみ

暮春

行ふなき名残を空になかむれば雲ものこらぬ春の山の端

くれて行空をかきりとなかむれば雲さへ歸る春の山のは
更衣

はなの色のうつろひはてし行点とて袖さへかほる夏衣かな

卯花

分かぬる月と雪との中垣に咲卵の花の色はけたれぬ

待郭公

時鳥いつより人をまちそめてつれなきものに音を惜むらん

聞時鳥

ほととぎすなく一こゑを待つて今ははねへき日こそ覺ぬれ

子規稀

聲も今なるゝは須磨のあま衣まとをにもなく時鳥哉

古郷橋

さとはあれてふるき軒はの橋にたれとほしらぬ袖の香をす

早苗

うへわたす山田の早苗雨過て緑すゝしき夕日影かな

五月雨

幾重までかさなる雲を行はあれと晴まも見えぬ五月雨の空

鶺鴒川

かひくたす幾瀬を月にかそへてや浪の鶺鴒はさしのほるらん

叢蟲

夏草

たひゝにばらひ捨すは庭の面に陰たかくなる草葉をや見む

夏月

夕立

天津かせ日影を空に吹とちてゆふ立涼し雲のかよひ路
夏萩

あつさなもはらひや捨る大萩のよる瀬すゝしき波の夕風
いさげふは夏と秋との中川にうきせかへこの御萩をもせん

早萩

白露のまつなき初る草のはに風たにしらぬ秋や來ぬらん

七夕

片糸のあはすはなにを七夕や玉の緒ばかり契おくらん
一夜れてたえぬ思ひや七夕の夢のわたりの天の川橋

萩風

萩の葉のしほれぬ聲そ身をしほるやかて吹しく萩風も哉

萩風のこゑきく暮の萩のはに契やなきし袖の白露

萩露

咲そめん盛しられて萩か枝に色つきそむる花の朝露

杜蟬

ゆふ日影もりこそ夏の陰はあれと猶木かくれに蟬や鳴らん

女郎花

おみなへしかいける花の色もうしけにあたものゝ露の契を

夕蟲

夕日さす淺茅がすへのきり／＼すなのれもよばき聲に鳴なり

夜鹿

秋かせもまさきのかつら暮る夜の思ひを鹿の音にやなくらん

初鷹

けさそ鳴きのふかすみし雉もわすれぬ峯を越る鷹か

秋夕

吹しほるなへて草木の夕露に我袖のこす萩風もなし

山月

萩風につもらぬ雪をばらはせて山のはしろくさゆる月哉

野月

うかれ行萩のよとのゝこも萩月にや露のやとりからまし

月見つゝ一夜は野へにれもしなんおはな袖をひしき物にて

江月

浪はるゝ堀江の月にいく夜來てたないし小船漕かへるらん

あき風の水のうき霧空はれて江の浪遠くすめる月かけ

河月

影うつる川音たかく浪更て水なき空も月そなかるゝ

浦月

船出る浪の行ふにあくかれて昔屋あらすな萩の浦人

籬菊

擣衣

曉霧

山路をばおくりし月の入跡にわくる麓の霧そ夜深き

岡紅葉

夕附日そむるもみちの色にこそ岡部の松も萩をわくらん

庭紅葉

九月壺

初冬

いつも聞軒はの松に吹かへてむへ由かせも冬そさひしき

時雨

我袖を跡まてぬらず時雨かな過てれやもる夜半の雪に

落葉

さそほるい行ふやいつこ吹まゝに風の上なる塵の木の葉は

朝霜

寒草

冬かれて残る末葉のうちなひくおはなに寒き風の色かな

千鳥

浦千鳥こゝもかしこもうき浪のよるの床をや思ひきためぬ

水鳥

宵のまは池の岩ほにれしかもゝ更てや寒き水になく聲

氷初結

冬月

鷹狩

野叢

浅雪

積雪

閑中雪

歳暮

寄月戀

寄雲戀

寄露戀

たのしみも今は仇なりあたし野の露の情もきえはつる身は

寄雨戀

寄風戀

寄山戀

くみて知れつになき戀をするか成ふしのけむりのたえぬ思ひな

寄關戀

寄海戀

寄原戀

寄橋戀

寄木戀

寄草戀

寄鳥戀

曉のうき鳥のれもいとふましあはぬを夜半のならぬ成身は

寄蟲戀

我のみそ心みたれてほたる火のもゆる思ひに身をやかさん

寄獸戀

逢ふとあらは千里もゆかん唐の虎ふす山をよし越るとも

寄玉戀

寄鏡戀

寄枕戀

寄衣戀

寄糸戀

浦松

窓竹

山家嵐

田家

古郷
海路
羈旅
述懷
神祇
祝言

爲兼卿家集補遺

續拾遺和歌集 戀四

忘れず霞の間よりもる月のほのかにみてし夜はの傍

新後撰和歌集 春上

弘安元年百首歌奉りし時

山さくらばや咲にけりかつらきや霞をかけてにほふ春風

入道前關白家にて庭落花といへる心をこみ侍ける

ちる花を又吹きそふ春風に庭を盛りとみるほともなし

秋風告秋といふことを

秋きぬと思ひもあへの萩のはいつしかかはる風の音かな
山風にたいふ雲のはれくもりおなし尾上にふる時雨哉

戀

いかさまに身をつくしてか難波江に深き思ひのしるしみすへき
逢ことはたと思ひぬの夢路にてうつりゆるさぬ夜はの關もり

我なかに忘るなとこそ契りしかいつよりかはる心なるらむ

弘安元年百首歌奉りし時

わすれ行人の契りはかりこものおもはわかになに亂れけむ

新千載和歌集

性助法親王の家の五十首歌に

風渡るさしの柳のかた糸にむすひもとめぬ春の朝露
高砂の松のみとりはつれなくて尾上の花の色そうつるふ

今はいや聞ふりぬへき五月雨の空にもあかねほといきす哉

弘安六年八月十五日夜内裏にて月五首歌講せられけるに

おく露の光も清き庭の面に玉敷そふる秋のよの月
山田もるかりほの庵に露散て稻葉吹こす秋の夕風
秋ふかき籬の露も匂ふなり花よりつたふ菊の葉に
色かはる正木のかつらくり返し外山しくるあきの暮かな

性助法親王家五十首歌に

夜もすから置そふ霜の消かてに氷かさぬる庭の冬草

弘安八年住江に御幸ありて行旅述懐といふことを講せられ侍けるにつかうまつりける

ふりにける跡を尋て住江の御幸かさなる今日にもある哉

道洪法師すゝめ侍ける十首歌の中に
一すちに心なき身とおもへとも憂を袖にしる涙哉

別戀の心を
いかいせんまた夜そふかき鐘の音に名残つさせぬ曉の空

建武二年九月十三夜内裏にて五首歌講せられける時お

なし心を
はかなくそ有し別の曉もこれをかきりと思はさりける

性助法親王家五十首歌に

うかりけるさの中河さのみなと逢瀬たえても戀わたるらん

新拾遺和歌集

弘安元年龜山院に百首歌奉りける時

立かへり又きさらきの空さへてあまきる雪に霞山のは
弘安元年百首歌奉りける時

あはれてしゐかの故郷来てみれば春こそ花の都也けれ
伏見院卅首の歌に

なる神の音はのかなる夕立のくもる方より風そはけしき

永仁元年八月十五夜後宇多院に十首歌奉りしに秋旅と云

事を

故郷を忘れんとともいかにせむ旅の秋の夜はの松風

題しらす

海士のかるみるめはよその契にて鹽びもしらぬ袖の浦波

かひなしやうきになしても一かたに思ひもりの心よはさは

弘安八年八月十五夜卅首歌奉りし時落花埋庭

庭の面は跡見えぬまで埋れぬ風よりつもる花のしら雪

新後拾遺和歌集

弘安百首歌に

蓬生の露のみ深き古郷にもとみしよりも月そすみける

同

秋ふかき紅葉のぬさのから錦けふも手向の山そ時雨る

同

この里はしくれて寒き冬の夜の明る高れにふれる白雪

同

海士のかる磯の玉もの下みたれしらせそむへき波のまもかな

同

さりともと心ひとつに頼めともいひしましなる夕暮もなし

新續古今和歌集

ほとけきすきいともなき初音こそ夢にまさらぬ現なりけれ

弘安元年百首歌中に戀の心を

くやしうそ唯時のまのうたいにまたみぬ夢をむすひ初ける

同

はかなくも夢をうつと思ふこそまるとるむほと心の心なりけれ

柳風和歌集

永仁のころうへのなのことも歌つかうまつりける時

霞

春といへはいつもかすみの方にあれと猶山のはの夕あけほの

鶯

むめかいは枕にみちて鶯のこゑよりあくる窓のしのゝめ

花

さそふ風もなさをしるやよきて散花靜かなる春の夕くれ

首夏のころをよみ侍りける

春ちかきみとりの山の朝くもり雲もかすみの色はなしけり

時鳥

月よりもまつさきたちて郭公夕山いつるむら雲の空

秋

風の音の哀そふにもなかりけり吹よはるしも秋の夕暮

月になる秋の心のいつくより我さへしらぬなみた落らむ

暮秋のころを

木葉おち草葉しほるゝ秋の雨に詠るすゑも夕くれの空

玉葉和歌集

山中春望といふ事をよみ侍し

鳥の音ものとけき山の朝あけに霞の色は春めきにけり

家に歌合し侍し時春雨を

梅の花くれなる匂ふ夕暮に柳なひきて春雨そふる

春歌の中に

思ひそめき四の時には花の春はるのうちにはも明はのゝ空

花歌の中に

おもひやるなへての花の春の風このひとものうらみのみかは

彌生のつこもりの夜よみ侍し

めくりゆかは春には又も逢ともけふの今宵は後にしもあらし

夏歌の中に

枝にもる朝日の影のすくなききにすいしきふかき竹のおく哉

露おもる小萩か末はなひきふして吹かへす風に花そ色そふ

秋甘首歌めされし時

露の色ましほの風の夕けしきあすもやこゝにたへてなかめん

院みこの宮と申侍し頃をのことも題をさくりて歌合し侍

し時月前懷舊といふことを

いかなりし人のなさげか思ひ出るこしかたかたれ秋のよの月

暮秋十首歌奉りし時

心とめて草木の色もななかめおかん倅にたに秋や暖ると

月歌の中に

秋そかはる月と空とはむかしにて世々へし影をさなからそめる

冬夕

たゆる日の時雨の後の夕山に薄雪ふりて雲を晴行

題をさくりて歌つかうまつり侍し時冬木と云事を

木の葉なきむなしき枝に年くれて又めくむへき春そちかつく

百首歌奉りし中に夜旅

とまるへき宿をは月にあくかれてあすの道ゆく夜半の旅人

雨中旅

旅の空雨の降日は暮ぬかとおもひて後も行そ久しき

忍戀

さらにまたつゝみまさと聞からにうき戀しさもいはすなる頃

不逢戀

恨したふ人いかなれやそれは猶あひみて後のうれへなるらん

忍待戀

人もつゝみ我もかされてとひかたみたのめし夜は、唯更そゆく

待戀

まつことの心にすゝむけふの日はくれしとすれやあまり久しき

月前待戀

とはむしも今はうしやの明かたもまたれすはなき月の夜すから

戀歌中に

時のまも我に心のいかなるとたいつねにこそとはまほしけれ

寄夢戀

なく／＼も人を恨むそ夢にみてうつゝに袖なげにぬらしぬる

題しらす

戀しさもみまほしきも君ならてまたげ心におほえやはする

恨戀を

ことのはに出しうらみはつきはてゝ心にこむるうさに成ぬる

絶戀の心を

ありし世の心なからにこひかへしいはゝやそれに今までの身を

戀の歌の中に

つらき餘りうしともいはて過す日を恨みぬにこそ思ひはてぬれ

うれふる事侍し頃

もの思ひにけなはけぬへき露のみをあらくな吹そ秋の木からし

海邊眺望を

涙のうへにうつる夕日の影はあれと遠つこ嶋は色くれにけり

山家嵐

やま風は垣ほの竹に吹すてゝ嶺の松よりまたひゝくなり

龜山院かくれさせ給にし比去年の秋後深草院うせさせ給

しな又程なく哀なる御ことなと女房の中へ申送り侍とて

ふたとせの秋のあはれは深草やさか野の露もまたきえぬ也

般若心經の畢竟空の心を

むなしきをきはめをはりてその上に世をつれ也と又みつる哉

春日社にまうてゝよみ侍し

頼むへき神とあらはれ身となれりおほろげならぬ契なるへし

風雅和歌集

春たつ心をよめる

あし引の山の白雪けぬかうへに春てふけふは霞たなひく

題しらす

しつみはつる入日のきはにあらはれぬかすめる山の猶奥の峯

鶯

うくひすの聲ものとかに鳴なしてかすむ日影はくれんともせず

梅

梅かゝは枕にみちて鶯の聲よりあくる窓のしのゝめ

春雨を

はるの色をもよほす雨のふるなへに枯野の草も下めくむ也

さひしさは花よはつかのなめして霞にくるゝ春雨のそら

題をさくりて歌よみ侍けるに河上春月といふことを

うちわたす宇治の渡の夜深きに河音すみて月を震る

伏見院西園寺に御幸ありて花の歌人々によませさせ給け

る時

宿からや春の心もいそくらむ外にまたみの初櫻かな

落花をよめる

一しきり吹みたしつる風はやみてさそはぬ花も長閑にそちる

暮春浦といふ事を

春のなこりなむる浦の夕風に漕わかれ行船もうらめし

題しらす

夏浅きみとりの木立庭遠み雨降しむる日くらしの宿

郭公を

かりはへていまこになく時鳥きよくすゝしき聲の色哉

題しらす

松をよらふ風はすそ野の草に落て夕立雲に雨きはふ也

秋歌の中に

あはれさもその色となき夕暮の尾花か末に秋そうかへる

吹捨て過ぬる風のなこりまで音せぬ萩も秋そかなしき

秋風に浮雲たかく空すみて夕目になひく岸の青柳

夕日うつる柳の末の秋風にそなたの雁の聲もさひしき

伏見院御時六帖題にて人々歌よませ給けるに秋雨を

庭の蟲は鳴とまりぬる雨の夜の壁に音するきり／＼す哉
月の歌として

月の色も秋にそめなす風の夜のあはれうけとる松の音かな
野分を

野分たつ夕の雲のあしはやみ時雨にいたる秋のむら雨
河霧を讀侍ける

朝あらしの峯よりおろす大赤河うきたる霧も流てそ行
題しらす

ふりはるゝ庭の霞はかたよりて色なる雲そ空にくれ行
雪ふりける日日吉社へうてけるに山ふかくなるまゝ風

吹あれて行きさきもみえず雲立むかひ侍ければ
行きさきは雪のふいきにとちこめて雲に分入志賀の山越

三島社に奉らんとて平貞時朝臣すゝめ侍ける十首歌の中
に松雪を

山おろしの梢の雪を吹たひにいくもりする松の下陰
夕雪

くるゝまでしてはしばしば竹のほに風はよほりて雪を降しく
鷹

谷こしに草とる鷹をめにかけて行ほとをそきしはの下道
五十首歌よみ侍けるに旅

めにかけて暮ぬといそく山もとの松の夕日の色そすくなき
あつまへまかりけるにやす川を渡るとて

やす川といかてか名には流れけんくるしきせのみ有世と思ふに
あつまへまかりける道にてよみ侍りける

たかせ山松の下道わけ行は夕風吹てあふ人もなし
旅歌の中に

故郷に契りし人もれさめせば我旅れなと思ひやるらん
結びすてゝ夜な／＼かはる旅枕^{寄カ}かりれの夢の跡もはかなし

寄樹戀といふことを
初時雨思ひそめてもいたつらに横の下葉の色そつれなき

百首歌の中に
頼まれはまたぬになして見る夜半の更行まいになとか悲しき

題しらす
暮ぬとてなめすつへき名残かはかすめる末のはるの山のは

後山本前左大臣左大將に轉任して侍ける次の朝申つかは
しける

時わかぬ君か春とや橘の蔭もさくらに猶うつららむ
永仁二年三月大江貞秀藏人になりて慶を奏しけるをみて

宗秀かもとに申つかはしける
めつらしきみとりの袖も雨のうへの花に色そふ春の一しほ

あさき夕といふことを
もりうつる谷に一すち日影みえて峯も麓も松の夕風

雑歌の中に
大空にあまねくおほふ雲の心國土うるほふ雨くたす也

物としてはかりかたしなよばき水におもき船しも浮ふと思へば
題しらす

大井河はるかにみゆる橋のうへに行人すこし雨の夕くれ
岡のへやなひかぬ松に聲をなして下草しほる山おろしの風

見るとなき心にも猶あたりけりむかふみきりの松のひともと

應長元年八月竹林院前左大臣かさりおろして侍けるを聞

て申つかはしける

かた／＼になしむへき世を思ひ捨てまことの道に入そかしこき

雑歌に

あふきても頼みそなるいにしへの風をのこせる住よしの松

戀のうたとて

おもひけりと頼みなりての後しもそほかなき事も人よりはうき

伏見院御時六帖題にて人々に歌よませさせ給けるに一夜

へたてたるといふ事を

夜かれそむるねまちの月のつらさより廿日の影も又やへたてん

寄雲戀

物おもふ心の色にそめられてめにみる雲も人や戀しき

思ひとりし昨日のうさはよはればやけふは待そと又いはれぬる

仙洞五十番歌合

乾元二年四月廿九日

春風

さそひ來る梅や櫻の色香にて風なつかしき正月如月

夏雨

秋近き野ばらの草の夕かけにむら雨降て風そ涼しき

冬雲

みれの雪をむら／＼雲に吹交て渡る嵐はかたもさためす

戀夕

暮毎に思ひそまさる待し頃うさ哀さにかはるいまいて

歌合

乾元二年五月四日

夏夜

月影はまた更ぬとも見えなくにみしかき夜半は鳥鳴ぬ也

絶戀

兩舌も頼む名残の有しよしたえはてぬればこれも戀しき

庭松

としてまかはらぬ色そなつかしき君住宿の軒の松か枝

爲兼卿家歌合

春朝

さたかにはその色となきけしきにも唯春めける今朝にそ有ける

春夕

梅花くれなゐ匂ふ夕暮に柳なひきて春雨そふる

夏朝

朝あけのまかきの竹の浅みとりなひく若葉に露そ涼しき

夏夜

庭しろく袖に涼しく影みえて月は夏とそ又おもはるゝ

秋朝

朝風は檜にあらく吹過てくもりもあへぬ秋のむら雨

冬朝

けさしはや雪はふりきぬ山風のあれつる夜はこれにそ有ける

冬夕

秋の名残なめし空の有明に倣にたる冬のみか月

冬夜

こしかたの戀しきうちに戀しきばとよの明りを月にみし頃

戀朝

戀まさる心のまゝになかめしてしくれぬ時をけさうつしぬる

戀夕

暮かゝる空にむかひぬ物を我思はしとても入あひのころ

十六夜日記

大宮の院の權中納言の許より道のほとおほづかなさと
音つれ給へる文のついでに此せうとの爲簾の君もおなし

さまにおほづかなさなとかきて

古郷は時雨にたちし旅衣雪にやいとゝさえまさるらん

佐渡國にてよみ給へる長歌文字くさりゆふ礫といふ物の

歌なと物に見えたるを爰にあく

あら玉の年も越ねとおふ坂の關さへあけて霞むこのした
ふる雪に昔のあとを尋てやわか榮つむらん たかまとのなの
此ほとは川音たていうちとくる水のひまに のころしら波
時そとてひとく梅の玉かつら心にかけて みるやわきもこ
なりけんと花をもみすば鶯の波よりほかに 聲やきかまし
待侘しはつねをそきく郭公しのひしほとは しはしばかりか
たちはなの香をなつかしみ夏衣袖を涼しき 風のふくかも
今はゝや夕立しけりいかばかり露けかる 覽 森のしつくの
津の國のあしほの螢ほのゝと明行よはの 野にも見ゆるか
川の瀬に清きみきわの御祓せし跡より秋の 風は吹かは
春夏や秋霧かけて泊らばや夜半も吹飯の はまになるなみ
とまり船苦引捨てゝ夜もすから満くるもしほ みて明しつゝ
夕暮は野原おしなみ鳴鹿のあはれをそへて 露むすふ草

ふるさとの庭の朝貌吹風にむしの音をへて 寒きころもて
誰もばた惜むかひなく秋も早とまらて行か てるまの関にも
すきのやに降音す也神無月しくるゝこそ の ろきこのはか
聞しにもあらぬ嵐のさしに音さへ今は かはりてそ吹
かきくらしふる泡雪のつもるまで 猶山深く 雲がゝれた
けふまでも狩場の眞柴をよさへて 霰を寒き たまはこゝのへ
墓へとも猶暮はてゝむは玉の一夜にふしな へたてつる哉
契りしも偽にしてうき人を忘れんとすれば なしとことの
は かくばかりあひも思ぬあふことを頼む心の はてはつらき
か ひまをなみうらみそまさる麻衣ぬるゝ袂に かゝるしら波
おのつからとにも恨めし人心愛在しまゝの 身そと思ふを
數々に猶そ戀しき月日へはわすれんとのみ 思ひける哉
見しもうしきゝしも人の思ひより立や烟の なひく夕へを
西に通ふ我ゝゝとそ極樂の道のしるへと 思ひしらすや
待ことの猶とし月のあけて積れば老と やかてならぬか
掛卷もかしこき賀茂の葵草のかけてそ頼む 神のみこまこ
せを早み流れて早き水くきの跡ばかりみゆ これそうたかた
手を折てかそへつゝみむ萬代を神より外は 誰かしらなむ
右三十一首なり又一首のかしらの一字を横によめば
あふことを又いつかはとゆふたすきかけし誓ひを神にまかせて
又一首の下の一文字を横によめば
たのみこしかもの川みつさてもかくたへなほ神を猶やかたむ
右合て三十三首

佐渡志といふふみに云此卿こゝにおはしけるほと五月雨

山といふ所にてよみ給ひしといひ傳へたる歌
としをへてつもりし越の湖はさみたれ山の森の雪か

藤爲兼卿傳

藤大納言爲兼卿の事は公卿補任に故從二位爲教卿の
男母は故修理大夫三善雅衡朝臣の女建長八年正月七
日敍爵正嘉二年二月廿七日從五位上同年正月廿一日
任侍從文永四年正月五日正五位下同五年十二月二
日任右少將同七年正月六日從四位下同十二年正月
六日從四位上建治元年十月八日任左近少將同四年
正月六日正四位下二月八日兼土佐介四月十一日轉
右中將正應元年七月十一日補藏人頭同二年正月
十三日任參議四月廿九日敍從三位同三年正月十
三日兼讃岐權守六月八日兼右兵衛督十一月廿七日
轉右衛門督十二月八日敍正三位右清水賀茂行幸行
事賞同四年七月廿九日任權中納言同五年七月廿八
日敍從二位六月帶劔永仁二年正月六日敍正二位
同四年五月十五日辭權中納言同六年三月十六日座
事乾元二年閏四月自關東蒙免除自佐渡國被
召返延慶三年十二月廿八日任權大納言明年正月
御元服上壽也同四年十二月廿一日辭權大納言正和

元年八月廿三日聽_ニ本座_ニ同二年十月十七日出家依_ニ上皇御出家_ニ也法名蓮覺後改_ニ靜覺_一と見えたり又補任毎年の下にしるせし卿の御齡の中にはひが書も見ゆれど正しとおもふ方につきて考れば建長六年の誕生なるべしそれよりかぞふれば正應元年 伏見院女御入内の御時に頭中將爲兼朝臣御消息もて參れりと増かゝみに見えたるは此卿卅五歳の時にあたれりおもふに此比よりやおほやけにも殊に用ひられ給ひけむ正三位の權中納言に任せられ給ひし永仁六年は四十三歳ならんかくて其島に六とせ在て乾元二年歸洛し給ひし時は既に五十歳也其後四五年を経て延慶中に爲世卿と撰者の評論ありしは五十五六歳のほどなるべし 伏見院の勅によりて玉葉集を撰みて奉られし正和元年は五十九歳出家して法名蓮覺と申しは六十歳の冬にて同四年の冬ふたゝび六波羅にとらはれ給ひしは六十歳の時にてやおほしけむ免除の沙汰はいづれの年なりけん記したる物も見えざれど猶建武の末迄もながらへおほしけるよしは新千載集の歌の詞がきにみえて其比八十餘歳に及び給ひぬらむとはおしてしられたりその後 萩原院の風雅集の撰み

おぼし召たゝせ給ひし康永の比迄も猶老くらずおはしてことくはへなどもし給ひしにやと思ふよしもあれどしひごとならんかすべて終り給ひし年月を記したる物をいまだ見ざればさだかにはいひがたけれど此御子左の御ざうは長壽の人多くて九十のうへ迄もながらへおはして然も老ばけず若き輩にうちまじりて歌をもよまれけるためしあればさることなしともいふべからず既に新千載集の戀五に 建武二年九月十三日夜内裏にて五首歌講せられける時おなじ心を前大納言爲兼はかなくて有し別の云々といふ歌を入らる今年八十二歳か又同集に建武二年内裏にて人々題をさぐりて千首歌かつうまつりける時戀天象と云ことを前大納言爲世下もえの我身よりこそ云々といふ歌をよまれけるよし見えたり此時爲世卿御年八十七歳なるべし抑爲世卿は爲兼卿に五歳の長者にて先官といひ殊に嫡流なれば我にきしらふ者なしとおぼしけれど爲兼卿又すぐれたる歌道の達者にて上下の用ひいみじくおはしければつねにねたき事に思はれしとか彼増かゝみに院の上(伏見院)さばかり和歌の道に御名高くいみじくおはしませばいかばかりかとお

ほしゝかども正應の撰者どもの事ゆゑわづらひども
ありて撰集もなかりしかばいとゞくちをしうおぼさ
れて

我世にはあつめ和歌の浦千鳥むなしき名をやあとに残さん

などよませおはしましたりしを今だにいそぎたゝせ
給ひて爲兼の大納言うけたまはりて萬葉よりこなた
の歌ともあつめられき正和元年三月廿八日奏せらる
玉葉集とぞいふ此爲兼の大納言は爲氏の大納言の弟
に爲教右衛門督といひしが子なりかぎりなき院の御
おぼえの人にてかく撰者にもさだまりにけりそねむ
人々おほかりしかどさはらんやは院の上好みよませ
給ふ御製の姿は前大納言爲世のこゝちにはかはりて
なん有ける云々といへるをみれば其世のさまかつか
つ意得らる但し此兩卿のそねみかはされしもひと世
の事ならず祖父入道大納言爲家卿の没後より爲氏爲
教の兩卿兄弟の御中そばゞ敷何事につけてもいと
いたくいどみかはされたりきかの爲氏の大納言はお
したちかどゞしき質にてやおはしたりけむ弟達を
いつくしむ心露おはさで爲教卿をおとしめにくみ給
ふのみならず爲相卿の相傳ありし播磨の細河の莊を

さへ横さまにおし取などいと殘忍なる所爲どもの有
けるやらん物には書傳へたり又續拾遺撰集の事にて
兄弟あらそひ有し時爲教卿にはかにやまひつきて既
に死ぬべくおぼされしかば

かきりある命を人にいそかれて見ぬ世の後をかねてしりぬる

とよみて身まかり給ひにければ其比これを口ずさみ
にして世にはさまゞに沙汰しけるとなん此歌のさ
まいかさまにゆゑ有しことならんかし爲世卿も猶そ
の質をや受つぎ給ひけむ一族の中にてても諍論つねに
たえずおはしけり爲相卿の都を出て鎌倉に下り爲守
朝臣の歌道を廢して出家し給つるもみな爲世卿によ
りてのゆゑ也とかや此比は歌の道三つに別れて彼は
これを譏りこれはかれを破らんとかまへたりし中に
も持明院の御方には爲兼卿のまめなる風體を好ませ
給ひ大覺寺殿の御方には爲世卿の艶なる姿を執しお
ぼし召れければ自然に此兩家のいどみ殊更にて其門
葉の末々までかたみに讎敵のおもひをなしけりとぞ
然るに爲兼卿は永仁にいたりて院の御おぼえ他に
すぐれ歌道の繁昌時を得たまひければ爲世卿ならぬ
人達迄もあいなくそねみにくみて野守の鏡などいふ

書をつくりて彼卿の歌のさまをいたく難じ申されけりそれに爲兼卿のうたとて

なげとなる有明かたの月影ふほとゝきすなる夜のけしき哉
萩の葉をよく／＼見れば今そしるたゝおほきなる薄也けり

といへる兩首を出して種々の難をかゝれたれども其論さらに當れりとも覺えずもとより此卿は當時の浮花なる體をこのまれす萬葉集のいにしへにもとつき歌は實正によむべき物ぞと人にも教へ導き給ひしかは詞をもかざらず姿をもつくろはすたゝありによみ給ひしも多かりつらんそれとてもそらごとをかまへ詞をかざりていつもおなじさまなるをつゝけよみたる其比の歌にはまさりぬべし心敬僧都が老のくり言にむかし爲兼卿爲世卿と歌道の訴陳侍しに爲兼卿申給ひしとなむ我はせめて一萬餘首仕侍り爲世卿は歌七百首には過べからずそれにてはいかでか歌の旨をば存知侍らむと申されしと見えたりさる達者にて口にまかせられたる中には平懷なる體もなかまじらざらんさばかり多き歌の中よりたゝ此兩首をのみ舉てと長く難じ給ひしは又外にそしるべき歌のなかりけるにやとおもはれて中々に爲兼卿のはまれにこ

そと物わきまへたる人は申たりきすべて此野守の鏡うへは清げにした濁りて取見べき物にもあらず多く偏執より出たる僻言のよしをやつがりさきに論じ置たれど位山のぼりはてしよき人の御しわざときけばかしこさにこゝにはいはずかうざまにそねめる人多かりし故にや此永仁の末此卿隱謀の聞えありとて佐渡國に流され給ひしに實はそら言なりければ後に關東の免除ありて乾元二年閏四月歸洛ありてもとのつかさかへされけるよし保曆間記公卿補任等にしるされたりければそねめる人々の猶胸あかすおもひて撰者の事にとかくさはりを申延慶に又爲世卿と諍論おこり兩卿の訴陳しば／＼なりしを爲兼卿の陳狀道理にやかなひけん遂に玉葉の撰者をばうけ給はり給ひけり此時の事とかや爲世卿の訴狀に「爲兼卿は當家三代の風體を詠せず自己の一流を立て定家卿の遺訓にもとれり」と訴へその證にとて祖父相傳の書どもを引出されしも誠はみな偽り書にて僻案集、桐火桶、三五記などいへる書どもゝ時にあたりて爲世卿の作られける物也と近き比に成てはのゝ世に沙汰し侍るはまことにやあらんいかゞ侍りけん未來記、雨中

吟の兩書は玉葉風雅の御集をかしこくもいひやぶらんとて二條家の門人たちの作り出て例の定家卿の名をかりたる物ならんとはやく戸田茂睡翁はいはれたりき扱正和に玉葉集出來てよりはますく爲兼卿の風體世に行はれ毘舍門堂一流と稱して上下まなびよみければ偏執の人々はいよく妬忌をましていかで此卿をなきものにせんとまでそねまれつらん撰集の後程もなくふたゝび六波羅に召とられ給ひにけり兼好法師がつれく草に爲兼大納言入道めしとられて武士ども打かこみて六波羅へゐて行けるを資朝卿これを見てあなうら山し世にあらん思出かくこそあらまほしけれとぞ申されけると書しは此時の事也かの書の諸抄に永仁六年の事をひきたるはたがへりいかなれば此卿ふたゝひ迄かゝる難にあひてとらはれ人とはなり給ひけん不幸ははなはだしけれどつらく思へば其身朝廷のきり物にてまめなる心おはしける上に歌道にさへ長じ給ひてならぶ人又なかりければいづかたにつけてもふかく妬まれ給ひたる故なるべしこれはた高名の人に必ずあるならひなればかへりては御身のほまれとも申べくや資朝卿のあなうらや

ましとの給ひし事を思へばみづからの犯し有しにはあらで君の爲に身を忘るなどいへる勇ましきころざしもおはしゝ人なるべし扱こそよみ給へる歌も雄雄しくていつはりかざれるふしはをさく見えざりしかそれには事かはりて爲世卿はやさばみかざれることをむねとし給ひけると見えて今川了俊入道の和歌所へ出されたる不審の中に云爲世卿は態と人のおほく見申候時稚き御子孫達に短尺と蹴鞠をもたせ申され候て歌鞠の兩道御たしなみ候と人に見せられ候ける又内裏にて節會の夜さぬかづきを御けさう候けるを此女房あらけなく突倒し申てあの年やうしてと申ければ起直り給ひて

はかなくも人の心のあら磯におもひかけたる老の波かな

とよませ給て候けるとかや是は其前年の春の節會に此おなじ所にて爲兼卿かくの如く衣かづきをけさうせられけるに夜さりよと仰られ候ければ此女房見返りてあの顔やうにてと申て辻のきける袖をひかへてされはこそふるとは契れかつらきの神も我身もおなし心にとよみ給候けるをやさしきためしに申候ける事をききて後に爲世卿の家の女房をきぬかづきに作りたて

られ候て老の波の歌をばよませ給て候けるを守季と申者しりて語候し云々とあるをみればとかくに爲兼卿に劣らじときしろひ給ふ餘りにはかゝる心きたなき事をもし偽書などを作られけるにやと疑ひ思はれ侍るされど此卿は幸ひ人にて息女爲子典侍と申けるは 後醍醐帝の御いつくしみ深く第一第二の皇子の御母にさへおはしければ此御ひかりにて御代のはじめに續千載集を撰ばれなどして又此かたに勢うつりにければ爲相卿爲兼卿もやう／＼にけおされ給ひて只此二條家一流のやうになりて當家によらざれば歌といふ物にはあらざる如くいひなし種々の掟どもとし／＼におほくなりもて行玉葉、風雅の勅撰をだに邪路なれば見る事なかれといましめられしかば爲兼卿の歌などはまして口遊びにもするものなくはて／＼は何ゆゑにかく忌嫌ふぞといふことわりもしらでひたすらにいひ落しにければ四百餘年の今に至りてはさる名高き歌人おはしけりとだにしらぬ輩さへあるは歎かしとも歎かしき事ならずややつがりはやく此卿の風體を好みて玉葉、風雅をつねにくりかへしながら猶あかずして此卿の御集世に傳はりてある

ものならばいかで見てしがなと神佛に申さぬばかりにねがひをりしにさいつ比都にのぼりてやごとなき御あたりのしかもいにしへこのませ給ふ御方へめされて何くれと御物語のついで爲兼卿の御うへにおよびてかの御集のことを聞へ出ければその御あたりにもこの卿を慕ひおぼしめしける故に其集かねてをさめ置給ひつとてやかでうつくしう寫させてたうびたりきそのよろこばしさ何にかたとへ侍らんおしいただきもち歸りて見侍りしに正本は中院大納言通勝卿の御手跡にて妙壽院殿の御所持ありける御本のよし奥書に見ゆ歌數二百七十五首こと／＼く新奇にして然も詠物の正義を失はず本として歌よまんにはこれにこす物あらじと夫より後身をはなさず家の寶としてさし置つるを柩園のあるじはかねて珍書を好める人なればとり出て見せたりしにいたく珍重してかく有がたきものをひとりもてあそばんよりおなじくは板に彫らせて世の人にもしらせよかしとしりかきをさへ書て返されければげにもとおもひたちて此外にこれかれの集にて見及び置つる此卿の歌百八十餘首を本集の末に補ひ附るついで本集の中にもまたく寫

し誤りたりと覺ゆる所々にはかしこけれど愚按を傍に書つけなどして都て四百六十四首ふた卷としてふみ屋にあたへつかゝる事はいともおほけなきわざながらこは彼三代宗匠の没後歌の道も何事も猥かはしき世に出給ひながら人々のよみふるされたる跡によらずいにしへふりによみあらためんと一家の風をたて制の詞などいふわづらはしきこともなく見るものきくことにつけてひたぶるによみすゑられたる此卿の心ひろさ才のかしこさをあまねく世にしらせて僻案以下の偽書どもに惑はされて琴柱に膠する輩の眼をひらかしめんとてのしわざ也けりよしや正道をしらずして邪路にみちびくゑせわざなりと譏りにくむ人ありとも我は無學無智にして道理に通じ歌學をもつとめざれば歌をもよむことなくたゞ歌の道の僻言を悲しむといはれたる梨の本の一樹をたのむ蔭にて水無月の照はたゞく日をもいとはず汗とゝもにかきしるす

としの名文政とあらたまりたる日より

三十日ばかりの事になむ 北川眞顔印

いまはむかし玉葉集えらひたまひし大納言爲兼卿な

んあやしく其ころの歌口にはおはしけるさるものからかの卿のうたの今やうすがたなるを玉津島の御神も和歌の浦に御耳をやあらひたまふらんなどいひかたぶけたることのふるくも聞えたるは歌のよみくちのすぐれたもふのみかは世のきり人にさへおはしければねたくやすからす思はれてのわざにやあらむさばかり人のねたみいとふまで時の歌仙にていませしをいかゞはしけむ家の集の世にありともきこえざりしを北川眞顔のぬしさいつころやごとなきあたりよりもとめいでゝ文櫃のそこにふかくひめおかれしかどかくてしみのすみかとなしはてなましかばいまだにかく得がたかるをまして後にはひたすらなきものにやなりはてんとて板にはゑらせられしにこそこの集のかくおほやけになりぬることは歌の中みちふみならせる人たちのいとよきしるべならむかしさればこの集見ん人かのくもりがちなる野守の鏡にこゝろうつさで北川のきよきながれにこそよるべけれつちのえとらにあたれるとしやよひつごもり岸本由豆流しるす

惺窩先生倭詞集

序

いでや此やまと歌はそさのおの神風より吹つたへて
をのか家々の桂を折人世々にたゆる事なしこゝにわ
か先生せの山人なんもとひやゝかなる泉のなかれよ
り出てつゐにくしのひしりの道のみなもとをきはめ
文てふ文をよみつくとはいへれとなをあきたらぬ
すさひにやこゝろをわかの浦浪によせてかひやりす
てしもしほ草を今はたひとり誦しみればそのすかた
ふるめきてことはけとをく聞とかぬ事のみおほかれ
とうまくみてはらにあちはふ人あらはその心まこと
なきにはあらざるへしされは世のもころをすつると
もからとさらにかたるへからず爲景むけにいはいな
くまた小學にたにいらぬほとにてをくれたてまつり
しかはかてを千里の外にをふに力なくふみを一牕の
中に學ふにたよりあらすやをらあれ行故郷にたてる
四の壁もかたふきてうかつとなきひまあらはにをの
つからとなりの燈もひきつへしやゝふはこをおひて

行かよふとせしほとにはからずして垣上人も竹の林
の光かくれにしかはみなれ棹さしてをしへむ人もか
なと志賀津の海士の捨船のゆたのたゆたによるへな
き心ちせしをたまゝ玄同子情有て書を講し詩をと
きて我たらちねに請し惠の露はかりたにむくゐんと
はけみしもかひなくあらぬわさはひにあひぬをのれ
あまさへおもき病ひにさへをかされ藥をにる埋火の
もとにむかひていたつらに年月ををくりしかいつら
宮つかひし後はひたすらになたのしはやきいとまな
くてつけのをくしのとりも見ぬふみはむなしくしみ
のすみかとなるもねたからすやもし人有て名たゝる
跡のことの葉やいかにととばうさきの裴ともこの
集をやこたへ侍らむさてもこれをえらへりしは行水
のはやくの事なりしかとひそかにかうかへおはすめ
れはそのあやまちちりひちのことしまゝにはらへは
まゝにおほきためしはけにもしられぬるをよそに見
てたゝにやまんはかつふけうに似たれはみつからこ
れをあらためしかも猶のこれる玉を伊勢の海清き渚
にひろひいてふたゝひこゝにかきつめ侍るまんは
民部卿法印道春とゝもにはかりかなは西山前少將

入道にとふらひ公軌をしてうつさしめやかてあつさにちりはめんとすへて十あまり五卷なつけて惺窩文集といふゆたかに長きはたちの年の長月十二日先生廿五回の正忌にあたれりいさゝかこれをしるしてかつとをきをおふ心さしをのへ侍る物ならし

惺窩先生倭詞集卷第一

春部

立春

かすみつゝそれともわかすあめつちの初めもかくし春や立ちむ
 春やまたたつらん門のけふに明てしりくめなはのくり返しつゝ
 棹姫やはなのかつらなかけそめていろなる雲の今朝はみゆらん
 おもかけはおもひそめてし色にけふまつ咲花の春や立ちむ
 何となくひとの心のゝとかなるそらにうき立はるにやあるらし
 風のやまひになかされし年の春

花にのみいとひなれこし風のなを身にいたつきの春は來にけり
 はかなくもまた咲はなと頼むかなに幾たひのはるをかせへて

依風知梅

玉すたれさなからこゝも咲梅のにはひにこもるよそのほるかせ

柳先花緑

春の錦緑のいとたてはあれとはなをそけなるぬきもあるかな

花経暗水

ちるはなのなとさく水のうき枕夢路もかはる春のうたいね

靈山にまかりて花を見てよめる

春ことにおもふ物からあらぬ世の花もこゝろをけふみてしかな
 花の比人のさそひけるにいたはることありてまからさりけ
 れは

花

例ならぬ身はふしなから花のかけこゝろは人になくれやはする

世のうさをよそのしら雲かほりつゝ花はいつくもみよしの山
 溪水の月影かはるはなの枝ははつ雪またぬゆきのあけほの
 山かけの雪に棹さす舟やいつればなよりいつる春の三日月
 四の時おもへはおなしとせにはなにあやしきはるのほとなさ
 いつはりの花にもわかぬ世なりけりたかきことゝやみねの白雪
 旅衣あやないつこのはなのかげれてのあさけの香にのこり行
 山人のつま木のつてにみし花のいろなき袖もかににほひつゝ
 かめにさすはなにも手代を契る哉ければ櫻のとしことの春
 誰駒やつなきし峯のいはほよりをちくる水にはなそなかるゝ
 はなかつらそれかと匂ふきみがあたりあたにいさむる峯の白雲
 吹やいかにをのか枝ならぬ香に匂ふはなさくばかりみねの松風
 枝たかみおもふこゝろのかよへはや手折ぬ花の袖に落ぬる
 迷ひなをのこらむ物をさく花におもひつくみの春のころもて
 かさゝすはくふへき物を花たにもはつへき老の行末のはる
 月もはや夜やふけぬらん更ぬとてたちさりぬへき花のかけかは
 たれも見よ惠の雨のいつしかにうつればいとふはなにふる世に
 春雨
 さひしさも世にふりかへつやま里をうきに忍はぬころもはる雨
 春雨の親のいさめのいろにさくはなをしみれば物おもふ身や
 春雨よぬるとも花の色にいてはそめはや残る春のころも手
 相國寺幻菴上人むらさきつゝしを贈りける返事に
 紫のはいはなくるとはるは見んつゝしの色にのりのころもな

紫杜鵑花

あけうはふ色にくまるゝ身を聴てほといきすくる花のむらさき
海棠

あかぬよのはるの燈火きゆる雨に眠れるはなよれふらすを見む
春山家に友をこふると云事を

春霞そなたにとはぬやま里のかきねの柳雪のそこなる
正月二日由山居士の許へ衣をなくるとて

君がため春のころもばうすけれといはふこゝろを重れそへつも
題しらす

ほろ／＼ときしのはね音をとつれて人こそ見えぬめをさまし宛
ともに見し面影かへてはなになきとりにおとろくはるの空かな

暮春

日は春とくれ行そらのしたはしく名にはつなかぬ絲さくらかな
おくれこし深山かくれの櫻はなちるをもまたて春やくれまし

三月盡

はるはゝやけふ月なみのさそふ見つ花の行ふに身もなかれてよ
明ぬまの花にやかゝけつくさましさてもわかるゝ春のともし火
三十のやのかすさへけふのしたばれてくれゆく春のぼなの小車

夏部

子規

山の端の月におくれぬほといきすなそへもあたの窓のともしひ

勝熊が歌に「子規をのか楠なる聲よりは待てふ人をきか
ぬこころ哉」とよめるを聞てつかはしける

なれさへやくたり行世のほといきすまために來鳴里のあまたに

信澄が歌の返しに

夏草のみとりにうつむまとのうちにこゝろあれなと月の夕かせ
あはれしれ人の情はかたき世のみなみのかせの音はしてまし

五月雨

はれくもりいくたひけふもあすか川ふち瀬を庭の五月雨のころ

夏月

夏の夜の蟲の音いそくすゝしさにこほりをかたる庭の月かけ
すかみの袖打はらふゆふたちの残るしづくに月そこほるゝ

蓮

はちす葉の濁にしまぬ花をしもとればとらるゝたをやめの袖

納涼

涼しさばなをむすふての水よりもすむやこゝろのしつかなる暮
焼しほの關吹こゆるけふりさへすゝしくなひく須磨の浦かせ

唐のあふきに書て人につかはしける

時しもあれてる日のもとあつければあふきても見よ諸越の風

題しらす

この比の夏のあつさの人こゝろおそろしき世をひとりかもふる
かたるなり友こそ夏をそよさらにそかにみゆる竹の葉の風

長嘯子の歌の和答に

夢たゝよはしげん人の昔の夏の雨はふりにたりしをふみな
んすしけむ今の庭の面にもまたそ詠たまふる言葉げにさこ
そうつり行らめと雨も人の心もばたかばらぬことほりもあ
りけりなさはいへと慎の戸の明なかななる枕の月は人わき

して色ことなる涼しさもなしとはいへらす
ほすむきをふみにわするゝ庭の面にのこるむかしの夕たちの空
心なしおもへはおなし夏の月もたか枕にかさやはすゝしき

惺窩先生倭詞集卷第二

秋部

秋

目の色も秋はさらなりそめつくすあはれな月にゆつりすてつゝ
たか秋の夕を染てさひしさのいろとしたてる横のしたいほ

初秋

つゆよかせよあかしよりけにたいならぬ夕はまたし今朝の初秋

七夕

ことの葉のあやに戀しも織女は人のねかひのいとならなくに

萩似人來

人ほかる萩のうれはのそよさらにひらかしものを柴のとほそよ

草花非一

種なきしはなの數さへ八千種にあきのこゝろの色そみたるゝ

秋夕傷心

さひしさの秋のいつこが外ならんゆふへなやとす心つからに

蘭

ふちほかま誰かゆめ路にか通ふらん野をなつかしみ秋の夕かせ

月

たえてやは人はしのはむ草の菴に月もすみけり我もすみけり
雲埋むまさきのかつら月はもりぬさてやこの世も住ぬへきみを
晴るまの雨にかりほのとまをあらみもりにしほとはもらぬ月影

世にふるやさそなためしも有明の月の行ふにかゝるむらさめ
花にいつれ色はへまさる朝日かけにほひしまゝのありあけの月
なが／＼にくもれば晴るつきもみつたためなき世のうき雲の空
見ましかはかたふく影や惜むらむ雨におもひ出のあり明のつき
廣澤の草のかりねのつきに行雲の夢路もゝろこしのそら
秋かせにみたれそめにしくる髪はたれをあるしのやとの蓬生
あさちふわたかなみたにかなれし月こよひ都のにきはしきに

八月十五夜

めくりきぬ月をやためし人のよもいつかはこよひ秋のなかはの
世中よくたりはてにきこよひしもつきすみのほろいにしへの空
八月十五夜月曇

中秋雨

世をはいまかくのみしりし月にこそちきりし中のあきの夜の雨
くまもなく心にしむる秋のなかは月は出にけりあめの夜すから
市原野月見

中秋市原看月

山も野もいつふる雪にしかすらんとおもへは水の月そなかるゝ
秋の半おもふゆへありてひとり廣澤の池の月みんとさま
よひありきしに水はなみあせてたい名もしらぬ草のみお
のれところえかほにしけりあひいにしへのかたばかりた
にたと／＼しく世の有さまもかくやはとそ思ひなりぬ
ひろ澤の池の心のすむ世かは月のかつらもみ草ましりに

この歌人の見ましかはそのかみおもひけり水たいふと
も草やはなからんとそさもいはいいはむかし

獨見月

いひかはす物ならなくにつきにとふ古のひといにしへのひと

九月十三夜

今夜そとみぬもろこしの月やさば我あきつすのすむひかりかも

九月十三夜宗隆來れりけるに

共に見し月も今宵にめくりあひぬながらへまうく聴かしの身を

題しらす

しらさりしたゝ宿からのあきの夜そ月の都のよそならぬとは
うしとのみ何思ひけんこゝろからこのよも月のよそならぬよを
思はしなたまつら野の夕霧にうつろふ月のこゝろからとは
廻り來ぬ雲井のつきにさそはれてあきこそわたれかさいきの橋

九月九日

ことの葉は心の花のにほひもてさかぬもみゆるやとのしら菊
おくふかき谷の水の間にきく咲てなくれぬ水のにほふ山かけ
岡といふ人の許より「おもひやる種そさひしき一村の薄
うへをく山すみのいほ」といひをこせたるかへしに

分入しこゝろの跡はなきものをいかに薄のさひしさやしる
相國寺丹首座許より菊を折りて「白菊のうつろふ色のな
かりせば唯けふのみとなかめさるまし」といひをくりけ
る返事に

けふのみと何なかめけんしら菊のはなのあるもをむらさきの袖
此歌かの人のわつらひさはやき行末は紫の衣も此秋よ

りのあらましにこそ

紅葉一樹

朝霧にほの／＼ひとり立田ひめたつやにしきのうはをそひして

九月盡雨

よしやさは暮行秋のけふの雨よあすさへふらはそれもかたみな

冬部

山落葉

木葉ちる木すゑに山はあせて猶ふかくも住やひとのこゝろの

寒爐燒葉

この葉ちる此ころさむき衣手のうらふれかほに焼すさみつゝ

雪

打拂ふ袖や千代もとあかぬ色の雪にくたさむをのゝ山人

ことの葉の玉のちりをや雪とつむくにのしつめの山たかきまで

法の師のさそいのるらんゆき折の竹より後の梅の立枝を

山蔭やたつればうとしともかきのへたてなきとち雪まるばさむ

初雪

けふそけに雪もはつかの月なからかはすひかりは風まとななり

名所雪

しつかなるこゝろや雪の宿なからたのむよしの一奥も見るへく

面影は夢かとそおもふばる秋のこすへの雪の大ばらの山

世のうさな夕のかれの一聲にみなや初瀬の雪のやまひと

雪にけふみはふりかへつむをかてもよし野の山のよしや世の中

江暮雪

くれぬ夜をおもへば照すしら玉のたま江のあしの雪のしたをれ
雪中松樹低

ふりつもる雪のそこなる窓のもとになれし聲さへうつむ松か枝

青山有雪諸松性

操なる高根の松のをのれたにけちめは雪のみせぬるものを

霞

玉あられかやか軒はのふりはてゝ今朝みる程はこゑなかりしか

寒對月

見るかうちに雪けの雲はさえはてゝあらしを出る月のさやけさ

寒夜月

ひかりやゝうすくさえ行衣手になれにし物をまよひのまのつき

旅泊千鳥

ともをなみあるはさなからこと濱のうきれのね覺千鳥なくなり

河上水

川かせの行てやしのにをりはへて波の紋目の氷るなるらん

これや世をわたる朝の河ならむうすきこほりをふみまよひつゝ

逐夜氷厚

氷はてし枯葉のあしの夜をしるやなにはの道をふみまよふしも

題しらす

さつまかた雲にほえけん犬もさや梅さく庭のふゆの明ほの

歳の暮にある人の許に遣しける

人の世はなきもおほかる年のくれの命にまさるおもひてやなそ

なすこともなくて暮せる年そさはたか爲ならぬ世をし知ればや

風の病にあてられしとしの暮に

かせましり涙のあめのあめましりかしらの雪のくるゝとしかな
歳暮

やさしくもくるゝ年のみゝくまのゝ浦のば木綿がされゝて
いつまでかわかれわかれん我をすら年の思はんげふにもある哉
えやはいふ限りあるみのかきりなき年をはかなふげふに暮ぬと
なげくそよ今こん年と別れてはあはんとのちのたのまれぬ身には
かなくも又なげくなり惜むとて暮ゆくそらのことしのみかは

關路歳暮

年よ關すえてもこゆるこよひかな鳥のそら音をたればかるらむ

惺窩先生倭詞集卷第三

別離部

宗隆かあかたにまかり侍る比つかはしける

朝夕につられし袖のわかれてもおなしゝろの香にゝほはまし
きみならて葎の門のさしてとふ人はありともひらきやはする
まつとたに我はちきらしはなになまつ都の春をわすれし物を
宗隆に征衣を贈けるに返事せさればかされてまたやると
てあさちか下に啼からしたる蟲のかこと計の心さしをむ
なしくおほしてんばあまりに情なくや

武さし野のつゆわけ衣君かためはた織むしのなさけばかりそ

也足軒に和答してをくりける歌二十一首

今日しも神無月朔日さる人のむすめともあまたおほやけ
のかしこまりとするかにおてくたり侍しをあはれと聞
ものからさらぬよその袂とも打しくるゝは人の心の岩木
ならぬなるへし

たか親のこゝろの闇のかきくれてけふし時雨るそらにみせきや

このたびの老懷なのへられし事ともを見て九月半にや
しらさりしたれぬさめの秋の雨の子をおもふ道にふるは涙を
駿府へくたりの事さたまりて

命なり此世のうちはあめつちのよそならぬものを遠きわかれも
同晦日のあすとの日

老か身を千代もと猶も祈りをかむしはしわかるゝ人の子のため
十月朔日都をいたしてし日

大空をおもふばかりに人のおやのそてよりいそくはつ時雨かな
くらへみよこの思ひこそ何ならぬ長きわかれもあればある世な
たか心おやなき國にむまれしを子にしりにけん子にしりにけり
よの常のうきにはあらぬ世のうきとさや思ふらんそれもよの常
おなし夜のあがつき

かなしさの涙よ冬のさよすからいをねぬ夢をむすふつらゝは
われにとはいなるかなりとはなそいはむ悲しき事は悲しき物を
二日
なげかしよ思ひわがすはわかれにし昨日のうつゝけふの夢とも

同夜

いかにせんねいはや見えぬうきはあれと別の後も夢に別れば
三日夢かた

かよふらむ心木の葉にあともなしわけ出しよの庭はさなから
うつたへにわすれん物かわすれ草枯なはかれぬうきもかた身を
四日陽明の御歌の和

はいそ葉もあらしの色にいつみ川かけしや波なよその袂に
たのめなく星のやとりや木のもとをひかりにみする千代の白菊

五日たよりの文を見て

みすしらぬいつくの袖のみなとよりかへりよるへを水莖のあと

八日

はふらさぬ心をしらはをのつからいかにこの世を捨ててしまし
殘しなつたる貝おけ

終に逢むかひあるかたのかひやこれ人をふたみのうら思ひすな
又

愚哀

ゆけはゆく心にとなき道はあれな見よあま雲のよそにへたつと
よしやかのうきにつけても猶頼みつみに泣らんさけある世な
紀伊國へまかるへきあらましせし比東におもむき侍る人
に

松の葉にうつろふ月をかれて思ふもみちの秋のわかれのみかは
行はゆくこゝろは跡にをくれしをつらねし袖のわかればかりや
わかるとも音信のみはゆきかたのふしのなるさは絶すきいてよ
わかゆかんきの關守よたつかゆみ引かへてたにといめましかは
わするなよ車のうへにこといはし小笠かたふけそれとこたへん

細川内記の東にくたるといふまこひにきたれりけるか
すゝろに涙のおちければ「情しる心の花よ又や見んいの
ちありてのはるにあふとも」といへりし返事に

今そしる心のはなのなき春はときはいつはとわかぬかきりを
小幡孫一郎關東におもむき侍し時薰物を贈とて同心蘭と

いへる銘をその包紙にかきて

東路や秋行野へのふちはかまおなしこゝろの香やはわするゝ
もころしへわたり侍らんとてつくしまてくたりし時しれ
る人のもとへよみてつかはしける

なれてうし人の心をつきにはなにおもひいくへの山のおもかけ
その時船を鬼舁かしまにつなきて

やまと歌のあはれかけり目に見えぬ鬼のしまれの月の夕なみ

おなし時

薩摩かた八重のしほかせ告やらんあはれうきみは親たにもなし
けふりたつ澳の小しまやいにしへのおもひの色をなを残しつゝ
見よいかに雲路の鳥はとひ消えてかへるゆふへの山もありけり
東にくたり侍る時富士山をみて

白妙にふりつむ雪もしほしりを山のすかたにけふりたつらし
時しらぬ山のふもとに五月雨はさそな高ねのみそれなるらん

同時時

たか情かくやは我をくりゆかむみやこの月のあつまちのそら
おもはずや共に見まくのほしきかなみをしわければ秋のよの月

哀傷部

縦衣はつるいいとのみたれ心ちをさそとおもひばかり
侍れとつたなき言葉にはいびとくへくもえあらて

いなつまのひかりによするみの露やつもりてふちの衣手のそて
玉よはひかひなくなれて由も野もたゞ秋かせのころをさながら
月にわかればしうつり行横雲のきいてかなしき世のならひかな
しらさりき千代もと祈ることのはのしるしを塚の松に見んとは
人の上にきえしないまの身にしらはおもふに過ぎてさそな悲しき
翠染の夕への雨の雲と見しはきみかころもの袖にやあるらむ
むかしたれかゝる恨をのこし置いてかせの木の葉の色にみすらん
たちなれしかさにも思へ教へてし庭にものこるおもかけよさは
さきはときこえしこほりなにかしのめしはからすおもひ
かけぬ有さまいまもおもへ／＼と夢にやうつゝにやいと

しもさたかならぬないかいおほえたまふにやさりし七月
のころせうそこせし筆のあとせめて箱のうちよりもとめ
いてゝひらきみれば我袖のみなとはいとゝかの水の江の
うら島の子かそれならぬいのちとのみさらにくやしむは
かりにこそ

人ことにゆめといふてふよのなかのまことの夢をまたみつる哉
ありし世の人の情のいまさらになかき恨とならんものかは
又もあはぬ人の形みの筆の跡をあけてうらみのうらしまのはこ
秋あさくまたし扇もおきあへつゆよりききにきゆる身そうき
霜をかぬ南の海になくしもものつるきをわたる世はつかのまな
つのうへ光のうちのひとの世をさらぬ身にしも思ひかけきや
筆のはな矢かせの紅葉散にけりまたきさかりを名にのこしつゝ
詠めこし心のすゑはいまもなをやいろの雲に立のほるらん
みせばやと契りてし翰の筆もかなにたるをそれと影もうつさむ
支同妻になくれし時いひつかはしけるなそもかくわかる
とならばといひなくりしをおもふにむかしありけんとは
きをならせし人しもいかにかなしからすやはあるへき少
へこそ侍りけめ

やへかきのつまをさすきのさしなから今やわかれの雲隠する
いなつまもてらしやあへむ本末のしつとも露もすみはてぬ世は
さいの葉のいまはた同じなとも似すさやく霜夜やあきのはつ風
秋のくれつかたさる人のおやのおやなるさらぬわかれな
つたへ聞とふらはましくおもひなりぬるおりからそなた
の山に月はそくかゝりたる大かたの秋のわかれたにあは

れ催しかはなるなましてとてことつてやりぬ

人のおやのおやのわかれのあきの月子のこなおもふ道照すらん
みちかはるをはすて山の秋のそら都のつきに何のこるらむ
このかみなりける熊谷のなにかしが好色のつみありて自
害したりけるに周丹首座につかはしける

なにかしの主さる事のゆへありけらしものゝふのたけく
いさめる心さしいちはやきあまりにや秋の半またなきあ
へぬ霜のつるきのさやつかのまに身つからき点しはかな
さを思へば猶あとさへのこる庭たゝきのはらからあまた
あるか中にかへにむかふる法のともし火をかいけまし
いはほにたいめるしるしの衣をつたへつくへき人もさそな
えたふましくなかなしあへるとなりのかりもかりも
へたてなきあはひいとせめてうたはぬ歌のしのひ音にや
とて

つらねこしおなしえにしを水鳥の獨やくかにさそまとふらむ
いさむ名はなないやたかき大ひえやはたちあまりの五とせの秋
色にそむこゝろのはなをいまみればむなしきのりの種よりや咲
浅野紀伊守幸長身まかりける時

たか爲のよはひをのへてあきかせや吹上のさくの色もうらめし
思ひおもふ人のなさけの色に出てたきし紅葉のみもこかれつゝ
四十あまり九年とていなつまのひかりのうちのなにかそへけん
ありし日は國にむくふること草の草やむすばんつゆときえても
いはさりし今ひとことの悔しさよ永きわかれのそれもかたみを
又たくひすくない神の名そつらき世ばかりるわかれしもせし

時しもあれちるやあなうの花のいろはみにしむ秋の月に残りて
かすたらてなく音はおなしかりのよなわれも南の海なみたよ
友千鳥をくるゝ袖におもひいつるいつはと時は和歌の浦波
なき人のかへりくる身のなにしておはいうへし木末や蔭と頼まむ
おなしころにや

さよかせやいかに吹上の友千鳥をくるゝこゑの袖をみなとに
君しいますき行友のかすそへてなかは泉のみつかうき
和人哀詞

いりにげん春の鶯おなしなにのりのかとはまことよりこそ
題しらす

有し世のなき名悲しき山ふかみ雲かくれにし月をみるかな
面影は有しなからをせめてげに物言ひかはすならひありせば
闇ならん夢をばかなみ玉やさばさむる枕に有明の月
名はきゝぬ言の葉ことの玉の緒も永きためしのなとかなるらん
細川内記忠利のつくれりし友涙集のおくにかきそへける
みし友のなみたとななれ身はいつかなかはいつみの水莖のあと

惺窩先生倭詞集卷第四

戀部

戀

身はいつの恨の空にたちのほりみせはやくゆるむねのけふりな
あはれしれおもかけのみを身にそへてこれさへ君か情とそ思ふ
はしめよりいなにはあらていな船のいまほにいつるよその浦風
花染の重れてといひしきぬ／＼のひとへにかはる空さへそうき
あひそめていまさらいかにしかま川よそこにみなはの消人行衛よ
身にそへし面影をのみなさげとや言もかよはぬ中そかなしき
恨すよれてかさめてかつかの間もいつかはあはぬ面影そさは
夢うつゝ現もゆめもたゝならしひるはひめもす夜はずからに
午ふともさてやとはて山しろのこまの瓜生のなりもならずも

待戀

わすれはや契らぬ夢の行ふたにあしたの雲の夕くれの雨

寄蟲戀

おもふこともえてし色にゆく聲さはかりみせん我がみともかな

寄蟲忍戀 代人

なればなをゆるすれになくきり／＼すしらしな下に忍ふ思ひは

寄鳥戀

おもひあまりなかむるかだの空たかく飛にや鳥の影もはつかし
よしさらは我がやの雀それとたにおもはん人のことのほもかな
なふひなきとりも翅はあま雲のよそに成ゆくそらななめつゝ

難部

燈花

ふみ見ればむかしの人なともし火の花にそ契るよるはすからに
みな人は春のいろをやいそくらむひとり夜ふかきともしひの花

雨中竹

世にふればなひくや竹のぬれ／＼ておのかいるなる秋の時雨の

山河

世をもすて世にすてらるゝ身なればやさしてはうとき山川の水

海路

いつしかに行とも見えぬ沖津ふれあとなき波の末のしら雲

碧落無雲稱鶴心

日もはるにむかふ心の雲消て飛ゆく鶴の行ふしるしも

寄日懷舊

てりとをる國のひかりをわくらきころにあげよ天の御柱

寄月懷舊

秋ことの同しなかめをわれからやむかしにすめる月たにもなき

寄硯懷舊

すゝりのみのちなりけりと思ふ哉たかよのふみの四の友とて

述懷

有し世に名をはうつみぬ身はいつのいつくの山のこけの行ふや
人はいなあひやとりしてふるふみのしみのすみかをとおのか棲に

浮世とはたかまことよりつけ初しなのいつはりを聞ふしもかないつも／＼同じことゝて世のうさなひて唯にはやむへき物かいてやよのなとまたすきかけてさば同じことのみ明くれの空いにしへにもへ富まさる高きやにみせばや民の立てしけふりを

獨述懷

たかみねの草葉にうつむ谷のまつつらんれば霜の後とも

壯年述懷

まとはしとまなひしとの秋もなしわか身にかへす春の荒小田

老後述懷

身をすれば老ぬらむまそはつかしきひとの人なる道まとふ世に

驢馬倒載圖

わすれけりしりえしそきにしそくなりゆるやたゝ世を兎馬とて

横臥樓 樓名

山も我もよこほりふせる窓のうちにのらぬものはよその浮雲

白雲 酒器名

壽のみみつのうれへの外やこれかのしら雲のかゝるやま入

蟬丸 刻石爲像 是相坂之舊物也

世のちりなもぬけのからのうつ蟬の蟬丸とたも名にしおふらむ

宮よりもわらやのあるし四の絃のこゑなき聲は石にのこりて

四の絃に六種の歌にわらくつのわらやのあらしいひにうへきや

玄同のもとへ蓬窓日録をかへしやりける文のなくに過し

ふいたく更して燈火がつきえみきえずみかゝけまし

ひとの國われも蓬のまとのふみおなし心をかたるともし火

與順知 叙在別卷

かくばかり道こそあれなおもひいる山にふみ見る世々のふること
蒙菴大書易菴

もいのはな五百とせかくす山水も道しまことなしればしるきや

いつの比にや春日高野なと見めぐりける時よめる八首

春日山

かすか山ふみまふ道に松の葉の塵をつげとやたか家のかせ

今宵月三笠の山の草まくらゆめかうつゝかもろこしのそら

老木うつむ雲間のほしやともし火のかすかにひかる緋の玉かき

高野山

たかの山杉の木のもの月ひとりすむらん人のむかしみしはや

たかの山法の席をまきもあへする五千人はためしなのよや

高野山うき世のほかはなかりけり八のたにすら八十のちまたな

さよふけぬ三のたからの鳥もなしうきよの夢をのこせとや思ふ

骨堂に骨のおほきを見てよめる

塵の身のたれつもればや高野山名をうつみつゝほねはうつまぬ

題しらす

代々にたれ硯の海のなかれ行てかへらぬ水のあはとみなから

身そためしくみ行く人はなきものをすめはすみぬる山の井の水

なからへて人も梢のかせの音を植る小松にまつ契るかな

いつくより何のためとか野を遠み尾はなにしり人ひとりゆく

こけの下まねきし月も夢の世をいつらはつゐのうつゝともみん

山ならぬやまとおもひし松かせなとばれんとたに思ひかけきや

谷水のなにやなかれんおるかななるかけさへ移す身にしおもへは

みなきりて秋の行水河原毛の駒か牛かもわかぬばかりに

月にとてむかひしかきにみいつくのゑやはきいとく文の古言と
むらからす夕日さひしき嶺とをくかへる翅のいろに暮ゆく
はかなさは水に繪をかく紙や川向しことをおもかけにして

桃花源

かくれきぬいく五百年の情よりこゝろをあらふものはな水

蒙山

なかれては天地ひろくひたすめりやました水の木かくれてたに

氣象巖

心あてにいほはたかく見えなゝんむかしの人を面影にして

去し年嵯峨の山莊にあそびてところ／＼みありくつゐてに
なつけぬ

浪花隈

ひとこゝろあたにさくらの春の色のはなよりけなるなみの花かも

群書巖

かくしをくたかよの文のあとならむすかたを山のたゝむ巖に

鳥船灘

波のうへにはなれてなとふ鳥ふねやかみをわたるはるの山川

觀瀾磐陀

ことにいてゝえやはいはまのさゝら浪たちて見あてみ洗ふ心を
おもふとて人はゆるさぬ出水をこゝろにむすふあらましのいは
石にすゝきなかれに枕この山をおくゝやおひくいなんと思ふ

市原の山莊その景あるものことに八の名をつけ侍りて

飛鳥潭

とふ鳥の明日かといやはいひあへんげふの淵瀬の流れての世を

手月嶺

いく世たれ雲のよそにやなかわらむわけてにむすふ水の月かけ

朽斧松

ことの音にくたすや斧のえにしあればこの山かつの軒のまつ風

巖牆水

岩かきや水のすたれのたれこめぬ世のありさま隔て果てゝき

北肉峯

心をやそかひにすらんひとまれも北のそかひの山のばなはに

流六溪

たに水のみつのまに／＼なかるらん穴のむなしきかたも定めす

洗蜜料

たかみそきいかにかくしてかくるらんみそか心は神もしらしな

枕流洞

うたゝしの枕なかるゝみつ草のみとりの洞は春秋もなし

長嘯子の許より椎の木をほりてなくりける歌のかへしに

しめをかんときはかきはに椎か本をそれより君か隆と見てまし

たくへみんしゐのうら葉も白雲になかばゝゆつる峯のいほりや

たてかぬるやとのけふりのさひしさにひともとあかつ谷の椎柴

みつから作れるかなの詞に佐方入道宗佐か注をしたりけ

るをみて感してその心さしをしたへるにやあらん便につ

ていていびやりける

さそひとり友もあれなとおもふらん花ほといきす月雪にこそ

なかわらんそなたの空は八雲たつ雲のいつこか出雲ならさる

しらぬ火のつくしのひととはまたしらぬ心ゆきてや友と契りし

慶長甲辰の冬陸船の説を道春書侍りける時に此歌をよみて宗隆につかはしける

たかいほの名のみ船とて渡りあへず陸にもしつむ波やかくらむ
駿河より道春ふみなをくりけるときの返事

有てうき身のさかなさにおもふかな不死の薬もやきてしよな
富士の雪におもひも出ふみそめてしはたちはかりの山のはの月
この歌は道春二十二歳のとき初めてまみえけるによりてかくな

なれよふし雲のうへまでいや高き名の實をもしかれと思ふ
やまひの床にふして心ちいとあしかりける時よみて長
嘯子の許へつかはしける

しのはれん我ならなくにまつ忍ふともに見しよのはる秋の山
物ことにされるはうとき行ふとてきみにうらみん言の葉やある
明ぬるかくるゝ夜毎のことほりをゆふつけ鳥もわれにつくなる
人につかはしける

君もさは思はしとたにおもほえずこはさていかにうしやよの中
平の昌茂修學院といふ所にかくれて侍りける比とふらひ
まかりたるに「大比叡と音に聞しを今宵しもさむさしら
るゝかたしきの袖」とひとりこちければ

かたしきの袖に落つる秋のかせ枕のうへの大ひゑのやま
かくてしばし物かたりなとして

大ひえや麓のさとをたつねてもものいひかはす月も有かな
其後又かの里にまかりけるに折しも時雨のふりければ

神無月さらぬ時雨をいまさらにたかいつはりの世にやふるらむ

狂歌

飯にうへていと腹さへ脹るなり思ふ事いはんあれやほるへく
道春に金剛經の口義をかへすとて文のなくに

ふみしりて佛の道をゆくなとやこんかうをみなくきつけにして
道踏んこんかうさやうのくきつけをしらて走らは足のふんぬき
江戸にをもむきし比淨土宗の寺ちかきあたりに一宿しけ
るに夜日と名號をとなへてかしがましかりければ
をろかにも西とはかりはたのむかな機土に淨土はありける物を
下部をいさふとて

手のやつこ足のりりもの人は唯つかはぬならはつかはぬそよき
人の臍脇をなくりけるかへりことに

嬉しさをとおつとせいてはいかならむ妙なる命のふるくすりば

惺窩先生倭詞集卷第五

倭文部

長嘯子立春の歌を和してつかはしける

君によりまつたつ春の音羽川

波に言葉の花そなかるゝ

清見かた岩こすなみはたちぬはぬ

きぬをや春の富士の山姫

吉備のさけに細谷河を汲なさむはなにてはゝるはる
のさかつきもとより市に虎はなしそうしんもいかて
ひとをころさんくしくよき玉のひかりをうつみはつ
へき理やはある岩こす波のぬれきぬをあらたまのは
るのひかりにほしかへて千代へん仙人のたちぬはぬ
ためしを君かみけしと奉りけんはなに山姫のしわざ
にかあらんたまゝはるくはゝれる花に酔らん世に
しも生れあひもすそをたに濯んと思へとそれしかす
へきすへなければいひ送る言の葉のえにし我すむ宿
の枕すはかりなかれに帶せるはかり細きはそ谷川の
名にしおはゝ吉備の酒にもくみなしみかのはらたゝ

へてんこそねかはしけれあはれさけの泉のいつこか
さしてたつねゆくへくもあらぬかなさうゝしき宵
のまねさめかちなるあかつきのすさひにはたゝつら
つらふしなからあまつさかりをのみまもりゝてな
にかしのぬしか貧窮の歌とかあまたゝひすしてい
かはせんは一城の人たふれたるかこときはなの都の
世の常ならんをあやしのおきなはるもきの門のさし
てしる事もなかりしをさるともかきのへたてなきも
とよりかゝる折からもはや過ぬとつけこしたよりに
ゆき見しかはいにし春なるかたひらのかけすゝしく
いとゝなを甘日のかきりもいまいつはりによとおも
ひもそこなはれぬへくかそへもてつらつえつくゝ
とのみなかめをり白香山かなりはひをうれふるおな
しことをつゝりうたひあるしにたはふるゝになん
世をしるやむへもとみける色にさく

宗隆につかはしける

はなははつかのほとしおもへは

いにしへの人古のひとゝのみつゝめきしためしは世
の中のかはりゆくさまをなけき思ふ心やりにやあら
ん何の時にか敷しまの道のひしりとかや山莊をしめ

給し徳大寺の古跡をしたひてしはし冬こもり居し秀才なん有ける時しもいとすちの長をこふといふなる日影にはちかゝれと道のあさちにゆきいとふりしきて人めも草もおなし色にうつまれしにたゝしりへの峯に松のみひとりみさをつくりてたてり哀にさしむかひつゝ文つくへによりゐて文くりひろけふと興しおもふゆへやありけんからうたなり和歌なりからくひねりいたしていやしきちまたの邊繩のとほそのうちにいひ送り侍るかの身はおろちなれと心はひしりなりし人の書あらはし給ひけん文の名はをのつから目のまへの時とものにあんなるをいてや今のかたちは人なる物しか心はけたものにひとしくまねひてしもしらすほいなくまさらはしつゝさてやみぬかくさかしくいひおとろかし心つゝめるは我をおこすらんとそおもほゆされはあさちの松の人のうちにものこり侍りとよろこひていをねす心もすかゝしくおもひなりてかへりことなんなる

人めさへかれ野の淺茅くたちゆく

ゆきにし松も世をやみるらむ

しりにけんまたらふすまに聞馴し

をとせぬ松の雪の夜をやも

宗隆かかける神代卷にかしらかきをしてつかはしけるころ此歌をよみてをくりけり

大和文の神代の道はむへしおほやけことにてあまつ日つきの天地とゝもに傳へますゝちはいふにやは及ふわたくしさまに残りぬるも猶和歌の家と巫祝のもからの我にあひていへるなといふなるためしにのしるは道とするにたらずとそ桃花坊のおとゝものたまひしとかやいつれの世いかてか宗源のなかれの大江の水のおやなすことの葉にうつりて世の鏡とはなれるにかみつからの師の師なるは其氏人にて侍りしにさるゆへありてその家わろくなりつゝいとけなきより世捨ひとの道に入ぬれとさるふんひとのすゑとて文なんうるはしくて世のほまれも有けりもとより京極の先人つたへ來り父にをよひし故なきにしはあらさめれとおろかなるをのかしも彼伯樂か馬の三世につたへては鹿と成かへるとなりて力なくやみぬかしさても世はいかにそやそのかみの岩ねこのもとかやのかきはもゝのいふまでこそなからめあるは螢火のかゝやくさまにわづかなるをのかひかりをいひ

ほこらかしあるはさはへなすあしきためしにあらぬ
人のきゝをねちけまとはしてさたまれる世の五のつ
ねもやゝなくなりきみとひとゝの道したえなにの車
をくたきなにの舟をくつかへすなんあさましいてや
姨捨山にてりまざる月の色にたに物すくいもせの
山の中におつる川の流もいとあれて老ぬるものはし
つむ身に白川の水はおろくみぬなれにし友をも賣人
はたつの市路にもてさはきつゝうきことのみに月
にいやましゆくほとこそ物むつかしくたゆへくもあ
らねざるものからつくりてん八重の青ふしかきもせ
んすへなくかくれし八十隈ちも行かたしらてともな
ふ友ふねたになくたゝひとりさまよひしまゝにしは
らく蛛のすかきにあはらくし鶉ころもにかたちを
やつして住し所はげに都のうちなれとよろつひなひ
たるさましてあやしの賤の物いひさかにくゝこゑた
かく打ゆかみあやめもわかすかましくて朝な夕ない
となみあへる業をみれば、あらすみゝこすみ、黒木な
といふものもたけはたかりよきをうるにあしきをも
てをのれかしこけにとりしたゝめもよほす馬のみち
しるくあかゝりふむなしりなる子なとゝよみあひて

たまゝ酒しくらひつればよろほひまふかとするう
ちにいとけしきあしくいさかひうちあひゝたふるに
かほの人なる心のふたものなりけらしされはかくか
み中しもの人残なくたちもて行なるも神代の風二
たひふきはらひて民の草葉のすくなる道にたちなを
るへきものゝさとしにやかゝるらんとかへりてたの
もしき心ちもすめりこゝに柿本のまうちきみかい
なるえにかこひしといひしかこの鳥のいにしへの道
したふなる人なんひとりありける才さかしく手なと
つたなからて心をしりかたちをわすれ常にゆきかひ
しになをさりならすあるしのいやつくして隙ゆく駒
のあしなみのかけみぬまてにかたりくらし家鶏のた
れ尾のなかくほとに居あかしつゝにつかはしから
ぬやまともろこしの世々の古事におもひ残すかたな
くなくさむあまり彼文よみてきかせむ哉とすゝめし
かとをさゝしり侍らすとはいひなからさのみいな
みはつへくもえあらてそのうちの山とくさくたゝ
しくむすひあつめかきやりすつることになん

春

春や又あくる岩戸のけふしかもしりくへなほの引わたすらん

岩戸あけしはとめを春の朝日影匂ひしまゝかふりさけみれば
はなの時まわりと花のさく色にいまもましてる神かせよふけ

夏

螢ひの澤にみし夜のあけぬまゝの^いのかものとやあはれよの中
麻の葉の拂ひもあへすれちぬる人よさばへの神代のみかは

秋

やはらくる光あまねき月しづくの交にもあふく秋の夜のそら
がくぼかり神に遊なをり澄丹けいほればくたるよを歎くかな
秋の胆の極たぬ束縛むすわづなひひらいあまのむらきみ樂しがるらと

六武

神の代の宵のひまねの朝戸あけておもかけむかふよもの山々
櫛にたく霜しるし御決しるし今みるさへにおもしろのよや

經

久方の天のしたてる色にめていまめならずやは思ひそむらし
ざきたつる波のあやとてなる機の手玉もゆらの色になるてふ
和田津海の三年のほづのむつまじくおもひし物をさやなきつ鳥

山の中驛旅つる川の新さ

いふにぞくいかゞつかひの行空は鳥のあそひのあまのはと舟

述懐二の世を

常闇と思ひなはてそ面白くまたみしことのあれはあるよな
浮世なほ八重の青ふし隣てきなをのれいふせき蜘蛛のすかきも
入いづらむへ人の世は百たらず八十限ちにやかくれ行へき

哀傷

天地もおもへばちかき友かきのへたてはかなし終にゆくみち

賀

武きなもなくさむ歌の道しあれなすかゝしかる心つからに

長嘯子につかはしける詞

かやくきの藩にかけるよるへもあさはかに、ほの浮

巢のたゞよふいとなみもあたなれとさはかりたにな

くてかくやつくしき身にしもありけるかなやさり

とて人の隣をしめんとすめれば世にかすまへられぬ

ものしかとをいつたりの數あるかなかにつらねつみ

なはるらん於商の君かまつりこちしおりにさへあひ

ぬ牛ならぬはな繩さゝれ馬ならぬふもたしかくらん

はげにわひしかるへき世にしもありけるかなやんこ

となくてたま／＼人とをくかすかなる所ひとつもと

めえしかとうさきの裳とこたへしふみなんつくらま

はしくかりのいふも飛鳥河の頼にかはり行ことの

葉のすゑおもひ出つへくなりもてあしわたる庭のお

あは京飯の上のやとわぬ部の方なる

二上もあらうし、かぎふやみそなはし、ふ

つゝ、かの心や、こも公のそと、は人として

つゝ我々の明日のすゑにさしつかへあり合は

にかゝりと聲をあけてなくめりとはかりありてうた
ふその薄の歌

しけき野の蟲のねかねてわれそなく

ひとむらすゝき裁初しより

またうたふ松の歌

身をかくすよすかの山もあらなくに

なれたにしけれ庭のまつ蔭

とのみたのむ物から月はかりはもちこかしとそおも
ふさりぬへきよな／＼は契りあやまたすて月は出に
けり葉わけにくたくるひかりところせうきらめきあ
ひこれさへやまのすかたをおもかけにしてまつなつ
かしくうれしさはいへといつかはのそみかなふへか
らんをなにをまちかほにおほけなきあらましのほと
こそうたてはかなしなひとりされたる竹の杖により
ゐ影みたりの古のそらまでも心のくまなくすみほ
りめもうつら／＼なかむれば四方に人しつまりぬれ
と木末よりかよふものゝ音こそ聞ゆれかねにあらず
いしにあらずいと竹にはあらずかし手の足のふみま
ふかきりもおもほえずほと／＼しくありけらしたゆ
からすしもあらねはねやさしこもりひきかくるあさ

てこふすまのしたになを耳をあらひふしぬふけゆく
にやあらんしらへいかにそやあらたまり五湖の濤に
三更の枕をたかうしてゆるらかにまどろめは夢たに
きよき心ちそするやねたし時もりのうちなすつゝみ
にふとむねつふれ心のひしてさめぬればかはらのま
と桑の樞のひましろくなるまゝにをき出みれはいた
くかしける薄のかしらの花に霜置まよひうれ葉の風
のそよさらに心もなくてさむくたてるものをのかたく
ひしられてはたかはゆしおもへと／＼すへこそなけ
れかけより外にかたらふ友もなしや蘇門の山になか
くうそふく人そもとよりおもなれましはりさかふこ
となかりしかなへてなさけすくさすみさほいやたか
しとそいふめるあはれ獸の心ならて人のしわざもて
あそふ世ならましかはいひのふることゝさかきすさ
む墨の跡はあふきをうる賤のめもてつへく紙をひさ
く市人も價ましぬはかりものし給ふればことゝひわ
ひきこゆおはする山のそはのたつ木にある鳩のとも
よふ聲は聞給ふやかれすらしかりまして人としてと
かこちやれはいて此山祇のこゝろうかゝひて同しか
さしをとあるしなから世のならはしのさかなくてな

にはのよしといひつゝもあしまの舟のさはるふしお
 ほかれはやかしこにもおもふゆへあらんこゝにもい
 ふことあれとゆくりなくたえてひさしくをとつれさ
 りしのちは春はかへれと花鳥の色にも音にもうとまり
 はて日は春とくるゝことありうれはゑひとさむる
 事なくてうはひもさらぬ夏の空は雌雄の風の人わき
 しぬるを恨み身ひとつの秋の袖に紅葉こきいれしか
 たみたにあらておもはんことのやさしくとしもまた
 やゝくれぬ彼山よりせうそこもてくころしも神無月
 しくれにきはふならの葉のふりにしすかたを二歌に
 つくり山すみのこゝろいまたとけすほいなくなとこ
 とはの外に心のそこをつくしうるせくなにかひ給へ
 り鐘山の英霊もこのひとはしらの神の御心にやとお
 もほえりしはちらひてやみぬこの二歌はよるひかる
 玉なるをくらきになけあたふれはつるきはなくてい
 とともにふきふんてのほこさきをにらきてむくひせん
 とすしれる前にははもとにいたれらんゑみをそまね
 くへかめれとそをたにねかはしければやらんかたな
 くふつくみあまりもしの數もさたまらすことの心わ
 きかたき昔をさらにしのひかへさんとなるへしやよ

や心をさへはふらしすてつるけうのをのこにしもあ
 なりとてつみゆるへたまひてんとよ

君かすむ山の田ふせにふせいほを

我もむすはな契りたかふなむ

にこるさけにこらぬ人とよしゑやし

ゑひなきしつゝわらはなんやそ

元和五年の春夕顔巷の詞かきて道春にをくれ
 りける

五條わたりにはあらさなるをかのゑみのまゆひらけ
 て白くさける花の名は人のくにゝもやとたつねはへ
 りしにいさやことなることもしらさりきしかはあれ
 と心をたねとかいへれはいづくかおなしからすやは
 とてなんそこのふみそこのまきから歌ひとつかうか
 へ出のり

たねしあれは心は同じやまとも

からのうたにも夕かほの花

といへは又そいふなるをのれさるかたのたふせのふ
 せいはもたるにその青きかつらのほひもこよへれは
 ゆふかほの巷といふ三文字をひとひらの版にゑりつ
 けてかけつ露のよすか月の夕はへきらくしくひか

りあひてみぬ世のことまでおもかけうかみ心もすか
すかしくいてや此たゝいまのつゐてしてそのこゝろ
をもとせむればつかひにそのまゝなからいひやる

なにかいやし賤しきちまた夕顔の

花さへみさへ名さへなつかし

たにゝはなにの時の葦山にはなにの日の糧やとりし
ところのあまなしおしへしところのからもゝ草木の
名たにはつかしからぬかはおもへはすなはち夕顔お
もへはすなはちなりひさこ花あらは實あらんかし名
あらはまことあらんかしそのおろかなることはあら
てわれ何人そいとゝをろかにこそそれのとしといふ
より五かへりの草の青かりし時せの山のやま人所か
くなる

悼赤松氏三十首

赤松左兵衛佐廣通はゆかりあるぬしにてもとよりし
たしかりけるか一とせ世の亂し時龜井の何かししこ
ちことによりつみなくて切腹せしか年比ひめをきし
書物など形見にのこして文いとねんころにかきをく
りけるをみて

かくはかり終り正しき筆のあとを

みるかひもなく亂てそ思ふ
神無月思ふも悲しゆふしもの

をくやつるきのつかのまの身を

つるきはのくたきても身を鴛鳥の

惜むかひなく我そなくなる

かへりこんとかやことふゝこたりしいなは山はこゝ
かしこ其國さたかならざるにやしかはあれと時にあ
たりまことに名もつらき心ちのかこちかほにてたゝ
そのかたとのみおもひなりぬかの蘇長公か賦せし赤
壁も異論なきにしはあらすとなん

かへりこむものとはなきにいなは山

きく名もつらし松の言葉

萬代を住はてぬためしにひかれけん網にかゝりし龜
の古の鏡にかけてたにいかにくらかりしたゝ人のみ
はかりてん夢はかりもをのか身をこかせしならひを
はわすればてけりなよしやかの山鳥のをろのかゝみ
のをろかにてらす影にたにかけはをよはすのみおも
ひあまりつくゝとむかひし垣に耳つくらむもおほ
つかなくて聲も忍ひやかにひとりこちしことになん
なりぬ

身をこかすためし忘るゝ龜なれや

人をはかなみ夢になしつる

山鳥のをろかに照す影にたに

かめのかゝみの影やをよはぬ

昔山なりし人の虎と化せしためしは今の世にあること
にやひとのくちこそなをなともいふかれは虎はもの
のかはとぞ思ふ

人のくちうそふく虎のみやまなる

草木もしほり風をしくめる

しるよしゝて侍り磯邊といひし所は海にもあらず江
にもあらで名に聞ゆるにはたかひぬさらでたに僞り
おほき世のふたおもてになんねちけしたくひはけに
この手かしはよりも茂りあひつゝ時しもよきたより
ありてやおもひけんかゝる所のさまもなき名にたち
し波のさはきに人をおとしめしもあはれと聞物から
たまゝゝそこなるひとのことゝひかはすえにしひか
れてみつからのおほふにたらぬうすき袂も八重のし
ほあひにしほり侘ぬさても世ははかなき物かなかく
はかりなきけなきむくひのほともよせてはかへる波
のなきならひとやおもふ

立かへれをのれよせくる世を海の

磯へともなき波のぬれきぬ

世の物まなひなんする人のならひ上なきみちはをよ
はすも齡たに矩こえぬとやらんのかきりまてとはこ
そはけみけんよしされは今まとはすとはかりのほと
にたにひとせたらさりしあへなさもよしやその身は
まとはてもありけんよのため人のためいと惜からぬ
かはとて

學ひてし道にこゝろはまとはしを

一年たらぬよはひたにおし

此手書のなかの文の名によりて身つかからもおほくの
わさはひにあへり

壁の中石のはこにもかくすへき

世はなき道に文の名もうし

朝鮮の刑部員外郎なりし博士姜沆に五經四書などの
道傳られし後絶て久しき釋奠の式試科のさまとりい
となませみ侍りこの國にもあかりての世にはさかり
に行れしにや菅右相道真公の遺稿にもおほく書のせ
られけり彼博士のいひけらく此戰國のうちにてかゝ
るこゝろさしのおはするこれなん滕の文公のためし

おもひいてられて時に亞聖の才のなきのみそいとほ
いなからすはあらすとそ感しあへりけるおほくの文
のをくにかく言かき記しとめてをのかもとつ國にか
へりいにし

學ふとておしみしひまのこま人の

筆のあとのみ名は残りつゝ

おほやけのいとまありし折々のすさみには琴なとひ
きしことを

聞なれし人ならなくにことの緒の

たえなはたえね軒の松かせ

いにしなつの夜いたくふくるまで宗隆なとゝもなひ
つきみることのありし屋梁の残月に顔色をうたかひ
しひともさることやありけむ

ともなひし面影ながら夏の夜の

あたのかたみの月そかなしき

今よりのをのれさやけき月をたに

涙にくもるかけやかこたむ

うれしさの人の情のすゑ終に

おもへはうさのはしめ成りしか

天津そらうらみしとても我なみた

かゝる人にしかゝるへきかは
世のうさの逢さきるさにいひ／＼て

又いひ／＼ていふも言れす

歳暮

明は又春のとなりの笛竹や

世にふるとしのねをも忍はん

世中にかくてはあらしきてもいかに

と思ふまにそ年はいぬめる

なからふるはちに忍はん年くれぬ

あふけはいつのそらのしら雲

元日

としことをおもへはおなし花鳥の

なみたあやしき春は來にけり

はなならぬ人の名残のこそといへは

あけてかなしき春の櫻戸

前栽にとをくより花なんねこしうへられしに此はな

さかん後の春ことの我心の友とそたはふれしことを

時人をまたぬ物からねこしうへて

はなにくやしき後の世のはる

小祥忌

期年の正忌なりしに墓に宿草ありて哭せすといふなるためしをおもひてさてもいかに涙さへて今よりはかきりあるへきこゝちのし侍りて

今年しもかきりあればや限なき

なみたの雨のふるつかのくさ

夢とのみ驚くほとや二とせの

けふこそことのなみたをこそしる

大祥忌

つかの草かれては生る三かへりの

それならぬ世のうき年そふる

おくれゐていや遠さかる年月の

けふをいつまで歎んとすらむ

彼舊き友なりし宗隆のもとにいひつかはしける

語り出てあらはと問ん人たにも

なき世のなかそいやはかなゐる

ほとなくいまは昔にふりにしあとをことのたよりにたつねみしかは時うつりことさやしきもおもほえず目くれむねふたかりやるかたなきあまりいと物くるおしきわらは歌なんひとつ作り出つかたへの人にかりしにいてや世の人の心のたねしいにしへち

まもことならねはや平のむかしつ人のなかめし心のまゝの蓬にさまよくにてんとそいひしされとそのみちの器にたへたる人のたゝ此事とのみならひつゝ集なとひろく覺えなから狐のしろき裘をぬすみて鳥のそらねの關をはかりけんさましたらんこそ心のおくも見るべく人おかしぬるとかのからふべくもあらず侍らのあやしのをのか歌といふことしらすたゝ折にふれてなにとなくうかめる心をやりすつるはかりのすきみはおなしこといへるもいとよしかたくななるもおかしものくるおしきも興ありあらたあつくりてもよからし高州の刺史か數枝のはなを吹おるといひしもをのつかから少陵にかなへりとかへりてみづからこゝろおこりせぬかはとてやみぬ

蓬生のしけるやとはむかしみし

あとなきあきの淺まし世や

春の暮つかた西山にまかりしに賤のおの片山畑にわらひのほとろなんうち返してさひしくたてりしにふと思ひいつることの侍り四とせ五とせのさきならしいつそやへたてなきとちたつさひて此所に山莊の地をしのむとてみわたらひしおりしも此紫の塵打拂ひ

つゝあさりし面影もあらぬ世にふりかはりてなをも
のうきいろのみ身にしみまさる心ちせしかはいまは
いさきよきみさはつくりてん人もなしやとて

たか春の藤のはとらうちかへし

おもふかものをしつののをのれも

君臣之事

夫君は臣下の賢否を見てかしこきをは位にすゝめ祿
をおもくし玄からざるをは下位にをいて其分々につ
かふ是は君臣をみるの法なり臣は君の明闇をみて常
々敬をいたしいさむへきをいさめ恐るへきををそれ
百官以下の善惡を察して竊に君と談合し賢をは上
にすゝめいなゝるをは下にをき國民の賦税を少薄く
す薄則かならず三年のうち厚とるにあたり厚則國三
年の内うすく取にあたり如此にして先民を以て國
の本とし其上によりく君と臣と道を論し義を正し
國々の諸侯の忠不忠を察し如此ならば吉祥日々にあ
らはれて國治り天下やすからんとおもひ如此ならば
兵亂不慮に發て天下かならず危からんと思ひ此安危
の二を君臣の心の中に置て終夜寢す終日食せず家國

天下の平にならんことをおもふ是は君明なるにより
て臣君をかしつき奉るの職分なり又君くらきとて
其まゝすてす再三いさめ君を勵ます諫むれともきか
す勵とも不行徒に一旦の計を以て民の物を剝取君に
奉る者を良臣とし日夜に機變の巧をめぐらし君に諂
をいるゝ者を賢才とする時は其國かならず亡ふ然則
臣見^レ機其國をさるこれ異姓の臣といふされざる
の故ある時は其身を報し位を下り祿をうすく得て政
事をいはす只道德のみを高くし修己以俟命此を同
姓貴戚の臣と云是君臣に義あるのところなり

父子之事

凡父たる者子を愛するは天道の自然也愛せずむは何
を以父と云へきや愛するに道あり能子に物ををしへ
智深徳高からしめて君の徳を正し天下の政道を聞様
に手ならはす此を以て實の愛とする也徒に愛して理
を以てあひせざる時は彼鳥獸の其子を愛し牡牛^牝のを
のか子をねふりまはしたるに異ならず只世間の人貴
賤共に隨意にそたて無能にしてさてやみぬ能教とき
は貴も賤も皆天下の輔相となるをしへすして無能
則貴人の子下位におり賤士の子反て上位に登る彼貴

とへとも無_レ能則何をもつて天下をえらはんや此賤といへとも有_レ能則天下を輔相するにやすし是をしゆるとをしへさるとの間みな其父にかゝる是故に殷の湯王は其太子を民間に下して民の辛苦を知しめ周公は伯禽をはけます此誠に子を愛するの道也又子たるものゝ父に孝をなす是亦天賦の自然也無_レ孝は何をもつて子といふへけむや孝をなすに道あり只親を養ひ勞にかはる事誰もする所なり養は犬馬までにいたる敬せずは何を以て孝といはんや凡人の子たる者親を敬ふのあまりを以て身を立道を行ひ已か名を天下に舉則其親甚悦甚悦則これより大なるはなし是を眞の孝とす是故に舜の孝は四海に達し武王の孝は天下に通す此を父子のしたしむと云

夫婦之事

蓋夫婦は天地のことし天は地の外をつゝみ地は天の中はに懷る是故に男は外をいとなみ女は内を調ふ文王の後眞葛の中谷にはひらく其葉の茂れる比ほひこの葛をこゝに刈こゝに護締綌の衣を織て其成ことの安からざるをしり給へは文王も又天下のつとめに其勞苦し民の安を見ても猶傷かことくし給ふ是文王は

ほかをいとなみ太姒は内を調へ給ふ此夫婦の徳によりて天下の政閨門の内より出て萬邦自然に風化し民をのゝ其所を得たり此亦夫婦に別あるの意なり

兄弟之事

それ兄弟は天より次第すといへとも尤難_レ知者也是故に上に有三兄弟一兄は弟を慈愛し弟は兄を尊敬則其郷黨隣里より國に及て必法を法とす如此則兄弟の敬より起て國治る事あり是を兄弟に敬ありといふ

朋友之事

夫朋友は他人と他人と交る何以四の物の内にいるや父子兄弟の間にをいて自いひかたきものあり他人にあらずんはいかてか己か情意を伸へけんや是以四の物に之をくはへて五倫と號す朋友は信あるを以て朋友とし又五の是非を諫あひて益ある事最多しされとも朋友は義を以て合すかの朋友に非ある時再三諫てよきほとにすへきを此人彌近づきたしとしまむと思て諫ていさめ過せはいふもの軽く聽もの厭親しみを求として反て疎せらる是は義もなく信もなき朋友なりかくのことくなる者をは友とすへからす此眞僞をよく辨て信あるを友とすこれを朋友に信ありと云なり

嫡子並庶子之事

或人云嫡子を重し庶子を輕する事古よりあり思ふに妻も妾も共に我婦也功をのゝひとしからず槐棘のたかきゑな袋よりも猿狙の子を生し賢子か婢腹よりも卓ろくの才を出す然則只人の子の器量才能次第にかしつきもてなしてこそ能侍らんと云へり曰嫡子は天地交泰の德によりて生す夫婦の世配も亦天也彼妾婦は侍女のたくひなにを以夫婦の正對に比ふへけんや是故に嫡子は重く庶子は輕し然れども天子の太子と公卿大夫の嫡庶等にいたるまで十五より皆大學に入て理をきはめこゝろを正し己を修め人を治るの道を以て教_レ之後に太子をは天子の位につけ奉る間天子の庶子をは國に對して諸侯とす又公卿大夫の嫡子も其家をつく庶子は其才によりて或は天子につかへ或は諸侯につかへ別に家あり是を以てみれば誰か其天倫を背て庶子を重くし嫡子を輕せんや若愛に溺て人意をもつて私に計則綱紀亂て人道立へからず大人たるもの不可_レ不慎乎

女子之事

夫女は不幸にして男子と生れす是によりて女に三從

といへることあり幼稚の時は親にしたかひ若き時は男に隨ひ老ては子にしたかふ是故に人君たる者女子には師傅とて女の師匠をつけ其所をえらひおくふかき所にをいて聊も人のみぬやうにし教師傅してへさ_レらむ或人曰その師なにををしへ其女子なにを習やはく關雎の篇を以てならはす關雎は后妃の德夫婦和合の至なり彼關々たる雎鳩河の洲に和鳴し男先に唱へ女後に順ふ是夫婦の別なり彼聖女を學はすんは何をて女子の道といはんや凡女子すてに嫁して父母に孝をなす事易裏何樂て淫し哀て傷るへけんや男の愛によりて易_レ狎者は女の情なり貌相共に和樂して敬ひ其貞しきをいたし其守をうしなはざるを以て婦人の道とす三月桃の天々たる時は男女必ず會り女子男の家へ行て能一家の中をなつけ一家の内をなつくる時は其法國に及ふ時は(讓脱)其國治ると云ことを教訓す此女子ををしゆるの法なり

妾婦之事

蓋大夫たる者は妾婦二人士たる者は一人然れとも嫡婦妾婦の方あり此理を知ざる時は大人は國をうしなひ小人は其身をおとす周幽王は憎_ニ其本妻_一妾婦を愛

し太子をしりそけ庶子をたつ是によつて犬戎殺して又子もなしおちはしからざる妾婦を持てその身をおとすものあり儋年等是也只以レ婦爲レ婦以レ妾爲レ妾をのをの其分にしたかひ其宜に合ときんは何のあやまりのあらんや婦の字をみれば女篇に帚といふ字なり彼嫡婦は常々帚をもつて家をはき家をおさめんことを思ふ是は婦の道なり妾の字をみれば女篇に立と云字也此妾婦のおもはくは我は是侍女のたくひ立て侍御する役の身とおもひて必帚を取て室家をはき必家を治て子孫永年なることを忘さるは侍女の意也此婦妾の二字を以ても意得へしひとの良知深く萬事に變通する良能これもつて何ぞ天下の人の心をしらすらんや況や彼妾婦の計りやすきものをや

交隣國之事

それ國に大小あり大は小をつかひ小は大につかふ是必然の理なり今己の國大にして人の國小なる時は能人の小國をめぐまん人の國大にして己か國小なる時は能大國につかふるかことくにして交る或人云如レ此にして何益ありや曰己之國大にして人の小國をめぐまん時は彼小國わか喜にも進み憂にも進むこの

二は天理の自然大小之勢理の當然を以て交るそれ天道は徳あるものに天下をもつて與へ給ふ己小國也といへとも其徳漸々に積て天下の者皆小國の徳を慕て各歸服則吾事へ交かことく大國も反て我にしたかふ況や其國をやら然則天下何我手に入さらんや殷の湯王は小國を以て大國につかへ仁政の徳をもつて天下をたもち給ふ周文王もまた小國を以て大國につかへ仁政の徳をもつて天下をたもち給ふ是等みな其効也吾徳をもつて國と交則隣國大小は申に及はす天下皆服して吾は堯舜となり民も亦堯舜の民とならん此交り既先如レ此にして小國をめぐむふりをして大國にしたかふ巧をめぐらし後には人の國をとり天下を奪とする私にあらす是天理の自然禮にあたる儀則也如レ此則必天下を得へしたとひ其一代にえすともかならず子孫天下を得へし是を隣國に交り吾人を待の禮といふ

隱居之事

夫人者二十にして冠し三十にして妻を娶り五十にしてつかへ七十にして官を返遁世のこと其身をやすくす故に是を隱居と云去とも其人の徳高き時は朝廷よ

り杖を賜て又參内して論道談義いくはくそや八九十
歳に及て朝廷に杖つくこともならざる時は天子自そ
の屋へ行幸なりて其事をとひ給ふ何必これを隱居と
いはんや彼商山の四皓か避_レ世箕山の許由か隱居不_レ
足_レ論矣然れども是は君臣各その徳高く道の道た
るときのことなるへし道の興ると廢れると人事の可否
と天道の盈虛人の力の及ところにあらず如_レ此なる
時は深く世をいとひ隱居しても可乎歟夫蔣詡之幽居
劉禹錫之陋室何も心ゆかしき事なれば學ひても又よ
しあり夫三徑の下には有道陋室之中には無_二白丁_一
東籬の下には松菊猶存獨樂の園には明月の時に至り
清風自來此時に徳ある者と酒を舉て琴を彈し先生の
道を論し天道一致の奥妙を心に得天年を終る事誰も
ねかはしき事なるへし是を隱居といひて可乎歟右節
目の十條四書詩禮等の中を以て答を申といへともす
こし心のいそかはしき事ありてあら_二く申上侍るな
りかならず大なる差御座有へく候

衆妙集

詠百首和歌

玄旨法印

立春

をしなへて今日こそかすめ四方山のこのもかのもとに春や立ちむ
一本に

朝霞

よもすから聞しあらしも心あれや今朝は霞をよきて吹なり

谷鶯

朝またき鶯吹はらふ谷風にまつうち出るうぐひすの聲

残雪

降そめし去年の高根にほのくまた消のこる雪をみるかな

若菜

誰かまつわかな摘らむ花かたみめならふ人の袖のゆききに

里梅

野へにまつ咲よりなれてみれとあかめ梅の立枝も里をあまたに

簷梅

軒ちかき梅が香ながら玉簷ひまもとめいるはるの夕かせ

春月

かすむへき山の端遠くなりけりくもりなはてそ春のよの月

春曙

花鳥の色にも音にもかすみのみ猶立よさるはるのあけほの

歸鴈

おもはすよ都はなれて北に行鴈のなく音にともなはんとは

春雨

花見にといてたちもせず八重葎心にしけき春雨の空

岸柳

柳よりあたに散てやしら露の水行岸のあはとなるらむ

待花

はなよいかに誰ともいかなかめせむひなの住居に咲を待ても

初花

雨もよにさける軒はの朝戸明ておもほの花の色をみるかな

見花

くるとあくの花の思はぬことはりにわか心をもちらさてそみる

花盛

よをこめて花咲かゝる枝も葉もうつもればつる雪とみるまで

落花

うたてに猶やうらみん咲散るも常ある花とおもはさりせば

歎冬

はやせ河をられぬ水にうつろひて花や散らん岸のやまふき

津藤

水のおもにかけをひたして紫のあけほのうばふ池の藤波

暮春

ちる花もすぐるよはひも更にけふ春のわかれにをとろかれつゝ

更衣

かふるとて花のにほひも更衣春をばよそにすみ染の袖

卯花

夕されは雪かとそみる卯の花の垣はの竹の枝もたはゝに

待郭公

ほととぎすなにな契りに今こんといひし人をも待心地して

聞郭公

ほととぎす聞しとやいはむうたいねの夢のまかひのゝはの一聲

郭公稀

手を折てかそへやせましほととぎすまれなる聲とつもる目數と

故郷橘

古郷の軒端におふる草の名を花たちはなや香ににほふらむ

早苗

うへわたすふもとのさなへ一かたになひくとみれば山風そふく

五月雨

さみたれの比はしなとの風とても吹やははらふ天の八重くも

鶺鴒河

うかひ舟かはせの月にかはりてやのほればくたるかゝり火の影

夏草

花はまた咲もさかぬも夏草のわく人なしにしけるころ哉

叢螢

むかしたかあつめし窓の名残とて茂き草葉にやとるほたるそ

夏月

明やすき名残をそおもふ秋のよもなかしとはなき月のなかめな

夕立

かせの音むら雲なからきほひきて野分にしたる夕立の空

杜鵑

なく鵑の聲を時雨にまかへても立よるもりの下露はなし

せみのこゑこゑさなこゑなからまかふ時雨かな立よる袖にもりの夕つゆ

夏萩

けふは身のうちと涼しき御萩河にころころの水もなかれて

早秋

大かたの野への草葉の露をゝきて袖よりなるゝ秋のはつかせ

七夕

あふことは稀なる中になかれても契りはふかきあまの川なみ

萩風

一葉さへまたちりあへぬ木の本に先うちそよく萩のうはかせ

菰露

枝なからみよといひしをわすれては折袖にけぬ露のむら萩

女郎花

をみなへしたか言の葉になくさめて色めく花のくねるともなき

夕蟲

秋の野の露さへさむき草村に猶夕しもをまつむしのこゑ

夜鹿

よもすから妻やつれなき棹鹿のひとりふしとに恨てそなく

初鴈

此ころの秋の寢覺のうきこともわすれてそ聞初鴈のこゑ

秋夕

そのこといさしてはものをおもはれとなみたいとなき秋の夕暮

山月

野月

中そらにくまなきかけをみるよりばうす雲かゝる山の端の月

月ゆへにしらぬ野はらの露分て旅寝にかたるかたしきの袖

河月

わすれしなすみ馴つゝも久がたの中におひたるさとの川波

江月

なにはつものよしあしなしも誰わけむ入江の月は雲かくれして

浦月

はる／＼とよきの湊の露はれて月に吹こすいねのうらかせ

籬菊

うつろふな花のうへにも色そふと籬の菊や霜を待らむ

擣衣

そのさとゝ明てこそみめ夕月夜おほつかなくも衣うつ聲

曉霧

しくれせむ明ほのまたて秋山の麓をめぐるきりの一むら

岡紅葉

松の葉のいつともつかぬをかのへに今一しほの下紅葉かな

庭紅葉

峯はちり麓の色はこかるれとまた庭もせにうすき紅葉

九月盡

今はとてはびまつはれよ行秋のわかれ路に生るくつのはかつら

初冬

山里はしくれの雲をさきたてゝみその空に冬はきにけり

時雨

落葉

一年のめくる日數もうつり行時雨の空にたくへてそみる

色やたいこきもちうすきもはて／＼はおなし落葉に木からしの風

朝霜

いつよりか結びとめけん朝霜をしらていねつるほとをしそ思ふ

寒草

かせ渡るすさきのよもき冬かれて夕霜白きなちの川なみ

千鳥

友ちとりおなし所に立かへりあとこそこのこれわかのうらなみ

水鳥

いはたゝむ池の心は繪にもばたうつまほしき鶯の一つれ

氷始結

氷るらし淺瀬なからにかち人のわたれとぬれぬ水の朝風

冬月

花紅葉散るあと遠き木の間より月は冬こそさかり成けれ

鷹狩

たつ鳥に手はなす鷹のとひよるやいま心みし超なるらむ

野巖

むこ山やあまつたふ日もさえくれて巖になりぬいなのださゝ原

浅雪

降つむもよの間の雪は朝日影松と竹とのけちめ見えつゝ

積雪

こゝろあてのかきほの竹のふしの間も雪にかくるゝ朝明の庭

閑中雪

燈を守りつくしてふくるよにまとうつ雪のおとを聞哉

歳暮

老の波あはれことしもこゆるきのいそちといはん限をそおもふ

寄月戀

月ひとりそらにしりてやとりけんしのふる袖の涙なれとも

寄雲戀

立かへりしのふの山に入雲のまたなか空になにまよふらむ

寄露戀

いさゝらは人の心の秋風をふせてやみん袖のしら露

寄雨戀

よしやふれ身をしる雨も天雲のよそになり行人のかたみと

寄風戀

便あるかせもうきたる心地してことつてやらん人を待かな

寄山戀

ふしのれを甘ばかりばかさめとも麓にやみんわか戀のやま

寄關戀

わか爲はへたつる關となりにけりなとあふ坂の名をたのみけん

寄海戀

みるめかるかたこそなけれあら海の浪の立居に心よせても

寄原戀

戀しなむ身のおもひてに草の原とはんと契る一言もかな

寄橋戀

よひくの人めおもはぬかよひちやうつにまさる夢の浮橋

寄木戀

色みえぬ心の松も葛の葉のうらみはしたにさはく夕かせ

寄草戀

みせばやなをばなかもとに咲花の色よりふかき露の袂を

寄鳥戀

驚さへもこひにおもひなかけぬれば空とふ鳥も落るためしを

寄蟲戀

聞すてし君もやくるとまつむしのなく音にきほふ夕くれの宿

寄獸戀

はかなしやかゝる戀路におりたちてひま行駒も身にはしられす

寄玉戀

わか袖のうへにそ落るひろひ置てかへらんといひし瀧のしら玉

寄鏡戀

手向くともあらぬ思ひにます鏡うけすやいかにあらみさきひめ

寄枕戀

人にやはつけの枕と頼むそよとけてわかぬるよはのなみたを

寄衣戀

よかれさぬ中の衣の隔さへあはれうらみのあれば有身に

寄絲戀

かた絲のその一ふしはのこるともまたよりあはん恨をそまつ

浦松

こゝろあるあまのしわさに釣舟をよせてはつなく松かうらしま

窓竹

なひきあひて窓におほふも植置し一本ゆへのむらさきの竹

山家嵐

都にてあらしときし音はたみ山のと朝な夕かせ
田家

故郷

行とまる心を宿とさためもなふるさとのかたそゆかしき

海路

舟人もしらすはるげき波路をはたき吹風にみなやまかせん

醫旅

さすらふる旅にしあれば宿ことのまのこりとそわつらふ

迷懷

うつもるし身ともうらみしよの中の人をしらぬを先うれへん

神祇

おほかたは鏡をみてもおもひしれ空にくもらぬ神の心を

祝言

治まれる御よのしるしはしらけり君と臣との身をあはせつゝ

詠二十首和歌

初秋露

このれぬる朝けの露の玉かしは落るも散るも秋の初風

閑居秋風

わけてとふ人もなければ萩の葉の音にさたむるやとの秋かせ

野草花

こはき咲野守のかたみよそなから心をうつす花のいろかな
夜蟲

曉鷹

むしのねをなを聞あかてはぬるよの夢をはかなみさそひてそ行

深山鹿

はるかなるみ山おろしにたくへきてたゆめはたゆむ棹鹿の聲

杜月

月はなを露にそやとる秋かせの信太のもりの千枝に吹とも

河月

みるかうちに西になかれて淀川のよとむともなき月の影哉

浦月

とまりせしいく浦浪のあはれなも月にやさらにおもひいつらん

島月

誰すみて八重の鹽路になかむらん興の小島の秋のよの月

江月

かせそよく入江の蘆のほのくと月になり行うす霧の空

山朝霧

めのまへに海をなしつゝ朝霧のあらぬ所に興津しま山

海邊櫛衣

風あらき浪のよるゝあま衣うつ音さへもまとをにそきく

田家秋寒

小山田のかりほの庵の稻庭霜をかされて風そ吹しく

野草欲枯

いろ／＼の花に咲とも行秋にならんさかみん野への草葉の

庭菊

もい草のうらかればつる露霜に一花残る庭のしら菊

雨中紅葉

紅葉は一時雨のあめにぬれにけり笠取山の名にもかくれす

河邊紅葉

ちらて先かけをやうつす紅葉はのうきてなかれぬ山川の水

山家暮秋

くれて行名残おもへは山里のうきこそ秋のかためなりけれ

閏九月盡

なが月のひかりの影を又そおしむ有明の空をながめつくして

春部

由巳亭の會に年内立春を

くれて行年のなを巻くり返し今もむかしの春やたつらむ
雪も今日ふるとしなからあら玉の春のものとして立かすみかな

立春

明渡る遠山かつらそのまゝにかすみをかけて春や立らむ
波路より春やきぬらむわたつみの沖をふかめて立かすみかな

元日立春

天地のめくみをうくる人やけふみつのはしめの春をしるらん

正月十二日會始に立春霞

野も山も春につゐる棹姫の袂ゆたかにたつかすみかな
たちにけり明ては春と夕月夜おほつかなしとみへし霞も
天正九年正月江南安土に越年せし元日の試筆に
みるかことくあふけ神代のかみ山けふあら玉の春のひかりを

同十六年元日のこえ侍ける前の日より曉かたまてあら

しはけしくて朔日にはしつまり侍しに

けちめあれや昨日はこそそのあらしとてけふはなきたる朝風そ吹

同十七年正月大坂旅亭にて元日に

あら玉のとしの緒そへてこそたちし霞の衣かさねきにけり

同十九年元日寅の時はかり禁中の四方拜おかみにまいり

て歸り侍ての試筆の歌に

ともし火のひかりをそへて雲の上に星となふるあかつきの庭
同廿年入唐の御きた有し年の元日に

日本の光をみせてはるかなるもろこしまても春やたつらん
文祿二年薩州鹿兒島に年をとりの元日に

あつまよりこえくる春もはや人のさつまちとなく立かすみ哉

同三年元日に

一とせを六十にそへてさためある命のほかになからへにけり

同四年元日に

またれつゝさかん日数を先もおもふ花の都のぼるなむかへて

同五年元日に雨降侍ければ

豊年のはしめをみせてふる雨に民の草葉やまつめくむらむ

慶長二年元日に

ふる雪もふかき山路も春とたちことしをこえてかすむ色かな

同三年元日に

うしと思ひつらしといひていく返りあら玉の年を身に迎へけん

同四年正月孝元に家督相續し侍へきとの元日に

あら玉の今年はやなもゆつりはの常磐の色にならへとそおもふ

同五年元日に

正月には五百八十とせも在へんと逢人ことのことくさにして

同六年吉田に越年の元日に

あふくなり先あめつちの神まつるよしたの里に春をむかへて

同八年元日に

七十にみちぬるしほの濱ひさし久しくなりぬわかのうらなみ

同十一年丙午正月元日に

春立ていさめる馬の年のをのなきためしにひかんとそおもふ
年號不知

たちかへりかひある春ともろ人のあそひの浦の名にやふるらん
あふけ猶天津日嗣のしるしとてくもりなきよの春は來にけり

元日試筆に

八隅しる井かめくみをよにうけてのこる隈なきはるはきにけり
うなばらや霞もともにみつしほの浪ちはるかに春立ちしも
打出て國見をすれば山かすみうら浪なきて春はきにけり
たれも猶松に千年やかそふらむけふな子日ときくにつけても

初春

さは姫のかすみの衣はしそめて雪のひままつ朝日かけかな

正月七日會始當座に初春霞

春きてはいくかもあらすさは姫のかすみの衣またきほすらむ

早春鶯

なれにけりかすみの衣春立ていくかもあらぬうくひすの聲

慶長五年三月廿五日式部卿智仁親王亭にて古今講釋つか

うまつりし後和歌會御興行の當座に春風解氷といへるこ

とを

とけて行音やわくらむ耳利川こほりのうへのぼるのあさかせ

朝霞

さえかへるゆふへの雲は消はてし今朝こそ春のかすみなりけれ

正月七日會始に山朝霞

このねぬる朝けのかせも山姫のおもかけそへてたつかすみかな

二月十九日月次會におなしこゝろを

朝なく／＼たつとはみえず山の端の遠きや霞むけちめなるらん
足曳のあらしの音はたえはてゝなれとなくあさかずみ哉

霞滿山

さは姫の雲の衣のうはきとや春のかすみ立かきぬらん
あさもよひきのふの山もみえぬまで春をふかめて立霞哉

文祿三年正月廿一日月次會始に霞添山氣色

山姫のかさしの櫻またきよりおもかけにはふ朝かすみかな

海霞

あまのぼら雲の波路もわたつみの興をふかめて立かすみ哉

海上曉霞

あさもよひきの海かけて住の江のくるゝ浪間に立かすみ哉

雪中聞鶯

うくひすの梅の花かさけさきても雪のふいきにぬれて鳴なり

谷鶯

朝またき霧吹はらふ谷かせにまつ打出るうくひすの聲

野外朝鶯

今朝のあさけなのか名こえて鶯の里のこなたの野へに鳴なり

文祿五年正月七日會始に若菜知時

なれのみ春をわかなの花かたみめならふのへの雪の草葉に

慶長五年正月七日會始に雪中求若菜

わかなさへ人のもとめにことなれや雪の下まで道をたゝして

ゆきかへり野へは雪間も七種をけふの爲とやつみあつむらん

同八年正月七日に烏丸蘭臺のもとより

君かよはひ十といひつゝ七種の名をかそふへきはつれのひかな

返し

君かよはひかきりはさらに七種の名をやかそへんちよの初子と

龍野待從亭會當座に谷殘雪

河波の音そふまゝに谷の戸の奥かおくまで雪そすくなき

谷せばみ雪のしほりや殘らん日影もしらぬいはれこのれに

松殘雪

吹はらふあらしのいかにうつもれてはるまでのこる松のしら雪

餘寒霜

かれぬへき色とはみえぬわかくさに秋よりさむき春の朝しも

露曉梅間

梅かえもあふひのくさのゆかりとや日影にむかふ露よりそさく

若木梅

いかにしてむかし香にはほふらんうへし若木の梅の初花

夜梅

夜も明はたつれてもみんそのさといなしへし程のむめの下風

慶長五年二月十九日月次會に梅遠臺

かほりくるゆくさきおほくふるよに尋れそわふる梅の木の本

正月會始に梅花久芳

梅の花かたこそふくめ天地のひらけし春の跡をのこして

天地のひらけし春のためしとてことしも梅の香をふくむらし

後正月十日飛鳥井中將亭會始に梅花久嘉

さいの葉のよゝなをかされて梅のえもしみつくほととの春風そふく

軒梅

たちぬるゝ袖もいとほしなめふる軒の葉もむめか香そする

天正十六年正月廿五日殿下御會始に梅有桂色

色をうつしにほひなとめてうれしさや袂にうつむ梅の下かせ
いろわきてこそうへをきし庭の面の若木の梅や千代の初花

同廿年正月十二日龍野待從亭にて有し會に多年詭梅

散ものいさりとてたえぬなめ哉はるいくかへりさくやこの花

同正月十三日月次會始におなし心を

うへをきし一木ことに身を分て春いくかへりなめしつらん

たのみきぬ松もむかしのとばかりに春咲梅をしる人にして

菊亭右府晴季公庭前の梅を一枝送らせ給ひて

よもきふのかけなりけりな咲やこの花の春なもとふ人のなき

御返し

さくやこの花なもとほすなりにけりわか蓬生にむすほれつゝ

病中に幸藏司より紅梅一枝送られ侍し返事に

かくはかりにほふもあやし紅の色にとられの花とみるにも

岸柳

きしによるなみをひたして淀川のとむとみする青柳の絲

天正廿年六月初日式部卿智仁親王亭御會始當座柳露風

枝かはす柳の絲にさそはれてしとろもとろに春風そふく

夢想法樂の會に春月

ひさかへて花散るのちの春の風月のかすみは吹としもなし

久かたの空もひとつにかすむなり雲やはかゝる春のよの月

春曉月

曉の雲吹かぜにさそはれてかすみにもるゝ春のよのつき

二月廿五日東福寺哲長老詩歌興行侍しに月流春夜短とい

ふことを

雲の波にとまる瀬なしと行月の舟なかしたるさよの春かせ

同十六日夜飛鳥井羽林亭にて三十首の題をさくりて讀侍

けるに遠山春月

かさなれる山の端みせて夕くれの霞の奥に月やいつらむ

吹風もおよばぬ山の夕かすみ月のひかりやまつばらふらむ

名所春月

月影はかすみもやらす相坂の關のあなたにあらしふくらし

春曙

めてきつる花も紅葉も月雪もかすみに消る春のあけほの

茶知丸興行月次會におなしこゝろを

くらへつるこゝろの秋もうす霧に月と花との春のあけほの

春流飲馬

さくらかり水かふほともあら駒のあなむなかれに引そといむる

春鴈離

春風につらなをばなれて北にさりみなみにかへる天津かりかれ

閩春雉

心せよきゝす鳴なりかの岡にくさかるおのこわけて入とも

雲雀

鳴たつともむかふ野かせをそむくとて雲にはのらぬ夕雲雀哉

子をおもふひはりの床も夕日影さすあかるも立かへる聲

飛鳥井羽林亭にて夕雲雀を

のとかなるかけを契りて春の日のおつればおつる夕雲雀かな

三月五日也足軒興行錢別當座に花を

そことしもしらぬ野山のさくらより花こそ花のしほりなりけれ
たつね入こゝろのとはいいかせんまたみぬ山の花ばありやと
もろく散る老のなみたにくらふれば猶のとかなるはなの朝露
愚亭興行の會に花初開

かつさける花をしておもふこゝろよりきのふはしらぬ山風そふく
心ある人にまたれて咲花の我をはよそにみんもはつかし
見花思友

あひにあふ友しかなやひとりみる花の心もうしろめたさに
ひとりわかむかふにつけて心あらん友しかなと花もみるかな
月次會に心靜見花

もろともにちらねはちらぬ心そといひをしへても花をみるかな
殿下わたらせ給ひて和歌の會興行の時に多年愛花

あかなくに花みぬとしはなけれどもけふは老なも忘れぬるかな

吉田左兵衛佐會に終日對花

朝日かけいつのほとにかうつりけんあからめもせず花に暮して

月前花

なにをよにおもひをかまし春のよの月と花との露のあけほの

飛鳥井羽林亭にて三十首題をさくりてなの／＼歌ふみ侍

ける中に花下送日

日數をも花にへにけり谷ふかき岩根の枕あとみゆるまで
散まではかへらしものと日數をもしらすかすへん花の下かけ

岡花

しなてるや片岡山のさくら花くまなき色に春かせそふく
山松にならひのなかのさくら花いひあはせてや風にちるらん

瀧花

枝ながら岩本さくら波こえて花のかなかす瀧のしらなみ
老て後あはれそまさる瀧つ涙はやくのとしの花はみしかと
花の比大原野にまかりて

いといなを老木の花そなほ山いまま小松の色とみるにも
三月十四日鞍馬にまかりて花みる人の往來たえぬをみて
山櫻咲散るほとは来る人の花にそたえぬあなつゝらおり
二月十五日聖門主連番御庭のさくらさかりに見にまいり
侍りて歌ふみ侍けるに

さく比を君やなしへし庭の面に二木はかりの花のさかりは
返し

とほれては色そふまいに昨日みし花ならぬかとうたかはれぬる
はやくのことなりし奈良にまかりて三條亞相實澄めしく
せられ手向山ちかき藤樹庵にて當座有しに春旅といふ題
をさくりて

いさ櫻花のぬさをや手向山紅葉にあける神のこゝろに
慶長八年はるの比鞍馬の花をみ侍りて

おりたつとこなたかなたの花にきて猶心ひくくらま山かな
丹後國田邊大内庄大谷の花見にまかりて

色もかもまさきのかつらくる人をまつはかりなる山櫻哉
おなし時大關西國御陣の供奉なりしが秋は歸陣たるへき
なといへば

ふるさとの花の錦をたちかさね紅葉のにしき著てやかへらん
護念寺にて

色もかもへたてなければ蘆垣のまちかき花をいかてうらみん

慶長十年三月三日豊前國上野村興國寺墨染の櫻を見に

へりて

すみ染のをしへなうけて咲花の心はおなしふか草の露

おなし時息孝之にかはりて

夕くれの色をそのまゝ咲花の名殘とみてやたちかへるらん

聖護院門主御庭の八重櫻二木はかりさかりなる比紹巴法

印なとかたらひまいり侍しに

心ときをしへのほとはしられけりなきてさける花の二木は

清水寺にまいりけるに瀧のもとの花のさかりなるを見て

あらしふくなとはの山の花さかりちらぬをなかつ瀧のしら波

花のいはひ

よし野山こゝろにかゝる雲もなし風ふかぬよの花のさかりは

けふにしるし袖ふる山のみつかきの久しきよゝの花は有とも

君かよのこかね花咲みちのくの同し名にあふみよしの山

愛染寶塔の花たいひとりみにまかりて

なかもつゝひとりそ分るよし野山はなより外にこゝろちらさて

よし野のやとのまへのたにかくれの竹にはなのちりつも

るをみて

した折の音こそきかね竹のはのたはむばかりの花の白ゆき

吉野にて人々にかはりて

人ことの家つとならばよし野山さくららの枝も折やつくさん

いとよしやよし山の山風も吹やは及ふ花の木ことに

たか宿とへたてゝみえん蘆垣のよし野の山の花の木のもと

ちれば咲化に分入よし野山人のこゝろのおくもなきまで
木の本に分けてみればよしの山花の外なる峯のしら雲
かせる今枝ならさぬ君か代をばなの心もあふかさめや
よしの山花の心もおくみえてちる櫻あれば又そさきそふ
吉野山すゝ吹あきのかりねより花そ身にしむ木々の下風
高野にて深山の花を

ふかくなるほとそしるるゝ花にさへ鳥のねきかぬ山路分きて

み山木の色こそなけれ花櫻咲かたはらに立ならひては

天正九年長谷寺にまいりけるに四方のあらしに雪のこと

く河つらに花のちるをみ侍りて

ほつせ河こほらぬ水にふる雪やはな吹をくる山おろしの風

文祿三年二月廿九日關白殿吉野の花御覽のとき人々五首

の歌つかうまつりけるに花のねかひ

春風におほふかすみの袖もかなちらさは花のうきにやばあらぬ

花をちらさぬ風

ふくもなをばなと夢とをさそひえぬ風のちからやよほの手枕

瀧の上の花

たき浪のおつとは見えて首せぬや花にまされるみかさなる覽

神のまへの花

一枝になをさかきほの香をそへて手向ことなる花の色かな

はなのいはひ

君か爲花のにしきをしき島やゝまとしまねもなひく霞に

おなしときに人々にかはりてよめる歌の中に花のねかひ

したひきて頼ひもみちぬむさしあふみさすかに遠き花の山路を

山風にはな吹なかせよしの川すゑの末までみん人の爲
花をちらさぬ風

木の本のすゝ吹かせはそよさらに花に及はぬみよしの山
たきのうへの花

みなかみにあらし吹らし瀧波の白きをみれば花そおちくる
みるかうちに瀧津河内はさえくれてみそれになりぬ花の白波
行水のはやくのことをおもひいて袖をそひたす花の瀧波

神のまへの花

さくら咲中にとりぬの二柱たちならひつゝ花をこそみれ
咲散るもたゞそのまゝに手向山はなをば神にまかせてやみん
やまかせも入やはたゝむ神かきやしめの中なる花のさかりは
はなのいほひ

もろこしのよし野なりとも花さかは尋ねもくへき春の山路を
彼山にわたのあした

ななさりの花さへめていこしものをまして吉野の春のあけほの
天正十七年吉野にて花のうた五首

よし野河たかれの櫻ちらぬまも花になかるゝ水のしらなみ
白雲もいかにまかへんよし野山はなのかおろすまものあらしに
よしの山まことの花はそれなからしほはまかふ峯のしらくも
山の名も春やたかけんみよし野や花よりうへにはふしら雲
わけのほるかたもしられす咲つゝ花にあまきるみよしの山

初瀬にて花を

常盤木にふくはなへての春風も花にはけしき山おろしかな
花面影

月のうちのかつらも花や咲ぬらんおもかけにほふあまつ春かせ
なれゝしおもかけとめて我が身こそ咲散る花の形見なりけれ

落花

色もかもありてよの中はてはうきならひをすれば花や散らん
はるの比清水寺にまかりて

散をのみおもふ心の行へまてはなにをとはのやまかせそふく

落花騒風

ちりぬへき時にいたればさそへともいふばかりなる花の下かせ

よし野にて御當座ありし時落花埋草といふことを

みよし野や花はみゆきと降しけとおひもなつめ木々の下草

殘花薫風

散らしつることをやけふはいとふらん花の香をくる春風そ吹

雨後苗代

ひきうへん五月の雨をなほしるにまつ待えたる朝みとりかな

藤のうたのうち

藤浪のこえつゝ春もくれぬめり花のちきりも末の松山

龍野侍從亭當座に松上藤

これも又一本少へかむらさきの藤咲かゝる松のむらたち

春きてはみとり立そふ梢より又一しほのまつふちなみ

聖門主御庭の白藤をみせられ侍し夕へ當座に

これもまたなにを花そこといはむ藤咲庭のたそかれの比

三月十七日宇治にまかり旅ねして侍ける曉月に郭公の鳴

を聞て

里の名を月にそかこつほとゝきすはるのよふかき雲になくなり

暮春鶯

はなちれば人來となしに鶯の春の名残をうらみてそなく

溝口大炊助會當座におなしこゝろを

うくひすの鳴ねによらは今しはと別れてゆかん春もあらしな

三月盡に雨降ける日藤を折て人につかはすとて

雨にけふ手折ばかりやいにしへの人の心にかへるふちなみ

三月盡

かきりあればくれ行春を先におもふさためなきよの命なれとも

夏部

子規

聞しにもありてなき音は時鳥ゆめかうつゝか夜半のたまくら

慶長五年正月廿一日夢想の會興行せし貞首の中におなし

心を

あけにけり山ほといきすやまかつらかけて鳴音を待とせし間に

夕郭公

村雨に想しはれて夕つゝのほしあへぬ空になくほといきす

夕月夜おほつかなしやほといきす忍びねなからもらす一聲

杜子規

ほといきす歸るさいかにさそはれてきにしこゝろの神なひの杜

六月十九日丹後國にて一遊齋興行月次會に瞿麥を

くれなるの末摘花のなこりとや咲出にけん庭のなてしこ

瞿麥落

みな人の心をばちよくれなるの色にうつるふなてしこの露

月次會當座に雨後鵜河

雨すくる河瀬の浪に月さしてかゝりもしろさうかひ舟かな

天正十七年卯月廿六日當座に河邊螢

みたれ行螢のかけや川の瀬になひく玉ものひかりなるらん

五月二日長門國豐田にとまり侍ける時たらひといふ所に

て先年下向し侍ける時狂歌をよみ侍りけることをおもひ

出て

星のかげとつるとみせてくるいよのたらひの水にとふほたる哉
六月十九日月次會に空山暮蟬

蟬の色もむなしき山の入り影けふもくれぬと蟬を鳴なる

田邊にて愚息越中守忠興和歌會興行せしに杜蟬を

蟬の羽のうすき衣もほしわひて杜のこすゑの露になくなり
夕されはせみの羽衣なれきてもりの栗にぬれてなくなり

池上蓮

つゆの玉これなんそれとうつなみむ花に立おほふ池の蓮は
みたれてや池の玉ものかいらん濁にしまぬはちすなれとも

六月朔日法橋松雲もとより炭をくり侍しにふみてつか
はしける

峯の雪にやきしものこる炭かまや今日の氷室のたくひなるらん

泉聲秋近

秋ちかくこえくる涙もさいれ石の岩にせかるゝ音そ涼しき

六月十九日月次會に玉階夜涼

橋の上はいかにすゝしき月待てなをおはしまよるのたもとの

田邊にて愚息越中守忠興興行和歌會に納涼を

あつさ弓いそへの山の下すゝみかくるたもとに夕かせそふく
涼しさを人まつやとのかことにてふせきもやらず風のあしき

納涼忘夏

岩浪のいつくを夏はへたつらんだい涼しさはあきのはつかせ

六月十九日丹後國にて一遊齋興行月次の會に夏萩

うきことは身をもはなれず御板河かへらぬ水にはらひ捨ても

閏五月十九日月次會に夏地儀

いかばかり空にてる日そ夕立の跡よりかはくにはの眞砂路
日にあつき石はふむともいさいらは出てかはらの水むすひてん

夏山

みしかよの有明の月のうすくもりくらはし山の名やおもふらむ

夏動物

秋かせもしらぬ鹿の子の露にさへあはれをき行小野の草ふし

夏獸

夏かりのみしかき蘆の淺澤にあさりてたてるつるふちの駒

夏人事

なつのよのみしかきほとの名残とてあされの枕せぬ人そなき

秋部

愛宕山より月輪にまかりて秋立て二日といふに下山しける道に瀧のありけるを人になつければ日くらしの瀧とこたへけるに折ふし日くらしの名にもたかはす鳴けるをきいて

きのふけふ秋くるからに日くらしの聲打そふるたきのしら涙

七夕七首會興行しけるに待七夕

灯もなを九重の雲のうへに秋の七日のほしまつるなり

七夕の歌の中に

織女をつまゝつよひの塵ばらふ閨の扇や秋のはつかせほし合の空もにたりとみたれ碁の石川の水にかけなならへて

七夕にて遊し侍し時の當座に

今日待てとわたる舟のかひもなく逢せなたとる天の川浪

七夕別

いきうしといひてわかるゝ七夕のひとやりならぬしのゝめの空

七夕枕

天河せんかたもなし枕よりあとより明るまほのなこりにまれにきてなつともつきし岩枕星のあふよのあまの羽衣あまの河かたしきかねて磯枕水かけくさにそてやぬれなむ

七夕衣

かさねへき雲の衣を織女のさをなくる間に明るまほはかな重ぬへきよるの衣をたちぬひてたなはたつめや秋を待らむ

七夕扇

七夕絲

彦ほしの扇やたよるれやの塵をばらばいやかてをかんとすらんたえせしな五百機たてゝなり姫のけふの手向の絲は引とも七夕の手になとらしとよの人のれかひの絲や今日ばかりらん

七夕舟

玉ほしをめぐらばとをしくたりせに竿さしわたせ天の川舟

七月七日田邊にて興行の會に二星適逢

あまの川とをきあふ瀬を契りとや二のほしの中におつらん

萩聲驚夢

たか夢をきそひのこしてうたいの枕に過る萩のうはかせ

七月廿一日月次會に萩を

さいの葉のみ山のさともそよさらにさびしさそふる萩のうは風萩の葉に先をとつてそよくなり秋風吹とかりはつけれと

萩露

いく度か袖ぬらしけん萩が花おらは落ぬへき露とみなからしくれつる雲井のかりの翅よりこはれてむすふ萩のうは露

庭萩

宮城野のこのした道もとをければ哀とそみる庭のむら萩庭の面にうつしてそみる紫の色こきのへの秋はきののはなうへ置し庭の草木は色もなしとあらの小萩咲そめしより聖門主道澄庭の白萩ことしより色に咲かはりけるをみて更に繪もいかに及はん秋萩の白きを後の色になしても御かへし

一度は色かはるとも萩か枝の白きの後と又やたのまむ

八月下旬休庵の庭の萩散はてゝ後民部卿法印紹巴など申すゝめられてみせられし時常座有ける其後短尺をいくら

れて愚老にも一首よむべきよし申をくらせられしに中々に花散はてゝみる人のこゝろもなかね萩のしたつゆ秋はきの庭もまかきも露霜にうつるひかはる花のいるかなはな散て分入ひとの心さへときにうつるふはきのした露

月次會に湧出穗

はる／＼と分て入野の袖のうへにぬれぬ涙こそ花すゝき哉

閑庭薄

まねくへきならひもしらしなのつから人なき庭におふる薄は

極露

朝露もさえこそやらぬ咲出て夕かけまたぬ花の名たてに

戸外極

うつるふはいつの人こそ櫛の戸なさしてぬるよのあさかほの花

袖上露

おほかたの草葉をしなみ吹はらふ風のほかなる袖の露哉大かたの秋にもたえぬ夕露を戀する人の袖にくらへんむらさめのまやの軒端の夕日影袖まにほさむ櫛の下露

七月廿一日月次會に出を

水くきのなかへにすたく装たかきすてし筆にか有らん露の葉のうらみやなそと蘆垣のまちかきむしの聲を聞ゆる

草蟲聲

むしのこゑ大宮人の袖はへてさかのゝ露にしはれてそゆく

夜蟲

鈴虫のふり捨てたき秋のよのねさめをゆするきり／＼す説
籬蟲吟

秋かせのならすまかきの櫓よりひゝきをうくる松むしの聲

後九月五日三條羽林興行會常座に袖山鹿

袖人のをのゝ音してなのつから山ふかくなるさなしかのこゑ

故郷秋夕

ふるさとを心かるくもいてやせんよのありさまの秋の夕暮

秋夕傷心

あはれたゝ心のあたとなりけりあまりめてこし秋の夕くれ

對山待月

つく／＼と月まつくれはかねてより心にかゝる山のはのくも

八月十五夜關白殿大佛殿のうしろの山の亭にて月を翫そ

れより聚樂亭にかへらせ給りて和歌會待しに

月こゝひ音羽の山のをとに聞をはすて山のかけもをよはし

おなし時人にかはりて

みる人のこゝろのくまもなかりけりこゝひの月の影にひかれて

八月十五夜に

名をおもふ心な人にいさめてや空にくもらぬ秋のよの月

八月十五夜くもりてやゝ更行まて月のみえずはへりける

に

よしさらはむなしき名のみ立雲に月のうらみなかへつゝやみん

おなし夜寢覺て月をみるにやう／＼村雲のはれわたりにて

侍けるをみて

いとほし老のねさめのなかりせばこのあかつきの月はみましま

八月十五夜くもりて月のみえず有ければ

よの中のきはりをなけきけん月にもこよひかゝるうき雲

曷叱下國の比名月なればとて一如院にて月をみて

たまさかの友待つて今日のこよひにたるときなき月をみる哉

八月十五夜かれこれともなひ橋立にまかりて更行そらま

て月をみ侍りて

月みれに秋もこよひもなかはにてふけぬの浦の名残をそおもふ

名月蝕蟻にあたる夜曷叱庵にて

雲霧の外にもさばる月影やくよひの秋の恨なるらむ

八月十五夜月のくもりければ

名をおもふこゝろもしらすしら雲の浮世を月の影にみる哉

八月十五日月次會當座に十五夜後朝

うつり行秋の半の月の色にあかてわかれしよこ雲のそら

明月離雲

ひかりこそ月のかつらの秋かせにこえてもはらへ夜半の村雲

九月十九日一遊齊興行月次會筑紫より歸陣にて出座し侍

けるに月を

おもひやれ宿のこのまの影さへも心つくしのあきのよの月

月の比永種のもとよりいひをこせける

はしたてやすみわたるともなれし都の月の秋をわするな

返し

なれし月の都の名残をもかけてそおもふ天のはしたて

月の比越後國主上杉のなにかしにつかはしける

しるたへの月は秋のよかく計こしちの山の雪もありきや

播州御陣の時所々見物の次に明石の浦にて夜の更るまで
月を見て

あかしかたかたふく月も行舟もあかねなめにしまかくれつゝ

うらみしな花の心も待とたにしらは日數のうつり行とも

あは雪のきえにし跡は七種のかげの露にそてやぬれなむ

廿日月

九月十三夜

名にめていたれかみさらん月影のありしにまさるけふの今宵な

みちもせぬこよひの月の影よなともなかの月にかばらざるらん

ななめこし秋の半もむかしにて今宵や月のなこりなるらむ

月次當座に水上月

山河や水上とをき岩波のくたきもはてぬ月の影かな

關白殿聚樂にての御會當座に湖上月を

いくそたびやすらひぬらん詠つゝ月もよわたるせたのなかはし

名所月

みるからに西になかれて淀川のとむともなき月のかげかな

後九月四日宮川禪尼にて菊をみ侍りて當座に月前松

山松の軒におほひて夕月夜ほるかにのほるかけをみるかな

夕霧はゝれてあとなき山風に松よりくもる月のかげかな

月前鶴

さよもばや更行月に秋の霜がされてしるき鶴の衣毛

八月十五日月次會當座に寄月哀傷

なき人のおもかけそへて月のかほそゝるに寒き秋のかせかな

暗わたるかりのは山のしくれより聲の色そふむら紅葉かな

八月十五日月次會に薄暮鴈

入日さす雲のはたてに聞ゆなりあまつ空なる初雁のこゑ

九月廿六日月次會に曉擣衣

よなさむみ衣かりかれ打そへてあかつきほふつちのなとかな

曉鳴

あかつきの鳴のほれかきかきたえて夕つば鳥の聲をかすそふ

九月九日薩摩守義久のものとより菊を送るとて

九重にけふつむ菊の色は香き山路の秋はさもあらにあれ

返し

こゝのへに今日摘袖の色もかもふかき山路の菊の下露

月照菊花

めかれせぬまかきの菊に夕霜の色をかさねる秋のよの月

紅葉

おしとおもふ紅葉にきけは木枯の音より外の秋風もなし

秋かせに紅葉やちらんつれもなき岩木の山の名をたのみても

慶長五年正月廿一日夜夢想の會興行百首の中におなしこ

ころむ

下紅葉しくれノて鳥の音もきこえぬ山の色やそむらむ

九月五日三條羽林興行の會紅葉添色

山姫のたちさるからにくれぬこのそめのにしき色やそふらむ

あきいての目かすかさねて露霜のふるえの紅葉色そこかるい

同廿六日月次會におなし心を

くらへみんもみちの色に思ひ出るときは山のつゝしなりとも

岡紅葉

夕露のなかへの山の紅葉はやしくれぬさきの色をみすらん

霜後紅葉

朝日さすかたより霜のかつ消てむらこにみゆる庭の紅葉は

月次會宮座に暮秋

鹿の音も峯の葛葉もさそはれてかへるをいそく秋のくれかな

ながむるも心ほそくや行秋のかたみかほなる有明の月

秋田

かすみにもたちまさる霧にかけみえて春日わする秋のくれ哉

秋野

あしかきのまちかく庭をへたてゝも野へこそ秋の色はふかけれ

冬部

若州侍從興行會當座に時雨告冬

降雪はまたとを山の村雲に冬をみせたる初しくれ哉

違村時雨

山もとの松にいさよふ夕しくれ雲のかへしの風や吹らむ

落葉

色やたいこきもうすきもはてくはおなし落葉に木枯のかぜ

十月十三日若州侍從興行會に冬菊薰袖

かへてたになをしら菊の衣手にうらめつらしくにほふ色かな

十月十日三條少將亭會に殘菊帶霜

散うせぬ松をためしと霜の後みさほにたてる庭の白菊

なくしもの秋冬かけて家の風ふたいひにほへ庭のしら菊

十一月十三日飛鳥井羽林亭にて夕竹霜

怒ちかき竹のさ枝になくしものしろきをみれば夕風そ吹

鞠の懸の有所にて寒樹交松といふことな

よつの時や四本の松にことゝはむ花も紅葉も枝になき比

うへそふる柳櫻も冬かれて庭に葉かへぬ松の一しほ

寒草

うつろひし秋の花野の露よりも哀はふかき霜の下くさ

河原風吹にけらしな霜かれの洲崎のよもきおれふしにけり

寒草處々

霜かれをたれかあはれと思ひ草おはなかもとの秋をこひつゝ

氷始結

けさの朝けこげかとみえてくむ人のしほしやすらふ山の井の水

十月十九日月次會に氷閉瀧水

吹おつる山風さむみ瀧つせのなかるいよとやまつこほるらん

月次會に冬月

天津風雲の浪路に音そへて月の氷をよする影かな

浦冬月

雲ほらふよさのうらかせさえて月そよわたる天のはし立

霜月十九日月次會に水鳥

川よとによとこしめつゝ水鳥の落瀧津せやはやく過らん

十一月十八日初雪ふりける曉

ふりそめてまかへばまかふ影ながら在明の月にのこる雪かな

十一月十九日曉初雪降侍しに大閣より山崎長松を御つか

ひにてよをこめて一首ををくり被下侍し

月に散るみきりの庭の初雪をなめしまいに更るよはかな

御かへし

つきにちる花とやみまし吹風もおさまる庭の初雪の空

初雪のあしたある人のもとより

やまの端もへたてぬ雪の色なから分てそみつる庭の松か枝

かへし

わきてみる心そふかき山のはの雪の色やは庭のまつかえ

若州少將靈山の山庄にて和歌會興行あるとて題をさくら

れ侍しに橋上初雪

吹をくる雪のしからみかけそめて夕風しるき谷の柴橋

愛宕に侍ける比雪降けるに

つみかへるしきみか峯の夕風や萩の雪を吹はらふらん

深雪

庭のおもはひとつ野風のなとさえて籬をしまつもる雪哉

山雪

山の端の星のひかりもうす雲にたえ／＼のこる雪の色かな

十月廿三日飛鳥井羽林亭興行會に夜思山雪

あけはみんとおもふ心に峯の雪まつ分かくる夢のかよひち
さいの葉の太山の雪のよなをさむみ見るはかりなる峯の松風

林間雪

色かへてよの間雪のちりそいく林にしけき木の葉なれ共

關路雪

かせそよく竹の下道分過て雪に宿かるあしからのせき

崎雪

ふる雪のすきさになてるかきさのひとりほらはぬ浦風そ吹

冬かれの野島かさきに雪ふれはおはな吹こす浦の夕風

刈田雪

臥なれし小田の原とやふる雪もかのこまたらにあとをみすらん

鵜屋雪

冬さればあし屋の煙立消て雪にそくもるなたの鹽かせ

松雪

うつすともえやはなよはん雪の松白きを後のおもかけにせは
今ははや心のまゝにつもるらしあらしのいちの松のしらゆき

松上雪

ちりうせぬ松にならひて吹しほる嵐のうへにつもるしら雪

霜月十九日會當座に雪埋松

夕日影をちの山もと降はれてあたゝかけなる雪の松はら
あらし吹音もよの間にうつもれて嶺も尾上も雪のあけほの

疎簾看雪

やふれ行あみめの絲のなのつから雪をみせたる玉すたれ哉

雪中迷懷

さすか又はらひは捨し終に我あつめぬ窓の雪とみるにも

鷹狩

はしたかの妻こゝろみし羽ならしもさなからみゆるとりの落草

爐火著冬

春の日のひかりにあたる心地してれふりにむかふ埋火の本

十二月十九日田邊にて月次會に爐邊閑談

おもふことえやは心にうつみ火のかきあらはして又そかたらふ

夜神樂

うたふよの聲のうちにもその駒やびのくま川をためしにそ引
神樂の香をかくほしき萩かなゆふとりしてうたふあかつき
神の心いきみやすらんその駒に猶くさかへとうたふよのこゝろ

年欲暮

よにすむはあはれみしがき年のなのくるゝないとお昨日今日哉

雪中歲暮

春秋を夢にすくさん雪ふりてくれ行としのうつゝならずは

戀部

烏丸蘭臺阿野羽林など丹州下向の時の當座に忍戀を

とはいとへこのふのなかのしの薄はにいてゆまの露にいかにと

慶長五年正月廿一日夜夢想の會興行百首の題の中におな

し心を

しのふくさみたれそめてそ色かはる心をくへき袖の露かな

忍涙戀

さらばまたそのまゝなかせ泪川せくに涙こそ袖のしからみ

互忍戀

いかにせむ色にいてなほ君と我ともに忍ふの草はつむとも

みせはやなともしにのふのすり衣下にみたる露のたもとを

忍久戀

としてもしのふの山の嶺の松色にはいてすかぜはさはけと

聞戀

すへなくもまたせてつらし鉤簾のとに聲聞ばかり立はふれとも

大かたはかたるか中に我がおもふ人のうへのみまつとはれつゝ

見戀

みすもあらす人をたとゐにしられけり夢にまさらぬ現有とは

洩始戀

中々にもらしてやみむ思川せきとゝむへき心ならねは

稀逢戀

秋なまつ星のあふせもしられけり稀なる中の袖のしら涙

忍尋縁戀

おもひ草尾花の露にぬれノすほのみく風のつてにとはいや
豊前國香春にて忍傳書戀

こゑなたにこすの間遠く聞なからつたへてうれし文のこの葉

依戀祈身

いのるとも神やはうげん戀せしとわかきさへしたかはぬよに

祈不逢戀

神たにもうけぬ祈のみしめ縄ひきかへすとも君にしらせし

つれもなき人にはいはしゆふたすきかけつゝ神に又いのるとも

十月十日三條羽林家當座に祈神戀

いかにせんうきを紉の神ならはいのらすとてもあはれまん身を

丹後國宮津に住居の時一女院にて會有し人々にかはりて

契戀を

神かけてちきりし末を思ひ出よ我こそよには數ならずとも

契待戀

人をわか思ふ心のまことよりいつはりしらてまつゆふへかな

不逢戀

うつゝにはいつかいされん逢ことは夢ばかりなるよはの衣を

閏五月十九日月次會當座に待便戀

はいかりの關ともいはずこえてきぬ人傳ならぬ便もとめて

逢戀

こよひこそしのふることもわすれければ逢うれしさの心まといに

忍逢戀

あふ人にまつうちとくる心かなざりとてよにはしのふものから

正月廿五日關白殿御會御當座に後朝戀

逢不會戀

わかれつるうきふしにのみまされてや中々今朝は物思ひもなし
あひみつる程もうつゝとまたしらて夢になせとも契らさりしな
はかなしや一よふせやの中絶て又はいさゝのよそめはかりは
もかみ川逢瀬はたえていな船のいなとはかりに月日をそふる
逢後増戀

稀戀

あひみしは夢ばかりなる佛をあはれうつゝにこふる比かな
稀にあくる山櫻戸なとてのみちらさば君かうきにやはあらぬ
依忍稀戀

追戀

いかにせん忍ふふかれのそのまゝに逢ことかたき中となりせは
忍つゝ立よるねやにわかうへなかなると聞そかつはうれしき
あひおもはぬ

思ひ

かた戀のくるしさつげん難面のこゝろかへする人もありやと
おもふなはおもはぬなよのならびそとしりてもままとわか心哉
いかにせむたれは心のおもひ草ばらふにたへぬ根さしならねは
被忘戀

恨戀

さりともとつらき人をもたのむ哉我わすられぬ心ならひに
わすれ草人の心のたねとりてたえぬ戀路にうへましもものを
人心配のむかしにわするらむちさりしことはきのふと思ふに
つれなさにこりぬと人や思ふらんうらみぬほとに成てこし身を
恨戀

さらに又うらみこといはん文は猶とりて其まいかへすつかひに
のこりなく人につたへよつらしとて恨をかくす中ならなくに
きくに今人につたへんたえこしは又なほさりの恨なりとも
披書恨戀

恥身戀

夢中戀

夏戀

寄月戀

寄風戀

寄雲戀

寄名所戀

いかにして人にむかはん老はてゝ鏡にさへもつゝましき身を
さよ衣かへすたもとに夢人を待とや床のちりはらふらん
行營さらにつたへよ夕くればおなし心にもゆるおもひた
とへかしなしのふとするも月夜よしと告て下に待身を
人めのみ忍の浦のかせをあらみ身のうきふねやよほもかぬらん
かせなれて人には誰かつたへまし思ひの烟空にみゆとも
あふことはならはぬ身さへ横雲のわかるゝ空に名残有物を
立かへりむねのうちにやさばくらんせくにそ袖は音なしの瀧
もらすへき人に心を岡のへの末せきとむる水莖のあと
慶長十四年六月飛鳥井相公非野公豊前國小倉に下向の時一
讀興行し侍けるに寄野戀を
むさし野もはては有なんゆくりもわか戀草の種をたつて

寄海戀

みるめかるかたならませば大海のかへらぬ浪に身は沈むとも

寄苔戀

いける身のほとをほをきてしらぬよの苔の下とはなに契りけん

寄木戀

なそもかくよになかるらん名取川身は埋木のしつみはてつゝ

寄鳥戀

わかれちはまたよふかしといひなすもしばゝ鳥の鳴て過なり

いかてかくつれなき人そいふことに答ふる鳥もあればあるよに
まてしほしそらねと人にいひなすもわかれの鳥の八聲にそなる

寄衣戀

くれなるの八しほの衣それとみよ忍ふにかなふなみたならねは

寄筆戀

その人のこゝろもさそとたのむかなたいしき筆の跡をみるにも

寄玉戀

にくからぬ人にみせはや涙にもなをぬれきぬの袖のしらたま
似ることよもきの嶋の玉の枝手にたにとらて逢ふしもなし

雜部 上

古渡雲

たか袖のなこりとゝめて枕かのこかの渡にたてるしら雲

深夜雨

更にけりゆきゝたえたるよるの雨くらはし川の海も音して

ぬま

水まさる岩かき沼のうき草や苔のみとりの色をそふらむ

うきくさに岩のはさまちかくれぬの下にやかよふ水の水上

也軒一會興行の當座に夏遊浦

うきみるを道の行てにひろひてやあそひの浦の目をくらすらん

浦島

浪の音もひゝきなそへて住の江や浦島となき松風そふく

とし浪のいくかへりとか浦島に老木の松のまつそ久しき

慶長五年三月廿五日式部卿智仁親王亭にて古今講釋の後

の當座に故郷庭草を

今ははやゆつりやはてんむかしみしいもの垣根をとつる葎に

閑居

やまを我かたのしむ身にはあらねともたいしつけさを便にそ住

十月十三日當座に野篠

冬かれの萩の下葉にかへりてや霜うちさやく野邊の篠原

窓竹

鶯のきなくみきりのや日影むらゝないく窓のくれたけ

一遊齋興行月次會につくしより歸陣にて出座し侍るに松

を

わかみとり立かへるとしのかひありて老の命もいきの松はら
名所松

ひろひ置し例もさらに高砂の松のおもはんことの葉にして

浦松

心あるあまのしわさに釣舟をよせてはつなく松かうら島

庭上松

庭に先つうつしそいうる大かたは松のおもはん老をはちても

松經年

とし／＼に老ぬるかけそ哀なるまつのおもはん身をほわすれて

松添榮色

立かへる春にひかれて松の葉のみとりもふかき朝かすみ哉

飛鳥井相公豊前國小倉に下り給し時會催し侍しにおなし

心を

君かよの松にひかれてのほりゆかん千年の坂もめのまへにして

人にかはりておなしこゝろを

うれしさをなにとへん我宿にうへし四本の松のことの葉

曉鷄

あかつきの鳴のはれかきかきたえてゆふつけ鳥の聲そ敷そふ

關路鷄

こはた山こはたか爲にれ覺ふとゆふつけ鳥のあかつきの聲

あはた山夜ふかくこえて相坂のこなたにそきく關の鳥が音

木蟬山ゆふつけ鳥のこゑ待て越こそやらね馬はあれとも

慶長五年正月廿一日夜夢想に

心たにしたにかよはい石清水むすふ契しも絶しとおも
ふとよみ侍しかは百首の題を飛鳥井三品へ申請てなの
をのに歌をすいめ侍し中に旅を

みやこおもふ涙も露もあらそひて草の枕に幾夜れぬらん

山旅

たひ衣日もかさなりて宿とへは同じ山路の峯のしら雲

峯をこえ谷をくたりてやとへはおなこゝろへと山かせそ吹

旅行友

したひきぬ部にしてはみすもあらずみもせぬ人も旅の友とて

寄夢旅

ことつくるものにもかなやたひ枕みやこの夢のかへるたよりに

羈中眺望

ゆく／＼も心なうつす海山のなかめをたひのおもひ出にして

旅宿

をのつから一夜の宿となりにけりしはしといひし夕くれの雨

旅泊

いつ舟のかくきにけんとおとろきてなをさへたとる唐泊かな

旅泊浪

由良のとの行衛はるかにこくふれもとまりきたむる和歌の浦浪

六月十九日月次會三首に遠方書信

みやこにとことえりしつゝかく文にとこほりぬる筆の跡かな

山家

をのつからあやしの賤のことの葉をうつして友となるゝ山里

山家送年

年月をふるにつけてもおもふそようき山住にまさるうきよな

山館燈

仙人の住家とやいはんみたれ基の音して更るともし火の影
よもすから靜にすむもうらやましたか山窓のともし火のかけ
山おろしのたえず音する窓のうちにあやしく残るよはの燈火

田家

作るともそいろに過し小山田のかたしきかゝるやとの一むら
さといなき田中の井とのあせつたひ汲人あれや道そたえせぬ

古寺鐘

たれもみな命はけふあすか寺入逢の鐘におとろくはなし

遊女

くれにけり野上のさとの草枕たれと契りをまつむすふらむ
はちらひてなればそなれん一夜妻たか名残をか身にしのふらん

思往事

西にうつり東の國にさすらふもいま行駒のあしからのやま

四月廿日定家卿の自筆新勅撰集求えたる宴宴に和歌會興

行し侍けるに披書知昔

雲の上の月にまじりてえらぎ置しことの葉みする筆の跡哉
もしは草かく跡したふ心のみむかしにかへる和歌のうら涙

社頭柳

ゆふしてゝ宮ちかよはいかけそへ神の心もなひくさかきは
みつかきの久しきよゝり柳葉を神の御まへにうへやそめけん

社頭祈君

敷島の道すなほにといのるこそまつ君か代にすみよしの神

新勅撰覽宴三首の中に社頭祝

あふひ草かけておもへはそのかみにこれと二葉の松の尾の山

祝

れかはくは家につたへん梓弓もたつばかり道をたゝして
ちりうせぬ人の心のたれよりやうへ置窓のまつこのことの葉

溝口大炊助興行會におなし心を

おさまれるよはうらむへきふしもなし植そふ田子のうたふ聲迄

寄星祝

としなへてほしなたいき起きなれし光を見する雲の上人

寄山祝

民の戸のにきはひまでもしられけり岩倉山の治れるよは

寄道祝

いにしへの風をつたへてまきしまの道によりくる和歌の浦浪

君か代のたゝしき道はゐるかなるあなかの民もゆたかにそ往

敷島の道のひかりもあふきみんことはの玉の數をひろひて

寄國祝

あし原やみつほの國もやす國となひくにみゆる春風そ吹

たて置し神のちかひの今までもななうこきなき國の御柱

治する國の司もしられけり高木の村のあるにまかせて

聚樂行幸の御會に人々にかはりて寄松祝といふことを

年に猶まさ木のかつらなかきよをかけてそ契る宿の松が枝

かけて今日みゆきをまつ藤浪のゆかりうれしき花の色哉

おさまれる御代そとよばふ松かせに民の草葉も先なひく也

今日よりは君にひかれて葵草二葉の松の千代に八千代に

あふくよの人のこゝろの種とてや千代を契れる松のことの葉
夢想の會に寄神祝

例に今うつしてそすむ八雲たつその八重垣の神のむかしな
關白駿渡御のときおなし心を

かゝみこそしるしなりけれ曇なきこゝろの神とあふきゝぬれば
飛鳥井州公豊州下向の時興行の會常座におなし心を
いにしへはこゝにきたのゝ神とてや残すちかひを猶あふくらん

雜部 下

慶長五年七月廿七日丹後國籠城せし時古今集證明の狀式
部總督仁親王へ奉るとて

いにしへも今もかはらぬものの中に心のたれたのこすことの葉
おなし時鳥丸蘭臺へさうしの箱まゐらせし時

もしほくさかきあつめたる跡とめて昔にかへれわかのうら涙
かゝりし後ことゆへなかりしかはかの箱をかへしなくら
るゝとて辨のもとより

あけてみぬかひもありけり玉手箱二度かへるわかのうら波
返し

うらしまや光をそへて玉手箱あけてたにみすかへす浪哉
慶長六年閏霜月十九日照高院宮道澄よりかくおほせられ
し

おもひやるも心つくしの道なから行はなくさむかたやあらまし
御かへし

みやこ出る名残を何にくらへまし行かはなくさむかたは有とも
也足軒素然勅勘なかうふりて數年丹後在國ありしを今度
めしかへさるへき勅定有よし勸修寺大納言より申をくら
れけるにほとなく歸落なりしかは

わするなよつばさならへし友鶴のひとり雲ゑに立歸るとも
返し

かへるへき雲ゑにたとる友つるのものと澤邊を立はゝなれし
八月廿七日豊山左膳方よりとて歌數をよみて書付よしあ

しを分へきよし有けるに此一首をいくつかはしける
いつれともこと葉の露の玉さかにわかれもやらぬ光をそみる
八月十九日奥山佐州へ茶湯とてまかりけるに床に千五百
番の歌合に定家卿筆にて杉の庵の時雨のことなとかいれ
たる一軸をかけられたるに折ふとくれて興をそへける
ほとに

くやしきもとはて月日をすきの庵身にしむ秋のはつしくれ哉
聖門主へ日比齒をいたみて樂を申請侍しにこの比又申う
くへきよし申てまゐらせ侍し時に

ことばりの老木のくちはそれもな落るもおしむ秋風ぞ吹
御かへし

をそくとき木々の落葉をみてもしれ麓はふせく嶺の秋かせ
あるものゝかたより一首をいくつ侍ける

音に聞うたの名所なかなかにすむほといきす初音きかはや
返し

初音をいいかでもらさんなのか住山ほといきす名のりきかすは
宮川の禪尼櫻のはしに住ける時まゐるへきよしひて度

度打過ければかの御かたより
君こむといひし日ことに過ぬればたのまぬ風のわひつゝそ吹
返し

はかなしやまつに度々すきぬともたのまぬ風といひし便は
江雪苑返しにつかはしける

わひて住みやこなよそにさそふ身やうかへる雲のしくれ成らん
慶長四年九月八日三井寺講堂御再興ありて柱なと立ち

し比照高院宮へまいりてかくそ申侍し
絶にける三井の流をあらためて更に汲しる法の水かな
御かへし

かすかなる三井のなかれなとふ人に心の水をすましつるかな
住吉の社にまいりて古今相傳の子細あれば讀て奉納し侍
ける

數島の道のつたへも絶やらぬ行末まもれすみよしの神

慶長四年六月廿二日烏丸蘭臺岡野羽林など下國の折ふし
橋立見物のために宮津へ供奉してまかり侍ける次日舟に

てみせまゐらせかの寺にて一讀の當座に
たよりありてまたれし雲の上人もけふゝみそむる天の橋立

對馬宗諫州入道閑齋よりなぐられ侍ける

天下なひきしたかふ大きみにはこふ御調をすゝむ高麗人
返し

君か代にこまもろこしもへたてなくほこふ心やみつ成らむ
群在のもとより比えの山にありける東大寺の香をいくら

れける時このうたをそへて一つゝみの紙に書付られける
おほけなき袖の匂ひのくばゝるも我が立袖のみやうかとそ思ふ

返し

咲花に似たりと香をそとめぬるわか立袖の峯のしら雲

正月十日夜わか道を心にかげぬれば老たるものもわかく
なる術なりといふ夢想ありてのあしたに思ひより侍る

あしわかの道に心そいさみぬるこやこまかへるはしめなるらむ
泉州堺津宗佐たび／＼歌の點のこと申をくりけるこのた

ひも百首の歌をのほせ批判のことこひける一卷のおくに
和歌のうらにまた浪なれの磯のあまのよする心を哀とも見よ
返し

あま衣なれにしわかの浦の浪かへりて淺きみくつをやしる

禁中へ富士の山繪に書たる御屏風奉りし時

久かたのそらにつもれる白雲や明行ふしの高根なるらむ
中院黃門通勝卿入道ありて此一首をいくり給はりし
むらさきにそめし心もたちはてぬ袖の行衛を苔にまかせて

返し

むらさきにそめし心のはてもなしおもはぬ袖をこげにやつして

これを物かたりし侍ければ紹巴

苔になす袖ぞかしこきゆつり置心はふかきむらさきの庭

天正十五年十月廿七日愛宕月輪寺にて幸賀庭義灌頂せし

前日白雲寺福壽院またまかりて通夜し侍りしに

けふのこよひ心のやみもはるばかり光をそへよ法のともし火

おなし年九月上旬島津薩摩守義久此比在洛のことあり息

女を人しちの心にてといめられ侍り同道有たきよし御こ

とはりたひなりしかといひかたきよしを申つかは

せしにかやうに申をくられはへりし

ふたよとは契らぬものを親と子のわかれむ袖の哀をなしれ

返し

なれし身をはいなまし玉手箱二世とかけぬ中に有とは

琉球國使節にくして思日徳といふわらはへのほりはへり

けるにいさゝかのこにつきてさつまにといめらるへき

よし有けれとさま／＼になため歸國し侍る時建善寺のも
とへよみてつかはしける

しほしともいかてといめん親と子のつらき別を思ひとくには

鹿兒島の東よし野山ちかきわたりなつみの瀧といふ所あ

り見にまかりて

これも又よしのにちかきなつみ川流て瀧の名にやおつらん

肥後國八代にといまりける目池を見侍りて

かけもみし目数をうつす旅衣身をやつしろの池の鏡に

同國の白川をわたりて

なかれてのなを行末をたのむかな身は白川の淡と見ながら

ひれふる山みんとて舟にてまかりて

松浦渚ゆく舟となき追風にひれふる山のむかしをそおもふ

丹後入國のとき橋立見にまかりて

そのかみにちきり利つる神代までかけてそおもふ天の橋立

いにしへに契りし神の二柱今も朽せぬあまのはしたて

與謝のうらにて

よさの浦松の中なる磯清水都なりせは君もくみむ

慶長二年昌山御不例のよし聞て八月十五夜よふれにて大

坂へくたりけるに三嶋江に舟をとめ蘆間の月をななめ

て

たれか又こよひの月をみしま江の蘆のしのひに物おもふらん

廿四日きもつきよりめぐりといふ所までつきて大安寺に

泊りけるに夕月夜おかしくさうつるを見て

はる／＼と山をめぐりの夕月夜にしに入江の影をみる哉

廿五日登田へ舟をよせてたかつの人丸御影堂尋てまかり
拜奉りて旅宿に歸曉かたにおもひよりける

あふきみんたかつの松の木の間よりむかしなのこす
在明の月
赤石の間たつれてみ侍しに松の木立ふりたるなむかしの
あとい里人のなしへ侍れば

夕日影あかしのなかの跡とへは昔おほゆる松かせそふく
ふしまをみやりて
みつしほにくもりはていもゆる涙の白きを後の繪嶋とそみる

高砂の松見にまかりて

高砂の松のおもはんこゝるにも猶はちやらぬことの葉にして
備後國鞆のうちに舟とまりして翌日出たつとて

今日はまた吹こそなくれこきよせて泊し舟のともものうらかせ

吉野山み侍るつゝあてに三輪の山なとふらひ行侍に宇治橋
の材木とて杉の木立ことくく杣人のきりける神木とて

五六本のこしけるを見て

三輪の山杉一本を杣人のこすや神のしるし成らん

吉田に久しく逗留し侍ける比雪の降ける日近衛前相國の
御もとより御頭痛再發のよしのたまひて御歌あり

みな人のみるてふ雪を山守は風のさむさにたれこめてけり

御かへし

吹風をいとふにはあらて木々の雪散をみしとやたれこめにけむ

出羽より上洛の人有比西國御出陣供奉にいてたつとて申
なくりける

いな舟のうきよなりけりもかみ川のほればくたる旅のこゝるは

大庭の御神いさなきいさなみなりと聞及しまゝ白方より
まいりてみ侍しつゝあてに

そのかみやひたりみきりにめくりあへる契絶せぬ天のうき橋
かへるさに八重かきの明神み侍しに在所をは佐草の間と

いひける社のおくに八重垣榊にてめくりなをかこひて杉二
本ありむかしは大木なりけるかこるひてのちうへつきた
るとなむ

更に今みるそあやしきいにしへのその八重垣も杉のしるしも

高野へまかるとてまをこめてまつち山こえ侍るとて

おきいて、猶あくるよなまつち山こえてきのちの末いそくとて

高野おくの院にて

あなたうとうきよの夢や覺ぬらむそのあかつきをまつの風に

きふれにまゐりて

きふれ川岩こそ浪やゆふたゝみ手向の袖にたえずかくらむ

目野といふ所にまかりける次に長明といひし人うき世な
はなれて住居せしよし申つたへはへる外山の庵室のあと

をたつてみ侍るに大きな石のうへに松のとしふりて
水のなかれいさきよき心の底さこそとをしはかられ侍る

昔のことなと思ひ出て

岩が根になかるゝ水も琴の音のむかしおほゆるしらへにはして

七月廿四日湯光院三回御忌の御佛事とて清涼殿にて法華

懺法ありけるに雲客僧衆ともに禮拜せられけるをみて菊
亭右府へ申なくりける

今日といへば花も散しく法の會に立居かさなる雲の上人

御かへし

あしたゆく今日法の會につかふるや老をもはちぬ雲の上人
十一月二日稱名院殿廿五回之追善の一會に寄夢懷舊とい
ふ題をくり給はりけるに丹後下國の折ふしなれば沈思
に及ばず引て下りしに十二月九日亞相はからさるに遠行
のよし聞えあれはやかて書付てのほせ侍る

遠さかるよの跡までしのお裁いやはかななる夢のなこりに
蓮池淨知うせて後かの後家のもとに申つかはし侍りし
法の花更にひらくる蓮こそ心の池の根さし成けれ

はちすか阿州の息女いまはいけなく侍しを羽柴左近を
むこかれとしてちかきとしより丹波のかめ山にすみわた
られけるに風の心ち例ならすしてさま／＼にいれうをつ
くすにかひなくむなしきから五月六日東山岡崎のあた
りにさうそのことあり見物にまかりし折ふし郭公の鳴
わたるも折しりかほにあればとおほへて
よなさるもとしへぬる身も時鳥人につたへて鳴聲をきけ

めしつかひける森のなにかしに萬といひしわつらひ
て六月廿七日身まかりける親のなげきを吊て
ときは木のしける下葉の散行や秋まぢあへぬ森の木からし

九月十六日雄長老遷化ありしに

長月のいさよひの月の影さえてむなしき空やかたみ成らん
昨波軒賀茂河にてむなしくなり給ふを聞て

たちかへるならひもさかす波川きのふの涙のあはれよの中
正月十六日大閤過しよの御夢に若君を御らんしてこたつ

のうへに御なみた落たまりければよみ給へる

なき人のかたみの涙のこし置て行衛もしらす消はつる哉

これ返しせよとおほせことありけるに

おしからぬ身をまほろしとなすならば涙の玉の行衛尋ん

ある人の三周忌に

あらはに嬉しかるへき三年をも空しきあとにかそふるそうき

春釋教

春風の吹ときてこそしられられ氷もおなし水の水かみ

定なきよのならひはめつらしかられと扱も藤陰老師高野

の山にのほり給しは今既に廿年はかりにも成けるにやそ

の間予かのほるへきたより度々おほけれと今年の紅葉の

比くる春の時なといひてうきよのきつなにかいつらひて

夏引のいとまなくいくとせを送り侍しか時しもこそある

に去年の初秋老師身まかり給けるに今しも奈良の京に知

人を訪ふとおもはさる外に此上によちのほり先師の造

像にむかひ侍る事こそいかなることやらん歎てもな

をあまりあり富院主いまはのこといも物語せらる又年來

建立の伽藍とも多かりける中にも明神の鐘を鑄させ樓ま

てたてられけるは誠によのつねならぬ人にや予舊友にも

こと更したばしかりし故愁涙をさへかたし彼老人のすけ

る道なれば三首の瓦礫を綴て碑前にこれをそなふるもの

なり

おもひきや青葉の藤のかげに來て散にし花の跡とはんとは
わかこくなくなき人をしもしたふらん山時鳥聲そへて啼く

法の師のつくりし鐘の樓よりも高野の山に名はひきけり

慶長九年五月初六日細川大藏卿法印爲自性院先師藤陰

宗波追善也

長岡幽齋玄旨公來訪走筆奉贈

松

堂

故國迢々隔海西、秋風客意轉凄々、夜長旅宿愁無寐、新月多情照
獨栖、

又

玉帛新修西國歡、使臣隨處好聞韻、唯愁歸路三千海、遠客風帆阻
歲寒、

次朝鮮國正使松堂老人來詩二篇韻旨續國風和合

幽齋玄旨

月やとふかたしく袖の秋風にれぬよかさなるたひのすみかな
にしの海やその舟よそびとくせん秋くれ行は浪のさむきに

丹後國にくたりける比一安軒よりいひをくられるから

うた

海國天無三日晴、連宵背月到深更、憶勇共對洛陽雪、榻畔閑聞茶

鼎聲、

この韻を和してつかはしける

あはれしれあやこの空の初雪をなれていくよの山かせの聲

三月十六日近衛中納言鞍馬へ人々誘引ありて花見給ふに

雨ふり出て逗留のよしきいて壽命院旅床下まで申をくり

ける

成群鞍馬競春風、黑客驢人吟興濃、歸計催來山雨灑、櫻花知是願
留公、

慶長八年三月靈山の花見侍りて
れうせんのしかのやくそくたかへしと真如くちせぬ花盛かな
くらまのかへるさに禁制の櫻を一枝折て

一枝の花ぬす人となりにけり袖にくらふの山のかへるさ

烏丸蘭臺より鰯といふ魚にさくらの枝を折添られてなく
り給るとて

いへばえに岩もと櫻折そへて心ひとつを山ふきのばな

返し

山ふきの色そふ花のことの葉に口ふりとてもいかてこたへん

蜂屋出羽侍従より鳥の子二百枚鳴三なくられて

とりのこを十つ、十となを十とかされ上たる文のなとつれ

かへし

鳥の子を十つ、十はかさぬとも思はぬ人にくれぬ文かも

男女會圖を掛繪にしてある人歌を所望せしに書付侍ける

給爾賀毛流姿奈可其裳徒仁心有古加壽多興利那羅須也

慶長のはしめの年仲の冬大坂の亭にうつりおはしまし

し比奇瑞の靈夢を感せらるゝことありその和歌にいはいく

よなれとひきそあはする初春の松のみとりも住吉の神

凡靈夢あり善夢あり昔し黃帝夢に華胥氏の國にあそぶさ

めて後天下大におさまれること彼境のことしといへり又

殷高宗の良佐を得て國家盛なりしなり中につきて松は十

八公の名ありこれ又丁固か夢に感せし嘉兆ならずや抑住

吉の御神は西のうみをとをさしほちよりあらはれ出てち
かきさかひにあをたれ給へりたゝこの我朝を鎮護し給

ふのみにあらずはるかに異國征伐の御ちかひ事なるかゆ
へに神功皇后の三韓をたひらけ給ひし時も御神ことに威
猛を施し給へりとそされはこのあきつ洲四の海浜のこふ
せずしてこまもろこしもなひきしかひ奉ること只此時
にありその久しき行さきを思ふに住吉の松に小松のかけ
をならへつゝ一木くゝに千世をかそへても勁節枝さかへ
貞姿色みさほにしてなむかきりなき御齡なるへし今この
ことを聞になろかなるこゝろにもよろこびにたえずいさ
さか筆をそめて祝詞を奉るといふ事しかなり

法 印 玄 旨

すみよしの神のめくみもあらはれて君か八千代をまつ言の葉

此集者法印玄旨之詠歌也、曾孫細川丹後守行孝纂其
詠草、寄藤原相資慶卿、請編爲家集、蓋法印依爲亞相
之外曾祖也、去々年彼卿被捐館舍、易簀之前囑予曰、
法印之詠歌編集之事有志不果、今有何面目見法印於
地下、若代我遂其事死無遺恨、予不得辭、即許諾、行孝
聞亞相之遺言、亦請予不已、傳聞法印生武門、長亂世、
帷幕爲宅、金革爲枉、西伐東征不遑寧處、然深嗜和歌、
耳目之所觸、心忠之所感、吐辭爲歌、橫槩賦詩之子建
再生我國者歟、況稱此道之先達、貽其傳於後學、誠可
嘉尚、可景慕乎、倩以法印一生之所計、遺稿之所在所
謂存十一於千百者也、何足稱法印之全集、雖然片玉寸
金不可謂非寶、今集爲一冊、後來博雅之士以其漏脫更
有增益之不亦幸乎、於是在部分類編次爲集歌數八百餘
首偶以清書之本備 法皇之御覽辱賜其名號衆妙集是
玄旨之集而玄之又玄之意歟又被染御筆被下外題法印
身後之榮道之冥加何事可過之乎誰人不仰之哉件清書
之本任其懇望贈行孝之間以事之始終記紙尾者也

寛文第十一曆季冬

雅 章

草山和歌集

春たつこころを

こほりぬしのなかのしみつうちとけてもとの心にかへるはる哉
としのうちにばるたちける日

あふさかの關路をこえてあらたまの年のこなたに春はきにけり
梅薫風といふことを

いつかたにあくかかれてんむめかゝのそこともしらぬ春の夕風

春月

春のよのならひになしてみる人もうらみぬものと月やかすめる
花のうたあまたよみし中に

つるに身のけふりとならんばてやなな花にたちそふ霞ならまし
やまひのつこもりに

ゆくはるをふはしとなかん鳥たにもかへる別はいふかひもなし
ふちのはなはひまつはれよ今はとて歸らん春いつらきわかれに
むさしのくにありけるともたちのもとへ

むさしのは思ふ夢路もはてやなきあはてそ歸るうたゝねのこ
世をのかれてこゝかしこありきけるころ

のかれては山里ならぬ宿もなしたゝわれからのうき世なりけり
はやくのともたちのもとなつかはしける

物毎に猶そわすれぬいてしよをおもひいてしとおもひすつれと
ひとのうたすゝめける返事に

木のはしにたくふ身なればいまはなを言葉の花も色やなからん

題をさくりてうたよみしに寄道祝

のかれても長閑き御世の恵をばつまきのみちのやすきにそしる
ともたちのふみをこせたる返事に

なれしよの友をそ思ふやま深くおもひいる身もいは木なられば
やまさとにてほといきすをさきて

まのひれもやすくやもらす時鳥われびとりすむまつゆとほそに
ほといきすなれもみ山をいていはいとい語ふ友やなからん

秋たちける日

草葉にもまたなきあへぬ露みえてそてにまつしるあきのほつ風

野蟲

さそじくるあきの野かせやみたるらんをちこちになる鈴蟲の聲

旅行

旅の空なにかわひしき世を捨ててにし身にはふるさともなし

浦月

こしやふけ難波の蘆のふしのまも月にねられのあきのうらかせ

月を見てよめる

ことしけき都の人はいかいみるみつゝききみすめるつきかけ

契空戀といふことを

そのまゝにわれこそたのめ人はよのかはる習ひに契りをきけん

秋のころなくなりける人をいたみて

わか袖はいかてかばかんことはりのゆふへのほかのあきの心に

披書知昔といふことを

くりかへしとなき昔を静かなるまとのうちとのふみにみるかな

述懷淚

法の道おしむためにはよのうさをなけしほともぬるゝ袖かは

雪埋松

まつにのみなをふりつみて冬枯のこすゐにかろき庭のしらゆき

恨絶戀

まくすばらかへす衣のゆめちまていまはうらみのあきかせそ吹

獨述懷

山さとも都もおなしかくれかやよにわすられしわが身なるらむ

寄夢無常

このよなは現になしてたれもなを枕のゆめをゆめとみるらん

月前擲衣

たれもこの月にはれしとよもすからうつや砧のこゑもおしまぬ

わらはともたちなりし人いながふりたつねきてかへりし

とき

迷ふそよあふはわかれのことはりは人にもさこそ教へける身の

山家橋

くちはてれなをおりくはとふ人の心にかゝるたにのしはいし

景軌父公軌七周忌に法華經ならひに開結二經をみつから

かきて供養に三十首歌すいめける此經難持

いかにしてふはしたもたんうき身さへ受難き世にあへる御法を

經文のうたよみける中に唯我一人の爲救護

たのめ猶たゝわれひとすくふへきをしへたへなるのりの心を

山家冬朝

さひしさもけさこそまさされ嵐たに松になとせぬゆきのやまさと

氷

池の面は夜半のあらしにとちばてゝに松に残れる涙のなとかな
竹爲友

松のみさをむめの匂もなき身もてともなふたけの心をそ思ふ
人の子なうしなひたるをいたみて

たかまことたいいつはりの人の世に定めなきよといひし一こと

京より来てきて「世をいとふ人のこゝろもふかくさの里

をばかれますとはんとそおもふ」といひし人に

かれすとへ人の心はあさくともたふかくさのさとのあはれを

無有覺事雖有魔及魔民皆護佛法

一むらの雲さへあきのひかりにてくまなきそらにすめるつき影

春雪

さかぬまにきゆるもつらし花とみてあるへきものをみねの白雪

龍華院より花のえたにつけてうたたまはりけるに

わしのやま昔のはるは遠けれとおなしいろかのはなそたへなる

春のくれに

ちるはなはかせに恨てなくさめきくれゆく春をたれにかこたむ

人の名をよみし中に李夫人

はかなきや夢にまさらむおもかけの烟にきゆるやみのうつゝは

夜述懷

うしや又いかにまされんふつかなるよはの心にあすもくれなて

停年月

傾ふかてふはしやすらへ動きなき星のくらゐにむかふつきかけ

草菴にてこれかれうたよみしに曉述懷

いつまでかれさめむなしきとこの上に枕もしらぬゆめなのこさむ

庭月

月もやゝかけやかたふく置霜のなかばさえゆくにはのまさこち

初雪のあした

ほのくとおげゆく庭のおもしろく神代おほゆるけさのはつ雪

月前落葉

やまかせによその紅葉をさそひきて松のこのまに疊るつきかな

歸鷹

まよひいてし人の心をふるさといさゝはさそへ歸るかりかれ

深草のさとにすみなれてのち

すまてやはかすみもきりもおりくゝのあはれこめたる深草の里

くるゝまで花を見て

月雪のひかりににほふはなの色にくるゝもしらぬ春の木のもと

草菴の會に山家郭公

人のよのことかたらはぬほとゝきす又もとはなむ松の戸ほそに

題をさくりて不逢戀を

いかにせん身はさきたたむおもひにて烟の末もあはてきえなほ

いかなるときにか

鐘のをとのうちおとろかす曉もなをさめやらぬゆめそつれなき

人のよな思ひねにのみまるとめはいやはかなゝる夢もみえけり

花を見て

花や猶あたりとみむいろにたにうつればかはる人のこゝろを

初鷹

月はまたほのめく峯のまらくもに數こそみえればつかりのこゑ

ゆきふりつもりたるあした

里の犬のあとのみ見えてふる雪もいとふかくさ冬そさびしき
年のくれに

けふくれてあすは又こん年なれともとの月日のかへりやはする

海邊夕花

すまの浦のあまのたくなば永き日もくるゝほとなき花のした影

旅宿三月盡

くさ枕われにてふりぬゆく春もこよひかりねのときやつゆけき

草野秋近といふことを

なつふかきをのゝふのほら露ちりてしのふにあまるかせの色哉

秋夕

めのまへの世をこそなけゝ大方はうしともしらし秋のゆふくれ

山家時雨

ちりのころもみちを庭にさそひきていろにしくるゝのきの山風

里雪

橋ひめのまつ夜むなしくふるゆきにけさあをつくる宇治の里人

あつまへゆく人に

別れゆく道はとをはたみそよそとかへりこん日を先かそへぬる

このすまゐもなを人めしげくて

世ないとふ山なもひとのとひくれば市にやさらに身を隠さまし

やまふき

芳野川はるの日かすもゆくみつにうたかたよとむやまふきの花

寄玉戀

人しれぬそでの涙のしらたまもみ世まであはぬためしとやみん

旅

なげかしな迷ひきにける身をすればわが故郷もかりのやとりを
祝のこゝろを

四方の海みつのひしりのみちなからむかしの波にかへる御代哉
月のうたに

なかき夜も岸におふてふ草の名にあくるほとなきすみえの月
寄山述懷

あふきみるいそちあまりの位山ふもとのちりの身ないかにせん
ほといきす

あしひきの山はといきす心とやうき世にいてゝねなはなくらむ
古水和尚のあとをたつねて人々歌ふみしにかの詠歌の句
なとりて題をさくりてつきな

今宵なをあかすむかひておほけなくうき身のともとたのむ月哉
としふるこひといふことを

みしかけのかはるもかなしれやの月身さへふりぬるそでの涙に
待月

山かけやわかまつのとはつきなくてよそのたかれをてらす月影
月をみておもひつゝける

ななふかくみてこそやまめ山さとのさびしさあかね秋のよの月
月前忍戀

なれぬとて月をもちかゝやとすへき今はいろなる袖のなみに
山家水

すむとたにしらるなふかき山水のうき世の塵に名をもけかさし
月前鐘

なかめやるとなちのさとのかれの音も聞ゆ計りに澄るつきかな

山紅葉

名にしおほいしのふのやまの下紅葉いかてかつゆの色に出らん
若離我独忽然歸大我といふこゝろを

おもへ人たゝぬしもなきおほそらのなかにほるゝ海山もなし
松藩閣のかせのをとたかくいとさびしきゆふへ

軒近きまつのあらしもこゑ高しすみこしやまにとしやへぬらん
はるのうたの中に

うちなびく梢に見えてあなやきのいとよけほそきはるの三日月
顯壽七周忌に

なき人をなをこびくさの七くるまめくれる年のかすはつめとも
曙郭公

たくひやばありあけの山のはといきす月もくもまのそらの一聲
六波羅蜜の歌ふみし中に檀波羅蜜

惜からぬ身を思ふにもひとのためすつるかひなきわれを悲しき
毘梨耶波羅蜜

おもへ人かたきためしのいはほにもなかるゝ水の跡は見えけり
十界の歌の中に縁覺

さとりあれば月目てらさぬ中そらの闇にもひとの道やまよはぬ
四弘誓願の中に煩惱無盡誓願斷

はらひみよこゝろに積るちりひちの山端なくはつきもへたてし
山家夢

跡絶て入ぬるやまのかひやなきみし世へたてぬゆめのかよひち
秋風

おとろかせうき世のゆめもさむへくはうらみもはてし秋の上風

折句の歌にふゆのはな

ふみわけしゆきのみ山のりのみちはるけきあとになを迷ふ哉

深山鹿

おもひいる人はたえたるおくやまになきてもしかの獨すむらん

秋雲

ふきそめてうき秋風のこゑよりもたつしらくもの色そ身にしむ

八月廿日はかり平等院にふけゆくまでつきを見て

たちかへるそもわすれてふくるよの月にいさふうち川波

はしのうへにやすらひて

うらやましうちのはしもりいく秋の月ななめて年のへぬらん

太子傳をよみしついでに

よしあしとわかれしすゑのりはみないにはの水の流なりけり

末のよにたれくみてしる法の水とみのなかはいなをたえれとも

世短意常多といふ句を約にて詩つくりけるとときおなし

くよみしうたの中に

いつまてと猶たのむらん百年のゆめてふものもさためなき世な

うつりゆく夕の雲をななめてもこのよのなかはなにかつねなる

花のうたの中に

いこまやまかくろふ雲もをしなへてはなのはやしにかほる春風

さきてちるものもおもはし山櫻いろかのほかにばなをななめは

なにゆへに花にこゝろをつくすそと春はふれともとふ人もなし

まほちのあつまへゆくなはなむけすとして人のうたよみけ

るをみて

むさしの雪も水もふみわけてはてなきのりのみちなきはめよ

便あらは清見かせきもふしのねもかくなかめきと人につけこせ

おほかたの世にこゝろとも住なれしわかやまみつの心わするな

山房夜話といふことを詩につくりしとき

ともにきく枕の山のさるのこゑなれもうき世のことやかたらぬ

竹爲友といふことな

植置てむなしきこゝろすなほなるすかたなともとなるくれ竹

春のくれに

はるをなをしたふ心そのこりける花にやいまたつくさけりけむ

いなりのやしるにて

なをてらせひかりをこゝにやばらけてひとの願ひをみつの燈火

ちのひさしくすみける家にて月前梅といふことな

そてのうへは月やあらぬと霞夜にはるやむかしの梅がいそする

おなしとこゝろにて

面影もたゝさなからのふるさとをうつみなばてそ庭のあさちふ

ふみわくるあとは昔の庭のおもにたゝ名もしらぬ草そしける

残雪を

谷かけやゆきまれなるあとみえて久しく残るこそそのしらゆき

百首の歌の中に駒迎

あふさかのこのしたくらき秋きりに獨みちしるもちつきのこま

春盡雨聲中といふ句を約にて詩つくりけるに雨といふ文

字をえて

白妙に匂ひしみねのくもきててみとりをそむるよもの春雨

山夏月

たかれにはなつもさはらてみる月の影たにもらぬはやましげ山

山家のうたとて

峯のくもたにのかすみにくちぬへしうき世にそめぬあさの小衣
題をさくりて歌なみしにあしるあはぬこひ

心から身をうちかはのあしるもりはかなきわきに目を送ららん
いまはたい心ひとつにこひしなむおもひたえぬと人にしらせて
空山無人水流花開といへることをおもひて

人はこてむなしきたに、みつなかれはな咲やまの春そふつけき
はたる

ふるはなをこゝろをのみそてらす月まとの螢もなにかあつめん
東寺の蓮さかりなるころつとめてみにいきてくれにかへ
りにける鴨川わたるとて

なつの日のあつさもしらすあさかはや夕河わたる道のゆきゝは

遠村の蚊遣火

かやりびの煙たてすはゆふまくれありともみえしやまもとの里

淀川の舟にて

ふるひると流れもゆくか淀川のよとむとひとはよそにみれとも

宇治川の水上にのほりて人もかまはずふつかなるところ
にびさしくなかもて柴舟のゆきかふをみるにかほる大將
のたれもおもへばなといひしもおもかけにうかひて

人のよはたれもおもへば水の土に浮てはかなき宇治のしはふれ
雨ふりける日平等院にまうて、堂のもとにもものうちしき
ていとびさしくおりけりかれのこゑかすかにきこゆるな
いつこといへばみむるなりといふおもひつゝけて

はかなくてけふもくれけりあすしらぬみむるの山の入相のかれ

あきのころうちにせうたうしてあめさへふりけるにおは
なかりふきかいひしもげうありてやとりぬふけゆく夜の
いとふつかにて

尾花ふくかりほの庵のふるの雨に里のなしらぬかたしきのとこ
月のころ醍醐にのほらんといひやりたるにかみにはさ
ることありまもへとありしを雨いたうふりてにはかにば
れたるゆふへふもとのさとにきて月のすみのほるによめ
る

きてみよといはずはつらしあめはれてかさとりやまに出る月影
中谷といふところにてひたのをとをきいて
なにこともいまはやまたのひたふるにすてゝやすまん谷深き庵

野夏草

わけゆかはのへばしける夏草の中にもいとのみちやのころん

草花告秋といふことをひとのよませしに

ほにいつるそてとはなしに花薄いかにまれきあきのきぬらむ

山家冬月

まれにみしびとめもかれて冬枯のくさのとさしげ月そくまなき

隋荷社にて百首賦の中に五月雨

とふ人もとはてほとふる五月雨に雲はゆきゝのたゆるまもなき

山家

身をさらぬこゝろなともと定めすは猶もすむへき山のおくかは

山家曉

猶深きやまのおくともいそかれす寢覺のところにこゝろすむよは

夕立

むしのねも能すばかりゆふたちのなこりすいしき庭のくさむら
妙の一字をかきてうたよみてとびとのいひしに

こゝろにもをよばぬものは何かある心にとへばこゝろなりけり
題しらす

そなたそとなかむる空もかきくらしいと隔つる雪のふるさと
母のなくなりぬるころひとのもとより五首のうたよみて

とふらひける返事に

さきたれば猶いかばかり悲しさのなくる程はたぐひなけれと
いまはたふかくさ山に立雲をよほのけふりのはてとこそみめ
何事も昨日のゆめとしりなからおもひさまさねわれをかなしき
いかにしていかにもくびん恨りなき空を仰きて涙にはなくとも
たのもしなあまねきのりのひかりには人の心のやみものこらし
はいのなくなりてのち

惜からぬ身をおしよるゝ垂乳根の親の礎せるかたみとおもへば

おなしとよのくれに

ふゆふかき宿にこりつむ山かつのなけきのなかに年もくれけり

辭世

驚の山つれにすむてふみねの月かりにあらはれかりにかくれて

梶の葉

おとこのすけるやまとうたは女すらよめりしかあれ
ばおとこ女のなかをもやはらげたけきものゝふのこ
ころをもなぐさむるとこそつらゆきのぬしもかきた
めれかけまくもあまのうきはしのもとにして二ばし
らのおほん神のあなうましとみやびをかはし給ひし
はながいきもせのはじめとかや久かたのあめにして
下てるひめのことばにはもろ神の心をさだめ人の世
にはうねめが口ずさみにておほきみがこゝろをなど
めしとなんかのならの葉のふるきあとをおもふにあ
べのひのみやよりはしめてひなぶりにいたりては賤
のめあまの子のこと葉をももらさず又古今集の序に
は小野小町をなんその名きこゆる數にえらめりそれ
よりおちつかた伊勢、さがみ、いづみ式部、こしきぶ
の内侍、清紫の二女、俊成卿女、宮内卿、丹後、さのみ
かきつゝけんもくだしければもらしつこのほか
まさきのかつらながくつたはれる代々の勅撰にいれ
るおうなの歌ははまのまさきこのかずをしらぬたぐひ

なるべしすゑの世といへども大うちのことばの花に
ほひいとふかゝらめどこすのひまもれいづることな
ければ人しらぬことなんめりそのやむごとなきゝは
はいふもさらなりひがきの女しろめ江口の君のこと
葉まで集にも入れられ世のくちずさみにもすなるい
まよつのうみ浪しづかに關のひがし戸ざゝぬ御世な
ればもゝのみちゝいやさかりにしてみやこもひな
も和歌のうら波にこゝろをよせずといふことなんな
かりけるまして九重にすめる人はをのづからさす竹
の大みや人のみやびやかなる風情をあふぎてその名
きこゆる人もおほかりこゝにちはやぶる祇の園のほ
とりに茶店ちやみせのいとなみをなせる梶といへる女ありそ
のこころばへやはらかにしていやしからずいとけな
きより父母によく孝をなしていとなみのいとまなき
すさびにさうし歌物語などにすきて立やすらへる人
の心ありげなるにそふるき歌のこゝろばへをひそか
にとひきゝていつしかみそぢ一もじのなさけをしり
て花に月に口ずさめることになりぬるとぞかゝれば
心のたくみにしたがひてやさしきすがたもすくなか
らぬにやゆきかふ人の耳とゝむることゝなりにしか

ば世のすき人はさらなりさるはたうときかたにもやさしきためしにきこえけるとぞこれなんいやしき身といへども和歌の徳にて侍るならしあるはあだくしきすきものはたはれたる歌よみてそのかへしをものせよといひさはぐもおほくあるは心あるいなかうどはその言の葉ひとつふたつうつしもて都のつどいひひろめけるほどにむべなるかなあづまのはて西の海のほとりまでかうばしき名は流れずといふことなしやつがれことしいぬのきさらぎのはじめ武蔵野の霞をたちいで、都の春をたづねさまよふついでにひがし山の花のもとにあそびてかの茶店にやすらひよめる言のはをきかまほしくせちにいざなひければいな舟のいなひはてずひとつふたつちかきほどの歌なりとて書てみせつまことやつたへきしよりは心の泉ふかく言葉の花匂ひまさりていとめづらかなるふしもまじれりこれよりおり／＼かの林のかげをわけて旅ころもなれゆくまゝに草葉の露心をかぬさまになん歌物語などせし事たび／＼なりしが文月のすゑやがてあづまにくだるゝに成しかばれいの都のつどにみぬ人にもみせまほしう和歌のうらの玉藻か

きあつめたるふみやあるみせてよとしかまのあなかにせめければまめやかにもものせぬよしとかくいひまぎらはしけるほどに酒などたうべけるえひのまぎれに玉手箱ひめをけるものを見出せしにまろがれたる反古やうの物なりしかばひそかに袖にしてかへりて見侍しにかのかきをける玉藻なりしかばふかきほいとげぬとうれしくてとみにうつしてかのがりにかへしぬさりとて我ひとりもていなんもおこがましかれば世のすき人にもみせまほしくちかきうきねの加茂の川水にみじかき筆をそめて梓にいのちながうするものならし寶永三の秋文月その日

武陵遊士 蛙鴨子

梶の葉卷上

山家郭公

世にとなくすめはこそあれ忍びれも我にやゆるす山ほといきす
のこりの菊といふ事を

なにかはくらへてもみむ枯はてゝ花なきころのしら菊のはな
十四になりけるとし歳暮戀といふことを人のよませ侍け
れば

こひ／＼てまた一とせもくれにけりなみたの水あすやとけなん
立春の心をよめる

のとけしなとよあし原のけさの春風のすかたも水のこゝろも
浦雪といふ事を

ふくかせもほらひはゝしてしさふかみつもりのうらの松の白雪
雪の明かた人のゆきかひもはとちかく聞えければ

ゆく人のあかつき雪をふむなともまくらにさゆる道のへの宿
ある人の許より心さしふかくありけにいひかはし侍る女

のあふことはいとかたかりけらしある目まかりて侍るに
ちいさやかなる人形の夫婦あます手づから送りて侍し
かば袖に手にまばしもはなたす人めだになき折ごとには
とり出て見侍るに中／＼むつまじきいもせのなからひも
はたくさへおぼえあはぬことのいとつれなくなりばべ
りぬされども手をもはなたすうちまもり侍るとて

逢ことは猶ひとかたにつれなきをなとむつましき形見なるらん
といひをこそ侍し返しに

ひと方に恨みな里をあふことは二世をかくるかたみとなしれ
あふことかたき事のみいふめるをなをふたふ心はつよく
侍れば

あふことのはてまもあらぬ戀路にはもろき命や限りなるらん
と有し返し

あふことにかふる命をいさやまたまらぬ戀路になとかきるらん
言葉はおり／＼情ありげなれば

はかなくも身のなる果をまらてなと言葉の花の色にめつらん
と有し返し

あたにしも色になる身まかりそめのこと葉の花にうつる心は
物くるほしうさへなりて

今はたいあらぬ心となりにけり戀せきりにしもとの身ながら
と有し返し

もとの身と思ふはあらぬこゝろかは人はまことに戀せざるらん
春戀といふ事を人のよめといひければ

まのほれぬ心のいろをそれとみよ雪まにもゆる野邊のわか草
依戀祈身といふことを

つれなきもおもひかへして更に又いのちあらばと身を祈る哉
寄山戀を

波は袖にこゆともたのむ玉の緒のあらはあふせの末の松山
月前忍昔戀といふ心を

もろともにみし世もあるを袖の上にあはれとひくる闇の月影

七夕にふみて手向侍し

世の人のあたし心にうつさはや一夜の星のたえぬ契りを

水郷の花といふ題にて

みる人のなきさの花は思ひいつやたえてさくらといひし言ひ葉

黄葉を

ちしはとそまたまら露のうすもみちしくれなきそへ秋の山風

寄關戀

おさまれる御代も戀路はうかりけり人めの關のゆるしなければ

風のすがた水の心もいざしら波のよるべきだめぬうたか

たのこぎゆく舟のかぢ枕かはさむことはおもひふらねど

もたゝ敷島の道しるべときけば其心のたけもにかりまゝ

れず花になく驚水にすむ蛙までうたよまざらんはなしと

いへども心なよする人まれなるにかゝる女の心さしこそ

ありがたう侍れ詠じなかれし歌聞え侍れかしたづね行

ければ人めのさはりありてむなしくかへりよみてつかは

しける

音にのみ聞しよりなを袖のうらのみるめにまさるわかなみた哉

といひをこそ侍し返し

みるめうきはかなきあまの袖の浦にいさしら涙の立しばかりな

みやこ人のうたなりとて吾妻にて見はべりし人に道のゆ

く手にふとまみえよみなける歌など見侍しほどにかく

聞しより見し言の葉のいろふかくにほひをそふる花の一もと

といひをこそせたるかへしに

われこそはこのことのはの花の香をあかす袂にふかくうつさめ

海のはとりの春の曙といふことを

うつすともいかなよはむ水くきのあしまた磯の春のあけはの

寄盤戀

もえわたる澤のはたるをうき人にみせはや身にもあまる思ひと

出雲國大社奉納の歌に月前待戀

なげきつゝいつ迄かくは月にのみ涙とはれむ夜はのさむしる

人のもとへつたふべき文をうしなひて侍りければ文の主の

もとへよみてつかはしける

ふみまよふ身こそつられれ目をへてもそことまられぬ水菫の岡

夜時雨といふことを

いろそはむあすのもみちのいくまほをしらせて過る小夜時雨哉

かしの葉卷中

夜露といふことをよみ侍りけるに

雪ならは惜にとめてあすやみよるのあられの音にのみして

戀の歌を人のよませ侍しに

おもかけよいつのなさにたちねらむ人はあとなき風のうき雲

春たつこゝろな

あけわたるそれものとかにばるたつと思へば霞む四方の山のは

夕落葉

くまとなる秋の木かけのうらみをおちにはにるゝ夕ぐれの月

ある人の許より恨一夜戀いふことを

あらさきあすの契りを頼きてけふなかりの命なりとは

と讀ておこせし返に

けふのみになとかさるらん玉の緒にあすの契りをかけて頼まば

久しくあはさる人の許よりまことに無限心中不平等、一

宵満話又成空、とは誰かいひけん

あはぬまはいかに恨のおほかりきこよひはなにを語りあかさん

と有し返しに

ふしさらばくらへかこたんあはぬまの恨のかすは何れまきさと

ある人のもたとより忍にあまる戀の心を

君こふる袖しのうらのあた浪はなみたそ汐のみちひなりける

とあるかへしに

涙にはみちひあらしなあたまの袖しの浦にさはくばかりそ

ある人の許より

よるへなきゆらのみなとの捨小舟ゆくゑも涙の梶をたえつゝ

と言おこせし返し

かひなしやゆらのみなとのあまなふねよるへさためぬ人の心は

としのくれに

といめぬ月日に關はなかりけり年そこえゆくあふ坂の山

限一夜戀

おもはすよあはぬ月日もくれ竹の一夜のふしにかさるへしとは

山家の雪といふ心を

世にかよふみちこそなけれ谷かけや雪にそふかき山のかくれ家

人のもとへ梅の花を折てつかばすこて

わか袖のにほひもゆかし君かため折つるむめのなこりと思へば

寄露戀を

おほかたのうき夕ぐれの露と見ん秋のほかなる袖のなみたを

友とする人にいざなはれて夕ぐれ過るほどにみちたどた

どしけれど女のあるしの歌よむ人となんいへるやとりに

入てその事かのことなどかたらひもてゆくにふるくよみ

たまふ歌とてかすくをしろしてみせ給へるに遠く聞遙

におもへるは數にもたらずとなふれば其吟玉に聲あり思

へばそのこゝろ錦にひかりありきくなうとびみるをい

やしくなすとは古人のそらごととや其歌のなかに寄露戀

といへるに

たれにかはかくとゆふへの袖のつゆぬるゝもほすも心ひとつ

とあるにいさゝかならひて
袖の露ぬるゝもほすもしらぬ身にかゝる心のみちしるへせゝ

さらによみたまへる言の葉なと思ふ物から

夜をへてもきかて過めやほとゝきすいかに惜める初音なりとも

返し

春のはなのにはひなをそへて時鳥う月もまたてもらすはつねそ

三月三日

此ノ變ニノ二字アリ
(正誤)

ある人のよめる夢逢戀

しはしたにせめてさめすはるの夜の夢はみしかき花の面影

おなじ心を

あふことはゝかなき春の夢路哉やかてうつろふはなのおもかけ

さめて後の心を

あふことを夢なりけりと思ふにも覺しうつゝそくるしかりける

おなじこゝろを

ちきりあれば夢にもあふと思ふにそ覺しうつゝの頼みなりける

名月に

くまもなき秋のこよひの月かけに萩のしたはもさやけかりけり

待郭公

まつもうしきかぬもつらしほとゝきすいかなる里に初音鳴らん

寄月戀

なにゆへにかゝるなみたと袖の上にやとれる月を人やかめん

もみちを見侍りて

こゝにたにしくれの染るから錦たつたの山はもみちしぬらん

夕立

ゆふたちのはれてすゝしき草むらは秋とやいはむ露の月かけ
はじめの冬の心を

けさみれば秋のかたみの露きえて霜をきかふる冬は來にけり

惜花

おしめ人春はいくかもあらし山名にさそはれて花もこそちれ

ある人のもとより逢かたき心の歌ふみてつかはしける

梶の葉にかきもつたへよほとと遠き又こん秋の一夜なりとも

その返し

契りあらは星のたむけのかちの葉にかゝれる露は秋やほさまし

ある人世の中のものよしあしともにあしからの關のあなた

世すて入都の花をこととばんもいとほづかしけれど數し

まのみちいづれなさけをへだては

しき島の道に鳴なる鶯鳥音をのみとなくたつはきにけり

と有しかへし

いさしらぬ道にまよひてわれそなくしるべとなれ和歌の浦鶴

あるひとのもよりをのか世々になりてなをあかぬ別れ

をなげく身のうへを聞て

あたに吹風としらすもおみなへしなびきて今やつゆこはすらん

といひをこせたる返し

秋とふく風ゆへうきなおみなへしとはれていとゝ露そこほるゝ

卯月ばかり雨のふりける日ある人の許より寄雨戀といふ

歌をよみておこせける

戀せしな身を卯花の雨もいまこほれて袖にものそかなしき

返し

こひせずは哀もまらしとはかりの身なうの花の雨にかこちて
ある人のもとより

梶の葉にかきつくしてもたのむかなあはれ一夜を星にたくへて
と有し返し

世々たえぬ星のちきりにたくへてよ一夜ばかりの中はたのまし
冬月といふ事を

さよあらし萩のかれ葉のなとふけて霜にいろある月そ寒けき
立春

のとけしなげさあまの戸をいつる目の霞の衣はるをかされて
夕かほ

これなくはたれとひてみんしつかやのけふりいふせき軒の夕貌
よるの鹿といふ事をよめる

身にしればよそにはきかぬさよ衣つまこふ鹿のなきあかすこふ
月前擣衣

たかさとも秋の夜さむばしら露の月のひかりにころもうつらし
歳暮

くれにけり一夜ばかりを隔てにて去年とや人のあすはいばまし
春歸らんといひて故郷く行ける人のもとへ

春こんといひし言のはたかへすはさかてや花も人をまつらん
花の歌あまたよみけるに

けふの日もよしさは暮れよし野山花をあるしにまくらからなん
菊

つゆにななにはひもふかくさきそふや秋のいろなる庭の白菊
木葉ちる比山のはの月を見侍りて

もみち葉のちるかしくれか一むらの雲やはかくす山のはの月
河原の夕すゝみを見侍りて

こゝに來てみたらし河の水の上をおもへはすゝし波の夕風

梶の葉卷下

寄露戀

たれにかはくとゆふへの袖の露ぬるゝもほすも心ひとつな

ある人の許より

哀我さたかにいつか夢ならてゆめかとたとるあふこともかな

とありし返し

おひ思ふ心にそれとみるならばゆめのたいちもうつしならずや
いのる戀

祈るてふこゝろをせめてあはれとおもはる神も人にことはれ

ある人のもとより廿日あまり三日の月を待たてよつると

てはしおし待人のことのおもひつゞけいたうなみだこ

ぼしてほどなく月をたもとに見て

露もかく思ひかけきやわか袖にやとる月さへまたるへしとは

といひおこせたる返し

たか袖も秋のならひにおくつゆのおもひかけすは月もやとらし

あつまよりのぼりたる人のくだるとて

わすれしな神のみそけい秋の月我は吾妻のはてにすむとも

と有しかへし

よひ／＼はおもかけなからまちいてむあつまのはての山の端の月

ある人の許より人の心の花にめでて

春ふかくかすむ梢のはなくらてひとのこゝろの色香をそおもふ

返し

ことのほの花のひかりをなをそへようたて心の色香なき身に
待郭公心を

ふしや我まつ身としらほじと聲をほのかにもらせ山ほとゝぎす

立秋

秋きぬとけさより袖にふく風のなとはかはらて身にやしむらん

扇のもやうにやなきのもとに女の琴を弾してゐるを見待

りて

いはてかくおもひ亂るゝ青柳のいとあひかたきしらへなるらん

寄露戀

木かくれて身を空蟬の露にのみぬれつゝむ袖そはかなき

見不逢戀

君ふいかにあはぬ歎にふそながら見るかひもなきわか戀の山

歳の暮におやをいはひてよめる

老のなみかすそふまゝにまたはなの春にもちかき年のくれかな

ある女のもとより

八重霞立へたてゝもかちのなとそことしらるゝ和歌のうら舟

とよみておこせしかへし

あるへせよ和歌の浦曲はそことしも霞にまかふあまのなふれな

雨中戀

一かたばをやみたにせよ手枕になみたも雨もいかにふるらん

かものみたらしにまうて侍りけるにあひしれる人の夕す

ずみに來れるよしを聞てよみてつかはしける

あかすみん人にはよそにもみたらしのおなしなかれの月と思へば

むかしを思ひ出る事の侍りて

つらくのみすきこしかたをしのへとやうきひとりにたてる儚

述懐

さのみ身を思ひなわひそつらしとてうしとて世をは過ぬ物かは

夕時鳥

ゆふくれのあはれそまざる時鳥なみたほしあへぬ袖のさみたれ

八月十五夜くもりければ

よしこよひくもらはくもれ世にたかき月の都の名には隠れし

なにはのかたをなかめやりて

こゝろなき身にさへおもふ春はたゝなにはわたりの明ほのゝ空

寄露戀

大かたのうきゆふくれの露と見ん秋の外なる袖のなみたを

みちのくよりのほりたる人なりとて

君故にまよひ來にけりあつまちのしのふこゝろを哀ともみよ

返し

われにのみなにかはまふあつまちやまた異方に人忍ふらん

野寒草

みしやゆめのこゝろ草葉に霜むすふ手枕の野の秋のおも影

かへる雁

ゆく雁よはるな見すてそ山の名にかへる都の秋をおもは

海邊秋夕

浦つたふかせそみにしむあまこゝろもたつしらの秋の夕暮

待雪

遠山につもると見れと里にまたふらぬ雪けの空そつれなき

月照叢露

あくるかとみしは草葉のしらつゆが庭もまかきも月をやとれる

しるべある庵にしばし身を隠せしにおり／＼友どちつれ

つれとふらふたにもちきりし人をわすれがたくて

おもひあるみ山の奥の苔の露かくても人をわすれやはする

とある人のいひをこせたる返し

うき中をいとひはててもや山ふかみ忘れんとてそ身をかくすらん

む月ばかりに雪のいたうふりたる日かきれの梅をながめ

て

春もなほむもろゝ雪のむめかえはにほひばかりに花ぞしらるゝ

隣梅といふことを

いとえたも折はやつさしさくはなのあるしよそなる庭の梅かえ

待郭公

まちわひて夢も結はぬほとゝきすいく夜あかして初音聞かなん

扇の繪に芦に舟のかくれたる所をかきたるに歌よめと人

のいひければ

かくて身も朽やはてなんなにはその葦間隠れのあまのすてふれ

絶後戀

ちきりしはむかしなりけり思ひれの夢にはたえぬ人のおもかけ

恨戀

はふ葛のしたのうらみをしらねはやこゝろとさばく人のおき風

ある人のもより

獨れになれてそ拂ふちりひちやつもりて床の山となりけり

返し

初雁

せきあへぬ床はなみたの淵なれやちりのみつもる思ひのみかは
玉章をかりのつばさにかけてこそおほかなさや秋はなからん
久戀

もらすなよく年ふたにわきかへる岩根の水のみくさかくれを
月のうたよみける

みる人のあはれと思ひつらしともこゝろのまゝに月やすむらん
木の葉の道をうつみたるに

雪ならはとひこし人のあともみん木のはにうつむ庭のかよひち
梅の花さかりなるころ

はる風にふられんもうしあつまやのあまりに匂ふ軒の梅かえ
ある人の許よりいまはたし思ひたえなんとよめりし人の
いにしへもかくばかりこそとふるあは雪よりもまづきえ
ぬべくて

物おもふ心よさきにきえはてしつれなくのころはるのあは雪
返し

ものおもふ心もともにあは雪の身さへきゆるときかはたのまん
難面戀の心を

きえれたる人のつらさにかくしほるつゆの命にむかうき身は
尋梅

風さそふ匂ひをみちのしるへにてことふさとの梅があるしに
雪のあした木このこすふを見侍りて

花かとも見しは中々ふらゆきのかゝれるえたはむめもこと木も
明やすき月にはしゑし侍りて

まち出しまたよひなかられやの戸をさゝぬにあくる短夜の月
寄雞戀

きぬ／＼のその夜の儘に鳥の名のかけはなるへきとは思ひきや
寄霞戀

たくへやる音もあられの玉ならば碎くこゝろをそれとしられん
やよひのつこもりに

けふは又さらににもかすめ夕日かけいる山のほの春のわかれに
ほときすを開て

一こゑはおもいなしかとなかめやる雲のいつこそ山ほといきす
牡丹を見侍りて

われのみかあはれこてふも花の色にうつすこゝろの深見草かな
水鳥

水とりのうきねにさはく涙まくらむすひさためぬうすこほり哉
早苗

まつめかおりたつを田の水がみみなひまもなくとる早苗哉
藤の花を見にまうて

たれとなく松のこすふもとひこすばうらむらぎの藤の夕はへ
逢不會戀

はかなくもたえぬうつりにしたふかなみし夜のゆめの昔語りな
寄月祝

秋津すやもとすふなひく君が代はてる月弓の空にしるしも

梶の葉卷下終

佐遊李葉

水無月の比ほひやるかたなき暑をしのがまほしく洛陽のほとり東山なる祇園かみりそのとかいふめる御社に詣て森の木陰に立やすらひ南の風の薫るを袖に待とる程こころ行かふ人の此所に物し侍る茶店のあるじの女いときなき時より八雲たつの神詠三十一字の言葉に心をそめ春の朝花の下に日をくらしてすける我懷を吟じ出し月の前に夜を明しては獨我詠る志をのべ侍るよしそこはかとなうをのがどちいひもてさはぐまこととにや我古郷にてをろく聞得しその人なるをやとつくばねのこのもかのもとに問尋讀置しもしは草しかまのあながちに乞求て難波のよしあしもいさしらぬ火のつくしがた我歸るさの土産つとにもせまほしと一卷の書にしるしもて書林の何某によき筆して寫してよとあつらへ侍るにかの人のいへるむべなるかな此書にあへることをしかし獨これを懷にして古郷に著てかへる錦となさしめんも本意なきわがならずや願くは梓にいのちながふして折にふれつゝ遠津國の同志の人にもしらしめば此道のたつきにもならむかしと

せちにいはれていなみのゝいなともいはず旅のやどりともし火のもとにしていさゝか此情をのばへてさゆり葉となむ名付侍る

隠士風雲子

佐由理葉卷上

春部

年内立春

くればはてぬ年の内にもなをつからたつ春しるくけさはかすみて
いとばやも春たちぬらし年の冬の日かけもかすむばかりに

元日

あまの戸のおくれば春と世につけてきくものときし百とりの聲
春來ぬとけさはあらしの音羽山みねのかすみはふきもはらはて
花鳥のいる音もいそげいつしかとまちしみやこの春は來にけり
今日といへばふくものとけし惠みある神の園生のまつ春かせ

初春見鷄

あしたつのくも井によはふ萬代のこゑものときき春そにきはふ

霞添春色

遠近の山もひとつにたちこむるかすみやはるのいろなそふらむ

山路霞

たちこめしかすみこそはのかけみちもなれてやかまふ春の山人

若菜

誰もみなつむてふ野邊のはつわかなおひせぬ千代のはるを契て

露暖梅開

日かけさすかたえは露もとけそめてはなにはころふ軒の梅か枝

窓梅

まところかくさし入月の影なからにはふもあかね夜半のうめか香
古宅梅

さそへなをみる人もなきむめの花ゆきとふるやの軒のはるかせ

梅遠薫

たか里としらぬ木末をさそひ來てにはふもやしや風のうめか香

柳靡風

見れとおかぬすかたつ風の吹かたにまかせてなひく青柳のいと

柳露

なくつゆの玉のなかくうちはへてむすふちきりもふかき青柳

谷残雪

ふるとしのかたみとや見む春來てもまた消のこる谷のしらゆき

野残雪

野邊ことにつむとはなくて消のこるゆきまの草の色そ添ひゆく

梅近聞鶯

なのかためうへしをしるやうくひすの軒はの梅に宿しめてなく

春雨

さひしさもいかていとむ春雨にひもとく花のさかりまたれて

夕春雨

此ゆふへ音こそまされふるとしもしられぬほととの軒のぼるさめ

歸雁

誰にかもあけてみすらん小夜深くかけてそかへる雁のたまつさ

山家待花

山かつらあけぬくれぬとさくはななこゝろにかけてまつの下庵

山家花

身をかくすかひもあらしの山さくら花ゆへにこそ人もとひきて
處々尋花

さきぬやといてやま越て尋ねこしこゝろにあかね花のおもかけ

見花忘耻

見れとあかね花の色香にたくひなき身のうき程も思ひわすれて

花下送日

あけくる一日かすもよそに春はたゝ深山の花に身をやまかせむ

松間花

ちりあへぬためしなならへまつかえにましりてさける庭の初花

花風

見るひとのおしむ心をさそとしもしらすや花をさそふはるかせ

瀧邊花

山ひめのなりかさぬらんたきつせのしらきぬかゝる花の木末は

花袂

そこにかとゆきかふ人もさく花のたもとをかさす春ののとけさ

八重櫻

名におひてちらすもあれな八重さくらけふ九重の花のさかりは

杜花

さく花もありとしられて春風のさそふにほひやもりのしたかけ

くれぬともえやは歸らんさく花にこゝろひかるゝ森のしめなは

對花日暮

めかれせすむかふもあかね花の枝にうつる日影の暮ゆくはおし

關花

ちきりなきて又こん春もあふさかの關路の花のさかりをや見む

山花留人

しほしとて花もやしたふしめてわか歸さもよほす春の山路に

夕花

このゆふへ見すてゝかへる山さくら花もつらくや我をおもはん

雨中花

ほすひまもなか／＼し目をふる雨に立ゑる花のかげのたもとは

依花日短

永しとは誰かいひけんみれとあかねはなにくれゆく春の日影を

三月三日

めくりあふけふ三千とせの齡をもちきりし桃いはなのさかつき

夕雲雀

なく雲雀いつこにとこをしめしのゝそことも見えすかすむ夕に

河欸冬

出吹のはなのしからみゆくはるをかけてといめよ井手のたま川

藤

ときはなるいろをならびて松か枝に千とせもかれにはふ藤波

名所藤

いく春もかけてやちきる住の江のはま松か枝のはなのふちなみ

暮春蛙

夕されのあはれもいまばあらを田になきてかはつのばる暮ふ聲

夏部

更衣惜春

なれ／＼てかへまくおしき袂かな花のいろかもなつのころもに

新樹

うすくこくしげる梢のわかみとりみしはつ花のいろにたくへて

夏月

なく露とまさこの月も白たへにひかりあらそふ夜半のすいしさ

江夏月

なつ草をわけて入江の水の面にやとるまもなきみしか夜のつき

未聞郭公

たか里に鳴てすくらんほといきすわれにはつらくおしむ初音を

郭公を聞侍りて

待かひもあり明の月のさやかなる聲もおしますなくほといきす

啼すていゆくゑもしらぬほといきすやみのうつゝの夜半の一聲

磯時鳥

なく聲はあら磯なみにまきれてもかけはかくれぬ山ほといきす

五月雨

いつはれてあさき瀬はみむよし野河みかさそひゆく五月雨の比

螢

消やらぬのかおもひのくるしさもそれと螢の身をこがすらし

窓螢

窓ちかく光をみせてゆくほたるなすわきもなほちちへる身に

里蚊遣

かやり火のけふりのうちに夏のこの月もかたふくなちの山さと

蓮

にこりにそしまね心をおもふかな池のはちすのはなならぬ身も

樗

紫のいろをかことにとひやらんはなにあふちのぬし知らすとも

水邊納涼

夕なみのたちもかへらて涼しさのこゝなせにせん河つらのさと

沙由梨葉卷中

秋部

初秋

くれ竹のひとよあくればすゝしさも袖におほゆる秋のはつかせ萩

かひなしや野邊にまつさく秋萩のはなに千種のいろもけたれて

初雁連雲

雁のなくなみたの露のたまつさやかさつられたるくもの一むら

野外蟲

夕されは野もせのつゆのいのちをほなにかけてか蟲の鳴らん

野蟲

鳴むしのなみたの露のやとりかはあはれもふかき野邊の草むら

七夕

吹風もしらへかばして今宵あふ星やうけひくいとなけの聲
このゆふへ露のちきりの玉かつらくるゝをそしと星やまつらん

七夕七首

七夕月

まちわたるほとや久しきあまの川こよひあふせの月のみふねを

七夕河

たえせしの名こそなかるれ天のかはあふせまれなる契なからも

七夕草

たまさかにあふ夜の星の手向とやはなもひもとく秋のなゝ種

七夕鳥

なれもこよひ契たかはぬかさいきのよりはの橋をかけて待らん

七夕衣

かさねとも一夜ばかりは七夕のくものころものうらみつしな

七夕別

たなはたの絶ぬおもひや葛かつらくる夜稀なるけさのわかれに

七夕祝

たのもしな幾代を経て牛女のれかひのいとたえぬちきりは

橋霧

河なみはしらみてもなを秋霧にまつ夜をのこすうちのはしひめ

海邊月 八月十五夜

あかしがたこよひの月を見るめかる蟹のとま屋もさを待えて

八月十五夜

たれもみなあかすなめん又たくひなかはの秋の月にむかひて

野徑月

かけやとす月のひかりにさきそふる花野の露をわけゆくもおし

九月十三夜

雲きりもはれてさやかに十日餘りみよや名におふなかつきの影

名にしおふ今宵ばかりとおもふにそなを見るほとも長月のかけ

月下淺茅

月影もあくるまでとや宿るらんはらふ人なきつゆのあさちふ

掃衣

よもすから起あてともに賤の女かうつやころものあさちふの宿

浦邊衣

あまころも波といもにやうつなともたかしの浦の秋のよすから

重陽

かさしおる菊もはへあれしら露の玉のななき千代のためしに

伴菊延齡

色も香もあかすかさいんしら菊の花に千とせのよはひちきりて

林頭月

出やらぬかけを遅しとまつひばらみれの木末に月そいさよふ

霧間雁

聲あまたきこゆる雁も幾つらと見えこそわがぬあき霧のそら

紅葉

山ひめのひとつ心にそめなすも木々にいろわく四方のもみち葉

暮秋野

名残おもふ野邊のおはなやまねくらんつれなく暮るゝ秋の夕な

秋祝言

いろかへぬときはかきには秋をへてふむにつきせぬ松の言の葉

冬部

初冬

冬のくるけふよりいと山かせもしくれをさそふ音そはけしき

初時雨

うき雲にさそはれきぬる初しくれふりにし日より袖をぬらして

初雪

ふりそめてまた一重なる庭の面にやかてきえんもおしきしら雪

朝雪

めつらしな雪の花さくかたなかのあしたのはらの草のかれふも

海邊雪

清見かた磯やま風もさえ／＼てゆきもてはこふみほのまつはら

冬山

散はてゝいろなき風のなとは山のこると見えし木々のこのほも

雪

さえ／＼しよはのあらしの程みえてあさけの庭につもる白ゆき

社頭雪

けさはなをふるのやしらの神垣にたか／＼けそへし雪のしらゆふ

氷留水聲

なかれゆくみつも氷にとちられてけさはさびしき音なしのかは

屋上雪

手よくらの夢も見つかす風さえてまきの板屋にあられふるをと

寒草繞曉

これもまたつるにはかれんあさちふや残る葉衣に霜むすふころ

歳暮

暮てゆくとしの小手巻くりかへしなとかおしまん我身ひとつに
したへともさらにとまらぬ小車のうしやことしもくれて行らん

小百合葉卷下

戀部

待戀

れやの戸をさいていく夜があかつきの空たのめなる人待とて

忍涙戀

よなくのまくらそ浮きぬみた川ひるは人めを恥らへる身に

被忘戀

いやまさるおもひまいかに今はかく忘れ果しうき身ひとつに

後朝戀

けさはなを袖こそしほれ逢みてもあかねわかれのみらしはの露

逢不遇戀

あふ夜半のこゝろにもにす何故にたえよと人ばとをさがるらん

絶戀

むすひしも今はくやしきわすれ水かく深からぬなかのちきりを

忍通書戀

おもふことえもいひやらず何くれと人めをしのふ中のたまつさ

戀不依人

さのみなとつれなかららん身におほぬ戀も有世の習ひと思はし

寄鏡戀

見るもうち涙にくれますかゝみの思ふ身のあらぬすかたを

寄忘草戀

あたなれやおなし軒端に生出てしのふにましろこひわすれくさ
戀學問妨

見もはてすまなへる書はおこたりてあらぬおもひの人の玉つさ

夏別戀

手まくらなかはす程さへなつの夜の明るはつらきぬくの空

後朝戀

消れたゝまたあふこともしら露のをき別れにしげさのつらさに

寄花戀

たくひそと見るさへもうしさくら花あたに移ろふ人のこゝろは

寄夢戀

うつしにほなをもゆるさぬ逢坂のせきちをこゆと見る夢もかな

いつか又思ひあはせんうつしにもあひみし夜半の夢のちきりを

寄河戀

うきしつむ身こそつらけれ戀わふるなみたの河のふかき瀬瀬に

寄橋戀

うつしにもわたらまほしくおもひれにみし夜のまの夢の浮橋

寄硯戀

たへかれてかきやる文をみてもしれすゝりの海のふかき思ひを

寄舟戀

いつのまにこと浦風にゆく舟のわかにたにしもよるへたえぬる

寄埋火戀

消やられていといこかるゝ埋火のありとばかりの身こそつらけれ

寄弓戀

かひなしやわか方にしもあつさゆみひけとなひかね心つよさは

寄竹戀

うきふしもまかきの竹の一夜たにあひみぬさきに變るこゝろは

寄鶯戀

うきひすのこほる涙もはるくればとくるを人のこゝろともかな

寄山戀

たのまれぬ名にもあるかな我中ばいつあふさかの山路へたて

寄木戀

うき身世に誰かはしらん太木木のいたつらにのみ朽はつるとも

寄瀧戀

こひわふる涙のたまのかす／＼におもひみたれておつる瀧津せ

祈神戀

いのるにも同じつらさをみしめ繩かけてかひなき神のめくみか

契久戀

うきながら月目經にけり契てしそのことの葉のすゑをたのみに

恨戀

消やうて人のこゝろのあき風にうらむかひなきくすの葉のつゆ

春夜戀

春のよは軒もる月のかけたにもなみたにかすむむとりねのこゝ

雜部

山家

とふ人もなき奥山のさひしさは／＼にかなふすみかなりけり
おもひ入ひとのこゝろもあきからぬみやまのおくのまつの下庵

山家水

山水のかけひにつたふなとつれもこゝろすむへき友とこそなれ

隱士出山

山ふかくすむ人あらしいまはとて出てつかふるみちひろき世は

山家橋

のかれすむたにの柴橋しはしたにこゝろにかけてとふ人もかな

山家煙

よそにてもあはれとはしれ柴の戸の夕ぐけふり絶のはかりな

草庵雨

すみわふるくさの庵にとふ人もたえてさひしきあめのなとつれ

朝旅

おき出るあしたのはらの草まぐらなをふるさとの夢もむすはて

朝市

やすからぬ世のいとなみや朝な／＼うることをのみいそく市人

饒別

なからへてまたあふ坂の山路にやちきりもなかん旅のわかれな

八十八賀

八十あまり八年の後も松竹のよはひかさねんよろつ代までに

柿本の明神に奉納し侍る

ことの葉の道ぞさかへんまもりますこの神かきの松のときはに

窓前竹

ともなひし人のよはひも幾としかいはらぬやとのまとのくれ竹

尾張の國の何かし部にまうて來てかへり給に別おしみて

沖津なみたちかへる人に逢ことはいるかなるみの恨みとを知れ

かへし

今さらに名残をしくもなるみかたよせくるなみの立かへりても
ある聖のおはせし庵をとひ侍りて

うらやましうきことしげき世の中をしらてすむ身の心やすさは
引むすふしはの庵のしはしたによのうさしらてすむ身ともかな
年のくれつかたある庵をとひ侍るにあるしの尼君歌謡て
又の日をくられしかへしすとて

うら山し世の外なれやぐれてゆくとしのいそきもしらて住身は
世をうしとおもふ比

うきなからいつまでかくはよの中にすみの衣の身をもかへなて
社頭松久

さかへゆくこの神かきにたちならふ松も久しきためし知られて
流

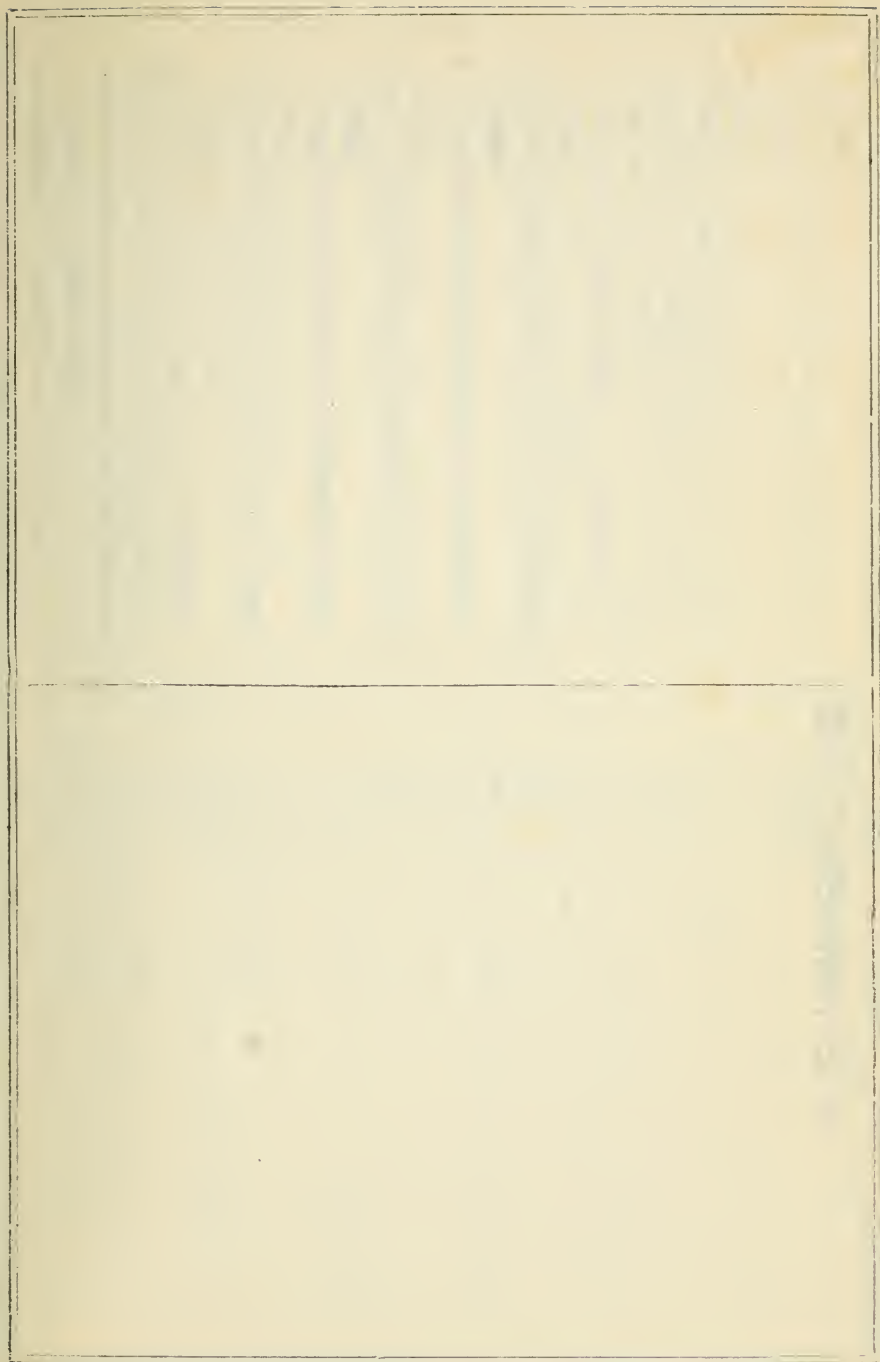
松にふく風のしらへのなとそへてこすふにかゝるたきの白いと
池水久澄

にこりなきその玉ものかけ見えてひさしくすめる宿のいけ水
ある人のにしかいとやらんいふ貝に松をふかきてさかつ

きになんし侍るその心はへな歌によめとのたまはせしに
さかへんと野への小松を庭の面に移しうへにしかひもあらなん

きのとれといへることを人々み侍しに
夕からすふりつむ雪に太山木のえれのぬくらなためかぬらん

續々群書類從第十四 終



明治四十年五月二十日印刷
明治四十年五月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

市島謙吉

編輯兼
發行者

東京市本所區番場町四番地

印刷者
本間季男

東京市本所區番場町四番地

印刷所
内外印刷株式會社

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03043 7644